黒鉄色のノクターン

逆月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒鉄色のノクターン

【Ｎコード】
Ｎ０９２１Ｉ

【作者名】
逆月

【あらすじ】
（５／２４一部完結しました）――
進化、あるいは退化した人類達は『変種』と称され、『ネオ』と自称し、『ヴァンプ』と呼ばれた。
それら新たなる人種の皇は『始祖』と呼ばれ、それまでの世界を蹂躙した。
革命の烽火に灼かれた世界は、『未来』と『種族』を分岐させ、日本という国を幾多にも引き裂いた……。

1・世紀末に咲く石楠花（前書き）

異色ファンタジーを目指して……みます。
それだけじゃなく、いろんな要素を入れていきたいな、と。
よろしければ感想、批評を頂けましたら幸いです。

1・世紀末に咲く石楠花

――世界ってのは突然変わるモンだ。なんの脈絡もなく、一言の断りすらないままね。

昨日まで普通に生きていた人間が今日起きたらいなくなってるなんて事はザラにあるし、数分前には幸せの絶頂にいたのに、今は不幸のどん底なんて話もはいて捨てるほどそこらに転がっている。

その代わり様は、それこそいきなりされた癌告知のように……もしくは何かの天災のように人間達を掻き乱す。

――それを考えれば……まぁ今みたいな自分もありなのかもしれないな。

そんな愚にも付かない考えが浮かび、そんな自分の思考に小さな笑いが漏れる。

そう、別にレジスタンスのメンバーに変わるくらいはなんでもないんだろう。

なにしろ俺はまだ生きてるんだ。死という絶対の変化に比べれば、その度合いも知れてるっちゃ知れてると言えるだろう。

身近な隣人が殺人犯だったりもする世界だ。テロリストだって世界各国にいる。

武装レジスタンスなんてそれにちょっと色がついたモノだ、と割り切れば、なおさら変化の度合いもしれてるってモノだ。

……まぁ、そんな言い聞かせをしている陳腐な自分には、溜め息混じりに小さな嗤い禁じえないけど。

「シャクナゲ！ヤバいぞ、ヤツら気付いてたみたいだ！第一班、第一班、オクレ、オクレ！」

隣にいる仲間――今なお通信機に向かって必死に呼びかける仲間の声を聞きながらも、俺はなんとなく耽っていたつまらない思考に嘆息でピリオドを打つ。

そして地べたに座っていた体をゆっくりと起こしながら小さく伸びをした。

『オクレ』――簡単に言えば連絡を返せって意味だけど、今の状況から考えて『連絡』が返ってくる事はないんだろうな……そんな冷静な現状分析をしつつも、強張った筋肉を丹念にほぐす。

連絡が返ってこないと思う理由は簡単だ。１つしかない。

通信機にかかりきりの仲間が、俺達の行動に敵は気付いていたと言ったのだ。

そして俺達みたいな存在――つまりレジスタンスの行動が読まれていた、という事がどういう事かを考えれば、自ずとその答えに行き着くだろう。

まぁそれすら分かっていないのか、その仲間は今なお必死に無言を貫く通信機に呼びかけていたけど。

レジスタンスというのは、一般的に権力や特定勢力に対する反抗組織、抵抗組織の事だ。

つまるところ『レジスタンス』があるからには、それを目障りに思う勢力が当然いる、という事になる。

そしてこれまた一般的な事なのだが、レジスタンスの力というの

はその『特定勢力』よりも劣る事が多い。
改めて言うまでもなく当たり前の話なのだが、真っ当にぶつかり合って勝てる力があるなら『レジスタンス』なんて組織は作らない。
勝てないからこそ概ねの『レジスタンス』達は地下に潜り、チマチマと作戦を決行するのだ。

その作戦が読まれたという事がどういう事か、と言うと……

「ヤ、ヤバい。ヤバいぞ、シャクナゲ！このままじゃ一網打尽にされちまう！！」

……まぁ、そういう事になるだろうさ。

「先行していた第一班の事は……まぁ本人達になんとかしてもらうしかないね。とりあえず三班（ウチ）は引くよ。後ろにいる二班のカーリアンにも連絡を」

それだけを言うと、俺――今はシャクナゲという名前のみ呼ばれる自分はそっと立ち上がる。
その両手に、俺がコードを貰って以来ずっと握ってきた相棒を手にしながら。

「シャクナゲは……」

「……仕方ないからね、俺はちっと足止めでもしてみるさ。その為のコードだし……あっ、機材は全部捨ててきな。重いだろ」

まぁその機材一式も今の御時世じゃ貴重なモノではあるけど、機材を運ばせてて仲間も傷つきました……じゃ間抜け過ぎる。
そう思い、機材も持っていこうとする三班の仲間達にそう諭すと、

憂鬱げに溜め息をつきながら相棒を握ったままの手の平をフルフルと振ってみせた。

いいから先に行け――そう言いたいのが分かったのか、駆けていく仲間達を見やりながらも、俺はゆっくりと目の前を伸びる暗い道を見据える。

時間は恐らくそうないだろう。作戦行動が読まれ先行部隊が奇襲を受けたなら、長く持つハズがない。

なにしろ敵方の方が数は圧倒的に多い。その上奇襲という不利な状況で戦う羽目になったとしたら、いかに先行の一班が奮戦しようが長くは保つまい。

そう状況を把握しながらも……不利な要素を思い浮かべながらも、1人第一班が先行していたハズの道の先を見やる。

その先からやってくるであろう化け物を見据えるかのように。

「なぁ、『シャクナゲ』。俺らはいっつも損な役回りだよな」

そう語りかけるも答えは当然なく――

「絶対的な切り札（ジョーカー）扱いをされて、最後までババを持つ羽目になる」

手に握る相棒は冷たい輝きを放ち、死を撒き散らす冷たき2つ顎を覗かせるのみ。

「強いからこそ負けを約束されるなんて、なんの冗談なんだろね？」

それでも二丁の拳銃、黒いオートマチックである『シャクナゲ』はやはり何も語らない。

そのいつも通りの沈黙こそが彼らの答えな気がして……

世界が狂ったのを今更嘆くのは無意味だ、そう諭された気がして、俺はそっと空を見上げた。

牙のように細い赤き月が浮かぶ狂った世界を――

１０年とちょっと前、世界はいきなり大きな変化に見まわれた。世界中に変種が生まれだしたのだ。

――『人間』の格好をし、『人間から生まれた』人の変種が。

最初の１０年は何事もなく、変種達も受け入れる方向で世界は流れていた……らしい。

らしいと推測で語るのは、俺が産まれた時にはすでに変種が存在し、すでに当たり前の存在と化していたから。

あって当たり前の存在が、当たり前に受け入れられていく課程の世界だったからだ。

そんな風に変種が受け入れられ、緩やかに流れていた世界がゆっくりと……そして歪に変質しだしたのは、俺がそろそろ義務教育を終え、高校生というステータスを持とうかという時分だった。

――世界中にいる変種の一部、全体から見れば本当に僅かな確率の変種が世界中で変革を起こしたのだ。

人間の世界に馴染んでいたハズの変種達。
すでに人並みの幸せも、人並みの不幸も、人並みの権利も、人並みの義務も持っていた変種達。

そんな変種達は人とは違う力を持ち、稀に人とは多少違う姿形を持つモノもいるが、すでに『人間』として……『人間から生まれた新たな人間』として受け入れられてたのに、この変革以来『人外の化け物』と呼ばれるようになったのだ。

――人に仇なす化け物、『ヴァンプ』という種に。

変種、その中でも俗に『ヴァンプ』と呼ばれる連中は、すでに変種に対する法も整備された世の中を全部……仲良く暮らしていた連中全てを巻き込んで、各地で力をもって改革を起こし、世界中を混乱に陥れた。

世界の中心と呼ばれた国が最初に崩壊したのは、ある意味当然だっただろう。
なにしろその国は『世界の中心』と認識される国だった上、人道を口にしながらも力を使う事に躊躇しない国だったのだ。
変種を受け入れる人道と、それを利用しようとする軍拡主義が変種達に自らの力を過信させ、驕らせた。
その過信こそ、変種達が『ヴァンプ』に変わる土壌となったのだろう。

とんだマヌケ共だが、それを単なる他人事と笑えないのがこの国の辛い所だ。
その『壊れゆく大国』に付き従う政策を取り、モロにその崩壊の影響を受けたのだから。

それまでその『大国』を目の敵にしていた僅かな連中でさえも不安に圧され、流通や経済が悪化するのは文字通りあっという間の事だった。

……この国で力あるヴァンプが変革を起こしたのも、それからすぐの事だ。

以来3年、この国……日本は、すでに四国と九州をギリギリ維持できる規模まで圧され、他は力あるヴァンプ共に好き勝手に切り取られた。

力のあるヴァンプが他のヴァンプ共を淘汰し、力を持たない人間（既存種）を支配して、各地を分割統治しているのだ。

それぞれが王だの将軍だの名乗る、強大な力を持つイカレ頭共が――。

俺達『黒鉄（くろがね）』は、それに対抗する諦めの悪い連中。

ヴァンプ共の好き勝手を認めたくない、『人間』と『変種』の集まり。

……まぁその中でも、俺は飛びっきり諦めの悪いヤツって言えるだろうね。

そう、ヴァンプ共の支配で落ち着いたこの国を、またメチャクチャにしようとしているんだから。

二丁拳銃をぶっ放し、かつて根を張っていた世界を取り戻そうと足掻いているんだから。

ひょっとしたら多くの人はもう望んでいないかもしれない事を、いまだに諦めきれずにいるんだから。

――だから俺の名前は『シャクナゲ（石楠花）』。
雑草のようにしぶとく、諦めの悪いシャクナゲ。
……頑なに自身の在り方を主張するだけしか能がないシャクナゲさ。

＊＊＊＊

「はぁ!?あのアホ……1人で足留めとかしてんの!?」

「は、はい。私達に先に行けと言って……」

「ったく、あんのバカ」

赤く染まった髪が風になびく。
あたしのコードそのものの色をした髪が。
それを鬱陶しげに払いながらあたしは盛大に舌打ちを漏らしてみせた。
あたしと同じく符号（コード）持ちでありながら、いつも通りにカッコ付けの雑草野郎へと毒付くように。

「あんのアホ、カッコ付ける余裕があんならとっとと下がれっての！！足留めにしたって、あたしと協力すりゃ簡単な話でしょうが……」

もちろんアイツの考えくらい分かっている。

あたしには仲間達の撤退を守らせたいのだろう、そんな考えから1人で足留めをしようと考えたんだろう、それぐらいは分かっているつもりだ。

それに対しては『アイツらしい』とすら思う。

それでもここはこうやって悪態をついて見せなきゃならないところなのだ。

「カ、カーリアン、お願いします。シャクナゲを……シャクナゲを助けてやって下さい！！」

そんなあたしの態度に、そう縋りつくようにして懇願してくる青年にも、思いっきり嫌そうに顔をしかめてみせる。さらにはそれを見せつけるかのようにそちら向いた。

こうやって形ばかりでも嫌そうにしてみせる事が大事なのだ。そうしなければ軽く見られる事になるし、あのカッコ付け野郎に恩を着せる為にも、『イヤイヤながら』ってポーズは必要不可欠だろう。

素直になれない、とかじゃない。絶対ない。ありえない。

あくまでもあたしを軽く見させない為なだけで、ついでに恩を大きく売る為でしかない。

「面倒っくさいわねぇ～。あのアホ、どんだけあたしに迷惑かければ気が済むってのよ」

「そ、そこをなんとか……なんとかお願いします！今ここ来てるコードフェンサーはカーリアンしかいないんですっ！！」

そんな泣きそうな調子で言う雑草野郎の副官に、あたしは内心ではほくそ笑みながらも、大袈裟に天を仰いでみせた。

自らの立場……特殊なコード持ちである変種、『コードフェンサー』たる自身の立場を嘆くように。

「カクリ、二班は三班のマヌケ共と一緒に撤収。機材は三班と分担して運んで」

「機材を……運ぶと手間取ります……」

「雑草野郎が足留めしてんなら、二班の機材くらいは運べるでしょ？三班の連中に持てるだけ持たせりゃいいのよ」

冷静な副官……カクリの声にそう返しながら、シッシッとばかりに手をヒラヒラ振った。

その副官が、可愛い顔にはもったいない相変わらずの無表情で小さくコクンと頷くのを見ると、あたしはもう一度イヤそうに舌打ちをしてから歩き始める。

「あたしはカッコ付けの雑草野郎を引っこ抜いてから行くから先に行ってて。多分そんなにかかんないから」

「……はい」

「あんたの優秀さは信じてるから言うまでもないとは思うけど、無

理そうなら道具は全部捨ててきなさいね」

「……はい」

相も変わらずあまり喋らない子に、呆れ混じりに肩をすくめ……あたしは予備動作もなく駆け出した。

後ろで一つに括った赤いポニーテールを、夜風になびかせながら。

カーリアンのコードに相応しい、赤一色のコートを着込んだ『コードフェンサー』として。

（……ったく、アイツはあたしがいなきゃ何も出来ないんだから！）

なんて事をちょっと嬉しく思ったりもしながら。

＊＊＊＊

「えっと、よかったのかい？なんかカーリアンを騙したような気がするんだけど……」

彼女が去った後にそう語ったのは、三班副官の青年だった。

その言葉に二班副官たる小柄な少女は、小さくコクンと頷いてみ

せる。

「カーリアンは素直じゃない……。……逃げろって言ったらムクれてた。……そしてあなたが何も言わなかったら……多分オロオロしてた。……シャクナゲの事が心配なのに自分からは何も言えず……ただひたすらオロオロオロオロしてた」

そんなカーリアンも可愛いけど……と続ける少女を見ながら、青年は小さな苦笑を浮かべた。

強大な変種――コードフェンサーであるカーリアンが、自身の副官である小柄な少女に実権を握られているという噂は本当だったんだ、などと納得しながら。

そして最初に副官である少女に面会した自分の運の良さに感謝しながら、彼は残ったままになっている主がいる方向を振り返る。

彼が心酔する自分よりも若い変種……1人残ったままになっている少年を見据えるように。

（……シャクナゲ、あなたは必要な『人間』です。あなたはヴァンプとは違う存在なんですよ）

そんな事を思い、小さく呟きながら。

「……撤退。……二班は数の少ない薬を優先……三班は機材を運んで。……怪我人はいないからすぐに出る」

「残ったままのシャクナゲにはカーリアンが手を貸しに行ってくれました！我らは先に撤退します！ここの殿（しんがり）は私と黒兎小隊で。後のメンバーはカクリさんの指示に従って下さい！」

そして2人はそう指示を出すと、それぞれ即座に撤退準備に入る。

『紅』と『黒鉄』の2人が帰るまでは、彼ら2人が班の仲間を纏めなければならないのだ。

胸の内で小さな不安が消えなくても、それを抑えて彼らが率先して準備に入らなければならない、と2人ともが理解している。

それは上に立つ者が何事も率先して動くのが、この2つの部隊に共通する在り方だとそれぞれ理解しているからだ。

2・アナザー　バースディ（前書き）

表題はイメージで付けています。英語ではなく、カタカナ表記なのは敢えてそっちを使ってみます。

2・アナザー　バースディ

世界はヴァンプと呼ばれるキチガイ共に好き勝手にされていた。
友達と遊び歩く放課後も、暖かな夕食が待つ家も、それら生活の中心たる家族をも壊されて――

昔の私は、文字通り気が触れそうだった。
力を持って全てを奪った『変種共』。
私の大切を全部壊した『バケモノ共』。

それを思うと気が変になりそうで……実際ほとんど変になりかかっていた。　目の前で『狂った変種に従う人間共』に、泣き喚きながら犯されていく友達を見た。
その様子を、ただ震えながら隠れて見ていた自分の汚さも見た。
あまつさえ耳を塞いでその友人の悲痛な声から、自分の心だけを守ろうした弱さも知った。
あちこちで『狂った変種共』と、それに対抗する人々の怒号が響く中を、その時の私はただ泣きながら……震えながら家に帰ったのだ。

昨日までは平和だった。あちこちで『変種』が革命を起こし力を振るっていても、そんなニュースを聞いても私の周りには関係ない、そう思っていたのだ。

それなのに、次の日には私の街にも『狂った変種』は毒牙を伸ば

していた。

変種の内でもヴァンプと称されるモノは、その力を持って一夜にして私の世界を変えてしまったのだ。

ヴァンプ共の力は、ただの人の変種とは思えない力だ。
国が崩壊するくらいと言われても分からないだろう。

私も自ら実感するまでは理解出来なかったクチである。
だが、圧倒的な力を持っていたのだ。

銃弾や爆発物、燃え盛る炎ですらモノともしない頑丈な体を持つモノがいた。
もちろん銃弾など当たらない速さのモノもいた。
腕を振るだけで風や衝撃波を起こすモノ、電子機器を自在に操るモノまでいた。
私がこの目で見ただけでこんな連中がいたのだ。

もちろん粉々にされればいかな変種とて死ぬだろう。
だが、連中は害虫にも似た強い生命力を持って、害虫以上に巨大な規模で災厄を撒き散らす。

そしてその力を見せつけて、人々を狂わせ、従わせ、ヴァンプの従者とする。
そう、ヤツらはその力でどんどん人々を狂わせていく『ヴァンパイア共』だった。

ヴァンプに比べれば、ヴァンパイアなんて可愛いモノだ。
少なくともニンニクや十字架は『あのクソったれ共』には効かないのだから。

泣きながら帰った私は、ニュースを食い入るように見てまた泣いた。

声はもう枯れていたから、ただ無言でさめざめと泣いた。

各地でヴァンプ共が決起し、自衛隊や警官隊が撤退しているのを知ったから。

泣き叫んでいた友達の仇を取ってくれるモノがいない、そう思い知らされたようで泣いたのだ。

街の様子に、会社から飛んで帰ってきた父が、ゴルフクラブを握り締めながら力強く笑ってくれた。母も『主婦の底力見せてやるんだから』と言って、私を元気付けようとしてくれた。

私も笑ってみせた。

だが、そんな家庭も……家族の会話さえも次の日までは持たなかった。

最初に父が殺された。

痩せていて、強そうには見えない父が勇気を振り絞って立ち向かい、家へと押し入ってきた『ヴァンプ共』に殺された。

『素直に従って、家財一式と娘を差し出してりゃいいのに』

そう笑う男達……すでにヴァンプに成り果てた元人間の男達に、母も立ち向かった。

最後に笑ってカードと印鑑、自分と父の携帯を渡してから……

――私に『逃げなさい』と言って。

私はそれを見ていた。狂ったように叫びながら、包丁を振り回す

母の姿を……

いつもは穏やかな母の最後の姿をただ見ていたのだ。

やがて押さえつけられ、父のグラブで叩き殺される様子を。

私はただ聞いていた。

大好きだった母の声で小さく呻く声も、私を呼ぶ声も――そして『逃げなさい』という願いも。

多分、私は狂いかけていた。

正確には狂いたかった。狂ってしまえればどれほど楽か、ヴァンプ共のようになれたならどれほど良かったか……本気でそう思っていた。

元人間のヴァンプじゃない。元変種のヴァンプみたいな力があれば、私は奪われなかった。

私は狂うほどにそう思った。　狂うほどにそうじゃない運命を――人のままの自分を呪った。

それは目の前のヴァンプ共への恨みを超えた、呪詛と狂気だったと思う。

そんな狂気を孕んだまま――

下品な笑いを浮かべながら近付いてくる男共を見て……

私は叫んだ。

心の底から、魂の奥深くから絞りだすように叫んだ。

全てを拒絶するように……

ヴァンプ共と自分に対する怨鎖の叫びを上げた。

長い髪が怒りと恐怖と絶望で、真っ赤に染まるのを視界の端に見ながら。

引きつるように笑いを引っ込める男共に、私はなおも叫んだ。その叫びに意味なんかなく、ただの衝動のままに叫んでいたに過ぎない。

そう、父と母の血で真っ赤に染まった玄関先で、赤い髪を振り乱して叫んでいたのだ。

自らの体から滲み出す炎が視界全部を更なる赤で染め上げるまで――。

これが変種としてのあたし……ヴァンプではなく『人間の変種であるあたし』が誕生した瞬間。

父と母を殺したヴァンプ共にはなりたくない私が、ヴァンプになる誘惑を拒絶して産み出した『あたし』。

普通の人と思っていた私がその名前と生活を捨て、『カーリアン』のコードで呼ばれるほどの力を手に入れた瞬間だった。

それから数日がたった。

世界は相変わらずクソったれのままで、ヴァンプ色に染められた感じを受ける空間には反吐が出た。
もちろんそれはヴァンプ共だけが理由ってワケではなく、撤退したまま音沙汰のない国に対しても感じた『絶望』。
あたしはそんな絶望に突き動かされるように、ヴァンプ共を狩った。
元人間も、元変種と呼ばれたヴァンプ共も、区別なく狩り続けた。
ただ策もなく追い回し、ただがむしゃらに追い詰め、そして残酷に殺した。
その途中で家族を殺された少女を拾い、他にも数人の仲間は出来た。
全員が私みたいな体験をした人々、虚ろな瞳をした人々ばかりだった。身上的には同類だったハズだ。
人もいたし、変種もいた。
だが、あたしはそいつらにもムカムカしていたのだ。
……あたしの力に付き従う連中が、『ヴァンプ』と重なって見えたから。
その苛立ちを消すように、紛らわせるように『ヴァンプ共』を殺した。
あたしの力――炎を体から生み出す力で。
あたしの紅蓮の炎で灼き尽くした。
『灼熱の紅姫』だの『黄昏の死神』だの呼ばれるくらいに。
……あぁ、そう言えば一つ気の効いた2つ名があったな。
『死にたがりの紅』って2つ名が。

なにせあたしは死に場所を探すように全てを燃やした。
何とか普通の『人間達』に力は使わずにいたが、その分を当てこするようにヴァンプ共には容赦をしなかった。
どの程度燃やせば『狂った変種』は死ぬのか。人を平気で傷つけられる人間でも、やはり自分が傷つけられたら同じように痛がるのか。
強がっているヤツらが、どれぐらい燃やしたら、『もう殺してください』と言うのかを試した事もある。
他にも神経を灼き切ったら本当に痛くないのか……ｅｔｃ．ｅｔｃ。

恨みを買うように、恐れられるように、殺されるのを望んでいるかのようにあたしは力を振るった。

当然報いを受けるのも早い。あたしに恐れを抱いた一部の連中が、ヴァンプ共に密告をしたのだ。
最初に拾った少女……カクリと名付けてやった少女だけはあたしの側を離れなかったが、後はみんなヴァンプに従うか、死にたがりに従うかを悩んでいた。

そう、カクリだけだった。
両親が殺されてから、ずっと隠れていただけの少女だからカクリ。
恐怖か悲しみかで記憶を無くしたらしい少女に、気紛れでそんな名前を付けただけなのに、彼女だけはあたしの側から離れなかったのだ。

記憶障害からか言葉も上手く話せず、『うーうー』唸るだけしか出来ないのに、あたしを囲む連中を睨みつけてもみせた。

カクリ自身は、知覚能力が優れているだけの変種でしかなかったのに、だ。

死にたがりが供を連れてどうするっ!?あたしは1人でいい!!

そう叫んでみせても、少女は『うーうー』唸って、あたしの側から離れない。

しまいには『アンタがいても邪魔なの!!鬱陶しいんだよっ!!』と怒鳴ってもみせたのに、カクリはイヤイヤをしながら離れないのだ。

周りにはヴァンプ共が数十人。

この内何人が『元変種』で、何人が『元人間』なのかは分からない。

その比率がどうだったにせよ、武装した連中に囲まれているのは変わらない。

それでも……それでもあたしは、何故か諦める気にはなれなかった。

今までなら、このヴァンプ共を皆殺しにして巻き込んで死んでやる。

父や母、友達の恨みに比べればまだまだ足りないけど、せめてここにいるヤツらだけは地獄に引き込んでやる……そんな風に考えていただろう。

そんな事を考え、薄く笑っていたかもしれない。

――やっと死ねる。

そうも思ったハズだ。

それなのに、その時は何故か死ねない気がした。
何故か死に場所はここじゃない、と思えたのだ。

でも、状況は絶望的で……銃を構える連中のただ中にいる。

――あたしなら銃弾くらいは避けられる。
銃弾を溶かして無力化出来る。
でも他の連中は……？カクリはどうなる？

……家族を失った時と同じような絶望感を感じあたしは躊躇した。
あたしが全力で力を使えば、カクリを巻き込んでしまう。そう、
あたしがこの手でカクリを殺してしまう。

そんなあたしの躊躇を見て取ったか、銃口はカクリに向く。

『やめ――』

思わず悲鳴を上げそうになった瞬間だった。

この場には相応しくない気怠げな口調が聞こえてきたのは。
目の前の銃口は火を噴いていないのに、銃声に似たモノが聞こえ
てきたのは。

『……そっちの赤いのに用があるんだけどな』

そう言いながらカッコつけた様子でクルクルと二丁の拳銃を手先
で回し、あたしとカクリの前に男が立ちはだかったのは……。

『……ヴァンプ共はムカつくけどさ。今は見逃してやるよ』

そう言ってフッと銃口に息を吹きかけ笑う男は、囲まれているのを気にもせずあたしへと向き直り

『お前、合格ね』

そう言って軽くウインクをかますと言葉を繋げた。

『場所をわきまえず力を使い、一切合切巻き込むヤツなら捨ておくつもりだった。
いや、俺が狩ってたね。ヴァンプ予備軍って事でさ』

そう言って左手の銃を高く投げ上げ、きょとんとしていたカクリの頭を開いた左手でなでてから、落ちてきた銃を再度手にする。
右手の銃口は、ずっとヴァンプ共に向けたままだ。

『黒鉄の『シャクナゲ』……この名前で引いてくれたら嬉しいんだけどね？』

そう言った男は、ムカつくくらいにカッコを付けていて……ムカつくくらいにそれが似合っていた。
滲み出す冷たい空気――殺気に、ヴァンプ共が恐れをなしたのか、はたまた『シャクナゲ』という名前におののいたのかは分からない。

だが、ヴァンプ共は悲鳴を漏らし、我先にと逃げていく。
あたしを裏切ったヤツらも一緒になって。

『俺はレジスタンス黒鉄のシャクナゲ。
迎えに来たよ。ヴァンプとは違う君を』

そう言って差し出された手。

――それを躊躇いながらも握った瞬間より、あたしは『ヴァンプを殺す死にたがり』から『黒鉄のカーリアン』になったのだ。

2・アナザー　バースディ（後書き）

今回の話で分かるように何人かの視点を変える形で話を進めます。三人称は入れません。しかも純粋なファンタジー……完全に異世界と割り切って書いたりもしません。それでも読んで頂けたら幸いです。

3・ネオ

「数が多いね。将軍もそれだけ黒鉄が鬱陶しいってワケだ」

そう関西を以西を統べる狂った男……関西の始祖たるヴァンプ『自称将軍』に毒付くと、さらにスピードを上げて俺は裏道を疾走し続ける。

頬をきる風、夜でも生ぬるい夜気。それらは冷たい何かを含んで交互に駆ける足を蝕み、俺の体を夜気が抱いているような錯覚を受ける。

それでも歩は止めない。

この先には帰るべき場所があるから。

こんな自分がいていい場所があるから。

そう思えば、そんな錯覚ごときで動けなくなるワケにはいかないのだ。

この先にあるのは、ただの廃墟群だ。ただの廃れた街、過去に都市だったモノの成れの果て。

それはいわば都市の亡霊と言えるだろう。

しかしそんな場所でも、いまだ足掻く俺達にとっては唯一の居場所。

黒鉄が活動の拠点を置いている都市『廃都・カリギュラ』があるのだ。

かつては関西地方でも割とデカい都市として知られ、今では『キチガイヴァンプ共』にカリギュラと名付けられた街。

――そこで俺達『黒鉄』は活動を開始した。そこは関東より引っ越してきた俺と、今は亡き『アカツキ』というコードフェンサーが出会った街でもある。

黒鉄を『アカツキ』が作った街だ。

アイツは変種でありながらヴァンプからは最も遠い男であり、黒鉄の体制を作った総指揮官。

瞳も髪も金色をした日本人離れした男。

つまり外国人の血を引いていない限りは有り得ない色素構造により、すぐに変種だと分かるような外見をしていた。

そして俺に愛銃と同じシャクナゲのコードを付け、俺をいまだに約束で縛る男……。

（智哉、お前ってホント自分勝手な）

そう先に逝った『俺だけが本名を知る』親友へと毒を吐き、２つの銃口を空へと向ける。

（カッコ付けのお前に、いい役をくれてやったんだよ）

そんな俺の耳に、つい最近まで聞き慣れていた皮肉げな調子の言葉が聞こえた気がして……

俺は笑みを漏らす。

黒鉄が誇る強大なコード持ち。

最初にコードを……人であり続ける『符号』を受けた変種。

変種でありながらヴァンプである事を拒絶した『黒鉄の人間』。

黒鉄最初のコード持ち……『シャクナゲ』の笑みを。

「……俺はかなり強いよ？

それに諦めの悪さも格別だ。

なんせ、黒鉄に咲くシャクナゲは枯れないんだ……『黒鉄が必要なくなる時までは絶対に』！！」

辺りには人影はない。

夜目の効く俺が見ても人はいない。

走り去った後には、何人ものヴァンプ共の死体が転がっているが、それでも今ここには誰の気配もない。

ただ優れた嗅覚により、後方からわずかに流れてくる血臭が感じられるだけだ。

それでも俺は声を張り上げた。

自らの居場所を示すように。

この道の先へと――居場所に撤退した仲間達を追おうと走る犬共（ヴァンプ）を、俺に釘付けにするように。

そして相棒のオートマチックは牙を向き、吠え叫ぶ。

こいつには銃弾の心配がない。

だから俺も遠慮なく弾をバラまいてやる。

将軍の犬共に、獲物の存在を知らしめるように派手に音をバラまいてやる。

「来い、来い来い来い来い！！シャクナゲを刈り取るつもりならここに来いよっ！！」

……世界は狂っていた。本当にどうしようもないくらいに狂っていた。

『シャクナゲ』が空間圧縮能力を――空気の塊を銃弾に変える力を持つのが、当たり前に感じられる程に狂っていた。

あるいは『アカツキ』自身が、『ラストノート』と呼ぶ予知能力を持っていたり、カーリアンが『高ぶる感情を炎に変える力』を持つくらいに狂っていた。

そんな中で『シャクナゲ』は咲き誇る。

『暁』に約束させられた事だけを叶える為に。

『……いつか俺達が『アカツキ』や『シャクナゲ』じゃなくなる日がきたら――智哉、『……』と呼び合える日が来たらいいな』

そんな約束の時の為だけに、俺はヴァンプ共を狩り続ける。

精鋭である第三班の長として。

『黒鉄』の最初の友として。

バラまいた空圧の弾丸が破裂して弾痕を壁に刻む。
この道の先には人影がいくつか見えた。それは思惑通りに音に惹きつけられてきた者達だろう。
その人影へと俺は走る。
銃器を握るその影が仲間であるハズがない。
仲間達にはもったいないけど機材を捨てておくように指示をした。
武器すら捨てて逃げるように指示したのだ。
それにそいつが手に持っていた銃器は、俺達黒鉄が使うモノよりも断然高性能のモノだったのだから。

それを一瞬で見極め、足を動かす為のギアをさらに上げる。
そのスピードは、すでに並みのヴァンプ……『元人間』には即座に視認出来ないモノなのだろう。

見当ハズレな場所に穿たれる銃弾を鼻で嗤い、スピードを維持したまま銃手たる男の脇を駆け抜けた。

コキン……

そんな小気味のいい首が折れる音と感触を、叩きつけたオートマチック越しに感じ、そのまま俺は壁へと向かい飛び上がる。
そしてその壁を強く蹴り付けると、宙を数十m単位で飛んだ。
はためく衣服の影を追い、慌てたように銃を空に向ける他の連中を見て、俺はそれらの人影に順にポイントしてから引き金を引いていく。

パンパンパン……

そんな銃声にしては軽すぎる音が建物の間に響き渡り、次々と『

ヴァンプ共』を血の赤へと染めていった。

それを――確実に命を刈った事を、自らの目で確認しながらも油断はしない。

死者に対して哀悼の意すら向ける余裕はない。

――元人間ばかりか？『元変種共』は？

それが憂慮となって、無表情という名前の鉄仮面を被り続ける。

元変種――本当の意味でのヴァンプが、これだけの騒動に出てこないハズはない。

そう思い、辺りをみやった瞬間だった。

俺へと無色透明な衝撃波が襲いかかってきたのは。

「ぐっ……」

無様に吹っ飛ばされ、そう呻きつつも大地に激突する瞬間に受け身を取る。

そして受け身の勢いのまま、地面を転がるようにその場を離脱した。

鈍い音と共に、さっきまで俺がいた場所のアスファルトが砕けるのを感じながらも、両手の銃口をその衝撃波を放った相手へと向けた。

「シャクナゲ。また君かい？将軍閣下も今回ばかりはかなりご立腹だよ？」

「はっ！心の狭い野郎だな、エセ将軍サマもさ。そんなに俺達に目を付けられるのが嫌なら、さっさと隠居しろっつっとけ」

そんな風に軽口を返しながらも俺はその男を見る。
ご丁寧にビルの屋上――しかも給水等の上なんてベタな場所に、これまたベタに月を背おいたたずむ『ヴァンプ』を。

「……シャクナゲ、いい加減にしなよ。君ほどの新人類（ネオ）が、なんで将軍閣下に逆らってまで古い体制にこだわるのか……正直理解に苦しむよ」

そのヤツら独特の呼び方……『ネオ』という響きに唾を吐き捨て、俺は気怠げに立ちあがると、両手に握るオートマチックで肩を叩いてみせた。

――ネオって響きだけは何度聞いてもムカついて仕方がない。
たかがキチガイが思い上がる様子が俺を苛立たせる。
『それ』と同種だと思われるのにも反吐が出そうだった。

「そりゃお前の理解力……脳みそが足りてないからさ。
それに気安く『シャクナゲ』って呼ぶなよ。お前みたいな三下なんか知らないぜ？」

「ふざけているのかっ？大体、お前達は誰の街に入り込もうとしていた！？私の街……『クリシュナ』だろうが！？なんで私を知らないなどとぬかせるんだ！？」

簡単に三流の挑発に乗ってくれるのは有り難いね、全く。
だから三下だって言ってるんだけど。
だが、そんな内心を出さないまま、俺は惚けたように言葉を返した。

「あぁ、お前がエセ将軍麾下のナルシストか。
悪いな、クリシュナの知事が『一番間抜け』って事しか知らないんだわ。だから顔もしらない。まぁ、間抜けだからこそクリシュナを狙ったんだがね」

「キサマ……」

「はん、ご自慢のナルシストの仮面が外れかけてるぜ？
……所詮は下衆なキチガイヴァンプ。上っ面だけ取り繕っても醜いだけさ」

そう嘲るように言った俺に、男は狂ったような叫びを上げて衝撃波は放つ。
四方八方に音の衝撃波……声の塊を。

「ムキになんなよ、下衆野郎。せめてナルシストを気取るなら短気は直しとけ。
醜悪すぎて反吐もでないからさ。可愛さ余らずムカつき１００倍だ」

「殺すっ！！」

俺は銃声……破裂させた空圧で声の塊を相殺し、男へと向かって宙へと跳躍する。
その俺へと次々と音波を放ち……男は飛び降りながら拳を振りかぶった。
そしてそのまま俺に激突するかの勢いで肉薄し――

「くっ……」

俺だけがそのまま弾かれる。俺だけが相手の勢いに押される。
それは身体能力だけの問題ではなく、上下の――位置取りの差だ。
俺は重力に逆らって飛び上がり、ヤツは重力を味方にして飛びかかる。その差に負けて俺は態勢を崩したのだ。

「シャクナゲェェェ――――ッ！！！」

「……くそっ！！」

再び上――自身の有利な立ち位置へと飛び上がりながら、俺の名前を音波に変えて放つヴァンプ。その様子に舌打ちを漏らし、両手の銃口をその男の足元、そして放たれた音波へと向ける。

そしてその破裂音と空圧で、音波を相殺しながら大きく飛びずさった。

――いかに頭は三流でも、知事を任せられる力だけはある……て事かよ。

そう毒づきながらも、耳の奥には相殺しきれなかった音の波が突き刺さり……

それが『俺達の名前』を形取って放たれた、と思うと血の混じった文字通りの『血反吐』を吐き捨てた。

「男のヒスはな……ウザいんだよっ！！このエセ将軍のクソ三下野郎がっ！！」

俺は耳の痛みを無視したままその音波に負けじと吼え猛り、再度地面を蹴る。

それにヤツはもう一度上から飛びかかろうとして――足に力を入

れた瞬間にはその足場たるビルの屋上にある給水塔が破裂した。

俺が先程から撃ち続け、飛び上がりながらも空気圧をぶつけていた給水塔が、穴だらけの様相で傾いていく。

――ふん、上に位置取り、シャクナゲの弾丸軌道にさえ気を付けりゃ勝てるなんて甘い考えが……

「三流なんだよっ！！この三下ヴァンプがっ！！」

その崩壊に注意を取られ、とっさにビルに降り立ったばかりの男に、両手の『シャクナゲ』が死の砲火を浴びせていく。

１発、２発……１０発、２０発と。

ただ狙いもつけずに、ひたすら浴びせかけた。

その間も男は怒りの声、痛みの叫びを……苦悶の呻きを音波へと変えて俺へとぶつけてくる。

交差する空圧の弾丸と音の波。

どんどん音波は俺の体力を削り取り、耳の麻痺から脳まで痛みだす。そして体から溢れでる分だけ血を奪っていく。

それでも俺は銃を放ち続け――

飛び上がった俺が同じビルに降り立ち、銃撃を止めた瞬間……いや銃口をもう持ち上げていられなくなった瞬間には、不可視の音波はただの小さな声へと変わっていた。

後に残るのは哀れな元変種の呻き声。

それは音波にもならず、微風すら起こさないただの声。

「……シャク…ナゲ」

あくまでも敵意衰えず、倒れ伏しながらも俺の名前を呼び続ける男は、その体に無数の小さく深い穴を空け、人間と同じ色をした赤い血を垂れ流していた。

「気安く呼ぶなつったろ？ま、今のお前ならいいけどよ」

「……？」

俺の言葉が理解出来ず、疑問を浮かべる表情にも死相が浮かび――俺はそれに対して再度嗤ってみせる。

『シャクナゲ』の笑みを。

「先に逝ってろ。お前の親玉……将軍閣下もいずれ地獄送ってやる」

「シャク……」

俺の言葉に、最後の力を振り絞るかのように瞳へと力を込め……俺はその額へと銃口を向けた。

「そうさ。お前と同じようにシャクナゲの名前を刻み付けて……な」

「シャクナゲェェェ――――ッ！！！」

――パンッ！！

4・パートナー

――全くさ、1人突っ走るのとか勘弁してよね。

そんなグチを口内で漏らしつつ、あたしは夜道を駆ける。

本来なら、『黒鉄』の大半の部隊を率い、潜入する為に通るハズだった『戦都・クリシュナ』へと続く裏道を。

たった1人で1都市の警邏軍を足留め、なんてムチャな真似をしている男がいるだろう場所へと向かって。

――ほんっとカッコ付け野郎なんだからっ！！

脳裏にはニヒルに笑う黒髪黒瞳、細身の男の笑みが浮かび――

続いてその男が傷だらけな姿も浮かんで、あたしは駆ける足をより早めた。

アイツが……あの黒鉄のシャクナゲが、そんなに簡単にやられるようなヤツじゃないのは、あたしが一番分かっているつもりだ。

でも不安になるぐらいは仕方ないだろう。

アイツが死ぬ。

それは今の『私』の一番の……最後の目標が潰える事を意味する。

アイツが死ぬ時は、せめてあたしがすぐ側にいる時じゃなきゃな

らない。それ以外は許せない。
絶対に死んじゃダメ！とか言っているワケじゃないのだから、それくらいのワガママは叶えてもらってもいいハズだ。

そんな事を、クソッタレな神様とやらに毒づきながら、あたしはひた走る。

今走っている辺りは、汚らしいゴミが撒き散らされている裏通りで、そのゴミからは凄惨とも言えるほどの悪臭が漂っていた。
それに、あたしは足を止めないまま顔を軽くしかめてみせる。
別に臭いだけに顔をしかめたワケじゃない。
これくらいの悪臭が漂う場所は、あたし達の街にもいくつかある。さすがに慣れた……とは言い難いが、この臭いごときで足を止めるほど、ネンネなお嬢さんなつもりはない。

『このコートに臭いが付く』
『シャクの黒のコートと対になる紅いコートに臭いが付く』事だけが、あたしを鬱にさせる。

「シャクナゲェ～！？シャクゥ～、どこぉ～？」

とっとっとシャクをとっ捕まえて帰ろう……そう思って声を張り上げる。

恐らくカリギュラからクリシュナへと至る道の内、シャクならばこの道で足留めをしようとするだろう。
彼の能力を考えれば、この寂れたビルが立ち並ぶ通りは、障害になりえるモノばかりだと思えるかもしれない。

だがそれは違う。
この障害物達は、そのまま彼の身体能力を活かす足場となるのだ。
彼の最大の力はその正確無比な銃撃によるモノなどではなく、その変種の中でもかなり高い部類に入る身体能力と、銃撃を活かせるだけの状況把握能力だ。

アイツがこんな障害物だらけの場所に、何かを考えて潜んでいる……そう考えればあたしでも震えがくる。
だからこそシャクは、このビルが林立する通りへと敵を引きつけるハズだった。
あたしにはそれが自信を持って断言出来る。

「シャクナゲェ～？シャクってばぁ！！」

もちろんこんな大声を張り上げてみせるのも、あたしなりの計算が入っていた。
シャクならば気付けばやってくるだろうし――

「それ以外……ヴァンプが気付いちゃっても問題ないしね？」

そう言ってあたしは足を止めると、フッと息を吹きかけるようにして、通りの一角へと灼熱の息吹きを飛ばした。

途端、通路に撒き散らされたゴミから吹き上がる紅の炎柱……『カーリアン』の力の発露。

そして爆炎巻き上げるゴミの群れがさらなる悪臭を吹き上げる中、そこから3人ほどの人影が転がり出てくる。
3人の男……元人間達が。

「ふん、まぁあんた達でもいっか」

それを見てなおそんな気楽な口調で言うと、あたしはポリポリと頭を掻いてみせた。

――まぁ、ハズレだけど、ヴァンプを見かけちゃった以上は潰しとくか……シャクの居場所くらい知ってるかもしれないし。

そんな程度の感慨を込めて。

「お前、ネオか？どこの者だ？」

「……北陸の者か、はたまた中部の手の者か？」

「どちらにせよ、将軍閣下に挨拶もなくシャクナゲを狩る事は許されんぞ？」

そんな勝手な推測、勝手な男達の言動をあたしは鼻で笑い、腕を大きく振るってみせる。

内で高ぶる感情を……烈火のごとき感情をくすぶらせながら。

「……狩るって誰を？シャクナゲを？黒鉄のシャクナゲを？あんた達ごときが！？はっ、笑わせんな」

そして、抑えきれなくなったそれを、手のひらに紅蓮の輝きとして溢れ出させながら。

「キ、キサマッ――！！」

そんな驚いた声を小気味よく感じながらも、あたしは不快そうに

吐き捨てた。

「……それにネオ、なぁんて呼ばないでくんない？
あんたらヴァンプ共――元変種や元人間みたいに、『新人類』って
響きだけで優越感を持てるほど、あたしのプライドは安くなんかな
いからさ」

――それにシャクの前で『ネオ』なんて呼んだら瞬殺されてるよ
……とも思ったが、それは口には出さずに留めおいた。

シャクの事ばかりを考えてるようでなんだかイヤだし、何よりも
『ネオって呼び方』が嫌いなのは、シャクの影響をモロに受けたモ
ノだ、と私自身が自覚していたから。

「あたしはカーリアン。シャク――シャクナゲの……えっと、同僚
？友達？
あれ、なんになるんだろ？」

そう名乗りつつも、どちらの響きもなにか納得がいかず、あたし
は殺気が乱れ飛ぶ中で小さく首を傾げた。

確かに同僚なのは間違いない。友達と言っても不足はない。
……でも、なんか響きに納得がいかないのはなんでだろう？
その理由は良く分かっていたけど、口に出して『同僚』や『友達』
と言い切るのは、なんか納得がいかない。

「キサマ、黒鉄かっ！？」

「黒鉄のネオだっ！！合図を――」

そんな風に考え込むあたしをよそに、慌てて真ん中の若い男は発煙筒を掲げようとした。それにあたしは思いっきり地面を蹴り一気に肉薄する。

そしてそのまま手のひらの輝き――あたしの力の塊たる高熱の渦をぶつけてやる。

シュッ……そんな一瞬で肉が炭化する音が聞こえ、腹を焼かれた男の声にならない断末魔が一瞬遅れて響き渡った。

それを聞きながらもあたしはそっと溜め息を吐く。

『殺す時はさ、自分の心も押し殺すつもりでやれよ？心が痛みを忘れないように……さ』

そう言っていたシャクの言葉を思い出し、あたしは憂鬱感一杯で残る2人を見やる。

「あたしさ、例えヴァンプでも、もう殺しはしたくないんだよね。アイツが……嫌がるからさ」

――だから……

そう続けながらも、あたしは新たな輝きを両手のひらに集めていく。紅蓮に輝くあたしの中にある炎の力を。

「シャクの居場所、教えてくれない？もし知らないなら大人しくしてて。こっちの作戦は失敗に終わった以上は、無駄な血は流したくないしね」

そう言ってその輝きを2人に向かってかざしてみせた。

もちろん、いざとなれば人間を殺す覚悟を瞳に込めて。

「大人しくしててよ？シャクナゲさえ見つけたら、あたしもシャクナゲも引いてあげるからさ」

そう言いつつも、まだ『あたしの中にいる冷酷な悪魔』を前面に押し出してみせる。

ヴァンプ共に、あたしの本気が伝わるように。

でもそれに……かつてのあたし、『死にたがりの紅』に、心まで覆われないように言い聞かせながら。

――大丈夫、大丈夫だ。今のあたしは『カーリアン』……

黒鉄のコードフェンサー『カーリアン』だ。

『死にたがり』なんかじゃなく……

――そう！シャクの『相棒』であるカーリアンなのだ！！

そんななんとか納得がいく『関係を表す言葉』に、あたしは小さく頷いてみせた。

胸の内でシャクの名前を呟きながら。

本名の分からない黒鉄最強の『コードフェンサー』の『コード』を呟くだけで……

『カーリアン』である自分が強くなるのを感じながら。

＊＊＊＊

正直状況は最悪だった。
体中からいまなお血が溢れ、視界が歪んでいく。
知事クラスのヴァンプや他多数を狩り、最低限の足留めは果たせたが、その代償もまた大きかった。

まずは体力面。正直休息を入れながらでなければ、歩く事すらままならない。
どこかでジックリ休んで、普通よりも早い回復力と治癒力に頼りたい所だが、正直この血が厄介だった。
元変種共は、嗅覚などの五感が非常に優れているのだ。血の臭いを撒き散らしたまま休息などをしても、落ち着けるワケがない。

だからこそ俺は限界ギリギリの体力を振り絞り、細い裏道をゆく。
今なら元変種共じゃなく、銃を手にした元人間にもかなわないかもしれない。
それが俺を焦らせ、倒れ込みそうな体を突き動かしていた。

「アイツら……上手くカーリアンに合流出来たかな……？」

そんな心配をわざわざ口に出し、自らの帰る場所を思い出しながら、一歩一歩ゆっくり歩を進めていく。
この先にある街に、こんな自分でも——血にまみれた俺でも受け入れてくれる場所がある。
罪に濡れた俺でも、まだ守れるモノがある……それだけを寄りどころに歩を進める。

この先に誰かがいるのはしばらく前から分かっていた。
……俺も変種だ。
その感覚はヴァンプにも劣るモノではない。
それでも、今更道を変えるワケにもいかず……
こっちに真っ直ぐに向かってくる相手に、道を変えても意味がない事を悟り、ゆっくりと二丁の銃へと手を這わせた。

――アカツキ、もし約束を果たせなかったら、俺を思いっきり殴ってくれよ……。

そんな事を思いながら。

だが――。

「シャク！？ちょ、ちょっと！大丈夫なの？シャク！シャクったら！！」

その先にいた……こちらへと走り寄ってきていた赤髪の少女は俺のよく知る人物で――

思わず小さな苦笑が口元を歪めた。
その心配げな慌てた声を聞きながらも、俺は今はもう側にはいない親友に悪態をついていたのだ。

――約束を果たすまでこっちには来るなってか？
ホント、お前は自分勝手なヤツ――

そう悪態を漏らし終えた所で……俺の意識は深い闇へと落ちていった。

4・パートナー（後書き）

カーリアン……他地方出身のパイロキネシスであり、現二班班長。
産まれた時から変種だったワケではなく、突然変種としての能力に目覚めた『突然発生型』
昔は荒れていたらしく、いまだに生地では賞金をかけられているお尋ね者である。

コード『紅』。

スキルランクはＳＡＢＣＤＥの順に高いモノとする。

スキル・パイロキネシスＡ

カリスマ・Ｃ（自分の班員をまとめあげるだけなら十分）

身体能力・Ｃ＋

女性人気・Ｂ（二班副官であるカクリ以下、女性班員に人気が高い）

ツンデレ・Ｃ

ヤンデレ・Ｄ（痛みを感じるような過剰なスキンシップ有り）

二重人格・Ｃ（荒れていた頃の自分、死にたがりと呼ばれていた頃の自分を、忌避している為、別人格と扱う傾向にあり）

5・カリギュラ（前書き）

都市名は当然架空です。というよりも、全部フィクションです。
今更ですが、この作品はあらゆる企業、地名、人物となんの関係もありません。

5・カリギュラ

「シャク、シャクっ！！もうすぐ……もうすぐ私達の街に着くからっ！！ねっ？」

私はただひたすらに焦っていた。
焦りに焦ってカリギュラへの道を走る。
背中はすでに真っ赤に染まっていた。
そう、私の背中はコートの紅ではなく、背負っている彼の血で真っ赤に染まっているのに、そこから感じられる体温は、血で染まった背中越しに冷たく感じられる。
それが私をより混乱させ、ただ焦らせる。

どんな時でも見せ付けるようにカッコを付けて、ニヒルに笑ってみせるシャクナゲが、笑う余裕なく倒れたのだ。
……それが私の冷静さを奪っていた。

――速く、速く…速く速く速く速く……

ただひたすらにそれを願い、通路を駆ける。
真っ暗な通路をひた走る。どうすればいいのか……自分には何が出来るのかが分からないから、ただ急ぎに急いで走る。
道順など気にはしない。そんな余裕なんかない。

ただ跡を着けられると迷惑をかける事になるから、時折低い建物をわざわざ変種の身体能力を生かしてよじ登り、飛び越えて、あらぬ方向にある廃墟へと火を放つ。

『パイロキネシス』――

あるいは人体発火能力などと呼ばれ、古くから認知はされてきたこの能力だが、今は目くらましにも使えるのが助かった。

「もうすぐ、もうすぐカリギュラ――神杜市に着くから！私達の街に着くからっ！！」

そう呼びかけ続けなければ不安に押し潰されそうになり、ひたすら背中のシャクへと話かけ――

私は夜の裏道を疾走した。

――神杜（かみもり）市……現、廃都・カリギュラ。

神杜なんて呼び方は私達黒鉄でもあまりしない。

シャクがたまに懐かしがってそう呼ぶくらいだ。

私の出身は東海方面であり、この辺りには特に思い入れがない。

ただ日本でも関東に次いで、ヴァンプ共が活動を起こした地方……関西の1都市――それが神杜。

私の地元が知事の手腕か、あるいは自衛隊や警官隊が優秀だったのか……はたまたまなのかは知らないが、日本でもかなり最後までヴァンプの影響を受けなかった地方なのに対し、最初に犠牲

になった元港街。

そして国が撤退し、多くの人々が去った後でも、残った住民達が自分達の街を守る為に、最後まで戦い続けた『廃都』。

それが私達の街、『カリギュラ』。

その頃には――神杜と呼ばれた頃には、嫌な思い出や辛い出来事も多かったはずなのに、シャクは昔を懐かしがって儚く笑う。

だからは私は敢えて『神杜』の名前を出したのだ。

彼の大好きな街の名前を――。

それがシャクの生命を繋ぎ留める為のキーワードだと思い込んで。

ひたすら夜道を駆け、何人か見かけたヴァンプ達を振り切って、あと少しで廃墟ばかりが……無人の家屋ばかりが目立つ街へと着く、という場所での事だった。

夜もかなり更け、涼しい夜風が頬を撫でてくれていた。

火照った身体にはそれが気持ちいいはずなのに、それを感じる余裕すらなく……

私は戦いの音を聞く。

怒号と銃撃。何かと何かが反響する甲高い音。

そして低いエンジン音と爆音を。

一瞬、カリギュラがヴァンプの襲撃を受けているのか、と私は思った。

私達の行動がバレていたなら、関西統括軍――将軍が率いる関西

軍が報復に出たのかと思ったのだ。
それくらいはあり得る事で、むしろ当然の考えとしてそれを危惧した。

だから慌てて私はその音がした方向へと駆けていく。
一刻も早くシャクを治療し、寝かせてはあげたいけど、カリギュラが陥落しては元も子もない。
私が援軍として駆け付け、他の仲間達にシャクを任せるべき……
そう私の中に僅かに残った冷静な部分が理解した。

本音を言えば、私自身が治療する場所までシャクを運んであげたい。
だけど正直な話、私には彼を治療するスキルはない。どうすれば血が止まるのか、どのように処置すればシャクが楽になるのか、それすらも分からないのだ。
だから自らの内にある誘惑をなんとかはねのけ、私は駆ける。

だが、その先にいたのは――

「……カーリアン」

私の副官であるカクリと二班メンバー数人だった。
他のメンバーの姿が見えないが、みんながみんな緊張した表情をしていて――
私はワケが分からず混乱をきたす。

「カクリっ!?あなたなんで……」

「……カーリアン。落ち着いて……あなたなら少し考えれば……分

かるハズ……」

そんな事言われたって――

カリギュラが襲撃を受けたのなら、帰還したばかりの二班と三班じゃなく、待機していた四班と五班が迎撃に出るハズだ。

足りなければ六班と七班も駆り出せばいい。

それでもなお数が足りないにしても、撤退により疲れきっている二班を、こんなカリギュラの郊外にもあたる最前線に立たせる理由なんて――

そこまで考えて、より私の思考は混乱をきたした。

背中ではシャクが小さな熱をもった吐息をつき、それがなお私の思考をギリギリまで追い詰めていく。

「ふぅ……、今のカーリアンには……何を言ってもダメね。……シャクナゲは？……無事？」

そんな風にひたすら混乱していた私に、カクリは呆れたように軽く首を振ると、そっと私の背中に背負われたシャクを見やる。

「……そうだっ！シャクが、シャクが血だらけなの！！シャク、シャクったら！！もう神杜だからね？もう大丈夫――」

「……少し落ち着いて……カーリアン、あなた情緒不安定よ……」

私とは対照的に、そう大人びた口調で言うと、カクリは私の背中へと回った。

「下ろして。私が見るから……」

そして、抑揚のない口調だけは変わらないまま、彼女はいそいそと背負っていたバッグを下ろし、簡易式の救急セットを取り出し並べていく。

「……傷は深くない……出血の多さは……傷自体が多いから……。それも治りかけ……深い傷は……腕。多分……腕で庇ったか……銃を前方に撃ちながら……攻撃を前面から受けたから……」

そう診断をしていき、小さく溜め息を吐いた。

「……普段なら放っておいても出血は止まるだろうけど……血が止まる前に……出血量が生命維持に支障をきたす可能性がある」

そう言ってバッグから真新しい白のガーゼを取り出すと、腕の付け根に近い部分をキツく縛りつける。

そして取り出した普通の裁縫針を、ライターで念入りに炙り殺菌していく。そして中でも深い傷を、その針を使ってチクチクと縫合していった。

今なお血が溢れる傷口を血まみれになりながら抑え、全くの無表情で躊躇う事なく針を刺していくカクリ。それにちょっとヒキそうにはなったが、胸中にはそれ以上の安堵が広がっていくのが分かった。

カクリに――救急班たる二班の副官に任せておけばもう安心……そう思ったのだ。

班長の自分が、医療スキルを一切持っていないのは多分情けない事なんだけど、その分を補って余りあるほどに副官たるカクリの腕と判断には信用が置ける。

「カクリっ！ヤバいぞ！！前方に出てる三班が追い込まれ――」

そんなカクリの様子を、安堵といくばくかの不安でオロオロしながら見ている時だった。

私の班のメンバーである男が慌てて駆け付けてきたのは。

そしてその仲間は、慌てたまま言葉を続けようとして、カクリの横にいる私に気づくと、その表情に満面の笑みを浮かべた。

安堵したような笑み……信頼が滲み出ている笑みを。

「カーリアンっ！！戻ってきてたのか！助かった！カーリアンがいてくれたなら、これくらいの追っ手なんざ屁でもない！」

「追っ手……？」

だが喜色満面で跳ねる男にも、私はまだその言葉が差す意味が分からず――

首を傾げる私に、頬についた血を拭いながら、カクリは心底呆れたような溜め息を漏らした。

「カーリアン……あなた、本当に動揺してたのね……」

そして溜め息混じりでそう言うと、彼女は事情を簡単に説明してくれる。

といっても事情なんて簡単な事だった。カリギュラ襲撃なんて危惧より、もっと先に思い浮かぶべき事だと言えるだろう。

カリギュラへと斥候にきていた部隊がいたのか……あるいは待ち伏せていた部隊がいたのか、撤退中の二班と三班が将軍麾下のヴァンプ共と鉢合わせしたのだ。

その為カクリ達も拠点であるカリギュラへは引く事は出来ず……この先で交戦する事になったらしい。

カリギュラの中には、戦う事が出来ないメンバー……街の復興に従事しているだけの仲間達がいる。

街中での乱戦は絶対に避けなくてはならない。だからこそこの先で延々と足留めを食らっているのだ。

その上、足留めをしていたシャクナゲじゃなく、二班と三班を追っていた部隊までもが合流し、かなりの苦戦を強いられているらしい。

二班は元からバックアップの班であるし、三班は今回の作戦にシャク以外のコードフェンサーが参加していない。

秘密裏に遂行する予定だった作戦だし、約半分の班が出張る作戦だ。都市防衛に他のコード持ちは残してきたのだ。

そしてなにより、今の三班には絶対的なリーダーである『シャクナゲ』がいない。

それが大きい。これで苦戦で済んでいる辺りからしても、カクリと三班副官の優秀さは疑うべくもないと言えた。

最精鋭と言われる第三班だが、指揮官のいない部隊はモロいモノだ。

……そして『黒鉄第三班』は特にその傾向が強い班なのだ。

――それほどシャクナゲという名前が持つ意味は大きい。

それはそのまま『黒鉄』というレジスタンス組織においても、神杜市とカリギュラにおいても特別な名前である事を指す。

黒鉄が出来る前……住民の抵抗運動時からずっと先頭にたってきた者。
黒鉄の中で最も傷ついてきた者。
黒鉄の中で、誰よりも仲間の為に命を張ってきた『人間』……それが『シャクナゲ』なのだから。

だからこそ、古くから抵抗運動を続けてきた古参のメンバーほど、シャクナゲに感じる恩と信頼は深い。
最精鋭である黒鉄『第三班』は、そんな連中の集まりなのだ。

その第三班が、シャクナゲがいないというだけで感じる焦り……
そして心細さは計り知れない。

それを指揮し、叱咤して三班副官とカクリは持ちこたえてみせた。

それに思い当たると、私の中で『何か』がドクンと跳ねた。
私達――私とシャクナゲを待っていたワケじゃないけど、結果的には帰り道を確保してくれていた。帰りを待って、敵の攻撃を凌いでくれていた――。

『あたし』の中で『カーリアン』がたかぶるのが分かった。
冷静な部分が『私』を押し返した。
私と呼んでいた『あたし』が、真っ赤に染まった気すらした。
怒りの赤でも血の赤でもない。
『カーリアン』の赤。

「あたしが行くわ。カクリ、アンタはシャクナゲを連れて帰還する

準備をしてなさい」

「……はい」

「それから三班の連中にも連絡しといて。『カーリアンが行くから、炎が見えたら撤退しな』ってね」

「……はい。カーリアン」

そして駆け出す前に簡単な治療が施されたシャクを見る。

――今はあたしがアンタの大事なモノを守るよ。

そんな想いを込めて。

「ふん、シャクナゲがいなくても、黒鉄にはこのあたしがいる！この『紅のカーリアン』がいるんだ！！ヴァンプのクソったれ共に好きにはさせないよ、させてたまるかっ！！」

「……はい、カーリアン。……私達には……あなたがいます。……カーリアンがいます」

そう最後まで律儀に返事を返すカクリを見て……あたしは駆け出した。

――もうこの背中には、シャクナゲという重い存在はいない。

黒鉄を想って……仲間を想って戦い続けてきた『人間』はいない。

傷ついた『相棒』は、『信頼出来る仲間達』に託してきたから。

そう、でもそれに負けないくらい――

（シャクに負けないくらい、今のあたしは重いモノを背負っているんだ！）

そんな想いを抱いて……

背中をシャクナゲの血で紅に染めたまま、あたしは『カーリアン』として駆け出したのだった。

5・カリギュラ（後書き）

カクリ……二班副官の少女で、実質二班を動かすブレイン。
変種。白髪黒瞳。恐らく十代半ば。
変種といえど、その身体能力は人と変わらない。むしろ運動神経においては下回るほど。
この白髪は、カーリアンのように変種特有のモノではなく、かつてなくした記憶――家族を失った際の大きな恐怖の記憶によるモノ。
しかし今では、このカクリという名前が気に入っており、失った記憶には未練がないらしい。
カーリアンが大好き。

スキル

考察力・Ａ＋（考察力と知識、知覚能力は、変種としての彼女にとって唯一特化した部分）

身体能力・Ｅ－（並み以下）

知覚能力・Ａ（考察力と合わせ、小さな音など僅かな情報で周囲の様々な状況を把握出来る能力）

知識・Ａ

医療技術・Ｂ＋（何にも出来ない班長を補えるだけの能力）

計算高さ・Ｂ＋

腹黒・Ａ

冷静・Ｂ

カーリアン好き・Ａ＋＋（可愛いモノが好きなのであり、カーリアンは特にツボらしい）

毒舌暴言・Ａ

ポーカーフェイス・Ａ

無口・Ｂ

寂しがり・Ｃ＋（自覚なし）

6・コード

４年前の事だった。
オヤジと共に関西の港町、神杜市へと引っ越す事になったのは。
かなり栄えた港街。関東に住んでいた俺でも、名前ぐらいは聞いた事がある大きな街。
そんな街に、高校に入ってすぐの時期に急に引っ越す事になったのだ。幾つもの県を跨いで。

――その頃の世界情勢はとことん混迷を極めており、あちこちで『国が倒れた』『革命が起きた』というニュースを毎日のように聞く時代だった。

この国でもそんな世界情勢の余波を受け、故郷である関東の方では『変種』……不思議な力に高い身体能力を持つ人間と、持たない人間との間で、毎日いざこざが絶えなかった。
オヤジが引っ越しを決めたのはそれもあっただろうし、関東の騒乱にこれ以上俺が巻き込まれないように、と考えての事だと思う。
オヤジは俺の為に……いや、はっきり言おう。『俺のせいで』故郷を捨てる事になったのだ。
そうして故郷から逃げ出すように神杜にやってきた。

あの人――オヤジは俺にはほとんど構ってはくれず、一緒に過ごした記憶はあまりなかった。それでも小さな頃に母親を亡くしてから、なんの不自由もなく生活させてくれた。

プレゼントとケーキを用意するだけではあったけど、誕生日やクリスマスにそれを欠かした事は一度としてない。

多分不器用な人だったんだと思う。俺に対する気遣いも分かりにくい人だった。

それでも高校生になろうかという年だったし、俺もそんなオヤジの不器用さを理解出来る程度には大人だった。

――それまで俺が育った地方では、『力を持つ変種』が徒党を組み、持たない人間も護身用の得物を堂々とかざしながら、これまた徒党を組んで練り歩いていた。

あちこちでぶつかり合い傷つけあって、毎日どこかしらで火の手が上がるような場所だったのだ。

昔からの友人達もご近所さんも、それぞれが変種と人間の側に分かれ、睨み合うようなギスギスした場所――。

さながら狂ってしまった世界の縮図であるかのように、見事なまでに紛争多発地帯と化していた。

そんな中でも主に犠牲になるのは『力を持たない人間側』。そして『それを守ろうとした警官隊』。

『力を持つ人間達』……中でも『新皇』と呼ばれるクソ野郎を中心としていた勢力が、かなりの範囲を占拠し、事実上関東の大部分を支配しているような状況だったのだ。

そこから逃げるように引っ越したとて、臆病者と謗られる事はないだろう。

――だがこの神杜市も、引っ越してすぐに混迷の余波を受けたのは皮肉な話だった。

それでもまだ地元だった場所よりは幾分マシではあったけど。

だが関西も俺達が引っ越して間もない頃から、あちこちで様々な勢力が割拠し、ぶつかり合いを始めるようになった。

『人』と『変種』で集団が分かれるようになっていた。

あちこちで小競り合いが起き、そこら中をギスギスした空気が蔓延し始めていた。

――俺は知っていた。

メチャクチャになった地方の……しかもその割と中心近くで、日常が壊れゆく様子見ていた俺は知っていたのだ。

――これが崩壊へと至る序章だと。

すでに数ヶ月前に関東で見ていたから、数ヶ月後にはここが関東と同じ状況に……人と人とが傷つけあう『地獄』に陥る事が予見できたのだ。

今は『神皇軍』なんて自意識過剰な名称を使っている勢力に替わるモノが、この地域一帯を治めるという事以外は……

ここも関東と全く同じ道を辿るのだろう、そんな諦観にも似た思いを抱き、それでも少しでも長く普通の日常を過ごそう……そう諦めていたのだ。

そんな時だった。

俺がアイツに会ったのは――。

場所と状況はよく覚えている。

俺が『力を持たない人間』に『敵』として追われ、仕方なく逃げ回っていた時の事だ。

もちろん俺の身体能力なら簡単に撒く事が出来た。

簡単に追っ手を撒いて、時間潰しに路地裏で缶コーヒーを飲みながらボーっとしていた時の事だ。

座り込んでいた通りを取り囲む建物の一つ――薄汚い二階建ての事務所の屋上に、だらしなく座って空を見上げていた男がいたんだ。

日本人には有り得ない金の髪と、同色の瞳を持った整い過ぎた容貌をもった少年が。

そしてその儚げで悲しげでありながらも、強い意志みたいなモノを感じさせる瞳をこちらに向ける。

――そいつが最初にかけてきた言葉もよく覚えている。

気怠げな口調でこう言ったんだ。

『やっぱりこの街も壊れっちまうんだな……』

悲しそうな、でも俺と同じ『諦め』を含んだ声で。

『もう、この街が――この国が壊れっちまうのは止められないみたいだ』

俺と同じ事を考えていた金髪の男は、そう言って悲しげに笑ったのだ。

＊＊＊＊

コード……それをそのまま和訳するなら『規定、符号の体系、暗号』である。

簡単に符号と訳して事足りるだろう。

だが、黒鉄が規定するコードには特別な意味があった。

私が大好きな彼女にはコードがある。

『紅のカーリアン』というコードが。

意味的に分けるなら『紅』が彼女のコードであり、『カーリアン』はコードネームと言えるかも知れない。

だが、同じ変種である私にはそれがない。
私の呼ばれる名前は、彼女が私に付けてくれた本名だ。

私も彼女と同じように家族を殺された境遇であるのに……同じように黒鉄に拾われたのに、私にはコードがない。

まぁ、殺されたと言っても違いはあるらしいが。
おぼろげな記憶しかないが、後で詳しく調べたところによると、私の家族は『力のない人間』に殺されたらしい。
私に変種特有の力がある……というだけで、私の暮らしていた家は襲われ、普通に暮らしていた私の家族は殺されたのだ。

だが、彼女は違う。
彼女の家族はヴァンプに殺された。
ここで似ているのは、同じく殺されたという事と、家族の代わりに生き延びた事だけ……。

他の点では、私には産まれた頃から変種としての力があったが、彼女は突如変種の力に目覚めたという違いはある。

だがこの違いも、コード持ちとそれ以外の差にはなりえない。
何故そう言えるかと言うと、『黒鉄』と言えば誰でも思い浮かぶ人物……『シャクナゲ』は、私と同じように『自然発生型』――産まれた時から変種だったらしいから。
そして4班のリーダー『オリヒメ』は、カーリアンと同じく『突然変異型』だ。

この2つにはもちろん違いがある。
自然型は持っている力にかなりの個人差があるが、突然型は全体的に力の強いモノが多い。

その証拠に自然型である私はシャクナゲとは違い、知能と知覚能力以外は全く普通の人間だ。むしろ体を動かす事に関しては、普通以下と言えるぐらいだろう。

また、自然型はその力をいつでもだいたい一定して発揮出来るが、突然型は感情による波が激しいようなのだ。

これは私の仮説に過ぎないが、シャクナゲとカーリアンを見ていればほぼ間違いないように思える。

シャクナゲはいつでも一定以上の力を示すが、カーリアンは場合によっては全く力が発露しなかったりするのだ。

調べたところによると、オリヒメにも似た傾向があるらしい。

この点から考えてみれば、『シャクナゲ』が黒鉄最強だというのはあながち間違いじゃない。

自然発生型なのに、突然変異型にひけを取らない力をいつでも発揮出来るのだから。

まぁ、力を全然発揮出来ない時に、オロオロしてみせるカーリアンは特に可愛いのだが……。

話は逸れたが、つまりこの2つの『発生条件』にコードを得るほどの差はないのだ。

全体的に強力だがムラがある突然型と、弱い力を持つ者も多いが、強く安定した力を持つ者もいる自然型。

コード持ちが大体半々な点もこれを裏付けていると言えよう。

もう一つ、『純正型』と呼ぶ発生系列も存在するが、これは除外する事にする。

数自体非常に少ない発生系列であるし、何よりこの発生系列の変種はシャクナゲ級に――そして全開カーリアン級に、強力過ぎる力を持っている連中ばかりだからだ。
黒鉄にも1人いるが、彼女は当然コード持ちである。

だがここまで考えた時点で、コードフェンサーとはどんな存在か、の答えは出ていたりする。

……つまりコードを持つ者全員が、『強力すぎる力を持った人間』という事だ。全員が非常に危険視されうる存在だ、という事でもある。

だが、コードとはあくまでも『2つ名』の類ではない。
2つ名ならば、カーリアンは文字通り山ほど持っているが、今の彼女はあくまでも『コードフェンサー』なのだ。

――コードとは符号。
コードとは符号というのが、やはりコードの在り方だろうか？
シャクナゲと共に黒鉄を作った『アカツキ』の考えは分からない。
黒鉄の体制と、『コード』を作ったアカツキと言うコードフェンサー。

私が来てすぐに『アカツキ』が死んでしまったのは残念で仕方がない。彼と話せれば黒鉄や世界情勢について、さぞ実のある話し合いが出来ただろうに、と思うのだ。

だが彼と話せなくても、コードに込められた意味――その符号が指す意味と願いは分かる。
黒鉄では当たり前で……黒鉄では常識だから。

差別を助長しそうな『コード』というシステムを作ったのは、ひょっとしたら黒鉄を崩壊させる原因になったかもしれない。コードフェンサー達が増長し、黒鉄というレジスタンス組織を、単なる変種が支配する組織へと変えていたかもしれないのだ。

だが、それでも彼はコードを作った。

――願いを込めて。

『強力な力を持っていても、人である事を誓った者』の符号を。

「カクリぃ！ご飯行くわよぉ！？」

私が自分の考察を纏めたノートをパタンと閉じると、それを見計らったかのように声がかけられた。
廃墟の一つにある私の住居には本しか置いていないが、それがいつも通りに整理されている様を確認してから部屋のドアを開ける。

「……行く」

「さっ、行こ。今日のご飯はなんだろね？」

そうやって機嫌よく笑う彼女――私の唯一の上官の姿に、私は小さく溜め息をもらした。

彼女は誰が見ても間違いなく美人だと思うだろう。スタイルも抜群だし、背も平均より高い。小顔の中にある意志が強そうな赤い瞳も人の目を惹くと思う。

何より時折見せる子供っぽい仕草や表情が、ルックスの大人っぽさとのギャップを持っている時なんか、犯罪級の可愛さだと思う。

小柄でツルペタ、無表情と分類される私とは大違いだ。

でも――

「……カーリアン……シャクナゲが目を覚ましたのね？」

「あれ？もう連絡行ってるの？あたしもさっき聞いたばかりなんだけど」

「……」

この分かりやすすぎるところだけは子供だと思う。

昨日までの情緒不安定さがシャクナゲの容態のせいなら、いきなり機嫌がよくなればその理由も分かるというモノだ。

「カーリアンは……可愛いね……」

「……？あ、ありがと？」

おまけに『機嫌がいい時』は、皮肉もあまり通じないときてる。
まぁそこが『私のカーリアン』の一番可愛いところであるのは間違いないのだけれど。

「ったく。シャクったらっ！三班も二班もあたしが駆け付けなきゃ危なかったんだからねっ！ご飯持って一緒に文句言いに行きましょ！！」

「……はいはい」

どうせ散々悪態をつきながらも、ニコニコ笑っているだけでしょうに……。

そんな事を思いながらも、私はカーリアンに引っ張られて食堂へと向かったのだった。

まぁ、内心では……
あぁ、カメラが欲しい。使い捨てで構わない。プリンター付きのデジカメなら最高だ。
ご機嫌なカーリアンの様子を後世まで残せないなんて、それだけで世界情勢を乱したヴァンプ共は万死に値する……
そんな事も考えてはいたけど。

6・コード（後書き）

今回のあとがきは紹介はナシです。アカツキとシャクナゲの紹介は、もっと後になる予定です。
次のあとがき紹介は三班副官の予定。

7・ベネトレイター（前書き）

今回、かなり手直しをしたのですが、何か納得のいかない箇所がある……気がします。
おかしな箇所がありましたらご指摘お願いします。

7・ベネトレイター

「3日も眠ってたのか……」

目を覚ますと、俺は見た事のある殺風景な部屋にいた。

その部屋は、今俺自身が寝転がっているパイプベッドと、見知った顔の青年が腰かけている安パイプ椅子、そして布切れと評してもいい薄手のカーテンが一枚だけしかない寂しい部屋だ。

本当に殺風景で、天井や壁はコンクリートが剥き出しになっている。壁紙すらない辺りからして、殺風景さもここに極まれりと言えるだろう。

「心配しましたよ。カーリアンが連れてきてくれた時には、血まみれで意識もなかったらしいですし。スイレン達も『自分達が作戦に参加出来ていれば……』って後悔してましたからね」

だがこんな殺風景極まりない部屋ではあるが、実はこれでも病室だったりする。それもこの街では、最上級の部屋と言ってもいいくらいの上部屋だ。

「あんまり無茶をしないでくださいね。ウチのメンバーは心配性な連中が多いんですから」

そう軽く睨むように見つめてきながら、椅子に腰かけた青年――

副官のアオイは、愛用の果物ナイフで手際良く皮を剥き、切り分けたリンゴを差し出してくれる。
その視線を笑みでかわしながらも、一切れ摘んで口へと運んだ。
滅多に口に出来ない果物の甘酸っぱさが、乾いた喉と口内を潤してくれた。

三班の副官であるアオイは、落ち着いた雰囲気を持つ俺よりもやや年上の男だ。その柔和な印象からしても、決戦班と呼ばれる三班の副官には見えないだろう。
また中性的で、優しげな容貌からか女性人気も高い。
実務においても非常に優秀で、様々な雑務、他班との交渉などをソツなくこなす頼れる副官である。

あっという間にリンゴ一個を収めた腹は、文字通り3日は何も食っていないかのように減っていた。しかも目が覚めてから一時間近く、検査などで水以外口にしていなかったのだ。
リンゴの酸味が空きっ腹によく染みる。

今いるこの部屋は『神杜総合病院跡地』――黒鉄第二班、救急班の本拠の一室だ。
もちろん病院としての機能は半分以上死んでいるが、それでもこの『廃都』カリギュラでは唯一活動している医療機関である。
看護経験がある者や、数少ない医者の全てが配属されたこの廃病院は、カリギュラ内でも随一の人口密度を誇る場所だと言えるだろ

う。

当然、カーリアンやカクリの執務室もこの中にある。

そんな病院跡地で、重傷を負っていたらしい俺は3日ぶりに目を覚ましたのだ。

「でも、さすがはシャクナゲですね。例え撤退中でも、クリシュナの知事だけはキッチリ潰してみせるんですから」

「向こうから出て来てくれたんだ。力を過信してるヤツだから助かったよ」

1人無茶をして、何日も眠っていた俺を気遣ったのか、そんな事を晴れやかに言うアオイ。

だがそんな気遣いが分かりつつも、その言葉に対しての笑みには苦いモノが混じるのを禁じ得ない。

――潰してみせた、か。

アオイの嬉しそうな声を聞きながらも、俺の中では暗鬱たる気持ちが広がっていく。

それは同じ『人間』を殺した罪悪感。

クリシュナ知事だけじゃなく、何人もの人間を殺した感慨。

例え避けられなかった事だとしても、これをしっかり胸に刻んでいかなければ、俺もいずれ『ヴァンプ』のようになる。

力に驕れば、俺は間違いなく危険なヴァンプになる……そう確信すればこそ、アオイに無条件で笑みを返す事は出来なかったのだ。

「……すみません。不謹慎でした」

「いや、いいよ。ただ俺は力を誇って笑うワケにはいかないんだ。符号持ちだからね」

俺が笑っていない事に気付いたのか、それとも口が過ぎたと思ったのか、そう謝ってきたアオイにはなんとか笑み返してみせる。

コードフェンサーだから……ね。

甘さの言い訳にしか聞こえないな。

そんな自嘲を含んだ苦笑を。

「頼もぉーー！！」

「……もぉ……」

そんな気まずい空気を打ち破ったのは、聞き慣れた2つの声だった。

威勢のいいソプラノと、『仕方ない、付き合ってやるか』といった感慨が多分に含まれたアルト。

そう、この病院跡地の警備責任者と実務責任者である、二班のツートップたる少女2人のモノだ。

「ようやくお目覚めみたいね、こんの迷惑かけまくり野郎っ！！」

「……野郎」

そう言うと2人の内背の高い赤髪の少女は、ツカツカと歩み寄ってくると『椅子！』と言いざまアオイをその場……俺の寝台脇の椅子から追い落とした。

もう1人、背の低い白髪の少女は、手に抱えた盆――食堂から持ってきたらしい盆を軽く掲げてみせ、

「……椅子」

そう言ってジッとアオイを見据える。

『自分の両手は塞がっている』というアピールしてみせるその少女に、アオイは苦笑を漏らしながらも立てかけてあったもう一脚のパイプ椅子を持ってくると、『どうぞ』と勧めてやった。

「あぁ、カーリアン。食事まで持って見舞いに来てくれたのか？」

「あんたバカでしょ！？これはあたしの分よ、あたしの分っ！！」

「……これ、私の」

「そりゃ残念。あぁ、アオイ。悪いけどなんか食堂から持ってきてくれないか？リンゴじゃ足りないみたいだ」

椅子を強奪され、壁際に立ったままのアオイにそう頼むと続けて俺は口を開いた。

「それからウチの連中に、明日には復帰するからって言っておいて

くれ」

「……明日は無理。……ちょっと様子見。……シャクナゲにも休みが必要」

そんな俺の言葉に、小柄な方――二班副官にして、この医療機関の実務責任者でもあるカクリが小さな声でドクターストップをかける。

『救急班としての二班』のトップはこのカクリという少女だ。

まだ幼い――と言えばカクリは怒るかも知れないが、まだ十代半ばでありながら、その類い希なる知力ととっさの判断力は、まだ本職の医者達をも圧倒するモノを持つ……らしい。

まだ大掛かりなモノや切開が必要な手術は、熟練の医師達に一歩及ばないらしいが、それも経験の差でしかないと噂に名高い逸材だ。

「カクリがダメってんなら、シャクは絶対ここから出さないからね!?」

「……からね」

何故か嬉しそうにそう宣言するカーリアンが、警備責任者兼黒鉄第二班のトップに立っているのは、単にカクリが『カーリアンと一緒じゃなきゃ絶対イヤ』と言ったからである。

まぁ、『二班も現場に出る事になるし、力の強いコードフェンサーがいた方がいいだろう』という理由もあり、カーリアンがトップ、カクリが副官という体制になったのだ。

本来ならばカーリアンは、強行班である一班か我が三班に配属されていただろう。

彼女の力は後衛向きのモノではないのだから。

つまりカーリアンは、班長という名前の二班専属用心棒、もしくはカクリ専属のボディーガードに近い。

「明日……が無理なら、今週中と伝えておきましょう。みんな心配していて落ち着きがありませんから」

妥協案をだし、確認するようにカクリを見やるアオイに、白髪の少女は思案するように小さく首を傾げ

「……3日は様子見……それならいい」

そう言って、一瞬カーリアンを見やってからコクンと頷いた。

「……3日か。ま、いっか。3日は絶対安静！抜け出したらこんがり焦がすよ？」

そんな物騒な事をカーリアンはにっこり笑いながら言うと、『ほら、アンタは三班のところに行ってきなさい！』と所在なげに立ったままのアオイを追い出した。

「……カーリアンは独占欲が強い」

「独占欲……？」

「あ、あんたは黙って寝てりゃいいのっ！ほら、出汁巻きだけ恵んであげるから口塞いでなさいっ！！」

カクリの言葉に疑問符を投げかける俺に、何故かカーリアンは大慌てでカクリの口を片手で塞ぐ。

そしてもう片手に握った箸で出汁巻きを掴むと、俺へとそれを差

し出した……というより突き付けたが正しいかもしれない。

「……ん……あーんだ……はい、あーんって言わなぐっ――!?」

なんとか口を塞ぐカーリアン手を押しのけ、口の端を軽く持ち上げる笑みを浮かべながらそう言うカクリを、カーリアンはその赤の瞳でキッと睨みつけ、再び強くその手で白髪の少女の口元を押さえつける。

「……騒がしいな。一応病室だぞ?」

「うるさいっ!おしゃべりなカクリが悪いんだっ!」

そう言って無理矢理俺の口へと出汁巻きを押し込んでから、フンッと鼻息荒くそっぽを向く。

まぁ、なんでもいいんだけどさ――

「カクリ、顔真っ青だぞ?あんまり強く塞いだら息も出来ないんじゃないか?」

――取りあえずこれだけはツッコミを入れておくべきだろうか?なにせ鼻まで手で覆っているのだ。息も出来ないだろうから。

「えっ……?カ、カクリっ!?」

慌てて口を塞いでいた手を離し、カーリアンは真っ青な顔で目を剥いている自らの副官を見やる。

「……カーリアンに……殺されるトコだった」
「お、お喋りなアンタが悪いんだからねっ！？」
――相変わらずだな、カーリアンもカクリも。
そんな感慨を抱き、騒がしい2人に肩をすくめながらも、俺は騒がしい2人を苦笑混じりに見やったのだった。

「じゃあ一班は約半数を失ったのか……」
あの後、アオイが運んできてくれたモノは、消化に良さそうな――もっと言えばイマイチ腹にたまらないモノばかりだったが、それでもなんとか空腹は満たせた。
見舞いに押しかけてきた三班の仲間達を、カーリアンが『救急班・班長権限』でアオイごと追い出した以外は、落ち着いた時間だったと言えよう。

その食後に――もっと言えば押しかけてきた三班のメンバーを退室させた後に、俺は今の現状をカーリアンから聞いているのだ。
まぁカーリアンから聞くよりもカクリから聞く方が確実、という気もするのだが、こればっかりはこの2人の『仕様』なのだから仕方がない。
カーリアンが話す役、カクリが細々補足する役というのが、この

コンビの造りなのである。

だが、黒鉄の現状を聞けば聞くほど、部屋は暗鬱としたモノに包まれる。

「一班のナナシやコードフェンサー達も頑張ったみたいだけどね。完璧待ち伏せしてたみたいで、混乱をきたした班員を纏める事すら難しかったみたい」

「……みたい」

ナナシとは一班のトップに立つコードフェンサーで、場数だけならカーリアンを凌ぐ男だ。

しかも一班は我が三班とは違い、3人いるコードフェンサー全員が今回の作戦に参加していたのだ。

それなのにメンバーを纏められず、半壊をきたして撤退せざるを得なかったというからには、将軍率いる関西軍も相当周到に迎撃準備をしていたという事だろう。

……そしてその事実は、ある可能性を示唆しているに他ならない。

「裏切り者がいるな」

そう、それは黒鉄の情報を流す存在が内部に――しかも黒鉄の中枢近くにいる事を示唆しているのだ。

「裏切り者っ!? 黒鉄にっ!?」

「……黒鉄に？……まぁ、そうなるわね」

全く考えもしてなかったのか大げさなほどびっくりするカーリアンと、その彼女に一応合わせておいてから俺の考えに同調するカクリ。

そのコンビの対比を見てから言葉を続けた。

「今回の作戦はかなり綿密に、秘密裏に準備した作戦だったんだ。なんせクリシュナの知事や実力者達を始末して、その混乱に乗じて街へと拠点を置く……今後を見据えた大事な作戦だった」

「確かにそうだね。アンタんトコ主体で、何十日にも渡って話し合いを進めてたらしいし……」

「……前日までに作戦概要を知ってた者はかなり数が限られる。……クリシュナの反抗組織も一枚噛んではいるけど」

そう、今回の作戦概要は、班のトップクラスの者かその側近……そしてクリシュナに潜むレジスタンス、『白鷺』のメンバーのごく一部しか事前に知らなかった事なのだ。

普段は黒鉄全部が一丸となって活動する事が大半なのに、今回だけは万全を期して秘密裏に事を運んだ。

それほど力を入れ、確実を帰した作戦だったのだ。

班の長としては『唯一変種ではない側の人間』である五班の班長など

『ここまで秘密にする必要があるのか？』

と言っていたくらい、万全を期して準備を進めていたのだ。

この事実は――

「……この黒鉄の中枢近くに……将軍の手の者がいるのは間違いないと思う」

カクリの言う通り、考えもしなかった懸念である『裏切り者』という要素が、『黒鉄』に潜んでいるという事を示唆しているに他ならないのだ。

7・ベネトレイター（後書き）

前回、アオイを書くと言っていましたが、シャクナゲ紹介1。

シャクナゲ……二十歳前後、自然発生型変種。関東方面出身。
一番最初にコードを与えられた変種であり、黒鉄初期からのメンバー。

当初のコードは『宵闇』。
『暁』というコード持ちと対比となるコードだったのだが、現在では『黒鉄』のコードで呼ばれている。
『黒鉄のシャクナゲ』の名前は、単なる所属組織名と名前を表すモノではなく、そのまま二つ名として有名。
また関西軍発行の賞金首の中では、今は亡き『アカツキ』を抜き、最高ランクの額がかけられているお尋ね者でもある。

スキル

銃撃・A

状況把握能力・B＋（的確に先を見据える能力。本来はA＋だが、ネガティブと独断専行でマイナス補正）

身体能力・A＋（変種の中でもかなり高い身体能力に入る）

戦術眼・B

カリスマ・S（班のメンバーはおろか、他班の者にも慕われる能力）

知力・B

格闘・C＋（二丁拳銃を扱う点、つまり両手が塞がっている点からマイナス補正）

直感・B

ネガティブ・A（かなり後ろ向きな性格）

鈍感・C＋

奥手・B（ネガティブとプラス補正しあっている）

独断専行・B＋（1人で突っ走るスキル）

女性人気・A－（カーリアンや他コード持ちと仲がいい点でマイナス補正。つまり近寄りがたい）

皮肉・B＋

カッコつけ・B＋

8・サブクライシス

カリギュラ郊外近くに位置する『第三班専用居住区』。
そこの一角にあるアパート・響谷荘は、かなり年季を感じさせる風貌を持った建物だと言えた。
壁には大震災にでもあったかのような亀裂が縦横無尽に走り、それがより一層近寄り難い雰囲気と、来客を拒む様相を醸し出しているように感じられる。

……こんな言い方をすれば何か曰わくありげに聞こえるかもしれない。だが、もっと正直な感想を率直に言わせてもらうならば、『ボロくて古くて今にも倒壊しそうなアパート』、これで説明が事足りるようなアパート――それが響谷荘である。

かすれた文字で『響谷荘』と書かれた歪んだ看板が、これまた何か曰わくありげであり、何回か訪れた事のある私ですら入るのをためらわざるを得ないような建物である。

「カクリさん、ようこそ」

入り口でにこやかに迎えてくれた青年にも、アパートの雰囲気とのミスマッチさゆえに怪しさを感じるくらいだ。
正直ちゃちなホラーハウスよりも断然タチが悪い。というよりホ

ラーハウスなんか目じゃない。
少なくともホラーハウスではゴキブリなんかは出ないだろうし、倒壊に巻き込まれる心配もないだろうから。

「……相変わらずボロ」

「ボロいのは認めますがね」

苦笑するここの管理人……三班副官であるアオイに対し、私は茫然自失に近い内心を叱咤し、覚悟を決めて中へと足を踏み入れた。

庭先には雑草が青々と生い茂り、地面が全く見えない。ついでに言えば、その雑草の下を何かが這いずる気配もする。

もしこれが私の聴覚や視覚、そして認識能力が産み出した架空の存在感なのだとしたら、私の想像力もなかなかのモノだ。
もし現実の気配なのだとしたら、この場で回れ右をしたくなるから、そんな戯れ言でなんとか思考を埋め尽くした。

「さ、どうぞ。汚いところですが」

……その言葉は実際は適度に片付けられていて、それでも謙遜として言うべき言葉じゃないだろうか？これでは正直謙遜も謙虚もなく、事実をそのまま言っているだけでしかない。

だから私はハッキリと言ってやる。

「……ゴミ屋敷」

と。

それでもアオイは笑ったまま『どうぞ』と勧めてくるのだから、大したツラの皮の厚さだと思う。

まぁ、こんな『ゴミだめ』には三班の者でもそうそう近付かないだろうし、それを狙ってきたのだからこれ以上文句を言うつもりもなかったが。

だからギシギシ軋む床にも、天井を走り回る小動物……ネズミの足音も気にしないフリをして抜けそうな階段を上がり、実際に抜けた跡が見受けられる廊下を抜けて二階の一室へと入った。

もちろん一歩歩くごとに、『優秀な副官であるアオイ』の株は、世界恐慌も真っ青な勢いで急暴落していったが。

「お茶を――」

「……持ってきた」

部屋に入るなりお茶をいれようと立ち上がるアオイを止め、バッグからペットボトルを2つ取り出すと、アオイへと1つ手渡してやる。

二班本部にある食堂で、空きペットボトルにつめてきたモノだ。

別に手土産のつもりなどない。

単純に『このアパート内に置かれていたモノを飲み食いする気にはなれなかった』し、『飲み食いするところを見たくなかった』からあらかじめ用意して持ってきただけのモノだ。

「あ、頂きます」

そう言ってペットボトルを開けるアオイに、私は小さく頷いてみせると、自分も一口だけ含んでからさっそく本題を切り出す事にした。

長い時間この場所にいるのはさすがに色々はばかられるし、何よりこのアパートで夜を迎えるのは怖すぎるから。

――本題。

それはシャクナゲと私が懸念している『裏切り者』の事だ。

「裏切り者……ですか」

「……そう」

「シャクナゲはそう言ってましたか？」

「……そう」

簡単に裏切り者の懸念について話すと、アオイは考えこむように顎もとへと手をやった。

これが彼の考える時にする仕草なのはすでに知っている。
そして今、考えている事についても私には予想が出来ていた。
彼とて『内通者』がいる可能性については考えていたのだろう。
その上で
『三班のメンバーに裏切り者がいる事は有り得ない』
そう考えているのは間違いない。

『シャクナゲを裏切る者が三班に万が一いるならば、自分は絶対に気付いている』
とも考えているハズだ。

それは盲信と言えばそう言える内容の思考である。
自分の身内と、自身の目を過信している考えだとも言える。
だが、それについては『私も異論を挟むつもりはない』。

理由は簡単――シャクナゲがリーダーだから、である。
つまり、『私の大好きなカーリアンの信頼をも受けた』男が持つ、不思議な求心力は私も認めているからだ。
まぁ、私はシャクナゲなんかより『可愛いカーリアン』の方を深く信頼しているが。

そしてアオイ――
彼の事も私は評価している。
美的感覚や掃除能力については0点だが、その優秀さはシャクナゲの右腕として――そして最精鋭たる黒鉄第三班の副官として不足なモノではない。
そう、彼は決してバカでも無能でもないのだ。

シャクナゲの影に隠れて目立たないが、彼の副官としてずっと側にいた男だ。
身内相手だからといって目を曇らせる程度なら、最前線に立ち続けるシャクナゲのフォローなど出来はしまい。
全班員の把握と、シャクナゲとの繋ぎ役。そしてシャクナゲがその力を振るう際には、班員達の進退を決める決断力を持っている。
彼がいるからこそシャクナゲは1人で行動する事が出来るし、三班が最精鋭でいられるのだ。

……まぁ、力自体はシャクナゲやカーリアンと比べるべくもないし、何か突出した能力があるワケでもないので、あくまでも『サブ』としては優秀といった感も否めないのだけと。

……そして美的感覚だけは最低ラインをも下回っているが。

「二班の方で心当たりはありませんか？」

「……二班は……有り得ない」

「それは……何かしら確証があっての発言ですか？」

その無遠慮な言い方には正直カチンときたが、カーリアンがシャクナゲほどの信頼を得ているかを考えれば、それも仕方のない事かと思い直す。

何せカーリアンの2つ名……悪名や過去の荒れようは有名だ。
残酷で残虐に、ヴァンプを狩る変種。
同族を狩るハンターにして死にたがり――
全て焼き尽くす灼熱の使い手。

これだけ設定があれば、悪名なんて尾鰭羽鰭に背鰭までついて広まるモノだ。

そしてその全てが、同じ地方から流れてきた者によって広められたモノでもある。それゆえに信頼度の高い話だと認知されているのだ。

しかもタチの悪い事にその悪名は数も多い。両手両足の指を使って数えても、さらに何人分かの指が足りないほどに。

その上、私達の地元を支配しているヴァンプ共の長……マスター・シヴァと名乗る狂人からは、目が飛び出そうな額の賞金がその首にかけられていたりする。関西発行の最高額賞金首はシャクナゲだが、それに迫る額が彼女の首にもかけられているのだ。

つまりは1地方のトップ自体が、カーリアンの2つ名を喧伝していると言えよう。

それだけに彼女個人を知る者でなければ、カーリアンは畏怖の対象にしかなりえない。

まぁ、『カーリアン非公認ファンクラブ・紅薔薇会』が、二班メンバーを中心に結成された事もあり、徐々にカーリアンの事を誤解する者は減ってきているのだが。

もちろん、その紅薔薇会の主席兼創立者がこの私なのは言うまでもないだろう。

「……今回の作戦……二班で事前に知ってたのは……私だけだから」

「カーリアンとあなただけしか知らなかったってワケですか……」

「……それ違う」

なるほど……と言った感じで頷くアオイに、私は待ったをかけるように口を挟む。私の言葉の意味がちゃんと伝わっていないのだろうと思ったからだ。

「……カーリアンは少し空気が読めないから……私が黙ってた。……今回の作戦は……カーリアンも直前まで知らなかった事……」

「……」

「……だから二班は有り得ない。……二班に必要だった準備は……全部私が手続きをした。

……もちろん他の班員に……疑われるような下手も打っていない」

これほど確実な証拠は有り得ないだろう。そう思い、小さく口元を歪めてみせた。

何せ『カーリアンですら作戦開始直前まで知らなかったのだ』から。

普通一般班員は、伝達事項などを班のトップから伝えられる。もしくはその副官から伝令される形となる。

だが二班に限ってはカーリアンの性格があんなだから、定期的に開かれる定例会議には私が参加する事が多いのだ。

彼女もそんな会議には出たがらないし、他の班の者も私が代理出席をしていても文句など言わない。

……カーリアンの性格がああだから。

まぁ、そんなずぼらなところも、カーリアンの可愛いところなのは言うまでもないが。

彼女が文句を言いつつも会議に出向くのは、シャクナゲが何かのついでに二班まで彼女を迎えにきた時か、シャクナゲと話す機会がなくて少し寂しくなった時くらいのモノだ。

そんな乙女チックなところも……以下同文だ。

「……二班の実権は副官にあり、か。カーリアンも大変ですね」

「……ぶぃ」

何故か私を怖いモノでも見るような瞳で見てくるアオイに、なんとなくブイサインを返してから、私は小さくお茶をあおった。

「まぁ、それはそれとして……です。黒鉄に内通者がいると仮定するなら、候補を上げておきましょうか？」

「……そうね」

「あっ、先に言っておきますが、ウチにそんな輩はいませんよ？ウチの連中はシャクナゲに何度も命を助けられた者ばかりです。彼の為に命を張れる者ばかりだと断言出来ます。なんならこの首をかけてもいい」

「……そんな汚い首はいらない。……それに元々……三班を疑うつもりもない……」

なにせ三班は、黒鉄の中でも一番危険な役目を負う事が多い班である。

班長であるシャクナゲが自分からそんな役目につきたがるのだ。彼に従うメンバーがそんな彼に従う以上、三班が一番激戦区に当たるのは必定と言える。

黒鉄に裏切り者がいるとしても、そんな危険な役目を負う班には入るまい。

それに三班は班員同士の繋がりも深い班だ。昔からの顔馴染みも多い。おかしな動きをすれば一番目立つ班と言えるだろう。

だから私は、無条件でアオイの言葉を切り捨てた。

「……汚い、ですか。清潔にしているつもりなんですがね」

「……あなたの美的感覚は信じられない。……このアパートを見れば……信じる気も起きない」

「はは、手厳しいですね」

そう言って苦笑するアオイにも私は無言で返し、脇に置いていた鞄を漁る。

そして中から一冊のノートを取り出した。

「……ここに私が知る限り……事前に作戦を知り得た者を挙げてきた……」

「ふむ。つまりそこから取捨し、絞ろうと？」

「……もちろんこの中の者が……直接話を流したとは限らない。……部下に話した者がいて……そこから流れた可能性もある。……ク

リシュナの『白鷺』も疑うべき。……でも足掛かりは……このリストの中にある」

「なるほど。つまり私の方でもノートのリストを絞り込み、あなたの方でも絞っていけば――」

「……そう、かなり数は限られる」

即座に理解したらしいアオイにしっかりと頷いてみせると、私はゆっくりとノートを開いた。

無力な私に出来るのはこれぐらいしかない。裏で手回しをするぐらいしか出来ない。

私は余りに非力過ぎるから。

そう思えば自嘲的な笑みが浮かびそうになる。

それが歯がゆかった時期もあった。

しかしこれが彼女――私に名前をくれたカーリアンと、彼女が大事にしている居場所を守る為に、私が出来る唯一の事だと今は信じられた。

それは私の力はその為のモノだと信じられたから。私にはこの頭を使うしかないと悟ったからだ。

だから私は、こうしてカーリアンの影でい続けるのだ。

8・サブクライシス（後書き）

アオイ……黒鉄第三班の副官。自然発生型の変種。
生まれは他地方らしいが、班の仲間達であれ過去を知る者はいない。
二十代前半の長身細身の男。
能力については知られていない。（曰わく、『変種としての私には大した事なんか出来ません。単なる物質操作……テレキネシスの劣化版みたいなモノです』らしい）

スキル

補佐能力・Ａ（副官に必要な能力は、全て持っているランク）

交渉能力・Ｂ＋（他班との交渉を一手に請け負えるランク）

身体能力・Ｃ＋

料理・Ａ＋（趣味の領域は越えている）

テーブルマナー・Ａ＋（同上）

美的センス・Ｅ－（班のメンバーですら、家には遊びにこないランク）

掃除能力・Ｅ－（美的センスと互いにマイナス補正）

作り笑い・C＋（班の仲間以外にはとりあえず作り笑顔）

忠誠心・A

隠し事・A（過去を一切秘密にしている）

仲間想い・B＋（班の仲間第一）

9・ナイト&デイ2（前書き）

なんかちゃんと本文を載せたハズなのに、しっちゃかめっちゃかになっていました。

その影響もあり、あとがきの番外編、都市スキルを何度書き直したか分からないくらい書き直しました。

そしてラストもやや変わっております。

だからサブタイも『ナイト&デイ』から『ナイト&デイ2』に変更致しました。

9・ナイト&デイ2

「……これ、報告書」

そう言って背後から書類の束を投げつけてきたのは、二班副官を務めている小柄な少女だった。

その声に思わずビクッと体を震わせてから振り返り――誓ってもいい、気配なんか全く感じられなかった――その姿を確認すると俺は大袈裟に天を仰いでみせる。

時刻は早朝というにもまだ早過ぎる時間帯だ。周囲を染める色はまだ夜のモノである。暦上はもう春先なのに、朝の明るさは空の彼方にも見えてこない。

そんな時間帯にいきなりカクリのボソッとした声をかけられたら、それだけでビクッとしそうなモノではあるが、今はそれだけが理由じゃない。

「……ところでシャクナゲ……あなたは何をしてるの？」

「……分かってて聞いてるだろ？」

こんな時間帯に、着替えや手荷物をいそいそと鞄に詰め込む俺を見て、整理整頓でもしているように見えるワケがない。

ウチの副官……アオイほどじゃないけど、掃除なんて滅多にしないクチだし。

現に質問を投げかけてきた側であるカクリもそう思っているのか、その幼さが残る口元を皮肉げに歪めていた。

それを確認して、俺はまたも嘆息を漏らす。

「それにしても今朝は随分と早い登場だな？カクリ。……カーリアンは？」

「……可愛い寝顔で……眠ってる」

「そうかい。で？今日は？珍しく1人のようだけど、こんな朝早くに何か皮肉でも言う為にわざわざ出向いてくれたのか？」

「……それもある」

「あるのかよ」

そんな会話を交わしつつも、開き直り気分で『脱走準備』を整える俺の近くに、彼女は無表情を維持したまま近付いてくると、ペタンとベッドに腰を下ろした。

今いるこの部屋は、俺の部屋ではない。

つまり俺個人の私室でもなければ、三班班長の執務室……という名前のボロい小屋でもないという事だ。

実はまだ第二班の本拠たる廃病院の一室にいるのである。

――本来の予定なら、俺は一昨日には現場復帰を果たしていたハズだったのに。

さすがに骨折をしていたり内臓を痛めていたりしたなら、後一週間やそこらは大人しくすべきだろうが、幸い骨や内臓に異常は見られなかったのだ。

つまり元より高い俺の治癒力をもってすれば、後は体力の回復次第でしかないという事である。

何より今は状況が状況だ。

一班が大ダメージを受けている現状で、俺がのんびりしているワケにもいかないだろう。

かれこれの理由からしても、3日も休めば休み過ぎなぐらいなのに、もう5日もこの部屋に半軟禁状態で置かれていたりするのだ。

いい加減フラストレーションが溜まりすぎて、『こうなったら二班の連中が起きてくる前に勝手に退院してやろう』などと俺が考えたのは、昨日カクリから『……明日もシャクナゲは退院不可』と言われた時だった。

だからこうして脱走準備をまだ夜も明けない内から整えていたワケだが、そんなところ所に全く気配も感じさせずに近付かれボソッと声をかけられれば、思わずビクッと体が震えてしまうくらいは仕方がないだろう。

それがなんだかんだと理由を付けて、俺を退院させまいとしていた小柄な少女の声だったならなおさらだ。

まだ陽も明けない内から、まるで俺の考えを読んでいたかのよう

にフラッと姿を表す彼女に、俺は内心で小さく苦笑を浮かべてしまう。

――バレないうちに抜け出そうと思っていたのにな……。

そんな思いが苦笑を浮かべさせ、嘆息を漏れさせる。

こんな時間に無断で抜け出すとはまさか思うまい……なんて考えていたのに、この少女――カクリにはお見通しだったようである。

「……今日は手土産持参。……いいからこの報告書を読んで」

「報告書……？なんのかは知らないけど、今日こそは退院させてもらうからな？お前だって毎日毎日カーリアンがここに来て、騒ぎを起こしてたら困るだろ？」

「……別に困らない。……カーリアンのワガママは……私的萌えポイントだから」

「そうかい。黒鉄の副官はみんなどこかしら感性に問題があるよな」

「……そ？」

そんな会話をしつつも俺は着々と退室の為に手荷物を整え――その横では、カクリがどんどんその手荷物をバラしていく。

しかもカクリは全くの無表情のままで。

「随分と露骨な嫌がらせだな？」

「……嫌がらせなんて……すごく心外」

「無表情で良く言うよ、全く」

そんな会話の間も、非生産的ないたちごっこは変わらない。

俺が手荷物を整え、カクリがバラす。

俺が無造作に詰め込んだ衣服を、カクリは丁寧に畳みながら脇へと積み上げていく。

その積み上げられた衣服をまた俺が手に取り――

そんな無限ループに先に終止符を打ったのは――つまり先に声を上げたのはカクリだった。

「……とにかくあなたは……出ちゃダメなの」

「だからなんで？体調に問題なんかなかっただろ？昨日なんか検査すらなかったくらいだ」

「……それでもダメ」

その間も両手は休みもお構いもなしに、バッグに詰め込んだ着替えを広げていっている辺りが、この少女の一筋縄ではいかないところだ。

そうしているうちに、次第に広げられていく荷物の方がだんだん多くなり――

その状況に根負けし、仕方なく彼女が示してみせる報告書を手にとる。

朝方に近い時間帯な事もあり、辺りは暗く月の光すら差し込んで

こない。だが、夜目の利く俺には整った彼女の顔がはっきりと見えた。

その顔付きは幼さを多分に残しながらも、相反する深い知性を感じさせる。

相変わらずの無表情ではあるが、その表情からは茶化す色は見えない。

それもまた俺に溜め息を漏らさせた。

何か理由があっての事なんだろう……そう思わされたのだ。

まぁ、そんな真剣な表情1つすらもカクリの思惑って感が多少はあったけど。

「言っとくけど、あくまでも退院させないつもりなら理由くらいは聞かせろよ？

カーリアンの暇潰しの相手として……とかじゃ納得しないからな？」

「……カーリアンの暇潰し相手じゃ……不満？……まぁいいわ。……とりあえず読みなさい」

そう言って詰め込まれていた着替えを次々と出していき、丁寧に畳んで積んでいく少女に、俺はこれ見よがしに溜め息をついてみせると、放り投げられた書類へと目を向けた。

そして丁寧に作りこまれた書類束の表題を何気なく読み上げる。

「可愛いカーリアンの萌えポイントについて……？」

……その謎が溢れ出る表題になんとつっこめばいいんだろうか？

軽く首を傾げたまま固まってしまうくらいのリアクションは仕方ないだろう。

だが、固まったままの俺に対し、カクリは澄ました表情のままその書類を俺から取り上げると、何故か着込んでいた黒無地シャツの襟元から新たな書類を取り出してきた。

「……間違えた。……本物はこっち」

「……どっから書類出してんだよ?それにある意味さっきの書類のが気になるんだがね?」

「……私のライフワークの記録よ。……見たいなら……カーリアンのファンクラブ……紅薔薇会に入りなさい。……あなたなら特別会員にしてあげる」

「ま、考えとく」

そんな会話を交わしながらも、俺はその人肌の温もりを維持した書類を頭痛のしてきたこめかみを押さえながらめくる。

カクリと話す時は、大抵この調子なんだと俺は悟っていた。何故か1つ仕込みがある場合が多いのだ。

それが分かっていたから、俺も深くはつっこまない。

隣で『人肌の温もりはどう?』とか、『最近のカーリアンについて』とかを脈絡なく話す少女には適当に返し、次々と書類を読み進めていく。

もちろんその記載内容についてはある程度予測が出来ていた。

前話していた『裏切り者』――『内通者』についてであろう、と。

……まぁ、『カーリアン観察日記』に類似するモノである可能性も、なきにしもあらずではあったけど。

だがそんな考えはまさに杞憂だった。渡された書類にはおふざけは一片も含まれておらず、丸っこい文字と綺麗に色分けされた表でキッチリとまとめられていたのだ。

その最後には軽く内容全体のまとめと、現状の『黒鉄』や『カリギュラ』についての考察も書いてあり――

「……なるほどね」

読み終わるまでにはカクリの考えが俺にも分かった。
俺がずっと退院をさせてもらえなかった理由も。

「……そう」

「だから俺にはまだ出るな、てワケか」

「……そう。……『黒鉄のシャクナゲ』は、怪我人っぽく大人しくしててくれればいい」

「また大胆な事を考えるね。『警備班』に話は通して――いないんだろうな」

カクリの澄まし顔を見ながらも、思わず『警備班』のリーダーたる友人に同情の念を抱いてしまう。
カリギュラの治安を任された第五班のリーダー・カブトは、その見た目とは違い、真面目すぎる性分の持ち主ではあるが、そのせいもあり間違いなく苦労性の青年だろう。
……まぁ本当に同情すべき点なのは、自分が苦労性な事に本人だけが気づいていない点なんだけど。

「……カブトは抱えがいのある……いい頭の形をしてる。……それに警備班のメンバーも信用はしきれないから」

「良く言うよ、全く。どうせ今回も『俺の発案』として押し通して、警備班に自分が恨まれないように……とか考えてるんだろ？」

「……シャクナゲは頭がいい。……だから好き」

「……ったく、このタヌキ娘が」

ウフフと妖しげな含み笑いを漏らす少女に、俺は呆れとそれ以上の末恐ろしさを感じ、肩を大袈裟な所作ですくめてみせた。
そして了解を示すように書類をヒラヒラと振ってやる。

その書類の内容は簡単なモノだった。
要点は、カクリとアオイの2人が調べ上げた『内通者候補』の記載。
あの作戦時の状況や所属班の位置取りから候補を削り、なおかつ

確実に信頼出来るメンバーを限定し、『それ以外のメンバー』を調べあげた『報告書』。

班の長だから、コードフェンサーだからといった立場的なモノは考慮に入れずに全てを分析し、それぞれの経歴、そして関西軍やエセ将軍、その側近との関係がある者など、その関係性等細かに書き込んだ『書類』。

もちろん経歴不詳、経歴確認出来ずの者は出来るだけ徹底的に調査しつくし、それら詳細なども細かに書かれた至れり尽くせりなモノだった。

もちろん全てを読破する時間なんかなかったが、カクリがこうして渡してきたくらいだ。満足のいく調査が出来たのだろうと思う。

共に調査をしたアオイの性格からしても、不確かなモノを俺まで通す事は考えられない。

そして調べ上げたからには、それに対する対策が必要となってくる。

その対策の為に『俺はここに留めおかれているのだろう』と言う事は、カクリが朝早くに『わざわざ1人で』会いに来た事からも想像が出来た。

「またカーリアンには秘密にしてるのか？」

「……ん。……カーリアンは分かりやすいコだから」

そこが可愛いんだけど、とお決まりのセリフを吐き、彼女はジッと俺を見据えてくる。

その視線に籠められたモノは明らかだ。

――あくまでも『俺の考え』って事にしたいワケね。したたかなモンだ。

自分に……そして上官であるカーリアンに、誰の敵意も向かないように――そして二班の独断だと思われないように、三班の長である俺からも認可を得たいのだろう。

まぁ、他にもう一つ理由はあるんだろうけど。

「……好きにすればいいさ。『あぶり出し』だろうがなんだろうがね。俺が動けないと確信が持てれば、『ベネトレイター（裏切り者）』達も動き始めるだろ」

「……ありがと。……アオイは借りたままでいい？」

「三班主体って事で、アオイには協力するように言っておく」

「……ん。……もう行くね？」

確認が取れた事で満足出来たのか、カクリは畳んだ着替えを脇に置いてゆっくり立ち上がった。

そしてそのまま歩いていき――部屋のドアをくぐる直前に俺へと振り返る。

……冷たい光を宿した瞳で俺を見据えながら。

そこに年相応の無邪気さや感情などは見とれない。

その視線は、黒鉄七班の１つ第二班のブレインにして副官としてのモノだ。

そう、それは甘さや無鉄砲さがあるカーリアンを補佐する、冷静さ

と思慮深さを宿す副官の瞳だった。

「……あなたの賢さは好きよ。……その変種としての力も心強い。……時折怖くなっちゃうわね」

「二班副官のしたたかさには負けるよ」

そしてそのまましばらく視線をぶつけ合い、一瞬だけその視線が交錯する。

その瞳は俺の奥深くを探るような怜悧な輝きを放ち――

ゆっくりと閉まるドアによって、その視線の交錯は終わった。

『いくらあなたでも、カーリアンを傷つけたら許さないから』

そんな小さな言葉を、確認するような響きで残して――。

「許さない……か。赦しなんて求めてないよ」

その扉から視線を外すと、俺は無機質で無骨な天井を見上げた。

なんの飾り気もないただのコンクリートによる平面。

そこに感じられる僅かな寂しさに、ちょっとした親近感を覚える。

それを打ち払うように……そんな感慨を拭いさるように口元を歪めてみせる。

作り慣れた『シャクナゲ』としての笑み――皮肉げに口元を歪め

るだけの仮面の笑みを浮かべる為に。

「俺に必要なのは罪と罰。そこに『赦し』なんかが入る余地はない」

この呟きはきっと誰にも届かない。人並み外れた知覚能力を持つカクリにさえもう届かない。

だからこそ声に出した。

声に出さずにはいられなかった。

『カーリアンを傷つけたら――』

そう言った少女の言葉が胸の奥深くにチクリと刺さっているのが分かる。

誰かを気遣う少女の言葉。

その想いの余りに他人を警戒する視線。

それが少し……本当に少しだけ羨ましく思えたのかもしれない。

カーリアンがじゃなく、そんな感情のままに行動出来るカクリが。

「……俺はシャクナゲ。ずっとこれからもただのシャクナゲ」

そう言い聞かせる言葉が――今までも自らに言い聞かせてきたその言葉が、虚ろに病室に響く。

胸の痛みは変わらない。

……それがより、本来の自分は1人っきりなんだと思い知らせてくれたのだった。

9・ナイト&デイ2（後書き）

番外・都市紹介

カリギュラ……関西地方にある元神杜市という港町。

現・関西統括軍（通称関西軍）が武装蜂起した事件『関西事変』から起こった動乱と、関西軍の侵攻によって廃墟が立ち並ぶ街となった。

通称・廃都。

都市スキル

生産性・Ｃ－（自給自足がやっとのランク）

資源・Ｂ＋（元港町だけあり、資材やかつての廃品など、多数が蓄えられている）商業・Ｄ（交流によりマイナス補正）

防衛能力・Ｂ＋（張り巡らされた地下水道と、廃墟と貸したビル群を使った迎撃戦を使った防衛戦なら、かなりの防御力と遊撃戦が期待できるランク）

人材・Ａ（動乱期の初期から日本各地を回って集めていただけあり、人材だけは優秀）

治安・Ｂ（変種、非変種での争いはなく、女性の1人歩きが出来る治安）

交流・Ｄ－（地図上は周り中関西軍の都市であり、まさに四面楚歌。反関西軍勢力との交流のみ）

武装・C＋（1都市としては豊富と言えるが、1地方軍と比べれば貧弱なレベル）

番外編1・カクリの考察（前書き）

すこし世界観の紹介や人物紹介を、違った形でしてみようと書いたモノです。

結構珍しい試み……だと思うので、ツッコミ等お待ちしております。柔らかくオブラートに包んでツッコんで頂けたらなお幸いです。

一部書き足し、誤字脱字を修正。というより一回アップしたモノは編集出来ないんですかね？

番外編1・カクリの考察

私がこの考察を記録として残す事にしたのにはいくつか理由がある。

まずは私個人の欲求によるモノ――知的好奇心だ。純粋なる興味。

黒鉄、変種、ヴァンプ、世界情勢。

その全てを知りたいという知的欲求……。

それが私にこの考察をさせる原動力となったのは否定出来ない。

元来私は、その欲求が強いタイプなのは自覚している。

それが『知覚能力が増大された変種』ゆえの特性なのかは分からないが。

そして次に来るのは、私が所属する『黒鉄第二班』の戦力を憂慮した為である。

つまり我が二班は後方支援をメインとする部隊である為、黒鉄内においても決して力の強い部隊ではない、という事を憂慮したのだ。

黒鉄全七班中、下から数えてトップ……それが二班の実力だという認識が私に力を求めさせた。

私にとっての力――つまりは情報や知識を。

いかに二班のリーダーであるカーリアンが、黒鉄内でも有数の力を持つ変種であれ、コードフェンサーが彼女しかいない事実だけは揺るがない。

もし、今も僅かに『黒鉄という組織』を軋ませている『各班の間にある軋轢』が大きくなれば……内部で黒鉄の実権を握る争いでも起きれば、我が二班の立場は非常に危ういモノとなる。

そうなった際、彼女――私の大好きな可愛いカーリアンは、一番始めに傷つく事になるだろう。

カーリアンさえ抑えれば、二班にロクな戦力が残っていないのは、カリギュラに住む者なら誰でも知っている事なのだから。

――だから私は記す事にしたのだ。

私の大好きな彼女と、彼女が大事にしている居場所を守る為に。

私の知覚能力や自ら足、使い得る全てのツテを使って直接集めた情報（ちしき）を……。

――だから私は残す事にした。

情報をまとめ、整理して、今後の黒鉄内での動きを……これからの世界の流れを読む為に。

他の班との戦力差を埋める術（すべ）……私なりの力を。

――私はカクリ。

元の名前は思い出せず、また思い出そうとも思わない力弱き変種。

今は『紅』の副官である『考察者』。

そして彼女が与えてくれた名前に誇りを持つただのカクリだ。

まず最初に黒鉄の現状をまとめておく。自分の置かれている立場を、確実に再認識する意味を込めてだ。

自らの立場を自覚しないまま考えを巡らせたところで、思考は迷走をきたすのがオチであろうし、何よりより強い危機感を持ち、より正確な情報を記す為に。

――現在の黒鉄は全部で七つに班分けをされている。

俗に言う黒鉄七班だ。

といっても、カリギュラに身を寄せる人間全てが、いずれかの班に所属しているワケではない。

ほとんどの人々は関西統括軍……強い力を持ち、権力を簒奪した『将軍』を自称するヴァンプや、その配下に住む場所を追われた者で、戦う力やすべを持たない人間達なのだから。

そういった人々は、開いた場所で田畑を開墾し、数少ない家畜を飼い慣らしたり、あちこちで廃品を集めて各地に流したり、荒廃した街を立て直したりといった作業に従事している。

中にはカリギュラの治安維持にあたる『黒鉄第五班』に協力し、見回りくらいなしてくれる者達もいるが、ほとんどは自分に出来る範囲の作業しかこなしていない。

そんな人々の中で、戦う意志を……護る為に手を汚す決意を秘めた者達が『黒鉄』を名乗る。

守る為に手を汚す――その為の硬き意志を宿す為に。

そんな黒鉄に所属する者達が、配属されるのが七つの班となる。
各班ごとにそれぞれ交流があり、人員の移動もたまにあるが、ほとんどは最初に所属した班から移動する事はない。
最初の段階で状況や能力に応じて班分けをされているからである。
我が二班に医療機関に勤務経験のある者や、性格や能力的に前線向きではない者が多く配属されるのは、これを考慮しての事だろう。
私もこれに当たる。私の場合は『能力的に前線は向いていない』からだ。

かつては各班の上に、人事や班ごとの戦力バランスを取る統括部という機関が『あった』。
だが今現在の黒鉄には……アカツキがいなくなってからの黒鉄には、統括部という機関はなく、班内での人事やグループ構成などの全ては、それぞれの班のやり方や裁量に任せられている。
班の長が決めているところもあれば、構成員達の採決で決めている所もあるらしい。

……まぁ、その現在の体制――各班の裁量次第といった現状が、私の頭を悩ませている大きな要因なのだが。

それはここでは置いておくとして、下にそれぞれの班ごとに私が知りうる限りの情報を記載する。

第一班『強行班』。リーダー・ナナシ。
有事の際は一番先に動き、力を振るう実働班。
また、カリギュラに対して敵対行動を取った武装盗賊――かつて将軍に権力争いで敗れ、それでも将軍に従わない力に傲ったヴァン

プ達と、それに従う徒等を組んだ輩――に対し、制裁攻撃に出る部隊でもある。

その為に、前線へと立つ機会が多いナナシの能力は、黒鉄内でも良く知られている。

『無限再生』と呼ばれるほどの超回復能力がそれだ。

聞いた話によれば、切り飛ばされた腕すら、くっつけていただけで問題なく動くようになった、という逸話すら持つ変種である。

また、一班にはコード持ちの変種がナナシを含めて3人いるが、それら全てが班長であるナナシと同じく、身体能力の一部が特化した者ばかりである事も一班の特徴と言えるだろう。

通称『不死身のナナシ』率いる武闘派……それが『黒鉄第一班』である。

班の体制は未確認だが、恐らくは合議制であろう。

ナナシは戦術眼はなかなかのモノを持つが、基本的に頭は温く情にモロいタイプだからだ。

特記事項として我が二班との関係は良好である事、同じように武闘派である三班の事をライバル視している事を記す。

これら2つ事項の理由は簡単だ。

ナナシがカーリアンに惚れているからである。

これはいずれ使える情報だから、しっかりと脳裏に刻んでおく事とする。

第二班『救急・支援班』。リーダー・カーリアン。

とっても可愛い『私の』カーリアン率いる黒鉄第二班だ。

彼女の能力は非常に強力で、三班のシャクナゲが言うには『高ぶった感情を炎に変える力』らしい。人体発火能力とかパイロキネシ

スと言えば分かりやすいだろう。
まぁそんな情報よりも、カーリアンの可愛さの方が重要特記事項なのは間違いないところではあるが。
前述したが、カーリアンの他にコード持ちはいない。
私ならば上手くすれば、戦歴の浅いコード持ち程度なら罠にハメて潰すくらいは出来ようが、それも『上手く行けば』だ。
正直な話、他班との戦力差は頭が痛い問題だ。

二班とて前線にも出るが、支援や怪我人の治療の為に出るだけである。

班の体制は、副官である私が提言をし、カーリアンに承諾を取る形が多い。

第三班『決戦班』。リーダー・シャクナゲ。
一班が切り込み隊だとするならば、三班は勝負を決する為の決死隊と言える。
一班と同じく、武装盗賊の迎撃や追撃もする班ではあるが、その違いは三班の第一の役割は、関西軍に睨みを効かす事だと言う事であろう。
この班のリーダーであるシャクナゲは、我が黒鉄でも最も名の知れた人物であり、その首には関西軍以外の各地方勢力も賞金をかけているような『超大物』だ。
関西軍にとっては、設立以来の仇敵だと言える。
黒鉄第三班とシャクナゲがいるからこそ、一度は支配したカリギュラから撤退する羽目になったのだから。

シャクナゲについては後日の考察項にて詳細を述べるが、その能

力についての推察だけはここに載せておく。
彼の能力は、銃を愛用しながらも弾丸を補充するところを見た事がない為、恐らくは銃の弾丸を何かで精製する『物質形成能力』だろう。
確証はないが、近いモノだと推察する。

また、三班はある意味最も独裁的な体制を持つ班だ。
リーダーであるシャクナゲが絶対なのだ。そして彼に絶対的な信頼を寄せる強力なメンバー達。
コードフェンサーは他に3人いるが、『音速』のヒナギク『不貫』のヨツバ『水鏡』のスイレン共に強力な能力者である。
副官はアオイ。力の弱い変種でコードは持っていない。
他班との間に問題は起こしていないが、一番他班から注目を浴びる班でもある。

特記事項・シャクナゲはムカ……羨ましい事に、私のカーリアンの想い人である。

第四班『防衛班』。リーダー・オリヒメ。
オリヒメの能力はカーリアンと対象的な力である。
『空間冷却能力』。やはりカーリアンの逆で、感情を冷気に変える能力……なのだろうか。調査が必要だ。
班の役割は、主にカリギュラの防衛を専任している。
その為、カリギュラから離れる事は滅多にない。
コードフェンサーはオリヒメと他2人。
1人はテレキネシス……念動能力者だが、もう1人は未確認である。

特記事項・カーリアンとオリヒメの仲は最悪だ。よく睨み合っている。
またオリヒメは自尊心が強い女で、『姫』と班員に呼ばせているようだ。ほとんどの相手には慇懃無礼を極めたような態度を取る。
もっと言うなら、カーリアンの敵だから私も好きではない。

……かなり私情が入った。この考察には私情を挟まないよう以後気をつける。

第五班『警備・整備班』。リーダー・カブト。
リーダーであるカブトは、班の長達の中では唯一のコードナシ…
…しかも変種ですらない男である。
しかし、カブトはシャクナゲと並んで古いメンバーで顔も広い男だと言えよう。
この班にはコードフェンサーが2人おり、その内の1人、副官である『幻影』のアゲハは非常に強力な変種として知られている。
班の役割としては黒鉄の機材や火器、車両の整備、支援砲撃を担当している。
もちろん警備班らしく、カリギュラ内での治安にも目を光らせている班でもある。

注意すべきなのは、この班の持つ地力だ。カブトはシャクナゲ個人との繋がりも深く、三班との繋がりが深い。侮りがたい地力を持つ班だと言える。
所属するコードフェンサーの能力は未定である。

特記事項・なんとしても強力なコードフェンサーであり、副官でもあるアゲハの能力を知りたい。動向注意。

第六班『情報班』。リーダー・ヘルメス。
リーダーであるヘルメスの能力は黒鉄内でも有名で、強力な暗示能力を持つらしい。
いわゆる一種の『テレパス（精神感応能力者）』だ。
さすがに人間を操るのは難しいらしいが、自らの脳波を他者にリンクさせ、その思考を妨害したり混乱させたり出来るモノと聞く。
かなりに珍しい力である。
その力は、主に味方の戦意高揚に使ったり、尋問やら情報収集に使っているらしい。
他に六班にはコードフェンサーが1人所属しているが、その力は未確認。定例会議では独自の立場を貫き、他班との繋がりも薄い。
諜報、防諜と言った黒鉄の見えない部分を支える班である。

特記事項・私の情報収集において、一番の障害となりそうな班である。注意が必要。

第七班『遊撃班』。リーダー・スズカ。
全部未定。気持ちいいぐらい一切合切が不透明。
この班は他班の援助要請に応える為の遊撃班なのだが、まず構成員数からして分からない。
一度二班の副官として援助を要請したが、『現段階では必要なし』と通達された。
私が探りを入れようとしているのを読まれている可能性がある。

班長であるスズカ自体、定例の会議以外ではあまり見た事がないぐらいだ。だが、カーリアンやシャクナゲとは親しそうであった。

特記事項・スズカは黒鉄唯一の純正型変種である。

恐らく能力だけで言えば『黒鉄最強』は彼女――『銀鈴のスズカ』だ。

これら七つの班の内、二班や五班のようにいくつかの役割を持つ班もある。

それはいずれ折りをみて……そして必要に応じて班分けされる事になるのだろう。

全ての班が、元々はアカツキ総指揮の下、シャクナゲとカブトが率いていた部隊から分けられていったように――。

だが班分けされる前……つまり現時点で、ある程度は敵味方の線引きはしておかねばならないのも事実だ。

何か事が起こってから慌てるのは優雅ではないし、私の主義にも反する。

何より誰かが事を起こす時には、一番にカーリアンが狙われる可能性もある。

それはマズい。それでは私にとって意味がない。黒鉄という組織が残るだけでは、私にはなんの意味もないのだ。

だからこそ出来るだけ早い段階で、いずれが真に味方になり、いずれが裏を持つのかを見極めておく必要があろう。

裏を持つ者には、それ相応の手札を切らねばなるまい。

――この考察にだけは残しておくが、一班が半壊した作戦……あの状況は私も考えた事がある。

つまり『関西軍に情報をリークし、一班のような前衛部隊――つまり力の強い部隊にダメージを与える』――そうやって『黒鉄内での戦力の調整を図る』というのは取り得る策の1つではあった。

だが、少し考えただけで棄却した案でもある。

下手をしたら黒鉄が壊滅しかねないダメージを受けるのは望むところではないし、何より私の立場からすればあんな策は下策もいいトコだからだ。

確実に効果はあるだろうが、そのダメージは二班と友好的な『一、三班』が受ける事になる。

当然支援部隊たる自班も危うくなり、その上で『内通者がいる』というのがバレバレになる。

ハイリスクの割にリターンが少な過ぎる。

それでは策を施しがいがない。

……まぁ正体不明な六、七班がハメられるならやっても良かった案ではあったが。

そして『内通』がバレるという件。これは私が手を下したなら痕跡を残さない自信はもちろんある。

それでも関西軍と渡りを付けるには、それなりに大きな動きが必要になるのは間違いないだろう。

その間の動きの全てを、六班や彼から――黒鉄のシャクナゲから隠し続けていられるかと言えば、正直確信が持てない。

自信はあっても確信がなければ動かない……それが私の信条である以上、この策は端からボツだったと言える。

つくづく彼は厄介な相手だ。
彼個人を相手に、『情報班』並みに気を使うというのはちょっと優秀さが過ぎる。

カーリアンも何も彼を選ばなくてもいいだろうに、とすら思う。
彼はカーリアンの大事な人である以上に、私の『政敵』に近い相手だ。
二班の立場を守る為に一番警戒すべき『力』を持っているし、何よりカリギュラの『生きている方の英雄』だ。
その存在自体、名前そのものがカリスマと言ってもいい。
彼と真っ向から対立出来るだけの影響力を持っているのは、『死んだ方の英雄』たるアカツキぐらいだろう。

一年ちょっと前に来たばかりの小娘に過ぎない私とでは、発言力から影響力まで雲泥の差なのである。

そして何より厄介なのは、それらを使いうるだけの頭を持っている事。
頼りになる以上に、厄介極まりない相手……それが私のカーリアンが選んだ相手だというのが皮肉過ぎる。

限りなく有り得ない仮定ではあるが、最悪三班と敵対する立場に立ったとしよう。
そうなったのなら私がいかに策を巡らし、周到なトラップを張ろうが、私達二班は抵抗らしい抵抗すら出来まい。

まぁカーリアンなら他の五つの班全てを敵に回してでも、三班の側に付きそうな気がする……というより確実にそうなるであろうか

ら、本当に仮定でしかないのだが。

だが問題はその先だ。

三班が確実に二班の味方になる――いや、『二班（カーリアン）が三班（シャクナゲ）の味方をする』としても、『対等』な立場を持っている事が絶対条件だ。

それには『拮抗する力』か、『力に勝る手札』が必要不可欠。

下に付くのはカーリアンが望む状況ではない。あくまでも『今のまま』が理想である。

二班と三班が対等であり、他班からの潜在的脅威がない状況――

――本当に頭が痛い。二十手三十手と策は打っているが、前回の作戦失敗により黒鉄の状況が動き始めた以上、百手くらいは既に手持ちがいるかもしれない。

まぁどんな汚い策をどれだけ使ってでも……どんな過程を踏み、誰と敵対する羽目になろうとも、彼女が望む『全て結果を必ずもたらしてみせる』つもりではいるが。

だが今はネタ待ちだ。今出来うる策は全て打つが、全然足りない。

その為にも後日、考察2を記すまでになんらか有効な情報が入る事を望む。

4月某日・『考察者』が記す。

番外編1・カクリの考察（後書き）

番外、考察編はいまのところ3つまで書けています。

プロットを弄り、ネームを弄り、物語調にしたモノです。

大体全5話予定で、物語の随所にネタバレにならないように挟む予定です。

その他に、シャクナゲ過去編4話（予定。3つは書けてます）が最後に纏めて入ります。

本筋は15話まで書けていますが、この次から更新ペースはやや落ちるかと。一気に上げたらストックが無くなり、更新ペースがメチャクチャになりますので。

週1でのアップ、半年内完結を目標に頑張ります。

１０・ミスリード（前書き）

この次から週１更新開始です。
更新は土・日・月のどれかになると思います。
元が早筆ですし、早く書けるようにもしますが、週１が限界です。
応援、感想、批評よろしくお願いします。

なお、文章の編集はちょこちょこ致します。

10・ミスリード

「大丈夫ですか？やっぱり痛みますか！？あぁ～、変われるモノなら変わってあげたい……」

そう言いながらウロウロと病室内を歩き回っているのは、我が三班に所属するコードフェンサー『ヒナギク』だった。

小柄で愛嬌のある顔立ちをしている彼女は、作戦時行動時に見せる緊張感溢れる表情とも、班内で仲間達に甘えてみせる顔付きとも違う、今にも泣き出しそうな表情で落ち着きなく室内を歩き回っている。

「あぁ、まぁさすがに無茶しすぎたからかな？まだちょっと体のあちこちが痛むんだ」

「あぁ……どうしよう、どうしよう～。わ、わたしに出来る事って何かあります？」

「いいから落ち着いて。君がオロオロしてたら他の班員達も不安になるだろう？君は我が三班が誇るコードフェンサー『音速のヒナギク』なんだからね」

苦笑を漏らしながらアオイがそう宥めるも、ヒナギクは相変わらず落ち着きがなく――

「これが落ち着いていられますかっ！？
……あ、シャクナゲ。何か甘いモノでも欲しくないですか？なんなら二班からもらってきましょうか？果物も今は不足してますけど、シャクナゲの為だったらふんだくって――」

「……頼むからカーリアンとゴタゴタは起こさいでくれよ？」

腕捲りをしながら物騒な事を言い出すヒナギクを、俺は寝転がったままでなんとか引き留めた。

このヒナギク、三班の中では――いや黒鉄全体の中でもかなり強い力を持つ変種だ。

コードを持つに相応しい能力と、高い身体能力も秘めてはいるのだが、その性格にはかなり子供っぽいところもあるのが困りものでもあった。

『音速』のコードと共に、その名前は知らぬ者がいないほどの強者なのは間違いない。だが、普段の彼女をみて『音速』という単語とリンク出来る者が少ないのも間違いないだろう。

天真爛漫でそれゆえ破天荒。それが『音速』のコードフェンサー・ヒナギクだ

……まぁそんな性格なワケだから、我が三班で他班と問題を起こすのは、大抵ヒナギクだったりもするのだけど。

そんな言動からか、能力の割に他班からは軽く見られがちな彼女だが、三班のメンバーからの評判は非常にいい。

動きやすいようにショートに切りそろえた青みがかった黒髪と、それを纏める黄色のカチューシャ。表情がコロコロと変わるところも相まって、班内では『ヒナちゃん』と呼ばれ、みんなの妹分として可愛がられているのだ。

まぁそれは、最もコード持ちらしからぬコード持ち、とも言えるのだろうが。

「あぁ～、シャクナゲ～。痛いですか？痛いですよね？痛みますよねっ！？その痛みの借りは、クサレな将軍や役立たずの救急班に、わたしがキッチリ倍返しにしてやりますからぁ！」

「……間違ってもカーリアンの前でそんな事言うなよ？」

そして班員みんなに可愛がられているだけに、班の仲間を誰よりも大事に……家族のように思っている少女である。

……それゆえに暴走しがちな点については、頭が非常に痛いのだが。

今日彼女がここに見舞いに来たのにはワケがある。

いや、普段ならカーリアンが、三班のメンバーが押しかけて来ないように目を光らせているのに、今日に限ってそれをしていないのにはワケがある――というべきか。

今日は『班長会議』の日なのだ。

普段ならカーリアンは出席もせず、副官であるカクリに任せがちな定例会議ではあるが、今日だけは彼女が1人で出席をしていたり

する。

もちろん自主的に彼女が会議に出向いたワケではない。

最初は散々『忙しい』だの『面倒くさい』だのと、ブーブー文句を言っていたが

『俺は出席出来ないから、代わりに見ていてくれないか？三班からは『スイレン』を代理に出すけど、カーリアンにはスイレンと一緒に、他班が無茶をしないか見ていて欲しい』

そう俺が言うと唸り出ししかめっ面をしながら黙りこみ、カクリが

『……シャクナゲは……カーリアンを信頼してるんだね』

そう言うと仕方なさそうに……でも思っていたよりは簡単に了解してくれたのだ。

もちろん、『貸し1だからね！』と恩を着せられてはしまったけど。

そう言った事情でカーリアンがいない今、ヒナギクはアオイに『見舞いの名目』で連れて来られたのである。

もちろんヒナギクからしたら『見舞いそのもの』でしかないのだろうが。

「病室で騒ぐから三班は出禁！なんて、カーリアンのヤツはなんの権限があってそんな事言いやがるんですかね！？」

「いや、なんのって、救急班班長の権限だろ？」

「それって横暴です！無茶苦茶です！！職権乱用ですっ！！シャクナゲはわたし達のリーダーなんですよっ！？見舞いもダメなんておかしいです！！」

「い、いや、ヒナ？出来れば声のトーンを落としてくれないかな？ほ、ほら、病室だしね？」

カーリアンがいない為か盛大に文句を撒き散らすヒナギクを、アオイは冷や汗を垂らしつつもなんとか宥めていた。

アオイのそんな態度も当然と言えば当然だろう。二班や他の班との応対は、三班ではアオイの仕事と言えるのだから。

他班とのトラブルとなるような発言はいつも彼の頭を悩ませる出来事である。

ましてやカーリアンは、二班の班長でもある強力なコードフェンサーだ。

副官であり実質二班を動かし、運営しているカクリは、救急班の頭脳とも言える存在ではあるが、彼女は絶対にカーリアンにしか従わない。

そういう面からしても二班のトップはやはりカーリアンであり、その彼女への不満はアオイからすれば頭の痛い問題であろう。

「スイレン達はなんにも言わないんですけど、わたしはやっぱり不満ですっ！！シャクナゲが療養するなら、こんな二班の施設なんかじゃなくてウチの休憩所でいいハズですっ！！」

「ヒナ、いい子だからワガママ言わないで。元々シャクナゲには一度ゆっくりと休んでもらうつもりでいたんだ。その意味で言えば今

回はいい機会なんだよ。健康診断やメンタルケアなんかもついでに済ませられるからね。それはここでしか出来ない事なんだよ」

そう宥めるようにヒナギクの頭を撫でてやりながら、アオイは困ったように小さく笑う。

その姿は、機嫌を損ね、拗ねてしまった妹を宥める兄の姿のようであり、小さな子供をあやす父親のようでもある。

頭を撫でられても、最初は不満そうに唇を尖らせていたヒナギクも、いつしかポワ〜っとした表情を浮かべていた。

「それにヒナだって、シャクナゲは少し頑張り過ぎだって思うだろう？たまにはゆっくり休んで欲しい……そう思わないかい？」

「そ、そりゃ思いますけど……」

「それにシャクナゲは実際無理をしすぎていたみたいでね。カクリさんにも大分怒られちゃったんだ。『変種とは言え人間なんだ。いくらシャクナゲでも、人並みの休みも取らずに体を酷使し続けるなんて』ってね」

もちろん、そんな事をカクリに言われた覚えなんかない。というより、彼女にそんな医者らしい気遣いをされた覚えすらなかった。

問答無用で『退院不可』としか言われなかったから。

それを思えば苦笑の１つくらいは浮かぶってモノだ。

まぁ、もし言われていたとしても、何もそんなヒナギクを脅すような事を言わなくても……と普段ならば思っただろう。

思慮深いアオイが、こんな不安を煽る事を言い出すのは解せない、

とも思ったハズだ。
俺じゃなくても、ヒナギクよりは達観しているスイレンならば、アオイの言葉に疑念を抱いていただろう。
だが、今の俺はアオイをたしなめるような真似はせず、無意味に小さく笑ってみせる。
「まぁ、俺も昔からここで戦ってきたからね。古傷はいくつでもあるし、体も痛みはするさ」
「そ、そんなに体調悪いんですかっ！？」
案の定ヒナギクはオロオロしだし、目にはいっぱいの涙を浮かべていく。
今にも俺にすがりつかんばかりのその様子に、やはり多少……いやかなり心が痛むが、敢えて曖昧に笑ってみせた。
「心配しなくてもいいよ。ただ、しばらくは三班の活動に顔は出せないかな」
「シャクナゲが……」
そんな俺の言葉に、見舞いに来た頃の上機嫌さも、俺を心配しながらも笑っていた笑みも消え、ヒナギクはただどんよりと表情を曇らせる。
その表情は単純に悲しんでるワケでも俺を心配しているだけでもなく、『不安』を最も如実に表していた。
彼女が何を不安に思っているのか……それが分からないほど俺もバカなつもりはない。

その不安は我が三班の最大にして唯一の弱点についてなのだ、という事ぐらいは自覚出来た。

「しばらくはスイレンにいざという時の指揮は任せる事になると思う。もちろん私も協力はする。ヨツバもね」

そうアオイが続けるも、ヒナギクは聞いているのかどうかも分からない茫洋とした表情で、小さくコクンと頷くだけだ。

それほどまでに彼女の不安は大きいのだろう。

そんな彼女の様子は、そのまま我が三班の弱点が、いかに重大なモノかを物語っていた。

そして、その欠点を知りつつもなんの手も打たなかった俺が、いかに浅はかだったかも……。

「シャクナゲがいない以上、我が三班は作戦行動は起こせない……それはヒナにも分かるよね？」

「はい」

「そう、一般班員の不安は大きいだろう。彼らはシャクナゲの指揮だから疑いなく動ける。シャクナゲがすぐ側にいると思えばこそ、勇敢に戦えるんだ。

それに何より、スイレンやヨツバはシャクナゲが動かなきゃ動いてくれないからね」

――そう、我が三班は、俺の指揮下以外では、作戦行動を行った事がないのだ。

ただの一度たりとも。

作戦上別行動を要する際には、同じコードフェンサーである『スイレン』が別働隊の指揮を執るが、スイレンが三班全体の頭となった事は一度もない。

それは良く言えば決戦班……戦いを決する班ゆえの特性とも言えるかもしれない。

一致団結して1つの目的に向かって戦う場合は無類の強さを誇るが、その頭がなければ途端に脆くなる……それが我が三班唯一無二の弱点なのである。

スイレンもヨツバも頑固者だから――と言えば拙い言い訳になるだろうが、あの2人が絶対に俺以外の指揮を認めない事も大きな理由だろう。

『シャクナゲがいなければ戦えない決戦班』と、他班から揶揄される由縁だ。

「だからヒナギクには出来るだけの協力をしてほしい。スイレンもヨツバも私に協力的ではあるけど、絶対に一線を引いてるからね」

「……でも何をすれば？」

アオイの言葉には力が籠もり、それを受けたヒナギクは躊躇いがちながらも顔を上げる。

そんな様子を見ながらも、アオイの言葉に込められた別の意味を俺は悟り、思わず苦笑が浮かびそうになった。

アオイの言葉は単にヒナギクだけに向けられたモノなどではなく、俺に対して『あてつけ』でもあるのだろう。

『あなたがいなければこんなに私は苦労する羽目になるんです』

そう言外に込められているのが分かった。
それが分かったからこそ、見せつけるように小さく嘆息を漏らしてみせる。

「まずヒナギクにはね、シャクナゲが休んでる間は自然にしていて欲しい」

「そんな事……？」

そんな俺の態度にも一瞥もくれず、アオイはこの作戦の核心――茶番とも言える『見舞い』の目的へと話を進めていく。

こんな風に裏で勝手に動いているのがバレたら、また三班は『俺の独裁で動く班』なんて言われるな。

そんな事をちょっと憂鬱に思いながら。

だが、動き出した茶番（舞台）は、これから行う作戦……『内通者のあぶり出し』には絶対に必要な事で――
内心でヒナギクに謝りながらも、俺もその舞台に上がるべく彼女へと向き直ったのだった。

１０・ミスリード（後書き）

ヒナギク……三班所属の一般班員。自然発生型変種。
１５歳という最も年若いコードフェンサーでもある。
コードは『音速』。その能力は後の話で記載。
無邪気で天真爛漫、甘えん坊な所を持つ少女。
怖いモノ知らずでトラブルメーカーな部分もあるが、班の仲間達にはそれも含めて大事にされている妹分。
同じ三班のコードフェンサーであり、各班長にも匹敵しうる発言力と能力を持つ『水鏡』のスイレンに、『いずれは私を超える』と言わしめた強力な能力者である。

……その見た目や行動からはそうは見えないが。

スキル

能力・Ｂ（現時点で。今後の成長ではまだ伸びると思われる）

身体能力・Ｂ（これだけはすでにシャクナゲに次いで二番目）

経験・Ｄ（身体能力では勝っているはずなのに、訓練では他の三班のコードフェンサーに遊ばれるランク）

カリスマ・Ｃ（班の仲間の心は掴めているランク）

直感・Ｂ（天性のモノ。なんとなくの考えナシで真実を見抜く事がある）

妹属性・Ａ＋（これは一生モノだと思われるランク）

トラブルメーカー・Ｂ

天真爛漫・Ａ

家族想い・Ａ＋（家族第一ランク。今の家族は班の仲間）

怖いモノ知らず・Ｓ（カーリアンやスズカにも平気で喧嘩を売るランク。見ていた仲間の顔色が真っ青を越え真っ白になり、卒倒しかけても気にしない）

11・フィフスリーダー（前書き）

ちょっと更新が翌週にズレ込みました。
祭りとかで周りがバタバタしてたモノで。

11・フィフスリーダー

ヒナギクが緊張の面もちで病室を退室した後、俺とアオイは揃って大きな溜め息を漏らした。

『誰にも――スイレンやヨツバにもシャクナゲの事は他言しないように』

そう念を押されたヒナギクは、きっと俺やアオイが思っているよりも大きな重圧を感じているだろう。

そんな彼女の心情を思えば、溜め息くらいは漏れるというモノだ。

そうして罪悪感からの溜め息を2人して漏らし合うと、お互いの心情を見透かすように顔を見合わせて小さく笑いあう。

「ヒナギクには悪い事をしたな」

「えぇ……ですが、仕方ありません」

そう笑いつつも、そっと顔を伏せる辺りからアオイの心情が垣間見える。

まだヒナギクを――彼女の幼さを利用するような手を打つ事を後悔しているのだろう。彼女が適任と決めた自分を責めているのかもしれない。

なにせアオイは、ヒナギクを本当の妹のように可愛がっているの

だ。

アオイの関西事変以前の過去を俺は知らない。それを知っているのは、俺よりも古くからの付き合いであるアカツキくらいだろう。

だが俺が思うに、ひょっとしたらヒナギクを誰かと重ね合わせて見ているのかもしれない。

それは俺の邪推に過ぎないかもしれないが、そう思わせるほどにアオイはヒナギクを可愛がっているのだ。

班の為、そして黒鉄の為と言い聞かせても納得なんか出来なくて当たり前だ。

それでも俺に対して笑って見せる彼に、俺はなんの言葉もかけられず……

ぼんやりと今回の作戦――『狐狩り』と銘打たれた、内通者をあぶり出す作戦について話し合った昨夜の出来事へと思いを馳せていた。

「シャクナゲがここにいる……つまり療養しているという期間を、敢えて内通者に突かせようってのぁ分かった。コイツが動けないと見れば、なんらかの行動を起こしたくなるのは間違いねぇだろうからな」

「……」

部屋には俺とアオイ、カクリとさらにもう1人、今作戦について説明を受けたばかりの男の4人がいた。

黒鉄第五班『整備・警備班』リーダーのカブトである。

筋骨隆々とした体躯を持ち、その顔付きも精悍そのものだ。

だが上背だけはやや小柄で、カブト自身もそれをコンプレックスとしているらしいが、その存在感はそれを補って余りあるモノだと言えよう。

またそんな見かけとは違い非常に手先が器用であり、機械弄りや日曜大工のような作業が趣味であり特技という、『整備班』の長らしいスキルも持っていたりする。

病室でもいつもと変わらない一張羅のツナギを着ており、今日も様々な工具がぶら下げられたベルトを付けたままだ。

その性格も容貌通りに豪放磊落を地でいくカブトではあるが、今はちょっと困ったかのように顔をしかめ、俺とカクリを交互に見やっている。

巻かれたタオル越しに頭をボリボリ掻きながらも、なんと言ったモノか悩んでいるようなその表情は、ゴツい顔立ちのカブトには余り似合っておらず少し笑えた。

「笑ってんじゃねぇぞ、ったく。まぁた勝手な真似しやがって。一言俺に相談してからにすりゃいいだろうが」

俺の笑みの意味を正確に理解したのか、カブトはそう言うとプイッと視線をあらぬ方向へとそらす。そんな様子もまた笑いを誘ったが、その笑みをなんとか堪えて小さく謝罪する。

「……悪いな。でも今回はいい機会だったんだよ。カブトが俺達の作戦を知らなかったなら、他の班の連中が知るワケもないだろう？」

「ふん、だからって大したケガでもねぇ事まで隠して、こんな場所で隠れてコソコソやってんのは気にくわねぇ。……心配しただろうが」

そうそっぽを向くカブトには本当に深い安堵が見えて――俺は無言で小さく頭を下げた。

カブトが本当に俺の身を案じてくれていた、と分かるからこそ俺は素直に頭を下げたのだ。

五班のカブトは、黒鉄七班の班長では唯一力を持たない側の人間だ。

だが、それを引け目にも対抗心にも感じておらず、誰にでも平等に接する事を旨とする男である。

だからこそ他班の者からの評判も非常によく、コードフェンサー達からも一目置かれているのだろう。

単に古くからの黒鉄だ、というだけで班の長にと推挙をされたワケではないのだ。

またアカツキと俺が変種を、カブトが力を持たない人を纏めたからこそ、今の『2つの人間種が共存する黒鉄』があると言っても過言ではない。それは全黒鉄共通の認識であろう。

そんな古くからの付き合いであるカブトが今の俺の現状を知らないという事は、そのまま他の班の者達も『三班のシャクナゲ』のケガの具合が分かっていない、という事の証明になる。

「でもよ、俺にはやっぱまだ信じらんねぇな。あいつが裏切り者だなんてよ」

素直に謝られた事で機嫌を直したのか、あるいは元からそれほど怒っていなかったのか、カブトが首を捻りながらそう言うと、それまで黙っていたカクリがスッと一歩前に出た。

「……まだ決まったワケではない。……候補は他にもいる。……でもやはり彼女を外しては考えられない。……彼女は情報班の長。……六班の目をかいくぐって外と秘密にやり取り出来る者は……黒鉄にもそんなにいない」

「そうだな。最低でもコードフェンサークラスの力を持つか、六班の制限を受けない班長や副官でなければ難しいと思う」

俺がそう続けると、カクリはコクっと頷いてみせてからカブトへとその視線を向けた。

その視線を受け、カブトはやや怯んだかのように顔をひきつらせる。

……恐らくカブトはカクリが苦手なのだろう。直接聞いてみた事はないし聞いても否定するだろうが、その態度を見ただけでもそれが分かる。

当然カクリにもそれが分かっているのか、スッとすり寄るようにカブトへと近付いていく。

「……でもコードフェンサーの中で怪しいと思える存在は……調査だけでは確信が持てなかったアゲハと七班の連中だけ。……カブトの所のアゲハは……裏切り者じゃないよね？」

「あ、当たり前だ。アゲハのヤツぁ昔っから俺の右腕なんだぞ？もう1人のコガネのヤツは左腕だ！！黒鉄がどんなキツい時でも一緒

に頑張ってきたんだ。それに将軍の野郎にゃあいつも借りがある。関西軍につく事だけは絶対あり得ねぇ！」

すり寄る――というよりは詰め寄る小柄なカクリに、筋肉質のカブトが押し寄られる様子は滑稽で、思わず笑いがこぼれそうになるが、俺もそのカブトの意見に同意するように頷いてみせる。

「昔から神杜――カリギュラで関西軍に抵抗している連中は、何かしら将軍に含むモノがあるからな。もちろんそれだけで全面的に信用しろとまでは言えないけど、アゲハに関して言えば信用してもいいと思う。俺は五班班長であるカブトの言葉を信じるよ」

「そうですね。私もアゲハさんは良く知ってますが外していいかと思います。となると七班の連中ですが……」

俺に続いてアオイまでがそう言うと、カクリはカブトをジッと見やったまま口を開く。

「……七班は存在自体が謎。……スズカ以外のメンバーは私でも知らない。……黒鉄唯一の純正型であるスズカが……裏切っていたならコトだけど」

「ス、スズカは裏切らねぇよ。あいつはシャクナゲにでっけぇ借りがあるらしいんだ。あの堅物な性格からして、それを返すまで裏切りはあり得ねぇ！」

何故かカブトがカクリに尋問されているように見えるのは気のせいだろうか？隣で苦笑するアオイにもそう見えていたのか、彼は大きく肩をすくめていた。

「七班には他にコードフェンサーが2人いるけど、スズカには絶対頭が上がらない連中だからな。それに黒鉄にも関西軍にも興味がないのか、あの2人は必要最低限の事しかやらないんだ。そんな2人がスズカを裏切ってまで将軍についたとは思いにくい」

そう俺が言うと、興味を引かれたのかカクリが俺へと向き直った。その後ろでカブトが盛大に胸をなで下ろしていたけど……

「……七班。……本当に謎。……純正型にも興味あるけど……構成員すら分からない組織形態……そこに興味がわく」

「七班のメンバーについては、班長や副官クラスでも知る者は限られているみたいですからね。私もスズカさんと2人のコードフェンサーしか面識がありませんし」

アオイは別段変わりなく、カクリはやや興味深そうな様子で見てくるが、それに対しては肩をすくめるだけで返した。

スズカが表に出ない理由なんて他人が聞いて面白い話でもなんでもない。それを勝手に人に語るのは憚られるが、別にそれほど特別な理由があるワケでもない事を俺は知っている。

「スズカは純正型とか変種とかの前に女の子だからね」

だからそれだけを返すと、話を本筋へと戻す。

この『女の子だから』という言葉こそが、スズカが人前に出てきたがらない理由なのは語らないまま。

「アゲハではない。七班でもない。カーリアンは元から『クリシュナ潜入作戦』については知らなかったし、一班は今回の件で大ダメージを受けた。ナナシもコードフェンサー2人も大怪我だ。じゃあ

オリヒメの所か六班になるけど」

元より今回の作戦に参加した3つの班は、疑いから外して考えてもいいだろうと俺は思っていた。

一班だけがダメージを受けた形にはなったが、それは運が良かっただけに過ぎない。

報告によれば一班のナナシはかなり注意深く進行していたらしい。強行班である一班は、犠牲を出す事を前提とした前衛部隊だが、ナナシなりの予感か何かがあったのだろう。今回の作戦時は予定よりもかなり注意深く先へと進んでいたようなのだ。

結果的に、そのナナシの注意深さに二班と三班は救われた事になる。

先行させていた一班の索敵チームが敵の待ち伏せを発見し、やむを得ず戦闘に移行した。

その戦闘中に連絡手段を潰されはしたが、俺達後続は連絡の不通から進行をためらった為に、関西軍の待ち伏せの中に突っ込まずに済んだのだ。

まぁそのせいで一班は半壊の憂き目を見たのだが、待ち伏せを悟れたからこそ即座に防戦・撤退を選べたワケだし、半壊で済んだとも言えるだろう。

この状況からしても今回はまだ運が良かっただけなのは明らかで、ナナシの勘と判断に救われた感が大きい。

ならば裏切り者はこの3つの班にはいないのでは?そう考えるのが当然だろう。

一班内部にいたのなら今回も半壊程度で収まらなかっただろうし、二班はカクリ以外作戦を事前に知らなかった。そして我が三班は、

クリシュナの一番奥まで入りこむ予定だった班である。待ち伏せされたなら乱戦となるのは必定の班に、裏切り者がいたとは思いにくい。

俺なら、内通者はもっと安全な班に潜入させる。その方が結果的に長く役に立つと判断するからだ。

「まず四班のオリヒメさんですが、彼女は黒鉄を裏切る事はあっても、シャクナゲの事を裏切りはしないと私は判断します」

「……ムカつくけど……それには同意」

思考に耽る俺に、2人の副官がなんらかの意志の疎通をしあうと、意味ありげなその視線をこちらへと向けてくる。

カブトはそんな2人を脇から見ながらボリボリと頭を掻き

「モテる野郎は羨ましいね、えぇ!?色男?」

などと言いながら、白い歯を見せて二カッと笑ってみせる。

さすがに3人が何を言いたいかぐらいは分かったが、それでも俺は苦笑し

「ヒメは命を助けられた借りは、絶対返すっていつも言ってるからね」

とだけ返す事にする。

もちろん3人の言いたい事が分かった上で。

そして3人が呆れるのを承知でそう返したのだ。

それが『シャクナゲ』のスタイルだし、何よりオリヒメの為だと

思っているからだ。

……もちろん多少、自分の弱さに対する言い訳が混ざっているのも否定はしないけど。

3人の呆れたような表情には気付かないフリをしたまま、俺はそんな事を考えて小さな息をつく。

シャクナゲとしての自分の立場に逃げている……そう知っていて、そんな弱さや滑稽さに一番呆れているのが俺自身だと知っていたから。

12・フォックスハント（前書き）

今回は頑張って土曜日になってすぐに更新。
頑張って……というか今はまだ手直しだけなんですけどね。
知り合いから番外編……黒鉄が出来るまでとか、メンバーの日常みたいな話も書いてみたら?と言われ、それをちょこちょこ書いてみたりしてるウチに、気付いたら土曜日でした。
バトル小説風なのにバトルナシという革新的な小説（?）を脱却するいい機会かな、と。
読んでみたいか否かを感想にでも書いて頂ければ、こちらで載せるかどうかを考えてみます。

……お蔵入りな可能性が高そうですけど。
今回のあとがきは『カブト』

12・フォックスハント

「まぁ、お前らがなんで六班のヘルメスを疑ってるかってぇのは分かった。消去法でいきゃアイツが残るってくらいはな。でもよ、実際は裏切り者なんていなくて、単に関西軍が警戒の網張ってるトコに、たまたま突っ込んじまっただけかもしれないぜ？」

まだ納得がいっていないのだろう、わずかに顔をしかめながらカブトはそう言うと、頭をボリボリと掻きながら壁にもたれかかりながら俺へと視線を向ける。

そのカブトの言葉には口を挟まないまま、カクリまでが無言で俺をジッと見やってくる。

その視線の意味は明らかだ。

――あくまでもカブトの楽観的な意見を否定してみせるのは、三班の長である俺の役目って事、か。

その考え……あんまり二班副官としては目立ちたくないという保身的な考えが分かり、思わず苦笑が浮かびそうになる。

さっきまで散々目立っておいて何を今更、という感が否めない。

同じ考えが浮かんでいるのだろう、アオイも苦笑を漏らしていた。

まぁ、二班副官の立場からすれば、身内を疑うようなリスクが大きい――ありていに言えば他班から疎まれるような件では、極力消

極的な姿勢を取っておきたいのだろう。
カーリアンがその辺りに『かなり』無頓着な分、カクリは特にその辺りを気にしているように思える。

……まぁ、カクリの存在感自体は『あのカーリアンにも全く負けてない』し、二班の実権がカクリにあるのはすでに『公然の秘密』でしかないのだけど。

だが、俺が話を進めなければせっかくカクリ達が進めてきた作戦が無駄になる。それに俺には俺で少し思うところもあったから、苦笑と溜め息を同時に噛み殺した。
まぁ、カクリが俺に期待している役割は『カブトの説得』なのだから、ここでだんまりを決め込んだら後で何を言われるか分からない、というのも理由ではあったが。

「たまたま俺達が行動を起こす場所に、たまたま関西軍が警戒の網を張り、しかもたまたまヤツらは気まぐれで待ち伏せのような陣形を取っていて、偶然俺達がそこに突っ込んでいった……か？それはいくらなんでも無理があるだろう？」

内心の考えは出さないように気を付けながら、私情を一切挟まない口調でそう言うと、カブトの鳶色の瞳をジッと覗きこむ。

――お前の言葉は仲間を信じたいという甘さから出たモノじゃなく、冷静に班員や黒鉄に身を寄せる者達の事を考えた末の言葉なのか？

そんな意志を視線に込めて。
カブトは俺よりも十近く年長ではあるが、立場的には全くの同格だ。アカツキと並んで親友と言える間柄でもあるし、付き合いも同じぐらいには長い。

全く怯む事なくしっかりとその瞳を見据える。

こうなったら折れるのはカブトだ。カブトは決してバカじゃない。自分の意見の甘さぐらいは自覚しているだろうから。

「た、確かに偶然が過ぎるのは分からぁ。でもよ、漏れたのが俺達側――黒鉄内部からとは限らないだろうが？クリシュナのレジスタンス側からかもしれないぜ？」

「最初は俺もそう思ったよ。あっちにも話は通してあったしね」

カブトの意見に一応頷いてみせ、それでもカブトには口を挟ませないまま言葉を続ける。

「黒鉄の情報を売ってクリシュナ市民の待遇、生活環境の改善を将軍に交渉したんじゃないか……その可能性は確かにある。クリシュナの生活レベルは関西事変以前に比べればかなり低い。それに関西・中国全域がまだ紛争地帯でもある。少しでも改善を願い、黒鉄を交渉の出汁にした可能性はあるよ」

「だったら――」

「でも、いかにクリシュナのレジスタンス組織、『白鷺（しらさぎ）』が追い詰められていたとしても――あるいは早急な市民生活の向上を願っていたとしても、簡単に黒鉄を売って将軍と交渉しようなんて考えるかな？」

俺がこう思う理由は簡単だ。

説明するまでもなくカブトにも理由は分かるだろう。

理由は一つ、黒鉄がレジスタンス組織としては関西でも最大規模

の組織だからだ。
いかに破棄された都市だとはいえ、一都市そのものを拠点として持つレジスタンスなど他にはいない。それを何年も維持している組織なんて、この国全土を見渡してもあるかどうか。

それに白鷺にとっては、黒鉄は近くにある同じ目的を持った大組織であり支援団体でもある。
関係も良好そのモノだし、今回のクリシュナへの潜入も、白鷺がクリシュナ内部にいるから狙いやすいという点を考慮しての事だ。
また白鷺は黒鉄ほど古い組織ではないが、数年に渡り活動してきた組織であるし、向こうのメンツとも面識がある。

もっと言えば、白鷺が小さくとも組織を維持していられるのは黒鉄があってこそだと言える。黒鉄が近くのカリギュラを抑えていなければ、クリシュナには粛正の嵐が吹き荒れるだろう。
レジスタンスは狩り出され、疑惑が持たれただけの市民達すら捕らわれる事になる。
しかし、黒鉄健在の間に無闇やたらとクリシュナ市民の反感を買えば、それは黒鉄にとってのつけ込み所になる。今は白鷺にも黒鉄にも関与せずに従っている市民達も、恐怖と力だけではすぐに抑えきれなくなるだろう。
そうなる事を恐れればこそ、今の段階では白鷺へのチェックが甘い。つまり近くに黒鉄という癌があるからこそ、クリシュナにある膿は見過ごされているという事だ。

はたしてそんな友好組織を売ってまで、自分達の地元をメチャクチャにした『将軍』と交渉しようと白鷺は考えるだろうか？
ましてや将軍がまともに交渉してくれる保障などないのだ。単に自分の首を絞める可能性が圧倒的に高い。

「でもヘルメスだって簡単に将軍の野郎と交渉しよう、なんて思うヤツじゃないだろうが。アイツもかれこれ黒鉄に入って1年は立つぜ？」

「そうだな。確かにそれは間違いない。別に俺だって疑いたいワケじゃないんだ。それだけは分かってほしい」

そう答え、疲れを含んだ溜め息を漏らす俺に、カブトも溜め息を返しながら頷いてみせる。

「……わぁってるよ。本来なら情報班である六班、ヘルメスに調査を依頼するような件だ。でもそのヘルメスに一応容疑がかかってるから、黒鉄（ウチ）の切り札でもある三班のお前が代わりを勤めてる。面倒くせぇ上に嫌な役目を被ってくれてんだろ？」

そう言うとカブトは考え込むように口を閉ざした。

カブトはその顔つきからしても厳ついし、それに見合った豪放な性格をしているが、仲間の事は誰よりも信じる男なのだ。

それゆえに仲間へと疑いの目を向けるという行為にはやはり二の足を踏むのだろう。

「……白鷺にも当然調査は入れる。……もし白鷺が裏切り者だったなら……私が絶対に尻尾を掴んでみせる」

「私は三班にいなければなりません。シャクナゲの代わりを果たしているポーズが必要ですから」

黙り込んだカブトに言葉を重ねるようにカクリとアオイがそれぞ

れ言葉をかけるが、そんな2人には目も向けず――ただ顔をしかめ、虚空を睨んだままでぼそりと口を開いた。

「……確認しておきてぇ。これは三班と二班、連名での協力依頼か？それともシャクナゲ、テメェが呼び出したからにはシャクナゲ個人からの指示と見ていいのか？」

「……俺には個人も班も切り離しては考えられないよ。ただ――」

カブトの言葉に含まれた意味が俺には分かった。

だからこそ、『返すべき答え』だけは即座に返せた。

ただ俺の内にずっとある答えと、カブトの望んでいるそれとは違っている事が分かっていたからこそ、俺はその先を言いよどむ。

「ただ……なんだ？」

「ただ言えるのは、俺はアカツキの代わりになるつもりはないって事だよ。それだけは絶対変わらない。だから俺個人から一班長に対して指示という形は取れないし、取るつもりもない。俺は……アイツとは違うんだよ」

カブトは恐らく、まだ俺に黒鉄の行動を指針する立場に立って欲しい……そう思っているのだろう。

アカツキ亡き黒鉄を引っ張る役割を俺に願っているのだと思う。

『オメェしかいねぇ！アカツキがいない黒鉄を守れるのは……将軍の野郎を潰せるのは、シャクナゲ……オメェしかいねぇんだ！！』

そう言って俺を説得しようとしたカブト。

あくまでもそれを固辞した俺。

その記憶が甦り、俺はカブトと視線を交錯させる。

あの時――アカツキが亡くなった時ほどではなくても、1つの班が半壊、かなりの人数が死傷した今回の件は、黒鉄にとって大きな痛手だ。

アカツキが亡くなった時は、カリギュラ全土が絶望に包まれていた。アイツが病に倒れる運命を皆が呪った。

その悲しみと絶望の深さは、アカツキの存在に見合うだけの敵、つまり将軍を暗殺するくらいしかこれからのカリギュラを維持する方法はない、と俺に考えさせたほど――そしてそれを単独で行動に移させるぐらいのモノだった。

残念ながら暗殺自体は失敗したが、その行動により仲間達にゲキは飛ばす事が出来たのは幸いだったと思う。

今回はそこまで大きなダメージを受けていないが、黒鉄メンバーやカリギュラの市民達の精神に深い影を落としているだろう。

だからこそカブトは、この協力要請を『シャクナゲ個人から五班への作戦指示』である事を望み、大打撃を受けた黒鉄を引っ張る決意を望んでいるのだと分かった。

カブトは事あるごとにそれをほのめかしてきたからだ。

「俺はアカツキとは違う」

――俺はずっとシャクナゲ。ただの徒花（あだばな）。ずっと俺はただのシャクナゲなんだ。

そういつも自分に言い聞かせている言葉を脳裏で繰り返しながら……。

俺の考えは変わらない――それを示す意味でも、その想いにより強い意志を乗せて言葉にする。

「俺はシャクナゲ。ずっとこれからもシャクナゲ。それ以外には生きる道なんかなく、それ以外の道も望んでいない」

――そう、俺の本心……ずっと俺を縛ってきた制約を吐き出すように。

だが、それ以上はカクリの手前で口にする事も出来ず、無理やり口元を笑みの形に歪めて皮肉げな表情をカブトに向ける。

「もし、これが個人として――友人としての頼みだとしたら……指示って形じゃなく、依頼や頼みだとしたらカブトは聞いてくれないのか？三班と二班共同の動きだとしても、黒鉄の事を考えて動いているのは変わらないというのに？」

その言葉と笑みを受けると、最初は困ったように顔を歪め、次に悩むように顎に手をやり、最後に諦めたように苦笑いを浮かべてから、カブトはそのゴツい肩をすくめてみせた。

「……カッ、かなわねぇな。わあったよ、何もやらねぇとは言ってねぇ。ひょっとしたら考えが変わってんじゃねぇかって期待しただけだ」

そう言ってヒラヒラと手を振ってみせてから、カブトは真面目な顔付きで頷いてみせた。

「六班の動きは俺んトコが監視する。アゲハならヘルメスにゃヒケは取らねぇ。コガネはもう一人のコード持ち、『マルス』に付ける。

他のヤツにゃウチからも手練れを出す……それでいいんだろ？」

「あぁ。頼む。じゃあ作戦……『フォックスハント』について詳しく説明するよ」

フォックスハント……狐狩りと称した、裏切り者をあぶり出すこの作戦。

それは、考案から下準備までがカクリとアオイによるモノだが、ここは敢えて俺の考案によるモノかのように口火をきる。

カブトのような古参メンバーであり、発言力がある男を動かすには、同じ立場である俺でなければならないからだ。

そして俺の言葉に神妙に頷く3人を見ながらも小さく溜め息をつく。

アカツキ――あの無責任な親友さえいれば、俺がここまで苦労する事もないのに。

そんな繰り言を内心で浮かべながら。

そして……

――カクリには悪いけど、『狐』をあぶり出すのは俺なりのやり方をさせてもらうよ。

ま、しばらくは君の手の平で踊っているけどね。

俺は君にアカツキの代わり……『班の戦力の調査も調整もさせるつもりはない』から。

そんな事を素面で考えながら、チラッと無表情な少女を見やる。

まだカリギュラを任せるには幼過ぎる少女を。

12・フォックスハント（後書き）

カブト……黒鉄第五班の班長にして、シャクナゲと並んで古い『黒鉄』。２９才。
特殊な能力を持つ強力な変種達に混じり、唯一力を持たない側でありながら1つの班を束ねている。
小柄でありながら筋肉質。汚れの取れないツナギと作業ベルト、頭に巻いたタオルがトレードマーク。
大型機械や火器などの武器に詳しく、整備班としては実質一番役に立つ男。

シャクナゲ専用の超大型バイク（後の番外編に出ます）バルバトスや、数少ない装甲車なども専属で整備している。
またカリギュラの防衛や、内部の治安などを守る班の長でもある為、武器の扱いにも手慣れており、それの扱いの手ほどきをしたりもする。
実戦では主に副官である『アゲハ』率いる精鋭が前面に立ち、彼は後方からの支援砲撃を担当してはいるが、それはアゲハに『長は後ろでどっしりと構えているモノ』と言われている為。

『シャクナゲはガンガン表に出てるじゃねぇか』とブツブツこぼしながらもその言葉に従う辺り、副官である女性が怖いらしいというもっぱらの噂である。

また、二班副官であるカクリに見つめられると居心地が悪いらしく、苦手としているのも有名であり、『女性恐怖症なのでは？』という噂もある。

スキル

機械知識・A

火器取り扱い・B＋（一般の黒鉄……武器など握った事のない人間に教えられるレベル。爆発物の取り扱いにも長ける）

運転・B（自転車からショベルカーまで。建設重機はノリと気合いで動かすモノらしい）

整備・A

豪快・A－（ただし押しが強いというわけではない。むしろ弱い）

腕力・D＋（変種に比べれば低いが、普通よりは強いレベル）

女性恐怖症・B－（噂になるレベル）

仲間想い・A＋（カクリやアゲハには甘いと言われがち）

思い込み・B＋（仲間想いでプラス補正。独断専行を助長する）

独断専行・C＋（思い込みでプラス補正。昔からの黒鉄には標準装備？）

秘密・A（古くからの黒鉄であるだけに、アカツキやシャクナゲの過去やカリギュラが出来るまでの事、他メンバーの秘密なども良く知っている。その為カクリに目を付けられた……とは本人談）

口の堅さ・A（頑固ともいう）

13・ジ・　エンド　オブ　パーティー（前書き）

週末はバタバタしてるので金曜更新です。週1更新だけは維持します。

13・ジ・　エンド　オブ　パーティー

詳細な打ち合わせをする前に一旦休憩を挟む事となり、俺達はアオイが用意してくれた紅茶と干し菓子を食べていた。

現在の状況……黒鉄の財政、食糧の問題などからして、旨い茶葉や甘い菓子類、デザートなどは高級嗜好品と化しているが、アオイは一般的な食材と僅かな甘味料で、なかなかのお菓子を作ってみせる。

元の葉が持つ味の限界は超えなくても、安茶葉であれ作法に従って入れるだけで味も大分変わる。

紅茶のゴールデンルールを身に付けた黒鉄も、ここまで優雅な所作で給仕ができる黒鉄も、もちろんお菓子作りが得意な副官もアオイぐらいしかいないだろう。

これらは三班のメンバーからも非常に評判が良く、意外と甘党なスイレンなんかは『このお菓子を作れるだけで、アオイには副官の価値がある』なんて言っていたぐらいだ。

黙々と干し菓子を口に運ぶカクリも、滅多に口に出来ない甘いお菓子に、口元を僅かに緩め口一杯に頬張って食べていた。

見かけとは違い、これまた意外と甘党だったらしいカブトも、先ほどまでの話し合いでの雰囲気とは違い、上機嫌で干し菓子を口に運んでいる。

「カッ、アオイぃ～！ウチのヤツらにもその菓子、いくつか包んでやってくんねえか？」

「……カーリアンにも」

そうねだる2人にも穏やかに笑ってみせながら、小さくアオイは頷いていた。

そんな三人の様子を見ながらも、内心では自分の副官の気配り――場の作り方に、俺は改めて感嘆の念を抱く。

この気遣いこそがアオイのスゴい所だと実感させられたからだ。

絶妙の間で雰囲気を和らげる方法を知っている。その事の重要さを知っている。それがいかに難しいかを知っていて、実践してみせるところがアオイの手腕だ。

場を引き締めるだけなら誰にでも出来る。

簡単な事だ。小難しい顔をして、大袈裟な所作を心がけてればいい。

だけど、それだけでは連帯感は生まれない。

実のある話し合いは出来ないのだ。

その合間の息抜き……ちょっとした間をとる事こそが大事なのであり、それをアオイは知っているのだろう。

「シャクナゲはもういらないんですか？残りはカクリさんとカブトさんに包んで渡しちゃいますけど……」

「んっ……、もういいよ。ありがとう、アオイ」

どういたしまして、そう笑う自ら片腕たる青年に、色々な意味を込めて笑いかけ……

俺はお茶を啜った。
ここからの話し合いが重要なんだ、そう自らに言い聞かせて。

「まず今回の作戦のキモは、ずっと反将軍・反関西軍を掲げている俺が戦線を離脱している、という事。だから残念だけど俺はここから動けない」

「おめぇはヤツらにとって目の上のコブだからな。それがいないってだけで、さぞ動きやすいだろうさ。んで？そっから具体的にゃどうすんだ？俺んトコが6班を監視するのは構わねぇ。どうやって『狐』共を動かす？」

裏切り者を作戦名から『狐』と呼んだカブトは、つまらなそうに目を細めながらチラッとカクリへと視線を向ける。
その辺りは俺ではなく彼女に聞いた方が早い、とカブトも理解しているのだろう。
つまりは裏工作は彼女の分野、そう認識されているという事だ。

「……私が白鷺の調査を担当する。……アテならある。……絶対に裏を取ってみせる。……もちろん白鷺はシロだと思っているけど……その確証が得られなければ……それはそれで報告する。……その間に――」

「その間にヒナギクを通して、三班のメンバーに俺が重態だとほのめかす噂を流す」

俺へと視線を向けてくるカクリの言葉を引き継ぎ、俺がそう言うと、カブトは小さく首を傾げてみせた。

「わざわざヒナッコを使うのかい？スイレンじゃなくてよ」

その疑問は予想出来ていた。

何せスイレンとヒナギクでは発言の重みが違う。

表の副官がアオイだとするなら、裏の副官はスイレン。

アオイがシャクナゲの右腕だとするなら、スイレンは左腕……そう認識されているからだ。

そんな『水鏡のスイレン』のネームバリューが、班長達のそれにも負けないモノであるのに比べれば、『音速のヒナギク』の知名度は劣ると言わざるをえない。

また実戦経験の面からしても段違いである。

それを指摘したいのだろう。

そんなカブトの疑問には、俺に代わりアオイとカクリが無表情を装って……あるいは無表情のままで答えた。

「スイレンを使って噂を広げるつもりはありません。彼女はちょっと有名過ぎます。それだけに周りから裏がある女性と見られがちですから。もし彼女が動いたならそれだけで警戒されかねません。そのせいで『狐』が動きを見せなければ、シャクナゲ離脱案はこちらの士気を下げるだけになりかねません」

「……だからヒナギク。……彼女にはシャクナゲが重態だと吹き込み……その上でそれを口止めをする。……そうすれば彼女はそれを意識し過ぎて……それが勝手に噂となる。……カーリアンも同じ。……2人共分かりやすいタイプだから」

そう淡々と語る2人。だが、2人共冷静そうな見た目ではあるのに対し、その内面は正反対であろう。

カクリはカーリアンを利用する事を躊躇わない。彼女の性格を読み、それを逆手にとって行動指針を決める事が別に悪い事だとは思っていないのだ。

結果的にカーリアンさえ傷つかなければ、彼女自身を利用しても良しとしている節がある。

もちろん自分以外の誰かが、カーリアンの性格を利用する真似をすれば、烈火の如く――いや、冷たい怒りの炎を燃やすだろうが。

それに対してアオイは、仲間に対してそう言った割り切りが出来ないクチだ。

ヒナギクを結果的に欺く作戦を、心情的に納得は仕切れてはいないだろう。

2人とも参謀向きな性質と、班長補佐である副官に見合う手腕を持ってはいるが、そんな性格の違いからして補佐のスタイルは全く異なると言える。

カクリが謀略を得意とし、裏で色々と動いて敵も味方も欺き、自班の優位を築くタイプなら、アオイは内政に力を入れ、味方の地力を上げる事で敵に付けこませないタイプと言えよう。

「なるほどな。つまり『口止めされて、不自然な態度が滲み出るヒナっこ』から、噂をひろげようって事かい。けどよ、それだと確実じゃねぇし、時間がかかり過ぎんだろ？」

そんなカブトの疑問はもっともだが、その辺りに抜かりがある2人じゃない。

「もちろん噂の下地はこちらで整えます。すでにシャクナゲが何日も入院しているのもそうですし、私以外が面会出来ないのも噂を助長するでしょう」

「……それに明日……カーリアンを1人で班長会議に出すのも一手。……カーリアンは……ライバル視しているオリヒメに勝ち誇って……シャクナゲが『二班本部に』入院している事を吹聴する。……当然他の班長ないし、供の副官の耳にも入る。……ヒナギクの態度は……その情報の裏付けになればいい」

そう淡々と語るカクリ。その言葉は推測を多分に含むモノでしかないが、恐らくその考えは間違っていない。

カーリアンに悪気はないのだろうが、彼女は平然と『シャクナゲがずっと入院している』、『第二班本部で面倒を見てやっている』などと言いまわるだろう。

そこに裏はない。彼女はそういったところがあるだけだ。後先考えきれていないというか、少し目先に捕らわれがちというか……

カーリアンは決して馬鹿なワケじゃないんだけど、抑えが効かず、思った事や言いたい事が我慢しきれないところがあるのだ。

その場にヒメ――四班のオリヒメがいたら、対抗心からそれにより拍車がかかる事だろう。

彼女を少しでも知る人間ならば、そんな彼女の態度に裏があると思うモノはいまい。

カーリアンはそんな裏工作が出来る人間ではないし、もし何かを画策していたら、即座にバレる分かりやすい性質だ。

そんな裏工作は、副官である『腹黒カクリ』の専門……そんな認識も、カーリアンの言葉の信憑性を増す事になる。

「……何か失礼な事を考えられた気がするけど……まぁいいわ。……ともかく明日はカーリアンだけを会議に行かせる。……私は『どうしても外せない用事』がある……そう言う事にする。……そうね、一班の連中……先の作戦の怪我人の面倒でも……見ている事にする。……だから明日のカーリアンは……すっごく舌の滑りが滑らか」

チラッと俺を見てくるその瞳は、『あくまでも冷たい輝きを放ち』、それに小さく肩をすくめてみせる。

「そうなれば『狐』は動き出すだろう。いつまでも俺が動けないワケじゃないし、一班もやがては機能を取り戻す。『不死身』と言われるナナシならもう回復してるだろうけど、他のメンバーはそうはいかない。今が一番のチャンスだと思うハズだからね」

「……強行班と決戦班の2つが動けない、か。確かに『狐』や将軍からしたら魅力的だな。それに釣られて、動き出した所を――」

「押さえられたらいいけど、それが無理だったなら叩く」

この状況で釣られないワケがない……とは思う。もし釣られないとしたらよほど注意深いか、あるいは単なる内通者ではないか……もしくはここにいる誰かがその『狐』だという可能性もある。

そう思えるほどに状況は作りこまれていた。

俺の負傷からここまで裏をかいた状況を作った少女を見ながらも、俺は小さく溜め息を漏らす。

それでも2つほど問題があるとすれば、まずはカブトの五班や我が三班、カクリの二班にも『狐』の手の者がいる可能性だ。

まぁカブトには絶えずアゲハかコガネが付いているだろうし、カクリはいつでもカーリアンにくっ付いているからまだ安心ではある

が。

かの『幻影』は、カブトの部下らしく身内を守る時にこそその力の真価をみせるし、その教えはコガネにも受け継がれているだろう。

カクリに手を出そうとしたなら、それこそご愁傷様としか言えない。

彼女に傷一つでも付けたなら、カーリアンの怒りの炎に一欠片の炭になるまで黒焦げにされる事だろう。

そしてアオイに関しても心配はしていない。

この三人に関して言えば、よほどの手練れでなければ確実に返り討ちに出来る。

だが、他のメンバーはそうもいかない。

部外秘なのだから他に漏れる心配はそう高くはないだろうが、その意味でもこの策は秘密裏に進める必要がある。

次の問題は――

「……シャクナゲは大人しくしてなさい。……もし抜け出したら逆さ磔だから」

「分かってる。分かってるからそんな怖い事を無表情で言うなよ」

当分は暇って事だろうか。

俺は相当情けない表情をしていたのか、アオイがおかしそうに笑い、カブトもそれにつられて――

今日の話し合いは終わる。

最後には了承してくれたカブトに、いきなりこんな作戦を持ちかけた事を何度も謝って。

それと、利用する事になった『ヘルメス』に対して僅かな罪悪感を感じたまま――。

番外編・カクリの考察《世界情勢編》（前書き）

今週は二回更新です。
番外編が混ざってはいますけど……。
来週全体的に手直しに着手します。

番外編・カクリの考察《世界情勢編》

私がこの考察をするに辺り、最も興味を惹かれ、好奇心が刺激される事柄はと言えば、やはり今の世界情勢を彩る歴史ついてであろうと思う。

この世界の現状。

この世界の裏側。

この世界に至るまでの近代史。

その中に埋もれたワード……変種、ヴァンプ、黒鉄。

それら全ては、１つの出来事……いずれは《人という種》に起きたであろう事象が元にある。

《進化》。

あるいは《退化》。

進化と退化は対語ではないから、我ら人種に近年起こった変化は進化とも言えるし退化とも言えるであろう。

人も生物である限り、いずれは起きえた遺伝子レベルでの必定が今の世界を象っているのだ。

変種……ヴァンプ、あるいはネオ《新人類》。

この《変化した種》が人という種の次にある存在なのか、それとも終わりにある種なのかは分からない。

だが、この《進化》には2つほど懸念がある。

1つ目。この《進化》は一気に飛躍しすぎている事。

進化というものを突き詰めて考えれば、これは実にゆるりと進むモノであるべきで、一足飛びに進むモノでは絶対に有り得ない。

ゆるりと進化あるいは退化し続けて、人という種は――いやあらゆる生命体はあり続けているのだから。

だが現在変種と呼ばれている種の出現は、今までの進化の過程では類を見ない形で世界に現れた。

いきなり現れ、『しかも爆発的な速さで世界中に増えていっている』のだ。

これが何を意味するのか？

単なる進化なのか、あるいは別の何かなのか……

もう1つの懸念は、最初のそれに比べても最悪にタチが悪い。破滅思想に近いかもしれない。

私は基本的にネガティブな思考の持ち主なのは自覚している。

考察者としてはそうあるべきだと思うし、策を練る際も最悪を予想して施すべきだ。だからこの性格は、きっと私には必要不可欠なモノで、欠点と言える部分ではないとは思っている。

だが、この懸念を単なる妄想、いつもの後ろ向きな思考の延長だとは笑えない。

進化の先にあるモノ――それを考えれば、さすがの私も震えが走るのを禁じえないのだ。

進化の先にあるモノ、それは『死』であり『滅亡』であり『無』なのだから。

それが遺伝子に組み込まれた自殺因子（アポトーシス）により引き起されるモノなのか、あるいは他の事象によるモノかは分からない。
だが、生命体の過度な進化は、いずれ確実に自らの種の死滅へと繋がっていく。
それは今更、進化論などを持ち出さずとも分かり得る事だろう。

もし我ら人の変種が、人の最終進化系だとしたなら、その先にモノは……。

私はカクリ。世界を見るには小さくて、まだ幼い考察者。
世界を憂う気持ちなどより、身近な者の安泰を願う女。
後ろを向き、前を見て、ただ行く末を案じる者。
その為に世界の全てを知る事を願ったただのカクリだ。

現在の我が国の情勢は、そのまま世界情勢の縮図として当てはまる。
世界では中心と呼ばれた大国が最初に倒れ、我が国では国の中心である首都が落ちた。
そこから関連のある国、地方へと混迷が広がっていったのも全く同じだと言えるだろう。

――そしてその最初の混乱の中心に、どちらも1人のヴァンプがいたという事実もまた……。

世界の中心と呼ばれた国では、若くしてその国の軍高官まで登りつめ、反乱を起こした『総統・リシャール・ベルナンド』が。

我が国には関東地方の人々……その中でも現状に様々な不満を持つ変種、特に若い少年少女達を纏め、国の中央を力で制圧した『新皇』がいた。

それら最初のヴァンプ――『ヴァンプの始祖』とも言える存在の起こした混乱は、加速度的な速さで各地に飛び火し、今の世界と日本がある。

残念ながら『リシャール・ベルナンド』については、海外の情報も入らない現状では情報が少ない。

それゆえに『新皇』について考える事によって他国――世界情勢を想像してみる事とする。

新皇……その容姿はまだ若い少年、あるいは少女だとも言われ、ある筋では老人だとも言われるほどに、その名前が知れている割に謎が多い人物。

我が国最初の『ヴァンプ種』であり、この国の『ヴァンプのオリジナル』とも言える個体なのに、彼――あるいは彼女の情報は驚くほど少ないのだ。

誰もが……そう力ある変種達ですら、世界の流れに身を任せていた時勢に、最初に力を示して蜂起した人間。

最初に行動を起こすだけの自信と、能力を持つ変種という事だと思われる。

それだけでも『新皇』がいかに強い力を持っていたかが窺えるだろう。

不安定な情勢の中、それでも平和に生きていた人々を、力に溺れ

た『ヴァンプ』へと変えるほどの力を持っていたのだ。
その能力だけではなく、多数を惹きつけて止まないだけの魅力も持っていたハズだ。

混迷する世界情勢だったとはいえ、短期間で1つの国の中枢を潰し、人々を掌握・支配したのはいかに強大な変種とて驚くに値する。
圧倒的な能力と、人を惹きつけてやまないカリスマを持つ存在だという事は間違いない。

恐らくリシャールもそんな存在なのであろうと私は考える。
軍部を掌握した手腕と、反乱へと導いた絶大なカリスマ。
そしてそこに、恐らく強大な変種としての能力が加わっていたのだと思われるのだ。
地位という武器、名声という後ろ盾がリシャールにはあったが、新皇にはリシャールが起こした反乱に対する『人々の不安』という情勢が味方した。

――だが逆を返せば、『たったそれだけを後ろ盾に、国を崩壊に導いた』という事である。　それだけでこの2人が似ている、と感じるのは穿ち過ぎた意見だろうか？

またこの新皇だが、現在は死亡したとも病で寝込んでいるとも言われている。
あくまでも噂の域を出ないが、新皇が起こし率いている人々の集団が、正式に関東軍（神皇軍と自称する）として成立したのと同時期より、新皇は公の場には姿を見せていないらしい。
現在では関東以外の各地方勢力間で、暗黙の内に領分を取り決め

不可侵条約を結んではいる。だが、地方勢力でも最大勢力である神皇軍はそれに対しても沈黙を守っているらしく、『新皇死亡説』が流布する要因となっているようだ。

この新皇……我が国最初のヴァンプについて分かれば、様々な疑問にも答えが見つかるのだろうが、すでに新皇の存在そのものが伝説化している節があり、いかな私とて調査は難航を極めていると言わざるを得ない。

今では『新皇』という言葉自体が、関東軍の上層部――かつて新皇の側近だった者を指す言葉となりつつあるくらいだ。

そんな彼について分かっているのは、まず『この国の始祖である事』、『姿は分かっていない事』、『強大な変種である事』、そしてそこから考えるに恐らくは『純正型』である事だけである。

純正型……我が黒鉄でも今は『スズカ』1人しかいない希少発生型の変種。

純正型は、かつての黒鉄を見渡してみても『アカツキ』しか他にはいない。

ヴァンプでは、将軍もマスターシヴァも純正型だ、とかつてシャクナゲは語っていた。

2人ともに対峙した事がある彼が言うのだから、恐らくその言葉に間違いはないだろう。

そこから考えても、支配者層はほとんど『純正型』と考えても間違いないと思われる。

なにせ彼らの力は圧倒的『過ぎる』。

スズカは間違いなくシャクナゲやカーリアンを抑えて『黒鉄最強

の変種』であるし、アカツキは黒鉄を起こしまとめ上げたリーダーだ。

彼らは、その能力により出来る事が他者よりも断然大きいのだ。

純正型は自然発生型と同じく生まれながらの変種である。

生まれながらに能力を自然に持ち、高い身体能力を持つ。

この2つの違いはただ一つだけ。

『人とは違う姿、違う箇所を外観に持つ事』――それだけだ。

アカツキの特徴は私も知っている。黒鉄に来た時――つまり最初に会った時に見せてもらったからだ。

彼の金の瞳の虹彩が幾重にも重なっており、その黒目部分は円が幾つも重なったような瞳をしていたのを。

『君達には特別に見せてあげる』

そう悪戯っぽく間近で笑っていた顔は今でも覚えている。

不思議な色彩をした瞳と、整い過ぎる余り妖艶とすら表現できる顔立ち。そのルックスに反比例した、幼さが残る笑みが特徴的だった。

もう1人の純正型……スズカの身体的特徴については分からない。きっとどこかにあるのだろうが、彼女はそれをひけらかしたりしないのだ。分かるワケもない。

そんな下手をすれば見えないような小さな違い――でも人によっては大きな違いと感じるそれが『純正なる変化した人種』の証なの

である。　つまり圧倒的な能力を持つ最強の変種達の証だ。

また私の調査の先にはいつでも――どんな調査をしていてもアカツキの名前が一度は出てくる事も挙げておく。

シャクナゲと並んで、我が黒鉄最初のコードフェンサー『アカツキ』。

最初のコードと最初のヴァンプ。黒鉄の始祖とヴァンプの始祖。

そして死亡説が流れている最初のヴァンプと、死亡した最初の黒鉄。

……この符合はあくまで偶然だろうか？最近はついそんな事を考えてしまう。

私の周りの環境は、彼ら2人に大きく影響されているからなおさらそう考えてしまうのだろう。

それが分かっていても、そんな考えが浮かんでしまうのだ。

出来る事なら彼と一度じっくり話してみたい。彼と話せれば様々な疑問についての答えが得らるだろう。

それが叶わぬ願いなのは分かっているけど。

話を考察に戻そう。

人間社会において重要なファクターを占める『文化』、あるいは『文明』についての考察に移る。

ヴァンプの誕生以来、人類の文明レベルは極端に後退した感があ

る。
今までの人間種よりも優れた知力や身体能力、あるいは空想の産物でしかなかった力を持つ『変種』が誕生したのに、文明レベルが下がった理由……これについて私なりの解釈を記す。

現在の我が国の現状から言えば、ガソリンエンジン等や銃火器、火器管制系には大きな衰退は見られない。
だが電気や水道、通信等のライフラインは混乱期に分断されたままとなっている。
また各地に勢力が乱立した事により、地方それぞれの工業や特性までもが分断されたままである。

恐らくこれは我が国だけに言える事ではなく、世界全体に当てはめて言える事であろう。
また各地で起こるの紛争により、生きる為に必要な最低限の文明レベルを維持する事すら困難な事が理由として挙げられる。

また変種が特殊な力を持ち、高い身体能力を持つ事も理由だと私は考える。
変種の力には電子機器を操るモノ、銃火器などよりも強い攻撃力を持つ者がいる。また進路を制限される車などよりも早く動ける者もいる。
つまりは下手な道具、文明の産物などより、変種個人の力が最大の力となりうるのだ。
それゆえに支配者層である『元変種』……ヴァンプは、文明レベルの維持・向上には興味を示さず、最低限のレベルより動かないのだ。
ヴァンプ共は勢力拡大にしか目を向けず、民衆はそれに抗う術を持たない。

文明レベル向上を目指そうにも、施設や資源は支配者層に抑えられ、その支配者達も自勢力の維持と拡大にしか目を向けず、娯楽や芸能・芸術などは底辺レベルから動かない。
いずれはこの国も落ち着き、文明レベルもかつてのそれに近くなろうが、この国だけが落ち着いても次は他国からの侵攻を受ける危険性がある。

……世界の混迷はまだまだ終わりが見えそうにない。

新皇が――関東軍が順調に支配地域を拡大していれば、ひょっとしてとっくにこの国は落ち着いていたのだろうか？
あるいは各地方軍が連合して関東軍に対抗し、より激しい戦火がこの国を焼いただろうか？

そんなｉｆの世界に想像を馳せるのも、考察者としては知的好奇心がくすぐられる。

だがどんな可能性の世界であれ、我が黒鉄は立ち上がっていただろう。それだけは確信が持てる。
アカツキには正直様々な疑惑を持たざるを得ないが、彼がどんな人物であれ、１つだけ不動の功績がある事は私も認める所である。

黒鉄にシャクナゲを引き入れた事。
私やカーリアンにはない『求心力』を持つ男を、黒鉄に引き入れた事。
純正型である将軍やマスターシヴァを恐れない男を仲間にした事だ。
彼がいるならばどんな可能性の世界であれ、黒鉄はヴァンプに抗

うレジスタンスであり続けたであろう。

これは考察者にはあるまじき事かもしれないが、絶対の確信を持って言える。

次の考察では関東軍、各地方軍、日本、そしてこの3勢力から独立するレジスタンス『黒鉄』……中でも『シャクナゲ』と『将軍』について考えてみようと思う。

１４・ルビーハート（前書き）

ちょっと前にアクセス数が５０００を越えてたみたいです。
いまいち見方が分かってなくて、あんまり見ないんですけど……。
見てモチベーション上がったり下がったりしそうで嫌ですし。

まず、ユニークとはなんですか？とそこから分かってません。
当然、ＰＶは携帯の方が多いのに、ユニークはパソが多いのかが何故かも分かってません（汗）

なにしろ５０００、ありがとうございます！

14・ルビーハート

アオイが退室した後……
俺はなんとはなし無機質な天井を見上げていた。
天井のタイルが剥がれ落ち、コンクリが剥き出しの天井。
装飾1つない、建物に必要な耐久性を残しただけの室内。
快適さなど求めていない部屋。
ただ大きな窓と、外からの視界を遮る布切れ……カーテンと呼ぶのもおこがましいそれがあるだけの寝室。

ここは病室としては落第点だ。
いっそはっきりと失格だと言ってもいい。
寝室としても及第点はあげられない。
少なくとも『昔』の生活を知るモノ――革命前を知る者からすれば、この部屋は物置よりも上等……といった評価しか与えられない部屋だろう。
まぁ、物置よりも上等な点はと言えば、無駄に物が置かれていないという事でしかないけど。

「……今日は嫌な夢を見たくないよ」

それでも今の黒鉄の現状からすれば、この部屋でも上等な部屋なのだ。

風が入る窓がある。
ベッドもあるし、それにかけられたシーツも綺麗に手洗いされてある。
部屋がちゃんと部屋の形をしている。
何より雨漏りしない屋根がある。

これだけで上等な部屋の条件は満たされている。
濡れて風邪をひく心配も、凍えて眠れない事もない。
風邪なんかひけば、今の世じゃ普通に死に関わる。
なにせ薬なんてモノは備蓄が少ないリストの筆頭だから。

酒などのアルコールですら、嗜好品ではなく医薬品。
そこらに咲く雑草ですら血止めや腹下しの薬に使われている。
そんな現状を考えれば、この部屋がどれだけ恵まれてる事か……。

「今日はもう夢を見たくないよ」

だからこそ――こんな部屋にいるからこそ、眠りの中でも安息を望む。
律儀に何日かおきにやってくる悪夢に、今日も震える。
動き回ってさえいれば、考えなくてもすむような事に怯えてしまう。

無骨だけど、安全で暖かい部屋。
暖かい余韻が残る部屋。
それが今の俺を弱くしているのが、はっきりと自覚出来る。

なんて皮肉なんだろう、そう思う。
死線に立っている時よりも、命をかけて戦っている時よりも、ただ寝転がっている時の方が心が休まらないなんて……。

それは、世界が壊れているからそんな風になっちゃったのか、はたまた俺が壊れているからそう感じるだけなのか、はたまたその両方なのか――

『シャクナゲは休んでいて下さい。後は私やカクリさんでやっておきますから』

『……いざとなれば……スイレンにも事情を話す。……あなたは安心して惰眠を貪ってなさい』

そう純粋に気遣ってくれた仲間と、無感情な少女の声が脳裏に浮かぶ。

その2人が向けるのは、シャクナゲと呼ばれる俺への信頼の瞳。

カクリはきっと俺が素直に彼女に任せっきりにする、なんて事を思っちゃいないだろう。

それでも何も言わないのは、俺が自分達に不利を働かないと信じているからだ。

それは信頼、と言ってもいいとは思う。

それが……俺が不利を働かないなんて他者が確信出来る事自体が、いかに歪んでいるかという事にはきっと気付いていない。

そんな信頼を寄せられるシャクナゲが、いかに歪んだ存在かは俺（シャクナゲ）自身しか知らないと思う。

歪んでいるからこそ今の『シャクナゲ』が――死を恐れない最初の黒鉄（シャクナゲ）がいる事には誰も気づかない。

それが幸せな事かどうかは、当の俺自身ですら分かっていないくらいだから。

知られたくない、と思うからには知られていない今が幸せなのか……それとも逆なのか。

様々な思いが入り混じり、密かに開始した『狐狩り』。

その狐と俺にどれほどの違いがある？人を殺めた者と人が死ぬ理由を作った者の罪の違いは？

狩り出す側がそんな事すらも分かっていない。それがまた滑稽で……愚かだ。

「……もう俺を苛むな。分かってる。俺は忘れてなんかいないから。ずっと背負っていくから……」

そんな後ろ向きな事を考えていると、決まって奪ってきた命と、多くの未来が恨みがましく脳裏で黒い鎌首を持ち上げる。

それは思考を呪縛するように俺へと纏わりつき、心をゆっくりと無彩色へと染めていく。

そんな空虚な心には、決まって無機質な歯車が軋む音が響きだす。

カラカラと……

脳裏に半透明な歯車が埋め尽くす灰色の世界が広がっていく。

ガラガラと……

半透明なそれは、小さな歯車（それ）から大きな歯車（それ）へと動きを伝え、ゆっくりと無限の荒野を軋ませる。

ゴロゴロと――――

「もう夢は見たくない」

その歯車達が奏でるモノは、無限大の空虚。
それが象るのは、かつて見た世界で、今も身近にある世界。
不可視の歯車（ギア）達の合唱は、そのまま訴えへと姿を変え――

「もう俺を苛むな。分かっているから……忘れてなんかいないから」

今日も夢を見る事に対する恐怖を植え付ける。

カラカラと周り続ける音は、悪夢への前奏曲（プレリュード）。

ガラガラと軋む音は、夜毎に『忘れるな』と囁く夜想曲（ノクターン）

ゴロゴロと蠢く声は、罪を糾弾する死者達の歌（レクイエム）

そして今日も俺は悪夢に苛まれる。
シャクナゲと言う『偽善者』を呪う無限大の悪夢に――

＊＊＊＊

「ふっふ～ん♪」

思わず鼻歌を口ずさむ。

気分の良さが溢れ出そうになる。

ついさっきまでやっていた班長会議は、私的には上首尾に終わった。

何を話していたかはよく覚えていない。どうせ一班と三班の現状に危機感を覚えた民政部の連中が、考えるだけ無駄な対応策でも決めようと話してただけだ。

それでも『上首尾』だったと確信できる辺り、かなり上機嫌なんだと自覚できた。

まぁ、民政部の苦労も分からないでもない。

黒鉄に保護を求めた者――戦う力を持たない者、戦いを嫌う人々を纏めるのは、大変だろうなって事ぐらいは。

それらの人々に仕事や復旧作業を割り振り、管理するのも面倒だろうし、そんな人々と『黒鉄』の間に立つのが頭の痛い作業なのは、彼らに興味がない私でも分かる事だ。

でも正直な話、民政部が黒鉄（こっち）の事に色々と口を出すのはいい気分がしない。

あたし達なりの理由がそれぞれあるにしても、あくまで黒鉄は『有志による自警団』なのだ。

戦いを本職とする『軍人』でもなければ、戦う事により報酬貰う『傭兵』でもない。

確かに食事や住居などは優遇されてはいる。

服などを新調する為の資金も給付される。

でもそれだけだ。『命』に見合うほどのモノを貰っている覚えな

んかない。
それでも別段不満がないのは、あくまでも個人の意志で『黒鉄』に入ったからだ。別に戦えない人々の為に戦っているワケでも食う為でもない。
もっとはっきり言えば、『民政部の下についたつもりなんかこれっぽっちもない』のだ。

自分達の居場所を守る為に戦い、共に戦う仲間の為に命を張る。他人の為じゃないとはいえ、仲間の為になら身体を張って戦うのも悪くない。
それに合わせて戦う力を持たず、戦う勇気が出ない人でも、自分なりに頑張る人々を仲間だと思うようにしてはいる。
シャクがあたしにその考え方を教えてくれたからだ。

だからその為に命を張る事は我慢出来る。
でも、それを他人に強要されるいわれなんかない。それを指示される事は我慢できないし、おかしいと思う。

だから本来は、シャクに頼まれでもしなければ、今日の会議には出るつもりはなかったのだ。
つまらないのが目に見えていたし、民政部の言い分が色々とムカつく事も予想出来たから。
だから会議中の話は半分――ほとんど聞き流していたのだ。

大怪我したらしいのに早くも復活していたナナシが、隣からなんだかんだと色々話しかけてはきたけど、それもまたついでに聞き流していた。

別にナナシが嫌いなワケじゃない。
ナナシも楽しいヤツだしいいヤツではあるけど、少し抜けたトコ

があるのと、ガリガリな見た目に反して暑苦しい性格なのがマイナスだ。
シャクにしょっちゅう絡むのも頂けないし、シャクが律儀にその相手してやるのを見るのが少しムカつく。

まぁなにより、その時は正面に座る四班の『陰険氷女』との睨み合いに忙しかったのだ。
その睨み合いが『上首尾に終わった』というのが、今日の会議の成果だろう。

本当にアイツ――オリヒメとは気が合わない。
元々同じ班……シャクの下にいた頃からの知り合いであり、ほぼ同時期に黒鉄に来たという経緯まであるのに、アイツは初対面から今現在まで、一貫してあたしを目の仇にしている。
あたしもそれに変わりはない。

なんせ初めて会った時から『あ、コイツとは絶対仲良くなれないな……』と思っていたし、その勘は今の今まで外れていないのだ。
そして今後外れる事もないと思う。

なにせアイツの喋り方が嫌いだし、その澄ました視線も気にいらない。『ヒメ』なんて班のメンバーに呼ばせている辺りなんて最悪だ。
今後どれだけ経っても、どんな天変地異が起こっても、そんなオリヒメを好きになる事なんて有り得ない。

そのオリヒメが――いつも高飛車な冷血女が、今日はあたしを探るように、幾分悔しそうに見ていたのだ。

その理由ももちろん分かっている。
それがあたしをさらに機嫌よくさせた。

『スイレン。今日の会議はあなたが出席しはるんですか？シャクナゲはどうしはったんです？』

『……シャクナゲは――』

『今は療養中よ。二班本部のスウィートで寝てるんじゃない？『面会謝絶』だから『あたしかカクリ以外』はちょっと会えないけど』

オリヒメの言葉に答えようとするスイレンを遮って、あたしがそう言った時に、今日の会議の要点は終わったようなモノだ。
あたし的には……だけど。

『はぁ……まぁ、そういう事らしいですね』

そう言ったスイレンの声に、多分の疲れが含まれていたのは気付かない事にした。
『あんまり広言しない方がいいんだろうな』と、昨日まで思っていた事も忘れよう。

……あと、あたしの言葉を聞いて、民政部の連中の顔色が真っ青を通り越して、真っ白になったのもスルーする。

『ドジ踏みやがって。いい様だな、あのスカし野郎』

そう笑っていたナナシは、なんかちょっとムカついたから、足を踵で思いっきり踏み抜いて黙らせたけど。

とにかくそこからはオリヒメとの睨み合いに徹しただけで会議が終わる。
発言は最初の一言だけ。
場をメチャクチャにしただけな気もするが、それも結局はあまり気にしない事にしたのだ。

民政部の連中は、やっぱり青い顔をして対策がどうこう言っていた。
だがそれに対して、ここに集まった『黒鉄』達は揺るがない。
全員が一癖も二癖もある連中ばかりなのだ。シャクが動けないというだけで取り乱すヤツなんか1人もいるワケがない。

確かに不安はある。
三班のコンディションは、シャク（アイツ）の状況次第といった所があるからだ。
そしてその三班の戦意が下がるという事は、黒鉄全体にも大きな影響を与えるだろう。
なにせ『決戦班』たる三班は、黒鉄最強の部隊と言っても過言ではないのだから。

それでもあたしは動揺なんかしていなかった。

ここは黒鉄の街。
最後まで諦めなかった人々が流した、多くの赤い血が染み込んだ街。

そしてあたし達は、そんな街に集まった今も諦めない者達の集まりなのだ。
不安を感じる暇なんかないくらいやる事もたくさんある。

だからあたしには、会議なんていってもいつもの退屈な場と変わらない。
つまりいつも通りに、『オリヒメ』と睨み合うくらいしかする事がなかったのだ。
他のヤツらも動じてなどいないし、ムカつく事にオリヒメも平然と睨み返すだけで話なんか聞いてはいなかっただろう。
だから話し合いの成果なんか、オリヒメを悔しがらせたという事だけで構わないのだ。
それだけで少し幸せな気分でいられるのだから。

……ナナシが会議の間中、痛そうに呻いてはいたけどね。

１５・ムーンライズ（前書き）

先週、今週と少し上げるペースを早めてみました。
単純に事故って休みで、する事なかった……だけではなく、計算してみると完結までかなり膨大な文字数になりそうだから、です。
多分章分けしてページも分けますけど。
この勢いで行けば――プロット全部こなして、なおかつ心が折れなければ、全部完結するには軽く１００万文字を越えます。
ほんの６倍強ほど……

15・ムーンライズ

予想通りグダグダなままで無駄な時間（班長会議）が終わると、特にする事もなかったあたしはまっすぐに二班本部へと帰還する事にした。

あたしの部屋がある黒鉄第二班の本部は、この街唯一の医療機関でもあるから、今日も変わらず多くの人が訪れている。そんな人混みの中を突っ切るように階段へと向かった。

「カーリアン！お疲れ様です！」

「今日は会議だったんですよね？お疲れ様」

道中かけられる仲のいい班員達の声にはヒラヒラと手を振って返し、バタバタと忙しげに動き回る仲間達を見て大きく息を吐く。

この班内であたしに声をかけてくれる人は限られている。

同じメンツ以外はあたしに声をかけてこようとしない。視線すらもあわせたがらない。

『紅』が怖いのか、カーリアンが怖いのか……はたまた目に余るほどに『存在自体』が異様に見えるのかは分からないけど、この班でもあたしは確実に浮いていた。

まぁ自業自得なのは分かっているつもりだ。

あたしの過去――『死にたがり』だった頃の行動が、そのままあたし自身に返ってきている事は自覚していたから、何も言う事は出来ない。

……ちょっと寂しい気持ちにはなるけどね。

そんなあたしが帰還したところで話相手なんてそういるハズもない。

結局は食堂にでも行って適当に暇でも潰すか、なんてありきたりな考えへと行き着くのはいつもの事だ。

だけど時間帯が外れているからだろうか？訪れた食堂にすらほとんど誰もおらず、あたしが話しかけても大丈夫そうな相手は１人もいない。

――タイミングが悪かったかな。お昼ご飯時が終わったばっかだもんね。

そうは思ったけど、そのまま別の場所に行くのも癪にさわるので、仕方なく隅の方の席でチビチビとお茶をすする。

二班の食堂で出されるお茶は、なんの茶葉を使っているのか不明な点を除けば味は悪くない。

むしろクドさと渋みがなく、香りもキツくない辺りがあたしの好みにあっている。あっさりと飲める分、飲み慣れた日本茶よりも気にいってたりするくらい。

だけどお茶をすすって時間を潰すのはさすがに限界がある。それにあたしがいるせいか、周りの雰囲気も静かなのが少し居心地が悪い。

仕方なく備え置かれているペットボトルにお茶を入れてもらい、また目的も定まらないままブラブラと歩く事にした。

――さて、これからどうしようか。

そう考えを巡らすも、交友範囲が狭いあたしにいい考えなんか浮かぶワケもない。

1人の時にいつもしている事はと言えば、能力制御の訓練――あたしの唯一の日課をこなしているぐらいなんだけど、今日に限って言えばつまらない会議に顔を出した後でもある。訓練なんかする気にはなれそうもない。

後は三班の本部に顔を出すくらいだけど、シャクがいない時点でその選択肢も欄外だと言えた。

たまには医療班の仕事をしようかとも考えたけど、医療班の一員としてあたしに出来る事はそう多くない……というよりも全くない。

――カクリに聞けば何かやる事があるかな。

そう思って通りすがりの顔見知りに居場所を聞くも、あの子が文字通り目が回るような忙しさの中で走り回っている事しか分からなかった。

二班の内務は全部あの子が請け負っているし、それも仕方ないよね……そんな事を溜め息混じりに思いながらもただブラブラと歩き回る。

いくらあたしが暇をしていようが、現状の黒鉄の中では、我が二班こそが一番忙しい班なのは間違いない。

まず先日の作戦で負傷した一班の連中の面倒を見なければならないし、長期療養中の仲間達の世話もある。

それに薬品や医療品の在庫管理も疎かには出来ない。

残念な事だけど、毎日しっかり数を管理をしていなければ、『薬の数を誤魔化すヤツ』が出てくるらしいのだ。

医療班としては捨て置けない問題だ。それを未然に防ぐ為にも、

仲間同士で不要な不信感を持たない為にも、在庫の管理は欠かせない。

それに今の状況――つまり『黒鉄のシャクナゲ』不在時を狙って、攻めてくるかもしれない関西軍に備える必要もある。

最悪この都市から撤退しなければならない可能性も考慮し、その準備を怠るワケにもいかない。

これらの作業を、カクリは1人で全部仕切っているのだ。本当に目が回るくらいに忙しいだろうと思う。

でもあたしがそんなカクリを気遣って、仕事を手伝おうとし申し出ても、『カーリアンに任せたらお目付役を何人もつけなきゃならないから……』とか言って手伝わせてはくれないのだけはさすがに不満だ。

失礼なとも思う。

けど、過去の実績から言ってそれを口に出して言うのはちょっと憚られた。

今までも在庫の少ない薬品が置かれた棚をひっくり返したり、ムカつく怪我人をひっぱたいたり、班員の見舞いにきていたオリヒメと睨み合い、喧嘩したりと散々してきたのが分かっているから。

まぁ『カクリの言い分はもっともかな……』なんて自分で納得してしまう辺りは、かなり救いがないかもしれないけど。

『あたしに望まれている役割は二班の仲間達の楯になる事だから、別に内務で役に立たなくてもいいよねぇ……』そんな事を自分に対して白々しく言い訳している辺りも、我ながらちょっと虚しいかもしれない。

ならば何をするか――と考えて、する事なんて1つしか思い当たらない辺り、あたしも自分に素直な性格をしてるなぁ～と思う。

「さて。会議で一悶着もあったし、三班の連中やオリヒメが押しかけてこないか見に行こ♪」

そう、これも二班班長としての立派な仕事だろう。

大勢が押しかけてくれば迷惑極まりないし、怪我人にも負担がかかる。

アイツらを無理矢理追い出せるのは、この『紅のカーリアン』しかいないしね。

……そんな大義名分を自分自身に言い聞かせながら、今日も最近の日課通りに本部の最上階へと足を向けた。

先の撤退よりそこの――特別病室の住人と化している1人の『黒鉄』に会う為に。

「ちわ～」

少し声を細めて病室に入ると、一陣の風が部屋から廊下に吹き抜けた。

窓は開け放たれ、そこから入ってくる風があたしの赤い髪を撫でる。

その部屋にはベッドに寝ころぶ男が1人だけ。

『シャクナゲ』

あたしと変わらない年齢でありながら、ずっと黒鉄を引っ張ってきた男が、今はそこで小さな寝息を立てていた。

――疲れてんのかな？シャクが部屋に入ってきても気付かないなんて。

いつもならすぐに目を覚ますのにさ。

そんな事を思いつつも、立てかけられていた丸いパイプ椅子を持ってきて、ベッドサイドに腰を下ろした。

穏やかに眠るシャクは、時折寝苦しそうに唸っていた。

その寝汗を拭おうと思わず手を出しかけて――少し躊躇する。

シャクは本当に鋭いのだ。

例え寝ていようが、部屋に入ってきた事に気付かないのが不思議なくらい鋭いヤツなのだ。寝汗なんか拭えば、まず間違いなく目を覚ますだろう。

コイツがゆっくり眠ってる姿なんて、まず見られない光景だ。

そう思えば手が止まる。

――もう少し見ていよう。あんまり寝苦しそうだったり、うなされていれば起こせばいい。

その誘惑はあまりにも魅力的で、あたしの思考は即シャットアウトされる。

だってこんなに無防備なシャクは見た事がなくて、初めて見た寝顔は可愛く思えるほどに穏やかなモノだったのだ。

……こう考えてしまうぐらいは仕方ないでしょ？

昔、カリギュラに来たばかりの頃――

つまり救急班も決戦班もまだなく、同じ変種であるシャクの下で戦っていた頃のあたしは、今考えてみればヒドく手のかかる部下だったと思う。

すぐに他の連中と諍いを起こし、敵のヴァンプを見れば突っ走っていた。

そんなあたしが仲間達から孤立するのは早かった。

文字通りあっという間だった。

あたしが東海地方でも有名な『ヴァンプ殺し』――『死にたがりの紅』だと広まれば、よりその傾向は顕著になった。

またカクリ以外の他人は、あたしに寄ってこなくなったのだ。

……だからかもしれない。新しく出来た居場所は何故かひどく不快な場所だった。

そんな中、あたしをずっと気をかけていてくれたのがシャクナゲだった。

別に無理矢理仲間達の輪にいれようとしたワケじゃない。

孤立していて、戸惑って、でもそんな状況が少し……本当に少し寂しいなと思った時には隣にいてくれたのだ。

そんな人は世界が壊れてからカクリ以外では初めてだった。
あたしを色眼鏡で見ないヤツはシャクしかいなかった。

そんなシャクにあたしはことさら距離を取った。
『死にたがり』の自分は、自分の命と同じくらい他人の命もどうでもいい、と思っていたような人間だったから。

そんなあたしはきっと壊れていると思っていたから。
だからあたしは、誰かに側に来られる事が……『壊れた自分』が誰かを無意識で傷つける事が怖かったのだ。

そんな日が続いていたある夜の事だった。
一般班員の集合家屋で寝ていたあたしは、当時よく見ていた悪夢にうなされて目を覚ました。
隣にはスヤスヤと眠るカクリ。その幸せそうな寝顔が理不尽にも腹立たしく思え、そっと部屋を抜け出した。
きっと今眠ってしまえば覚めたばかりの悪夢に追いつかれ、またうなされるような気がして外を歩く事にしたのだ。

向かった先は外壁がボロボロの古いビル。

二階建てのそれはひどく古臭いモノだったが、そこは何故かあたしには落ち着ける場所だった。
多分今になって思うけど、その場所でよくシャクが――そしてたまにスカし野郎（アカツキ）が――遠くを見ていたから気にかかっていたんだと思う。
そして彼と同じように遠くを見ようとして……いつの間にか気に入ってしまったんだろう。

――その晩も、そこにシャクナゲはいた。

古臭く、倒壊しそうな建物の屋上に腰を掛け、ずっと遠くの空を見ていた。

あたしはその姿にただ圧倒されたのを覚えている。たった一目みただけで、思考の全てが彼に向いてしまった事も。

背景の満月も、瞬く星々も、その場では単なるアクセントに過ぎなかった。

腰掛けるシャクナゲがその光景の中心で、他はそれを彩るモノでしかないように思えた。

――ただ何故か幻想的に感じたのだ。

そう思った理由なんて分からない。今でもワケなんかどうでもいいと思っている。

ただその感慨こそがあたしには真実だった。

『眠れないのか？』

あたしに気付いていたのか、そう語りかけてくる少年の声に思わず素直に頷いた。

それを見て彼は『俺もだ』と小さく笑う。

そして促されるまま同じ場所に登り、あたしはその隣に腰を下ろした。

今までのあたしならムキになって拒否していただろうに、本当に自然とそうしていた。

『怖い夢を見たよ』

唐突にそう言った彼の言葉に、思わずあたしは息を呑んだ。

自分もうなされて目が覚めたばかりなのに、この少年が夢を『怖い』と言った事が信じられなかった。

『眠るのが時々怖くなる。起きていればやる事が一杯あるから、イヤな事を考えずに済むんだけどね。眠っていたらイヤでも夢で思い出させられる事があるんだ』

この少年でも――みんなに頼りにされ、いつでも不敵に笑いながら先頭に立つ少年でも怖い事がある……そう聞いてビックリしたのだ。

『黒鉄のシャクナゲ』でも『壊れたあたし』と同じようにうなされて、悪夢で見るような過去があるという事が信じられなかった。

いつでも仲間に囲まれ、どんな時でも周りを引っ張っているようなヤツなのに、その時の彼の表情は年相応のモノで……

あたしの口からは言葉が出てこなかった。

『最近はね、神の愛ってヤツは有限なんじゃないかって思うんだ』

『はっ？』

沈黙が落ちた間に、そんな変な事を語り出すシャクナゲに、あたしはまたも面食らい間抜けな声を上げる。

こんな世の中で、いまだに『神様』なんていもしない存在の話をされたのにもビックリした。

『今までの世界でね、神の愛ってヤツは切れちゃったんじゃないかって思う時があるんだよ。そう考えれば、もうそんな神（ヤツ）に頼ろうなんて気も起きない。有限の事しか出来ないヤツに、地獄（いま）を変える事なんて出来ないから』

『ふん。元からそんなヤツ、アテになんかしてない』

『……そうだな。俺もとっくに見限ったよ。
神なんかいない。悪魔もいない。
今、この世にいるのは人間とヴァンプだけだ』

そう言って彼は口を噤んだ。
その表情は悲しげには見えない。寂しげにも見えない。
ただ無感情に月を見上げていただけだ。

『だから俺はここで戦っているんだろうな。こんな世界の中でも、せめて周りの仲間達にだけは頼りたくて――そして頼られたいから戦ってるんだって思う。俺はスゴく弱いから、たった1人じゃこんな世界（場所）には立ってられないんだ』

『……』

『それだけの為に……そんな理由で戦ってるんだとしたら、俺は虚しいヤツだって思うか？』

そこにいたのは、初めて見る等身大の『1人』だった。
隣で笑っているのは、強大な変種である事や『コード』の有無なども関係ない、たった1人の人間がいた。

静けさを増した夜に、あたしはなんの答えを返せないまま月を見上げる。

変種ではなく、1人の人間としての答えを出せないあたしは――1人でいる事に逃げているようなあたしは、きっと彼以上に滑稽だろうな。

蒼い月光に照らされながら、あたしはそんな事を思ったのだった。

15・ムーンライズ（後書き）

黒鉄……この組織は昔から7つに班分けをされていたワケではない。
ただ状況に応じて『シャクナゲ』『スイレン』『スズカ』などが部隊をまとめ、戦闘に出るだけだったのだ。
明確に人員を分ける余裕がなかったからでもあるし、力の強い変種が少なかったからでもある。
昔は他にも『サザナミ』や『クロネコ』などの強い変種がいたが、彼等はもう黒鉄にはいない。

戦闘で力尽きた者や、戦えなくなった者、戦いを拒絶した者……そしてヴァンプに堕ちた者などが多数おり、絶えず人員は不足しがちだった。

その転機が訪れたのは、一年前と少し前の事。
カーリアンやナナシ、オリヒメなどの強力な変種が次々と加入し、黒鉄が七班体制になったのだ。
当時『将軍』を後一歩まで追い詰め、名を上げたシャクナゲは昔からの馴染みが集められた班……第三班の班長となり、ナナシは引き連れて加入した部下達と共に一班へ。
そして他の者達もそれぞれが振り分けられた班へと所属する事になる。
こうして『アカツキ』というリーダー無き組織は、今の形へと変貌を遂げたのだ。

……と今更組織紹介を入れてみました。
現在絶賛入院中の逆月です。
一昨年の今頃も入院していた逆月です。
今は折れた足を吊って、３日ほど検査入院な逆月です。
正直かなり暇な逆月でした。

16・スパイラル　ラブ（前書き）

お知らせ。
この話と『ムーンライズ』は繋がっています。主に両方の最後辺りとか、今回の始まりとか……
ムーンライズから続けて読んで頂けたら……いや、読まなくても分かりますが、より分かる……というより嬉しいです。

主に逆月が。

お知らせ2。
次回更新は来週です。
事故った為検査入院しているので、やや間が空きます。
そして次回からしばらくは、多分初めて『彼』の視点での物語となります。
伏線上手く入ってるといいなぁ……と見直してから上げますので、露骨な伏線にも気付かないフリをして下さいませ。

お知らせ3
『黒鉄色のシンフォニア』の次回作が『男の戦い、女の戦い』に決まりました。
のんびり書いていきます。

お知らせ4
誤字、脱字が幾つかあるかもしれませんが、お気付きの方はお知らせ下さい。
また感想等もあればかなり嬉しいです。
やる気、意欲も多分出ます。

お知らせ5

あとがきに、カーリアンの一人称についての補足があります。

16・スパイラル　ラブ

その日からだった……と思う。
その夜からあたしはシャクが気になりだしたんだと、今になって思う。
ただ並んで月を見上げていただけでロクに話なんかしなかったし、あたしからは全然話しかけたりもしなかったのに……
その日から、気が付けば自然とシャクの姿を追うようになっていた。

カリギュラを攻め落とそうと軍を進める関西軍に対し、先頭に立って戦うシャクを見た。
仲間達に指示を出し、ゲキを飛ばして、最前線に向かう姿も見た。
ボロボロになるまで傷を負いながら、それでも故郷を……居場所を守った事を喜び合う仲間達に笑いかける顔も見た。

そして傷ついた仲間達を見て、自分の指揮の下で傷付いた部下を見て、その顔を悲痛に歪める弱さも見た。
それまでのあたしは、どんな時でも自分しか見えていなかったのに、気が付けばそんな色々な『シャクナゲ』を知っていたのだ。

正直な話、それまでのあたしは、正面からぶつかったならシャクには負けないだろうと思っていた。
確かにシャクナゲの身体能力はずば抜けている。あたしのそれよ

りも全然高く、全黒鉄の中でも最高クラスの身体能力を持っている事も分かっていた。

正確無比な銃の腕も知っているし、それらを活かせるだけの豊富な経験値は、まだまだ新米だったあたしが及ぶモノなんかじゃない事も理解していたつもりだ。

しかしそれらを考慮しても、彼の力より自分の能力の方が強いと考えていたのだ。

スイレンやオリヒメの方がよっぽど強力な変種だと感じていたし、何度かシャクの下で組んだ事のあるスズカは、純正型の力を思い知らされるだけの能力をもっていた。

それなのに、何故アイツが黒鉄最強なのかが分からなかったのだ。

一度その事についてスズカに聞いてみた事がある。あたしが初めて彼女が指揮をする部隊で戦った時の事で、初めて彼女の力を間近で見た時の事だ。

街道を渡って商いをする人達を襲う——つまりカリギュラや他の大きな街に襲撃をかけたりなどは出来ない程度の、チンケな武装盗賊達の討伐・捕縛が役目の任務だったけど、そこで見た彼女の力はまさに圧倒的だった。

『最強』なんて仰々しい称号が似合うとしたら、それは彼女にこそだろう——他者を見られなかった頃のあたしですらそう思ったのだ。

だからつい聞いてしまったのだ。

『アンタならシャクナゲよりも全然強いんじゃないの？』と。

そんなぶしつけなあたしの質問にスズカは小さく首を傾げ、少し考える素振りをすると、彼女は真剣な面持ちでこう答えたのだ。

『確かに私ならシャクナゲに勝つ事は可能。私と『シャクナゲ』の戦力を比較すれば、ほぼ勝利出来るモノと推測する』

そこで一旦区切ると、彼女は少しだけ口調を強めて言葉を続けた。

『でも彼と戦う事は絶対にあり得ないと断言する。

――なぜなら私が絶対に戦いたくはないから。彼と戦う事になるぐらいなら、私は全てを捨てて逃げる術(すべ)を考慮する』

そう『銀鈴』のスズカ、最強の純正型は、なんの迷いもなく逃げると答えたのだ。

自身の言葉を『断言』してみせる事に、なんの間違いもないと言わんばかりの小さな笑みを浮かべて。

勝てるのに逃げる……絶対に戦いたくないから逃げる、と。

その答えは正しいでしょう？と言いたげな笑みすら浮かべて、だ。

だけど不思議だったのは、そんなスズカの答えでも柔らかな表情でもなかった。

そう……、なによりも不思議だったのは、その答えを聞いて『あたしが何故かその言葉に納得してしまった』事こそが不思議で、首を傾げたのを覚えている。

そしてそんなあたしを見て、表情の薄いスズカが儚く笑っていた事も。

そう、色々なシャクを見て――弱さも強さも脆さも見て、そしてスズカの迷いない言葉を聞いて、すでにあたしは自分の考えの過ちや疑問の答えに気付いていたんだと思う。

――シャクの強さはその弱さや脆さにあるんだ。

能力だけじゃない。全ての要因を含めて、シャクナゲは『黒鉄のシャクナゲ』なんだ……そう気づいていたんだろう。

それこそが強みであり、彼が黒鉄最強と呼ばれる所以なのだ、と。

現にシャクの部隊から班分けされたナナシの班が、下手を打ち撤退させられる事はあった。

『銀鈴』のスズカでさえも味方が総崩れとなり、撤退を余儀なくされた事が何度かあったのだ。

そんな中でシャクナゲだけは――その部隊だけは『負けた事』や『撤退させられた事』が『ただの一度もない』。

数の不利や状況の不利があろうと、何故かシャクの部隊だけは『負ける事がない』のだ。

確かに『勝利』と言えるような結果はほとんど得られはしない。

だが、そもそも黒鉄と関西軍では兵員の数、その装備からして全然違う。

関西軍が関西西部全域と中国地方をほぼ掌中に収めているのに対して、黒鉄が勢力範囲としているのは、何度もの戦火で焼かれた『廃都』だけ。

その前提条件があるだけで、『負けない』という事がいかに困難な事かが分かると思う。

黒鉄はただ一方的に攻め込まれる側で、専守防衛しか出来ないのだから。

それだけに『勝利』の対価は得られないけど、それでも『シャクナゲだけは負けていない』。

勝ちを得られなくても――例え他の部隊が全部撤退しても、一番激戦区である戦場を受け持ち、苦境の中で維持してみせ、戦況を絶対的な敗北に傾かないようにしているのが『黒鉄のシャクナゲ』なのだ。

それはもちろんシャクの力だけで出来る事じゃない。仲間全員が一丸になって死に物狂いで戦うからだろう。

メンバーが精鋭ばかりだとかそんなのは関係ない。

新兵（ペーペー）も古株も『自分達はシャクナゲの部隊の者だ』……つまりは『一番危険な場所、一番大事な場所を任される負け知らずの部隊の者なんだ』という自負を抱いて、命を懸けて戦線に立つだけ。

その先頭に立つ男の背中が彼らを死線に立たせる。

死の恐怖を忘れさせる。

持ちうる全ての勇気を奮い起こす。

そして彼の為にその身を楯にする。敵を突き破る矛とする。

……その結果にあるのが単に『不敗』の積み重ね。

決して『常勝』ではなく、単なる『不敗』。

それだけの事でしかない。

それが彼の部隊にいたあたしには分かる。

なにしろこのあたし自身がそうだったから。

あたし自身が……死にたがりの紅たるあたしが、彼の部隊で戦う時だけは死に物狂いで戦っていたから。

シャクをほっとけなくなったのだから。

なにせ本当にアイツは危なっかしいし、いつもがむしゃらだし、おまけに平然と仲間の楯になろうとする。

危険な先陣立とうとする。

ただ黙して先へと進み続ける。

そんな姿を部隊の者達全てが見ていて、そんな彼をそのまま模倣しているだけの部隊が『不敗』の結末をもたらしているだけだ。

それが最精鋭というレッテルを取り払った姿であり……その結果こそが『シャクナゲ』の強さの証なんだろう。

力では圧倒的なスズカが拠点を防衛しきれず撤退させられても、『まだ自分達にはシャクナゲがいる』……そう仲間達に思わせる事が出来るのが、『黒鉄のシャクナゲ』なのだ。

『自分達はまだ負けていない』

そう思い続けられる人々の強さ……それはこの敵地に囲まれたカリギュラを、数年に渡り守り続けてきた実績が証明している。

さすがにその全てがシャクの力だとは言わない。

だがそんな人々の想いの根底に、シャクの後ろ姿があるのは間違いない。

今よりもずっと過酷な時も、シャクはその姿勢でいたのだ。

大分状況が落ち着いてから仲間になったあたしでさえ、アイツの後ろ姿が脳裏にこびりついているのだから、他の仲間達がそれを支えにしていたのは間違いないと断言出来る。

それぐらい『黒鉄のシャクナゲ』は混迷極まる関西では強烈な光なのだ。

……そこまで気付いた時には手遅れだったと思う。

もうシャクのヤツは、あたしの心の中に住みついていた。

彼の弱さや脆さを知り、強さも見て、普通の人間としての彼をも見たあたしは、それを認めざるを得なかった。

そんなシャクナゲを知っている自分が、何故か特別にすら思えていた。

――アイツみたいになってみたい。シャクナゲみたいに、誰からも信頼される人間になってみたい。

そうはっきりと思ったのはいつからだったろう？もう覚えていない。

きっと初めて会った時から気にはなっていたんだとは思う。

『迎えにきたよ。ヴァンプとは違う君を』

そう言われたのが……ヴァンプじゃない、力に狂ったヤツらとは違う……そう言われたのが嬉しかったのは間違いない。

救われた気持ちになったのも。

そしてそれ以上に

――きっとアイツの立つ場所（ところ）は、あたしが憎んでも憎みきれない『ヴァンプ』とは正反対の立ち位置だ、そう思った。

あたしが否定したヴァンプからは、最も遠い存在だと思ったのだ。

それがあたしが『シャク』に最初に憧れた理由だと思う。

憧れから好きに変わった理由については知らない。今まで考えた事もない。

それはどうでもいい事で、きっとあたしにとっては取るに足らない理由だと思うから。

だって『好き』になるのに理由なんて必要ないし、みんながみんなシャクナゲの事が大好きなのだから、理由なんか特にないのだろう……そう思ったのだ。

「んっ……」

軽く唸るシャクに、私は小さく吐息を漏らした。
そこに眠っているのは、まだ若い……少年と呼べる年代を超えたばかりの男だ。
見た目は悪くない。決して最上とまでは言えないルックスだけど、絶対に悪くない顔立ちだと思う。
寝顔に至ってはカッコいいというよりも、可愛いが当てはまるくらい。それも悪くない。

今まで……私が変種の力に目覚めるまでに見た男の中には、きっとシャク以上に格好良い相手は何人もいた。テレビの中も合わせればかなりの数がいただろう。
昔は街を歩く度に声をかけられていたから、結構ルックスを見る目はあると思う。
ファッションにも気を使っていたしオシャレも好きだったから、声をかけてくる男はよりどりみどり過ぎて、正直うんざりするぐらいだった。
それだけにそれが好きになる要因にはならないと分かっていたつもりだし、自分は顔だけで好きになるタイプじゃないんだろうな、とも思っていた。
でもシャクを見ていたら、すごく好きな顔立ちをしているような気がしてくるから不思議だ。
この顔立ちだけでも好きになれた気すらする。
昔シャクに声をかけられていたなら、きっと付いていっただろうな……そんな取り留めのない事すら考えてしまうほどに。

昔はどんな人に声をかけられようが付いていかなかったのに、シャクに声をかけられていたなら付いていった、なんて事を考えているのだから、『恋は盲目』とは良く言ったモノだと思う。

それだけで自分がどれだけシャクに『やられているのかが実感出来る』。

……でもこんな気持ち、言えっこない。私が『好き』って言ってもシャクは前以外見ていないもん。

そう思うからこそ私は想いを表には出さないと決めた。

誰かにバレていても、直接聞かれたなら否定してみせる。きっぱりと否定してみせると決めている。

それも単なる強がりだと思われるかもしれないけど、それでも否定する事には意味があると思うから。

もし、私がこの想いを誰かに伝えるとしたら、それは1人だけしかいないのだ。

しかもたった1つ、一瞬の場面でしかあり得ない。

それはあたしとシャクナゲが死ぬ時――『つまりシャクがようやく歩みを止めた時だけ』だ。

――いつか2人とも死ぬ事になるだろう。

それもきっとそう遠くない未来で、悲惨な末路だと思う。

なぶり殺しにされるか、野垂れ死ぬかは分からないけど、きっと2人共ろくな死に方は出来ないだろうから。

それだけあたし達の闘いは絶望的なモノで、それは負けの目しかないサイを振るような勝負なのだ。

それに『あたし』達も所詮は人殺し。ヴァンプを何人……何十人と殺してきたのだから、自分達だけ苦しくない死に方を望むなんて

勝手過ぎる。そう覚悟も出来てる。
それでもシャクは最後まで仲間達を守ろう、1人でも助けようともがくだろう。
最後の最後まで足掻くと確信できる。
そんなシャクにあたしは精一杯の悪態を吐き、私まで逃がそうとする彼に、無理矢理な屁理屈をこねてでも側にいるのだ。
そして最後には2人になって、後は死ぬだけ——そうなった時に『私の恋はようやく始まる』。
ようやく私として素直になれる。
逃がしきれなかったあたしに、申し訳なさそうに謝り続けるシャクへと私は笑いながら……そして多分照れまくりながら、生まれて初めての告白するのだ。

『もう歩かなくていいんだよ』

『もう休んでいいんだよ』

『だからこれからは最後まで私を見ていて』

そう言うつもりだ。言葉はそう決めていた。
好きとも愛してるとも言わないけど、それが本心の全てで……最初で最後の告白。
きっとシャクは驚いて呆然とするだろうな、と思う。

だってあたしは、今までムキになってそんな気持ちを否定してきたのだから。
そんな彼にあたしは『私』として笑う。最後くらいは人並みの恋で笑いたいから。
それだけが私の最初で最後の恋の在り方と、『終わり方』なんだから。

後は私達を――『黒鉄のシャクナゲ』と『紅のカーリアン』を討とうと殺到するヴァンプ共との最期の狂宴。
力に狂って、名誉に、プライドに、ネオの名前に酔った連中を相手にした悪あがき。

そんな中でも、あたしは最後まで彼の楯になってみせる。
最後までそうありたいと願う。
意志が霞み、体が壊れ、あたしの内なる炎が潰えても。
その代わりに彼には最後ぐらいは私だけを見てもらうのだ。
前じゃなく隣を歩きたいと願ってきた私を。
それが……それだけが、こんな世界、壊れたリアルの中で、私に出来る恋の仕方と狂ってしまった恋の結末だから。

でも――

「シャク……少しは休んでいいんだよ？」

でも――

「歩き続けなくてもいいんだよ？」

でも――

「だから、『私』を見て……」
でも、小さく呟くぐらいはいいよね。
今後も『あたし』で居続ける為に、少しだけ気持ちを吐き出して

もさ――。

今のあたしは弱いから。

きっと誰かに支えられなければ、こんな世界（場所）に立っていられないくらいに弱いから。

こんな世界だからこそ、あたしも誰かを支えてあげたいから。

その為だけに戦っているんだとしても、アナタなら笑わないでしょ？

だから小さく呟く事ぐらい許してよ。

そんな言い訳をしながらも、あたしはただボーっとシャクを見ていた。

――あたしが側にいない時に死ぬ事だけは絶対許さないから。

そんな言い聞かせを、寝ている彼に小声でしながら。

16・スパイラル　ラブ（後書き）

結構ノリで書いてます。

カクリの考察・欄外編

私はこれまでの付き合いから、カーリアンに2つの性格……いや、性質がある事を確認している。

1つ目はいつものカーリアンだ。

見栄っ張りで寂しがり、面倒くさがりなクセにマメ、子供っぽいかと思えば意外と鋭かったりする私が良く知るカーリアンである。

これは恐らく、『死にたがり』と呼ばれた彼女が『変質』したモノだと私は考える。

彼女自身は『死にたがり』の自分を忌避しているようだが、恐らく今の彼女自身はあの頃に形成され、周りの影響で変質したモノだと私は考えているのだ。

ならばもう1つの彼女はどんな性質かと言えば、弱い『彼女』である。

簡単に言えば『変種ではなかった頃の彼女』だ。

死にたがりとは相反するモノこそが、彼女の内面にはいると私は見る。

動揺したり、動転したり、あるいは喜怒哀楽のいずれかが強過ぎる時に、彼女はその顔を覗かせる。

いつもはおバカなクセに頭の回転や理解力だけは高いのに、途端に頭の巡りが悪くなり、ただブツブツと1人考え込む姿など、もう鳥

肌モノのギャップ萌え――もとい、かなり異常であり、顔付きすら変わっている気がするほどだ。

その2つの見分け方は……というより見ただけで分かるモノだが、自身の呼び方、つまり一人称だ。

普段の彼女は『あたし』と呼び、はすっぱな物言いをしがちなのに対し、もう1人の方は私と呼び、混乱時には支離滅裂な事を言いがちだ。

……まぁその様子を見ただけで分かるのだが。

これは一種の二重人格かとも思っていたが、彼女自身がその2つ共を自覚している節がある点からして、違うと私は診断する。

一概には言えないが、二重人格者は、それぞれの人格がお互いを理解し、認識している例が少ないのだ。

また、切り替えがコロコロと目まぐるしく変わる点も違う。

そして最も違うのは、主人格を後から生まれた人格……『カーリアン』が普段抑えている事だ。

これは数ある乖離性人格障害の中でも、非常に珍しいケースだと言えよう。

そしてそれで上手く回っている辺りがビックリでもある。

……まぁ、その意外性も『私の』カーリアンの可愛い所なのだが。

一度彼女が毎日書いている日記を読んでみたいモノだ。

内容もそうだが、その中では、『私』と書いているのか『あたし』と書いてあるのか……。

つくづくカーリアンからは目が離せない。

……カーリアン、ほんと怖いコ。

17・レイディ・ヘルメス（前書き）

う～ん。
かなり露骨な感じですが、気にしないで下さいませ。
また編集するかもしれませんが……
少し早く上げられました。
次回更新は２２日、日曜日予定

17・レイディ・ヘルメス

「ふぅ……」

大きく溜め息を吐くと、目の前にそびえ立つ高層ビルのなれの果てを見上げた。

――ここに来るのも久しぶりだな。

そんな事を1人ごちながらも、深い溜め息を漏らす。

それは、ここがあんまり好き好んで来たい場所ではない事もあるが、ここに来た経緯も大いに関係している。

『……アオイには直接揺さぶりをかけてみて欲しい。……私よりも三班がバックに付いているアナタの方が……万が一の時もきっと安全』

いつも通りの無表情のまま、そんな事をヌケヌケと言う二班副官の少女の事を思い出せば、溜め息と小さな苦笑が漏れるくらいは仕方ないだろう。

彼女が言った『万が一』や『きっと』という言い回しは便利な言葉だ。詐欺師が使う言葉の使用頻度をランク付けするならば、まず2つとも十指に入るだろう。それくらい使いやすい言葉。

なにしろ他人を説得するのにこれほど使いやすい言葉もない。言った本人はなんの確約もしていないのに、言葉に妙に説得力があるような気分にさせられるのだから。

そしてなにより、例え内心では『六班が騙し討ちとかしないかな』と思っていても――『簡単に尻尾を出してくれれば楽なのに』と望んでいても、それを気遣いにも似た言葉で覆い隠せる。

そんな彼女のちょっとした期待を思えば（もちろん本気ではないだろうが）、『その腹黒――もとい、裏工作好きなところだけは、もうちょっとなんとかならないモノかな……』と考えてしまうくらいは仕方ないだろう。

「とは言っても、尻込みしてても仕方ないですし、行きますか」

そんな独り言を漏らしつつも、心持ち重い足を動かして廃ビルへと歩を進めていく。

足取りが重いのは、脳裏に浮かんだ少女――時折組む事があるカクリさんの事が嫌いだから、といった事が理由なワケではない。むしろその能力は評価しているし、まだ若いからか意外と熱くなりがちな点も好感が持てると思う。

でも今から私がすべき事は、彼女の計画に沿っての行動などではないのだ。

彼女の思惑から外れる行為だという事が分かるからこそ、ちょっとした罪悪感を感じてしまう。

『アオイには特別に頼みたい事があるんだ。カクリに任せるのはまだ早い気がするから』

――そう、これからの行動は私が心服する主の言葉を果たす為だ。
我が三班の長の命を果たす為だけの行動なのだ。
私も我が主も、今回の策を練った彼女の能力は高く評価しているし、それを信頼してもいる。
だがそれはそのまま『彼女の能力を見極めている』という事。
そう……まだ彼女では『黒鉄』は背負えない、と私も我が主も判断しているという事だ。
彼女は『若すぎる』し、経験も人脈も少なすぎる。
今の時点では、古くからここで戦ってきた黒鉄――最初の黒鉄である『主』には及ばない。
だからこそ彼の命を受けた私は独自に動いている。
彼女の考え通りに……でも彼女の思惑とは違う形で。
彼女の『狐狩り』を完璧にする為の保険と――私なりのちょっとした『裏工作』を施す為に。

私はアオイ。黒鉄に所属する符号無き変種の1人。
そして符号の持つ『意味』を求めない変種。
自分自身には意味が持てず、周りにそれを見いだすような変わった人間。
三班副官という立場に身命を捧げる詰まらない男であり――
――それゆえにあまり親交のない他班、情報班『黒鉄第六班』の本拠地に1人で乗り込む事になった要領の悪い男さ。

「失礼します」

そうにこやかに本拠の一室、まだ部屋の原型を留めていた応接室へと足を踏み入れた。

飾り気がないのは三班の本拠――巨大な地下駐車場を改造した場所と変わらない。だが、どことなく六班の本部はこざっぱりした印象を受ける。

基本的にあまりモノが置かれいない事もあるが、割とコマメに整理してもいるのだろう。

それが班ごとの特色と言ってしまえばそれでおしまいだが、やはりここのトップが女性である事も関係しているのかもしれない。

もちろん機密を扱う『情報班』の本部ならではの厳重な警備も敷かれている。

入り口で念入りに身体検査をされるし、中はあちこちを歩哨が巡回している。

何よりいざ中に入っても、入室が許可されない部屋すらたくさん――というより入れない部屋の方が多いぐらいだ。

この中には、ここの長ですら定例の会議で採択を取らなければ触れない資料があるのだから、それも仕方ないと言えば仕方ないだろう。

かつて『統括部』という機関がここを使っていた名残からか、ここには昔の黒鉄の情報や構成員の個人情報が多く残っているのだ。

そういった情報や機密――中でも『最重要機密』に属する情報を詳しく知るのは、今は亡きアカツキと五班のカブト、そして我が三班の班長たるシャクナゲぐらいのモノだろう。

それらの情報を残したモノ、あるいは形に残るモノを管理するのも六班の役割なのだ。

そんな場所であり班でもあるのに、六班に割とクリーンなイメージがあるのは、班長であるヘルメスの堅い雰囲気によるモノが大きい。

単に堅物とは言っても、慇懃無礼を地でいくオリヒメとは違い、ここの班長は本物の堅物なのだ。しかもその堅さは、誰にでも平等に振りまかれている。

その平等さこそが、クリーンなイメージを持たせているのかもしれない。

……まぁ、コンクリート剥き出しで鉄骨すら見える部屋なのに、豪奢な革張りのソファーが2つ置かれているだけという、彼女の執務室のセンスはどうかと思うが。

「……今、貴班は大変な状況だと思っていたが、わざわざなんの用かな？」

「まぁ、ウチは一班ほど被害は受けていませんでしたから」

面会を求めると、即座に迎え入れてくれた部屋の主の言葉にはそう返し、勧めてくれたソファーの片割れに礼を言って腰を下ろす。

突然の来訪に歓迎の色も拒絶の色も見せず、冷静な面もちを崩さない辺りは、さすがに1つの班を切り盛りするコードフェンサーと言えるだろう。

同じ女性班長であるカーリアンやオリヒメが、周りに感情がだだ漏れなのとは対照的だ。

七班のスズカさんはよく知らないが、聞いたところによると彼女もかなり放任主義らしいから、この六班の班長が一番しっかりした女性班長だというのは間違いないだろう。

「それよりもご無沙汰しています。今回の会議には班長も私も参加出来ず、申し訳ありませんでした」

「いや、あれだけの損害を被った直後に会議に出てこれたナナシが異常なんだ。シャクナゲにはお大事にとお伝えしておいてくれ」

あくまでも堅い口調を崩さない彼女は、落ち着いた物腰のままそう言うと唇の端を持ち上げる程度にそっと笑う。

その表情一つ取っても、私と同年代とは思えない……老成にも似た落ち着きを纏っている。

その引き締まった体付きや、ほとんど表情を動かさないところもいつもと変わらない。

その仕草一つ取っても不自然さは1つも見当たらない。

だから私もその言葉通りに受け取ったように、自然に言葉を返した。

「ありがとうございます。

――『ヘルメス』」

……もちろん彼女の言葉の全てをそのまま受け止めたワケではないけど。

『ヘルメス』……彼女については私があらかじめ多少は調べておいた。

私が担当したのは、単に私の方がカクリさんよりも断然古株だったから。彼女が黒鉄に来た時期はカーリアンやカクリさんとほぼ同時期だったからだ。

彼女が黒鉄に流れてきた経緯などを、当時来たばかりのカクリさんは知らないだろう。

私はその当時、すでに黒鉄に馴染んでおり、当然その時の状況も知っていたから、彼女についての調査は私が担当する事になったのだ。

その間にカクリさんは、彼女が持つ独自の情報網を駆使し、外部――白鷺や関西軍の動きを調べ、他に私とは縁の浅い人物を担当した。

私が六班の人物で調べたのはヘルメスとその部下であるコードフェンサー・『マルス』だけだ。

……何か厄介なところだけを担当させられた気がしなくもないが、関西軍に出来る限りの探りを入れているカクリさんも危険な橋を渡っているのは間違いない。

それに彼女に六班所属のコードフェンサー2人の調査を任せるのも気が引ける。

純粋に彼女が心配なワケではなく、彼女の策士ぶりからして何かしでかすのではないかと気が気ではないからだ。

それはさておき、今現在までに彼女が調べたところによると、外部組織であり、『狐』の有力な候補でもあった白鷺は、すでにその容疑からは外れている。

むしろ今の段階では真っ白に近い。

何しろ戦都・クリシュナに潜む反抗勢力である白鷺は、先の作戦

――我が黒鉄が戦都侵攻を企て、失敗に終わった時期と同じくして関西軍に潰されていたのだから。

抗戦むなしく徹底的に潰され、残党狩りによってメンバーの大半が殺されるか、取り押さえられたらしいからだ。

もし白鷺が――あるいはそのメンバーの誰かが関西軍と繋がっていたなら、確実に黒鉄を潰すまではそんな行動は取らない……というのが、私とカクリさんの共通する考えである。

そう考える理由は至極簡単だ。

白鷺は黒鉄に比べれば小さな規模の組織で、黒鉄のように武力による反抗など出来る規模ではない。つまり所在さえ分かっていれば、いつでも潰せるレベルの組織だという事が、そのまま白鷺が容疑から外れる理由となっている。

もし白鷺と関西軍が繋がっていたなら、彼の組織を関西軍が早急に潰す必要など全くない。

生かしておけば……多少の要求を聞いて飼っておけば、黒鉄という大魚の情報が得られる可能性があったのだから。

つまり今の時点で白鷺が潰されたのは、白鷺を生かしておく価値が関西軍にはなかったからという事だ。

むしろクリシュナ内でちょこちょこ反抗されて鬱陶しい相手だから、黒鉄にダメージを与えた隙に潰しておいた方がいい……そう考えたのではないかと思う。

しかし白鷺がいくらシロだとしても、今の段階で潰されたのはさすがに少し疑惑が残る。

カクリさんがそこに気付いているかどうかは定かではないが、私が関西軍を仕切る立場なら、白鷺はもうしばらくは生かしておいたと思う。

例え鬱陶しい相手でも、黒鉄の疑惑の目を逸らす為に、『白鷺という対象』は残しておく……私ならばそうした。

貴重な内通者（本命）を疑惑から遠ざける意味でもそうしただろう。

まぁ、ここまで考えるのはさすがに穿ち過ぎなのかもしれないけど。

……さておき白鷺が潰された事によって、私に割り当てられた『ヘルメス』と『マルス』の情報がより重要性を増してきたのは間違いない。

つまり情報班である六班が持つ情報と、防諜班である六班の中にある穴――内通者が突けるであろう穴を特定する事が重要になったのだ。

そしてもちろん容疑者として調べる必要もある。

……もちろんこうして第六班の本拠地に出向いてきたのは、それを調べる事が目的ではないワケだが。

「さて、アオイ。さっそくで悪いが、君がここに来た理由を説明してもらえないだろうか？ウチは機密を扱う部署だけに他班の来訪は歓迎出来ないのでね」

「はぁ。それは重々承知しているのですが、そうも言ってられませんでして……」

「……聞こうか」

私の様子から何かを察したのか、ヘルメスは元から冷静な表情をさらに引き締め、少し身を乗り出してきた。

変種にしては珍しい色彩である黒い瞳に、僅かに緊張の色を見せながら。

たったそれだけで場が引き締まっていくのがわかる。

彼女が持つ独特のプレッシャー……それを肌で感じつつも、私は最初に『建て前』を切り出した。

この建て前と言うのは、カブトさんやカクリさんも知っている『内通者』に対しての二・三・五班の現在の動きについて、だ。

それをただ淡々と述べる。

――そう、隠す事なく『アナタが疑われてますよ』と示したのだ。

カクリさんなら――いや、私も彼女の立場なら、もう少し気のきいたセリフと、言葉の並びを考えただろう。

ありのままの現状をそのまま伝えるような馬鹿正直な真似はしなかったハズだ。

あくまでも『ひょっとしたら自分が疑われているのかもしれない』と思わせるような言い方をしていたと思う。

そうして牽制をし、ボロを出すのを待つのだ。

ギリギリまで手札を見せつつも、切り札だけは隠し持つ。それも駆け引きのセオリーの一つだから、ひょっとしたらそうしたかもしれない。

……まぁ『ヘルメス』との駆け引きなんて、心臓に悪いにもほどがあるから、考えたくもないが。

だが、現状の私とカクリさんでは立場が違う。

彼女はあくまでも黒鉄第二班の副官であるのに対して、私はあくまでも『シャクナゲの部下でしかない』。

その違いは大きい。それはつまり、シャクナゲの意志だけが私の取る態度を決めるという事なのだから。

「……ふむ。君の言い方だと私が疑われている、というのを知らせてくれているように聞こえるが？それは君――いや、『シャクナゲは私達を疑っていない』、そう思ってもいいのかな？」

当然私の言い回しの不自然さには彼女も気付いたようだ。軽く首を傾げ困ったように笑う。

「ご賢察の通り、シャクナゲはアナタを疑ってはいないようです。その理由については私も知りませんが、それはまぁ、私にとってはどうでもいい事ですので。シャクナゲが無実だと思うなら私にとってもアナタ方はシロですから」

「君も相変わらず……みたいだな」

私の言葉にそう小さく笑いながらも、彼女は視線だけでその先――本題を促してくる。

『それを知らせにわざわざ来たワケでもあるまい？』

そう言いたげなその黒瞳に、今度は私が苦笑を浮かべた。

「それもご推察の通り。まずは現在の状況からお話します。現在、二班の副官と五班がアナタを――六班の動向を調べ監視しています」

「知っている」

あっさりとしたそのセリフにやや面食らいながらも、それは表に

出さないように気をつける。五班もカクリさんも下手な動きは見せていないハズだが、そこはやはり機密を扱う情報班、といったところだろうか。

班本部の周囲は、やはり普段から警戒が厳重なようだ。

それを改めて認識しながらも、務めて淡々と言葉を続ける。

「さすが。それは二班副官の調べた中では、アナタが最有力の『内通者候補』として上がったからです。情報班として普段から裏で動く立場が裏目に出た感じですね。彼女ではアナタ方の動向が掴めなかったようです」

「……」

「そこで事前にアナタ方を調べる役割を私が、六班が動き出したならそれを抑える役割を五班が、外部を調べるのをカクリさんが現在は担当しています。

――シャクナゲが離脱している間に動き出すであろう『内通者』……作戦上『狐』と呼んでいますが、これを今はアナタ方だとほぼ断定している状況だと言えますね」

「シャクナゲの長期離脱はまさか……」

「その通りです。『フェイク』ですよ。念入りに裏工作までして見せかけただけの嘘です」

彼女はやはり頭の回転は早い。僅かなピースで、今の状況を飲み込んでいく様子は、話していて気持ちがいいくらいだ。

もちろんそれは、知られる必要のない事まで悟られる危険が多い、という事とイコールで結ばれてもいる。そこには気をつけねばならないから、それはそのまま『油断ならない相手』ともイコールで結

ばれているワケでもあるが。

「ここに来た私の役割は、『狐を狩る側』の情報を情報班であるあなたに流し、今現在の各班の動きを知らせる事……つまりさっきの話です。
それにどんな意味があるのかは聞かないで下さいね。私も聞いてはいませんから」

「ふむ」

そう形ばかりは頷いてみせつつも、彼女は黙考を続ける。
いくらなんでも、私の言葉をそのまま受け止めたりはしていないだろう。
そんな甘さを持ったままでは、身内をも疑わなければならない事もある『情報班』の長は務まるまい。
だからこそ私は、彼女の思考がどこに行き着くのかを見極める為に視線を彼女から外さない。

彼女には分かっているハズだ。私相手にカマかけや取引が通じない、という事は重々承知していると思う。
私がすべきなのは必要な事を伝える事。
そしてその結果感じた事、知った事をそのまま持ち帰る事だけだ。
情報を選別する必要もなければ、情報を求める事もしない。

それはそのまま彼女からの言葉は余り意味を持たない事を指している。
彼女がウッカリと情報班の機密を話す事など到底期待出来ないのだから。
もしそんな真似をすれば、それこそ怪しむべきだ。
私がここで持ち帰るべきなのは、話している最中の彼女の様子と、

彼女が言葉を発する際の僅かな感情の揺れ、そんな程度のモノでしかなく、それ以上は求めてもいない。
そんな私に取引を求める事自体が無意味であり、カマかけなど失笑に値する。
それぐらいは分かっているだろうから、彼女は言葉もなく思考を深くする。

そうしてしばらくの黙考を続けたあと、彼女は軽く眉根を寄せると大きく息を吐いた。

「……我が情報班でも内通者について洗ってはいる。今もそれでゴタゴタしていてね」

「それはお疲れ様です」

「だが、シャクナゲはまた大胆な真似をするな。彼が抜ければ三班の戦力はかなり落ちるだろうに。彼がそんな賭けじみた真似をするタイプだとは思ってもみなかったよ」

「悪い芽は芽のウチに摘む、その為には多少の賭けも仕方ないでしょう？たかが雑草の芽だとしても、育てばいずれ大樹の源を食い荒らす事もあり得ます」

「その考え自体は否定しない。しかし、そんな賭けじみた真似はやはり彼らしくないと思うんだがね」

そう言って溜め息を吐くと、意味ありげな視線を向けてくる。
そんな彼女の言葉や視線にも、私に出来るのはただ肩をすくめる事だけだ。

先も言ったが、私にはカマかけも交渉の言葉も……そして『言葉には出さない無言の交渉』も通じない。
私には個人の意見など存在しないのだから。
だから主が何を考えているのかを想像出来ても、それを表に出す事などしない。
そんな私の様子に、彼女は呆れたような、でもどこか納得したような笑みを浮かべ、肩をすくめてみせた。

……恐らく、本当になんとなくだが、彼女は『狐』について目星を付けているのだろうと思う。
何故そう思うかと言えば、私のカンだとしか言いようがないが、このカンは外れていないと思う。
そしてシャクナゲもまた『狐』の心当たりがある、そう彼女は考えたのではないか。

こちらはカンではなく、確信だ。現にその心当たりがあるからこそ、私を体よくカクリさんの策に合わせるように六班に接触させたのだと思う。
その心当たりを情報班に当たらせる為に、だ。

……それが果たして『狐を確定する為』なのか、はたまた『狐の心当たりを信じたくないから、その可能性を潰す為』なのかは分からない。
シャクナゲには甘さがあるからこそ、私にも彼の考えがハッキリとは断言出来ないのだ。
だがまぁ、それは別に大きな問題じゃない。彼が甘さで決定を下そうが、黒鉄としての判断を下そうが、私にはどのみち従うという選択肢しかあり得ないのだから。

「……分かった。とりあえず情報には感謝する」

「いえ、こちらとしてもいらぬ諍いを起こしたくはありませんので。一応あなた方を監視はしてますが、敵意があってではないとご理解下さい」

「……いや、ウチの連中もワケの分からないまま他班に周りうろつかれ、多少ピリピリしていてね。ここは助かったと言っておこう」

その言葉を最後に、やおら彼女は立ち上がると、すでにすべき事を決めているのか、その表情はすでにいつも通りのモノで――

「待って下さい」

私はそんな彼女を慌てて引き留めた。

会談は確かに終わったが、まだ『用件』は終わっていない。

確かにシャクナゲに任された用事は済ませたが、まだ私自身の用事が済んでいない。だからこそ慌てて彼女を引き留める。

「まだ何か？もう十二分に現状は理解したつもりだが？」

「確かに私はシャクナゲの意向でこちらに来たのは否定しません。その用件に関してはもう終わりました」

「……」

「しかしどんな事情を含んだ情報（モノ）であれ、それを得るには見合うだけの代価（ペイ）が必要だとは思いませんか？」

私のその言葉に、ヘルメスの切れ長の瞳がスッと細まるのが分かる。

当然だ。そして至極普通の反応だと言える。

班長の意向で……班の為、黒鉄の為に来た私が、代価を求めるなんて筋違いもいいところなのだから。

それが分かっていても……そしてヘルメスに訝しまれても、私は気にもしない。ただニコニコと笑って彼女の反応を待つ。

ここに話を持ってきた事に代価を付ける事こそが、私個人の用事であり、ここでの目的の一つ……というよりメインの目的なのだから、ここで憚るつもりなんか全くない。

「……三班が他班に代価を求める、か。そこまで三班追い詰められているとは全く思えないのだが？

シャクナゲは健在であり、水鏡と不貫の二人もいる」

……実にナチュラルにヒナが無視されている。

「そうですね。今のところウチの戦力は他六班から抜きん出ているのは否定しません。ですから今回の代価といっても、それはあくまでも私に対するモノだと思って頂きたいんです。ご存知の通り、ウチのトップは無欲なものでして」

「……戯言を弄するつもりか？君には三班副官という立場があるだろう。どのような物言いをしようとも、それは変わらん。だが――」

そこまで言ってふと彼女は口を噤むと、その細い顎先へと指をやる。

その視線を僅かに上げ、そのままの態勢でやや考えを巡らせるかのように、１人コクコクと何度か繰り返し小さく頷いてみせ――

最後に『ふむ』とほんの少しだけ大きく頷くと、私へとその視線を戻した。

その瞳にあったのは、先ほどまでの頑なさではなく、私の言葉にそそられた僅かな興味と好奇心の色。

そして本当に少しだけ――好奇心に負けた自分を、僅かに恥じるような色。

それは私の望んだ通りの反応であり……『ヘルメス』としてのモノではなく、彼女個人の表情。

「……ま、まぁ、いいだろう。君の望みを聞こうか」

しばしの逡巡ののちそう言うと、僅かな吐息と共にそう吐き出して、小さく首を傾げる。

その内心では、彼女自身も自覚しているであろう悪癖――『好奇心を抱いたら抑えきれない』性格に対して、自嘲の笑みを浮かべているのだろうか？

『好奇心は猫を殺す』

ヘルメスにはこの言葉を贈ろう。

まぁ私自身は彼女に害意を持っているワケではないが、いずれこの悪癖が彼女の足を引っ張るような気がしてならない。

あくまでも冷静沈着でありながら、彼女は彼女で他の女性班長の類に漏れず、やはり『キワモノ』なのだ。

……その子供じみた好奇心とか、他には肝心な時に凡ミスをしてしまうところとか。

彼女がついさっきまで繰り広げていた思考を、そのままトレース

するのはさすがに困難な事ではあるが、恐らくは『私が何を言い出すか』、『シャクナゲに付きっきりの私が、個人で何を望むか』と言う興味が最終的には勝ったのだろうと思う。

彼女ならば直接的な物言いでも無碍に断りはしない……というよりも、断れないだろうと思っていたが、やはり事前に思っていた通りにコトが進めば小さく安堵の息を吐く。

――まぁ、独断だと言った事によって、ヘルメスの中で私の株は暴落したかもしれないし、今後うろんげに見られる事になるかもしれない。

どのみち今まで築いてきた信頼は、近い内に一度精算するつもりだったからそれはそれで構わないのだけど。

そして――

そんな事を考えつつも、私はヘルメスにあるお願いをして……彼女の執務室をゆっくりと後にした。

私のお願いの意味が分からないのか、しきりに首を傾げながらも了承してくれた彼女を後に残したまま。

――今回懸けたこの個人的な保険……私が築いてきた信頼を代償に懸けたこの『保険』が、今後もずっと役に立たない事を願いながら。

17・レイディ・ヘルメス（後書き）

ヘルメス……黒鉄第六班『情報班』の班長。
ヘルメスとは『ヘルメス神』（ゼウスとマイアの子であり、旅人や伝達の神）から取ったモノではなく、『ヘルメス・トリスメギストス』（伝説的な錬金術師。賢者の石を唯一手にした人物と信じられている）から取ったモノ。
またそこから生まれたヘルメス思想（世界の神秘を探求しつくす思想）……つまり隠された情報を得る思想、隠すべき情報を守る意から取った。
二十代前半のたおやかな女性であり、変種の中では珍しい黒髪黒瞳を持つ。（ちなみに、黒鉄内で黒髪黒瞳を持つ変種は、他にはシャクナゲがいる）
冷静沈着を旨とし、堅苦しい男言葉を使うが、細やかな気配りが出来る事から、女性コードフェンサーでも随一の人望を持つ。
しかし、本人は『情報班は隔絶され、隠蔽されるべき班であり、あまり表に出るべきではない』と考えており、人望がある事には微妙な心境。
そんな彼女の思想によるモノか、第六班は他班との繋がりが薄い。

スキル

テレパス・A（他者の深層心理に働きかけ、様々な感情を植え付けたり、思考を誘導出来たりする。対象がよほど忌避する事（自殺や親しい者を殺害するなど）を強要したりは出来ない。しかし、それ以外では強い意志を持たない者でなければ、彼女の能力から逃れられない）

身体能力・Ｄ（変種の中では低い部類。腕力だけならば既存種の男よりも劣る）

人望・Ｂ（年下男性に幅広く）

思考能力・Ｂ

状況把握能力・Ｂ＋（テレパス（他者の心理が多少読める事）によりプラス補正）

心眼・Ｂ（テレパスによる心の目。半ば本能的に備わる才能だが、彼女の場合は能力により培われたモノ）

好奇心・Ｃ（変なところで好奇心に負ける性格）

堅物・Ａ（班長連随一）

ルックス・Ａ（カーリアンやオリヒメと対をなす。隠れミス黒鉄アンケートでは年下男性票が大半を占める）

掃除好き・Ａ（掃除が好きなだけであり、部屋の内装にはこだわらない）

ドジっ子・Ｂ（時々信じられないようなミスをするらしい）

18・『ネームレス』（前書き）

少し番外編ぽい話になってますが、この話に初登場した『彼』視点の番外編は別にあります。
シャクナゲ視点とカーリアン視点がストーリーのメインであり、後はサブ的な形としてあり、全体的な傾向として補足や番外編ぽく感じられるかもしれません。

日曜日更新とありましたが、土曜日に更新出来ました。
次回は一週間後の日曜日『までに』更新致します。

18・『ネームレス』

「よぉ、アオイぃ～。なぁんの用でウチに顔出してんのよ？珍しい――つか初めてじゃねぇ？アンタがシャクナゲ抜きで他班本部に顔出すなんてよぉ」

ヘルメスとの会談を終え、それが上首尾だったと判断出来た事に一息ついた途端、そんな声をかけられ、私は思わず顔をしかめそうになった。

――面倒なヤツに会った。

そんな思いに思わず天を仰ぎたくなり、作り慣れた笑顔の仮面にヒビが入りそうになる。

場所が場所だけに、会いたくはなくても会う事になるかもしれない、とは思っていた。それどころか、ヘルメスとの話し合いが上手くいかなければ、こちらから『彼』の元へ出向くつもりですらあった。

ヘルメスに『お願い』を聞いてもらえなければ、次善策として『彼』に会うつもりではいたのだ。だが、あんまり会いたくない相手――交渉の相手にしたくない相手である事は間違いない。

ヘルメスとの話し合いが上首尾に終わり、その優秀さが確認出来、シャクナゲの依頼＋αがこなせた以上、会わないに越した事はなかったのに……

こうして向かい会う事になってしまったのは、偶然などではない

だろう。

声の主は振り向くまでもなく分かった。

その声の主は、ヘルメスよりずっと『要注意』と認識している人物のモノなのだから、よもや間違うワケがない。

「これはこれはマルスさん。お久しぶりですね」

振り返った先には予想通りの顔があった。

『風塵』のコードフェンサー『マルス』……『夜鶴』のヘルメスの部下であり、第六班最大戦力たる男が『立っているのも面倒くさい』と言わんばかりに、壁に思いっきり寄りかかりながらそこにいた。

ヘルメスがその能力の特性と身体能力の低さも相まって、支援や補助、そして『情報班』の部分に重きを置く人物だとすれば、彼はそんな彼女に代わって前衛に立つ前線指揮官と言えるかもしれない。

その能力は、コードのままで『風』を操るモノだと聞く。

多くの者が能力を把握しきれない『符号』を持つ中で、自らの能力を晒すかのようなコードを持つのだ。

『紅』や『蒼』といった、その色から能力を想像出来るコードを持つ者は多いが（カーリアンとオリヒメの事だ）、露骨に自身の能力を示すコードを持つ者は、全黒鉄を見渡しても彼と『不死身』のナナシくらいのモノだろう。

その能力を把握されないようなコードを持っているのが普通であり、手札を無闇に晒す2人が少数派なのは言うまでもない。

まぁ彼の場合は、パイロキネシス（発火能力）やエレキネシス（発電能力）が、変種の力の中でも割とメジャーな能力であるのに対して、風を操るという自身の力が非常にレアなモノだと言う自信か

らか、はたまた他の理由があるのかまでは定かではない。
だが、それだけに彼の名前は他班にも良く知られていると言えた。
『風塵』のそのコードと共に。
かつてはヘルメスと共に、『ゼフィーロス』という名前の変種集団のツートップの一角として、関西軍に抗っていた者として。

……そう、いい意味でも。また悪い意味でも、彼の名前は良く知られていた。

その風貌からすれば恐らく私とそう変わらない年代だろう。
それなのに――しかもコードフェンサーでもあり、ヘルメスの右腕たる立場でもあるのに、彼からは全くと言っていいほどに構えたところが見えない。
寝癖のように軽く跳ねまくったダークブラウンの髪も、眠そうな瞳も、そして猫背気味の背が面倒そうに丸められているのもいつも通りだ。今日もいつも通り上下共に黒のジャージ姿な事もあり、余計にだらしなく感じられる。
ヘルメスが黒のスラックスと真っ白のカッター、その上から黒のコートと、きっちりした服装をしていたのとは対照的だ。
だが、別にその『やる気のないところ』を私は苦手としているというワケではない。

「ま、俺はちょっと街を出てたかんね。……で？」

「……で、と言われますと？」

「とぼけんなよ。アンタがここに来た理由さ。シャクナゲ抜きで動くなんて珍しいじゃねぇの」

「今シャクナゲは療養中でして。ウチは今上も下も大忙しなんです

よ。書類仕事が溜まって仕方ありません」

「ふ～ん……」

私の返答にもつまらなさそうな欠伸を漏らし、マルスは私に小さく首を傾げてみせる。

そして相変わらず眠そうな瞳をショボショボさせながら、寝癖がついたままの頭をボリボリとかきむしると

「でもよ、シャクナゲの療養なんてブラフだろ？」

そのままの表情で、そう切り返してきたのだ。

構えたところも見せず、こちらを試す様子もなく、ただ事実を確認するだけの素振りで。

「……アナタは気付いていたんですね？ヘルメスは気付いてなかったように見受けられましたが」

「ま、ヘルっちはちょっと馬鹿正直なところがあるからさ。それよりそろそろ答えてくんないかなぁ？なんでウチに顔を出してんだい？」

……この男のこういった所が私は苦手なのだ。

思ったままに喋っているかと思えば、こちらの手の内を見透かすような事を平然と言う。

それに面食らう事もままにあるし、何より彼の言葉には、いつでもブラフやカマかけが含まれておらず、単に確認する色しか見られないのが厄介であり、いつもの飄々とした対応ではやりすごしにく

い。
　また彼の確認の言葉は、いつであれ大抵が真実を射抜いている事も私に苦手意識をもたせる。それだけに簡単に話を逸らす事が出来ないし、言葉に駆け引きが含まれていないから、裏をかく事も言葉による牽制もままならない。

　二班のカクリさんなど、彼に比べればまだ可愛いモノだ。彼女よりもマルスは余程扱いにくく、なおかつカクリさんみたいな可愛げも全くない。

　そう……はっきりと言ってしまえば、マルスは『不気味』なのだ。何を考えているのか分からないのに、こちらの考えだけは読まれているかのような錯覚を覚える。それでいて構えたところが全くない事が、何よりも『怖い』。
　彼はどんな時でも率先しては動かず、面倒臭そうにしているだけなのが余計に気味が悪く、掴みにくい印象を持たせる。
　その怠惰な姿勢からか、他班の者に『役立たずのコード持ち』なんて呼ばれたりもするが、そんな連中こそ私からすれば失笑モノだ。
　私からすれば、その存在だけで警戒感を呼び起こされるのは、全黒鉄を見渡しても彼と『アゲハ』、そして『スズカ』くらいのモノなのだから。

　スズカはその力の強さゆえに警戒してしまう。その能力を知るがゆえについ身体が構えてしまう。
　圧倒的な異能を誇る純正型を前にして、素面でいられるモノなどそういない。
　私が知る中でも彼女と対等でいられるのは、シャクナゲとカーリアンの２人だけだ。
　カーリアンも異端と言えるほどの強力なパイロキネシストだから、強大なるスズカには親近感を持つのだろうし、彼女が黒鉄に来たば

かりの頃からの付き合いがある。
そして周囲から距離を置かれるモノ同士という共通点もあるだろう。
また、シャクナゲは誰に対してでも態度が変わらないから、彼もスズカにも変わらず接する。
スズカも彼にだけは素直に従ってくれるし、彼には話しかけているようだ。

だが裏を返せば、この2人だけしかスズカとは向き合えていない、という事だ。
他の班長連……既存種であるカブトさんも除けば、ナナシやオリヒメでさえも、スズカに対しては萎縮したところが見受けられる。
それは他のコードフェンサーも然り、『私のような者』も然りだ。
それは生物としての本能――つまりは強者に対して感じざるを得ないモノだと言えよう。
それだけの力が『銀鈴』にはあるのだから。

対してアゲハはその逆だ。その力が全く読めないだけに警戒せざるを得ない。
いわば『未知』に対する警戒。『幻影』の如く全貌が見えない違和感と、掴みきれないモノを掴もうとするかのような錯覚……そんな不気味さを彼女には感じる。

そして彼……マルスは、力も能力も分かっているのに、こちらも同様に見透かされているような感じが警戒感を呼び起こす。
そう、彼の情報を知っている以上に、こちらの事も知られているような気がするのだ。

この内、だれが……どのタイプが一番厄介で、タチが悪いかについては議論の余地があるだろうが、『幻影』と『銀鈴』に並ぶ男が

役立たずなどと言えるのは、よほどお気楽な考え方だというのは議論の余地がないだろう。

「……内通者について少々。ヘルメスにもご報告と、少々お願いしたい事がありまして」

だから彼と話す時は、ブラフ（ハッタリ）だけでは話せない。多少の真実を混ぜて言うしかない。

言葉を濁す事も出来るが、それで変な懸念を持たれたりするのも面白くない。出来れば彼みたいなタイプとは好意的立場でいたい。

いかにやる気が見えなくとも、彼が六班の最大戦力であり、かつて変種達による自衛集団・『ゼフィーロス』を率いていたのは純然たる事実なのだから。

「やっぱ二班ントコのガキんコがちょろちょろしてんのは――ま、いっか。面倒くせぇし」

「すみませんね。あんまり大っぴらにはしたくないんですよ」

「アンタだけがこうしてウチに来てる時点で、結構大っぴらで怪しいと思うけどな？アゲハやコガネのヤツがウチを張ってんのもアンタの仕業だろ？」

「それはカクリさんの提案ですよ。カクリさんは、今の段階ではアナタ方を警戒しているみたいでして……」

やはり彼もアゲハやコガネの動きを掴んでいる。ヘルメスに監視されている事を伝えたのも、ひょっとしたら彼の仕業かもしれない。

そんな事を考えつつも、表面上だけは笑顔のままの私の言葉に、マルスはフンっと軽く鼻を鳴らしてみせた。

そしてまた大きく欠伸を漏らしてから、涙の浮いた怠そうな瞳のままで私を見る。
それは探るような色を一瞬だけ見せ――たかどうかを確認する前に、すぐさまいつもの気だるげな瞳へと戻っていた。
……そう、感情の揺れも、考えも押し込める『厄介な目つき』に。
「とりあえず派手な真似するにしてもウチは巻き込まないでくれや。ウチも二班ほどじゃねぇけど、戦力（人手）は万年不足気味なんだからよ」
「肝に銘じておきますよ、『風塵』」
「あぁ、それと一応言っとくか」
もたれかかっていた背を壁から離し、そのまま私が来た方向へと歩き出す彼は、やはり私をここで待っていたのだろう。
『偶然だな』とも『待っていた』とも言わないままでの会話の周到さ――私の考えの一端を、自分が何故ここにいるのかという事へと向け、最初から話の主導権を握った男は、やはり無感情で無感動のままだ。
ここでした会話に、最初っから興味なんかなかった……と言わんばかりのその態度には、敬意すら覚える。
自分からここで待っていたのに、いけしゃあしゃあと無感動を貫けるのは大したタマだ。
そしてその態度のまま……しかも面倒そうな姿勢のまま、立ち去り際にさも今思い出したかのように『本題』へと入ろうする。
全く、彼は無能のポーズが上手いのか下手なのか……はたまた上手すぎるのか、下手すぎるのかにはいつも悩まされる。

そんな愚にもつかない思考をしている私へと、ペタペタと室内用のスリッパを鳴らしながら、彼はだらしなく歩いてくると、そのまますれ違い――

「二班のガキんコがアカツキの事をチョロチョロと嗅ぎ回ってるぜ？」

「……アカツキの事を？」

「今回の件――アンタらの作戦とやらで、五班と正式に渡りがついたから、カブトにでもそろそろ接触するんじゃねぇか？真実を保管する場所としちゃ、アンタんとこのシャクナゲや、ウチの機密文書（シークレット・クラン）庫よりも、カブトは断然ガードが甘いからな。幸い『厄介なアゲハも側にいない』しよ」

――その物言いは引っかかった。

言葉だけをみれば、忠告を与えてくれているのだろう。それは分かる。

だが、その言い方だと『彼も真実を知っている』ようには聞こえないか？

確かにヘルメスとマルスが管理する六班の『シークレット・クラン』には真実がある。

いずれ来たる未来を思って、真実を残しておいた……と『あの人』から聞いている。

だが、『何故それを彼が知っている』？管理はしていても中を閲覧する権限などはないハズだし、何より中の文書は機密保持の為にパスワードがかけられ、その中身も暗号化されているハズだ。

自らが管理するモノが真実だと……黒鉄の出来た由来と、『黒鉄の本来の存在理由』、『コードフェンサーの本当の役割』がそこに残されていると何故知っている？

「……前々からお聞きしたかったのですが、あなたはどこまで知ってるんです？」

「なんも知らねぇさ。今の黒鉄は気にいってるからな。それが壊れるような事はなんも知らない」

――嘘だ。そう思った。

確信と言ってもいい。断言しよう。これはカマかけなんかではない。

なにしろ彼は『いつであれ確認しかしない男』だ。そう私が認知している事も知っているだろう。

それに彼の言葉こそが全てを知っている証拠だと感じるのも、決して穿ち過ぎではないと思う。

どこで知ったのかは問題ではない。『知っているという事実こそが今の全て』だ。

彼を最大級の危険と認識し、排除すべきだと意志を固め、意識を深め、内なる力を高める。

温厚な副官ではなく、黒鉄の守り手としての自分を解放していく。

自分自身にはコードを持つほどの能力はなくても、こんな時の為の力なら与えられている。

それを解放していくだけだ。

――その為に力を『あの人』……黒鉄の創始者たる『暁』のコードフェンサーから頂いたのだから。

「やめとけよ、『ネームレス』。アンタは、こんなトコで俺とやり合うワケにゃいかないだろ？ここにゃヘルっちもいる。もしヘルっちもまとめて潰すってんなら、俺も本気で抵抗すんぜ？」

だが、すれ違った後方からそう言った言葉が聞こえ――

私は高めていた戦意を少し抑えた。

「……本当にあなたは何でもご存知ですね？」

「アンタに言われたかねぇな？最も古いコード持ち『名無しのアオイ』」

その言葉は挑発するようでいながらも、彼は背を向けたまま、無抵抗を示すように諸手を上げていた。

だが、それに相反して、周囲を流れる風が私の肌を妖しく撫でる。締め切られた屋内に流れる僅かな微風。それが彼の意志1つで、荒れ狂う暴風と化すのは間違いない。

「アナタが班長だったら、情報班は恐ろしい部隊だったでしょうね？」

「ふん、何を言ってんだか。今の御時世じゃな、ヘルっちみたいな甘ちゃんが上に立つのが正解なんだよ。厳しさと冷静さだけで生きるにゃ、今の世界はきつ過ぎる。俺みたいなのは下から理想と甘さを支えてりゃいいんだ」

『俺みたいなの』には、何か含むモノがあったように感じた。それはきっと『俺やアンタみたいなの』といった含みなのだ分かり……私は戦意を完全に霧散させると苦笑を浮かべた。

そして彼にならってそのまま踵をかえす。

背中合わせのままの彼の言葉には、疲労感と現状に満足する心が見え、ちょっとした親近感を覚えたのもあるし、その姿勢が彼の本当の想いの現れだと思えたから。

そして、甘さがある班長を支える苦労をしているのは、自分も同じだから。

「アナタとは今後一生敵対しない事を祈りますよ。」

この言葉は忠告だ。甘さではなく忠告。自分に似た考えと立場を持つ男に対する忠告。

そしてネームレスとしての最後通告だ。

それは『これ以上深部に入り込むな』と暗に告げているのであり、敵に回れば『アナタの大事な誰かを私は躊躇いなく手にかけます』と、言外に込めた言葉でもある。

「あぁ、俺もさ。『アオイ』」

その言葉に返ってきたのは短い言葉。そこで敢えてアオイと呼んだ彼の賢明さに、少しだけ安堵しつつ、私はその場を後にする。

もう振り返りはしない。

私を『ネームレス』と呼び、真実を知っている男には見向きもしない。

真実を知りつつも、現状に満足していると言えるなら、彼はその真実を保管する『シークレット・クラン』の守り手としてはこれ以上ない存在だ。　その真実を守る為に……消えない過去を守る為に、彼は『風塵』のコードフェンサーとして戦ってくれるだろう。

それは彼が気にいっている『今の黒鉄』を守る事にも繋がるから。

そして、彼の弱味――本音が見えたのも大きい。

彼が『ヘルメス』を大事に思っている、と分かったのは収穫だった。

それが『真実を知った』彼が、私に対して支払ったペイ（情報）なのだとしたら、やはり全てが彼の思惑通りだったという感が否めないが。

私はアオイ。

コードを持たず、その役割も与えられていない名も無き変種。

黒鉄という体制を守る為に……そして黒鉄の在り方を維持する為に存在するネームレス（名無し）。

その為だけに今後の人生と自らの過去、１つしかない名前までも捨てた詰まらない男。

シャクナゲの副官である為に、持ちうるペイ（代価）の全てを捧げた『ただのアオイ』だ。

18・『ネームレス』（後書き）

ネームレス……コードを持たない変種。簡単に『名前（コード）を持たない』者達の意でネームレスと呼ばれいる。
黒鉄が本拠地とする廃都における一種の都市伝説の類。

その噂は主に黒鉄達をメインに広まっていったが、廃都の住民達でも噂だけは知っている話。
ただし、ほとんどの者達はそれほど信じてはいないあくまでも都市伝説。

曰わく――
コードの意味を持たず、人間である事を望まないネームレスは、黒鉄の暗部で暗闘し、その権力を握ろうとしている。

曰わく――
ネームレスは、かつてシャクナゲやスズカに敗れた武装盗賊が、素性を偽って入り込んでいる者達が大半である。

曰わく――
ネームレスはかつてアカツキが組織した黒鉄の暗殺者集団であり、裏切り者を粛正する殺人部隊の生き残りである。

曰わく――
ネームレスは、シャクナゲがいざという時の為に組織した部隊であり、黒鉄第三班の本拠地にある秘密訓練所で、毎日血が滲むような特訓を繰り返している。

などなど。

他の都市伝説としては、『第二班の本拠地では、人造パイロキネシス（ダミーカーリアン）を造る為の人体実験施設がある』、『アカツキは実は生きていて、黒鉄第三班の奥深くでその指揮を取っている』、『五班の本拠地である自動車工場跡地では、核をも上回る威力を持つ反物質の研究をしている』、『七班の銀鈴がほとんど人々の前に姿を見せないのは、天女か女神を彷彿させるほどの美女（これは逆に老婆という説もあり）であるのに、青い血が流れている為（緑という説もあり）』、『六班の黒鉄達の大半は、かつての日本の公安部の者達で構成されており、今は九州に押し込められた自衛隊と密に連絡を取っている』などなど多数。

もちろん根も葉もない噂が大半ではあるが、中には悪意を持って流された噂や、希望的観測が混じった噂、そして真実が織り交ぜられている噂もある……らしい。

19・トゥルー　オブ　トゥルース（前書き）

これについては作業報告？か何かに色々と書いてます。
当初よりかなり長くなりました。
加速しすぎなところを抑えたつもりですが、結構物語は加速し始めています。

19・トゥルー　オブ　トゥルース

――生きろ。

そうアイツに言われたのを覚えている。
その幾重にも瞳孔が重なった金の瞳で、真っ直ぐに見据えられながら。

――生きられるだけ生きろ。死ぬ瞬間まで生きろ。

死にたいと思った事がある。
死ねば楽になる……そう逃げに走りたい時があった。
いや、今でもたまに思う。

なんであの時、アイツの言葉を聞いちまったのか。なんであの時、アイツの『俺を信じきっていた』真っ直ぐな瞳を見ちまったのか……。

もしあの時アイツと話さなければ、今の苦しみや悲しみを抱える事もなく、『真実』を孕んだ狂った状況に悩む事なんてなかった。
アイツらに出会わなければ、『戦い』なんて似合わない真似をしなくて済んだ。
金の男の言葉が胸に楔（くさび）を穿つ事も、黒の男の悲しみを知る事もなかった。

――アイツは未来（この先）の為には必要なヤツなんだ。でも今

のアイツは頼りないし、壊れかけてる。俺がいなくなっても支えてくれるヤツが必要なんだよ。それをあんたに頼みたい。いつかアイツの事を、本当に大事に思ってくれる人が出来るまで……。

そう言って役割を与えた男の言葉に、今も俺は縛られている。

きっとこれから先、ずっと……ずっと縛られ続けるだろう。

俺が金の男の言葉による楔に捕らわれてしまった以上……そして黒の男に夢を重ねてしまっている以上、死に逃げる事すらも出来そうにない。

責任と夢と楔に雁字搦めにされ、溜め息を吐く日はこれからも続く事になるのだろう。

大きな秘密と、知らなければ良かった過去を知ってしまった以上、俺はこれから先もずっと『真実』にうなされ続けるに違いない。

……だがその程度なら、『真実』を得た代価としては余りにも安い代償だろう。

金の男は文字通り『命を賭けた』し、黒の男は『心を壊した』のだから。

俺の悩みなど、当事者であり、強力な変種である2人には遠く及ばない。

そこに疎外感を感じるよりも、『自分が変種じゃなかった事に感謝している』辺りが、我ながら最悪で……本当に救いようがない。

「カブトさん。二班の副官殿が面会を求めていますが……」

作業の合間にボーっと考え事をしている最中、部屋の外からかかったそんな声に、小さな溜め息を1つ漏らす。

――来たか。

なんの為に来たのかについては、心当たりがあり過ぎるぐらいだが、いずれは来るだろうと思っていた瞬間でもある。

そして真実を暴こうとする相手としては、予想の範囲内の相手だ。

そう思っていたからこそ、あのチビッコは前から苦手だった。

「……通しな」

そう返して、小さな苦笑を顔に貼り付ける。

アゲハがここにいない現状に、今になってチビッコにハメられたと気付くが、それも今となっては後の祭りだ。もうあまり腹も立たない。

かの少女にとって『狐狩り』の『狐』とは、始めから『真実』を指していたのだろう。

そして『狩り』とは、それを得る為の状況を作る事だったのかもしれない。

俺のガーディアンであるアゲハをここから引き離し、もう1つの真実の保管庫たる六班を掻き回す……その為に今の状況を利用したのだろう。

俺はそこに気づけてなかったが、果たして黒の友人は気づいていたのだろうか?そんな事を考えて軽く頭を振る。

例えどんな状況になったとしても、アイツが真実を語る事など有り得ない。

『絶対に有り得ない』。そう思い直して。

銀色の少女に、最初から狙われていたのは俺と六班。

『真実』そのものを守る三班に比べれば、まだ緩いこの2つだ。

それが分かっても悔しいなんて思わない。むしろ安心する。
あの二班副官が、こんなヤバい橋を渡ってまで求めるという事は、他の誰も『真実』には行き着いてはいないという事だから。

そんな事を考えている俺の目の前で、執務室の扉がゆっくりと開く。
その扉の先に、いずれはやって来たであろう『真実を求める者』の姿を映しながら――。

＊＊＊＊

廃工場の奥の一室、《五班本部執務室》の一番奥の席に座るカブトは、いつもよりずっと渋い顔をしていた。
そう……いつもみたいに、感情が浮かぶ表情をしていなかった。無表情というのとは違う。それは感情が全く浮かばないモノを指すと思うから。
だから今のカブトの表情を表す言葉としては、無表情という表現は当てはまらない。
言うなれば『仮面』だ。今の彼は、似合わない仮面を被っている。五班班長にして、この黒鉄でも最も古い人間としての仮面を。

「なんの用だ？」

その質問は蛇足だと思う。だが、彼はそう聞いてきた。私の用件くらい分かっているハズなのに。

「用もなく他班本部に来るのぁ感心しねぇな？ウチも暇じゃねぇんだ」

「……そう？……まぁ私も暇じゃないわ」

「なら用件に入ったらどうだ？今ならアゲハもいねぇ。禅問答なんかしてる余裕がねぇのはそっちだろ」

やはり、私がアゲハの不在時を狙って来た事には気付かれていたか。まぁ私が、この五班本部の工場跡地に1人で訪れた事など一度もないのだから、それぐらいは気付いていると思っていたけど。

「……なら単刀直入に」

何を聞くかはあらかじめ決めていた。答えが返ってこないであろう事も予想している。

それでも迷わずに私は疑問を発する。こちらには疑問の答えに見合うだけの手札がないのだ。

策など弄しようもない。

「……アカツキとは何者なの？」

だから最初から核心へと切り込む事にした。時間もないし、手札もない。何より職人気質なところがある彼には、下手に回りくどい事をすれば逆効果だろう。

確かに他にも聞きたい事は山ほどある。シャクナゲの事もそうだ

し、関西軍の事もそうだ。
何故関西軍は、力押しでカリギュラを落とさないのか？
何故関西軍は、散発的にしか攻めてこないのか？
白鷺や他のレジスタンス組織には、徹底的な弾圧と排除を遂行しているのに、何故『黒鉄だけは例外なのか』？

黒鉄の戦力は確かに他レジスタンス組織とは一線を画している。
自衛隊の置き土産や、独自にあちこちからの仕入れた武器があり、優れた力を持つ変種がいる。
恐らく最高ランクのパイロキネシストであろうカーリアンや、ゴキブリじみた生命力を持つナナシ、極めて高い身体能力を持つシャクナゲがいる。
何より真なる『新人類』とヴァンプ達が呼ぶ変種――純正型のスズカがいる。
彼女がいるというだけでも、黒鉄が単なるレジスタンスとは一線を画しているのは間違いない。
他の純正型は、多分そのほとんどがヴァンプ――しかも高位の地位を持つヴァンプになっているであろうから。その強い力ゆえに、より力を過信し、より力に狂ってしまっているだろうから。

だがそれだけでは、関西軍の動きは腑に落ちない。
圧倒的物量差と、兵員差を持ってすれば、カリギュラを落とす事ぐらいは『出来るハズ』だから。
たとえスズカがいたとしても、だ。
なにしろ関西の将軍自身も純正型だと聞くし、関西軍には他にも純正型がいるかもしれない。ならば、スズカ1人くらいは抑えられるだろう。

それをしない理由が気になる。
誰も気にしていないのか、気付いていないのかは分からないが、関西軍の在り方――他のレジスタンスに対する処置からすれば、黒鉄に対してだけは『ぬる過ぎる』。

……そう、確かにそれも聞いてみたい。その答えが聞けるなら、どんな条件を付けられても構わない。
恐らく彼は、その答え――あるいはそれに準ずるモノを知っているハズだから。
だけど、その疑問は抑えて、まずは一番聞きたかった質問をぶつける事にしたのだ。

私の中にある懸念、一番の最悪の可能性……『新皇＝アカツキ』の方程式を崩す為に。

決してこの推論は、誇大妄想から生まれたモノではないという自信があるし、そう的外れ過ぎる推論でもないと思う。
アカツキが黒鉄を起こす少し前に、『新皇』――真なるヴァンプの始祖たる変種が、病に寄り伏せっているという情報が行き交いだし、公の場に姿を見せなくなったのは間違いない情報なのだから。
そして、関東軍が拡大を止めたのもそれと同じ時期である。
そして2人共純正型の変種であり、共に一組織の頭になりうるだけの手腕を持ち、実際トップに立った2人。
そして2人揃って一切謎に包まれた存在だと言う事が、より私の中の考えに真実味を帯びさせる。
この共通項の多さは、こんな懸念を覚えさせるには十分過ぎるだろう。

なにしろこの懸念が当たっているならば、関西軍のぬるさも、黒鉄の徹底した秘密主義にも答えが出るのだから。

関西軍――ひいては将軍は、自分と同じく純正型であり、自分よりも強い力を持つであろう『新皇・アカツキ』を警戒して、あまり強くは動けないのではないか？

本当にアカツキが死んだと確信が持てないからこそ、甘くならざるを得ないのではないか？

黒鉄の秘密主義もそこに起因するとすれば、より現実味を増す。関西軍を牽制する為だけに、『アカツキの死』をあやふやにしているのでは？そういう可能性が出てくるのだ。

もちろん『新皇＝アカツキ』が事実となれば、黒鉄の存在意義――『ヴァンプの不当な弾圧に抵抗する』組織という理念にも反するだろう。

この国でのヴァンプの象徴は、あくまでも『新皇』なのだから。将軍は、所詮『関西のヴァンプのトップ』に過ぎないのだから。そんな存在が、ヴァンプに対抗する為の組織を作ったなど、笑い話にもならない。

黒鉄が空中崩壊する理由にもなりうるから、黒鉄は徹底した秘密主義を貫いているのだとしたら？

だからこそこの疑問を一番に持ってきた。

答えが返ってこなくても、多少の動揺がカブトから見られれば、私もこの推論は『ずっと胸に秘め、表に出さないようにしなければならない』。

黒鉄が崩壊すれば、カーリアンの居場所はなくなってしまう。そんな真似を引き起こす『真実』など、あってはいけないから。

――だが、カブトは私の疑問には答えない。その表情でも答えは

見せなかったのだ。
あくまでも冷静な面もちのままで嘆息を漏らし、フンっと小さく鼻を鳴らす。
それはなんというか……彼らしくない表情。というより、彼らしくない所作だったと思う。
なんというか、疲れたような……そして私を憐れむようなそんな仕草で、彼は虚空を見上げた。

「アカツキはアカツキだ。それ以外の何者でもねぇ。変わり者の変種で、スズカ以上に変な純正型。それ以外では有り得ねぇ」

この言葉は真実なのだろうか？断言する自信がない。
彼はお世辞にも嘘が上手いタイプではないと思ってきたが、この言葉が嘘だったとしたらその考えを改めねばなるまい。
真実だったとしても同様だ。
この私でも真偽が見抜けない表情をしていたのだから。

事実を淡々と告げているようにも見えるし、嘘を並べているようにも感じられる。
『隠す必要がない』と言わんばかりの表情にも見えるし、『隠し通す』という強い意志を秘めているようにも見える。

ただ間違いないのは、カブトが言った言葉は、黒鉄ならば誰でも知っているアカツキの姿だという事だ。
それは秘密でもなんでもない。私が調べたアカツキの情報のままであり、皆が知っているアカツキの姿だ。
そんな事が聞きたいワケじゃないのだけは間違いない。

「……私が聞きたいのはそんな事じゃない。……アカツキは……」

「アイツはアカツキ。最初のコードフェンサーで、それ以外の何者でもねぇ。強いてアイツについて、他のヤツらが知らない情報を知りたいってんなら、将軍の野郎とは顔馴染みってくらいか？」

「……将軍と？」

「ふん、そうさ。野郎とアカツキは、昔からのツレだったんだとよ。野郎がヴァンプの親玉になるまでは……だがな」

アゲハがいねぇ状況を作り出した手間賃だ、と最後に付け加え、カブトはジッと私を見る。

そこには様々な感情の揺れが――私には分かり得ない想いの数々が見て取れ……

私はそれ以上この事には触れない事にした。

ただ嘘を吐いただけならば、その感情はこうまで雑多なモノを含まないだろう。

誤魔化しに走っているだけなら、その考えは誤魔化す事だけに向けられ、こうまで色々なモノを含んだ瞳にはなり得ない……そう思ったからだ。

その感じからして、このまま言葉を続けても彼はこれ以上口を割らないだろう……そう思い、話の切り口を変える事にする。

それにアカツキが何者か、という事と同じくらい、彼については知りたい事もあったから。

「……アカツキはなんの為に今の黒鉄を……今みたいなあやふやな黒鉄を作ったの？」

「……」

「……軍事に特化したワケでもなければ……情報戦に特化したワケでもない。……ヴァンプに対抗する為だけなら……今の黒鉄はその目的に向かう手段があやふや過ぎる。……その目的は？」

「目的は――」

「……彼が関西軍に対抗出来るだけの組織を作れるのは間違いない。……彼には人を惹きつける力があったから。……でも今の黒鉄の体制は効率的とは言えない」

途中彼が口を挟んできても、私は気にもせず一気に言葉を吐き出した。そうしなければ、切り口を変えた意味がないと思うからだ。

私のペースに持ち込む為にも、彼には口を挟ませないまま、一気に疑問をぶつけた。

黒鉄は武器の調達からその扱いの訓練まで、ほとんどを自立してやっている。

医療施設（二班）も完備し、各種施設や武器などを整備をする為の組織（五班）を持つ。

発電などのエネルギー開発施設もあるし、情報を収集する為の組織（六班）もある。

でも、そのどれもが特化してはいるワケじゃない。

確かに暮らしやすい生活空間を作る上で、必要な施設が多数あるのも間違いないが、ヴァンプと対抗する為に――『その為に作られた組織』にしては甘すぎる。

ぬるすぎる。

そして緩すぎる。

ヴァンプを――関西軍を打倒もしくは圧倒しなければ、黒鉄やカ

リギュラの安泰など有り得ないのに、まずは生活空間の維持から始めている感があるのは、大きな違和感を感じざるを得ない。
確かに黒鉄に対しては、何故か甘い対応を取る関西軍だが、黒鉄は黒鉄でそれに負けないくらいに甘い組織だと思う。

まずは力。何を置いても力がなければ、いかに生活空間が安定していても、本末転倒もいいところだろう。

二班を前線に出さないのも、甘さと言えば甘さだ。
都市の防衛の為だけに、貴重な戦力――四班や五班を割くのも分からない。
六班が機密保持と情報戦の為だけに動くのもそうだし、七班が遊撃に留まるのもそうだ。

実質的な戦闘部隊――前衛部隊は、《一》と《三》の2つしかない。
他は守る事に主眼をおいた部隊であり、その支援の為の班だと言える。それらに多大な労力と資材を費やしているのが現状なのだ。

アカツキが本当に戦う為、守る為だけに黒鉄という組織を作ったのなら、もっと厳格な規律を作り、『戦わなくてもいい』という逃げ道など残すべきではない。都市に保護を求めてきた人々にも命をかけさせるべきだ。
私ならそうするし、その方が強い黒鉄を作れるという確信もある。
今の黒鉄よりも居心地は悪くても、今よりも数段レジスタンスらしい組織形態になるだろう。

戦いたくない人は労働だけに留まらせる？
何をふざけた事を……。遊びなら他でやればいい。善人ごっこがしたいなら、仮初めでもいい、平和になってからにすべきだ。

仲良しこよしの人権団体ならそれもいいだろう。
そんな甘い考えを、ひねた私もちやほやしてあげる。

――そんな甘さが許される世界だったなら。

だが、黒鉄はあくまでもレジスタンスだ。
レジスタンスのハズだ。絶対的に不利な立場にある、弱い組織のハズなのだ。
それなのに、このぬるさはなんなのだろう？

アカツキほどの男なら――純正型であり、これほどの規模を持つ勢力を作れる男なら、もっと効率よく『強い黒鉄』を作れただろう。
厳格な規律とその中での自由の保障。現状での緩い生活よりも、先を見据えさせる。傷を舐めあう馴れ合いは、後になって好きなだけさせればいい。
それぐらいでなければ、『本当なら生き残れないハズ』だ。
そんな組織も、彼ならば作れたハズなのだ。
今みたいな間怠っこしい形の黒鉄が作れるぐらいなのだから。

だがそんな私の疑問に、カブトは黙したまま答えない。
眉間に皺をよせ、重々しい溜め息を漏らすだけだ。
そのまま彼は何も答える事なく立ち上がり、佇む私の横をすり抜けると、執務室の入り口の方へと足を向ける。

「……タイムオーバーだ。今日はもう帰んな。アゲハのヤツがもう帰ってきたからよ」

そしてそう言って部屋の扉を開けると、無言で彼を見やっていた私へと顎をしゃくり、退室を促してきた。

――そんな誤魔化しで……と一瞬激昂しそうになった。
私は色々と分の悪い賭けをしてここにきたのだ。その程度の誤魔化しで引き下がると思っているのか……そんな考えを抱いたから。

だが、彼の言葉が『もう帰ってくる』じゃなく、『もう帰ってきた』だった事に気付き――私の背筋を冷たい汗が流れ落ちた。
その言葉の意味が浸透すると共に、それが嘘ではないと示すように、私を見やる視線をどこからか感じて。

「……みんなを欺くなんてイケナイ子ね。
でもその勇気だけは誉めてあげる」

私が視線に気付いた事を悟ったのか、そう背後から話しかけてくる声。それは甘い響きを乗せたモノで――
甘さを含んだ陶酔と共に、同等の恐怖が背筋を駆け上がる。

その声は、本当にすぐ後ろ……カブトの言葉の意味を悟ると同時に、すぐさま扉へと向かって歩き出している私の、すぐ後ろから聞こえてきたのだ。
それは『さっきまで私がいた辺りから聞こえてくる』という事に他ならない。
さっきまでは、確かに私とカブトしかいなかったハズなのに。

その声は、幻想的であり蠱惑的な響きを持っていたが、それと共に絶対的な強者のモノだと分かる存在感をも放っている。

それは今までも覚えのあるモノ――五班最強の『幻影』の声音だ。

言葉の意味を――誉めてあげるという目線の高さも共に――理解

するよりも早く、本能的に私はその声の主には相手にもされていない事が分かる。

「……その答えが知りたければ、『コードフェンサー』の存在する意味について調べなさい。フロイライン」

そう背後から告げる言葉に、振り返って問い返す勇気などなく（間違いなく、先ほどまでは誰も周りにはいなかった。私の知覚能力でも感知出来なかったのだ）、私はそのまま逃げるように執務室を退室した。

アゲハを相手に回すのはいくらなんでもマズい……そう思ったから。

それが出来るくらいなら、最初から六班と五班をひっ掻き回すような真似はしなかった。

なにしろ彼女は、ひょっとしたら『私の』カーリアンよりも強いかもしれない変種の1人だ。

私がこれ以上でしゃばり続けて、カーリアンまで彼女に目を付けられるのだけは、絶対に避けなければならない。

少なくとも、彼女の力が把握出来るその時までは。

だから私はそれ以上口を出す事もなく、カブトに言われるがままに執務室を後にする。

――背後を振り返る勇気なんて出せないまま。

最後の……恐らくはアゲハのモノであろう言葉を、しっかりと脳裏に刻みつけながら。

そして……

何1つ真実を得られなかった事に、より増した焦燥感に苛まれながら。

19・トゥルー　オブ　トゥルース（後書き）

今回は番外編や紹介ではなく、普通に後書き。

カクリとアオイが視点の場合、やはり物語はグングン進みます。
カーリアン視点では全く進んでなかったのに。ちょっと反省です。
確かに物語を加速させようとは思ってましたけど。

トゥルー　オブ　トゥルースは響きで決めました。意味的には繋がりがないですが、『真実』を強調する題にしたかったので。

途中経過……シンフォニアは全く進んでません。ノクターンも全く。
次回更新は次の日曜日まで、と目標だけは立てています。
どちらを優先的に見たいか等お聞かせ頂ければ、頑張り方を変えますが、今のところノクターンをとりあえず頑張る方向でいます。
大分先に載せる予定の話『ロング　セイ　グッバイ』……シャクナゲが将軍暗殺に向かう過去編は書けてるのに、次の話は手付かずとか……。
プロットを立てておいたら、書きたいシーンを先に書くクセがありまして。

これはまぁ先のお楽しみにして頂けたらと思います。番外編でありながら、本編にもつながる間違いなく山場の話ですから。

次はシャクナゲ視点……というより、これからはシャクナゲ視点とカーリアン視点が増えていきます。
誤字・脱字には気をつけておりますが、もしお気付きの際はご指摘よろしくお願いします。

番外編・カクリの考察《人物編1》

この国はかつて日本と呼ばれた単一民族による国家だった。
かつてとは言っても、そこまで昔の話ではない。ほんの数年前までの事である。
だが、『かつて』と表現しても違和感を感じないほどに、ずっと昔の事のように思えるのもまた事実だ。

まぁ単一民族といっても、正確に言えばアイヌなど小数民族もいたが、問題なく溶け込んでいる民族紛争のない国だったと伝え聞く。
昔起こった世界規模な大戦以降は大した紛争にも巻き込まれず、世界でも有数の経済大国と認識される裕福な国だったのだ。

だが現在のこの国は、幾つもの地域にそれぞれ別々の勢力が立ち、それがせめぎ合いあい争っているのが現状だ。
さながら内戦の様相を示しているワケではあるが、これは今まで起こっていなかった民族紛争が勃発したワケでも、宗教がらみの争いでもない。

『ヴァンプ』――

数十年前に生まれた『新たな人類』のうち、特に強い力持つ個体がこの国を分断統治しているからである。
このヴァンプという言葉は、当初自らの力に溺れ、欲に狂った変

種のみを指す言葉だった。だが現在ではその『元変種達』の力に魅惑され、それに従って権力を握る『力を持たない人間』をも指す言葉となっている。

かつてある男はヴァンプを指してこう言っていた。

『その力の強さで人を虜にし、狂わせるヴァンパイア共』と――。

そう言う意味合いでヴァンプと呼ばれているなら、なかなか的を射たネーミングだと言える。

そのヴァンプ達がそれぞれぶつかり合い、淘汰と支配を繰り返して、やがてそれぞれ地域ごとに1人の元変種をトップに勢力を形作るに至ったのだ。

私とカーリアンの出生地である地方は、『マスターシヴァ』という狂人が支配し、今暮らしている関西西部地方から中国地方は、『将軍』を自称する男が権力を掌握している。

他に日本という国が、いまだその体面を維持している『九州・四国』を除けば、『北陸地方』、『中部地方』、『東北地方』、『北海道』、そして『関東地方』にそれぞれ勢力が立ち、まさに群雄割拠の体を様していると言えるだろう。

中でも関東一帯と中部地方の東部、東北地方南部を勢力圏とする『関東軍』……『神皇軍』は、その勢力範囲も広く、『日本最初のヴァンプ』である『新皇』を頭に掲げた最大勢力だと言えよう。

先の考察でも述べたが、現在新皇には『死亡説』が流れている。それでも各地方軍は『神皇軍』を警戒し、それぞれが不可侵条約を結んでいるのだ。その辺りからしても、いかに『神皇軍』と『新皇』が強大な影響力を持つかが伺えよう。

なにしろ混乱期にあったとはいえ、一番最初に変革を起こした変種が『新皇』であり、それは『一番最初に変革を起こせるだけの力を持ったヴァンプ』と言う事に他ならない。

他の地域の勢力がその名前を恐れ、警戒するのも分かる。

他の勢力は、新皇が広げた混乱に乗じて立ち上がっただけの勢力であり、それはそのまま自分達だけでは、１つの国を覆す事など出来なかったという事なのだから。

私はカクリ。私がこれを記すのは、単純に私にはそれしか出来ないからである。

私は強大な力を欲しても手に入れられない存在。ヴァンプ達に力で抗う事が出来ない弱き変種……。

ただの『考察者』。

ただ世界を見て、その知識と情報を力とするしか出来ない弱き女。

『紅』にもらった名前を唯一の誇りとするただのカクリだ。

まずは、我が黒鉄が敵対する関西の『将軍』についての情報をまとめておく。

本名はサカガミ……シャクナゲがそう言っていたのを聞いた事があるから、この情報に間違いはないだろう。

自ら『関西地方から立ち、やがて全国を統べる将軍』と大げさに名乗り、関西統括軍……関西軍を立ち上げた男である。

実は関西軍とは言っても、中国地方の方が実質的な統治面積は広かったりする。

関西東部は中部地方の『獅子』、北陸地方の『軍神』、そして『マスターシヴァ』の勢力が入り乱れる紛争多発地帯で、将軍の勢力が地盤を持つ地域は関西の西部に限られるのだ。

彼は新皇に次いで力を示した第一世代のヴァンプと言えるだろう。
幾多の権力争いを繰り返し、紛争絶え間ない関西西部と中国地方のヴァンプ達を掌握したヴァンプ。
そしてその後、軍勢を率いて日本という国の支配地域を、四国と九州という地域まで押し込めたのが『将軍』である。
彼の統治法は非常に分かりやすく、『弱肉強食』を法の中核に据えている。
知力であれ、腕力であれ……あるいは世渡りといったモノであれ、優れた力を持つ者が上に立ち、人々を好きに支配するのだ。法など実際無きに等しく、上の者の言葉こそが法と言っても過言ではない。
その支配体制のピラミッドの頂点に立つのが将軍なのである。

その能力については未確認ではあるが、参考になりうる資料はある。
かつてシャクナゲが将軍暗殺を狙って襲撃をかけた事があったのだ。
三班を率いてではなく、シャクナゲ個人の独断で、将軍の本拠である『光都・カエサル』へと向かったのである。

……アカツキが死んだその直後に。

しかしカエサルの高官達を何人も殺し、将軍を後一歩というところまで追い詰めたところで、さすがの彼も将軍に撃退されたと聞く。
その話からしても、将軍個人の力はシャクナゲと互角以上であるのが明らかであり、強力なヴァンプであるのも間違いないだろう。

もっとも1人でカエサルに入り込み、何人もの高位ヴァンプ達を始末して、将軍の元まで辿り着いたシャクナゲもまた、恐るべき変種といえるであろうが。

この件以来、『黒鉄のシャクナゲ』は、関西軍発行では最高額の賞金首となり、各地方にまでその名を轟かせたのだ。

現在の関西西部は、このシャクナゲの所属する我々『黒鉄』と、将軍率いる『関西軍』の睨み合いにより均衡が守られている、と言えるかもしれない。

関西以西を代表する変種……それが将軍とシャクナゲだ。

シャクナゲと彼が率いる『黒鉄第三班』は、カリギュラに侵攻してきた関西軍にとって強大な壁となって立ちはだかり、各地に潜むレジスタンス活動の機運を盛り上げてきた歴戦の部隊だ。

現在ではカーリアンやオリヒメ、ナナシなど強い力を持つ変種達が多数いるが、その体制が整ったのは比較的近年になってからである。

それまでは黒鉄と言えば『シャクナゲ』であり、他に知られていた変種と言えば『スイレン』と『スズカ』くらいのモノだったと言える。

次に今までに調べ得た『シャクナゲ』の情報についてまとめてみる事とする。

彼の存在は我が二班の安泰を測る上でも無視出来ない存在であるし、関西の情勢、近代の出来事を振り返る上でも外せない存在であるからだ。

シャクナゲ……黒鉄の前身、『神杜解放戦線』、そして『神杜死守連合』時代から最前線に立っていた男。

解放戦線時代には、神杜市を武力制圧した関西軍に対し、有志を

率いて市街に潜み抗戦し、徹底したゲリラ戦でもって関西軍を神杜から撤退に追い込んだ。その後も、解放戦線時代の面子をそのまま率いて、何度も関西軍からの派遣部隊を撃退した神杜市の英雄。
決して仲間達には戦いを無理強いせず、自らの姿勢で仲間を惹きつける黒鉄のカリスマ。
日本という国を守る自衛隊をも撤退に追いやった関西軍を、ゲリラ戦と奇襲を駆使し何度も打ち破った神杜の守護者。
それゆえに『黒鉄のシャクナゲ』という呼び名は、組織やコードを指す言葉ではなく、彼の2つ名としてそのまま用いられる。

『シャクナゲは黒鉄そのもの』

私は誰かがこう言ったのを聞いた事がある。それは実に的確な表現と言えるだろう。
黒鉄と言えば誰もが思い浮かべる男……それがシャクナゲだ。

ここまでの表記だけなら、彼は非の打ちどころがない存在に思える。
だが私は、彼に対してイマイチ信用が置けない部分があるのだ。
彼の事は別に嫌いではない。むしろ感謝しているくらいだ。
彼がいなければ私も私の可愛いカーリアンも、今この街にはいなかった。今のような住み心地のいいカリギュラは作られなかっただろう。
ぬるま湯のような甘い印象も捨てがたいが、今みたいな黒鉄でなければ、カーリアンは今みたいな快活な性格にはなれなかっただろう。
昔の怖いカーリアンのままであったハズだ。
だから彼には深く感謝はしている。

しかし、シャクナゲには謎が多過ぎる点が私には気になる。

シャクナゲの能力がいまいち不透明な点もそうであるし、出生がよく分かっていない点もそうだ。
関東の方の生まれ、というのは信用出来る筋からの情報だが、それすらも確信が持てない。
仮にもしこの情報が本当だったとしても、それはそれでまた謎が深まる事になる。

何故関西に移ってきたのか？
争乱に包まれた関東から逃げてきたなら、何故関西ではレジスタンスとして活動する事にしたのか？
関東からは逃げてきたのに、何故関西では戦う気になったのか？
非常に興味深く、それゆえに警戒感が呼び起こされる。

彼には力があるからだ。恐らく物質形成能力の一種であろう特殊能力と、変種の中でもかなり上位に位置する身体能力、そしてその知力。
何より人を惹きつける『魅力』。
その全てが私に危機感をもたらせる。

シャクナゲは権力や富を望まないから余計に……。
レジスタンスと言っても、その実質は自分が将軍に代わって権力を握ろうとする輩が大半なのに、彼はそれを望まない。
『黒鉄のトップに』と皆から望まれた時――アカツキが亡くなった後も、リーダーになる事を望まず辞退した程だ。
彼が辞退したからこそ、他にリーダーになる者もおらず、それぞれの班が独自に動きを見せる現在の体制になり、今の黒鉄がある。
そしてそんなシャクナゲが一番危険な任務を負い、命を懸ける姿勢を見せ続けるから、他の黒鉄達も命を顧みず戦うのだ。

何を目的に戦うのだろうか？

なんの為に命を懸けるのだろうか？

非常に興味を惹かれ、それゆえに警戒する。
私まで彼に『惹かれる』のは、考察者として好ましくない。
それでは本末転倒だ。観察対象に感情移入して、観察が続けられないなど、間抜け以外の何者でもない。

もし、彼の目的を知る事が出来れば、それは大きな手札になるだろう。
あくまで黒鉄である事に固執し、権力に対して否定的――嫌悪感すらにじませる理由が分かれば、彼の過去も分かるかもしれない。
それはひょっとしたら、謎の多い『アカツキ』という男についての手がかりになるかもしれない。

次の考察はアカツキについて考えをまとめてみる事とする。
黒鉄最強のシャクナゲを従え、将軍に完全に支配されかけた地域に波紋を起こした男。
彼について分かれば、私の行くべき道も見えるかもしれない。
そうすれば私が取るべき道も見えてくるだろう。

20・レジェンド　オブ　シルバーベル2（前書き）

2って言うのは、ナイト&デイ2の2と同じです。
一回間違えて消してしまったので（カクリの考察3を入れ忘れてたのに気付き、それを入れようとして消してしまった）、少し変化させてアップしました。

だから2はツゥーではなく、セカンドと呼んで頂けたら幸いです。
気分的に。
次回更新は今後作業報告に載せるように致します。

20・レジェンド　オブ　シルバーベル2

――狂気があった。
ただ狂気だけが俺の全てを囲んでいた。

狂気狂気狂気

力を求めた人々。

それらの人々の全てが狂気に彩られ、そんな人波の中でただ1人……たった1人で恐怖と絶望に震えている。

たった1人狂えないまま、欲望に流れられないまま、ただあるがままで、狂人達の欲望に溺れている。

狂えたならどれほど楽か――欲望に溺れる事を良しと出来たならどんなに心地よいか。そんな空想すらも許されない狂気と、世界中に満ちるヴァンプ達の産声に包まれている。

それでも俺を覆う世界は、ただ無機質な音を上げて周り続ける……軋み続ける……歪み続ける。

この世界を彩り、現実を回す歯車の声だけが脳裏に響く。

――歯車が回る音が脳髄を揺さぶる。

カラカラと虚ろに。

――歯車が軋む音が身体を掻き抱く。

ガラガラと朧気に。

――歯車が歪む音が心を繋ぎ止める。

ゴロゴロと嘆きの声で。

こんなハズじゃなかった。

こんな事になるハズじゃなかった……そんな言い訳を繰り返してみても、それになんら意味はなく、なんの価値も生まれない。

ただ心が言い訳をする事に疲れ、軋み磨耗して、歪み折れていくだけ。

絶望が心の許容量を越え、それが決壊しても、止まる事のない狂気のロンド。産まれたばかりのヴァンプ達が起こした惨劇が、目の前で繰り返される。

ゆっくりと自分の意識が浮上し、現実に戻るまで終わらない永遠の悪夢の繰り返し。オートリピートする『繰り返される始まりの夢』。

視界が白く染まっていくのを感じて……やっと浮上していく思考に安堵して――

狂気に、運命の鎖に雁字搦めにされた心が軽くなったような気がする。

ただ軽くなったような気がするだけで、壊れた心が癒える事はないと分かっていても。

この夢の終わりだって、次に繰り返しの夢を見るまでの、一時の安息に過ぎないと分かっていても……。

＊＊＊＊

窓から射し込む光に目を覚ませば、見慣れた少女が脇のパイプ椅子に腰をかけていた。

ゆったりとした感じのニットに包まれた灰色の髪は、少し長めのウルフボブで、ジッと自らの手元を見ている瞳は紺碧色の海のモノ。
間違いなく目立つ要素を持つ美少女でありながら、間近にいても希薄で儚い印象を受ける。
そんな少女を確認して、改めて辺りを見渡した。
まぁなんでここに彼女がいるのかなんて、そう疑問に思うほどのモノではないかもしれない。
ここには今、俺が『入院』しているし、唯一彼女と仲がいいカーリアンもこの建物の中にいるのだ。
そう考えれば、彼女――スズカがここにいてもそれほどおかしくはない。

まだ白んでいる視界と、僅かに鈍痛が続く頭。寝起きだからか身体も重い。
仕方なく、その寝転がった姿勢のまま、脇に腰掛けなにやらやっている彼女を見やる。

どうやら趣味である刺繍をしているようだ。時折何かを考えこむかのように刺繍をしている布を掲げてみせ、そしてまたチクチクと針を進めていく。
脇には色とりどりの刺繍糸と、その色の数だけ用意された刺繍針。その横にある剣山みたいモノも彼女の刺繍道具だ。
その灰色の髪の毛に乗っかった、白いファーがついた大きな同色のニットが、時折ピョコピョコ動いている辺りからして、お得意の首をカクンと傾げるポーズでなにやら悩んでいるらしい。
彼女は悩んでいる時も、他人に何かを確認する時も、そして喜びや悲しみを現す時も、首を傾げてみせるのが癖だったりする。
その時の首の角度や表情、付属する仕草などは千差万別だけど、昔から彼女はそうやって自分の感情を表現する事が多い。
とかく表情が薄い彼女は、その首を傾げる仕草と共に、自分が何

を考えているかを現すのが癖だった
別にカクリのように、表情を消す事を心がけているワケではない。アイツの場合は、表情を消す事によって自らの心を隠しているのだろうが、スズカのそれは単に薄いだけだ。
実際のスズカは、分かりにくいだけで様々な表情を持っている。まぁそれを読み取れるのは、昔からの付き合いである俺と、こっちに来てから仲がいいカーリアンくらいのモノだろうけど。

「起きた？」

さすがにボーっと見ていたら気付かれたらしい。脇に置かれた布地には、鎖状に螺旋を描く形で幾何学的な模様が描かれている。
今は何を象っているのか全く見えて来ないけど、やがてなんらかの形になるのだろう。

「いつからいたんだ？起こしてくれれば良かったのに」

「寝てるところを邪魔しちゃいけないと思った。それにさっきまでカーリアンもいたけど、起こしてなかった。だから私も起こさない事にした」

――私が来たらカーリアンは慌てて出て行ったけど……とスズカ。

どうやら本当に熟睡していたようだ。目が覚めるまでスズカがいる事には気づかなかったし、カーリアンが来ていた事も、出て行った事にも全く気づかなかったのだから。

……こんなに熟睡した事なんて何年ぶりだろうか？
それだけしっかりと、過去という悪夢に捕らわれていたんだと思うと、少しだけ笑いたくなる。

その笑いは、自嘲的なモノを多分に含んだ笑いにしかならないだろうけど。

「夢を見ていたの？」

「いや……」

「シャク、少しだけ泣いてた」

「……」

本当に情けない。今度は情けなくて涙が出そうだ。

「夢を見て泣くほどもう子供じゃないよ」

「そう」

思わず口をつく強がりにも、スズカはいつものように軽く首を傾げてみせるだけだ。

じっくり見なくても分かる。今の彼女は笑っているのだろう。表情が薄くて分かりにくいけど、暖かさが少し滲むほのかな笑みを浮かべている事だろう。

言うなれば、背伸びをしたがる弟を見る姉のような表情をしているに違いない。

「……なんか格好つかないな」

「そう？」

言葉と共にスッと伸びてくる細い指先は、俺の額にかかる髪を梳

いてくれる。
梳かれて初めて分かったが、どうやら少し寝汗をかいていたみたいだ。少し髪の毛が額に張り付いているのを感じ、僅かな気恥ずかしさを覚える。
だけど彼女がしたいようにさせた。

これも彼女のクセだ。俺やカーリアンくらいにしかほとんどしないけど、彼女はよく他人の頭を撫でたがる。
カーリアンはどうだか知らないけど、これをされるのはさすがにちょっと情けない。
なにしろスズカは、見た目も実年齢も俺よりも幾つか下で、確かカーリアンと同じだったハズだ。
そんな少女に頭を撫でられるのは、さすがに恥ずかしい。
でもこれを嫌がったり、手を跳ねのけたりすると、本当にスズカは悲しそうに顔を歪めるから、受け入れざるを得ないのだ。

それはスズカからしたら、彼女の力――彼女が操る『斥力』を怖がっているように感じられるのかもしれない。
彼女はその体から斥力……対象をはねのける力を放つ。
こう言えばそれほど強大な力ではないように感じられるかもしれないが、その力は圧倒的なモノだ。
手をかざして『思う』だけで全てを弾き飛ばし、自らの重力を斥力で中和するだけで宙を浮く事も出来る。最も重力などの自然的な力を中和するのは、単に斥力を操るだけよりも疲れるらしいけど。
また銃弾なども彼女の身体には届かない。彼女が構築する『斥力』を操る世界では、ただの火薬で飛ばされる程度の勢いなど、あってないようなモノだ。
一点に絞って放たれた斥力は、それだけで不可視の弾丸に近い力

を持つし、握った金属塊は火薬の爆発力の代わりに、斥力の力を得て大砲の砲弾にもなる。
並みの身体能力では、その体から放たれる斥力により近づく事すらもかなわないだろう。

その斥力を最も上手く、最も効率的に使えるのが彼女の『両手』だ。身体からも放てるが、より自在に操れるのがその細い指先。
今俺を撫でてくれている指先も、ちょっと彼女が力を使うだけで、俺の頭を柘榴に変えるだけの力を放つ。

それを怖がられていると感じるのか、撫でられるのを拒否された時だけは、顔を歪めて本当に悲しそうな顔をする。
きっとあのカーリアンでも、スズカが悲しそうに顔を歪めるのをみれば、黙ってその頭を差し出すだろう。

「汗、拭いてあげる」

「いいよ、自分でやる」

やはり汗が気になるのかそんな事を言い出す彼女に、俺は一応拒否を試みる。

「……拭いてあげる」

「タオルだけ貸して――」

「……拭く」

「頼むよ」

まぁ、無駄なのは分かっていたけど。
なにしろスズカは、本当はとても寂しがり屋で、他人に構いたくて、そして構って欲しくて仕方がないようなヤツだから。
純正型でさえなければ、たえず人の輪の中に入っていただろう…
…そう思わせる性格をしているから。

そんな彼女が、物質も他人も遠ざける事しか出来ない力を持つなんて、本当に神ってヤツはどうしようもなく腐ってる。そして間違いなく歪んでる。

アカツキの『力』よりも、カーリアンの『炎』よりも……俺のモノよりも、スズカの『斥力（ちから）』こそが彼女には似つかわしくない。

だって彼女は寂しがりで、他人に構いたがりで、1人が嫌いな本当に優しい少女なんだから。

――ただ『純正型』に生まれついただけに過ぎないのだから。

――かつての彼女は『鬼姫』と呼ばれていた。
奥羽の鬼姫・スズカと。
それは、本名である鈴華を『鈴鹿御前』という鬼にかけた2つ名であり、今はニットに隠されている小さな2つの突起が、鬼の角の

ように見えるからだろう。

その角こそが彼女が純正型である証であり、彼女を狂わせる原因だった。

俺が出会った時――初めて出会った時の彼女は、本当に鬼のようだった

彼女に取り入ろうと画策する者、彼女を討って名を売ろうとする者、彼女の名前をかたり好き勝手しようとする者達の全てを、たった1人で殲滅し、たった1人屍の山深い頂で吠えていた。

本来ならまだ中学生に上がったばかりであろう少女が、たった1人で『ヴァンプ』達の屍の山を築いていたのだ。

「……あなたも？あなたも私を傷つけるの？」

そう言った彼女は、虚ろな瞳でこちらを見やる。血も肉も一切その体を汚してはいないのに……その時の彼女は濡れていた。

自身の紺碧色の瞳から流れ出る涙で濡れていた。

勝者である彼女が、ポロポロと涙を流して泣いていたのだ。

思わず呆然と見やる。悲しみにくれる少女を。

そんな無言をイエスと捉えたのか、少女はその右手をかざした。

「1つだけ、1人だけで良かった。たった1つ――たった1人でもいいから欲しかった。変種としてじゃない、人である私を見てくれるモノが……私は欲しかったッ！それだけで私は良かったのにぃ！」

そんな慟哭の声と共に放たれる荒れ狂う力の波。その力場に全く抗えず、遥か後方に吹っ飛ばされる。

なんとか態勢を立て直し両足を踏ん張ってみせるが、僅か一瞬で

自分より年下の小さな少女に、軽く数十メートルは吹っ飛ばされたのだ。

モノの見事に――無様に吹っ飛ばされた。

後にも先にも、あれだけ見事に吹っ飛ばされる事はもうないだろう……そう思うぐらい見事に。

「それでも誰も私を見てくれない！私の心を見てくれない！力しか見てくれない！私はこんなの欲しくなんてなかったのにッ！！」

止まらない力の奔流。立ち上がる俺に凄まじい勢いで迫る『少女』。

地面からは土や石ころが俺に向かって舞い上がり、大地を削りながら灰色の少女は力をぶつけてくる。

……涙でその顔をぐしゃぐしゃにしながら。

泣き疲れ、枯れて、かすれてしまった慟哭をあげながら。

「私は普通の心を持ってるのに！みんなと同じように嬉しかったり、悲しかったりするのにッ！普通に生きて、普通に笑いたいだけなのに！私はただ……ただ『こんな風に生まれてきただけなのにッ』！」

振るわれる小さな拳により、大地に大きな穴が穿たれる。

その拳の大きさには見合わない巨大なクレーターが刻まれる。

蹴り足が大地に軌跡を作る。

本来の身体能力はともかく、力を使った彼女のそれは、俺をあっさりと凌駕していた。

その力が斥力によるモノだとはすぐに気付けたが、全く対処法は浮かばない。

なにしろ不可視であり、その力の限界も見えない。どの程度のベクトルまで使いうるのかが分からない。

何もかもがむしゃらで、やけっぱちに近い動きだったから、殺そうと思えば『力』を使うまでもなく出来ただろう。
遠距離から石ころや岩を飛ばされていたらどうにもならないが、接近してくるなら簡単だ。
最接近した時に一度彼女の攻撃をかわせればそれでいい。
斥力の余波が体を押すだろうが、指先さえ届けばチェックだ。その細い首――頸骨を掻き取るだけで彼女の地獄は終わる。
直線的すぎる動きは、俺にはなんとか把握出来るモノだったし、なんとかなっただろう。

『普通に生きて、普通に笑いたいだけ』

『こんな風に生まれてきただけ』

そんな言葉を聞かなければ。
彼女が泣いてさえいなければ。
俺が同じ変種でなければ。

そして少女のその考えが理解出来なければ、きっとあの時に全てが終わっていた。

悲しかった。ただ悲しかった。そんな少女を見ているのが悲しくて、虚しかった。
彼女はそんな大それた事を願っているのか？そんな過度の願いを抱いているのか？叶わないモノを望んでいるのか？
彼女も俺もそんなに苦しまなきゃならないほど罪深いのか？そこまで赦されない存在なのか？

そう思えば、気付いた時には――俺は彼女の拳を両手で受け止めようとしていた。
荒れ狂う力の流れに逆らって、その両手を取ろうとしていた。
そんなバカな……自殺行為に近いそんな真似をしていたのだ。

そして――

「……たった1つだけ？たった1人だけでもいい？そんな悲しい事言うなよ」

「……なんで今の私に近づけるの？なんで――」

俺を弾き飛ばそうとする力の奔流に、筋肉も骨も皮膚も血も全てが軋む。
皮膚が破け、血が霧のように舞い散る。骨が軋む不快な音が体を震わせる。筋肉の繊維がブチブチ千切れる音が聞こえる気がする。

それでも少女に向かう足を止める気はない。
意地だった。色々悩んでいて、それでも先に進もうとして……結局は蹲いてしまった俺の最後の意地だった。
この少女を、『俺みたいにはしたくない』という意地だけで身体を張った。
元よりこの身に惜しいモノなんて何もなかったから、簡単にそんな真似が出来た。

「一杯作ればいいんだ。自分の大切も、自分を大切にしてくれるモノも、一杯作っていいんだ！」

「……なんであなたも泣いてるの？」

「だって俺達も生きてるんだから。人として生まれたんだから。そんな当たり前くらいたくさん欲しがったっていいんだッ！」

最後の一歩、彼女の力に抗って、最後の一歩を踏み出す。

拒絶する斥力により、ボロボロ破けた指先が彼女の小さな手に届く。より一層強い力が俺を弾こうとしても、その手を離すつもりなんてさらさらなかった。

「……なんで私の手に触れるの？」

心底不思議そうに首を傾げる少女が悲しかった。近づいてくる者全てを拒絶して、近づいてくる者を不思議そうに見る彼女が悲しくて仕方なかった。

だから痛みを訴える体を無視して、笑みを浮かべてみせる。

こんな痛みなんかより、心の方が痛くてどうしようもなかったから、笑みを浮かべてごまかしてみせる。

「なんでだって？触りたいからさ。触れてみたいから触れたんだよ。だって君はこんなに暖かい。こんなに暖かくて、小さくて……こんなに可愛い手をしてる。だったら俺が触ってみたくなっても、ちっともおかしくなんかないんだよ？」

その小さな体に込められた力がゆっくりと弱まっていくのが分かる。震えだすのが分かる。

だからその小さな体をゆっくりと包んであげた。泣きじゃくる少女に、俺なんかでも出来る事があるとすれば、きっとそれぐらいでしかないから。

そしてそれだけで十分。俺には十分過ぎるくらいだった。

彼女は何かを言おうとするけど、それを続けさせるつもりはない。

きっとそれは、彼女自身を傷つける言葉だと思ったから。
だからそっと頭を撫でてやる。
――綺麗な銀色にも見える灰色の髪を。
そこにある、歪に膨らんだ彼女の『証』ごと。
それを俺の血で汚すのは気が引けたけど、血に濡れた手で優しく撫でる。

「君は人間だよ。だって泣いてる。悲しくて、悔しくて、こんなに泣いてる。涙を流せる君は人間なんだよ。
だからもう……そんな悲しい事を言うな」

それが俺とスズカの始まり。
今では最強の黒鉄と呼ばれるようになった少女の……始まりの物語。

「どうしたの？」

撫でながら聞いてくる少女に、『なんでもない』と返しながら肩をすくめる。
今さら昔を思い出していた、なんて言いにくい。いい思い出でもあれば、悲しい思い出でもある出来事だから。

そんな経緯からか『俺に恩がある』と言って憚らないスズカ。その恩の為に黒鉄にまで付いてきた少女。

出来れば彼女には穏やかに生きて欲しい……そう願わずにはいられないのに、付いてきてしまった同族。
本当は――本当のところは、俺の方にこそ彼女に恩があるという事を知らないのだろう。
同じような立場の彼女を救う事で、俺自身が救われた気がしていたのを、きっと知らない。

それを言うのは気恥ずかしくて、少し情けなくて、まだ吹っ切れていないから……
だから出来るだけ、彼女がしたいようにさせる事にしている。
頭が撫でたい時も、黒鉄として戦う事を決めた時も――そしてまぁ、今みたいに汗を拭いたり世話をしたがる時も。

「腕、上げて。服を脱がす」

「や、そこまでは――」

「……嫌なんだ。シャクは私なんかに世話されたくないんだ……。私なんかが側にいたら鬱陶しいんだ……」

ちょっと行き過ぎな気もするし、少し子供っぽさが抜けない辺りはさすがに心配にはなるけど。

この後、結局服を脱ぐ羽目になったのは――まぁ、言うまでもないだろう。
他の黒鉄は当然ながら、俺もカーリアンもある意味では全く頭が上がらない少女。
それが最強のコードフェンサーたる『銀鈴』のスズカなのだから。

20・レジェンド　オブ　シルバーベル2（後書き）

人物紹介・スズカ1

スズカ……『銀鈴』のコードを持つ黒鉄第七班『遊撃班』班長。
シルバーグレイの髪に、コバルトブルーの瞳、色素の薄い白い肌を持つやや小柄な少女。
黒鉄唯一の純正型と目されるコードフェンサーでもある。
基本的に他人との接触を持たない事や、その表情が薄い事（無表情ではない）などから、周囲に冷たい人物だと思われがちだが、実際は世話好きで話好き、趣味が刺繍という普通の少女。

また刺繍を施したハンカチや布地などは、班の仲間やシャクナゲ、カーリアンなどに頻繁にプレゼントしていたりと、他人に何かを上げることを喜ぶような性格をしている。
クセは何かを思ったり、考えたりする時は首を傾げる事と、他人の頭を撫でたがる事。カーリアンやシャクナゲの頭を、背伸びしながら撫でる姿がたまに見られる。

そんな少女ではあるが、純正型であるのは伊達ではない。
能力は対象に対して斥力＞ｒｅｐｕｌｓｉｏｎ＜を自身の体から発生させる事。対象跳ね飛ばしたり、押し潰したりの他、自身に向かう質量ある物質を遠ざける事や、大地に対して斥力を放ち、宙に浮く事すらも出来る。
大地や後方に斥力を放って、身体能力以上のスピードを出す事も出来る為、まさに距離やスタイルを問わない、オールラウンダータイプの万能スキルと言える。
ただし、両手から以外は扱える力は限られる他、自然に宿る力（重

力や引力）などに対してもその力は減退する。
また斥力を操る為、質量を持たないモノや少ないモノ（炎や雷、風など）に対しては、その力が働かない欠点もある。カーリアンの炎は、数少ない弱点でもあるのに（スズカが負けると同義ではない）、カーリアンとは仲がいい。
純正型の証は、角にも見える頭にはえた2つの突起。普段は大きなニットで隠している。

スキル

能力・S＋（斥力を操る彼女の能力は、間違いなく黒鉄では最高レベルのモノ）

身体能力・C～S（斥力を効率的に使う事により、プラス補正）

知識・C

カリスマ・B（同じ班のコードフェンサーからは、絶対の信頼を得ている）

ルックス・A（儚い印象の美少女タイプ）

コンプレックス・A（自身の純正型の証を嫌っている）

寂しがり・A

世話焼き・B（他人に対してあれこれ世話を焼きたがる。寂しがりと互いにプラス補正）

人見知り・B（自身の頭を見られる事を嫌い、怖がられるのを嫌う為、他人と接触するのが怖い。コンプレックスでプラス補正）

21・フェイクフラワー（前書き）

なんかまるっとあやふやです。
自分なりに工夫したんですけど、才能の限界は一週間じゃ越えられないみたいです。
また全部書き終えたら補正します。

あと、このノクターン一部が終わったら、黒鉄設立秘話的な話である『マーク　オブ　ブラックメタル』か、そのまま続きに行くかで悩んでます。
構想練るのに基本的に時間がかかる人なので、よろしければ希望をお出しくださいませ。

今回はあとがきがありません。

21・フェイクフラワー

服を脱がされ、念入りに――そして嬉しそうに汗を拭かれたり、着替えを用意されたりと一通り世話を焼かれた後、俺はスズカが剥いてくれたリンゴをしゃくしゃくと食べていた。

『シャクがしゃくしゃくと』なんて、全くつまらない自分のダジャレに、1人バカウケしていたスズカも、今はまた刺繍の続きに没頭している。

これもスズカの特徴の1つ。

彼女は決して馬鹿笑いはしないけど、笑いの沸点が異様に低い。掛け値なしのダジャレに、口元を抑えて笑っている姿は微笑ましくもあり、笑うポイントが分からず若干ひくところもある。

カーリアンも笑いの沸点が高いとは言えない――そもそも彼女は、喜怒哀楽全ての感情の沸点が低い――から、その辺りも気の合う箇所なんだろう。

まぁ一番気の合うところは、強大な能力を持っている割に、2人ともが寂しがり屋って辺りなんだろうけど。

最近はしょっちゅう食べている気もするけど、このリンゴ自体も貴重な糖分であり、食糧ではあるのは間違いない。

カリギュラ印のミカン――気候的にはミカンの方が適している事もあり、リンゴ自体なかなか手に入らない一品なのだが、やはり入院中はリンゴ、というイメージが強いのだろうか。スズカはリンゴ

を幾つか仕入れ、持ってきてくれていた。
彼女も俺と同じく、黒鉄としての給金をほとんど使わないクチだから、いい機会とばかりに箱ごと大人買いをしたのかもしれない。
残りのリンゴは仲間に配ったとしても、彼女の性格上なんの不思議もない。
むしろ喜んで班の仲間に配って回っただろうと思う。

「シャク」

そんな事を考えていた俺に、彼女は小さく首を傾げながら声をかけてくる。
その手を休め、脇に刺繍の道具を置くと、彼女は少し躊躇うような仕草と共に視線を合わせてきた。
その様子に、思わず若干身構えてしまう。
何か嫌な予感がする。
予感というよりも、確信と言った方が近いかもしれない。
スズカは、俺に対して何かを言いよどむ事自体滅多にないし……
それに今はタイミングがタイミングだ。
それぞれの目的を持った『狐狩り』が動き出した今、スズカなりに思うところもあるだろう。
それに用件が終わっても（つまり一通り世話を焼き終わっても）スズカが帰ろうとしなかったのは、彼女の方にまだ用事があるんじゃないかと思えたのだ。
そう考えればここで刺繍を続け出したのも、間を計っていたんじゃないかと思える。

「シャクはこれからどうするの？」

「どうする……って何を？しばらくはここに――」

「そうじゃない。そういう事を聞きたいワケじゃない。分かっているハズ。とぼけないで欲しい。あなたがいつまで『シャクナゲ』を続けるつもりなのかを私は聞きたい」

「……」

――この質問はいつかは来る質問だと思っていた。

今までされなかったのが不思議なくらいでもあった。

それでも息を呑む。ひょっとしたらスズカは、そんな疑問をもう持っていないんじゃないか――そんな淡い期待を持っていたのかもしれない。

彼女は俺がこっちに来る前からの知り合いで、付き合いの長さだけで言うならカブトよりも長い。そしてアカツキよりも古い。

そんな彼女がこの街に来た理由は、単に俺に付いてきただけでしかなく、この街そのものには縁もゆかりもない。

彼女の出生地方は、関西とほぼ同時期に争乱が起こった地方だけど、関西に比べて東北は、それ以前から変種に対する差別や蔑視が大きかった地方である。

それだけにかなり以前から変種達は団結し、古くから徒党を組んでいたらしい。

ヴァンプと呼ばれるような支配者層でこそなかったが、優秀な――あるいは強力な指導者さえいれば、関東などより早くに革命が起こっていたかもしれない。

その指導者の候補こそがスズカであり――変種、既存種に限らず、彼女はいつも他人から狙われていたのだ。

その力を利用する為に……

もしくは災いの芽として。

だから何もなくても彼女はいずれあの地を離れていただろう。

あるいは自分を取り巻く環境に絶望し、東北という地方を代表するヴァンプになっていたかもしれない。

そんな故郷を離れる理由になったのが俺であり、この街に留まっているのも、単にその延長に過ぎない。

だからこの質問は、あの時から――俺の戦う理由たるアカツキが亡くなってからは、いつされてもおかしくない質問だった。

それでも答えの用意なんて出来ていない。

『自分はずっとシャクナゲ』……そんな陳腐な言い聞かせで、全てをあやふやにしてきたくらいなのだから。

ずっとこの街にいられる、そう思い込もうとすらしていたのだから。

「あなたがここにいたいと言うなら構わない。それなら私もここを守る為に戦う。もちろん戦いたくなんてないし、力なんて使いたくはない。だけど、あなたの側にいられないよりはマシ。だからあなたがここにいたいなら、私もここで戦うつもりでいる」

だけど……と続けながら、彼女は少し俯いた。

それに俺は沈黙を返す。沈黙以外は返しようがない。

それは何を言いたいかが分からないからじゃない。

何を言われるか分かるからこそ怖い。だからこそ言葉が口から出てこない。

「あなたはいつまで罪を償い続けるつもりなの？」

出てきたのは予想通りで……ある意味予想の斜め上をいく言葉。

「あなたはいつまで『約束』に縛られるの？いつまで『シャクナゲ』を背負うの？いつまで――」

自分を罰し続けるの――？

胸を突き刺されるような錯覚を覚える。

彼女には……全てを知る彼女には、俺の罪と罰を知られている――その意識が『刃』となって心に突き刺さる。

「あなたはもう十分罰は受けた。全部があなたのせいなんかじゃないのに、あなたは全部背負ってきた。『あなたのお父さんが殺された』のも、アカツキが死んだのもあなたのせいなんかじゃない。それでもそれを背負ってきた」

「俺は……」

「あなたのお父さんは、あなたに向かうハズの怒りを自分が受け止めた。でもそれは、あなたのお父さん自身がそう願ったから。親の務めだと信じたから」

言葉が出ない。喉の奥に何かがつっかえているような気がする。

胸が痛い。すごく痛い。今までスズカが溜め込んできた言葉の刃が、深い傷痕を刻む。

「アカツキもそう。アカツキの望みはアカツキ自身のモノ。それはあなたのモノではないし、あなた自身もアカツキではない。そもそもあなたは――」

――シャクナゲなんて名前じゃない。

そう続けられた言葉に心が膿を出す。

ジクジクと……ダクダクと……とめどなく膿が溢れ出る。

「あなたはあなたの為に生きてもいい。罪も罰も捨ててもいい。生きているのはあなた自身なのだから。約束の相手であるアカツキも、罪を償う相手であるお父さんももういない。2人とも自分の考えで生きて……生きぬいて……自分自身の考えでもういない」

ここまで饒舌なスズカは久しぶりに見る。その言葉が刃の鋭さを持つなんて、これが初めてだ。

それに驚く暇もなく、ただ心が血に塗れでいく。

「あなたはもうシャクナゲを捨てて……過去を捨ててもいい。過去を心のずっと奥にしまって先をみてもいいと思う」

――少なくとも私はそう思っている。

その言葉に心が軋む。

歪み、欠け、壊れつくしたハズの心が、なおゆっくりと歪さを増していく。

「それにもういつまでも全てを隠しきれない。あなたが隠し通せても他の人々はそうはいかない。スイレンにヨツバ。カブトにその副官。六班のシークレットクラン……そしてネームレス達」

――それら全てが、アカツキが隠している真実を隠し通せるとは思えない。

それは……その通りだと思う。
アカツキがいかに防壁を凝らし、幾重ものファイヤーウォールを築いても、それを突破してくる相手は必ず出てくる。
越えるべき目標さえあれば、その先にあるのがなんであれ興味を持ち、なんとしてもそれを越えてしまいたくなるのが人間だ。
その先にあるモノが『絶望』か、はたまた『一握りの希望』かなんて結果は、そこには全く関係ない。
『パンドラの箱』がもしあったならば、開けてみたくなるのが人間なのだから。

今もそれを志している人間はいる。
カクリにマルスの2人がその筆頭であろう。ひょっとしたらシークレットクランに近い場所にいるマルスなら、すでに黒鉄の全てを知っているかもしれない。
そしてカクリならそう遠からず『真実』を得ると思う。

――黒鉄とは檻であり、コードフェンサーとは『符号で囲う者』という意の言葉だという事を。
『フェンサー』とは剣士という意味などではない。つまりコードフェンサーとは『コードを持つ戦う者』の意ではないのだ。
フェンサーとは『檻』や『囲い』。
フェンスから連想し、擬人化された『アカツキの造語』。
コードフェンサーとは、戦う為に作られた存在などではなく、『囲ったモノを抑えこむ為の存在』なのだと言う事を……いつか皆が知る日が来る。
アカツキがいくら皆が勘違いをするようにその在り方を作っても、コードフェンサーの真実は檻の役割だという事を知る。
俺やアカツキがそれをいくら望んでいなくても……それをどれだけ巧妙に隠していてもだ。

「あなたは絶対傷つく事になる。絶対嘆く事になる。間違いなく居場所をなくす。だから聞きたい。あなたはどうするつもりなのかを」

「……俺は」

「いつまでも隠せない。きっと今はもうその時。ずっと隠せたならそれで良かった。でももう隠せない人もいる」

彼女は無機質で、無表情を装って、その刃を振るっていた。
言葉を研ぎ澄まし、敢えて俺の傷をえぐっていた。
そうしなければ、溜まった膿を掻き出せないからそうしたのだろう。
そんな事などしたくはないであろう事は、彼女の優し過ぎる性格と、律儀過ぎる性質からしても間違いない。
その無表情こそが証拠だ。薄くともいつもは見えている表情が、綺麗に隠されている辺りが彼女の心境を語っている。
もう首を傾げていない辺りから、彼女には迷いも何もない事が窺える。

本当に彼女は優し過ぎる。そう思う。
自分がしたくない事や相手の傷を抉る言葉を、ここまで躊躇なく使えるのは間違いなく優しさだ。
相手を気遣うだけの甘さじゃなく、相手を立ち上がらせる為の優しさだ。
強さだと言ってもいい。
それが分かっていても言葉が出てこない。
スズカがどれだけの覚悟を秘め、どれだけの勇気を振り絞っているのかが分かっていても。

「今いる内通者も秘密を隠せない誰か。多分だけど間違いない。きっともう秘密を持っていられない誰か。今の秘密を抱えたままの黒鉄を変えたい誰か……」

――あなたもそれは分かっているでしょう？

そう続けられても、俺には答えられない。答えるまでもないからではなく、単に答えたくないから答えられない。

俺は黒鉄にいたかった。この罪を償える場所を捨てられなかった。アカツキが作った『昔の日本に近づけた場所』を守れたなら、守る為に戦えたなら……

それは自己欺瞞に過ぎなくても、罰と償いをこなせている気がするから。

「あなたが望むなら、私は黒鉄を……秘密を知る全てを消してもいいと思っている。アカツキの黒鉄を全て壊し、1から作り直してもいい、と」

……望まない。そんな事は望んでいない。

「あなたが自分を罰する場所としての黒鉄を必要とするなら、その為に力を振るう覚悟はある」

……罰する為の場所。

「また、ここと違う地に渡るのもいい。そこで全てを捨てて、1か

らやり直すのもいい。シャクナゲとスズカを捨てて、忘れて、2人だけで過ごしてもいい」

――そんな真似は……出来ない？

本当に？心は惹かれない？全く心は揺れ動かない？

忘れたフリが出来るなら……そんな忘却を許す場所があるなら、行ってみたくはない？

答えはノーだ。行けるものなら行ってみたい。

全てをリセットして、リセットを受け入れてくれる人とゆっくり暮らせるなら、それは過去を捨てられる事とイコールだ。

過去をゼロにするのと変わりない。

なにしろその場所には『罪も罰もない』。『償い』をしないのなら、それらは全くの無価値だ。

「あなたは――」

でも……それでもそんな真似は出来ない。

いや、許せない。

それを許せば、過去の過ちも後悔も全て許す事になる。

混迷する世界情勢から、差別され、蔑視され始めたこの国の変種達を、『自分なら救える』と過信して、慢心して……結果躓いてしまった愚かな子供を赦す事になる。

そんな事は力を持った個人がやっちゃいけない、そんな独りよがりな事を思っちゃいけない……そう思い知った『俺』まで捨てさる事になる。

俺の為に全てを捨ててくれたオヤジを忘れ、俺を支えてくれたアカツキを捨てる事になる。

そんな挫折と反省――いわば思い出の全てを失う事は、俺にとって生きる価値を失う事と同義だ。

「……スズカはどうしたい？」

「私はあなたに従うつもり。今までもそうしてきたし、これからもそれは変わらない」

彼女の意志を聞こうと……いや、彼女の選択に逃げようとしても、やはり彼女はそれを許してはくれない。

彼女はいくら強くともあくまでも甘える側の存在で、決して他者に甘えさせる側ではないのだから。

信頼する者には全力で甘えて、全身で選択を委ねてくれる代わりに、絶対に決められた選択には抗わないのだから。

それは一見楽な立場に立っているようにも見えるだろう。だが、決して簡単に出来る事なんかじゃない。

絶対の覚悟と……絶大の信頼を持てなければ、そんな思考委任、権限譲渡みたいな真似は出来ない。

そんないつも通りのスズカのスタイルに、俺はようやく笑みを浮かべられた。

そのいつもと……今までと変わらないスズカのおかげで。

信頼と覚悟を目の当たりに出来たおかげで、元々１つしかなかった選択肢を選びとる事が出来たのだ。

だって俺は『ずっとシャクナゲ』で……『今でもアカツキの友人』なのだから。

「逃げるにしても――そしてこのまま黒鉄でいるとしても、俺にはやるべき事がある」

そう、今までの立場を考慮すれば……そして今後残される黒鉄達の事を考えれば、やっておかなければならない事が俺にはあった。

この地を離れるにしても、このまま暴かれた真実に貫かれるにしても、やっておかなければならない事が俺にはある。
アカツキの友としての唯一の心残り。唯一のやり残しが。

「……将軍を殺すこと？それとも関西軍を潰すこと？」

そのスズカの言葉に、小さな笑みが浮かぶ。
そして、そんな事が――誰かを殺すという事が言える少女に少し悲しくなる。
自分の事は棚に上げて、悲しくなる。

将軍を殺す事。関西軍を潰す事。
それらは同義であり、全く違う事でもある。
例えば将軍を殺しても、関西軍は違うヴァンプが率いる事になるだけであり、関西軍の軍としての機能を潰しても、あの将軍なら新しい関西軍を作り直すだけだろう。

だから俺は、様々な感情を押し殺して小さく首を振った。
その2つは『黒鉄のシャクナゲ』としての心残りだ。
シャクナゲとしていずれは達成すべきだった目的だ。
それはアカツキの友人であるシャクナゲの心残りではない。
例え形が同じだったとしても、俺には俺で――俺個人としての理由がある限り、そんな誰かの為なんて言い分は使いたくはない。
黒鉄の為だなんておためごかしを使いたくはなかった。

「俺の心残りは坂上を倒す事だよ。『将軍』なんて名乗っているヴァンプじゃなく、アカツキの――智哉の友人だった男の事でしかない」

「それは同じ――」

「違うよ。全然違う。だって俺には、ヴァンプを打倒する者である黒鉄の資格なんて、もともとなかったんだから。黒鉄じゃない俺のこれは単なる私怨だよ。あの時に……智哉が死んだあの時に、坂上を止められなかった愚かさを晴らしたいだけさ」

それは後悔というよりも未練に近い。『かつて討とうとした相手』を、自分の覚悟のなさから逃した未練。

そのせいで、今も神杜が関西軍の脅威にさらされている事への悔恨だ。

かつて黒鉄を維持する為に将軍を討とうとして、それを果たせなかった弱さの償いだ。

『将軍を殺してしまえば、俺は神杜にいる必要なんてなくなるんじゃないか』

そう考えてしまった弱さと汚さ……そのせいで犠牲になった人々に対するせめてもの誠意だ。

いまさら失った命が返らないのは分かっている。そんな事で償いにならない事も知っている。自己満足なんじゃないかとも思う。

でもそれらは、義務を果たさない理由にはならない。

死者達の想いを果たす義務。

シャクナゲに架された夢を果たす義務。

一度裏切った信頼を今度こそ果たす義務。

それらを裏切る理由になど絶対にならない。

「俺はもう一度《光都》へ行くよ。今度こそ坂上を殺す為に……」

「私も――」

「ありがとう、スズカ。でももう、スズカも俺なんかに縛られなくてもいいんだよ。好きに生きていいんだ」

「私も……」

「でももう一度だけお願いを聞いてもらえるなら、俺が帰ってくるまで、ここを……この街を守っていてほしい」

スズカの言葉を遮るように……聞かないようにする俺は、きっと残酷な事をしていると思う。

ヒドい事をしているんだと自覚している。

それでもそのまま一気に言葉を吐き出すと、そのニット越しに頭を撫でてやった。

彼女が一番好きな事……コンプレックスの象徴でもある頭を撫でるというその仕草に、万感といってもまだ足りないだけの謝罪と、罪悪感を込めて。

そしてそれ以上の感謝を……ずっと付いてきてくれていた事への感謝を込めて。

「もし俺がしばらくたっても帰ってこなかったら、全ての真実を明らかにしてほしい。そして《狐》を――秘密に潰されそうになっていただけの狐を、許してやってほしいと伝えてくれ。それが終わったら、スズカは逃げるんだ。戦わなくていい場所まで逃げ続けてほしい」

「……お兄ちゃん」

初めて会ったばかりの頃と同じように――こっちに来る前と全く同じにそう呼んだスズカの瞳からは、ポロポロと涙がとめどなく溢

れていく。
綺麗な紺碧色の海と同じ色をした瞳から溢れるそれを、軽く拭って立ち上がる。

彼女は絶対に止めない事を知っていたから。
信頼する人の選択は、彼女にとっては絶対のモノだと知っているから。

「……帰ってくる？」

「帰ってくるよ、俺はまだまだ生き足りない」

まだまだ罰を受け足りない。
まだまだやる事もある。
死ぬにはちょっと重荷が多すぎる。

「帰ってきたらまたお兄ちゃんって呼んでいい？」

「それは……」

ちょっと勘弁してほしい。絶対に色々と誤解を招く。解けない誤解で絡められる事になる。

「いい？」

「……いいよ」

あんまりよくないけど、そう頷いて——壁に掛けてあったコートに腕を通した。
俺がまだ『宵闇』のシャクナゲだった頃からの一張羅。戦闘服。

アカツキから貰ったモノ。
そして近くのテーブルに置かれたままだった『シャクナゲ』を手に取った。
もうすっかり馴染んでしまったグリップの形に、いまだ馴染めない死の感触を感じて――
泣かせてしまった妹のような少女に、心の中で謝罪する。
彼女に何も言わせず、一気に自分の考えを述べた自ら卑怯さを。
そうすれば彼女は絶対に従ってくれると知っていたからこそ、より深い罪悪感を感じる。
だから胸の中で彼女自身に誓ってみせた。

必ず帰ってくる事を。
その先にあるのが断罪なのか、赦しなのかは分からない。
それでも今度こそは――と。

アカツキにも、俺のせいで死んだ仲間達にも誓う。
甘さも弱さも全てを捨てて、『シャクナゲ』の縛すら捨て去って、この街を脅かす親友のかつての友人を殺す事を。

それを胸に秘め――
俺は一週間近くをのんびりと過ごしてきた部屋をあとにした。

22・ターン　オブ　ルビーアイ（前書き）

あとがきを追加し、脱字を直しました。１２／１８。
あとがき……文字数が一杯一杯でぶつ切り感溢れていますが、気にしない方だけお読みください。

お得意のカクリの考察バージョンです。コメディタッチな気分転換小話ですけど。

22・ターン　オブ　ルビーアイ

――ハメられた。
正直そう思った。

スズカは確かに物分かりのいい性格をしている。少なくとも俺にはずっとそうだった。
でもそれは、『自分自身』という枠内においての事だ。
その事も俺は理解していたハズだった。
そして彼女が決してバカじゃない事も、俺をある意味では誰よりも理解しているという事もわかっていたつもりだった。
そんな彼女がなんの手立ても策もなく、俺を1人で行かせるハズがないという事に、今まで気づかなかったのは迂闊であり――やはりハメられたと思う。

「一応聞いていいかな？なんで君がここに……俺の車庫にいるんだ？」

目の前には見慣れた女性の得意気な顔。
真っ赤な瞳と真っ赤な髪を持つ――

「カーリアン」

黒鉄第二班の班長が、俺専用の超大型二輪車『バルバトス』にもたれかかりながら、こっちを見据えていた。

「スズカにさ、シャクについていってあげてって頼まれたのよ」

「……やっぱりか」

カーリアンの性格を思えば、一旦見舞いに来ておきながら、起きるまで待たずに帰ったという事に、まずは違和感を感じるべきだった。

忙しい立場にあるカクリやカブトとは違って、彼女は比較的時間に余裕がある。

有り体に言えば暇なのだ。

そしてスズカとも仲がいい。

スズカと一緒でも気まずく感じたりしない、唯一の黒鉄なのだ。

そんな彼女が、スズカとおしゃべりをするでもなく、先に帰ったからには理由があると考えるべきだったのだ。

「スズカのヤツ……」

あの表情の薄い妹分に――自分はいつも通りに物分かりのいいふりをして、しっかりカーリアンに手を回していた彼女に、思わず悪態が漏れそうになる。

彼女ならああいう話の振りをすれば、俺がずっと後悔をしていた事……つまり坂上の事を果たそうとすると分かっていたハズだ。

逃げるにせよ、変革を迎えた黒鉄に残るにせよ、坂上の事は自分で果たすべきだと、俺はずっと思ってきたのだから。

それが智哉の願いであり、黒鉄の悲願であり、俺の未練だから。

それがスズカにも分かっていたと思うし、それは『俺の手で果たしたい』と思ってきた事も知っていたハズだ。

そして俺が、スズカにはここに残ってくれるように願う事も予測出来ただろう。
だから彼女は、『自分以外の自分が信用出来る人物』に、お目付役を任せる事にしたんだと思う。
――つまりはカーリアンに。
やはりハメられたと思う。
……そして親友であるカーリアンに、そこまで残酷になれるモノなのかと思ってしまう。
彼女が《光都・カエサル》に付いてくるという事は、俺と今は将軍と名乗る坂上との戦いの側に置くという事だ。
それはとても残酷な事で――とても理不尽な事。
カーリアンの知る現実と、真実の違いを見せつける事だ。
俺はきっと全力を出さなければ、坂上に――『自分の世界を構築する能力を持つ純粋なる変種』には勝てない。
それにあのおしゃべりな坂上が、ペラペラと全てを語り出すかもしれない。
それが分かっているだろうに、カーリアンにお目付役を任せるというのは、スズカらしからぬ残酷さに思えた。
カーリアンの事を思えば、出来るだけ真実からは遠ざけておくべきなのに。
もっと言えば、黒鉄内でもヴァンプ嫌いの筆頭たる彼女には、受け入れがたい事であるハズなのに。
それとも――それともひょっとしたら、スズカは本当に心の底からカーリアンを信じきっているのかもしれない。
直接的な判断を彼女に委ねるくらいに信用し、信頼しているのかもしれない。

他人に対して臆病なスズカが、そこまでカーリアンを信用したのだとしたら、彼女の人間的な魅力は大したモノだ。

「さ、行くなら行きましょ」

「どこに行くつもりか知ってるのか？えらくお気楽に見えるんだけど」

「将軍のトコでしょ？スズカがそう言ってたわよ？」

それを知っていながら、そんな風にお気楽でいられるのは度胸があるからなのかどうなのか。

将軍のいるところといえば光都であり、光都といえば関西軍の首都だって事を分かっているのだろうか？

「ほら、ちゃっちゃと来る！みんなにはバレないように行きたいんでしょ！」

「出来ればカーリアンにもバレたくなかったよ」

「無理ね。仮にも入院中なんだから、主治医代理のあたしは付いて行かなきゃ、あたしがカクリに怒られるわよ」

「君を連れていったら、俺がカクリに怒られると思うけどね」

そんなやり取りを交わしながらも、俺は仕方なくバルバトスのシートに腰を下ろした。

背後には何故か嬉しげなカーリアンが座る。

――スズカがそう望むならカーリアンは連れていこう。邪魔はし

ないように言い含めておけばいい。
それに彼女なら『断罪者』としては申し分がない。
黒鉄1ヴァンプ嫌いの彼女なら。
そんな事を思いながら、一年前……智哉が亡くなった時にも訪れた光都に向かうべく、俺はバルバトスのエンジンに火を入れたのだった。

＊＊＊＊＊

「カーリアンに頼みがある」

そういきなり言われたのは、しばらく時間を遡った時の事――つまりシャクの寝汗をついに拭おうと手を出しかけた時だった。
その声に思わずビクッと身体が震える。
その声はずっと聞きなれていたモノではあったが、ここでは聞こえるハズのないモノだったからビックリしたのだ。

――だって背後にあるドアは、あたしが入ってきて以降開かれておらず、この部屋にはあたしとシャクの他には誰もいないハズだったから。

そう思って周囲を見渡せば、簡単に声の主は見つかった。
なんの事はない。その少女は窓から顔を覗かせていただけだったのだ。

ただし問題があるとすれば、ここは最上階……つまり地上七階だという事だろう。
そして、窓の下には足をかける場なんてない事も問題かもしれない。
それでも平然とした様子で少女は窓辺に肘を付き、こちらをジッと見据えてくる。
真っ白なニットをかぶった頭を、コクンと小さく傾げながら。

「……私、邪魔だった？」

「ちょっと！どっから入ってきてんのよ！？危ないでしょ！」

イタズラっぽく小さく笑う少女に慌てて駆け寄った。
もちろん彼女からしてみれば、七階ぐらいの高所など危なくなんかない事ぐらいは知っている。もっと危ない場所――そう、例えば戦場などでも、彼女が一番安全な立場にいる事も分かっているつもりだ。
最強の変種たる純正型にして、最高の能力を持つ黒鉄である彼女からしたら、戦場とは平等に命のやり取りをする場所なんかじゃなく、『命を一方的に狩る場』でしかない。イコール彼女にとっての戦場とは、仲間の命を守る為の場でしかない事を知っている。
彼女が脅威を感じる相手がいるとすれば、かなり強い力を持つ高位のヴァンプか、まさに彼女と同じ純正型を敵に回した時ぐらいのモノだろう。
あるいはちょっと無茶をしすぎて、シャクに怒られるんじゃないかってビクビクしている時ぐらいモノだ。

それでも……そんな事はよく知っていても、そんな高所から顔を出されたら危なく見えるのだから不思議だ。
慌てて駆け寄るとそっと脇に手を入れて引き上げてやり、不思議

そうに首を傾げている彼女に軽くデコピンをかました。

「遊びに来る時は正面から来なって言ったでしょ？落ちたら痛いんだよ？」

「別に危なくなんかない。落ちないから痛くもない」

「見てるこっちが危なく見えるからやめてって事！」

三階にあるあたしの執務室……という名前の私室にくる時も、大抵は窓からだったりするけど、まさか七階でも同じ真似をするとは思わなかった。

あたしでも足場さえあれば——あるいは手段さえ選ばなければ、七階の窓から侵入する事くらいは出来るけど、やはり落ちたりしたら危ない事には変わりない。

それに常識的な観点からしても、そんな真似をしようとは思わない。

……ほんとにこの子には常識が通じない。

そう思えば溜め息が漏れる。

だからこそ、彼女にはついつい口うるさくなってしまいがちだった。

「カーリアンはいつも心配性」

「スズカは相変わらず常識破りね」

そんな事を言いつつも、軽く弾かれたおでこをさすりながら、彼女ははにかむように笑う。

なんでこの子は、怒られてるのにこんなに嬉しそうにするかな。

そう思えば思わず苦笑が滲む。
誰かに心配されたり、怒られたりしたくて、つい危ない真似してしまいがちな子供がいる、って話を昔聞いた事があるけど、彼女もそんな感じなのだろうか？
あたしの前ではとにかく危ない真似や、心配させるような真似をしている気がする。
普段は……会議なんかの公の場では、話を聞いているのかいないのか、ひょっとしたら寝てるんじゃないかと思うくらいに茫洋としてるのに。

「で？シャクの見舞いに来たの？なんなら起こそうか？」

「いい。シャクにも用事があるけど、カーリアンにも話があるから」

そう言うと、スズカはトコトコと部屋の入り口まで歩いていき、付いてきてとも言わないままで部屋を出ていく。

話があるってここでは出来ない話って事？シャクを起こしたくないからとか……そんな事を考えながらも、あたしも彼女に続いて部屋を出る。

最上階であるここには、他に入院患者は入っていない。
エレベーターが電力の関係で止められている以上、怪我人や病人は、基本的に下の階の部屋から埋められていく。
最上階とはいっても、実際は眺めに見合わない長い階段を上った先の部屋に過ぎず、回診をする医師達も、進んでこの階の部屋に入院患者を入れようとはしないのだ。
まぁシャクが入院している今は、三班有志数名が六階との中間で見張りをしているから、なおさら人影が少ないのもあるけど。

そんな廊下を、ひょこひょこと左右に独特に揺れる歩様のまま、スズカはどんどんと歩いていく。
その歩様に合わせて、ニットのしっぽとファーがくるくると舞っていた。

昔は味気も飾り気もないグレイのニットをずっと愛用していたけど、一度あたしが彼女に命を救われた折に、この白の可愛いニットをお礼として贈ってからは、ずっとこのニットを愛用してくれている。
最初はラビットファーだったんだけど、それが戦闘でボロボロになった時に、改めて今の形になったのだ。
ラビットファーだったら、長過ぎてちょっとした事でほつれたりするから、苦心して今のカーリアン特製ニットに縫い上げたんだけど、それもまた一塩思い出深い出来事ではある。

だって前のニットがボロボロになった時のスズカったら、背中に重い影を背負って、ラビットファーが千切れたニットを大事そうに抱えてるのだ。
それまで被っていたグレイのニットを再び深く被っている辺りが、より深い哀愁を漂わせていて、つい『あたしが直してあげる』なんて言ってしまったのは仕方がない事だと思う。

ひょこひょこ揺れるファーにそんな思い出を見出し、ちょっと笑ってしまいそうになる。
あたしには姉妹なんていないのに、スズカは妹のように思えるのだ。
天性の妹属性があるとしか思えない。
みんなから怖がられているけど、カクリやシャクと同じぐらい、彼女が今のカーリアンを形作る要素になったのは間違いない。

カクリはスズカより年下――というより、生まれ月からすると、スズカはあたしより上なんだけど――なのに、何故かあの子は姉っぽい。

シャクが兄でスズカが末っ子。そんな序列があたしの中にはあったりする。

もちろんそんな事を言えば、カクリは目を剥いてスズカを敵視すると思うけど。

やってきたのは屋上だった。

柵も欄干も取り払われ、真っ平らな平面を見せるコンクリート作りの屋上。

子供達の立ち入りどころか、一般的に解放されていないそこに、スズカは平然と立ち入った。

鍵はどうしたんだろう？なんて思うけど、きっと担当がかけ忘れたんだろう、たまにあるんだ。別にスズカが壊して入ったワケじゃないよね、と自らに言い聞かせて気にしない事にする。

スズカを相手どっては、気にし過ぎたら負けなのだ。

「あのね、カーリアン」

「なぁに？あたしにちゃんとお願いなんて珍しいね？前は頭の事だったっけ？」

コクンと頷く少女に苦笑を返す。

この言葉はそのまま、無言の催促が多いって揶揄している言葉な

のに。
　そのニットの修繕もそう。

「カーリアンはちゃんとお願いしたら、聞いてくれるってシャクも言ってた。頭の事も秘密にしてくれてる。気にしないでくれる」

「人が嫌がる事をペラペラ喋る趣味はないよ。それに無意味に意地悪をする悪趣味も持ち合わせてなんかない」

　彼女の真っ直ぐすぎる視線を向けられたら、いつも少し気後れを感じてしまう。
　なんというかその紺碧の瞳が綺麗過ぎて。
　彼女ほど綺麗な碧の瞳は、変種が多いこの黒鉄でも見た事がない。
　当然、四班の『クモ女』なんかとは比べるべくもない。

「だから私はあなたを信じてる。私の頭を見ても変わらなかった…
…変わらずに頭を撫でてくれたカーリアンを信じる事にした」

「あはは、まぁ信じてくれるのはありがたいけどさ。あたしに出来る事なんかしれてるからね、あんまり過剰な期待はしないでよ？」

「大丈夫。カーリアンに出来る事しか頼まない」

「で、お願いって？」

　なんとなく……本当になんとなく、言いにくそうにしているように見えたから、もう一度こちらから催促をしてみる。
　彼女は他人に何かをお願いする事に、あんまり慣れていないタイプだから、こちらから積極的に話を振らなければ言いにくいのかも……なんて思ったのだ。

「シャクに……」

「シャクに？」

「付いて《光都》まで行って欲しい」

「ふんふん。オッケー」

決意を秘め、語調を強めてそう言うスズカに、あたしは迷う事なく即答してみせた。

……なのになんでだろう？何故かズルッと足元を滑らせ、ずっこけかけている。それはなんというか、彼女らしからぬユニークな動きだった。

「即答だね？なんで、とか聞かないの？」

「別に聞く必要ないと思うけど？シャクが光都に行くのは、これが初めてじゃないでしょ？」

「将軍を殺す為に行く……と言っても？」

「それこそ二度目でしょうが。前ん時もあたしは一応黒鉄にいたんだよ？」

むしろ1人で行かれるくらいなら、付いていった方がいいに決まってる。それこそ悩む理由にならない。

それにスズカがこうして頼んでくるぐらいなのだから、考える必要もない。

まぁ、1人の黒鉄としての建て前的なモノを言わせてもらえば、兵力や資材の差からして、このままじゃいずれジリ貧になるのが目に見えているんだから、『暗殺』が卑怯だなんて事も言ってはいられないと思う。

いずれは取るしかないと思っていた選択だし、それが出来うる存在は、黒鉄内でもシャクかスズカをおいて他にはいないだろう。

他のメンツじゃ力が足りないか、あるいは度胸や覚悟が足りない。

スイレンやアゲハならあるいは……とも思うけど、アゲハは何を考えているか分からないクチだし、スイレンはシャクの命令がなければ動かない。

そしてシャクは他人にそんな命令を絶対にしない。

だからシャクか、あるいは独断で動いたスズカぐらいしかいないと思うのだ。

スズカは時折、全く予想外の行動を取ったりするから。

「で、いつ？あいつがここから出てすぐ？いつ出れるかあたしも知らないんだけど」

「多分、今日中ね」

「ふんふん、今日中ね……ってはぁ！？」

「今日中にシャクは動く。私が動かせる。本当は動いてほしくなんかないけど」

意味が分からない。急すぎる。何よりシャクは入院中だ。

しかも動いてほしくないのに動かせる？

でもそんなあたしの内心などお構いなしに、スズカはカクンと首を傾げてみせる。

「シャクにとっては必要な事。黒鉄にとっても……目的だと思う」

「でも今日中なんて、ちょっといきなり過ぎない？もうちょっとしっかり計画を立ててさ――」

我ながら、どの口が計画なんて似合わない言葉を吐くのか……なんて思ったりもするけど、それでもその行動はあまりにもシャクらしくないと思う。

そしてあまりにもスズカらしくない。

シャクはあれで事前準備に手間暇を惜しまないクチだし、スズカに至っては、そんな計画立案なんてするタイプじゃない。思いっきり身近な人物任せで、自分が取る行動は決められた範囲内だけ……

そんな感じなのだ。

「計画なんて無意味。だって計画は勝率や成功率を上げる為に必要なモノだから」

「だったら余計――」

あたしはなおも似合わない言葉を吐こうとして……寸前でそれを思い止まった。

スズカはちょっとだけ首を傾げ、困ったように笑っていたから。

「大丈夫。シャクがもし負けるとしたら、それは自分自身以外には有り得ない」

「はっ？自分自身に……って？」

「大丈夫。カーリアンは付いていくだけでいい。付いていって、シ

ャクがどこかに行ってしまわないように見ててくれるだけでいい」

あくまでも大丈夫と言い張るスズカに、これ以上何を言っても、何を聞いても答えてはくれないという事が分かった。

何故なら彼女の頑固さをあたしはよく知っているから。

そこにシャクが関係したならば、二乗してより頑固になる事を知っているからだ。

……ひょっとしたら少しだけ悔しい気持ちもあったかもしれない。

スズカはあたしよりもシャクの事を知っている……それが悔しくないと言えば嘘になる。

だからあたしは渋々を装って頷く事にした。

そうすればスズカが知る『彼』について、あたしも知る事が出来ると思ったからだ。

「しゃあないわね。カクリには話しといていいよね？」

「二班副官には私から話す。最初にそんな許可を取ったら、間違いなく反対される」

――確かにそうかもしれない。あの子はあれで心配性だから。

「大丈夫。カーリアンはシャクを連れ帰ってくれたら、それだけでいい。私が後はやっておくから」

またしても大丈夫、か。

なんというか、らしからぬ強引さに思える。その様子を不信には思わないけど、ちょっと訝しく感じる。

でもシャクが動いて、スズカがそこに一枚噛むならば、あたしには悩む余地なんかない。

スズカが噛む以上、シャクをここに留めおく事は実質不可能だ。
いくらあたしやカクリが止めようとしても、この2人を止められっこない。

それに――

「分かった。とりあえず光都に付いていって、無茶しそうだったらひっぱたいてでも連れて帰る……それでいいのね？」

あたしにはあたしで目的がある。シャクを1人で行かせるくらいなら、付いていった方がいいに決まっている。
そういう意味では、事前にスズカから話を聞けたのは、きっと幸運な事だったと思う。

「お願い。シャクは光都への足に、前と同じようにバルバトスを出すと思うから、先にアレが置かれている車庫に行っていて欲しい」

そして車庫とやらの場所を最後に告げると、スズカは踵を返した。
もう話は終わった……もう自分に出来る事は終わったとばかりに。

ほんの少し寂しげな雰囲気をその背中から感じたのは――果たして気のせいだったのだろうか？

その後、あたしは細々とした小さな準備をこなし、心の中で覚悟を決めてから、シャクナゲ専用の車庫に足を踏み入れた。
シャクが前に光都へ向かった際も使ったらしい、大きなバイク――緩やかな曲線が描く流線形と、歪に膨らんだフレームを持つ『バ

ルバトス』の部屋に。

色々と考えを巡らせながら、そう時間を置かずにやってくるであろう待ち人を待っていたのだ。

なんとなくアカツキが亡くなってから、停滞していた感がある黒鉄が、動き始めたような感慨を覚えながら。

22・ターン　オブ　ルビーアイ（後書き）

欄外・カクリの考察……第2回ミス黒鉄ランキングの結果と、第3回に向けての考案について。

1位・スイレン
三班のナンバー2というネームバリューと、人当たりも悪くない辺りから当然のごとくトップ。
その支持層は、同じ三班のメンバーから他班にいる古参のメンバーまで、比較的長く黒鉄に在籍しているメンバーが中心と思われる。
男性、女性の区別なく幅広い人気を誇り、当然第3回でも、私のカーリアンにとって強大なライバルになると思われる。

2位・ヘルメス
彼女の上位ランクインは正直予想外だった。
しかし、結果から考察すると頷ける部分もある。
生真面目で堅苦しい人当たりをしてはいるが、それを相対する人によって変える事はしない。
いつであれ変わらないその姿勢は平等とも言える。自分に対しても厳しい辺りは、ストイックな印象を与えるだろう。
その辺りが彼女がここに位置する理由だと思われる。
その支持層は、年下男性から女性の黒鉄で、中でも年下男性から圧倒的な人気を誇っているようだ。
要注意だと言えるだろう。

3位・スズカ
やはり見た目が大事なのだろうか？カーリアンも決してスズカには負けていないはずだが、スズカの場合は、その容姿から得られる支持層で得をしている。

彼女は儚げで、淡い印象からか、年上女性からの人気が高いのだ。
年上男性からはその力からか敬遠されがちだが、年上女性からその可愛さにより支持されたようだ。
カーリアンも妹のように可愛いがっているし。まぁカーリアンは厳密に言えば年上ではないが。
他者とあまり被らない支持層により、彼女は次も強大なライバルとなる事だろう。

４位・オリヒメ
……何故か分からない。この結果は絶対納得がいかない。
四班のバカ共が、何か裏工作をしたとしか思えない。
そうなのだとしたら、次の第三回ミス黒鉄では思い知らせてやろう。
裏工作は私の専売特許だと言う事を。

五位・カーリアン
当然！そう当然私のカーリアンは、五指には入った。
ギリギリでもなんでもいい。
前回は手が回りきらなかったから、この結果に甘んじただけだ。
次回は紅薔薇会の同士達がいる。今回より躍進するのは間違いない。
ネックはやはり悪名だろう。それを補う為にも、有名なシャクナゲと行動を共にさせるのは悪くない。
シャクナゲに注目する輩は、必然的にカーリアンの可愛さを見る事になるだろうから。

６位以下は、四班のサクヤ、ヒナギク、私と続いている。

23・Long way to say good－bye――Black－Gear

ギリギリ更新日を守れました。
今回は英語でタイトル。
ちょっと印象持たせたい場所だけ英語……という簡単な考えから。
次回は一週間飛ぶかもしれないです。
Ｂｌａｃｋ－Ｇｅａｒの部分だけをタイトルで変えて、しばらくこんな感じの話が続きます。

最後に……お気に入りユーザー登録、お気に入り登録ありがとうございました。
ＰＶ１５０００をいつの間にか超えてました。本当にありがとうございます。

23・Long way to say good—bye——Black—Cat

脳裏では一段と高く、大きな音で歯車が回っていた。
まるで過去を懐かしむように。
過ぎ去りし日を儚むように。

——カラカラカラ……

その灰色に染まった世界の中には、重厚な歯車と鈍色の鎖の群れ。
それ以外にあるモノはと言えば、無機質かつ無彩色な灰色の平原のみ。
そんな中、ただ歯車が唄う音だけが世界を回す。

——ガラガラガラ……

やがて再び発露される事を願うように、歯車が軋む音が唄い続ける。
旋律にもならず、言葉にもならないただの音の群れ。
吹き荒ぶ風すらもなく、ただ単調に、ただ淡々と、ただ軋む音。

——ゴロゴロゴロ……

この世界にはいつもただ1人きり。たった1人ぼっち。ゆえにただ孤独。
ここにいるのはこの平原の主にして、この世界の奴隷。
――と呼ばれ、――と疎まれ、――と蔑まれ、――と尊ばれたモノの成れの果て。

今はただ、この世界を抑えようと足掻くただの人間。
それが足掻きだと知っていて、なお足掻く変種。

今日も回り続ける歯車の音が聞こえる。
鎖の蠢く音が聞こえる。
主（俺）が世界を発露させるその日まで。
奴隷（俺）がその世界に屈服するその日まで……。

そっと空を見上げる。
もうすっかり見慣れてしまった夜色の空、昔とは違う真っ暗な闇に包まれてしまった空を。
そこにはほとんど欠けてしまった月が登っていた。光化学スモッグからか……あるいは変種である俺にだけそう見えるのか、淡い赤の輝きを放つ月が。

「智哉……」

つい先日――本当に数日前まで共にいた親友へと呼びかけてから、傍らに控えていた鋼の獣に跨った。

その自身の体を預ける獣――２５００ｃｃもの排気量を誇る、五班リーダー・カブト渾身の特注バイク『バルバトス』は、待ち焦がれていたかのような低すぎる唸りを上げ、俺へと語りかけてくる。

――早く、早く走らせろ……誰よりも、何よりも早く！早く早く早く早く早く――！

そんな叫びを上げている愛車を落ち着かせるように、俺は軽くハンドルを叩いてやった。

――すぐに走らせてやる。『カエサル』まで今日は手加減は抜きだ。思う存分吠え猛り、走り狂わせてやる。

その獣が持つスペック……バケモノじみた排気量と馬力を、いつもは最低限にしか使ってやれない。

それをずっと哀れに思っていたし、今の俺は鋼の獣と同化して狂いたい気分だったから、俺は躊躇いなくバルバトスを吹かし、その魂の叫びに自らの魂を同化させた。

轟々と響くエグゾーストに、ビリビリと震える夜の大気。

それは俺――唯一乗りこなせる主との魂のリンクを喜ぶ獣の吼え猛る声。

「……今日は止めはしない。俺も今日だけは好き勝手やるつもりだから」

軽く触る程度にスロットルを回すだけで、動力系から生み出された力が駆動系を震わせ、複雑な電装を躍動させるのが分かる。
そしてそれはそのまま抑えつけてきた俺の中にいる『獣』すらも猛らせた。

「安心して眠ってろ、智哉。将軍は……お前が大好きだったこの街を脅かすヤツは俺が殺してやる。

この宵闇のシャクナゲが――」

戦都を抜け、さらに東へと進んだ先にその街はあった。
光の都と冠された街。

――眠らずの都市……カエサル。

その街に足を踏み入れたのは、実はかなり久しぶりの事だったりする。
少し前まで、各地を巡って同士を集めていた際も、この街には立ち寄っていない。
迂回して、近寄らないようにしていたのだ。
なにしろ敵の本拠なのだ。いくら警戒しすぎても足りはしない。
それに、神杜との間には戦都を挟んでいる事情もあったから、この街には最低限の情報収集要員しか入りこんでもいない。

それでも今回はここにきた。
途中にある戦都や、廃都との間にいくつも設けられた関門を、バルバトスのパワーに任せて強行突破してまで。
もちろんそんな派手な真似はこれが始めての事で、ちょっとした高揚感みたいなモノを覚えてしまう。
最短距離で、障害は力づくで……そんならしくない手段を用いたのには、もちろんそれなりに理由がある。

1つは俺が――つまりはシャクナゲが、将軍を殺したのだと大々的に周囲の都市に知らしめる為。
事前に俺がこの街に向かった痕跡を残す為に、そんな派手な真似をしたのだ。

そしてもう1つは、最短距離……最短時間で行かなければ、俺が往復するまでにカリギュラが攻めこまれてしまう可能性があったからだ。
今のアカツキ亡き黒鉄はあまりにも脆弱で、将軍の本隊じゃなくても、戦都や西の水都の軍に攻められただけでも瓦解しかねない。
水都に比べて戦力が充実している戦都を混乱させる意味もあり、戦都を抜ける道程と関門を突破する手段をとったのだ。
そうして廃都と光都への道に目を向けておけば、帰路は少し北に抜ける形をとるだけで、グンと帰りやすくなる。
またバルバトスのスピードならば、本格的に警戒網を敷かれる前に、光都にたどり着けるという目算も立てて、行きは強行軍をとったのだ。

そんな様々な考えから真っ直ぐに東――光都へと向かったワケだが、戦都や途中の関門に比べて、光都自体は驚くほど警戒が薄かった。

元より西の戦都、北の古都、東の山都、南は海に囲まれている立地からか、警備はそう多くない街ではあるが、拍子抜けするほどあっさりと郊外へと入り込めたのは意外だった。

目の前に広がる光都の街並みは、相も変わらずさんざめくようなネオンの光に包まれている。

その光都の異名のごとく無尽蔵に光がたかれており、そのカエサルの名前のごとく見栄えがいい。

カリギュラの夜とは違い、カエサルの周囲はいつでも無尽蔵な光が溢れていた。

ただでさえエネルギー資源が不足がちな中、夜でも街をネオンや街灯で照らし続けるこの街は、今の世では異質であり異常にしか見えない。

自らの足元を照らし続ける為だけに無駄なエネルギーを使う――そんなところからも、将軍を自称する男の見栄っ張りな性格が垣間見えるだろう。

ヴァンプ達の権勢欲が具現化した街……それがこの光都・カエサルだ。

これまでにこの街には入り込んだ事はもちろんあったが、何度来てもその異質さには慣れそうにない。

ほんの数年前ならば、このカエサルの姿こそが人の住む街の在り方だったというのに、今は廃墟ばかりが立ち並ぶ『神杜』の方がしっくりくるのだ。

そんな感慨に捕らわれながらも、郊外のビル街に止めたバルバトスを離れ、1人城へと歩を進める。

将軍の住居であり、かつてはこの街のシンボルだった城……『ベルセリス要塞』に。

「……行ってくるよ、戻れなかったら次の主によくしてもらってくれ」

俺をここまで運んでくれたバルバトスにそう声をかける。

だが、その言葉に含まれた矛盾に、苦笑が浮かんでしまう事だけは止められない。

バルバトスは俺用に――俺の身体能力に合わせて作られた特注だ。

次の主などそうそう見つかりはしないだろう。

スズカかスイレンなら使えるだろうけど、あの2人が俺のお下がり……つまり形見のようなバイクを乗り回すとは思えない。

それが分かったからこその苦笑。

そしてそんな考えによるモノか、バルバトスが俺を引き止めようとしているかのような錯覚すら覚える。

自分を最大限に使ってくれる主を、引き止める声が聞こえた気がしたのだ。

「……悪いな。でも死ぬつもりはないよ。アイツの死だけで『約束』を果たす事は出来ないから」

――それに俺は、まだ生き足りないから。

そう最後に付け足すと、ゆっくりとバルバトスに背を向けた。

その両手に自らに科した制約の証を握りしめながら。

＊＊＊＊

「案外あっさりと入れたわね」

思わずそんな感想を漏らしてしまう。

光都は戦都・クリシュナの1つ向こうにある。いわば敵支配地域にある街を、1つまたいでさらに東にあるのだ。

それなのに別段問題も起こらずやってこれたのは、まっすぐに東に向かわずに戦都を大きく迂回して、かつては古都といわれた都市を抜ける道を選んだからであろう。

その古都も、今では北陸から南下してくる勢力と、関西軍がぶつかり合う最前線であり、革命以前に旅行で訪れた際の面影はほとんど残っていない。

今でも特別警戒区域であるその街を通ったシャクの判断は、やはり正しかったのだろう。

戦都の部隊は、黒鉄――中でも『黒鉄のシャクナゲ』率いる黒鉄第三班に対抗する部隊だ。

カリギュラ方面からの来訪者には、常に警戒しているだろう。

だが、北陸に面する部隊の連中は、黒鉄ではなく北陸方面に警戒の目を向けている。

もちろん南も警戒はしているだろうけど、立ち寄らずかすめて通過するだけなら、戦都を突き抜ける危険とは比べるべくもない。

それをシャクは知っていたんだと思う。

彼に比べれば、あたしがいかにこの辺りの状況を把握していない

かを思い知らされた気がする。
今まではせいぜい戦都までしか行った事がなく、周囲の状況も地図の上でしか知らなかったんだろう。
同じ班長の立場にありながら、この差は正直ちょっと気恥ずかしい。

「前に光都に入った時は突き抜けたけど、今回はまだ前に比べれば余裕があったからな」

そう笑うシャクに肩をすくめてみせるけど、その彼の笑みがハリボテなのはすぐに分かった。

光都に近づけば近付くほど……カリギュラから離れれば離れるほど、シャクが纏う緊張感は増していた。
今もあたしが知るシャクよりずっと重い気配を放ち、ずっと深い瞳をしている。
光都の郊外に止めたバイクから離れた時には、あたしでさえ生唾を飲むほどのピリピリした空気を纏い、その視線に射抜かれそうな錯覚を覚える。

……らしくない。
そう思う。
気にくわない。
そうも思う。
倍以上――いや場合によっては十倍近い数の関西軍から侵攻を受けた時でも、彼だけは変わらずに余裕を見せているのに……今のシャクは本当に『らしくない』。
でももっとらしくないのは、きっとあたしだと思う。
いつものあたしならそんなシャクをみれば、からかい混じりに軽口を叩いただろう。

あの黒鉄のシャクナゲから余裕が消える状況なんだから、ひょっとしたら喜んでいたかもしれない。

いつもは1人余裕ぶって、1人一番傷付く場所に向かって、1人で悲しんで……

そんな彼らしさが消えた事に、あたしはきっと俄然やる気を出して、シャクに余裕ぶってみせたと思う。

彼が余裕ぶって見せない相手――つまり本心を見せられる相手に、あたしはなれたんだと誇らしく思ったかもしれない。

そんな相手は、あのスカシ野郎のアカツキ以外にはいなかったから。

アイツがいなくなってから、シャクはことさら強くあろうとしだしたから。

「ベルセリス要塞は正面から突破するしかない。あそこは掘りに囲まれた城を要塞化したモノだから、裏口なんてないんだ。昔、観光地であり地域のシンボルだった時は、ひょっとしたら裏口くらいあったのかもしれないけど、少なくとも前に入った時はなかった」

――隠し通路くらいはあるだろうけどね。

そう続ける彼に頷いてみせる。

もう茶化す余裕もないし、そんな状況でもないのはさすがに分かっている。

もうここは光都――

あたし達黒鉄の敵、関西軍の本拠地の一角なのだ。

今までは交通規制も関門も何もなかったけど、ここからさらに街

中に入ればそうはいかないだろう。
現になんとかって名前の要塞は、かつてのお城――戦国時代の城を改築したモノらしい。その侵入は容易ではないと思う。

「最初はカーリアンが、少し時間を置いて俺が突っ込む事にしたいと思う。ちょっと――いや、かなり危険だけど、カーリアンには陽動を頼みたい。君の炎は凄く目を引くからね。それに目が行っている間に俺が将軍の元へと向かう。どうかな？」

――悪くない、とは思う。
シャクが下手に暴れまわるよりも、あたしがそこら中を発火させまくる方が、間違いなく敵を引きつけられるだろう。
確かに危険だとは思う。でも本当に危険なのは、あたしじゃなくてシャクの方だ。
本拠地の中に突っ込むって事は、逃げ場のない場所に入り込んでいく事に他ならない。
いざとなれば逃げ場や隠れる場所なんかいくらでもあるあたしとは違って、中に入り込むシャクには全くない。
入り口、城の外壁、外堀の周囲を囲まれただけで、どこにも逃げようがなくなるのは、シャクの方だ。
そうは思ったが、その考えを口にする事はなんとか自制した。
他にいい方法がないのもあるし、何より彼は一度一人っきりで光都に入り込み、要塞を踏破して将軍を後一歩まで追い詰めた実績がある。
そしてあたしが外を任されたという事は、陽動だけじゃなく彼の退路まで任されたという事だ。
それがちょっと嬉しくて……誇らしい気がして、あたしは渋々を装って頷いてみせた。

「ま、仕方ないわね。外は任せときなさい。絶対入り込める隙を作

ってみせるから」

「頼むよ」

――帰り道もあたしが確保しといてあげる。

そう心の中で恩を着せてから立ち上がると、大きく伸びをした。

凝り固まった筋肉と緊張感をほぐすように丹念に体を動かし、軽く頬を張る。

――今までずっと守勢の戦いしかしてこなくて……

攻められた時だけ戦ってきて……

それ以外の事をする余裕なんかなく、ただがむしゃらに生きてきただけのあたしが、今はシャクと一緒に光都にいる――

そう思えば感慨深いモノがある。

今はもういない双刃のクロネコや深緑のサザナミ、練血のミヤビ……そしてアカツキが今のあたしを見ればなんて言うだろう？

無謀を笑うだろうか？

それとも頭を抱えてみせるだろうか？

「……行こう。今度こそ、今度こそ坂上を――」

そんな彼の呟きと共にキリキリと辺りの空間が引き締まり、そんな冷気にも似た空気にむせそうになる。

少しだけ悲しくなる。

その空気をあたしは知っていたから。

これが彼から滲み出る殺気によるモノだと……シャクが本気で戦う時に撒き散らす、死の空気だと知っているからだ。

そんな時のシャクは、余裕を無くしている時だと知っているから、少しだけ悲しくなるのだ。

「……じゃ、先にいくね」

「あぁ」

そして、最後にそんな言葉だけを交わすと、あたしは1人、ゆっくりと大通りを歩きだした。

血路を開くなんて言葉はあるけど、今のあたしにそんな気概はさらさらない。

適当に敵を引きつけて、あたしもシャクを追った方がいい。

今のシャクは、なんかヤバい気がする。危ういとかそんなモノじゃなく、純粋に危険な気がする。

将軍との間に何があったのか……かつて将軍を殺そうとここに来た時に、一体何があったのかあたしは知らない。

知っているのは『シャクナゲが失敗した』という結果だけ。

実際に戦って勝てなかったのか、状況から途中で諦めたのかは分からない。

ただ今のシャクの様子から、何か思うところがあるのだけは間違いないだろう。

それが余裕を無くしているのか、はたまた違う理由からなのかは分からないけど。

でもきっとスズカは、そんなシャクの事を知っていて、ちゃんと分かっていて、あたしに付いていくように頼んだんだと思う。

だからここで時間稼ぎをする事だけに、気を取られるつもりにはなれなかったのだ。

――絶対にこんなトコでは死なせないから。確かにあたしが側にいるのはいいよ。でも、親友から頼まれた事を果たさないワケにはいかない。だからここでは死なせられない。

そんな終わりを認めたくなんかなかった。

だってそうなればスズカは絶対に泣くだろう。

それにシャクは、今までカリギュラ――神杜を守る為だけに戦ってきたんだから、最後はその守ってきた地で迎えるべきだ。

だからここはあたしがずっと願ってきた最後の場所じゃない。そんなのは認めたくない。

その為には、足留めや時間稼ぎなんて陽動に手間を取るワケにはいかない。

そう考えを纏めると、そっと両手をかざした。

――その手のひらにある、あたしの色をした紅の灼熱をかかげるように。

23・Long way to say good—bye——Black—C

また何か思いついたら追記します。

24・Long way to say good－bye――Crimson

あとがきを追加。
忘れておりました。
次回更新は活動報告にてお知らせしますが、今度こそ一週間飛ぶと思います。
今回の人物紹介は『アカツキ１』

24・Long way to say good－bye――Crimson

「付いてこい。将軍閣下の元へ連れて行ってやる」

「は？」

突然投げかけられた言葉に、思わずそんな間抜けな声を上げてしまった。

ついうっかり……とかじゃなく、それ以外どんな声を上げればいいのか分からなくて、当然の流れとしてそんな間抜け声を上げたのだ。

だってここはあたしの敵である関西軍――関西統括軍の首都たる《光都・カエサル》だ。

当然こんなところに知り合いなんていないし、何より目の前に立つ若い男は、そのくすんだ銀髪や雰囲気からして、間違いなく元変種だと思う。

まぁ、元変種だろうが元既存種だろうが、将軍に閣下なんて付けるクサレなんだから、関西軍なのは間違いない。

よりにもよってそんなヤツに、その親玉である将軍の元に案内してやると言われたのだ。

ヤツらと敵対関係にある黒鉄の――紅のコードを持つこのあたしが、だ。

意外というよりも、そんな言葉が出てくるなんて、まず予想が出来るワケがない。

だけど、いつまでも惚けてばかりもいられない。キッと視線を細め、その若いヴァンプを油断なく見やる。

「……どんな魂胆があるのかは知らないけど、こう見えてもあたしって気が長い方じゃないわよ？下手な冗談は――」

「冗談のつもりはないな。それにこれだけ派手な真似をしでかす女が、気が長いなんて事も考えていない」

――ほっとけ！

自覚はあるけど、他人に……しかも初対面の敵にそれを言われると、さすがに腹が立つ。

まぁそこのコンクリ造りのビルは、ちょっと派手に焦げているように見えるけど。

その男の後ろのヴァンプ――恐らくは元既存種や弱い力しか持たない元変種達が、真っ青な顔でこっちを見てたりするけど。

その男がいきなり現れて、変な事を言ってこなければ、もっと派手な真似をするつもりだったけど。

でも敵にそんな事を言われる筋合いはない……と思う。

「理由は聞くな、知らん。単に黒鉄の者が来たなら……シャクナゲ以外のヤツが来たなら、すぐに通せと言われているだけだ。閣下が何を考えているのかはお前が直接聞けばいい」

あくまでも淡々と……むしろ面倒そうにそう言うと、その男は後ろにいる下っ端の1人に何らかの指示をし、こちらの返事を聞く前に踵を返すとさっさと歩き始める。

その態度が『付いてきても付いてこなくてもどっちでもいい』と言っているように思えて――

あたしは慌ててその後を付いて歩きだした。
なんでこんな事になっているのか……と言われれば、もちろんあたし自身よく分かっていない。
ただ案内してくれるというなら、付いていってもいいかと思っただけである。罠なら罠でもいい、突破するだけだから。

ただもし罠じゃなかったら？なんの為にこんな事を？
そう思ったから付いていく事にしたのだ。
でもなんかよく分からない現状に、首を傾げてしまうくらいは仕方ないだろうと思う。

それを理解する為にも、シャクと別れてからの出来事を思い出す事にしてみよう。

シャクと別れた後――というよりも、別れてからすぐ、あたしはちょっと悩んでいた。
革命前までは数多くの車が行き来したであろう大通りは、今は虚しく閑散としていた。
部品を取られたかつては自動車だったモノの残骸が、道端のあちこちに止まっているところからも、この街が交通の要衝であり、大きな都市だった事が窺える。
人の行き来は全くない。
聞いた話によれば、被支配者層の人間は、地下道や郊外に押し込められているらしい。

この街の中心は、完璧にヴァンプだけのモノなのだ。

そんな大通りの脇で何を悩んでいたかと言われれば、それは当然シャクの事である。

シャクは一度、将軍暗殺に失敗している。

それが単なる力負けなのか、はたまた数の暴力にやられたのかは分からない。シャクはその事について教えてくれないし、それを誰かに語ったという話も聞かない。

黒鉄に広がっている噂では、シャクは後一歩のところまで追い詰めながら、敗れたという話だったはずだ。

ここでネックなのは、『シャクは1人で多数のヴァンプ達と戦った後に、目的の将軍と相対した』という事。

それは言い換えれば、『最初から1対1なら負けていなかった』という暗に含んでいると言える。

それが事実なのか、単なる噂なのかは分からない。

ただ、その蛮勇とも言える行為が、アカツキ無き黒鉄に活気を与えたのは間違いない。

それを指して、カクリは『噂を上手く使った』と言っていた。

ひょっとしたら全く歯が立たなくて、単に逃げ帰ってきたかもしれないのに、その噂では『後一歩』だけ及ばなかった事になっているのだ。

あたしにとって間違いなく事実なのは、『アカツキが亡くなった後、たった1人このカエサルに向かい、結果シャクがボロボロになって帰ってきた』という事だけでしかない。

心配になって当たり前だろう。

むしろなんでアイツと別れるまで心配にならなかったのか、それが逆に不思議なくらいだ。

それであたしは悩む事になる。

つまり――

『シャクに将軍を任せていいのか』という事を。

あたしが陽動を受け持ったからには、シャクなら……たった1人でも将軍の元にたどり着いたと言われるアイツなら、間違いなく将軍の元までは行ける。

それくらい派手に暴れて、目を引きつけるつもりではいる。

でも、シャクが将軍にかなわなかったなら？

あたしが適当に敵を撹乱して、その後で将軍の元へ向かった時には、シャクがやられていたら？

それであたしは悩んでいるのだ。

もういっその事、あたしも一気に将軍のところへ行った方がいいんじゃないか？……なんて思うワケである。

――でももう賽は投げられた後だし。

一旦動き出してから悩むのが、あたしの悪いクセだった。動く前にはなんにも考えないのに、動き始めてからあーだこーだ悩むクセがある。

「カクリがいれば色々と考えてくれるんだけど……」

いかにあたしがあの子に頼っているか、それを嫌でも痛感する。

あたしが知らないところで、あの子が色々と根回しをしてくれているからこそ、あたしなんかでも二班の班長でいられるのだろう。

でも仕方ない。今あの子はいないけど、悩んじゃった以上……そして不安になってしまった以上、それを無視も出来ない。

そんな割り切りが出来る性格じゃない事は、あたし自身が一番よく知っている。

ならば今からどうするかと言うと――

「辺り一帯放火して、どさくさ紛れにあたしが将軍を潰す、ってのはどうだろ？……やっぱ厳しいかな」

なんて事を考えてしまうワケだ。

確かにシャクは強いけど、1対1で向かいあったなら、あたしはアイツに負けないと思う。

戦う事なんて有り得ないし、そうなるくらいなら全部を捨てて逃げる方法を考えるけど、万が一そうなればまず負けはしないだろう。

アイツの一番の『強さ』はそんな力の強さじゃないのだから。

それをあたしは知っている。

でもその強さは、将軍と相対するのには向かないと思う。

黒鉄と関西軍の争いのように、軍と軍の対戦なら話は別だ。その時はシャクの『強さ』こそが必要不可欠で、それがあったからこそ黒鉄は今まで戦ってこれた。

でも、今の状況で必要なのは、スズカのような純粋な強さだ。そして紅のような単なる強さだと思う。

だからこそ、ここでシャクを失う事だけは絶対に避けなければならない。

アイツの強さは、あたしやスズカが持ち得ないモノだから。

そして、黒鉄にもこの国にも……そしてあたしやスズカにも、アイツは絶対に必要な存在だから。

しかし、そう考えを纏めると別の問題が出てくる。この辺り一帯を放火しようにも、かつてこの辺の都市の中心であったカエサルは、建物は全てコンクリート作りであり、道路ですらアスファルトな事である。

……つまり簡単に火が着かない。
さて、どうしたモノかと悩みはループする。
足留めだけを果たすなら話は簡単だ。適当に都市を警備しているヤツらと遊んでいればいい。
そこらで問題を起こしまくればいいだけだ。
しかし、そんな事をしていれば言わずもがな……シャクのヤツは先に将軍の元へたどり着いてしまう。

すでにカエサルの中心近く、デカい城が彼方に見える場所まで来ておいて、いまさら悩む自分がホント腹立たしい。

「あぁ～、もうっ！！面倒っくさい！このまま突っ込んで、城に火を着けてやる！」

どうせもうシャクは動き出している。後戻りは出来ない。
『紅』出来る事は炎を操る事だけだ。
せめて――そう、せめてシャクと決めた役割を果たす為に、派手に暴れながら城を目指す事にしよう。そう短絡的に決めると、前方から近づいてきた身なりの良さげな男達に近づいていく。
この街で身なりのいい人間という事は、ヴァンプ側……つまり搾取する側だろうと判断したのだ。
懐が僅かに膨らんでいる辺りからして、銃を帯びているのだろう。
そこからしても、相手が堅気な人間だとは思えないしね。

「ねぇ、ちょっと聞きたいんだけど」

「なんやねん？てかあんた、この街では見かけんツラやな？ウチは入り口で検問とかしてへんけど、あんたみたいなんがこの街におらんのは知っとるで」

あら、関西弁。

……すっごく嫌いなタイプの話し方。

オリヒメのムカつく喋りを、そのまま下品にした感じからして初対面の印象はマイナスだ。

しかもやたらジロジロ見てくる辺りがムカつく。

ヴァンプってだけで死ぬほど……というより、ぶっ殺したいほど大っ嫌いなのに、それをさらにマイナス修正してくれる。

「あんさんみたいな赤い髪のヤツはウチにはおらんで」

「戦都の方にはおったよな？あれ？あれは男やったんちゃうかったっけ？」

2人とも関西弁か。

そういや、ここは関西。あたしの地元じゃないんだった。

黒鉄（ウチ）はみんな……若干一名の陰険と一名の暴れん坊を除いて、関西弁を話すヤツなんていないから、あたしもうっかりしていた。

この話し方を聞いているだけでなんでかムカムカしてくる。

……完璧陰険オリヒメへの印象のせいだけど。

暴れん坊の方であるヨツバは、いい印象も悪い印象もないけど、オリヒメの印象はかなり悪い。

顔を合わせれば、辺りを巻き込んで喧嘩ばかりしているのだ。関西弁にいい印象を持つワケもない。

「あんた達、この街の関西軍の人だよね？」

「あんたほんまにウチのヤツちゃうんやな？このタグ見えんのか？これがカエサル所属の証やねん」

えらく親切に……にやけた笑みを浮かべながら、首から下げたタグを見せつけてくる男達に、あたしは肩をすくめてみせる。
ここまで警戒心が薄いヤツらを前にしたら、肩をすくめるくらいは仕方ないだろう。
そのにやけた顔からして、何か変な期待でもしているのだろうか？

……ほんっと下らない。

「じゃああんた達でいいや。今からあたしとちょっと遊ぼっか？」

「あんたも統括軍に近づきたいクチかい。なんならクチ聞いたってもええで？俺らは近衛軍にも少し顔利くしな」

「まぁお互いよく知らんとクチなんか聞けんし、ちょっとどっかいこや」

そう言って肩に手を置いてくる男の内1人に、にっこりと笑顔を向けてやる。
その内で煮えたぎっている嫌悪感を、出来るだけ抑えながら。

「――どっこも行く必要なんかないわよ。あたしと遊ぶつもりなら、その遊びは『火遊び』の一択しかないんだから」

途端膨れ上がった攻撃意志の塊は、その密度と歪さを持ったまま、紅蓮の輝きとなって周囲に満ちる。

――ヴァンプ、ヴァンプヴァンプッ！！

脳が痺れるような、微かな痛みと共に、逆らいようがない快感が

突き抜けるような……そんな感覚が背筋を駆け抜けるのが分かる。
最近はまだマシになった方だけど、『ヴァンプ』に対して力を使う時に内から溢れ出るこの感覚は、いまだにあたしの内にある。

甘い甘い感覚だ。
陶酔感にも似ている。
この感覚は、今でもあたしを狂わせそうになる。
この感覚――それは多分『憎悪』。

コイツらには遠慮する必要なんてない。コイツらは『私』の全てを奪ったんだから。だったら『あたし』がコイツらから全てを奪っても、文句を言われる筋合いなんてない。
そんな誘惑に心がたわむ。
その誘惑は危険で――
この誘惑が、今のあたしの大事なモノ全てを壊す事を知っていたから、なんとか自制出来るけど、しがらみさえなければあたしの感情は全てを焼き払うだろう。
視界に写る全てを灰燼に帰し、辺り一帯を煉獄に変える。

カクリが言うには、あたしの力は突然型の中でも特に感情に左右されやすいらしいから、この快感（憎悪）は最悪に危険だった。
今回はベタベタされた事により、二割増しだったからなおさら。
それをなんとか抑え、ニッコリと笑顔を向けてやる。
あたしの肩に手を置いたまま唖然としている男――ヴァンプへと。

「さて、遊ぼっか？ルールは単純な鬼ごっこ、あんた達は逃げるオンリー、オッケー？」

「こ、この街ン中は能力使うん禁止されとるんやで！？関西軍敵に回すつもりなんか！？」

敵に回す？
腰が引けた様子で、甲高い声を上げる男に、あたしは見せつけるように唇を歪めてみせた。
――何を今更寝ぼけた事を。敵に回すも何も……
「……最初っから最後まで敵だっての！」
轟――
両手からほとばしる劫火は男達を掠め、背後の街路樹を炭へと変える。
文字通り真っ黒なオブジェと化したそれを見やり、指を軽く弾いて鳴らした。
その指先には新たな赤。紅の華が宿る。
「逃げるのはあっちよ。あのバカデカい城の方向を目指しなさい。少しでも道をそれたら、容赦なく焦がすからね」
――あたしは真っ直ぐに城に向かう、その間にシャクは迂回して入り込む。
もちろんあたしは足留めを食らうだろう、強力な変種も出てくるハズだ。
でもあたしが真っ直ぐ城に向かっている以上、敵にも目的地が分かるだろう。
それが分かる以上、城内に入り込んだ後は、シャクが警戒網に引っかかると思う。
結果はイーブン……いや、適当に引っ掻き回した後、辺り一帯に火を放つだけ放って、そのどさくさに紛れれば、城内で足留めを食らっているシャクよりも早くに将軍の元へ行ける可能性はある。

……まぁ、所詮は捕らぬ狸の皮算用な気もするけど。

「近衛軍呼んでこいや。コイツは敵や！敵のネオや！」

――ネオって……

「呼ぶなっつーの！」

色々と考え込んでいながらも、遊び相手の言葉――ネオって発言に思わず反応して、火球を飛ばす。

直撃コース、炭化まっしぐら、黒焦げ危機一発。

……あっ、当てちゃった、と思う間もなく――

その火球は掻き消された。

見た事のある力の発露――何度も黒鉄内では対戦した事がある『氷』の力によって。

「……女、お前黒鉄か？」

しかし、そんな声と共に現れたのは、当然あの陰険オリヒメなワケもなく、見た事のない若い男。

くすぶるような濁った銀髪と、ひょろっとした長身に纏っているのは、気だるそうな雰囲気。

溌剌と陰険オーラを放っているオリヒメとは違い、陰気そのものの男だった。

ただ、その瞳だけは剣呑な光を秘めていて――

「はん！」

あたしは問いに答える事なく、大きく肩をすくめてみせた。
その問いになんの意味があるのか分からなくて。
ここに敵として来ている以上、黒鉄だろうが北陸軍だろうが関係ないハズだと思えて。

「黒鉄か？」

だが、それでも男は重ねて繰り返す。
その問いには、大きな意味があると言わんばかりに。

「……だったら？あたしが黒鉄だとしたら、将軍さんのトコに案内でもしてくれるのかしら？」

皮肉げに……というより、皮肉たっぷりに男に返し、その手に新たな紅を灯す。
先ほど氷の力に相殺されたモノよりも、格段に力を込め、一段と感情を込めた炎を。

あの氷の力が、この男のモノなのかは分からない。
そして、あの力がオリヒメと全く同種の氷の力を操るモノなのかも分からない。
この力の持ち主が、オリヒメ級の変種なら勝つのは楽じゃない。
そしてオリヒメ以上なら、勝つのは厳しいと言わざるを得ない。

……突破くらいは出来るだろうけどさ。

だが、そんなあたしを意にも介さず、気だるげな雰囲気のままで、男はコクリと頷くと言葉を続けた。

そう、あたしを唖然とさせた冒頭の言葉を。

「付いてこい。将軍閣下の元へ連れて行ってやる」

人物紹介・アカツキ１

関西事変と呼ばれる一部の変種達による革命に際し、革命軍……現関西統合軍に合流しなかった変種達と、変種達を人として受け入れるようとする若い既存種達による集団のリーダー。
関西では数少ない純正型で、その金色の髪と瞳から『アカツキ』と呼ばれるようになった。
斜に構えたようなスタイルを貫きながらも、冷静に情勢を見極める事に長けており、革命軍と自衛隊の戦いが始まる前から集団の勢力をまとめ、神杜市に拠点を作っていた。
革命に成功し、関西統合軍と名を改めた革命軍に対し、拠点と勢力をまとめて抵抗する姿勢を保てたのは、アカツキの人望とその能力、『ラストノート』によるモノ。
ただしこのラストノートは、アカツキの能力の一旦でしかなく、本質的な能力についてはあまり知られていない。
シャクナゲを黒鉄に引き入れた張本人であり、黒鉄の元を作った人物である。
また、関西統合軍の将軍とは浅からぬ因縁があった。

スキル

能力・ＳＳ（その能力は戦いに向いたモノではなかったが、汎用性に富む強大な効果が期待できるだけのモノ）

身体能力・Ｄ（身体能力は変種の中でも下位）

カリスマ・Ｓ（人望や人心を掌握する能力は黒鉄随一で、アカツキ健在の時には、関西統合軍のトップたる将軍や、他地方軍からも勧誘の密書が届いていたほど）

先見性・ＳＳ（ラストノートの力と、それを有効活用出来るだけの知識によるモノ。シャクナゲとカブトという、黒鉄の礎となる人物を引き入れたのは、彼の先見の明を証明している）

知識・Ｓ

秘密性・Ｓ（嘘はつかない。ただし真実は話も決してさないタイプ。つまらない事から色々と秘密が発覚する可能性を考え、どうでもいい事でもあまり公言はしない。思わせぶりな口調で、カクリやアオイをからかっていた）

ルックス・Ａ（その瞳……虹彩が幾重にも重なった瞳により、他人から少し距離を取られていた）

ラストノートについて。

彼の能力、『預言書』の銘。

ただし、預言そのものが彼の能力なワケではなく、その能力の一旦が『ラストノート』。

一般にはこれがアカツキの能力だと知らせていた。

真実を知るのは、シャクナゲ、カブト、スズカと他数人のみ。

このノートには、彼自身の行動に関する未来のみが自動手記され、彼が噛んでいない未来には全く関与できない。

つまりシャクナゲやカブト、そして今後の黒鉄の未来などは記されない、欠陥預言書である。

25・Long way to say good－bye――the shadow

月曜日は連休ゆえの予定ができましたので、ギリギリ土曜日に更新致します。
なお『シンフォニア』の方は、手直しが終わりませんでした。

書き終わった後も本編をひたすら手直ししているうちに、そっちはすっかり手付かずです。
書けてはいますが、アップはさすがに出来ないデキです。
また終わり次第アップ致します。

今回のあとがきは、『あとがきっぽいあとがき第2弾』です。
あとがきネタはまだまだあるけど、今の段階では出せないから、あとがきっぽいあとがきを苦しまぎれに載せております。

感想や要望、誤字脱字のご指摘等ありましたら、ガンガンお願いします。

さりげなく誤字や脱字に、逆月自身もたくさん気付いてますが、直していないのは秘密です。
なんというか『ま、いっか』で済まし、後から……なんて先延ばししちゃうクチです。
それじゃダメだとは思っているんですがね、自分だけではなかなか動けない怠け者なんです。

25・Long way to say good－bye――the shadow

下弦の月が傾く頃――戦いの号砲は高らかに上げた。
隠密行動をしようにも、坂上がいるベルセリス要塞には、高い知覚能力を持つ変種も多いと思う。どうせバレる事になるのなら、最初から派手に始めてやろう……あらかじめそう決めていたのだ。

辺りには警報が鳴り響き、靴音の群れがせわしなく動きまわる。
そんな靴音の群れに、時にはゆっくりと忍びより、時には真っ向から突っ込んでヴァンプ達を潰していく。
銃床で顎を叩き砕き、膝を踏み抜き、倒れた相手の額にシャクナゲの唇を触れさせる。
そして深く暗い色のキスマークを刻まれた相手を、道の先へと蹴り飛ばし、それを盾のようにしてまだ生き残っているヴァンプ達へと迫り……その繰り返し。

苦鳴も嘆願も聞かない。聞こえない。何人潰したかも数えない。ただ怒号と悲鳴の狭間を駆け抜ける。
その中には、ひょっとしたら俺よりも――このシャクナゲよりも強力な変種がいたかもしれない。それでも俺が先へと進めたのは、純粋に経験値の差。
持つモノである関西軍と、持たざるモノである黒鉄。その2つが歩んできた経験の差が、今の俺と関西軍の変種――ヴァンプとの一番の差だろう。

それを実感しつつも、ただひたすらに奥を目指して進む。
思ったよりも数が少ない事が幸いした。恐らくは、また近畿東部地域で東海の狂人の勢力と、暇潰しのような小競り合いでもしているのだろう。

それは多分ツいていたと思う。
俺にとっても。そして今ここを離れているヤツらにとっても。

もちろんここに残ったままのヤツらだけでも、当然数はかなり多い。
だけどこの暗闇の中では、下手な変種の能力などよりも『身体能力』こそが最大の武器だ。
視力しかり、それに付随する認識力しかり。暗い場所は、その視界を狭めるだけじゃなく、認識力をも下げる。
この闇こそが身体能力の優れている俺には一番の味方と言えるだろう。

そんな状況をフルに使い、ここにいる戦力を確実に削っていく。
別にそれ自体が目的なワケじゃない。
目標はあくまでも1人で、それ以外は全てそこへ至る為の道標。
変種も既存種も関係ない。
向かってくる者は全て敵、俺の前に立つヤツは全部敵だと定めて……そう覚悟を決めて、戦いの号砲を上げたのだから。

もちろん今は亡き親友に、その号砲が届かない事は分かっている。
そんな感傷に浸るにはこの世界は神の膝元から遠すぎる。
アイツが地獄にでも落ちていたなら、あるいは聞こえたかもしれないが、アイツの要領の良さからいって、おめおめと地獄になど落ちてはいないだろう。

……もっとも『地獄』とやらが、現実（この世界）より過酷なのかは少々自信がない。

案外現実（この世界）に揉まれたアイツなら、地獄でも『こんなのぬるま湯と変わらない。ぬるいぬるい！！』とか言って笑っていそうだ。

そんな愚にもつかない考えに苦笑を浮かべながら、最後の警備兵を……一瞬で仲間達を壊され、呆然としたままの男を蹴り飛ばすと、その倒れた肩を足で踏みつけながら額に銃口をあてた。

――地獄（向こう）にもし智哉がいたなら伝えてくれ。

すぐにサカガミもそっちに行くってな。

……そんな言葉を落としながら。

――坂上。今は将軍を名乗るヴァンプのファミリーネームは、そんな珍しくはない普通のモノだった。

それを俺に教えてくれた男はもういない。狂ったかつての友人から……関西のヴァンプの始祖になった男から、必死に故郷を守ろうとしたアイツは、きっと自らの死期を知っていて――それでも諦めてはいなかった。

どのような手段を用いたのか、個人だけで集めうるには多すぎるほどの資金や資材を集め、それらを元手に、人と変種が共に暮らせる組織を作り、部下に命じて人材を集めていた。

俺を黒鉄に誘い、檻たる符号を持つに足るだけの能力者を集めていたのだ。

きっと……そう、アイツはきっと己の死期を知っていたからこそ、後を託すに足る人材を集めていたのだろう。

力の有無に関係なく人である事を願った者、ヴァンプにはなりたくない者達を集めていた。

ヴァンプのように、変種がその力に狂わなくても済むように、力なんかよりも大事な居場所を作り上げた。

今までの仲間だけじゃなく、これから出来るであろう新しい仲間達が、その力に溺れないように——そして『檻の中心』にいるバカを、その暖かさと居場所で抑え込む為だけに『黒鉄』を作った。

我が三班の今日の在り方も、アイツが作ったモノだ。

それを色濃く受け継いでいる班こそ、今の三班と言ってもいい。

俺自身も、アイツに言われて各地にいる変種達を集めて回っていたけど、今思えばそれは多分『檻の役割』を期待しての事だけじゃなかったと思う。

そして俺を——強力な変種達を同類達で囲み、狂う事を……増長することを抑える為だけじゃないのだろう。

故郷とそれを愛する人に残す為の財産だと思うのだ。

いつも考えなしに行動しているように見えて、アイツは自分の周りの世界を愛していた。自分を囲む人々を大事にしていたから。

それでもその男の存在は大き過ぎて、残された者達は絶望に包まれている。今いる場所に不安を抱いている。涙にくれている。

でもその絶望、不安、涙を拭えるヤツはもういない。

それが出来る男は、最後まで笑って——きっとそれも周りの者達の為に無理して笑って——逝ってしまった。

いかに死期を知っていても、死ぬ事が怖くないハズなんかないのに、最後の最期まで笑って逝ってしまったのだ。

……だから俺はここに来た。俺はアイツみたいに、その雰囲気だけで周囲を笑わせる事は出来ないから。
アイツみたいに笑うだけで周囲を安心させられないから。

――俺はアイツみたいにはなれないから。

「智哉、お前はそっちで安心して見てろ。お前の『暁』と対になる最初のコード『宵闇』に賭けて……この手を血に染めて、罪に濡らして、残してくれたモノは全部守ってみせる。
最初は――――将軍だ」

そう、血塗られた道が似合う俺には、所詮行動と結果で示すしか出来ないのだから。

＊＊＊＊

……どうなっている？
そんな思いに、軽く舌打ちを漏らしてしまう。
状況が全く読めない。少なくとも俺が予定した通りに事が推移していないのだけは間違いない。

予定では、先行したカーリアンとは違う道程を通り、彼女が起こすハズの騒動をすり抜け、吹き上がる爆炎に紛れて坂上の城の正門を目指す予定だった。

そう、それだけで大分楽に坂上の元まで辿り着けるハズだったのだ。

上手くすれば、カーリアンを蚊帳の外に置いたまま、全てをこなせるかも……なんて、甘い考えすら持っていたくらいなのに。

「なんでここまで警戒網が敷かれているんだ」

その正門からは、警邏兵達が慌てた様子で出て行き、あちこちへと散会している。そして肝心の入り口、正門前には簡易の砦まで築こうとしていた。

トランシーバーらしきモノで連絡を取っている兵、ドラム缶やら鉄骨やらを運んでいる者、スナイパーライフルらしき長銃を組み立て、あちこちのビルに散る者までいる。

驚きなのは、どこの闇市から取り寄せたモノなのか、革命以前にすでに後継機が出た関係で廃れていた『９９式』らしき戦車まで幾つか配備している事だ。

その奥には一台、９９式に比べれば断然新型の『ＴＫ―Ｘ』の改良型らしき戦車まで出てきている。

それら重車両が、門の前に盾のごとく扇状に配備され、砲塔を四方に散らしていたのだ。

「運悪く他地方軍が侵攻してきた時期に被った……ってワケじゃなさそうだな」

余りにも物騒な配備ではあるけど、それらの動きが防衛を目的としたモノであるのは明らかだ。

他地方軍が侵攻してきたのなら、こんな首都深くの要塞前に構え

はしない。侵攻部隊の迎撃に向かうだろう。
あの坂上が、自分の支配地域を侵されて、やられっぱなしのまま防衛の手を打つとは思えない。

そう、これは侵入者に対する構えだ。
本拠を守る動きの慌ただしさや物々しさからして、その侵入者が尋常ならざる相手だという関西軍の認識が深く見てとれる。
――そう、その侵入者とはすなわち俺を指しているのだろうという事は簡単に想像がつく。

かつてこの城の奥深くまで単身辿り着いた黒鉄。
一年前のあの日、関西軍の中枢をめちゃくちゃにした変種。
坂上と向かい合い、追い詰めながらも、途中で断念した存在を警戒しているのであれば、この警戒網の厚さ、物々しさも納得はいく。

……問題があるとすれば、『何故俺が今来ているとあっさりバレたか』だ。

黒鉄に潜む狐がその情報を流したとは思えない。
狐の正体が俺の思っている通り『アイツ』ならば、俺が倒れる事を望んではいないハズだからだ。
アイツが狙っていたのは、あくまでもアカツキが亡くなった時の再現。黒鉄を1つにまとめる事にあったハズだから。
大きな作戦の失敗と内通者がいるという危機的状況を作り上げ、アカツキが亡くなったあの時と似た状況を作る事。それにより危機感を与え、7つに別れた黒鉄を、再び1人のリーダーの下に1つにする事にあるのだろうと思っている。

万が一、俺が狐の正体を見誤っていたとしても、俺が抜け出したと気付いてから、関西軍に連絡をいれたにしてはこの動きは早すぎる。

俺達が抜け出した事くらいは、すでにみんな気付いているだろうが、そこから連絡を入れたにしてはいくらなんでも早い。

携帯もパソコンもすでにその存在に意味を成さず、通信網自体がほぼ壊滅している現在では、情報の速さも正確さも『昔』とは比べるべくもないのだから。

「……考えている暇はない、か。理由がどうだったにせよ、完全に準備を整える前に、一気に突破するしかない」

もしくはしばらく待って夜になってから――

そう安全策を考えて、即座に頭を振った。

夜になれば動きやすくなるのは間違いないが、その時間にはカーリアンが突出し過ぎている可能性がある。

彼女が今どこにいるのかは分からない。まさかあのまま真っ直ぐ城へと向かっていないだろうとは思うけど、いずれは彼女も城を目指すだろう。

憎まれ口を叩きながらも、彼女は心配性だから。

だけど彼女じゃ坂上には絶対に勝てない。

それは変種特有の能力云々だけの問題じゃない。あらゆるステータスを加味した上で、勝てないと判断せざるを得ないのだ。

まず彼女には絶対的に経験値が足りない。

純正型を敵に回した事が少ない彼女では、まず関西軍のトップたる高位純正型には勝てないだろう。

それ以前の前提として、彼女が救急班に所属している以上、まともな戦闘経験自体が浅い点も否めない。

対する坂上はというと、経験値自体は決して浅くない。
もちろん毎日――四年もの間、劣勢な戦いを強いられてきた俺やスイレン、スズカには及ばないだろうが、戦闘経験が浅いとは言い難い。
革命時の国軍との戦闘もそうだし、俺達黒鉄や他地方軍と争いを繰り返している実状もある。
他地方軍の主力が攻めてきた場合、つまり他の高位の純正型が出てきた場合は、ヤツ自身が前線に出る事もあるだろう。
武装盗賊達を締め付けたりもしているはずだ。
どうみても変種同士の争いという舞台では坂上に分がある。

第二に、坂上の身体能力は彼女よりも上だという事。
訓練ではカーリアンとやり合った事もあるし、坂上の身体能力もある程度把握しているが、カーリアンがヤツよりも上だとはあまり思えない。
変種の能力で純正型に劣るのは仕方がないとしても、身体能力や経験値まで劣ってはまず勝機がないだろう。

他の人種が純正型に勝つには、その2つだけは最低でも勝っている必要がある。

……まぁ、能力じゃまず純正型には及ばないのだから、出来れば他の全てにおいて勝っている、というのが理想ではあるが。

だからこそ、彼女だけが突出し過ぎるのは非常にマズい。
そうなれば――彼女が万が一坂上に人質にでも取られれば、俺は彼女を見捨てて坂上と戦うか、彼女を救うという選択に『また逃げるか』を、選ばなければならなくなる。

一年前に傷だらけになった自らの体を理由にして逃げたように。

今回もまた、逃げる選択を与えられてしまう。
……それはちょっと怖い。
今日の俺は、間違いなく見捨てるという選択を取るしかないから。
逃げる選択肢があるのに、今回はもう後に引けないから。
二度目はもう、背を向けられないから怖い。
だからこそ俺だけで済ませられる内に、全てをこなしておきたい。

……おきたいんだけど、気になる事があるとすれば、最初以来火の手が上がっていない事だ。
２０分ほど先行したハズなのに……そして手加減は苦手なハズなのに、炎が全然上がっていない事が気にかかる。
彼女と別れてしばらく時間を置いていた間に、何度か炎が見えて以来、彼女の力の余波が見えない事が不安を掻き立てる。
まさか紅のコードを持つほどのパイロキネシストが、こんな短時間で敵にやられるとは思えないが。

「夜まで待つワケにはいかない。タイミングを待つにしてもジリ貧になるのが見えている、か」

夜を待つのは却下。
タイミングを待っていれば、警備体制は敷き終わる。
こんな事になっているのなら、カーリアンとはここまで一緒に来れば良かったと思うけど、まさに後の祭りだ。

「……行こうか、シャクナゲ」

結局は犠牲なく坂上の元にはいけないという事だ。
ここを突破するにしても、殲滅するにしても、いずれは誰かをどこかで殺さなきゃならない。

むしろここで殲滅しておかなければ、中の敵と挟まれてしまうだろう。

ここにいるヤツらが、彼女や黒鉄の誰かを傷つける可能性もある。

ここで犠牲を少なくする事を目指すには、ちょっと俺の状況は劣勢すぎる。

出来る事は向かってくる者、留まる者は全て排除する事だけ。

逃げる者はせめて追わない……それぐらいの甘さしか持ち得ない。

いや、その程度の甘さであれ本来は許されないモノだろう。

無言で銃を構える。状況はすでに把握済みだと自らに言い聞かせながら。

後は一歩踏み出すだけ。

一番厄介なのはＴＫ―Ｘ改、そして９８式。

そこらに散ったスナイパー達は、正直無視してもいい。

狙撃には風読みや位置取りなどの技術もいるから、その腕も知れたモノであろうし、あれらは油断した目標……狙われていると気付いていない者にこそ脅威となる存在だ。動きまわる者を狙うには小回りが効かな過ぎる。

問題は重厚な装甲を持つ戦車。そして戦車に乗っていない者の中に、何人かは混じっているであろう高位ヴァンプ達。

こういう時に最初に狙うべきなのは、より脅威になる相手。その中でも狙いやすい相手だ。

そう考えると、戦車は汎用性は利かないし、都市内では小回りも利くとは言い難い分、その装甲の厚さから遠距離狙撃で向かい合うべき相手だとは言えない。

――狙うならヴァンプだ。

警邏兵の中でもふんぞり返っている者、そして格好を付けているつもりなのか、ＴＫ―Ｘ改の砲座に足をかけ、檄を飛ばしている男、そして変種特有の容姿を持つ者達から何人かをピックアップし、狙う順番を見定めていく。

正門前からそこそこ離れた距離があるここ……ビル群の中の１つである、廃れたビルの二階から見極める限りでは、やはり狙撃だけでヴァンプ達を全て始末する事は難しいだろう。

『シャクナゲ』の命中精度は、普通のハンドガンと比べればまだいい方ではあるが、狙撃用のライフルと比べればさすがに数段落ちる。

それを弾幕で補える点は利点ではあるが、必中を来す意味では大きな欠点だ。

「５人……いや、もっと冷静に見ろ、いいところ３人始末出来れば上出来だ」

狙うだけなら何人でもいける。確実に当てられるのは、最初の数人だけ。

その以上は速射ではさすがに命中精度が落ちる。

倒れた仲間を見れば、他のヴァンプ達は即座に身を隠すだろう。

そして撃ってきた方角を見定めてから、戦車が砲を撃ってくるのは間違いない。

「慎重になれ、冷静に、冷徹に……」

誰を確実に始末するか、誰を後に回すかで、今後の展開は大きく変わる。

純正型がいればそいつから狙いたいところだけど、関西という土地柄か、この地方は元々純正型の数自体が少ない。

少なくとも今の関西軍の中では、坂上以外の存在を俺は知らない。
この警邏兵の中でも、一目でそれと分かるヤツはいないようだ。

一年前に来た時には、坂上の他に1人だけいたが、そいつもあれからいなくなったハズだから、ひょっとしたら他にはもういないのかもしれない。

「こんな事なら、事前にカエサル所属のヴァンプのリストを完全にしとくべきだったな」

小さな舌打ちと共に、顔見知り――俺が顔を知っているほどの敵がいない事に、憂鬱な溜め息を漏らした。
近衛のヤツらは、恐らく中で待ち構えているのだろう。
近衛『軍』とは名前ばかりの、たった3人きりしかいない坂上の側近がここに出てきているのなら、アドバンテージがある内に潰せたのに。
やはり今日も俺はツいてはいないのかもしれない。

もちろん他にも何人かの強力なヴァンプは知っている。
錬血のミヤビを殺した相手は脳裏に刻まれているし、スイレンに殺されかけながらも、なんとか逃げ延びたヤツも知っている。
ヨツバに潰された元武装盗賊団の頭も知っているし、カブトを暗殺しようと狙い――いや、アイツは結局『アゲハに追いつかれて』殺されたのかもしれないが、そいつも知っている。

でもこの警邏兵の中にはいない。
完全なリストを作るには、リスクが大き過ぎたから先延ばししていたけど、そのツケはやはり大きかったようだ。

「アイツとアイツ。あの2人の容貌は間違いなく変種だ。染めたモ

ノでもカラコンでもない。アイツはダミーな可能性がある。後回しだ。指揮官だけは潰したいけど、まさかあの目立ちたがりじゃないだろうな」

ざっと見回し、確実に変種で、そのちょっとした動きから身体能力が高い者だけを優先する。

能力が分からない以上、見ただけでもある程度は分かる身体能力の高いヤツを狙うしかない。

目立っている者を狙いたくはなるけど、さすがに一年前、あれだけ派手な真似をした敵を相手にしながら、無造作にふんぞり返ってはいないだろう。

そうやって頭の中で削除リストを上げていき――

――カチッ……

セーフティーを上げる。

心の安全弁の開く音と共に、ゆっくりとその顎を開け『シャクナゲ』が牙を剥く。

「……この世に神なんかいない。神や悪魔なんて強すぎる存在はいちゃいけない。いるのは狂った人と足掻く人――ヴァンプと人間だけだ」

『シャクナゲ』、それは――

俺の力、俺の相棒。

俺の牙、俺の檻。

智哉の楔、智哉の願い。

約束の証、制約の具現。

――そして封じるモノでねじ曲げるモノ。

「さぁ、行こう、過去から続く時を血の赤で彩りに。
幕引きまで続く真紅の螺旋を駆けようか……」

ここは一年前の続き――その果てにある場所だ。
あの時に果たせなかった事を、ただもう一度やり直す為だけのアンコールステージ。
エンドロールはまだ先で、それは俺の終わりの時にこそ流れるのだろう。
この詰まらない筋書きが、悲劇的な喜劇で終わるも、喜劇的な悲劇で終わるも、その時の俺には関係がない事。
やっと終わりを迎えた俺の行く末は、きっと亡者が蠢く地獄の底でしかないだろうけど、その事は別に怖くない。
そこが現実(ここ)よりも腐って、歪んで、堕ちきった場所だったとしても、そこには俺に見合うだけの罰がキッチリ用意されていると思えば、むしろ気が楽になる。

本当に怖いのは、死後に待つのが虚無である事。
償う場もなく、後悔しかなく、ただ消えてしまう事の方がよっぽど怖い。

――山ほど罰と責め苦を用意して待っていろ。
地獄の主にはそう願う。
その罰と責め苦をキッチリと受けた上で、ひょっとしたら死後の世界にはいるのかもしれない『神』ってヤツに、この銃口を突きつける事を思えば嗤いが漏れそうになる。

後悔を果たす為に、また1つ罪を重ねる。
罪を重ねるのは守りたいから。

そして守りたいからこそ誰かを……自分の中で自分なりに他人に優先順位をつけて殺す。

その殺めた者に報いたいから、また後悔する道を選ぶ。

今も俺はその螺旋階段を上り続ける。あるいは転がり落ち続ける。

――時刻は夕刻に差し掛かり、やがては月がその姿を現すだろう。

多分、あの時と同じ下弦の月。

光化学スモッグの余韻からか、単なる見え方なのか、深紅に見えるあの時のような月が。

25・Long way to say good—bye——the shadow of the past

あとがきっぽいあとがき。
第2弾。

予定より長くなりそうです。というより、一章は確実に長くなります。
今回のアップ分を上げるまでもなく、半分は終わっている……とは思っていましたが、下手したらまだ半分くらいかもしれません。
なにしろ謎解きと伏線の回収があります。
もちろん唯一の見せ場っぽいバトルシーン、一章ラストバトルもあります。
二章に繋げる伏線も張らなきゃならないし、まだ出していないシーンもあります。

黒鉄という名前の由来とか。
アカツキの出るシーンとか。
あれとかこれとか。

狐についてや『真実』については、カクリの考察『アカツキ』や『真実』で、今までの考察タイプではなく、物語調で書いていきますが、長くなりそうですし。

二章も当然流れを決めてますが、それに入る為のステップを踏むのにも手間がかかりそうです。
この話は、書いてて楽しいんですけどね。
プロットから実際文字を起こしていく段階で話も膨れてきましたしね。
これが作者の手から文章が離れるという感覚か、とか思ったりしま

す。
勝手に文章が膨らむ感覚で、本筋を守るのに手一杯です。
まだ出ていない『ヨツバ』『スイレン』や、『オリヒメ』の四班、『ナナシ』の一班も考察でようやく出てきます。
終盤に物語が加速してく予定です。
二章に向けて、物語が収束していかない辺りが頭が痛い。
地続きなら章分けする意味がないだろ、と。

などなどいろいろ考えてはいますが、さて、3月中に一章を書き終わるんでしょうかね？
自分にも分かりません。
まぁ目標は変えませんけど。
単純計算すれば週1だと『後十回くらい』しか更新日ないのが問題ですが、その場合は週二更新する時もあるやもしれません。

更新日のお知らせは逆月の活動報告にて。

最後に。新たにお気に入り登録頂いた方々、ありがとうございます！

26・Long way to say good—bye——forget

次回は来週の月曜日です。
上げられれば2話上げます。
状況は活動報告にて。
他の作品はSSも含め不定期とさせて頂きます。
なにしろいつ書き終わるか分かりませんから。

今回のあとがきは『近衛』

26・Long way to say good－bye――forget

『俺達のグループの名前だけどよ、黒鉄ってのはどうだ？』

『黒鉄……？鉄の事か？それって派手好きなお前らしくない、なんか地味な感じがするな』

隣に佇んでいた金色の青年が、すごくいい事を思い付いたとばかりに俺へと向き直る。

その金の瞳は瞳孔が幾重にも重なった不思議な形をしていて、それをいつものように楽しげに歪めていた。

それはアカツキとみんなから呼ばれ出した頃の親友の姿。

今でもはっきりとその笑みを思い出せる男。

結城智哉（ゆうきともや）という名前を持ち、それを捨てた日本人。

俺や多くの黒鉄に……そして坂上にも多大な影響を与えた変種。

そして、俺の親友で――仲間で――理解者で拘束者。

アイツとは色々……本当に嫌になるほど色々な事があったのに、脳裏に浮かんだのはこんな時に思い出す事にしては、ちょっと懐かしくて、かなり微笑ましい思い出。

アイツはいつも突飛な事を思い付いては、それを自慢げに語っていた。

これもその1つ。

奪還した神杜市を死守し続ける俺達のグループ、その『神杜死守同盟』なんて陰気な名前を改名する、といきなり言い出した時の事だ。

『黒鉄ってのは鉄とは違うよ。別の……そうだな、レアメタルならぬロストメタルさ。つまりオリハルコンとかヒヒイロカネとかと同じ架空の金属だよ。俺の印象的にはな』

『……ってお前の印象かよ。まぁ好きにすればいいと思うけど』

隣で金色の少年とやり取りを交わしている当時の俺は、多分つまらなさそうにしていただろう。

実際その時はつまらなくと思っていた。

『また変な事言い出したよ、コイツは……』なんて、辟易としていたに違いない。

それでも——それでも、アカツキといた時の俺は、たまに笑えるようになっていた事に、今ではもう気付いている。

当時は笑う事自体滅多になくて、世界にも人間にも……自分自身にも絶望していたから。

笑う事に意味を見いだせず、その重要さが分からなくなっていたから。

そんな風に壊れ始めていた俺でも——いつであれ根暗でネガティブな思考にずっと捕らわれていた俺でも、アイツの思い付き発言や突拍子もない行動に、時折笑みを漏らしていた。

時には皮肉げな笑みを、時には苦みの混じった笑みを、本当に稀に微笑を浮かべられるようになっていたのだ。

『でも黒鉄って名前は、そんな金属から取ったワケじゃなくてだな、これはお前の口癖から取ったモノなんだ』

『……俺の口癖？』

『そうさ、あのクールなヤツ』

それが何か分からないほど、自分自身が見えていないワケじゃない。

クールなヤツかどうかは別にして。

でもそこには『黒鉄』の『く』の字も入っていない……そう思って訝しげな視線を向けた。

『この世に神なんかいない。悪魔もいない。いるのは人間とヴァンプだけ――。ずっと格好いいよなぁって思ってたんだよ、これ。ここまできっぱり神まで否定出来るのはすげぇってな』

『……うるさいよ。で？そこから黒鉄なんてどうやって連想したんだよ？』

そう聞いた俺に、智哉はもったいぶって咳払いを1つ。

そしてニヤリと笑ってから答えを返した。

『黒鉄はまんま英訳すればブラックメタルだろ？そしてブラックメタルと言えば、反キリストを歌った曲が多数ある、スラッシュメタル系の音楽ジャンルだ。ほら、『神を否定するお前』が所属するにゃぴったりじゃねぇか』

『……まんま直訳したらブラックアイアンだろ。それに得意絶頂なトコ悪いけどな、それって単なるこじつけだろうが』

呆れた溜め息を漏らす俺に肩をすくめ、智哉はフンっと鼻をなら

して視線を逸らすと、睨むように空を見やった。
俺にまともなツッコミを入れられて、ちょっとムクれていたのだろう。

それは関西でも数少ない純正型とその副官ではなく、レジスタンスのリーダーと組織の最大戦力でもなく、ただ普通の友人としてのやり取り。そして時間。
そこは出会いの場所で、俺達2人の運命が交差した場所だ。
アカツキは『運命』って言葉を嫌うけど……俺が神を否定するのと同じくらい、運命を否定するけど、俺にとっては『運命』を感じさせるほど、そこが特別な場所である事は間違いない。

『いいんだよ、『運命を否定する俺』と、『人間以上を否定するお前』。どっちも神じみたモノを嫌う者同士だろうが。俺達こそ正真正銘本物の『ブラックメタル』さ』

そう視線を逸らしたまま笑ったアカツキは、皮肉げに……でもどこか誇らしげに空を見上げる。

『まぁ神杜死守同盟なんて名前よりはマシだな。正直神杜なんて街に『俺は縁もゆかりも興味すらない』んだから。黒鉄か……まぁ、悪かないと思うよ』

そう返した俺に、ようやく智哉は得意気な視線を戻して笑う。
神杜なんて街に興味がないと言った言葉に嘘はない。
ただちょっと……ほんのちょっとだけ強がりが混じっていただけ。
その時にはもう、本当に少しだけだけど、神杜という街に思い入れがあったから。
それを見越して智哉が笑っているようで、今度は俺が視線を外した。

黒鉄……その名前が何故か、しっくりと心の隙間にカチリとはまるような感慨を覚えながら。

その時から俺は『黒鉄』になったんだろう。

神も悪魔も否定して、人間である事を望む『最初の黒鉄』に。

運命を否定して、無限の歯車と鈍色の鎖が紡ぐ世界を否定して、黒鉄のごとき堅き意志を宿した人間に。

近衛のタグを首から下げた男を穴あきにして、そっと空を見上げる。

場所は吹き抜けの廊下。真っ赤な血が床を満たす様を見て、小さな吐き気を覚えたから、そっと視線を逃したのだ。

体のあちこちがズキズキと痛むけど、それは気にもしない。

大量の血液が肌を流れ落ちるけど、それも気にならない。

細胞全てが活性化し、アドレナリンが吹き出し、感覚が麻痺しているような錯覚を覚える。

辺りに満ちる血臭にだけは、いつまで経っても慣れそうにないけれど、それはどれだけ罪を重ねても慣れてはならないモノで――

ゆっくりと歩を進める。ただ先へと足を動かす。この先に将軍を名乗る男がいる事だけを拠り所に。

「……先に行ってろ。すぐに坂上も後を追う。いずれ俺もそっちに行く」

名も知らぬ近衛の若きヴァンプの亡骸に背を向け、ただ先へ。

「この世界に神はいない。悪魔も必要ない。そして運命も信じない」

歩きながらもとつとつと言葉を零す。

先ほどふと思い出した過去から、いつもの口癖に親友が信じない運命（モノ）を付け足して――

「いるのは今なおそれに縋る人間と、抗う人間だけだ」

果たして縋る人間と抗う人間、どちらが罪深いのか。

そんな意味のない考えを――答えの出そうにないソレへと思考を沈めながら。

＊＊＊＊

四発ヒットしたのは、あくまでも僥倖だった。運が良かっただけといってもいい。

速射には自信があっても、じっくり狙いを付ける時間はなかったのだ。

しかも距離があり、動きもあるターゲットを狙う場合は、どんな要素で狙いを外すか分からない。

下手をすれば最初の一発ずつ……左右の銃で一発ずつしか当たら

ない可能性もあった。二発ずつ当たったのは、予想よりもいい結果だったと言える。

三発目を放つ瞬間には、敵の何人か――恐らくは元変種の何人かは、狙撃されている事に気づいたのだろう。即座に盾として戦車の影に身を隠していた。

コンマ数秒とは言わないけど、ほんの僅かな時間で俺が狙撃している方向を割り出し、その方向に対して正確に身を隠してみせる辺りが、元変種らしい判断力で、それなりの実戦経験を匂わせる。

それでも焦らず、今度は狙いを付けずに弾をバラまいて――戦車が砲を一斉にこちらを向けた瞬間までバラまいてやる。

最初は必中、後は弾幕で。

無限の弾を精製するハンドガンならではの、ありきたりな物量戦法。

それをしばし繰り返した後、戦車砲を向けられたのを確認すると、俺はその場所――二階の窓から飛び降り、一気に正門へと駆け寄った。

敵の動きは狙い通り。セオリー通りで、それに対処する事は難しくない。

必中で厄介な何人かを潰し、後は弾数で敵戦力を減らす。

背後で続けて起こった爆音を聞きながら、少し道を逸れる為に脇道へと入る。

足は止めない。敵が増援を呼ぶ前に、正門前のヤツらは潰す。

遠距離からの銃撃で、混乱している今を逃す手はない。

戦車の砲塔があちこち動いている辺りからして、戦車砲で俺が潰せたとは思っていないのだろう。

そして俺の位置が掴めていないのも間違いない。

いかに変種の知覚能力が高くても……つまり聴力や視力が高くても、『戦車砲の一斉発射音と爆発音で耳が麻痺し、視界が粉塵で遮

られ』ては半減する。
元変種の場合は、その高さゆえに半減では効かないだろう。
それはこちらにも言える事だけど、こっちは敵の位置を把握しているという点が大きく違う。
もともとそれを覚悟していた点が違う。
視力も聴力もそれほど必要とはしていない。駆け寄る間麻痺していても関係ないのだ。
そして駆け寄る間に、目に着いた敵、右往左往する連中を銃撃で穿っていくだけ。

それによりバタバタと倒れていく連中の脇、一台の９９式がこちらへと砲塔を向けているのを確認し――
その砲口へと空圧の弾丸を放った。
そう、砲弾が砲身にある間に炸裂させる事を狙ったのだ。

ドォォ――――ン……

狙いが当たり、砲塔が破裂し、砲身をかたどっていた金属がささくれ立っているのを見て、唇を歪めてみせる。

――コイツらはまだやりやすい。全然与しやすい。変種を相手にする闘い方が分かっていない。
そう思えば、口元に笑みが溢れる。

まだ戦都の連中の方が敵としては狡猾だった。あそこの連中の方が、変種が混じった戦争を良く知っていた。
変種のような小回りが利く者を相手取り、無闇に群れる愚を知っていた。
奇襲を受けたら散会するぐらいの知恵は持っていた。
群れていたら、カーリアンみたいな広範囲型能力者にとっては、

絶好の的にしかなりえない事を知っていた。
群れたままだと、俺みたいに身体能力が高い者を相手にした時には、味方が盾にされる事を知っていた。
それが分かっていない。

戦都の連中は狡猾だった。
アイツらならば、群れさせるにしても、下級の兵士ばかりを集めて俺の動きを抑えさせる事にしただろう。
その上で戦車や変種を下がらせ、砲や能力で味方ごと一掃するぐらいはしかねない。
四方を守られた首都ゆえの怠慢。安全な地ゆえに、兵士の危機感と練度が下がっているとしか思えない。

体勢を低く、地を這うような低い姿勢で、いまだ混乱冷めやらぬ敵の足元に突っ込むと、踏み鳴らすそれを縫うように奥へと進む。
その際に足を撃ち抜き、膝を銃身で刈り取る事も忘れない。
狙いは先の狙撃の際にいち早く身を隠した連中。この先にいる変種だ。
その連中だけは、下っ端が混乱している内に潰しておかなければならない。
それは絶対だ。周りが混乱している今こそが、このアウェイのフィールドと数の不利を覆す絶好のチャンスなのだから。

それに中にいるであろう近衛の連中とやり合っている際に、高位のヴァンプによる邪魔が入るのは非常に困る。
近衛の連中は、一人一人が非常に厄介な相手だからだ。
一年前に一番てこずったのも、軍勢を相手した時などより、居残っていたらしいたった一人の近衛を相手にした時なのだ。
多数に囲まれた状況でヤツらとぶつかるのは出来れば避けたい。

「ここでシャクナゲを止めよ、と将軍閣下が仰せだ！絶対に門より中に入れるな！」

「たった1人だぞ！本軍の力を見せろ！」

ゲキを飛ばしているつもりなのか、盾代わりの戦車脇から顔を出し、唾を飛ばしてがなっている連中を見てほくそ笑む。

その連中に左右のシャクナゲの照準を合わせ――

「――っ」

とっさに右手へと体を転がした。

本能といってもいい、僅かな危機感が体に退避行動を取らせたのだ。

「残念。ハズレちったよ」

背後の地面が、混乱していた敵兵を巻き込みながら大きくえぐれる音を聞き、背筋に嫌な汗が流れ落ちる。

軽い調子の言葉と共に笑っていたのは、城の堀にかかった橋……正門へと繋がる橋の中ほどに佇んでいる若い女。

先ほどまでそこにはいなかった女が、悠然と城から歩みを進めていた。

「近衛か」

その装束には見覚えがある。

濃紺のコートに、はだけられ胸元から覗く金色のタグ。

それらは本軍の中でも『近衛』に所属する者だけに許されたモノ

だ。

「そ。アンタに一年前殺された『田村』の代わり。現近衛の友枝(ともえ)由希(ゆき)って言うの」

そう言ってその右手をかざすと、その友枝と名乗った女はウインクをしながら続ける。

「ま、短い間だと思うけどヨロシクね」

その手から放たれるのは、不可視の力場。それを転がるように回避しながらも認識し、その銃口を――背後から俺へと手をかざしていた変種の男へと向ける。

その右手に炎を生み出していたパイロキネシストらしき男へと。

「あらら、本当にやるね？背中に目でもあるクチ？あ、純正型ン中にはそんなタイプもいるのかな？うわっ、キモッ！」

「よく喋る女だな、アンタ」

「それ、よく言われるぅ～」

会話混じりに近衛・友枝はポンポンと不可視の力を放ち……それを手の動きや仕草などから回避する。

かわした背後では、力場の直撃を受けた９９式の装甲がひしゃげるのが視界の端に写る。

恐らくこれはサイコキネシスの一種だろうと思う。念動力とも観念動力とも言われる変種の力の一種だ。

空間に力を放ち、それによって物質を動かす力を発揮させる能力

ではあるが、彼女の場合その物質を動かす力を空間に力場の形で留め、そのまま放っているのだろう。
サイコキネシスはパイロキネシスやエレキネシス、テレキネシス（物質そのモノに念を送り込み、それにより物を動かすタイプの念動力）などと並び、もっとも数が多い能力ではあるが、それだけに能力の質にはピンからキリまである。
この威力からしても、この新参の近衛はサイコキネシス系としては大した能力者だと言えるだろう。

唯一救いなのは、それ自体は簡単にかわせる事か。
威力自体は大したモノなのかもしれないけど、動き自体は直線的なのだ。
問題があるとすれば、全く友枝へと近付けない事。
回避したてで体勢が崩れたところへと銃弾や能力が飛んでくれば、いくら変種の中でも上位の身体能力があろうと、人間の身体構造上かわせるワケがない。
仕方なく周囲から銃撃や力を放とうとする連中に、優先的に弾痕を刻む事になる。

「キャハハハハッ！！すごいすっごい、やるぅ～。かっくいぃねぇ。さっすがあの人がビビるだけはあるわ」

どんどん不可視の力を飛ばすスピードを上げていく近衛・友枝。
友枝を撃とうにも、力を放つだけ放ってさっと城門に身を隠すから狙えない。
その上、他の連中も態勢を立て直したのか、散発的に攻撃を繰り返し始める。

――失敗した、最初に砲身を破壊した９９式の影に回り込みなが

らそう思う。
友枝に気を取られた辺りが致命的だった。
気を取られ、声をかけるくらいなら、その瞬間に一気に詰め寄っていれば良かった。
相手を確認なんてする必要などなかったのだ。
ここにいるのは俺だけで、後は全部敵しかいない。
そう思って――

「いや……もう1人いるか」

ここにはもう1人いたことを思い出し、小さく笑みを浮かべた。

ここには彼女がいる。
一年前と違って、もう一人黒鉄がいる。
赤い髪の――真っ赤な瞳の――ヴァンプである事を拒絶し続けた強い少女。

初めて見た時、自らの体から溢れ出そうになる力を、必死に抑えようとしていた少女。
憎い憎いヴァンプに囲まれながらも、その時の状況から闘い以外を選択しようとしていた彼女。
悲痛と無力感に苛まれながらも、ヴァンプを否定してみせるその姿は、とても尊くて……貴かった。
その体から今にも溢れでそうな明滅する炎は、強大で――
周りの人間を確実に巻き込むほどに凶悪で――
1人で抗うには、魅惑的すぎるほど魅力的で――

普通ならば、まず間違いなく力の解放という快感に抗えないほどの力だったと思う。

ほとんどのヴァンプが、その自らの力に抗えないように。
その力がもたらすモノに惹かれてしまうように。
それに魅了されてしまってもおかしくないだけの力だった。
でも彼女は――カーリアンはそれを抑えてみせた。
どんな事情があったかはわからないけど、それを歯を食いしばって、顔を悲痛に歪めて、安易に『力を使うという選択に逃げなかった』。
決して噂に聞いた『死にたがり』の姿じゃなかった。

力の衝動には、普通なかなか耐えられないのに。
他の誰もがほとんど耐えられないのに。
それほどに蠱惑的な衝動なのに、彼女はあくまでもヴァンプを否定した。
周りを巻き込まない為に、力を抑えてみせた。

……それは間違いなく尊い姿だ。
間違いなく強さだ。
間違いなく理想の姿だ。

彼女とはそれなりに長い付き合いなのに、一番印象深いのは、最初に出会った時のその姿なのだ。

「どうしたの、シャクナゲちゃん？諦めたのなら出て来なさい。サクッと殺ってあげるから♪」

――耳障りだ。
砲身が破壊され、動かなくなった９９式に身を隠しながら小さく唾を吐く。
この女は彼女とは違う。智哉ともカブトとも違う。
コイツの言葉は……声は、雑音（ノイズ）にしか聞こえない。

「それにしても……あの人もなんでアンタみたいなのに、そこまで警戒してるのかしら？全くわっかんないわぁ～」

――目障りだ。

他の戦車は砲を撃ってこない。撃った瞬間に、その砲弾を狙い撃たれるのを恐れているのか、はたまた近衛を名乗る女に『トドメは私が』とでも言い含められているのか。

盾にしている９９式を削る力と弾丸の音だけが響く。

……本当に愚かだ。

「こんなのを潰すだけで――この程度の男を殺すだけで、戦都知事の後釜に座れるなんてボロ過ぎッ！廃都のレジスタンス（お仲間）も、この分じゃどうせ大した事ないしね！ボロいボロい！」

――ウルサイ。

「廃都の連中も潰したら、ひょっとしたらひょっとして、西部地域の統括くらい任されるかもぉ。こりゃラッキー♪『黒鉄』なぁんて、ヘンテコリンな諦め悪いお古ちゃん達をプチっと潰すだけで、私ってば大出世♪」

――お前が黒鉄を否定するな。

その強さと、これまで歩んできた道を貶めるな。

ただ安易に力を振るう道を選んだヤツが、力を使う痛みや、力を持たない悲しみ、『力を持つ虚しさ』を知らない人間が、黒鉄を語るな。

智哉が払った因果への代償も、カーリアンの炎に対する葛藤も、スズカの他人を遠ざける痛みも、カブトの無力感による苦悩も知ら

ないヤツが……たかだがヴァンプという簡単な在り方に逃げた女が――

本当の罪を知らない者が、『人間』を否定するな。

「――この世に神はいない」

右手から『シャクナゲ』の片翼が落ちる。

『それ』から意識が綺麗に逸れる。

智哉が『因果をねじ曲げて作ってくれた』、俺に対する楔の片割れが俺という存在から放たれる。

いや、俺が『シャクナゲ』から放たれる。

――カラカラと歯車が回る音が聞こえる。

――ガラガラと鎖がうねる音が聞こえる。

――ゴロゴロと世界が軋む音が聞こえる。

出来れば坂上以外は――俺の『ソレ』を知っている坂上以外には、智哉からの『貰い物』の力で済ませたかったけど……

もうそうも言ってられない。

この女の声は耳障りで、勝手な未来予想図は目障りで――その言葉はそのものノイズの群れ。

それらは何よりも耐え難い。

それになにより、今回は俺一人でここまで来たワケじゃない。

俺だけでここに来たワケじゃないから……一気にここを突破する。

左手にいまだ握るシャクナゲが重い。頭に不快な痺れが残る。脊椎を何かが這い上がっているような錯覚を覚える。

轟々と大地を掠める風が、肌を撫でる。

そんな中、ボロボロになった戦車の影からその身をさらす。

その視界の中に、砲身をこちらに向けた戦車が、キィキィと何かを喚く女の姿が見え――

空いた右手を――暁から解放された世界の片鱗が這う右手を、ゆっくりそちらへと差し伸べた。

26・Long way to say good－bye――forget

関西統括軍――近衛軍

関西軍所属のヴァンプの中でも、強力な変種達数名で構成される精鋭。

軍とは名前ばかりで、実際に所属している者は十名に満たない。

街を領土としては持っていないが、各街の知事を処罰する権利、各街の軍を独自に動かす権利、本軍を指揮する権利を持つ為、将軍下の関西軍では地位的に最高位に位置する。

現近衛は『左近』『右近』と名乗る関西軍設立時からの古株二人と、『友枝』と言う一年前に昇格した女の三人。

一年前の事件で『田村』という近衛が亡くなり、唯一知事と近衛を兼任していた『旭（純正型）』が抜けて以来、弱体化を噂されていたが、現在では左近と右近のしっかりとした締め付けにより持ち直している。

不祥事を起こした知事（反乱や関西軍からの離脱を企てた者）を鎮圧し、武装盗賊等の取り締まりも指揮している為、ある意味では将軍よりも恐れられている。

序列的には『将軍』↓『近衛』↓『知事』↓『ヴァンプ』↓『それ以外』が関西軍の構成。

ちなみに余談です。

坂上も友枝も田村も旭も、全員歴史上にいる『将軍』からイメージした名字です。

坂上→初代征夷大将軍とかつての教科書には乗っていたハズの『坂上』田村麻呂（正確には初代ではない）
友枝→源平時代の女武将・巴御前
田村→これも坂上『田村』麻呂
旭→巴御前の旦那さんで、『旭』将軍の名を下された『源義仲』

さらに余談ですが、黒鉄も各班ごとに共通項を作っている班もあります。
三班……植物（石楠花、葵草、雛菊、睡蓮、四つ葉）
五班……虫（カブトムシ、揚羽蝶、コガネ虫）
四班……日本の神話、おとぎ話
六班……西洋の神話（ヘルメス、マルス）
七班……日本の鬼、妖怪（鈴鹿御前等）

例外は一班と二班。
一班は立場的にバラバラ（その辺りの設定はいずれ）、二班はカーリアンのみしかおらず、カクリは黒鉄に来る前のカーリアンによる命名だから。
となっています。
気付かれていたかもしれませんが、補足をしてみました。

27・Long way to say good—bye——undo the past

あぁバタバタしていて更新が遅れました。
しかもついウトウトしていて、あとがきを書けてません。
早めにアップしておくべきでしたね。反省します。
次回更新は活動報告にて。

27・Long way to say good－bye――undo

目の前にはただ大きめに作られたソファーが置かれていた。
別に豪奢な造りでも革張りなワケでもない、昔ならどこの家庭にあってもおかしくないような、ただ大きいだけのソファー。
あたしの部屋にあるソファーよりちょっと大きいだけのソファー。
ただ可愛げが全くないだけのソファーが、その部屋――ベルセリス要塞と呼ばれる城の奥にある事に、ちょっとした違和感を覚える。

近衛の一人……らしい『左近』と名乗った気だるげな雰囲気を垂れ流す男に促されるまま、要塞と化した城の奥まった部屋へと入ると、そこは大きいだけのソファーが一つある部屋だった。
そのソファーには、やや大柄で灰色の髪を短かくざっくり切り揃えた男が座っており、その両手の先は漆黒の何かに覆われているかのように黒ずんでいた。
その態度は上から下まで怠そうで、横柄そのものである。

「……女、お前が今の黒鉄か」

その声は、左近と名乗った男と同じく気だるげな声。
ただしそれは、左近よりも圧倒的な威圧感を含んだモノで――

「アンタが将軍ね？」

その正体をあたしに嫌でも実感させる。

そんなあたしの言葉には、その黒光りする右手――指先にびっしりと細かい鱗が生えた右手をかざすだけで返し

「坂上だ。将軍の名前は一年前にちっと封印してる。坂上と呼びゃあいい」

そう言って、いまだあたしの側に立ったままの左近へと、チラッとその灰色の視線を向けた。

「左近。お前は右近と一緒に、野郎の足留めをしてこい。餌に釣られた友枝のバカは――」

そう言った所で、遠くから爆音が聞こえてきた。それに将軍――坂上は肩をすくめて嘆息を一つ。

「まぁ、今頃一人、先走ってる頃だろうからな」

「……いかほど足を留めれば？」

「出来る限り、だ。一時間もありゃ、俺の用事は終わる」

「それは難儀。まぁ頑張ってみますがね」

「ちょ、ちょっと待ちなさい！」

あくまでも淡々と。あたしなど眼中にない様子で、二人だけで話を進めていくのを遮るように、あたしは声を上げる。

「さっきの爆発音はなに！？足留めってシャクを？それに話って何よ！？」

そんなあたしの言葉には何も返さず、左近は飄々としたまま踵を返し――

「悪ぃな。左近は右近や友枝……他の近衛と違って無口な野郎なんだ」

代わりに坂上が返答を返してくれるのに、ちょっと面食らう。

なんというか、思っていた人物像とはあまりにも違っていて。もちろんこれだけで『コイツって案外いいヤツ……』だなんて事を思ったりはしない。

今までの事もあるし、何より――

「お前にゃちっと話に付き合ってもらうぜ？どのみち時間はあんまりねぇだろうがな」

――その瞳には狂気にも似た光が宿っているから。

その灰色瞳には、ユラユラと怪しげな光が燃えているから。

「さて、話っつっても何からしたモンかな？」

「別にこっちに話なんかないわよ。それに話じゃなくても全然構わない」

小さく天井を仰ぎ、顎に手をやりながら言う坂上に対して、あたしはゆっくりと間合いを図る。

内に宿る炎は、何故か先ほど――表でヴァンプ共と向き合った時

と比べて勢いが減じた感があるけど、それでも問題はない。

戦う、戦う、戦う、戦う。

戦え、戦え、戦え、戦え！

自らにそう言い聞かせ、ゆっくりと内で燃え盛る炎に、憎悪という薪をくべていく。

いつもに比べて、炎の吹き上がりがやや不満だけど、それでもこの機会を逃す手はない。

敵は座ったまま、動こうともしていないのだ。

一気に駆け寄って、その首を炎で焼き切ればいい。

そう決意して、一歩踏み出そうとした時だった。

「……あぁ、やめとけやめとけ。他の人種じゃ純正型にゃかなわねぇよ。そりゃ確定事項に近ぇ。もうこれは生まれついての差ってヤツで、基本的に別の生き物だって思った方がいい」

「ンなのやってみなきゃわかんないでしょうが！」

「はん、分かるさ。人間が猿と知恵比べをしようなんて思うか？仲間を狩られたヌーが、怒り狂ってライオンに逆襲を企むか？しねぇだろ、ンな真似。そりゃ『相手は自分とは違う生き物』だって分かっているからさ。相手との力量差以前に、存在のあり方自体が違うから、ンなバカな真似はしねぇんだ」

――純正型ってのはな、人間にとってそういう存在なんだよ。

そう締めくくると、またもその右手を見せつけるように掲げてみせる。

膝についたままの左手にも、同じような黒鱗が浮かんでいるが、そちらはいまだに……あたしを前にしても怠そうに力を抜いたまま

だ。

もちろんそんな言い分に納得なんかしない。そんなのやってみなきゃわかんない……その考えも変わらない。

それを認めてしまったら、スズカとの関係を否定するような気がするし、シャクとアカツキの関係までも否定するような気がするからだ。

あたしはアカツキとはそれほど長い付き合いじゃなかったけど――長い付き合いにはなれなかったけど、シャクとアカツキは間違いなく『相棒』だった。

間違いなく、それぞれがお互いを信じあっていた。

あたしが今望む位置にあのスカシ野郎はいたのだ。

それをあたしが否定出来るワケがない。そしてコイツにも否定なんてさせない。

それでも……それでも、やや脱力感を覚えたのは何故だろう。

まさか坂上に戦うつもりがない事が分かって、『安心したから』などとは絶対に思いたくないけど、なんとなく強張っていた身体から力が抜けたのは間違いない。

「ま、なんにしても、少しだけ俺の話に付き合ってくれりゃいいんだ」

「……」

もちろんその言葉をそのまま信じて油断なんかしない。戦う覚悟も捨てない。

コイツは将軍で、仲間達の仇で……シャクの敵だ。

それだけは間違いない。

そんな意志を沈黙で返すあたしに、坂上は大袈裟な所作で肩をすくめてみせる。

「まぁ、立場的にゃ仕方ねぇか。でも、これだけは聞かせろ……女、お前の名は？」

「……あたしの名前になんの関係があんのよ？」

あくまでも面倒そうな態度は崩さないまま、ねめるように見やりながらの言葉に、あたしは露骨に舌打ち混じりでそう返すも、全く気にした素振りは見せずに坂上は言葉を続ける。

「もうすぐあの野郎がここに来る。元々友枝にゃなんも期待してねぇし、左近と右近だけじゃさすがにキツいだろ。田村と旭がここにいたら……って、いねぇモンをグダグダ言ってもしゃあねぇか」

――田村、そして旭。

坂上の口から出たその名前に、思わず体が硬直するのが分かった。その名前には聞き覚えがあって当然だ。

あたしが入ったばかりの頃の対黒鉄戦線において、何度も前線に出てきた近衛が『田村』。

あまり黒鉄とはぶつからなかったけど、何度か出てきた際には何人もの仲間を殺した近衛が『旭』。

この二つの名前だけは忘れたくても忘れられない。

特に『旭』という近衛は、あの錬血のミヤビを……あたしや他のコードフェンサー達に、『生き残り方』を教えてくれた女性を殺した男なのだ。

嫌でも脳裏にこびりついている。

その姿も、その力も、その全てが。

「なんにしろ、そうなりゃ後は俺と野郎で殺し合うしかねぇ。つまりは、ここでの会話が最後かもしれねぇってこった、こうやって誰かとただ話すだけってのはな。その話相手の名前くらいは聞いておきてぇのよ。あぁ、もうっ！なんでもいいから教えろっ」

あたしの中にようやくくすぶってきた憎悪を、まるで気に留めるでもなく、坂上は面倒そうに言い放つ。

その言葉遣いはあくまでも傲岸。
どこまでも不遜。
いきつくまで傍若無人。
完全無欠に上位からのモノ。

それが『完全別種』に対する侮蔑によるモノか、と言えばそれは違う気がした。
なんというか、侮蔑というよりももっと違う何か――。
それが何かは分からないけど、ただあたしを『別種』と見ているのは間違いない。
その瞳は同じ種族、同じ人種を見ているとは思えない冷たい光を宿していたから。

……その視線には少しカチンときた。それは溜まり溜まった燃料に、いつもなら容易に点火しうるだけの火種となったと思う。
なにしろ、感情に火が着きやすい事には自信がある。
まぁ、なんの自慢にはならないけど。

でも――

「カーリアンよ、二班班長カーリアン」

でも、あたしはごく自然にその内なる点火元を飲み込んでいた。

導火線に着火するまえに、その『点火源』がすぼんでしまうのを感じた。

――だけど、それは断じて『坂上』に呑まれたからじゃない。そんな簡単な事じゃないと思う。

なにしろ、坂上がどれほどの力を持っているのかは知らないけど、別にコイツ自身に対しては『それほど恐怖を感じていない』のだから。

その理由に、想像していたよりまだ話しやすいから……というのはある。

もちろん、今まで直接戦場で向かい合った事がないから……というのもあるだろう。

だけど一番の理由は、あたしが今まで想像し、恐怖し、否定した最悪に比べれば――カクリやスズカが死に、シャクまで消えて、たった一人でこんな世界（場所）に残される事を考えれば、坂上の圧力はどうってほどのモノじゃない。

だからここで萎縮しているのは、『坂上に対してじゃない』……と思う。

もっと何か――あたしが考えうる『最悪』にもっと近い何かが側にある気がして、体の内に無限とあるはずの憎悪が、深く深く落ち着いていくのを感じているのだ。

それが何かは分からない。あたしには想像も付かない。

ただ漠然とした予感が、あたしの火をくすぶらせる。

「ふん、お前が『芝浦』ご執心の死にたがりかよ。こりゃ、あなが
ち運命ってのもバカにゃ出来ねぇなぁ」

「芝浦……」

その名前に聞き覚えなんかない。坂上の口振りからすると、あた
しの知己ではあるみたいだけど。
あたしが言葉を反芻した意味が分かったのか、あるいはただ意味
もなくなのか、坂上は座ったまま木造の天井を見上げた。
その口元に笑みを刻みながら。

「純正型たる東海の始祖、マスター『シヴァ』。ヤツを傷つけたパ
イロキネシスト、死にたがりの紅。朱神、紅手の死神、ｅｔｃ．ｅ
ｔｃ――。同族殺しは一杯いるがよ、『コイツ』ほど短期間で大勢
の同族を殺しまくったヤツはそうはいねぇ。群れじゃなく個人でと
なりゃ、まず一級の殺し屋だ」

「……」

「そんなヤツが俺と野郎の決着の場にいる？なんの皮肉だ、こりゃ
？『お前が否定した運命』ってヤツのイカしたジョークか？」

「……あたしをカーリアン以外の名前で呼ぶな」

その言葉があたしに向けられたモノじゃない事は分かった。
その視線があたしに向けられていない事も……。

マスターシヴァの事については、あたし自身は何も思うところな
んかない。
アイツはもうあたしの中では過去の一部だ。かつて憎悪の余波を

向けたヴァンプ集団の長で、手傷を負わせただけで襲撃が失敗した存在……。

別に誰でも良かったから、二度は狙わなかった相手だ。

そんなヤツが、今は故郷の支配者になっているに過ぎない。

だからそれはどうでもいい。

芝浦？あの『狂人』の名前すら、今初めて知ったくらいだ。

そしてそんな事、今更知る必要もなかった。

問題なのは、あたしを『カーリアン』以外の名前で呼んだ事。

それだけがひどく不愉快だった。

至極愉快そうに、最高に不愉快そうに顔を歪める坂上は、興が乗ったとばかりに笑みを崩し、あたしにではなく天井へと言葉をかけ続ける。

いや、天井なんかじゃなく、そのずっと先にいる誰かへと語りかけるように。その瞳には狂気的な何かを感じるけど、それこそあたしにはよく見覚えがあり、今の世界では身近にあるモノだ。

だからそんな坂上なんかよりも、『名前』の方がずっと重要だった。

あたしはカーリアン。それ以外の名前で呼ばれる事だけは看過しえない。

あたしの大事な人達は、みんなあたしの事をそう呼ぶから。それだけで、その名前には大き過ぎる価値があるから。

坂上はそんなあたしの反応をつまらなそうに見るけど、そんな視線を向けられるいわれなんかない。

「ンな昔の二つ名にゃあ興味ねぇっ……てか？過去は変わんねぇのによ」

「アンタなんかに言われる筋合いない。それに、将軍なんてふざけた呼び名を持つアンタには分かんないでしょうね」

「はん、俺だってな、別に将軍なんてダセェ呼び名が好きなワケじゃねぇ。今は江戸時代かってんだ。単にブラフとして大層な呼び名が必要だったから使ってるだけだ」

――まぁそんな事ぁどうでもいい。

そう締めくくって、坂上はそっと唇を舐める。唇を潤す為というより、ちょっとした間を取るかのように。

「まぁ、なんにせよ感謝するぜ、死にたがり。お前が派手にやってくれたおかげで、あの野郎が来たのが分かったからよ。一応一年前のあの時から、網はあちこちに張っといたんだが、お前が派手に暴れてくれなきゃもうちっと後手を踏んでただろうからな」

「……」

それは――どういう事だろう？

つまりあたしが派手に狼煙を上げたからこそあの野郎――つまりシャクがここに来た事が分かった……という事だろうか？

……だけどそれはちょっとおかしい。

陽動に引っかからなかったのは理解出来る。

単純に街での騒動を切り捨てただけだろう。どんな騒動が起きても、どんな混乱が起きても捨て置くつもりだったとすれば簡単に説明がつく。

街が壊されても、気にしなければいいだけだ。どうせ壊された街の復興作業に従事するのは、ヴァンプじゃない。支配される側の人々だ。

そもそも陽動なんてモノは、相手の心がけ次第で意味を成さないのは常の事だ。
それが理解出来るくらいには、戦闘経験もあるつもりだ。

しかしその口振りだと、侵入者を『シャク』だと断定しているように感じられる。
侵入者が北陸や東海、中部の連中じゃなく、何故『黒鉄のシャクナゲ』だと思ったのか？
それが分からない。

「ンな怖ぇ顔で睨むなよ。代わりにお前には、俺が直々に『真実』ってヤツを教えてやる。一年前の事も、俺がこの一年間調べ上げた『腐った真実』ってヤツも。結城――お前にはアカツキって言った方が通りがいいか？アイツが隠してきた『全て』を教えてやる。そうすりゃ今のお前の疑問も全て理解出来るだろうさ」

「真実……？アカツキ？」

……気に入らない。
そう思う。
あたしの考えを――疑問を理解しているような口振りが気に入らない。
そうは思ったけど、コイツはあのスカシ野郎をよく知っている、という事があたしの中にある戦闘意欲を押さえこませた。

『アカツキ』の名前を出した瞬間に見せた、その表情。
郷愁にも似た懐かしさと、嫌悪感にも似た憎しみ。
ゆうき……と呼んだ時には前者が、アカツキと言い直した時には後者が、より色濃く見られて――
あたしは思わず息を呑んだ。

アカツキの名前を出した時に、ここまで複雑な感情を見せるのは『アイツ』しかいなかったから。

あたしの周りには、無条件でアカツキを特別視し、慕うヤツらが大半だったからだ。

たった一人――アカツキの親友であるシャクナゲを除いて。

それが坂上と被って見えた。

しかも、コイツにとってアカツキは天敵ともいえる立場だ。仲間ですらないのに、『シャク』と被って見えたのが不思議で――あたしは大きく息を吐いた。

ここまで話をしてしまったのなら、もう今更後には引けない事を本当に今更ながら理解してしまい、溜め息が漏れたのだ。

何も聞かないという選択肢は……問答無用という行動はもう取れない。もうあたしは、それじゃ納得出来そうにない。

「じゃあ、いつの事から話そうか？話の分岐点っつうのは山ほどあるんだがな」

そんなあたしの内心が分かったのか、坂上は小さく唇を歪めて笑うと、どこか物思いにふけるような視線を中空へと向け――『歪んだ真実』への扉をゆっくりと開けた。

＊＊＊＊

ジャラジャラ……

表へと続く扉の向こうから、金属みたいなモノが重なり合いながら鳴る音が聞こえ、彼――左近と呼ばれる男は小さな嘆息を漏らした。

自分の同僚――力だけはあれど、あの軽薄で俗物な女が敗れたのは間違いない。それは確信出来た。

そうでなければ……もし万が一にも、あのやかましい同僚が予想以上の結果を出したのなら、彼女はそれこそ鬼の首を取ったかのように喧伝するだろう。

なにしろ本当に軽薄で俗物な女だから。

近衛などと称されても、所詮は噛ませ犬に近いと思えば、その結果にもそれほど落胆はしなかったが。

しかしそれでも、やはり溜め息くらいは漏れてしまうのは仕方がない。

「あぁ、面倒くさい面倒くさい」

そう呟くと、今は高級嗜好品と化したシガーレットを壁にこすりて消す。

ほとんど吸っていなかったが、その様子からはそれほど頓着した様子を見せてない。

しかし、単に落ち着かない心境を抑えこむ為だけにくわえていただけだから、その吸い殻は用はすでに達しているといえた。

一年前、侵攻してきた東海の軍勢を迎え討つ為、彼と妹が山都へと出向いている隙に、この街へと侵入してきた一人のネオ。

同僚の一人を殺し、別の同僚の一人が出奔する理由を作った男。

戦都の知事だけが、他都市に比べてやたらと代替わりが早い理由

たる敵。
そして関西の始祖――将軍と呼ばれる主と共に、双璧を為す関西の顔。
そんな男を相手にすると思えば、高級嗜好品と分かっていても本数が抑えられないのだ。
自分ですらそうなのに、あの女は本当に勝てるつもりでいたのだから、もはや左近には嘲笑すら浮かばない。

「俺だけで一時間押さえられたらいいんだがね。そうもいかないかな」

主からの要望は『一時間』。
そう内心で繰り返し、小さくニコチンで濁った唾を吐き捨てる。
自分だけでその時間を稼げたなら、次の間で待つ妹――『右近』は戦わなくて済む。
そんな計算が彼の頭の中では立っているが、それがどれほど至難な事かも彼自身は自覚していた。
自分よりはやや力は弱くとも、戦歴だけで言えば上回る『田村』という名前の同僚を殺した男。
そして自分よりも強い、将軍と同じ純正型だった『旭』という近衛が、出奔する原因を作った男。
戦都の知事を、三代――つい最近四代になったが、四代に渡って潰したネオ。

そんな男を相手に、どれだけ時間を稼げたモノか……正直なところ彼にはあまり自信がない。
元々、敵を甘く見ないクチだからこそ、左近にはその一時間がいかに長いモノになるかが分かっていたのだ。
広い場所で向かい合えたならば、妹と一緒に戦う道を選んだだろう。そうすれば『一時間』くらいならなんとでもなったと思う。

でも真っ直ぐに奥を目指す相手に、向かい合う場所の選り好みなどしてはいられない。
そして妹である右近はともかく、自分の能力が広範囲に渡り力を及ぼすタイプの能力だという事を考慮すれば、ここは別れて足留めを試みるしかなかったのだ。それはやはり痛手でしかない。
しかし狭い室内では、妹をも巻き込む可能性がかなり高い事も考慮すれば、選択の余地はなかったのだ。

だから彼は一人、ここで待っていた。
たった一人、一年前に同僚が殺された廊下で。
大きな窓が取り付けられた、廊下の割には幅も高さもそこそこある場所で、壁にその背を預け、タバコの本数のみを消費しながら。

ギィ……と軋む扉。
その音に『後で油を指さなきゃな……』なんて事を思いながら、彼がその音源の方向を見やれば、そこには片手に大型のオートマチックを握った男が一人。ぶら下げた右手には、黒っぽい何かが這っている誰か。
まだ若い——自分や将軍よりもやや若く、妹と同じ年頃らしき、黒髪黒瞳を持つネオに左近はゆっくりとその視線を細める。

今まで直接相対した事はなかった。それでも『この男』の噂だけは嫌というほど聞いていた。
何度もその姿に想像だけは巡らしてきたが、やはり実物と相対すれば、『噂がいかに噂に過ぎなかったか』が分かる。
それほどの存在感を、漆黒の外套に覆いながらも、その男は淡々と歩を進めていた。
壁にもたれかかる近衛を、全く歯牙にもかけていない様子で。その歩みは、なんの躊躇いもなく、奥へ——壁に背を預けたままの彼の元へと歩を進める。

「アンタがシャクナゲか？」

「……」

「悪いが今は取り込み中でな、ここから先は一時行き止まりだ。少しばかり待ってくれれば通れるようになるが……どうする？」

歩む男はあくまでも無言。

ただ沈黙でもって答えを返し、歩みでもってその意志を示す。

「そうか……」

――問答無用ってワケか。

そう小さく吐き捨てると、濃紺色のコートをまとった近衛・左近はその手をかざす。

パキパキっと乾いた小枝を踏みしめるかのような音と共に、そのかざした両手から冷気が溢れていく。

それは左近にとっては慣れた力を使う感覚。

空中にある極小の水気――水蒸気を固め、壁に染み込んだ湿気を水分に還元する感覚。

そしてそれを極小の雹の群れへと変換し、前に伸びる廊下へと放つ。

狙いは付けない。その極小全てに指向性だけをつける。確実に狙いなど付けなくても、極小の群れをかわす事など出来るハズもないからだ。

しかし歩みを進める黒いコートの男は、全く慌てずに廊下を蹴り、壁を蹴り上げ、天井を蹴ると、そのまま重力に逆らうかのように天

井を駆ける。
そしてそのまま自らの頭上……中空を抜ける極小の雹群には目もくれず、その片手に握ったオートマチックをポイントする。

「……っ、聞いてた以上に化け物じみた身体能力してやがる！」

思わず悪態を吐きながら、慌ててその銃撃をかわしつつも、左近にはどうやって天井を駆けてみせたのかが分かった。
単純に重力に従って落ちるよりも早く——より強い力で天井面を前へと蹴り出しただけだ。
落ちるスピードよりも強く天井蹴り、その力で天井を駆けるように見えただけに過ぎない。
真っ直ぐ進む力の方が強ければ、落ちる力は微々たるモノとなる。
それを段差のほとんどない天井面でやってのけるには、天性のバランス感覚と強い筋力、身体を上手く使う術を持っていなければならないだろう。

そんな相手の芸当に舌打ちしつつも、中空を舞う雹の向かうベクトルを天井へと変える。
しかし相手もその動きを察したのか、天井を蹴り、壁を蹴り、地面を蹴って、廊下という面の全てを利用しながら、確実に奥へと進む。

「一時間か……人生最悪最長の一時間になりそうだ」

そして多分最後の——
そんな思いに小さく唾を吐き捨て、より深く、より強く力を集中していく。
まだ前哨戦を済ませたに過ぎないのに——邂逅したばかりだというのに、左近の背には冷たい汗がとめどなく流れ落ちていた。

それをなんとか無視し、さらにずっと力の集中を重ねていく。
それと共に、パキパキっと乾いた音が重なり合い、極小の雹が合わさっていき、空中に煌めく氷の刃を幾つも形成されていく。

「関西統括軍所属、近衛左近……参るッ！！」

左近は吠えた。近衛軍に入ってから、誰にも見せた事のない猛々しさで吠えて見せた。
その両手を前へと突き出し、濃紺のコートを力の余波でたなびかせながら。
それに合わせ舞い狂う氷刃は、廊下のあらゆる面を切り刻み、引き裂きながら、佇む黒へと迫っていく。

それに合わせるかのように、黒コートの男――シャクナゲも、今までダラリと下げたままだったその右手を、ゆっくりと掲げてみせる。

――ジャラジャラ
そううねる金属音と共に、その右手にはうねうねと蠢く鈍色の鎖の群れが這っていて……
それが迫る氷刃を威嚇するように鎌首をもたげてみせる。
そしてそっと――ここに来てから初めて、そっとその口を開いた。
吐き捨てるように。唾棄すべきモノを口にするかのように。

「――Ｕｎｄｏ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ（束縛の鎖を外す）」

目の前に立ちふさがる左近へと、様々な感情のこもった視線を向けながら。

28・アカツキ（前書き）

またまたギリギリ……
先週の反省はどこにいったんでしょう？

それは置いておいて、この話はかなり色んなネタが入ってます。多分今までで一番苦労しました。
文字数も一番多いですしね。

次回更新は来週月曜日の予定です。詳しくはまた活動報告に書いておきます。
あとがきはアカツキ２

28・アカツキ

「緊急会議たぁどういうこったろうな？」

「申し訳ありません、それは皆さんお揃いになってからという事で」

場所は黒鉄第三班本部入り口にある事務棟の一室。

そこに今は黒鉄七班の班長とその副官連が集まっていた。

集まっていたというよりも、三班副官のアオイが集めた、といった方が正確だろう。

「シャクナゲの野郎じゃなくて、おめぇが――野郎の副官に過ぎないおめぇが、緊急会議って名目で集めるのはなんでかって聞いてんだけどよ」

「すみませんね。それについても後でご説明致しますので」

絡むようなセリフだが、そう言ったナナシのセリフはもっともだった。確かにそれは解せない。

いくら三班でも――黒鉄七班の中核たる第三班でも、副官にそんな権限はないハズだ。

おまけにその三班は、『水鏡』『不貫』『音速』の三人が――つまりコードフェンサー全員が、この場にいるのは不自然だと言えるだろう。

特に『不貫』のヨツバは、こういった席には顔を出した事がなか

ったはずだ。
普段から滅多に見かけない男だけに、その茫洋とした雰囲気と絶えず閉じられたままの瞳に、言い知れぬ不安を感じるのは私だけではないだろう。

そして何より分からないのは、シャクナゲが――三班の長である彼がこの場にいない事。
スズカの頼みでカーリアンがこの街を離れている時に、彼抜きで三班が緊急の会議を催したい、というのはいかなる所以だろうか？

「スズカさんは欠席らしいですし、代理の方もやはりいらっしゃらないようですね」

黒鉄七班中、唯一誰も姿を見せていない七班に、特に落胆するでも焦るでもなく、アオイはいつも通り笑顔のままでそう言うと、ゆっくりと席から立ち上がった。

「ではお待たせ致しました。そろそろ会議を始めましょう。黒鉄の今後を左右する大事な会議を――」

私はカクリ。考察者。
全てを知りたいと望んできた者。
紅の力となりうる情報を望んできた者。
力弱きゆえに、力以外を求めた弱者。

『紅の為の黒鉄』である事を望んだ者。

――考察者ゆえに私には分かった。

――望んできたがゆえに分かった。

――弱者ゆえにそれを察した。

今この場から、大きな時代の流れが始まる事を。

私がその流れの中心からやや逸れた位置にしか立てない事、所詮は考察者でしかあり得ない事を……なんとなく察してしまった。

その中心にいるのは、変遷の場であるこの場所にいない者達であり――

私の大事なカーリアンは、私を置いてその中心にほど近い場所にいる事を……この時にはなんとなく悟ってしまっていたと思う。

「まず初めに、少々お聞きしたい事があります」

そう声をあげたのは、会議の主催者たる彼――アオイだった。

会議の議題や、シャクナゲがいない事に対する説明もないままの言葉に、より増していく不信感を感じる。

意図的に逸らしているのは明らかだからだ。

「アカツキ。我らのリーダーにして黒鉄の創始者の事を、皆さんはどのぐらいご存知でしょうか？」

「……アカツキとはそれほど長い付き合いではなかったが、なかなか出来る男だったと思っている。私は彼に救われたクチなのでな、当然悪い印象は持っていない」

戸惑いが流れる場に、それでもまず返答を返したのは六班の班長、ヘルメスだった。

きっちりと着込んだ男物のスーツ、後ろに撫でつけた黒髪を持つ男装の麗人は、その場に置いてもっとも落ち着きを払っていると言えた。

「大方の者は、彼になんらかの借りがあるだろう。シャクナゲに助けられたクチも少なくはあるまいが、それも間接的にはアカツキに借りがあるとも言える。答えはこれぐらいでいいかな？」

「ありがとうございます。では皆さんの認識ではリーダーで恩人、そんなモノでよろしいでしょうか？」

「……純正型。……そして将軍とは顔見知り」

アオイが言葉を切る前に私はそう手札を切る。これは手に入れたばかりの情報ではあるが、真偽については問題ない。

今そこでびっくりした顔で私を見ているカブトのお墨付きのネタだ。

多分カブトからしたら、ここでそれを話すとは思っていなかったのだろうが、手札をどこで切るかは私次第だ。今更文句を言われるいわれはない。

「カクリさんはご存知でしたか。多分皆さんは——今の班長連の方々は、カブトさんを除いてそれほど古顔ではありませんから、ご存

知なかったでしょうけど」

しかし、それに対してもアオイの反応は淡白なままだった。それをあっさりと認めた上で、全く悪びれる素振りも見せない。むしろ話す手間が省けた、といった感すらある。

三班の中では、唯一ヒナギクだけがちょっとびっくりしていたが、他の二人はどよめく場にもどこ吹く風だ。

ヨツバなどは面倒そうに口笛を吹いてみたり、前髪を触ってクルクル指に絡めてみたりしている。

「……聞いてねぇぞ、ンな話！なんだ、それ！アカツキの野郎と将軍が顔馴染みだぁ？ふざけてんのか！？」

「ふざけてませんよ。坂上――将軍は力に溺れた、でもアカツキは溺れなかった。道が違えるまで顔見知りだっただけです。関西軍に顔見知りがいる方ぐらいこの中にもいらっしゃるはずだ」

敵の親玉と自分達の仲間――仲間であり、リーダーだった男が顔馴染みだと知り、激昂したのか混乱したのか。一班班長のナナシが、その特徴的なパイナップル頭を揺らして立ち上がっても、アオイはあくまでも冷静なままだった。宥める気もないのか、そちらには顔すら向けない。

それをナナシは歯を軋らせて睨みつける。

アオイの言は、正論として通っている。

ただし、それが納得出来るか否かは別だ。

ナナシはアオイと同じか、あるいはやや上ぐらいの年頃だが、その性格や物腰は正反対と言える。

アオイは年齢不相応に落ち着いているが、ナナシは年齢の割に思慮が足りない。アオイは穏やかだが、ナナシは穏やかとは正反対…暑苦しいタイプだ。アオイは均整の取れたスタイルをしているが、ナナシは背が高い割に細過ぎる。

つまり性格の不一致というより、存在自体が不一致に近い。

それがなおさら正論を認める際の阻害となっているのは間違いない。

「ま、それはいいんです。アカツキは亡くなりましたし、彼はあくまでも将軍の敵でしたから。それは皆さんもよくご存知なはずです」

「そやったらさっきの質問はなんの意味があったんです？確かにウチも驚きましたけど、まぁそれは全然ええんです。アカツキには恩はあっても仇はありまへんから。でも、それをアオイはんが言うんは意味が通りまへんわ。あなたが聞いた事やろ？」

このちょっとムカ……特徴的な喋りは四班班長のオリヒメだ。彼女にはちょっと——かなり思うところがあるけれど、その言葉はもっともだ。

私の手札がポシャるのはいい。しかし、彼自身がアカツキについて聞いてきたのに、こちらの答えに『それはいい』はないだろう。

「あぁ、私が聞きたい事はそういった事ではなかったんですよ」

「……彼の能力、出自は分からない。……それを知っているかを確かめたいのなら……ここにいる人達は知らないと思う」

だけど私には分かった。彼が『アカツキについて』皆に聞きたかったのは、それらについてだろうという事が。

何故そう思ったかというと幾つか理由があるが、一番は私の勘だ。
私の今までの考察、今の話の流れ。そして将軍との関係ではなく、彼への印象についてでもないのならば、後は私達が知らない事を指しているのだろう……そういう考えの下地はあるが、『何かが動き始めた』という勘が一番なのは間違いない。
先へ進むには……新たに動き始めるには、今までの精算が必要なハズだ。そう考えれば、もうそれは勘ではなく確信といってもいい。

「さすがはカクリさん。まぁ出自についてはどうでもいいんですが。この中にアカツキの能力についてご存知の方はいらっしゃいますか？」

「……制約のある預言だと彼からは聞いたな。その目――金の円環連なる瞳を持つところからして、純正型なのは間違いないだろうが、それでもやはりかなり希少な能力だろう。たしかラストノート、だったかな。そう名付けたノートに、預言を書き込んで使っていたと記憶しているが……」

答えたのはまたもヘルメスだ。他のメンツは、話についてきているのかどうかも定かではない。
気になるのは、ヘルメスの隣にいるマルスがいつになく緊張している事である。
彼はいつであれ『やる気を見せない事』を念頭におき、周りに『使えない印象』を与えるタイプだと思っていたが、今はその片鱗も見せない。
宗旨変えでもしたのか……あるいは彼にも今の話の流れが読めているのか。
ピリピリとした緊張感を滲ませ、アオイを見つめている。

「ハズレです」

しかし、そんなマルスに気がいった瞬間も、会議はアオイ主体で進んでいく。

会議というより、説明会に近い形な気もするが。

「……私も預言だと聞いた。……そうだとしか思えない。……彼が立てた作戦立案、部隊配置はいつであれ的確だった。……預言の能力でハズレとは思えない」

私がそう思うのにはもちろん理由がある。

アカツキがいなくなった時、一番の問題となったのは、迎撃作戦の立案や今後の指針を決める際についてだった。

もちろんリーダーだったからそれらが問題になった、という事もあるだろう。

だがそれ以上に、彼の力が『預言』だという認識が周りにあった事が問題だったのだ。

彼は戦闘には出ないのに、彼が亡くなって皆が悲嘆に暮れたのは、彼の的確すぎる作戦立案がなくなった事によるモノだと私は認識している。そしてそれは外れてはいないだろう。

黒鉄に入ったばかりの頃は、『預言』と言われてもなかなか信じられなかったが、彼が組んだ布陣や防御網はいつであれ的確だったのは認めざるを得ない。

優秀な情報網を持っているのだろう……そうこじつけてもみたが、それにしても彼の場合は『的確すぎた』。

どこからどれだけの敵が来るのかを分かっていなければ、あそこまで的確に布陣は組めないだろう。毎回シャクナゲが率いる精鋭が、一番の難所に当たっていたのが証拠だと言える。

確かに死者は出た。黒鉄以外の民間人にも犠牲者はいた。それで

も最小の犠牲だったと思う。
なにしろ『関西軍』と『黒鉄』の戦力比はイコールではなかったのだから。

「でもね、それはやっぱりハズレなんですよ。彼の能力は『預言』じゃない。預言の能力は、あくまでも『ラストノート』の力です」

私の言葉にもそう否定を返され――

『預言の能力はあくまでもラストノートの力』

その言葉に大きな違和感を持つ。持たざるを得なかったとも言える。

ラストノート……それはただ分厚いだけの雑記帳だったと思う。分厚いだけの、どこにでもありそうなノート。それをアカツキが抱えていたのを私は何度となく確かに見た。

『純正型の証』を、特別だよと見せてくれた時もそのノートを抱えていた。

だけどアオイは今なんて言った？

預言の能力は『あくまでもラストノートの力』……預言の力は、『ラストノート固有の能力』だと言ったのか？

それを持っていたアカツキの能力ではなく、その『ノートの能力』だと言ったのか？

確かに……今の世の中、人の変種には不思議な力を持つ者がいる。かつては超能力と呼ばれたような力。

魔法じみた力を持つ者がいる。

人の肉体の限界を越えた、化け物みたいな身体能力を持つ者もいる。

しかし、だ。ノートのような器物に、そんな能力が宿るなんて話は聞いた事がない。ノートに『進化』も『退化』も――そして『変化』もない。そんな能力を自然と持つ事など有り得ないのだ。

動物の中には、変種の能力を受けて変質したモノもいるらしいし、ひょっとしたら人と同じような変種もいるのかもしれない。それはまだ理解出来る。

でも――

そんな事まで、今の世の中には起こり得るのか？

その考えに行き着いたのは、どうやら私だけではなかったらしい。ヘルメスがその顔色を、珍しく驚愕に歪めていた。

そしてカブトは……諦めたように、小さく肩をすくめていた。

しかし、そんな人々の様子などアオイは全く気にも止めてはいない。

端から見ていて不気味なほどにいつも通りで、そんな彼にちょっとした怖気を覚える。

そして彼がこれから話す言葉には、それを超える恐怖を感じてしまう。

真実を――あらゆる情報を求めてきたこの私がだ。

何故なら、今話しているアカツキに対する事柄は――すでに死して久しい男の話は、あくまでも前振りでしかないだろうから。

「アカツキの能力は『付与』。器物にあらざる因果を……事象を付与する能力です」

私が感じたそれに気づいていないのか、あるいは気にもしていないのか、答えは躊躇いもなく声となる。

淡々と……飄々と……でも重みがある内容を言葉にしていく。

「待ってくれ！いかに純正型とはいえ、そんな能力があり得るのか？そんな能力……モノの本質を変える能力など！」

「あり得るもあり得ないもありません、事実ですよ、ヘルメスさん。それにあなたも彼が因果律を歪め、新たな事象を付与した物質を見た事があるはずです。いえ、黒鉄に属する者なら――」

「アオイッ！」

そんなあくまでもいつも通りのまま続けるアオイの言葉を止めようとしたのだろうか。見た事がないほどの剣幕で……そして思わず立ち上がるほどに慌てて言葉を遮ったのは、今まで沈黙を守っていたカブトだった。

しかし、それにもアオイは軽く肩をすくめるだけで返し――冷たすぎるほどの視線を、椅子を蹴倒し立ち上がっていた男へと向ける。

「カブトさんは黙っていて下さい。これを話すと決めたのは、シャクナゲとスズカさんです。この二人がそう決めた以上、あなた一人が反対したところで意味はありませんよ」

声を荒げ、立ち上がる五班班長・カブトにも……この場では一番発言力があるであろう既存種の言葉にも、アオイは全くひるまない。それどころか、キッパリと彼の意志を跳ね返してみせる。

カブトの後ろにいた、五班所属のコードフェンサーの一人、『碧兵（へき）』コガネが思わず立ち上がりかけるほどの冷徹さで。

そんな『碧兵』に対して、アオイの後ろでフラフラ立っていた『不貫』のヨツバがその右手を掲げてみせた。

その動作になんの意味があるのかは分からない。
ただ、圧力といった意味だけでもその動作は効果的だろう。
なにしろヨツバは、味方相手でも躊躇はしない事で悪名高い男だ。
そして相対した敵は、必ず皆殺しにしてきた黒鉄一の狂戦士だ。
そんな彼を恐れる者は、黒鉄にも数多くいる。
コガネもそれを当然知っていたのだろう。小さく悔しげに呻き、歯を軋らせながらも再度腰を下ろす。
もし『不貫』と『碧兵』がこんなところで揉めれば、既存種であるカブトや私のような弱い変種は身を守る事すら出来ないだろう。
それを危惧したのかもしれない。
しかし、目を瞑ったままのヨツバは、そんなコガネの様子にもつまらなさそうに肩をすくめてみせる。まるで『かかってくればいいのに……』とでも言いたげに。
そこに侮蔑も嘲笑も浮かんでいないからこそ、ヨツバのその態度は異質だったと思う。それは『躊躇いも感慨もない』と宣言しているに他ならないからだ。

コイツはこの会議の最中――しかも三班とは仲がいい五班のメンバーを相手に、七以外の全班を巻き込んだ乱闘でも起こす気なのだろうか。
……まぁ、噂に聞くヨツバならそれくらいはしそうな気もするが。

その考えは共通認識らしく、室内には次第に緊張感が増していった。
オリヒメはその視線を細め、ナナシ以下の一班はいつでも立ち上がれるように重心を移動させる。
スイレンは変わらないが、ヒナギクは緊張と戸惑いが滲んだ顔で、周囲に視線を這わす。
そんな中でも楽しげにしていたのは、五班のアゲハだけだ。カブトの後ろに座したまま、今まで一言も発していないアゲハは、その

口元が妖艶に微笑んでいるのが見える。
あいにくその顔の上半分は、いつものように包帯を思わせる白い布きれが乱雑に巻かれていて窺えないが、その口元だけは確かに嗤っていた。

そんな室内の様子が分かっているのかいないのか、全く怯まないヨツバは小さく舌なめずりをし――小さく肩をすくめてから一歩下がった。
隣にいた女性……着流した浴衣姿のスイレンに、その視線だけでたしなめられて。
僅かにチラッと見ただけでしかないが、それにヨツバは素直に従ったのだろう。
掲げていた腕を下ろし、再度つまらなそうにぶらぶらと前後に振っていた。
別にどっちでも良かったと言いたげに。

この瞬間だけは、間違いなくこの『狂戦士』が場を呑んでいたように思う。
ヨツバが下がった事により、一気に室内を覆っていた緊張感が緩むのがその証拠だろう。それを確認して、ヘルメスが再度口火をきる。

「……私が彼の『作った物』を見た事がある、とはどういう意味だ？確かにラストノート自体は――それらしい物は見た事がある。だが、その能力、つまり実際に預言が書かれているかどうかは見た事はないぞ？」

「そんなもの私も見た事はありませんよ。見た事があるとしたら、シャクナゲとカブトさんぐらいでしょうね。でも、黒鉄に所属する者なら、絶対に『アカツキの力が作ったモノ』は見た事があるハズ

です」

さっきまでの緊張感もどこ吹く風とばかりに大仰に肩をすくめながらも、口調だけはあくまでも淡々としたモノだ。その仕草はまるで出来の悪い生徒に、筋道を立てて説明するかのような仕草で――珍しくちょっとした疲れと、僅かな苛立ちを含んでいるかのような口振りだった。

「分かりませんか？アカツキが亡くなってからも、彼と最も親しかった黒鉄が、絶えず『ソレ』を握って戦う姿は、誰しも見た事があるハズなんですがね」

「まさか――」

「……シャクナゲ」

ヘルメスも――同じ考えに行き着いたのだろう。

アカツキと最も親しかった黒鉄。戦う姿を誰しも見た事がある黒鉄。

そんな人物は『彼』しかいない事に。

そして、彼の戦闘スタイル、彼の一番の武器――能力を考えれば、答えは一つしかない。

彼自身と同じ銘を持つ、無限の弾丸を吐き出す二丁の銃。

彼のイメージとして、『黒』と同じく一番に来るモノ……

『シャクナゲ』

そこまで考えついても、内心で複雑に絡みあった何かはまるでほぐれていかない。むしろより複雑に絡み合っていくような錯覚を覚える。

いや、正直な話、アカツキの能力が説明された段階で、その可能性には考えが及んでいた。

物質越しに能力を発露する……そのスタンスにはよく見覚えがあったからだ。

そして、アカツキが『ラストノート』だけを作ったとも思えない。つまり、一回だけ能力を使っただけとは思えなかったのだ。

力を持てば使いたくなるのが『人間』という種族だから、そんな能力があるなら、他の誰か――そう、信頼出来る誰かに『力を付与したモノ』を渡していただろう事は予想できる。

だけど、そうは思ってもその考えは即座に否定してもいた。

なにせ『アカツキはもう死んでいるのだから』。

能力を残したモノも、すでに力を失っている『ハズ』だから。

でも、アオイの口振りからはその可能性しか見いだせず……私は今までとは比にならないほどの恐怖にかられた。

私はとんでもない勘違いをしていたんじゃないか？何か大きな見落としがあったんじゃないか？誰かに――いや、ハッキリというならば『アカツキ』に、私の考察、思考自体がミスリードされていたんじゃないか？

アカツキの能力が予言であると思い込まされていたように、今までの考察自体も彼の手のひらの上だったんじゃないのか？

それは、屈辱感よりも大きな恐怖だ。

『能力の一端だけ』をわざわざ見せつけて――黒鉄の者なら誰でも知っているほどに知らしめて、その本質を隠していたのなら、何

を考えてそれを隠していたのか？
なんの為に――そして『何を隠していた』のか。
自分の本当の能力を知られたくなかった？本当にそれだけか？
隠されていたモノは、本当に『ソレだけ』なのか？
だとしたら何故『アカツキが死んだ後もソレを厳重に秘密にしていた』？
死した後にその能力を隠す意味はどこにある？

「待て、待てよ、オイ！アカツキの野郎は死んじまってるだろうが！？アイツが死んだのは間違いねぇ。なのに、なんで能力だけが――」

「ほとんどの方の純正型に対する認識……『強い力を持っている』事と、見た目で分かる特殊な身体器官を持つ事、それがそもそも勘違いなんです。『力の本質』自体が……『在り方が違うんです』よ。単純な強弱じゃない。アナタの身体能力異常みたいな力や、オリヒメさんの空間氷結能力とは根底から次元が違うんです。まぁ、中でもアカツキは特殊な部類でしたけど」

次元が……在り方が違う？
それは本質自体が違うという事だろうか？
オリヒメの能力は、カーリアンと比べても遜色はない。ナナシの身体能力は、シャクナゲに次ぐ。回復能力や自己治癒力といった面で言えば、シャクナゲを遥かに上回る。
ニュアンス的に、それらとは比べモノにならないほどの強力な力――という単純な意味ではないだろう。

……だけど、その方が最悪だ。

なぜならそれは、純正型とは力そのものが――力の存在理由自体が違うという事だ。

つまり、『同じ舞台に立つ強者ではなく、全く違う舞台――手の届かない所に立つ強者』という事になる。

「純正型とは『世界を作る者』。私達が知るこの世界……この日常から外れた常識を持つ『世界』を作る者。私達が視認しえない、異世界を作る『純正なる新たな人類』、それが純正型なんです」

「……視認しえない世界を作る」

「そうですよ、カクリさんにも、私や他の方々にも、スズカさんが力を使う際に周囲に展開する『世界』は見えません。しかし『見えないだけです』、同じ純正型以外には。彼女の世界の理は、世界の創造主であるスズカさんが認識した対象を拒絶する事。それを私達は『斥力』として捉えているんですよ」

……私は銀鈴のスズカが戦っている姿は見た事がない。もちろん、アカツキが能力を使っている姿も。

だから真偽は分からない。

だからなんとも言えないが、もしそんな世界があるのなら、それはどんな世界なんだろうという興味だけは湧く。

ただし、見てみたいだけであって、『それを日常のモノ』と感じたいかは別だ。

自分だけに見える物、あるいは者。それはどれほどの孤独感を生むか……変種である私には想像が出来なくもない。

きっと最高に最悪だ。人が歪むほどに。他者を同一の種族とは見れないほどに。

「スズカさんの斥力……つまり『拒絶』、アカツキの『付与』。もちろん私は、どちらの世界も見た事がありません。ただし、この2つにも違いはあります。あくまでも存在理由も創造主も違う別個の世界。違う力が働き、違う常識が支配する世界ですから、違いはあって当たり前ですけど」

……その違いが分かりますか？と言わんばかりにこちらを見られても困る。

何を期待しているのか、あるいは意地悪なだけかは分からないけど、今はまだ理解が及ばない。正確に全てを掴めていない。

はっきり言うなら混乱している。

「……元ある物質に新たに因果を『付与』する理（ことわり）の世界と、元ある物質を拒絶するだけの世界。つまり『物質』という肉に世界を刻むか、ただ一時的に自らの理を空間に発露するかの違いですよ。つまり――」

「……アカツキが作ったモノ……正確に言うと、アカツキの世界が『力を付与したモノ』は……もうその物質そのモノの因果として固定され……アカツキ個人とは関係していない？」

どこまで反則なんだろう。そう思いながらも、私は答えの可能性をなんとかひねり出す。

――正解。

そう小さく言い、軽く笑うアオイに……私は吐き捨てたくなる。

そんな『力』は、あまりにも規格外過ぎる。予言すら出来る物質――予言を刻むモノを作り上げるほどの能力となれば、どれほどのモノが作れるか。

それを平然と笑いながら言える神経が信じられない。

「ラストノートに与えられた能力は、『アカツキ本人の考えを実行した際に至る未来を自動手記する事』。それにより彼は作戦を決めていたんです。つまりいくつもいくつもあらゆる作戦や部隊の配置を細部まで詰めて考えて――その中から最良の策を選んでいたワケです。分かりますか？つまり人の命を選んでいたワケですよ。大の為に小を捨てて、一番犠牲が少ない作戦がノートに刻まれた時に、作戦は決まっていた。そんな不完全な結末しか見れないのが『ラストノート』」

それが本当なら――あまりにも脆い予言だと思う。間違いなく使用者の心を蝕む予言書だ。なにしろ『自分が選んだ行動により死者が出る事が見えてしまう』のだ。しかも勝ちの目が見えない予言……良くてイーブンしか見えない不公平が見えるのだ。

それこそ何度も何度も部隊配置を考え、その度に絶望を見て、『最少の犠牲を選ばなければならない』。

そして、その作戦を選んだという明確な責を自覚させられる。

……私ならば妥協してしまう。きっと言い訳をしてしまう。諦めてしまう。そうでなければ、死が見えた人への罪悪感に潰される。

でもアカツキは、いつもいつでもどんな時でも自信満々でいた。記憶の中にある彼は、カーリアンが『スカシ野郎』と呼ぶほどに飄々としていた。

そこにどれほどの苦痛と悲哀が隠されていたのか。私には……きっと耐えられないという事しか分からない。

「……それに彼は間違いなく最高の能力を持ってはいました。不完全ながらも予言の能力や、無限の空圧弾を精製する能力を付与出来るだけの力を持っていた。でもね、そんな彼でも決して最強じゃな

かったんです。もしそんな存在だったなら、私もシャクナゲも――そして多分カブトさんも惹かれはしなかったでしょう」

それは……そうかもしれない。簡単に想像が出来る。

その力は心を蝕む。傷つけ、苛み、避けられぬ罪に溺れる。

それを平然と耐え、次々とそんな力を――反則を使えるなら、間違いなく最強にはなれただろうが、そんな存在はもう『人間』とは言えない。

その考えに僅かに安堵する。私達が所属する黒鉄の創設者は、あくまでも人間だったんだと思ったのだ。

「……アカツキが作ったモノを使うには『代償』がいったんだ」

――納得する側でそんな声が聞こえるまでは。

自らを苛むように、カブトが言葉を絞りだすまでは。

諦めと、深い罪悪感のこもった声を聞くまでは。

「ラストノートは新たに開いた所に予言が書き込まれる。順々にノートは埋まっていく。そして余白が埋まっていく分だけ――アカツキの行動の幅が……未来が縮まる。つまりあのクソッタレなノートの代償は『アカツキの命』」

「そう、だからアカツキはあんなに早くに亡くなった。黒鉄の体制が整うまで、惜しげもなくノートに頼り――犠牲が少なくなるように何度もノートを開いていましたから」

……バカだ。

それが本当ならば、アカツキという男は正真正銘のバカだと思う。

その力を上手く利用すれば、アカツキは関西を――いや、下手を

すれば関東軍に匹敵するだけの規模を持つ軍隊を持てただろう。
それをしなかった理由が分かったからこそ、私はアカツキがバカだと思った。人間性云々じゃなく、本物のバカだと思ったのだ。
それは今の黒鉄の甘さこそが『アカツキ』の望んだモノだと分かったから。
『支配』じゃなく、あくまでも共存。自由意志による共栄。
それを望んだからこそ、『軍』を強化しなかった。戦いを強制しなかった。力に頼らず、ただ言葉で訴え、態度で訴え、共に苦難と戦う同士を望んだ。
それが今の黒鉄の在り方の元なのだろう。そう考えれば、今の黒鉄にもある甘さの理由が見える。
それを求める為に必要としたのが力じゃなく予言だったんだろう。私と同じく『知識』を求めたのだと思う。
中でも絶対的価値を持つ情報――『一番いい結果が見える』という情報を。
その為に自らの未来をベットしたのだとしたら……あまりにもお人好しすぎる。

「アカツキは命を懸けた。予言……未来を知るには未来が代償だったから。それと同じように、他の道具も大きな代償が必要なんだ。
それがアイツの世界の『理』。だからシャクナゲもそれを背負った。
俺は――」

――背負えなかったけどな。

そんなカブトの言葉に含まれているモノが、後悔か、自らへの怒りか、弱音かは分からない。
しかしそう吐露する姿は、泣きそうで……いつもと違い、ずっと小さく見える。
その姿に誰も言葉を挟めない。カブトの嗚咽にも似た、懺悔じみ

た声には言葉も出ないのだろう。

アオイと――今なお嫌な予感が止まらない私を除いて。

「……シャクナゲの代償はなに？……それは『今も支払い続けているの』？」

嫌な予感。もう確信と言ってもいい。未来を――『命を代償に未来を知った』なら、『シャクナゲを使う代償』はなんなのか？

そしてシャクナゲという人物の能力が『弾丸精製』ではないなら、『本当の力はなんなのか』？

「シャクナゲの場合は、代償（それ）を望んで払っているんですがね」

「……望んで？」

「そうですよ。彼がアカツキに協力した理由は、その代償をアカツキから貰う事。代わりに『空圧圧縮』なんてつまらない能力を得たんですけど、それもあの人の望みです。むしろ『付与された能力はいらないくらい』と言ってましたね」

「……能力がいらないのに……代償を払った？……代償を背負うのが目的で『シャクナゲ』は作られたの？」

嫌な予感は止まらない。

アカツキの話だけで十分だ。もう十分『黒鉄の秘密』は知れた。

でも――懺悔や説明をする為に集められたわけではない以上、『ここまでは前振り』でしかないだろう。

だって『今から本題に入る』のだろうと思うから。

その為に三班……つまりシャクナゲに近いモノ達が、この場を設けたのだろう事は明らかだ。

それでも私は今、このタイミングで――シャクナゲと同じくカーリアンがいないタイミングで、この話を聞かされる事に体が震える。

「シャクナゲ――空圧を弾丸として射出する能力を付与されたモノに支払っている代償は、別の理です。未来を読む理には未来を、戦う力を得るには別の戦う力を。つまり『シャクナゲと名乗るあの人が支払っているのは、彼自身が作る別の世界』。それがあの二丁の銃への代償です」

――アカツキは最強じゃないと言いましたね？

続けてアオイはそう言う。追い討ちをかけるように。

――最強を……最凶を挙げるのなら、それは代償をキャンセルした時の彼こそがそうです。最強の『純正型』は彼、『黒鉄』の名前を捨てた時のあの人こそがそうですよ。

そう発せられたその言葉が――私の中で予感を確信へと確実に変えていた。

最悪の確信へと。

やはり私は勘違いをしていたのだ。アカツキには出会った最初からいいように踊らされていたのだと私は悟った。

彼自身は決して言ってはいなかったのだ。
最初に会った時、『特別』にその不可思議な瞳を見せてはくれたけど、それがなんなのかは『口にしていない』。

おそらく、みんなに『特別』だと言って、その瞳を見せていたのではないか？
そしてそれを見せられ、誘導していただけなのだと思う。
純正型は『体のどこかにその証がある』と。
私自身も多くの純正型がそうであるらしいと聞き、アカツキも同じだったからそう『思い込んでいた』。スズカにもあるらしいと聞いていたからなおさらだ。
確かにそんな身体的特徴があれば、間違いなく純正型だろう。
だが、『なければ純正型ではないとは、誰も明言はしていない』。
それがあるから純正型だとは一言も言ってはいない。

ついさっきでさえアオイは言っていた。
自分だけの世界を作り上げられる者が純正型なのだと。
つまり、それさえ出来れば純正型という事だ。

答えはすぐそこにあったのに……黒鉄が隠していた秘密のピースはあちこちにあったのに。
それに私は今になって気付いたのだ。

帰ったら今までの考察は全て廃棄しよう……ミスリードされただけのそれは恥ずかし過ぎる。
そんな取り留めのない事を考えながら、大きく溜め息を吐く。
今は遠くにいるカーリアンの事を思いながら。カーリアンが『それ』を知った時の絶望を思いながら。

28・アカツキ（後書き）

アカツキ２
アカツキの能力（ノルンズアート『運命の造物』）について。

アカツキは純正型の中でも特別な力を持つ。
それは物質に特殊な性質を付与するモノで、一度アカツキの世界の中で特殊な性質を付与された物質は、それを解かれてもその与えられた性質が消えないという点である。
普通変種の能力とは、変種の系統による差異なく、使いきりか常時発動が大半である。
使いたい時にだけ発動するカーリアン・スズカ型か、ナナシの超回復みたいに認識なく常時発動しているタイプばかりだ。
しかし、アカツキのそれは『物質固有の性質』として付与するモノなので、力を解いた後も変化した物質……『物質α』として残る。

そしてもう一点。その作られた物質を使うには『代償』が必要となるところもアカツキ固有のモノ。
普通の能力は、体力や精神力などを消費して使うモノや、全くそれらを必要としないモノがほとんどなのに対し、アカツキの能力には『明確』な代価が必要となる。
与えた性質と同質に近いモノが必要になるのだ。
それはアカツキが創造する世界、物質に新たな性質を付与する世界の理であり、創造者であるアカツキも例外ではない。

またその物質αを使えるのも、その代償を支払える個人に限り、アカツキの『ラストノート』はアカツキの選択の結末を記す代わりに、アカツキ以外のマスターはおらず、シャクナゲの銃はシャクナゲの

『能力』を代償にしている為、シャクナゲにしか使えない。

ラストノートは次の余白ページを開くとそこに未来が記され、使った分の割合だけ未来を削る。分厚めのノート一冊でアカツキ個人の命として設定されている。

シャクナゲの銃は、絶えず『使用者の世界』を代償にし続けて無限に空圧弾を放つ性質を持つ。

ただし、その銃を手放し、意識を自らが創造した世界に向けた際――『シャクナゲ』への代償に向けた際だけ、『物質α・シャクナゲ』の楔が外れる。

それがアカツキの思惑なのか、はたまたアカツキの能力でも抑えきれなかったからなのかは、アカツキ本人にしか分からない。

『シャクナゲ』だけは、与えられた新たな性質（能力）ではなく、その代償こそが望まれているという点だけは、他の物質αとは異なると言えるだろう。

なお、この能力により作られた物質は4つあり、ラストノート以外はいまだにそれぞれの使用者の元に残されている。

ノルンズアートの銘柄は坂上によるモノ。アカツキ本人はこだわっていない。

29・Ｎｅｏｎ　Ｅｍｐｅｒｏｒ（前書き）

１日遅れで更新です。
来週はちゃんといたします。
今はまだバタバタしてますけど。
タイトルは『新皇』を英名にしてみたんですが、エンペラーとロード、どっちが適切か分かりませんでした。
指摘があれば改善致します。

あとがきにシャクナゲ2か新皇について書こうかと思いましたが、それはまた全てが出てからにする予定です。今週のあとがきはありません。

29・Neon Emperor

「昔、もう五年も前になるか。この国にゃ、二人のバカな野郎がいたんだ」

そんな独白のような言葉から坂上の話は始まった。

坂上はそっと天井を眺めたまま、ソファーにその身を深く預けている。

「一人は関西で、仲間は一人」

何を思っているのか、何を思い出しているのかはその様子からは分からない。

相も変わらず暗い光を放っている瞳は、そのままプレッシャーとなって室内の空気を圧して、あたしの肌をピリピリと突き刺す。

「もう一人は関東。仲間は三人」

その瞳に映る光は、狂気と孤独を感じさせる漆黒で――

あたしは見慣れているアイツを思い出す。

「関西の男は実質戦闘能力なんざ持っちゃいなかったが、代わりに唯一無二の珍しい力を持っていた。特殊な価値観と能力を持つ純正型の中でも、間違いなく一際変わった野郎だった。そいつは、一人の仲間と共に共存を目指して未来に……壊れゆく未来に備えた」

アイツも、坂上と同じような……いつも孤独に苛まれたような瞳をしていて、たった一人遠くを見ていた。
あたしには見えない何かに思いを馳せるように。

「関東の男は、その仲間も含めて、四人が四人共非常に強い能力を持ち……その力を使って壊れゆく未来を抑えようとした」

この話があたしになんの関係があるのか、それは分からない。ただ口を挟める雰囲気ではなく、紡ぐように漏れる独白を聞く。

「関西の野郎はお前も知ってるだろ。お前らのリーダーだった男、結城智哉。アカツキと呼ばれるネオで、バカの関西代表。『ノルンズアート』っていう物質を変化させる……簡単に言やぁ器物を変種に変える能力を持つ男。お前も知ってるラストノートって欠陥預言書もそれで作ったモンだ」

「ノルンズアート……」

「まぁ、限定条件が山ほどある能力だったがな」

スカシ野郎……アカツキ。
いつもいつもあたしを何かとからかって、へこまして、『お前はかぁいいなぁ』とか言いながら頭を気安く撫でまわしてきた男。
もう一年も前に死んだ最初の黒鉄。
その能力は『ラストノート』じゃなく、『ノルンズアート』？
これが嘘か本当かは分からない。確認のしようがない。
だからあたしは黙って続きへと耳を傾けた。

「もう一人は関東のネオ達のグループのトップで……今は『新皇な

んて呼ばれてる四人』の内の一人。関東のバカ代表で――そいつもお前が知ってる野郎だ」

新皇の名前は知っている。

いや、この国に住む人間なら誰でもその名称は知っているだろう。

この国がめちゃくちゃになった大元を作ったヤツで、今は関東のトップたるヴァンプ。

そいつがどんなヤツかは知らない。カクリが色々と調べていたのは知っているけど、あの子でも調べあげる事は出来なかったらしい。

まぁ、すでにある程度は調べあげてはいるけど、それをあたしに隠しているだけかもしれない。

あたしの前でそんな話をすれば、あたしが『暴走』するとか思ってそうだし。

……『カーリアン』になったあたしが、勝手に突っ走るワケなんかないのに。

もし新皇を一言で表すなら、『人を既存種と変種に分けたヤツ』と言える。

それが四人をまとめた呼称だった事は知らなかったけど。

でも、あたしにとってはそれだけだ。

新皇はラスボス……それだけの認識でいいハズだ

ヴァンプの親玉……それだけなハズなのだ。

なのに……それなのに―

嫌な予感がする。嫌な予感が背中を走る。

「そう、今ここにいるお前ならよぉく知ってるヤツだよ」

ニヤッと笑う坂上に、あたしは何も言葉を返せない。言葉が喉で絡まり、声が思考の深いところに沈澱していく。

「……さて、お前はいったい『誰に付いてここにきた』んだろうな？」

サディスティックな笑みと嘲るような言葉が、あたしの思考を掻き乱す。

「あぁ、それからお前は知ってるか？結城が引き込んだ最初の『レジスタンス』は、争乱に荒れる関東から逃げ出してきたクチだって事をよ」

「……ウソだ」

「そいつは比良野……黄泉津比良坂（よもつひらさか）の比良と野原の野で比良野ってんだが――」

「……ウソだ」

「比良乃を一般的な漢字の『平野』に変えて、読みを変えたら『たいらの』になるよな。それを踏まえて考えてみてくれよ」

「……黙れ」

「新皇ってかつて呼ばれてた人物……平将門（たいらのまさかど）と被ってんだよな」

ネチネチと、もって回したように語る坂上の口調に……そこから

見えるモノに、あたしは膝をつく。ガクガクと震えてしまう。

「……ふん、簡単に言やぁ今は『シャクナゲ』って呼ばれている野郎――今ここに向かってきているお前のお仲間がそいつだ。ネオに抗うアイツこそが、ヴァンプ中のヴァンプ。ネオ中のネオ。この国のヴァンプの始祖の一人なんだよ」

――ウソだ！そう叫んだ。

――有り得ない！そう思った。

声を張り上げた。

でも坂上はとりあわず、面白そうにその表情を喜悦に歪め、あたしへと視線を向けてくる。

「新皇ってのはやたら秘密主義な連中らしくてな。俺でも調べんのにはえらく手間をくった。新皇が一人じゃないって事も、調べ始めて初めて知ったくれぇだ。『新皇』として表に出てきていたのは『ヤツ』は一人で、他はその側近って形を取ってるらしくてよ、すっかり騙されてたぜ。特に関東から抜けたあの野郎の事はトップシークレットらしくてな、その名前一つを知るだけでも、どれだけウチの密偵が潰された事か」

コイツの言葉は聞きたくない。コイツの言葉はそのものが毒だ。あたしのアイデンティティを揺るがす。黒鉄を否定する。

「俺とアカツキの野郎はダチで、シャクナゲの野郎は俺の後釜――それくらいの認識しかなかったのに、その後釜がここまで大物たぁまさか思わなかったってのもあるがな」

――だから一年前は油断した。あの野郎に不覚を取った。

そう笑う坂上の瞳は、深く深く沈んでいき……その色があたしを容赦なく追い詰めていく。

嘘じゃない、本当の事だと語っている。

その瞳に写る狂喜と歪んだ思いが、ある種真っ直ぐなモノで思い知らされる

「アカツキはすげぇ力を持っていた。俺と組んでりゃもっと確実に結果を出せたハズだ。手段さえ選ばなければ理想も叶っただろうな。それをしなかったのは、野郎がこっちに逃げてきやがったからだ。俺じゃなくても、野郎がいりゃ守る力にゃなる……そう踏んだんだろう」

アカツキとシャクナゲ。

その二人は友人で相棒……だったんじゃないの？

その関係には打算が働いていたの？

「アカツキはバカだった。本当のバカ野郎だった。共存？共栄？そんなもん、上に立ってから目指しゃいいのに、手段にまでこだわった。……ンな余裕なんざアイツにゃなかったクセによ」

そう言った坂上は、視線を天井に向けてそう吐き捨てる。

様々な感情が混じったまま。

「でもシャクナゲの野郎もそれ以上のバカ野郎だ。力に頼って上に立つ決意をしやがったクセに……差別され始めた変種を守ろうとしたクセに、途中で勝手に周りに絶望して逃げ出しやがった。散々国を壊しやがったくせに、最後は他の新皇のヤツらを抑える事もせず、一人だけいきなり我に返って、野郎のオヤジに連れられて逃げ出し

たんだよ。あのバカは」

唾棄する言葉は憎悪に歪み、その身からはより強いプレッシャーが漏れ出る。

それはアカツキの事を語る言葉よりも明確な感情で、強いモノで――あたしを打ちのめす。

「アカツキが違う手段を選んでりゃ今とは違う国になっていた。アイツが手段を選ばず力を求めてりゃ、関東軍にもそう負けやしなかった。アイツの物質を変種に変える能力があれば、最高の軍隊が作れただろうからな」

アカツキの能力はラストノート。いわく制限付きの預言書。

そう思っていたけど、今になって直接そうだと聞いたわけじゃない事に思いあたる。周りがそう言っていたからそう思っただけで、アカツキは――そしてシャクナゲは、そんな事を一言も言っていなかった。

もし坂上の言っている事が本当なら、あたしはアイツを見くびっていた。預言だけにかまけて、ずっと後ろに隠れているヤツだと思っていたのだから。

「だけどな、シャクナゲの野郎も負けず劣らずのバカ野郎だ。アイツ自身の力はともかく、その心が弱かった。弱ぇクセに、理想への最短距離を取った。効率のいい方法を自分で選んで――勝手にその『手段』や経過に潰されやがった」

――役回りや選んだ方法が逆だったら……なんて『たられば』を言うつもりはねぇけどな。

そう続けた坂上は、チロっと舌で唇を舐め、その腕をあたしに向

けてかざす。

「どうだよ？お前らが信じた仲間が、最大の敵だった気分は？最高にイカしてるだろ？お前らは所詮騙されてたんだよ、結城にゃ隠され、シャクナゲにゃ騙されてたんだ」

「……違う！だってあの二人は――」

「違わねぇよ。お前はコードフェンサー……だったか？それの役回りを知らないのか？」

「……人間である事を符号に誓った変種、守る為だけに戦う事を決めた変種――」

「はん、ンなお題目しか知らねぇのか？おめでてぇ女だな、あぁ？なら教えてやるよ」

あたしの言葉を鼻で嗤う。蔑むように嗤う。哀れむように、まるで自らと重ねて見ているかのように。

――聞くな、聞くな、聞くな。

そうあたしの内側の私が言っている。坂上の言葉は毒そのものだと警鐘を鳴らしている。それでも坂上の言葉は止まらない。

耳を塞ぐマネも出来ない。

「コードフェンサーってのはな、コードって称号を強力な変種達に与えて、そいつらで囲む事で……同じような変種達で囲む事で、『新皇』が狂うのを抑える為に作られたんだよ。いわばお前らは、コードって称号で繋がれた檻でしかねぇんだ！それだけじゃねぇ！てめぇらは――」

――いざとなったら新皇を殺す為にいるんだよ！

＊＊＊＊

「かふっ……けふっ……」

目の前で血を吐く男は、喉を通る自らの血で咳こみ、膝をついている地面をより深い赤で彩っていた。

もう立つな。そう願う。

もう寝ててくれ。そう叫びたくなる。

それでもなおその瞳には強い光がやどり――そんな男に向けて無慈悲に右手をかざす。

言っても無駄な事は分かっていたし、どの道このままだったらそう長く保たないだろう。

幾度も幾度もその身を打たれ、弾き飛ばされているのだ。ここまで全身を打ちのめされたなら、ナナシのような超速再生とすら言える回復力でも持っていない限り、無事には済まない。

それならば、最後まで近衛として死なせてやろう……そう思ったのだ。

それが慈悲なのか、残酷なだけの行為なのかは分からない。

ただそんな考えのままに、右手を這い回る鎖を飛ばす。

無様に吹き飛ばされるその姿に目を逸らしたくなっても、ただ繰り返し、ひたすらに繰り返して鎖を飛ばす。

さながら久々の獲物に喰らいつく蛇のごときしなやかさで……そして猛禽のような猛烈な勢いで飛ぶ鎖は、それこそボロボロの近衛と同じくらいの勢いで、俺の心に大きく深い穴を穿っていく。

「カハッ……ヒュッ……」

鎖に打ち据えられる度に漏れ出る命の赤と、それが混じった近衛の荒い息吹きは、そのもの刃のごとき勢いで、蹂躙する側の俺を切り刻む。

この男は、表にいた女の近衛よりもずっと強く、ずっとしたたかで――

その分だけ、お互いの苦痛が長引いている。

幾度氷の刃を吹き散らしても、何度氷の盾を無効化しても、どれだけ地を舐めさせても止まらない。

今も吹き飛ばされた勢いを利用して距離を取り、後続の追撃を上手くかわしてみせた。もう動くのも楽じゃないハズなのに。

天井を貫き、壁を引き裂き、地をえぐって廊下の輪郭がなくなった今でも、この男の意志だけは燃え上がっていて、衰えを一向に見せていない。

「……ほんとバケモノだな、反則過ぎる」

なおかつ、いまだに悪態を吐く余裕すらあるのだ。

そして何度目になるか分からない氷の刃を宙へと舞わし、こちらへと飛ばしてくる。

「……あと三十分ほど、この死にぞこないと遊んでてくれよ」

「もう、立つな……」

「つれないな、もう少しぐらいいいだろ？代価には俺の首をくれてやるからさ」

思わず漏れ出た俺の本音にも、返される言葉は淡々としたモノで――力みも焦りもなく、その無色の刃を飛ばしてくる。

それが通じるかどうかは、もう分かっているだろう。もうすでに何度も繰り返してきたその攻撃は、『今まで一度たりとも俺に傷一つ与えていない』のだから。

それでも懲りずに繰り返すのは、近衛の矜持ゆえか……はたまた個人の意地か。

そしてやはり繰り返す。今回も規定通りに繰り返す。

なんの変化も、小さな揺らぎもなく、無色の刃は『元の形である水に戻り』、自重に従って地面へと落ちる。

別にこれは不思議な現象などではない。水が自重により地面に落ちるのも、空中で形を留めていられないのも一般的な常識だ。

変種の能力による支配がなくなれば、水は『重力』という理に従うのは当たり前の事。

それを成したのが、俺の『世界』の尖兵たる蛇達であるのは間違いない。近衛の能力を、ただ触れただけで消し去り、いまだ断片しか姿を見せていないままで他者を圧倒する。

無意識で俺を守る。

世界の保持の為だけに守る。

俺個人の意志なんか関係なく、世界の為だけにその中心を守る。
それは世界の自浄作用にも似ていて――

「……やっぱ無理か」

――やっぱりなんの歪みもなく絶望をくれる。
敵対者にも。そして俺自身にも。

カラカラ……
狂った歯車の廻る音が聞こえる。
いつもよりずっとはっきりと。一年前と同じか、やや小さいぐらいの音で。
それは、抑えていてくれた『アカツキ』の力が離れていく足音のようだ。

「物質操作能力か、はたまた物質変換能力か……その鎖、どんな力があるんだろうな？」

ガラガラ……
見慣れていた世界を間近に感じる。
そこは赤い月が浮かぶ見渡すばかりの灰色の雪原。
空に浮かぶ半透明な黒い歯車と、世界に蠢く鈍色の鎖が世界を動かす音は……吐き気を催すほどに聞き慣れたモノ。

「こんな言い方は趣味じゃないか……冥土の土産に教えちゃくれないか？……どうせもう長くない」

ゴロゴロ……
歯車は記憶。全ての力を記憶する媒体。
鎖は発露。全ての力を発露する為の寄り代。

月は制御。全ての力の変換を促す頭脳。
俺は心臓。ただ一人きりの灰原の王で、空（から）の王国の中心部。そしてその世界では、ただ一つだけ意味を持たずにある物。

「だんまりか。どうせあんたの力の源……は俺には見えないけどな」

スズカの世界が羨ましかった。綺麗な銀の鈴が、彼女の周りをクルクルと廻るだけの世界はとても綺麗だった。
その音（ね）が他者を弾く力を持っていなければ、鈴の音も世界も我を忘れるには十分な美しさだった。彼女自身は嫌っていても、俺にはただ美しく見えた。

アカツキの世界は神々しかった。日輪が浮かび上がり、アイツと対象の物質を暖かく包む世界は、暖かさを感じた。
とても小さな世界だったけど、それだけに強い輝きに満ちていた。

俺の世界はただ広く、ただ何もない。役割が与えられた月と歯車、そして無数の鎖が這うだけの世界。

終末を連想する世界。
無彩色が覆う異世界。
それを連想させる理。

そっと腕に力を籠める。今発露出来る五本の鎖全てを、目の前の近衛へと向ける為に。
頭蓋、鼻柱、喉、心臓部、そして背後へと回して脊椎。
それらへと意識を向け――

「……もし、この先で……桃色の髪を持つ近衛と会ったなら……見

逃してやってはくれないだろうか？手痛く払ってくれていい。腕一本くらい折ってもいい。ボロボロにしてもいいから……命だけでも助けてやっちゃくれないか。……バカなヤツだけど、俺の妹なんだ」

その言葉に、思わず足が止まる。

すでに立っているのも限界だろう男の弱々しい言葉に、今更甘さが浮上する。

『妹』――その単語に、ヒョコヒョコ首を傾げながら刺繍をしている少女が思い浮かぶ。

ここまでボロボロにしておいて、本当に今更。

「……一応、まだ先に行かすつもりはないがね」

そんな一瞬の思考の隙間を付くように、一気に駆け寄ってくる近衛に――俺はとっさに攻撃をくわえようとする鎖を抑えた。

それに意味がない事は分かっていた。鎖は自動的に俺を守る。それでも蛇達は一瞬だけ動きを止め――男にはその一瞬で十分だった。

ピンッ――

弾かれた金属片が宙を舞い、乾いた音を響かせる。『それ』を抱えたまま走り寄る近衛の口元が微かに笑った。

「能力が効かなくても……近代兵器は……純粋な爆発はどうだ？ネオらしくない……情けない戦い方だけどな！」

そしてそのまま俺へと駆け寄り、その右手に持っていた楕円形の物体――手榴弾をごと体当たりをかけてくる。

僅かに遅れて牙を剥く蛇達はもう間に合わない。近衛に食らいつく頃にはすでに爆発の範囲内だ。

恐らくこの男は、俺の力を『他者の能力の無効化』とでも考えたのだろう。自分の能力が無効化されている様を、何度も見せられたのだからそう思うのも無理はない。

恐らく俺の事を坂上から聞いき、純正型の特性も知り、実際に相対した上で、この鎖が俺の能力の寄り代である事や、それが司るモノにも見当付けたのだろう。

だからその力が働かない能力以外の力に頼った、といったところか。

遠距離から銃撃であれば鎖が弾丸を弾くだろうが、近距離からの爆発となれば、鎖だけで全てを受けきる事は出来ない。

所詮鎖の群れは線だ。点は線で補えないても、線で面は補えない。

今まで何度も能力を使った攻撃をしてきたのも、距離を問わず攻撃してきたのも、それらに対するこちらの対応を見る為の布石だったと言える。

そして一番有効な攻撃方法を限定した。

逃がさないように自らが抑えて、近距離からの爆発で俺を仕留める……そう決めたのだろう。

問題があるとすれば、単に『自らの命』をベットしなくてはならないという事だけ。

そしてそれを躊躇なく実行する辺り、やはり近衛の連中は厄介だ。

抱えていた手榴弾を俺の足元へと投げつけ、その上で迷いなく俺を逃すまいと体をぶつけてくる。

それはまさに自爆、万歳特攻に近い。まさに決死の特攻だ。

――その推測の正否、その行動の結果はどうであれ、その覚悟は恐るべきモノだろう。

「な……にっ？」

爆発が起こるべき地点を驚愕の眼差しで見やるのが分かる。そこで爆発は起っていない。

無軌道に周囲に破裂するはずの金属片は、ただバラけて地面に落ち、鎖の一条がかすっただけの手榴弾は、爆発がないまま『爆発した後』に近い形で解体されている。

思わず足を止め、その様子を見やる近衛の体に、黒い蛇達は容赦なく食らいつき、その身をいくつも穿っていく。

その間も炎や炸裂は起こらない。人を弾き飛ばし、引き裂く『力』は生まれない。

「……外れだ」

この近衛の判断は外れだった。鎖に体中を打たれ、弾き飛ばされた男には、言うまでもなく分かっていただろう。

その上であえて言葉にしてみせる。

「……かふっ、けふっ！」

「もう分かったろ。変種の能力も、『爆発力』も俺には届かないって事が」

「……だな。……最後の最後に……しまらない」

ヒューヒューと倒れた男の喉から漏れる音が聞こえる。

気管に血がつまったか、あるいは潰れたか。

それでもその瞳は爛々としていて、いまだこちらを真っ直ぐに見据えいる。

それから目をそらしながら俺は問いかける。

「カーリアン……パイロキネシストはこの先にいるか？」

小さくコクンと頷くだけで返し、それだけでも辛そうに咳き込む。

「坂上は彼女に危害を加えるつもりで招いたのか？」

「違……う……」

「……そうか」

それだけで坂上が何を考えているかが分かる。この男の言葉を信じるなら……という条件がつくが、俺にはその言葉を疑うつもりは全くなかった。

坂上なら——俺の事が憎くてたまらないアイツなら、それはやりそうな事だと思ったから。

やっぱり——

やっぱり世界は優しくない。

もうこれで、俺には確実に帰る場所がなくなった。

ここに来る前に、スズカには『全て』を話すように頼んでいたけど、敵であるハズの坂上から聞かされるのとではワケが違うだろう。

もう俺は、今後彼女に信用される事はない。信用していなかった……しきれていなかった臆病者には、それも仕方がない結末かもしれないけど。

恐らく坂上は、喜々として『全部』を語ってみせただろう。俺が智哉と共にいた事が気に入らないアイツは、居場所を奪う事で意趣返しでもするつもりなのか。はたまた居場所をなくす事で、俺の戦意の低下を狙ったのかは分からない。単に嗜虐心によるモノの可能

性もある。
全てを語って、俺を否定してみせるだろう。
それが効果的な手段である事は否めない。
目の前が真っ暗になった気すらする。一番最初に敵対する黒鉄が——俺を拒絶する黒鉄が彼女だと思えば、足元から冷たい恐怖が這い上がってくる。

ヴァンプである事を否定した彼女。
ヴァンプを否定した彼女。
それは自分には出来なかった事だ。
自分は狂っていく日常から逃げ出した。
魅せられた人々の狂気から目を背けた。
全てを能力で解決しようとした。自分ならそれが出来ると思っていた。過信していた。
その挙げ句に、俺を恨んでいたヤツに家族が殺された。
世界を——国を壊した変種の一人として、暗い後悔と絶望に身を堕とした。

自分が出来なかった事をする姿だけを、たまたま彼女に見ただけだと思う。
いずれは彼女も狂っていたかもしれない。
力の誘惑の強さは……他者をも惹きつける魅力は、誰よりも知っているつもりだから。

それでも……彼女に否定されるのは、やはり痛い。胸が痛い。

しかし、彼女には聞く権利がある。最後に俺を罰する資格がある。
今までその機会はあったのに、俺から話せなかったのは自分の怯懦のせいだ。いまさら慌てて全てを自分から話す、なんて真似もし

たくない。

そこまで考えると、一つだけ大きく息をついた。そして倒れ伏したままの近衛の側に座る。

「あと三十分少々……だったな」

「……あぁ……それだけでいい……」

「付き合うよ」

そう言った言葉に、男は目を見張った。そして目を細めて小さく笑う。

面倒そうに、でも満足げに。

「……ありがたいね。でも……出来れば最初っから……そう言って欲しかった」

「坂上の目的も分かったからだよ。アイツも彼女には手を出さないだろ。どうせなら俺を苦しめたいハズだから。それなら彼女が生きている方が都合がいいだろうしね」

「……よっぽど……嫌われてんだな、……お互い様か」

――お互い様だよ。そう返すと、近衛は胸元からタバコを取り出して火を付けると、咳き込みながら煙を吐き出した。

「右近……妹の沙雪が……多分突っかかってくるけど……アイツは相手にしなくていい……これを……」

そう言って差し出された先には、さっき火を付けたジッポが握られている。

「それを渡せば……多分引いてくれる。……アイツは俺に……付き合ってくれていただけ……だから」

「妹か。羨ましいな」

「……可愛くない……ヤツだよ」

「俺にも妹みたいなヤツはいるよ。凄くかわいいんだ。目に入れても痛くない」

「……そりゃ見てみたいような……怖いような」

「下手すれば、坂上や俺より強いよ。怒ったら凄く怖いんだ。でも凄く優しいヤツだよ」

「……はん、惚気んな」

その瞳にはもう力はない。

せめて会話ででも引き留めている実感が欲しいのか、その口からは言葉が止まらないが、間違いなくもう終わりは近いだろう。

出会い方や場所が違ったら……そうは思ったけど、それは口にはしない。

俺は例えどうなっても……糾弾され、非難され、否定されても黒鉄で――

コイツは最後の最後まで近衛だ。

「……あの人もやっぱり間違ってたのかなぁ……正解ってなんなんだろうな」

「分からないよ。俺もずっと前に間違ったクチだ。アカツキでも正解までは行けなかった」

「……沙雪と普通に暮らしてたら……良かったんだろうか。全部見ないふりして……力なんかに頼らなきゃ……」

「そうだな。かもしれない」

それは俺も考えた事だった。スズカと一緒に、どこかに隠生すれば、どれだけ気楽になれただろう。

それを正反対の立場に立つ男も考えていたという事実が、ほんの少しだけおかしくて……悲しい。

「……あんたでも……無理だったなら……坂上さんも無理かな」

「アイツはもう間違ってる。力で支配しても、過去は戻ってこない。街だけを煌びやかにしてもそんなモノはまやかしだ」

「アンタとの確執が消えれば……また前を向いて……くれるかと思ったけど……もうダメか……坂上さん……俺達は……どうすれば良かったんですかね」

その言葉には繋がりが見えない。俺に語っているのか、坂上に語っているのか……はたまた自分に問いかけているのかも分からない。

ただ、その言葉を最後に、となりには天井を虚ろに見上げたまま、事切れた近衛がいた。

違う形で、誰かに託す形で未来を見ていた男がいた。

俺が殺したヴァンプがいた。
今までずっとぶつかりあって、さっきまで殺し合って、ようやく話し合えて――最後まで近衛でいようとしたネオ……そんな彼の本名を知らない事に、今更になって気付く。

「――俺はまやかしの理想なんか欲しくない。アンタらもそんなモノ、欲しかったワケじゃないだろ？」

光都・カエサル。
過去を移すさんざめく光が溢れる街。
そこに理想を見ても――過去を見ても、何も変わらない。

「神はいない。そんなモノはもう過去に消えた」

過去は美しく、きっと誰でも懐かしいモノ。

「悪魔もいない。そんなモノは理想の燃えカスだ」

この街の理想の端で虐げられるモノがいる。力がなくて、それを掴めないモノがいる。

「いるのは人とネオだけ。理想に捨てられた者と、理想に溺れる者だけだ」

30・Long way to say good－bye――Another

３００００ｐｖ＋ユニーク５０００いきました。
次回で過去編は全部出ます。といっても、将軍とシャクナゲの邂逅についての話に限りますが。
その後は現在編決着に向けてと、黒鉄の今後――つまり2章に向けてです。

にしてもバレンタイン……毎回対応とお返しに悩む。チョコ食えない人にはある意味出費しかしないイベントじゃないでしょうか？
返さなきゃなんか村八分くらいそうな気がするのも……ヘタレだからですかね。

30・Long way to say good－bye――Another

――30分。

たった30分が異常に長かった。

ひたすら沈黙を守ったまま、ボロボロになった廊下に腰を下ろして、ただ時を待つ。壊れた壁の向こうには気が早い月がその姿を覗かせている。

あの時と同じ下弦の月。

赤く細い牙のような月。

ずっと敵だった、しかも殺した相手との約束を守る必要なんてあったのか……そんな事を自問してしまうほどにその時間は長かった。

眩暈を起こしそうなほどに胸が痛かった。

これが最後の約束でなければ――そしてこの相手とのモノでなければ、守れていなかったかもしれない。

妹がいて、誰かに今も夢を重ねていて、そしてそれを諦めかけていた男と自分を重ねてみなければ、この30分は耐えられなかっただろう。

俺は智哉に――

こいつは坂上に――

進む道と立場は違えど、本当によく似ていた。それが俺を30分間ここに縛っていたのは間違いない。

「約束の時間だ、もう行くよ」

当然返事はない。目を閉じさせたその顔は安らかなモノで、勝者である俺の方が羨ましくすらある。

「坂上は俺が殺すけど、その後でも俺は黒鉄のままで足掻く事を誓う。あんたを殺したこの手をこれからももっと血にまみれさせながら、かつて間違った償いをし続ける」

――そして、いつかきっと……

そう続けただけで、最後まで言葉にはしないまま踵を返した。

その先はまだ誓わない。誓えない。

それは過去の清算を済ませてからだ。一年前に済ませるべきだった事を終えてからだ。

そうでなければ、言葉にする価値すら俺にはない。

だから言葉はそこで終わり。後はただ歩き始める。

一年前にも通った道を。

坂上がいるであろう一年前と同じ場所を目指して。

「今度こそ、今度こそだ。カーリアンが邪魔をしても……俺を糾弾しても――」

――今日こそは坂上を。

脳裏には一年前のあの時の事が浮かぶ。あの時、傷を言い訳に、最後の最後で逃げ出した一年前の邂逅が。

灰色の髪と同色の瞳を持つ関西の始祖。
力に酔い、力に酔わせ、魅了して、魅了されて――狂ってしまった男の姿が。
そして多分、今のような現状に至る原点たる闘いが。
関東を抜けて、その立場を変えても、始祖と始祖、力に酔った『始まりの愚者』同士がぶつかり合う運命の螺旋。
それを智哉が予見していたのか、いなかったのかは分からない。
ただ、こんな運命じみた邂逅を見れば、物の在り方――『物に本来宿るべき運命を変える能力』を持つアイツは、苦々しく思う事だろう。それだけは確信を持って言える。
そんな能力を持つからこそ、アイツは『運命』って言葉が嫌うんだから。
でも、そんなアイツが死んだあの日から、俺の新たな運命が動き始めたんだとすれば、それはなんて皮肉な話だろうか？
新皇を捨て、黒鉄にすがっていた俺が、『運命』を嫌っていたアイツの死から、新たな運命の奔流にさらされたのだから、皮肉だとしか言えない。

恐らく、カーリアンは俺へと憎悪を向けてくる。『関西』の将軍などよりも、俺の方を敵と見るだろう。あるいは両方をその憎悪に贄（にえ）とするハズだ。彼女の心を包む紅は、いつもよりずっと激しく燃え盛るに違いない。

それでも――それでもこの邂逅の邪魔だけは出来ない。
俺達を繋ぐ運命は遥か彼方なのだ。『運命を嫌う運命の造り手』は、もう手の届かない場所にいる。誰にも止められはしない。
ただ彼女はそれの見届け役に本人不同意のまま選ばれただけなのだから。

「この世に神はいない。でも運命はあるのかもしれない」

そう呟きながら苦笑を漏らす。
俺にとっての『運命』とは、間違いなく結城智哉――アカツキと呼ばれたあの男こそがその具現だった事を自覚しているからだ。
そう、五年前の出会い。そして一年前のあの時。
ひょっとしたらアイツに言われて、あちこちから仲間を集めていた時期でさえもそうなのかもしれない。それらはきっと今へと至る道標だったのだろう。
一年前のあの闘いも、今になっての決着も、それに至るまでの『黒鉄達の思惑』も、全てがプロットの立ったストーリーだった気さえするのだ。

俺は歩きながら思い出す。一年前の出来事を。あの時の迷いと後悔を。
右手を這い回る感触に思い出す。あの時、久々に感じた空虚な内面世界を。
初めて坂上という名前だけの始祖と出会ったあの時を――。

＊＊＊＊

「よぉ。またえらく派手にやってくれたなぁ。えぇ、おい？」

豪快に笑う男、ベルセリス要塞の最深部にいた『将軍』は、ただ

愉快そうに笑って俺を出迎えた。
タンクトップの上から、ハーフコートを羽織ったそのラフな姿は、『将軍』という自称には似つかわしくなく、そのボーズ頭も違和感しか覚えない。
その気安げな笑いも重厚感が全くなくて、少しだけ意外だった。だからだろうか、その口元の笑みですら卑屈な感じを受ける。
しかし、その愉快そうな笑いは、この場においては間違いなく異質だった。

警護に出ていた連中を殺され、カエサル在中のヴァンプ達を殺されて、近衛の一人たる『田村』まで殺されても、全く気にしない素振りなのだから、それは異質としかいいようがない。
そして、その異質さがあるからこそ、その笑いはひどく勘にさわった。
その愉快そうな笑いは、俺に吐きそうなほどの不快感をもたらしてくれるのだ。
それは、血に酔った恍惚感にも似た不快感で——スッと自然にスイッチが入った。
この男を殺すという、覚悟を決めるスイッチが。

「……好きなだけ笑ってろ。どうせ最後の幕引きは、お前の死に様で決まりなんだ。それまで精々笑い狂えばいい」

「はん、大した自信じゃねぇか。野垂れ死んじまった結城の下っ端風情が。ったく、アイツもよ、俺に着いてくりゃ——」

「……黙れよ、お前が否定するな。お前がアイツの選んだ道を、その最期を笑うな」

嗤う声にも、嘲る言葉にも様々な感情の動きが見え、それがさら

に苛立ちを増幅させる。
その勘違いが苛立たせる。
『アカツキ』の能力は唯一無二のモノであり、それは『将軍』や俺の上を行く価値があるモノだ。
それが分かっていないかのようなセリフが……自分主導じみた言葉が滑稽すぎる。

「それに結城智哉の下っ端だって？これからその下っ端に殺されるんだよ、お前は」

「殺す？俺を？なんの冗談だ、そりゃ？一人でこんなところまで来るなんて、無駄死にした結城に殉死でもするつもりにしか見えねぇよ、律儀な下っ端野郎だな」

しかし、そんな言葉にも興が乗ったように将軍は笑い、赤い舌で唇を潤した。
精悍な体つきと、豪放そうな顔立ちから受ける印象とは違い、軽い挑発に乗ってくる素振りはない。
それどころか、ヤツは軽口で返す余裕すら見せていた。
しかもその軽口は、俺の胸を抉る的確な言葉で、逆に俺が激昂しそうになる。

だがそれを表に出す真似はかろうじて抑えた。
ここで激情に任せて攻撃すれば、ヤツの言い分……親友が『野垂れ死にをした』と認めるようなモノだ。
そんな真似だけは絶対にしたくない。それは許されない。

「……ふん、冷めた目をしてやがる。あの温くて甘い結城の下に、テメェみてぇなヤツがいるたぁ思わなかったぜ？えぇ！？」

「情報不足だな。神杜に何度も遊びにきたアンタの手下を、あれだけ歓迎してやったのに」

「ほぉ……」

スゥーッと細まる眼光。歪められる口元。その全てが獰猛な獣のそれで――

それに酷薄な笑みで返しながら言葉を続けた。

「あぁ、そうだ。ここに来るまでにいた案内役は、どいつもこいつも口先だけで礼儀知らずだったよ。ドブ臭い口でキィキィと鳴いてさ、どうしようもないネズミばかりだった。

……でも、もう耳障りな声を上げる事もないだろうさ」

「……なるほどな。テメェがあのシャクナゲか。ふん、黒鉄最強とか呼ばれている……どうりで血生臭いと思ったぜ。テメェにゃ前から興味があったんだ。俺の後釜がどれほどのモンかな」

ゆっくりと間を詰めていく俺とサカガミ。その間はすでに１０メートルを切り、それでも俺もヤツも向かい合ったまま歩み続ける。

ヤツは無手。それでもその指先は黒の鱗に包まれており、それが最も強力な力を持つ変種――純正型の持つモノだと思えば、警戒心は否応なく増していく。

どんな力を持つのか、どんな理を持つ世界を作るのかは分からない。

智哉も教えてはくれなかった。何か考えがあったのか、いつもの秘密主義かはわからない。

さすがに知らないという事はなかっただろうが、アイツは坂上に関しては口が重かったところがある。

だがこのヴァンプは例え無手であれ、恐るべき能力を使いうるのだけは間違いない。

俺の手には親友が残してくれた二丁拳銃。それが遠距離からの攻撃に特化した武器だと分かっていながら、進める歩みを止めない。

「ここでテメェの力、見せてくれるんだろ？」

「……智哉が向こうで待ってる。アンタはここで消えるんだ。向こうへの片道切符だけはくれてやるよ」

そして俺とヤツ――人である事を願った俺と、人である事を捨てた『将軍』は、刹那の間を持ってぶつかり合ったのだった。

――神はいない。

こんな事を言えば、聖職者や坊さんは目を剥いて怒り狂うかもしれない。

いや、坊さんは『仏』だろうか？

どちらにしろ俺は信じない。

今の世の中を見渡せば、聖職者や坊さんもそれに強く反論は出来

はしないだろう。
この地獄（現実）が神の試練だと言うなら……あるいは仏が架した苦行だと言うなら、そんな神や仏はいない方がいい。
即刻自分も地獄（げんじつ）に落ちてみて、人間の痛みを知るべきだ。

それでもこんな現実を野放しにするようなら、そんな神（存在）を信じるのはバカをみるだけだろう。

だから俺は神はいないと思う。
いや、『俺は神（かれら）を認めない』――。

俺達は、そんな神のいない世界（ばしょ）で、自分達の力だけを頼りに戦うしかないのだ。
自分達だけで選択をし、道を進み、世界を見渡すしか出来ない。
こんなクソったれでシミったれた世界の中に、たった一つでも拠り所があるなら……守りたいと願うモノがあるなら、血で手を汚すほかない。

それが神の御名を汚す事だとしたら、それこそ願ったりだ。

だから俺は戦うのだ。自分が罪にまみれた世界、自分が咎で汚した世界で、その身を赤く染めながら……。
例えこの身が潰えても、泣く人がいない事だけを願って。

そして出来る事なら――

その先にある道がより辛い地獄である事だけを願って。

だからもし、神の代わりにや邪神や魔王がいるなら――

――どうか……『どうか俺を許さないでほしい』。

俺を呪い続けてほしい。死んだ後でさえも、狂えるほどの苦痛と深い後悔を与え続けて欲しい。

俺にこの世の全て咎と罪を背負わせて欲しい。

きっとそれは、元々は俺のモノだったハズだから――――。

「カッ……」

接近戦を試みたのに、不可視の空間の揺らぎに阻まれて無様に吹っ飛ばされる。なんとか吐き出しそうになった呻きを飲み込みながらも、俺は右の銃を構えた。

体は吹き飛ばされて宙を舞ったままだ。それでも的確に標的をポイントする。

辺りはもうもうと立ち込めたコンクリの破片が、細かい粉塵となり視界を狭め、闘いの熱気は肌を焼く。

「甘ぇよっ！俺にゃそれじゃ届かねぇってンだっ！！」

銃声は軽く三連。舞い散る粉塵を切り裂き、猛る始祖――ロードヴァンプに迫る。しかしそれは、その手をかざしただけで当たり前のごとく防がれた。

その隙に態勢を立て直し、足から地面に着地すると、吹き飛ばされた勢いを殺さないまま地面を駆ける。

ズッ――――

そんな堅いモノが裂かれるような鈍い音が後方から聞こえ、続いて何かが弾けたような振動が響く。その音源をチラッと見やれば、鋭利な刃で床を切り裂かれたような跡と、その先で見事なまでに破砕された部屋の外壁。

「上手く避けンじゃねぇか！ムカつくぜ、雑魚野郎！」

それは恐らく『真空』という不可視の刃によるモノだろう。今までの経験からしても、音や風の能力にしてはその威力は強過ぎるし、指向性が高過ぎる。

つまり切り裂いた跡が鋭利過ぎるのだ。

そしてその後ろに広がる破砕跡。

それは中心になびくように爆砕しているのだ。

地面を……コンクリと鉄筋を『真空の刃』が易々と分断し、その直後に真空を留めた力が消える事により、空圧の収縮、物質の破砕が起こったと考えればこの跡も納得がいく。

この真空というのは、何も存在しない空間の事で、単なる無空気状態の事ではない。

『何物も存在しない空間』――入り込めない空間をヤツ、将軍はその黒い鱗のある腕を振るうだけで作り、不可視の剣や楯としているのだ。

そこから見えるヤツの世界の法則、それは恐らく『削る』という理。

自分の世界を削り、削った空間を現実――普通に見える世界の空間へと干渉させる理を持つ世界だろう。

そして短い戦闘の最中でももう一つ分かった事がある。

ヤツが削れるのは恐らく『空間』、もしくは空気のみだという事。

もし他の物質をも削れるのならば、先程見事に吹っ飛ばされた際――接近戦を試み、最接近した際に、俺自身へとその指を振るったハズだ。

それをヤツはわざわざ距離を取ってまで、何もない空間を削って、それを飛ばす事で攻撃をしてきた。

恐らく、変種としては空間変質系の能力か、ひょっとしたら空間支配の能力になるのだろう。つまり『空間』にしかヤツの世界は力を及ぼせない。

それだけを考えてみれば、確かに大した威力ではあるけど、脅威にはなりえないような印象も受けるだろう。

この程度の能力ならば、純正型に限らず、現実世界の力の法則に縛られた『他の変種達』にも持ち得ない力というワケじゃない。

黒鉄の中でも、風塵マルスならばこれくらいの効果を持つ不可視の刃くらいは飛ばせるだろうし、水鏡のスイレンならば不可視の領域を……盾を築く事はできる。

それなのにヤツが特殊だと言えるのは、腕を振るという行為だけで思い通りに力を振るえるという気安さだ。そしてそれを自在に破砕させられる自在性だ。

それが自分なりの法則に則った『内面世界』を作るという事であり、純正型の強みだ。

将軍の世界において、ヤツが腕を振れば空間を削れるというのは、呼吸をすれば二酸化炭素が吐き出されるという当たり前の現象と同義程度の常識なのだ。労力も集中も必要ない。それが世界法則とも言えるのだから。

『空間を自在の形に削る世界法則』を持つヤツにとっては、削り作った真空空間は、剣であり盾でもあるが、自らの手足の延長に近いとさえ言える。

単に自らの世界からの干渉さえ解けば、その不自然は現実世界の修正を受け弾けるのだから、空間の破砕も真空の刃も自在に操れる。

そんな能力を持つ相手にとって、空圧の弾丸など豆鉄砲とそう変わらない。

いくらこの銃が、ヤツの世界にも干渉出来る『同じ純正型たるアカツキ』の世界の産物だとしても、そこから発射される空圧の弾丸はあくまでも空気の塊に過ぎない。直接銃身を叩きつけたならば、飛ばした真空の刃くらいは壊せるかもしれないが、弾丸ではたかだか僅かな空気――不純物が入った程度でしかなく、なんの痛痒も感じないだろう。

真に純正型の世界に対抗するには、やはり同じ純正型の世界が一番なのだ。

内面世界には内面世界を。

理には理を。

俺達の相性は、単純に最悪というよりも、手札や前提条件からして違うといった方がいい。

しかし、それは勝てないという事と同義ではない。そんな前提条件が違う条件での戦いは、関東の争乱以来慣れたモノだ。

関西では黒鉄として――そして関東では逆の立場で反則的な純正型として。

絶対的な法則を持つ異世界の構築者たる純正型でも、ただの拳に痛い思いをする事がある。力を持たない人間に殴り飛ばされる事が

ある。
それは俺自身が身を持って知っている事だ。
そしてそんな過去の痛みは、俺の誇りでもある。
自分を留めてくれた拳の痛みこそが、俺を人のままでいさせてくれたのだから。

その事実が俺を駆り立てる。地を蹴り、壁を蹴らせる。
そんな俺の痕を『真空』は的確にとらえ、次々と辺りを破砕させていく。

次々に当たりに傷跡を刻む将軍の牙。そして破砕される力の余波。
解放された真空は自身の無を補う為、そして不自然な空間を取り繕う為に、辺りの空間にあるものを強引にこそぎ取る。
それの範囲が読めない。敢えて『真空の規模』をまちまちにしているのだとしたら、こんな室内じゃ逃げ道すらないかもしれない。
ならば取れる手段はやはり一つしかない。近距離まで詰め、零距離から弾痕を刻む事。腕を振るう間もなく、距離を取らせないまま俺の手がかかる場所まで進む事だ。

「はっ！避けろ避けろ！刻まれたくなきゃ必死に逃げ回りやがれよ、下っ端野郎ッ！」

……耳障りだ。

対策を決めると、壁を蹴り、地面を蹴り、這うような低い姿勢で、グチャグチャに壊された部屋を駆ける。

「はんっ！俺に近づいても無駄だぜぇぇ――――――！！！！」

……鬱陶しい。

しかし、狂笑振りまくヤツの目前まで迫ったところで、不可思議な空間の歪みに大きく態勢を崩された。
ハッと気付いた時にはもう遅い。目の前には狂ったような喜びが溢れ出す男の瞳。
そして、弾ける空間。

それに体を流されながら、俺は今の不可思議な出来事について理解する。
ヤツは俺との間に、『削り取った空間――真空の膜』を張っていたのだろう。
それが俺が突っ込んだ事により形を失った際、辺りの空気がその真空へと流れこみ――

次の瞬間には、その空気の流れが空間を破砕する。

『真空』の中に急速に流れ込む空気、空圧が、俺の態勢を崩し、直後にはその流れが奔流となり、俺を打ち据えたのだ。

「ハッハァ――ッ!!死ね死ね!このカス野郎!テメェごときじゃこの俺に触れもしねぇんだよっ!!」

吹っ飛ぶ俺に、喜悦の溢れる狂笑を浮かべ、坂上はその腕を縦横無尽に振るう。
まさに力に酔いしれる、というのがピッタリの表情で、その力をばらまいていく。

「テメェの事ぁな、噂に聞いた瞬間から気にくわなかったんだよッ!!弱っちい普通の変種のクセに、俺の後釜に収まりやがって!テメェさえいなきゃ……テメェさえ中途半端に強くなきゃ、結城の野

郎も甘い幻想を捨ててたんだ！」

……目障りだ。

その空間の爆砕とも言える乱れから、転がるように脱出する俺に、ヤツは『真空の刃』を乱打する。

もちろんその刃の姿はハッキリと見えはしない。

今の俺は、アカツキの世界に縛られている。正確に言えば、その世界が構築した物質に。

つまりほとんど普通の変種なのだ。その世界の姿とてハッキリとは見えないのだ。

そこから派生し、現実に力となって干渉するモノが見えるワケもない。

ただヤツの手の動き、視線、そして第六感まで働かせ、それを悟るしかない。

流される身体を、アカツキの特注である相棒の銃杷で地面を叩きつける事によって、強引に体の向きを変える。

「バラバラになって……血反吐吐いて死にやがれ！テメェの次は、結城がいなくなった廃都だ！アイツがいなくなったなら、俺ぁ遠慮しねぇ！全軍連れてぶっ潰してやらぁ――ッ！！」

ここでの攻防は早くも３０分は超えただろう。室内はすでに原型を留めておらず、俺の体もすでにボロボロだ。骨折はないが、打撲や擦過傷は至るところにある。ここに来るまでの出血や、疲労も重なり、頭が貧血と疲労でクラクラする。

だけど、それでも俺はただの一手たりともヤツに攻撃を当てられ

ずにいる。
それが歯痒く、口惜しい。
アカツキが残してくれた『シャクナゲ』じゃ届かない事が悔しくてたまらない。

そして戦闘が長引くほど――血が流れるほど、体に青あざが出来るごとに、キリキリと痛みだす頭が俺を追い詰めていく。
それは、まるで『自分の内部に広がる内面世界』に、普段目に見えている世界が食い荒らされていくような錯覚と、それに伴い、頭の中の多様な機能を動かす『歯車が軋む』ような痛み。
そして感じ慣れていた『力への切望』。その行使に対する誘惑が心を千々に乱れさせる。

――たかだか空間を『削る』という中途半端な理しか持たない相手に、全く手も足も出ない。
完全に『拒絶』する、例外はあれど、対象を問答無用で遠ざけるスズカよりも、曖昧で弱い理に屈する。

――そんな事、有り得ない。

全盛期の自衛隊や警官隊を相手取り、敵対する幾多もの変種グループを相手に戦ってきた俺が？
純正型が数多くいる関東でも、最大規模の範囲を持つ『特殊な世界』と、最多の攻撃手段を持つ理を宿し、高位の身体能力をも持つ俺が、純正型が少ない事から『勘違い』をしているような男を相手に後れを取る？

……なんの冗談だ、それは。

そんな思いが内面でくすぶっていく。そんな危険な思想が頭の回路を灼く。

頭の中の歯車はゆっくりと軋み、油が点されていないそれは熱を持って――

「残念、残念だぜぇ――？噂に名高いシャクナゲが、一体どれほどのモンかと期待したんだがなぁ。正直拍子抜けだ。その身体能力も、攻撃をかわし続けた勘も、なかなか大したモンだってのは認めてやらぁ、下っ端！でもよ――」

……うるさい。

「テメェの能力が足ぃ引っ張ってやがる。そのチンケな能力……空間圧縮か？それじゃこの俺、関西の将軍にゃ届かねぇ！」

……うるさいウルサい

「いいぜ？もう結城の後を追わせてやる。安心しな。後からカリギュラのヤツらも大勢行くからよ」

「……この……神はいない」

外側と内側からせり上がっていく声に、体がカラカラに乾いていく。

血も涙も汗も全てが抜けていくような感覚に、頭が朦朧とする。

右手からはシャクナゲが落ちる。先ほどの空間破砕で痛めたのかもしれない。

……もうこの手には相棒（制約）を握ってはいられない。俺にはそんな事にこだわる余裕がない。

左手のシャクナゲを離さないようにするだけで精一杯だ。

大量に出血し、幾度も跳ね飛ばされた。最後にはオマケに間近で空間の爆砕に巻き込まれ、吹っ飛ばされた。
そして脳裏には力の囁きが繰り返されているのだ。

「……みと…ず、在らず……そのそ……する…」

「なんだぁ？命乞いか？聞いてやらねぇよ。最後くらい足掻くなよ」

足元はフラフラで、視界が歪む。
俺から流れ出した血溜まりは、異様に赤い。世界そのモノに映える赤だ。
そして唇から無意識のうちに漏れ出るのは、『灰色の世界を表す』かつて言い慣れていた言葉の羅列。
自分なりに『世界』を遠ざける為に設けていた、言葉による戒めの群れ。

「……いなくとも……てる事なく……この心は……」

言葉が進むごとに――意識が『シャクナゲ』から離れるごとに、俺に見える世界はゆっくりと現実からはかけ離れていく。

ゆっくりと白い灰が――雪のような灰が、俺を中心に世界へと広がっていく。侵食するかのように深々と。
舞い上がるように切々と。

「……この……を映し……この手は……歯車で……ぎて……」

歯車が浮かび、鎖が霞み、サラサラと灰色の雪が舞う雪原。
それは無機物が有する死と無を連想させる。

そんな中、温かみも彩りもないその世界で、唯一色を持つ煌々と輝く赤い満月。
『外』に浮かんでいた牙のように細い月とは違い、それは明らかに血の色をした朧月だ。

「ただ……に、幾千万の……刻み、幾万……を砕く」

「っ――!?テメェ、何を――」

「……ゆえに我が身は歯車を廻す虚空の歪み」

キィキィ響く声がちょっとだけ心地よいモノに変わる。
不遜な男が目を剥いているのが少しおかしい。
そんなにこの世界が面白いのか？
そんなにこの世界が異様なのか？
そう問い詰めてみたくなる。嗤いたくなる。
この世界と今の狂ってしまった現実に、どれほどの違いがあると言うんだ？
お前達が望む先は、きっとこんな灰色の世界だろう？
支配して、支配されて、壊して、壊されて、殺したから殺されて、奪ったから奪われて……その繰り返しの果てが、過去（あの頃）の時代の再来だとでも思っていたのだろうか？

「……ゆえに我が心は世界を歪むる輪廻の鏡」

あぁ、そうだ。俺はこの世界を知っている。
この何もなくて、代わりになんでもある世界を知っている。
寂しくて、冷たくて、脆くて暗い……
五月蝿くて、熱くて、いびつに歪む世界を知っている。

だってこれは俺の中から流れ出た無限。
歪で不完全な『“Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｗｏｒｌｄ”』。
――俺の中にある無限の世界なのだから。
「オオォォァァァ――――ッ！！」
吹き荒ぶ風の声にも似た……何かの音が聞こえる。

カラカラ――――

キィキィと嘆く風。
吹き荒ぶそれは寂しくて
無限の荒野を連想させる。
ただ在りし日は、こんな無機質な世界だった。
先に見える光は、こんなに目が眩む虚空だった。
あぁ、そうだ。壊れた世界は元から歪だった。
壊れる要因は雪のように降り積もり、壊そうとする者達はいつも側にいた。
そして今ある世界は、その結果が残っただけの世界だった。

透明な歯車が鳴く。
こんな世界を動かそうと、その空虚なる黒鉄（体）を軋ませ
カラカラと、ガラガラと、グルグルと回っていく。

無限の異世界は望むだけあり、望んだだけ壊れていく。
無限の虚空は、望むだけ空虚なそれで、望んだだけで満たされない。

広がる世界の中心で……自らの内側で、ガチャンと大きな音を立て一際大きな歯車が周りだす。
それはこの異世界の中心で、唯一肉を持つ体。
世界を創造するそれは、唯一心を持ち……その分だけ歪なモノ。

――そうだ。自分こそがこの世界の皇だった。
忘れたくても忘れられない……徒花（シャクナゲ）という名前で抑えこんだ、肉をもった歯車だった。

そして、俺こそが――
数ある世界の皇の中でも、最も罪深いロード（皇）の一人だった。
かつて『新皇』と呼ばれたロードヴァンプの一人であり……
その罪から逃げ出した弱き人間が、この空虚な世界で唯一のヒトだった。

純正型……人の変種の一種類。関東地方に近いほどその発生比率が高く、自然発生型の派生と思われる。
特徴としては一般的に非常に強大な能力を持つ変種、強大なそれを簡単な所作で連続使用する変種、他の変種や既存種では、どんな武器や兵器を手にしても相手にならない変種という認識しかない。
その数自体が変種の中でも一割にも満たない為、その存在に対する理解が浅い傾向にあり、特に関東以外の地域では純正型＝ヴァンプの親玉という認識以外ない地域もある。

しかし、実際の純正型の能力は、他の変種達のそれとは全く違い、『自分の望む理を持つ世界』を自らの周囲に作る力であり、他の変種達の現実世界に直接力を及ぼすモノとは本質からして違う。
つまり簡単に言えば、カーリアンの炎は現実世界の大気を自らの能力で発火させる能力だが、『見つめたモノが燃える』という理を持つ純正型の場合、大気がなくとも……能力者が疲れ果てて指一本動かせなくても燃やす事ができる。

純正型の場合、自らの領域内であればその理は働き、その力を現実に飛ばし、干渉させる形で領域外にも力を及ぼす事は出来る。
その展開する世界の形や範囲は純正型によってそれぞれ違うが、だいたいの範囲はせいぜいが１０メートル前後のモノで、それを外れると威力が格段に落ちる。それは純正型が作る世界の理は、現実世界の理から外れる法則の為、現実世界からの修正を受ける為。
その理による力の干渉を完全に防げるのは、ほかの理を持つ別の純正型の世界に限られる為、純正型同士の戦いの場合、それぞれの世界の領域のせめぎ合いになる事が多い。

また純正型には、産まれついて身体的な特徴がある事がほとんどな事もあり、自然型や突然型とは違い、一目でその存在がバレやすい。自然型や突然型は、毛髪や瞳の色といった部分にだけ特徴が出る為それを隠す事も容易だが、純正型のそれは肌や瞳孔、皮膚の角質化といった特徴も出る。

その為、他国で変種による革命が起きた際、日本でも見た目でわかりやすい純正型に対して迫害が始まり、それが関東で起きた革命の直接的な原因となった。

31・Long way to say good－bye――sinner－

後5週で終わる自信がないです。3月までには……という方針は変わらず目指しますが、ひょっとしたら4月に食い込むかも。
結構この話独自の設定がようやく出てきた辺りですが、どうでしょう？駆け足行進過ぎて分からなかったりしますかね？
その辺りがかなり不安です。
冒頭と感じが違う！とかいう意見もありそうで、結構気になっています。
よろしければその辺りのご意見を聞かせて頂ければ幸いです。

今回のあとがきは『世界について』

31・Long way to say good－bye――sinner

なんでこうなったのか……いくら考えを巡らせても、それに対する答えなんか出てこなかった。
最初は不安定な情勢の中、『変種』と呼ばれる人々が迫害され始めたのを見過ごせなかった。
ただそれだけだった。

確かに、現在外国では『変種』の一部が革命じみた事を起こしている。
恐らくその革命は成功するだろう、という情報もメディアから流れていた。
だが、それに参加していない変種達――つい最近までは『同じ人間として』暮らしていたこの国の変種達までが危険視され、迫害を受けるいわれなどないはずだと思った。
だからこそ仲間達を集め、自衛の為に……身内同士で傷つけ合わない為だけに、俺達は仲間を集めたはずだったのだ。

――それがいつからこんな事になった？
いつから俺達も革命なんて真似を起こす側になっていたんだ？

俺達は……少なくとも俺はそんな事なんか望んでなどいなかったのに、気付けば祭り上げられ、周囲の束縛や期待に雁字搦めにされて、もはや身動きが取れなくなっていた。

周囲には狂った輝きを浮かべた瞳を向ける人々……。
力に狂った仲間達。
そして大昔、関東で反乱を起こした人物と同じく、いつしか『新皇』などと呼ばれだした俺。

『これから私達が新しい国を造るの。今までの国では受け入れられなかった私達が、私達の為だけに今度は国を造るのよ。それを引っ張るのはあなたしかいないわ』

そんな事を言って……そんな程度の理由で、組織として、『新しい国』としての体裁を整える為だけに、『純正型じゃなくても分かる、見栄えのする特殊な世界を持つ』俺だけを表舞台に立たせた友人。

……自分の力には自信があった。
自分には慎重に先を見据える能力と変種の力があり、そしてその力に狂わない自信があった。
でもそんな自信など、所詮は浅はかな過信に過ぎなかったのだ、と気付いた時にはすでに手遅れで……

俺の周囲は壊れていた。
世界は……生まれた街は狂ってしまった。
俺が壊してしまったのだ、と思い知らされてしまった。
人々を魅了し、狂わせながらも自分自身が狂えないのは、俺みたいな咎人（とがびと）に対するささやかな罰なのかと絶望した。

『新皇』――それは自意識過剰だったバカな子供に付けられた『

罪の銘』。

それは永遠に消える事のない俺の罪の記憶に与えられた名。

永遠に離れられない深き罪と、辛き孤独を科す十字架。

それから逃れたくて、必死に逃れようとして――

手を差し伸べてくれた父さんに連れられて、故郷を後にする。

俺の罪の全てを、この懐かしくて温かい……今は壊れてしまった故郷に残す事を懺悔しながら。

『お前の罪を知ってるよ』

そう言われて唖然とした。目の前に建つ古めかしいビル――というより何かの事務所の屋上に座る男は、一体何を言っているのだろう？

そう思ったのだ。

だって俺はこの街には来たばかりで、知り合いなんか誰もいなくて……その『原罪』を知るのは、俺が相談した時に怒ってくれ、思いっきり殴り飛ばした父……共に逃げる事を選んでくれた父さんだけなハズだから。

『お前が背負うべき咎を俺は知っている』

その男は風に靡くサラサラの金髪で……
その瞳の色も神々しいまでゴールド。
染めたワケでも、カラーコンタクトを入れたワケでもない自然な神々しさを持っていた。
その顔立ちは日本人そのモノだ。ただその瞳だけは特徴的な多重円の瞳孔をしていた。
それに俺は彼が『同種』である事を即座に悟る。

『純正種――』

『そう。俺達は同じさ』

そう言って浮かべた笑顔は儚さと憂いを秘め、そっとその暖かさを俺の心に入り込ませる。
何故俺が純正型だと分かったのか、身体能力……あるいは雰囲気などから変種だとバレるなら分かるが、どうやって『純正型』だと断定したのか？
そんな当たり前の疑問さえ浮かばないほどに、気安い雰囲気がそいつにはあったのだ。

だが、その次に放った言葉に、『知ってる』という言葉が真実だと思い知らされ――周りの空気が固まった。

『多分みんながみんなお前を恨むんだろうな。でも――』

そこで一旦言葉を区切ると、その男は思わせぶりに視線を向けて、小さく嘆息を漏らしてから続けた。
悲しそうにその瞳を揺らしながら……。

『でも、誰もがお前を――『新皇』を恨んでも、俺だけは歓迎する

よ。比良野悠莉君』

『……お前』

知っている。

その言葉が嘘ではないと分かり、俺の中で激しく警鐘をかき鳴らす。

その呪われた『原罪の形』はこの街でも俺を苛むのか、自分だけ忘れて、せめてこの国が壊れきるまでだけでも静かに暮らそうなんてやっぱり無理なのか……そう思っても、内なる攻撃本能が『金色の少年』を敵だと騒ぎだした。

――この男がいれば、ほんの僅かな時も普通には過ごせない。

――この男がいる限り、俺は『罪』をずっと背負わなければならない。

――共に逃げてくれた父にも迷惑がかかる。純正型を恐れずに叱ってくれた父、殴ってくれた父、それでも故郷より息子を取ってくれた父を、周りの人間は糾弾するだろう。

『お前の息子が、この国をメチャクチャにしたんだ』

『お前の息子さえいなければ……新皇さえいなければ、この国はここまで壊れなかったんだ』

そう言われるだろう。

冷静に考えれば、俺じゃなくてもいずれはこの国を壊した事くらいはわかる。

言い訳なんかじゃない。

この国が壊れる要素はそこら中にあるのだから。

大国が倒れた事による経済不安や、変種と人との摩擦。

そして暴れ出した変種を国は止められないんじゃないか、という懸念。
それがあればいずれはこの国は壊れた。
新皇じゃなくても……俺じゃなくても良かったのだろう。
でも俺がロード……始祖になった。人々を魅了し、貶めた。変えてしまった。
その事実だけは、人々の記憶から消える事はない。
――俺には勝てない、なら父親を狙おう。父親は無力だ……そう怒りの捌け口にされるのは簡単に想像がつく。

『――この世に神はいない』

殺そう。殺すしかない。
コイツしか知らないなら、ここで殺せばいい。コイツ以外に知るヤツがいるかを聞き出してから始末しよう。
それが危険な思想である事は分かっていた。いかに狂っているかも自覚していた。
それでも、俺には余裕なんか全くなかったのだ。

これで最後――この力で人を殺すのは、これが最後……
そう覚悟を決めて、瞳に力を込める。
口から漏れるのは、言い慣れた『世界を表現する言葉の羅列』。
瞳には深く暗い殺意が宿っているだろう。
狂ってしまった純正種の持つ光が。

『殺気立たないでほしいな。俺じゃ君には絶対かなわない。間違いなく瞬殺される』

『……』

『俺は純正種なのに1つしか取り柄がない無力な人間だからね』

『……お前以外に俺の事を知るヤツは？』

俺の言葉にも大きく息を吐き、肩をすくめてみせるだけの男に、俺も溜め息で返して一歩だけ後方に下がる。

別にその間合いが必殺の間合いなワケではない。俺には――俺の世界には間合いなんて関係ない。

単に見下ろしてくる瞳に僅かに圧倒されて――本当に少しだけ気圧されて、無意識のうちに一歩だけ下がってしまったのだ。

『そっちの質問に答える前にこっちの要件だけは言わせてもらうよ。ま、無駄口は好きじゃないんでね、単刀直入になるけど』

そう言った男は、その脇に置いてあったらしい雑記帳を軽く掲げ、小さく笑う。

見透かすような……哀れむような気に入らない瞳で。

『俺と来ないか？俺が守りたいモノの為にお前の力を貸してくれないか？今まで散々色々と壊してきたその力を、今度こそ守る為だけに使ってみないか？』

そう言ってその手を差し伸べてくる。その場所には絶対に手が届かない事など明らかなのに、握り返してくれる事を心底期待したような表情で。

『意味が……分からない』

――本当に意味が分からないと思った。男の様子にカチンときてはいたが、その言葉により混乱をきたしてしまった。

『今度こそ……』

その言葉に惹かれたのは間違いない。

失敗して、逆走して、迷走して、結局は逃げてしまった俺に、次があるような口調に心が揺れる。

しかし、なんで俺の事を知っているのかが分からない。俺の――『俺達』の事は、向こうでも機密扱いだったハズなのに、なんで違う地方の男が俺の事を知っているのか？

それは置いておくとしても、なんでコイツの為に力を貸さなきゃならないのか。

そして、俺の事を知っているのなら、『なんで俺なんかに守る為の戦いが出来る』なんて思ったのかが分からなかった。

俺にはそんな力はなくて……それを自覚してなくて、過信していて、向こうの日常は壊れてしまったというのに。

しかし――

『もちろん代価は払うよ、ロハなんて厚かましい事は言わないさ。お前の――』

――お前の強過ぎる世界を俺が抑えてやるよ。人々を狂わせたその世界を俺の世界で抑えてみせる。お前はお前として、世界を持たない一人の人間として、今度は守る為だけに力を振るってくれないか？

事も無げにそう言って、そいつは――親友は初対面の罪人に向かって笑ってみせたのだ。

カラカラカラ……
歯車が回る音が聞こえる。
右手を這い回る鎖が地面に垂れ、ウネウネと地面をうねりながら、その鎖が覆う面を広くしていく。

ガラガラガラ……
歯車が軋む音が聞こえる。
左手に握る『シャクナゲ』は重く、熱を発しているかのようだ。
アカツキの世界から解かれた俺を、まるで苛むかのようにその存在を主張している。

ゴロゴロゴロ……
世界が蠢いている気がする。
大嫌いで、でも一番俺に近いところにあったその世界は、相も変わらずすぐそこにあった。
アカツキの力が――智哉が残してくれたモノが、単に見えないように隠してくれていただけ。
俺の世界を代償に、空圧を圧縮した弾丸を放つソレが、俺の心を守っていてくれただけだ。

「……ほんっとムカつくな」

思わず口を付くのは、ぞんざいな言葉。
それは今は変貌した俺――鎖を腕から生やす俺に、呆然としている坂上にではなく、俺自身に向けたモノだ。

「ずっと……ずっと遠ざけてたのに、本当にふざけんなよ」

今でも智哉の世界は俺を守ってくれている。片翼になってしまったシャクナゲで、精一杯俺を抑えてくれている。
自らの意志で……その弱さでそれから手を離したのに、一瞬でも『自らの世界』を求めてしまったのに、今でもそんな弱い俺を抑えてくれている。
あの空虚な世界は完璧には具現せず、朧気に俺の内面に広がっているだけだ。坂上には見えていないだろう。
その尖兵たる蛇達だけが現れただけだ。

「本当に……心ん底から――」

――情けない。
そう言葉にするだけで、泣きたくなるほどに胸が痛くなる。
あの一瞬……将軍に追い詰められた瞬間の思考は、間違いなく『ヴァンプ』のそれだった。
力があればこんなヤツには負けないのに……
力さえ使えばこんなヤツに好きに言わせないのに……
力さえ使えば、コイツなんか一瞬で殺してしまうのに……
そう考えてしまった。
力さえあれば、他者を蹂躙するという考えを持ってしまった。
それが情けなくて――心底悔しい。

「俺も坂上と同じだ。心の根っこじゃおんなじヴァンプだ」

ジャラジャラとなる蛇達を踏みしめ、警戒するように下がる将軍へと一歩一歩前へと足を進める。

「だからここで闘り合うのも……運命ってヤツだったのかもな」

一筋の蛇が鎌首を持ち上げる。続いてもう一筋、さらにもう一筋。ゆっくりと久々の獲物を吟味するかのように、ゆらゆらとその先端を揺らめかせる。

「――さようならだ。坂上」

「ふざけろッ！！」

吠える声と共にその腕を一閃させるもう一人のロードにも……足は止めない。

ただ弾けるかのように蛇達が宙を無尽に飛び、四方八方へとその身を翻す。

それぞれの指の上面から伸びる五筋の蛇達は、それぞれ天井に刺さり、その後跳弾して地面へと刺さり、そのままあちこち跳ねるかのようにして前方に壁を作っていく。

それだけで――

「な……んだと……」

それだけで坂上の刃を、そしてその余波である空間破砕を防いでみせる。

細い細い鎖の面だけで、それが無作為に格子状に連なるだけで、

坂上の『世界』からの干渉を防ぎきる。
微風すらも俺の元には届かない。

「……届かないよ、お前の世界の領域から外れた力は、すでにこの世界にあるべき力に変換されている。現実世界に認識された力じゃ俺には届かない。俺の世界から這い出た鎖に触れた力は、俺の世界の理に絡み取られる」

猛るかのように蠢く蛇達は、坂上を敵とはっきり認識したのか、あちこちに散った体を再度地面に落とし、ゆっくりと鎌首をもたげていく。

「空間の削除か、どうせそんなトコだろ?そのちっぽけな世界の理は」

「テメェ……」

「怒んなよ、その両手一杯に広げたのより、僅かにデカい程度のちっさい世界を、ちっぽけって言うのは的確な表現だろうが」

今でははっきりと坂上の『世界』が見えていた。
それは、赤錆色の大地が僅かに坂上の足元にだけ広がっただけの『小さな世界』。
その世界の中、手首辺りから伸びる錆塗れにも見える湾曲した赤銅色の刃にも、赤土が舞う大気にも微かな現実味もない。
そんな朧気な……あやふやな世界だった。

「世界――って言い方をするって事ぁ純正型かよ。その鎖がお前の『世界』ってワケか。今まで手加減でもしてやがったのか?」

「手加減？バカを言うな。単にアカツキの――智哉の世界に抑えられてて、『純正型じゃなかっただけ』さ。手加減する義理なんかどこにある？」

ちっぽけ呼ばわりにも必要以上に怒る事はなく、警戒するかのように腰を落とす。それこそが坂上が決して短慮なバカではない証拠だ。

警戒すべき相手を本能的に嗅ぎ分ける能力があるのだろう。言葉だけで少しでも情報を引き出そうというのは明白だ。

そんな坂上に対して、うねる蛇達は牙を剥く変わりにジャラジャラと威嚇音を発し、ジリジリと下がるロードヴァンプへと間合いを詰めていく。

「お前は勘違いしてんだよ。この関西にはろくに純正型がいないから……智哉とアンタ、後は旭って近衛くらいしかいなかったから勘違いしてるんだ。お前ぐらいの純正型ならな、関東や東北にゃまだまだいるんだよ。それを――」

智哉は……俺の嫌いな世界を抑えてくれた友人は、本当に凄かった。本当に奇跡を感じさせるだけの力を持っていた。

俺自身がどうやっても完全には抑えきれなかった『世界』を、アイツは抑えてみせた。

俺も色々と工夫して、力の解放には『必要なワード』を設けるクセを付けるようにして、さらに最低限の力だけで済むように世界の制御にも力を入れて……それでも完全には抑えきれなかった『内面世界』を、アイツの『世界』は抑えてみせた。

広大かつ無慈悲な灰色を、アイツの暁輝く世界はどこか見えない場所に封じてくれた。

それは俺からすれば、まさに奇跡の御技だった。大きな救いだった。

ずっと見える場所にその世界があったのなら、きっと今の俺はここにはいなかっただろう。

関東からずっと付いてきてくれていたスズカと、たった二人だけでヴァンプと戦い続けていたか、あるいはもう全部諦めて皇の道に舞い戻っていたか。そのどちらかだったハズだ。

スズカと逃げる道を選べなかった俺には、そのどちらかを選ぶしかないだろう。

その意味でも、アカツキの世界は俺にとって特別だった。

「それを知らなかったお前は……井戸の蛙に過ぎない事すらも自覚出来なかったお前は本当に哀れだよ」

「うるせぇ！！俺ぁ将軍、関西最強の純正型なんだ！テメェごときに――」

「そう言った意味じゃあ、関西の始祖……ロードは――」

そんな男が――アカツキの存在が坂上を歪めたのだろう。言葉を淡々と連ねながらもそう思う。

アカツキの力をコイツは知っていた。それは間違いないと思う。それを目の当たりにして、坂上は捕らわれたんじゃないのか。

自分がなまじ純正型だったから……なまじ『周りより』強かったからこそ、アカツキの能力はより魅力的に見えた。アカツキ自身には戦う力がなかったからこそ――『欠点』があったからこそ、坂上は自分の価値を過信した。

アカツキを補えると……同等なんだと思ってしまった。

「結城智哉……アカツキこそが関西の皇だったんだろうな」

「うるせぇってんだ！たかだか一度くれぇ防いだ程度で盛大に吠えんな！」

喋る言葉と共に振るわれた腕から産まれたのは黒い歪み。それはヤツの世界の空間が独自の法則に従って削れたモノだ。その歪みは、坂上の世界を出れば現実世界の法則にあった『真空』となって世界を突き進む。

『世界』が見えないモノには、その変遷は見えない。

そう、同じように独自の世界を築ける純正型でなければ。

真空は地面を易々と削り取り、無差別に壁を切り刻む。

それは腕を一振りという気安さから生まれた力としては、恐るべき切れ味を持った刃だと言えるだろう。

それでも――

「言っただろ。届かないって」

それでも届かない。真空は鎖に傷すら付けられない。再度四方に展開した蛇達のこちら側――俺の周囲には届かない。

その間も歩みは止めず、坂上との距離はもう指呼の間だ。

そう……もうチェックメイトだ。

「俺のコレを世界かって言ってたな？それも勘違いだ。『世界は絶対に世界の形しかとらない』。お前は知らないんだろうけど、アカツキの『寄り代』そのモノに宿る『あの世界だけが例外』なんだ。俺のこれは単なる尖兵に過ぎない。俺の世界から無理やり現実に顔を出しただけのただの端末の一部」

――でも、その端末にすらお前はかなわないんだよ。

そう言いつつも、右手を軽く持ち上げるだけで蛇達にゴーサインを出す。

坂上の小さな世界を侵食しろと。

俺の世界で……その一端で、坂上の世界を『食い荒らせ』と。

それを受けて、蛇達は猛然と宙を飛ぶ。牙を剥く蛇よりもなお苛烈な勢いで。

「……チッ」

「純正型同士のぶつかり合いは、『互いの世界の喰らい合い』だ。そして『理が通じる領域の侵し合い』でもある。俺の端末すら侵せないお前のちっぽけな世界が――」

それな圧され、見る見るうちに赤錆色の空間が――純正型にだけ見える坂上の世界が、鎖の体を持つ『世界の尖兵』に侵されていく。

軋みを上げ、歪みを広げ、霞むようにビリビリと震える。

それは絶対に受け入れられない他世界の侵入を防ごうとする、坂上の世界の必死の抵抗だ。世界の自浄作用にも似た拒絶だ。

それでも蛇達は赤錆の空間に侵入しようと身をよじり、先端部分を振るって突き進む。

「――俺の世界の侵攻を止める事が出来るワケないだろ」

そのせめぎ合いはまさに一瞬だった。

赤錆が鈍色に抵抗できたのは、二度まばたきをする間よりも短かっただろう。

一首の蛇その頭を潜り込ませると、その周囲にある赤錆色の世界をかき消していく。頭を振るって吹き散らす。
それが次々、五度繰り返された後には、蛇達の侵攻を食い止めるモノはもうなかった。
赤錆色の世界の残り香は、坂上の手首に生えた湾曲の刃のみ。それで坂上本人にも牙を剥く蛇達をなんとか迎え打ち、再度距離を取る。

「お前じゃ俺の世界を見る事もかなわない」

荒く息を吐きながら、なお憎々しげ睨みつけてくる坂上を、出血か疲労かでいまだにクラクラする頭を奮い立たせながらも真っ直ぐに見やる
打ち払われた蛇達は、坂上を囲むようにその位置を移動し、ゆっくりとゆっくりとその周りで鎌首をもたげていく。
補食者が被補食者を確実に仕留める為に、フォーメーションを組むように退路を断ち、隙を窺うようにユラユラと揺れる。

「アカツキの世界の理は『付与』。物質にあらざる因果……運命を与えるモノ。代償――つまり使用者との繋がりさえ作れば、どんなモノにも新たな力を与える能力だ」

俺が知っている多くの純正型の中でも、その『付与』の世界は格別に規格外だった。
作りあげる世界自体は驚くほど小さかったのに、その世界が持つ理は俺よりもずっと規格外だった。
そんな相手は、関東の連中の中でも一人しかいない。
俺に『表の新皇』としての立場を与えた『彼女』しかいない。

「それに対してお前の世界は、ただ空間を薄く削るだけのモノだ。

純正型が他の人類とは在り方が違うように――」

――純正型同士の理も平等じゃない。

様々な想いを噛み殺してそう呟いた声は、自分でもびっくりするほど頼りがなかった。

驚くほどにかすれていた。

自分の世界の理……それを口にする勇気もなくて、例えに智哉の世界を例を出す事が情けなかった。

そんな自覚をして、それでもなお口にできないほど嫌悪する世界が、いまもすぐそこにある事に心が震えた。

黒鉄になって、少しは変わったと思っていた自分が、いまだに力で他者を――同じ純正型すら圧倒しているという事に、泣きたくなった。

それでもなんとか蛇達に攻撃を指示しようとして――固まった。

坂上がさもおかしそうに……狂ったような笑みを浮かべている事に気づいて。

「結城が特別だったぁ？はん、知ってるさ、それくらいはな。じゃあお前はあれか？その特別だった野郎の意志を継ぐとかってヤツか？」

それは間違いなく侮蔑が含まれた言葉だった。嘲笑が混じった声音だった。

蛇達に居竦まれている獲物とは思えない不敵さと、不遜さ……そして皮肉が含まれていた。

「テメェはよ、あれだろ？自分自身の力が怖くて、昔培った自分の理性とか人間性ってモンにしがみついて、ビビって、震えて、結城

のヤツの尻馬に乗っかってるだけだろ？」

「……」

「そりゃ分かるぜ。結城の野郎は純正型のクセに妙に人が集まってくるようなところがあったからな。アイツの真似さえしてりゃ、みんながみんな付いてきてくれるだろ。じゃあよ、テメェは結城の後継いで、俺達みてぇなネオを全部ぶっ殺して、その先どうしたいんだ？」

――俺達みてぇなネオが全部いなくなったら、最後に残ったネオ……テメェは自分自身をどうするつもりなんだ？

そう言って、その身をゆっくりと晒した。構えを解き、渦巻く蛇達に向けて両手を広げてみせたのだ。

「俺ぁおごってたんだろうな、認めたかねぇが今は手も足も出ねぇ。その理すらも見えてこねぇしな。だから聞かせてくれや、アカツキの後継者。テメェは同属を殺して殺して殺し続けて……その先はどうすんだ？」

その言葉に――俺は固まった。殺して殺し続けて、その先は……と言われて、俺には答えが見えない事に愕然とした。

黒鉄を守り続けてそれだけでいいのか？

ただあり続ける事が、黒鉄の役割なのか？

それを望んで智哉はこの組織を作ったのかと言われれば、間違いなくＮｏだ。

智哉が俺を――俺の世界を危険視していたのは間違いないだろう

が、それを抑える為に黒鉄を作ったワケでもないだろう。
じゃあなんの為にと思い返してみた時、その答えが見つからない。
それ代わる自分の目的すらも曖昧だ。
俺はずっとあの場所を守って、守り続けて、何がしたかったのか。
ただ守る事にしか思考がいっていない自分に気づかされた。

そして――
そして思ってしまった。考えてしまったのだ。

『自分にはそれぐらいしか価値がないから、守る為に体を張るぐらいしか出来ないから、それがなくなったら……守る為に戦う相手がいなくなったら、自分には神杜（あの場所）にいる価値がなくなるんじゃないか』

『黒鉄であり続ける事が出来なくなるんじゃないか』

『贖罪の場所を――失うんじゃないか』

そんな事を……俺は考えてしまったのだ。

31・Long way to say good-bye——sinner——

世界について。

純正型は単純にその力が強大なだけの変種ではない。
純正型の本当の能力は『現実世界にあらざる法則を持つ独自の境界を作る事』にある。
この境界の事を純正型達は単純に『世界』と呼んでいるのだ。
この世界は人の内面世界に近く、精神の在り方や個人の資質によってその外観は変わる。だが、純正型以外にはその領域はほぼ不可視であり、見る事はおろかその世界に入っても知覚する事も出来ない。
また純正型によって個人差があるのは外観だけではなく、『その世界独自の法則』……理もそれぞれ異なっている。
例として坂上の『空間を削る』世界をあげるならば、それは坂上のみが作りあげる世界固有の理であり、似たような理を持つ世界があったとしても、全く別種の法則により産まれた力となる。

また、世界固有の理によって生み出された力は、その世界内でのみ通用する法則に従って生まれている為、その領域をでれば『現実世界にある物理現象』へとその力は変換される。
例えば坂上の削る世界で生み出された『削れた空間』は、坂上の世界内では全くの虚無、何物も存在しない空間の断裂であるが、その領域をでれば『真空』へと変換されるのだ。
他に挙げると、スズカの『拒絶する世界』で生み出された遠ざける力は、スズカの領域内であれば質量や重量などに関係なく問答無用で遠ざけるが、スズカの領域をでれば斥力へと変換それ、その法則に従う事となる。
特殊なのはアカツキで、彼の『世界』にある法則により生み出された力は、『現実世界にある物質内に定着してしまう』。

一度その世界法則にかかって生み出された物質は、現実世界にある法則を半ば無視してあり続けるのだ。
他の純正型の力は、現実世界の法則により修正されて、現実にそった力へと変換されるのに、彼が作った物質だけは『アカツキの物質の運命をねじ曲げる世界』の影響を失わない。
これがアカツキが特殊な世界を持つと言われている所以である。

世界の領域面積についても個人差はあるが、大体が１０メートルない程度の広さは持っている。
アカツキのように手のひらの先だけに作れるといった例外もあるが、ほとんどは坂上の『両手を広げた面積よりやや広い』くらいの領域はある。
ちなみにスズカの世界は、５メートル前後であり、スズカを中心に銀の鈴がクルクルと円を描く形で領域を作る。
その為にスズカのコードは『銀鈴』。決して『シルバー』グレイの髪を持つ『スズ』カだからではない。

32・フェイタルブラック（前書き）

今回は短いですが、今週半ばでもう1話上げる事になると思います。
アップは出来次第となりますので、詳しくは活動報告にて。
今回のあとがきはナシです。

32・フェイタルブラック

暗い昏い部屋の中。
声なく打ちひしがれる私の前で――グチャグチャに頭の中が崩れているあたしの前で、狂った笑みを浮かべた純正型がケラケラと笑う。
何がそんなにおかしいのか。何がそこまで愉快なのか。
ただ嗤いながら快楽の笑みで見据えたあと、名残惜しそうな未練たらしい仕草でゆっくりと部屋の入り口へと向き直った。
――ジャラ……
「そろそろ来やがるかな」
そう言って坂上は、さっき感じた未練など嘘のように……もはや私など眼中にないとばかりに……まるで恋い焦がれるかのように部屋の扉を見据えながら嗤う。
それは恋焦がれるというには狂気にまみれたサイコなモノではあったが、間違いなく渇望に近い感情が窺えた。
「女、てめぇは黙って見てろ。関西の始祖が俺だって証明する瞬間を」
そう言いながらも、もうその視線がこちらに向く事はなく――

「そして関西の始祖が関東の――この国の皇を超える瞬間を見届けろ」

ゆっくりと立ち上がるとギチギチと不快な音を立てながら拳を握る。

「お前はその生き証人だ。それ以外は望まねぇ。俺がもう一度『将軍』呼ばれるに相応しいという証人だ」

その音はまるで腕にびっしりと生えた鱗が鳴っているかのような音で、私は小さく身をすくめた。

――怖かった。ただ怖かった。

ここにアイツが来て、坂上と話をして……その話が私の認めたくないモノを認めるような言葉だったら――

そう思うと、怖くて震えが止まらなかった。

『迎えにきたよ。ヴァンプとは違う君を』

その言葉が、『俺とは違う君を』と言われていたのだとしたら、私は何を信じていいのか分からなくなる。

私はアイツと同じになりたくて……アイツはヴァンプからは一番かけ離れていて……その位置からは遠くが見えると思っていたのに、それが勘違いによる単なる幻だったと言われたら、今までの私はなんだったと言うのか。

そう思えば頭がぐちゃぐちゃに乱れて、ボロボロと欠けていく気すらする。

――ジャラ……ジャラ……

扉の向こうから聞こえてくるのは、何か金属がこすれるような音。
カツンカツンと響く靴の音共に、それはどんどん大きくなっていき、坂上から漏れる殺気も膨れ上がっていく。
その気配にその音の源の正体が分かり、思わず小さく後退ってしまう。

そんな音にアイツ……黒鉄のシャクナゲが結びつかなくて。
その足音は靴音だからか冷たく感じられ――その金属音からは感情が見られなくて。

『この街、なかなか悪くないだろ？見ての通りあちこちボロボロだけどさ、ここじゃみんな同じだ。既存種……人間も変種も一緒に笑って、悲しんで、同じモノ食って、同じように頑張って生きてる』

初めて私やカクリ、あと数人の人達を連れて廃都に着いた時、そう言って少し自慢気に笑っていたのを覚えている。

『じゃあちょっと行ってくるよ。今回は街の外で人をさらってる武装盗賊が相手だから、そう長くは空けないだろうけど、何かあったら誰かに声をかけてくれ。多分みんな力になってくれる』

初めて黒鉄として出て行くのを見送ったのは、廃都に着いてすぐの事だった。それでも疲れなんか見せず、私達の為に空いている部屋を用意してくれた。置いていかれた私達が困らないように、周り

にそれとなく気を付けてくれるように頼んでくれていた。

『ただいま』

そう言って――

初めて悲しそうに笑うのを見たのも、その作戦から帰還した時だ。

あいつが連れて行った仲間達の数人が、モノ言わぬ骸になって帰ってきた事が原因なのはすぐに分かった。

安っぽい布きれがかけられただけの『人だったモノ』を見る視線は、言葉よりも明確に悲しみを語っていたから。

――それが初めてあいつの『弱さ』を見た瞬間だ。

先頭に立つ強さだけじゃなく、相反する弱さを持っているあいつと、今ここで確かに存在感を主張する『何か』の雰囲気がどうしても結びついていかない。目の前で嗤う狂喜と、あいつが『同類』だったなんて認められない。

近づいてくる音と気配に私は息を呑む。情けないくらいに膝が笑い、体が竦む。

もうすぐあの扉は開かれる。

その時――その瞬間に、彼は私をどんな風に見るのだろう。

そして私は――いや、『あたしは』、あいつをどんな風に思うのだろう。

自分の中にある狂気じみた紅が、今はどうしようもなく怖かった。

キィ――……
音もなく開いたハズの扉に、そんな恐怖感を煽る幻聴を聞く。
その先にいたのは見慣れた格好をしたよく知った顔。
いつも通りの黒コートに黒髪黒瞳。

ジャラ……ジャラ……

ただいつもと違う箇所を挙げるとすれば、そんな音を立てながら右手に引きずられている黒い鎖の群れ。そして本来は両手で握られているハズの銃が片方しかない事。
そしてその暗い瞳。光の届かない深い海の底のような瞳が、いつもの黒瞳とは全く違って見える。

「待ってたぜ、結城智哉の殉教者」

「……」

『殉教者』――その言葉には嘲りの色などなく、事実をそのまま述べただけの気安さがあった。
だからだろう、ゆっくりと向き直っても、かけられた坂上の言葉には返事もない。
細められた視線はそのままゆっくりとあたしに向き――かすかに笑ったように見えた。
心の底から安心したように……思わず安堵を漏らすように……でもちょっとだけ悲しそうに。

「この女は証人だ。そして一年前、チェックメイトまでかけたくせ

に途中でいきなり退きやがったテメェが、また同じ事をやらかさないようにする為の保険だ」

「……どうして俺がこの街に来ている事が分かった？それに、なんでカーリアン――彼女を連れている事を知っていた？」

喜々として語る坂上に返す声も、いつも通りに冷静なモノだった。それはあたしがよく知っているモノで……その事に少しだけ胸が痛む。

「簡単なこった。テメェがあの後『廃都』に――結城の街に戻った事は簡単に調べがついた。ならまた俺の前に姿を見せるだろうってのも想像がつくだろうが。俺が『関西の将軍』としてある限り、テメェの敵なんだからな」

同じ声であたし達の敵と当然の事のように話す。あたしを置いてきぼりに話す事が……辛かった。

「だから一年前のあの時から、ずっと今みたいな時が来るのを待っていた。東海の『芝浦』や北陸の『長尾』と同じレベルで――いや、それ以上にテメェの動向は張ってたんだよ。廃都にも何人かテメェ専用に手下入れてるし、途中の関所やらこの街の周囲にやらにも腕利きを潜ませてる。関西軍が持つ通信網の類も、その為だけに一部割いてるしな」

淡々と、朗々と、でも喜々とした感情を滲ませて語る坂上と向かい合う表情はあくまでも薄い。先ほどあたしを見た時の『らしさ』が嘘のようだ。

殺気も敵意もなく、感情すらも消えたかのように感じられるその表情は、まるで能面か謝肉祭のマスケラみたいに思える。

一人言葉を並べ続ける坂上の方が、よっぽど緊張しているのは間違いないだろう。
その舌の滑りがその緊張を如実に語っている。

「それに備えてこの街にいる手下共……特に近衛の連中にあらかじめ厳命した事ぁ一つだけ。『もしシャクナゲが誰かを連れてきやがったなら、話がしてぇから手は出さずに俺ンとこに通せ』って事だけだ」

――まぁ、誰も連れてきやしねぇだろうって思っちゃいたんだが、万が一を考えて指示を出しておいたのが効をそうしたな。

そこまで言って、まくし立てるように語っていた坂上にようやくわずかながら余裕が見えた。歪んだ形ではあっても落ち着きを取り戻した。

恐らくは、あたしに全てを語ってみせた事を思い出したのだろう。それを知らしめる為に余裕を見せたのかもしれない。
彼は――シャクナゲは、あたしに知られる事を望んでいなかっただろうから。そしてそれを坂上も知っていただろうから。
今まで何も語らずにいたのは、多分語らなかったんじゃなく『話せなかった』から。
彼は多分、ずっとシャクナゲでいたかったんだろう。黒鉄として在りたかったんだろう。そして忘れたかったんだろう……そう思う。
その為には、『真実』を知る者は少ない方がいい。
そんな思いに葛藤しつつも、結局話せなかったんじゃないか……
そうあたしには思えた。

何故そう思うなんて理由は考えるまでもない。
『あたしもそうだから』。

あたしとそっくりだからだ。
ずっと今のカーリアンでありたいと思ってきた。その為にカーリアンになる前の事は……誰にも知られたくない。
感情のままに人を傷つけた事も、そんなつもりはなくても変種に対する恐怖を多くの人に植え付けたであろう事も……。
自分自身すらも忘れたいとずっと思ってきたのだ。
そして、詳しく知ればみんな離れていくんじゃないかって怖がってきた。
だから二班でも、怖がる仲間達には近づけなかった。それ以上近づかれてもっと怖がられるのが嫌だったから。
だからあたしには……彼の葛藤がよく分かった。

「それだけでアドバンテージを取ったつもりか？」

だけど、対する男はあくまでも平静だった。平坦と言い代えてもいい。
それはまるで――すでに諦めを受け入れた罪人のモノ。今のあたしよりもずっと先にある深い諦観。あたしなんがじゃ理解出来ない深く暗い場所から響く声だ。
その声は、感情が見えないからこそ真っ暗な奈落を思わせた。

「だとしたら『関西の将軍』は随分と浅はかだな。哀れみすら感じるよ。あの男が命で稼いだ一時間を、単なる意趣返しに使ったんだと思えば……反吐が出る」

「はぁん？急に饒舌になったじゃねぇか。嬉しいぜ、かの『新皇様』が急に身近に感じられてよぉ」

敢えて『新皇』と呼んでみせた坂上は、すでに完全に地に足が着いていた。本心から笑う余裕すら見える。

一時間という言葉と状況からして、あの男とは間違いなくあたしをここに連れてきた男の事だろう。

敵の中でも『仇敵』とすら言える近衛の一人にして、あたしの紅すらも掻き消した男……そのハズだ。

それでも敵であるハズのシャクナゲの瞳には暗い感情が浮かび――対照的に味方であったハズの坂上の瞳には喜色が宿る。

「で、左近はどうした？どうやってぶっ殺したんだ？妹の右近はどうだったよ？あいつは普通の変種にしては異常に強かっただろ？命令違反の常習者だったがよ、ウチじゃ俺に次ぐぜ？」

――あいつまで殺られたならワリに合わねぇなぁ……。

そうボヤく坂上は、取り戻した余裕により狂喜を増幅し――その言葉の直後に空間が固まった。

固まったというよりも『凍てついた』と言った方がいい。一気に体感温度が零下にまで落とされた錯覚すら受ける。

その感覚が今までに感じた事のあるモノでなければ――そしてまだに混乱と恐怖に完璧に捕らわれていれば、あたしでも間違いなく気を失ったであろう圧迫感を持って、一つの気配が空気を震わせる。

それは間違いなくシャクナゲの殺気だ。あたしが知っているモノよりも、ずっと強大なだけの彼の本気だ。

その瞳はより深い闇を宿して坂上を見据えている。

「……本当にお前は俺を後悔させるのが上手いな。一年前の咎が胸に痛いよ。本当に重くて仕方がない」

そう語る声もただ静かに沈んでいて。

「――なんで殺さなかったんだろうってつくづく思わされる」

深く空間に満ちた殺気にまみれる。

それに伴い鎖達はジャラジャラと音を立てながら部屋を這い周り、ゆっくりとその先端をもたげた。

まるで五対の頭を持ち上げる蛇のように。もしくは合図を待つ猟犬が、低い前傾姿勢を取るように。

それが今のシャクナゲの『銃』にも勝る牙なんだという事が分かる。自然とそう理解する。

黒い鎖達は……その存在感が希薄なのと反比例するかのように『強大』だった。

不確かな存在感を補って余りあるほどに、不気味だったのだ。

「カーリアン」

向かい合いながらもあたしに向けた言葉は静かなモノだった。殺気乱れる空間にそぐわない弱い声だった。

それでもあたしには分かった。

シャクナゲと呼ばれた彼が、その殻を剥ぎ取って『別の誰か』になる事が。あたしには見られたくない姿だろうという事が。

そしてその誰かこそが、時折垣間見えていた本当の彼なんだと――分かってしまった。

「出来れば……出来るならば、今は手を出さないでくれ。全部終わったならどんな言葉も受ける。怒りも悲しみも憎悪すらも受け入れる。死をもって贖ってもいい」

そして悟った。

その誰かは、あたしが思い描いていた『憎い新皇（始祖）』とはちょっと違う……見慣れていた『シャクナゲ』よりも、ずっと悲しい存在なんだっていう事が。

「俺はこの国の――君の大敵だ。大事なモノ全部の仇だ。だから覚悟はしてる。覚悟して君を連れてきた。でも今はダメだ。いくら『紅』が強力でも――」

――今手を出されたなら、多分殺してしまう。

余りにも弱々しく、儚く、脆い言葉が胸をつく。

『大敵』、『仇』という言葉が心を穿つ。

しかしそんな言葉だからこそ、その言葉が真実なのだと理解させられてしまう。あたしを殺してしまうという言葉が、誇張や一時的な言い逃れじゃないと分かってしまう、そしてそんな事を望んではいないという事を悟ってしまう。

目の前にいる男がヴァンプだとは思えなかった。

こうしてここで向かい合うまでは、きっと彼の事も憎んでしまうだろうと思っていたのに……あたしの中から憎悪が溢れ出すだろうと恐れていたのに、何故か彼を真っ直ぐに見る事が出来た。ヴァンプとして紅を溢れさせる事はなかった。

それが少し不思議で――それでも自然とそんな自分を受け入れら

れる。

だってあたしが知るヴァンプは、父と母を殺した男達だ。そしてそいつらの元締めだった狂人だった。

何も与えてくれないのに、全てを奪っていったヤツらだ。

家族も、家も、友人も、平和も、日常や故郷でさえも。

彼みたいに『与えてはくれなかった』。

コイツは何もあげていないのに……あたしからは何も奪わなかったのに、望むモノはなんでもくれた。

食べ物や居場所、仲間、失った故郷の代わり、そして――

『迎えにきたよ、ヴァンプとは違う君を』

――狂いそうになりながらも、心の底から望んでいた言葉でさえも。

さらには『改めて守る機会』までくれたのだ。

一度は守れなくて、泣いて、絶望して、最期には壊れかけていたあたしに救いをくれた。ラストチャンスをくれた。

今も……全てを知らされた今でさえも、あたしから『生命』を奪うという選択肢があるのにそれを選んでいない。それは一番確実で、安直で、魅惑的な手段であるはずなのに――それでも奪わない。

自分が苦境に立つ方を選んでいる。あたしを連れてきた時点で全てを覚悟の上だったとしても、その選択は覚悟を覆しうるだけの魅力があるハズなのに。

全てを失う可能性があるのに、だ。

たしかに許せない、許さない、憎い、悲しい……そんな全てが入り混じってはいる。紅は猛っている。でも彼の事を『汚い』とか『怖い』とは思えないのだ。

あたしが知っているヴァンプにあったどす黒さが見えなかった。

憎悪はある。悲哀も確かにある。彼にそれを向けてしまうのだけは止められない。

――彼は原点だから。あるいは原点（それ）に近いから。

でも『嫌悪』と『恐怖』はなかった。そしてそれを不思議にも思わない。

ただ、いつしか落ち着きを取り戻している事だけを自覚する。

それは溢れた困惑がもたらした一瞬の静寂なのかもしれない。

それでもその一瞬であたしには十分だった。一瞬でこの一年でどれほど『シャク』の姿を見てきたかを思い出せたから。

「許さない。だから――」

彼がいなければ廃都は――あの最後の自由が許された場所はあり得なかった。

そしてあそこでなければ……あの場所でなければ、多分あたしは本当の意味で野垂れ死んでいた。

ヴァンプみたいになりたくない、あいつらみたいにだけはなりたくないという、脅迫観念にも似た想いに暴走して、憎悪と嫌悪にまみれて死んでいただろう。

……勝手なんだろうな。

そう思う。苦笑してしまいそうになる。

なんだかんだ理由を付けてみて、あたしは彼を憎まないようにしているだけだ。……そう自覚もしている。

きっと彼以外の誰かが『新皇』だとカミングアウトしたならば、多分一切容赦しなかっただろう。

でも……それでも仕方ないとも思うのだ。
あたしの過去はきっと彼の過去（それ）と合わせ鏡だ。
そしてあたしの現在は、彼の『シャクナゲとしての過去』の積み重ねがあったからこそだ。
なによりあたしは――

「だから、これが終わったらとりあえず死ぬ直前までぶん殴らせなさい。その後でどれだけこんがり焦がすか決めるからっ！」

――あたしは、シャクの姿を見ただけで、どれほどの混乱や落胆、絶望にも似た失望からも持ち直してしまうほど、彼を見てきてしまったんだから。

あたしはカーリアンで在りたかった。
ずっとそれにしがみついていた。
そうすればもう何も失わなくて済むと思ったから。失った事に対する罪悪感と喪失感を補えると思っていたから。
真っ赤に燃えた家も、復讐の想いだけで傷つけてきたヴァンプ達も、巻き込んでしまった人々も、何も思い出さなくて済んだから。
でもしがみついていただけで安心していた。何もしていなかった。
黒鉄としての役割に依存していた。

あたしはカーリアンでいたかった。ずっと痛かった。
留まりたかった。だから止まっていた。
一人で歩くのは怖かったから、周りの環境を壊さないようにしていた。話しかけられない限り話さないようにしていた。

それは拒絶されるのが怖かったから。拒絶されて、価値観や世界が歪むのを恐れていたからだ。

自分の見える世界が広がれば、それだけ脆くなると思っていたから、あたしはずっと足踏みをしてきたのだ。

でも、これからは少しだけ――ほんの少しだけ前に歩いてみようかなって思う。

目の前で怯えたようにあたしを見て、呆然として、それでも坂上を相手に向かい合っている男を見て、そう思う。

だってあたしが前を歩けば、同じように足踏みを繰り返しているヤツを――強くて弱いアイツを、前に引っ張ってあげられるハズだから。

あたしの憎悪はいまだ近い場所にある。深い所まで浸透している。それはいつかあたし自身を殺すかもしれない。

それでもあたしはなってみたいと思った。

これからは『何かをあげる側』に立ってみたいと思ったのだ。

例えそれが『私』から全てを奪った原点の影響だったとしても、彼は『あたし』に全てを与えてくれた原点だった事も間違いないのだから。

そんな彼のようになってみたい――隣に立ってみたいと思った想いだけは、歪んでしまったあたしの中でも絶対に綺麗なモノだったハズだから。

33・マインドワード

カーリアンが――あの『ヴァンプ嫌い』が穏やかに笑っていた。
どこかで、いつかは見慣れていたような笑みを浮かべ笑っていた。
俺の言葉を聞いて、色々考えてみせて、苦悩に顔を歪めて泣きそうになった後で、それでも照れなど一切ないままに笑っていたのだ。

それはいつも見せてくれる彼女の笑みとはちょっとだけ違ったモノで。
ずっと近くにいたスズカの笑みと似た暖かさと、でも少し違った別の誰かを連想させる強さを秘めた笑み。
スズカはほんのりと光る夜空に浮かぶ満月のような淡い笑みを浮かべてくれる。そっと心に入り込み、ゆっくりと浸透していくような……そんな優しい笑顔を見せてくれる。ずっと側にいて、時折に見せてくれるその笑みは、俺にとって間違いなく救いだった。
彼女の過去を思えば、その笑みだけでも十分すぎるほどに強さを感じるモノで……その過去の凄惨さを思えば、その儚い笑顔だけでも俺には過ぎた救いになっていた。

それに対してのカーリアンは、その印象だけで例えるなら太陽だった。明るく照らしてくれるような、しっかりと温もりを広げるような笑顔をみせてくれていた。
それも彼女の過去を思えば強さの証明にはなるだろう。出会ったばかりの頃とは雲泥の差だ。

しかし、その笑みは強すぎるだけに時々無理が垣間見えるモノだ。
まるで明るく見せる事を念頭においた『張りぼての太陽』……今にも雲に隠れそうな不安と危うさもあったのだ。
だけど今の彼女からはそんな弱さなんか欠片も見えない、スズカと似ているようにも感じるのに、彼女らしい輝きを放つ笑みを浮かべて俺を見ていたのだ。

――こんな罪人には過ぎた、もったいないほどの笑みを。
強さだけじゃない、しっかりとした存在感がある笑みを。

――なんで？
思わず時と場所を忘れて、呆けたようにそう問いたくなる。胸に染みて頭が熱くなる。
――なんで俺をそんなに真っ直ぐに見るんだ？
そう涙ながらに聞いて、自分に相応しい罵倒を望みそうになる。
だって俺はバカな子供だった。自覚のない空っぽの皇だった。空虚な世界に似合った空の始祖だった。
それに気付くとそこから一人逃げ出して、みんなを騙して安穏としていた。
そして今も。今までも守る為に戦って、その為に命を手にして、それを贖罪だって言い聞かせてきたんだ。命の代価は命で。平穏の代価は自らの平穏で。
そんな考えにすがっていた汚い罪人なんだ。
なのになんで――
なんでそんな俺に笑える？
『本当に笑う事が出来る』んだ？
泣けないから、泣いて許しを乞う価値もないから、だからどんな時でも笑うしかなかった俺に……造りモノの笑みしか持たない俺に本当の笑顔が浮かべられるんだ？

そんな事を思っているのに、それは間違いないのに、それでも今まで色々と掻き乱されていた心が……思考が、スゥーっと落ち着いていくのを感じる。

何故かその笑顔に救われた気になれる。

そんなワケなんかないのに……そんな事を思う価値もないのに……そんな考えが勘違いも甚だしい事くらい分かりきっているのに、それでも救われたような気がして――

「……つまんねぇな」

――そんなつまらなそうな小さな呟きすらも聞き逃しそうになって、ハッと我に返った。

まるで心底つまらない出し物を見させられた観客のような、期待していたモノとはまるで違う拙い物語に呆れ果てたような言葉で、自分が今すべき事を思い出した。

それと共に無造作に振るわれる坂上の腕が視界の端に映り、俺はとっさに蛇達を走らせる。

別に自分を守る為に蛇達を使う必要なんかない。こいつらは放っておいても『俺だけ』は守ってくれる。それを俺自身が望んでいなくても。

俺が慌てて全速で蛇達を走らせたのは、『後でぶん殴るから』『話を聞くから』と言ってくれた――勘違いでも救いをくれた、『三人目』の少女のすぐ真ん前……そこに鈍色の壁を展開させる為だ。

自動制御に近い蛇達を……もっと言うなら、『世界の核たる俺以外の為には動きたがらない蛇達』を、叱咤して彼女を守る為に。

突如ジャラジャラと音をたてながら這い寄ってくる蛇達にギョッとし、前方を覆うように展開していく鎖の群れに、さすがのカーリアンも多少腰がひけていた。

そんな彼女の姿を見て……そのすぐ真ん前で間一髪間に合った蛇の壁が何かに軋むのを見て、思わず大きく安堵の息を吐く。

とっさにコントロールをしてはみたが、久々でもなんとか思い通りに動いてくれた事に胸を撫で下ろした。

「はん、いい反応じゃねぇか？なんか必死みたいで笑えたぜ」

真空を受け、小さな音を立て軋む蛇達を見てニヤリと笑う男――関西の将軍が、『証人』と称した彼女を狙って力を使うと思ったのは、半ば直感に近かった。直感に従ってそれに対した行動を取っただけだった。

しかし、後一瞬でもその行動が遅ければ、真空は彼女に届いていただろう。

そのカンが正しかった事は、坂上の小さな世界に生まれた黒い虚無の進行方向からすぐに確信出来たが、何故この男が彼女を狙ったのかは分からないままだ。

坂上が彼女を狙うワケがないと、俺は思っていたから。

証人――つまりは自分こそが、『新皇をも超えた皇だ』という証人として、彼女の存在は必要不可欠なハズだと思ってきたのだ。

「なんかよ、胸がムカつくくらい甘ぇ事になってやがるから、死なない程度に腕でももちょん切ってやろうかと思ったが……まぁ、テメェのその焦ったツラが見れたから良しとするか」

しかし、そんな俺の疑問を嘲笑うようにそう言うと、坂上はその舌でペロリと唇を舐めてみせた。

灰色の狂気をより増幅させながら。

「どうせならドロドロとした復讐劇とか見たかったのによぉ、芝浦がご執心の『死にたがり』も思ったよりつまんねぇ女だな」

俺の神経を逆撫でする為に、敢えて俺以外を貶める。俺に向けるべき言葉の刃の代わりに、彼女へ――今のカーリアンへとその刃を振るう。

それはあくまでも坂上らしく、どこまでも効果的な言葉の羅列だった。

「罵倒して、貶めて、怒り狂って、泣き叫んでくれりゃ、『新皇』に多少の意趣返しくらいならさせてやろうかと思ったのによ……ほんととんだ茶番だ。傷の舐め合いにしか見えねぇ、ほんとシラケるぜ」

ケラケラと、ゲラゲラと、ヘラヘラと嗤ってみせる坂上は、そのまま無造作に大きく両腕を振るう。そして手首の先に付いた赤錆色の刃から、巨大な黒い虚無で出来た鋭利な刃を生んだ。

それが無造作に周囲へと走り、そのままヤツの世界を出ると、部屋の外壁を微塵に切り刻む真空の刃へと変わる。続いてはぜた真空の収縮に床が、壁が、天井を造る建材が粉塵となり――

その部屋……城塞の奥まった一角にある離れとも言える部屋が、その一角ごとあっさりと更地と化す。

カーリアンの前に展開させた鎖と、自動的に俺の前に展開した鎖の守る後方以外――つまり坂上の周囲から後方にかけて、上方も左右もまっさらな更地へと。

そこになんの躊躇いもなく、ただただ狂笑を深めてその体を震わせる。酔いしれるように大きく体を反らせて空を見上げる。

「まぁいいけどよ。なんせやっとこの時が来たんだしな。
……ほんと待ちくたびれたぜ。一年経ってようやくだ」

そう呟いた声は、先ほどの嘲りよりもずっと小さく――でも深く黒い色を含んで俺の耳朶を打つ。

「今日やっと！あの夜と同じ舞台、あの時と似たこの夜に！この煮えたぎる屈辱が晴れるッ！やっと俺が『皇』として立てるッ！あいつに――結城の野郎に並べるッ！！」

そこに俺を――そしてカーリアンを揶揄する色はもうない。もうそんな言葉のやり取りは不要とばかりに、空へと声をかけ続ける。
その体を大きく反らせ、天に吠えるように。
赤錆が浮いた世界を、その周囲で震わせながら。

それが誰に対する言葉なのか……もちろん俺には分かった。俺だからこそ分かった。同じように『運命』に捕らわれていたからこそ分かった。

坂上はその力の『強さ』に捕らわれ……
俺はその世界の『優しさ』に捕らわれた。
坂上はその力の『特異さ』に惹かれ……
俺はその世界の『輝き』に惹かれた。

表裏一体。まさに合わせ鏡。
共に惹かれ、捕らわれ、引きずって――誰よりもあり方が近いクセに、誰よりも求めたモノが遠い反存在。
だからこそお互いが許せず、お互いを認めたくない。

どこかで違う選択をし、違う道を選んでいたら、俺は『新皇』と

して関西に攻め込んでいたかもしれない。皇の道に狂っていたかもしれない。始祖たる世界に酔っていたかもしれない。

ひょっとしたら坂上は、智哉の『相棒』のままそんな俺の敵になっていたかもしれない。『ノルンズアート』で生まれた力を駆使した仲間達……『モノ（力）と一緒に変えられた運命』を受け入れた仲間達と、俺（新皇）達の前に立ちはだかっていたかもしれない。

確実なのは、俺達が横に並ぶ事だけはなかっただろうという事だけ。俺達はどんな道を行っても、どこまで行っても『敵』だっただろうという事だけだ。

「あぁ、今夜やっと俺は一年前の清算が出来る――」

だからその言葉は俺にも当てはまり――

「今夜こそ俺は皇になるんだ」

――俺の望みからはかけ離れている。

「俺の後ろに」

それだけ言ってカーリアンを俺の背後へと移動させる。無論坂上には彼女を殺すつもりなどないだろう。彼女には『純粋な第三者としての証人』という役割（ロール）を期待しているハズだからだ。自分の敵側であり、自身自らが事情を語ったという背景がある彼女以上に、そのロールが相応しい人物もいまい。

だが傷つけるつもりもないかと言えば、そうではないだろう。

『腕一本くらい』切り飛ばされても、人間は簡単には死なないの

だから。目や耳さえあれば、坂上からすれば十分なのだから。
だから俺は彼女にそう声をかけ、蛇達を護衛につけたまま俺の背後へと移動させる。

彼女の『紅』は非常に強力ではあるが、純正型の世界と比べるとやはり心許ない。
なによりいかに彼女の能力でも、燃焼には『酸素』が必要不可欠だ。
彼女の能力は『発火源』と『燃料』を能力で補えるが、酸素だけはどうしようもない。坂上の『真空』とは相性が悪過ぎる。
そして恐らく彼女は、坂上から『純正型の世界』について詳しくは聞いていないだろう。そこまで話す必要性が坂上にはないし、それを理解させるだけの時間もなかったハズだ。
だからこそカーリアンは戦うべきじゃない。
もちろん、いまだ多少混乱しているであろう彼女は、多分能力をそう使いこなせないだろうという理由もある。

「はん、余所見たぁえらく余裕だな？ムカつくぜ、クソヤロウ！」

吠える坂上はそのまま俺へと腕を振るい、それに対抗するかのように牙を剥く二筋の蛇と『力』をぶつけ合う。

「シャッ――！」

空気が漏れるような坂上の声と、ジャラジャラとうねる音。しかし、坂上が放った真空は、唸りながら空間を乱舞する蛇達ではなく、飛翔する鎖にぶつかる前に地面へと突き刺さり粉塵を舞いあげる。
もうもうと吹き上がる土煙の中、残る三筋の蛇達に守られたカーリアンが、ようやく背後へと来た事に安堵しつつも油断なく周囲を見渡した。

そして自身の周りを舞っていた蛇達は、坂上がいた辺りへと向かわせ、カーリアンの護衛の三筋はそのまま俺の防壁として呼び戻す。
少し離れた後方にいる限り、カーリアンにまで攻撃が飛ぶ事はないだろうし、何より今のままでは手詰まりなのだ。
一年前のように、油断を含んだまま真っ直ぐに向かってくるならまだしも、このように土煙を舞わせ視界を奪うような搦め手を使ってこられると、正直手を抜く余裕なんて全くない。

一年前のままの坂上だと思っていてはさすがにマズいという事だろう。
確かに坂上の『世界』を出た力がただの真空に変換されているかぎり、鎖の防壁で防ぐ事は間違いなく出来るだろう。俺の理の断片でしかない鎖でも、それだけは確信を持って言える。
だけど、それは俺自身が攻撃を食らっても平気だという事と同義じゃない。
やはりその殺傷能力は俺自身にとっても危険極まりないのだ。

辺りからは対空迎撃の為に乱舞し、唸る蛇達のあげる甲高い金属音と、鈍い音を上げ何かが破砕する重低音。
それらに紛れるように迫っていた黒い影にチラッと視線を走らせると、そちらへと残った左のシャクナゲから弾丸を撒き散らす。

「ウザッてぇンだ！そりゃ俺には効かねぇって分かってんだろッ！」

しかしその黒い影は、幾多のヴァンプ達を葬ってきた空圧の弾丸を全く気にも止めない。
手をかざしながら走るだけで常時その指先から黒い歪みを生み出していき、空圧の弾丸を飲み込んでいく。
そしてそのままスピードを落とす事なく俺へと迫ると、両手首にある赤錆色の刃を蛇の防壁へと振りぬいた。

もちろん蛇達も黙ってはいない。攻撃専任の二筋が取って返して牙を剥き、宙を走り、その金属の先端を赤錆の世界へと潜り込ませようと頭を振るう。

それでも坂上は全く躊躇わない。自らの世界へと食い入ろうとする蛇を省みないまま、その手首の刃で鎖の防壁の一部を僅かに切り払う。

ギィンと甲高い音が世界に響き、打ち合わされる世界の欠片と欠片。打ち負けたのは……刃ではなく蛇。

打ち負けたと言っても、そこに出来たのはわずかな決壊だけだ。しかし坂上は、そのスペースに赤錆色の刃を強引にねじ込んできた。

――クッ、マズい。

そう毒づく暇もなく、小さく開いた防壁の穴の向こうで笑う坂上が見えた。

その次の瞬間には、動かすスペースの少ない中で、ねじ込んだ刃を僅かに振るう。

ほんの数センチに満たないが確かに振るう。

――鎖の防壁の向こう……つまり守られていた俺へと向かって。

「――ッ！」

生まれでる極小の黒い歪み。それがこちらへと走ってくるのを確認するまでもなく、とっさに大きく体をひねってかわす。態勢など気にする余裕もなく、不様に転げるようにして直撃をかわしたのだ。

「――Ｌｉｎｅ　ｄｒｉｖｅ！」

それは間違いなく致命的な隙で――迷わず口の中で小さく蛇達に

指示を飛ばした。それとほぼ同時に、かわしたすぐ真横で巻き起こった空間の収縮に思わずたたらを踏む。

予想していたとはいえ、やはり体はその気流に大きく流された。蛇達の護りもなければ態勢も不利なのだからそれも仕方がない。

そんな俺の動揺に合わせて僅かに乱れる防壁の蛇達。それを嘲笑うかのように、ニヤリと笑った坂上がその手を俺へと向けようとして――大きくその場を飛びずさった。

直後、振るおうとした坂上の手のすぐ先に舞い落ちる二本の黒い鎖。それに続いて繰り返される絨毯爆撃じみた落下攻撃。

『Ｌｉｎｅ　ｄｒｉｖｅ』という指示に従った蛇達による急降下攻撃だ。

坂上の世界を浸食しようとしていた蛇達が、俺の指定した言葉に従って僅かに迂回すると、上方から一斉に突っ込んできたのである。

それにより鈍い爆音が地面を削り、ボロボロの床が大きくはぜる。

蛇達を的確に動かす為……そして少しでも自分の力による被害を抑える為だけに、昔やってきた『ワード作り』が役に立った。本来は出来るだけ最小限の力を、出来るだけ完璧に制御する為だけに作ってきたワード。

それがこんな形で役に立つとはまさか思わなかった。

その考えに、やはり坂上を侮っていたんだろうという思いが浮かぶ。

今した事は、単純に言えば完璧な搦め手だ。世界に覆われた坂上に直接蛇達が喰らいつく事は出来なくても、その爆撃じみた力の余波や、飛ばされる瓦礫の威力だけでも脅威となる。それを狙っただけの単なる鎖の特攻だ。

『純正型の世界に別の純正型の世界に属するモノは入り込めない』が、現実世界にある物理力だけは違う。

黒い歪みや赤錆の刃は坂上の世界の中にしか存在しえないが、現実世界の修正を受け真空へと変換された歪みは、他の純正型の世界でも存在出来るのと同じだ。

物理的な肉を持った核（坂上）がいるのだから、それはそうおかしな事ではない。

本当に搦め手で、純正型の戦い方としてはお粗末極まりない。それだけに意表を付く意味では効果的とも言える。

そんな考えは坂上も分かったのだろう。

大きく後方へと飛ぶようにして鎖が弾いた瓦礫をかわしてみせる。

そして小さく笑うと、首をコキコキと捻って鳴らしてみせた。

「はん、ちったぁ本気（マジ）になってきたかよ？」

……ペロッと唇を舐めて歪めながら、一片も侮りを見せる事なく、どこまでも楽しそうに。

「まぁ、えらく慌てた素振りでかわしやがるから、なんか企んでるんじゃねぇかとは思っちゃいたが、まさか直接ぶつけてこずに力の余波で飛ばされた瓦礫を使ってくるたぁびっくりしたがな」

「……」

無言で見据えていても、なお坂上は上機嫌で、その黒鱗が手の甲にびっしりはえた右手を、ギリギリと音が聞こえてきそうなほど強く握ってみせた。

「でもよ、今のは意表を付かれたから少しばっかり焦っただけだ、二度は通じねぇぞ？俺にゃ真空の刃だけじゃなく、『歪み』の盾がある事も知ってんだろ？」

そう言ってニヤリと笑うとさらに大きく飛んで距離を取り、腕をダラリと垂れさせた。

ギチギチギチ――

その手の先、赤錆色の刃の辺りから、そんな何かがこすれる音が聞こえ……薄い黒色の膜が生まれそれが坂上を薄く包んでいく。

それに思わず目を見張る俺を愉快そうに見つめ、そのまま俺の後ろ――離れた位置に立っていたカーリアンへと向き直る。

「女ぁ、もっと下がってろ！テメェが近くにいちゃこいつが気にして本気を出せねぇだろうが！本気のこいつでなきゃ意味がねぇんだ、邪魔すんな！」

その言葉と共に後方――カーリアンと俺の中間地点がはぜる。抉れるように大地がかける。

それはヤツの真空がはぜた時と同じ現象で……思わず舌打ちが漏れた。

どちらの力を振るう時にも、ヤツの腕は……力を生み出すのに必要なプロセスであるハズの『腕は振るう』という行為が含まれていなかった事に。

「不思議そうだな、あん？腕を振るってねぇのに、なんで空間が弾けたかわかんねえんだろ？」

「――Ｐｉｅｒｃｅｒ（射し貫くモノ）」

坂上が昔のままだとは思ってはいなかった。確かに思ってはいな

かったが、それでもまだ考え方が甘かったらしい。そんな思いに思わず小さく歯を軋らせる。

しかし、そんな事は表に出さないまま蛇達に指示を飛ばす。

坂上の『理の全て』は分からなくても――いや、分からないからこそ、攻撃の手は緩められない。

俺のそんな思いを知ってか、あるいは小さな単語による指示に従っただけか、二筋の蛇達は再度牙を剥き宙を走る。

愚直なほど、そして一切他に気を向けない速さで、二対の蛇が真っ直ぐに坂上へと走る。

それに俺は平行するように足を踏み出しかけて――

残る三対の蛇達が、その進行方向を遮るように壁となった。

まるで坂上へと向かおうとしていた俺を留めるかのように。

蛇達は自動的に俺へと向かってくる『力に反応するだけだから』――そして真空は『無色透明だから』俺自身にも良く分からないが、恐らくは踏み出そうとした先に無色の刃があったのだろう。

それを鎖が踏み砕いたんだと悟り、進行方向を変えて慌てて距離を取った。

……もう間違いない。坂上の真空は『腕の振りだけで生まれているワケじゃない』。

「はん、その鎖はやっぱ厄介だな。自動制御か、はたまたなんか別の法則でもあんのか、そこまでは分からねぇけどよ」

ただ一心に突っ込んできた蛇達を、その赤錆色の世界の境界線で受け止めながら語る坂上。その声にはなんの感慨もなく、蛇達を気にした素振りもない。

一年前はあっさりと食い荒らされていたのに、今は蛇達の全力の

特攻を全く意にも介していない。

「まぁ、あっさり決着がつくたぁ思っちゃいねぇが。でもよ、今の俺があの時のまんまたぁ思ってねぇだろ？」

むしろ悠々とした歩調でこちらへと歩みを進め――

「そろそろ本気で行くぜ？ちっとずつ刻まれたくなきゃ――」

そう言って、まるで見せ付けるかのように、その表情へと深い笑みを刻む。

「――お前ぇも本気で来な」

その笑みに今までにない嫌な予感が走り――直後には俺の周囲の大地が、小規模な空間破砕に包まれていた。

33・マインドワード（後書き）

次回更新は月曜日。月曜日は毎回（何かない限り）更新致します。
前書きも後書きもあったらさすがにちょっと鬱陶しいかと思いまして、今後はお知らせ、御礼、設定解説や紹介は、まとめて後書きでいたします。

今回は『ワード』について。

関西に比べて強力な純正型が多く、その数自体も多い関東の純正型達が寄り合って『世界』を制御する為に編み出した方法の一つ。
自分自身に対する暗示や刷り込みにも似た方法であり、至極単純な理論によって確立されている。
つまり『特定の言葉に反応して、それに沿った動きを世界が見せる』事を目指しただけの単純なモノである。
シャクナゲの蛇とスズカの鈴（というより鐘）は、これら決められた幾つかのワードに従って動かす事がほとんど。
刷り込みに近いだけあり、反射に近い形での単純な迎撃行動（になりうる形での理の行使）しか出来ないが、二人の場合はもともと力を効果的に最小限の形で使う事を目的としている為、このワード方式を使っている。

その上二人は、無意識に世界が展開されないように、解放用ワードを設けようと試みてはいたが、そちらは半分しか成功していない。
つまりいかに幾度も刷り込みをしても、完全に肉体とは別物である内面世界を抑え込む事は出来なかったのだ。

ちなみに、今でもこの試みは継続中だったりする。

なお、ワード式以外にも自己催眠による『ミラー式』や、特定動作を組みこむ肉体連動の刷り込み『アクセル式』など、それぞれの地方や所属団体によって違いもある。

34・スケープゴート

『ん～、アカちゃんとかでいいっしょ？真っ赤だしさ。あん？なに、ダメだって？ケチケチすんなよぉ、アカちゃん』

あたしを『アカちゃん、アカちゃん』と呼んだ女性は、全部知っていたんだろうか？

目の前で続く戦いを見ながら、ふとそんな事を考えてしまう。

『カーリアンねぇ……アカちゃんも可愛いのになぁ。ったく、こぉんな可愛い子にそんなまんまの名前付けちゃってまぁ……。気のきいた、かぁいい呼び名を付けてあげるくらいの器量見せろってのよねぇ。アカツキもシャクも融通効かないんだからぁ』

みんなが頼りにして……みんなが付いていく事に迷いなんか持ってなくて……そんな黒鉄の中心たるアカツキとシャクナゲを、大声で面と向かってけなしていたのは、黒鉄の中でも『錬血』たる彼女だけだった。

それを聞いても、みんなが笑っていたのは彼女だからだ。

ケ・セラ・セラ。そんな口癖を持ちながら『なるようになる』為に頑張れる女性だった。

……まぁ、そのネーミングセンスはともかくとして。

『アイツら二人はさぁ、ほんっと危なっかしいんだよねぇ～。やっ

ぱこのミヤビさんが側にいてやんないとにゃ～♪』

姉さんぶってて、細々と色々気が付いて、それでもどこか子供っぽい人。

最初はシャクに頼まれたからだろうけど、ずっとあたしに声をかけてくれた数少ない人。

『バッカじゃん!?そんなに無駄死にしたいってんなら、あたしがここでぶっ殺したげよっか?突っ込むなら周りに迷惑かけないように突っ込めよ、バカチン!猪かっ、あんたは!』

彼女はあたしに戦い方と生き残り方、そして守り方を教えてくれた。黒鉄としての基礎を叩きこんでくれた。

文字通り『叩きこんで』くれた。

思いっきり叱ってくれて、しょっちゅう手も出してきて、ヤクザな蹴り方で蹴りも入れてきて、逃げ出したらいつまでも追いかけまわされた。

でも叱った後には

『無茶すんなよぉ、死んだら泣くよ?あたしもカクリンも泣く。カクリンはいいけど、あたしは泣かすなよぉ……』

とか言って、バカな真似をした当時のあたしに抱きついてきた。

こんな暖かい女(ひと)にはあたしじゃなれないんだろうな……そんな事をなんとなく思っていた。

彼女はあたしみたいな問題児や、黒鉄としての後輩達を導いて――そんな彼女の教え子達が、いつしか自然と『雅組(みやびぐみ)』なんて呼ばれるくらい、黒鉄に影響力があった人だった。

『……あたしじゃアイツらの――アイツの側にいらんないんだよねぇ。アイツは多分、いつか帰っちゃうからぁ。あたしの『錬血』じ

ゃシャクを助けるにゃちっと足んないだろうなぁ』

……あの人は知っていたんだろうか？

あの一度だけ漏らした悲しみの声は、全てを知った上でのモノだろうか？

だから足りないと悲しそうにしていたんだろうか？

それでも……そんな考えを持っていても、ずっと歩き続けていられた彼女は、やはりとても強い人だったと思う。

誰か一人が全部を守る事が出来ないなら、たった二人じゃ全部を背負いきれないなら、みんながみんなを守れるように……自分自身の力で生き残れるように——そう願える強さがあり、その為に新米黒鉄達の『恐怖の鬼教官』として、あの人は頑張っていたんだろうから。

まぁ新米いびりが半ば趣味だったのも間違いないだろうけど。

『……頼んだ……からぁ。……『カーリアン』の……『紅』で……あいつを……シャクを助けて……あげて……』

それでも、最後の最期まで近衛『旭』から新人達を守ろうとして——圧倒的な数の敵から、出来るだけ多くの教え子達を守ろうとして——あたしに後を託してくれた。

まるで今の状況を読んでいたかのように。

彼女は知っていたのだろうか？全部分かっていたんだろうか？

だとしたらやっぱり『ミヤビ』はスゴいと思う。

本当にスゴいんだと思う。

……でもね、ミヤビ。
なんていうかアレだよ、ちょっとだけ今のあたしは複雑な気分だよ？
そんな語りかけを思わず脳裏の女性にしてしまう。
『ケ・セラ・セラ、なるようになる、だよ。アカちゃん』
そんな答えが返ってくるのは分かっていても。

複雑になる理由はもちろん多々ある。しかしそこに、シャクが新皇だったとかいう理由は、実はもうあまり含まれていない。
もちろん全然ないとは言わない。
だけどそれは、『後で話聞かせてもらう』と言ったのだから、その話を聞いてから悩めばいい……そんな風に無理矢理自分を納得させている。
先送りにしただけ、と言えるかもしれないけど、あたしにしてはすっぱりと割り切りが出来た方。ウジウジ悩んで、怖がっていない分だけ真っ直ぐ立てていると思う。

じゃあこの複雑な気分の大勢を占めている理由は何かというと――なんかこの場であたしだけが、見事に置いてけぼりを食らっているような気がして仕方がない事だ。

坂上が腕を振るった。
事前に気付いたらしいシャクが、その鎖であたしの前に壁を作った。
『腕ぐらいちょん切ってやろうと思った』とか坂上が言っていたから、多分あたしは攻撃されたんだろう。
それをシャクの鎖が防いでくれたんじゃないか。現に鎖の壁に何かがぶつかったかのようにちょっとたわんだ後、その前方が弾けていたし。

で、今度はシャクの手から伸びる鎖が走って、坂上の1メートル手前の空中でうねってみせて――

坂上がシャクに突っ込んでいって――

シャクがよろけて――

坂上から少し前方へと、鎖が上方から突撃をかけた。

……もの凄く高度で、近寄ったら危険な攻防をしているのだろう。

二人共どんな能力を持っているのかは分からないけど、辺りの破壊具合からしてそれだけは分かる。

でも、あたしは見事に乗り遅れている気がする。

いや、多分間違いなく乗り遅れているんだろう。

なにせ、シャクの鎖の動きは別としても、坂上の攻撃方法は見えないし、お互いの動きの速さやあちこちから舞い上がる粉塵などで、その攻防のほとんども見えないんだから。

ギャラリー無視もいいところだ。

もちろん単なるギャラリー（観客）なワケではないけど。

でも、ただこのまま見ていていいモノか、それぐらいは考えてしまう。

シャクは確かに嘘を付いた。

結果的に初めてあたしから『信頼』を奪った。絶対的な信用を奪った。あたしの命で沈黙を強いる代わりにそれを奪った。それは間違いない。

でも、それだけであたしにくれたモノとの割合が差し引きゼロになったワケじゃない。

ほんの少し欠けただけ。今までくれたモノと比べれば、本当に少

しだけ差し引かれただけだ。
だからここはシャクの味方をして肩を並べて戦うべきなんだろう。ずっとそうありたいと願ってもきたし。
混乱も大分落ち着いて、色々と自分の中で考えて、なんというか一皮剥けた気がするぐらいだ。これなら普段通りとはいかなくても『紅』を使えるだろう。
なにより坂上はヴァンプだ。いまなおヴァンプのままで、ずっとヴァンプだった男だ。あたしの紅が向かうにたる相手だと思う。

それでも――それでも、だ。
こんな攻防の中に……しかも攻撃手段が見えない相手に、あたしが突っ込んでいってどうなるというのか？
多分相手にされないどころか、障害物として真っ先に狙われるのが関の山。その上でシャクに庇われたりでもしたら、もう目も当てらんない。
肩を並べるどころか、足を盛大に引っ張るオチになりかねない。

あぁ、ホント、彼女は――『錬血のミヤビ』はすごかったんだと思う。
自分にやれる事をしっかりと知っていた彼女なら、この場にいてもなんらかの的確な行動を取れただろう。
ケ・セラ・セラ……やる事を決めて、それに全力を尽くせば、後はなるようになる。そんなあたしには出来ない考え方を普通に実践出来ただろう。
なにせ、バカチンだの猪だのと罵倒してきたけど、ヴァンプに突っ込むしか能がなかったあたしを、ちゃんと生き残れる黒鉄へと導いてくれたぐらいだ。本能の奥深くにまで、戦いを見据えるだけ事の大事さを刻んでくれたほどなのだ。
それだけでも偉大な先輩だったと思う。

……もうここでは、あたしはただ見てるしかないんだ。ただ見ているべきなんだ。

そんな認めたくない『正解』が導ける程度にでもなれたのは、間違いなく彼女の鉄拳指導によるモノだ。

冷静に考えれば、あたしがここで何も出来ないのも仕方がないと分かる。

だって今のあたしよりも、当時の彼女の方がまだ強かっただろうから。ずっと強くて、ちゃんと全部受け止めていたんだと思うから。

彼女には『力』と『知識』、『強さ』と『優しさ』があった。それはまだあたしが及ばないレベルのモノだ。

でもあたしには『命』と『可能性』――『未来』がある。力と知識、強さや優しさを補えるだけの『時間』がある。それの源になるモノもすでに託されている。

彼女自身があたしみたいな教え子達を導いて、共にいた時間で色々と植え付けてくれている。

そして、最後の最後にあたしに願ってくれたモノ。

『頼んだから。アカちゃんの紅で、シャクを助けてあげて』

――それもあたしの胸の内にちゃんとしまってある。彼女の願いもあたしの中に宿ってる。

それでも今のあたしに出来るのは、『見ている事』だけ。

無闇に『バカチン』な真似をしない事だけだ。

それが悔しいから――情けないからこそなんにも出来ない事に焦っているんだと思う。スズカなら……あの銀鈴なら……そう考えさ

せてしまうんだろう。
でも当時のスズカでも、きっとミヤビよりずっと強かった。今はさらにあの『銀鈴』は強くなっている事だろう。
妹みたいに思えてならない天性の妹キャラだけど、あの子の強さならきっと坂上にも負けはしない。
彼女はあたしよりも全然強く、あたしより全然シャクに近い場所にいる。
あたしじゃ届かない力の高みと、あたしには見えない世界を間違いなく持っていると思う。

それでもミヤビは、あたしにこそ願ってくれた。まだ弱いあたしだからこそ託してくれたんだと思う。
それを思えば、無闇に突っ込まないだけでもちょっとは期待に答えられたのだろうか――？
それは自分勝手な考えかもしれないけど、その考えがあたしを冷静にしてくれているのも間違いない。

だからこそ、あたしはここで足を引っ張るワケにはいかないのだ。
それだけは絶対だ。
たしかに手は出したくなるし、手を出しても責められる事はないだろう。相手は確実に敵で、ヴァンプで、仲間達の仇の大元だ。
ミヤビを殺したヤツの仲間で、クロネコを殺した連中のトップで、その他多くの仲間達の血の上に胡座をかいているヴァンプの王だ。
……そしてシャクやアカツキの敵だ。

でもここで手を出すのは違うんじゃないかと思う。大義名分はあるし、そうしたいとも思うけど、その結果どうなるかもちゃんと見れているから。

「はぁ、見てるしかないのかな？」

坂上も邪魔だからもっと下がれって言ってるし、シャクもそれに対して何も言ってこない。
そこからもシャクがあたしに望んでいる事は明らかだ。

「ミヤビってば、ほんっと無茶言ってくれるよね。こんなの教えてくんなかったじゃん」

思わずぶちぶちと呟きながら前を見る。
相変わらず喚いている坂上と、黒い鎖に周囲を守られながら向かい合うシャクを。
ものスゴい速さで行き交う鎖の特攻と、一歩一歩確実に間合いを測る坂上。
その攻防ごとに削れていく城と地面。かつて天井があった場所には夜色の空が見え、少しだけ赤っぽい月が顔を出している。
弓のように細い、大きく欠けた月が。

「かはっ……」

それに一瞬見入った隙――ほんの一瞬しか空に目を向けていなかったというのに、気付けばシャクはかすれたような息と共に、その口元から血を滴らせていた。

「えっ……？」

……正直何が起こったのかさっぱり分からなかった。そんな攻撃を食らったような音は聞こえなかった。
一瞬とはいえ、取るに足らないデジャヴにとらわれた事を後悔す

る。
　シャクの口元から溢れる喀血は、間違いなく内臓の損傷によるモノだろう。こらえきれず溢れるそれは、とても口を切ったとかいうレベルのものじゃない。

「シャクっ！」

　思わず声をあげ、駆け寄りそうになる。
　一瞬で思考が飛んでしまっていたから、シャクが左手を上げて止めてこなければ、間違いなく駆け寄っていただろう。
　でもやっぱり腕を上げるだけでも辛そうで――声を上げる事すら出来ないその様子に、思わず頭の中がカッと熱くなる。
　地面に手を付き、なんとか跪く事だけは耐えていたけど、その体を纏ったコートがボロボロになっているのが、離れていても目に入ってしまう。

「今――」

「……大丈夫だから」

　――行くから！
　そう叫ぶ手前でシャクはなんとか口を開き、それだけを言って立ち上がろうとする。
　その様子は、どう見ても『大丈夫』そうには見えない。
　恐らくあの地面を削る見えない刃ではなく、地面や壁を破砕した見えない爆発の力にやられたんだろう。周囲の大地には小さなクレーターがいくつも穿たれ、大地の欠片をより細かな粉塵へと変えている。
　多分あの小さなクレーターは、空間の破裂じみた力が『立っているシャクの間近』で起きた際、その余波で削れて出来ただけのもの

だと思う。
それほどの力を食らって大丈夫なワケなんかない。
すでに離れとも言えるこの奥の間は、床すらも原型がなく大地がむき出しで、粉々の建材がが散らばっているのだ。いかなシャクナゲでも、その部屋の様相に見合う程度にはボロボロのハズなのだ。

「……俺は大丈夫だから」

それでもシャクは、そんな事を言いながら——ボロボロになりながらも立っていた。

——なんで？

そんな呆けた感想が普通に出てくる。
確かに一瞬だけ……本当に一瞬だけ月に見入っちゃってはいた。
いつかどこかで見たようなデジャヴに、つい見入ってしまっていた。
でも一瞬だけだった。
本当に一瞬だけだった。
——なのになんでシャクは、その一瞬であんなにボロボロになっているんだろうか？

それがどんな力によるモノかの推測は出来ている。
でも、あたしが混乱しているのはもっと別な理由からだ。
ついさっきまで……空を見上げるまではほぼ互角だった。
完璧には見えないながらも、そんな印象を持てるぐらいの経験はあたしにもあるつもりだ。
それがほんの一瞬——本当に一瞬で崩されてしまった理由が分からない。
変わっている事と言えば、大地穿たれた小さなクレーター群と、額に手をやって愉快そうに笑っている坂上だけ。

離れた距離に留まって、シャクを指指しながら笑い転げている将軍だけだ。

何があったのか、どんな理由で今回の攻撃をシャクがかわせなかったのか……それが分からない。

「おいおい！結構まともに喰らいやがったな？少しゃ反応しろよ、一発で決まっちゃつまんねぇだろ？」

そんなあたしをそっちのけに、坂上はなお歩みを進めていく。

鬱陶しげに目の前の宙にうねる鎖を払うような仕草を見せながら、まるで見せつける為だけに自らの周囲の大地をえぐっていく。

おかしそうに、愉快そうに笑いながら。

相変わらず空気のうねる程度の音しかしない……破壊痕の凄惨さからすれば無音と言ってもいいその攻撃は、そのままシャクへと向かって広がっていく。

そんな攻撃が、やがて俯いていたシャクがさっきまでいた場所に近い地面を削る。

「……はん、さすがにこれはかわしたかよ。ま、そうこなきゃな！」

だがそこはシャクナゲ。いくら傷ついてはいても、そんな目に見えて迫る攻撃を食らいはしない。

気付けば、シャクはすでに低い姿勢で疾走していた。坂上に迫るようにその身を踊らせていた。

まるで這うような低い姿勢で、先ほど削れた地面を迂回するように坂上へと迫る。

その駆け出した瞬間はあたしにも見えなかった。離れた場所にいたあたしが、地面が削れた事に呆気に取られた次の瞬間には、もう彼は回避と攻撃に移っていたのだ。

そして自分を覆うように五筋の鎖達を周囲に従えながら、その左

手に握られた銃を坂上へと向ける。

「クドいンだよっ！そりゃ効かねぇってんだろ！」

それに吠えながら坂上は無造作に腕を振るい――

今度は鎖達が地面を打つ。

坂上が、やや苛立たしげに銃を向けるシャクに返答したその僅かな合間に。

落ち着いてきた粉塵を巻き上げるように、地面に喰らいつくように、その先端を激しくひねりながら。

それとほぼ同時に三度地面が不可視の何かに削れ、鎖が舞い上げた粉塵をさらに細かく砕く。

離れて見ていたあたしからは――いくら混乱していても、黒鉄としてそれなりに長くシャクの側にあたしには、その攻防の意味……シャクの狙いが分かった。

しかし、粉塵のど真ん中にいる坂上には分かっていたかどうか。

自らの大地を削る不可視の攻撃を誘発する為に、シャクが銃を向けたという事には気づいたかもしれない。苛立たせる為に、鎖じゃなく銃を向けたという事ぐらいには気づいただろう。

でももし突っ込んでいく鎖の進行方向を見誤らせる為だけに、目くらましを使ったと思っているなら……それは坂上の致命的な間違いとなる。

あいつはそんなに浅はかなヤツじゃない。

シャクは伊達に『黒鉄最強』を冠してはいないのだ。その銃の腕だけでそう呼ばれるほど、ウチの連中は甘くなんかない。

鎖達の全て――地面をえぐった後、僅かにその進路を変え、坂上の意識をそちらへと向けている『その鈍色の鎖達ですらも二番手の陽動』でしかない。

本命はそのさらに一手先。

坂上へと向かう鎖じゃなく、目くらましに紛れて、鎖の進行から大きく外れているシャク自身だ。
粉塵の中を転がるように身を低くして、坂上の背後へと回っていた彼の左手に握られた『シャクナゲ』。
鈍色の鎖に比べれば、坂上が侮っているその弱い攻撃手段こそが恐らくは詰みの一手。

今までのシャクは、ずっと鎖による攻撃をメインに繰り返してきた。それはそちらの方が強いからだ。その考えに間違いはないだろう。
今までは銃撃を陽動に使ったり、牽制に使ったりしかしてこなかった。何度か無効化されてきたりもした。
それぐらいにしか使えなかったんだと思う。それも多分間違いない。
しかし、それでも敢えて銃撃を牽制と陽動に使ってきたのは、いざという時に『シャクナゲ』を侮らせる為だったとしたら……？
鎖だけで倒せない時の為の保険だったとしたら？
そう思えるほどに――全てがこの為だとしか思えない計算された行動だった。

確かに今まで何度か坂上に向かって放ってきた銃弾は、その度に無効化されてきた。
原理は分からないけど、あの『シャクナゲ』の弾丸が坂上には届かなかった。

――しかし、それが『零距離』からだったならどうだろうか？後ろから迫り寄り、その後頭部に直接銃口を突きつけて放ったとしたら？それまで無効化させられるだろうか？
あたしはそこまでは出来ないんじゃないかと思う。
坂上の力の原理があたしには分からないけど、もし坂上にそれが

出来るとしたら、シャクには――今ここで将軍と相対している黒鉄のシャクナゲには、それが分かっただろう。そして別の確実な手段を考えたんじゃないかと思うのだ。

こうして行動に移したからには、シャクはこれでイケるという確信があったからだと思う。

なにしろこの行動にはリスクがある。シャクナゲを後頭部に突きつける為には、そのリターン（成果）に見合っただけのペイ（代価）がかかる。

先ほどまでとは違い、鎖による防御を完全に捨てた、完全な捨て身というリスクが。

先ほどの攻撃に意表を付かれていたのは、あたしだけじゃなくシャクも一緒だっただろう。

それでも迷いなくその方法を取れたのは、戦い慣れたシャクだからこそだ。でも、そのリスクを冒すだけの価値を見いださなければ、いかな彼でもここまで躊躇いなく実行は出来なかったハズだ。

その手を選ぶには、いかなシャクでも『零距離からの銃撃ならば勝てる』という前提条件を確信しなければならない。

普通なら様子見に走る。あたしでも多分そうする。

意表を付かれたら様子見に走るのが大半だと思う。

ジリ貧になるのが目に見えていても――そして今なら逆に意表を付けると分かっていても、そう簡単に出来る事じゃない。

そしてそれに見合ったリターンは約束された。そう思った。

坂上は完全に後ろから迫るシャクに完全に気づいていない。

――取った！

思わずそう快哉を上げそうになった。
完璧なタイミングで、餌（鎖）まで用意して、事前に『銃は脅威にならない』という思考の誘導までした上に、目くらましまでしたのだ。しかも彼の移動速度は、離れた位置のあたしから見ても断然早い。
その体の傷を感じさせないほどに速い。
その低い姿勢のままでシャクナゲを取り回す。
坂上には反応するすべすらない、そう思えた。
それでも――

「なんでっ！？」

――それでも、その彼の行動に結果が実る事はなかった。
無様に倒れたのは坂上じゃなく、シャクの方だった。
見ていたあたしからしても不可解さで……思わず声を上げてしまうほどの異様さで、シャクの進行は止められたのだ。

完璧に意表をついていたハズなのに、坂上自身は『そちらに意識を向けていなかったのに』、倒れたのは意表を付いた側であるシャクだった。
またもその周囲の地面が今度は『勝手に抉れ』、シャクをボロボロに引き裂いた。坂上は明らかに鎖にしか意識が向いていなかったのに。
どこまでもシャクの狙いは……タイミングからダミー、そのスキルまでが完璧だったと思えたのに。

「危ねぇな、いつの間に後ろに周りやがったよ？油断なんねぇヤツだなぁ、あん？」

今度こそ膝をつくシャクに嗤う坂上。ダミーとして向かい合って

いた鎖達の動きも目に見えて緩慢になり、地面を這いずるようにシャクの元へと戻る。
攻撃する為に突き出していた右手は、血と埃でグズグズだ。
飛び散ったモノか、はたまた頭から流れ落ちたモノか、その頬も赤く染められている。

「お前……真空を……」

「あぁ、やっぱバレちまったか。ま、仕方ねぇやな。今のは完璧に意表付かれちまったしよ」

「なんでっ！今のは完璧だった！完全に後ろに回って、アンタだって気づいてなかったでしょ！」

膝を付きながらも、離れた位置に立つ坂上を見上げるシャク。
それにワケの分からない言葉を返す坂上。
二人はなんか納得したような言葉を返していても、あたしには納得がいかない。
だってあれは完璧に取ったタイミングだった。後数メートル、シャクなら一秒たらずの間まで迫っていた。あれで取れなかったなら、それこそそんな戦いこそが在り方を間違っている。

「おいおい、新皇の味方すんなよ。草葉の陰で死んでいったレジスタンス共が泣いてンぜ？」

「新皇なんて呼ぶなっ！」

バカにするように『新皇』を強調する坂上。それに思わず声を荒げ、『紅』を飛ばしそうになる。額に思わず力を――燃料（感情）を集めそうになる。

それでも……それでも坂上はおかしそうに笑う。まるであたしを――蚊帳の外のあたしを嗤うように。

ステージのすぐ側にいながら、一人だけ手品の種に気付いていない間抜けな観客を見るように。

「はん、まぁいいや。テメェにも分かるように教えてやるよ。教えたところでテメェにゃなんにも出来やしねぇンだからな」

そう言って坂上は、その黒鱗に包まれた手を見せつけるかのようにかざす。

膝を付きながらも、なお坂上を冷たく見やるシャクを視界の端に留めながら。

「俺はよ、一年前コイツに痛い目にあってから、散々自分の力を磨く事に精を出してきたんだ。いや、俺達みてぇな純正型の場合、『より深く理解するように努めてきた』って方が近いか。世界――つってもお前にゃ分かんねぇよな……つまり能力を上手く使う方法や、より応用を効かす方法を考えてきたワケよ」

あくまでもその声は楽しそうで、その言葉はどこまでも見下したモノの言い方だった。

「単なるかわしにくさだけなら、見えない俺の力は最高だ。純正型にも初動の軌跡以外は見えないしな」

純正型にはこの破壊をバラまいた力が見えるというのは初めて知った。その言い方からして、単に目がいいってワケじゃないだろう。

何かワケがあるんだろうか。

「でもコイツはそれを防いでみせた。力の軌跡を見ただけなのか、別の要因もあるのか……そこは分かんねぇが、あっさりとそのクソッタレな鎖共で防ぎやがったんだ。俺の真空がその細い鎖に防がれたって事を認めるのだけでも、なかなかショックがデカかったぜ」

そう言いつつもなお楽しげで――そこからも今の坂上にある自分への自信が垣間見える。

なんていうか歪んだモノではあっても、その口調や仕草に無理がないのだ。

「どうすりゃいいかって散々考えたんだけどよ、答えは案外簡単に見つかった。純正型にも『見えにくい』ってだけじゃ、その鎖共の相手にゃ足りなかったなら、『見えにくいを見えない』にすりゃいい。『見えにくい』の意識を持った相手に、『見えない』力をぶつけられりゃ効果は倍増だ。もしくは『見えてはいても、その鎖の数じゃ反応出来ないほどの数を打ち込む』ってのもアリだな」

動きの一端が見える相手ならば、それにのみ目がいくのは分かる。それだけに見えにくいを見えないに変えられたならば、『見えるつもりでいる』相手には効果的だろう。

全く力の欠片すら見えないあたしにも、その考えが的を射ている事が分かる。

そして防衛の手数よりも多くの攻撃を打ち込むというのも、単純で強引な力技っぽくはあるけど、それだけに間違いのない方法だろう。

「だからよ、俺は見えなくするにゃどうすればいいか、より多くの真空を打ち込むにゃどうすべきか考えたワケさ。俺が腕を振るうと空間が削れる――それだけの能力を応用する方法はないものかってな」

「空間を……削る？」

「あぁ、分かんねぇのか。純正型じゃねぇヤツに説明すんのは面倒くせぇな。簡単に言やぁ腕を振るったら真空の刃が生まれるって思っときゃいい。空間の破砕は真空が壊れた時の残りモノだ」

その言い方も本当に面倒くさげで……仕方なさそうに言葉を変えて、説明してみせる。

『純正型じゃないヤツに説明するのは面倒』という事は、純正型にならもっと簡潔に説明する事が出来る、という事だろう。

……純正型ってなんなんだろうか？

あたしとは――あたし達と違うモノが見えて、違う常識があるとでも言うのだろうか？

スズカにその辺りを聞いておけば良かった、そう思う。

聞いて答えてくれるかは別として。

「腕を振るう。空間が――真空が生まれる。その生まれた瞬間や軌跡は、世界内なら……あぁ、一定距離の間なら見える。これを見えなくする方法を俺は二つ考えついた」

こんがらがるあたしと、いまだうずくまったシャクを見ながら、得意な様子で語る坂上は、大袈裟な素振りで肩をすくめてみせた。

「まぁ簡単に、世界の理――力が生まれる条件を変えるって案が取れりゃもっと良かったがな。それはちっと方法が思い浮かばなくてよ。あるかどうかも分かんねぇし、だから二つしか取れなかったって言ってもいい」

「……真空の『分裂』と『軌跡』の操作か」

こんがらがっているのはやはりあたしだけだったようだ。

シャクは確信を持ったようにそう言った。そしてゆっくりと立ち上がる。

その足元は全くふらついておらず、瞳にもいまなお戦意が宿っていて――それを見た坂上の狂喜はより膨れ上がっていく。

「はん、さっすがは新皇。よく分かったな、全くもってその通りだよ。俺の生み出した真空はあくまでも俺の支配下にある。だからこそ任意に破裂させられるんだ。ならその軌跡や在り方を弄るくらいは出来るんじゃねぇか、ってのがその考えの大元だ」

――真っ直ぐ飛んでくるか、破裂するだけと思ってたのが、脇から――しかも数が思ってたよりも多く飛んできたら、それは『見えねぇ』つってもいいだろ？

あたしに補足するように語る坂上は、そこまで言ってゆっくりとあたしへと歩み寄ってくる。

ここで初めて――シャクから視線を外したのだ。

「女ぁ、なんで俺がこんなしち面倒くさい説明を、お前にわざわざしてやったか分かるか？」

シャクには声をかけず、あたしへと向き合ってきたのだ。

この場では『ギャラリー』に過ぎなかったハズのあたしへと。

「本当なら見てるだけにさせとくつもりだったんだけどよ、どうやら新皇ってのはえらく頑固くせぇ。俺は本当の皇を――『本気の新皇こそ倒したい』ってのによ」

「えっ――？」

『本気の新皇』……つまりシャクは、『本気じゃない』とこの男は言いたいのだろうか？

何をワケの分からない事を言っているんだろう――そう思った。

だってここまでボロボロになっているのに、本気で戦っていないなんてそんなワケがない、そう思ったのだ。

「このままこれ以上痛めつけたら、コイツを本気にさせる前に勢いで壊しちまいそうだ。自分の欲求を抑えきれなくなりそうなんだよ。もしコイツが『自分自身が死んでも本気で戦いたくねぇ』なんて、ふざけた考えを持ってやがったとしたら――さすがにそんな結末は笑えねぇ」

それでも坂上の言葉には確信めいたモノがあって――

なんとなく……なんとなく本当の事を言っているんだろうな、と感じた。

そしてなんの気負いも……罪悪感や感慨すらもなく、坂上は続けたのだ。

「本気の新皇を倒さなきゃ俺の気が済まねぇってのに。俺の気が晴れる程度に抵抗して、散々足掻いてるトコを、虫けらのように踏み潰してやりてぇのによ」

その右腕を私に向けてかざしながら。

離れた場所にいるシャクに見せつけるかのように、その腕を振りかぶりながら。

そしてさも名案を思いついたかのように笑ってみせながら、坂上

はこう言ったのだ。

「だからお前よ、証人はもういいから、俺の為にここで死んでくれねぇか。コイツが本気で俺と戦いたくなるように――」

――俺を全力で殺したくなるようにさ。コイツの中でずっと眠ってるヴァンプを、目覚めさせる為の生贄になって欲しいんだよ。

そう言ってその黒鱗の浮かぶ腕を振り下ろした。

３４・スケープゴート（後書き）

完璧寝入ってて更新が遅れました。申し訳ない。
次回はひょっとしたらプライベートで更新はお休みするかも。
またお知らせします。

35・灰色世界

『ねぇ、あんたはさぁ、やっぱいつかは向こうに帰んの？やり残した事があるんでしょ？』

そうごく平然と俺の過去に触れてきたのは、全てを知っている黒鉄の中でも彼女くらいのモノだった。

そのあっけらかんとした口調に、思わず呆気に取られた事をよく覚えている。

黒鉄内で他者の過去を探る事は、暗黙の内でタブーとされている。そんなタブーがなくても、彼女はあまり他人の過去に立ち入ってくるような性格ではなかったけれど、時折こういった他の人ならまず聞いてこないような聞き方をする事があった。

それでも彼女自身には、気安さと親近感を抱かずにいられないようなヤツで、そんな意表をついた言葉でさえも嫌な気分を持たせない。そんな独特の雰囲気が持っていたのだ。

それでも一瞬の間を置いて俺の口から出てきた言葉は『帰れない』というモノ。

それ以外に応えようもなく、それ以外の道もなかったから。

俺の過去は真っ黒に彩られていて、もう全く何も見えない漆黒で

だから帰れるワケもない。そう思ったからそのまま答えたのだ。

俺には帰る道は見えず、帰るべき家もないから。

先に続く、より真っ暗な道しかもう見えないから。

『……そっか』

ただ小さくそう返してきた彼女は、ただ小さく微笑んで――そして本当になんでもない気安さと、軽い世間話的なノリを持たせたままこう続けたのだ。

『もし帰る時が来たらさぁ、あたしも向こうに連れてってよ。ほら、結構ヤバいトコなんでしょ？あたしは絶対役に立つよぉ？あんたに心酔してるスイスイにも負けないかんねぇ。カブトみたいにあーだこーだ悩まないしさ、アカツキみたいに一点特化型でもないしぃ』

――まぁシャク兄にぞっこんのブラコンリンちゃんにゃ負けるけど。

そう笑った。気を使っている素振りなんか全くないまま、朗らかに笑ってみせた。

それに俺も笑い返そうとして――笑い返せなかった。返せるワケもない。

故郷は壊れ、仲間達は狂ってしまった。もう俺には待っている人もいなくて、もう待つべき人もいない。

帰る……そんな言葉でさえも重くて仕方なかった。

そして例え帰ったとしても、眼前に広がるのは罪と罰の螺旋。

他の3人の皇はそれから視線を外し、取り込まれてしまった。俺はそれが耐えきれなかった。

きっとあの3人なら俺を嗤って許してくれるだろう。再び玉座へと押し上げてくれるだろう。そして、壊してしまった故郷の情景を、この国全土へと広げる為の闘いを再開するに違いない。

それはもう――笑えないどころの話ではない。

初めはただ変種も既存種も笑い合って、お互いがお互いを認めあって、ただの人間として生きていけるだけの場所が欲しかっただけなのに。

俺は間違っていないと信じて、ただがむしゃらに突っ走って、ずっと前を見て目標さえ見失わければ、いつかはそれに届くと信じていたのに。

裏切られれば、『俺の力がまだ足りないから』だと言い聞かせて、嘲笑われれば『俺がまだ子供だから』と我慢して、我慢し続けて。

『世界』を完全に使いこなせれば――自分の『特殊な世界』を使いこなせれば、きっと誰もが分かってくれる。こんな能力があっても、嘲笑われた綺麗事を言えたならそれは『真実』として響く。

みんながみんな、海外で革命を起こした連中みたいなヤツらばかりじゃないんだと分かってくれる。ただそう信じて走り続けきたのだ。

それまでは、不信や疑心に傷つけられた人々をみんなで守って、みんなで寄り添って頑張っていくんだ……そう思ってきただけだ。

――まだ足りない。まだ能力が足りない。知識が足りない。仲間が足りない。理解が足りない。年齢が足りない。強さも想いも足りない。

だから俺の『言葉』が届かない。

何度もそう言い聞かせて、差別や暴力に傷つけられた変種や、逆に変種に傷つけられた既存種達を仲間にし続けて……勢力を増していって――

気が付いたらこの国を壊せるほどの力が集まっていた。

そんな事を望んでいなくても、それが出きる『力』があった。
みんながそれを望んで、1から新しい国を望んで、新たな世界を望んで――
そんな願望を重ねられた。

足りない、まだ足りない、まだまだ足りないと足掻いて望んだ力も、知識も、仲間達でさえも、それを助ける力にしかなりえない。

必死でそれを抑止しても、もう他の3人は止まらない。俺じゃ『彼女』は止められない。
スズカが俺の為に5人目の新皇に名を連ねても、彼女に協力してもらって俺の失敗の尻拭いに奔走しても、狂い出した世界を修正しようと足掻いても――もうしがみついていた『過去』は戻らない。

だから一人勝手に絶望して、逃げ出したというのに。
だから今の俺があるというのに。

それでも彼女はいつか『帰る』モノだと思い込んでいた。
『帰る』という言葉を使ってみせた。

だから――
だから俺はこう答えたんだ。

『いつか……またいつか俺の『世界』が必要な時が来たら――俺がそれを望んだのなら、その時は付いてきてくれ』

そう彼女に――『錬血』を冠した雅に約束したのだ。
それが、彼女と交わした多くの約束の中でも、最後の約束。

キチキチキチ……

そんな耳障りな音が不安感を増大させる。

俺を嘲笑うかのように響くそれは、今は俺じゃなく、向こう……紅を冠した彼女に向かう坂上の腕にある鱗のこすれる音だろうか？

ただ不安感と不快感を煽るそれに声を上げる。

「やめ……」

声を上げようとする。しかし漏れるように出たモノは掠れるようなそれで、満足に声が出ない。いや、声すら出ない、というべきか。

もちろんそんな掠れた響きでは坂上は止まらない。力の盲信者で、真なる意味での『結城智哉の殉教者』が止まるワケもない。

嘲笑うように腕を振り上げ……再度俺の周りが爆砕する。

俺には直接当たらないように。でも鎖達の注意を俺にだけ向けられる程度の力で。

「はん、そのクソッタレな鎖共はテメェ優先なんだろ？分かってんぜ？なんせテメェの防衛はオート――無造作に守るに任せてたクセに、この女の防衛はマニュアル――テメェが鎖を操る為に集中してやがったからなぁ？」

「坂上……坂上ぃ！！」

爆砕する地面。振動する大気。

それに対抗するように張り上げた声に、なんの力も拘束力もない事は俺自身が知っていた。

俺は一歩も動けず、ただ吼えてみせただけ。それだけしか出来ない事に歯噛みする。

いかに鎖達に指示を出しても、いかに蛇達に願っても、『今のコイツら（五頭の蛇）』では俺を守るので精一杯なのだ。

コイツらは俺に向かう力を優先的に迎撃する。オートで迎撃する。

普通の変種の能力ならば、一本向かうだけで四散させるだろう。

それだけの歪んだ『理』をコイツは宿している。

それが迎撃に向かわないという事は、俺の周りには迎撃しきれないほどの数の力がある、という事に他ならない。

迎撃するには多過ぎる数があり、専守防衛に徹するしかないという事だ。

恐らく坂上が腕を振るって作った真空が、小さく『分散』して周囲一帯に広がっているのだろう。

先ほど俺が吹き飛ばされたのも、恐らくはヤツが後方に配した『分裂した小さな真空の塊』によるモノだ。

振るって作り出した真空よりずっと小さくても……一発一発の威力がそれほどではなくても、その数だけは対処しきれないほどにあるのだろう。

それにいかに分裂した分威力が落ちているとは言っても、まともにその空間破砕に巻き込まれてはたまらない。

それが今、俺じゃなく、彼女に――雅が可愛いがっていた最後の生徒、こんな所にまで付いてきて、『後で話を聞いてくれる』と言ってくれた彼女に向かおうとしている。スズカの大切な初めての友達に向かおうとしている。

彼女が坂上にとって脅威になるワケじゃないのに、彼女自身が坂上にとって目障りなワケでもないのに、彼女には『証人』を望んでいたハズなのに。

俺が坂上にとって拍子抜けする程度の相手だったから。
この一年、ヤツは血反吐を吐く思いで世界を使いこなす努力をしてきたんだろう。
俺には俺の事情があって、俺の弱さがあって退いたに過ぎないけど、ヤツからしたら『見逃された』事に変わりはしない。
その屈辱は分かる。分かるというよりも、努力に見合うだけの対応がなかったのなら、憤りを感じるのが当たり前だ。ただ俺を痛めつけて悦に入るほどには、坂上も腐ってはいないという事だろう。
しかし、そのやり方は間違ってる。なんでその対価を関係のない彼女に求める？

「お前の相手は……お前が憎いのは俺だろうが！お前の代わりになって智哉の側にいた俺だろうがっ！俺を見ろ、俺はまだ立ってる、お前を傷つける力もまだある。ほら、かかってこいよ」

その想いが俺に声を上げさせる。喉に絡みつくような鉄臭がこみ上げても、それを飲み下しながら、必死に蛇達へと指示を飛ばす。

「はん、半死人がキャンキャン吠えンなよ。結城が作ったそれ――なんらかの力が『付与』されたその銃が、テメェの力を抑えてるのはもう分かってンだ。前ン時も片方捨ててから純正型になりやがったし、何より今のお前には『証』がねぇ。『体の証』はともかく、『世界が展開』されてねぇ。相手がして欲しきゃ本気で来いや」

『世界』を完璧に理解し、使いこなすには、核たる使用者にも多大な負担をかける。それは俺も知っている。
あの本来人が持ちえないハズの力が、世界を知り構築する感覚が、どれだけ脳や精神に負担をかけるかを、俺はきっと誰よりも知っていると思う。
それだけの努力を、力を過信していた坂上がしてきたのなら、今

の俺の不甲斐なさは腹立たしいモノなのだろう。その声には苛立たしげなモノが混じり、その腕の一閃で一際大きくカーリアンのすぐ側の地面がはぜる。

「そいつは――カーリアンは関係ないだろう？彼女が憎いワケじゃ――」

そんな坂上の力を目の当たりにして――思わず慈悲を乞うような言葉が漏れてしまう。

だってその力は、彼女を殺してしまうには余りあるほどの力だ。殺し尽くせるだけの力だ。

そしてヤツは間違いなく殺し尽くすだろう。即死はさせず、俺に見せ付ける為だけに、彼女をあらゆる面で殺し尽くすに違いない。

自らの世界を知る努力をした純正型は、既存種にとっては純然たる脅威でしかない。それは俺自身の事を顧みるまでもなく分かる。

「関係ない……関係ないですって？」

しかし、そんな俺の言葉を遮ったのはあろうことかカーリアンその人で――ピクンっと小さく震えると、その肩を震わせながら、一人やり取りの外にいた当事者は声を張り上げた。

「関係ない、関係ない？ふっざけんなっ！思いっきり関係あるでしょうが！あんたとあたしはまだ同僚でしょ！あたしは全然そのつもりなんだかんねっ！あたしは絶対関係ある！バッチリ大有りなんだからっ！」

そう言って憤慨するように大きく鼻息を吐くと、彼女は独特のファイティングスタイル――右手を突き出した低い前傾姿勢を取ってみせる。

右手を狙いを付けるスコープに見立てて突き出し、紅を飛ばす額をやや前にやった紅を使う為だけの戦闘スタイルだ。

「あたしの相手をしたいってんならしたげるよ。なんかいい加減蚊帳の外ってのも飽きたしさ。言っとくけど、あたしってば東海の狂人に一矢報いた事もあるんだかんね、舐めてたら黒こげにしてやるからっ」

「それでも――それでもだ。芝浦の力と坂上の力じゃ違うんだ！相性が悪すぎる、坂上の力に紅は効かないんだよ！」

それでも……そう声を張り上げても、カーリアンも坂上も止まらない。

坂上は興が乗ったように笑いながら。カーリアンは堅い表情をしたまま。

そして俺は――それを見ながらも、固まってしまったかのように動けない。

間違いなくカーリアンは殺される。理不尽すぎる力の質の差に……押し潰される。

そして恐らく――本当に多分、彼女自身もそれに気付いている。

それでも戦う姿勢を見せる姿に頭が掻き乱された。体中のあちこちよりも頭がジクジクと痛みを訴えだすのだ。

――なんで？

なんでなんだろう？

なんでこんなに世界は狂ってるんだろう？

思った通りにいかないんだろう？

ここは俺と坂上だけが命を懸けるだけの場だったハズだ。

本来ならカーリアンは、神杜にいたか、悪くてもこの光都の表で陽動をしていたハズなのだ。
俺と坂上が傷つけあって、牙を剥きあって、世界を喰らいあって……その結果、片方が潰えるだけで全てが終わるハズだったのに。

分かってる、俺が今すべき事は分かってる。
片方のシャクナゲを手放す方法も、両方を俺から切り離す方法も智哉からは聞いている。

『いつか――いつかさ、悠莉が必要だって思う時が来たら、俺の世界の呪縛は切り捨てていいから』

そう言って、俺に選択を任せてくれたのをよく覚えている。
俺なんかに――間違いだらけの俺なんかに、大事な選択を託してくれた事を知っている。
俺を抑える為に強力な変種達による楔を作り、暖かい環境による人間達の輪を作り、家族のような仲間達で心の防壁を作ってくれながらも、『選択』を任せてくれた信頼を覚えている。
そしてその選択をすべき時が今なんだと分かっているつもりだ。
それでも――それでも怖いのだ。
また『世界』を展開させたら、俺自身も壊れてしまう気がする。
狂ってしまいそうな気がする。流されてしまう気がする。
力への衝動の強さ、人間の力への渇望、世界を展開させる歪んだ全能感を、俺はよく知っているから。

そしてそれ以上に、彼女も――カーリアンも、その世界に魅せられるんじゃないか、そんな恐怖も強い。
故郷の仲間達のように狂ってしまうんじゃないか、歪んでしまうんじゃないか……。
それは間違いなく、今の俺にとって最大の恐怖だ。

だから躊躇してしまう。
躊躇ってしまうというのに――

「あたしはさ、いいと思うよ。誰だって戦いたくなんかない時もあるもんね。だからたまにはシャクもいいと思うよ、そんな時があってもさ。そんな時はあたしが代わりに戦ってあげる。あたしがそうしたいって思うからさ」

――なんて事をカーリアンは言ってきて。
そして笑ってみせて。
そんな言葉に心が震えるのを自覚する。
スズカも同じような事を言ってくれた事はある。だけど、この場面でそれを聞かされた事に、カチッと心の深くで歯車（ギア）が噛み合ったような音が聞こえた。

――あぁ、やっぱりカーリアンは、スズカの初めての友達なだけはあるんだな。
なんて、今の場面には似合わない事を考えて……

――やっぱりカーリアンは、雅の教え子なだけはあるな。
なんて、今の場面には似つかわしい事も考えて……

痛む体をそっと前に押しやった。
骨が痛む。肉が痛む。筋が痛む。皮膚が痛む。眼球の奥が痛む。
なにせ全身が痛む。
痛くて痛くて仕方がない。
それでも前へ、ただ前へと進む。

「坂上……お前の相手は俺だろ」

「はん、まだ言ってやがんのか。言っただろうが、腑抜けたまんまのテメェとは――」

そこまで言って、坂上は一気に後ろへと飛びずさった。
俺へと苛立たしげな言葉と共にその視線を向けた直後に。
まだ何もにしていないのに、まるで『俺の灰色世界の気配』を感じ取ったかのように、余裕と苛立ちを合わせた表情を凍りつかせながら。

「お前は俺と――俺の世界と喰らい合いをしたいんだろ？潰し合いをしたいんだろ？」

まだ俺は世界を発露させてはいないのに。
俺一人では『絶対に世界は構築出来ない楔』が架されているのに。

「だったらカーリアンには……彼女には手を出すな。彼女がいなきゃ俺の本気は見られないんだから」

「……何を言ってやがる。世迷い言に付き合う気はねぇぞ？」

それでも本能か、ただのカンなのか、それだけで距離を取ってみせた坂上は、もはや俺にしかその目を向けていない。
さっきまでの余裕も苛立ちもなく、警戒したような低い姿勢でこちらを見やっている。
相変わらず銃（楔）をぶら下げ、この部屋に来たばかりとは違う、一年前に来た時とも違う血まみれの俺を。
さっきまでよりも、今までよりもずっと弱っている俺を――警戒するかのように見やる。

「……カーリアン。さっきの言葉、すごく嬉しかった。そんな事を

言ってくれたのは、スズカだけだったから……アイツしかいなかったから――だからすごく嬉しかった」

嬉しかった。それは本当。

本当に嬉しくて体が震えた。

躊躇いや恐怖による震えも消してくれるくらいに。

そしてそれ以上に悲しくもあった。

そんな言葉をくれた彼女に、俺は『重石』を預けなければならないから。

新皇を抑えていた楔を預けなければならないから。

『シャクナゲと悠莉を結んだ因果を完全に断ち切るにはさ、シャクナゲを黒鉄の誰かに預ける事……それしかないんだ。俺がそう作ったから。一つだけなら――片方のシャクナゲだけならお前の意志だけで外せる。でも完璧にシャクナゲから離れるには、同じ黒鉄の誰かに――しかも力を持つ変種に預ける必要があるんだ』

俺が世界を必要とする時なんか来ない、だから必要ない――そう言って耳を塞いでいた俺に『一応念の為さ』なんて言いながら、刷り込むかのように『シャクナゲ』の呪縛を解き放つ方法を言い聞かせてきたアイツは――あの最初の黒鉄は、全てを見通していたんじゃないか……そんな邪推をしてしまう。

だっていかにアイツのラストノートが不完全でも――どこまでいっても『欠陥予言書』でしかなくても、アイツ自身が俺の相棒で、坂上の親友だったのだから。

俺達の事は多分、そんな欠陥品に頼らなくても分かっただろうから。

でも、俺が世界を展開させる為に、『黒鉄』の存在が絶対に必要になるという枷。この枷を外す時に、彼女がいる事までは予測していなかっただろうな、と思う。

多分、智哉がそれを期待していたのは『紅』たる彼女ではなく、彼女の師匠である『錬血』だったろうから。

「それでも……それでもゴメン、本当にゴメン。これを――シャクナゲを持ってて欲しい、そして許して欲しい、今ここで――」

――君にそれを預ける事によって、新皇と呼ばれていた頃の俺に戻る事を。

そう言ってから返事も聞かずに、シャクナゲの片翼を彼女に向けて高く放る。

ひどく残酷な事をしているのは自覚している。ヴァンプ嫌いの彼女に『因果を渡す』事によって、俺がヴァンプの始祖になる――それが胸をキリキリと締め付ける。

「智哉の力を知っているお前は気付かなかったのか？」

それでも口調だけは淡々としたモノで語りながら、進める歩みのその先には、再び俺へと向き直った『関西の始祖』。結城智哉に代わって始祖となってしまった男。

「一つの物に与えられる運命は一つ、一つの結ばれた因果に対する代価も一つ。なのにシャクナゲは――俺の銃は二つあるんだ。不思議だと思わないか？」

「何が言いてぇンだ？」

「俺の世界を抑えるには、一つじゃ足りなかったって事だよ。智哉の世界でも一つだけじゃ抑えきれなかったんだ。だから二つに分け

たんだよ」

――『世界の発露を抑えるモノ』と、『理を抑えるモノ』に。

そう告げて、俺はゆっくりと体に力を巡らせていく。

脳裏に浮かぶのは、『暁』が『新皇』に架した『徒花』の枷。

アイツの世界はすごかった。本当に素晴らしい理を持っていた。

使い方によっては、俺を殺す事も出来たかもしれない。俺と組めば、『彼女』にも勝てたかもしれない。

それでも――それでも抑える事は不可能だった。

一つっきりの運命で抑えるには、俺の世界は重すぎた。だからシャクナゲは二つ、両翼ある。

「さっきまでは理を抑える楔を外しただけだった。それが不満だったんだろう？」

それぞれがお互いに補完しあって『シャクナゲ』は完成する。完全になる。

それにより得られる能力（運命）が『無限の空間圧縮弾の精製』というモノ。

片方は俺の理を食らって、もう片方は世界を食らって、両方とも空気を弾丸へと変える。

両方とも同じ結果を生むモノではあるが、二つの『シャクナゲ』はあくまでも別のモノだ。

単純に、二つとも外したら今までの倍という計算が成り立つワケではない。だってさっきまでの鎖達（蛇達）は、本来の世界（俺の世界）から無理矢理具現させたモノに過ぎないから。

本来は存在しえない世界（現実）に、無理矢理力を及ぼしていた

に過ぎないのだから。

「……だったら見せてやる。俺の『具現』を理とする灰色の世界を。この国が壊れた時より、俺を新皇と呼ばしめた無限の灰色を！」

坂上は勘違いをしている。

いや、俺と相対した純正型――もしくは純正型に詳しい者達は、みんな勘違いをする。

この蛇達が『ハッキリと見え過ぎるから』勘違いをしてしまう。

この蛇達を、俺が理によって操っている現実の鎖……もしくは俺の世界によって作られた『力の産物』だと思ってしまう。

つまりは坂上の世界から出た『真空』、スズカの世界から放たれた『斥力』に近いモノだと認識するのだ。世界を出て、現実世界に修正されたモノが『鎖』の形を取っている、と考えるのだろう。

そう考えるのが当たり前なのだ。だって純正型の世界は、『ハッキリと見えない事が当たり前』なんだから。

でもコイツらは違う。これは――この蛇達はあくまでも『世界の一部』で『理の端末』でしかないのだ。

言わばこの鎖達は、坂上の手首にはえた刃や、スズカの銀鈴と同じ類のモノ。

智哉の『世界を抑えるシャクナゲ』でも、完全に抑えきれなかった理そのモノ。

当たり前に『はっきりと見える』事こそが、俺を異常と言わしめた理由だとは誰も思わない。

本来見えるハズがないモノだとは思わないのだ。

「……この世界に神はいない」

口をつくのは、使い慣れた常套句。それから始まる『解放のワード』。

警戒を深めながら、それでも世界を発露しようとする俺を見やる坂上の向こう――こちらを見やる紅の彼女が、『シャクナゲ』をなんとか受け止めるのを見て、奥歯を強く噛み締める。

「認めず、在らず、その存在を否定する」

彼女の故郷を壊す間接的な原因になったのは、間違いなく俺だ。俺の驕りと過信だ。

周囲で蠢く蛇達を見やりながら、脳裏には灰色の世界を思い浮かべる。嫌悪するそれが、彼女をこれ以上傷つけない事を願う。

「紡ぎ手のみが世界にありて、カラカラと虚ろに響く歌を唄う」

その世界は強大だった。脆弱で霞んだ他の純正型の世界とは違い、ハッキリとした存在感を持っていた。

『純正型以外にも、その世界の端末が見えるほどに』。

その『無限の灰色世界』が見えるほどに。

その世界そのモノが、全ての人々に認識出来るほどに強大だった。

全ての人々が狂えるほどに、はっきりとした存在感があった。

「彼の者は最果ての日までただ独り、暗き血を流し、赤き涙を落とす」

それが――その異質さが、俺のみを指して『新皇』と呼ばしめた。

力の強大さだけではなく、その異質な世界こそが『旗印』とされた。

「無限の灰色世界にて、幾千もの刻を刻み、幾万もの孤独に心を砕く」

それは孤独の象徴だった。ただ孤独だった。

世界をより完璧に理解すればするほど、俺は祭り上げられ、より独りきりになった。

それでも――それでも良かった、それも今だけだと言い聞かせて走り続けてきた。

そうすれば、いずれは俺がいてもいい場所が出来ると思ったから。

昔みたいにみんなが笑えると思ったから。

「その身はただ歯車を廻す虚空の歪み」

その想いは、多分夜の夢よりも儚いモノだったんだろう。一人で見るには、大き過ぎたんだろう。どこまで行っても幻想に過ぎなかったんだと思う。

それでもいい――そんな考えこそが過信だった。間違いだった。

狂っていた。俺自身も狂っていた。

泣いて助けを求めるべきだった。独りは嫌だというべきだった。

今も多分、俺は間違っている。間違い続けている。

また独りの道を――孤独になる道を行こうとしているのだから。

「その心は数多の世界を歪むる輪廻の鏡」

灰色の霧が周囲に立ち上り、ゆっくりとその領域を広げていく。

その輪郭が薄く霞んでいく蛇達は、そんな周囲の変化に歓喜するか

のように、大きく震えを見せる。
灰色の霧は浸食するように現実を侵し……世界を侵す。

「故に紡ぎ手は今も独り、灰色の雪原にありて――」

この霧が晴れた後、俺は彼女を見る事が出来ないだろう。
怖くて視線を合わせられないだろう。
それでも……それでもいい。
最後にもう一度だけそう言い聞かせて――最後のワードを口にする。
ずっと『シャクナゲ』に抑えられてきた『世界』を具現化させる言葉を。

「――いつか在りし日の明日を唄う」

その言葉を最後に――
世界は灰色の雪原へと変えた。
真紅の月が浮かぶ灰色の原野。ただ灰色が彼方まで広がる終末を連想させる世界へと。

35・灰色世界（後書き）

一週間ぶりの更新です。
灰色世界、シャクナゲの世界について書こうかと思いましたが、まだ完璧には出てきていないのでまた次回かその次に。

ですから補足です。
シンフォニアでは、シャクナゲが率いる第三班のあり方が、家族のようだと表現しております。
今回の話では、シャクナゲを抑える為にアカツキがそういった黒鉄を望んで作った、としていますが（仲間達の人の輪で心の防壁がうんたらかんたら……って辺り一帯）、シャクナゲは第三班を、アカツキの作りたかった黒鉄をモデルにしているワケです。

つまり強力な変種……自分を含め、スイレンやヒナギクやヨツバ、それ以外の変種達が、力に酔わないように、狂わないように望んだ結果が、アカツキの作りたかった黒鉄と類似しているワケです。
やっぱり自分よりも強い変種が身近にいたら、自分の力に狂ったり、その衝動に負けたりしないですし、仲間達を家族だと思えれば、簡単にヴァンプに堕ちたりはしませんから。
そういった辺りとかも考えて、あちこちに伏線張って（シンフォニアにも張ってどうするんでしょうね？）、今回収に向かっているところです。
そこにも気づいて頂けたら嬉しいですね。

もちろん『狐』や『今現在のスズカ』についても考えています。
そこも見所……かなぁ、多分。

では、次回はカーリアン視点での世界解放です。

よろしくお願いします。

36・緋色の月

轟――……

そんな轟きにも似た声を上げながら、辺り一帯を強い風が凪いでいく。

空には赤みがかった下弦の月が浮かび、昼に比べて冷えた夜気が満ちる。

そんな中、再び向かいあったシャクと坂上。

関西のロードと、それに抗い続けた黒鉄。

血まみれのアイツと、何かを警戒するかのように緊張感を迸らせるあたし達の敵。

シャクが――あいつがこの国を壊した、全てを台無しにした存在だ、なんて思っちゃいない。思えない。

坂上の言葉の全てを鵜呑みにはしていないし、あいつ自身が例え坂上の話を全部認めても、その全部をキッチリ聞かせてもらうまでは、信じてなんかやらない。

あたしが見てきた『シャクナゲ』を、あたし自身が信じると決めたのだから。

あたしの友達に託されたあいつを、あたしは連れ帰ると決めているのだから。

でも分かった事もあった。

今になってようやく分かった事があったのだ。

あいつはあたしと出会った頃からずっとシャクナゲだったけど、シャクナゲじゃなかった頃のあいつもあった、という事。
それに今になってようやく気付いたのだ。

シャクナゲとしてのあいつしか知らなくて、それしか見えていなかった事に気付いた。
生まれた頃から、あいつはずっとシャクナゲだったとでも思っていたのだろうか。そんな今までのあたし自身がおかしくなる。
そして悲しくなる。

シャクがらしくない儚さを含んだ微笑みを見せて、あたしの言葉を嬉しかったと言ってくれて、そしてなんでか謝った後、『シャクナゲを持っていてくれ』と頼んできた時。その時、最後にあいつはなんと言っていたのか。
あたしにはそれがさっぱり聞こえなくて、予想すらも出来なくて、それが悲しくなる。
辛そうに、悲しそうに、苦しそうにしていたのに、あたしには何も言えなかった事が。
放り投げられたシャクナゲを受け取るべきなのか、突っ返すべきなのかも分からない事が悲しくなったのだ。

あたしには、その言葉がはっきりと理解が出来なかったから。
その言葉は距離があったという以上に、一層小さな囁きとも言える程度の声音でしかなかったから。
そして、シャクナゲ以外のアイツをあたしは見てきていないから。

それでもシャクがその言葉をどんな想いで言ったのか、どんな想いを込めたモノなのか、それが容易に分かるほどにその言葉は小さくて――
いつも皮肉げで、自信家なアイツからは想像出来ないほどに弱い

モノで――

懇願にも似た響きだけは伝わってきて、あたしはその言葉を聞き返すような真似は出来なかった。

ただ『持っていてくれ』と放り投げられた『シャクナゲ』をなんとか受け止めるしか出来なかったのだ。

受け止めたそれは、どこまでも無骨で、どこまでも重いモノだった。

幾度あいつの手を他者の命で染めたのか、何度あいつ自身が望んでいない命のままに牙を剥いたのか、どれだけあいつ自身の心をズタズタにしたのか――あたしには想像もつかない。

ただそれは、実際の重さ以上に重みを感じた。ひどく重く、どこまでも歪な感覚を覚えたのだ。

そして――

「……この世界に神はいない」

蕩々と、でも深い苦渋を含んだ声が響きだす。

いつもの常套句で、聞き慣れた口癖からアイツの異変は始まった。

さっきまで、シャクのダメージの影響かどこか鈍い動きをしていた鎖達は、その身をブルブルと震わせる。

まるで歓喜の猛りを……声なき狂喜の叫びを上げているかのような様子で五対の頭を空へともたげ、そしてアイツの周囲の地面へとその頭をうずめていく。

「認めず、在らず、その存在を否定する」

彼の言葉が進む度に、鎖達はより深くその身を震わせ――

その様子にまるで鎖達が生きているかのような、『生きている蛇』

のような印象を受けた。
五対の頭を持つ漆黒の蛇――そんなイメージに、背筋を冷たいモノが走る。

「紡ぎ手のみが世界にありて、カラカラと虚ろに響く歌を唄う」

あたしはその様子に言葉も挟めない。
嫌な予感がするのに――言いたい事はあるのに、考えが言葉に変換されない。
さっきまであった『坂上に一矢報いてやろう』『黒鉄の意地を見せてやろう』という考えすら、さっきの強風に薙払われたかのように消え去って――ただ呆然とシャクの様子を見やる。

「彼の者は最果ての日までただ一人、暗き血を流し、赤き涙を落とす」

その視線の向かう先――シャクは、『シャクだと思う彼』は感情の消えたまっさらな表情で淡々と言葉を連ねていく。
まるで決められたプロセスを踏むかのように。ことさら表情を殺しているように言葉を重ね――震えながら地面に突き刺さっていた鎖が、ゆっくりとその『存在感』を消していった。
まるで……なんて例え話じゃなく、白い霞へとその姿を変えていったのだ。

「無限の灰色の世界にて、ただ一人幾千もの刻を刻み、幾万もの孤独に心を砕く」

白い、というにはやや濁った『灰色の霧』。
それがアイツの周りに蠢いて……鎖が蠢いていた動きをそのままトレースしたように蠢いて、ゆっくりとシャクの周囲を霞んだ色へ

と変える。
重苦しい無彩色に包まれた景色へと。

「その身はただ歯車を廻す虚空の歪み」

あたしとアイツの中間に近い位置にいる坂上には――関西の純正型には、今の状況が分かっているのだろうか。
何か……底知れない不気味さが、心を深く落としめる。
シャクが関東の皇だと聞いた時よりも、ずっと遠くにアイツが行っちゃうような――そんな恐怖に体が我知らず震えていく。

「その心は数多の世界を歪むる輪廻の鏡」

それでも淡々と続く言葉の羅列。シャクナゲの口から漏れる述懐にも似た響きの声。
世界は……周囲の全ては、灰色に染められていく。
坂上のごく周囲、わずか数メートルの範囲を除いて、灰色が侵食を深めていく。
その中心にいるのは、間違いなくシャクナゲ。彼はシャクナゲ……だろうか？分からなくなる。頭が混乱する。灰色に酩酊した感覚に、クラクラとする。

「故に唄い手は今も独り、灰色の雪原にありて――」

それでも世界はやがて完成へと近づいていく。現状がよく分かっていないあたしにもそれが分かるほどに、世界は灰色で満たされているのだ。
その空に浮かぶのは、鈍い色をした半透明の歯車。
それが、カラカラと乾いて軋んだ音を上げているような気がして、空を見上げる。

そのさらに先、中天に浮かんでいたのは、真紅の月。
深く染まった緋色の月。
先ほどまでとは違った丸い満月。
それに寒気を覚える。
だってさっきまでは確かに細い下弦の月が浮かんでいたハズだから。
この灰色の世界に浮かぶそれは、明らかに異質なそれで、あたしは本能的に悟ってしまった。
ここは……この場所は、先ほどまでいた光都の中心と同じ場所でありながらも、すでに異界の地なんだという事を。
これが坂上が先ほどまで言っていた『純正型に見える世界』、しかも『シャクの世界』なんだという事が……分かってしまった。

「――いつか在りし日の明日を唄う」

そして、世界はシャクのその言葉と共に完成する。
シャクを中心に、より深い灰色の霞みが爆発的に広がっていく。
その勢いに一瞬目を瞑ってしまった後――そこに広がっていたのは、一面灰色の原野だった。
宙には歯車が浮かぶ世界。中天には血のように赤い月が浮かぶ世界。
そして大地には、土の代わりに粉雪のような細かい灰色が敷き詰められた世界だった。
そこには、先ほどまでもあった建物の残骸があった。
戦いの余韻もあったし、その余波で折れた樹木もあった。
抉れた大地もその姿を晒していたし、壊れた外壁の向こうには『光都』の景色もあった。

ただ、その全てが灰色に彩られていただけだ。大地の硬さが、柔らかい灰に変わっただけだ。
そして月が満月に変わって、宙に歯車が浮かんでいるだけでしかない。
それだけで異質だった。異界だった。心底震えがきた。
だって灰色に染まっただけで――浮かんでいないはずのモノが浮かんでいるだけで、この光景は終末を連想させる。
寂し過ぎる。悲し過ぎる。虚し過ぎる世界だ。

「これが俺の世界だ。ただ広大で、何もない純正型としての俺の世界」

立ちすくむあたしに、シャクは視線も向けない。
ただ淡々とした口調のまま言葉を連ね、その右手をかざす。
今は鎖の消えた普通の右手を。
あくまでも普通の人間と同じその右手を。

「坂上、お前には分かるか？この世界の『異常さ』が。お前の小さな世界に比べてだだっ広いだろ」

「……なんだよ」

「この灰色世界はな、俺が知る全ての純正型達の中でも一番広い。どこまで広いのか俺自身も分からないくらいに」

見渡す限りの灰色。終末の連想を現した世界は、たしかに果てまで続いている。
坂上の周囲だけを除いて、元の世界の余韻すらもない。

「なんだよ、こりゃ……」

そう呆然とする坂上の様子からしても、この世界が純正型としても異常なのは間違いない。

それでもシャクだけは淡々としていて。
声に感情の欠片すらも見えなくて。
あたしはいつしか膝を付いていた。

こんな世界は……いくらなんでも酷すぎる。そう思った。
こんな世界を一人で抱えていたなんて、いくらシャクが強くても酷すぎる。そう思ったのだ。

この世界に神はいない。そう常々口にするのはもっともだ。
こんな世界を自分だけが抱えこんでいたとしたら、狂ってしまってもおかしくない。いや、狂って当たり前だ。
だってこの世界には、あたし達以外の生が感じられない。
緑で存在を主張する草木もなければ、星々の瞬きもない。
あるのは無機質な歯車と、灰色の原野。そして歪な月。

「そして……純正型以外にも認識出来る、多分唯一の世界。それが俺の『灰色世界』」

「有り得ねぇ、有り得ねぇだろ！なんでこんなはっきりとした世界を持ってやがるっ！？純正型の世界は、各々の内面世界だろ？精神の具現だろ？そのハズだろうが！」

「……言ったろ。俺の世界は『具現』を司っているんだ。だからはっきりと見えるのか、はたまた違う理由があるのかまでは分からない。ただ間違いないのは、俺の世界は『異常』だって事だけだ」

そして、掲げたその手をゆっくりと振るう。
別段力を入れた様子もなく、ただ振り下ろす程度の気概で。
それだけで――たったそれだけの仕草で、宙を浮かぶ歯車が軋みを強くした。
音無き奇声を上げた。
そして宙から鎖が舞い降りた。
先ほどまでシャクの右手に縛られていた鎖達が、より深い鈍色を持ってシャクの側に浮かんでいた。

「は、はっ！この世界は虚仮威しかよ！またその鎖かぁ？だったら――」

「確かにお前は強くなったよ。皇に相応しい……かどうかは分からないけど」

「……っ、俺が、俺が皇だ！関西の始祖だ！」

坂上からは、余裕が消えていた。喚くように吼えてみせる。

対するシャクに余裕が生まれたかと言えば、それもない。
ただ二人とも淡々と余裕を削りあって――向かい合う。

「でもまだ俺には届かない。まだまだ届かない。俺が自分の命を削る思いで繰り返してきた、『世界の理解』へは届かない」

ただ動くモノはと言えば、虚空から舞い降り、蠢いている鎖達だけ。
一筋、二筋……五筋、十筋とその数を増していく鈍色の蛇達だけだ。

「アカツキの力は『ノルンズアート』と呼ばれていたけど、お前がそう呼び始めたんだってな？いい名前だと思うよ。運命の女神（ノルン）の造物（アート）。あいつの力にはぴったりだ。でも――」

――コイツら……ウロボロスも、響きだけは負けず劣らずぴったりだろ。

小さなつぶやきに過ぎなかった『ウロボロス』という言葉……その名前には聞き覚えがあったけど、その意味は分からなかった。

ただ不吉な響きである事だけは感じられた。

「広大な世界にある無限の蛇……だからウロボロス。ぴったり過ぎて反吐が出る」

そう言うシャクの周囲で、舞い降りた鎖達が逆巻くようにうねり狂う。

すでにその数は、目視では数え切れないほどとなり、飄々と灰色の空間を踊る。

「またこの鎖か、この世界は虚仮威しか、そう言ってたな？確かに五筋じゃお前の領域には踏み込めなかったよ。一筋たりとも傷を与えられなかった。でも一筋じゃ足りないのなら五筋、五筋で足りないのならば十、十で足りなければ――」

――百の鎖でお前を討つだけさ。

その言葉を最後に、向かい合ったままシャクはその手を振るう。

大きくはない。小さな……ゴーサインとも思えない、僅かなハンドサイン。

それに従って、舞い踊っていた鎖達が鎌首をもたげ、いまだに混

乱をきたしていた坂上へと猛然と飛び向かう。
その数は、すでに五筋では収まらない。四方八方から飛ぶ。獲物に向かう蛇のごとき勢いで宙を駆ける。

「もともとこの鎖は、この世界のモノだった。それが最初からハッキリ見えるだけでも異常だったんだ。分かるか？俺の異常さは、ずっとお前の目の前にあったんだよ」

語るシャクの言葉は静かなモノで――感情を消した響きで、灰色の空間に染み渡る。
それは感情が感じられないのではない。感情を消した響きの言葉だ。
迫る蛇達の勢いからすれば、存在感の薄い響きだ。それが分かるよりもなお早く、宙を走る鎖達は坂上の周囲へと到達する。
そしてこの灰色の世界の中で、唯一色を保っていた坂上の周辺の空間を食い破るかのごとき勢いで、その先端を突っ込ませる。

ギシッ――
そんな世界が軋む音が聞こえ、坂上の周囲の空間が歪んだ。
まるで、『灰色に坂上の周囲の空間が食われ、悲鳴を上げているかのように』。

「……っ、くそったれ！」

悪態をつきながらも大きく下がる坂上は、その腕を大きく振るい――

「あっ……」

呆けたような声を上げた。

信じられないモノを見たかのように。信じたくないモノを見たかのように。

腕を振るった瞬間、シャクの上方の虚空から新たに舞い降りた鎖が、幾重にも重なって格子状の壁を作ったのを見て。

「……言ったろ、俺の蛇達はウロボロスと呼ばれてるんだ。世界を一周出来る無限大の蛇じゃなく『無限の頭を持つ蛇』、だからウロボロス」

――コイツらを相手に数の有利で攻めるには、お前の『空間断裂』じゃ脆弱すぎる。

その言葉を最後に、新たに壁となった鎖――シャクが言うには蛇達も、その鎌首を坂上へと向けた。

まるで効いていないのは明らかなのに、攻撃を受けた事へと反応するかのように。

「バカな！真空の刃が防がれんのは分かる！でも……でもなんで、『空間の破砕』まで起こらねぇ！？なんで、お前の近くで『力が掻き消えた』！？」

「言わなかったか？俺の世界は『鎖の世界』じゃない。そんな理は有り得ない。コイツらはあくまでも『具現の理』を宿しただけ端末。存在自体は、『お前の手首にある刃と変わらない』んだよ」

狼狽する坂上に対するシャクの声音はどこまでも淡々としたモノ。諦観すら含んだ空虚な響きが感じられる。

その中で、また出てきた『理』という言葉。

世界というのは分かる。今の状況からして分からざるを得ない、と言うべきか。

純正型には、シャクの灰色の世界みたいな、自分だけの空間、力を自在に振るえる世界を構築出来る能力があるのだろう。

それは、純正型以外には『普通は認識出来ない空間』で、シャクの『灰色の世界』は特殊な部類なんだと思う。

多少の間違いはあるかもしれないけど、大筋は間違っていないだろう。少なくともスズカが力を振るっている時に、そんな空間を見た事なんかない。

あのコはまさに遠近スタイル問わず、圧倒的な強さを持っていたけど、そんな異変が周囲に起これば忘れるワケがない。

でも『理』という言葉の意味が分からない。

「俺の世界の理は『力の具現』。力の具現……つまり『力の在り方そのモノ』。『この鎖は触れた力のベクトルを、無効に近い値まで下げる』事も出来るんだ。消失は出来なくても、そのベクトルを零の近似値にまで下げられたなら――それは絶対防御に近いだろ？」

理……ことわり。つまり法則という事だろうか？

そしてシャクの世界――この灰色の世界の法則は、『力の具現度の操作』？

だとしたら、『ベクトルの操作』と言うべきじゃないか？

『具現』という言葉が当てはまっているとは言い難くはないか？

「少なくとも、お前の空間を『削る』だけの力じゃ、この壁は超えられない。余波すらも残らない。微風すらも起こせない」

そんな疑問を抱くあたしを意にも介さず、攻防は一方的に進んでいく。

蛇達とよんだ鎖の群れが、大きく飛んでかわす坂上を追い回し、時折攻撃に転じた……らしい坂上の見えない攻撃を、何事もなく新たな鎖が防ぐ。

それはいたちごっこというには、圧倒的に矛盾を含んだ攻防。
鬼ごっこというには、鬼が有利過ぎるやりとり。
それが永遠に続くワケもなく、ついに一筋の鎖が坂上の周囲の空間を食い破り、突き入っていく。

「……ふざけろ！」

しかしその鎖を、坂上は大声一喝と共に腕を振るって弾き返すと、辺り一帯を爆砕させた。
自らの周辺一帯を、自分をも巻き込む形で。

――自爆！？
一瞬本気でそう思ったけど、そんなワケがない事ぐらいはすでに理解していた。
あの坂上が、本気でシャクと戦いたいと望んでいた将軍が、将軍の名前を自ら封じてこの時を待っていた男が、そんなに諦めがいいワケがない。
案の定、その粉塵が収まった頃には、やや離れた位置に灰色の髪の変種は立っていた。
体のあちこちをボロボロにして、血で真っ赤に染まって……それでも笑いながら立っていたのだ。

「一瞬面食らっちまったぜ。お前の世界があんまりにも異常過ぎてよ」

「……」

返す言葉もなく無言で佇むシャクを、坂上は嗤いながら見据える。
狂気を溢れさせながら、その身を震わせていた。

どこまでも好戦的に嘲っていた。

「でもよ、お前の……具現だっけか？その力にも穴はあるみてぇだな？」

……穴？

さっきの自爆じみた行動で、坂上は何かを試したとでも言うのだろうか？

少なくともあたしには『力の在り方を決める法則』に穴は見えない。

だってそれは、『攻撃』という行動で生まれた力――あたしの紅のような力を、限りなく無効化するという事だ。

防御に関しての穴なんて、少なくともあたしには思いつかない。

「テメェの理が在り方を操れるのは、単純に力だけだろ？『力のみであるモノ』だけで、他の純正型の『世界内にある力』や、腕を振るう事で生まれるような、肉体に付随する力は操れねぇんじゃねぇか？」

喜々として語る坂上の言葉にも、あたしの理解は追いついていかない。

いや、世界云々は置いといて、肉体に付随する力までは操れないという事の意味は分かる。

しかし、なんでそれが坂上には分かったのか。それが分からないのだ。

「さっき俺はテメェの鎖を俺の腕で払ったよな？腕の刃で払ったつもりだったけどよ、少しばっかり掠っちまった。でも俺の体にゃ異常はねぇ。つまりお前の鎖は、『俺の行動を起こす力』をどうこう出来てねぇってこった。違うか？」

「……」

「そしてさっきの空間破砕。俺の世界の外に溢れた力は見事に掻き消されてるけどよ、俺の『世界内の力だけは消されてねぇ』。俺の周囲にある『真空に変換される前の空間の断裂による破砕』だけは、きっかり生まれてる。つまりテメェの鎖は、他の純正型の領域じゃ理を行使出来ねぇ」

……なんていうか、さっきまでなんとか場の中心にいたハズなのに、いきなり置いてきぼりにされてる気がする。

全く理解が付いていかなくなったけど、つまり――

「変種の能力みたいなモンは効かないけど、ぶん殴る事は出来るし、純正型なら力をシャクにぶつける事も出来るって事？」

「はっ、理解が早ぇな？簡単に言やぁそういうこった。他の……普通の変種に対しては間違いなく『最強』だろうよ。変種が一番の強みとする能力も、肉体強化や肉体変化みたいなモン以外は、その鎖の壁を抜ける事も出来ねぇ。でも――同じ純正型なら、勝ち目は普通にある。そうだろ？新皇っ！！」

そう言って、今度は坂上が攻撃に転じた。鎖の間を縫うようにシャクの元へと走り寄る。

腕は振るわない。何か他にしている様子もない。ただ雄叫びをあげながらシャクへと向かう。

対するシャクはどこまでも無言を貫きながら、身動き一つしない。ただ向かいくる坂上を見やるだけだ。

その代わり……というべきか否か、鈍色の鎖達が坂上の進路を妨げるようにその身を壁となし、坂上を食い破る為の刃と化す。

なんの指示も受けないままで猛るそれは、まるで意志を持っているかのように、宙を自在に走り、坂上の周囲の大地を抉り、灰色の土を舞い上げる。

――しかし、それでも坂上は止まらない。

前方を舞う鎖達を意にも介さず、迫る無限の蛇を腕を振るって薙ぎ払い、自身の色ある空間で防ぎながらもシャクに迫る。

接近さえしてしまえば――

そう考えているのだろう。その瞳に浮かぶ狂気じみた光には寸分の迷いもない。

それでもシャクは動かない。動けないのか、と疑ってしまうほどに微動だにもしない。

あそこまで血を流せば、体力を消耗してしまうのは当たり前だ。それに、こんな世界を展開させるのに、なんの代価も必要ないとは思えない。

体力や精神力、あたしの想像もつかないなんらかの負荷がシャクの身にかかっているのかもしれないのだ。

そんな考えを巡らせるあたしの前で、坂上はシャクの前方に築かれた鎖の壁をこじ開けてみせる。

その腕で、周囲の空間で、強引な力技でシャクへと迫る。

周囲一帯に浮かぶ鎖達も、坂上を留めようとその身を振るっているが、関西のロードヴァンプは止まらない。

鎖の先端が坂上の周囲の空間――『世界』を削ろうとも、坂上の進行の方が早い。より早くにシャクまでたどり着く。

「オラァァァ――ッ！！」

坂上の太い腕が雄叫びにも似た声と共に唸りを上げる頃になって、ノロノロと顔をその拳へと向け――シャクは見事に殴り飛ばされた。

確かに反応はしていた。まだかわせる間合いだった。
ただ……シャクはかわそうとしなかったように見えた。
鎖のやりたいようにやらせ、迫る拳にもやりたいようにやらせた。
そうあたしには見えたのだ。
しかし、続いて巻き起こった空間の破裂だけは、大きく飛びずさってかわしてみせる。
その動きにもぎこちなさはなく、動けなかったワケじゃない事は明白だ。
しかし、坂上はそんな事は気にもしないのか、僅かに舌打ちを漏らしただけでニヤリと笑ってみせる。

「やっぱ殴る事は出来るみてぇだな、あん？だったらやりようはいくらでもある。テメェのくそったれな鎖共が俺の世界を食い破る直前まで殴って殴って、ヤバそうになったら離脱する――ヒット&アウェイなんてぇのは趣味じゃねぇが――」

「やりようはある？たった一発『殴らせてやっただけで』あんまり吹き上がるなよ、坂上」

得意げに、でも歪んだ笑みを浮かべる坂上の言葉を遮ったその声は――坂上の言葉を遮った声には、何故か見下すような響きがあった。
そして哀れむような色が垣間見えた。

「……結城智哉が初めて俺の前に立った時、アイツは念には念を入れて、全てをかける必要がある『強力な運命』を与えた武器を用意していたよ。俺に万が一話が通じなかった時の事を考えて、最悪の武器――全てを与えて力を得る『ノーフェイト』を作っていた」

――結局、『アレ』は日の目を見る事はなかったけど、いざとなれば『新皇』一人と相討つ覚悟くらいは持っていた。

そう語る口調にも、蔑みが見える。殴られた箇所も気にしなければ、頬を新たに流れる血を拭いもしない。

ただ、シャクが殴られた事を怒るような蛇達が、坂上へと鎌首をもたげるだけだ。

「それがお前はたった一発殴れただけで満足なのか？それで勝ちを確信出来たのか？だとしたら……関西の皇を自称するには随分と温いな？」

「はん、ボロボロの体で吠えンな、噛ンな、吹いてンな！今のテメェよりゃ俺のが身体能力は高ぇ！そしてその大層な名前が付いた鎖共じゃ、俺の接近は防げねぇ！いくら増やしてもそれは変わンねぇ！テメェが出血多量で動けなくなるのが早いか、殴り殺されるのが早いかしかねぇ！」

カラカラカラ――

坂上の声に被せるように……どこかから空虚な音が響く。

単調な調べが、灰色の世界に響き渡る。

それは世界のあちこちから響いて聞こえた。

「……本当に温い。自分が本気だから――俺が世界を見せたから、それだけで対等だとでも？自分が本気なんだから、相手ももう本気なハズだとでも信じているのか？」

ガラガラガラ――

その音源を見極める欲求に勝てず、あたしは空を見上げる。

どこから聞こえるのか確信があったワケじゃない。
ただ何かが単調に回っているように聞こえたから、見上げただけだ。
存在感が希薄な、異界に浮かぶ歯車を。

「温くて甘い。甘くて温い。だからお前は智哉の後を付いて歩けなかった。お前にはあいつが目指した世界が眩し過ぎて、同じ方向を見ていられなくなったんだろ？」

「ふざけろ、俺があいつを見限ったんだ！見限ったのは――」

「ふん、別に水掛け論をする気はないよ。どう言ったところで、お前が温くて甘いという認識は変わらない」

ゴロゴロゴロ――
重々しい響きが世界を揺らす。この音は……なんなのだろうか？
音だけなのか、地響きを伴っているのか、はたまた無音なのにそういった幻聴が聞こえているのか。
分からない。分からないままで――見上げた先の月が『欠けていく』。
ゆっくりと円形に欠けていくワケじゃなく、端っこがポロポロと欠けていくのだ。
血のように赤い、緋色の月が。
この灰色だらけの世界で唯一色を持つ、空の主然とした満月が。

「でも、そんな温い一撃だから消えた。あぁ、一発食らったおかげでようやく頭がクリアになった。頭に掠るノイズが消えた」

シャクはそんな世界の中心でその身を大きくのけぞらせ、中天を見上げていた。

ポロポロと欠けていく月を笑っていた。その表情を歪めていた。
それは決して心から笑っていた表情じゃない。嘲りも他者に向けたモノじゃない。
何故かそれが確信出来た。
その頬を流れる一筋の涙を見るまでもなく確信出来たのだ。

「俺が新皇なのか、はたまた比良野悠莉なのか、それともシャクナゲなのか……この灰色世界そのものなのか。力の衝動、歪んだ全能感、そんなノイズが消えた」

そこにいたのは紛れもなく見慣れたあいつで、どこまでも黒鉄のシャクナゲだった。
さっきまで見違えそうだった不安感が、綺麗に消えたのだ。
だって今のあいつの表情は――見慣れた『弱いあいつ』だったから。

「俺はシャクナゲ。どこまでいってもただのシャクナゲ。黒鉄に咲く徒花。アカツキの枷が消えてもそれは変わらない。俺は――」

――ただのシャクナゲだ。

そう言って初めてその腕を振りかぶる。その身をのけぞらせながら、さらに大きく腕を振り上げる。
それを前に降り下ろすと同時に、小さな言葉を漏らした。
たった一つ、でもあたしから見ても『力ある言葉を』。

「Ｓｅｔ――Ｓｈｉｆｔ　ｕｐ　２ｎｄ－Ｗｏｒｌｄ――アナザーバースディ――」

36・緋色の月（後書き）

きわきわです。ちょこっとおかしい箇所もあるかと思います。
そこはあったかく見守ってください。
また直します。
アカツキの造物については次回あとがき、灰色世界についてはさらにその次に載せられるかと思います。
次回はスズカ視点です。

37・イノセントシルバー

「やっぱり使っちゃったんだ」

夜色の空気に、ほんの少しだけ灰色が混ざったような感覚を覚えて、私はそっと彼方へと視線をやった。

黒でも白でもなく、灰色と言えば思い出す人――今は『シャクナゲ』と名乗る、私の兄になってくれた人がいるであろう偽りの光都の方角を。

いくらあの人の世界でも……あの広大な『灰色』でも、こんな隣の県にまで届くワケがないのに、私には何故かあの『灰色世界』が再び現れた事に確信が持てたのだ。

それが悲しい事なのかどうか私には確信が持てない。

兄が関東を離れた時から、あの世界を嫌っていた事は知っている。遠ざけていた事も分かっている。

それでも私にとっては、あの人と灰色世界は切っても切り離せないモノだし、私と同じなんだという繋がりみたいなモノもあの世界には感じていたから。

そしてなにより、私自身はそこまで灰色という色を嫌ってはいないから。

『……たった1つだけ？たった1人だけでもいい？そんな悲しい事

言うなよ』

そう言って彼は笑った。泣きながら笑ってみせた。
痛みや苦しみからじゃなく、悲しんで泣いてみせた。
体中傷だらけだったのに……私がボロボロにしたのに、そんな私の為に泣いてくれた。

『一杯作ればいいんだ。自分の大切も、自分を大切にしてくれるモノも、一杯作っていいんだ！』

そう言って怒ってくれた。
私の間違いを怒り、考え方を叱り、そしてそんな私の間違いを生んだ環境に怒りの声を上げてくれた。
自分も同じような立場にあったのに……後から聞いた話じゃ私なんかよりずっと辛い場所にいたのに、私の事を考えてくれた。

『だって君はこんなに暖かい。こんなに暖かくて、小さくて……こんなに可愛い手をしてる。だったら俺が触ってみたくなっても、ちっともおかしくなんかないんだよ？』

そして私に触れてくれた。
みんながみんな怖がって、誰も近づいてすらこなかったのに……私を利用しようとする人達以外からは疎まれてきたのに、彼は私の手を暖かいと褒めくれた。可愛いと言ってくれた。
自分をボロボロにしてなお、そこから発する『拒絶』の音に苛まれ続けていたのに、それでも私の手を握ってくれた。
私の世界からの攻撃に対して、自分の内からも『世界』の攻撃意志が溢れそうになっていたハズなのに、そんな辛さを欠片も見せない暖かさで、より強く握り続けていてくれた。

『君は人間だよ。だって泣いてる。悲しくて、悔しくて、こんなに泣いてる。涙を流せる君は人間なんだよ。だからもう……そんな悲しい事を言うな』

そして――

そして私の事を人間だって言ってくれた。私がみんなと同じ心を持つ人間だと認めてくれた。

誰もそんな事を言ってくれなかったのに……『忌み子だ』、『鬼子だ』と化け物扱いをされてきたのに、初めて私を『私』という人間として扱ってくれた。

――『居場所』を与えてくれた。

――『家族』になってくれた。

――『優しさ』をくれた。

――『言葉』をくれた。

――『暖かさ』の意味を教えてくれた。

――『名前』を呼んでくれた。

――『笑顔』をくれた。

――『知識』をくれた。

学校にも行けなかったり私に……家族すらも消えてしまった私に、そこで与えられるであろう『当たり前』をくれた。

そして――

――『恐怖』を向けなかった。

――『憎悪』を向けなかった。

――『好奇』を向けなかった。

――『欲望』を向けなかった。

――『猜疑』を向けなかった。

私が私のままでも『嫌悪』しなかった。全てを受けて、間違った時は叱ってくれ、褒めるべき時にはちゃんと褒めてくれた。私の頭を撫でて目一杯褒めてくれた。

年はほとんど変わらなかったのに、必死になんとか狂ってしまったモノを直そうと足掻きながらも、私を導いてくれた。

狂っていく世界と『道』の仲間達を抑えようともがきながら、私にはそんな素振りを見せなかった。

だからこそ、私は今ここにいる。

「悠兄ぃ。今度は……今度こそは、私があなたの帰る場所を守る」

その為だけに私はいる。

どんな時を思い出しても、どんな場所に想いを馳せても、あの人は当たり前のように側にいてくれた。そして私もずっと側にいて欲しかったから、兄の反対を押し切ってまで『道』の一人にもなった。

『道』の一人として、自らの意志で人も殺めた。世界も使った。

革命軍……そして関東軍と化した『道』の一人、『白銀の道（シルバーロード）』――そして『白銀の皇（シルバーロード）』として。

さすがに、一人だけおじさんに連れられて関西に逃げたと知った時は頭にきたけど、それでもせっかく出来た関東での居場所を、寸分も迷わずに捨ててしまうほどに、あの人自身が私の居場所だった。

あの人は――兄のような彼は、全てをくれて、そして私の全てになっていたのだから。

「銀の鈴よ、ただ麗々と唄え
くすんだ色が堕ちきるまで……

白色は嫌い。白は他の色を否定するから。
金色は嫌い。金色は他の色を掠めるから。
銀色は嫌い。銀色は拒絶の色だから。
黒色は暖かい。黒は全部の色が混ざった色だから。

私は全てを万色の群れに隠したばかり。
そっと流れる拒絶の声が
いつかこの身を砕くまで
無限の色はただ私と共にある」

淡々と紡ぐワードと共に、リンゴーンリンゴーンと、澄んだとは言い難い鈴というよりも鐘のような音が脳裏に響く。
それはずっと疎んじてきた世界から響く『銀鈴の音』。
この『頭にあるモノ』と同じく、私をずっと苦しめてきた音。
それに耳を済ませ、そっと先を見る。
私の世界の力を受けて荒廃し、人が全て退去した『山都の一角』で、遥か彼方へと視線を向ける。
その先からいずれ来るであろう狂人の軍勢を見据えるように。
関西に乱入してくるであろう別の始祖を睨みすえるように。

関西で動乱があれば、真っ先に動くのはあの男だろう。その推測には確信があった。
そして北陸や中部からの侵攻よりも、東海からの軍勢が一番厄介だという認識にも自信がある。
なにしろ今あの人と共にいる彼女は、彼の狂人との因縁が深い。
今狂人が廃都近くまでたどり着いてしまえば、ひょっとしたらその因縁に引きずられ、私が大好きなあの人までが狂人と向かい合っ

てしまう可能性がある。そうはならなくても、『紅』の彼女は間違いなく狂人と向き合う事になるだろう。

それだけは避けなければならない。そんな事態は今だけでも避けておきたい。

真実を知られたあの人は、多分すごく傷ついているだろうから。そんなあの人の側には、あの人を傷つけない仲間が必要だから。

帰ってきた神杜は――そして真実を知った黒鉄は、きっと真っ二つに割れているだろう。

それを見ても、兄は気丈に振る舞ってはみせるだろうけど、それもいつ折れてしまうか分からない危うさの上で、バランスを取っているだけに違いない。

だからあの人が決着を着けた後にこそ時間が必要だった。

あの人が完全に立ち直る事は無理でも、せめてまた前を見られるまでの時間が必要だと思った。

もとより関西の始祖との決着自体にはなにも心配はしていない。

もし、この国の中であの人が負ける存在がいるとすれば、それは『兄自身』かあの『魔女』以外には有り得ない。

私は、例え死んでも二度と『拒絶』をあの人には向けないし、他の二人は魔女に比べればまだ容易い相手だろう。

例え『第二の世界』までしか使えない不完全さを差し引いても、その世界だけで彼は『万鎖の皇』と呼ばれたのだ。偽りの皇でしかない坂上に不覚を取るとは思えない。

そんな可能性がもし万が一にもあったなら、例え事態がどうなろうと私が付いていっただろう。

「だから悠兄ぃは大丈夫。カーリアンもいる。いくらなんでもカーリアンを巻き込んでまで死を選んだりなんかしない」

紅の彼女を付いて行かせたのはその為もある。
万が一坂上に圧倒されて『自分に』負けそうになっても、彼女がいれば『諦められない』という足枷になる。
そしてカーリアンがいれば、帰る場所も間違えないだろう。
あくどいかもしれないけど……そしてカーリアンは怒るかもしれないけど、あの人が側にいなくなる恐怖は一度でコリゴリだ。
後で正直に謝れば、カーリアンなら許してくれるだろう。

そうは思っていても、口に出してわざわざ確認する辺り、やはり心配なのは間違いない。
付いていけば良かった、と思う気持ちはやはり強い。
雅に散々『やっぱリンちゃんはブラコンだねぇ』ってからかわれてきたけど、これぱっかりは変われそうにない。

それでも付いて行かなかったのは、私がすべきなのは『内憂』ではなく『外患』に備える事だと思ったからだ。
内輪揉めはなるようになる。時間さえあれば、落ち着く形に落ち着くだろう。『スイレン』はやり手だし、『ネームレス・ワン』たるアオイには、かの『変換された運命』の力がある。
……アカツキに言わせれば、守護というよりも『呪い』らしいけど。

その上、必要かもしれない事は、七班（仲間）の『ヌエ』と『シュテン』に頼んできた。
それが落ち着くまでに必要なのは時間だけだ。

這いよる運命の糸が――因縁が、あの人の元へ向かうまでの時間を稼ぐ事。それが私だけに出来る事。
『世界』を持ち、理を持つ私にしか出来ない事だ。

そこまで思い返して、私は思わず溜め息を吐く。
なんとなく見上げた先に浮かんだ仄かに赤い月。それがあの『異世界』を思わせた。

「赤は嫌いじゃない。灰色の中でも一つだけ自分を主張しているから」

だからだろうか。なんとなく戯れに、世界の解放ワードには出てこない色について口にしてみる。

そして兄の苦悩の大半を占める異世界、私よりも強大な『具現』を司る世界を思い出す。
そこで他者を蹂躙し、かつての国軍を殲滅し、その度に心を磨耗させていた兄の姿を思い浮かべる。
純正型の世界は、心を消費し欠損させ、その分だけ力を振るうモノなんだと漠然と思っている。
だから、いつかきっとあの異世界は兄を壊すんだろうな、と考えてもいる。
そしてその後、私も後を追うように壊れてしまうに違いないと確信してもいた。
でも今はまだ、その時じゃない。
それだけは譲れない。謙るワケにはいかない。
そう自分に言い聞かせて私はここに来たのだから。

「……行かせないよ、シヴァ。この先は通行止め。あの人の側にいる為だけに、五人目の『新皇』と呼ばれる事を望んだ私の全てにかけて、ここから先は行かせない」

彼の為だけにこの『世界』を使うと決めていた。兄の為だけに『

理』を振るうと決めてきたのだ。
その為に私は『力』を与えられたんだと思ってきたのだから、ここで『力』を振るう事に迷いなんかない。
山都を襲撃し、荒廃させ、都市軍を退去させた事も必要だったからそうしただけだ。
退去していくうちの誰かが『バケモノめ』と悪態をついていたけど、そんな事もとっくに自覚済みだ。
なんと言われても……なんて思われても、光都への通り道たるこの都市を落とす必要があったのだから、些事にまで気なんか回してはいられない。
ここは私、山都の関西軍、狂人の軍勢と3つが入り乱れるには手狭過ぎる。なにより敵は一つの方がやりやすいし、ここの軍勢が引いたとなれば関西攻略の拠点として使おうと考えるだろう。
だから山都の軍勢は邪魔でしかなかった。それだけが全てであり、ここを襲撃するには十分すぎる理由だった。
そして世界と世界の争いに、純正型以外を下手に巻き込むのもあまり好きじゃない。

「カーリアンは大丈夫。絶対連れて帰ってきてくれる。アオイ達は守っていてくれる。だから私は私の出来る最善を尽くすだけ」

そうなんとか自らに言い聞かせ、軽くコクンと頷いてみせる。
それだけで——小さく口に出すだけで、ほんの少しの不安が消える気がしたから。

まだ視界に軍勢は見えない。
でもそう遠くないうちにここを通ろうとするだろう。そしていずれは北陸や中部の連中も、関西東部たるこの地に矛先を向けてくるハズだ。

古都の辺りは、道筋からいってあっさりと北陸が抑えるだろう。
しかしこの辺り――かつては奈良と呼ばれていた辺りは、三つ巴の様相で勢力争いを繰り返すに違いない。
だけど、今だけは――今だけでもここは抑えてみせる。
あの人の側にいる為に……あの人が何年も前から負い続けてきた、深い傷が癒えるまでの居場所を守る為に。

「私は私。私はスズカ。私は黒鉄。私はあの人の妹。私はあの人の家族」

何度も口内で繰り返し、そっと頭を傾ける。見えない誰かにお祈りをするように。
『祈り』はやはり人に勇気を与えてくれるモノだから。
例え偶像にすぎない虚構に対するモノであっても、その行為には意味があると私は考えているから。

「――神様、私はあなたを信じます。あなたを敬います。尊びます」

それに……私は感謝している。兄には秘密にしているけど、残酷な神様に私は間違いなく深く感謝しているのだ。
兄が信じない存在に、私は確かに感謝している。

「あなたが与えた進化に対する代価は重いモノでしょう。変化の代償は大きなモノでしょう。そして兄はその全てを背負おうとするでしょう。ですが、どうか――どうかその重荷を私にもお与え下さい」

私に『世界』を与えてくれた事、あの人の側にいられるように『拒絶する理』を与えてくれた事を……私は感謝しているのだ。

それにもし神様がいないならば、私は誰に祈ればいいのかが分か

らない。何に願えばいいのか分からなくなる。
私は兄やアカツキのように『……』を信じきっているワケじゃないのだから、『……』を信じて行動を起こす事に迷いを持たないワケにはいかない。
それに純正型には――いや強い力を持つ変種には、力に狂わない為にも確かに信じる『何か』が必要だと思うから。
私には絶対的な――でも兄を傷つける心配のない偶像が必要なのだ。

「私はあなたを拒絶いたしません。あなたの私に対する咎ならば喜んで受けましょう。罰にはこの身を差し出しましょう。私にはそれを受けるだけの過去があります。これまでの過去も、これから私が流す数多の血も、それは全て私の意志によるモノなのです」

兄はバカだった。確かに愚かだった。傲っていた。若かった。
あの人には悔やむだけの過去がある。それは間違いない。
この国が壊れる原因の一端は、間違いなく比良野悠莉にある。それは否定出来ない事実だ。
優しさや強さは時に全てを壊すのだろう。彼のそれはきっと強すぎたのだとも思う。周りを惹きつける以上に狂わせてしまうほどのモノなのかもしれない。
それでも私にとってのあの人は、間違いなく救いだった。
私はあの人の優しさに救われたのだ。
それは確かな事実だ。
ならば彼によって壊れたモノの報いは、彼に救われたモノにも架されるべきだ。
そうでなければ救いがなさすぎる。

「私は全ての咎めを受けましょう。嘲りを拾いましょう。蔑みを甘

受いたします。これから流す血もあなたの御心には背くでしょう。
でもそれは私自身の意志によるモノ――」

――そう、全ては私自身が決めた事なのです。

「そして今また、私は兄の居場所を守る為に力を使います。悠兄ぃがシャクナゲとしていられる場所――羽根を休められる居場所を『銀鈴の世界』を使ってこの手で守ります。あなたの教え、考えに背くのは全て私の意志です」

それは覚悟よりも深く、誓いよりもなお確かな誓約だ。偶像に向けたモノでありながら、自分自身にも誓う祈りよりも真摯な想いだ。
そして誰にも汚せない私の在り方の全てだ。
それだけを私は祈ってきた。願ってきた。誓約した。
私は祈りの為の言葉は知らない。それを学ぶ機会はなかった。
だから私なりの精一杯を込めて訴えかけるだけの拙い祈りでしかない。
それでもひたすら真摯に祈る。

――神は信じない。
――運命は信じない。
そう言った二人の純正型の分まで私は祈る。
そうすれば神様や運命は、兄よりも私に深い重荷を与えてくれると思えたから。

そしてそのままの姿勢で私は静かに時を待つ。
東北の始祖となりえた変種としてでも、『新皇』の最後の一人でもなく、一人の人間として――黒鉄として、守りたいモノの為に手を汚す覚悟を秘めて。

「私は望みません。こんなにも早くあの人が壊れるなんて絶対に認めません。そんな未来は拒絶します。世界の理全てを拒絶しうる『銀鈴（私）の世界』にかけて――」

37・イノセントシルバー（後書き）

シークレットクランよりサルベージした情報のまとめ
ノルンズアートについて

アカツキこと結城智哉の『付与する世界』において、新たに力を与えられたモノの総称。
アカツキの世界そのものを指してそう呼ぶ場合もあるが、普通はその造物のみを指す。
普通なら持ち得ない力……普通の物質なら持たない運命を与えられたモノ、という意味から『運命の女神の造物』と名付けられた。
しかし実はアカツキの世界自体は、その異端で強大なモノとは違い、指先の周囲１０センチ程度にしか展開しない小さなモノで、純正型達の中でも最小サイズだったりするらしい。

一般的にかなりの試作品が作られ、廃棄されてきたモノと思われるが、『武器』として残っているモノが四つだけあるとの事。
それぞれが目的を持って作られたモノだけに、強い運命を与えられてはいるが、それを使用する為の代償――つまり使用者として造物とリンクする為に支払う代価――も大きなモノとなる。

一つ目は『シャクナゲ』。
比良野悠莉の『灰色世界』を代償に彼を使用者と認める二つで一つ、一つで二つの二丁拳銃。
これは『無限の空圧弾精製』という力を与えられたが、作られた目的としては代償の方になる。
つまり『比良野悠莉の灰色世界を抑える事』の方が目的であり、そこから派生した能力はおまけみたいなモノらしい。

次が『ファム・ファタル』
『運命の女性』と名付けられた造物。
『ネームレス』と呼ばれるコード持ち達の暗部と言える者達の中でも、『ネームレス・ワン』と呼ばれる者に与えられたモノ。
二刀一対の小剣であり、代償や能力については不明。

三つ目は『ノーフェイト』
これについては一切の記載がない。
ただ『全ての運命を断ち切る運命毒』とある。
そして『ノーフェイトには触れてはならない』と。
比良野悠莉と接触する際に結城智哉が作ったモノだから、恐らく作られた順番としては一番初めのモノに当たるのだろう。
ただこれについての記載は、後からいくつもデリートと上書きが重ねられ、情報班の力を持ってしても修復ができない。
これを記載したのが『アカツキ』か『シャクナゲ』かはわからない。
しかし、彼等がそれほどに恐れたモノなのだとしたら、『ノーフェイト』とは一体どれほどの力を持っているのか。

最後のモノの名前はない。
どこにも記載されていない。
ただこうあるだけだ。
『我が親愛なる友に送る』と。

某月某日、情報班副官が記す。

38・セイント　オア　ダークネス（前書き）

あとがきには文字数の関係上乗り切らなかったので、臨時で前書きにてお知らせを。

お知らせ1、今回のあとがき、人物紹介『シャクナゲ2』は次の話と二部に分けます。
理由は上記の通り文字数の関係上です。パソコンで書けばもっとあとがき書けるのか、ちょっと興味ありです。

お知らせ2、5月中にはノクターンも終わりそうです。予定じゃ3月中だったんですがね。不思議ですね、ホント……。

お知らせ3、ちょっと今回の話は、いつも以上にぶつ切り感があるかと思います。本当はラストまで書いちゃうつもりでいってたのですが、長くなりすぎたので分けました。その関係上終わりがぶつ切り感たっぷりです。

お知らせ4、シンフォニアは来週こそアップです。手直しだけなので今度こそ多分間違いなく……かなぁ、多分。

誤字や脱字……というより増字？が今までに多数ありますが、暖かい目でお読みください。
あまりに目に余る、気になるという箇所はお教え下さったら幸いです。
あと、今回のタイトルに意味はありません。今まで以上にノリです。
アナザーバースディは色々掛けてましたけど。

38・セイント　オア　ダークネス

――この世界に神はいない。
いっこない。いたらおかしい。いたら変だ。いるなんて有り得ない。
だってもしそんな存在がいるのなら、こんな世界にはなってない。もしそんなヤツがいるのなら、こんな世界でも受け入れなきゃならない。こんな現実を諦めなきゃならない。

――そんなのって……そんなのを認めるなんて悔し過ぎる。
悲し過ぎるし、許せない。
許せないから神はいない。
憎みたくないから神はいない。
悲し過ぎるから神はいらない。

『神様はいるよ。だってさ、いなきゃ救われないじゃない。報われないじゃない。そんなのって許せないじゃない』

彼女は――信じていた。いや、多分すがっていたんだと思う。

『神様がいないなら、こんな風に生まれてきただけの私達が、こんなに嫌な思いばっかりしている救いがないじゃない。いつかは救われるって思わなきゃおかしいじゃない』

そう言って、みんなを励ましていた。必死に現実に抗っていた。
でも……結局は狂ってしまった。現実を知ってしまった。世界に負けてしまった。現状に絶望してしまった。
そしてその時に――俺の中で『神様』は死んでしまった。

――灰色世界――
もし『この世界』に神がいるのなら……それは俺なのだろう。
この世界では、全ての力が俺の支配下だ。この世界では、全てが灰色（俺の色）だ。

鎖達しかいない、鎖達しか有り得ない、無機物の世界の皇。
虚しい虚しい一人きりの裸の皇。
それが灰色世界の神。

だから俺は、この世界でも神は認めない。
有り得ちゃいけない。認めちゃいけない。
それを認められる時が来たなら――それは俺が狂っているという事だから。
だから認めない。許さない。

――ウロボロス――
第一世界、ファーストギア、蛇の世界、原初の灰色。
新たに生まれ変わるその時まで、ただあるだけの『具現の端末』。
『緋色の月という制御板』に支配され、『歯車という記憶板』に使役される『無限の蛇達』。

――アナザーバースディ。
灰色世界の一歩進んだ世界で一歩後退した世界。

『具現』をもっとも現した『月が一つ欠けた世界』で。
俺の精神や肉体では精一杯の世界。
それが――俺の中ではじけた。

「ぐっ……！」

幾つもの蛇達。歯車から伸びた鎖達。
それが狂おしいまでの勢いをもって、核である俺へとその身を委ねる。歯車から伸びた幾筋かが、俺の身へと突き刺さっていく。
端から見れば、俺が蛇達に刺し貫かれたかのように見えるだろう。
だけどよく見るまでもなく違和感ぐらいは感じられるかもしれない。なにしろ突き刺さった蛇達は、突き刺さるだけで俺を貫いてはいないのだから。

これはただ、灰色世界の第二段階である『歪の生誕日』を示す為の前段階だ。制御板が記憶を引き出し、端末を端末たらしめる為の『変化』に必要な儀式に近い。
つまり端末たる蛇達達は、歯車に蓄積した『力』の情報を、俺へと送る導線の役割も果たしているのだ。

……ただし、そこから流れてくるのは情報だけじゃない。蓄積された力の記憶だけじゃない。

『衝動』。
変種が突き当たる力の行使に対する『衝動』と呼ばれるモノも流れてくるのだ。
特に『自分の世界』という名前の領域すらも作れる純正型の『衝

動』は、もはや『強迫観念』に近い。
そう、そこから流れてくるのは、忘我にも至る快感と至高の全能感。
力の行使に対する衝動の極致と、全能感の最果て。
かつてはもう少し慣れていたハズのそれらが、今はより強く俺の全身を駆け巡る。

その衝動のままに一歩向こうに行けば『新皇』の俺がいて、ギリギリ踏みとどまれたこちら側にいるのが『比良野悠莉』の俺。

「――ッ！――ッ！！」

俺に語りかける声……カーリアンの言葉に、返事を返す余裕なんてない。
ただ手をかざすのが精一杯で、体を大きくそらして月を睨みつける。
俺に快感と全能感、欲望を送り込む、この灰色世界で唯一色を持つ空の皇を。
この口から漏れるのは哄笑だろうか。懇願の悲鳴だろうか。それとも祈りの言葉だろうか。
口元を流れる唾液にも頓着せず、眼力だけででも欠けてしまった緋色を押しやろうとする。

カラカラカラ――
誘惑の言葉が脳裏に響く。
『認めろ』と。
『己の欲望全てを認めろ』と、皇が囁く。

ガラガラガラ――
妖艶な声が耳元を掠める。

『お前は皇だ』と。
『お前の力があれば、全ての敵を討てる』、『あの紅い女も、銀色の少女も、富も権力も国も世界も！全てが己の意のままだ』と囁く。

ゴロゴロゴロ――
扇情的な声音が耳元で唄う。
『灰色が全てをもたらすだろう』と。
『お前の望む全てを具現させるだろう』と囁く。
それは――相変わらず心を打った。心を踊らせた。心を惹きつけた。

でも……と思う。
しかし……と考える。
もし灰色が全てを現しても、そこには決して現せないモノがあると思うのだ。

『さぁ、全てを解放しろ』
『さぁ、全てを望め』
『さぁ、さぁ、さぁ……』
『さぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁ！全てを！』

確かに、望めば全てが手に入った。
全てを望める位置にいた。
後数年あれば、関東一円だけじゃなくこの国が手に入っただろう。
彼女と俺、他の二人にスズカまでいたなら、いずれは他国にも手を伸ばせたと思う。
他の三人はそれを甘受した。
その『道』を受け入れた。

各々の世界を用いても決して手に入らない『一つ』を無視した。
そうすれば、『一つ以外は全て手に入ったから』。

『悩む事はない。お前の世界はそれだけの価値がある。第三第四の世界も、しがらみを捨てれば受け入れられる』
『そうすれば『彼女』をも討てる。『彼女』を救える。第二世界ではかなわなくとも、全てを求めれば全てを得られよう』

そうかもしれない。そうなのだろう。
『言葉の皇』も俺に言っていた。
灰色は未完の色で、未完の世界だと。

でもそれを受け入れたら――
それを認めたら――

「……そんな世界じゃ誰も笑ってくれない」

スズカも、カーリアンも、アオイも、スイレンも、ヒナギクも。
アカツキも、カブトも、クロネコやヒビキ、そしてミヤビも。
そして『彼女』も笑ってはくれない。
笑顔が見れない。それ以外しか手に入らない。

『それ以外の全てが手に入る。それもいずれは手に入る。全てを手に入れれば、全てを人に望めるだろう』

――それじゃダメだ。そんなモノじゃ満足出来ない。そんなモノ、欲しかったんじゃない。
俺は『彼女』に笑って欲しかった。そして狂ってしまった彼女にもう一度笑って欲しい。
スズカをみんなに笑って受け入れて欲しい。

カーリアンにみんなが笑いかけて欲しい。
智哉やミヤビに安心して笑って見ていて欲しい。
『彼女』に笑顔を思い出して欲しい。

「だから――俺と皇(あんた)が相容れる事はないよ。永遠に」

体に刺さり透過した蛇達。
カラカラと忙しく回り続ける歯車達。
そして四分の一ほど欠けた緋色の月。

そんな異界の中、異常な状況の中で、小さく呟いた程度の言葉には、打ち響くような強さなどはないだろう。
それでもいい。染み入るような深さがあれば、俺はまだ俺のままでいられる。
強さに狂わない弱さがあれば、俺はきっと俺のままだ。

そんな考えに安堵する間もなく、『衝動』の次は『力』が体に突き刺さった蛇達を介して流れ込んでくる。
『歯車に記憶された力の在り方』が。

それらは核である俺が見た能力や、実際にこの身に受けた能力。
かつての敵が使った力や、かつて肩を並べて戦った黒鉄達の刃。
肉の器を持たない、『純正型の世界に属さない』、そして今この『灰色世界にオリジナルがない変種の能力』達の雛型だ。
それらの力が制御板から記憶板を通して、端末に現れる。

それが『歪(いびつ)の生誕日』。
あらざる力が具現する世界。
俺の――灰色世界のセカンドワールド。

百を越え、二百を上回る能力を、宙を踊る端末が具現する。俺が得た具現の記憶のままに現れる。

それらの全てが『コピー』でも『劣化レプリカ』でもない。全てが『オリジナル』だ。

単に全く同じ存在である『他のオリジナル』と共生出来ないだけで、その在り方は変わらない。その強度もなにもかもが『歪なオリジナル』。

それが俺の制御もないままで――この世界に現れる事を喜ぶかのように、破壊の為だけの軍勢と化して具現化する。

あるものはその鈍色の体を炎に変え、あるものは透化して不可視の刃と化す。

またあるモノは音波による破壊を撒き散らし、あるものなど俺の残像をそこら中に作り出す。

それら端末達の力の発露に俺の意志は含まれていない。

ただ現した力のあるがままを発現させているに過ぎない。

力の向かう方向に指向性などなく、力の在り方を取り込んで具現の世界の核となった俺以外の全てを飲み込んでいく。

俺に出来るのは、紅の彼女の元までその力が飛ばさないように抑制する事だけだ。

「お前が言ったように、俺の世界は確かに不完全だよ。力としてだけある存在にしか干渉出来ないし、お前の世界をなかなか食い破れない事からわかるだろうけど、純正型の世界に対する攻撃力もそう高くない。力の具現を現すにしてはお粗末さ」

坂上は……呆然としていた。ただ発露する力をとびずさってかわした後、ただ呆然と俺を見やっていた。

その瞳に浮かぶ色には見覚えがある。

関東で見慣れていた恐怖の色だ。そして畏怖と憧憬、羨望と嫌悪の混じった表情だ。

「でもそれがどうしたって言うんだ？純正型の世界に干渉する力が弱くても、肉体に包まれた力をどうこう出来なくても、灰色世界で包み込んでお前を殲滅する事はできる。百を超える力の群れで押し潰す事が出来る」

ここはそれしか出来ない場所で、誰かを傷つける力を現すしか能がない世界だ。俺以外の生を奪う異界だ。

何百という人の命を飲み込んで、この国が壊れる一因にもなった堕ちた楽園だ。

いかに強力な世界を持つ純正型でも、敵としてこの地に入って生きて外に出られたのは、『彼女』以外にはいない。

全てに干渉し、その在り方を汚染する……『絶対毒』の理を持つ、『本当の意味での新皇たる彼女』以外に、ここから出られた者などいないのだ。

他の二人やスズカでさえも、この世界じゃ俺に勝つのは容易くないだろう。

一年前に敗北を知ったばかりの赤錆世界の強度と理では、五年前のあの日から、血反吐を吐く思いで世界を抑えようと足掻いてきた俺の灰色は止められない。

それが分からないほど愚かじゃないのだろう。そして前方に広がる力の群れに、恐慌を来す程度の半端な矜持など持ち合わせてはいないのだろう。

背を向けて逃げる真似もせず、やたらめったら力を振るうでもなく、佇んだまま視線をまっすぐに向けてくる。

「……そういや聞いてなかったな、なんでテメェは関東を抜けたのに、こっちでまた戦う事にしたンだ？テメェは逃げてきたんだろ？」

その声に滲んでいた狂気じみたモノもなりを潜め、むしろ淡々とした声音でそんな事を聞いてくる。

荒れ狂う力の群れなど眼中にないというワケではないだろう。

そんな事をいまさらながら厳かとも言える口調で聞けるのは、まがりなりにも関西の皇としてあった男の意地と誇りなのかもしれない。

「なんでかな。智哉にノセられたってのが正直なトコだけど、アイツが信じてたモノを俺ももう一度信じてみたくなったから――だな」

「結城が信じてたモノ？」

「あぁ。でもお前には分からないだろ。お前は自分の力と考え方を信じて袂を分かったらしいけど、お前には智哉が信じてたモノが分からなかったから、自分の考え方を選んだんじゃないか？」

怪訝そうな坂上の表情がちょっとだけ腹立たしく思え、俺の口調に苛立ちが混じる事ぐらいは仕方ないだろう。

こいつは智哉の友人だったのに、アイツがどれだけバカだったのかをまるで分かっていない。普段はちゃらけていたアイツが、どこまで愚直なヤツだったのかを分かっていない。

それが苛立たしくて、少しだけ悲しい。

智哉は……アイツだけは最後まで坂上を信じていたのに。

「……アイツは甘ぇんだよ。ノルンズアートで武器を作って、兵隊に持たせてりゃテメェが命を削る必要なんかねぇってのに、そんな

自己満足のテメェルールに縛られて、結局はなんにも残せず死にやがった。壊れちまった世界で、無駄にしちゃなんねぇ力を、アイツはテメェの美意識だけで無駄にしやがったんだ」

確かに……智哉の力には無限の可能性があった。俺みたいに他者を攻撃する方面だけに特化してもいなかったし、坂上よりも強大な理を持っていた。

恐らく汎用性や特異性から見ても、俺や『彼女』、他の皇達の誰と比べても一番異端だったのは、関西の始祖になり損ねた結城智哉だろう。

繋がりという名前の様々な代償を他者に支払わせて、最強の軍隊をも作れただろうし、欠陥預言書を他人に使わせればより多くの未来を知れたのかもしれない。

でも、アイツはそうはしなかった。ほとんどの造物を自らの責任が及ぶ範囲で使っていたし、造物にかかる責任は自らが取ろうといつも心がけていた。

でもそれは、結城智哉という人間個人の美意識によるモノでも、アイツの身勝手な自己犠牲によるモノでもない。

そんなモノであるワケがない。

だってアイツは――

「智哉はさ、最後に笑っていたよ。安心して後は任せられるって笑っていた」

「……」

「お前が関西軍を立ち上げて敵に立ったのも、廃都を包むように勢力を広げていったのも……それなのにお前自身が先頭に立って廃都に攻め込んでこなかったのも、お前なりに故郷を守る為だって信じてた」

「ンなワケねぇだろ！ボケた頭で温い信頼寄せて、結局は――」

「そうさ、結局俺達は敵同士だ。最後まで敵同士でしかない。アイツの勝手な信頼さ」

勝手な信頼。そうなんだと思う。

甘い、確かにそうだ。

でも……と思う。

しかしそれが悪いのか、と思う。

愚かで甘くてどこまでも温い考え方だけど、アイツのその強さに救われたヤツは確かにいるのだ。

そう、今ここにいる。ここで灰色世界に飲まれずに、絶望の直中に座りこまずに、蛇達を抑えてここにいる。

「……でもアイツはそれでいいんだ。そんなヤツだから救われたヤツもたくさんいる。そんなヤツにしか救えない人間もたくさんいる」

俺も、ミヤビも、カブトやヘルメスも。

アイツに拾われなければ救われなかった。ほんの僅かな救いもなかった。

アイツが周りに運命の造物を与えて平然としていられるようなヤツなら……そんな他人を犠牲に出来るヤツだったなら、俺達は――俺は救われていない。

だからそんなアイツの考えを否定しないし、誰にも否定させたくない。

「――アイツは運命なんて信じていなかった。鼻で笑って抗った。アイツが信じていたのは『人間』だけさ」

それでいい。それが最初の黒鉄の考え方なんだから、敵に回った友人を信じるという考えも笑わない。

ただ、結城智哉が死んで、抑えがなくなった『坂上』という人間は脅威になる。故郷との繋がりを持つ友人がいなくなった男は、見境をなくすかもしれない。

黒鉄を脅かすだろう。

アイツはそれを案じていた。今の仲間達――自分がいなくなって、悲嘆にくれる黒鉄の家族達を案じていたから、俺が代わりになっただけだ。

抑えられないなら……黒鉄が脅威を感じるなら、俺が坂上を殺そうと決めただけだ。

俺は結城智哉とは違うから。

俺の世界は、アイツみたいに優しくはないから。

「俺はアイツみたいに『人間』を信じていた。一度は確かに躓いたよ。もう立てないと思った。だから向こうから逃げ出した。でもまだ信じていたい。もっと信じていたいんだ」

――だから俺も神や運命、それに世界は信じない。認めないと決めた。信じるのは『人間』だけだ。

それが答えで――最後に向ける言葉だと決めた。もう語る言葉はない。

これ以上どのような言葉をかけたとしても、坂上と俺が分かり合う事はないだろう。

所詮は結城智哉という核を中心に、俺達二人は対極の位置にしか立てないのだから。

坂上は智哉は何も残せずに死んだと言った。
一年前のあの時は無駄死にだと笑った。
確かに端から見ればそうかもしれない。本来ならもっと大きなモノを残せたのかもしれない。
でもアイツが残したモノは確かにある。俺の中にも、神杜の中にも、仲間達一人一人の中にもあるのだ。
それはきっと今は小さくて、アイツの力の希少さに比べれば取るに足らないモノなのかもしれない。気付いている者も少ないのかもしれない。
でもやがてその小さなモノも芽吹く時が来るだろう。
来ないだなんて言わせない。
だって俺は……俺達は信じると決めたんだから。
だからアイツが蒔いた種が芽吹くまで、俺は黒鉄として側にあり続ける。
確かに黒鉄とは柵で、コードとは所詮は檻だ。人の輪で作った小さな囲いだ。アイツの優しさとちょっとした茶目っ気によって作られた符号に過ぎない。
でもそれは、俺を抑える為だけの檻なんかじゃない。
新皇を繋ぐ鎖なんかじゃないはずだ。
今は亡き戦友達の意志を繋ぐ為の囲いなんだと俺は思う。いずれその意志が芽吹くまでの居場所なんだと信じてる。
だってアイツはどこまでも甘いヤツだったから。どこまでも愚直なヤツだったから。

俺達第三班は、そんな『暁』に魅せられた花や植物の名前を冠した班だ。いずれ芽吹く世界まで在り続ける徒花の集団だ。
咲くべきモノが咲いた後には消える存在だろう。消えなくちゃならないモノだろう。
血塗れた雑草は美しい緑を陰らせる存在だから。

ひょっとしたらそんなシャクナゲとしての在り方も、ひどく歪なのかもしれない。

でも最後にはきっと笑っていられると思う。新皇を捨てて、姓も名前も捨てて、シャクナゲになった事を後悔はしないだろう。

……だって得たモノは確かにあったのだから。

38・セイント　オア　ダークネス（後書き）

人物紹介、シャクナゲ2

かつては黒鉄の創始者であるアカツキと対になる存在として、『宵闇』のコードで呼ばれていた黒鉄第三班班長。
本名は比良野悠莉といい、関東出身。
そして関東地方の現政府にして、日本で最初に革命を起こしたヴァンプ集団『道』の創設者の一人。

体に証を持たない希少な純正型であるが、もっと特異な点を挙げるとすればその力の発露の仕方である。
本来は純正型以外には見えないはずの領域……力を及ぼせる純正型としての彼の世界は、純正型以外にも視認出来るのだ。

単純に灰色世界と呼んでいるその世界の異常な在り方こそが、彼を『道』の中でも『新皇』と呼ばれる存在にしたといっても過言ではない。
目に見えない世界を持つ他の純正型よりも、人々に異端を見せつけられる彼を皇にしたのである。

その灰色世界こそが彼の本来の力の源泉で、二丁の銃から空圧の弾丸を放つのは、あくまでもその銃の能力に過ぎない。

彼本来の力は『力の具現』。
力の在り方を決める能力と言える。
例えば『ベクトルイーター』と名付けられた基本能力は、彼が力を現す為の端末として用いている鎖が、その身に触れたあらゆるモノ

に宿る力……慣性や速度、熱量など全てを無力に近い値まで下げる事が出来る。
そして第二世界と呼ばれる段階の世界では、あらゆる変種の能力を再現する事さえ出来るのだ。

ただしその中にも法則はあり、力の具現という理も絶対ではない。
第一に肉……生物の肉体に包まれた力は具現化出来なければ、ベクトルイーターで食らう事も出来ない。
第二に同じ純正型の世界から派生した力は具現出来ない（ただし、他の純正型の領域――世界から出た力にはベクトルイーターが効く。これは純正型の世界から出た力は、すでに現実世界の力へと補正されているから。それなのに具現化は出来ない理由は第三の理由による）。

そして最後に『全く同じ力を使える者が灰色世界の領域にいる場合、その力は使えない』。
これは全く同質の存在が二つある矛盾によって、灰色世界の理――そしてその核である男の内面に負荷がかかるから。
つまりカーリアンがいる時は紅が使えない。
また他の純正型の世界から派生した力が使えないのは、それは一度現実世界からの干渉、補正によって歪められたモノだからだと思われる。
つまりスズカの斥力はすでにただの斥力ではなく、補正された斥力αであり、スズカの世界による干渉も残っているから。

39・ブラック　ブラッド　ラストラン

荒れ狂う力の端末を抑え、百を超える力の記憶から一つずつ力を選びだす。

ここは力の在り方がある世界。力だけがただ残り続ける灰色世界だ。

それでも脳裏には、その力と共にあった仲間達の姿がよぎる。

坂上の勢力と、智哉の勢力。かつて友人同士であった純正型二人の争いにより、その命を散らした仲間達。

今ここに具現化させるのは、数ある力の中でもそんな黒鉄達の残り香ばかりだ。

――双刃と呼ばれた怜悧な女性黒鉄の力。

――深緑と呼ばれた、今は亡きひょうきんで軽い性格だった友人の力。

――飛炎と呼ばれた、重大な火傷を負った顔を覆面で隠した仲間の意志。

――そして『錬血』と冠された、俺を最初に支えてくれた人の想い。

黒鉄としてあった人々の力――コードを持ち、檻として俺を抑えてくれた者達が持つ力の一つ一つを、丹念に端末へとのせ、しっかりと自分のコントロール下においていく。

そうしなければ、ただの力として荒れ狂ってしまうだろう。暴力の群れとなり果てるだろう。

――そんな姿はこの力達には似合わない。最後まで黒鉄であり続けたあいつらには似つかわしくない。

もちろん力自体はオリジナルと変わらなくとも、使用者である俺自身は、オリジナルの使用者よりも劣化している。

当然だ。俺の体、俺の意識、脳細胞、精神。それら全てが他の能力を現すようには出来ていないのだから。

その力の強度は変わらなくても、制御率自体は五割といったところだろう。

それでも暴走だけはさせられない。させるワケにはいかない。

この力は、この無彩色な世界により発生したモノだけど、それだけの意味しか持たないワケではないのだから。

俺にとっては、全てが大事な記憶（檻）の数々なのだから。

「あの動乱時に、他人を信じて盛大にバカを見た野郎が、またおんなじ目にあいてぇのか？はっ、笑えるぐらいお人好しだな、あん！？」

……一度そんな目にあってるからさ。信じてバカを見るのはまだいいんだ。

だって信じて裏切られるなら許せるから。誰も信じずに独りきりよりはずっといい。

だからこそアイツは笑っていられたんだろう。笑って最後を迎えられたんだと思う。

智哉も散々嫌な思いをして、バカを見て、友人にまで離れられた

のに、それでも笑っていられたのは、『後は安心して任せられる』と言った言葉通りの心情だからだ。

「力で抑えなきゃなんねぇモンもある。力で対抗しなきゃなんねぇ相手もいる！関西を狙ってる芝浦の野郎にゃ理屈は通じねぇ！」

そう思うよ。俺もその点は同意見さ。『あいつ』は一番狂ってる。守るには力が必要だ。信じるには強さが必要だよ。

でも智哉は――戦う力を、結局は最後まで持たなかった黒鉄が言っていたんだ。

『大事な誰かを守るには、この身一つ、この心一つさえありゃいい。信じるってのはそれと同じだろ。信じられているって思うと救われるだろ。俺にはそれがあるから力なんていらないんだよ』

って。

俺にはその考えも分かるんだ。

だって俺はそれで救われた男なんだから。救われたヤツをいっぱい見てきたから。

「テメェを見てたらやっぱムカつくぜ！この結城のコピー野郎！」

俺じゃコピーにもなれないだろうさ。

また嫌な思いをするだろうし、絶望もするだろう。そうなればやっぱり後悔して、散々悩んで足踏みもすると思う。

……でもそれは怖くない。

今まで――こっちに来てから四年、ずっとそうだったんだから。

向こうでは一度盛大にポカをして、道を踏み外した。もうこれ以上ないほどのバカをした。

壊しちゃならないモノを壊して、手放しちゃならないモノを手放した。

こっちではひたすらそれを悔いていただけだ。

そんな底辺を這いつくばる人間にはない上しかない。上を見るしかないんだ。

そこにアイツがいた。それだけさ。

俺には先がある。罪の描く灰色の螺旋が広がっている。

アイツには——もうそれがない。

ほら、俺とアイツはやっぱり違う。どこまでも違う。そうだろう？

「テメェには負けねぇ！テメェにだけは死んでも負けは認めてやらねぇ！俺が——この坂上晴臣（はるおみ）が皇だ！俺は間違っちゃいねぇんだ！」

俺はアイツとは違う。暁とは違い、大地に燃えカスを残す灰色だ。

白にも黒にも——光にも闇にもなれない半端モノだ。

だけど坂上も——坂上晴臣と名乗った男も、結城智哉とは違うんだ。

「——朱袴の矛（しゅばかまのほこ）」

その手に灰を硬く塗り固めた——この世界ではそこら中にある灰という物質を『連結』させた矛を握り、自らの世界内で力を最大限に解放させながら突っ込んでくる坂上を見やる。

空圧の刃が周囲を切り刻み、音波の破砕で大地が割れても。

火弾の群れが突っ込み、不可視の壁に阻まれても……ただ真っ直ぐに向かってくる赤錆世界に包まれた男を。

——ひょっとしたらコイツはもう止まれないだけなのかもしれない。そんな事を考えてしまう。

止まれないという辛さに想いを馳せてしまう。共感してしまう。

そして、その愚直なまでの直進にはある種の感動すら覚える。
周りの力の全てが、コードフェンサー級の仲間達の力なのに止まらないのだ。
何も思わないというワケにはいかない。

「朱の刃張り（あけのはばり）」

そんな愚直さは嫌いじゃない。嫌いにはなれそうにない。
吹き上がる飛炎を吹き散らし、空圧の刃を真空で相殺し、音波を爆音で掻き消し、見えない壁を切り刻んで……
まさに最強の変種たる純正型というべき暴虐の行進は、黒鉄達の力を吹き散らしていく。
それでも慌てる事なく残された『錬血』の力を広げ、待ち構える。

錬血のミヤビ――。
俺が知る全ての変種の中でも、アゲハ以上に珍しく、スイレンと同等以上の戦力を持ち得る力を宿した変種。
そんな彼女の力は『物質支配能力』とでも言うべきモノだ。
あらゆる同種の物質を、任意の形に結合させ、完全に意識下に置く能力。彼女の望むがままの形を型どり、彼女が望むがままにその形を崩す。そして彼女の望むがままに宙を翔る。

彼女の意思が途切れると結合は消えるし、数も同時には多く作れない。
しかしその結合された物質は、彼女の意思の限り形を失わないし、彼女の意思から外れる事もない。シャクナゲの銃撃でも、戦車の砲撃でも『錬血』の造物が崩れる事はないのだ。

その力を使い、灰を塗り固めた刃を１０余り作り上げていく。
数もミヤビに及ばなければ、その形も柄や鍔すらもない刃のみの

無骨なモノばかりだ。
お世辞にも剣の群れとは言えないそれらを、彼女が好んで作り上げた『朱袴の矛』と『朱の刃張り』の二振りを残して、坂上へと刃の雨のごとく舞い降らせる。

この時点でもすでにかなり限界が近い。数多の力を制御する事に頭がズキズキと痛む。抑圧された世界が神経を圧迫していく。抑えこんだ衝動が心をすり減らす。
それでも力の制御をなす手綱は手放さない。

ここで力を完全に解放して、暴力の群れで将軍を殲滅するのは簡単だ。
かつて国軍を……自分達なりに国の為に戦っていた大人達を、灰色で飲み込んで、世界で攻めつけて、力で圧倒したようにするのはとても楽な道だ。
本来の戦い方としてはそうあるべきなのだろう。
数多の力の群れで、幾多の敵を無意識で殲滅する……そんな殲滅戦こそが灰色世界の使い方なんだと思う。
でもそんな真似はしたくなかった。それだけは避けなければならないと思ったのだ。
こんな考えはひょっとしたら無駄な美意識、自己満足に過ぎないのかもしれない。でもそうはしたくなかった。

……俺は新皇とは違うという事を認めさせたかったのだろう。
坂上にも、黒鉄の残り香達にも、後方で一人取り残したままの彼女にも。
そんな考えなど伝わるワケがないのに——向こうの俺など知るワケがないのに、そうしたいという想いを抑えきれなかった。
ひょっとしたら自分自身にも思い込ませたかった、という理由が大きかったのかもしれない。

でも――それは大事な事のような気がしたのだ。

「おらぁぁぁぁ！！！！」

大きく振るわれる坂上の腕は真っ直ぐに俺へと向けられたモノ。
それが自身に向かい飛ぶ、拙い制御に支配された『錬血・灰色世界』の刃の雨を――その制御を吹き散らす。
恐らく渾身の力と理を秘めた空間の断裂が、この身を引き裂こうと迫っているのだろう。
それを『朱袴の矛』と名付けられた矛を新たに飛ばして迎撃させる。

朱袴の矛と朱の刃張り――

彼女がこの二振りにだけ名前を付け、どんな時どんなモノを結合させて作っても、すぐに形に出来た理由は分からない。どのような思い入れがあったのかも聞いた事がない。
彼女自身は黒鉄という兵士であり、戦士であったけど、能力的には鍛冶師や製作者――アカツキと同じタイプだったんだと思う。
その高い身体能力と、錬血の力を上手く使いこなして前線に立っていたから、その実力は間違いなく黒鉄でも随一と言えただろう。
だけど本来は誰かの後ろで武器や盾、罠や敵の前進を阻む壁を作るべきだったんだと思う。

でも彼女は絶えず前線に立っていた。周りを叱咤激励していた。
そんな彼女が主に近接戦で使っていたのが、この二振りの武器だ。
時には土塊から、廃材の銅から、泥から作り上げた矛と刃。
凝った作りの柄を持つ片刃の矛と、無骨な作りの同じく片刃の刀。

俺を『相棒』と呼んでくれた女性が、最後に振るっていた二振りの武器（力）。

多くの『その他』を飛ばして敵を効果的に削り、それをかいくぐってきた敵を二つで迎撃する――それが彼女の戦いだった。

全く違うタイプの二つを、彼女は近接戦の場合は使い分けて使っていたのだ。

その矛は折れず崩れない。その刀は絶対に曲がらないし、欠けもしない。

だってその矛と刀を形作っているのは、物質同士の自然な結合によるモノじゃなく、ミヤビの錬血によるモノなのだから。

元が灰だろうが土塊だろうが、この形をした矛は絶対に折れちゃいけない。

彼女の心が最後まで折れなかったように、この矛も決して折れちゃいけない。それが空間の断裂による攻撃だろうが、打ち負ける事など有り得ない。

そう信じて、矛の軌道をなぞるように真っ直ぐに駆ける。

片手にはシャクナゲに変わり『朱の刃張り』。

絶対不折の片割れ。

「そんな得物風情で――！？」

突き進む矛にも、その後を真っ直ぐに追う俺自身にも迷いなど欠片も含ませない。

空間の断裂と矛の甲高い衝突音が響いても、破裂した真空が矛を弾き飛ばし、辺り一帯を薙ぎ払っても。

そして矛と自身が放った真空が相討った事に、坂上が呆気に取られても。

大地を削り、灰色を削り、この身に数多くの裂傷を刻んでも、残る不折の刃を握った手は緩めない。この駆ける足も止めはしない。

空間の断裂のままぶつかったならば、俺でも無事には済まないだろう。空間の断裂とは不可視にして、人体には抗えない必殺の刃に他ならない。

だけど、それが破裂した後に残る空間の破砕ならば耐えられる。

……少なくとも、変種として強い肉体を持つ俺ならば。

だから怯む事なく、ただ真っ直ぐに坂上を……自身渾身の断裂をはじかれ、驚愕の表情を浮かべる坂上晴臣を見据えながら、その刃を突き出して駆ける。

「くっ……！」

再度振るおうとする坂上の腕と、一心に走る俺の足。

変種の極みたる純正型同士の戦いにしてはお粗末で、どこまでも滑稽な決着の間際だろう。

泥臭くて、垢抜けていなくて、失笑を買うような真似をしていると思う。

でもこれは……この在り方は、シャクナゲという存在らしい在り方だと思えた。

皇ではなく、それに抗うただの雑草。

暁の恵みを喜び、露の潤いを喜び、艱難辛苦に耐えるモノらしい、体を張った在り方。

そんな存在に俺はなりたかった。灰色で全てを蹴散らし、全てを淘汰する皇になどなりたくはなかった。

――だからこの決着の付け方は、ある意味本望だった。

この瞬間だけは、黒鉄としての役割を忘れていたと思う。
確実に倒す事よりも、その行程を大事に思っていたのは間違いない。

一瞬早く坂上の腕が振るわれる。生まれたての空間の断裂が迫るのを肌で感じ、より力を込めて腕を突き出した。

朱の刃張り――。
この一振りの意地にかけるしかない。もう俺のままで殲滅する灰色世界を使う余裕はない。
これ以上戦うには、自動殲滅、無意識による殲滅、灰色世界のオーソドックス……そんな手段しか残されてはいない。
ズキズキ痛む頭、圧迫された精神、自らの世界からの干渉――それらに思考を放棄すれば、気付いた後に残されるモノは空虚な孤独。

――そんな光景はもう見たくない。

だから残された朱の刃張りに頼るように、縋るように残る力の全てを込める。
朱袴の矛や他の刃が形を失い、灰に戻っていくのが『錬血』の力による繋がりで分かる。
世界に現れた力の余韻はすでに朱の刃張りのみ。
他の力は消え失せ、世界はすでに無機質な灰色のままに空虚なモノに戻っている。
しかし、それは暴発の前の静寂だ。操りきれないから抑えつけているだけの静寂だ。
それが分かっていても、なぜか俺の心は澄んでいて。
どこまでもただ真っ直ぐで。
今の灰色世界は、少しだけ――ほんの少しだけ『色』を持っているような気がした。

そんな中、俺と坂上の距離は――零になったのだ。

39・ブラック　ブラッド　ラストラン（後書き）

シャクナゲ3

スキル

灰色世界・ＳＳ＋（殲滅戦のような大軍を相手取る戦闘に特化した『力の具現』を理とする世界。かつて関東で国軍、警官隊や自衛隊を相手にした際は、火器による砲撃の速度、爆発力、弾丸の速度を理で殺し、端末である無限の鎖で薙ぎ払うという、無意識に近い、世界の防衛本能による戦い方を取っていたが、それでも幾多の戦いで全ての敵を殲滅した。ちなみ国軍相手には、二番目の世界すら使っていない。この数値は未完の部分も含めたモノ）

身体能力～Ｓ（基本的には普段と変わらない。しかし、端末による絶対防御と、端末に身を任せた宙を走る移動速度は、普段よりも断然上で、それによる補正）

本能Ｓ（シャクナゲというよりも、灰色世界の防衛本能。敵対するモノを核の意志に関係なく攻撃する自己保存の法則）

持久力Ｄ（主に精神的に消耗が激しい。世界からの『衝動』、力に対する錯綜による消耗は、普段の比ではない）

制御力Ｄ（全く制御出来ないワケではないが、世界の本能を完全には抑えきれていない。持久力の低さと共にマイナス補正。スズカの『拒絶の世界』よりも制御出来ておらず、抑えきれないなら使わないようにしていたほど。それすらワード式を使っていても完璧ではなく、シャクナゲを持つまでは常に世界に怯えていた）

稀少度ＳＳ（アカツキの『ノルンズアート』とは方向性が違うが、誰にでも見える世界はかなり異端のモノ。この世界の異質さが彼の過去を変えたと言っても過言ではない）

緋色の月について。
灰色世界の虚空に浮かぶ空の皇と彼は称している。
自分とは別の……自分の中にいる新皇の象徴として捉えているのだ。
その実は、世界の法則――力の具現を司る制御板で、世界に満ちる理の在り方と、端末の制御を成している存在である。
歯車が記憶を留め、鎖が力を宿す端末、月が制御。
灰色世界にあるモノ全てに意味がある。
それが核である彼にとって、自分の存在価値は人体にとっての心臓と変わりなく、必要不可欠でも在り続ける為に必要なだけで、それ以上の意味がないモノ……といった認識を生んでいると言える。
だから緋色の月を敵視している風があるのは、世界を制御しきれる存在に対する『コンプレックス』によるモノがあるのは否定出来ない。
ただし、現実夜空に浮かぶ月を見るのは好きで、それは灰色に浮かぶ異界の月とは違う風情があるから……との事。

４０・ブラッドライン（前書き）

あらかじめ言っておきます。

今回はすごい短い上、あとがきもありません。
『４０』話じゃなく『３９．５』話って感じです。

あとがきにミヤビを載せようかと思いましたがやめました。
また回想やら番外編やらでミヤビが出た際にします。『マークオブブラック』じゃメインキャラですし、そっちを書き出したら載せるかもです。

次回は決着。終結。
後はアオイ、カクリターンで現状の『黒鉄』や『廃都』についてを書いたり、『狐』に決着をつけたり。
決着にも案が２つあったんですけど、自分好みで決着を持ってく事にしました。

スズカ、狂人、絶対毒の理、新皇、関西以西のその他勢力、そしてアカツキの遺物。
そういったモノは二部以降です。

ん～、二部をページ分けるか、はたまた全部を同じページにして、最多文字数小説を目指すか悩み中。
ご意見よろしくです。
次回更新については活動報告にて。

そろそろ５５０００いきそうです。最近閲覧者数が増えて嬉しい限り！

ありがたや～。

40・ブラッドライン

シャクが蛇と呼んだ鎖達の変貌。それはあたしにとって、よりここが異界なんだと知らしめるモノだった。

苦悶の叫びにも似た、存在を誇示するかのような――あるいは自らを奮い立たせるかのような……そして何かに縋りつくような声を張り上げるシャクに、あたしが思わず声をかけたほんの数瞬後。

駆け寄ろうとしたあたしを、中空を見やりながらシャクが腕を上げて制止したわずか後。

鎖達がシャクに突き刺さり、ゆっくりと透化した直後に鈍色の蛇達が再び具現したその姿。

――それはありとあらゆる自然の猛威にも似た圧倒的な力達の現出だった。

鈍色の鎖達の体は、それぞれその姿を『力』へと変えていた。

あるモノは真っ赤な炎に。

あるモノは無色透明な刃に。

あるモノは甲高い音と共に爆散する音の塊に。

そんな中で、シャクの残像が幾つも生み出されているのを見て――今まで見た事のあるその『幻像』の在り方を見て、あたしはその力の群れの正体を悟った。

なんとなくだけど、どこか確信を持って。

『水鏡』のスイレン。

黒鉄第三班が誇る近衛殺し（インペリアルキラー）。

あたしでも『こいつにはちょっと勝てないかな……』なんて思う数少ない黒鉄の一人。

そんな彼女の能力は、ありとあらゆるモノの目に見える姿を、光の屈折と空気に含まれた水分を操って曲げる、『空間干渉』『視覚操作』にも似た力を操るモノだ。

その幻像の数は、彼女が使った力に比べれば幾分少なかったけど、かつて見た事のある『百を越える彼女の残像の群れ』と、その在り方は良く似ていたのだ。

そう思えば、そこにある『力』の群れの中に、見覚えがあるモノが幾つか含まれている事に気づく。

あの灰色の大地を切り刻んでいる無色の力は、双刃のコードフェンサーの『空刃』に似ているし、甲高い音と共に爆散する力の塊は深緑の力そのモノだ。

飛び交う火弾は見た事のないモノだけど、恐らくはあたしと同じ《発火能力》を持つ者の力なんじゃないかと思う。

そう、そこに現れた力の群れは、恐らく――本当に確信などないけれど、『変種』と呼ばれた人々の能力なんだろう。

それを、『鎖』達が変貌して現しているのだと思う。

――あぁ、そうか。

そこまで考えて、そう納得する部分があった。

さっきの説明……『ベクトルの操作』なんじゃないかと感じた、

この世界の理というモノに対する説明への違和感。
それはまさしく正しかったのだろう。
この姿、力の大群が具現した在り方――。
これこそがこの『灰色の世界』の本来の在り方なんだろう……そう思ったのだ。

この力の群れの猛りは、まさに災厄と呼ぶに相応しいモノだろう。
これらを前にしては、既存種や一つの能力しか持ち得ない他の変種達では、自らの身を守る事など出来っこない。
まさに四方八方からせまりくる自然の猛威に近い。

それがシャクから辺り一帯へと広がっていき、周囲一帯を爆砕し、坂上を飲み込もうと触手を伸ばす。
そして、離れて見ていたあたしにも――。

――あ、ヤバい。
そう思ったのは一瞬の事。
それでも身をかわそうとしなかった自分に小さな苦笑を浮かべ、目の前で『行進を留めた大群』を見やる。

大地を抉る破砕も、飛び交う火弾も、音速の刃も、大気を切り裂く雹の群れも、あたしのほんの数メートル手前でその行進を止めた。
坂上を追う力の群れはその余波を四方八方にバラまいているのに、あたしの方へと迫ってきていた力だけは、その余波ですらも留まったのだ。
だれがその猛威を止めたのかは考えるまでもない。
そして避けようともしなかった自分をおかしいとも思わない。

ちょっとだけ……ほんのちょっとだけ、あたしとあいつの距離が開いたような感覚が悲しくて、それでも何故か『自分は大丈夫』と

思えた事が誇らしい気がしただけだ。

そして全てが掻き消える。

全ての力達が掻き消える。

一切が静寂へと戻る。

ただあるのは灰色の大地と同色の空、そして歯車と月。

そんな無彩色な静寂を彩る中空から、再び鎌首をもたげるかのように顔を覗かせた鎖達は、先ほどとは違いほんの数本だけだった。

その数わずか五本。最初にシャクが使っていた数と同じだけの鎖が、静かに佇む『黒鉄』を覆い――その鈍色を変貌させていく。

先ほど具現し、顕現し、全てを蹂躙しようとした力達の中でたった五つ。私がよく知っている三つと、私が知らない二つの力へと変貌していく。

灰を巻き上げ乱れ舞う風。

気流が渦巻くような甲高い音の渦。

これらはあたしとも面識のある人物の力だと思った。

同じような力を持つ変種は他にもいるかもしれないのに……ましてやこの力の群れが現れた原理は、ひょっとしたら全然別の何かかもしれないのに、あたしにはこの二つが『双刃』と『深緑』のモノなんだと思えて仕方がなかった。

確信出来る要素なんか何もないのに、そうなんだという確信があった。そんな自分に違和感すら覚えない事を、全く不思議にも思わない。

――今は亡き先人。今では『廃都』と呼ばれるカリギュラに染み込んだ、黒鉄達の血のほんの一滴。

この二人とあたしの間には、それほど深い繋がりがあったワケじ

ゃない。あたしがこっちに来たばかりの頃にあった一大抗争――廃都郊外で起こった黒鉄と関西軍、その他が入り乱れた争いで、二人ともが殺されてしまったから。

深い繋がりを持つ前にその機会を奪われてしまったのだから。

でも、シャクと彼等は違う。

その間には血の交わりよりも濃い繋がりがあっただろう。友人といった関係よりも深い絆があったに違いない。

ならば――ならばこの時、この場面で、彼等が『ここにいる事』に違和感を持たないのも当たり前かもしれない。そんな戯れ言を、あたしはなぜかしっくりくる感慨と共に納得していたのだ。

次に現れた火弾の群れも、無色透明になり、あたしには見えない形で具現したなんらかの力も、恐らくあたしの知らない――いつか黒鉄だった者達のモノなんだと思う。

そして――

「あっ……」

そして、現れた灰色の刃の群れに――あたしは惚けた声と共に言葉を無くした。

灰色の土、灰そのモノが固まっていく過程。そして連結され、形を持って繋がって出来ていく『刃達』に。

「なんだ、あたしに任せるなんて言ってさ……」

あたしは知らず知らずのうちに涙を流していた。

悲しみでも喜びでもない。何かが内から溢れてきて、それが涙になって流れ落ちていったのだ。

『頼んだから。カーリアンの紅でシャクを助けてあげて』
なんて言ったクセに――

「やっぱりあんたもほっとけなかったんじゃん」

……そう思えば、知らず知らずのうちに笑みまで漏れていた。
あたしがこんな状況でもシャクをシャクだと認めたように、彼女もきっと黒鉄の全てを知っても、彼女は『あのまま』だったんだろうな、と思えば笑いたくなったのだ。

「ミヤビもさ、大概面倒見がいいよね、ホントさ」

その呟きはきっと誰にも届いていないだろう。脳裏に浮かんだ『彼女』にも届くワケがない。
それでも――それでも『彼女』があたしの呟きになんて答えるかだけはわかった。

『ホント、シャクのヤツってば手がかかるからさ。でも、ケ・セラ・セラ……頑張ればなるようになるよ、アカちゃん』

そう笑っているような――そんな気がしたのだ。

41・スタートイットアップ

空には、欠けた部分がゆっくりと継ぎ接ぎされた緋色の満月が浮かんでいる。
欠けた部分が補われるごとにゆっくりと……だけど確実に、世界が俺の意識下に戻っていく。
宙に集まっていた力の意志達は、一つを残してそのまま情報となって歯車へ。具現の端末達はただの端末へ。

残っていた最後の一つ――坂上の左腕の付け根を貫き、駆けていた俺の勢いでそのまま斬り飛ばした『錬血の刃』も灰色の霞へと返る。

「……なんだよ、そりゃ」

ぶつかり合い、弾き飛ばされ、倒れ伏した坂上の息づかいは荒い。吹き抜ける風に紛れる吐息の間隔は短く、流れ出す血の勢いも止まらない。
対する俺も、『朱袴の矛』に敗れた空間断裂の余波――坂上渾身の力と理の残り香たる破砕に打たれた体からは、ジクジクと血が流れ出している。
あちこちに傷を負い、髪もボサボサ。一張羅のコートなど、耐刃繊維を編み込んだモノなのに、ザクザクに切り刻まれてもはや体に引っかかっているだけに近い。

「俺の理を……そんなショボい武器で受け止めるとかムチャクチャだろ」

おそらく、最初の渾身の空間断裂を朱袴の矛で打ち破った時点で、勝負は決まっていたんだろう。最後に受けた空間断裂には、ほとんど力がこもっていなかったのだ。

朱の刃張りとぶつかり合っただけで、僅かな微風を残して宙に消えていった様は、要塞と称された城の一角を廃墟と化した力とは思えないほどに弱かった。

「あれはさ、始祖でも純正型でもない、一人の黒鉄が使っていた刃なんだ。ただ意志のままに形をなし、ただ意志のままに駆けるだけの刃――」

――でも、絶対に欠けちゃいけないモノなんだ。

そう呟いただけで、何かが込み上げてくるのを感じる。

もう一年。ミヤビやサザナミ、クロネコがいなくなってから一年も立つ。カーリアンより前、彼女の先代にあたる『最強のパイロキネシスト』だったヒエンが亡くなって二年、ヨツバの前に『不貫』を名乗っていた壁使い、スミレが亡くなってからは三年も経つ。

全員が全員、変種としても非常に強い力を持っていて、全員が全員黒鉄。全員が全員、アカツキに救われたヤツら。

そして、みんながみんないまだに強く俺の思い出に残り、『檻』を作る記憶のカケラ達。

俺に『シャクナゲ』という在り方と、価値をくれた存在。

智哉が作ってくれた檻は、決して『造物』であるシャクナゲなんかじゃない……あいつらを思い出す度にそう思う。

確かに『シャクナゲ』は灰色世界を完璧に抑えてくれる。俺の内でくすぶってはいても、表に出てくる事はない。

完璧な『世界抑制器』で、俺が望んで止まなかった力を秘めている。

でも、俺が俺でいられたのは……罪や咎に潰れなかったのは、間違いなく俺の周りにいてくれた檻――黒鉄という絆で結ばれた仲間達のおかげだろう。その記憶に残る暖かさのおかげなんだと思う。

あいつらがいなければ、俺は間違いなく潰れていた。智哉がいなければ、俺には皇の道しかなかった。

「あいつは……結城智哉は、なんにも残せなかったワケじゃない。今でも智哉が残してくれたモノが――黒鉄という在り方が、俺や他の変種達を守ってくれている。俺達の心を守ってくれている」

「……」

「変種はさ、強くなんかないんだ。純正型は強くなんかないんだよ。一人きりじゃ簡単に壊れてしまう。その心はとても脆弱で、どこまでも脆くて壊れやすい。あいつのやり方は、変種達を檻で――仲間達で囲って守っているだけでしかないけど……それはひょっとしたら間違ったやり方なのかもしれないけど……いつかはそんな檻も必要なくなると信じてた」

「……未来を信じてた、ってか？クセェ野郎だ」

吐き捨てるようにそう言う坂上は、呆れ混じりに小さく笑って――それに俺は即座に否定を返す。

こちらはちょっとだけ普通に笑みを浮かべながら。

「違うよ。言ったろ？あいつが信じていたのは『人間』だけさ」

ドクドクと血を流しあって、互いに鋭く視線を交わしあって、言葉の刃を交えあって……。

その間に、先ほどまであったギスギスした緊張感はすでにない。何故か今になって真っ直ぐ向き合えているような……坂上晴臣という個人とぶつかり合えているような、そんな感慨を覚える。

「……はっ、もうどうでもいい。どのみち勝ったのはテメェだ、比良野。さっさとこの首を取って……後はテメェがやりたいようにやりゃいい」

そう言って、その上で坂上は真っ直ぐに俺を見据えてくる。

その灰色の瞳に強い光を宿したまま。

「でもよ、答えは聞かせてくれるんだろ？『一年前に聞きそびれた答え』。テメェは同族を殺し続けて……どうしたいんだ？俺はこのザマだ、今回はもう後戻りは出来ねぇぜ、アカツキの後継者？」

その声にも嘲る色はなく、ただただ真っ直ぐに問いかけてくる。

一年前には答えられずに逃げ出した……いまだに答えの出ていない問いを。

そんな坂上の様子に、理想的な、模範的な答えに逃げる真似はできないと思った。

ありったけを真っ直ぐに返すしかないと思えたのだ。

ただ視線だけは逸らさないように……灰色の瞳から逃げないように真っ直ぐにしっかり見返す。

「抗い続けるよ。ずっと世界や運命に抗い続ける。同族を殺して殺

し続けてでも抗ってやる。神はいないと否定し続ける。俺自身が壊してしまったから出来た『現実（いま）』に納得なんかしてやらない。

……だって俺はシャクナゲ。アカツキと同じ最初のブラックメタル。抗い続ける雑草。最後の最後まで俺は黒鉄――」

――だから『比良野』の名前はお前が持っていけ。それは智哉に預けたハズのモノだから。

「……はん、いらねぇよ。あいつが置いていったモンは、後継者のテメェが持ってろ」

片腕を無くした不完全な大の字で、ゆっくりと灰色が霞んでいく空を見上げながら、坂上は吐き捨てるようにそう言うと、その瞳を閉じた。

辺りの光景が、俺の世界からゆっくりと色を取り戻していくのと比例して、坂上の赤錆色の世界も霞んでいき……その切り裂かれた腕からはひたすら赤を広げていく。

今から治療をすれば、腕を無くしていても助かるだろう。変種じゃなくても助かる可能性はある。

でも、坂上はそれを望んではいまい。

例え今ここで助かったとしても、命を狙われ続けて生きる事になるだけだ。

坂上は将軍、関西の将軍だ。

その首は虐げられた市民達にも、坂上の次に覇権を狙うヴァンプ達にも魅惑的なモノだろう。そういった者達を、理を振るう腕――つまりは力が半減した坂上が今まで通り抑えつける事は出来まい。

近衛も今では一人……兄を殺されながらも、その意志を受けて俺を通してくれた少女しかいない。抑えつける力のなくなった関西軍

は、一気に坂上の敵に回る可能性が高い。
それならここで、区切りのついた今この時点で――そう思う気持ちも分かる。

「でもよ、忘れンじゃねぇぞ、『シャクナゲ』。テメェは新皇。どこまでいっても最初の皇なんだ。俺と同じ道を進んだヤツだったって事を……絶対忘れんな。そしていつか気付くだろうさ。結城のやり方じゃいずれつまずくって事にな」

「そうだな、つまずくだろうな」

というよりも、今現在すでに盛大につまずいている最中だろう。
廃都と呼ばれる神杜では、恐らく黒鉄が二つに別れていると思う。
俺をシャクナゲだと認めてくれる連中と、それ以外に。

俺はこっちに来てから、一度も神杜で『灰色』を使った事はない。
誰かを傷つけた事もない。それでもこうなるのは必然だった。
俺はヴァンプで、皇で、それを隠していたんだから。それをみんなが承知の上で、仲間になってもらったワケじゃないから。
その現状こそが、智哉が隠し続けてきた事に対する答えだろう。
間違いは……歪みはあったんだと思う。

「でも、つまずいたならもう一度起き上がればいい。間違いこそが正解に近付く為に必要な時もある。暖かい嘘もある、いつかは分かってくれる……俺はそう信じたいよ」

「……腑抜けが。でも今の俺に、その腑抜けを糾弾する資格はねぇ。負けたのは俺だ。好きにするがいいさ」

「あぁ、俺はこのまま先にいくよ。お前はここで消えていけ。いつ

かは俺も同じ場所にいく」

――さよならだ、坂上晴臣。関西の皇。

そう呟き、霞んでいく灰色の中で、その姿を取り戻した蛇達の意識を倒れ伏す坂上へと向ける。

ここで坂上を討つ事はより大きな混迷を生むだろう。黒鉄も変わってしまうに違いない。

坂上の勢力がこの関西という地に、仮初めとはいえ安定を生んでいたのは間違いないのだ。

それが潰えればこの地には他の地方勢力が入り乱れ、より激しい戦乱を生むだろう。俺自身もその渦中から逃れられないと思う。

でも、俺と坂上が潰し合って、俺が生き残った時点でそうなる事は決まっていたのだ。そう分かっていた。

逃げる事を選ばず、黒鉄であると決めた以上、この結果からは逃れ得なかった。今更それに抗えない事も分かっている。

それに俺はずっと黒鉄としてあり続けると誓ったばかりなのだ。その誓いは変化にまみれても変わっちゃいけないモノだと思う。

来たる変化を恐れて、俺は『黒鉄のシャクナゲ』を名乗るワケにはいかない。

そこまで考えて、舌なめずりをする蛇達に指示を出すべく腕を掲げる。

待ちに待っていた『清算』の時なのに、晴れやかとは違う……何か重いモノを、新たに背負わされたような感慨を覚えながら。

そしていざ指示を出そうとした俺と、灰色がこの身深くに沈んでも、世界に残ったまま牙を剥いている蛇達の前に――

横から飛び込んできた一人の少女が立ち塞がった。

＊＊＊＊

倒れ伏す坂上。ボロボロの衣服を纏い、それを見下ろすあいつ。
それを見ながら安堵の息を吐き、側に駆け寄るべきか否かを少しだけ悩む。
今、二人がボソボソとしている会話。それに入り込んでいいものかどうか分からない。
側で見ていただけの――もっと言えば、傍観者である立場に納得してしまっただけのあたしに、二人に干渉する資格があるのか……そんな事を考えてしまう。

あたしは見ていただけだった。

『大丈夫。カーリアンは付いていってくれるだけでいい』

そう言っていたスズカの言葉通り、本当に付いてきただけに過ぎない。
紅と呼ばれ、黒鉄最強のパイロキネシストと呼ばれ、いい気になっていたつもりはない。そんな言葉に、あたしはなんの価値も見いだせなかったハズだ。
でも、どこかで『自分の力なら、どんな時でも自力でなんとか出来る』……そんな慢心があったのかもしれない。

かの錬血ですら、自らの無力を嘆いていた時があった事をあたしは知っていたハズなのに。
『後は頼む』と言われたのだから、その重みを知るべきだったのに。

――あたしがこんなんじゃ、ミヤビも任せっきりにはできないよね。

そう自嘲の笑みが浮かび、空を見上げる。
空はもう、ほとんど色を取り戻していた。灰色の残滓はまだあちこちに残っていたけど、異界の情景はほとんど消えていて、余韻として鎖の数本がシャクの周囲に漂っているだけでしかない。
こんな風になるまで、あたしは一体何をしていたんだろう?そして何をしたんだろう?
そう自問をしてしまうのを止められない。
今も、倒れ伏す坂上に鎖によるトドメをさそうとしているシャクを見ているだけだ。
それは必要な事で、やらなければならない事なんだろう。黒鉄としてはいずれ達成すべきだった目標だ。
でも……でも何故か今のあたしは、シャクには『その力』で誰かを殺めて欲しくない、なんて事を考えてしまう。

今までも、シャクがシャクナゲとして誰かを殺めていたのは見た事があるハズなのに。
あたし自身も、自分の紅で人を殺した事があるのに。
何故かそんな感傷に心がささくれ立った。どうしてもそんなシャクを見たくなんかないと思ってしまう。
でも、それを止めるには『黒鉄』という今の立場が邪魔をして……『どんな力を使ってみせても、どんな力で人を殺めても、シャク

はシャクなんだ』という陳腐な言い聞かせで納得させようとしてしまう。

――あたしは本当に弱い。

とても脆くて弱い。

一時はシャクと共にここで死ぬ覚悟すら決めたハズなのに、今どうするべきか、何がしたいのかを決めかねるくらいに薄っぺらだ。

そしてそのままシャクが坂上にトドメを射そうと、鎖達を向けた時だった。

あたしが動けず、何も決められないまま見ていた時と言ってもいい。

あたしの横を……すぐ真横を一陣の疾風が駆け抜けたい。

疾風のごとき濃紺の影。

少し長めのコートを纏った淡い桃色の影。

それが躊躇う事なくシャクと坂上の間に立ちふさがる。

ジャラジャラと蠢く鎖達を意にも介さず、なんの迷いも躊躇も見せず、その両手をいっぱいに広げながら。

「もう決着はついたよね？だったら坂上は見逃してあげてくれない？」

あたしよりも小柄な――近衛の装束を纏った少女が、そう言って立ちふさがったのだ。

「右近！テメェ、生きてたのか！」

「無様ね、坂上。あっさりシャクナゲを通した私が言うのもなんだけど、出来ればそんな姿は見たくなかったわ」

倒れ伏しながら見上げる坂上に対する言葉もとても怜悧なモノで、『近衛』とは思えないほどに見下した物言いだ。その視線すらも向けはしない。

ただまっすぐにシャクを見据えたまま立ちふさがる。

……まっすぐに向かい合っている。

「ちっ、なんでもいい。なんとでも言え。とにかく邪魔を――」

「あなたは黙ってて。死にぞこないは黙って成り行きに身を任せてればいいの」

不遜というよりもむしろ傲岸不遜。傷を負った将軍を敬う気持ちはカケラもなさそうなまま、見ていて清々しいほどにあっさりと坂上の言葉を切って捨てる。

「シャクナゲ、私は兄さんの意志を受けて道を譲ったわ。仇であるあなたを先に行かせた」

「……」

「それを借りだと、私のたった一人の兄を殺した事を負い目だと思うのなら、ここは見逃して？」

「……ふざけんなよ、右近。俺ぁそんな事――」

「あなたが望むかどうかは関係ないよ。ただね、坂上。あなたは無駄死にだけはしちゃダメなの。兄が生涯をかけたあなたが、無駄死になんて……絶対に許せない。絶対に許さないから」

あたしより小柄で、華奢な少女。そのルックスは可憐といっても

いい。その身に纏った濃紺のコートはぶかぶかで、桃色の髪も柔らかそうで。

その言葉から察するに、恐らく『左近』という『氷使い』の男の妹。

その淡い桃色がかった瞳は、あたしが見慣れている強い意志を秘めていた。

そう、よく見慣れた銀色の少女――最強の銀鈴が戦う時に見せるモノとよく似ていたのだ。

それがまっすぐにシャクと対峙し、退かぬ意志を溢れさせながら立ちふさがる。

その言葉はズルい物言いではあった。でも効果的な言葉を選んでいる賢さの現れでもある。

彼女は強い意志と、効果的な言葉で……シャクの前に立ちふさがっていたのだ。

「坂上にもう再起の道はない、もう『将軍』とは名乗れないわ。私が絶対に名乗らせない。将軍の名前はあなたが持っていってもいい。それだけでここは退いてはくれない？」

「……それは詭弁だよ。坂上そのものが将軍なんだ。その存在そのものが関西軍を関西軍たらしめてる。例え坂上が将軍を名乗らなくても――そして名乗らせなくても坂上は坂上で、俺は黒鉄なんだ。黒鉄のままなんだ。敵である事は揺るがない。坂上も――」

「坂上が何を望んでいるかは関係ないわ。私には全然関係ない。興味もない。ここで死にたい？将軍として戦って、そして負けたからには生きていられない？それがこの戦いの結末だから？」

――なら将軍はここで死ね。この要塞と共に、関西軍の名前と共に消えてしまえ。

その言葉は憎しみも蔑みも込められていた。感じ慣れた憎悪を『将軍』という言葉に向けていた。

それは近衛にはあるまじきモノではあったけど、その中には揺るがない強さもあるように感じられた。

「でも『坂上晴臣』には絶対に『意味』を作ってもらう。将軍を名乗った意味、私達が――兄が従った意味。血反吐を吐いて、地べたを這いずってでもそれを作る義務があるわ。そうでしょ？そうじゃなきゃ報われないじゃない？どうしてもここで最後までやるって言うのなら――」

――まずは私が相手になるわ。最後の近衛であるこの私が。

そう言ってただじっと見据える。将軍を打ち破り、いまなお猛る鎖達を従えるシャクに全く怯む事もなく。

構えもない。力を使う溜めもない。

ただ眼力のみで抗い、自らの身体を盾にするかのように立ちふさがっているように見える。

しかし先ほど駆け抜けたスピード……あれは変種としても異様なまでに早かった。

多分、黒鉄で最高の身体能力を持つシャクよりも。

まさにピンク色の疾風。人影すらも認識出来ない一陣の影だった。

能力を使っていたのかどうかは分からないけど、あのスピードの持ち主ならば容易ならざる相手だと言えるだろう。

そんな人物がシャクと向かい合い――またあたしは悩んでしまう。

彼女は本気だ。例え死んでもここから坂上を逃そうとすると思う。

勝てるかどうか、それをなし得るかどうかは問題じゃないのだろう。

その考えはあたしにも分かる。それを決して無駄だとは笑えない。笑う事など出来ない。

今はいろいろ知って状況が変わったけど、あたし達『黒鉄』も同じような状況下で戦ってきたのだ。笑えるはずがない。

「シャク……」

あたしは――あたしは何を考えているのだろうか？

今、何を言おうとしているのだろうか。

坂上もこの少女も敵でしかないのに……ミヤビやクロネコ達の仇の片割れなのに、何を言うつもりでシャクに声をかけたのだろう？

言葉が詰まって口をついてこない。舌が絡まって声にならない。

黒鉄として正しい在り方は、ここで二人とも討つ事だ。一年前に、亡くなった多くの仲間の仇を討つと誓った復讐者としてもそうだろう。

それは『死にたがり』として……憎悪を燃やすパイロキネシストとしては、理想的な在り方だと思う。

だから悩んでいるのだろうか？

死にたがりを拒絶したい衝動が、選択を躊躇させているのだろうか？

……違う。

「帰ろ。もう帰ろう？神杜へ。あたし達の街へ」

「……カーリアン」

違う。絶対に違う。

あたしは見たくない。絶対に見たくないだけだ。シャクが過去に捕らわれて、灰色（過去）で誰かを殺す姿なんて見たくない。

「あんたは勝った。辛くて嫌な思いをして、足掻いてもがいて坂上に勝った。それでいいじゃない？」

あたしみたいに、復讐や妄執に捕らわれる姿なんて似合わない。確かに坂上は殺されてしかるべきだ。あたしやシャクナゲにはその理由がある。殺す理由がある。

でも、シャクには――『シャクナゲ』じゃなく、あたしが『シャク』って呼んでる人には、守る為以外の時にその手を血に染めて欲しくない。

「これからはあたしも一緒に戦うから……あたしも一緒に背負うからさ、ここであんたが全部背負っちゃわないでよ」

その背中に誰かがいる時以外に、重荷を背負って欲しくない。そんなのあいつには似合わない。ずっとずっとその為だけに戦ってきたシャクには、過去の因果で命を刈るなんて似合ってない。

ずっと神杜の守護者だったヤツが、神杜の現在（いま）や未来（明日）の為でもなく、過去（昨日）の為に戦うなんて……絶対にあっちゃいけない。

それは多分、感傷に過ぎないのかもしれない。余計な感情なんだろう。

「坂上を残した咎はあたしも背負うから。黒鉄としてじゃないあんたもあたしは見ていきたいからさ……」

あたしは黒鉄失格なんだと思う。ずっと縋ってきた在り方を捨てる行為に等しいんだと思う。

でも――

でも、それは『カーリアン』としては正しい在り方だと思う。

大切みんなが、仲間達が呼んでくれるカーリアンというあたしにとっては、それが『らしさ』だと思えたのだ。

「だからもう帰ろ？待ってる人がいてくれる街に――」

41・スタートイットアップ（後書き）

あぁ、やっちまった……って感じです。
一応この結末は予定通りなんですけど、途中で『やっぱ敵は最後散るべきかな』と、最後まで変えるべきか悩んでいた箇所でもあります。
右近を出さずに残しておいたのも、坂上には反抗的でありながら、左近の言う事には従うっぽい表記をしたのも、ラストで『坂上の為ではなく兄の為に』こういう行動をさせる為だったワケです。
まぁ、いまだにちょっと変えるべきかなと悩んではいますが。

丘かどっかで左近や坂上の墓を作り、そこに背をむける右近ラストも考えていたんですが。
まぁ坂上にはちょっと生きててもらおうかな、と。

本当はこの話に全部を詰め込んで『ラスト』にしようかと思っていたんですが、締めがカクリやアオイじゃちょっとなぁ、と思ったので、そこは変えました。
次回カクリとアオイ、その次にシャクターンでエンドな予定です。

えっと、いきなりですがお知らせ。
次回は更新多分お休みです。
何故かというと、カクリとアオイはちょっとつながりがある話なので、両方にメドが立たないと書きにくいんですよね。
ですから、来週までにメドがたてばカクリかアオイをあげます。
立たなければ『立ち次第曜日関わらずに』あげます。その次は間違いなく月曜日アップ。
そして次の次の次の月曜日でラスト……な予定です。

5月中ギリギリに終わります。
本来なら月曜日更新を守りたかったんですが、それをすると5月中に終わらない可能性があるんですよね。だから来週は不定期更新で。

さらにお知らせ2
あとがきで何か書いてない事ありましたっけ？
思い浮かばないので、来週分あとがきに載せる紹介等で何かありましたら、どうぞご意見お願いします。
メッセージボックスや感想などなんでも大歓迎受け付け中ですので。

さらについでにお知らせ3
二部やマークオブブラックメタルについては、どうするか……
どっちも書くとなると更新が偏りそう……もしくは更新が立ち行かなくなりそうです。

案としては
マークはとりあえず短編みたく、アカツキとシャクの出会いだけを抽出してみる。
マークはかなり不定期覚悟でやってみる。
両方不定期覚悟でやってみる。
死ぬ気で更新に挑戦してみる。
マークを中編くらいでやって、終わり次第二部にいく。

で考えてます。
死ぬ気で……はキツいですけど。
これも要望がありましたらお願いします。

では、ラストまであと少し。

お付き合いお願いします。

42・クライシスモア

黒鉄は真っ二つに割れた。

いや、正確に言えば、粉々にバラけたとも言えるかもしれない。

ついさっき行われた話し合い――三班副官・アオイによる暴露会とも言えるそれは、今までも黒鉄のあちこちを軋ませていた亀裂を、ものの見事に大きく広げた。修復不可能なまでに黒鉄の在り方を歪めた。

『この話の後、あなた方がどのように行動されるかは分かりません。私達三班の敵に回るというのなら受けて立ちましょう。今まで通り……というワケにはいかなそうですから』

そう言って締めたアオイはあくまでも飄々としていて、どこまでも淡々としていて――

『シャクナゲは新皇です。かつてはそう呼ばれていました。最初のヴァンプの一人にして、その象徴だった存在です。端的に言えばこれを伝える為だけに、私は副官の身分でありながら皆さんを集めた次第です』

そんな爆弾発言をした直後とは思えないほどにいつも通りだった。

激昂する一班にも、足早にその場を後にする四・六班にも、にこ

やかに笑ったままだった。
　がっくりとうなだれていた五班のカブトには目もくれない。多分何事もなければ、最後までにこやかなままでいたと思う。

「ヴァンプの王にまんまと俺達ゃ騙されてたってか!?ふざけんな!あのクソヤロウは俺がぶっ殺してやる、汚れたヴァンプの始祖は俺が絶対ぶっ殺してやるからな!」』

　一班のナナシが班員に抑えられながらもそう言葉を発するまでは……。
　シャクナゲを『ヴァンプ』と蔑むまではにこやかに笑っていた。
　足早に去っていく黒鉄の仲間達にも、吼え猛るナナシにも笑顔を向けていたのだ。
　『私達三班の敵に回るというのなら受けて立ちましょう』と言った言葉を、そのまま現すかのようにいつも通りだったと思う。
　……そんなナナシの言葉を聞くまでは。

　その言葉と共に、笑顔を模した仮面はあっさりと掻き消えた。まるで表情そのものが取り外し可能なアタッチメントかと思うほど、笑顔の仮面は余韻をカケラも残してはいない。
　そして喚くナナシへと嘲笑うかのような……というより、明らかな嘲笑を向けたのだ。

「笑わせないでくださいよ、不死身。あなたにそんなシャクナゲを貶めるような事を言う資格があるんですか?」

「どういう意味だ、そりゃ!?」

「言葉通りですよ。たかだか元武装盗賊の頭風情が笑わせるな、て事です」

「てめぇ……」

「シャクナゲに――いえ、一年前の黒鉄メンバーに負けたから仲間に加わっただけの盗賊ごときが、キャンキャン吠えるのは正直見苦しくてかなわないんです」

その蔑みは止まる事なく、ナナシが一番気にしている過去を嘲笑う。

にこやかとは言い難い冷たい冷笑をむけ、大袈裟に肩をすくめてみせながら。

「気にくわないのならここで吠えてないで、戦闘の準備でもしに帰ればいいでしょう？いくらなんでもコードフェンサー一人しか連れていない今の現状で、我が三班に勝てると思うほどバカじゃないでしょう？」

「アオイ……！！」

「あぁ、そうだ、あらかじめ言っておきましょうか。私はシャクナゲやアカツキほどには甘くないですから、一度敵に回った場合は、いくら尻尾を振ってみせても絶対に許しませんよ」

零度を越え、氷点下にまで下がる空気に、体がガチガチと震えるのをなんとか抑え、私は嘲笑うアオイを見やる。

そのいつもの相手を立てる物言いから変わってしまったアオイを。

その目的を。

「一度敗れた上にその命を助けられ、仲間に迎えられた恩を忘れたというのなら、同情の余地も情けをかける価値もありません。あな

たに『唯一無二の黒鉄』たる三班の実力を思い知らせてあげましょう」

そう不敵に笑うと、スッとその指先を出口の扉へとむけ、言葉もなく退室を促してみせた。

その背後では黙したままでヨツバが舌なめずりをし、それを困ったように肩をすくめながらスイレンが見やっていた。残るヒナギクは、いつもの様子と違うアオイにオロオロしていたが、それでもすぐさま飛び出せるように一歩足を踏み出している。

その様子があまりにも『らしく』て――たまに見かけていた三班のコードフェンサー達らしくて、軽く腰がひけるのを自覚した。

直接向き合っていない、いわば第三者に近い立ち位置だったからこそ、そのらしさが際立って見えた。いつも通りの姿が……揺るがない強さに感じられたのだ。

『不貫』のヨツバに『水鏡』のスイレン。

まだまだ新米である『音速』のヒナギクはともかくとして、この二人はコードフェンサーの中でも別格だと言える。

それは、『班長』を含めた黒鉄に属する変種全ての中でも別格という意味だ。班長連は全員が全員メチャクチャな能力を持っているのに……まぁヘルメスは戦闘向きではないけど……この二人はその班長連をも凌ぐほどの力の持ち主だと私は見ている。

『狂戦士』だの『ブラッディークラブ』だのと呼ばれるヨツバは、間違いなく黒鉄では仲間内からもっとも恐れられている存在だ。

一度フラっと街を抜けて、二つほど近隣の武装盗賊団を一人で潰して帰ってきた事すらあった。それはそれで恐るべき事ではあるのだが、私が真に恐れたのは、一人で武装盗賊団を潰した経緯を聞いた時の事だ。

『……暇やってん。盗賊はなんか好かんし』

三班のコードフェンサー……つまり黒鉄でもかなり大きな戦力である男が、返り血まみれでそう言っている事にこそ私は恐れた。

たかが武装盗賊などと笑えない。今の関西にいる武装盗賊達の大半は、かつて将軍に敗れたヴァンプ崩ればかりなのだ。下手をすればコードフェンサークラスの変種すらもいる可能性もある。

黒鉄一班の連中は武装盗賊上がりが多いが、その首領格であったナナシがそのまま班長に収まっている事からしても、武装盗賊が侮れない集団である事が分かる。

……まぁナナシから言わせれば、一班の連中は『義賊』だったらしいけど。

それを『暇だったから潰した』『嫌いだったから潰した』と言ってみせたのだ。恐れるなと言われても無理な話しだろう。

当然、この『盗賊殺し（ロバーズキラー）』は、私の『敵に回しちゃいけないヤツリスト』でも、かなり上位に位置付けられている。

そして水鏡のスイレン。

こっちはそのリストの中で、ダントツ一位である男と、同じくダントツ二位である女に続いて、ダントツの三位にランクインしている。

一位は今問題になっているクセモノ揃いの班をまとめている男だ。そして二位に最強の純正型たる銀鈴。

これは順当なランクだと思う。黒鉄の全員が敵に回したくないと思っている二人だろう。

それに続くのが班長でも副官でもない、この『近衛殺し（インペリアルキラー）』……いつもゆったりとした浴衣を着ているスイレンだ。

普段は穏やかで良識人。いつも浴衣を着ているというこだわりはどうかと思うが、血の気の多い三班の良心とも言えるような女性だ。

班長であるシャクナゲの代理に立つ事も多い。しかし、どんな時でも班長や副官であるアオイを立てる奥ゆかしさもある。

そんな女性なのだが、一度怒らせればヨツバですら比にならないぐらい怖い。

なにせ彼女、たった一人で水都へと視察に来ていた近衛を襲撃した事すらあるのだ。

しかも襲撃しただけではなく、その近衛が引き連れていた関西軍の部隊を一人で潰走させ、近衛を討ち取って帰ってきたという。

関西軍のトップである将軍の側近中の側近たる近衛を、だ。

『近衛』という地位にいるヴァンプを討ち取った事がある人物は、黒鉄多しと言えど多くはない。『黒鉄』を冠する男と、かつていた『錬血』、そして五班の『幻影』と『水鏡』だけだ。

討ち取った近衛の数倍以上の数のコードフェンサーが、近衛の連中に敗死させられているし、かの錬血ですら別の近衛に敗れてもういないのだ。

そこからもこの『インペリアルキラー』がどれほどの能力を持つかが分かる。

しかも彼女は、そのやり方にもインパクトがある。

最後は水都からきた援軍を能力で立ち往生させて、部隊の指揮を執っていた水都の知事を締め上げると、その知事が乗っていた無駄ガス食いのリムジンに文句を付けながら、それに乗って廃都へと悠々帰還したらしいから。

しかも知事に運転手までさせて。

これは私がこっちに来る前の話だが、黒鉄の連中なら誰でも知っている話だ。恐らくはその近衛に殺された仲間達の敵討ちなのだろうが、やり方も半端じゃなければ、実行出来た能力も半端じゃない。

なにより胆力や度胸にこそ恐れ入る。
少ない数を連れただけで近くまで来ているからと言って『じゃあちょっと行って潰してくるか』とプチっと潰せるような相手じゃない。

カーリアンですら『スイレンって戦ってる時とか怖いんだよね。後になって夢とかで見そうだもん』と言っていたほどなのだ。怖いモノ見たさや知識欲で触れたい部類の人間じゃない。

そんな二人を相手に回し、ここで――精鋭である三班の根城近くの会議室で暴れようとするならば、ナナシは救いようがないバカだと言える。
いや、ナナシならばそれぐらいは気にせずに突っかかりかねないが、後ろの『金剛』が間違いなく止めるだろう。
武闘派揃いで、脳みそまで筋肉で出来ている一班の連中の中では、まだ副官である金剛のメメは思慮深い方だから。

……まぁ、その厳めしいコードといかつい体付き、ムサい顔立ちのいい年をした男が、『メメ』ってのはどうかと思うけど。

案の定、メメは素早くナナシの肩を抑えて留めると、そのまま怪力に任せて出口へと引きずっていく。
見るからにムキムキで、力はありそうなメメではあるが、その体付きは伊達ではない。湯気を出しそうなほど激昂するナナシをしっかりと抑えつけ、そのまま出口へと向かう。

「ではいずれ近いうちに戦場で。今日のカシラへの発言は必ず後悔して頂きますから」

……相も変わらずややハスキーな見た目を裏切る声で、しっかりと宣戦布告を告げて。

「ナナシさんはしっかりと落ち着かせておいて下さいね？冷静さを欠いた指揮官ほど、戦場において有害で醜悪なモノはないですから」

……どの口がそんな事をほざく。最後にしっかり逆撫までしておいて。

アオイのにこやかさに内心で毒を吐いてから、小さく溜め息を漏らした。

これでこの場には『三』と『五』、そして『二』である私だけが残ったワケだ。そう思えば溜め息を禁じ得ない。

なにしろそこでうなだれているカブトは除いても、他のメンツは私じゃどう足掻いてみせてもかなわない連中ばかりだ。

ヨツバやスイレンだけじゃなく、ヒナギクにすら手も足も出ない。

当然『五』の最大戦力である二人、『幻影』と『碧兵』にも勝てはしない。この二人はそれぞれ五班において、三班の『水鏡』と『不貫』にあたる。

碧兵コガネも私やカーリアンより古参のメンバーだし、幻影のアゲハに至っては、スイレンと並んで黒鉄最古参の一人だ。

アオイの言葉を借りるなら、黒鉄が一番キツかった時代から残っている『本当の意味での黒鉄』。その一人にあたる。

それだけじゃなく、彼女は不気味さでいえばワースト。謎の深さで言えばブービー。敵に回したくない相手としてもスイレンの次という存在だ。

このメンバーの中では、『碧兵』と『音速』ですら可愛く見える。
雷人の異名を持つエレキネシストであるコガネと、最年少コードフェンサーにして、三班の最大戦力の一角である問題児、『音速のヒナギク』ですら、ここでは心休まる相手になりうるのだ。

「さて、カクリさん」

「……なに？」

いや、不気味さで言えば、すでにアゲハは次点かもしれない。
今にこやかにこちらを向いた男、顔馴染みの苦労性、美的感覚の欠如著しい三班の『副官』。彼こそが今は私にとって一番不気味なのだから。
その笑顔が。こちらを向いた見慣れた顔が。
彼はその笑顔のままで、私に死の宣告をしかねない。その見慣れた『仮面』のままで、私へと毒を吐き、追い詰めてくるだろう。

そう思えば、無意識に体が構えそうになる。
それでも私はことさら平然とした様子で見返してみせた。強がりくらいは張ってみせなければ、カーリアンの代理という看板が廃る。彼女の副官として矜持くらいは持っている。
もちろん背中は汗でびっしょりと濡れ、立ち上がれば膝が盛大に笑っていただろう。
しかし、私はそんな自己分析を全てどこかに押しやって、震えそうになる手を持ち上げて、ペットボトルに入れたままのお茶を煽ってみせた。

「平然としてますね？カブトさんからあらかじめ聞いていた、ってハズはないでしょうし。アカツキの虚言による刷り込みが弱かった

んですかね？」

「……しっかり騙されてたわ。……悔しいけど、私はアカツキを疑っていた。……純正型には……体になんらかの証があるモノだと思い込まされていた。……誰にでも披露していたであろう、『特別な目』に……見事に引っかかってた」

正直はめられた、という感覚が強い。アカツキの言葉を鵜呑みにしていた自分が不甲斐ない。シャクナゲには興味を向けただけだ。彼を疑ったかと言えばノーだろう。

私はアカツキこそを疑っていた。彼の正体が全ての鍵だと信じていた。シャクナゲには――同じように『経歴が分からない最初の黒鉄』には興味を向けただけだ。

全く同じような立場で、同じく全てが分かっていない存在だったのに。

いや、シャクナゲに関しては、『関東出身』で『純正型のスズカ』が懐いている存在というアドバンテージすらあった。それでも私はアカツキに目が行っていたのだ。

それこそが――自らに『情報を求める者』の眼差しを向けさせる事こそが、アカツキの目論見だったとは思いもしなかった。ここに来たばかりの頃に『特別に』見せられた瞳も、刷り込みに近い影響があっただろう。

つまり『この黒鉄という組織に自分以外の純正型は、体に印を持つ銀鈴だけだ』という誘導に引っかかった。初めて会った日から彼にしっかりとリードされていたんだと思う。

それが正直情けない。

出会った頃からアカツキに手玉に取られておいて、考察者などと名乗るのはおこがましい限りだ。

私などは表面だけを見て、その言葉を疑わず、そのまま記していただけの『観察者』がいいところだろう。

「ふむ。では、その落ち着きは虚勢ですか？だとしても、やはりあなたは大した副官殿ですよ」

「……イヤミね」

「本心なんですがね。正直な話、私にとってあなたは脅威だったんですよ。あなたと話す時はいつも手汗をかいていました。緊張していたんです」

――まぁ、一番厄介だったのは、『シークレットクラン』の側にいた六の副官殿でしたけど。

そう続けるアオイに、私は胸中で納得するモノがあった。

つまり先ほどまでここにいた『風塵』の様子、それの理由が分かったのだ。

つまりかの『無能』を演じるコードフェンサーは、私より先に全てを知っていたのだろう、と。

そしてそれを黙っていた、という彼の選択の重みを知った。

――私はどうすべきだろうか？

ここにはカーリアンがいない。私自身の判断で今後の指針を決めねばならないだろう。

なんだかんだ言って、カーリアンはかなり鋭い。それに考えなしに動いているように見えても、物事の本質を見抜く目が彼女にはある。

利害関係や合理性を優先するあまり……そして好奇心が『やや』先行するせいで、私には意外と見えなかった事が、彼女には当たり

前のように見えていたりする事があるのだ。
その意味でもここに彼女がいないのは痛い。心の支えという意味ももちろんあるけれど。

「……さて、あなたはどうされますか？」

その言葉は――どういう意味に取るべきだろうか。二班が敵に回るか否かと問いかけているのか、はたまた私個人の感情について問いかけているのか。
正直なところ、私にはシャクナゲが誰だろうとどうでもいいのだけど。
まぁ、『どうでもいい』と言い切るには、問題が大きすぎる事は否定できないが、正直それは『新皇』にこそ興味があるワケで、『シャクナゲが新皇だった』という事はあまり関係がない。
それを気にするとしたらカーリアンの方だろう。それこそが私にとっては一番の悩みの種なワケではあるが。

「……正直二班の中で、あなた達に付く者は少ないと思う。……ウチは戦力的に弱い班だし……長いモノには巻かれる主義者が多いから」

「まぁ、今日の様子からして、『一』と『四』はウチと決別するでしょうからね」

散々一班を煽っておいてよく言う。どうせ一班は敵に回るから、せめて怒り狂わせてやりやすくしよう、とか考えていたんだろうけど。

「正直六も危うい。一応ヘルメスさんには、あらかじめ楔は打っておきましたが……やはり厳しいかな。スズカさんがこちらに付くと

明言してくださったら、こちらに靡く連中も増えるでしょうが」

――あの人はあの人でキツい持ち場がありますから、これ以上無理は言えませんけど。

そう言ってアオイ溜め息を一つ漏らす。その脳裏にはどんな絵図が書かれているのだろうか。興味がない事はないけれど、私がその絵図通りに動くかどうかは別だ。

さて、カーリアンならどうするだろうか？ヴァンプ嫌いの彼女として動くか、はたまたカーリアンとしてあり続けるか。

――そこまで考えて、私はハタッと気付いた。そして自らの迂闊さを呪う。

……彼女は今、どこにいるのだろう。スズカが言うには、頼み事をして出てもらったとの話だったが、それはどんな頼み事だったのか。

それを私は聞いていない。

スズカの側で何かをしているのならばまだいい。私はてっきりそう思っていた。

なにしろ彼女とカーリアンは仲が良い。だから、カーリアンには自分から黒鉄の全てを打ち明けて、分かってもらえるように話をしてくれるのならば……まだ安心だ。

だけど、ここにはもう一人いない人物がいる。

今の揺れ動く黒鉄の中心たる男。『黒鉄』を冠する最古の黒鉄。

そして『新皇』だった存在。

彼に付いていっているのであれば――最悪だ。すでに全てが終わっている可能性すらある。

私は、この話し合いにいない存在……つまりなんらかの用事で表

に出ているシャクナゲと、スズカに何かを頼まれたカーリアン、そしてカーリアンと共にいるかもしれないスズカが、今の黒鉄の中心にいると思っていた。

そこで何故シャクナゲとカーリアンが共にいるとは思わなかったのか。彼女がスズカに何を頼まれたのかを知らないのに、私はそこに視線を向けていなかった。

その理由は分かる。スズカが言わなかったからだ。

私は会議が始まるまで、シャクナゲが不在だとは知らなかったのだ。それを知った上で、かの銀鈴はそこには全く触れなかった。

ただ『カーリアンにはちょっと頼み事をしたから』と言っていただけだ。

私が『またスズカのヤツはカーリアンを連れまわす気か』と思いながらも、『まぁ銀鈴と仲良くするのは悪くないか』と納得してしまう事を見越していたのだろう。

そんな心情を読まれて、そのトレースに従う形で私は思考していたんだと思う。

なんて迂闊なんだろう。

忙しく頭を働かせ、今さらになってシャクナゲがどこにいるのかを考えてみるが、全く分からない。

いくつか考えられる場所はあるけど、どこであれ彼から全てを聞かされたとしたら、カーリアンが自棄になって突っかからないとも限らない。

そうなればどうなるか。想像したくもない。

「カーリアンなら心配はいりませんよ」

「……えっ？」

「あれ？いきなり黙りこんでガタガタ震えだすから、てっきり彼女の心配をしていたんだと思ったんですが……違いましたか？」

肩をすくめてそう言うアオイに、私は露骨に舌打ちを漏らしてみせる。

本当に今日の私は迂闊過ぎる。表情に出すようじゃダメだ。

もし、彼ら三班の手の内にカーリアンがあったのなら、今の私の態度は最悪だ。

その可能性は低いとは思う。彼女を人質として抑えても、操れるのは精々私くらいだろう。

そして私は大人しく操られる、扱いやすい人間なつもりはない。

だけど可能性は決してゼロじゃない。そこを見越してことさら無表情に振る舞うべきだった。

「そう警戒しないで下さい。私達は別に他班と率先して揉めるつもりはありませんから。彼女は絶対無事ですよ。心配なのはむしろシャクナゲの方です」

「……どういう意味？」

相変わらず話の持っていき方が上手い。ちゃんとこちらの疑問を煽る言葉を上手く使ってくる。

問いかけずにいられない箇所をよく知っている。つまり私の弱味をよく理解しているという事だ。

「シャクナゲは彼女以上に後ろ向きでしてね。全てがカーリアンにバレた後、進んで殺されてやりはしないかって心配をしてるんです」

――シャクナゲが自分から話すとは思えませんが、ペラペラと口を滑らせそうな人物がいますしね。

そう言って深い疲れを吐き出すように、大きく息をつく。その『人物』とやらが誰なのかは気にかかったが、アオイはもう私には言う事はないとばかりに視線を逸らしてしまう。

カーリアンは無事なんだから、答えは彼女が帰ってきてからでもいい――そう言っているかのように。

そしてうなだれたまま言葉を発しない男――カブトへと視線を向けた。

「本当に浅はかですよね。シャクナゲがカーリアンに殺されたとしたら、私達が彼女を見逃すハズもないのに。普段のシャクナゲなら、それぐらいはわかりそうなモノだ。

――そうは思いませんか？カブトさん」

かけられた声に軽く震えて、カブトはその頭を抱えこむようにさらに深くうなだれた。

その視線をあげもせず、殻に籠もるように。

そしてその姿勢でポツリと……小さな悔恨の声を上げた。

シャクナゲやアカツキと同じ黒鉄の創始者の一人であり、今も後ろに『碧兵』と『幻影』を従えさせているとは思えない、普段の豪放な言葉使いからは想像もつかない――弱々しい声で。

「……やり方を間違えたのか、それともどのみち上手くいくハズがなかったのか。俺ぁ黒鉄を一つにしたかっただけなんだがなぁ」

そんなワケの分からない言葉から――

彼の述懐は始まった。述懐というには苦味が含まれすぎた……懺悔のごとき言葉が。

42・クライシスモア（後書き）

次回に繋げる形を取りました。
視点は変わって次回に続く……カーリアンとシャクターンみたいな感じです。
もうアオイターンもだいたい書けてますけどね。
来週半ばまでには更新できます。

そしてその後はカーリアンとシャクナゲのラスト。
全くなんも考えてないんですけどね！これが。
それは今月中に上げるという方向で。二部もちょこちょこ書いていく予定だし。

二部は三人称の予定です。一部よりさらにあちこちに場面が飛ぶから。というより、多分三人称の方が向いてるから。
二部始まる前にちょっと幕間を入れる予定ですけど。
いきなり場面変わるのもあれだから。

というお知らせ等であとがきは終わりです。
あとがきネタ浮かばないんだもん。

43・サンズ・オブ・デイブレイク

――やり方を間違えた、か。

悔恨の声をあげる五班の班長に、私はなんと声をかけるべきだろうか。

私個人の考えとしては、『彼』のとった方法をそう間違えているとは思えない。

黒鉄の戦力を削り、危機感を煽る。バラけた各班の思惑を一つにするには、『狐』のやり方が最良だっただろう。

確かに犠牲は出るが、その犠牲になる人物もある程度は選ぶ事が出来る。

単に――そう、単にまだ時期尚早だっただけだ。

「アカツキがいなくなった時の再現。それを目論んでいたワケですね、カブトさん……いや――」

『狐』。

そう呼ぶべきか否かを悩んで結局は言葉を濁す。

ひょっとしたら彼が動かなければ、いずれ私が取っていたかもしれない手法だ。彼を嘲笑う気にはなれない。

――黒鉄を一つにする事。

アカツキがいなくなってからの彼は、その事を常々言ってきていた。

アカツキに代わる存在は、シャクナゲしかいないと。

シャクナゲがまとめあげて、黒鉄をより黒鉄として強くしなければならないと。

きっと自らの無力を省みて、それでも創始者として、アカツキやシャクナゲの友人として、彼は彼なりに動いてきたのだろう。それは私にも評価できる。

真っ直ぐで裏表のない性格が、作り物のそれだとは思えない。

「アオイ、テメェが俺のやった事に気付いてるって事は、シャクナゲの野郎も気付いてんだな？」

「直接聞いたワケではありませんがね。聞いても答えてはくれなかったでしょうし」

「……相変わらず甘ぇ野郎だ。俺をあの『話し合い』に呼んだ時点で、気付いてんじゃねぇかたぁ思っちゃいたが」

そう嬉しいのか、苦々しいのか分からない複雑な笑みでいう五班班長に、同意の意味を込めて肩をすくめてみせる。

私が狐について気付いたのは、単に『狐』が誰かと考えた場合の消去法によってだ。それだけで必然的に候補はかなり絞られる。

いや、二人にまで絞ってしまえた。

まずシャクナゲは有り得ない。それと共に、三班の連中も。

我々『三班』の結束は血の結束だ。家族の絆に等しい。それ以上といっても過言ではないだろう。

もちろん今まで三班にやってきた新参者の中には、不届きな輩が何人かはいた。

でもそういった連中がそうそう生き残っていけるほど、ウチは甘い班じゃない。仲間の信頼を得ずに生き残っていられるのは、ウチでも『不貫』ぐらいだろう。

そんな彼も『その実力だけ』は、誰からも認められている。シャクナゲには絶対逆らわないし、先輩である水鏡も立てている。その一面は皆信じているだろう。

もし万が一、不届きな輩の中で生き残れるほどの力がある者がいたとしても……あるいはその内面を上手く隠せるだけの知恵があったとしても、絶対にウチで長くは過ごせない。

そういった連中は、必ず『行方不明』になるのだから。

だから我が三班から裏切り者は出ないし、ヴァンプは生まれない。それは『中核』として当たり前の事だ。

そして二班のカーリアン。彼女は事前に作戦を知らなかったらしい。二班副官の言葉だけでは本当か否かは分からないが、それを確かめるのは簡単だ。

直接彼女に聞いてみればいい。彼女が嘘をついていたとしたら、私には絶対に分かる自信がある。『紅』の彼女は嘘が下手な人間だし、それは副官である少女もよく知っているだろう。

その上で『彼女は事前に作戦を知らなかった』などと、浅はかな嘘はつくまい。

そんな二班副官こそが怪しいといえば怪しい存在ではあったが、今回に限れば外してもいい。

自分達――特に大好きなカーリアンまで割を食う作戦は取らないだろうし、『一』も『三』も『二』とは仲のいい班だ。

これでダメージを受けたのが『四』や『七』だったなら、彼女こそが一番怪しかっただろうが、今回は外してもいい。

そして自分達だけが割を食った一班の連中も外していいだろう。
何より『一』は謀略に関しては下の下だ。そんな事をするぐらいならとりあえず正面突破……そんな班なのだ。
また結束に関してもかなり固い班である。我の強い『鉄拳』だけはやや注意が必要だけど、自らの足場である一班だけが割を食う真似はすまい。

残るは『四』『五』『六』『七』。
七のスズカさんがウチを……シャクナゲを裏切る可能性は、ウチのメンバーが裏切る可能性よりも低い。そして七のメンバーが唯一従うのがスズカさんだ。
第一スズカさんを除いた二人が、今回の作戦について知っていたかどうか。黒鉄の行動には興味すらも持っていない可能性がある。
なにしろ『夜狩(やがり)』のシュテンはともかく、『牙桜(がおう)』のヌエは作戦会議にも来た事がないのだ。
……まぁ、夜狩も今までに一度だけ、『銀鈴』に影のように付き添ってきただけではあるが。
私ですら顔しか知らない人物、それが『夜狩』と『牙桜』だ。

そんな二人が従うのが銀鈴なのだ。彼女にしか従わない、『三人しかいない黒鉄遊撃班の双璧』。
シャクナゲが『絶対にスズカにしか従わない』とまで言った二人が裏切った可能性は低いだろう。
不気味な存在ではあるが、無闇に藪を突っついて敵に回した覚えもない。

四は防衛班だ。侵攻作戦の細部までは知らないし、『一』と『三』が作戦に加わる以上、戦力が低下した廃都の防衛計画にてんてこまいだったハズだ。

作戦に対する通達も防衛に関するモノしかほとんどされていないし、班長である『蒼』が裏切る可能性は、二班の『紅』が裏切る可能性と同じくらい低確率だった。

二人とも猪突猛進なタイプであるし、シャクナゲに対する想いも同じようなモノだ。

救われた恩を好意に履き違えている節もあるし、かなり自分の中で思い出を美化している節もある。簡単にそんな想いを裏切ったりは出来まい。

今回の話し合いで――直接ではなく私から聞かされた事で、『四』は揺らいでしまっただろうが。

残るは『五』と『六』。

どちらも可能性がある。どちらも情報をリークする可能性はある。

六のヘルメスさんは除外してもいい。彼女は優秀ではあるが、裏工作をするタイプじゃない。意外と真っ向から当たってくるクチだ。

五の二人は自ら動かない。幻影は幻である事を良しとし、碧兵は自らが既存種の班長に従う為の戦力だと自覚している。黒鉄の為に不利になる事はしないとしても、自分から利になる事もしない。

結果残るのは五の班長と、六の副官だ。

五のカブトさんは、『アカツキがいなくなった時の再現』。

黒鉄を一つにまとめる為に危機的状況に追いやる、そうする可能性は……ないとは言えない。なにしろ彼は、黒鉄の『創始者』という立場を、重荷に感じていた節があったから。

つまり黒鉄の為に何かをしなければならない、という考えが見れたから。

六が裏切るとしたら、『シークレットクラン』より全てを知った

『無能』が、ヘルメスに黙って動いた場合だ。
こちらの可能性も高い。私はかの『風塵』をそれだけ恐れていたのだから。

この二つの班が情報をリークした場合の違い。それだけが私に『カブト』を狐だと疑わせた。
つまり、カブトが裏切った場合、黒鉄は危機的状況に陥るだろうが、『挽回は可能な範囲で』という条件もつくだろう。
だが、かの『風塵』が黒鉄の在り方を否定して、完全に潰そうとしたら……一班が大ダメージを受けた程度では済まなかったハズだ。
もし、黒鉄での権力を得る為に動いた場合も、六の風塵が画策したならば、一が小突かれた程度ですますワケがない。我が三班こそが大きな被害を受けていたハズだ。
我々『三』こそが黒鉄の中核であることも、最大の戦力を持つ班であることも……そして彼が『新皇』であったことも間違いない事だから。

――私は悩んでいた。
いずれ来るだろうと思っていた問題に、予想していた通りに悩んでいた。
黒鉄をバラけさせた事を後悔してはいない。それが『彼』の意志だから。あの人が動き出した以上、今までの『黒鉄』が変わる事は必然だったのだから。
それでも悩んでいた。
最終的に我々三班が事態を収める事が決定しているとしても、全てが終わった後にどこまで戦力を残せるか。そして『どこまで戦力

を残させるべきか』を。
そしてこの扱いの難しい『創設者』を、手の内に残すべきかを。

私は『無銘』。全てを捨てて『運命の女性』を得た男。
家族も居場所もなくし、目的もなくした身で、最後に残った過去と名前を差し出して、新たな運命を得た男。
『ファム・ファタル』に魅了され、目的の為に全てを投げ打つ事に迷いを持たない、ただの『ネームレスワン（一番最初の名無し）』だ。

「俺ぁよ、黒鉄の為になんかしたかった。なんかしなきゃならねぇと思ってた。運命を――代償を背負う覚悟もなく、立場に甘んじてた俺にゃそれしかねぇ。俺ぁ逃げちまったから……アカツキから逃げちまったから、それを償いたかった」

「アカツキが三番目に造り、破棄した『リバティ（自由）』。それから逃げた事を言っているのですか」

「そうだよ！俺ぁ怖かった！どんどん寿命が尽きていく結城も、その側で足掻き続けて、戦い続けているシャクナゲも！絶対に迫り来る死に笑えるような強さなんかねぇ！力を得て戦い続けられる自信もねぇ！」

運命を汚す『ノーフェイト』。
世界抑制器たる『シャクナゲ』。
自由を冠した『リバティ』

この三つが黒鉄の創設者三人が持つハズだった『造物』。そう私は聞いている。

しかし、その中で結局起動したのは、二つでなければ意味をなさない……力を得る為ではなく、力を抑える為の『シャクナゲ』のみ。

ノーフェイトは厳重に保管されて眠りにつき、リバティはシャクナゲにより完全に破壊された。

その持ち主となるハズだった男が――逃げたから。

「俺にゃ捧げる世界も力もねぇ！なら代わりに差し出す代償は俺の命か？記憶か！？それとも……そう考えるのが怖かった、最後の最後でビビっちまった！」

「それをシャクナゲやアカツキが責めたとは思えませんが」

正直、彼の取り乱し方は予想外だった。そんな懺悔じみた事を私達に聞かせてどうするというのか。

私には彼の懊悩がさっぱり分からない。

私は喜んでこの身を礎へと差し出した人間だ。リバティやノーフェイトに代わって、四番目に作られた『ファム・ファタル』に全てを捧げた男だ。

ひょっとしたら『彼女』の影響で、私の感性はどこかが狂っているのかもしれない。

そうは思っても、何故か共感しようという気持ちにすらなれない。

「そうだな、アイツらは笑ってたよ。俺にゃそんなモンは必要ねぇって……俺にゃもっと他にやるべき事があるって言ってくれた。だからこそ、俺にゃ何かをする義務がある！」

――そう思っていたんだがな。

そう笑う彼に晴れやかさはない。それは思っていた通りの展開に進まなかったからか、はたまた今でも自らの行動に対する苦悩があったからか。

「何かをする義務、ね」

これが……黒鉄の在り方を変える事がシャクナゲの望みだとでも？リーダーに立つ事を望まない人物をトップに据えた組織が、長続きするとでも思っているのだろうか？

そして、あの人をトップにする事で救われるのは……果たして誰なんだろうな？

そう言ってやりたくなる。

いや、言うまでもなく彼には分かっているのかもしれない。

……救われるのは彼自身だ。

何かをやり遂げた、自分に出来る事をやったと慰められる彼自身こそが救われるだけだ。

そう言ってやろうか、と一瞬本気で考えてしまったが、結局は言葉を全て飲み込んで、心情を吐露する『狐』の背後にいる女性へと視線を向ける。

おそらくは実際に狐の手足となったであろう……五班の『幻』を。

「困りますね、アゲハさん。あなたなら分かっていたハズだ。どんな状況に追い込んだとしても、今のシャクナゲが『暁』の代わりになる事はないって事ぐらいはね。まさかこんな事になるとは……なんて間の抜けた事は言いませんよね？」

今のように一人過去の決着に出向き、後は皆の判決に全てを委ねる……。

そんな彼らしい結末を選ぶ事ぐらいは、付き合いだけは古い――そして焦燥感に捕らわれる事のない『幻影（強者）』たる彼女には見えていたハズだ。

今回は行動を起こした思い切りの良さからいって、銀鈴に焚き付けられた可能性も高いけど、一人であれいずれはそうしただろうと思う。

内通者に揺れる黒鉄、アカツキがいなくなって一年、ゆっくりと軋み続けてきた黒鉄。

そしてその内通者の正体を知りながらも、黙っている自分。

挙げ句には、その内通者自身に今の状況を逆手に取られ、望まぬ地位へと押しやられていくのだ。その内通者は『良かれ』と思ってした事で、罪悪感など薄いモノだろう。

そんな状況を考えれば、いずれは彼も限界に来たと思う。

しかも遠くない内に。

「私は私の従う長の望むがままに行動しただけね。あなたがあなたのところの班長が起こした行動に従って、主の為だけについさっき黒鉄を歪めたように、ね」

「……あなたは相変わらずですね」

「あなたほどじゃないわね。今回の敵対宣言じみた真似、彼はきっと知らないんでしょうね？」

「まったくもってその通りですよ。あの人が望んだのは『真実を明

らかにする事』だけでしかない」

大袈裟に肩をすくめてみせながらの彼女の指摘に、思わず舌打ちをもらしそうになる。

別についさっきの出来事を後悔などしてはいない。だが、あの人の考えから外れる行動を起こした事も、また間違いないのだ。

しかし黙って全てを言う通りにしていれば、あの人は仲間だった者達に全ての判決を委ねるつもりでいただろう。

打ち明けて、許しを乞うて、罰も甘んじて受けたに違いない。

彼の過去は大罪そのものだから。

だが私達三班としては、あの人を失うワケには絶対にいかないのだ。

仲間であり、リーダーであり、家族。そう思わせてくれた人。

そんな人を差し出して、ヴァンプを憎む人々による魔女裁判じみた断罪に、その身をさらさせるワケにはいかない。そんな事は家族としても、また命を預けあった仲間としても絶対に看過出来ない。

この辺りに直接彼から被害を被った人間はいない。それでも彼はずっと悔いてきて、この地方では大勢を救ってきたのだ。

ここで生きる人々は、誰しも『シャクナゲ』の名前と、『黒鉄』という組織に借りがあるはずだ。彼が……そして黒鉄達が血を吐く思いで築き上げてきた名声に、借りがないとは絶対に言わせない。

そんな大事な事を忘れる者達が、ヴァンプへの恨みを『逆恨み』に変えただけの、いわば私刑じみた行為に及ぶと分かっていながら、あの人を差し出す理由なんてどこにもない。

例え同じ街に住む隣人達にであれ、あの人自身が望んでいる事であれ、だ。

過去がどうだろうと、今のあの人はシャクナゲだ。それが全てだ。

班員全てが一度はあの人に救われている。こんな世界の中で、自分がいてもいい居場所ももらった。

だから私達は班を挙げて、他の全てと敵対する道を選んだ。

私やコードフェンサー達だけじゃなく、あの人以外の班員全てがこの時に備えていたといってもいい。

そう、いつも先頭立っていた彼こそが、我々三班そのもの……我々の在り方なのだから。

しかしそれを彼女に言っても、水掛け論に過ぎないだろう。

彼女は五班の視点で黒鉄の為に動き、私は三班の為に動く。立場の違いは明らかだ。

「それにね、ウチの班長が言っている事もあながち間違いじゃないわね」

「……」

幻影はさらに言葉を続けていく。私の考えをおそらくは見透かした上で。

その先は聞かなくても分かる。おそらくは『正論』そのものだろう。きっと自らの班長と同じ路線の言葉を、より理論武装を施して言ってくるに違いない。

それが――

「『黒鉄』以外の誰に混迷するこの街を守れるのかしらね。あなたに出来る？水鏡が代わる？それとも二班のおチビちゃんが重荷を背負ってくれるのかしらね？私はゴメンね。幻影にはそんなのガラじゃないし、そんな能力もないわね」

「……あなたは本当に嫌な方ですね。その言い方は本当に癪にさわる」

――それが気に障る。先ほどの不死身とのやりとりで、短くなってしまった堪忍袋を擦り切らせる。

「あら、ごめんなさいね。全部事実だけしか言ってないつもりなんだけどね」

本当に『幻影』はタチが悪い。おちゃらけた言い方なクセに、その言い分が的確だからこそ余計に。

おチビちゃん扱いされたカクリさんを伺えば、ややムッとした雰囲気を見せていた気もするが、今度は表情には出していない。

やはり彼女はなかなかに優秀だ。自分の事ならばあっさりと受け流せるらしい。

……ネックはやはり『紅』か。

そうやって彼女を観察する事で気持ちを落ち着かせ……そんな事に彼女を利用した分かればさすがに怒るだろうが……私は改めて幻影を見返した。

「やはり、私達『三』と『五』はここで決別すべきですね。『五班』と黒鉄さえ安泰ならば、こちらには配慮して下さらない幻影とは上手くやっていけそうにありませんし――」

――三さえ良ければいいあなたに言われたくないわね。

そう言う幻影は無視して、うなだれる五班班長へと視線を向ける。

「カブトさんの考え方は、いつかシャクナゲを潰す。これはいい機

会なんでしょう」

「待ってくれ！」

「待てません。私はシャクナゲとは違います。アカツキともね。今回の事で私達は――」

――怒ってるんですよ。

そう言って、この場の主催者である私からその場を後にすべく立ち上がる。

当然、スイレンさんやヨツバ、ヒナも後に続く。

最後の言葉は、私達全員の意見だ。カブトさんの『弱さ』にシャクナゲを潰されたくはない、と言わなかっただけまだ甘いぐらいだろう。

――確かに彼はやり方自体は間違えていない。黒鉄の為というのも嘘ではないだろう。

だけど行動を起こした一番の理由に『自らの罪悪感』が来る点は許せない。それにシャクナゲの名前を上塗りし、『黒鉄の為』なんて誤魔化しをしている点が許せない。

そういう考えが伝わったのだろう。カブトさんは言葉もなく座りこみ……残った五班のコードフェンサー二人は、静かな様子で班長に付き従う。

「……待って。……私ももう出る」

残っていたカクリさんも私達に続くように席を立った。
私と五班がやり合っている最中は口を挟まず、終始黙していた彼女は、手早く書類をまとめて横に並んだ。

狐の正体に気づいていたからか、単なるハッタリか……あるいは『どうせそこまで害をなさないであろう狐』など、利用出来れば後はどうでも良かったのか。全くいつも通りの彼女はやはり将来有望株なんだろう。

そんな事を思いながらも、うなだれて沈むカブトに、私はなんの感慨も覚えないまま振り返り、その脇で小さく肩をすくめていた『幻影』へと最後に視線を向ける。

黒鉄創設時からずっと内側にあり続けた『幻影』を。
包帯にまかれ、顔の上半分が見えない『素顔も知らぬ旧知の幻』を。

「あなたが『幻』であったのは今日までですよ。三の副官である『無銘』が、五の副官である『幻影』を――」

――食らってやる。
そう最後に言ってそのままドアを閉める。

「なら私の相手は碧兵かしら、副官さん?私が幻影の相手をするモノだとばかり思っていたのだけど」

「……俺が碧兵かぁ思っててんけどな。まぁ、俺の相手は不死身でえぇよ。一班は俺がやるわ。ほら、やっぱり盗賊上がりは好かんし」

「ヒナは……えっと……」

「ヒナは勝てる相手だけにしておきなさい。まだ小さいんだから、無理して怪我をする必要はないわ」

「う～、小さくなんかない！もうすぐ１５です！ヒナもやりますですぅ！スイレンって意地悪です！」

私の宣戦布告にやる気を出したのか、はたまたこれがいつも通りのままなのか。

なんの気負いもなく、それぞれが勝手に相手を指名をしていく仲間達に笑い、そっと後を付いて歩く小柄な少女に声をかけた。

三班本拠に向かう私達に付いてくる少女へと。

「あなたはどうされますか？」

「……カーリアン次第ね。……二人とも無事なら……私は三班に付く事になりそうよ」

『私は』、か。

的確な言葉を返してくれる少女に、思わず笑みが漏れてしまう。

その笑みの意味を履き違えたのか、あるいは正確に読み取ったがゆえか、不機嫌そうに顔を逸らす少女が少しだけ年相応で――どうしても笑みを抑える事が出来ない。

「三班（ウチ）以外は当てに出来ませんよ？七班は遊撃班らしく、そっち方面でやる事が山積みですから。まぁウチだけでも、七が敵に回らない限りはなんとか立ち回れるでしょうが」

「……私としても安全牌を取りたいとこだけど。……でも仕方ないでしょう？……カーリアンがそっちに付くんだから」

おやおや、二人揃って戻ってくると思っているからこそ、一緒に歩いているというワケですか？

思わずそう言いそうになるが、それはなんとかこらえて、代わりに常々思っていた疑問を問いかける事にした。

「なぜあなたは――いや、スズカさんもなんですが、カーリアンにそこまで信頼をおけるんですかね？正直スズカさんが太鼓判を押してはくれましたが、カーリアンならシャクナゲを殺そうとするんじゃないかと、私は気が気じゃないんですが」

そんな私のもっとも過ぎるハズの疑問に、彼女は何故か呆れはてたかのような、でも少しだけ得意げな笑みを浮かべてみせる。

笑われてしまったが、私としてはかなり真剣に……しかも本気で心配な事なのだが。

「……スズカは見る目がある。……さすがは我がライバルね」

ライバルだったのか。それは知らなかったな。やはりカーリアンを巡る……だろうか？

なんにしても、えらく強大なライバルを持ったモノだ。お互いに。

「……彼女はね、優しいのよ。……真っ直ぐで暖かい。……『死にたがり』って悪名のフィルターを取って見てみれば……即座にあなたも気がつくわ。……あのコの可愛さにもね」

「フィルターを付けて見ていた覚えはないんですが」

「……つまりね」

私の話は聞いていない様子で、滔々とカーリアンに対する話が始まってしまう。普段は無口な彼女が、カーリアンについて語る時だけは、雄弁な事は知っていたが。

「……彼女は自分自身を裏切らないコなの。……絶対に最後には自分を曲げられない。……確かに全てを告げられた当初は……シャクナゲに突っかかるかもね。……でも、シャクナゲがあのコを攻撃しなければ……間違いなく揺れるわ。……そして散々迷った挙げ句に、絶対あのコは自分を裏切れない」

「……」

「……それって素晴らしい事よ？そう思わない？……死にたがりと呼ばれるほどの過去があったならなおさらね」

ないものねだり、と言えば怒るだろうか？確かに彼女はカクリさんとは違って――そして意外と策士なスズカさんとも違って、真っ直ぐで裏表のない人物ではあるが。

「……立場もオリヒメとは違うみたいだし……悔しいけどこの一年で……あのコの想いは本物になっちゃったからね……それは絶対に裏切れない」

そう言って小さく笑うと、『今後の方針を決めましょう』と彼女らしい無表情にもどり、先へと歩き出していく。

私達の家。黒鉄第三班の本拠地へ。

これからしばらくは、本物の住居になるであろう『全ての黒鉄達

の故郷』へ。

珍しく多彩な表情を浮かべた少女に、びっくりしてしまった私を取り残したまま。

43・サンズ・オブ・デイブレイク（後書き）

1日遅れというべきか、1日早くというべきか。なんとか更新いたします。

最近の悩みは題名が浮かばない事です。色々候補は出ても決まらない。

簡単にさっくり決まる時もあれば、なかなか決まらない時もあるのが常ですが、最近は決まらない率が高いんです。

今回も4つくらいからなやんで、全てをボツってから『まぁこれでいいや』と。

意味的に『暁の子ら』みたいな。完璧当て付けですけどね。

前回、今回と色々出ましたが、次回はさらに色々出ます。

シャクナゲターンオンリーですが、『過去』についてサラッとカーリアンに話してたりします。それだけでかなりネタ出てます。一章のラストなのに。

『彼女』についても語りますし、その世界の強大さについてもさわりだけ書いてます。

でも一番見て欲しいのはカーリアン。あのコがなんというか少しは変わったんだな、て辺り。

一生懸命で、でも自然っぽくて……を目指してます。

ここまで書いてたら分かるでしょうけど、もう書けてたりします。

あとは微調整のみで。

一気に一話を書き上げた話って、最近じゃ久しぶりでした。

ラストに相応しいか分かりませんが、ぜひ読んでみて下さい。

次回あとがきは、二章の紹介みたいなモノを載せるか、はたまた一章の補足を入れるかですね。
二章には補足されてますし、一章でもさわりは書いてますが、わかりにくい箇所があるハズです。
ヘルメスとアオイの会話の終わり。頼み事の件とか。
『ヘルメスさんには楔を打って～云々』とは書きましたが、そこは二章への伏線ですよ、と補足してみたりするワケです。

二章の紹介は、ダイジェストぽく。
どちらを書くか分かりませんし、どちらも書かないかもしれません。
二章への幕間で書く事なくなりそうですし。

といったところで文字数が迫って参りました。
いや、文字数よりも書く事が尽きてきました。

ラスト一話、ぜひ読んでやって下さい！

４４・デイ　アフター　トゥモロー

「俺はさ、純正型じゃなかったんだ」

崩れ果てた要塞から少し離れただけの場所で、ようやくそれだけを言葉にした。

ここまで肩を貸して連れてきてくれた少女は、一言も発しない。

この廃ビルに付くまでに五分、付いてからも五分、ただ黙って手当てだけをしてくれて、沈黙を守っていてくれた。

喚く坂上をあっさりと気絶させ、軽々とかついだ近衛の少女が去った時も、笑ってみせていた。

『この借りは必ず』

俺を最終的には思い留めた彼女に、立ち去り際そう言った近衛にも

『利子は高いかんね』

と笑ってみせた。

とてもヴァンプ嫌いのヴァンプ殺しだとは思えない、柔らかな笑みで。

そして言葉もなく俺へと肩を貸すと、騒ぎが大きくなりだした要

塞から離れる為に歩きだす。ボロボロになっている俺など、背負っていった方がずっと早かっただろうに、肩を貸して最後まで歩かせてくれたのは優しさだろうか？

それは分からない。最後まで自分の足で立っていられたというだけで、僅かに救われた気になれた事だけは間違いないけど。

少しだけ落ち着ける場所に着くと、慣れていない不器用な手つきで傷を拭ってくれ、大きな裂傷には破った服の裾を巻き付けてくれた。それは救急班の班長としては落第点の手際だったろう。

でも真剣に……そして気遣うような優しさで、手当てをしてくれたのだ。

……彼女は、俺が自分から口を開くのを待っていてくれたのだろうか？

それとも、彼女も怖かったのだろうか？

その答えは分からない。分からないままで五分が過ぎて、ようやく口を開いたのだ。

「俺にはみんなみたいに『証』がなかったから、単に世界を関知出来るだけの普通の変種でしかないと思っていたんだ」

『道』――。

誰がそう呼び始めたのかは覚えていない。俺達が自らをそう称し始めたのか、それとも潰してきた敵対グループがそう呼び始めたのか。

「俺には仲がいい二人の友人がいてさ、その二人が純正型だっただけ。たまたま純正型二人と仲が良かっただけだった」

今では『重力の皇（グラビティロード）』と呼ばれる友人は、とても熱血漢で暑苦しくて――。

本当の意味での『新皇』となった『汚染の皇』、絶対毒の皇（ベノムロード）である少女は、とても勝ち気で負けず嫌いだった。

「俺はただその二人と同じが良かっただけだ。多分最初は、難しい事なんかなんにも考えてなくて、ただ仲がいい二人と一緒が良かっただけなんだ」

二人は際立っていた。目立っていた。とても優秀で、人を惹きつけずにはいられなかった。

俺とは――世界が見えるだけの俺とは違った。

そして優秀だったからこそ、その二人にはいつも敵がいた。

最初は周りの同学年、次には近い年頃全ての子供達、そして親達を経て、教師や警察、最後に国。

「なんにも悪い事はしてなかった。ただ優秀で……俺も含めてちょっとだけ出来が良くて、ただ外国で変種達が革命を起こしていただけだった」

俺達には――いや、二人には居場所がなかった。親も周りとは違う二人を怖がって、教師も自分を上回る子供達を不気味がって。

なんにも特別は欲しがらなかったのに、どこまでも特別だった。

「中学に上がり、より世界が見えだした頃……そして『革命』なんてものが起こり、混沌の幕が開けた時代。俺達は同じ境遇の仲間達を助けようと思った。へこたれるのは簡単だ。ふてくされて周りに合わせる事も出来た。でも――」

――私達がやりましょ！私達はなんにも悪くなくて、現実の方が

間違ってんのに、無理に合わせる必要なんかないわ！そうでしょ？

彼女はそう出来なかった。いや、しようとしなかった。

多分、優し過ぎたんだと思う。真っ直ぐ過ぎたんだろう。

見て見ぬフリは出来なかったのだ。

「でも、それじゃなんにも変わらない。ずっと間違いが続くだけで、いつまでも隠し続けていかなきゃならない。特別を隠しきれないほど幼い子供達は救われない」

俺達は学校を抜けて、毎日どこかで戦っていた。特別を嫌う連中から、別に特別になんてなりたくない人達を助けようとした。

時には警官隊とぶつかって、時には変種狩りをしていた同年代と戦って――

地道に署名活動をして、行動で害がない事を示す為にボランティアをしたりもして。

「あの頃の関東（向こう）は、どこもかしこも凄くひどい時代で、一番混沌としていたけど、俺達が多分一番真っ直ぐに駆けていた時だったんだと思う」

『ベノム』と呼ばれていた彼女がリーダーで、『グライ』と呼ばれていた友人がサブリーダー。そして『ゼロ』……能力『ゼロ』の俺が参謀。

ベノムとグライはいつも掛け合いをしていて、結局最後はいつもグライがやり込められていて、たまに蹴り飛ばされていて……数少ない仲間達はそれに笑っていた。

俺も大袈裟に溜め息を吐いてみせながらも、笑っていたと思う。

なんにもなかったし、毎日がありふれていたけど、それが欲しか

ったモノなんだと思った。こんなのがずっと続けばいい、と。

「変わったのは、ゼロがゼロじゃなくなった日から……俺が純正型の世界、『灰色』に目覚めた時からだったと思う」

正確に言えば、そのありふれた毎日には、ずっと前からあちこちに無理が出ていた。

ベノムとグライは強すぎて。

特に全てを『汚染』する彼女は、純正型の世界をも侵す絶対毒を持っていたから、完全に反則過ぎて。

他にもあちこちで変種達のグループが起こりたち、既存種のグループとぶつかり合っていたし、俺達を抑え付ける為に、国も変種達の部隊を整えて始めていたというのもある。

そして――『言葉の皇』が入ってきた。

あの何処か不気味な、全てを見透かしたような純正型が。

でも、完全に変わったのは、俺が『純正型』として目覚めた『あの時』からだろう。

必死に知恵を絞って、仲間達の在り方を考えていたゼロ自身が、決定的に変革の鍵となった。

「ありがちな話だけどさ、目立ち過ぎていた俺達を相手するには、なりふり構わずってヤツらが増えてね、人質を取られたんだ。それも見ず知らず子供をだよ。ただ変種で純正型だっただけの子供が人質にされてさ、それでも放っておけなくて……友人二人が出向いていったんだ」

あの時、俺は『私達だけならなんとでもなる』という言葉を信じるべきだったんだろうか。
放っておけなくて駆けていくべきじゃなかったんだろうか。

……そこで見た人間の汚さや弱さは、いまだに脳裏にこびりついている。

「無抵抗でベノムに殴られるグライ。それを見て……人質を盾に仲間に仲間を殴らせて、それをゲラゲラ笑いながら見ている連中」

フラフラで顔をデコボコにして、それでも笑うグライと、歯を噛み締めて、血を滴らせて、涙を流して拳を振るう彼女――。

「我を忘れた。こんなのってないって思った。俺達はなんでこんな目にあってまで頑張ってきたんだろうってね。無我夢中で駆けいって……」

――そこからは記憶が曖昧だ。
気が付けば、辺り一帯全てが廃墟になっていて。
彼女の『汚染』の世界に守られたグライとベノム、子供。
立ち尽くし見上げた空に浮かぶ緋色。蠢く蛇の感覚と歯車の軋む音。

『あなたも同じなんだ』

そう笑うベノム――『平野遊里』。
同姓同名の彼女の笑みが……とても怖かったのを覚えている。

「そこから俺達が歩む道は狂いだした。敵対者には容赦をしなくなった。行動に制約がなくなった」

話を聞いているのかいないのか。カーリアンの方向を見る事も出来ないまま、ただ淡々と言葉を連ねていく。

何を望んで言葉を重ねているのか、どんな反応を求めているのか。それすらも曖昧で、思いつく端から記憶を掘り下げ、順番に言葉にしていくだけだ。

恐怖は薄れない。言葉にする事がやはり怖い。

でも、一度口を閉ざしてしまえば、もう二度と言葉には出来ない気がして――ここから先には進めない気がして、今まで『アカツキ』や『カブト』、他には数人にしか語った事のない過去を言葉にする。

「俺は――ゼロだった俺は、混乱していた。焦っていた。俺は特別でもなんでもないハズだったから、いきなり変わった環境に戸惑ってしまったんだ」

俺は二人とは違う事に……多分『安心』していたんだろう。どこか線引きをしていたんだと思う。

線の向こう側は『特別』で、俺は単に線に限りなく近いだけの『こっち側』。そんな意識があったのは間違いない。

「俺が純正型だったから、それまでの関係が壊れてしまった気がして怖かった。『道（仲間）』が狂ったのは、純正型だと自覚していなかった自分が――世界を操りきれない未熟さが原因なんだと思ったよ」

強力な殲滅戦を可能とする制御の効かない世界。それが全ての原因だと思った。

これさえ抑えておければ――なんて、甘い幻想を本気で信じた。

「純正型の世界に踏み入れてしまった俺を、二人は喜んでくれた。

戸惑う俺に笑顔を向けてくれた」

『これで私達はずっと一緒だね』

そう語った彼女が変わったように感じた。

俺が変わったから、彼女も変わってしまった気がして――

「それからは無我夢中で力を制御しようとしたよ。命を削る思いと言っても過言じゃないくらいに、世界へと手を伸ばした。踏み込んでしまった俺が、ちゃんと向き合っていくには、同じ位置までいくしかないと思った。だって――」

――もう、世界を知らなかった頃には戻れないから。だから前へ進んで、昔に近い位置を見つけるしかない、そう思ったんだ。

そう言って……大きく息を吐いた。

その時の考えの甘さが、『必死さ』と同じなんだとしても、今の俺には『逆効果』なんだと分かる。

彼女と対峙したあの時――歩みを止め、逃げ出したあの時にそれを思いしらされた。

「彼女達に声が届かなければ、まだまだ自分の力が足りていないからだと言い聞かせた。俺達がかつて望んだように、『ありふれた毎日』が取り戻せなければ、自分が子供だから周りの大人は耳を傾けてくれないんだと思った。もっと力があれば、仲間がいれば、欲しいモノ全てに手が届く」

――そんな考えに逃げた俺こそが、始祖なんだろうな。

そう思う。

周りとは合わなくなり、孤独に溺れる日々。いつしか革命軍そのモノとなっていく『道』。

そして『ゼロ』から『新皇』へと変わった俺。

それでもただ必死だった。変わっていく周囲と友人。在り方が歪んで『皇』へと変貌する二人。

それを留めようと必死で走り続け、がむしゃらに先へ先へと自らを追い立てる毎日。

周りの環境が望んだ日々に変われればみんなが元に戻る、彼女は昔みたいに笑ってくれる、あの頃と同じように、グライと掛け合いをして笑わせてくれるだろう。そう信じていた。

「でもさ、結局全部が逆効果だったんだ。彼女はあっさりと世界を壊した。現実を歪めてみせたよ。『もうこんな場所なんかいらない』ってね」

俺が世界を制御しようと必死になっている間も、各地での抗争は激化の一途をたどっていた。

自衛隊が国軍になって、警官隊が武装警官隊に変わって、俺達を出会い頭にあっさりと射殺しようとしてきて――

そういった敵の全てを、彼女の毒は飲み込んだ。

俺よりは狭く、普通の純正型よりは広い、そんな『霧雨が舞う無色の世界』から抜けた力はあらゆるものを食らった。

大地をへどろの渦へと変え、空気の在り方を汚染し、弾丸の軌道ですら蝕んで、他の『世界』すらも歪めていった。

「こんな自分達を認めない現実なんかいらない。一から全部作るからいい。俺も『自分達と一緒』なんだから――こんな世界には未練がないハズだ」

――そう言った。

『ユウも一緒に来てくれるよね？もう今までみたいに現実にこだわらなくても、ユウも一緒になったんだから』

そう言って……俺の努力の全てを砕いた。

俺が力を求めたのは、そんな意味じゃないのに。

一緒なのは良かった。それについては覚悟も決まった。

でも一緒が良かったのだ。

変わってしまった世界で、同じ位置に立ちたかったワケじゃない。

「俺が彼女達の位置に近づいたのはそんな意味じゃなかったのに。

いつの間にか欲しかったモノや求めていたモノは、どこまでも遠くに行ってしまっていた」

いつしか『灰色の皇（グレイロード）』、または『万鎖の皇（チェーンロード）』と呼ばれ、唯一人『新皇』と称されだした子供。

全てに見える『特別』を祭り上げられた道化。

なんにも見えていなかった哀れな愚者。

『私はユウが大好き。もう一緒になれたんだから、こんな世界に我慢する必要ない』

彼女がこだわっていたのは世界じゃない。普通の変種である俺と一緒に生きていける世界。

ずっと一緒だった人の心が……子供だった俺には見えていなかった。

「最後には絶望して――それでも一縷の望みを託して、彼女と向かい合った」

『ねぇ、ユウ。私達はずっと一緒だよね？』

目の前に立つ彼女は笑っていた。幼なじみである俺にだけ見せてくれる柔らかな言葉遣いと、綺麗な笑顔で。

『……一緒にいたかったよ』

そう返した俺は――多分泣いていた。

灰色世界を展開し、逆巻く力の群れを従えながら。

『私達は一緒の名前を持ち、一緒の時間を過ごした、一緒の日に産まれた二人だもんね』

そういう彼女に、いつもなら『そういう考えを口にすんのって、女には恥ずかしくないのか？』そんな風に返していたのに……俺には言葉を返せなかった。

ただ、空を見上げて――

『――Ｔｅｒｍｉｎａｔｅ（終末端子）』

彼女に相対する無限の蛇に合図を出すだけだ。

勝てないだろうと思っていた。俺じゃ彼女を止められないだろうと分かってもいた。

でももうこれぐらいしか取れる方法はもうなかった。

国軍は撤退し、この近隣は全て『皇』のモノだ。国軍が彼女を抑えつけられたなら、劣勢な中でも彼女や仲間を連れてどこかに逃げる道もあった。その為にこの世界を使えたならどれほど良かっただろうか。

その場合、父さんを一人にしてしまうが、こんな息子がいるよりはまだ幸せを掴める可能性がある。

『皇』が俺達である事は可能な限りデータから消したし、口止めにはとりたくない方法まで取ってきた。

俺達を知る人間は、仲間内でもトップクラスの者ばかりで、いざとなればそういった全てを消してしまってもいいとすら考えていた。

そうすれば、父さんは新たな幸せを見つけるだろう。俺は全てを背負って隠れて生き続ければいい。罪悪感に呑まれ野垂れ死ぬのがお似合いだ。

そう考えていたのに……そうはならなかった。

彼女も俺達も、国軍を凌駕してしまったから。

……もう彼女を止められる存在は、同じ『皇』と称されたモノにしか出来ないのだ。

『私と戦うの？』

『もう、いいだろ？もう、戦わなくてもいいじゃないか？この国は十分めちゃくちゃだ。変種を差別をしている余裕なんかないし、復興にはみんなの力が必要になる。それで――』

『ダメね。それじゃダメ』

灰色の中で広がる霧雨は、力の群れを寄せ付けない。全てを汚染して、変貌させていく。

彼女は……悲しそうだったのだろうか？笑っていたのだろうか？ただ全てを寄せ付けない高見にいて、俺を否定する。全てを否定する。

『せっかくユウも一緒なんだから、私達が住みやすい世界に変えるの。だってさ、もう脅えなくてもいいワケじゃない？ユウと違うからって事を気にしなくてもいいんだよ？私達はこれからずっと一緒なんだから。もう昔にこだわる必要なんてないの』

『俺は……今までを捨てたくなんかないよ』

『捨てるんじゃないの、変えるの』

『それを――』

――捨てるって言うんだよ。

限界は必要なかった。そんなモノは関係なかった。

ただ一矢報いて、一発ひっぱたいて、彼女を引き戻せるキッカケを求めた。

かなわず敗れるのは分かっている。毒にまみれるのは覚悟の上だ。

そんな最後は望むところだった。

ただ、その最後の姿で、彼女に何かを訴えられればいい。

そう思い向かい合って、削り合って――

「俺には彼女を止められなかった。一矢くらいは報いたかもしれないけど……結局は俺の限界の方が先にきた」

ボロボロに敗れた。灰色は汚染され、力は霧散させられた。

『ユウに私が傷つけられるワケないもんね？』

そんな言葉とともに柔らかく抱き留められ――その優しい絶望に心は殺され尽くした。

彼女には戦っているつもりなんかなくて、ただジャレてる程度の感慨だったんだと思う。

だって毒の一滴でさえも、俺自身を冒そうとはしなかったんだから。

「そして逃げ出したんだ。みんなには黙って、全てを話した父さんに連れられて……関西まで」

卑怯な……弱い俺。

絶望に負けて、絶望に溺れた俺。

今も、目の前の彼女に『断罪』という救いを求めている。

そうすれば、俺はもう絶望を受け止めなくてもいい。

『仲間達』には合わなくも済む。

「このヘタレ」

でも返ってきたのはそんな言葉だけで。

「でも、いつかは向こうに帰るんでしょ？」

いつか聞いたような言葉が続けられて。

「だってシャクはもうシャクだもんね」

そんなワケの分からない事まで言ってきて。

「今のシャクはもうヘタレじゃないもん」

そう笑ってみせる。

「だってこっちでも色々背負ったんだよ？シャクを信頼した黒鉄達を知っている今のシャクなら――」

――負けないよね？

そう言って『うん』と大きく頷きながら。

そんな精神論で勝てる相手じゃないんだ、と思った。俺は強くなんかないんだ、とも。

でも彼女はそんな俺の言葉が出るよりも早く、聞こうとすらしないまま立ち上がってみせる。

「あたしもさ、弱いよ。すんごく弱い。シャクよりもずっと弱いし、ミヤビにもかなわない。スズカには全然勝てそうにないし、オリヒメとやっても負けるかもしんない」

負けず嫌いの代名詞みたいな少女は、そう言いながらも晴れやか

な表情で、呆気に取られる俺を気にもしないまま続けてみせる。

「でもさ、これからは強いよ。強くなる。すぐにミヤビにも勝てるぐらいになるし、スイレンにも勝ってみせる。いつかはスズカにも負けないぐらいになる」

――陰険オリヒメなんか相手になんないぐらいになるからね。

そう言って……手当てをされた状況のまま座っていた、俺へと手を差し出してくれた。

「そんなあたしが引っ張ってあげる。どんどん強くなってくあたしが、シャクを絶望ってヤツから引っ張り上げてあげる」

おっかなびっくり手を取る俺の手を力強く握り返しながら、サッと一つにまとめていた髪をほどいた。

そこから広がる紅は、綺麗な真紅で、何故か力強さみたいなモノの象徴に感じられて。

「そうすればシャクは負けない。もう負けない。もっと強くなるあたしが、そう決めたから負けっこない」

「……なんだ、それ」

「信じるってのは力になる、信じられてるって思うと力になるんだよ？知らない？スカシ野郎がそう言ってた」

そう笑いながら言うカーリアンを、俺はただ呆けたように見上げる。

――あぁ、確かに言ってたな。誰にでも言ってたんだろうな。アイツは恥ずかしいヤツだったから。

そう思ったし、カーリアンにさえもしっかり影響を与えていたらしい事に、ちょっとだけ目眩を覚えた。

「シャクはさ……うん、やっぱシャクはシャクだよ。あたしはそう信じる」

本当に……アイツはなんでも知ってる。欠陥預言者でしかなかったクセに。どこまでも他人任せなクセに、ちゃんと残すモノは残していてくれる。

「俺はさ、そんなに強くなんかないよ」

「うん、これからだね」

「多分また躓く」

「手を貸してあげる」

「足踏みに慣れてしまった」

「引っ張っていくから平気」

「一杯罪にまみれてる」

「あたしもだよ。ドロドロで血の匂いが取れないくらい。多分これからもっと汚れるよね」

「なんで笑ってんだ？」

「だってさ、後ろ向いてた時は罪って怖かったのに、今は別に怖くなんかないから。罰は覚悟の上、償い上等って思ったらなんか開き直るよね」

「開き直りかよ」

アハハと笑う彼女は、なんからしくなくて。
思わずツッコミを入れる俺がものすごく久しぶりで。
肩を貸されて歩き出す。

これが本当の彼女なのか、それとも単なる作り物なのかは分からない。
ただなんとなく眩しく見えて……懐かしい誰かをダブらせてしまって、思わず笑ってしまう。

「帰ろっか、神杜へ。あたし達の街へ」

「……あぁ」

帰れば俺は断罪されるだろう。それをずっと望んでいた。
そのハズなのに、無力感に苛まれただけの狐が、意外と辛辣な性格のアオイに責められてはいないだろうか……そんな事の方が気にかかる。

「そこからまたスタート。新しい黒鉄を始めよう。あたしはさ、ちょっと決めた事があるんだ」

「決めた事？」

「カクリは反対するだろうけど」

俺はもう、カーリアンには散々驚かされた。次はあの無表情娘が驚かされるのを見るのもいいかもしれない。

そんな情景を想像して、小さく肩をすくめてみせる。

――そうだな。もし俺にもまだ『居場所』があったなら、もう少しだけ抗ってみてもいいかもしれない。

そう思えた。

だって危なっかしくて、力の強さの割りにどこか頼りなくて、スズカ以上に手のかかる存在だった少女が、こんなにも変われたんだ。

そう思えば、まだ諦めるのは早いような……諦めてしまうのがもったいないような気がしたのだ。

「行こう。これから大変だけどさ、まだあたし達がいるんだ。アカツキやミヤビはもういないけど、まだ黒鉄と紅がいる」

アカツキもミヤビもいない。クロネコやサザナミもいない。

でも、そうだ。まだ『銀鈴』は側にあり続けている。あの全部を捨ててでも俺を必要としてくれた家族がいる。

アオイもいるし、三班最強の剣と盾と称された『水鏡』と『不貫』もいる。いずれ経験さえ積めば、新参のヒナもそこに名前を連ねるだろう。

スイレンとヨツバなら、今現在でも脆い世界しか持たない弱い純正型よりはずっと強い。

「大丈夫。あたしがみんなに言ってあげる。シャクはシャクなんだ

って。ちゃんと分かるまでこんがりと説得してあげる」

「こんがりって比喩が変じゃないか？」

なんか力ずくって感じすらする。普通はじっくりだろう？

そうは思っても、何故かそれが彼女らしくて――

「あたしの説得は熱いよ？うん、熱意が大気に感染するっていうのかな？」

「それって紅の能力のまんまだろ」

彼女とそんな言葉を交わしながら、そうか、といまさらになって思う。

『俺はさ、見えないモノは信じないし、言葉をかわせないモノに説得力なんて感じない。信じるのは未来や運命じゃないよ。神様？はん、神様ってのが俺にコーヒー一杯でも奢ってくれたのか？』

――俺が信じるのは人間だけさ。言葉をかわして、結局人間に手を差し伸べてくれる可能性がある『人間』しか信じない。

そういっていた友人の……どこまでも人間だったヤツの言葉が、今になってはっきりと胸に染みたのだ。

……そうだ。俺は信じると決めたんだ。最後まで成長出来る人を――こんなにも変われる人間を信じていたいんだ。

そっと空を見上げる。明るみ始めた暁を。

誰かが信じてやらなきゃ力にならないだろ？信じるってのは力になるんだもんな。

そう思う。そしてその誰かを他人任せにするくらいなら、俺が信じればいい。

俺は神も運命も信じない。

信じるのなら……人間がいい。

コーヒー一杯奢ってくれない神様や、灰色がかった運命よりは、このあったかい手を信じる方がずっと救われる。ちょっとした事で笑いあえる仲間の方が、ずっと信じがいがある。

「これからのあたしがシャクの本当の相棒なんだからさ、覚えておいてよ」

唐突にそう言う彼女は笑っていて。どこまでも真っ直ぐに笑っていて。

俺もつられて笑ってしまう。冷笑でも、苦笑でもない、ずっと忘れていた笑みで。

「あたしは『美緒』。祇条美緒（しじょうみお）。その名前、ずっとあんたに預けとく。これからのあたしが本当の『カーリアン』だから。あたしの宝物はシャクが持っておいて」

「……」

そして、みんながみんな繋がってる。どこまでも繋がってる。それが何故か可笑しくて——本当に嬉しくて。

「……ぷっ、あははははっ！」

笑えてしまう。はてなと首を傾げる彼女をそっちのけで。腹の底から声を上げて。

『結城智哉……この名前はお前が持っててくれ。アカツキって名前が必要なくなるその時まで』

『あたしは雅っ。雪代雅。まっ、相棒契約の手付け代わりに預けとくにゃあ～』

本当にみんながみんな……どこまでも優しい。どこまでも暖かい。

少し恥ずかしそうに顔を赤らめながら、憮然としてみせる彼女が誰に似ているのか分かってしまう。多分あいつらに似ているんだろう。俺の相棒を名乗ってくれた……今はもういないあの二人に。

「ちょっとっ！笑うとか有り得ない！今のって笑うとこっ！？有り得ないでしょ！結構頑張って――」

憤然と食ってかかる彼女をジッと見返して。

笑いをこらえるなんて本当に久しぶりで。

「俺は比良野。比良野悠莉。忘れたいってずっと思ってきたこの名前……預けてもいいか？」

一年前のあの日以来、もう自ら名乗る事はないだろうと思っていた名前（過去）を口にする。

過去を語った証に、重荷をちょっとだけ預けるという意志表示として。

そんな考えが分かったのか、はたまた分からないままでも気にしないのか、彼女は肩を貸してくれたそのままの姿勢で、惚けたように見返してくる。

そしてその真紅の瞳を目一杯見開くと

「うん！」

そう晴れやかに笑ってくれたのだ。

44・デイ　アフター　トゥモロー（後書き）

はい、一部完です。なんかあちこち伏線残りまくりですけど、それは回収しきれなかった辺りですね。一部がメチャクチャ長くなったんで、章分けする際に回収が出来なくなってしまったワケです。

ヘルメスとアオイの会話とか。

遺物『ノーフェイト』や『ファム・ファタル』とか。

顔しか出していないメンバーとか。

初っ端にやられたおバカさん呼ばわりされた近衛とか。

書き上がるまでに変わった部分も多いですね。坂上が生きてたりとか。スズカが結構でしゃばったりとか。

本来はスズカ、二部までほとんど出ないハズでしたから。

二部では『ノーフェイト』、顔しか出していないメンツのあれこれ、勢力争いとかが出てきます。まぁ顔も名前も出てない人もでますけど。これ以上人を増やしてどうするつもりなんでしょうね。

あと二部は三人称でやってみる予定なんですが（メチャクチャ場面変わるから）、それに慣れるのが一苦労っぽいです。

二部は誰がメインとかはなく、スズカもカーリアンもシャクナゲも、それにアオイやスイレンとかも見せ場はある……予定です。

まだまだ関西なので、多分二部では終わらないかな。心が折れなければ。

絶対毒の人は出ない予定ですしね。関西編が終わったらページ分けするか、それとも二部から分けるか。

一つのページで全話書いてゆくゆくは最多文字数小説を目指すのも惹かれます。それもいいかも、みたいな意見を聞きましたし。

でも話数増えて見にくくなるのがちょっと……といった感じで、まだ悩んでたりします。

ほら、１００話を越えてたら、初めて読む人は読む前からげんなりしそうで。二部も一部より長くなりそうですし。

何はともあれ、一応本編は終わりました。
ラストに最初の方に出ていた『名前』の伏線を拾えたし、あんまりバッドエンドにならなかったし（ファンタジー系はバッドエンドに惹かれがちなんです）、まぁ楽しく書けました。
後は来週にお試し三人称による幕間ストーリーと、一章の補足、それで完璧に二章へと移行いたします。

では特に何も書いてはいないあとがきですが、ここまで読んで頂けた方々、ありがとうございます。

最後に。忘れないうちに７５０００ＰＶ達成、ありがとうございます！

――幕間――

「よっこいしょ！」

そんな掛け声と共に倒れていた体を起こすと、彼女は辺りを見渡した。

「あっちゃ、えらく混乱しちゃってるねぇ～。こりゃ坂上はやられちゃったかな」

そう呟いて、汚れてしまった濃紺のコートを脱ぎ捨てる。その下に着込まれていた大きめのブラウスが、豊満な肉体により盛り上がりを見せていた。

辺りはひたすら喧騒に包まれ、嬌声じみた叫声がそこかしこから上がり、まだ日も明けきっていない時間帯とは思えないほどの騒ぎだ。

「ふん、左近と右近もやられた、かな。あの二人がいたらここまで混乱はきたしてないでしょうし」

そう呟いた女の胸元には金色のタグ。

豊満な胸元からは覗くそれは、この街では力の象徴たるモノだった。それを彼女はあっさりと引きちぎり、なんの未練も感じさせないまま投げ捨てる。

「坂上がやられたって事は、もうお役ゴメンって事よね。やれやれだわ」

そう呟く声にはなんの感慨もなく、歩き始めた歩には未練すらもない。

そしてなんの表情も浮かべないまま半壊した要塞に背を向け、辺りの混乱に眉をひそめる。

別に混乱から漏れる怒号や叫び声に何かを思ったワケじゃない。単に『うるさいな』と言いたげに眉をしかめ、小さく舌打ちを漏らしただけだ。

「本当にバカばっか」

その怒号の中には、今まで彼女に媚びへつらってきた者達のものもあるだろう。ツテを頼って関西軍に身を寄せただけの弱者も。そういった連中が、混乱時に火事場泥棒のような真似をしても、いずれ今得たモノも誰かに奪われるだけだ。

今の世の中は、奪えば奪われる、弱者は奪われる、強者はより強者に奪われる……そんな世界なのだから。

だからこんな崩れゆく街、壊れゆく勢力のただ中で、残飯拾いをしている連中は下の下だと彼女は思っている。本当に賢い連中は、今頃すぐさま他勢力の元へ走っているだろう。

『関西の坂上が黒鉄というレジスタンスのメンバーに敗れた』という情報を、自らの口から確実なモノとしてもたらす為に。

伝達手段が激減した今の世界では、人の手から直接渡されるモノほど確実なネタはない。光通信も衛星も使えない、携帯なんてもっての他である以上、簡単な無線機や人づてほど確実な通信手段はないのだ。

だからこそ周りのバカ達の喧騒が耳障りで、仮初め仲間だった者

達が目障りで仕方がなかった。

「まぁいっか。バカは放っておいて私もとっとと帰りましょ。もう関西に入り込んでる必要もなさそうだし、いい加減この街も飽きてきたしね」

そう誰に言うでもなく呟いて、彼女――偽りの近衛、『友枝』は歩き始める。

漆黒の侵入者に敗れた傷などどこにもない、軽快そのものの足取りで。

辺りの喧騒に、その形の整った細い眉をしかめながら。

「予定の手土産（モノ）とは違っちゃったけど、まぁアイツなら喜んでくれるでしょ。なにせ、アイツの率いていた北陸師団一つを壊滅した因縁の皇のネタなんだから」

――取りあえずうるさい残飯漁りの野良犬共を、ポーズとは言えあっさり負けた事への憂さ晴らしに狩っていくか……そんな程度の感慨で、自らの能力を解放させていきながら。

＊＊＊＊

幕間。

始めに……とは言ってもすでに始めではありませんが、今回の話はストーリーには関係ありません。

全く関係がないワケではありませんが、逆月本人の気分転換と、三人称の練習短編をいくつか盛っただけの、まさしく幕間と言えるパートです。

小説を書くには書き続ける事で培われる『小説脳』……あるいは『小説筋』みたいなモノが必要だというのは、多分書いてみた事のある人ならなんとなく理解頂けると思いますが（ただ数書くだけでも文章力って上がりますよね）、正直ヤバいです。

今の逆月は、三人称を書く為の小説脳がはんぱないくらい減退してます。左近の辺りで演出として三人称を入れましたが、あそこも苦労した記憶があります。

上の超短編も、やたら苦労してこれです。

一年のブランクは思った以上です。一人称のまんま行こうかと誘惑されまくりだったりします。

＊＊＊＊

練習短編2

生きるとはなんだろう。

少女は漠然とそんな事を考える。

今までなんとなく兄についてきただけの人生。兄に選択を任せっきりだった自分。

強力な空間冷却能力を持つ兄に守られてきただけの妹……。

そんな自分が、何故今になってそんな事を考え出したのか。また何故、別に尊敬も敬愛も……侮蔑も嘲りも向けていなかった『将軍』

という男を助けようなどと思ったのか。
それが彼女自身にもよく分からず、ただその意味について思考を広げていく。

兄には目標があった。なんとなくではあっても、彼には目指していたモノがあった事を彼女は知っていた。
ただ力が足りなくて……兄ほどの能力があっても、その目標には届かない事を知っていて、それを『将軍』に重ねていただった事も知っている。
彼女はそれに付いていっただけだ。だから、兄がいなくなれば『将軍』などになんの価値も見いだせないハズだった。
そう、そのハズだったのだ。

でも彼女は……『右近』と呼ばれ、近衛の中でも右腕としての力を認められた彼女は、何故か『将軍』を助けてしまった。
許せないと思ってしまったのだ。

本当ならば、無様に負けた『将軍』を嘲笑い、そんな将軍を見込んだ亡き兄の不明を嘆いただけで、その場を去るハズだったのに。
兄の夢が潰える様だけを目に焼き付けて、後はただ無気力に生を費やすハズだったのに。

彼女は優秀だった。不可思議で強力な力を持つ兄よりも……周りから怖がられ、異端視された『将軍の左腕』よりも、そのあらゆる能力が上回っていた。
必要以上に能力を誇示し、見せ付けてみせた兄の影に守られて彼女は育ってきたけれど、実際は妹である彼女の方が圧倒的に強かった。
ただ周りは兄にのみ目がいっていて、彼女の影が薄くなってしまっただけだ。それゆえに『兄に守られている妹』というポジション

についていただけに過ぎない。
その位置が彼女には心地よかったし、妹である自分を大事にしてくれる強い兄が好きだったから、進んで影にいるようにしたのだ。兄や自分から離れていった親族、近所の人々、周りからの冷たい視線に怯えているフリをした。そうすれば兄が守ってくれ、進むべき道を示してくれたから。

兄は誇りだった。家族だった。大切で宝物だった。
たった一度――従う人物だけは間違えたけれども、彼女にとっては彼が唯一だったのだ。
そんな兄の願いの全てが潰えるところを見終えて、『右近』の名前を捨てるつもりだったのだ。
後は自堕落に、無気力に生き、生きるのに飽きたら兄を殺した男に挑んで殺されるのもいい……そんな事すら考えていたのだ。
目の前で実際に『将軍』が殺されそうになるまでは。兄の間違いが証明される瞬間までは。

……兄は、本当に間違っていたのだろうか？いや、間違っていたとしても、それを――そんな事を自分が認めてもいいのか？

ただ見ているうちに、そんな疑問が浮かび上がってくるまでは。

――確かに坂上は負けた。いずれはこうなると思っていた。将軍は決して強くない。その能力はともかく、過去に捕らわれ過ぎている。
今の瞬間は来るべき時が来たに過ぎないと思った。弱者は敗北するのが理だ。当然の結末なんだと聡い彼女は理解してもいた。
そうは思っていても、それをただ黙って見ている自分が兄を裏切っているような気がしたのだ。

――兄は確かに間違っていた。仕える存在を誤った。でも自分ならば……『右近』である自分ならば、その間違いにも『意味』を持たせられるんじゃないか。

間違いの核たる男さえ生きていれば、その間違いを意味あるモノに出来る可能性がある。自分は……兄に守られてきただけの自分には、それをする義務があるんじゃないか。

そう考えてしまったのだ。

それからずっと彼女は考えていた。肩に片腕を無くした『将軍』だったモノを担ぎながら考えていた。

生きるとはなんだろう。

そして、一人だけ生きている自分は、間違ってしまったんじゃないか、と。

片腕を無くし、力を半減させた男を担いでいる自分は、兄よりも愚かな間違いをしでかしているのではないか……そう思うと、担いでいる男をそこらに捨ててしまいたくなる。

意味とはなんだろう？

どうすればそれを作れるのかも分からないのに、何故自分がこんな真似をしているのかが分からなかった。

――やっぱり同じような間違いを侵すなんて、自分は兄と兄妹なだけはあるな。

そんな結論にもならない結論を持って小さく笑う。

分からない事は、この『間違いの素』に任せればいい。そう考えを先送りにして彼女は笑う。

どうせ苦労するのは『将軍』だったこの男なのだ。自分は精々最後の近衛らしく、こいつに苦労をさせるだけさせて、意味を見つけ

させる方向に誘導するだけでいい。
　自分が生きている意味なんて、この『間違いの素に意味が出来てから』考えても遅くない……そう結局は結論付ける事にしたのだ。

＊＊＊＊

近衛話ばっかりですね。練習小話とはいえ、拙い出来な気がします。

一部について。そして二部に向けて。

一部はカクリシーンでミスリードをする必要があった為（アカツキに対する記述によって、アカツキという人物へと読者の目を向けた。またそのシーンを出す事によって、純正型という種へのあやふやさをある程度誤魔化した）、一人称の方が都合が良かったし、書き出したばかりのキャラ達に色を付ける為にも、それぞれの心情を出すには三人称より一人称かな、といった点から一人称でいったワケですが……場面切り替わり過ぎですね。
その点は猛省すべき点かと思います。

二部はさらに場面が切り替わりまくります。
反省を生かし、一つの場面をある程度は続けてから切り替える予定ですが、それでも限度があります。
なにしろ、『黒鉄動乱編』とプロットで名付けた三班を中心としたパートと、『……回帰編（……は人物名）』と名付けたカーリアンパート、『山都騒乱編』と名付けたスズカとシヴァの皇対決パート、『ノーフェイト編』と単純に名付けたシャクナゲパートを、あっち

こっち行き来します。合間には北陸の動きだったり、回想だったり、三班以外のパートだったりを入れますし、ゴチャゴチャしまくりなワケです。

一人称なら心情を表しやすくキャラを描きやすいから一部はそれでいったのですが、二部みたく場面移動が多々あると、一人称ではあっぷあっぷな予感大です。

ですから、この幕間を区切りとして、三人称に切り替える方針に致しました。

正直なかなか苦戦しそうです。

三人称って辺りが特に。

マークオブブラックメタルについて。

アカツキ視点のみからなる黒鉄創設秘話、『マークオブブラックメタル』ですが、二部がある程度進んでからになると思います。

単純な話、一人称で書くマークの方が今の段階では書きやすいのですが、それを書き出すと三人称がまたまた書きにくくなる気がするんです。

ちょっと三人称で慣れた頃に、ゆっくり書いていこうかな、と。

そして二部の筆が行き詰まってしまった時に、マークを上げる形にしようかなと考えています。

結構文章を書くのは早い方だと思うのですが、やっぱり行き詰まる時は行き詰まりますし、予定があって書けない時は書けません。ついでに言えば、両方平行しては時間的にやっぱり無理です。

だから本編書いて合間にマークを上げる。さらに合間にシンフォニアを書いていって、書けたらそれも上げる、でいこうかなと。

一週間に一度二部かマークかは絶対上げる形……二部本編をメイン……で、時折シンフォニアも上げる、が多分いっぱいいっぱいです。

最後に。
早くも幕間は終わりです。一部に残っている伏線は、そのまま二部に持ち越しです。
小話も３つ書く予定でしたが、ネタもないので２つだけ。後最後にネタばれ気味の練習予告編だけ。全くもって趣味と暇潰し全開で終わります。

６月半ばからは二部が始まりますが、あとがきネタと感想は随時募集中。
二部からはショートショートストーリーをあとがきに書くかもしれません。このままだと逆月の趣味と暇潰し感溢れるストーリーになりそうです。
１０００文字でストーリーを書くという限界に挑む無謀っぷり。文字数増え気味な逆月にはキツいモノがあります。

結局二部までは一部と同じページでいく事にしましたが、三部（心が折れてなければ）からはページを分けるかもしれません。１００話越えたらさすがにみにくかろうと思いまして。
でもやっぱり最多文字数小説の座を目指す事も諦めきれない逆月です。

では二週間を使ってストックを作りますので、ぜひ黒鉄色のノクターン第二章『Ｒｅｑｕｉｅｍ　ｏｆ　Ｎｏｆａｔｅ（運命毒の鎮魂歌）』、多少のご期待を持ってお待ち下さい。

Ｐ・Ｓ　なんというかですね、設定やプロット、下書きなんか全てをメールで保存してやりくりしているんですが、未送信メールが１

００に迫る勢いなんですが……。
携帯でやりくりしている方々はどうやってるんですかね？パソコンを使えばよりスムーズにいくでしょうけど、この小説は暇潰しという区分で書いている為、出来るだけ携帯だけでやりくりしたいんですよね。
パソコンを使う場合、自宅……しかも自室オンリーでしか書けませんし。
小説用白ロム携帯を一台持とうか悩み中です。

第二章ネタばれ気味『ノーフェイト編』版練習予告編。別に読まれても多分障りはないかと思います。あくまでも練習用予告編。どこまでも練習予告編なので。
大筋が変わる可能性はありませんが、表現は変わるかと思いますし。それにこのネタだけでは状況も読めないでしょうから。
多少のネタばれも嫌だという方はバックプリーズ。

＊＊＊＊

「運命を冒す運命毒――ね。まさしくだな」

そう呟く彼の目の前には見慣れた人物が立っていた。
いや、『見慣れていた』というべきか。
その人物は背を向けて立っていて、顔も表情も窺えない。それでも彼にはその人物が誰か見間違うハズがなかった。
見間違いようがなかったのだ。

「……この世界に神はいない」

その人物を認識して、理解して、あり得ない存在だと意識して。

彼は躊躇いなく己の内側へと手を伸ばす。

自らの内側でその存在を主張する寂しい世界へと。

少し前まで……十日ほど前まで、四年以上も目を逸らしていた灰色（過去）へと手を伸ばす為に。

「認めず、在らず、その存在を否定する」

背を向けて立つ人物がそこにいる事。それがいかに異常な事かぐらいは、彼自身が一番分かっている。

でも、この世界では何が起こってもおかしくない事も、また分かっていたのだ。

この運命を冒す運命毒――運命を否定する『ノーフェイト』の領域では。

「紡ぎ手のみが世界にありて、カラカラと虚ろに響く歌を唄う」

目の前の人物は、見慣れた虚ろな黒髪黒瞳をゆっくりと向けてきて――記憶の中にある通りの絶望を溢れさせた色を向けてきて、小さく何事かを呟いた。

「彼の者は最果ての日までただ独り、暗き血を流し、赤き涙を落とす」

その呟きが何と言ったのかは当然聞こえない。聞こえるワケがない。

轟々と鳴る風が、自らの口をつくワードが、そして内から溢れてくる世界の侵攻が、それに耳を傾ける事を徒労とさせた。

――それでも……それでも、彼には『その人物』がなんと言ったのかが容易に想像ができた。

「無限の灰色世界にて、幾千もの刻を刻み、幾万もの孤独に心を砕く」

どうせ、『今だけだ』とか、『いつかはこんな事をしなくてもよくなるようになる』とか言っているのだろう……そう思えば、頭の片隅がチリチリと焦げるような感覚を覚える。

目の前に立つのが誰かなんて事は関係なく、自らの内側にある世界に怯えながら、『いつかは』とか『もうすぐ』とか考えて期待して、そうやって自分を追い込んでいるのだろう。

それはとても彼自身には馴染みのある考え方で……泣きたくなる。噛いたくなってしまう。

「その身はただ歯車を廻す虚空の歪み」

『その心は数多の世界を歪むる輪廻の鏡』

そして――

反響するかのように重なる同列のワード。彼特有で、彼固有の灰色世界を現す言葉の羅列。

それが二つ重なるように、吹き荒れる風の中に紛れる。

一つは彼自身の声で……もう一つは目の前の『幾分若いもう一人の彼自身』の声。

「故に紡ぎ手は今も独り」

『灰色の雪原にありて――』

重なって響くのは、虚ろで、濁って、落ち込んで、歪んで、壊れかけの彼の声。

最強最初のヴァンプと呼ばれた『新皇』の象徴たる一人の姿。

「――いつか在りし日の明日を唄う」

『――いつか在りし日の明日を唄う』

それが彼、シャクナゲの声と重なって――

世界には『二色の灰色』が具現した。

――幕間――（後書き）

あとがきは本文中にもあるように、超短編を掲載するか、はたまたあとがきのみによる連載をするか、はたまた人物紹介をするか致します。

次回アップは１４日、あとがきはスズカの人物紹介２。そこからおわかりかもしれませんが、序章はスズカとシヴァの邂逅から始まる予定です。

……三人称で納得いく話さえ出来れば。

あとがき連載案としては、少女Ｓの想像世界とか、マークに出て来ない黒鉄話とかを考えてます。まれにあとがきっぽいあとがきも入れますけど。

あとがきって本当に難しいですよね。あとがきだけで楽しめるような感じにしたい、とか思わなきゃ（主に逆月自身の暇つぶし面で）書かなくてもいいかと思いますけど。

2nd Prolog――運命毒と威厳の花（前書き）

はい、二章更新です。
従姉妹の結婚式やらなんやらで、更新は土曜日に。
すっかり忘れてましたよ、結婚式がある事なんて。

それはともかく二章。題して『Requiem of No－Fate』。
最初なので前書きもありです。三人称です。頑張って書いてます。
でもおかしな箇所があったら教えてやって下さい。
今回のあとがきは初っ端からですが『ノルンズアートで作られた造物（武器）について』。
よろしければ感想等頂けたら幸いです。
では、長々と続くでしょうが、二章もよろしくお願いいたします。

来週は『マークオブブラックメタル』の一話を上げる予定です。
こちらも思っていたより面白くなりそうなので、よろしくお願いいたします。

2nd Prolog――運命毒と威厳の花

――このページが最後になるだろう。お前の手元にこれが届く頃には、俺の命の残高は底をついてると思う。悪いな。

古びた一冊の日記帳は眠っていた。

黒い革張りのカバーと、かつての持ち主の手垢が僅かについたページ。年季を感じさせるそれは、長く陽に当たる事なくずっと眠り続けてきた。

もう書き手も読み手もなく、その存在を思い出そのものとして、ただ在り続けてきたのだ。

――最後の最後、こんな時にこういった書き出しはズルいかもしれない。卑怯だと思ってくれても構わない。

最後にどうしてもお前に頼みたい事がある。お前にしか頼めない事があるんだ。

これをちゃんと後に託さなきゃ悔やんでも悔やみきれない。死んでも死にきれない。

その最後のページの冒頭から滲むのは、深い悔恨と重い言葉の羅列。

もう持ち主がいなくなったそれは、親友であり相棒であり共犯者でもあった男に預けられ、ずっと眠り続けてきた。

持ち主が得てきた数多の思い出をその中に秘めて。

最後のページには滲むような悔恨を載せて。

――色々厄介事を任せて、散々振り回して、最後の最後まで日記という形を使ってこんな事を頼む俺を、お前はいつか恨むかもしれない。憎まれても仕方がないと思う。

だけど忘れないで欲しい。覚えていて欲しい。

もし俺がいなくなってしまう事で『黒鉄』が歪んでしまったのなら、お前は俺が遺した全てを捨ててしまっても全然構わないんだという事を。

全てを捨ててでも守りたいモノや、叶えたい想いが出来たなら、お前はお前として生きてもいいんだという事を。

俺が言った言葉の数々に嘘はない。それだけは真実のモノなんだと信じて欲しい。

最後のページにあるモノはたった一人にだけ向けた言葉の羅列。

そこだけは日記というよりも、苦い思いを残した遺文だった。

それまでのページには日頃何を思っていたか、どんな辛さや楽しさがあったか、どれほどの後悔があったかを書き残してある。確かにそれだけを見れば日記と言える存在ではあっただろう。

だが書き手のいない今では、それは後から自分で読み返す為の日記ではなく、あらゆる意味からも誰かに遺した遺文だと言える。

――だけど、だけど頼む。どうか頼む。お前がここを去る時にはどうかアレを壊して欲しい。他の全ては捨て置いてくれても構わない。全てを背負う必要なんかどこにもない。でもどうか『ノーフェイト』だけは壊していって欲しい。

ノーフェイト……。

その言葉を記した文字だけが明らかに震えていた。その事が何よりも、この日記を書いた人物の思いを雄弁に語っているだろう。その単語に不吉さを感じざるを得ないだけの苦渋が見て取れる。

――前に一度、あれの破壊に失敗した事は覚えている。あれの怖さも俺には分かるつもりだ。

でも親友、これはお前にしか任せられない。お前以外には出来ないと思う。

『四番』を持つアオイや、スズカでもきっと『あの災厄の一番』には届かない。持ち主がいないままでも、お前の『灰色』でなければあれは壊せない。

そのページがわずかに波打ち、文字が少しふやけて見えるのは悔恨の証だろうか。それとも最後の生命を振り絞る想いの欠片なのだろうか。

そして『ノーフェイト』という存在を、なるべく代名詞で補って書いてあるのは恐怖ゆえだろうか。

それは誰にも分からない。

書き手もなく、読み手が封印してきた隠された日記には、もはやその想いを汲み取る者すらいない。

――俺はお前と会えた事を後悔しない。こんなに早く幕を閉じる事を恨んだりもしない。犯した罪の重さや、残した贖罪の重みで俺はきっと地獄に落ちるだろう。でもそれは構わない。笑いながら無限の苦しみにも耐えてやる。

その筆跡には力強さがない。むしろその文字からは、どんどん力を失っていく様が垣間見えてすらいた。それでも自らの意志と『たった一人』に向けた真摯な想いだけは、ページを経るごとに強くなっていくように感じられる。

――それでもたった一つ後悔があるとすれば、自分の想いを裏切ってまで力を望んだあの時の事だ。たった一人恨む存在がいるとす

れば、お前と初めて会う時に『念の為』と自らに言い聞かせて、アレを作った時の臆病な自分だけだ。

今までの日記中では強さを見せた。優しさも見せた。おおらかさや厳しさも見せたし、甘さを見せた箇所もあった。

しかし、はっきりと弱さを見せたのは、この最後のページだけだ。はっきりと後ろを向いた記述を残したのは、最後の最後だけだった。

――頼む、親友。俺が遺してしまった災厄を、お前の手で刈り取って欲しい。『災厄（俺の弱さ）』を『自由（カブトの後悔）』のように眠らせて欲しい。

抑制器たる『威厳』を捨てて、お前が憎む『灰色』の力を一度だけ……たった一度きりでいいから、俺の過去の後悔の為に貸してくれ。

残酷な事を言っているのは分かっている。これを書いた瞬間から、間違いなくお前には俺を恨む権利がある。

でも、誰も近付かないように防衛本能を組み込んだ災厄は、その防衛本能ゆえにいつか甘い運命毒で人々を侵す。人々を取り込んで留めてしまう。

あれの破壊は、災厄の怖さを知っているお前にしか頼めないんだ。

そう締められて……少しだけ間が開いた。僅かに何かを逡巡するかのように。

――最後に。

『恭順』と『希望』を残す。『自由』を破壊して以来、ずっと造らないできた『力を秘めた造物』。それの四番目と五番目だ。

この二つはお前の為だけに残す。

『恭順』は今これを書いているこの時も、お前の為に戦ってくれている男の元に。

『希望』は、これからもきっと戦い続けるであろうお前の未来の為に。
悠莉、俺はお前を信じてる。お前には俺みたいな陳腐な幕引きは絶対に似合わない。
生きられるだけ生きろ。
死ぬその瞬間まで足掻け。
俺の生命を代価にする事で作った礎を、いつかは笑って越えていけ。
今日からお前が最初の黒鉄だ。お前はもう一人じゃない。最初の一人で、その後に続く者達がたくさんいる。
忘れるな、お前の命はもうお前だけのモノじゃない。
中途半端にこっちに来やがったら、ミヤビ達と一緒に追い返してやる。
お前なら俺の弱さを越えてくれるって信じてる。向こうに帰る時には、俺達の想いも連れていってくれるって信じてる。
いつか在りし日の明日は、お前のその目で見つけろ。
灰色の呪縛はお前自身の手で乗り越えろ。
俺達はもう十分背中を押してやったはずだ。あとは真っ直ぐに歩いていけばいい。
忘れるな。お前は一人じゃない。もう一人っきりの孤独な皇じゃないって事を……絶対に忘れるな。

そう締められて、そのページは終わっていた。
後悔と苦悩と悔恨と。
それらの後、最後の最後に大きな希望を残して。

――運命毒の鎮魂歌
Ｒｅｑｕｉｅｍ　ｏｆ　Ｎｏ－ｆａｔｅ――

2nd Prolog――運命毒と威厳の花（後書き）

シークレットクランからサルベージされた情報の追記。
『ノルンズアートで造られた武器について』

最初に造られたのは『災厄』と呼ばれるノーフェイト。戦う力を持たないアカツキが、万が一新皇が狂っていた時に備えて造った武器であり、自分が使う為に造った唯一の武器であるらしい。
災厄と呼ばれるのは、新皇に対抗する為に大きな力を付与されている為でもあるが、大き過ぎる付与の力に、使用者自身もその力の影響を受ける事が理由として上げられている。
すなわち変種特有の『力を使う事への衝動』を受けるらしい。
しかも並みの変種が受ける衝動よりも強かったようだ。
それを恐れた為、アカツキ自身がその力に魅せられないように、自律型の防衛本能までも付与されているとの記載があった。
その為か、その破壊ですらも容易ではなく、かつて宵闇のシャクナゲが一度破壊に失敗している。
その防衛本能、少しずつ滲み出す力の欠片を封じる為、現在では黒鉄第三班の本部地下深くに厳重に封印されているとの事。
なるほど、生活環境としては最悪な、地下の駐車場を本部とする理由の一端はそこにあったようだ。

二番目は『シャクナゲ』。シャクナゲという個人と区別を付ける為の型番として、『威厳』とも呼ばれる。
ノルンズアートで作られた全ての造物の内では、唯一付与された能力ではなく、使用する為に必要な代償を目的として造られたモノ。
型番の『威厳』とは、石楠花の花言葉から。

三番目は『リバティ』。
自由を関する武器で、現在では破棄されている。
『使うも使わないも自由。お前が必要だと思った時に役に立てば嬉しい』
そう言ったアカツキの言葉からリバティと呼ばれるようになったとの事。

四番目は『ファム・ファタル』。運命の女性の銘で呼ばれる。
『恭順』の型番は、その使用者であるアオイのシャクナゲに対する絶対恭順の姿勢から。
アカツキの死後、一年経った現在でも、シャクナゲの副官として、そして黒鉄の暗部として在り続けるアオイに、この戦う為の力を渡したアカツキは、相当見る目があったと言えるだろう。

五番目の『希望』については記載がない。
恐らくシャクナゲのみがその所在を知っているのだろうが、現時点ではそれを調べようがない。
希望の銘を持つそれが、その名の通りの存在である事を切に願う。

2―1・再来の花（前書き）

ざっと１０２４文字きっかりのショートショートがあとがきに。
きわきわです。ギリギリです。
やっぱり次からは、２話に分けてあとがきにショートショートを載せようかと思います。
もしくはショートショートは諦めて、あとがきナシでいくか。
なにしろあとがきとかお知らせを書く文字的余裕がなくなりますから。
今回のお題は『スズカとカクリ』です。
スズカとカクリ……ものスッゴい書きやすいコンビから入りました。
お試しですから書きやすい系で。

2―1・再来の花

少女は想像の世界に思考をうずめていた。
お気に入りのちょっと大きめな真っ白なニットの裾が、風にパタパタと流されるのを感じながら。

自分には望むべくもない世界、あり得ない世界、望んでやまなくても絶対に届かない世界。
届かないのならばせめて想像の翼を広げて、その世界へと思考をうずめる。自分にもそれぐらいの権利はあると言い聞かせて、彼女が構築した場所へと想いを馳せる。

こうしていられる間だけは全てを忘れられた。辛い事にも嫌な事とも全てに折り合いを付ける事が出来た。

――こんな世界は嫌だ！一人っきりは嫌だ！もう誰かに傷つけられたくない！

いくらそう声を枯らしても、どれだけそう願っても、ただ目の前にあり続けるのは敵ばかりで。ただ悪夢ばかりで。どこまでも絶望ばかりで。
その全てをただ拒絶し続けた。孤独の銀色で薙ぎ払い続けた。
その結果、より大きな敵に追われ続け、深い孤独まみれ、寂しさに溺れていった。

彼女の幼少期の記憶の中には、ただ一人ぼっちで山の中の廃村にいた頃の記憶しかない。

夏には北方に移動して、冬になれば雪の積もらない南に住居を移して、ただ誰にも傷つけられないように、そして傷つけないように、人目を恐れて生きてきたのだ。

ろくな食べ物もなく、ひもじい思いをした。服も外敵から剥ぎ取ったモノを着続けた。暖かい寝床なんて望むべくもなかった。

ただ一人で、死にたくなっても死ぬ事すら出来ないままで、ただその延長に惰性で生きていた頃の自分。それは彼女にとってとても悲しい記憶で、今でもたまに夢でうなされて目が覚める。

『……たった1つだけ？たった1人だけでもいい？そんな悲しい事言うなよ』

あの時、あの場所で救いを得られるまでは、そのあり得ない架空の世界だけが彼女の拠り所だった。そこだけにしか彼女の居場所がなかった。

家も家族も、友人や知人もなく、近寄る全てを拒絶するだけの現実は、とても痛くて悲しくて……どうしようもなく寂しい場所だった。

夢の世界に暖かさを求めるしかなかったのだ。

『――だって君はこんなに暖かい。こんなに暖かくて、小さくて……こんなに可愛い手をしてる。だったら俺が触ってみたくなっても、ちっともおかしくなんかないんだよ？』

あの時からだ。そう彼女――スズカは思う。

あの時から現実に違う色が加わった。辛いだけでも悲しいだけでもなくなった。みんながみんな敵ではなくなった。

「悠兄ぃは近所のお兄さん。私は幼なじみ。カーリアンは同級生……」

それでも今も変わらず想像の世界へと思考を広げるのは、やっぱり望んでいたモノに対する未練があるからだろう。そう彼女自身が理解していた。

学校に行ってみたかった。

友達と寄り道をしてみたかった。

買い食いをして、ウィンドウショッピングをして、買いたいモノを買うか財布と相談して、でもお小遣いまで我慢しようかと自分をなだめてみたりして。

たまに学校で文化祭……とかいうイベントがある時など、遅くまで友達と準備をして、結局帰りが遅くなった自分を、心配してくれた悠兄ぃが迎えに来てくれる。

そんな『普通』を夢想すると顔が自然にほころんだ。

きっとカーリアンは……現実でも唯一の友人は、そんな普通の世界でも兄の事が好きになって、自分は自分でやっぱり好きになって、いろいろとやきもきしあったり、相談しあったりするのだろうと思ったら、つい笑みが浮かんでしまう。そんな事を考えるだけで胸が高鳴っていく。

――やっぱり悠兄ぃは大人っぽい方がいいかな。カーリアンにはスタイルはかなわないし、背も負けてる。何より自分は奥手で口下手だ。

彼女みたいにはなれなくて、でも自分なりに頑張って。

そんな想像の中の自分を応援する事が大好きだった。普通を一生懸命に生きて、普通に泣いたり笑ったりする自分を想像すれば、その間だけは救われた。

きっとあの時、あの場所で彼に救われていなければ、今でもそん

な想像の世界だけが全てだっただろう。ひょっとしたらそんな想像の世界すらも失って、自分を見失っていたかもしれない。
そう思えば震えがくる。恐怖の余り泣きそうになる。

「私にも守りたいモノが出来た。今の私なら大丈夫、大丈夫。きっと自分を応援出来る」

砂塵が舞い上がる向こう、遠く地平線の果てから近付く轟音の群れを確認し、スッとスズカは立ち上がった。
空を見上げれば厚い雲に覆われた曇天が広がり、それに向けてスズカはそっと小さく息を吐く。

待ちくたびれたとは思わない。彼女がこの山都という街に来てから早くも3日が過ぎていたが、出来ればその待ち時間や労力は無意味に帰し、完全な徒労で終わって欲しかった。
誰も住人のいない家で雨露をしのぎ、一人っきりで味気ない携帯食をかじり、夜は湿気った毛布にくるまって眠る。
そんな日々を寂く思う気持ちだけはどうしようもなかったけれど、それでも我慢してこの街にあり続けた。
全てはこの時の為、この瞬間に備える為だと言い聞かせて、一人っきりのこの街で東を警戒してきたのだ。
ありふれた普通を想像して寂しさ紛らわせながら。

「シヴァ、通らせない、通さない」

そっと架空の世界に向けていた思考を現実へとシフトし、その両手を軽く広げる。
脳裏に浮かぶのは銀色の鱗粉を散らす『銀鈴』の世界。
そしてその世界へと意識を向けながら、目の前に適当に散らした廃材や鋼材に、拒絶の意志を向けると小さくつぶやいた。

「――嫌い」

それに合わせて目の前に積んでいた廃材はゆっくりと震えだす。
彼女がその白い手のひらを向けると、それらは弾かれたかのように飛び去っていった。
ただ真っ直ぐに、重力よりも強い『拒絶』の力に従って、捨て置かれた金属達は歪な形をした弾丸の群れと化す。

――『斥力』――。

彼女が操る力は、簡単に言えばそれだった。
正確に言えば、彼女は自らの体から対象に向けて斥力を放つ世界を構築出来るのだ。
それが鬼子と蔑まれ、忌み子と恐れられた少女だけの能力である。
その力は心底大嫌いなモノで、ずっと嫌悪の対象でしかあり得なかったのに――今でも吐き気を催すぐらいに憎いのに、今の彼女にはそれを振るう事に寸分の迷いもなかった。
この力が『銀鈴のスズカ』として、兄の妹としてある為に必要なモノだと思えば、簡単に我慢出来たのだ。
今も彼女の周りにはフワフワと舞う銀色の鈴が、響くような音と共に鱗粉を撒き散らしていた。彼女自身か、あるいは全くの同族である純正型にしか認識出来ない領域を構築している。
その異界を無感動に見つめながら、そっとその身から大地に向けて力を放った。
重力という当たり前の力を拒絶し、相殺する銀色の力を。
その身を無造作に虚空に浮かべられるほどの異端の銀翼を。

「空色は嫌い。私のくすんだ銀色には似合わないから」

そう呟いた小さな声は、先ほどまで想像の世界に微笑んでいたモノとは違い――熱の籠もっていない銀（金属）を思わせる冷やかな響きだった。

「動いた、か」

そっと双眼鏡を下ろすと、彼女は小さく嘆息を漏らした。

その腰まであるアッシュブラウンの髪を風に流し、やや垂れた愛嬌のある瞳を薄く細めると、その視線を裸眼でははっきりと確認しえない距離にいる銀色の少女へと向けたまま、小さく舌で唇を潤した。

そしてずっと東を見据えたまま動かなかった少女が、ようやくその力を解放させて東へと注意を向けた事に、彼女は小さくほくそ笑むと、大きな伸びをしてから立ち上がる。

銀鈴のスズカ――。

彼女が知る限り、黒鉄という組織の中で最も厄介で、誰よりも強大で、そんなステータスからは信じられないほどに可憐な少女を監視し始めて、すでに三日が経っていた。

山都という、関西圏では東からの勢力に対する防波堤代わりの都市を、たった一人で蹂躙し破壊した少女。その様子をつぶさに観察し、自分では勝てない事を改めて認識したからこそ、彼女は少女の動向を見張っていたのだ。

山都の軍勢を蹴散らした後、少女が東へと注意を払っていたのはすぐに分かった。なんの為にかは分からなくても、東を警戒している事だけは分かったのだ。

そしてつい先日無線から流れてきた情報……関西軍の将軍が暗殺

されたという情報を聞き、すぐに今の状況が飲み込めた。そして少女が何をそこまで警戒しているのかも。

それでもより確実を期す為に、東からの勢力が進んでくるまで少女を見張っていた。

昔からその少女をよく知っていたからこそ、彼女が東に釘付けにされ動けない状況になるまで待っていたのだ。

「マスターシヴァと新皇の一角。さてどっちがより人外なのか……。興味は尽きないところだけれど」

そう一人ごちながら、この三日間、銀色の少女を監視する為の根城としていた廃ビルの屋上を後にする。

本当ならば、変種の皇同士のぶつかり合いを、高みの見物とばかりにギャラリーを決め込みたいところではあったが、それは彼女の本懐からはかけ離れた単なる好奇心によるモノでしかない。それを自覚していたからこそ、この国では誰もが興味を惹かれるであろう好カードに、ためらう事なく背を向ける。

彼女には欲しいモノがあった。

ずっとずっと憧れて、渇望して、狂おしいほどに求めたモノがあったのだ。

それをスズカという少女は持っていない。マスターシヴァも持ってはいない。

だからこそ、最強の変種二人のぶつかり合いに、特に未練などを持たないまま背を向けたのだ。

「スズカは今近くにいない。アカツキもすでにいない。ミヤビもいないし、カブトじゃ手に入らない。やっとこの時が来た」

ずっと欲しくて欲しくて仕方のなかったモノを持つのは、たった一人の男だった。

かつて少年だった男。黒髪黒瞳の変種。かつては絶望のどん底、闇の一番深い場所にいながら、今では強力な光を放つ存在。

そんな彼がかつて持っていて、今では封じられたそれを求めて、彼女は西へと向かう。

ほんの一年とちょっと前に後にした、今では『廃都』と呼ばれる故郷へと向かって。

その所有者たる少年が今もいるであろう、懐かしき場所を目指して。

「……『あれ』は私にしか似合わない。ねぇ、シャク、あなたがいらないのなら、私にくれてもいいでしょう？」

一度は諦めて、未練を引きずりながらもなんとか納得して――納得したつもりになって、それに背を向けたけれど、彼女は帰ってきた。

諦めきれない思いに引きずられて。

捨て切れなかった未練に手繰り寄せられて。

関西に動乱の火が宿ったという情報を聞いた瞬間から、彼女は抑えてきた想いに引きずられた。欲しいモノに手を伸ばしたくなった。使われずに封じられてきたモノだからこそ、諦めきれなかったのだろう。そう彼女自身、自分の心情をそう自覚していた。

誰の手にも渡っていないならば、ずっと想い続けてきた自分こそが、『アレ』の所有者に相応しい。

そう自分自身に言い聞かせて、再びかの地へと舞い戻ってきたのだ。

「シャク……シャク、今度こそ渡してもらう。今度こそ、力ずくでも譲ってもらうわよ」

そう呟いてその場を後にする。

彼女の髪と同色のその瞳に狂気の色はない。あるのは底知れぬ深さを持つ執念だけだ。

一年以上も抱えてきた未練が一気に燃え上がったかのように、その瞳には深く暗い色を持った炎を宿していた。

2―1・再来の花（後書き）

私はスズカが嫌いだ。いや、嫌いというよりも苦手と言った方が正確だろうか？
私をどこか子供扱いする雑草野郎は、彼女を指してこう言った。
『あいつは天才だよ』と。
そしてこうも言った。
『あいつがちゃんとした環境で学んでいたら、間違いなく歴史に名前を残しただろうな。俺が先生をして、後は独学で学んだだけであれなんだから』

私はスズカが苦手だ。
茫洋とした雰囲気を持ちながら、誰もが注目せざるを得ない空気を持つ彼女が、どうしようもなく苦手だ。
私の大好きな彼女は言った。
『スズカってばさ、なんか嘘とか見抜いちゃう雰囲気があるんだよね。見透かされてるって言うか』
と。
嘘を吐くのが下手な彼女ではあるが、人を見る目は間違いなく確かだ。
あの透き通るような黒灰色の瞳は、私が裏で動いている時ほど見透かすように見つめてくる。
ジッと。ただ真っ直ぐに。私の思考の奥底を見つめるように。
そんな彼女の視線に屈して、行動方針を変えてしまう私が最悪だ。

私はスズカが羨ましい……のかもしれない。

彼女と最初に出会ったのは、黒鉄が七班体制になる前の事。
当時から黒鉄の顔として名の売れていた、今では『黒鉄』の名前を冠する男の陰から、ちょっとだけ顔を覗かせていたのが彼女だった。
ビクビクと、オドオドと、どこか落ち着かない様子で、私と私の大好きな彼女を見ていた。

綺麗な少女だと思った。
私が今まで見た中では、誰よりも美しかった。
私が大好きなカーリアンよりも可憐で美しかった。
そこからして私には悔しかった。
カーリアンは人間味のある美しさだ。躍動感のある美だ。
対してスズカは人間離れした美しさだ。幻想的とすら言えた。
卑怯だと思った。ズルいとも。
その上彼女は、私達とは違って頼れる保護者が側にいる。その男の存在感に彼女は守られている。この街で彼女を『化け物』だと蔑む者は誰もいない。

もし彼女がただ守られるだけの存在――見た目通りの存在なら、ここまで彼女に対抗心を持たなかっただろう。
彼女がただか弱い存在であったのなら。
彼女はその保護者である男よりも強く、それでいてその男には従順。
そこが私とは相容れない。

私はスズカが大嫌いだ。とても苦手で、誰よりも相容れない。
きっと私にとって対抗すべき存在としてあり続けるだろう。
でもそれは、手を取り合えないという事ではないのかもしれない。
だってある意味誰よりも彼女を認めているのは私だと思うから。

2―2・狂人

「あ～ぁ、つまんないなぁ」

そう小さく呟くと少年は大きく溜め息を漏らした。やや小柄なその体はどこまでも華奢で、ライトブラウンの長髪は女性の髪のように細くなめらかだ。

その髪と真っ赤なスカーフを風と慣性で後方へと流しながら、そっと髪と同色の瞳で曇天の空を見上げていた。

今にも冷たい雨が降り出しそうな厚い雲に覆われた空を。

「やっぱさ、美味しいモノは先に食べちゃわないとね。誰かに取られてから後悔するなんて間抜けな事極まりないしさぁ」

ノロノロと走るオープン仕様のキャデラックの後部座席に、その華奢な身体を沈め、鈍い光沢を持つ重厚な革張りのシートにその頬をくっつけながら、誰に言うともなくただボヤくように独りごちる。

黙々と運転に従事する男も、助手席に座る大柄な女も、少年の声には返事を返さない。

助手席の女はただ雨が降り出さないかと心配するように空を仰ぎ、運転手は緊張に頬をひきつらせたまま前を見据えている。

空を見上げる女性はともかく運転手である男は、少年の声が聞こえると同時に大きく体を震わせ、額を流れる粘っこい汗をハンカチで何度も拭っていた。その顔色は青を通り越して白く濁り、歯の根も合わないほどにガチガチと震えている。

そんな男を、少年も女も気にした素振りすら見せず、ノロノロと走る車のシートに身を預けていた。

三人が乗る磨きぬかれたブラックパールの車体は、後方に数十台規模の車の群れを引き連れて一路西へと向かっていた。

砂塵を巻き上げ、排気ガスを撒き散らしながら、我が物顔で道いっぱいに広がって走る車達の群れの長がごとき威容で。

その群れの中には大型トラックもあるし、軽トラもある。中型バイクや原付までである。一昔前なら間違いなく警察官により取り締まりを受け、集団暴走行為として検挙されていたであろう。

ただ当時の暴走族とこの集団が一線を画す点を上げるとすれば、警察という機関がすでに力を持っていない事と、この集団が反社会的行為をする集団ではなく、この集団こそが一地方のヒエラルキーのトップである『為政者』のモノであるという点であろう。

先頭の車以外には、それぞれ黒い逆十字と斜めに傾けたハーケンクロイツを合わせたようなペイントがボディに施され、その下に小さく記された三桁からなるナンバリングが刻まれていた。

先頭のキャデラックには、黒地に白で描かれた同じ柄の旗。

その下のナンバーは『００１』。

「マスター、北陸の連中も南下を始めているようですが、いかがされますか？」

「あーはん、どうせ最後は関西を半々ってトコで手打ちになるんじゃない？向こうは古都、こっちは山都。後は早いモノ勝ちで取ったモン勝ちってトコかな。その辺りで向こうから停戦を申し込んでくるんじゃないかなぁ。中部の新羅もいろいろとうっさいしさぁ、長尾（向こう）としても僕と戦いたくはないだろうしね」

その少年は『マスターシヴァ』と呼ばれていた。東海三県と関西

東部を勢力圏とする勢力の支配者（マスター）シヴァと。
その紋様こそが彼のシンボルであり、ナンバーこそが組織での序列そのものだった。
彼の率いる東海軍の車両のみからなる部隊は、緩やかに……でも真っ直ぐに関西の中心へと軍勢を向けて走っているのだ。
『狂人』とも呼ばれる指導者であり、地方最強の変種にして純正型である少年に率いられて。
同じく暫定政府として機能し、関西西部地域を治めていた勢力『関西統括軍』が瓦解し、その影響から動乱に揺れる関西西部地域へと勢力を伸ばす為に。
その手始めとして、彼らは動乱の余波を食って軍勢が撤退したらしい『山都』へと向かっているのだ。

「でもさぁ、あんまやる気出ないんだよねぇ。坂上がいない関西で僕らに抵抗するヤツなんていないだろうしさぁ。近衛の連中もいないんでしょ？」

「坂上がやられて、左右の近衛が生き残っているとは思えませんね」

抑揚のない女性の言葉にシヴァは軽く肩をすくめてみせる。

「……やっぱそうだよねぇ。こんな事になるんなら、坂上はさっさと食っちゃえば良かったよ」

「マスター、退屈しのぎの八つ当たりは結構ですが、部下にはなるべくお止めくださいね。出来れば無抵抗な者にも止めて頂きたいのですが……」

空を見上げたまま淡々とそういう女性の声は、あくまでも抑揚のないモノで……後部座席に座る少年は、それに対してつまらなさそ

うに鼻を鳴らした。

「君が僕に指図するなよ、それから八つ当たりって言うな。カエラ、別に君がストレスの捌け口になってくれてもいいんだよ？」

「ごめんこうむります」

「だったら口は出さないで欲しいな。僕はやりたいようにやる。殺したかったら殺す。目に付いたから殺す。気分が良くても殺すし、悪くても殺す。雨が降りそうだから殺す。太陽が眩しいから殺す。それが僕という生き物の在り方さ」

――それぐらい知ってるでしょ？

そう言いたげにルームミラー越しにカエラと呼んだ女性を見てから、少年はさらに言葉を続ける。

「君らはその死体の山の中で、今まで通り権力や利権を勝手に貪りあえばいい。それがお互い気楽で後腐れないでしょ？僕は誰かを殺す事に大きな理由を求めない。君達も理由は求めちゃいけない。代わりに君達が僕の力をどう利用して何をしていても詮索はしない」

そう歌うように口ずさむと、血に濡れたように赤い舌で、その頬に刻まれた歪な形をしたファイヤーパターンのタトゥーへと舌を這わす。

「まぁ未確認だけどさ、向こうには僕の顔に傷をくれた紅（あか）もいるみたいだし、案外暇はしないかもね。しなかったらいいと思わない？暇だったら暇だったで死体の山が増えるだけだしさ」

「……死にたがりの紅、ですか。確かに彼女も厄介ではあるでしょ

うが、他にも少々気になる情報もございます。こちらも未確認ではございますが、マスターは関西に関東を抜けた皇もいるとの噂をご存知でしょうか？」

女の言葉にその切れ長の瞳をスゥーッと細めると、少年は思案を巡らせるように空を見上げた。

「あん？関東を抜けた、ねぇ。聞かないなぁ」

その気だるげな瞳には、感情らしき感情は浮かんでおらず、まるで今の天候のような鈍い輝きを放っている。

「でも抜けたってからにはひーくんかな？壊れちゃったって聞いてたから、どっかで首でも括ったんじゃないかと思ってたんだけど」

「もし、噂が事実で、新皇の一角が関西にいたとすればどうされます？念の為に連絡を入れて今からでも『アンチ』を呼びよせますか？」

「別に必要ないよ。もしひーくんがいるんだったら、数はいくらいても全然関係ない。アンチの数だけ死体が増えるだけさ。何しろあの『灰色』は、多数を相手に殲滅戦行う事においては最悪の災厄だからね」

「では――」

「だねぇ。ひーくんがいたら結構楽しそうだよね。だからさぁ……」

そこまで無表情のまま言葉を交わし――少年はそっと前に座る女性の首元へと手を伸ばした。

その端正な顔立ちとしなやかな体付きの中では、唯一歪で異形のごとき鉤爪を持った角張った手のひら……異様を現した『証』である指先をその首元へと押し当てる。

「……あんまり勝手はしないでね？君は優秀だから、僕の言いたい事ぐらい分かるでしょ？」

「了解しました。変わらずアンチクルセイダー（逆十字軍）は待機と伝えておきます」

その突きつけられた指先に、当の女性ではなく隣の運転手が息を飲んだ。人の首ぐらいならあっさりと握り潰しそうなその鉤爪は、どこまでも異様で、凶器そのモノにしか見えない。

それでもカエラ自身は気にした様子も見せず、再び空へと視線を向ける。

その白目との境が薄い、薄銀色をした瞳で虚空に浮かぶ何かを見つめるかのように。

そして何事かを呟くようにその口元をもごもごとさせながらも、その首筋にあてがわれた異形には目もくれない。

「ひーくんがいたら楽しいよね。ヒャハッ、結局なんだかんだで遊んだ事はなかったしさぁ。僕の力とあの殲滅世界、どっちが偉いんだろ、だろ」

「……連絡は付けました。アンチクルセイダー半数は中部との境界線に、残る半数は関東方面の境界線にて待機。以上です、マイマスター」

ただ空を見上げながら、ぶつぶつと言っていただけのカエラのその言葉に、シヴァは満足したように小さく笑うと、その首もとへと

あてがっていた手を引っ込める。そして再び後部座席にその身を沈めるようにして、曇天の空を見上げる事を再開した。

「ありがと、『連絡役』。でもちょっとノリが悪いかなぁ、カエラは。ま、おしゃべりなだけのヤツよりはいいけどさ」

――おしゃべりは殺す。口だけしか取り柄がないのなら、そのよく回る舌を引き抜いて殺す。小うるさい口を引き裂いて殺す。

そう歌うような声音で呟きながらマスターシヴァは笑う。

口元を可笑しそうに、心底愉快げに歪めながら。

それでも前方に見えてきた関西東部の要衝、『山都』を見据えたその瞳は、あくまでも無感情なモノでどこまでも機械的だった。

シヴァが手を引くまで無表情を崩さなかったカエラではあったが、別に彼女とて狂人と呼ばれるマスターが怖くないわけでも、自分は殺されないと高を括っていたわけでもない。

それどころかこのマスターは、下手を打てばあっさりと自分すらも殺すだろう、そう思ってもいた。

それでも無表情を保っていられたのは、単にマスターシヴァという少年の事を彼女が深く理解しているからに過ぎない。あっさりとうろたえるような弱さを見せれば『弱いヤツは殺す。弱いから殺す』と、理由にもならない理由でこの少年はその牙を剥くだろう。

今までに何人の側近や側仕えが殺されたか、何人の小間使いが精神的な緊張の余り発狂したか。その数はずっと側で『連絡役』をしていたカエラでさえも数えきれない。

周りが何をしていようが気にもしない。殺したくなったら殺したい存在を殺すだけだから、周りは別に気にならない……そんな少年が一大勢力のトップに立てたのは、一重にその純正型としての力の強大さゆえでしかないのだ。

その側近達は、狂人の興味を必要以上惹かないように精神を常に

すり減らし、その代償として利権を得ているというのが、東海地方の政府の内情だったりする。

――まぁ見合っただけの代償なのかと言えば、ちょっと疑問があるところだけど。

息も荒く油汗を流す運転手を見ながらそう思い、

――彼もそろそろダメか。

そう溜め息混じりに今度は意味もなく空を見上げて――

「マスター！」

カエラは真っ直ぐにこちらに向かい飛ぶ何かを『視た』。次から次へと凄まじい勢いで迫る『何か』。

遥か彼方から迫るそれは、砲弾の一斉射を上回るほどの勢いでありながら、砲弾にしては歪な形をした力の群れだった。

その内の一つ、一番間近まで迫ってきたモノが、相変わらず殺す殺すと歌うシヴァと、蒼白な顔色の運転手、そしてカエラが乗ったキャデラックを真っ直ぐに目指しているのを確認し、彼女は後ろに声だけをかけると、それ以上は顧みる事なく助手席から飛び降りた。

カエラのかけた声の意味を理解したのか、それとも彼自身も何かを感じていたのか、シヴァは相も変わらず無表情に歌いながら、前方を確認しないまま慣性に任せて後方に転がり降りる。

「あーはん、エラく力持ちが投げつけた、とかぁ？力持ちは殺す、筋肉質は見ていて気持ち悪いから、肉を全て削ぎ落として殺す」

直後、きれいにクルッと回転し、足から降り立ったシヴァの前で、

グシャと鉄骨により潰される車体。直撃し肉片となった運転手は最後まで状況を掴めないままでも、狂人の車を傷つけない事に心を砕いていたのだろう、その片手は潰れた体から離れた後も、歪んだハンドルにかかったままで鮮血に塗れていた。

「ご無事ですか、マスター」

「一人だけ先に逃げといてご無事もないでしょ？カエラは相変わらず面白いなぁ、面白いから今は殺さない」

そう笑うシヴァを囲むように、後方を走っていた車達が止まった。それを少年は軽く見やってからさらに歌う。

無感情に、無慈悲に。

「ここは停車禁止ぃ。この辺りの天気はどうやら『曇り時々鉄骨、たまにコンクリートが突進してくるでしょう』……みたいだよ？バックしても間に合わないだろうから、運の悪いヤツは殺されろぉ」

「……くっ！総員――」

退避と繋げる間もなく、空からはあらゆるモノが降ってくる。

コンクリートの砕片から始まり、鉄骨、レンガ、車のドアやら屋根の瓦、さらには大型トラックのタイヤまでが、ごちゃ混ぜに降ってきたのだ。

先頭を走ってきたキャデラックは、鉄骨によりスクラップと化した後も、ひたすらに異様な雨に打たれ続け、金属の摩擦により生まれた火花が燃料に引火したのか爆発炎上し、周りの車群も降り続ける重量級の廃材達により、次々と廃材の仲間入りを果たしていく。

「当てずっぽうに投げてるのかなぁ？メチャクチャだよね～、グチャグチャだ～」

そんな光景の中心でもシヴァは歌い、可笑しそうに声を上げて笑う。無感情な瞳に僅かな喜悦を混ぜて。

「重力を操るぐーちゃんならこれくらいの真似、軽いモンだろうけどぉ、関東にいるはずのぐーちゃんがこんなトコにはいないよね～。じゃあ誰かなぁ～？あの車、結構お気にだったのにさぁ」

「マスター！一旦――」

なんとか回避に成功した者、運良く砲弾の雨に巻き込まれなかった者達をまとめながらのカエラを尻目に、シヴァは興が乗ったかのように一人先へと歩き出す。

「ハイハイ、みんなは下がってよぉし！多分半数くらいミンチになっちゃったみたいだけどさぁ」

「マスター！」

「『ここは俺に任せて先に行け！』とかとかどう？なかなかパターンじゃない？もしくは『僕を止めたきゃ倒すしかないよ』とか。……どっちがカエラの好みかなぁ、かな？」

鈍く光る眼光をチラッとだけ後方にやり、試すかのように女性を見やる。

そこには苛立ちも怒りも何も垣間見えず、だからこそこの少年の異質さがよく見てとれた。

「はぁ、では一旦下がります」

「あははっ！賢いヤツは殺さない～、使える間は便利だからぁ～」

どこまでも自由奔放なシヴァの言葉に、カエラは諦めたように溜め息を吐きながら、いまだに喧騒醒めやらぬ生き残りをまとめ、後方へと下がっていく。

ここで自分の我を通せば、このマスターは間違いなく癇癪を起こすだろう。そしてその癇癪は、さっきの暴悪な飛来物などよりも多大な被害を自軍にもたらすに違いない……そう分かったからこそ、カエラは素直にその言葉に従ったのだ。

「賢いから君は好き。賢いうちは殺されない」

そう歌うように言いながらも、その視線は真っ直ぐに山都の方向を向いていて、後退していく連中を見向きもしない。

「面白いのかな～、一発芸にしちゃ気が効いてたけど、あれっぽっちじゃダメダメだよ？同族の彼女ぉ」

そう言った少年の視線の先にあったのは一つの人影だった。前方の虚空に浮かぶ一人の銀色の少女。

やや長めのウルフボブは灰銀色で、それを包むニット帽は汚れのない純白。同色のファーを風に流して佇む、シヴァと同年代の少女が、どこまでも怜悧に少年を見つめていた。

服装はチャコールグレイのデニムの上に、裾の長いシャツ。その上からはノースリーブの黒いジャケットを羽織っている。

どこまでも服装に頓着のなさそうな雑な着こなし方の中で、そのファー付きのニット帽だけがやたらと可愛く見える。

「近衛……じゃないよねぇ。アサヒはもう壊れちゃったらしいし、あいつの力じゃさっきみたいな真似は無理だろうしさぁ。他に純正種はいなかったハズだけど君は誰かなぁ、かな？」

「……黒鉄」

「黒鉄、ねぇ。あぁあぁ、じゃあ君が坂上を殺しちゃったのかなぁ？見たところやってやれない事はなさそうだしぃ、坂上の力との相性も悪くなさそうだしさぁ」

黒鉄という名前に、愉快げにシヴァはその相貌を初めて楽しげに歪めた。

鈍い光を放つその双眸には、何か得体の知れないモノが燃え上がる。

関西発祥の対ヴァンプレジスタンス『黒鉄』。

この連中がいるが為に、関西圏ではレジスタンス組織が多いという事は、ちょっと世情に詳しいモノならば誰でも知っている事だった。

街一つを関西軍より奪還し、要塞化して反政府体制を取っている点からすれば、レジスタンスというよりは、一つの小さな国家に近いと言ってもいいだろう。

その組織最強と目される変種の男が、地方最強の純正型である『関西の将軍』を暗殺しようと企てた事や、関西軍のナンバー2だった純正型、『近衛・旭』を半死半生の段階まで追い詰め、関西軍を抜ける理由を作った事は、かなり大きなニュースとなって全国を駆け抜けたほどだ。

その実力やネームバリューだけではなく、反体制的な組織に属するという点を警戒して、関西圏以外の地方でも、その男の首にはかなり高額の賞金がかけられている。

その男が所属する『黒鉄』という組織の連中が、今までずっと関西統括軍とぶつかり合ってきた事や、今回の関西動乱の原因となった事をシヴァは思い出した。

それでも彼は無造作にテクテクと歩を進めていく。

「シヴァ、芝浦、東海の始祖にして、関東を追われた狂える純正型……だよね？」

彼女はシヴァの言葉に答える事もなく、そして返事を待つ事もなく――近づいてくる少年へ向けてゆっくりと集中を高めていく。

虚空を浮かぶその細い体を風になびかせながら、彼女はスッと無造作にその手をかざした。

途端、広がっていく異界をシヴァは視る。銀色の鈴が少女を中心に弧を描き、その鈴の鈴が広がった分だけ違う色を持った領域が広がっていく様を。

それはまっさらな銀色の世界、雪原を思わせる白銀の世界だ。

銀色の鱗粉が、厳かに響く鈍い鐘の音に合わせて震え、明確な意志を持って、シヴァの歩みを阻害しようと力を放つ。

「あはっ、綺麗な世界じゃん。銀色の鈴がクルクル～って。だから殺す、綺麗だから綺麗に殺す」

それに対抗するようにシヴァも集中を高め、大きく舐めるように舌を唇へと這わせていく。

「マスターシヴァは……嫌い！」

しかし、マスターシヴァがその力を展開するよりも前、力に阻害された歩みを再開するよりもさらに早くに、不可視の力がその身を襲う。

それは風に押しやられるようなモノでも、物理的な何かがぶつかってきたワケでもなく、まるで後ろに引っ張られているかのような――後ろに重力源があるかのような力の奔流。それに見事にシヴァは吹き飛ばされ……そんな流されるシヴァよりもさらに早い動きで銀色の影が肉薄する。

「……大嫌い」

そして態勢の崩れたシヴァの腹にそっと拳を当てると、なんの力も加えた様子がないままで、さらに大きく後方へと吹き飛ばす。

後方に吹っ飛ばされながらもなんとか態勢を取り直したシヴァの口元からは、多量の赤黒い鮮血が滴り落ちる。それを特に気にした素振りも見せないままで、僅かに驚いたようにその目を見張った。

力を込めた様子どころか、触れたか触れていないかすらも微妙な、攻撃とも言えない接触に過ぎなかったのに、少女はマスターシヴァを吐血させるほどの勢いで吹き飛ばしたのだ。

そしてそのままさらに追い討ちをかけるワケでもなく、彼女は軽く距離を取ると、サッと地面に手を付き、転がったいた石ころを数個軽く放り投げた。

「……嫌い。大地のカケラは大嫌い」

続いてそんな小さな呟きと共に、彼女は軽くその右手を掲げる。膝を付きながらもなんとか態勢を保っていたシヴァへ……そして先ほどそちらに軽く放り投げた石ころへと向けて。

その呟きと銀色の領域は鈍い音を増していき、その音に触発されたかのように、数個の石ころは弾丸を上回る速度を得て真っ直ぐにシヴァへと飛び向かう。

一発目は外れ、二発目は軽く身をよじるだけで服を引きちぎるに留まり、直撃しそうな三発目だけをシヴァはこともなげに異形の手

で受け止めてみせる。
苛烈な速度で飛ばされ、摩擦熱で軽く熱せられるほどの力が込められたただの石ころを、その歪な証であっさりと受け止めてみせたのだ。

「あーはん、やるぅ。痛い痛い。しかも陽動を交えて、最後の一発だけは顔面直撃コースとか容赦ないねぇ。当たったらザクロだったかもぉ。脳漿飛び散ったりとかぁ」

そう言って受け止めた石ころを放り捨てると、軽く口内に残った血反吐を吐き捨てる。あれほどの速度、力が込められた弾丸を受け止めても、全く傷一つついていない手のひらを見せつけながら。

「でっもぉ、残念無念、こんぐらいの力じゃ殺せない。これぐらいじゃ届かない」

「……あなたの力はかなり特殊なモノだと聞いている。今の攻撃を防いだのも、あなたの世界の理のおかげ?」

しかし少女もそれぐらいなら出来て当たり前、と言わんばかりに気にした様子を見せず、真っ直ぐにシヴァへと視線を返した。

「そりゃ秘密だよ。話したらつまんないでしょ?そっちは多分質量加速……じゃないね、多分斥力かな?最初は重力の親戚みたいなモンでも使ってんのかと思ったけどさ、それじゃ僕を吹っ飛ばしたやり口がちょっと説明つかないし」

「……秘密」

あくまでも、そしてどこまでも様子の変わらないシヴァに、少女

は小さく溜め息を漏らす。
さすがに彼女も、これぐらいでかの『狂人』を仕留められるとは端から思ってはいなかった。
同じ変種、純正型、地方によっては純正種と呼ばれる同族。
中でも皇、始祖とも呼ばれる連中と向かい合うのは、実は彼女にとっては初めての事だった。
しかし、そういった連中がどれほど異常な力を持っているかという事はよく知っていた。
人の変種の中でも最強の種、『現実とは違う理を持つ異世界を現せる』純正型として生まれた彼女。純正型の中でも『あらゆる物質、力の拒絶』という、強大な能力を秘めた領域を作り上げられる彼女は、数ある純正型の中でもかなり高位の能力を持っていると言えるだろう。
しかしその弊害として、『互角以上の敵と相対した事がない』という経験不足が付加される事は、ある意味当然だと言える。変種と既存種が対立する現状で、彼女が今まで出会ってきた強い力を持つ変種は、全て味方側の人間だった。
今目の前にいる少年のように、敵だとはっきり言える立場の相手とこうして向かい合う事はなかったのだ。

「私はスズカ。黒鉄第七班班長、銀鈴のスズカ。ここから先には行かせない」

それでも自身の内から這い上がる不安を押し殺し、『拒絶の理が支配する領域』を、より強く強固に広げていく。
そして震えそうになる心を叱咤して、ことさら冷静な声音を装って目の前の同族へと死の宣告を告げた。

「シヴァだよ。ちなみにこの名前は、ヒンドゥーの破壊神の方じゃなくて、マヤの死神シバルバーからだからさぁ、そこんとこはヨロ

シクぅ。あっ、これは一応こだわりってヤツね」

――ほら、シバウラーって響きも似てるしぃ。

滴る血も、広がる異界すらも気にせず、マスターシヴァは笑う。

口元だけを歪めて嗤う。

「君は綺麗だから殺す、強いから殺す、殺したいから殺す、雨が降りそうだから殺す、雨が降ったら濡れるから殺す、雨がやんでも太陽が出るから殺す」

そしてシヴァはゆっくりと地面に手を付き、空に向かって吠えるように顎を突き上げた。

己の領域――マスターシヴァとしての世界を広げる事なく、ただ狂喜だけを空間に現していく。

その奇形の腕の先……左右にある五対の指先にある爪を、それぞれ鈍い赤色を持つ鉤爪へと変貌させる。

「殺す、殺す。殺されたくなかったら殺せ、殺せ。死にたくなかったらただ殺せ」

そう歌うように呟いて、シヴァはその先端が赤く染まった異形の腕を持ち上げた。

その細い体躯を大きく反り、空に向かって甲高い狂笑を振りまきながら。

2―2・狂人（後書き）

あとがきストーリーはナシ、というより出来ませんでした。
2話に分ける段階にすらなりません。
つまり書けてません。締めが難しいんですよね、ショートストーリーは。
シバウラーさんがなんかキャラ薄い気がしたとしたら、なかなか鋭いです。
この方は一応色んな人と面識がある設定ですが、その辺りも含めて今後を期待してくださいませ。
キャラ薄いのは三人称にいまだ慣れないから……じゃないと思います……よ？多分。
次回はノクターン本編を来週にアップ予定です。
……はい、マークの次話が書けていないのです。

2―3・三番目の憂鬱

「楽しそうで結構な事だ」

戦場を離れる直前に見た、白いニットをかぶった少女と戯れる主を思い浮かべて、カエラは小さな嘆息を漏らした。

少女はカエラから見ても圧倒的な存在感を放っていた。

可憐そのものといったルックス。その幻想的とも反則的とも言える容姿からすれば、アンバランスに感じるほど雑に着こなしたその服装すらも、ある意味ギャップとして好意的に受け止められなくもない。

間違いなくとんでもない美少女であり……恐らくは純正型。そう、純正型特有の雰囲気をカエラは少女に感じていた。

いわば絶対的存在としての強烈な在り方を、カエラは少女に見いだしていたのだ。

別にカエラは強者として、その少女に同じ強者の匂いを感じたワケではない。

むしろ彼女は変種としての能力によって、知覚能力とコミュニケーション能力が優れているだけで、戦闘という行為に関しては全くの素人を自負しているぐらいである。

そんな彼女から見ても、その少女のスピードは人間離れしていた。

手をかざすだけで巨大な質量を持つ物質を投げ飛ばしていたし、手を軽く当てるだけでマスターを跳ね飛ばしてすらいた。

あの『狂人・マスターシヴァ』をだ。

その小さな拳で平坦な道をクレーター群に変え、蹴り足の軌跡でアスファルトの大地を刻んでいく様は、異様な光景でありながら畏敬の念すら感じるほどだった。

そういった点から見ても、並みの変種であり得るワケがない事は明らかだったが、その少女の放つ存在感そのものが、彼女の心に焼き付くほどに異常に感じられたのだ。

それは『深く視る』事に秀でているからこそ、分かりたくなくとも分かってしまうのかもしれないし、マスターシヴァをよく知っているからこそ、その存在感を感じとれたのかもしれない。

ひょっとしたら、最後には絶対の勝利が約束されているヒーローに憧れる子供のような、あるいは捕食される側であるか弱いインパラなどよりは、牙を持つ捕食する側であるライオンに好意を抱くような、強者に対する純粋な憧憬にも似た感情を抱いているからこそ、分かってしまったのかもしれない。

「マスターのストレスを残らず発散させてくれれば……とは思うが、さてそこまではどうかな？最近は中部との小競り合いも減ったし、さぞイライラを溜め込んでいた事だろうしな」

しかし、そんな事を思うとはなしに考えながらも、彼女は冷静に状況を判断して小さく肩をすくめてみせた。

戦いの余波はすでにその視界に映ってはいない。視力で見える範囲からはすでに遠く離れてしまっていた。

もちろん大打撃を受け、混乱を来した仲間達を避難させるという目的もあったが、一番の理由はそれではない。

近場にいては『マスターの遊び』に、自分を含めた仲間達全てが巻き込まれてしまう事を懸念したからである。

あのマスターならば、それこそその場の勢いだけで……そして少女との『遊び場には邪魔だから』というだけで、自軍を巻き込んできてもなんらおかしくない事を彼女はよく知っていた。今まで起こ

った他地方との勢力争いでも、敵方に殺された人間よりも、下手をしたらマスターの『癇癪』の犠牲になった人間の方が多いんじゃないかとすら考えているぐらいだ。

「あの少女がせいぜいマスターのいい遊び相手になってくれればいいが……」

そう一人ごちて、フッと小さく息を漏らす。

呆れたような、自らの高望みを笑うような自虐的な嘆息を。

彼女は自らのマスターを全く心配してはいなかった。それがいまさらながら少しだけおかしくなる。

それは心配したところで自分に出来る事は『視る』事だけだという事を知っていたからでもあるし、かの『狂人』と呼ばれる少年が負けるワケがないと誰よりも思っているからでもある。

それを踏まえて考えても、全く主を心配する気持ちが出てこないのは、自分が誰よりもマスターシヴァに毒されているからだと思えて、おかしくなってしまったのだ。

だから彼女は『アンテナ』を立てる真似をせず、戦い趨勢を視る事もしない。

それをする意味が見いだせない。

彼女が考えている事はと言えば、『あの少女が出来るだけ悪あがきをして、マスターの『癇癪』を収めてくれればいい』……精々半壊した部隊を立て直しながら、そう考える事ぐらいだった。

「サード、車はほとんどがやられちまってます。そこらで足を調達しようにも、動けるヤツが少なくて……」

「まぁ、仕方ないか。今『視た』ところでは山都に軍勢はいないようだし、ここで後続の車がくるのを待つしかないだろう」

サード――つまり東海の軍勢でも、マスターシヴァの配下では地位的に『三番手』につくカエラの言葉に、状況を報告してきた男は軽く頭を下げる。

東海地方の軍勢を実質運営しているのが、『マスター』でも『ファースト』や『セカンド』でもなく、『三番目』であるカエラだという事は、東海地方の軍に所属する者ならば誰でも知っている事だった。

マスターシヴァのお気に入り。

ファーストやセカンドとは違い、変種としての戦闘能力ではなく、実務能力……つまりは面倒くさい事をする能力を買われた補佐役兼狂人の知恵袋。

三年近く前――つまり全国をフラフラ回っていたらしいマスターシヴァが、東海に居着いてしまってからずっと側に付いていて、いまだに殺されていないどころか、戯れで傷つけられた事すらない側近中の側近。

その点だけでも、『サード』である彼女は周囲から一目置かれていた。

非常に高い戦闘能力を持つ純正型であり、『アンチクルセイダー』のトップ、そして狂人シヴァにもその力を認められている『ファースト』は別格としても、マスターに媚びへつらい過ぎて逆にカンに触ってしまい、暇を持て余したマスターに遊び相手として使われた『地位だけのセカンド』よりは、ずっと恐れられ、敬われていると言ってもいい。

「はい。あの……」

「なに？」

そんな彼女に恐れかしこまる連中は決して少なくない。

いかに戦闘能力がゼロに近くても、彼女の能力は非常に有用なモノであったし、なにより彼女に肩を持ってもらえただけで『気まぐれなマスターの遊び相手候補』から外れられる可能性があるのだ。敬わないワケもないし、慕わないワケもない。

もちろん周りの人間が自分をどう思っているのか、そしてその結果どういった態度で接してくるのかを、彼女自身よく知っていた。だからこうして報告を終えた後も、いまだ何か言いたげにしている男に訝しさを覚える。

「あ、あの、マスターは勝てるんですかね？さっきの女、メチャクチャなヤツだったでしょう？」

「……それはマスターに勝って欲しいから出た心配の言葉なのか、はたまた『その逆』なのか、そっちの方が私には気になるな」

「い、いや、自分は――」

「冗談だ」

慌てて弁明の言葉を続けようとする男に、カエラは僅かに顔をほころばせる。

その二択の答えは、聞くまでもなく分かっていた。それでもこうやって口に出す辺り、自分の底意地の悪さが目に付いたようでおかしくなってしまう。

「マスターは負けないよ。アンチクロスのメンバーなら……東海地方の人間なら、それぐらい分かっているだろう？」

「あ、いえ、その……」

「あの人はいつも一人。一人で相手を見つけて、一人で遊んできたんだ。その遊びが人を引きずっていき、その集まってきた集団がアンチクロス……東海軍となった」

「……」

「あの人の怖さは私達自身が一番よく知っている。あの人は他の地方の皇共なんかよりずっと恐ろしい人だ。そうだろう?」

――これ以上は言うまでもないな?無駄な期待は持たない事だ。

そう言葉を締めると、カエラは青くなって口を噤んでしまった男から視線を外した。

「全くマスターにも困ったモノだ」

その言葉は誰に向けられたモノでもなく、ただやりきれなさを含んだ小さな嘆息と共に漏れる。今まで何百回憂慮したか分からない事を思う度に、彼女は盛大に頭を抱えたくなる。

為政者という者は……あるいは集団のリーダーとなるモノは、それ相応の役割というものを果たすべきだ。

これはカエラの持論なだけではなく、一般常識的なモノだと彼女は考えている。

それは人の集団は言わずもがなであるし、動物の集団でもリーダーは敵性の生物、違う群れの個体に対して群れを守る義務があるという点では共通していると言ってもいい。

人間で言えば、政治家や官僚は自国の権益を守るという義務と、自国の国民を導く必要があるワケであるし、動物で考えれば、ハーレムの長である雄は、それを荒らす他の雄を打ち破って群れの雌や子供を守る義務があるという事だ。

そこに例外はない。人間の社会には知恵があるがゆえに腐敗があるワケであるが、最終的に国のトップへと期待するのは、自らの安全と生活の保障だ。そこに国の垣根はない。

動物でもなんの役にも立たず、牙も持たない、つまりは群を守ってはくれない雄をリーダーとする集団はないだろう。

しかし、そういった人間とそれ以外の生物の『組織』というモノに、共通してある常識から外れた存在がいる事をカエラは知っている。

彼女の持論や常識からは『皇たりえない皇』……それがマスターシヴァだった。

それがカエラの認識であり、頭痛の種でもある。

誰よりも鋭い牙を持ち、誰よりも恐ろしい性質をも持つ。

ただそれだけの存在、たったそれだけを認められた支配者。それだけの理由で、誰も逆らう事の出来ない『モノ』。

それが『マスターシヴァ』。

彼をリーダーとする見返りは、『ただ彼から攻撃される可能性が若干低くなる』……それだけでしかない。

見返りというには不確かで、微々たるモノでありながら、誰もそれに異を唱える事すら出来ない。

その枠組みの中で上手く立ち回る知恵があるか否か、そしてその在り方の中で上手く力を発揮できるかどうか、それらだけがマスターシヴァ以外の地位を決めているに過ぎない。

名前だけのセカンドがその象徴だ。セカンドとしての地位に見合う力を持ちながら——つまり『組織の中では』ナンバー2でありながら、彼は遊び相手に使われたのだから。

力による確固たる序列がありながらも、それすら意に介さない異物がいる組織。

絶対上位者が組織の枠組みを越えたさらに上にいるワケである。

もう五年以上前に関東から堕ちた五人目——他の新皇に『狂人』

の烙印と共に追われなければ、五人目の新たなる種の皇となるハズだった少年が、皇ではなく『絶対上位者』としてあるのが東海地方の在り方なのだ。

「関西の人々はきっと思い知る事になる。混沌に包まれている今日の自分よりも、さらに最悪な状況があるのだということを」

その言葉に答える者はいない。報告をしてきた青い顔の男の姿はなく、辺りにあるモノはと言えば曇天を司る雲と、荒涼とした廃墟の群れ。

「それは明日の自分だ。マスターシヴァの支配する東海地方の法則……弱肉強食を超えた、たった一人の無秩序に支配された明日の自分こそが、本当の底辺なんだときっと思い知る」

――東海（向こう）はもう、我が主が完全に支配してから、二年近くもそれでやってきたんだ。そろそろ他の地方の連中も、同じリスクを背負ってくれてもいいだろう？

今まで自分達を支配してきた憎むべき『将軍』、そしてその近衛達が、死に物狂いで東海の狂気からの防波堤となっていた事を知ったとしたら……さて、関西の人々は一体誰を恨むのだろうな？

そんな戯れ言に苦笑を浮かべて、彼女は空を見上げながら時を待つ。

生地とは違って、いまだ狂気の色が薄い地方に、何故か小さな吐き気を覚えながら。

2―3・三番目の憂鬱（後書き）

なんとか月曜日更新は間に合いましたが、あとがきストーリーは間に合いませんでした。
まぁあとがきストーリーは気分転換的な意味合いが強いので、間に合わなければ間に合わないで載せずにいきます。
次回はスズカとシヴァです。

2―4・銀鈴と狂気の宴

「あっははははっ！いいっ！スッゴくいいじゃんかッ！！彼女ぉぉ！！」

大気を摩擦して飛来する拒絶によって放たれた轢(れき)を、その異形の豪腕を一閃させて弾くと、細身の体をバネのごとくたわめてからシヴァは前方へと飛ぶ。

まさに飛ぶと言った表現そのままに一足でスズカへと迫り、角張った手のひらを大鉈のごとく振り抜いた。

「……嫌い」

しかし、当たればスズカの頭部をあっさりとザクロのごとく変えるであろう、打撃というよりもはや斬撃に近いその一閃を、彼女はその細すぎる腕であっさりと受け止めてみせる。

いや、正確に言えば受け止めたワケではない。マスターシヴァの異形の腕と、彼女の手のひらの間には空間がある。

つまり彼女の力――斥力がシヴァを拒絶して受け止めたのだ。

「やるやるぅ。かぁっ、この腕の一撃を受け止めてくれたのって、君以外じゃ三人しかいないんだよ？」

「……嫌い。大嫌い！」

「ぐーちゃんこと新皇のグラビティロードとぉ、中部の新羅……あとウチのアンチクルセイダーのトップ、ファーストだけさぁ！」

大気が悲鳴を上げるかのように轟風を巻き起こし、二人が力をぶつけ合う場所を支点としてアスファルトの大地がひび割れていく。

それは純粋な力比べというには不可思議な、在らざる力が介入したぶつかり合いだ。

しかし、その中心たる二人の様子は明らかに違う。

スズカは自らの『拒絶の世界』を展開しているのに対して、マスターシヴァは一切『世界』といった純正型の証を示してはいないのだ。

それでも二人の戦いは拮抗していた。

スズカとて、関東では『白銀』を冠した新皇の一角だ。東北で始祖となり得たほどの力がある。

しかしその名前を誇って、マスターシヴァを侮っていたつもりは毛頭ない。それどころか彼女はかなり本気でぶつかっているつもりだった。

飛ばした轢は最高クラスの斥力を推進力として飛ばしたし、シヴァを殴った拳にも殺すつもりの拒絶を込めたつもりだ。

元はただの石ころといえど、銀色の力を最大限に受けた弾丸は、並みの人間ならば簡単にミンチへと変えるだけの力があるし、銀色の拒絶で覆われたその拳は、簡単にアスファルトを砕くだけの威力がある。

それでもシヴァはあっさりそれらを受け止めてみせると、逆にその腕が鉞（まさかり）のごとく振りかぶられ、スズカを引き裂こうと唸りを上げて迫ってくるのだ。

なんで自分の攻撃を簡単に受け止められるのか、などと自問はしない。シヴァに問う真似もしない。

その異常さこそが、マスターシヴァのマスターシヴァたる由縁なのだろう、そう自然と理解するだけだ。
いつかの兄のように、自らを傷つけながらも受け止めてみせたワケではない。力で拒絶に対抗してみせているだけであり、この少年ならばそれぐらいは簡単なのだろうと認識する。
そう、つまりこの少年を相手に、関西で今まで力を振るってきた時のような手加減は必要はないのだ、と。

そう考えてから、一際大きく拒絶の力を放つと、スズカは大きく距離を取った。
シヴァを簡単に弾く事は出来なくとも、拒絶のベクトルを変える事によって自分自身を対象から弾く事は出来る。それを利用して、彼女は一気に距離を開けたのだ。
そしてより銀色へと思考を馳せると、左腕をシヴァに向けて掲げる。

「……其は全てを射抜く忌まわしの銀槍」

いかにシヴァが強くても、逃げるつもりなど彼女には毛頭ない。
距離を取ったのは、単に力比べでは埒があかないと思ったからだ。
そして距離を開けると同時に、踏みしめるかのように大きくその足を広げながら、自身で設けた力の在り方を決めるワードを紡いでいく。

「其は悪鬼を裂き通る拒絶の刃」

その掲げた左腕に、彼女固有の世界にある銀鈴から散った鱗粉が集っていく。
それは純正型以外には見えない白銀の塊であり、対象を完全に拒絶する彼女の世界に属する力の欠片そのものだ。

それが急速に集まっていき、まっすぐに左手より伸びる。

『大通連』

その左腕から真っ直ぐに伸びるその銀の槍は、かつての仲間達にそう呼ばれた。

それは『鈴鹿御前』と呼ばれる鬼が使ったとされる妖刀の銘だ。

しかし槍のようでありながら刀の銘を持つそれの用途は、槍のそれでも刀のそれでもない。

彼女自身が接近戦自体をあまり好んでいないという理由もあるが、その『大通連』の在り方自体が、刀や槍といった凡百の武器としての用途を選ばせない、という理由が大きい。

それそのものが、彼女が使いうる最大限の拒絶を宿した、振るうには大きすぎる理を宿しているのである。

左手より伸びるその純然たる力の塊を、左手に右手を添える事でスズカはなんとか支える。

着込んだ衣服やニット帽は、風もないのに大きく後方へとなびき、彼女自身も踏みしめた足に力を込め、その場に留まる事だけで精一杯だ。

これを振るう事など、この『銀鈴世界』の支配者たる彼女にも容易な事ではない

「……それ、何かな、かな？なんか物すっごくヤバげな感じだよね？」

「これは簡単に言えば先輩に対する意志表示」

「先輩って……僕なのかな、僕しかいないよね？」

シヴァは意味が分からないとばかりに首を傾げる。それに対して

スズカは初めて笑みを見せると、その異端の槍をより前へと突き出すかのように、大きく前傾姿勢を取った。

「そう。五人目になるハズだった先輩への、実際に五人目になった私からの声明代わり」

「……五人目って事は君は――」

「あなたにはこの先はない。先には行かせない。これはそういう意志表示であり、もう誰の道とも交わらせないという私の覚悟の証。あなたの『狂った道』は……私の白銀の道がここで遮る！」

その言葉を最後に、彼女は大きく後方へと弾き飛ばされた。

誰かに弾き飛ばされたワケではない。自らの槍の放つ力に、その華奢な体を飛ばされたのだ。

溜めに溜めた斥力が、支配者である彼女を飛ばしたのである。

その槍は、手を離れた刹那すらも視界には映ってはいなかった。

あっという間に真っ直ぐ飛び去ってしまい、今頃は完全にスズカの力の影響から離れた遥か彼方の上空で、その形成を失っている事だろう。

その途中にあったシヴァの右肩辺りを、ごっそりと削り取って。

純正型として、新なる種の皇の一角とも呼ばれた『マスターシヴァ』でも、反応すら出来なかったのだ。

当のシヴァは、腕を肩からあっさりこそぎ落とされたというのに、なんの衝撃も受けていないかのように突っ立ったままである。

それもシヴァの身体能力ゆえではない。単にそれほどの切れ味と威力を『大通連』は持っていたという事だ。

銀色にコーティングされた石の弾丸をも弾いた腕を、なんの痛痒も衝撃も感じさせないまま、妖刀の銘を持つ力の塊は刺し貫いたのだ。

「やるね。外傷を受けたのは……えっと、いつ以来だったかな、かな？ん～、覚えてないや。どうやらウチのファーストと同じぐらいはやれるみたいだね、『後輩ちゃん』」

それでも――

それを理解した上でもシヴァは笑う。一瞬だけ呆けたように傷口を見て、地面に落ちた腕を見て、得心したかのように頷いてから笑ってみせる。

「腕をまるっと落とされる……これってかなり衝撃的だよね、ね？痛みっていうより高熱に苛まれてる感じだよ」

「……ちゃんと頭を狙った。でも外れたのは多分私の狙いミス。言い訳になるけれど、アレはまだ私には完璧に御しきれてはいない。多分あれほどの力を込めたなら、一生御しきれないかもしれない。本来なら――」

――痛みすら感じさせないまま、その狂った意識を司る頭部を刈り取るハズだった。

弾き飛ばされた空中で、華麗に態勢を整え地面に降り立ったスズカはそう続けると、腕を落としてなお笑う少年へと向かって歩きながら、足元の石ころを拾う。

そこにはなんの表情も浮かんではいない。端正な顔はまるで能面のようで、そこになんらかの感情を読み取る事は出来ない。

ただ拾った石ころを軽く掲げた右手の上の虚空に浮かべ、今にも飛ばすべく力を溜めていく。

「……後輩ちゃん、君はスッゴく強いよ。さっきまでなら君は僕の

お気にになれてた。でもさぁ――」

そんなスズカを見て、シヴァはどこか冷めたような……がっかりしたかのような表情を浮かべた。先ほどまでの喜々とした表情はなりを潜め、どこか無感情にスズカを見ていたのだ。

「……その表情は気にくわねぇなぁ。まるで僕の知ってるあの人みたいだよ。力がありながら、誰とも違う特別がありながら――そして最初の一人でありながら、それを嫌っているあいつみたいだ。君ならこれが誰の事を言ってるんだか分かるだろ？」

「……」

もちろんその人物が誰を指すのかがスズカには分かった。

その人物は彼女にとって人生の指標であり、力の使い方や物事の考え方を教えてくれた人だ。

人としての当たり前を教えてくれた先生でありながらも、欲しいモノはなんでもくれた大事な家族だ。

自分が似ている人物と言えば彼以外にはありえない、そうスズカは思う。

だって彼女はその兄みたいにずっとなりたかったのだから。その兄と同じになりたくて、考え方を理解したくて、ずっと側にいたのだから。

それ自体は当たり前で、彼に似ていると言われる事は誇りですらある。

「君がここにいるって事は、この先に『彼』もいるって事かな？『僕の代わりの五人目たる君も』、彼が連れてきたって情報は聞いてるからね」

「あなたはこの先に行けない。行かせない」

しかし、彼女は思わず舌打ちを漏らしそうになった。
何しろ自分の浅はかな意志表示により、この狂人に『この先』に対する深い興味を抱かせてしまったのだ。

「……教えてくれないんだ。じゃあ仕方ないね」

そんなスズカの冷めた言葉に、シヴァは小さな溜め息を吐き

「押し通って確認するまでさ」

そう言って落ちた腕を拾うと、ゆっくりとその前進を再開する。
無造作に、どこまでも無遠慮に進行を再開する。
ただ歩の向くまま、ただ真っ直ぐに。
スズカが構える銀色にコーティングされた石ころの弾丸を、まるで気にした様子もないままで。
そして落ちた腕をゆっくりと元あった場所へと押し付けながら、てくてくと歩を進めていく。

「後輩ちゃん、君は僕の『世界』について彼に……ひーくんに聞いてはいないんだろ？聞いてないハズさ。ひーくんは甘ちゃんだからさぁ、僕の事を誰彼かまわず話したりはしていないハズだ」

そう言って一歩踏み出した瞬間には、その押し付けただけの腕が……異形の手が躍動を始める。肉が盛り上がり、骨が軋む音が響いていく。

「僕の世界は誰にも見れない。見れっこない。僕の世界はこの『身体そのモノ』だからね」

そして三歩歩いた時には、すでに落ちた腕は元通りくっつき、それを掲げながらニィッと笑ってみせる。

「つまりね、僕にとっての身体は、それそのモノが武器であり世界なのさ。こんなのが傷ついてもすぐに『直る』。簡単には傷もつかない。だってこれは僕が完全に支配する『領域』なんだから」

飛来する轢を今度は受け止めもしない。抉られたハズの頭部は、ぶつかった衝撃に軽く仰け反っただけで、傷一つついてはいない。

「これに傷をつけられただけでも後輩ちゃんは強い方だよ。僕の身体は僕の望むがままに硬度を変えるんだからね。身体の構成物質の濃度を変えるなんて僕には簡単なんだよ。硬くなれって思うだけで硬くなる」

もはや血が滲む事すらもなく、打つがままに任せてただ歩く。時折払うように振るわれる腕にも、銀弾を鬱陶しく感じている程度にしか見えず、その前進を阻む効力はまるで見られない。

「目に見えるこの腕だけが『特別』なワケじゃない。この腕で止められるモノは、本当ならどこでだって受け止められるんだ。わざわざ腕を使って止めてたのは単なる気分だよ。勝手にこっちの腕だけを警戒してくれたりもするしね」

無遠慮な前進を止めないまま首をコキコキと鳴らしながら小さく左手を振るうと、その指先が軽く裂けて血が滴った。

別に何かに切り裂かれたワケではなく、『単にそうなる事が当たり前の事』と言わんばかりに、ごく自然に裂けたのである。

「そんでもって僕の世界、この肉に覆われた僕だけの領域は、こういった使い方も出来るのさ。
――鮮血滴る赤き矢羽根」

そして血の滴るその腕を、空間を引き裂くがごとき勢いで振るった。

直後その左腕から滴り落ちる血流は、その振るった腕の勢いをもって辺りへと飛散していく。

それは赤き弾丸というよりも散弾に近い。暴悪なまでの勢いと、圧倒的な数で辺りの廃墟を砕き、街路樹をなぎ倒していく。

液体であるはずの血液が――凝固してもなお硬度の高いハズであるコンクリートを砕き、深く穿っていくのだ。

スズカにもその赤き弾丸は迫るが、それを彼女は辛くも銀色の領域で拒絶し、後ろに飛んで軽く距離を取った。

「そのワード式の使い方も、それによる世界の制御も、戦い方でさえも君はひーくんに習ったんだろ?僕もさ。僕もあの三人に世界について習ったんだよ。ひーくんとぐーちゃん、それからゆーちゃんにね」

あっさり銀色の領域に拒絶され、液体に戻った自らの血の滴をシヴァは気にも止めない。それどころか、単に力を見せつけただけだから、防がれても全然構わなかったんだと言わんばかりに薄く笑ってみせる。

「僕の腕はこんなだからさぁ、昔っからずっと一人っきりだったんだよね。何かを教えてくれるようなヤツもいなかったし、自分の力について学ぶ余力なんかもなかった。一人で路地裏に隠れ住み、残飯を漁って暮らすだけで毎日が精一杯だったよ。あの三人に会わな

きゃ野垂れ死んでたかもね」

――その方が既存種の連中にとっては良かったかもしれないけど。

そう暗く嗤いながら歩むシヴァの腕からは、流れ落ちる血流はすでに止まっており、傷口さえも綺麗に塞がっていた。

それはすでに『自然治癒』などという領域ではない。

元々そういった、傷口の開閉ですらも自在な身体構造だったとしか思えないほどに、綺麗に傷口が塞がっていたのだ。

「あの三人に拾われて、ようやく僕になれた。僕は僕だけが持つこの狭い世界を理解した。その為に必要なワードによる世界の制御については、君と同じくひーくんの仕込みなんだよ、後輩ちゃん」

スズカがなおも飛ばす銀色の弾丸をまるで意にも介さず、眼中にもない様子でその体に受けながらシヴァはただ歩く。

淡々と無感情に言葉を連ねながら。

「でも君は、戦い方までもがひーくんによく似た感じだよね？どうせ殺るなら一撃で痛みを感じさせないように……とかはひーくんのまんまだ」

スズカから発する拒絶の意志をも、自らの身体が内包する世界で受け止めながら、ただ真っ直ぐに歩を進める。

すでに二人の距離は、シヴァの一飛びにも満たない間しかなく、緊張感がゆっくりと空間を満たしていく。

「それじゃダメダメだよ、後輩ちゃん。こっちまでシラケちゃうじゃんか。痛みで動けないぐらいに痛めつけてから改めて念入りに殺す、ぐらいの覚悟で来てくれなきゃね。狙いが甘いって分かってんのに、頭なんて小さい的を狙うからさっきの大技は外したんだよ。

ひーくんみたいな甘い考えは、あの『灰色』だからアリなんだ。君はそんな考えなんか綺麗さっぱり捨てた方がいい」

展開される純正型スズカの銀鈴舞う領域に踏み込む異物は、嘲るような調子そう続け、マスターシヴァという狂人と向かい合う少女は、恐れも怯みも見せないまま狂人を待ちうけていた。

シヴァの言葉に返事すらも返さず、銀色の拒絶が支配する空間にその身を包み、真っ直ぐにその乾いた瞳を見据えている。

「返事もなし、か。潔さすら感じるぐらい君は真っ直ぐだねぇ。本当に君は綺麗だよ……胸がムカつくぐらいにね」

吐き捨てるほどの勢いもなく、ただ口を付くままに言葉を声へと変えるシヴァは、その銀色の領域を自ら歩みで侵していく。

普通の人間ならば、踏み入る事さえ難しいであろう、拒絶の意志を真っ向から受け止めながら、自らの世界――それを内包した身体で穿っていく。

「……灰色の皇は絶望に堕ち、重力の皇は孤独という毒に見舞われた。絶対毒は己を含めた全てを蝕み、言霊使いは汚れた世界をただ観るのみ。そして狂った道たるこの僕は、ただ一人、たった一人、より狂った世界を歩み続けてるってのに、最後の君だけがそんなに綺麗なんてさぁ……八つ当たりしたくなるじゃんか」

「其は全てを廃絶する銀鈴の唄」

「本当に無愛想で、どこまでも好戦的な後輩ちゃんだなぁ。――黄昏の晩餐にて黄泉人を喰らう」

スズカの呟いたワードに合わせて、銀色の波紋が……斥力の波が

周囲一帯をより凄惨に打ち壊していく中、マスターシヴァたる少年はその異形の腕を軽く掲げる。

そして斥力の波にその髪を後方へと流され、僅かに破れた服の切れ端をひらひらと舞わせながらも、まるで涼風にその身をさらしているだけであるかのように、無感情で無機質な表情のままそれをスズカへと向けた。

「後輩ちゃん、君は強いけどさ、すんごく強いんだけどさ、今はまだ『それだけ』だよ。皇ならば誰でも抱えている狂気を君は持っていない。ひょっとして君は純粋過ぎるのかな？ひーくんなら散々甘やかしてきただろうしね」

その掲げた手に赤い滴……腕のあちこちから漏れ出た血が集っていき、刃のようにその先端を尖らせていく。

掲げた腕を、まるでそれそのモノが生物であるかのように、重力に逆らって血液が這っていき、ゆっくりと形をなしていくのだ。

それは不可視の投擲武器として使ったスズカの『大通連』とは違う、誰にでも見える文字通りの血の刃だ。

向こう側が透けて見えるほどに薄い切り裂く為の凶器だ。

その刃の鍔もとは、肉が盛り上がって完璧に肉体と一体化している。

「其は深淵、其は煌めく銀の楯――」

その異形の剣を見て、スズカは本能的に拒絶の力を防御へと回す。

ついさっきまでは、対象を拒絶し、跳ね飛ばし、切り分ける事に使った力を、本来最も使いやすい形である防衛行動――攻撃を拒絶し遠ざける形へとシフトしていく。

別にその剣の異常さに臆したワケではない。

自分の銀弾がシヴァの肉体を打ち破れない以上、この血の刃は簡

単な防壁では防げないと考えたのだ。
その意志を受けて、彼女の領域を司る銀鈴はより甲高く鳴く。
より多くの拒絶の粒子、銀鱗の煌めきをばらまきながら、せわしなく彼女の周囲を飛び狂う。

「まぁ何にしてもさ、ひーくんに会う前に君に会えて良かったよ。君をボロボロにして見せつけたなら、一体どんな反応をするのか…
…いい手土産にはなる。
――アーネンエルベの剣」

「其は銀龍。我が身を守る銀鱗の楯」

そして二つの力はぶつかり合う。
全てを切り裂く赤き剣と、全てを拒絶する銀の楯をその手にかざしながら。
共に人の変種達の中でも、皇と称されるほどの異常な力を顕現させながら。
そして共に皇と呼ばれた関東地方から堕ちた身でありながら、狂気に見舞われた堕ちた道と狂気を知らぬ無垢たる白銀の道は、共に縁のない西の地で交差したのだった。

2―4・銀鈴と狂気の宴（後書き）

人物紹介・スズカ２

彼女の力は斥力、つまり拒絶を支配する領域を作る能力であるが、それを表すワードが『嫌い』という意志表示であるのは文中の通りである。
しかし、拒絶をより強力に表し、明確な力として扱う為に設けたモノもある。
そのワードである『其は……』と続くそれは、彼女の中では禁忌の部類に属する力で、関西に渡ってからは使ってはいない。
『黒鉄に属する七班のスズカ』としては使わないと決めてきたからである。
そのワードによって操られる力は、『嫌い』と一言で表される力とは違い、絶大な力を発揮するモノばかりで、関東時代には敵対する純正型をも圧倒したモノである。
つまり『白銀』としての力であり、皇としての象徴でもあったワケのだ。
それを今の兄代わりの男にはみせたくないとの思いから、自分の中では封じてきたのである。

中でも『大通連』と称されたあらゆる存在を拒絶する力を込めたモノは、その一撃で刃が飛ぶ軌道上に存在する全てを消し飛ばした、スズカにとっても必殺の部類に属する力で、『灰色』と呼ばれた男にも『あれほどの力は俺にも現せない』と言われたほど。
本来は彼女の性格上からも拒絶による防御技や、斥力の波による味方の補助が得意なワケであるが、攻撃においても純正型随一と言えるほどの力が振るえるのだ。
欠点はと言えば、無作為に力を込めた為、支配者であるはずの彼女

まで大通連は拒絶しようとする事である。
しかし、力の暴走自体はなく、灰色世界を支配する男よりもずっと上手く自らの世界と付き合っていると言える。
ちなみに兄代わりの男の前で『大通連』を使った事は一度しかない。
それは彼女なりの『いつまでも妹として、兄の庇護下の立場にいたい』という、ちょっとした願望からであり、『俺にも現せない』という言葉に『もうこいつは一人でも大丈夫』と思われたかも……と一人恐れおののいた事があるから。

大通連……鈴華御前という鬼女が使ったとされる刃。それをもって彼女は、東北の鬼王らを坂上田村麻呂と共に討ったという伝承がある。
スズカのそれは、刃の部分全域が全てを拒絶する力の塊で、対象に当たるとなしに絶対の切れ味……つまり無作為の拒絶によって引き裂くモノ。
ちなみにその拒絶の力は、支配者であるはずのスズカにも効くモノで、溜めに溜めたスズカへの斥力を使って凄まじい勢いで飛んでいく。
その為、投擲武器としてしか使えず、彼女自身も毎回後方に飛ばされる羽目になる。

2―5・班長補佐の役割

「……なんで俺達三班が他の六班から独立した状態になんてなってんだよ」

そう呟いた男は、スプリングの効いていない固いベッドの上で溜め息を漏らす。

単純に疲れ以外にも、呆れをブレンドした深い嘆息を、これみよがしに吐いてみせたのだ。

そして目の前で畏まっていながらも、そんな自分の心情を穏やかな笑みで受け止める副官と、自分の手当てをしてくれた赤髪の少女になんとも言えない、複雑な表情を向けた。

「いえ、他の六班全てが敵に回ったワケではありません。第七班は依然我々の盟友としてあり続けていてくれますし――」

「ウチの二班のメンツは……まぁ半分以上は五班と一班に合流したけど、元班長であるあたしと元副官のカクリはこっち側よ」

複雑な表情になってしまう理由は、彼自身にも分かっている。

平然としている二人に、どんな言葉や表情を向ければいいのかが分からなかったからだ。

――なんでこの二人は得意気なんだろう？

そんな風にすら思う。隠していたこちら……自分が悪いのは、今も療養中である彼自身が自覚している。それに対する咎めは受けるべきだと思っている。

甘んじて全ての罰を受けるつもりはなくなっていたけど――精一杯言葉を尽くして分かってもらうつもりではいたけれど、力をもって分からせるつもりはさらさらなかったのだ。

その旨はちゃんと副官である青年に伝えていたし、話し合った当時はいい顔こそしなかったモノの了解してくれたハズだった。

それが廃都と呼ばれる拠点のある街へと帰ってきてみれば、自分達三班の周囲には特別防衛網が敷かれ、本部は厳戒体制で他班を牽制していたのだ。

わざわざ『水鏡』と呼ばれる女性が、街外れまで迎えに出ていた事からも訝しく思っていたが……しかもやたら恭しい態度でかしこまっていた辺りで、彼の中にあった訝しさは確信に変わっていたが、事のあらましを聞いて改めて目眩を起こしたのも仕方がなかったと言えるだろう。

それどころか他班に呼びかけ、自らの言い分の正当性を訴えて、街の世論や周囲を取り巻く現在の状況を盾に、民政部に『政治からの不可侵』の約束まで取り付けていた手際には寒気すらした。

民政部とはそのまま街の運営機関そのものであり、人々への食料配分や復興計画を担う、政治を主とする機関だ。防衛や迎撃といった軍事を司る『黒鉄』という組織とは、対になる存在だと言えるだろう。

そこへ『シャクナゲと第三班の名前なく、この街を守れると思っているのか』、『将軍を倒した黒鉄こそが、この街の安定には必要だとは思わないか』と交渉を持ちかけたのだ。

つまりは『向こうに与するのであれば、こちらは今後街の防衛には一切手を貸さないし、こちらが勝った際にはそれ相応の対処をと

る』と暗に示し、脅しに近い真似をしたワケである。

こんな真似をしでかした理由は、食料や消耗品の支給などと簡単ではないだろう。

食料などの備蓄については、第三班の副官である男ならば抜かりがあるはずもない。

班長である彼自身も、この三班本部に備蓄されている食料や武器弾薬、燃料などについては、一つの班としてはかなりのものだと自負しているぐらいだ。

それでも『政治からの不介入』……つまり『街の政治機関からは敵対されていない』という名目はやはり大きいのだ。それだけで三班の者には自信になるし、自らの正当性を信じる他班は揺れるだろう。

やり方は脅しに近い真似だったとしても、『民政部が三班の実力を認めている』という証にもなる。

しかし、やり方自体が頭痛の種なのは変わらない。

そしてそんな事よりもさらに頭が痛いのは――

『でかした！副官！あんたなかなかやるじゃん！うん、カクリに言って誰かいいコ紹介してもらってあげる！』

と大張り切りで、帰還してからずっと三班に居座っている『元』二班班長であろう。

なにしろこの少女、二つにバラけた二班を副官に言って解散させただけではなく、いい機会とばかりに仲間を引き連れて三班に加盟してしまったのだ。

しかも『班長補佐』なんて今までなかった役職まで与えられて。

ちなみに頭が痛い女性としては彼女にも劣らない、『元』二班副官は、副官補佐兼相談役なんて役割にちゃっかり収まっていたりす

る。

今頃は上官である『紅』にも劣らないぐらいに大張り切りで、あちこちに策や罠を張り巡らせている事だろう。

「俺の事を思ってくれてっていうのは分かるよ、でも――」

「私としてもやはり二の足を踏むところだったのです。ですが、話して分かる相手ばかりではない事も事実なんですよ。幸いスズカさんを始め、相談をした皆さんが私の意見に賛成し、快く色々と協力してくださいましたし」

――スズカぁぁ！またお前は素知らぬ顔で色々やってたのか！？

一番最近に見た『銀鈴』の、あまりにもいつも通りだった表情に、彼は実際に頭を抱えてひっくり返りたくなる。

もちろん平然と悪びれていない自分の副官にもだ。

「シャクナゲ、あなたは絶対に必要な人間です。他の班の連中など知った事じゃありませんが、少なくとも私達三班の仲間にはあなたが必要なんです」

「うんうん、あたしも今は三班だけど、全くの同意見かな」

――カーリアンはともかく、他の元二班の面々、つまりカクリとその取り巻き（紅薔薇会）の連中は、『紅』に付いてきただけだろう。

シャクナゲはよっぽどそう言ってやりたかった、言えなかったのは、単に療養中で言う気力がなかっただけだ。

そう思わなければ、ここで本当に突っ伏してしまいそうだったのだ。

「ナナシんとことオリヒメんとこは完璧敵なのよね？」

「はい。現在一班は、拠点をドームから北の山中にあるホテル後に動かし、高い位置からこちらを牽制しています。四班は少し混乱しているようですが、本拠の廃ビルを中心にあちこちへと戦力を散らせ、防衛網の構築に入っています」

「……オリヒメのヤツ。じゃあ五と六は？」

「五班は動きを見せていませんね。まぁ業務は行っていませんし、港湾の入り口を固めて他班との接触は断っているようですが。六班に至っては、本拠に閉じこもったまま動きが見られません」

「ふんふん。じゃあ問題はやっぱ一班と四班……かな？」

「さすがですね、班長補佐。特に一班はいつ攻めてきてもおかしくありません。四班も防衛班だけあって、時間をおけば強固な防衛網を築いてしまうでしょう」

今日はとりあえず一人にしてくれ……そんなシャクナゲの願いも虚しく、『現状の把握だけでもお願いします』と言って譲らないアオイと、『オッケー』と簡単に了承を返した少女の話を、側で聞くともなしに聞かされる。

今までもこういった話し合いをしてきた事はあった。特にずっと副官であった青年とは、『決戦班』の班長と副官として、ほぼ毎日のように似た話をしてきただろう。

それでもシャクナゲは、溜め息を禁じ得ない。

なにしろ今回の敵対者は同じ『黒鉄』なのだ。ずっと仲間だった者達が相手なのだ。

心は深く沈み、憂鬱に思考が塗り潰されそうになる。

きっと彼自身が各地を回って、この街へと連れてきた者達とも戦う事になるだろう。

「シャクナゲ、これは私達個人の意志です。ワガママと言ってもいい。だからあなたは戦ってくれなくても構いません。私達が勝手にやった事ですから」

「そんな……そんなワケにはいかないだろ」

「……そうですか」

――そうですね。

そう言って副官であるアオイは、気付かれないように溜め息を漏らす。

それは疲れを滲ませたモノではない。単にそう言うだろうと思っていたと示す為の嘆息だった。

どちらにしろ、三班の士気はこの班長次第だ。彼が不戦を貫いていれば、他の誰もが戦う事に躊躇いを持ちかねない。

それをこの班長自身が自覚しているからこそ、彼自身がいかに戦いたくないと思ってはいても、動かざるを得ない。

そうしなければ、自分の為を思って立ち上がってくれた仲間達を見捨てる事になる。

いかに自分が苦悩していようが、同じ班の仲間達だけを戦わせる

事など、この班長に出来るハズもない。
そう話を持っていったのが自分だったとは言え、やはり心苦しくなってしまう。副官としての分を越えている事を申し訳なく思う。

「私は即座に動き、まずは一を屈伏させたかったのですが、いかがでしょうか？四が防衛網を築く前に一を敗北させられれば、四は抗うを良しとはしないかと考えていたのですが」

「……それでいい、と言いたいけど、少しだけ時間をくれないか？」

「覚悟が決まりませんか？」

そう真っ直ぐに問うアオイに、彼は小さく肩をすくめてみせる。やるせなさそうに、でも仕方ないとでも言いたげに。

「違うよ。こうなったらもう戦ってから話をするしかないと思う。俺がいくら会談を求めても一班はきかないだろうし、四班もすぐには応じてくれないだろうから」

「すみません。一班を煽り過ぎたのは少々出過ぎた真似でした」

言葉とは裏腹に、アオイ自身には全く悪びれたところが見られない。あくまでも飄々としているそんな青年に、思わず苦笑が漏れてしまう。

「いいよ。一回一班とはちゃんとぶつからなきゃならなかったって事だろ」

――どこか一つを徹底して敵に回し、そこを圧倒してみせる事で、

争いを早期に収めるって考えたんだろうけど。
そう自らの副官の考えを看破しながらも、そんな素振りを見せないしたたかさに呆れまじりに感心までしてしまう。
確かに一班ならば、三班の実力を示すにはいい相手だろう。あそこを圧倒出来れば他班に対する牽制にもある。
『一』と『三』の二つこそ、黒鉄が誇る二大前衛班だという認識が多くの者達の中にあるのは間違いないからだ。
それが早期に混乱を収める方法だと彼も理解はしている。
それでも今の現状では、彼には他に優先すべき事柄があったのだ。

アカツキの友人として、そしてその遺産を持つ者として。

「単に待って欲しいのは、俺には一つしなきゃならない事があるからだよ」

「しなきゃならない事？なんかあるなら代わりにあたしがしたげよっか？」

意気揚々と手を上げる少女に何故か微笑ましさを感じ、それでも『任せて任せて！』とばかりに表情をほころばせる彼女に、シャクナゲは小さく首を振ってみせた。

「ありがたいけど、今回は甘えられない。やるのは『アカツキの遺産』、それの破壊だから」

「スカシ野郎の遺産？」

――彼女には任せられない事だったから。
いや誰であろうと、任せられない事柄だったからだ。

「あいつの世界が残した四つ、その中で持ち主不在のモノ、最悪のモノ、俺がかつて破壊に失敗した災厄――『ノーフェイト』」

「ノーフェイト……」

あの不気味な錫杖――不可思議な力ぐらいは、アカツキに与えられずとも元から持っていそうな遺物を思いだすだけで、彼は胸の奥深くから嘔吐感がこみ上げてくるのを自覚する。

あの人間を止まらせる運命毒。停滞させる因果。その全てに、今ではかつてないほどの恐怖を感じている。

彼自身でさえ――絶対の意志を持って挑んだ『宵闇』であった頃のシャクナゲでさえ、あの運命毒には抗えなかったのだ。

あの時もし、使用予定者にして制作者でもあるアカツキがいなければ、無事に『帰って』はこれなかっただろう。その事実が、彼をより暗澹たる気持ちにさせる。

「リバティ――カブトが持つハズだったモノにはさ、そこまでの力はなかったんだ。持ち主がいなきゃなんの害も及ぼさない存在だった。カブト専用だった。俺の『シャクナゲ』は抑える為のモノで、力自体は大したモノじゃない。でもあれは――」

「運命を冒す運命毒。アカツキが『新皇』を殺す為に――あなたが狂っていた時の為に作っておいた、『ノルンズアート製造の一』にして零番、ですか」

「シャクを殺す為のモノ……」

「そう、シャクナゲを――もっと言えば、新皇だった『灰色』ですらも殺せるだけの力を持つ『一』。それが『ノーフェイト』」

そう語るシャクナゲの声はどこまでも暗い。思いを馳せるというには陰鬱すぎる表情で、誰とも視線を合わさないようにそっと天井を見上げた。

それを見ていた少女は声もかけられずに、ただオロオロとし始める。

そんなのを相手にするなら、やっぱり自分も――そう言いたいのだ。それがはっきりと分かるほどに心配げに、手を握ったり広げたり、天井を見上げてみたり床を見下ろして落ち着かない。

「あれはその力ゆえに防衛機構を施されている。いや、あれの力そのものが、防衛する為の力になって垂れ流しになっているんだ。誰の手にも渡らないように、ゆっくり運命毒が滲み出し続けている。アカツキの切り売りした『全て』を今も蓄えながら。だからこの三班の地下深く――光すらも差さないさらにその先に眠らせてきた」

そんな少女には気づかないフリをして、淡々と言葉を連ねていく。目を合わせてしまえば、彼女は強引にでも自らの参加を表明し、それを押し通してしまう気がしたからだ。

「いつかはこの手で……そう思ってきたけど、黒鉄達みんながアカツキの力を知った以上は放っておけない。誰もあんな『異物』を求めるべきじゃない。あれは――」

――人間を信じていたアカツキが、その信念を一度だけ歪めて作った本当の闇だ。

その言葉に室内には沈黙に包まれる。

『ノーフェイト』。それについては副官である青年ですらも詳しくは知らない。

四番目の造物たる『ファム・ファタル』を持つ遺産の継承者でさえ、その情報に触れる事は禁忌とされてきたのだ。

当然いかに元班長だったとは言え、一年前にこの街に迎え入れられた少女には馴染みのない名前だ。

それでも沈黙しえなかったのは、アカツキと呼ばれる特殊な能力を持つ創始者が、信念を歪めて力を求めたという言葉に、底知れぬ畏怖を覚えたからに他ならない。

そして目の前の彼――シャクナゲの名前と、強大な力を持つもう一人の創始者でさえも破壊しえなかったモノ、『新皇』と呼ばれた時の彼でさえも殺しかねないモノという言葉の意味を理解したがゆえだった。

「今日の夕方には行ってくるよ。帰ってくるまでの間は……二人に任せていいか？」

「了解しました」

「いや」

それでも班長補佐である少女は即答で否定してみせた。了承を返した隣の副官が唖然としていても、今では補佐すべき存在である男の言葉にも憚る所なく、あっさりと首をフンとばかりに横に背けてみせる。

「……カーリアン、今回ばかりはいくらごねても連れてはいけない。スズカがいても連れては行かないよ。頼むから――」

「じゃあ、『シャクナゲ』はあたしに預けていきなさい。そして絶対取りに帰ってくるって約束して！んっ！」

それどころか班長に――第三班では誰もがその言葉に従う班長に、『頼む』と言われても怯まないまま、その手をグッと突き出した。
そして彼の武器であり、彼自身と同一の銘を持つ遺物であり、『灰色』を抑える為の『シャクナゲ（抑制器）』を寄越せと迫ってみせたのだ。
それは、彼が『灰色』を抑える為に必要不可欠なモノだということは、彼女が一番よく知っているハズなのに……彼が自らを保つ為に『抑制器』に縋っている事は、あの光都での出来事を知っている彼女なら分かっているハズなのに、だ。
もちろんその行動の意味が分からないほど、彼も愚かではない。彼女は間違いなく彼の身を案じてくれているのだろう。そう思う。
それでも唖然としたまま横でそのやり取りを見ていた副官が、そのやり取りの意味を悟ったのか今ではニッコリと笑い、少女を援護するかのようにジッと見つめてくる様に、思わず憮然としてしまう。
そしてほれほれとばかりに手を突き出してくる少女に、大きく肩を落として溜め息を漏らした。

……なんというかこの班での『班長補佐』の役割が、彼にも読めてしまって。
まさしく彼女は、副官には出来ない事をするうってつけの補佐（人材）なんだろうと思ってしまって。

「……分かったよ」

それが可笑しくて、嘆息混じりに枕元へ置いてあった『シャクナゲ』を渡しながら、彼も笑えてしまったのだ。
この数年、手放す事をずっと恐れてきた『抑制器』を、ここ最近だけで二度も手放す事になったというのに、それでも何故か自然と笑えている自分に少しだけ驚きながら。

2－5・班長補佐の役割（後書き）

お試し短編、初の前後編分けましたバージョンの前編。
今回の本文のちょっと前辺りをイメージしています。
後編は次回あとがきにて。
題して『班長補佐の役割と、副官の役割』。

「ねぇ、副官。ちょっと聞きたい事があるんだけど」

「なんでしょう？」

手際よく雑務をこなしていくアオイを見るとはなしに見ながら、カーリアンは何気なく言葉をかける。
別に二人っきりの場にいたたまれなくなったワケでもなければ、無言に包まれた三班執務室に耐えられなくなったワケでもない。
言葉通り、彼女には三班の副官である彼に聞きたい事があったのだ。

「シャクってさ、なんか弱点とかないの？」

「はっ？」

「いや、あいつって結構なんでも出来るじゃん？書類仕事もすれば機材の整備するし、前なんかここで子守りもしてたしさ。ほら、これは苦手、とかあるのかなぁって」

カーリアンの言葉の意味が分からず、少し固まってしまったアオイを、気にした素振りも見せずに続けた。

彼女にとってその質問に特に深い意味などない。単に『補佐』となるからには、その苦手分野を知っておきたいと思っただけに過ぎない。

それが分かったのか、あるいはそんな事はなくとも自分なりになんらかの解釈を付けたのか、アオイは小さく笑ってみせる。

「シャクナゲは弱点だらけですよ」

「はっ？」

「だから、シャクナゲは欠点だらけなんですよ」

言葉の意味が解らず……いや、理解出来ず問い返すカーリアンに、アオイは穏やかな笑顔のままで続ける。

「人に頼る事が出来ない、人を使う事が出来ない、人に貸しを作る事が出来ない、例え貸しを作ったとしてもあの人は貸しっぱなしです」

「……」

「そして自分を好きになれないから、自分を大事に出来ないし、自分に優しく出来ない。そしてそんな嫌いな自分を表にさらけ出せない」

――ほら、欠点だらけでしょう？シャクナゲほど欠点だらけの班長なんて、黒鉄七班にも他にはいませんよ。

そうにっこりと笑ったまま続けるアオイに、カーリアンは小さくかぶりを振った。

それは否定の意味ではなく、『あぁ、確かに欠点だらけかも』と納得したがゆえだ。

三班のシャクナゲは、あちこちを走り回って仕事をしているくせに、その仕事を他に回しているところなど、彼女は見た事がない。

周りに貸しを山ほど作っているのは、普段の彼を見ていたら明らかなのに、それを徴収しているところなども見た事がないのだ。

2―6・百識と東幻の邂逅（前書き）

あとがきの小話についてはごめんなさい。
とりあえず言い訳しません。
まず、ごめんなさい。本気でごめんなさい。
何についてかは言いませんがごめんなさい。

携帯投稿の際の文字数って大敵だよね、て話です。

次回からは、あとがき小話を台本調のトークっぽいあとがきにするか、はたまた何週間か練って短い話を考えるか、もういっそナシにするかで考えてます。
一応次週は台本調でやってみるかな、と考えてますが……ふと我に返る。
あとがきが完璧趣味の場と化してますやん、と。

2―6・百識と東幻の邂逅

「さて、と」

足早に執務室を退室しながら、アオイは素早く今後の作戦行動について思考を巡らせていく。

室内からは新たに任命された班長補佐の賑やかな声と、それに釣られて穏やかな声音で話す男の声が聞こえ、それに小さな安堵の息をもらすと、夜闇で真っ暗な廊下へと歩を進める。

出来ればもう少し、三班のトップ間にある思考の溝を埋める為に、色々と話をしておきたかったところだがそうもいかない理由があったのだ。

今の状況――班のトップである男が戦線から抜ける状況は、もちろんアオイの中であらかじめ予想してはいた。しかし、ノーフェイトという破壊すべき遺物の所在や、目が覚めた班長の怪我の具合、何より精神の状態を把握した今は、脳内に組み上げていた作戦リストに綿密な修正を加える事が優先されたのだ。

そう、自らが仕える班長が戦えない状況については、アオイは幾つか可能性をあげていた。

まず今回のように、『アカツキの能力を皆に知らしめたが為に、その遺産を誰の手にも渡らないように破壊する』といった状況……現状のように、所在も能力も不明な『ノルンズアートの一』の破壊を、内乱の沈静化よりも優先すべきだと、遺物について一番よく知

る班長が判断した場合だ。
そして次の可能性としては、班長が光都で重傷を負って、前線に出られない状況があった。
この二つは可能性としては比較的高かったし、考えうる中でも最悪の状況と言える部類ではない。まだ本当に最悪の可能性であった『ヴァンプ殺しの紅が牙を剥き、彼女が灰色に殺されてしまった』場合に較べれば、全然マシだったと言える。
その場合は、きっと班長も帰ってはこれなかったであろうし、帰ってきたとしても壊れてしまっていただろう。
しかし、それに比べれば全然マシだったとはいえ、やはり班長が前線から抜ける状況が手痛いというのも間違いない。
班長さえいてくれたならば、例え他のコードフェンサー達がいなくとも、三班のメンバーこそが黒鉄最強だと、副官である彼は自信を持って断言出来る。
その黒鉄を冠する男の名前と、彼に率いられる三班のメンバーの力だけで、今回の内乱はそう手間は係らず抑えられただろう。
そう、『元皇』の力も、ネームレスの存在も、『水鏡』と『不貫』の助けすらも必要なかったと思う。
その『理想形』からすれば、今の状況でも溜め息を禁じ得ない。
内乱を早期に抑えられない以上、あちこちに布石を打っておかねばならないし、頼りたくない相手、隠しておきたい手札を切らなければならないからだ。

――問題は西、か。

そう小さくそう一人ごちてから、コマを配置する位置について脳内の盤面上で綿密に戦力を計算していく。
東から押し寄せてくる狂気の波は、黒鉄最強の少女が受け持ってくれた。戦力を鑑みるに、彼女以外にはそれをなし得なかっただろう。

三班が誇る『水鏡』や『不貫』でも、皇の侵攻を抑えるには不安がある。皇という異常種の相手は、同じ皇でなければ役不足だというのがアオイの認識だからだ。

しかし、彼女がそっちに掛かりっきりな以上、西にある二勢力への抑えは、事実上黒鉄内にいなくなったと言ってもいい。

関西軍の侵攻に押されながらも、最後には同盟者として自立を保っていた『学園』と『瀬戸内水賊衆』。

これに対する抑え……『将軍』と『シャクナゲ』、そして純正型である『銀鈴』に代わる存在が必要不可欠となる。

中でも、『学園』という箱庭を維持する事を第一に置いている勢力よりも、瀬戸内海を縄張りとして、そこでの自由を得ている水賊衆の方が問題だと彼は考えていた。

中国地方には、二人しか確認されていない純正型の内の一人、『提督』を名乗る少女が指揮する集団。その集団は、構成メンバーも荒くれ者揃いであり、何度かカリギュラにも海賊行為を働いた連中だ。

将軍とシャクナゲ、関西の二大巨頭がぶつかり合って力を削りあった状況に、彼らが動く公算は非常に高い。

シャクナゲが前線にいてくれさえすれば、内乱を彼と一般メンバーに任せ、それを収めてから水賊に備える事も出来たが、今の状況では、先にあの連中に対する楔を先に打つ必要があると考えた。

――やはり私が西に出向かなければならない、か。

正直その決断は気が重く、憂鬱な溜め息が漏れ出そうになる。

なにしろ班長が事情により地下に潜らなければならないというのに、四方八方に敵がいる状況で副官の自分まで離れなければならないのだ。

「憂鬱そうね、副官さん」

「……憂鬱というよりも、むしろ陰鬱の方が響き的にはあっている気分ですかね」

たった一人で、誰もいない廊下を歩いていた最中に、いきなりそう声をかけられてもアオイが慌てる事はなかった。

その声が聞き慣れた女性のモノであるという理由もあったが、ここ――三班班長である彼がいるこの区画は、そのもの全てが彼女の領域だとあらかじめ認識していた事が大きい。

そう、この区間内では、『水鏡』の名前を持った三班の幻たる女性の声が、どこから聞こえてきてもおかしくはないのだ。

例え自室にいる時であれ、班長と副官の執務室にいる時であれ、あるいは真夜中の廊下の直中であれ。

水鏡に映った幻のように、彼女はどこにでも現れるし、どこへでも消える。それにいまさら驚く理由など有り得ない。

「私はこれからちょっと西に出向いてきます」

「学園……いえ、水賊衆に挨拶回りかしら？」

挨拶回りは言い得て妙ですね。そう返しながら、振り返る事なく小さく肩をすくめてみせる。

恐らく彼女も、先ほどの執務室内に『いた』のだろう。光によって情報を得る『視覚を支配』する水鏡の力ならば、それぐらいは出来てもなんらおかしくはない。

それをいまさら責めるつもりなどさらさらなかったが、思わず愚痴がこぼれそうになるのだけは抑えられなかった。

「全く副官なんて役割は、あなたにも出来るでしょう？あなたが引

き受けて下さらないから、私は心労で精神が擦り切れてしまいそうですよ」

「ご愁傷様。でも私には無理よ。最大戦力を誇る三班は、班長と共に副官までが強大な能力を秘めた変種であるべきじゃない。それを大多数は望まない。本当はバランス的に見て、既存種が副官である事が理想的なんだけど、あいにくウチの副官になり得るだけの能力を持っていて、ウチの副官になりたがるような既存種がいないんだから仕方がないわ」

――それはあなたにも分かっているでしょう？

そう言いたげな水鏡の言葉に、これ見よがしな溜め息だけを返してみせる。

もちろん彼女の言葉はアオイにも理解出来る。

班長と副官は、既存種と変種で分かれる事が理想的なのも分かっているつもりだ。

権力の一方への集中は、争いの火種になりかねない。潜在的にある種族間の確執を無闇に刺激する必要はないのだ。

そう言った意味でも、三班副官には自分こそが適任なのだろうとは思う。

自身が能力を持たず、穏やかな仮面の下に牙を隠す事に長けた『アオイ』こそが。

「全く、あなたには適いませんね」

「そうかしら？私はあなたには適わないつもりでいたのだけれど。『百識』さん」

「……その二つ名はとっくに捨てました。今はただの無名その一ですよ。もうその呼び名には懐かしさすらも感じません」

そう自然に答えつつも、漏れ出る苦笑だけは禁じ得ない。
この女性が、過去の自分を知っていたという事に対する驚きなどよりも、『百識』などという不相応な呼び名を、誰かに知られていたという事が気恥ずかしかったのだ。

『百識』……百を超える識見を持った者、という大げさ過ぎる意味があるかつての『ハンドルネーム』。
それを誇っていた気持ちが今では欠片も理解出来ない。
ただ世界を知らずにいた、無見識だった頃の自分に対する情けなさと恥ずかしさが込み上げてくるだけだ。百を知っていながら、必要な一を知らなかった過去の無知な自分が。
だからこそ、その頃の自分の事は誰にも語らない。彼が心服する長にさえ語ってはいないのだ。
まぁ、かつてアカツキをも手玉に取った事がある、凄腕のクラッカーでもあるこの女性ならば、知っていてもおかしくはないと思っていたが。

「百識はもうどこにもいません。その男は、『彼女（ファムファタル）』に喰われて消えたんです」

「そう」

「そうですよ。かつて灰色の皇に従っていた『東の幻影』がもういないように、ね」

「……そうね。過去は変わらない、変えられないわ。変えられるのは未来だけ。これからの自分だけ」

それだけを言って黙り込むスイレンに、アオイは微笑とともに小

さく頷いてみせる。

変えられるのは未来の自分だけ……。その言葉がしっかりと思考に根付いていくのを、自覚しながら。

それ以上を――自分以外を、他人を、環境を、世界をも変えられる存在がいる事は確かだ。彼の身近にもそんな存在はいる。

でも自分自身がそんな大きな存在ではない事を、彼は常に自覚していなければならなかったのだ。そうでなければ、彼の力――無名のアオイが持つ『彼女』の力は、多くの人間を傷つけてしまうから。

彼が彼女という『運命』を刻まれたのは、力に誇り、驕る為などではなく、これからの未来を変えられるであろう存在を、土台で支え続ける為だけでしかないのだから。

「最近はいかがでしょう？やっぱり我らが本部に不法に出入りされる方は増えましたか？」

そんな内心の思いを出すことはなく、あくまでも淡々とした口調のままで問いかける。

もちろん、自分の葛藤の全てが隠せているなどとは思わない。

それでも隠してみせる事こそが、彼の彼らしさだと言えるだろう。

「そうね、シャクナゲが帰ってからはやっぱり増加傾向にあるわね。手負いの手柄首に群がるハイエナ達は、毎夜毎夜飽きもせずに来てるわよ」

「……やっぱり中にはコード持ち達も？」

「昨夜は『鉄拳』が遊びに来ていたわね。夜分突然の訪問はあまり歓迎出来ないから、丁重にもてなしてすぐさまお帰り頂いたのだけれど」

一班所属の『鉄拳カリヤ』は、武闘派揃いの一班の中でも、特に功に逸る気質がある事はアオイもよく知っていた。だからその事実自体は驚くに値しない。

ただ、同じコードフェンサーでありながらも、『彼女』との格の違いを改めて認識させられる。

彼女は恐らく、『本当に丁重に扱って、カリヤを傷つける事なく帰らせただけ』だろうから。

「やっぱり一班の方々はどうにかしないとマズいかもしれませんね。貴女とて毎日毎夜見張り続けるワケにはいかないでしょうし」

「でもヒナだけではまだちょっと頼りないし、かと言ってヨツバに任せてたら、多分侵入者は全員殺されちゃうわ」

それは多分ではなく『間違いなく』だろう……そう思ったが、苦笑を返すに留めた。

恐らく彼女自身もそうなるであろう事は分かっていて、言葉を濁しただけに過ぎないだろうと思ったからだ。

「そのヨツバさんは今どうされてます？」

「裏の入り口で月見をしているわね。野良猫に餌を与えて、そのまま見張りがてら居座っちゃったみたい」

「あの方が居座っているのに、わざわざそこからこの本部に入ろうなんて考える酔狂者はいないでしょう」

恐らくは今話に上っている彼自身も、そんな事ぐらいは分かっているだろう。

見張りのつもりはほとんどなく、単にいつものように野良猫に餌をやったまま動くのが億劫になった……というのが真相に近いのだろうと考えて、アオイの表情には苦笑の色が混じる。

なにしろ彼が見張る場所からこの本部に侵入しようなどと考える事自体が、勇敢というよりも無謀と言った方が的確なのだから。

自殺志願者でも、もっとマシな選択肢を選ぶだろうからだ。

「シャクナゲのゴーサインさえ出れば、彼はいつでも動くわよ？まぁその結果、相手が負けを認めた段階で、どれだけその班が原型を残しているかは甚だ疑問だけれど」

「ヨツバさんは手加減って言葉を知りませんからね。でもこんな内乱ごときで戦力を散らすなど、出来れば避けたいというのが本音です。あの方には示威戦力としてずっと大人しくしてて頂きたいところなのですが……そうもいかないかもしれません」

「そうね。シャクナゲが地下に潜っている間、ずっと水面下で行動をしているだけにはならないと思うわ」

本当に困ったモノだ。そうアオイはつくづく思わされる。

戦力が足りないワケではない。それを使いうる人材がいないワケでもない。備品や武器などの資材がないワケでも、糧食が足りないワケでもない。

むしろその逆だ。戦力に至っては『あり過ぎて困る』。

一つの班としては他を圧倒するほどの力を保持している。恐らく他班が認識している戦力などより、よほど大きな力を三班は保持しているだろう。

準備をしてきただけあって、資材に困る事もない。今後援助なく戦闘が続けられても、一年は余裕で凌いでいける自信がアオイには

あった。
問題なのは、その戦力を上手く調節する事だ。あまり三班の力を見せつけ過ぎないようにする事が難問なだけだ。
『水鏡』と『不貫』だけでも、実際のところ一つの班に対抗しうるだけの力があるのに、今では『紅』までいる。
対抗勢力としては一番手に来るであろう五班ですらも、自分が『恋人』と共に『幻影』の相手をする以上、対抗勢力として見れば脆弱だとすら言えるだろう。

……他班のように、黒鉄内だけに注意を向けられたならば、だ。

「……内憂外患に加えて、前門の虎、後門の狼。東からは狂気、西からは『学園』と『水賊』。あぁ、北からは長尾も来ますね」

考えれば考えるほどに頭が痛くなる。口に出せばなおさらだった。
今後黒鉄の戦力を上手く纏めていく為には、あまり勝ち過ぎてはいけないという条件がある事まで考えると、彼は目眩まで起こしそうになる。
なにしろ三班は恐れられ過ぎてはいけないのだ。それを彼が仕える長は望んではいない。
たった一人であっても、黒鉄の全てを相手取れるだけの力を持つ『最初の黒鉄』が、本当はどこまでも甘く、どこまでも弱い事を彼は知っている。
その男が、強大過ぎる一人の力が、他の人間をいかに狂わせていくかという事をよく知っており、それを恐れているという事も知っている。
そして自分が、そんな男の望みを叶える為にここにいる事も、そんな立場が案外気に入っている事も自覚はしていた。
しかし、それを自覚しているからこそ、彼が愚痴を言える相手が同じような苦労を背負う女性しかいないのだと思うと、さすがに今

のように陰鬱な気分になってしまうのだ。

「……これがあの人が再び目覚めた事に対する最初の試練なんだとしたら、いくらなんでも難易度が高過ぎませんかね、アカツキ」

そう、言っても仕方ない事だと自覚しながらも、自分以上に策士で、自分が従う長以上に甘い金色の男に対して、思わず恨み言が漏れてしまうほどに。

2－6・百識と東幻の邂逅（後書き）

「私の普段の職務は、あの人が無作為に作りまくった貸しを、適正な勘定で徴収する事がメインなんですよ。貸しを作りっぱなしだと、対等な関係は作れないでしょう？」

「そう言えばカクリも、前にあんたに仕事を押し付けられた、とかなんとかブツブツ言ってたような気がする」

「それは多分、二班の紅と四班の蒼が、民政部の真ん前でいつもの小競り合いをした際に、ビルを一棟きれいに更地にした時の事でしょうね」

「うぅ……、そう言えばそんな事もしたような気もしなくもない」

頭を抱えたくはなったが、なるほどと納得する節もあった。
いかに使用されていないビルとはいえ、やりすぎた感があった割には、お咎めが甘かったハズだと思ったのだ。
数ヶ月の禁固刑くらいは覚悟していたのに、三ヶ月の減俸と厳重注意だけで済んだ裏には、そんなやり取りが副官同士の間であったのだろう。

「まぁ正確には、スズカさんが『カーリアンを助けてあげて』と泣きついてきたのが発端で、あの人は純粋に善意だけで動いたつもりなんでしょうけど」

「……それをあんたは、勝手に貸しって形にしたってワケ？」

原因は自分の事ではあったワケだが、善意を裏で貸し借りにしているやり方には納得がいかず、カーリアンの口調は思わず咎めるようなモノになる。
しかしアオイは、全く悪びれる事なく言葉を続けた。

「そうしなければあの人は潰れてしまいます。なんでもかんでも善意だけで引き受けて回って、誰かの為だけに働き続けてね」

そこで少しだけ間を置くと、小さく肩をすくめて嘆息を漏らす。
見慣れた、彼らしい飄々とした笑みを浮かべたままで。

「あの人に借りを作ると『高く付く』という認識が必要なんですよ。そうでなければ、誰も三班班長という立場を重く見る事は出来ないでしょう。本当の意味で信用も出来ないと思います。無償の善意ほど、今の世の中信用出来ないモノはありませんから」

確かに正論かもしれない。そう彼女でも思った。

「あんたが代わりに憎まれ役をやってるって事？」

「望んでそうしています。所詮副官なんて、班長を立てる為の土台であればいいんですよ。私はただの土台でありたいんです。まぁ、シャクナゲは弱点だらけですけど、だからこそ土台としては支え甲斐がある人なんですよ」

そう笑ったアオイが、本当に誇らしげに見えて――

「あたしも支えるよ、あたしなりのやり方でさ」

彼女も小さな笑みを返していた。

2―7・壊れきった不貫の楯

彼は自分が一番強いという事を知っていた。
自分が最強で最狂、そして最凶なんだと。
噂に流れるように、『シャクナゲ』や『スズカ』などではなく、自分こそがそうなんだという事を、漠然とながらも確信していた。
そして黒鉄の中で一番異質な存在も、彼ら『元皇』の二人などではなく、一介の黒鉄でしかない自分なのだという事も。

彼には怖いモノなど何もなかった。死ぬ事は怖くなかったし、失う事を恐れたりもしない。
善意も悪意もなく、常識も倫理観も全てが欠如して、なにもないただの力の塊。
それが『彼』。
彼は赤ん坊でも必要ならば殺せた。誰もが憎むような極悪人でも必要なければ殺さなかった。
ただ『敵』だけを全て殺し、『敵』だけは誰一人として逃がした事がない。
自らは何も持たず、何も求めない。
そんな存在を壊せる者などいるワケがない。殺せる者も存在はしない。
何故なら、元から壊れきっているモノは、どうやってもそれ以上壊せないのだから。元から生きてはいないモノを、どのような手段を用いても殺す事は出来ないのだから。
だからこそ、誰を敵に回しても自分が負ける事は有り得ないと彼

は知っていた。
元から壊れきっているからこそ壊せない。
それが『不貫』のコードフェンサーなのだ、と。

一人である事にももう慣れた。孤独を費やす術も得た。
『三班の楯』『不貫』と呼ばれ始めてから、多くを殺し、壊してきたが、それに対してもなんの感慨も浮かばない。浮かんだ事がない。思い返す価値すら見いだせない。
罪悪感も、嫌悪感も、葛藤も、悲哀も、絶望も、彼には皆無だった。
善意も、好意も、熱意も、歓喜も、希望でさえも、彼の中には根付いていなかった。
何故なら彼は、本当の恐怖を知っていたから。
嫌悪も葛藤も悲哀も超え、善意も熱意も希望をも砕く、本物の絶望を覚えているから。
だから彼はいつも一人だった。孤独を望んだ。
彼を知る者の中には、彼の強さ故に勘違いをしている者もいるが、彼が身を置いている立場は、『孤高』などと言った言葉で取り繕えるモノではなく、純然たる孤独だった。
そんな彼に話しかけてくる者は、同じ三班の中でも、彼と同じく『本物』を知る人物だけだ。
本物の絶望、本当の孤独を知る二人だけ。

不貫のヨツバにはなにもない。同じ境遇の二人……『シャクナゲ』や『スイレン』のように、今の現状に対して足掻いているワケでもない。抱えているモノは『零』だった。
彼はいつも暗闇を歩き続けているだけ。いつでもいつか来るであろう終わりに向かっているだけだ。
いつ、どんな場所で訪れるかも分からない終点。彼が今現在従っている男がいなければ、とっくの昔に迎えていた終わりの場所へと、

無作為に歩を進めているだけでしかない。

『俺がお前に意味のある終わりをやる。お前だけが生き残ってしまった意味を俺がやる』

絶望に沈んでいたハズなのに、そんな言葉を何故か信じてしまったから、その見えてこない終点を目指して、ただ歩いているだけに過ぎない。

彼には何も見えていない。何も見る必要がない。

何故なら、目に見える範囲に求めるモノが転がっていない事を彼は知っているから。

彼は他人の命になんの価値も見いだせない。

何故なら、今の彼は自分の生き残ってしまっただけの命にも、なんの価値も見いだせないのだから。

彼はただの楯で、目的を達した際には……つまり終わりがきてしまえば、壊れてしまうだけの存在。

何かを……あるいは誰かを守った代わりに、自らが壊れてしまうだけのモノ。

そう、壊れるに値する場所と価値を見いだすまで、彼はただ『不貫』であり続けるのだ。

流麗な笛の音が夜の闇の中に響いていた。

それは精巧に作られた竹笛の柔らかな音色のようでありながら、精緻なリズムで空間に刻まれていく。

その音色に対する聴衆はなく、いるのは数匹の野良猫のみ。

その場所が、黒鉄第三班本部の裏口……もっと言えば、『現状の黒鉄では孤立している第三班の入り口』の一つである事を考えれば、余りにも人気が無さ過ぎるとすら言えるだろう。

辺り一帯に敵がいる事を考えれば、口笛を吹いているだけの男がたった一人しかいない現状は、警戒心が無さ過ぎるとすら言えるかもしれない。

そう、精緻で情感溢れる笛の音は、男が奏でる口笛によるモノだった。

高価な楽器を使っても、ここまで見事な音色を奏でるには、相当な修練がいるだろう……そう感嘆させうるだけの音色を、彼は数匹の猫だけを観衆に奏でていたのだ。

その両の眼を堅く閉じて。

空に浮かぶ半月を見上げるようにして。

傷一つない、どこか人形じみた面もちの男は一人、どこまでも一人で、その空間に存在していた。

「ここは通行止めやで」

それまで頭を下げ、ただ男の聴衆に徹していただけの一匹の猫――漆黒の毛皮を持つ野良猫が、その寝そべっていた態勢から顔をあげ、背後にその金の瞳を向けたのと、その男が口笛を止めて少し先にそう声をかけたのは、ほぼ同時の事だった。

その声は、男性にしては高くとても済んでおり、先ほどまでの口笛の続きであるかのようであった。

決定的な違いがあるとすれば、その声には口笛に含まれていたような情感が、すっぽりと抜け落ちていた事だろう。

その上、男はそう声をかけただけで、閉じられたままの瞳を開く事もせず、目蓋越しに月を見上げる事を止めもしない。

それでも口笛を再開する事はなく、口笛の残り香にも感じられる

ヒュッと掠れるような音を上げる。それがなんらかの合図だったのか、単に別の誰かの気配をこの場に察したからか、猫達はのっそりと立ち上がると、闇に紛れるように立ち去っていった。

「……ここはあなた一人だけですか、ヨツバさん？」

「俺が通行止めや言うたら、ここは絶対に通れへんねん。せやったら人数なんかいらんやろ」

闇に紛れるように、ゆっくりと現れたのは小柄な少女だった。ピンクの髪をローツインに纏め、タンクトップの上から薄手の丈の短いポンチョを羽織っている。その裾に隠れるオレンジ色のホットパンツと、お洒落なスニーカーは、見るからに動きやすそうな格好で、剥き出しの腕や太ももは健康的な魅力に溢れていた。

「四班のサクヤです。今の混乱を一番手っ取り早く解決する為に、こんな夜分に失礼させて頂きました」

「四班のサクヤ……あぁ、おったな、そんなコード持ち」

響音のサクヤ――三班の『音速』に次いで若い、年少のコードフェンサーに、ヨツバと呼ばれた青年はこともなげにそう返し、月を見上げた姿勢を崩さないままその片腕をヒラヒラと振ってみせる。それは手招きをしているワケでもなければ、挨拶をしているワケでもない。明らかに『シッシッ』と猫でも追い払うような仕草だ。しかも彼が、猫をこんな風に追い払わない事は、先ほどの猫達の様子からしても分かる。

そう、彼の言葉遣いからも明らかだったが、その仕草ですらも彼は少女を対等の相手として扱ってはいなかった。

それが分かり、サクヤは思わずギリッと歯を鳴らして噛み締める

が、何度か深呼吸を繰り返してから落ち着いてみせる。

「私もコードフェンサーです。今の状況で通さないと言われて、『ハイ、そうですか』と帰るワケにはいきません」

「帰らん言われてもな。一番手っ取り早い手って、つまりは原因の削除……あの人の暗殺やろ？それが分かっとって、『不貫』の俺がここを通すワケないやろ」

「通してもらいます。このままだったら、ウチの姫がシャクナゲと戦う事になっちゃいます。そんな事になったら姫がかわいそう過ぎます！」

激昂するように、でも声を静めたまま言葉を漏らす少女に、ヨツバはようやくその閉じられたままの視線を彼女へと向ける。

それでもその顔には、表情を表すモノなど微塵も浮かんではいない。

「だから今のうちにあんたが……て事か？その決意は立派やけどな、結果は見えとる。俺がここにおらんでも、あんたじゃあの人には勝てん。決意だけが先行した犬死にしかならへんわ」

「私をあんまり甘く見ないでください！私は絶対の覚悟を持ってここに来たんです！どうあっても通さないと言うのなら、私の力を持って押し通るまでっ！」

「……絶対の覚悟？笑わせんな。絶対なんてモンはあらへん。そんなモンあるワケないんや。あんたが絶対通る言うてもな、俺がここは通さへんって言うたら――」

感情を高ぶらせる少女と、どこまでも起伏のない青年。その間には少女から向けられる戦意だけが高まっていき

「――通るん諦めてとっとと去ねや」

そして一気に萎んでいく。

青年は別に威迫したワケでも、荒々しく恫喝したワケでもない。もちろん力を持って黙らせてもいない。

ただ淡々としたまま自分がここにいる意味を、改めて告げただけだ。

そう、決して『貫く事が不(なら)ない』三班班長の楯としての立場で。

同じ『コード持ち』という同格の立場が邪魔をして、自分が『通さない』と言った言葉の意味が分かっていないらしい少女へと向かって。

「俺が通さん言うたら誰も先には通れへんねん。通るんを素直に諦めるか、命落として通るん諦めさせられるかしかないんや。他の選択肢はあらへん。それが例えあんたんとこの班長でも、五班の班長でもな」

サクヤは、絶対の覚悟を持ってここにやってきたつもりだった。

まだコードを持って一年。四班が出来てすぐに副官に抜擢されてから、一年しか立っていない。それでも自分が支える班長には信頼を置いていたし、信頼されているとも思っている。

決して副官として見れば有能とは言えなくても、自分なりに一生懸命にやってきたこの一年を、誇りにすら思っていた。

意外と子供っぽい班長には、なんだかんだで振り回されてばかりの一年ではあったが、その班長の側が自分には居心地のいい場所だった。

その班長が、三班の『シャクナゲ』に拾われて黒鉄にやってきて

以来、ずっと好意を寄せていた事をサクヤは知っている。
それだけに、今の状況でどれだけ班長が傷ついているかを考えれば、サクヤの方が泣きたくなる程だった。
この先実際に三班と刃を交えれば、恐らくシャクナゲとぶつかるのはその班長だろう。なにしろ『蒼のオリヒメ』は四班で一番強いのだから。
サクヤが信頼する彼女は、その事実と四班の長という立場から、そうせざるを得ないのだ。
黒鉄最強であり、『元ヴァンプの王』でもある三班班長が万全ならば、副官でしかないサクヤや、もう一人のコードフェンサー『スクナ』では、あまりにも勝ち目が薄すぎる。
それがオリヒメにも分かっているだろうから、『黒鉄』には『蒼』が当たるしかないのだ。

もし『シャクナゲ』が万全ならば、だが。
そう、今のシャクナゲは決して万全などではないハズだった。
仮にも『将軍』とまで呼ばれた関西のヴァンプの王とぶつかり合ったなら、無傷でいられるワケがないのだ。
だからこそサクヤは、今この時にこの場所へとやってきた。
そう、今の混乱の元凶たる『彼』を討つ為に。今ならば……今でなければ、自分が勝つ事など有り得ないと考えて。相討ちぐらいにはなんとか持ち込んでみせる、そう見積もって。

しかし――

「俺の担当はお前ら四やない、一や。やから敵対しようとしてても、今ならまだ見逃したる言うてんねん」

――甘かった。
どこまでも見積もりが甘かった事を、サクヤは痛感させられる。

「でもな、別に俺の相手はお前ら四でもええねんぞ？」

自分が『不貫』と『水鏡』に勝てるなどとは思っていなかった。でも、彼らを夜闇の中で煙に撒いて、突破ぐらいは出来ると考えていた。

自分も彼らと同じ『コードフェンサー』なのだから。同じように力ある人間だと認められた存在だったから、そう思っていたのだ。

「今でももう十分我慢したっとんや。シャクナゲの命令に対する義理は立っとる。次は言わへんぞ、とっとと去ね」

それが勘違いだった事を理解させられる。

単なる甘さでしかなかった事を痛感させられる。

『響音』たる自分では、三班の『不貫』を相手にして、相討ちにすら持ち込めない事が分かってしまう。

何故ならば、彼はずっと一人だったから。

今までどんな作戦の時でも、たった一人っきりで行動してきた事を、サクヤは知っているから。

その彼が、『一班を相手取る予定だ』という事は、彼は一人で黒鉄の一つの班を相手にするつもりだという事に他ならない。それなのに今向かい合う男からは、それに対する気概もなければ気負いも見えない。ごく当たり前に、割り当てられた一班をたった一人で相手取るつもりでいるのだ。

「……お迎えも来たみたいや。良かったな、帰る理由が出来て」

その言葉を最後に、彼の視線――閉じられた目蓋越しの視線は、

再び上空へと向けられた。
そう、サクヤの背後から駆けてきた、彼女が信頼する『蒼』の気配ですらも、全く相手にしていない素振りで。

「サクヤ！やっぱここに来てたんやな！勝手な行動は……って不貫！？あんた、まさかあいつにケンカ売ってたんちゃうやろな？」

相変わらず瞳を伏したままで、気を張り詰めていたサクヤよりも早く、近づいてくる気配に気づいた事からして異常だった。
そして、夜も更けた頃にいなくなったサクヤを心配したのであろう蒼でさえも――敵対する四班班長を確認してさえも、全く動揺していない事も異様だった。
むしろ蒼の方が動揺しているぐらいであり、そこになんの違和感も感じられない点がサクヤを混乱させた。

「まだなんもしてへん。アホな事言いよったけど、まだ我慢効く範囲やったし、手はまだ出してこんかったから、俺も手は出してへん。でもこれ以上ここらうろつきよったら……俺に対する宣戦布告やとみなすぞ」

そう、不貫はどこまでも四班の二人を相手にしてはいなかった。
対等どころか、敵だとすら認識していなかったのだ。
単にサクヤとオリヒメが、自分が担当する一班の連中ではないから、というだけの理由で。
もし彼の担当が四班だったら……そう考えると、サクヤには最悪の末路しか思い浮かばない。
彼女はすでに――僅かに相対し、言葉を交わしただけで、その男に呑まれていたのだ。

「……行くよ、サクヤ」

「さいなら。もう来んなや」

「……ウチもあんたとは会いたないわ」

その言葉を最後に、サクヤは蒼に引かれてその場を後にする。

全く相手にされないまま、不貫というコードを持つ男の『異質さ』だけが心にしこりとなって残ったままで。

「不貫のコードフェンサーは敵にしたらアカン。あいつの事はよう分からんけど、あいつはウチらとどっかが違う。『何か』が違うんよ。副官のあんたは、今まであいつに会った事もあるし、それは分かってると思ってんけどな」

「……あいつ、なんなんですか？『あれ』って、なんなんですか！私と同じコードフェンサーなのに、なんで――」

手を引いて、足早にその場を後にするオリヒメに、サクヤは思わず食ってかかるような物言いをしてしまう。

色々考え過ぎて、気が逸ってサクヤでも、彼が自分に注意を向けたその瞬間に悟らざるを得なかった。

防衛班という後方に位置する班に所属してはいたが、それでも何度かの激戦を経験してきたからこそ、『不貫』を冠する男の持つ異質を。

――不貫は誰にも興味を示さない。悪意も戦意も殺意も持つ事はない。殺す相手になんの感情も抱く事なく、敵は全てを殺す。

ヨツバは楯としての役目を持っただけのただの殺人機械だ。

そんな都市伝説にも近い噂が、限りなく事実に近かったという事を。

自分に向けられた意識の中に、僅かたりとも感情が含まれていなかった事を。

あの男には、戦場で嗅いだ事のある『狂気』や『憎悪』がないのだと。

いやそれどころか、そういったもの含めた人間の持つ感情の全てを、あの男は何一つ持っていないのだという事を、向かい合った瞬間に分からされてしまった。

伏せられたままだったその瞳の奥に、あらゆるモノを移さず、飲み込んでいく乾いた砂漠色の瞳を見たような気すらした。

「あいつにだけは目を付けられたらあかん。あいつは絶対に敵を許さんやつやから。絶対に敵を殺し尽くすまで止まらんやつやから。あいつに目を付けられたら、それはもう死神に目を付けられたようなもんや。やから三班の敵に回っても、あいつの敵にだけは回ったらあかん」

そう言ったオリヒメ――『蒼のオリヒメ』の手は汗ばみ、わずかに震えていて。

背後から迫る何かに怯えるかのように、ただ前へと歩を進めていて。

サクヤも体の震えが止まらなくなる。頭から血の気が引き、体を包む強烈な寒気に吐き気すら覚える。

――蒼は、四班では三班に勝てない事を知っている。そうサクヤは思った。

それでも許せなくて、混乱してしまって、周りの意見を気にしてしまって、三班を向こうに回すしかなかったのだ、という事が分かってしまった。

だからこそ、今まで防衛網の構築にのみ労力を割いて、周囲に対して出来うる限りの『時間稼ぎ』を試みているのだと、理解してしまったのだ。

そう、単にシャクナゲに対する恩義や思慕の念だけで、彼女は攻撃に移らなかったワケではないのだ、と。

「あいつが一班を相手に回すって言うたなら……もう一班は終わりや。それをあの連中が分かってるんか分かってへんのかは分からへんけど、あいつらはもう死神に目を付けられてもた」

死神――。

その表現をサクヤは笑う事は出来なかった。

何故ならその『称号』は、先程向かい合った青年にどこまでもピッタリと当てはまっていたから。

「……ウチらはね、絶対に勝てん戦いをしてる。勝てん戦いをしてるんよ」

その言葉が、今の今まで大した動きを見せなかった蒼の心情を表していて。

今のサクヤの考えをも現していた。

何事かを話しながら去っていく二人を見送って、ヨツバは小さく溜め息をもらした。

「暇になってもたな」

別にそれを苦に思ったワケではなかった。
それは彼にとってみれば、特に憂慮するに値しない些末な事柄だ。戦場で過ごす一時間も、退屈に過ごす一時間も、彼からしてみれば特に変わりのない一時間に過ぎないのだから。
ただなんとなく何もする気にはなれず、半月が浮かぶ空を閉じられたままの瞳で見上げ続ける。そしてその端正な顔立ちにかかるほどに長い髪を、そっと夜風に流しながら細い指を空へと伸ばした。

「言われた通り手は出してへん。これでええんやろ」

「……ええ。彼女は私達と率先して争うつもりがないみたいだから」

背後になんの気配もないまま現れた女性にも、顔を向ける事はせず、ただ真っ直ぐに空へと手を掲げ続ける。
今も気配一つ感じられない女性――『水鏡』に、なんの興味も関心も示さない。
相変わらず彼はただあるがままを受け入れて、ただ気の向くままに行動して、誰にも寄りかからずにそこにある。恐らく今月に手を伸ばしているのも、昔からシャクナゲがそうしていたのをたまに見てきたから、なんとなく自分も伸ばしてみたくなった……というような理由に過ぎないのだろう。
それをスイレンは少しだけ苦々しく思ってしまう。

彼からは相変わらず生きている気配がしないのだ。今の彼女のように、視覚の中だけにその存在を現しているワケではないのに、全くといっていいほどに生気がない。
必死で足掻いて生きている三班のメンバー中でも、二代目の不貫は明らかに異質な存在だ。
綺麗な音楽の中にある僅かな不協和音が気にかかるように、彼の

存在そのモノが不協和音として気にかかるのか、あるいは自分に匹敵しうる彼が本能的に気にかかってしまうのか……それは水鏡と呼ばれる彼女にも分からない。

ただ画用紙に一滴落ちた黒いインクのように、彼には気にかかるような部分があったのだ。

「……全く、こんな風に現れても二人揃って驚かないんだから、少しだけ自信をなくしちゃうわね」

「あんたはそんな人やって知っとる。あんたは一人しかおらんけど、どこにでもおる。あっさりと霞んでまう水鏡のように虚ろやけど、あっさり消えてまうほど弱ぁない。ここにおっても驚く必要はあらへん」

「あっさりそう納得されちゃってるから自信をなくしちゃうのよ」

「……そうか」

相変わらず顔を向けない青年に、スイレンは小さな笑みを漏らしてみせる。

「あなたは変わらず待機よ。入り込んできた相手は好きにしちゃっていいから。でもなるべくは殺さないであげてね？」

「まぁ、努力はするわ」

「……うそつき」

そんなやり取りを最後に、その空間にはまた男が一人だけしかいなくなる。

無表情に、無感情に、無愛想と言えるほどの色もない、無色透明をイメージさせるような男だけが残る。

辺りに響くのは流麗な笛の音と、郷愁をさそう半分に欠けた朧月。それに手を真っ直ぐ伸ばして……何かを求めるかのように伸ばして、男はその手を握りしめた。

まるで欠けた朧月ごと、望んでいたモノを閉じ込めてしまうかのように。

2―7・壊れきった不貫の楯（後書き）

ヨツバについて。

ヨツバが口笛を吹いている設定は、平敦盛の『青葉の笛』から取りました。
青葉↓四つ葉のイメージで。
この人に関してはまだ全然何も出てませんが、ちゃんとエピソードや今後についてもしっかりと決めている、数少ない人物です。
割と書いていると感情移入してしまうクチで、元の設定から変わってしまう事がたまにあるのですが（といっても大筋に影響出ないようには心がけています。影響出そうでかなり変わった部分は、一部ラストの将軍と右近についてぐらい）、この人は絶対に変わらないだろうな、と思います。
スイレンやオリヒメなどは、多分今後次第で結構変わりそうですし、スズカやカーリアン、シャクナゲでさえ変わるかもしれません。
何気にスズカとスイレンさんは書いている間に、思っていた以上にお気に入りになってますしね。

でもこの人は変わらない。変えたくないと思っています。
これぐらいしっかりとエピソードや行く末が決まっているのは、ヨツバとアオイとカクリ、後はラストの敵性存在ぐらいです。

今回と前回は、もう裏方話と化してますが、書いてて結構楽しかったです。
今回はかんなり書くのに手間取りましたし、色々変な箇所があるかと思いますが、苦労だけは二部史上最大でした。
まぁ、二部自体十話も行ってないんですけど。

何か気にかかる点等ありましたら、ぜひお知らせ下さいませ。

最後に。
気付いたら、お気に入りにしてくださっている方が結構増えてました。
全くもってありがたい事です。
それがノクターンを書く意欲に繋がって、ストックが溜まった理由なのは秘密です。
感想なくてもテンションは全く下がらないのに、あれば上がるのが我ながら不思議です。

本来はあとがきに台本調の話、座談会みたいなのをしてみようかと思っていましたが（台本調ってのはあれです。
カーリアン「」
みたいに名前を付けて、会話をメインに書くやり方です）、非常に向いていないみたいで苦労しています。
多分挫折しそうなので、もし折れちゃったら、次は前話みたいに前後編で小話を載せます。

……こっちは簡単に書けるんですよね。

2―8・紅と元副官の現実

「……おかえり」

カーリアンが黒鉄第三班の班長室からあてがわれた自室へと戻ると、向かいの部屋をあてがわれているハズの小柄な少女……元二班副官のカクリが、いつも通りに部屋へと入り込んでいた。

この白髪の少女は、最近何故か自らの部屋ではなく、カーリアンの部屋で様々な執務を行う事が多い。二班にいた頃もたまにそういう時があったが、三班本部脇にある事務棟に二人が部屋をもらってからは、ほとんど毎日のように彼女の部屋に居座っていた。

「ただいま。今日も忙しそうだね」

「……おかげさまでね。……全く、頭が痛いわ。……今にも過労で倒れそうよ」

今日も部屋に置かれているちゃぶ台に様々な書類を広げまくりながら、顔を合わせるなりこれ見よがしな溜め息を吐いてみせる。

小柄で真っ白な髪。その髪にも劣らない、透けるほどに綺麗な肌を持つ少女は、相も変わらず無表情を保ったまま、ちゃぶ台の脇にぺたんと座り込んで、せっせとなんらかの書類へとペンを走らせている。

「……二班の半数はこちら側に引き込んだけど……残りはもう無理

ね。……あとは頭がガチガチ。……どうしようもないわ」

「あ、あはは」

「……いきなりあなたが解散宣言なんてするから。……私に任せてくれれば……せめてもう少し順序を踏めば……二班はほとんどそっくり持ってこれたのに」

スッと視線を逸らせ、頭をポリポリと指先で掻くカーリアンに、いつになく冷たいカクリの言葉が突き刺さる。

視線を逸らしているのに、少女の怜悧な視線に突き刺されているかのような感覚を覚え、カーリアンは思わず小さく身震いをしてしまう。

「だってさぁ。カクリに『三班に入る』なんて言ったら、絶対反対されるって思ったんだもん。だから二班を解散させて、班長って役割を無効にしようかなって」

「……はぁ、あなたって子供みたい。……確かに反対はしたわ。……多分あなたを説得しようともした。……でもあんな真似をされるぐらいなら……許した方がまだマシだった」

ジトッと見つめてくるカクリに、カーリアンは思わず一歩下がってしまう。

最近顔を合わす度にこんな会話を繰り返してきたのだ。いい加減聞き飽きてしまうぐらい同じ事ばかりを繰り返されていれば、いかに元上司にして今も上司という立場があろうとも、立場的に弱くなるのも仕方がない事だろう。

先の一件――関西西部地域と中国地方を抑えている関西軍のトッ

プである『将軍』が、『黒鉄のシャクナゲ』に敗れた一件は、地方一帯どころかこの国中を揺るがした。

まず北陸地方の勢力が、再び版図を広げようと関西地方北部へと南下を始め、古都と名付けられた街へと攻撃を開始した。

東海の勢力は西へと侵攻を始め、関西東部地域に軍勢を進めており、こちらは山都と名付けられた都市の軍勢をすでに撤退に追い込んだらしい。

もっとも山都の軍勢を撤退に追い込んだのは、東海の軍勢ではないとの噂もあり、カクリにはその真偽を確かめるすべがない。ひょっとしたら……と考えている可能性はあるが、それも確かめられてはいないのだ。

中部地方の勢力は今だに沈黙を守ってはいるが、いずれは勢力が関西に向いている北陸か東海へと攻め込む可能性が高い。また関西東部に向かい、三つ巴の激戦区と可能性もある。

関西の各地はそれぞれその地域のトップだった知事が、そのまま権力を握り、地域ごとの争いが日常化しはじめた。

かろうじて他勢力が侵攻を開始した東部地域の三大都市、山都、白都、光都の軍勢は、協調態勢を見せているらしいが、それもいつまで持つか……とカクリは考えている。

東部の前衛都市である山都が落とされた事により、混乱が広がっており、他勢力に恭順の姿勢を見せるのも時間の問題だろうと考えているのだ。古都の知事はやり手だと聞いているが、正直後援もなく戦うのは厳しいと言わざるを得ない。

また西へと追いやられた日本政府も、再び本州へと手を伸ばそうと中国地方に進出するであろうし、それらの各勢力の動きの果てに、近年ずっと動かなかった『関東軍』が動き始める可能性も高い。

そう、『新皇』が――いや新皇達が、今は関西にいるかつての仲間の噂を聞けば、動き出す可能性が高いのだ。

当然各勢力の動きについてはこの街にも入ってきている。

しかし、この街の勢力は外に視線を向ける余裕などない。
この街――中でもこの街の軍部とも言えるレジスタンス組織『黒鉄』は、未曾有の混乱の最中にあったからだ。
最精鋭部隊とも呼ばれた『第三班』を中心とした混乱に。

そんな中でも、元二班副官であったカクリは、色々と画策や根回しをして、第二班をまるまる手元に残したまま、カーリアンが望むであろう事柄に備えようとしていた。
同志とも言える信頼出来る仲間達に指示を出し、自らも裏で暗躍して、二班内で発言力の高い人物に色々な手を打ってきた。
流言飛語を流し、周りから孤立させたり、逆に二班副官として取り立ててみせたり、あるいは話し合いの余地がある人物には、最大限に時間を割いて真摯に向かい合ったりもした。もちろん権限や不当な蓄えを使っての買収もしたりしたが。
そんな全ての事前努力を、当のカーリアン本人にいきなり壊されてしまっては、くどくどと文句ぐらい言いたくなるのも無理はない。

『二班は解散！これからも医療班だった事を忘れずに、みんながみんなのやれる事を頑張ってね！あたしは三班に付くから！』

二班の面々を集めたかと思えば、あっさりとそう言ってのけた彼女の姿は、『カーリアン好き』では人後に落ちないであろうカクリでさえも、トラウマとなりかねない出来事だった。
不幸中の幸いだったのは、その今までにない真摯な宣言と裏のない在り方で、同志達の結束が高まった事と、何人かの仲間達が付いてきてくれた事ぐらいだろう。

「……全く、忙しすぎてご飯を食べる時間も惜しいわ」

二人の部屋と化している班長補佐・私室で、おもむろに備え付けの台所に立つカーリアンへと、カクリは聞こえよがしにそんな事を呟いてみせる。自ら縫って作った青と白のストライプ地のエプロンを纏ったカーリアンに、無言の催促をしているのだ。

「シャクにお弁当作るからさ、それと一緒でいいよね？」

「……卵焼きは甘いのがいい」

「了解」

もちろんそんな催促などこの班長補佐に通じるワケもなく、当たり前のように元から二人分の食事と、一人分のお弁当の用意をしてはいたが。

――カーリアンって何回見ても意外なんだけど、家事はなんでも出来るのよね……そんな事を呟きながら、カクリは目の前の書類へと向き直る。

『シークレットクランからのサルベージした情報概要』

そう上げられた書類は、秘密裏に交渉を進めていた黒鉄第六班副官・マルスより送られてきたモノだ。

「……向こうも余裕がないのかしらね」

――それとも六はまだ芽があるのかしら？

そんな呟きと共により思考を巡らせていく。

シークレットクラン。
それは『情報班』である第六班の虎の子と言っても過言ではない存在だ。戦力が医療班であった元第二班を除けば、一番弱い班の存在理由と言ってもいい。

（完全に敵味方に別れたと思っていたけど、六班はまだ揺れている？それともこれは『無能』の策略？）

パラパラと書類を流し読みしながらも、所望した情報が送られてきた意味を考える。

副官補佐としてのカクリが一番警戒しているのは、第五班の『幻』だ。当面の敵対者である一や四よりも、ずっと『幻影』を冠する女を警戒している。副官であるアオイと協議した結果、彼も同じような考えだとの確信もある。
だが、二番目に警戒しているのは、はっきりと敵対してはいない六の副官、唯一シークレットクランの深部を読み解いた『風塵』のマルスだったりする。
副官であるアオイなどは、ある意味幻影よりも高く彼を評価していた節がある。
そんな彼が、こうもあっさりと切り札を……まぁフェイクも織り交ぜた断片に過ぎないだろうが……切ってきた意味が分からない。
カクリとしてもダメ元で、探りの意味で掛け合ってみたに過ぎないのだ。

「カクリぃ～、今度塩申請しといて！切れちゃった」

「……分かった。……あとは？」

「卵も。魚しめる酢も欲しいかな」

「……酢、一応伝えとく」

――分からない事は後に回すべきね。

そう結論を後に回し、台所に立つ彼女の元へと歩いていく。

後ろで一つにまとめた紅の髪を、馬の尻尾のように跳ねさせながら料理をする少女。仕上がっていく料理のいい匂いに誘われたのもあるが、疲れ果てた心がその後ろ姿から得られる『癒やし』を求めたのも間違いない。

「……随分上機嫌みたいね？」

「んっ？そかな？」

台所とは言っても、ガスもなければ当然冷蔵庫もない。水道だけは、氷を操る能力者や水の能力者がその能力で雨水やら川の水やらを分解し、蒸留水と化したモノを本拠地の深部に備え付けられたタンクに貯蔵してくれているから使える。だがあるのはそれだけで、台所とは呼べないような部屋だと言える。

まぁ、今料理している彼女に限って言えば、『火』だけは困る事がないから、十分台所の役割を果たしているが。

「う～ん。やっぱ冷蔵庫欲しいね。火力発電とかに定期的に協力してんだからさ、見返りを回してくんないかなっと！」

そんな事をボヤキながらも、見事なフライパンさばきでいい色に焼けた卵焼きをくるりと返す。その手が直接フライパンのふちを握っているだけで火元がない点だけは、見慣れているカクリにしてもやはり異様に見えたが。

「……氷の支給、受ける？」

「いいよ、そんなもったいない真似。使う分だけその都度食堂に取りにいくからさ」

冷蔵庫という名前だけの箱は、文字通りこの部屋ではただの箱に過ぎないが、氷の支給さえ受ければクーラーボックスの代わりにはなる。それをカクリは言っているのだが、その度にカーリアンは『たいてい食堂行くからもったいない』と言って断るのだ。

カクリからすれば、食堂で食べるよりも『大好きなカーリアンの手料理』を毎日食べたいから、たびたびこう声をかけているワケだが。

「あぁ、そうそう。シャクのヤツがまた出かけるって話だけど」

「……出かける？……そう言えば弁当がどうとか言ってたわね。……でもこんな時期に？」

正確に言えば『このくそ忙しい時期に』と言ってやりたいのをぐっとこらえる。彼の『黒鉄のシャクナゲ』は、彼女達が所属する三班方についている派閥では、最大戦力の一人と言ってもいい。

それだけじゃなく、陣頭指揮を執る指揮官としては、全黒鉄を見渡しても最優秀だと言えるだろう。

なにしろ彼が見ているというだけで、他の面々は死に物狂いで戦ってくれるのだ。

正直な話、カクリの戦線予想図の中で、彼と彼が率いる直属部隊が占める割合はかなり大きい。それが一時的であれ抜けるとなれば、理由によってはこれからカクリは班長室に殴り込みをかけなければならないだろう。

「うん。スカシ野郎が残した……ノーフェイトだっけ？それを破壊しにいくって。みんながみんなスカシ野郎の能力を知っちゃったから、誰かが手を出す前に壊すんだってさ」

「……そう言う事は早く言って！」

『ノーフェイト』。

それについてカクリは聞き覚えがあった。ついさっき見た書類の中でも、その項目だけはしっかりと目を通していた。

――出来れば、出来れば見てみたい。

そう思った。

アカツキが恐れ、シャクナゲが破壊ではなく封印してきた存在。新皇を殺す為に作られた遺物。

興味が出てこないワケがない。ひょっとしたらこちらの……『カーリアン側の切り札』になるかもしれない。

そんな思いに駆け出そうとして――

「もうすぐおかず出来るけど食べないの？」

「……食べる。……食堂でご飯貰ってくる」

後でいいか、シャクナゲもすぐには出ないみたいだし……と思い直したのだった。

2―8・紅と元副官の現実（後書き）

スズカさんとシャクナゲ小話。
この組み合わせって、なかなか難しいんですね。関西に来てからだとマズいネタが色々と入りそうなんで、『レジェンド　オブ　シルバーベル』の直後辺りにしてみました。
完璧暇つぶしのあとがきなのに、なんというか色々と悩みました。
前後編に分けます。台本調はすっごく難しい。今回は間に合いませんでした。
今回の表題は『いただきますと半分こ』

「全部食っていいんだぞ」

飾り気のないコンクリートが剥き出しの一室で、少女は黙々と食料を頬張り続けていた。
冷たくなってはいたが、今まであんまり食べた事がないちゃんと味付けのされた食事……色取り取りのコンビニ弁当の数々に、まるで魅了されるかのように、箸を往復させる。
その箸使いはぎこちないモノではあったが、そのスピードだけは弁当の空箱が増えるごとに増していき、ものの数分で彼女はすでに四つ目の弁当に取りかかっていた。
向かい合って胡座をかいている黒髪黒瞳の少年は、ひたすら口に食べ物を詰め込み続ける、少し年下の灰銀色の髪の少女を嬉しそうに見つめ、少女は少年が差し出した食べ物に遠慮がちに手を伸ばしては、それを次々と口へと運ぶ。時折チラッと少年を窺ってはいたが、彼が笑っているのを確認すると、彼女は食事へと再び没頭していた。

「警戒しなくてもいいんだよ。それは全部鈴華の分なんだから」

そう笑う少年は本当に嬉しそうで。暖かい微笑みを浮かべていて。

それでも少女――鈴華はチラチラと少年を上目遣いで見やる。

「……あなたの分は？」

「俺はいいよ。あんまり腹が減ってないんだ」

その笑う少年の言葉に嘘がない事ぐらいは鈴華にも分かった。

広げられているコンビニの弁当には目も向けていないし、鈴華が夢中で食べているのを見ている表情は、本当に穏やかで嬉しそうに見えたからだ。

それでも鈴華と呼ばれた少女は、チラチラと窺うように少年を見やり、最後に蓋を開けた幕の内弁当には手を付けないままで、箸を置くと小さく俯いた。

2―9・未来を留める毒素

「鈴華……」

一人執務室内にある寝台に寝転がったまま、シャクナゲは小さな呟きを漏らした。

それは今、この街にすらおらず、関西の東の果てで、東海から攻め寄せてきているであろう軍勢に、たった独りきりで向かい合っているハズの妹の名前だった。

とても儚い印象と、抱きしめただけで折れてしまいそうな細い体を持つ少女であり、自らを兄と慕ってくれる妹分。

そんな彼女が、東海の狂人と呼ばれている男と向き合っている様を想像すると、彼は心配と焦燥感に胸が掻き乱されるような感覚を覚えてしまう。

彼女の力は彼自身が一番よく知っていた。一度は敵として向かい合った事すらある。

その時は彼女の未熟もあって敗北はしなかった。だがその未熟が成熟した今ならば、恐らく自分には勝ち目などないだろう……彼はそう考えている。

――そう、少なくとも世界を使わない自分では、決して勝てない相手だろう、と。

いや、例え彼の『灰色』を使ったとしても、妹である少女は絶対の勝利が約束出来る相手ではない。

彼女にはあの『具現の灰色』に代わる『拒絶の銀色』があるのだ

から。

「……鈴華。俺の教えた一番大事な事を――最初に教えた事を忘れるな。『アレ』を壊したらすぐに行く」

それが分かっていても……あの銀色の力をよく知ってはいても、かつての『朱色の道』と呼ばれた、狂った男の力も彼はよく知っていて。

「すぐに俺もいくから。だから危なくなったら……勝てないと思ったらすぐに逃げてくれ」

だからこそ、『勝てない時は全力で逃げろ』という教えを、彼女が忠実に守ってくれる事を願う。

新皇という、人の変種の中でも規格外の集まりの中で、最も最悪な力を持っているのは、無色たる『絶対毒の皇』だった。

最も上手く世界を操り、力を制御しきれていたのは、山吹色たる『言霊の皇』だった。

最も戦闘に向いていて、攻撃能力も高い力を持っていたのは、濃紺たる『重力の皇』だった。

最も多彩な力と最も広い領域の世界を持っているのは、灰色たる『鎖の皇』だった。

最も防御力が高く、補助能力に優れていたのは、銀色たる『拒絶の皇』だった。

朱色たる男には……結局は新皇の名前を持てなかった少年には、特筆すべき点は何もない。

最悪と呼ぶには足りず、制御においても甘さがあり、応用を効かすには世界の領域が狭く、その攻撃にも多彩さはなく、防御力にお

いては直接身体に負荷をかけて頼ってしまう分、完璧とは言いがたい。

それでもあの少年は、あと一歩のところまで新皇の領域に近づいていたのだ。いや、仲間達から危険視されなければ、間違いなくその一角に名前を連ねていただろう。

表向きの皇は一人だとしても……一番異常さが目に付く『灰色』だけがそう呼ばれていたとしても、『芝浦尋』も新皇の五人目だとされたハズだった。

何も特筆する部分がない。でも灰色並みに異常な純正型。

世界を持たず、世界と同化した純正種。

それが最も狂ってしまった……最も悪い方向に狂ってしまった『朱色の道』。

重力の皇の猛攻にも、言霊の皇の妨げにも屈せず、絶対毒の皇からも逃げ切った最大の異端者。

恐らく、彼を討つ事に最後まで反対していた自分が参加しても、『朱色』が逃げる事に専念していたのなら、逃げ切ってしまったんじゃないか……そうかつての『灰色』たるシャクナゲは考えていた。

そんな男と向かい合っているかもしれない少女を思い、彼は深い吐息を漏らす。

黒鉄の名前と、かつて灰色と呼ばれた呪縛。

今も昔も、様々なモノに縛られている自らの境遇を、ほんの少しだけ憂鬱に感じながら。

「はい、これお弁当ね」

「ありがとう。地下に入ってから食べるよ」

「あたしとカクリの残り物だけど、出汁巻き辺りは自信作だからさ」

赤髪の少女が手渡してきたハンカチに包まれた弁当箱を受け取りながら、彼はレザーのジャケットを羽織った。

色はいつも着ているコートと同じ黒だったが、ジャケットと白いシャツ、黒いパンツを着込んだだけの今の姿は、断然ラフな格好だと言えるだろう。

何よりその両手には、いつも握っていた『抑制器』がない。

それが、ずっと見慣れてきた姿と大きく印象が違っていて、カーリアンは少しだけ見入ってしまう。

それに気付いたのか、シャクナゲは小さく笑ってみせた。

「今日は三班班長としての自分を、誰にも誇示する必要がないから」

そう言って、小さく肩をすくめる。

その言葉の意味が、カーリアンにはもちろん分かった。

彼がいつも着込んでいる黒いロングコートは、黒鉄という呼び名――あるいはかつての『宵闇』から連想するようにと考えて、あえて着るようにしていたのだろう。

なにしろ『黒鉄のシャクナゲ』と言えば、敵方からすれば超高額の賞金首だ。そして味方からすれば、限りなく頼りになる仲間となる。

それをあえて誇示する事で、敵を惹きつけ、味方を鼓舞していたのだろう。

なにしろ彼女自身が、彼と一緒に関西軍の侵攻部隊と戦っていた際は、彼が翻す黒い外套をつい探してしまっていた事を覚えていた。

「……ゴホン、オホン！」

思わずシャクナゲを見つめているカーリアンを見て、隣に立っていたカクリはわざとらしい咳払いをしてみせる。

それに我に返ると慌てて視線を外し、カーリアンは隣の少女を前へと押し出した。

「ちょ、ちょっとこのコが話があるんだって！あたし、副官のトコに呼ばれてるからさ、行ってくるねっ」

――戻ってくるまでまだ出ないでよっ！

そう言ってバタバタと駆けていく彼女に、シャクナゲは小さく肩をすくめると、ジッと佇んだままのカクリへと視線を移した。

「……で？用件は何かな、副官補佐殿？」

「……私が言いたい事は分かっているでしょう？……余計なやり取りは抜きにして……答えだけを簡潔に聞かせてくれない？」

もちろん彼女の言いたい事がシャクナゲには分かった。今からしようとしている事を考えれば、何に関する事かは明らかだったからだ。

「答えは分かっているだろ。それこそ余計なやり取りでしかない。アレは絶対に壊すよ。例えアレが誰かにとって必要なモノだとしても、だ」

――ノーフェイト。

人が作った災厄。それを彼女は求めている事が、シャクナゲには

分かった。
その事自体を無思慮だと……浅慮だと笑うつもりはない。
なにしろ彼女は一年前に来たばかりで、『災厄』については残されたデータでしか知り得ないのだから。
それを考慮すれば、むしろ彼女が賢いからこそ……今の現状を見れるだけの知恵があるからこそ、出た言葉だと言えた。少なくとも、現状に不安を感じられる程度には、周囲の状況が見えているのだろう。
好奇心という要素が全くないとまでは思わないが、決してそれだけが理由ではない。
そもそもこういった直談判みたいな直接的なやり口は、彼女の主義に反しているだろう。

「……その力が今必要な抑止力になるとしても？」

「力ってヤツにはさ、大きく分けて三つ種類があると思うんだ」

――『ノーフェイト』。
記憶の奥に刻まれた、忌むべき器物。
親友の持っていた様々なモノを奪って、運命というモノをねじ曲げられ、力を刻まれた存在。
その存在をたった一言で表す事は、いかな彼でも難しかった。
それでもカクリが、その持って回った言い方に口を挟まなかったのは、今の彼……『シャクナゲ』を持っていないこの男が、彼女にもいつもと違って見えたからだ。
そしてその自分を真っ直ぐ見つめている、強大すぎる力を持つ男の黒瞳の中に、僅かな恐怖や嫌悪感が見えたからこそ口を挟めなかったのである。

「それは守る為の力と、傷つけるだけの力……そして俺達、皇や『

アレ』が持つ人を絶望させるだけの力さ」

そして、それだけで話は終わりだとばかりに視線を逸らせると、その移した先の空間に向かって『スイレン』と小さく声をかける。

いつも通りの様子のままで、その何もない空間にそう声をかけても、なんの不自然もないとばかりの声音で。

「バレてましたか。全く、ここでは『水鏡』も形無しですね」

「なんとなくな。いるんじゃないかと思ってたよ」

その呼び掛けの一瞬の後に、その空間には艶やかな和装の女性が現れる。

三班が誇る『近衛殺し』。

そして黒鉄第三班の陽動・攪乱用の遊撃小隊『黒猫』の隊長でもある、『水鏡』のコードを持った女性である。

彼女はシャクナゲとほぼ同年代でありながら、どこか彼よりも大人びた雰囲気を持っていた。

その涼やかな浴衣は、無造作に着流されただけであり、濃紺色の髪はざっくりと無造作に肩口で切り揃えられただけだというのに、そのスタイルが洗練されたモノのようにも見える。

七班のスズカを可憐だとするならば、彼女は見る者に妖艶な印象を持たせるだろう。

間違いなく美女であるのに、何故か近寄りがたい雰囲気があるのだ。

「何か御用でしょうか。彼女が後を付いていかないように、私に見張っていろといった事でしょうか」

どことなく苦笑気味に口元を歪めて——僅かに体を強ばらせてい

たカクリに、チラッと視線を向ける。
その瞳は、小さな笑みの刻まれた口元とは違い、全く笑っておらず、カクリは思わず一歩下がってしまう。
大抵の相手には物怖じしないカクリではあるが、水鏡のスイレンに対しては苦手意識があったりするのだ。
なにしろ彼女には、いつどこから自分を見られているかが分からないという不安がある。カクリには、色々と後ろ暗い部分があるからなおさらの事であろう。

「カクリをあんまりからかうなよ。後でその分文句を言われるのはアオイなんだからさ。用件は分かっているんだろ」

そんな二人の女性の無言のやりとりに、シャクナゲは小さな嘆息を漏らしながらそう続けると、スイレンの紺色の瞳をジッと見つめた。

「用件というのは、私にも付いて来るな……といったところでしょうか？しかし――」

「言い方を変えるよ。足手まといだからここにいてくれ」

承服出来ないとばかりにすぐさま言葉を続けるスイレンに、シャクナゲはあっさりとそう返す。
しかしそんな言葉の意味とは裏腹に、その表情に厳しさや険しさはなく、むしろスイレンをいたわるような、柔らかい表情を浮かべていた。

「黙って付いていく、といっても『今のあなた』には通じませんね。ですので率直に返答させて頂きます。お気遣いは感謝致しますが、そのお言葉には従えません」

「言うと思った。カクリもなんだかんだで付いてきそうだしね」

足手まといと言われても気にする素振りもなく、彼の気遣うような表情から真意を見抜いた上で、それでもスイレンはあっさりと拒否の意を示した。

しかし、それにもシャクナゲは笑ったままで肩を軽くすくめてみせると、沈黙を守ったまま経緯を見ていたカクリへと、チラッと視線をむける。

もちろんカクリは、相変わらずのポーカーフェイスを保ってはいたが、いきなり図星を指された事に小さな舌打ちを漏らしている。

「まぁ何も教えずに、一方的に言い付けても聞いてくれなさそうだから、二人にはあらかじめ教えておくよ。アオイやカーリアンには内緒にしておいてくれ」

そしてそう言うと、少しだけ声を落としてから彼は続ける。

「ノーフェイトはね、簡単に言えば『夢を見させる道具』なんだ」

「……夢って白昼夢かしら」

「それに近い。あれが単純な悪夢を見せるんだったらまだ救いはある。あれが見せるのは、対象が望む『甘い夢』さ」

ワケが分からないと首を傾げながらも、その言葉の真偽を見定めようと彼を見つめるカクリと、ただ黙って続きを待つスイレンに、シャクナゲは吐き捨てるかのような……臍を噛むかのような声音で言葉を漏らした。

「悪夢だったらさ、覚めて欲しいって思うだろ？それにいかに嫌な夢にだって多少は慣れる事も出来る。でも、あれが見せるのはひたすらに甘い夢なんだ。覚めて欲しいなんてカケラも思わないような……ひたすら甘いだけの空想を見せてくれるんだよ」

そこまで説明しただけで、二人の表情からは不可解そうな色が消えた。聡い二人には、すでに『ノーフェイト』の能力が……それがもたらす結末が読めてしまったのだ。

「そうさ、アレに囚われたら現実には帰ってこれないんだよ。もっとはっきりと言うなら、本人が現実に帰ってこようとすらも思わなくなる。夢が夢だと一生気付かず、そこから覚めないんだ。一旦入れば、あの甘い世界が現実だと思ってしまう。『あの夢が本人にとっては現実になる』。問答無用だよ、あれの領域に入れば、そこには辛さや悲しみがある現実なんか入る余地がないんだから。後はひたすら現実を……未来を奪うノーフェイトの毒にどっぷり漬かるだけさ」

――それが『新皇』に対抗する為にあいつが造った、『運命毒の器』の正体さ。

そう吐き捨てるかのように言うと、シャクナゲはぎこちない笑みを浮かべてみせる。

その笑みは間近で見ていても、どこか距離を感じるようなモノで。笑っているのに、何故か泣いているかのようにも見えて。

言葉を失っているカクリを見ていながらも、どこか遠くを見ているかのように見えた。

「あれは誰にも利用なんて出来ないよ。カクリが望む結果をもたら

してくれるモノなんかじゃない。周りの者達全ての未来をむしばんで、取り込んで、今に留めてしまうだけさ。あれはどこまでいっても、所詮は希望に擬態しただけの醜悪な絶望を見せるモノでしかないんだから」

「……そんなモノを破壊なんて出来るの？」

問答無用だと彼は言った。

かの領域とやらが、純正型の『世界』といったモノを模したモノなのか、あるいは全く別物なのかはカクリには分からなかったが、彼が一度その遺物の破壊に失敗している事から考えても、彼も前回はその領域に囚われたクチなのだろう。

つまり『ノーフェイト』とは、それほどに強力な暗示能力、あるいは催眠能力を持つという事である。

そんなモノを――幻視も幻覚も眩惑もこえた強制催眠を、領域に入った者全てに無差別で施す遺物を破壊など、どうやってするつもりなのかがカクリには分からなかった。

全てが煙に巻く為のデマだとまでは思わなかったが、何か裏があるのではと考えてもいたのだ。

「……必ず壊してみせる。俺の力も所詮はあれと同質のモノだ。どっちも個人が持っちゃいけない類の力だ。絶望には別の絶望を当てる。結局はそれだけの話さ」

「……灰色、あなたはまだそんな事を――」

シャクナゲの自嘲を含んだ言葉に、しばらく沈黙を守っていたスイレンが思わずそう口を挟みかける。

その言葉が、昔の……関西に来るより前の彼のモノと変わらないように聞こえたから。

シャクナゲと名乗る前の、無彩色な彼を思わせたから。
しかし、それはスイレンの勘違いで。
それを彼女は即座に悟ってしまって、言葉を続ける事が出来なかった。

「……俺もさ、いつまでも絶望を抱えて、俯いて、座り込んだまんまじゃいられないって思ったりもするんだ。そんな準備期間は四年も貰ったんだからもう十分かなってね」

――そろそろスイレンを、俺みたいな手のかかるヤツのお守りから解放させてやらなきゃな。

何故ならそう笑っていた表情は、今までよりもずっと自然なモノで、出会ったばかりの頃の彼を思い出してしまうようなモノだったから。

「俺の世界は確かに最悪の一歩手前のような世界だけど……散々絶望を目の当たりにしてくれた力だけれど、だからって俺がいつまでも座り込んでいていい理由にはならない」

昔の――新皇と呼ばれだすよりもさらに昔の彼を。
ただ周りの仲間達の為にひたすら走り回って、それでも一緒に心から笑い合えていた仲間だった頃の彼が、彼女にははっきりと重なって見えたのだ。

「後悔はある。罪もある。それを捨てる真似なんて俺には出来ないし、しちゃいけないと思ってる。だからこそ、そろそろ前に歩き始めようかと思うんだよ」

――俺を前に引っ張りたがる物好きなヤツが、最近になって一人

増えちゃったしね。

そう言って、彼は小さく天を仰いだ。コンクリートの天井を越えた、さらにその先へと想いを馳せるように。

「……これは俺の役目だ。二人の出る幕は、『アレ』が関係する限りどこにもない。昔、溺れてしまった夢を――呑まれてしまった毒を乗り越えるのは、きっと今の俺にとって必要な事なんだから」

「……シャクナゲ、あなたはもう、灰色と呼ぶべきではないんですね？今地下に向かおうとしているのは、過去の清算の為ではないのですね？」

スイレンのそんな言葉に秘められた、様々な思いを知った上でも彼は笑ってみせる。

そこには迷いが見えた。弱さもあった。それでも視線だけは彼女から外さない。

「『灰色』はいつまでも俺だよ。それはずっと消えない。でも俺はシャクナゲであり続けたいと思ってる。答えはそれだけじゃダメか？」

それが彼女の望む答えかどうかは、彼には分からない。

いや、きっと違うだろうと考えていた。

でもそれは本心そのもので、偽らざる本音そのものだった。

「……結構です。ならば私は私で、三班の『水鏡』として水鏡に出来る事を致しましょう。副官補佐殿もそうして下さるかと思います」

「……勝手に決めないで。……でも、仕方ないわね。……あなた達

二人の意見に逆らってまで求めるのは、さすがにリスクが高そうだし。……で、『優秀なる班長様』は、私は一体何をすべきだと思う？」

言葉の上では納得してみせながらも、イヤミ混じりに『優秀なる班長様』を強調してみせるカクリに、少しばかり苦笑してみせてから、シャクナゲは小さく首を傾げてみせた。

それは彼女が副官補佐として何をすべきか、と聞いてきた事に対して答えを迷っているからではない。

どんな厄介事を任せてやろうか、というちょっと意地悪な含みを持った笑みであり、新たに副官補佐としてついた少女を試すかのようなそんな笑みだ。

「……なんか墓穴を掘った気がする」

その表情に、イヤミを言ったつもりなのにそれが全く通じなかったばかりか、逆に自らの首を絞めてしまった事にカクリはすぐさま気付いたが、もはや後の祭りである事は明らかだった。

「カクリには新たに三班に加わってくれた仲間達を、一つの隊として調練してもらおうかな。二班だけじゃなく、他の班から加わってくれた仲間達もいるから、結構実戦的な訓練も出来るだろ。前線は無理でも、後方支援から拠点の防衛までこなせるようにして欲しい。補佐にはヒナを使ってくれていい。俺から連絡はいれておくから」

「……ヒナギクに手を貸して貰ったら、逆に手間がかかりそうなんだけど」

カクリの呻くようなそんな言葉にはいくつか理由があった。

第一に、彼女は実戦的な訓練の方法など知らない事だ。彼女はも

っぱら事務や後方支援用のスキルに特化しており、それをさらに磨く事で、副官としては欠落している戦闘スキルを補っていたのだ。

元二班も、カクリのそのスキルによるモノか、支援用の部隊としての面しか持ってはいない。元二班の戦闘能力は、班長である『紅』によるところがほとんどだったのだ。

それなのに、いきなり一つの部隊の編成から訓練までという、畑違い極まりない仕事を任されてしまっては、いかなカクリでも弱音ぐらいは漏れてしまう。

第二に『音速』のコードフェンサーに手を貸して貰うという事に対する憂慮だ。

彼女、音速のヒナギクは、三班きってのトラブルメーカーであり、カクリとは意志の疎通に齟齬が生じまくるほどに性格が違う。

それを憂慮してのモノであり、せめて他の三隊……『黒兎』『黒猫』『黒雉』の幹部を貸して欲しいと口にしようとした。

ちなみに、シャクナゲ率いる『黒狗』小隊を除外しているのは、副隊長が前述のヒナギクであるのに、それを断って他の幹部連を貸して貰う事に対して見栄が悪いからである。

「アオイならヒナを上手く使ってみせるんだけどな」

――聞こえよがしにシャクナゲがそう呟いてみせるのを聞くまでは。

「まぁ、カクリには荷が重いっていうなら仕方がないかな。アオイか俺が帰ってから部隊を編成して、一から鍛えるしかないか」

――嘆息混じりに肩をすくめながら、背の低いカクリの頭にその手を置いて、子供をあやすように撫でてきたりしなければ。

「まぁ、いくらカクリでも苦手な事ってあるよな。俺の副官がなん

でも出来るタイプだからって、『カーリアンの元副官』までそんなワケじゃないか」

「……こんの雑草野郎」

「で、結局やっぱり荷が重いからって、カクリは引き受けてくれないのか？」

頭を気安く撫でてくる手を乱暴に払いのけようとして、サッとかわされた事が決め手となった。

キッとシャクナゲを見据えると、心なしか肩を怒らせながら背をむける。

「……安い挑発だとしても……カーリアンの名前まで出されて引き下がれるか。……新規加入者の経歴の載った名簿は勝手に貰っていくから」

「頑張ってくれ。すごく期待してるから」

「……覚えてろよ、この雑草野郎。……月の浮かぶ夜ばかりだと思わない事ね」

「俺も夜目が利くから夜戦は得意だよ」

「……カーリアンのお弁当、米粒一つでも残したりしたら……今度は私が内乱を起こしてやる。……帰ってきたらチェックするからね」

「どれだけ美味かったか教えてやろうか？」

「……いるか」

『私なんて弁当の余り、残り物で喜んでたのに』
などと言いながら、呪い殺さんばかりの視線を最後に残し、足早にスタスタと去っていくカクリに、シャクナゲは朗らかに手を振ってみせる。
それをスイレンは呆れた様子で見やりながらも、小さな笑みを浮かべてみせた。

「あのコには随分と期待なさっているみたいですね」

「そう見えるかな？」

「えぇ。あなたがあんなに誰かに発破をかけて、何かをやらせようとしているのは初めて見ました」

「……かもね。誰かに頼るとか、何か任せるとかって昔から苦手なんだ。不器用だからさ」

「それはよく知っています」

そんなやり取りに、二人揃って自然に笑い合う。
最近ではこんな風に笑い合った事などなかったからか、ずっと顔を合わせてきたハズなのに、何故か不思議な懐かしさにも似たモノをお互いに感じてしまう。

「さて、では私もお暇致します。何かご用がございましたら承りますが……」

「俺に対してのその堅い喋り方をなんとかしてくれってのは……無理なんだろうな」

「無理です」

きっぱり迷いなく即答してみせるスイレンに、シャクナゲは諦め混じりに溜め息を漏らしてから、霞んでいく彼女の姿に声をかけた。

「みんなを頼むよ。出来るだけでいいから」

その言葉には返答もなく、気配が急速に遠ざかっていく。

しかし、返事はなくとも彼は案じていなかった。

彼女が返答をしなかったのは、単に返すまでもなく引き受けてくれるからであろうと思ったからだ。

彼女は、『水鏡のスイレン』と名乗るよりもずっと前から、そういう律儀な女性だったから。

そう、関東から逃げてしまった『灰色』と呼ばれた男に、何年も経った現在でも変わらずその力を貸しているほどに。

2―9・未来を留める毒素（後書き）

「もうお腹いっぱいか？まぁ、結構量があったからな」

そんな言葉にも顔を上げないまま、彼女はスッとその幕の内弁当を少年の方へと押しやってみせる。

「遠慮なんてしなくてもいいんだ。俺は――」

「……半分こ」

「えっ？」

俯いたままの鈴華は小さく震えていた。それは恥ずかしがって震えていたワケでも、遠慮せずに食べていた事を悔やんでいたワケでもない。

彼女は純粋に、自分がこれから言う言葉が、少年に拒絶される事を恐れて震えていた。

それでも一瞬の後には、意を決したかのように涙が目元に浮かんだままの顔を上げると、鈴華の言葉の意味がわからずに首を傾げている少年へと、勇気を振り絞って口を開く。

「こ、これは出来れば一緒に食べたい。……い、いただきますって言って、ごちそうさまって言って……半分こ」

その言葉にはあらゆる要素が欠けていた。理解を及ぼすのに必要な目的すら欠けていた。

「わ、私、今まで誰かと一緒に食べた事がない。で、でも、前に街

に出た時に見たの。何人かで一緒にいただきますってやってた。とても楽しそうで、少しだけ――本当に少しだけ羨ましかった」

それでも何が言いたいのかが少年には分かった。何故チラチラと自分を見ていたのかも。

彼とて、別に本気で自分が警戒されているなどとは思っていなかった。それでもそんな当たり前の事を望むだけで、ここまで臆病になれる少女が悲しくて、本当に悲しくなってしまって。

俯いている鈴華の頭にポンと手を乗せて、軽く撫でてやる。

その頭の上で存在を主張する、鈴華の純正型としての証ごと。

「……一緒に食べようか」

そしてそう言うと、いまだ袋に入ったままだった新しい割り箸を取り、目の前にある最後の弁当へと箸を向けた。

「いただきます」

「……い、いただき、ます」

向かい合って座り、最後の弁当を綺麗に半分ずつに分け合って。

嬉しそうに、でも戸惑ったかのようにはにかむ少女に、精一杯の笑みを浮かべてみせながら。

＊＊＊＊

前後編にするとワケわからん状態ですね。

全く持って趣味全開ですし。

2―10・四番目の一人目

「……さて、と」

そう呟いてアオイは小さく伸びをすると、凝り固まった体をほぐすように軽く伸びをした。

そして先ほど執務室から退室していった、自らの補佐役たる少女に回す予定だった仕事……民政部宛てや他班に向けての書類仕事の山を、机の上でまとめてから立ち上がる。

これらの仕事は、彼女にこそ適任ではあったが、別に彼女でなければこなせない類の仕事ではない。そう考えたからこそ、彼は彼女の前でこの用意しておいた仕事の話題自体を出さなかった。

今ある書類仕事などは、言ってしまえば誰か適当に頭の回る人物に、それら書類の趣旨さえ間違えないように指示しておけば、それこそ子供に任せてしまっても構わない類の仕事だったのだ。

三班班長、あるいは副官の名前でさえ出しておけば、誰が作成したかなどは関係なく、無視される事もないだろう。

――後で最終チェックだけ彼女にお願いすればいい。

そう考えて、彼が補佐に用意しておいた仕事は後に回したのである。

班長が副官補佐である少女に任せた仕事に比べれば、時間を稼ぐ為の牽制や、敵性部隊の士気の低下を狙った書類仕事などは、雑事

と言っても過言ではなかった。
今後における付加価値を考えれば、班長が任せた仕事の方が断然重要だと彼も考えたのだ。

つまり、彼女に苦手な部門を任せる事によって、それに対する経験値を与えられ、なおかつ三班のメンバーにとって名前だけの役職に過ぎない『副官補佐』の名前に、それ相応の箔を付加出来る事に重きを置いたのである。
その箔というモノが格になり、ひいては信頼になる。
前線で命を懸けて戦う部隊である黒鉄第三班にとって、彼女がただの『カーリアンの知恵袋』のままであるか、『役に立ち、いざという時には頼れる副官補佐』であるかは大きな違いだ。
なにしろ三班のメンバーは、全員が全員、徹頭徹尾に戦士達の集まりなのだから。
あの関西事変以来、ずっと抗ってきた者達ばかりなのだから。
そんな彼等は、自らが仲間と認めた者の指示にしか従わず、共に戦う事を良しとはしない。立場上は仲間である事を認めても、戦友であるとは認めない。
彼女がいかに優秀でも、彼女自身を信頼出来なければ『その立場に関係なく』指示に従う事はないという事だ。
この辺りは階級に縛られた軍隊などとは違い、レジスタンスという有志の集まりらしいと言えるだろう。
厳格な規律こそが部隊には必要だという考えもあるだろうが、今の三班の在り方を変えるつもりは、アオイにも……そして班長であるシャクナゲにもなかった。
それが『黒鉄』という集団の自然な在り方であるし、逆に言うならば、信頼出来る優秀な戦友の指示ならば、三班のメンバー達はどの班よりも勇敢に戦ってみせるという事でもあるからだ。

班長補佐である『紅』には、そういった面での心配は全く必要な

い。彼女には十分過ぎるほどの格がある。
別に黒鉄最強のパイロキネシストである事など、そこには関係ない。
『紅』のコードで呼ばれ、今まで三班を支援してきた二班を、たった一人きりの戦力で守ってきたという実績こそが彼女にはあるのだ。
そして怪我をし、後ろに下がらざるを得なかった時に、彼女の力に守られながら治療を受けた事など、精鋭たる三班の班員ならばこそ誰にでもある。
後方に味方支援部隊があるという事実、そして怪我を負ってそこに下がらざるを得ない時に、その部隊を守る存在があるという事実が、前線に立つ者にとってどれほどの安心感を与えるか。
ずっと最前線で戦ってきた三班のメンバーは、その重みを知っているだろう。

だが、元副官に過ぎないカクリにはその信頼がない。
いかに一番優秀な支援兵であれ、彼女に代わる存在がいないワケでもない。例え実質部隊を運営していたのが彼女だったとしても、自らの手を汚して二班を守ってきたのは『紅』なのだから。

しかしアオイからしてみれば、自らの補佐であるカクリが、いつまでも『カーリアンの元副官』という認識のままいられては困る。せっかく優秀な補佐（コマ）を得られたのに、それが最大限機能しないのでは意味がない。
三班副官としてではなく、『無名の壱』として出る予定なのに……というより出ざるを得ないのに、自分の代理にすらなれないのでは困るのだ。
何より、彼女のような本質的に優秀な『頭』役は、今の三班にとって何よりも欲しい人材でもあった。

それを打開する事こそが、今回の仕事の目的だろう……そうアオイは考えている。

今の現状で、支援用部隊を三班内に新設し、それをある程度のレベルまで調練出来たならば……贅沢を言うなら、かつて支援専用だった二班以上のレベルまで持っていけたのなら、彼女の実務能力はさすがに『信頼』に値する。

目に見えた実績となる。

それこそが、シャクナゲが彼女にこの仕事を任せた意図なのだろう。そうアオイは読んでいたのだ。

「それにしても、シャクナゲはどうやってカクリさんにあれだけのやる気を出させたんですかね。……大方『紅』を出汁にしたんでしょうけど」

そう笑って、部隊新設と調練に対するアドバイスを、いつになく真剣に求めてきた——ついでに様々な交渉の末に、資材の使用権まで持っていった——副官補佐に溜め息を漏らす。

しかし、『あの雑草野郎に、絶対目にモノを見せてやる』と、感情を燃えたぎらせていた様子には苦笑しか浮かばない。

いや、上手くノセられたカクリが、そう言いたくなる気持ちぐらいはアオイにもわかるけれども。

しかし、一応上官である副官の前で、さらに上官である班長に目にモノを見せるって……そう考えれば、溜め息の一つや二つくらい漏れようというモノだ。

「とりあえずこの書類は代わりにアザミに任せるとして……」

そう表向きは自らが率いる『黒兎小隊』の副隊長であり、裏では『名無し』でもある少女への連絡用の箱に、おざなりに書類の束を放り込むと、そのまま無造作に執務室を後にする。

明日には、カクリ用に用意しておいた文字通り『山ほどもある』書類に、アザミという名前の小隊の副隊長が、上官に対する呪いの言葉を吐きながらも、朝から晩までペンを走らせている姿が彼には想像できたが、彼女ならなんとかこなすだろうと気にしない事にする。

ついでに最終確認を求められた副官補佐であるカクリが、ストレス発散にだめ出しをしまくる図まで浮かんでくるが、それもいつもの微笑のままでスルーした。

忙しい時にはこれぐらいの量の書類仕事や事務仕事、さらには面倒くさい会談のような長時間かかる予定まで、ほぼ毎日のようにアオイはこなしてきたのだ。

今みたいな非常時ぐらいは、アザミにも泣いてもらおうと考えて……小さくほくそ笑む。

――上手くすればカクリさんのやっかみ混じりのだめ出しで、アザミの実務能力の底上げも出来る、かな。今後はちょっと楽が出来るかもしれません。

そんな事を考えながら。

そのまま続いて隣にある自らの私室……自宅として使っているアパートではなく、事務棟に泊まり込む時用の個室へと足を向ける。

そこが副官の私室である事を知る者は、三班のメンバーの中でもそう多くはいない。

なにしろ、外開きの部屋の入り口辺りには、物置のように物が積み上げられている。ドアには『物置』と書かれたプレートまであるのだ。

そこに無造作に入ると、室内に置かれた唯一使用出来る家具である寝台の脇に、無造作に立てかけられたままの二対の小剣をナップ

サックに入れる。後は余分なスペースに、簡単な身支度だけを適当に詰め込むと、すぐさま部屋を後にした。

私室だと言うのに（物置と書かれているし、物置然としてはいたが）、入る時に鍵もかかっていなければ、出ていく時に鍵をかけたりもしない。

そんな事など全く気にした素振りもなく、担いだ地味な革製のナップサックだけを手に、軽い歩調で歩き出す。

そう大きくもなければ、複雑な造りのモノでもないナップサックの入り口からは、入りきらなかった二対の小剣の柄が覗いていた。

赤銅じみた不思議と目に付く色をした柄が。

その柄は鎖で繋がれており、歩を進めるに合わせてシャランと小気味よく鳴る。

彼が歩き去った跡には、どこか涼やかなイメージすら持てる、透き通った音だけが残響となって残っていた。

上官であるシャクナゲが地下に潜る事となってから、まだ半日余り。それでも周りへの差配を全て終えていた。

その間に休みを取る暇もなかったが、全く疲労を感じさせない足取りで、彼は西へと向かうべく歩き始める。

誰かに行き先を告げるでもなく、誰かに出発を見送られるワケでもない。

それを気にかけもせず、簡単な身支度だけを持って、たった一人きりで。

彼は誰よりも勤勉な事で仲間達からの信頼を勝ち取り、真面目で努力を惜しまない姿勢で副官として認められていた。彼自身がそれを自覚しており、副官になってからもその態度を崩した事はない。

今の状況で誰にも告げずこの場を離れても、『黒鉄同士の戦いが

土壇場で怖くなった』などと、浅はかな邪推をされる程度の信頼ではない自負がある。

それだけの努力を見せてきた自信があったし、積み重ねてきた時間にも誇りがあった。

ずっと『戦闘においては余り役に立たなくても、その判断には信頼が置ける副官』という立場を得る為に心血を注いできたのだから。

時間を惜しむ余り、誰にも告げず急いで旅立っても……そして自分が少しばかり戦場を離れていても、簡単には崩されないだけのモノを築いている、という確信を持っているのだ。

「さて、じゃあ気ままな船旅と洒落込もうか。最近ストレスも溜まっていたし、いい加減肩肘張り過ぎて、肩もこっていたし」

だから彼は、本部を出るなりいつもよりも気楽な口調でそう笑ってみせる。

一旦表に出て、副官としての自らを見る者がいなくなったのなら、副官の仮面はもう必要ないのだ。

むしろ『恭順』を得た四人目として……そして最初の無名として、いざとなれば自分達に敵対する事の意味を、力を持って知らしめるつもりならば、『温和な副官』の仮面は邪魔にすらなりかねない。

なにしろ相手は格上で、面識の薄い相手で、積み重ねが通用しない存在であるのに、無理やりにでも我を通す必要があるのだ。

交渉の末に『戦争』という手段をも、手札に入れておく必要がある。

「久々に二人っきりで遠出だよ。頼りにしてる、私の唯一の恋人（ひと）」

それでも表情だけは優しげで。

肩からぶら下げたサックからはみ出した金属質な柄を軽く撫で、その鎖を愛でて。

まるで本物の恋人にでも語りかけるような柔らかい言葉遣いで。
ゆっくりと手配しておいた郊外の船着き場へと歩を向ける。

西の『提督』を名乗る水賊少女。仲間の数は少ないながらも、瀬戸内という領海を関西軍から得た『純正型』。
いざとなればその少女と、彼女が率いる荒くれ者揃いの水賊衆全てと、『戦争』をするだけの覚悟が彼にはあった。
話し合いでは無理ならば、戦争でもって分からせる覚悟が。
誰も見ていない地でたった一人、その身に血を浴びる覚悟が。

『名無し』達の一番は、誰よりも努力を重ねて、誰よりも計算高く、誰よりも全てを捧げて、誰よりも多くを失って、そして誰よりも結果を優先する。
戦争も話し合いも、唾棄すべき手段も真っ当な交渉も、真摯な態度も血を見る結末も。
結果を得る為ならば、その過程の全てを割り切れる。
何故なら彼は、すでに四番目の遺産――『ファム・ファタル』という結果を得る為だけに、かけがえのないモノを捧げた後なのだから。
そう……もう何年も前に、今の自分へと至る過程を、割り切ってしまっているのだから。
そんな風に変わってしまった自分に後悔した事など、ただの一度としてないのだから。

だから彼は笑顔のままで多くを諦める。
相対する水賊衆全ての命でさえも。
そして、自らが今も捧げ続けている代償でさえも。

2―10・四番目の一人目（後書き）

人物紹介・スイレン

水鏡のコードを持つコードフェンサーで、黒鉄第三班の中で編成された『黒猫』と名付けられた小隊の隊長でもある女性。
たおやかな良識人で、浴衣を愛用する点も相まって、容貌も涼やかな印象がある和風美人。
第一回ミス黒鉄（非公式）、第二回ミス黒鉄（公式イベントになった）で、ともに支持率一位の『ミス黒鉄』となっている。

しかしその実態は、『近衛殺し』、インペリアルキラーとまで呼ばれるほどの能力者で、『表の副官がアオイなら、裏の副官はスイレン』『アオイがシャクナゲの右腕なら、スイレンは左腕』などと呼ばれていたりもする。
黒鉄が結成されて以来の最古参メンバーの一人で、関東出身。
なお余り知られてはいないが、関東では新皇の側近中の側近でもあった人物で、関西に動乱の火が移るずっと前から戦ってきたという過去がある。
その為、能力を戦闘に効率的に使う経験値、それ以外にも応用を効かす応用力は、他のコード持ち達の追随を許さない。

スキル

能力Ａ＋（その能力は眩惑光后、あるいはクイーンメイブとかつて

は呼ばれていた。光と水気を操り、幻を生む能力である。それだけではなく、自らの幻像に限り、ある程度まで精神を同調させる事が出来る為、スイレン自身の幻像は会話も出来れば、多少の存在感まで持っている。ただしそこまで精緻な幻像は数体作るのが限界で、多くを作る事は出来ない。また『視界に移る』という事を媒介にした暗示に近い能力な為に、声は聞こえて目に見えるのにその幻像に触れられない。ただの幻としての幻像ならば百を超えた数を生み出せる。他にも目に見えるモノを見えなくする能力もある。人間を他のモノに見せる事は出来ない）

応用力Ａ（能力やその他あらゆる面での応用が効く。他スキルのプラス補正）

容貌Ａ（若干大人っぽく見える艶やかな美人）

こだわりＳ（和服を愛し、ガーデニングを愛している。また抹茶を心から愛しているのに、お茶請けは何故かフライドポテト）

意地っ張りＢ（意外と意地っ張りに見えて、心の底から意地っ張り。自らが正しいと思えば、班長連を平然と論破し、意地を通してみせる）

狂戦士使いＢ（三班の中で、シャクナゲについでヨツバに言う事を聞かせる事が出来る。ちなみにシャクナゲはＡ、アオイはＣ）

また他人をからかう事が好き。ヒナギクを子供扱いする他、カクリなどをからかう。

もちろんカクリが自分を苦手としている事を知った上で。

2―11・深淵の彼方

――この世界に神はいない。

限りなく続く孤独な原野、際限なく広がる灰色の世界。

そこで彼は一人、独りっきりで天に呪詛を吐き続けていた。そこに佇んでいた虚無感にその身を包まれながら。

その時の痛みを、絶望を、彼は今でもはっきりと覚えている。否、忘れた事など一瞬たりともなかった、というべきか。

――認めず、在らず、その存在を否定する。

幾百もの命を消し飛ばし、幾千もの想いをも飲み込んで。

たった一人きりで残されてしまう結末を、ずっと胸に抱えて生きてきて。

記憶のど真ん中に、孤独が居座り続ける中で、無力な『神様』を否定し続けてきたのだ。

――紡ぎ手のみが世界にありて、カラカラと虚ろに響く歌を唄う。

顕現するありとあらゆる力、自分を取り巻く破壊の為だけの将兵達。

守って欲しいなどと思わなくとも……いっその事消えてしまいたいとすら願っていても、それらは絶対に許してくれない。

死にたくないという人々を踏みにじって、死ねないと縋ってくる者を消し飛ばして、自分一人を生かし続けてきたのだ。
助けてくれ、と縋る者に思わず手を伸ばしても、間に合う事はなく――
そんな行為ですらも、灰色世界は攻撃意志によるモノだと判断して。
いつも一人だけが残される。
たった一人だけで取り残される。
カラカラと虚空に響く歯車の音だけを残して、彼はいつも独りの結末に取り残される。

――彼の者は最果ての日までただ独り、暗き血を流し、赤き涙を落とす。

暗き血を浴び、赤き涙を流し続けた幾度もの戦いの場の中には……『仲間』を守る為に戦ってきた『故郷』では、戦場と呼べるようなモノはほとんどなかった。
一方的に刈り取り、一方的に殺し尽くし、一方的に奪いさって、結果一方的な死を振りまく場でしかなかったのだ。
命の価値が極端に軽い戦場にありながら、簡単に吹き消されるのはいつも相対する相手側。自らは血を流した事すらも数えるほどしかなく、命を奪った感慨や報いすらも残してはくれない。

――無限の灰色世界にて、幾千もの刻を刻み、幾万もの孤独に心を砕く。

そんなモノを、果たして『戦い』と……そして『戦場』などと呼べるだろうか。
華々しい決闘も、敵対者の想いを認める事もなければ、殺した相手の顔すらも知る事が出来ない。ただ幾千もの命を飲み込み、幾万

もの罪悪にまみれる結末が残されるだけの場を、戦場などと呼んでいいものだろうか。

『屠殺場』や『処刑場』と呼んだ方が近くはないだろうか。

そんな考えが、戦う度に自らを削り取っていく。精神を磨耗させ、ゆっくりと真綿で絞め殺すかのように心を壊していく。

――その身はただ歯車を廻す虚空の歪み。

たまに――ごくたまにあった、同族の敵対者と向かい合った時ぐらいにしか、傷を負う事すらもなかった。

それでも同じ地方に生まれた同族の中には、彼や仲間達以上の力を持つ者はおらず、僅かな手傷（報い）しかもらう事も出来なかった。

違う地方の強い変種と向かい合った時ぐらいにしか、負けを期待する事も出来ず、それらの戦いでも結局は終わりを見る事など出来なかったのだ。

そう……彼はいつしか報いを期待するほどに、終わりが来る事を切望するほどに、歪んでしまっていた。

――その心は数多の世界を歪む輪廻の鏡。

その歪な異界に見合うほどに、その異常な世界を反映するかのように、彼は歪んでいた。

永遠に続く螺旋階段にも似た、終わりが見えないという苦痛に耐え続け、ほとんど彼は壊れかけていたのだ。

あっさりと消えていく命に、自分は超越種なんだと『諦めて』しまいそうなほどに、折れかけている自らの心。

相手がどれだけの兵数を用意していても、どれほどの力を持つ重装備であったとしても、いつも結末は変わらない。

どれだけ心が悲鳴を上げ、魂が切り裂かれ、精神が壊れても。

変わらない……変わってはくれないという絶望。

――故に紡ぎ手は今も独り、灰色の雪原にありて。

そして残されるのはただ一人。
だからいつもたった一人きり。
いつであれ一人孤独に、灰色の原野で勝利の咆哮を上げる。
絶望に苛まれた、孤独にまみれた、苦悩に溺れた悲痛の声を。
その時の苦しみを、彼は今でも『悪夢』という形で覚えている。
至る所で『忘れるな』と囁く亡者の声が聞こえてくる。

――いつか在りし日の明日を唄う。

それでも――それを今でも覚えていても、彼はここへとやって来た。
禁断の間にして、禁忌の地。
誰にも踏み入る事を許さず、ここの所在すらも伝えず、ずっと思考の隅へとやってきた場所。
黒鉄第三班の地下空間。
『ノーフェイト』という名前の災厄が封じられてきた地へと。
あの『孤独の戦場』の象徴たる灰色、心を壊し尽くしてきた灰色、自らの内で存在感を増してきた灰色を、自らの意志だけで使う覚悟を決めて。
いつか在りし日には、完膚なきまでに敗北した『災厄』と向かい合う為に。

軋むような重低音を響かせ、金属製の扉が開かれていく。

何年も開かれる事のなかった地下深くへと続く……人に造られた『災厄』へと至る扉が。
その先にあるモノは、ただ深い黒。淀んだ空気を持つ漆黒の闇。
長きに渡って、太陽の光も人造の光も受け入れてこなかった黒一色の空間。
それが一寸先の視界すらも奪い、あらゆる存在の侵入を拒むかのようにたゆたっていた。

「あれから四年か……」

その闇の深淵へと、手にした懐中電灯で先を照らしながら歩を進め、シャクナゲは小さな吐息を漏らす。
彼の歩みからは、闇に対する恐怖のようなモノは感じられない。
ただ淡々と歩を進め、無表情に先を見据える。
その様子は余りにも淡々とし過ぎているように……そしてほんの少しばかり無表情すぎるように見える。

「いつか、またいつか……そう先延ばしにして、ずっと逃げ続けて」

迷いなく進み、滞りなく一人言葉を吐き出し続けて。

「結局はこんなにも時間がかかってしまった」

真っ暗な空間を突っ切り、闇色の階段を下っていく。
ひたすらに闇の奥深くを目指し、どこまでも深淵へと身を沈めて。

「でもよ、待たせた事に関しての文句なら受け付けないからな。お前も俺に後始末を任せたって事でお互い様だろ。
――どこか遠くからでもいい、見ていろ。今日ここで、今ここでお前の未練を断ち切ってやるから」

宵闇の黒を越えて、深淵の闇を歩く。
阻む者はなく、障害もない。
ただ異質な遺物、歪な異物が眠る場所へ。

そしてゆっくりと歩き続けて。
迷いなく先へと進み続けて……その最奥に行き着く。
一番深く、一番濃い闇の彼方。
異常な冷気が満ちる扉の前に。

『甘い夢を見て、その夢にまみれてせめて死を迎えられたら……なんて、どれだけ甘ったれた考えだったんだろうな』

そう言った友は、笑いながらも泣いていた。
後悔にまみれた繰り言で、自らをより追い込みながら。
自らの不明と、弱さを嘆きながら。
浮かべている笑みですらも強がりにしか見えず、流している涙があっさりと頬を伝う。
それはその男がシャクナゲに対して見せた唯一の弱さ。
儚さも脆さも愚かしさも含めた脆弱さだった。

『現実の力には勝てないから、精神を絡め捕る。現実で歩んできた道のりの全てを問答無用で捨てさせて、彼方に置き去りにさせて、無理矢理最高の夢の中に絡め捕る。そんな力を持つ『アレ』が、最高に最低な……自分の罪悪感を薄れさせる為だけに産まれた結果なんだって思うと、自分をなぶり殺したくなる』

枯れたように細い、生命力の感じられない指先で顔を覆い、嘲笑うというには苦いモノが含まれ過ぎた嗤いを漏らす。

それを見て、そんな親友を見てしまって……それでも彼は浅はかに考えていた。

アレが後悔の具現たるモノなら、壊せばいい。壊し尽くして、存在そのものをなかった事にすればいい。

そう考えていたのだ。

『アレはもう、今の俺じゃ壊せない。今の弱った俺じゃ、制御するだけでも精一杯だ。俺以外には壊せないのに……使用者で、『夢』が効かない俺にしか壊せないないのに、俺にはもうそんな時間がない』

その考えが、どこまでも甘い考えだった事はすぐさま思い知らされた。

骨身に染み入るほどに理解させられた。

一度は親友に代わって壊しに行って――

結果、弱った親友が体に鞭打って救いにきてくれて、やっとの事で夢から逃れられたのだから。

なんとか戻ってくる事が……覚める事が出来たのだから。

『この命に代えてアレを消せたならいいんだけどな。どうやら俺の絞りカスの命ぐらいじゃ、見合ってはくれないらしい』

浅はかだった。愚かだった。

『運命の造物』とまで呼ばれるほどの能力が産んだ、最初の力ある器物にして、最悪の異物。

それを甘く見ていたのだ。

だから『三番目』を壊せた『二番目』の所持者は、あっさりと毒に浸かりきってしまった。

甘い甘い、狂いそうに甘い、狂いきってしまうほどに甘い運命毒に。

あれから何年も経った今でも、最奥の扉の前に立ち、『災厄』の気配を感じただけで、皮膚という皮膚が、血という血が、肉という肉が、その気配に『惹かれている』事を彼は自覚していた。

意識という意識が、精神という精神が、思考という思考が、『求めている』事が分かってしまうのだ。

――あの甘すぎる毒、心がとろけそうな運命毒に、どっぷりと頭の先まで浸かりたくなってしまっている事を。

「美味かった。カーリアンがこんなに料理が得意だったなんて初めて知ったよ。カクリが恨めしげに見てただけはある」

その扉から少し離れた位置に、赤いハンカチに包まれた弁当箱を慎重に置くと、彼はそう小さく笑みを漏らす。

昔からしょっちゅう三班の本部に顔を出し、いつしか顔パスで入り口を通りだして、普通に三班班長の執務室までやってくるようになった挙げ句、今では三班に籍を置くようになった少女。

彼女と『料理』を結びつけて考える事自体なくて。

そのイメージには余りにも合わなさ過ぎて。

本格的な和風のお弁当に……和風御膳という呼び名すら似合いそうな弁当に、心底から驚かされた。

「自信作って言ってただけあって、出汁巻きは美味かったな。信じられないだろ。あの問題児筆頭だった紅が、実はすごく料理が得意だったなんてさ」

扉の先には誰もいない。
いるハズがない。
彼自身が封印して、厳重に施錠して、管理してきたのだから誰かがいるハズもない。
それでもシャクナゲはその扉の先にそう言葉をかけ、甘い毒を求め続けている自らを律してみせる。

「他にも色々と直接会って話したい事はあるけど……お前が知らなかった事を山ほど教えてやりたいんだけど。
今はまだダメだ。今はまだそっちには行けない。だから――」

――お前の後悔だけを先に送ってやるよ。

そう言って、弁当箱を置いた位置よりもさらに先、扉のすぐ真ん前まで足を進める。
その何も握っていない右腕を軽く掲げてみせながら。

「……今度こそだ。今度こそ壊しに来たぞ。暁が産んだ災厄（ノーフェイト）！」

そして自らを鼓舞するように、吠えるようにそう言うと、軽く掲げただけの腕を扉へと振るう。

――Ｕｎｄｏ　ｔｈｅ　ｃｈａｉｎ（束縛の鎖を外す）。

決意の後にそう告げて。ゆっくりと命じて。確実に宣告して。
そしてその腕に朧気な現実感しか持たない鈍色の蛇達を呼び出した。
彼の……『シャクナゲ』という枠を超えた彼そのモノの力を。

「――Ｂｕｌｌｅｔ－Ｃｈａｉｎ（弾丸の鎖蛇）」

そしてその腕を這い回る蛇達を、目の前にある最奥部たる部屋へと続く扉へと飛ばす。

五筋の弾丸、五本きりの弾幕として。

そしてその扉の周囲ごと粉々に砕かれ、開かれてしまった禁断の封印地へと入っていく。

「あの時俺を捕らえた甘い幻想を……どこまでも心を捕らえた偽りの世界を……狂いそうになるほどに魅了した紛い物の希望を！俺の中にある灰色の絶望で壊し尽くし、殺し尽くしてやる」

本来ならば……もっと広い空間で、ここが地下でさえなければ、彼はあっさりと過去に決着を付けていた。

こんな『運命毒』が滲み出し、体を蝕むような甘さが感じられる間近まで来る事はなかったと思う。

彼が抱える灰色の力で、幾百、幾千もの力の渦で、破壊する方法を選んでいたに違いない。

『いつかはこの手で……』

そんな彼の思惑や望みを押し殺して、迷いなく安全で最善の方法を取っていただろう。

その姿を視認し得ないほどの遠くから、自身の力が持つ広大な領域を最大限に使って、押し潰すように、擦り潰すように破壊する方法を選んでいたハズだ。

辺り一帯ごと破壊し、灰燼に帰し、飲み込んで、諸共に砕き尽くす方法こそが一番確実なのだから。

いかに取りたくない手段でも……忌避すべき力でも、それ以上に彼は『災厄』を恐れていたし、絶対に死ねない理由があったのだか

ら。

しかしここは地下深く。

彼が管理してきた、黒鉄第三班の本部地下の最奥部で、かの『灰色に使役された、無差別に破壊を振りまく軍勢』を呼び出すワケにはいかなかった。

そんな真似をすれば、間違いなく彼は土砂に埋もれ、圧死か窒息死という末路を辿る事になっていただろう。

その結果、かの灰色が世界の核であるシャクナゲの危機に暴走し、ここの真上にある彼の家……そして仲間達にまで、とばっちりを食らわせないとも限らない。

それほどに『灰色』は規格外なのだから。

規格外の支配域を持っているのだから。

運命毒が影響を与えないように、いつか時が来るまで誰もアレには関わらないようにと考えて、この地下深くに置いたに過ぎないのに、それが結局は彼が再び『災厄』とまみえる原因となっていたと言える。

その皮肉を笑い、過去の自分の浅はかさを嗤い……そして覚悟を決める。

向かい合うだけで甘い毒に惹かれてしまう本能を、抑えてみせる為に意志を強く深くして、彼は『ソレ』と相対した。

無差別に放った鎖の弾丸ごときでは傷一つついていない、コンクリートに根元を埋められていた『災厄』。

どこか無彩色な冷気を放つ、無骨な錫杖。

ノーフェイト（運命の否定）と名付けられた、人の未来を殺す為だけの毒源と。

「Ｃｈａｉｎ－ｄｒｉ――」

それを視認して――今度こそ徹底的に破壊しようと、鎖達をより苛烈にして猛烈な勢いで飛ばそうとして。
その両腕から飛ばせるだけの蛇を繰り出そうとして。
それがすでに間に合わなかった事を思い知る。
彼の『災厄』の毒素が、砕き開かれた扉から漏れ出し、自らを取り込もうと顎を開けている錯覚すらも見えた。
そんなシャクナゲの危機感に、すでに具現化して虚空を這っていた五筋の蛇達も牙を剥くが、それすらもすでに手遅れで――。

「いいさ。俺を取り込めよ、ノーフェイト。でもな、あの時の俺と一緒にはするなよ」

シャクナゲは、まるでその毒素を受け入れるかのように両腕を軽く広げてみせる。
その口元に、彼らしい皮肉げな笑みを刻んで。

……そして『彼は白い霧に包まれていく』。
その思考も、肉体も、魂ですらも。
鈍色の蛇達が消え、闇色の世界も消えて、深くて甘い霧に覆われてしまう。

最悪たる災厄。
鎖の先制攻撃でさえも壊せなかった『運命毒の甘い吐息』に、彼はその身を捕らえられ、飲み込まれていった。

2―12・新たなる紅

「というワケで、あたしは一人、光都に出戻りましたとさ……ってなんであたしがこんな事しなきゃなんないのよっ！意っ味分かんないっ！」

そんな一人ノリツッコミを呟きながら、カーリアンは小さく地団駄を踏んだ。

いつものスタイリッシュなポニーテールではなく、やや幼くも見えるツーサイドアップにまとめられた髪型は、その長い赤髪のボリュームを増して見せ、いつもより柔らかな印象を持たせている。

服装もいつもの赤いハーフコートではなく、黒いシャツの上から丈の長い白いパーカーを肩に引っ掛け、下はデニム地のショートパンツ、足元は丈夫そうな編み上げの登山靴を履いていた。

小さなショルダーバックが足元に置かれている以外は、手荷物らしきものは全くなく、腰からは革製の銃のホルスターらしきモノを二つぶら下げている。

そんな彼女は、つい先日も来たばかりだった光の都、その片隅にある住宅街で、一人憤慨しながらもぶつぶつと文句を漏らして続けていた。

『カーリアンにはぜひ迎えに行って欲しい人達がいるんです』

副官アオイのそんな言葉に従って……班長補佐と副官ってどっち

が立場が上なんだろうなどと考えながらも、かつて関西統括軍の首都だった『光都・カエサル』へとやってきていたのだ。
昔から関西随一の大都市であり、商業や政治の中心でもあり、変種による動乱の後には、黒鉄達がヴァンプと呼んでいる力に驕った変種達に、『光都』と名付けられた街。
彼女の第二の故郷である『廃都』からは、『戦都』と名付けられた都市を越えたさらに先にある街である。
もちろん今回は歩きでも、前みたいにシャクナゲのバイクで送ってもらったワケでもなく、三班の車を出してもらった。
しかし、現地で下ろされたのは彼女だけだった。『帰りはどこかで適当に足でも拾ってください』なんて、ありがたい言葉まで運転手をしていた仲間から頂いて、一人置き去りにされたのだ。
それがまた彼女の不満を大いに増大させている。
この『頼まれ事』に関して副官補佐であるカクリなどは、実際に出向かされるカーリアン以上に文句タラタラで、アオイの私室に文句をつけに行ったぐらいだった。しかし、そこから小一時間ほどで帰ってくるなり

『……頑張って、カーリアン』

と彼女の元副官はまるっきり意見を変えていたのだ。
まぁ、カクリが上手くアオイに丸めこまれたなどとは彼女にも思えないから、またなんらかの裏取引があったんだろうと思っている。
そう思えば、それなりに長い付き合いだけに僅かな苦笑が滲んでしまう。なにしろあの白髪の少女は、喜々としてそういう『裏取引』を行う少女だから。
しかし、そんなやり取りで不満が解消されるワケもなければ、今の状況に納得出来るワケもない。

「シャクがいない今、あたしまでいなくなったら、一体誰が三班を

守るってのよ！」

何故なら今の彼女は、『班長補佐』なのだから。

彼女は今の三班を守る職務と、仲間達の先頭に立って戦う義務が自分にはある、とそう考えているのだ。てっきり自分が班長の『代わり』をするものだと考えていたのである。

それだけの能力を持っている自信があるし、三班に対する敵対者にも心当たりがあり過ぎる。

僅かばかり残った冷静な部分では、『スイレンもヨツバもいる』などと思ったりしてはいた。しかし、そんな冷静な彼女の部分などは、意識の深層……しかも片隅に仮住まいをしているに過ぎない。

つまりは他大多数を占める『不満』に見事に圧倒され、黙殺されていた。

なにしろ彼女は、班長であるシャクナゲが地下に潜ると決まった時に、『班長補佐である自分には、その間班員達を守る義務がある！』などと、彼女なりに大層な覚悟を決めていたりもしたのだ。先頭に立つ事こそ三班の長の在り方なんだろう、それこそが『彼の補佐』としての役割だろう、そう考えて大いに気炎を上げ、やる気満々だったワケである。

もっとも、『書類仕事は誰かに任せるとして……』という前置きはあったが。

「それなのに、『わぁい♪副官ちんにお使い頼まれちゃったぁ♪』……なんて言うか！これってまるっきり子供のお使いでしょっ！」

――知らない人に付いて行っちゃダメよ？

などと、真剣にカクリに心配された事もまた不満だった。

それがより今の現状に対する怒りを燃え上がらせる。

いかに混乱してはいても、単身――あるいはごく少数で『光都』に入り込むなど、いかな精鋭集団たる三班のメンバーでも、誰にでも出来る事じゃない事ぐらいは彼女にも分かっている。
分かってはいるのだが、それと納得出来るかどうかは、やっぱり別問題なのだ。

「こういった仕事こそ、『水鏡のスイレン』の役割でしょ！」

『今のところ、班長補佐にしかこれほど重大な任務を任せられる人はいないんです』
そんな言葉に丸めこまれ……今になって丸めこまれた事実に気付いてしまって、彼女は一人『光都』の片隅で吠える。

「どうせあたしだけは暇してたんだけどっ！いつものごとくあたしだけが暇だったんだけどっ！」

みんなが忙しい中、『今のところ』絶賛やる事募集中だった班長補佐に、白羽の矢が立っただけである事に気付いて……『頼める相手が他にいない』という言葉が、そのままの意味でしかなかった事に気付いてしまって。
そんな彼女の額からは、無意識の内に紅の閃光が宙を走りだす。
彼女の操る、あらゆるモノを焼き払う炎の意志が込められた赤き熱線が。

「副官の野郎、帰ったら泣くまでぶん殴ってやるっ！」

そうは言っても、結局は三班班長になだめられて、許してしまうだろう事は分かっていた。それでもとりあえず一発ぐらいは副官をぶん殴る為にも、やる事をやってしまおうと考えて気持ちを落ち着ける。

「……あ」

その時には、辺り一帯に『紅』が撒き散らされ、猛火が周囲の住居に移り、燃え上がり始めていたのだが。

「……さて、愚痴はこれぐらいにして、お仕事頑張ろっか」

そんな周囲の状況から、数瞬以上かけて無理矢理目をそらすと、『よしっ』と気合いを入れて――彼女は脱兎のごとく駆け出した。

自分の癇癪が起こした火災を、脳内ではきっぱりとなかった事にして。

『さっさとお仕事を頑張る』という名目で、面倒になる前にこの場から逃げる事にして。

罪悪感を押し殺した放火魔の心境そのままに、足元に置いてあったショルダーバックを肩に担ぐと、彼女はその場から駆け出したのだ。

『光都と山都、及び古都を行き来し、情報を収集していた仲間と合流し、帰路の護衛をする事』

それが彼女に与えられた仕事だった。

もちろんそういった諜報活動についていた工作員はそれなりの数がいる。しかし、そういった工作員の全てを引き上げさせるつもりは、アオイにはなかった。まだまだ揺れ動くであろう関西東部を見る目が、これからも必要となる事が明らかだからだ。

何より上手く人員を潜り込ませるのには、それなりの手間と資金がかかっている。引き上げさせるのにも、それ相応の人員と時間、手間がかかるだろう。

しかし今回は、情報そのものを持っている連絡員と合流し、無事に『廃都』まで連れて帰る事が目的だった。つまり対象が個人なのだ。

今まで個人ならば、多少の袖の下……つまり賄賂と口利きさえあれば通れたルートも、今の混迷が広がる現状ではどうなるモノか分からない。

各地で起った盗賊集団が横行している現状で、関所を守る関西軍の者達の睨みが効かなくなっている以上……そしてその関所の番人すらも強盗に変わりかねない事まで考慮すれば、安全に情報を持ち帰るには、それ相応の戦力を送る必要があった。

つまり腕利きばかりの小隊を送るか、『コードフェンサー』クラスの強力な能力者を派遣するか、だ。

今までの三班の構成のままだったならば、アオイは小隊を派遣しただろう。黒雉隊の隊長を筆頭として、自らの黒兎隊からも何人かを加えた、腕利きばかりの迎えを寄越したと思う。

三班のコードフェンサーである『水鏡』は、現状の三班においては動かし難い有用な戦力であるし、『不貫』は戦力としては水鏡にひけを取らない者ではあるが、そんな任務を任せるにはそれ以外の面で不安がありすぎる。『音速』は戦力も不安であれば、それ以外でも不安だった。

なにしろ『音速』は廃都の外の地理に疎い。気づけば山都にまで行ってしまうかもしれないのだ。

だから戦力は多少不安でも、プロフェッショナルである者達をまとめて、戦力を数で補って送っていただろう。

ほんの少し前に『光都』まで行っていたコードフェンサーがいな

ければ。
そして戦力以外に多少の不安はあれど、戦力には不安がない、目下やる事のない班長補佐がいなければ、だ。

『紅』を冠する彼女は、有り体に言えば暇人だと思われていたのだ。少なくとも、しばらくまともな戦闘にはならないと判断したアオイからすれば、だが。
それがアオイにとっては好都合であり、また不安要素だったのである。

もちろん、戦力といった面で不安はない。使用出来る能力にはムラがあるが――簡単に言えば気分次第、しかも機嫌が悪いほど能力が高まるというタチの悪さがある――それでも彼女は一級の能力者だと言える。
なにしろ『元救急班』たる黒鉄第二班の最大戦力であり、唯一の戦力でもあったのが彼女だ。
二班は元々後方支援用の班ではあったが、それでも戦闘を全くしてこなかったワケではない。たまに奇襲を受けたり、予期せぬ接敵があった時などは、彼女がもっぱら敵を撃退していたのだ。
二班の仲間達の先頭に立ち、敵を黒焦げにして、焼き払って仲間達を守ってきたのだ。

たまにやりすぎて味方車両に引火したり、派手に炎を吹き上げ過ぎて、援護に来たハズの仲間の部隊がちょっとばかり巻き込まれたりするぐらいに、強力なパイロキネシスト（発火能力者）なのである。
しかし、四班の班長である『蒼』との小競り合いで、ビルをまるまる一棟平地に馴らしてしまうなど、『泣く子も黙って平謝りする』と噂に上るほどに、一度怒れば災いが周り一帯に降り注ぐトラブルメーカーでもあった。
つまりアオイの中では、緊張状態が続く廃都で、戦端を開く原因

になりそうな人物ランク、堂々の一位でもあったのである。

ちなみに僅差の二位には、『紅』とばったりあった瞬間から開戦しかねない、『蒼のオリヒメ』がついている。彼女は紅に比べれば理性的ではあったが、紅に関わった瞬間から点火済みの爆弾に変わるという厄介な面がある。

結局はどっちもどっちなワケであるが、『蒼』にアオイから干渉出来ない以上、もう一方の『紅』をどうにかする必要があったのだ。

それも考慮されて、彼女には『諜報活動をしていた工作員の出迎えと、帰路の護衛』という任務が与えられたワケである。

加えて余談になるが、今回に限って言えば、アオイとカクリの間にカーリアンが考えたような裏取引はなかったりする。

『今の状況で四班に刺激を与えたくはないんですよ。防衛網の構築でこちらに時間をくれているワケですから、それを失う可能性は万が一にも避けたいんです』

と言われ

『……言いたくはありませんが、カーリアンとオリヒメはどこか引き合う箇所があるのか、結構予想外な所でエンカウントしたりするでしょう？『斥候に出る』と散歩に出られた瞬間、ばったりなんて事になりかねません。かと言って彼女を執務室に閉じ込めておくワケにもいきませんし、大人しく閉じ込められてもくれないでしょう』

などと嘆息されて、カクリには全くもって反論出来なかっただけの話である。

もちろんただでは転ばないカクリは、彼が管轄する資材運用に対しての交渉や、彼女が行う事になった『新部隊の調練』についての

アドバイスなど、ちゃっかりと『カーリアンを使う為の交換材料』をもらっている。
小一時間かかったのは、それらカクリ側からの交渉によるもので、カーリアンが考えているように『アオイが渋るカクリに交換材料を提示した』ワケではなかったりするのだ。

何をどう考えてみても、上手く使われているとしか彼女には思えなかったが、副官達は副官達で涙ぐましいまでに現状維持に気を使っていたワケである。
そのせいで、アオイ一人が憎まれ役になっているのだが、そんな事を気にするアオイでもカクリでもない。
黒鉄五大アンタッチャブルの一人として有名な『燃やしたがりの紅』と、五指には入らないが補欠には入るその元副官『腹黒』に対して腰が引けるようでは、五大アンタッチャブルの内の二人が所属する第三班の副官は務まらないのだ。
かくして反対意見も不満も聞き入れられず、カーリアンは不平を漏らしながら光都まで出張ってきたワケである。

――ったく、さっさと拾って帰ろ。シャクが帰ってくるまでには帰りたいし。

そう言って腰から下げた、二つの革製のホルスターを軽く撫でる。
そこにあるのは『黒鉄』の象徴。
置いていくべきだとカクリや（それにかなり興味津々な様子で）アオイに言われたのだが、頑として譲らず任務に持ってきたモノだ。
それを撫でる時だけは穏やかな笑みを見せ、『よしっ！』気合いを入れ直す。

この都市から彼女の住む廃都までは、距離的にはかなり離れてい

る。しかし歩いて帰れない距離でもない。優れた能力を持つ変種であり、変種なりの体力を持つカーリアンならば、一日歩き通しで行けばお釣りがくるぐらいだろう。

それでも名前と風貌しか知らない人物と合流し、確かに間違いないかを確認した後で帰還するとなれば、それなりに手間はかかってしまう。何より今の情勢の中、真っ直ぐ最短距離で帰れるとも限らないのだ。

廃都と光都の間には、廃都のレジスタンスの抑え込みと、西端に追いやられた日本の勢力に対する最終防衛ラインとしての役割を与えられた『戦都』がある。幾度も廃都に侵攻してきた都市であり、廃都のレジスタンスにとっても一番の攻撃目標でもあった『クリシュナ』がある。

普通ならばそこを西から東に抜けるだけでも、なかなかに骨の折れる作業であり、骨の代わりに金が掛かる作業でもある。

もちろん彼女は労力も金もかけず、車に乗って寝ていただけなのではあるが……それは帰りの行程に備えて体力の維持に務めていた、と彼女は主張している……同乗の三班班員達は戦都の強行突破に際して、銃弾の雨と追撃してくる車両を振り切る為に、かなり長い間カーチェイスを演じる羽目になっていた。

今までならば、それなりの袖の下を用意する事で平穏無事に抜ける事も出来たのだが、関西統括軍が分解した現状では、そうもいかない可能性があったのだ。関西の地において、将軍と双璧を張る『シャクナゲ』が所属する黒鉄に対しては、間違いなく最大レベルで警戒しているであろうし、混乱している現状では、渡された袖の下に欲をかいた関所の兵が、強盗に変わらない保証もない。

何より将軍がいない関西統括軍に気を使うといった行為自体が、シャクナゲ率いる三班にとっては士気の低下に繋がる恐れもなくはない。

それだけにカーリアンも同乗する行きは、様子見を兼ねて強行突破を敢行し、帰りは東と西を警戒する戦都を迂回して帰還するルー

トを取る事になったのだ。
つまり行きの行程だけ見ても、カーリアンは戦力として数えられ、上手く戦都の偵察に使われていたという事である。

もちろん彼女自身は寝ていただけであり、三班班員だけで突破出来た以上、そんな事を知る余地はなかったのだが。

「時間まではまだあるけど、約束の場所までは行っとこっかな。念の為に『これ』は持ってきたけど、辺りを見回って警戒しとくに越した事はないし」

そう一人ごちると、羽織ったパーカーのポケット越しにある自らの得物を確認し、よしっと気合いを入れてから視界内で最も高いビルへと向かって歩を進める。
出来るだけ高い場所から、地形や比較的に人の少ない方面、警戒の厚い場所を確認する為に。
この都市の現状をちゃんとその目で見て、記憶して、それを持ち帰る事もまた自分の仕事の一環だろうという、今までの彼女には似合わない、彼女なりに最良の判断を下して。

そう、彼女は前回この都市に来た時と比べて、その内面は大きく変わっていた。意識して変える努力をしてきたのだ。
行きの車の中でずっと眠っていたのも、どうしようもなくなるまでは、仲間達を信じきって体力の維持に務めてきたつもりだった。
断じてサボって寝ていただけではない。
むしろ今までの彼女の性格から考えれば、凄絶なカーチェイスなどは格好の暇潰しであり、喜々として仲間達を煽っていただろう。
もちろん今でも興奮はしたのだが、そんな自分を無理矢理に抑えて眠るようにしたのである。それだけに眠っていた彼女には、同乗した三班の班員の方がびっくりしていたほどである。

小さな事ではあるが、それも自分で考え、判断し、最良を選ぶ努力をするように彼女が考えている結果だ。今までの彼女は、与えられた仕事をこなすだけで、それ以上を求める事などはなかったし、任務外は比較的好き勝手にしてきたのだ。

しかし、与えられた敵だけを排除し、守るべきを守ってきただけの自分では、ここから先には進めないと考えた。今までのままでは、今まで以上になんかなれっこない……そう自分に言い聞かせて、『紅』たる彼女は変わる決意をした。

元より素直すぎる性質のある彼女は、その決意と自らに対する言い聞かせを繰り返してきただけでも、内面や考え方には多少の変化があっただろう。

それでも今回は自ら動かず、暇を持て余しながらも仕事が来るのを待ち続けてきたのは、立場や状況が変わった今の現状がよく分かっていなかったからだ。

今まで副官であるカクリに頼りっきりだったツケである。これまで表の事情にさえ疎かった彼女は、まずは色々と話を聞いて回って、改めて状況把握に務めていたが為に、自分から動きようがなかったのだ。

ただがむしゃらに動いて、仲間達に迷惑をかけたくはなかったのである。

そこだけを見ても彼女は変わったと言えるだろうし、今回の任務がタイムリーだったとも言えるだろう。なにしろカクリもアオイも、彼女自身の判断よりも最良の仕事をあてがってくれるだろう。少なくとも今の彼女よりも、あの二人は現状がよく見れているハズなのだから。

カクリやアオイの危惧ゆえに任された仕事ではあったのだが、彼女なりに今回の仕事に対して胸に期するモノがある事も間違いない。

今までの自分では出せなかったであろう結果を……なんらかの進歩を出してみせるという想いがあるのだ。

確かにシャクナゲがいないという時期に、表に出されるという事

には不満があり、不服も盛大にあった。出来れば廃都内の仕事を希望したかった。

しかし、それで今までみたいにぶちぶち文句を言っているだけだと、あの時この都市で言った言葉が嘘になってしまう。嘘を吐いたつもりなどなくても、不平不満に捕らわれて行動にしない程度ならば、到底真実にはなり得ない……そう彼女は考えたのだ。

――あの時、自分が言葉にしてみせた高みには届かない、と。

――強くなる。『蒼』や『水鏡』、そして『銀鈴』や『錬血』よりも強くなる。

彼女はそう彼に言ってみせたのだから。

周りにいる誰よりも……女性ばかりを挙げている点は無意識だったが……強くなって、先に引っ張っていってあげると誓ってみせたのだから。

だから彼女は変わるべくして変わらなければならない。自然と変わっていくのではなく、自らの意志と行動の結果で変わらなければならなかった。

その為に考えた結果が、ただ言われるがままに諜報員を迎えに来るのではなく、ついでに光都の偵察をして、可能ならば拠点の一つにでも火を着けて、街の混乱に拍車をかけてやろう。そうすればシャクナゲが戻ってくるまで、光都は大人しくせざるを得ないかもしれない……そんな結論だったのだ。

『近衛』がもしまだ他にもいたのならば、出来れば自分の手で討ち取ってやりたいとも考えてはいたが、そこまで一気に望むつもりはない。

『水鏡』や『錬血』に並ぶ『近衛殺し』。黒鉄の強者としての証みたいなモノには惹かれたのだが、まずは一歩……そう自分自身を戒めてもいた。

あまり高望みをし過ぎて、一番重要な案件を疎かにするつもりはない。『ついでにこなせたらこなしておこう』と言った程度でいい。
そう考えているだけでも、彼女は大きく変わったと言えるだろう。

――目印は首から下げられた三枚綴りのタグ。それを掲げる相手に対する合い言葉は『宵闇』と『明けの明星』。
そう確認しながら全く気負いを見せる事なく歩いていく。
不満を抑え、今回の仕事に対して高ぶりそうな自分を抑えて。
ここが彼女の嫌うヴァンプが支配する都市であるのに、それに対しては何か深く考える事もないままで。

「うっし！過ぎた事は仕方がないっ、反省っ！きっちり反省して、次回からばっちり生かすわよ、あたしっ！」

少しばかり離れた背後で、空を舐めるように燃え上がりはじめた紅蓮の炎に、少しばかりの反省と今後の戒めを自らに架しながら。

……実際新たに行動を起こして、一番最初にする反省が『癇癪を起こして放火しない』という辺りからすると、彼女が目指す新生・カーリアンへの道のりは果てしなく長いのかもしれない。

2―13・錬血の後継

彼女はかつて黒鉄としての先輩であり、師にも当たる女性に猪と呼ばれた。

猪でももうちょっと後先考えて突っ走るとも評された。

迷惑を顧みず、ただ無闇やたらと突っ込むしか能がないとまで言われた。

そしてそう言われる度に――迷惑をかける度にボコボコに殴られ、メタメタに蹴られ、ひたすらにひっぱたかれながら、しょっちゅう体罰上等を掲げるその教官に折檻を食らいまくった。

なまじ彼女が強かったからこそ……戦い方を知らぬままでも、その能力だけでもって『一級のヴァンプ殺し』として知られるほどだったからこそ、その師である女性も手加減が出来なかったのだろう。仕舞いには両方ともに熱くなってしまい、大抵の場合が周りに迷惑をかけまくるほどの大喧嘩になったモノだ。

その喧嘩の様はまるで怒れる龍と虎のごとき様相で、二人が揉めているとなれば、半径数百メートル以内からは仲間の姿が消え失せるほどだった。

その大喧嘩の末に、毎度火を吹く彼女（龍）が、騒がしい師（剣歯虎）にノックアウトされて、その後で延々と説教を食らう羽目になっていたのだ。

その師はかつてこう言っていた。

『あんたは将棋の駒で例えれば香車みたいだね』と。
『真っ直ぐ前にしか突っ走れないから、ただ愚直に突っ込んでるのかな。でもそれじゃ、あっさり取られて終わるしかないよ』と。
『アンタは誰かの支えがあってこそ生きる駒で、後ろから誰かを支えるすべを覚えてこそ、前を走る駒が力を発揮するようなそんな駒なんだ』
『盤の上を縦横無尽に走り回る方法を覚えなさい。周りには一杯助けてくれる人がいるんだよ？だから周りをちゃんと見渡して、自分が突っ走る方向をしっかり見定めなきゃダメ。アンタにはいつかさ、あたしを超えていって欲しいから』
……そう言って教育的指導を施したのだ。

能力で言っても経験から見ても、間違いなく黒鉄最強クラスの『剣匠（ソードメイカー）』。規格外である銀鈴を除けば……いや、その銀鈴にすらも迫るとまで言われた『黒鉄の錬血』。
かの『水鏡』をおいて、『自分よりもずっと強くて、ずっと強か』とまで言わしめた、生粋の戦闘技能者。
創造者であり、鍛冶師であり、剣の騎兵であり、鬼教官であり、指揮官でもありながら、ムードメーカーをも兼任する純粋なる黒鉄。
その異質な剣の創造者にして使い手たる女性こそが、カーリアンの力を――強力なだけでありふれていた『発火能力（紅）』を、最も高く評価していたと言っても過言ではない。
いつかは自分を超えられる、そう断言してみせたほどに。

その師はいつもいつも折檻……あるいは説教の後、毎度毎度彼女に抱きついて、わんわんと泣いてみせた。
馬鹿で考えなしで、いつも師を怒らせている生徒の無事を喜んで、無茶をしがちな生徒の無鉄砲を怒って泣いたのだ。
いつでも誰が相手でも折檻肯定で、拳骨上等。仲間の為に泣いて、

仲間の為に怒って。
仲間達には生き残り方をまず教えて、どんな存在でも、生き残り続けてこそ強くなれると信じて、真っ直ぐにぶつかってみせて。
そして誰よりも感情が豊かだった。
その師の影響が、今の彼女の性格に現れている事は間違いない。
彼女は——紅を冠され、香車に例えられた真っ直ぐな少女は、その師のような女性になりたかったのだから。

黒鉄の戦場ではいつでも先頭に立っている男——レジスタンス・黒鉄が誇る『最強』たる青年の隣で、ずっとその背中を守っていた少女。
百に迫る刃を精製し、連結し、支配して飛ばす非常に珍しく強力な能力も、高過ぎる身体能力も、女の子らしく可愛らしいそのルックスも。
確かに全てが羨ましくはあったが、それら全てなどよりもずっと、その立ち位置にこそ憧れたのだ。

先頭に立つ男に先駆けて剣の弾幕を飛ばしつつ、怯んだ敵に突っ込む男に合わせて斬り込むと、誰よりも……何よりも強固で高い壁として、黒鉄の象徴たるその男を守っていた。
男の背後を任せられた相棒として——その守護者として、最前線に立つ男の背中を絶対に敵には見せなかった。死角を敵に晒す事はなかったのだ。
無骨な刀を振るいては敵を近づけず、大地より土を連結した刃を飛ばしては敵を貫き、華美な矛で群れる敵を薙払っては、最前線に立つ男の背中の代わって、その身を血の雨に濡れさせた。

戦場にあっては常に先陣を切りて獅子奮迅。
刃の群れを率いてはいかなる場であれ一騎当千。
守護者としてはまさに鉄壁。

彼女こそが黒鉄と呼ばれた男の最初の相棒であり、最初の味方。
一番前で戦う男にとっても、最高の味方であり唯一の相棒。

その姿はまるで王将に従い、その脇を堅める金将のごとく。
果敢に突っ込んでいく、攻めの要たる飛車のごとく。
そして刃という無数の従者を従えて、主の為に血路を開く騎士のごとく。
その光景は、血に塗れた戦場には似合わない、どこまでも美しい一枚の美術品のような在り方で。
幻想的とすらも言える、不敗の象徴の片割れで。
そこに失ってしまった絆を彼女は垣間見たのだ。

――多くの半人前を救う為に、師たる女性が一人倒れるその時まで。
関西軍近衛総長たる男が率いる軍勢を前に、彼女がたった一人きりで立ちふさがったあの時まで。
不出来な弟子の中では、その図こそが、黒鉄の守りが絶対であるという証明だったのだ。

だから彼女――カーリアンは、師であるミヤビとよく似た性格をしているのかもしれない。
彼女のようになりたくて、その代わりを務めてみせたくて。

――後は頼むから。

その最後の言葉を果たしたいと思うからこそ、彼女の性格はミヤビに似てきたのかもしれない。
それは模倣でもなんでもない。憧れの対象をただ真似ただけなどとは、誰にも言わせるつもりはない。
彼女自身の目標として、今でも『錬血』の姿が変わらずに在る…

…ただそれだけの事なのだから。

『アカちゃんじゃまだまだあたしの代わりにゃなれないにゃ～。うん、まだ安心して任せてあげらんない。いつかは代われるかもしんないけど、あたしも大人しく譲る気はないかんね？』

かつて言われた言葉を……当時は納得せざるを得なかった言葉を、いつかは絶対に覆してみせると誓った。その誓いが今でも変わっていないだけなのだ。

しかし、カーリアンの元副官である少女や、現在上官となった黒鉄を冠する青年からすれば、少し物申したい部分があった。

――似るのはいい。目標とするのもいい。なにしろ錬血は間違いなく最高の黒鉄だ。

生き残るすべも、誰かを守る為の強かさも、全てが最高クラスの戦士だ。

錬血を目標とする黒鉄は、彼女の教え子達を含めて決して少なくはない。『音速』も『響音』も、彼女に戦い方と生き残り方を教わり、今でも戦い続けている錬血の後継だ。

カーリアンに比べれば些か未熟ではあれど、彼女らが最年少でコードを戴いた裏には、師のスパルタ指導も無関係ではない。

でも、と思う。

そう、いかに優秀な黒鉄の後継であれ、出来るならば似なくていいところまでは似ないで欲しい……そう彼等は思うのである。

錬血の後継達は揃いも揃って、仲間達を非常に大切に思う余りに暴走しがちな傾向があるが、特に紅たる彼女はそれ以外でも錬血によく似ていたのだ。

しかも似なくていいところほど。そして、思わず元副官や現上官

がボヤいてしまうほどに。

曰わく、錬血のミヤビは、基本的に嫌いな仕事はあらゆる口実の元にサボるクセがあった。

曰わく、錬血のミヤビは、気にいらない人間を叩きのめす事に毛ほどの躊躇いもなかった。

曰わく、錬血のミヤビは、口よりも先に手が、手より先に能力が出た。

そして曰わく――

この部分は最も誰かに受け継いで欲しくない部分であったのに、その願いに反してこの師弟（二人）が最も似てしまった部分。

曰わく……錬血のミヤビは、凄まじいまでのトラブル誘因体質だったのである。

「ん～……」

カーリアンは非常に悩んでいた。悩みだしてまだ数秒ではあったが、間違いなく懊悩の最中にあった。

「おら、ええから来いやっ」

「税が払えへんなら、労働するしかないやろうがっ。ガキや女でも働けるとこ連れてけ言われてんねん」

目標だった二十階は超えているビル。かつてはガラス張りだったのだろう。あちこちに穴が開き、無事な面は一つとして残っていない。

そこに高さという地点を求めてやってきたのだが、その前では今のご時世ではありきたり、余りにも芸のない展開が待ち受けていたのだ。

「とっとと乗れっ！」

「俺らかて面倒くさいねん。はよ終わらせたいんや」

関西統括軍の旗を掲げたトラックと、銃を構えた一人の男。そして辺りで廃品を回収していた人々なのだろう、女性や子供が目立つ集団を脅しつけて、トラックに乗せようとする二人組の男がいた。

それは軍の名前を借りた人狩り。労働力を得る為の因縁付けとも言える行為だった。

それは全くもってどこにでもある出来事で、それこそ珍しくもなんともない光景だ。

関西という地は、統括軍の方針からか、その勢力範囲内ではそう人狩り自体多くない方ではある。しかし、東海地方や北陸地方との境界付近では、労働力の確保という面目で、各勢力が自らが支配する区域の人員確保の為に人狩りに精を出している、と彼女は聞いていた。廃都などの統括軍に従わない地域では、戦いが起こる度に、戦利品代わりに戦えない人々が何人も浚われていた事も知っている。

しかし、ここは光都のど真ん中で、しかも真っ昼間だ。そんな白昼に堂々と人狩りを行う辺りからしても、関西統括軍は瓦解を始めていると言えるだろう。

だが、彼女が悩んでいたのは、そんな現状を目の当たりにして、

その情報の価値について悩んでいるワケではない。
関西統括軍が統率を乱している事は見てとれたが、それが今の彼女に直結しているワケではないのだ。

「……どうしよう。下手に手を出したりしたら、やっぱりマズかったりする？」

そう、今の立場を考えて、この場をどう収めるかについて悩んでいたのだ。
放っておく？
それが今の立場からすれば妥当だろう。今の任務は秘密裏の内に動けば、より確実にこなせるハズだ。それはカーリアンにも分かっている。
でも、見てしまった以上、『あの人達も大変だなぁ』では済ませられない。そんな風に考えられる性格ならば、いつまでもこんなところで様子など見ていない。

――困った。

誰かが『こうするべきだ』と言ってくれたなら、カーリアンは動きやすかっただろう。
その意見に賛成するか反対するかは差し置いても、自分なりに意見を出してパッと動けたハズだ。なにしろ彼女は、一度決めてしまえば悩む事はないのだから。

こんな風に、自分のやりたい事とすべき事の間で悩んだ時は、自分の周りの人間ならどうするかを考えて、彼女は決断を下す事にしていた。
周りの人間はみんな信頼出来るし、何より彼女自身よりは現状を把握するすべに長けているのだから。

――シャクなら……カクリなら……スズカなら……そしてミヤビなら。

そういつも通りに考えて――

「ちょっと待った――――っ！！」

次の瞬間には、『介入に賛成三、反対一（反対が誰かは敢えて考えない）』が弾き出され……あくまでもカーリアンの主観による……彼女は迷う事なく声を張り上げたのだ。

その声に人々が呆気に取られる暇もなく、赤い稲妻じみた熱線が空間を走る。それが空間に歪なジグザグを描き、人々を無理矢理乗せようとしているトラックに着弾すると、そのトラックは見事なまでに炎上してみせた。あっさりと燃えないハズの金属の表面に赤い曲線が走り、トラックを赤く染める。そして燃料タンクの温度をも上げると、爆発炎上して炎を吹き上げたのだ。

「うっし。制御も威力もいいカンジっ！」

誰も巻き込まれてはいない事を確認し、あっという間に炎に巻かれていく中型トラックを見て、カーリアンは軽くガッツポーズを決める。

周囲の唖然とした表情は気にもかけない。

――紅。

そう呼ばれる彼女の発火能力は、単なる火をおこすだけの能力ではない。

普通のパイロキネシストが持つ発火能力は、単純に発火源を発生させるだけの能力だ。例えるならライターやマッチ、そんな類のモ

ノを能力を持って発生させるモノに過ぎない。
それの強弱こそ、能力者によってマッチから火炎放射器までと千差万別だが、その原点だけは変わらない。それが燃料に着火し、炎を吹き上げさせるのが普通の発火能力の在り方だ。

だが彼女の紅は、あらゆるモノに炎を走らせる。それが不燃性の物質の表面であれ、水面であれ、だ。
しかもその指向性も高く、目標以外には着火させない事も可能だ。熱線という形で彼女の意思が着弾した先、そして彼女の手が触れた先であれば、何にでも着火する。
その力は、非常に強力というだけでは説明がつかないモノだ。燃料の代わりになるモノが必要となる。
それを満たすモノが『彼女の感情』、あるいは『意思』である。
彼女はそれを熱線として走らせ、着弾させると、炎を高く強く巻き起こす。例えるなら、対象にガソリンを撒き散らしたかのように、彼女の感情と意思がぶつかった先は、走る紅の線と共に猛火に包まれる。
あっさりと鋼の表面を炎が舐め、アスファルトを焦がし、大気を熱気が震わせていく。
彼女の炎は、着火源だけではなく燃料をも自らの内から零れたモノなのだから、ビルのコンクリートであれ、肉を持つ敵であれ、あるいは今のようにトラックであれ、あっさりと炎上させてガラクタへと変えていく。

「ふぅ～」

いい仕事をした、とばかりに一息吐くと、いきなり叫んだかと思えば攻撃をしかけてきた彼女に、唖然とした視線を向けてくる男達へと向けて、その灼熱を照り返すほどに白い手を掲げてみせた。
紅の光が明滅し、チカチカと高温の炎熱を思わせる輝きを乗せた

その右手を。

「……さて、と。好調をアピールしたとこで、今すぐ回れ右をするか、ここで真っ黒に焦げるか選ばせたげる」

辺りには彼女の力が発露する為の導線たる赤い稲光が走り、パチパチと小さな音が広がっていく。その稲光の全てが、他の意思が込められたモノ――弾丸や敵対する能力に触れれば発火する、彼女が関西に来てからの訓練で身に付けた守る為の紅（ちから）だ。

あっさりと弾丸を融解し、そのエネルギーを燃やし、他者の能力を散らす、黒鉄最高の発火能力者たる彼女の力の具現だ。

この周囲に広がる紅き閃光を持って、彼女は今まで後方に位置する仲間達を守ってきたのである。

今まで相対した者の中には、コード持ちにも匹敵する力を持つ者もいただろう。それでも……それほどの力を持ってしても、彼女の紅にかかればある程度は力を削がれてしまう。

何故なら紅は、他者の能力により産まれたモノにさえ、意思を向けさえすれば着火させる事が出来るからだ。

『何にでも感情や意志を付着させ、それを燃やす事で対象を炎に包む能力』……それが彼女の『紅』。

その異端とも言える発火能力を持って、彼女は『紅のカーリアン』……あるいは、東海随一のヴァンプキラー『死にたがりの紅』とまで呼ばれるに至ったのである。

目の前で沈黙に落ちる連中……それは人狩りにあっていた人々も含めて……そんな彼女の異名を知っている者はいないだろう。彼女はまだ、黒鉄という組織の中では無名な方であるし、有名な存在である『東海のヴァンプ殺し』の事は知られていたとしても、まさかそんな人物が警告をして猶予をくれるほど、のんびり屋だとは考えられまい。

「テンカウントだけ待つよ。次は直で当てる」

それでも人々が口を閉ざしていたのは、彼女が『力を持つ側』だと理解せざるを得なかったからだ。それも人の叡智が産んだ銃火器すらも寄せ付けない、強者だと判断したからにすぎない。

並みのパイロキネシストでは、たかが一度の能力行使でトラックを炎上させる事は到底かなわない。大抵の車両の燃料タンクには、外部からの熱をある程度断つ工夫がされているモノだ。周囲が炎に包まれたからといって、あっさりと引火するなどあり得ない。

パイロキネシス自体は、人の変種が持つ力の中でもそう少なくない部類であるが、それだけに他のパイロキネシストと比べる余地がある。

つまり今の能力発露だけを見ても、彼女が並みの発火能力者ではない事ぐらいは一目で分かってしまうのだ。

「……九」

窮鼠猫を噛むと言うことわざがある。

その言葉通りに、力を持たない側の人間でも、武器や備え次第で力を持つ側を打倒する事は出来る。追い込まれた鼠のごとく、強者に噛みつく事は出来る。ある一定レベルまでの能力者なら、やはり銃火器の利便性や、人を殺す為に進化し続けてきた技術の前には屈してしまう。

しかし逆に言えば、ある一定レベルを超えた能力を持つ者には、知識で作った武器などでは到底届かない事も、この時代に生きる人間はよく知っているのだ。

関東で国軍を圧倒し、この国を壊した変種の王然り、関西で将軍と呼ばれた男然り。

窮鼠猫を噛むで済めばいいが、相手は鼠や猫などではないどころか虎でさえもない。人より強大な身体能力を持つ虎ですら、人の文明の進化の前では、絶滅の一歩手前まで追いやられているのが現実だ。

目の前の女が、その文明を壊してしまった存在（変種）の一人である事を考えれば、彼らが恐れる理由も分かるだろう。

「……八」

彼女がかつて師と大喧嘩をした際、剣歯虎（サーベルトゥースタイガー）に相対する、怒れる龍と称された（ドラゴンブレス並みの理不尽過ぎる火力から）のは伊達ではない。

先ほどの火力が人間に向けられれば、まさに骨しか残らない事は明らかだ。

そして、今もバチバチと歪に放電する紅い閃光を右手に掲げ、ゆっくりとカウントを続ける小さくその口元を、チロッと這わせた舌で潤す姿は、より一層彼らの恐怖を煽った事だろう。

内で広がる開放感、力を使う事に対する高揚感がどうしても滲み出るその表情は、強い力を持たない者には理解が及ばない類のモノなのだから。

「……七」

まだスリーカウントしか進んでいない段階でも、周囲の人々を恐慌に落とすには十分だった。それだけあれば、全員が混乱してはいても誰かが現状を理解出来る。

いきなり理由も告げず攻撃してきた理不尽を問い質す事すらせずに、人々はあっさりとその身を翻していく。

理不尽を問い質すのに必要なのは、倫理や論理ではない。それ相応の力が必要なご時世なのである。

先ほど人狩りにあっていた人々も揃って、慌てて逃げ出していく。狩る側だった者も狩られる側だった人間も、そこには差はない。

より強き者に対しては、その足並みを揃える事がある意味では自然であろう。

もちろん、逃げていいと言われたから、周りを気にする余裕なく揃って逃げ出しただけとも言える。

「六……ってもういないか」

カウントが半分もいかないウチに、たった一人残されたカーリアンは小さく笑い、辺り一帯に放射していた赤き導線を収める。

「……感謝が欲しい、なんて甘ったれた事を言うほど世間知らずじゃないけどさ、なんかやっぱ割に合わないよね」

――でもここは灰都じゃないし、当たり前っちゃ当たり前なんだけど。

そう呟いて、最後に一際太い赤き閃光を人々が逃げていった方向に飛ばし、大地に着火させると、当初の目的であったビルからあっさり背を向けた。こんな派手なマネをやらかしておいて、その場に留まっているワケにもいかない事ぐらいは、彼女にも判断がつく。

そしてアスファルトに放った紅の炎が、ただ逃げていくだけの人々に対する憤りを発散させていくのを背に、いずれ知らせを受けてやってくるであろう敵達をやり過ごすべく、いち早く合流地点へと足を向ける事にしたのだ。

――進んで偵察しよう、なぁんて似合わない事を考えてたから、割に合わない目に合うって事かな。紅は紅らしくしてろって事かもね。

そんな事を考えながら小さく吐息を漏らし、腰から下げたホルスターに手を這わせる。

似合わなくてもらしくなくても、変わるしかないんだから変わる、その意志に揺らぎなどはない。そんなモノがあるワケがない。手のひらに感じる確かな存在感は、その想いをより強くしてくれる。

……彼女は一度決めたら突き進むしか能がない。師から『猪突猛進を地でいく』と呼ばれた弟子なのだ。

今はただ、突き進む方向を見定め、方向転換をしているだけであり、存在そのものの本質が変わる事などあり得ない。

あり得ないのだが――

「『Ｗｈａｔｅｖｅｒ　Ｗｉｌｌ　Ｂｅ，　Ｗｉｌｌ　Ｂｅ』……なるようになる、か。でもあたしの場合、それは『Ｌｅｔ　Ｉｔ　Ｂｅ』と同義ってワケじゃないんだよね」

似合わない流暢な発音でもって告げた言葉は、師の口癖だったモノで。

続けて口にしたのは、変わらないままであるワケにはいかないと告げるモノ。

「あたしがケ・セラ・セラ、と言えるようになるには……やっぱ遠いなぁ」

――なるようになるよ、アカちゃん。

そう言っていた女性の事を思い出す度に、その境地の遠さが思い知らされた気がして。

未だに残る、一目散に逃げていく人々に対して浮かんだ、モヤモヤをかき消すように笑う。

そっと空を仰いでみる。
雲が満ち、灰色に染まった曇天を。
晴天とは切り離されち今の位置。空の青さからかけ離れた場所。
それこそが今の自分のいるべき場所のような気がして。

「まぁ、任されてみる。あたしなりに頑張ってみるよ、ミヤビ」

――とりあえずは、任されたお務めをしっかりこなすトコから、ね。
そんな心境を自覚してなおそう呟きを残すと、その場を後にした。
今の彼女が任された仕事を、彼女なりに完璧に……一歩でもいい方向にやり遂げる為に。
いつかは自分も、『なるようになる』と言える日が来る事を願いながら。

2―13・錬血の後継（後書き）

幕間ぽい話になった理由を書いたあとがき。
錬血さん押しなここ最近です。元より好きなキャラクターですし、非常に書きやすい。
今回も冒頭の錬血さんが出てくる部分は、当初もっと……半分ほどに短かったんですが、気付けばこんな長さに。
本当は次の段階まで話を進めるつもりだったのに、気付けば何故か幕間みたいな話になっていたりします。
あれ？と書いてる本人も不思議でしたが、まぁいいかと。
次こそは本編を……と思いますが、最近では番外っぽい本編に関係ない、いつか使う予定で書いていてもいつになったら使えるか本人もよく分かっていない話のストックが、本編のストックよりも増えているという、よく分からない状況です。
おかげで本人もちょっとストーリーがこんがらがっていたりもします。こういったモノが伏線になる予定は全く、これっぽっちもないんですが……いつかは伏線にもなったりするんでしょうかね。
あちこち組み換えて、話を付け足してみればいけるかな。いけないかな。
文字だけ連ねると後々苦労しそうです。今回なんて若干……いや結構書き方違いますし。これでもいくらかは修正したんですがね。

次回更新はノクターンだけ、かもしくはマークもまとめてか。
マークもまとめての場合は、その次の一週間は更新お休みして、ちょっと話の練り直しをする事になります。
ワケの分からないストック以外は、話のストックが減ってますしね。
そのあたりは活動報告にてお知らせします。

2―14・赤札付きの閃光

目的地は光都の郊外にも近い、やや寂れた場所にある橋の下だった。

――なんていうか、昔の不良が決闘する時に待ち合わせするような場所よね。

そんな益体もない事を考えながら、カーリアンはゆっくりと腰を下ろした。そして担いでいたショルダーバックに手を突っ込むと、入れておいた簡易食糧を取り出して一口それをかじる。

黒鉄独自の簡易食糧は、干した果実などを、多少の塩と一緒に小麦粉や芋を擦ったモノに練り込み、焼き上げ乾燥させたモノが支給される。

水気はなくパサパサで、塩気が口の中の水分を奪っていく上、その味は決して美味しいとは言い難い。もっとはっきり言ってしまえば、腹は膨れるがマズいモノだった。

「……相変わらず美味しくないし喉が乾く」

慣れてはしまっても、思わず顔をしかめずにいられないその味に、小さく毒づきながら欠片も残す事なく腹に納める。

そして、軽く唇を湿らせる程度にペットボトルのお茶で喉を潤してから、簡易食糧を包んでいた包みを丁寧に畳み、ペットボトルと共にバックへとしまった。

――資源は大切にってね。

そんなどこかの標語じみた事を考えつつ、待ち合わせまでそれなりにある時間を、いかにして潰すかについて思案を巡らせていく。

何もせず、ただボーっと待つだけで過ごすような時間は、勿体無く思える。そんな余裕など自分にはないと思えてしまうのだ。

――この美味しくない簡易食糧を、少しはマシに改良してみるのもいいかも。

などと考えてはみても、それも廃都にいてこそ出来る事だ。恐らく黒鉄のメンバーなら誰しも、この味気ない簡易食糧には苦しめられているであろうから、きっとみんな喜んでくれるだろう……そう考えると、少しだけその頬が綻んだ。

こういった遠出にあたる作戦や、隣の戦都との戦闘など長期に渡る作戦の場合は、かさばる弁当などを個人で持っていったりは出来ない。簡易食糧を幾つかとペットボトル入りの水、それだけが支給される。

もちろん部隊ごとの作戦行動の場合、輜重（しちょう）部隊――食料や装備を運ぶ部隊はちゃんとある。ずっと簡易食糧ばかりを口にしているワケではない。

しかし、いつでもどんな時でも、落ち着いて食事を取れるとは限らないのだ。乱戦の最中、あるいは各自命がけでの血戦の最中、片手間で取れる食事は絶対に必要となってくる。

その時に備えて、一食分だけ弁当を持っておくぐらいならば、簡易食糧を二つ持ってくる方が荷物は少なくなるし、よっぽど腹にたまる。また、その味は最悪ではあるが、行動に必要な分の栄養価がある事も間違いない。

今回のカーリアンの場合、お手製の干し飯のおにぎりと干し肉を幾つか、そしてドライフルーツと味噌を少量持ってきてはいるが、それは簡易食糧に飽きてしまった際の取って置きだ。彼女が個人で用意したご馳走なのだ。

干し肉は薄く味噌を塗って軽くあぶり、干し飯は小さな器に入れ

た水で戻してから、味噌を溶かして食べるのである。ドライフルーツは割と洒落たデザートになる。

カーリアンの場合は、支給を受けた簡易食糧と共に干し飯や干し肉、干した果実などお手製の携帯食糧も持ってくるのが常だったが、他のメンバーはやはりそんな面倒な真似も出来ないだろう。

昔を思えば不便極まりないが、食べられるだけまだマシであり、材料があり工夫の余地があるだけ全然いい。

廃都はビルの屋上から北にある山裾、各班本部の近くや本部地下まで、ありとあらゆる箇所を食糧調達の為に畑として開墾し、保存庫として利用していた。また畜産にも知識がある者が寄り合い、精を出しているおかげで、食糧自給率は飛躍的に上がっている。

それもこれも全てが、アカツキの都市防衛計画によるモノであり、それがあったからこそ何年も孤立していても戦えたのだと言えるだろう。溜め込んだ財を払ってみかんの木を買い取ると、山の奥深くの一部を段々畑のように開墾し、カリギュラ印のみかんまで作っている辺りかなり徹底されている。

塩田も作られているし、他にも果汁や塩、大豆や他食材を元に色々と改良された調味料まで作っている。

かつては関西でもかなり大きな都市として知られた廃都は、現在では関西でも随一の食糧自給率を誇っているのだ。

現在では、各班ごとでも食料事情には工夫を凝らしており、中でも特に救急班であった元二班は、食材の加工や調理方法など、現状でも出来る独自の創意工夫といった面において、他の班の追随を許していない。その面でも二班との合併は、三班のメンバーから諸手を挙げて歓迎されたほどだったりする。

メンバーのほとんどが前線に立つ事が多い三班と一班は、食料の備蓄云々以前のそういった面において言えば、一歩も二歩も他班からは遅れを取っているからだ。この二つの班において言えば、食料とは保存方法と量こそが重視されていたのである。

「はぁ、廃都にいない時に限ってこんな事思い付くんだよね。栄養価だけでまっずい簡易食糧の改良なんて、すごくやりがいありそうなのにさ。なんで今まで思い付かなかったんだろ」

そう漏らしながらも、今思い付いた事を帰ってから独自に実践すべく、頭の中にしっかりとメモしておく。

――今までそれだけボーっとしてたって事かな。

そんな反省も含めて。

しかしそうなると、今ここでも出来る事は限られてくる。

いつもの日課。場所はどこであれ、やる気さえあれば出来る事をするしかない。

つまり力の制御訓練。

今までずっと繰り返してきた、紅の制御力を増す為の訓練でもしておこう……そんな考えに落ち着いて、そっとその白い右手をかざした。

拳のまま、座った目線の高さへとゆっくりと掲げる。そしてこれまたゆっくりと、じっくり時間を賭けてその手のひらを開いていく。

その手の中に生まれゆく小さな紅の光。それはとても小さくて、儚い光だった。

それを敢えて小さく留めたままで、少しずつ燃料を……内にある感情を込めていく。

彼女の紅は、何かに対する『感情』を燃料に、『意思』を発火源にする。内側から無限に湧いてくるモノを燃やすのだ。

しかしそれは、感情を向ける対象が必要だという事であり、力が向かう先が必要だという事だ。一人っきりでひたすら感情を燃やすというのは、やはりなかなかに無理がある。つまり力を減じてしまうのである。

それを敢えて行う事で、より自在に力を扱うすべを覚えるという

のが、彼女が行っている制御の訓練だ。
一人っきりで内から感情を引き出し、それを限界ギリギリで留める事によって、自分が扱える火力を伸ばす事と、紅を扱う事によって剥き出しになった感情を制御する方法を得る。自らの力の手綱を、しっかりと手中にする。力を向ける対象がなく、萎んでしまいそうなそれを限りなくたぎらせ、吹き出しそうになる紅をしっかりと抑える。
これこそが彼女の能力を考察した上で、ミヤビとシャクナゲが考案した、紅という異端を操る彼女専用の訓練となる。
それを毎日毎日繰り返していく事で、彼女は確かな制御力を身に付けてきたのだから、二人の能力を見る目はかなり確かだったと言えるだろう。
最初の頃などは、たぎらせる事は出来ても抑える事が出来なかった。あるいは全く力が発露しなかったりもした。
それを思えば、確かに成果が見える訓練でもある。

「ん～、今日はいまいち気分がのってないかも」

もちろん一人っきりでこなす訓練なだけあり、かなりモチベーションに左右されるモノではある。上手くいく時はかなりの紅を留めておけるが、上手くいかない時はほとんど力を発露しない。手のひらを掲げて『うんうん』唸るだけで終わる事も当初は珍しくなかったし、現在でもたまにある。
今も小さな紅がチロチロと燃えてはいるが、その外観通りの力しか持っていない事が彼女には分かってしまう。
それを一旦霧散させると再び腕を掲げ、もう一度気合いを入れて紅を生み、また霧散させる。それの繰り返しをひたすら続け……ふと自分を反対側の川岸から見ている視線に気付く。
いや、その手にした能力の塊が、彼女が意識するよりも早くに別個の存在へとその力を向けようとして、そこで初めて視線に気付い

たのだ。
　殺気も敵意もなくとも、彼女の紅は他の意思や力に反応する。純粋にカーリアン個人の感情を燃やしたそれは、別個の感情に反応する本質があるのだ。
　その本質を利用しなければ、二班班長として一人で敵の奇襲を警戒し、班員を守る事など出来はしなかっただろう。

　そこにいたのは、同年代からやや年上の女性だった。どこまでも無遠慮に見ているだけなのに、それなりに気を張っていた彼女が気づかなかった、という点だけを見ても油断のならない相手だと思える。
　とっさにカーリアンは、『燃料』の向かう矛先をその視線の主へと定め、警戒を強めていく。

「あっと、お邪魔しちゃったのかしら？ウチの事は気にしないで、どんどん続けて続けて」

　確かな対象を間近に得た途端、先ほどまでの小さな紅球とは違う、圧倒的なまでの紅の渦が広がっていき、放電するように力をバラまいていく。

「……んー、やっぱり、さっきトラックを燃やしたのはまぐれじゃなかったみたいね。さっきからチョロい能力をチマチマ使ってたりしたから、拍子抜けしそうだったのだけれど」

「……あんた、だれ？さっき泣きながら逃げ帰った連中に、泣きつかれて出張ってきたクチ？」

　パチパチっと小さく弾けるような音を立て、紅の閃光はカーリアンを包んでいく。それは先ほど、人狩りの現場で使った時よりも濃

い紅色で彼女の白い頬を赤い光に染める。
まるで使用者であるカーリアンの警戒を現すかのように。

『一番怖い相手、警戒しなきゃならない相手はね、自分より強い力を持つ敵対者じゃないんだよ』

そう彼女は教えられている。というより、師に生き残る為の心得として文字通り叩き込まれている。

『自分より断然強い、格上の相手からはさ、取りあえず逃げなさい。背中向けて一目散に脇目もふらず逃げるの。それでその敵よりも強い仲間に頼ればいい。それだけの事でしょ？』

自分やシャクナゲ、いなければスイレンやスズカ。この誰か頼ればいい……そう言って、逃げ伸びる事で仲間の役に立てと教え込まれた。

『絶対に背中を向けてはならない時』はあるけれど、そんな考えを持っていいのは一人前になってからだ、と。

――じゃあ、どんな敵が警戒しなきゃならないってのよ？強い相手じゃないなら弱い相手に警戒しろっての？

そう自らを叩きのめし、マウントポジションをとる師に、ふてくされながらも彼女が聞いた時、横暴なる師はもう一発拳骨を落としてからこう言ったのだ。

『本当に怖いのは敵か味方か分からない相手。なかでもその相手が、自分の理解の範疇を『一瞬でも超えていた』時だよ。そういう相手はね、例え自分を弱く見せていたとしても、実際は自分より強かったりとかするし、味方っぽく見せていても、背中にナイフを隠して

たりとかするからね』

そう言った師の言葉を信じるならば、目の前の女性は条件を完璧にクリアしていた。カーリアンは彼女が近付いていた事に気付かなかったし、敵とも味方ともしれない相手だ。

なにより、品定めするようなその瞳は、上から見下ろすモノのように感じられる。

アッシュブラウンの髪と同色の瞳、そして猫科を思わせる顔の造りは、師であるミヤビと印象的には似ている部分が多い。しかし、朗らか過ぎて裏表が全くなさそうなミヤビと比べれば、目の前の女性は可愛いというよりも美人な造りのせいか、冷たい印象を受けてしまう。

銀色の縁なしメガネも、青白くも見える薄い色の肌も、病的で神経質な印象を持たせるし、下ろした長い髪が放射状に地面に広がっている様は、どこか無頓着さと異質さが垣間見える気がする。

極めつけには、適当に肩に引っ掛けただけにも見える野暮ったい黒の外套だ。よく見ればそれは、元々は黒いコートだったであろう事が分かるが、今ではぼろ切れになるまで着古されており、まるで凶鳥としての鴉を連想させる。

そのボロボロな外套を纏う姿が、まるで傷だらけの羽を持った鴉を思わせるのだ。

「違うわ、あんな連中とは全く関係ないわよ」

女性にしては低い掠れたようなその声は、穏やかな響きを持ちながらも油断出来ない何かが内包されている気がする。

それはもちろん、カーリアンの力の発露を見ながらも、気にした素振り一つ見せない事も関係しているだろう。

「それを信じろって？この光都の中で関西軍（あの連中）の敵だとでも言うつもり？」

「だと言ったら？もしかしてたったそう言うだけで、ウチの事を仲間だとでも思ってくれるのかしら？」

女の言葉に、カーリアンが敢えて鼻で笑うような仕草を返してみせても、相手はたいして気にした様子も見せない。

それどころか、どこか試すような――いたずらげな返答に、思わずカーリアンの方が息を呑んだ。

「まぁ、初対面のウチの事を信じられないだろうし、信じてくれなくてもいいのだけれどね――黒鉄さん」

「……っ」

『黒鉄』。

そう呼ばれ、看破されても、攻撃しなかっただけまだ自制が効いた方だと言えるだろう。

なんとか平静を保ち、そして射るように細めた赤い瞳を女性へと向ける。

実は危ないところでカーリアンは攻撃しかけていた。敵だと判断し、紅を向けそうになった。

この都市において黒鉄という存在は、名前そのものが敵対者を指す言葉に他ならない。光の都は関西を根城とするヴァンプ達の首都であり、黒鉄はそのヴァンプに抗うレジスタンス（反抗勢力）だ。

さらに言えば現在の光都の混乱も、『黒鉄』の名前を持つ男が深く関係している。その情報があちこちに浸透している可能性まで考えれば、カーリアンが過剰に警戒してしまうのも無理はないだろう。

「……もし本当にあたしが黒鉄だったらどうする？捕まえたら賞金くらいは貰えるかもよ？」

――この街の中（ここ）は、あたしにとって場所が悪い。

そう判断して、カーリアンは理性で感情をなんとか抑える。

いかに橋の下であれ、派手にドンパチをやらかしては、都市を警邏しているヴァンプに発見されてしまうだろう。

「そうでしょうね。あなたほどの力ある変種なら、かなりの賞金が首に懸けられいるのでしょう？

――まぁ、ウチにはそんな賞金、必要なんてないのだけれど」

「……ふん」

「なにより今の関西軍に、律儀に賞金を払う余裕があるとも思えないしね」

ここは不本意だけれど一旦退くか、あるいは一撃で決着をつけるか。

そう思考を巡らせるカーリアンに、女は抑揚のない口調のままでそう言うと、ゆっくりと立ち上がった。

その身長は、女性にしてはやや高いカーリアンとほぼ同等ぐらいだろうか。変種か否か以前の問題として、間違いなくなんらかの武道を身につけているのだろう。野暮ったい外套ごしでその体のラインは見えないが、立ち姿は真っ直ぐと芯の通ったモノで、ブレが全く見えない。

不気味なほどに真っ直ぐな立ち姿で、逆にどこか不自然さを感じてしまうほどだった。

「簡単に自己紹介をするならね」

距離にして五メートル強。身体能力に長けた変種ならば、一飛びで川を渡り、間を詰められる距離だ。

それを計りながら思わず腰を引き、座っていた姿勢から態勢を整える。

まるで猫科の動物のように低い姿勢のままで、いよいよ警戒を深めていくカーリアンに、女性は体を覆っていた外套を軽く払いながら小さく笑ってみせる。

唇を不器用に歪める、どこか不慣れな印象を持った笑み。

笑う事には慣れていない人間が、なんとか表情を歪めてみせただけの笑みを。

「ウチもあなたと同じ黒鉄なのよ」

「……はっ？」

そして事もなげにそう言う女性に、カーリアンは思わず間抜けな声を上げる。

もちろん警戒は緩めないが、一瞬だけ呆気に取られてしまう。

ここらに入り込んでいる黒鉄の諜報員達は、そう能力の高くない――有り体に言えば、元はこの辺りに住んでいただけの人間ばかりだと聞いていたからだ。

強い能力を持つ人間は、どう気を付けていても、いつかはその力がバレてしまう可能性が高い。そして強い戦闘能力を持つ事が、高い思考能力を持つ事と同義というワケでもない。何より、土地に馴染むという点においては、やはり元々その土地に住んでいる人間に勝るモノはいないのだ。

だからこそ黒鉄の諜報員は、現地に縁がある人間か、元々そこに

住んでいた人間かをあてがっている、そうアオイから彼女は聞いていた。

「あら、信じられない？」

「そうね、信じらんないわ。だってここはあたしみたいなのが油断したりしたら、あっさり寝首をかかれるような土地でしょ？」

「確かにね」

それなのに、目の前の女は自らを『黒鉄』だと言った。

彼女は間違いなく『力を持つ側』であるのに……シャクナゲやスイレンなどの百戦錬磨を誇る仲間達と比べて、経験といった面では圧倒的劣ると自認しているカーリアンにすら、その纏う空気だけで警戒を促させるほどであるのに、光都に入りこんでいる同朋である、と言ってのけたのだ。

力の発露などなくとも、その纏う空気は間違いなく強者のそれであり、油断ならないタイプだと五感に訴えかける何かがある。向かい合った瞬間から、カーリアンは本能的にそう悟っている。

そう、あのアオイが、力をあまり必要としていない諜報員に回すような人材だとはとても思えなかった。

「その慎重さは悪くないわよ。正確に言えば、ウチは黒鉄を抜けた黒鉄なの。つまり『レッドコード』なのよ」

「レッドコード……」

その言葉を聞いた瞬間、カーリアンから滲む警戒心は、はっきりとした敵意と殺意へと変わる。

関西軍の権力に恭順したコードフェンサーの符号は、レッドコー

ドとして抹消される。
彼女がレッドコードを名乗ったという事は、そのまま蔑まれるべき裏切り者だと自ら名乗ったという事に他ならない。

「……だったらやっぱりあんたは黒鉄じゃないじゃない。元黒鉄で現在は権力に尻尾振ってるってクチなら、あたしが一番嫌いなタイプよ」

レッドコードの裏切りにより散った仲間は少なくない。カーリアンの師である『錬血』も、レッドコードからの情報漏洩によって散った一人だ。
それを思えば、元よりあらゆる感情の沸点が低いカーリアンの思考は、あっさりと紅色に染まり、感情を司る回路が焼き切れそうになる。

「なんか話があるってんなら聞いてはあげるけど……あんまりつまんない事は言わないでよ。あたしって、我慢ってヤツにつくづく向いてないみたいだからさ」

「ウチは一年とちょっと前まで『閃光』と呼ばれていたわ」

バチバチと弾ける紅の電光。たぎる感情を詰め込み、あらゆるモノを灼き尽くそうとうねる力。
そんな灼熱の導線が辺りを紅く染め、カーリアンの冷たい言葉を受けてもなお、全く意にも介した様子はないままで、『閃光』を名乗った女は言葉を続ける。
どこかノスタルジックな雰囲気滲ませながらも、いつかどこかで見た事がある、強く儚い表情を浮かべて。
あくまでもゆっくりとした敵意を見せない口調のままで。

「黒鉄風に言えば元『閃光のエリカ』……になるのかしら。ウチの『閃光』は確かに抹消されているのだけれど、それは別に裏切り者の『赤い札』が付けられたってワケじゃないの。ワケあって故郷に帰還しなくちゃならなくて、ね。話し合って抜けさせてもらったのよ」

膨れ上がっていたカーリアンの敵意を、いつか見た不器用な笑みを浮かべたままで、真っ直ぐに受け止めてみせながら。

「事情があったとは言え、手前勝手な事を言って黒鉄を抜けたのに、やっぱり気になったから戻ってきたってワケ。
それにあたってなんだけれど、相当な力を持つ貴女……多分コード持ちなんでしょうけれど、貴女に黒鉄への帰還について後ろ盾をお願いしたいの」

――やっぱり一度抜けたからには、一人じゃ戻りにくくってね。

そう言って、包帯でぐるぐる巻きにされた右腕を外套から差し出し、鬱陶しい外套を払いのけると、その場で小さく礼をしてみせたのだった。

2―14・赤札付きの閃光（後書き）

一応本文中でほとんど説明しているつもりだけれど、念を入れて用語とか設定とか解説・あとがき版。

世界……単純に世界、もしくは領域とも呼ばれる、純正型変種のみが作り上げる事が出来る、特殊な異界。
世界を形成する純正型によって、景観から範囲、その世界が有する特有の理まで全く異なっている。
特に理というモノにおいては、その世界の在り方そのものの根幹にまで深く関わっており、その理が現す力が純正型の力という事になる。
今まで出てきた純正型の世界と理については以下の通り。

坂上晴臣……物質として存在するモノ以外、つまり空間や風、あるいはそこを燃やす炎などまで『削る』という理を持つ、赤錆色の世界。
世界の範囲から出た力は、空間の断裂に変質する。範囲は二メートル四方。
スズカ……あらゆる物質や力を遠ざける『拒絶』の世界。
世界から出た力は『斥力』といった形に変わる為、質量を持たないモノには効力が薄いが、その世界の理が及ぶ範囲内においては、あらゆる存在を拒絶する力が働いている。もちろん変種の能力においては、拒絶しきれないだけの力を持つモノもあるが、それでも拒絶という理に受ける強制力は強く、攻撃力は何段階も下げられてしまう。
銀色の鈴が空間を幾つも舞う、白銀色の世界。範囲は十メートルから二十メートル？
シャクナゲ……灰色の世界。

力という概念に当てはまる存在を具現化する理を持つ世界。
その理を現す為の世界の端末に過ぎない鎖だけでも、相当な力を持っているが、意外と欠点も目立つ世界。純正型の領域に対する攻撃力の低さ、世界を使役するためにかかる負荷、精密な力の発露を出来ない大味さ、鎖の数で補わざるを得ない攻撃力と防御力など。
一番の特異点は、純正型以外にも視認出来る世界だという事と、広すぎる領域を持つ世界だという点。範囲はまだ載せていない……ハズ。

レッドコード……赤札とも呼ばれる裏切りの符丁。関西軍や他地方軍に降った者の中で、コードを持っていた者達が特にこう呼ばれる。普通のヴァンプよりも『裏切り者』という点から恨まれる傾向にあるが、元々はコードフェンサーでもあった為、レッドコードとは高位のヴァンプばかりという事でもある。

2―15・紅と閃光の思惑

「で？戻ってこようと思ったのは、やっぱり今回の騒動が原因なワケ？」

そうことさら軽い調子でカーリアンは言った。

今回の騒動……それはつまりは関西統括軍の将軍が黒鉄のシャクナゲに襲撃され、行方が分からなくなっている件、そして廃都を根城にするレジスタンス・黒鉄が真っ二つに分かれ、廃都内で睨み合っている事を指している。

光都の関西統括軍上層部は否定しているが、人の口に戸は建てられないものだ。

いくら隠してはいても、将軍がシャクナゲに襲撃された事実は高い噂になってしまっている。その為、現在関西各地では統括軍に対する反乱が幾つか起こっているのが現状だ。

黒鉄の動乱については、カーリアンが噂に聞いただけでも、将軍無き後の行動方針を巡るモノ、シャクナゲが力を持ちすぎる事を警戒する一派によるモノ、などなど様々な噂が囁かれていた。

もちろんその中には『荒唐無稽な真実』も含まれている。

とても信じ難い、とても許し難い真実も当然含まれてはいるのだ。

――曰わく、黒鉄のシャクナゲは、関東の地において『新皇』と呼ばれるヴァンプの王だった。

そんな普通であれば眉唾物でしかない真実も、雑多な噂に紛れて細々と流れていた。不思議なほどに信じられていない、単なる噂話

の一つとして。

「まぁ、そうなるかしら？一応ウチも黒鉄には結構な期間所属していたわけだし、命を助けた相手もいれば逆に命の恩人も中にはいるわ。気になるのが当たり前の人情でしょう？」

「あんたの人情は置いとくとして、先に言っておくけど、あたしはシャクナゲに付いてる派閥……いわば今じゃ少数派よ？」

閃光を名乗った女の言葉に、そんな考えを首を軽く振って払うと、カーリアンは牽制混じりにそう言った。

「ウチは黒鉄に戻りたいの。黒鉄とは、暁の彼が作って、宵闇の彼が所属する組織の事でしょう？」

それを気にした素振りもなく、目の前の女は平然とそう言葉を返す。

閃光を名乗った彼女の言い分は、いちいち当たり前のモノに聞こえた。かつて支え合った仲間を気遣うのは、一度袂を分かったとしても当たり前だろう。

現在は敵味方に別れた間柄とはいえ、かつて同僚だったナナシやカブトの事が、カーリアンも気にはなっているのだから分からない話でもない。

年中いがみ合い、力をぶつけ合っていたオリヒメは別として、やっぱり同じ黒鉄達に力を向ける事は、出来れば避けたいとカーリアンも思っている。力を用いなくとも分かり合える機会があるのならば、そちらの方が全然いい。もし彼らが、別勢力からの攻撃を受けたなら、手助けするべきだと考えているほどだ。

そして『黒鉄』を冠する彼が、黒鉄でなくなる事なども有り得な

い。今では彼こそが最初の黒鉄であり……最後まで彼は黒鉄で在り続ける事だろう。
　例え他の誰もが彼を『ヴァンプに対抗する者』だと認めなくとも彼は黒鉄で、彼と共にある者こそが黒鉄なのだ。少なくともカーリアンにとってはそれが真実だ。
　だから閃光の言葉自体には理解は出来る。

「一旦は抜けたんでしょ？なのに『やっぱり気になったから戻ってきました』なんて理由じゃ、到底納得は出来ないわね」

　しかし、この元『閃光』の場合は別だ。理解は出来ても納得は出来ない。彼女の話には、何か裏があるように思えてならないのだ。
　何故なら彼女は、一度『一身上の都合』で黒鉄を抜けているというのだから。
　それが今回の騒動を聞きつけたぐらいで、戻ってこようなどと思うだろうか？
　一度その仲間達に背を向けた以上は、それ相応の覚悟を持っていたハズなのだ。もう二度と顔を出せない、ぐらいは考えていただろう。
　なにしろ、弱小勢力に過ぎなかった黒鉄から背を向けたのだ。逃げ出したワケではなくとも、周りにはそう思われてしまうであろうし、彼女自身も負い目を感じていただろう。
　そう、彼女の言い分を全て信じたならば、その点が訝しく思える。

「そうでしょうね。ウチとは面識ないし、信用は出来ないのも無理はないわ。でもここで相互理解を深めようとしても限界はあるでしょう？」

「……」

「だからもし彼が――かつて『宵闇』と呼ばれた黒鉄が、ウチの復帰を認めてくれたのなら、貴女も味方をしてくれないかしら？」

「……あいつが認めるのなら、多分誰も反対しないわよ。あたしだって反対なんかしない」

『宵闇』。

それはかつての黒鉄のリーダーであり、唯一黒鉄を仕切れた『暁』と対になる存在に与えられた符号。最初の符号所持者たる男に与えられた呼び名だ。

今現在、彼はカーリアンが所属する派閥のトップであり、黒鉄が現在の混乱に陥った原因でもある。

彼女を『死にたがりの紅』から変えてくれた人々の内の一人で――さらに変わりたいと考えた理由にもあたる人だ。

その彼が最初に持っていた符号が『宵闇』。暁が死んだ時に黒鉄から失われたロストコード。

今でこそ死した暁に代わり、最初の黒鉄として、彼は『黒鉄』のシャクナゲなどと呼ばれてはいるが、かつてはその全身黒ずくめの出で立ちと、黒い二丁拳銃を用いて死を振り撒く様から、後方の本営で都市や勢力を守る『暁』に対して、前線で仲間を守る『宵闇』と呼ばれていたのだ。

黒鉄のシャクナゲ、あるいは近衛殺しのシャクナゲ……そして最近では『始祖殺し』のシャクナゲなど、様々な呼ばれ方はあれど、その原点は『宵闇』の二つ名じみたコード――関西のヴァンプにとっては、今でも忌み名となっている符号だ。

そのシャクナゲがこの『閃光』の帰還を承認したならば、他の誰かが反対意見に回るとは思えない。カーリアン自身、閃光の事は知らないままでも、彼の意見は最大限に尊重するつもりであるし、そ

の意思に逆らってまでもシャクナゲの為に動き、黒鉄を二つに割った『水鏡』やアオイが反対するとは思えない。

周りには基本的に無関心を貫くヨツバならばなおさらだ。

反対に回りそうなのはカクリぐらいであるが、まさか彼女も周りの意見をまるっきり無視して、自らの考えを押し通しはしないだろう。

現在はアオイの補佐官という立場もあるカクリは、基本的に無理やり我を通すような真似は避けるタイプだ。裏方からこそこそ動いて、自らの意見が通りやすくはしても、『これはどうしようもない』と思えば足掻かないのである。

そう考えたからこそのカーリアンの言葉だったが、目の前の女――エリカは小さく笑うと、黒い外套ごしに小さく肩をすくめてみせる。

「普通ならそうでしょうね。でもウチの事に限って言えば、水鏡やカブトは反対するんじゃないかしら？」

「スイレンが？今の状況からして、カブトが反対する可能性はあるかもしれないけど、彼女が彼の意見に反対するなんてあり得ないと思うけど」

少なくとも、何度も顔を合わせた定例会議では、いつであれ一歩引いた位置から、シャクナゲやアオイのサポートをしていた姿しか見た事がない。

あーだこーだと喚いては、シャクナゲや黒鉄に無理を通そうとする民政部を、穏やかな笑みのままでやりこめる様や、ふらっと出歩いてはなかなか帰ってこないヨツバを、引きずるようにして連れ帰ってくる姿は何度か見た事があったが、基本的には穏やかで波風を立てない人物という印象だった。

――スイレンを怒らせたらメッチャ怖いからにゃ～？とりあえず怒らせたなら、シャクにとりなしてもらいなさい。もちろん、額がすれて血が滲むくらい頭を地面にこすりつけなきゃダメよ？

と、『黒鉄で賢く生きる方法・要注意人物編』として、師であるミヤビから教わっていたぐらいだから、その印象のままの人物でない事は明らかだが、幸いにして彼女が怒った姿をカーリアンは見た事がない。

「ウチは黒鉄を出ていく時にちょっと揉めたからね。それに水鏡（彼女）って几帳面でしょう？間違いなく一度抜けたウチにいい顔はしないし、いつかまた出ていくかもしれないと思われるだろうからね」

「あたしも別にいい顔をしてるつもりなんてないわよ？」

確かにスイレンってばちょっと几帳面かもしれない……

カーリアンも確かにそう思わなくはない。

趣味であるガーデニングで、細々した作業をしている姿と、寒い時期であれ浴衣を愛用しているという、少し偏執狂じみたこだわりを思い浮かべれば妙に納得してしまったのだ。

さすがに冬は上から陣羽織やコートを羽織ったり、マフラーを巻いていたりするが、彼女が完璧に洋服を着こなしている姿は見た事がない。一度も見た覚えがないという辺り、服装にはかなり徹底したポリシーがあるのだろう。

「それでも貴女には後ろ楯お願いしたいわ。帰るまでに仲良くなれるかもしれないし……なんなら貴女のお仕事のお手伝いをしてもいいのよ？」

「あたしがなんの為にここに来てるのかを知っているみたいね？」

そんな確認するようなカーリアンの言葉にも、エリカは不器用な笑みを浮かべたままで、ことさら呆れたような仕草で肩をすくめてみせる。

「ここは昔から、この都市の諜報員と落ち合う時に何度か使ってた場所の一つだもの」

確かに郊外にもほど近いという位置や、住宅街から外れているという立地、川があり四方に視界が開けていながらも、橋の下という事からあまり人目にはつかないという条件は、人目をはばかりながら落ち合うという条件に当てはまっている。

カーリアン自身は今回のような任務に着いた事がない為、他の場所については全く知らなかったが、ローテーションで落ち合う場所を変えているだけだとしたら、かつて黒鉄だったという彼女が、こういった場所をある程度知っていてもおかしくない。

「光都での諜報活動自体は、昔はあんまりなかったのだけれど、やっぱり状況が状況だものね。コード持ちを派遣してもそうおかしくはないでしょう？」

「……なるほどね。確かにそこまで知っているなら、かつて黒鉄の関係者だったのは嘘じゃないみたいね」

光都自身に諜報員を入れていない事は彼女も聞いていた。むしろ他の地方と隣接している、北の古都、東の山都、南の守りである白都、黒鉄に対する前線都市たる戦都に対して潜り込ませている人数の方が、多いぐらいだという。

それらカーリアン自身が持つ知識――最近になってなんとか覚えてきた知識を総動員して、目の前の女の言葉を判断していく。

「ウチが普通のレッドコード（裏切り者）で、諜報員達や落ち合う場所まで知っていたほどなら、あの『副官』さんがこの場所を指定するワケがないから？」

「……そうだけど、まだ信用はしてないわよ？」

「あら、残念。まぁ、あっさりとレッドコードを信用するような人物を、こんな敵地ど真ん中に派遣するワケもないのだけれど」

信用は出来ないにしても話自体に矛盾は見えない。だが、なんらかの理由があって色々知っているだけで、完璧に入り込むまで尻尾を見せないだけなのかもしれない。

かつての黒鉄を知っており、アオイが指定したこの場所の意味を知っていても、やはりそれだけでは信用には足らない。

彼女を派遣したアオイであれ、判断ミスぐらいはするだろう。

ならばやはりここは現場の自分の判断で、『確実』にいくべきかと考えてより深く悩んでしまう。

目の前の女は、カーリアンの勘からすれば黒に近い灰色だ。目に見えて敵対はしてはいなくても、敵視するには値する。

――でも……。

疑わしきは罰せよ、という考えでもいいのだろうかと、そんな甘い事も考えてしまうのだ。

疑わしきは罰するという在り方が、今の自分に相応しいのか。彼の補佐としてこの考え方は誇れるのか、その点で悩んでしまう。

ひょっとしたら全て事実かもしれない。そして、例え何か裏に事情があったとしても、味方をしたいと思っている事は事実かもしれない、そんな事も考えてしまう。

今の二つに分かれた黒鉄において、戦力となるモノはいくらいて

も構わない。例え彼女が『シャクナゲ』の在り方を認めなくても――別の派閥である一班や四班に入る結果になったとしても、それを理由に同行を断るという事をカーリアンはしたくない。

そんな事を考えよりも、向き合って話せばいずれは分かってくれるかもしれない、という可能性の方を取りたかった。

それは多分、甘い感傷に過ぎないのだろう。危険なだけの考えに過ぎないのかもしれない。

でも、それが彼女が付いて歩くと決めた彼の望むモノであり、理想なのだろうとも思う。

正面から向かい合って話す機会を持つ事をこそ、カーリアンが知る彼は望むはずなのだ。

そこまで考えたならば、どうするかはあらかた決まった

カーリアンは班長補佐であり、彼の考えをも補佐すべき対象なのだから。

「あんたを信用はしないけど、シャクに話を通すくらいならしてもいい気がする」

「……シャク」

「どうかした？」

「いいえ。懐かしい呼び名だと思っただけよ」

『シャク』という呼び名に、今まで落ち着いた態度を崩さなかったエリカが、一瞬だけ驚いたような表情を浮かべる。それに訝しさを感じたが、カーリアンはそれを表情には出さないままで、軽く流しておいた。

もちろん警戒レベルは一段階上げてはいたが、なんとかそれを『

紅』といった形に出さない程度に抑えこむ。

「とりあえず、連れてはいってあげるけど、不審な真似をしたら――」

「貴女が相手になる、って事ね？」

「そうよ。もちろんシャクがあんたを危険だと判断したのなら、あたしが後始末は引き受けるつもりよ」

「後始末、ね。心配しなくてもシャクナゲならば、ウチの事許してくれると思うのだけど、もしそうなったのならば手加減して欲しいものね？」

軽く笑みを浮かべ、小さく肩をすくめるエリカに、カーリアンはいまだ僅かに発露していた紅の網を強引に霧散させる。

そして油断なく見やる視線をなんとか力ずくでほぐし、目の前にいる黒ずくめの女を、『敵』というカテゴリーから『やや敵より』というモノに変えて、なんとか心中の敵愾心を抑えこんでいく。

――手加減？

そんなモン出来ないに決まってるでしょ。

そう内心で一人ごちながらも、今までの制御訓練で培ってきた自制心を、総動員して冷静ぶるのが精一杯だった。

『紅』を扱うモノとしての直感が言っている。

自らを害せる力を持つ者を、本能的な直感で関知する事に関しては、黒鉄でも随一たる彼女には分かっている。

目の前の女性は、敵意や害意すらも燃やす、紅を従えた自分すら

も傷つけられるだけの存在なのだと。
水鏡や不貫、蒼や碧兵、不死身や風塵、そして錬血や銀鈴にも感じていた、強者に対する感覚。それをこの『閃光』を名乗った女…エリカに対して、カーリアンは確かに感じていたのだ。

「あたしは紅。一年くらい前から黒鉄をやってるわ。カーリアンって呼んでいいから」

「貴女が紅なのね。元東海地方随一のヴァンプ殺しで、通り名は確か『死にたがり紅』……だったかしら？」

「カーリアン、よ。それ以外の呼び名は好きじゃない」

得心がいったように軽く頷くエリカに、カーリアンは努めて冷静な口調でそう返した。
そしてことさら平坦な口調で言葉を続ける。

「あんたも元黒鉄なら、他の連中の過去を無闇につつく事がマナー違反だって事ぐらいは知ってるでしょ？」

「……そうね。全く持ってその通りね」

その様子にエリカは少しだけ面食らったような表情を浮かべ、続けてそれを意地の悪い笑みへと変える。

「まぁ今の黒鉄（連中）は、そんな基本を忘れちゃったヤツも多いみたいだけれど」

その言葉が指す意味に気付き、カーリアンは思わずハッと息を呑んだ。エリカが言外に指している事柄を悟って、思わず彼女を真っ

直ぐに見据えてしまう。

「いくら過去が罪悪にまみれていても、宵闇の彼が黒鉄で成した業績は嘘じゃないというのに。そうは思わない？」

「……その口振りだとあんた、元から『知ってた』のね？」

「ウチはあの人の部下だったからね。他にも色々と知っているわよ？例えば……暁の彼が造った遺産の事とか、ね」

カーリアンの言葉に、意地の悪い表情のまま言外で肯定を返すと、エリカはそっと距離を測るように歩み寄っていく。

「実はね、ウチがいなくなってからの一年で、黒鉄はおバカさん達の集まりになっちゃったのかと少し心配していたのよ。でも、貴女みたいな人もいたみたいで安心したわ。これは本当よ？」

「……あたしはあんたを連れてくって言った事を、絶対に後悔しそうな気がするわ。残念ながらこれは本心よ」

それを見ながらも、カーリアンは小さく肩をすくめるだけで返し、大きな溜め息を吐いて憂鬱を吐き出してみせる。

「まぁ、連れてくって言った以上は、変えるつもりもないけれどね。あんたを野放しにするよりは、いざという時に責任を取る方が楽っぽいし」

「安心なさい。宵闇は絶対にウチを許してくれるわ。彼は『そういう人』でしょう？」

その知ったかぶった物言いはやや面白くなかったが、それは全く持って彼女言う通りだろうとカーリアンにも思えた。

シャクナゲを名乗る男は、例え目の前の『閃光』が許し難い裏切り者だったとしても、絶対に最後には許してしまうだろう。水鏡やカブトが許さなくても、彼だけは苦悩した後に許してしまうに違いない、

彼は『そういう男だ』と、カーリアンにも思えたのだ。

カーリアンが知る限り、彼が今まで絶対的に敵対した存在は、将軍とその近衛総長だった男だけだ。

将軍率いる関西軍に敗れた反関西統括軍を掲げる勢力を、自らが手引きして黒鉄へと引き入れた事もあるし、武装盗賊団にさえ情けをかけて仲間に引き入れた事すらある。

近隣で迷惑をかけない限りは、武装盗賊団の討伐にもあまり乗り気ではないぐらいであり、『不貫』が気ままに盗賊狩りをしているからこそ、ある意味バランスが取れているとすら言えた。

『あいつはちょっと他人には甘すぎる』

そうミヤビが――メチャクチャをする事にかけては黒鉄随一でありながら、甘さも多分に含んでいたあの錬血が、かつてはそう溜め息混じりに愚痴を漏らしていたほどだ。

黒鉄の在り方として敵対した将軍と呼ばれた男と、謀略でもって『錬血』に幾重もの足枷をかけた上で、さらに彼女の生徒を楯に取って殺した外道。

個人ではあの二人以外に、彼が感情を剥き出しにして敵視した存在をカーリアンは知らない。恐らく関西の地では他にはいないだろうとすら思っている。

その二人共に、シャクナゲは独断でもって暗殺に向かった過去があり、二人共にその報復は失敗に終わっている。しかし、二人共が現在ではその立場を失ってもいるのだ。

将軍は一度は彼を撤退に追い込んだものの、二度目の邂逅ではカーリアンの目の前で片腕を失くし、近衛総長だった男はある時期からその姿を消した。

坂上晴臣という元将軍は、彼に敗れてその地位を追われ、自らの側近に死に場所すらも奪われて。近衛総長だった『旭』は、まるで何かから逃れるかのように、関西から遁走してしまっているのだ。

その二人に比べれば、目の前のエリカにどのような事情があったとしても、彼女がそこまでシャクナゲに敵対した存在だとは思えない。彼女の口調からもそれが分かる。

シャクナゲの過去を知っていても、どこか親しげな雰囲気を持つ事から分かってしまう。

「……なら、やっぱりあいつは許しちゃうんでしょうね」

そう分かるからカーリアンは笑ってしまう。笑うしかないから笑ってしまう。

その甘さと、絶対的に相反する非情さのバランス。歪に歪んでいるその様を、溜め息混じりの笑みで認めてしまう。

「いいでしょ。あたしはあんたの事は聞かない事にする。それを判断するのは、あんたの過去を直接知るヤツがすればいい」

「味方はしてくれないのね？」

「出来るワケないでしょ、あんたの事を何にもしらないのにさ」

そして内部での疑念や悪意、敵意の諸々全てを完全にねじ伏せながらも、カーリアンはそんな様子を見せないまま肩をすくめた。

「これでも最大限に妥協したつもりよ」

そう冷静に告げてから立ち上がると、一足飛びに反対岸へと飛んだ。

閃光を名乗ったカラスを思わせる黒ずくめの女のすぐ近くに。

「あんたを廃都に連れてってあげる。あんたがいなくなってからも、あいつが守ってきたあの街に。今のあんたに何か裏があったとしても、あの街を見て考え直してくれる事を期待する事にするよ」

そしてそのまま右手を差し出すと小首を傾げる。

「短い間になるかもしれないけどさ、よろしくね」

そう言ってカーリアンは握手を交わし、内心では溜め息を漏らす。

――信じるのって難しいよね。いくらシャクの判断でもさ、その全部を信じきるってやっぱりちょっと難しいよ。

そう苦笑混じりに、自らに『教育』を施した女性に愚痴をこぼし、『信じるって気持ちは力になるんだよ』と茶目っ気混じりに語った、金色の男へと心の中で中指をおっ立てる。

そう、自分を変えてくれた女性と、『彼』を今でも縛っているいけ好かない男。

今でもあの街に、自らの遺志を残している二人にだけ心中で弱音を見せて、彼女は自分のやり方を信じる事にしたのだ。

――ったくさ、仕事も始まってない内から厄介事抱えこむなんて、これって絶対ミヤビから受けた悪い影響だよね。

今は亡き師に聞かれたら、拳骨の雨が降りそうな事を少しだけ考

えながら。

——あんたが道を切り開く為に力を使ったなら、あたしのこの力は道を照らす為に使う。

あたしじゃミヤビの代わりにはなれないけど、それでもいいよね。

そんな事を考えて、今まで何かを決める時は他人任せだった彼女は、自らの意思だけでまた一歩踏み出したのだ。

2―15・紅と閃光の思惑（後書き）

次週は更新自体をお休みします。
書き溜め分はありますが、多少予定にない話が出来てる為、どのように組み立てるかを考え直す為です。
あと、年末にむけて諸々の調整をする為です。
これを年内最後のお休みとして頑張っていきますので、一週明けにはまたよろしくお願い致します。
そろそろ１５万ｐｖが見えて参りました。
感想等もお待ちしていますので、よろしくお願い致します。

2―16・牙を持つ狩人は西に在りて

黒鉄第七班、通称『遊撃班』。

この部隊は、黒鉄唯一の純正型変種であるコードフェンサー『銀鈴』が率いる集団として、有名な部隊である。

その班の役割は主に、他班の要請に応えて戦力面で支援する事がメインであるが、大規模な戦闘においては、少数でもって敵方の後方に現れて、攪乱や物資の破壊など不正規戦を行う事も請け負っている。当然危険な任務であり、重要な役割だ。

それほどの困難な任務を可能としている事からしても、銀鈴の能力の高さは当然疑いようもないが、それはまた他二人のコード持ち……『牙桜』と『夜狩』の能力の高さもまた証明していると言えるだろう。

いかな銀鈴とて、一人で幾つもの任務を請け負えない。個人で部隊の代わりになる事は難しいのだ。

それゆえにこの二人のコード持ち達が、かなりの実力者である事は黒鉄達にとって常識だった。

敵地のど真ん中でも、銀鈴の足を引っ張らない程度には賢く、敵方を混乱に陥れるほどには強い。それが遊撃班の二人に対する評価だ。

それなのに、この二人についてよく知っている人物というのは驚くほどに少ない。それどころか、今までに支援を受けた他の班であれ、七班のメンバーについて知っている者は皆無といってもいいぐらいだ。

陰ながら支援された班は、いつの間にやら敵方からの圧力が減じていた程度の感しかなく、七班に掻き乱された敵は、一体何が起こったのかすらも分からないまま蹂躙された。

『牙桜』のヌエと『夜狩』のシュテン。

七班の活躍の裏に、この二人の影がある事は間違いなくとも、この二人がいかに活躍をしたのかを知る者はいない。

彼等をよく知る存在は少なく、知っている者達もまた、全員が揃って彼等に一定の距離を持って接する。

それは三班の副官であるアオイ然り、水鏡のスイレン然り、そして五班の幻影を持ってしてもまた然り。

だから七班という班が、コードフェンサー三人だけしか所属していない、たった三人きりの班である事を知る者はほとんどいない。七班の在り方やその情報の少なさから、班としては最小の規模である事は予想出来たとしても、まさか三人しかいないなどと考える者はいない。

その実績に裏打ちされた能力の高さから、少数というイメージよりも先に、強さが目立つという理由もあるだろうが、一つの班の仕事を、たった三人きりで充分にこなせるほどとはまさか思いもしないのだ。

まさに少数精鋭に特化した最大の異能集団。

それが黒鉄第七班・遊撃班なのである。

その数少ない構成員である二人は、混乱の最中にある廃都を離れ、山都で狂人を待ち受けるべく東へ向かった銀鈴の元をも離れ、二人っきりで廃都よりさらに西へと赴いていた。

それはスズカが廃都を離れるよりも早く。シャクナゲと将軍の決着よりもさらに早く。アオイが西へと意識を向けるよりもずっと前に。

ただ自らの主である銀色の少女の考えとその願いに従って、たった二人きりしかいない銀色の守護者達は、周り中敵地である中国地方へと来ていたのだ。

「さて、俺らはこれからどうしよっか？」

「わたしはぁ、早くお嬢のとこに帰りたいかなぁ～」

「いや、お前がどうしたいのかは知ってるし、その点については特に聞いてもいないんだけどな」

二人連れの男女が、切り立った崖の上から、眼下に広がる鉄筋コンクリート造りの建物を見やっていた。

コンクリート剥き出しの粗悪な造りのモノから、煉瓦を模したタイル張りの綺麗な造りのモノまで、その数は合計で十を軽く越えている。元々それらは、山を切り開いて作った単なるビル群の跡だ。

不景気打開の為の事業の一環として、山を切り崩して開拓した一角。建設を終わったモノから建設途中のモノまであるのは、その一角が未完成のまま開発が終わったからに過ぎない。

その地域はすでに、国の支配する地域ではないのだから、仕方がないとも言えるだろう。

現在その辺り一帯は、とある勢力が本拠地として利用し、高く堅牢な壁で外界から覆っていた。

「『学園』は相変わらず『学園』だな。やたら分厚くて高ぇ壁と鉄格子に囲まれてて、見てるだけでクソ息が詰まりそうだぜ。そん中

でこのクソな時代に見合わねぇほど平和ボケしたヤツら。ホント、いつ見ても箱庭めいてて不気味なモンだ」

「……帰りたい。お嬢、お腹を減らしていないかなぁ～？一人が寂しくて枕を涙で濡らしていないかしら？東海のマッド野郎に泣かされてたりとかぁ～？

あんの野郎、もしお嬢を泣かしたりなんかしたら――三枚に卸してすり潰してやる」

――学園。

中国地方に地盤を持つ勢力の中でも、瀬戸内海沿岸を抑える瀬戸内水賊衆とは対照的に、山辺の地方都市一帯に力を持つ地方勢力で、学園の通り名の通り教育機関を自称している勢力である。

水賊衆と共に、関西統括軍の侵攻の元に屈しはしたが、共に敗北して膝を折ったワケではない。色々と制約はあるモノの自治権を与えられ、勢力をそのまま維持しているのだから、その地力は大したモノだと言えるだろう。

もっとも黒鉄もアカツキがいた当時には、同等以上の条件――破格といってもいいほどの条件で降伏を勧告されてはいた。しかし、当時のトップだったアカツキは、寸刻も迷う事なく蹴ってみせたのである。

その為に、関西以西二大勢力『関西統括軍』と『黒鉄』は長くぶつかり合ってきたのだ。

学園も水賊衆も、黒鉄とは違う選択を選んだ勢力ではあったが、特にこの二つと黒鉄がぶつかり合う事がなかったのは、これらが西に面した勢力であるという事が大きな理由であろう。つまりこの二つは、西に追いやられた日本という政府に対する抑えと、いずれ九州や四国へと侵攻すべき時に使われる力として、将軍から見込まれていたのだ。

その為に関西地方の争いからは一歩引いた位置に立っていたので

ある。
　もちろん、黒鉄を相手にこの二つに助力を頼めば、自らの無力さを晒す結果となり、以後扱いにくくなるという理由もあった事も間違いない。

「クソ平和そうで結構なモンだ。黒鉄が関西軍と長く戦り合ってきたから、西に向かう余裕がなかっただけだってのによ」

「学園なんてどうでもいいよぉ～。どうせここのヤツらはぁ、この場所以外どうでもいいんだろうしぃ～」

「まぁ、そう言わず見てみろよ、ヌエ。平穏にくるまった陰気くせぇ場所だと思わねぇか。このパチモンくせぇクソ平和ぶりは見てて寒気がするぜ」

　男にヌエと呼ばれた少女は、ひらひらのレースが編み込まれ、ゴテゴテと飾られたドレス調の服を翻しつつ、仕方なさそうに一瞬だけ崖下を見やる。その肌は白磁のように白く、髪はフランス人形を思わせる金色で、服装と合わせて精巧な人形じみた可憐さがあった。
　サイドポニーテールにまとめられた髪は、稲穂を思わせる黄金色に煌めき、彩る青い瞳はサファイアを彷彿とさせる輝きを放っている。その瞳に仕方なくといった色をありありと浮かべながら眼下へと視線を向ける。
　しかし彼女は、小さく肩をすくめるだけで返し、すぐさま視線を東へと向け直した。

「平和で結構ねぇ～。いつまでも平和でいて欲しいわぁ～。例え全身から整形感が滲み出すあばずれ女みたいにぃ、ブラフやフェイクにまみれたモノであってもぉ、美と平和ってやっぱり尊いモノだものねぇ～」

「……本気で適当だな、おい」

つまらなそうに学園を見やっただけで、すぐさま恋しそうに東を見る少女に、男はげんなりとした様子を隠す事なくそう言うと、自らも面倒臭そうな溜め息を漏らす。

本当は彼とて、少女と同じ心境なのだ。こんな場所の監視なんかしていたくはない。

命を聞くべき仕える主であり、妹みたいに保護すべき存在でもあり、背を預けあう戦友でもある銀色の少女に頼まれなければ、正直な話こんな辺鄙な場所には来たくなかったぐらいだ。

辺鄙なだけではなく、不気味な場所でもあるのだからなおさらだ。

「こんな仮初めの箱庭なんかよりぃ、お嬢の方が心配なだけよぉ～。まぁ、学園を守ってる『委員共』に見つかってぇ～、帰るのが遅くなったら嫌だなぁ～とは思うけどぉ～」

「俺は委員共に見つかる事なんかより、お前が委員共相手に騒ぎを起こす事の方が憂鬱だっての」

面倒そうに、憂鬱そうに、でも心ここに在らずな様子で語るヌエに、男は溜め息一つ漏らしてガシガシとタオル地のバンドで覆われた頭をかきむしった。

平均よりも小柄なヌエと比べれば、ウェイト面で二廻りはありそうな大柄な身体を、青いスタイリッシュなジャージと黒いタンクトップに包んでおり、見るからに体育会系を現した風貌をしている。

濃い灰色の髪と褐色の肌は、どことなくアラブ系の血を思わせるが、その顔立ちは平均的な日本人のそれだ。

横に並ぶ少女と見比べると、見るからに正反対の印象を抱く事だろう。

「ま、ここにゃお前の『子供』を残しときゃいいだろ。さっさとクソ水賊共の監視にでも行こうぜ」

面倒臭そうに、そして仕方なしといった感を多分に滲ませながらの男の言葉に、ヌエはにっこりと極上の笑みを浮かべてみせる。

どこまでも穏やかでありながら、どこか嗜虐的な光を放つ不可思議な瞳を、暗く輝かせながら。

「……ねぇ、シュテン」

「なんだよ？」

「――×××野郎が勝手に方針決めてんじゃねぇぞ、コラ」

そしてその笑みのまま、見事に爪先を立てたトゥーキックを男の脛へと叩きつけた。少女の細い足首からは想像も出来ないほどに、見事な角度を誇ったその蹴りは、叩きつけるというよりも突き刺さるといった方が的確かもしれない。

「――ってぇンだよ！つかなんでテメェがいきなりキレてんだよ！今のやり取りのどこにキレるポイントがあったってんだ？」

「わたしは帰りたいってさっきから言ってんだろ、×××か、てめぇは！こんな事してる間に、万が一お嬢の可愛い顔に傷でもついてたらねじ切るぞ、コラ」

思いっきり差別用語を叩きつけながら、脛を抱えてうずくまっていた男――シュテンの脇腹に、容赦の欠片も見受けられない蹴りの連打を叩きこんでいく。

「だからいてぇつってんだろっ！なんで俺にキレんだよっ！だいたいな、これはお嬢の頼みで引き受けた仕事なんだぞ？」

「ンな事知るかよ、テメェ一人でこなしゃいいだろうが。一人遊びは得意だろ？年中女日照りなテメェにゃ、見合った仕事じゃねぇか。この腐ったさくらんぼ野郎っ！」

しゃがみこんだシュテンと、憤然と体を反らすヌエの視点は中空でぶつかり合い……そのまま言葉もなく、ヌエはその細い指先二本をシュテンの目へと突き出した。

「危ねっ！つかお前にゃやっちゃいけない事とか、道徳観とか、容赦とかないのか！？昔からの同僚に対して無言で目潰しとか、人間としてアウトだろ！」

「座りこんでるのにぃ、わたしと変わらない視点というのが目障りだったんですぅ～。次こそはしっかり潰しますねぇ～」

「はい、アウト！アウト過ぎる！何がアウトって、猫被ってるのに発言の内容変わってない辺りがアウトっ！」

次々と目潰しを繰り出していくヌエと、それをギリギリでかわしていくシュテンは、ほぼ同時に距離を取ると、これまたほぼ同時に『チッ』と小さく舌打ちを交わし合う。

シュテンの目の真横に、ヌエの指先が貫いていった痕である血のラインが引かれている辺り、先ほどのやり取りに手加減はあっても容赦がなかった事が見受けられる。

ヒュンヒュンと空を切る指先には、躊躇いというモノが見えない。

「クソっ、なんて女だ。大体な、これは元々はお前が……お・ま・え・がっ！その力を見込まれて頼まれた仕事だろうがっ！俺は付き添いを頼まれただけだっての！」

「あん？それはあれか、テメェはわたしにお嬢からの頼みを断れって、そう遠まわしに言ってんのか、おい。死ぬか？童貞なまんま、女への妄想と幻想だけを抱いて死ぬか、コラ」

小さな拳をキュッと握り締めながら、スッとごく自然にヌエが距離を詰めれば、シュテンが同じ分だけ距離を取る。完璧な上下関係に見えなくもないが、この程度ではまだ掛け合いの域を出てもいない。

ヌエにはヌエの、シュテンにはシュテンの距離感があり、長い間をかけて折り合いを付け、作り上げた関係がこの状態なのだ。

割を食っているのが主にシュテンなのは、彼の方がまだ責任感と常識を持っているからに過ぎない。

少なくともそれがシュテンの言い分であった。

もちろんヌエからすれば、ヌエなりの言い分があるのだが。

「女へのクソみたいな幻想なんざ、テメェのせいでまるっきり壊れ尽くしてんだよ、この二重人格女っ！つかな、出会った頃からもう五年は経つのに、いまだに二言目には童貞童貞言いやがってっ。ンなのとっくに卒業したわっ！」

「……見え透いた見栄って哀れですぅ～」

「見栄じゃねぇっての！哀れんだ目で見んなっ、このリアルサイコスリラー女っ！」

「……下僕その二が、あんま舐めた口聞いてんじゃねぇぞ」

「誰が下僕その二だよっ！コロコロ人格変えやがって」

「お前だよ、この祖チン野郎。ちなみにお嬢の下僕その一はわたしですからぁ～」

「なんで下僕宣言をそんなに誇らしそうに言えんだよ」

――まぁ、お嬢の手下なのは否定しないけどよ。

そう呟いて……これまた大きな溜め息を一つ漏らすと、仕方なく降参とばかりに両手を上げた。

二人がモメた際、銀色の少女がとりなさない限りは、折れるのはいつもシュテンの方だった。ヌエが我を折る相手は、上官でありお気に入りでもある銀鈴か、ずっと昔……ここよりもずっと東の地で、彼女が仲間として認めた銀鈴の兄だけだ。

何より彼女にふてくされられては、この仕事は非常に厄介な事になる。ヌエの支配する『子供達』がいなければ、二人という人数の壁は越えられない。

先も言ったが、彼もさっさとやる事を済ませて、出来るだけ早く帰りたいのだ。一応自らの目で見ておいて、後は彼女の子供達に監視を任せてしまいたいのである。

「ちっ……しょうがないですねぇ～。シュテンの×××野郎を苛めても早く帰れるワケじゃありませんしぃ～」

――ならするなよ。

とは思ったが、その言葉が地雷であるのは明らかなので黙殺し、

無能を見るような嘲りを含んだ瞳で見やる彼女に、小さく肩をすくめてみせる。

「でもぉ私の子供達はぁ～、そう長く使役出来ないって事を忘れちゃダメですよぉ～？」

「分かってる。三日も保てば、少しは片付いてんだろ」

「まぁ、『ちょっとキツくすれば』七日はいけますけどぉ～」

「なら余裕綽々だろ。そんだけあれば、少なくとも黒鉄のヤツも自由が効くようになるだろうし、動きも取れるようになる」

――そして黒鉄と呼ばれているあの男が陣頭指揮に立ったなら、街の争乱もすぐに終わる。

そう心の中で付け加えて、力を――甘い『匂い』を拡散させていくヌエを見る。

彼女が……『牙桜』と呼ばれるコードフェンサーが、『子供達』を使役する為に使う誘惑の芳香が、一瞬だけ霧のように浮かんだ淡い桃色の霞を広げていく。

「おいで。獰猛にして勇猛なる、毒の剣持つ愛し子」

その霞が消えると同時に……十を遥かに越える振動音が空気を振るわせた。

そのバイブレーションを思わせる幾つモノ『羽音』が、空間を掻き乱す。

「……なにもさ、そんな物騒な子供を使う事ぁないだろ」

現れたのは小さな体躯を持ちながらも、屈強と勇猛を誇る兵団。
虫族最強にして、集団を作る生物としては屈指の攻撃力と連携能力、殺傷能力を持つ毒虫の王。

「この子達が一番相性がいいんですぅ～。か弱き乙女を守る騎士様はぁ、やっぱり強くなくちゃあダメでしょ～？」

「どこにか弱い乙女が……ってなんでもない、なんでもないから、そんな極上の笑顔で俺を見るな」

――大雀蜂。
その子供達は、見事な統率力でもって、他の昆虫はおろか同じ雀蜂の種をも餌とする絶対の補食者達の群れだった。
たった数十匹でもって一つの蜜蜂のコロニーを……何万匹もの弱きモノを全滅させるほどの猛卒達。何百倍モノ体積を持つ人間をも死へと導くほどの毒を持ち、恐れも躊躇いもなく他者を攻撃する獰猛さも持つ、日本在来種のあらゆる生命体の中でも最強の種族。
また、時速約４０ｋｍで飛翔することができ、一日約１００ｋｍもの距離を飛翔する能力まで持っている飛翔兵だ。
しかも彼女が呼び出した子供達は、幼子の手のひらほどもある異様なサイズだ。それがにっこりと聖女のごとく微笑むヌエの周りを飛び交っていく。その様は、ヌエが先ほど言ったように、さながらあらゆる外敵から姫の身を守る騎士のようにも見えなくはない。

「この子達ならぁ、他の子達に食べられちゃって、観察が出来なくなるってオチもないしぃ、早駆けさせたら一晩で廃都にも連絡がいきますしぃ～」

「分かった、分かったからこいつらを離してくれ。うっかりで刺されたらマヌケ過ぎる」

「……相変わらずヘタレですねぇ、こんなに可愛いのにぃ～」

ねぇ？とばかりに小首を傾げて、辺りを舞う子供達に手をかざすと、にっこりと微笑んでみせる。

その笑みは、まるで森の中で無害な小鳥にでも手を差し出すように緩やかなモノであったが、手を向けた対象が対象なだけに、シュール過ぎる光景にしか見えない。

「我が愛し子よ」

そして先ほどよりも濃い桃色の霞を発すると、彼女の子供達は辺りへと散会していく。

使役者である、異能の魔女の命に服する為に。

「さて、行きましょうかぁ～。提督ちゃんはぁ～、学園よりもず～っと好戦的ですからぁ」

「はぁ……、なんで俺はお前みたいな怖い女と組んでるんだろうな」

「早く来ないとぉ、子供達に追いかけてもらいますよぉ。

……まっ、一回あいつらにブスッと刺されてみりゃ、バシッと上下関係ってのが分かるかもしれないけどよ」

牙桜のヌエと夜狩のシュテン。

銀鈴の剣と楯。左右の腕。兄貴分と姉貴分でありながら、弟分と妹分。二人っきりの『ガード』。得体の知れないコード持ち。

彼の二班副官や、六の副官でさえもその正体を知らず、三の副官

でさえ藪をつついて蛇を出したくないとの考えから、距離を置いているほどの存在。

それが牙桜であり、夜狩。

彼等を端的に現す言葉は幾つもある。ただし、それら全てを知る者は決して多くない。

彼等はいつも他班の影に潜み動く者であり、陽の目を見る事はない者。否、正確に言えば、陽の目を見る必要もなく、彼等は任務はこなしてきたのだ。

その異能者の中でも特異である能力を使い、白銀に従う『牙』を持つ『狩』人として。

彼等もまた、銀鈴と共に始まりよりある黒鉄でありながら、それすらもよく知られてはいない。いつから彼等が黒鉄にいたのかも、強力な純正型である銀鈴の影に隠れてしまっているのだ。

そんな彼等が、黒鉄として存在してから四年経ち、ようやく動きを見せ始める。

黒鉄の意思も暁の遺志も寄せ付けず、ただ銀鈴の想いと願いを叶える為だけの存在として。

2―17・牙桜は誓いに身を捧げ

――スズカを頼むよ。この子には出来るだけ明るい場所にいて欲しいんだ。

かつての仲間であり、初めて好きになった少年にそう頼まれた時から、彼女は今の彼女になった。

本当は嫌だった。そんな頼み事をなんで自分にするのか、よりにもよってなんで他の女の事を自分に頼むのか、そう朴念仁な少年に問い詰めたかった。得物を首筋に突き付け、悪口雑言でもってなじってやりたかった。

それをしなかったのは、ひとえに彼の立場をよく知っていたからだ。

ゼロ……能力ゼロで幼なじみの腰巾着をしていた立場から、その幼なじみに並ぶ立場へと立ってしまった苦悩を知っていたから、その理不尽な頼みを受け入れざるを得なかったのだ。

彼女は本当にその少年の事が好きだった。

頼りなくて、本当は情に脆いくせに、常に必要以上に冷静ぶっていて、幼なじみや仲間をまとめようとしている姿は、ちぐはぐさよりも必死さが見えた。

ルックスは並みより上程度でしかないくせに、時折誰よりも輝いて見える事があった。

考えるよりも先に行動を起こす方が性に合っているらしい、グル

ープのリーダーとヴァイスリーダーより、普段はずっと苦労しているくせに、仲間内からは『腰巾着』と呼ばれている様を最初は情けなく思っていたハズなのに、その事に対して周りに憤りを覚えるようになったのはいつからだっただろう。

力に目覚め、世界に目覚めた時には、見合わない苦労をしていた少年に見合った対価が与えられた、そう思っていた。

力を持っていない事で、心ない仲間内からは蔑まれていたのだから……グループ上層部の内で、一人だけ能力による世間からの蔑視を受けていない事を妬まれていたのだから、これで彼は仲間達に認められ、余計な苦労をしなくて済むだろう。

そう安易に考えていたのだ。

その目覚めた世界が、あの『灰色』でなければ。

あの異端尽くしの異世界でなければ。

証を持たない純正型という異端ですら、霞む世界でなければ。

無能力であった彼のガード達……彼の苦労を知る僅かな者達は、これであの少年は本当に仲間だと認められると、そう誰しもその目覚めた世界に喜んだというのに。

その喜びはあっさりと絶望によって塗り潰された。

彼が抱える圧倒的な異界に、より最悪な状況があるのだと知らしめられた。

蔑視と弾圧に苦しむ仲間達は、目に見える異界を持つ彼に……目に見える圧倒的な力に、救いを求めたのだ。

何十、何百、何千という人々が、目に見えない力を持つリーダーやヴァイスリーダーより、彼に救いを求めるようになった。

彼より強いであろうリーダーの少女より、安易に目の前に晒された力に縋った。

そこで、少女は気付いた。
仲間達も気付かされた。
あの力は救いになどならない、と。
少なくとも、あれは彼が求めたモノではなく、少年の救いにはならないのだ、と。
彼は一度たりとも力を欲した言葉は言わず、そんな彼を周りで見ていた自分達だけが『彼に力を求めていたのだ』と。

能力ゼロの彼を守る為にリーダーに付けられたガードは、いつしか皇の近衛兵へと姿を変え、そのガードの一角だった少女は、かつて抱いていた自らの浅はかな考えに、奥歯がすり減るほどに歯噛みしながらずっと少年を支えてきた。
少年を皇へと祭り上げる者達から、ゼロだった頃より側にいた…いつしか放っておけなくなって、気付けば想いを寄せていた彼を守る為に。
変わらず少年を支える者が減っていき、彼に縋る者達が増えていく中で、心を砕いて戦ってきたのだ。

それなのに――。
そんな自分に、余所から連れてきただけの少女のお守りを頼むのか。
そう声を張り上げて、涙を流して訴えたかった。
自分じゃなくても他にもいるだろう。
何も自分に頼まなくても、他に頼りになるヤツなら何人かいるではないか。
思わず少年の背中に隠れていた銀色の少女が、彼女の視線にビクッと震えるほどに睨みつけてしまう。
それでも……それでも真っ直ぐに見つめられ、笑いかけられながら

――頼むよ。こいつにはさ、俺と同じ道を歩かせたくないんだ。本当はどこか遠くの……そうだな、暖かくて優しい場所にでも連れて行ってやれたらいいんだけど、残念ながら安全そうな場所が思いつかなかったんだ。だったら――

『信用出来る誰かに任せるしかないだろう？』

そう言われてしまって。

『道』の中心として、唯一のリーダーとして、新たなる存在の守護者として、望まぬ位置に押し上げられた少年に、浅はかで無能だった少女は何も言う事は出来なかった。

少年は朴念仁ではあっても気が利かないワケではない。むしろ年齢不相応に聡いぐらいだ。

きっと彼は彼女の想いを知っていたんじゃないかと思う。

そしてそれを利用して……その思慕の念も罪悪感も無力感も利用して、こんな残酷な事を頼んだのだとしたら――

――なんて甘いヤツなんだろう。

そう思わざるを得ない。

身近な人々の中で一番若くて、色々な想いから一番後悔しているであろう少女に、『贖罪』の機会を与えようとしているのだから。

自らを恨ませるような方法で、自分が悪者になってまで、彼女にまで救いを与えてくれようとしているのだから。

『俺と同じ道を歩かせたくない』

『信用出来る誰かに任せるしかないだろう？』

そう言って、彼女へと別の道を差し出してくれたのだから。

だったら……それが分かってしまったのだったら、彼女には頭を

下げてこう言うしかない。
精一杯の恨み言と、ありったけの罪悪感と、歯噛みするほどの無念と、言葉に現せないほどの感謝を込めて。

『……了解致しました。我が親愛なる皇』

せめて『友人』ではなく、『仲間』でもなく、『皇』という言葉に代える事で、自らの内にある想いを抑えこみながら。
残酷で優しい少年に、精一杯の皮肉を効かせながら。
そしてその少年から視線を外すと、どこか興味を見せながらも、恐る恐るといった様子で少年の背後から顔を出していた少女へと視線を向ける。

『スズカ、とお呼びしても？』

二人のやり取りに腰が引けながらも、その呼びかけに慌てたようにコクコクと頷く少女。
異様にやせっぽっちで、怯えたように少年にしがみつく彼女を見やり、出来るだけ柔らかい笑みを浮かべてみせる。

『わたしは夜鳥（やとり）。夜鳥美哉と申します』

自分の不器用な恋が終わり、為せなかった贖罪が新たな形へと変わる事に、寂寥感を感じながらも、彼女にはその道を歩くしかなかった。目の前で恐々と引きつった笑みを返す少女には、出来るだけ暖かい場所を歩んでもらう為に。
託された願いを果たす為に。

『わたしとお友達になってもらえますか？』

金髪青眼を持った落ち着いた雰囲気を持つ少女は、夜鳥から鵺(ぬえ)へと名前を変え、ガードからコードフェンサーへと立場を変えて。
何年も経った今でも、その誓いに殉じ、銀色の少女の側にいる。
おちゃらけた雰囲気にその生真面目さを隠しながら。
穏やかな面と酷薄なる面に、自らの内面が別れてしまう痛みを乗り越えて。
やせっぽっちだった彼女までが皇となり、荒れ果てた道を歩んでいても、自分が彼女にとっての暖かい居場所となる為に。
いつしか贖罪や捨てた想いによるモノだけではなくなっていても、その誓いこそが根本にある事は今も変わってはいない。

「ん～、なんかぁ、水賊連中は相手しなくてもいいみたい」

かつて高速のインターだった場所にバイクを止め、一旦小休憩を取っていた時に、ヌエはいつも通りの緩やかな口調でそう言った。
そのインターは、山の中腹のそれなりの面積を開拓して出来た場所で、なかなかの広さを誇っていたが、現在では乗り捨てられた古い車と、打ち壊され、内装から建材まで盗られてボロボロになった休憩所しかない寂れた場所だった。
そこの駐車場で、停められた大型バイクの隣に着けられたサイドカーにもたれかかったままボーっと空を眺め、しばらく黙考していたかと思うと、ヌエは小首を傾げて隣を見やる。
隣では車体にもたれるように体を休めているシュテンがおり、気

だるげな雰囲気を隠す事なく恨めしげな視線をヌエへと向けた。

「……いいクソ身分だな、おい。人が一日運転しどうしでクタクタだってのによ」

「あん？じゃあテメェがそのナリの割に地味くせぇな力を使うか、コラ。そのショボい力でわたしのスキルの代わりが出来んなら代わってやるよ、この能無し野郎」

「ちっ」

悔しげに舌打ちを漏らし、でも言い返せないのか視線を逸らすシュテンに、鼻で笑うような息を吐くと、ヌエは再度空を見上げた。

そしてそこから彼女の元へと舞い下りてきた、『子供』へとその手のひらでかざしてみせる。

「なんかさぁ、水賊連中にはぁ～、三班副官が行くみたい。念の為にぃ、あいつの見張りに付けといた子供が知らせてくれたしぃ」

その小さな手の平には、平均よりも大きなサイズのナツアカネが身を横たえ、かすかに痙攣を繰り返していた。

弱々しく少女の手のひらにすがるように。

でも少しずつその動きを緩慢にさせながら。

「頑張ったね。すごく助かった」

手のひらでゆっくりと死にゆく働き者だった子供に、心の底から労りの言葉を告げると、サイドカーより降りて地肌が剥き出しの山裾へと歩を進めた。

休みなく飛び通しで、報せを持ってきた代償となった小さな命を、大地に返す為に。
そして手のひらで硬い地面を掘り返し、ゆっくりとそこに横たえる。

「ありがと。ごめん」

せめて最後ぐらいは穏やかな気持ちでいられるように、小さく念仏を唱え、心からの礼と詫びを述べながら。

「出不精な無名の一番が出張るとはな。なんかあったって考えるべきなんだろうが、何があったんだろうな？」

「それはわかんないなぁ。わたしだってぇ、子供達と簡単にしか意思を交わせないしぃ～」

背後に歩みより、伸びをしながらもことさら明るい口調でそう声をかけてくる男に振り向いた時には、すでに彼女はいつも通りの笑みを浮かべていた。
穏やかな口調の時も、スラング混じりに罵倒する時も変わらない、柔らかな笑みをその口元に刻んでいる。
それにシュテンは小さく息を漏らすと、こちらもいつもと変わらないぞんざいな口調で口を開いた。

「ま、何にしても、あいつが出張るからにゃ、俺らまで別に出向かなくてもいいだろ。何を考えてんのか、あいつにクソ提督がなんとか出来んのかは分かんねぇけどよ、あいつは『遺産』を持ってるんだ。なんとかするアテがあるんだろうさ」

「だと思うよぉ～。アオイに付けた子だけが飛んで来たしぃ、他に

は大きな動きもないみたい。まぁスイレンやアゲハはぁ、子供達の目じゃ捕まんないんだけどぉ～」

そう言うと、ヌエは自分よりもかなり大柄な男の方へと期待を滲ませた瞳を向ける。

何が言いたいのか、その瞳を見ただけで分かってしまって、シュテンは思わず浮かんだ苦笑で返した。

――用事が終わったんだから、お嬢んトコにさっさと行こうってか？全く、分かりやすい性格なんだか、分かりにくい性格なんだか。

そう心中で漏らし、彼は大きく肩をすくめてみせた。もちろん口に出して言うような真似はしない。

口にしてそんな感想を言えば、彼女の事だ。罵詈雑言と面罵痛罵と脛に叩き込むようなローキックが返ってくるであろう事が、長年の付き合いからシュテンにも分かっている。

それでもこうして、一応期待を込めた視線で意思を通してくれるだけでも、今の彼女の機嫌がそう悪くない事が見て取れた。役割を終えた子供の亡骸を抱えていた時の沈んだ様子はすでにない。

――都合よく、名目だけでも仕事が終わった事が嬉しいんだろうな。

そう考えながらも、シュテンは少しだけ黙考するように顎へと手をやる。

確かに役割は終わったも同然だ。学園には相変わらず動く気配はなく、厄介な水賊には三班副官が出張っている。交渉の為か、はたまたそれ以外の為なのかは分からなくとも、上手くいかせるアテがあるのだろう。

それにもし仮にアテがなかったり、ヘタを打ったりして、三班の副官が水賊に捕まったりしたとしても、彼らには全く関係がない。

『あの男ならなんとかすると思っていた』

と言えば、二人が従う少女に対する言い訳としては十分だ。

「あ～、じゃあそろそろ東に行くか？お嬢に付けた子供から知らせがないって事は、あのクソ狂人とまだ闘り合ってないか、もしくはぶつかったばかりかってトコだろ。俺らが行きゃ助けにゃなるだろうしよ」

そこまで考えると、いまだに期待を込めた瞳を向けてくる少女に、あっさりと同意する事にした。

ここで下手に反対を唱えたりすれば、どれほどの凶暴な子供達をけしかけられるか分かったものではないし、この真っ直ぐな期待を込めた視線には抗い難いモノを感じていたからだ。

長年の付き合いからか、シュテンはこの小柄で凶悪な同僚には基本的に逆らいにくい。もとより気が乗らない仕事だったのだからなおさらだろう。

「おぉ～、万年童貞の割にはぁ、珍しく話が分かるじゃないですかぁ～」

――しかし返ってきた言葉は、そんな人の神経を逆なでするような言葉で。

「童貞を偏見すんな、ついでにもう童貞じゃねぇ、さらに言うなら万年も生きられるか……ってどんだけクソツッコミ要素が入るんだよ！？」

思わず律儀に、そしていつも通りにツッコミを返してしまう。

「せっかく褒めたのにぃ、相変わらず腐ったさくらんぼ野郎は細かいですねぇ～」

「すっげぇ上から目線だな、おいっ！」

「上から目線ってか、立場が明らか上なんだよ、阿呆。いいからさっさと車出せよ、トロ臭ぇ×××野郎だな。底辺這い蹲る下僕その二風情が」

そして最後にはこれまたいつも通りに『地』が出てきて、今まで何故かかわせた事がないローキックを叩きこまれるのだ。

「……くっそ、いつか絶対押し倒してやるからな」

「やってみろよ。体が痛みと毒で倍に膨れ上がるまで、子供達の洗礼を受けさせてやる」

ケラケラと笑いながら容赦のない蹴りを受け、ちょっとした意趣返しじみた言葉には、全く洒落になっていない脅しをかけられて。

筋肉質な大男と小柄で可憐な少女は東を目指すべく、止めておいた大型バイクへと向かって歩きだした。

関西と東海で分けられた地の境界線。

そこにある関西地方東端の防衛都市。

将軍を名乗った男から改名を受け、東海地方に対しての防壁の役割を求められた『山都・アルビオン』へと向かう為に。

2―17・牙桜は誓いに身を捧げ（後書き）

牙桜さんと夜狩さんの二人の紹介は、以後に回します。
代わりに身体的なプロフィール（設定決めただけで明記はしていない、特に今後作品内で明記しないであろうデータ）を何人分か。
これは初期に決めたメールのまんまをコピーして、短くまとめています。

シャクナゲ
身長１７７ｃｍ　体重６５ｋｇ
黒髪と黒瞳を持つ自然発生型変種（純正型変種）
好きな食べ物　りんご、和食全般
嫌いな食べ物　基本的に発酵させた食べ物、納豆やおくらなどのネバネバ系
好きな色　黒
嫌いな色　白
好きな人物　アカツキ？　ミヤビ？　スズカ（妹）
嫌いな人物　ヴァンプ　坂上晴臣
ワイヤーアクションをワイヤーなしで行える身体能力と、地形や天候、現状を把握しての戦術の取捨に定評あり。
基本的に偏食だが、現在の食料事情から好き嫌いを言わなくなった。
頼み事をされるのは得意だが、頼み事をするのは苦手な性格

カーリアン
身長１６８ｃｍ　体重４９ｋｇ
赤髪赤瞳の突然発生型変種。パイロキネシスト。
好きな食べ物　和食系
嫌いな食べ物　しいたけなどの一部茸類
好きな色　黒、紅

嫌いな色　青（嫌いな人間から）
好きな人物　シャクナゲ、カクリ、スズカ
嫌いな人物　オリヒメ（ウマが合わない、ノリが合わない、能力も正反対）

基本的にわかりやすい性格をしており、嘘が嘘になっていないぐらい嘘が苦手。
周りに仲のいい人物が少ない為か、仲がよくなった人物には全身全霊で信頼を寄せる。
物を癇癪で壊す事も多いが、実は料理が得意という似合わない特技を持っている。
カクリから甘やかされ、シャクナゲからも甘やかされており、スズカと同じく基本的に甘やかされる側の人物。

スズカ
身長１５６ｃｍ　体重４２ｋｇ
純正型変種。斥力使いで拒絶の世界の王
好きな食べ物　暖かい食べ物、誰かと食べる食事
嫌いな食べ物　冷たく冷えた食事、簡易食料
好きな色　黒、白、赤
嫌いな色　銀色
好きな人物　シャクナゲ、カーリアン、ヌエ、シュテン。
嫌いな人物　アカツキ、魔女

茫洋とした薄い表情を持った少女。実年齢よりも若く見える（実は数ヶ月だけカーリアンよりも年上）
好きな人物、自分を好きになってくれた人物には甘えるが、それ以外の人物にはどこか身構えたところがある。
寂しがりだが我慢強く、裏工作じみた真似は嫌いだがたまに裏で動く。

能力においては、カーリアンをして黒鉄一と呼ばれる、レジスタンス黒鉄で最強の少女。

2―18・夜の狩人は天使に魂を捧ぐ

――テメェで責任も取れねぇような真似はしねぇ。だから、誰か他人を背負い込むような真似もしたくねぇ。

それが彼の在り方の全てだった。一人で能力を振るって、自分の身は自分だけで守り続けて。

台頭する『道』、革命軍に対しても一歩引いて、勝てない喧嘩からあっさり背を向けて、それなりに毎日を過ごしてきたのである。

――ほんの五年ほど前までは。

五年ほど前に、二人連れの女に出会うまでは。

彼は革命軍と敵対はしていなかったが、味方もしてはいなかった。出来れば関わり合いにすらなりたくなくて、接触を極力避けていたほどだ。

ふらふらと各地を回っていた時は、下手に刺激しないように気を付けていたし、各地方へと革命軍が侵攻を開始した時も、出来るだけ各地の主要都市からは離れた場所で生活をしていた。

久々に関東地方に帰還し、ひとまずの寝床として古ぼけた公民館に居座った時の事だった。人気のない事だけを理由にその場所を選んだのに、時を置かずしてそこに同じく寝床を求めてきたらしい二人の少女がやって来たのだ。

最初は人の気配に警戒した。
それは当然だ。今のご時世、にっこり笑ったままナイフを突き出してくるような人間はどこにでもいる。だから彼は最大限に警戒しつつ様子を窺った。
こっそり覗いた先にいたのは、金色の髪を持った白磁のごとき肌を持つ美しい少女だった。
しかし、彼女はただの可憐な少女ではない。その気配は、明らかに荒事に慣れた変種のそれだ。
関東で荒事に慣れた変種とは、つまりは彼が接触を避けてきた『革命軍』縁の者である可能性が高く、革命軍所属の変種という事は、幾度も武装した国軍との争いを越え、場数を踏んだ能力者だという事だ。
その日本人離れした容貌から変種である事は間違いなく、その気配からそれなりの地位を持つ幹部連である事も悟った。
何より、その片手に軽く担いだ小型の回転鋸――いわゆる小型のチェーンソーが怖すぎた。

――ヤバいな。

そう思った事を、彼は今でも覚えている。
あれほど華奢で、小柄な体躯でありながら、相応以上の場数を踏んで無事にいるという事は、能力に特化したタイプの変種である可能性が高い……そう判断したのだ。
身体能力に優れた変種は、やはり体格的に恵まれた者が多い。もちろん全ての変種がその限りではないが、小柄な少女には肉体的な強さを持つ変種独特の体捌きは見て取れなかった。
あのチェーンソーだとて、ひょっとしたら彼女の能力を活かす得物なのかもしれないし、到底油断の出来る相手には見えない。
何より、『皇』ではないだろうが、純正種である可能性は捨てきれない。周りには護衛共がいる可能性もある。

面倒を起こしたくなかったし、首都圏全域を掌握し、そう遠くない間には関東地方全てをも支配下に入れ、やがては他地方にも遠征するであろう革命軍と争えば、居場所も故郷も失ってしまう。
それが分かっていたからこそ内心で舌打ちを漏らし――その金髪の少女が、警戒していた雰囲気を和らげ、にっこりと微笑む様を見て呆気に取られてしまう。

距離はそれなりに離れている。
その少女は公民館の向かいにある小さな神社の境内におり、彼はその少女を警戒して公民館の二階に身を隠しているのだ。
こちらは建物の中であり、二階という高所も取っている。向こうが気づくハズもない。
しかも間には小さな広場が開いており、肉眼で確認した彼とは違い、その少女がいかな変種であっても気配に気付く位置関係ではない。

そう訝しがっていた彼の視線の先で、金髪の少女はヒラヒラと境内の奥に向かって手を振ってみせる。
動きやすそうなハーフパンツと、シックなデザインながら、やたらとフリルの付いたワンピースを翻しながら。
その視線の先に彼も注意を向けて――

――彼は天使に出会った。

天使の翼のように、光を反射して煌めく灰銀色の髪。
白磁よりも艶やかな真珠のごとき肌。
どこか怯えたような仕草が初々しくて、今の汚い世の中に存在するにはもったいない何かであるかのようにも思えた。

先に表れた金髪の少女も、かなりハイレベルの美少女ではあったが、もはや次元が違う可憐さだった。

ハイレベル（高水準）ではなく『ハイエンド（最高峰）』。

比べられる存在などいないのではないかとすら考えた。

――古ぼけた神社を憐れんで、天使が舞い降りた？

今の混沌たる世の中に、スレにスレまくった彼が半ば本気でそう思ってしまったのだから、その衝撃は計り知れない。

何にであれ誓って言えるが、欲望を向けたワケではない。そんな対象にはならない。

彼は自らの欲望を向けたのではなく、その少女に心を奪われたのだ。

そして……彼は今までの彼にはあるまじき行動に出た。

いきなり目の前に出向いて心の内を述べたワケでも、眼前にかしずいたワケでもない。彼にとってはもっと意外な行動だった。

――こんな世の中で、あんな目立つ二人が旅をしているなんてワケありだろうか？

――理由がないワケもないか。ならばツレがいる？

――しかし、そのツレと落ち合うまでに何かあったりしたら、そのツレはどうするつもりなんだ？

――今の世の中にゃ、人買いなんてザラにいる。むしろこの辺りじゃ堅気の方が少ないぐらいだ。誰であれ革命軍か、それ以外のどこだかに所属してる。もしあの子に何か間違いでも起こったら、そのクソなツレはどう責任を取るつもりなんだ。

そう心配になって。

金髪の少女がかなりの能力者であっても、その手に握る凶器がいかに凶悪でも、やはり心配は消えなくて。

自らのモットーを一度だけ捨てる覚悟で、その二人の安全を確認出来るまで付いていく事にしたのだ。

そのモットーは五年近くも捨てたままになるなどとは思いもよらずに。

自らの行動が、端から見れば『お節介なガーディアン』などではなく、『見知らぬストーカー』である事には気づかないままで。

二人の少女は気の向くままに旅をしていた。まさに気の向くまま、足の向くままに首都圏を周っていた。

金髪の少女は銀色の少女にかしずくように仕えていた。かと思えば、ビクビクした様子のある銀色の少女の手を引っ張っては、振り回すかのようにして歩き回ってもいた。

あちこちで避難民達のキャンプを遠くから観察してみたり、壊れた名所を回っては無断で寝床にしたりと、まさに誰かに憚るところなく好き勝手をしていたのだ。

金髪の少女はどこまでも楽しげに。しかし辺りを厳重に警戒する事も忘れずに。

銀色の少女は、その金髪の少女の奔放さに少しだけ困っているかのような笑みを向け、それでも特に文句を付ける様子もなく。

何度か金髪の少女に存在をバレかけ、回転する鋸刃と轟くエンジン音に泡を食って距離を取った事もあったが、問題らしい問題も起きなかったのだ。

革命軍のベースキャンプに深夜無断で入り込んだかと思えば、食

料やら飲料やらを山ほど盗み出したりして、ヒヤヒヤさせられた。
金髪の少女は楽しげに。
銀色の少女はおっかなびっくりで。
かと思えば、前日の夜に忍び込んだ部隊が関所を置いている箇所を、わざわざ堂々と通ってみせたりして、関東一帯に勢力を広げている革命軍を嘲笑うかのように振る舞っていたのだ。

――見ているこっちの方が寿命が縮まる。

そう思った事も一度や二度ではない。
もちろん思わず駆け入ってしまいそうになった事もだ。

どんな状況でも金髪の少女は笑顔を向けて。
ならず者に囲まれていても、ただ銀色の少女の一歩前に出て、文字通り唸る刃で威嚇し、その能力で追い回し、それでも変わらず頼れる笑みを後方の少女に向けていて。
銀色の少女も不器用に……最初は無表情にしか見えなかったほどに微かに笑って。
時には困ったように、あるいは戸惑ったように、苦みを含んでみたりしながらも笑っていて。
見れば見るほどに異様な二人組で、見ているだけでも気が休まらない。

こんなご時世だ。女の二人旅がいかに危険かぐらいは、ローティーンの少女でも知っている。どうしても出かけなければならない際も、精々多数で寄り合い、革命軍に話を通していく事が最低限の自衛となる。

それでもこの二人みたいに綺麗に着飾っていれば、ハイエナはどこからともなく群れてくるだろう。あるいはまだ統制が完全に整っ

ていない革命軍の下っ端が、女の二人旅である事から邪で薄汚い欲望を向けるかもしれない。

顔を汚し、髪を汚し、ボロを着る事もまた立派な自衛なのである。

それなのにこの二人――特に金髪の少女は、ことさら着飾ってみせ、銀色の少女にもお洒落をさせようと色々な服を押し付けていたのだ。

銀色の少女が唯一本気で嫌がってみせたニット帽だけは、形を変え色を変えしても毎日被っていたが、服は日ごとにコロコロと変わっていた。

スポーティーなパンツルックの時もあれば、ゴシックロリータ調の服もありして、その傾向には枚挙に暇もない。

見かけてからおよそ十日ぐらい経った頃には、金髪の少女はゴスロリ調、銀色の少女は動きやすいパンツルックと方向性が定まっていたが、共に自らのルックスを隠すつもりはないらしい。

――やれやれだ。

心底そう思っていながらも、どこか微笑ましい気持ちにもなってしまう。

そして苦笑を浮かべている自分を自覚して我に返ったのだ。

『俺は一体何をやってんだ!?』

そう、自らの今の状況を顧みて、思わず頭を抱え込んで転がり回りたくなる。

――なんで年の離れた妹を、離れた所から見守っているつもりになってるイタい兄貴みたいな真似してんだ!?

そう思って自らを自嘲し、後悔し、反省して。

それでも離れ難くあり、付いていくのは元の地域……精々が二人

を見つけた場所の近くまでと決めた。
これ以上は変質者だ、と。
十分変質者に類似する行動だという事は、なんとか頭の片隅に追いやりながら。

この二人が革命軍の関係者である事はわかっていた。革命軍の関所は顔パスであったし、国軍がまだなんとか頑張っている区域には近づかない。
革命軍に所属するベースキャンプや関所では、下っ端からびっくりするぐらい低姿勢で迎えられていたし、部隊長クラスの連中まで慌てて顔を見せに出ていた事もあった。

――あの銀色の少女は、『皇』と呼ばれる革命軍でトップクラスの連中の関係者か何かで、金髪の少女はその護衛か何かなのだろう。しかも金髪の少女自体も幹部なのではないか？

そう彼は考えた。
時折寄ってくるハイエナ共を散らしていたのはいつも金髪の少女だったし、銀色の少女は今にも泣き出しそうな表情で震えていただけなのだから無理もないだろう。
その考えが間違っていた事を知ったのは、彼がその二人から離れると決めた場所に近付いた時の事だった。

いや、ある意味では彼の考えは間違っていない。銀色の少女は、革命軍のトップもトップ、『灰色の皇』の妹分だったのだから。
だが、銀色の少女が『守られるだけのか弱い存在』だと考えていたのは、決定的かつ絶対的な間違いだった。

最初に二人を見つけた場所でそれを思い知らされる。運悪くそこには、革命軍の内情を知る為に入り込んでいた国軍の諜報部隊が居たのだ。

確かにそれなりに開けた場所でありながら、障害物となる物が幾つもあるそこはなかなかの立地条件だったのだろう。

なおかつ公民館という場所は、付近の詳細な地図まである上、そこが革命軍との前線からはそれなりに離れた位置にあったのも都合が良かったに違いない。

そこで二人は敵勢に出会ってしまって……戦闘になったのだ。

金髪の少女は障害物に隠れながら桜色の霞を纏い、小さな猛卒達を使役して懸命に戦った。近寄ってきた存在には、獰猛に唸る刃を振るって血飛沫を舞わせる。

様子を見ていた彼も思わず駆け入り――ようやく出番かと気張って力を振るう。

これで俺は単に付け回していただけの野郎じゃない、と思わず喜び勇む。

『あなたね、ずっと付いてきていたのは』

そんな金髪の少女の言葉に、『やっぱり気づいてたか』と思わず苦笑を浮かべながらも、誰かを背に戦うなど久しぶりで、後ろで怯え、涙をポロポロと流しながらオロオロとする少女の為に、容赦なく自らの能力を解放していく。

バカデカい拳にナックルガード付きのナイフをはめ、殴り飛ばし、刃で切り刻む。

しかし相手が悪かった。

決定的で致命的に相手が悪かったのだ。

相手は首都圏を追いやられた国軍が、北陸地方で実験的に編成した、『強力な変種』ばかりが集められた虎の子の実験部隊だったのである。その部隊のテストとして、彼等は最適だったのだろう。

少人数で強力な変種。これほど革命軍に対してのテストとして、おあつらえ向きな相手もいない。周りに革命軍がいない事もあってか、怯む事も退く事もなく向かってきたのだ。

そして何より最悪なのが、その中には純正型が何人かおり、『長尾まりあ』――やがて北陸に勢力を築く『北陸地方の皇』までがその部隊にはいた事だ。

いかに金髪の少女が纏う桜色の霞が、他の純正型を抑えようとも。どれだけ男の能力が、他の変種達の能力を上回ろうとも。

決定的な差がそこにはあった。

後に皇と呼ばれる『長尾まりあがいた事』、その絶対的な差があった。

その差は刻一刻と如実に現れ、やがてどうしようもない結果として見えてくるだろう。

『逃げなさいっ！スズカ』

それが冷静に戦力を測っていた金髪の少女にも分かり、そう声をかけても後ろで震えている少女は首を振るだけで。

『とりあえず先に逃げときな。後で合流すりゃいい！』

そんな男の言葉にも、涙の浮かんだ瞳を向けていて。

決定的な差はやがて三人を押し包みそうになる。どうしようもない力の差に流されてしまいそうになる。

そして十数人に囲まれながらも善戦していた二人の内で、キツい

闘いを強いられていた金髪の少女が、ついに力を使いきれなくなり、不可視の力場に包まれそうになって――

『あ、あっ、あぁぁぁぁぁぁ――――――!!』

守られていただけの少女が。
守られていたハズの少女が。
か弱くて、儚げな存在だった少女が。

その泣き声混じりの叫びと共に、か細い背に翼を広げている幻想を誰もがみる。
銀色に煌めく、雪原のような世界を敵味方の全てが幻視する。
その翼に見えたものは、銀色の少女が勇気を振り絞って二人の前に出る際に『力を使って』蹴り上げた粉塵で。
その白銀の世界を見たのは、自分の為に戦ってくれている二人以外を弾き飛ばす、圧倒的な斥力が舞い上げた塵芥で。
そして弾き飛ばされたニット帽から流れ出る、灰銀色に煌めく髪の色で。

――その細い腕を突き出しただけで、致命的に傾き過ぎた戦況をひっくり返した。
あっさりと決まりかけていた結末を覆してみせた。

最も厄介な存在だと分かったのだろう、長尾まりあに一気に肉薄し、『世界』と『世界』をぶつけ合い、『領域』で『領域』を殺し合い、その他有象無象を拒絶する。
ここにいた変種達の中では、長尾まりあに続くであろう、金色の少女と褐色の青年の能力すらも。

他の連中など、その能力ごと肉体をも弾き飛ばしてしまう。
呆然とする二人と、辛くもその力を受け止めた長尾まりあを除いて。

まさに圧倒的に反則的で。
泣きながら、怯えながら二人の前に立った姿は魅力的で、今まで見た全ての存在の中でも究極的に美しかった。

入り込んでいた諜報部隊はなんとか撤退し、時間を稼いでいた長尾まりあも逃げ去った後、銀色の少女は慌てたようにその頭を抱え込んでいた。
小さな嗚咽混じりに、怯えを滲ませた仕草で。
そこにある歪な突起、角のようにも見える『証』を必死に隠すかのように。
そしてあちこちに視線を這わせ、頭から脱げてしまったニット帽を必死に探す。
それは偶然か……あるいは必然の産物として、彼の前に落ちていて。
戦いで腕に負った傷をそのままに、ただ銀色の少女を見ていた褐色の青年の前に落ちていて。

彼女はおっかなびっくりといった、どこかビクビクした雰囲気で、ゆっくりと近づいていく。
近づく度に、一歩ごとに、その紺碧の瞳に大粒の涙を湛えていきながら。
そして必要以上の時間をかけて落ちていた帽子を拾うと、少しの逡巡の後こういったのだ。

『……だ、大丈夫？　痛くない？』

その拾ったばかりの帽子を軽く叩き、いまだに血を流す青年の腕にあてがいながら。

見られたくないのであろう『証』をさらしながら、必死に血を止めようとぐっと抑えてみせた。止め処ない滴を、紺碧の瞳から零していきながら、それを拭う仕草もしない。

ただ『大丈夫？』と繰り返し、『痛い？』と聞いては、自らが涙を溢れさせていく。

ポロポロと涙を流しているのは、怖かったからだろうか？

あるいは、見られたくないものを見られた羞恥心からであろうか？

それは彼には分からなかった。分かりようがなかった。

それでも……そんな些末事よりも、ずっと大事な事が彼には分かったのだ。

――あぁ、俺の力はこの子の為に授かったんだ。

そう思った。

――こんなひねくれ者の俺が力を持って産まれた事には、こんな理由があったんだ。

そう確信した。

――今まで誰かの為に力を使う気になれなかったのは、今日この日の為だったんだ。

そう今までの自らの在り方に感謝した。

――この子と出会った時に、感じたものは間違っていなかったんだ。

それが彼の真実となった。

そして彼……酒井典斗（さかい・のりと）は、その出会ったばかりの天使に名を名乗り、自らの全てを捧げて守ってみせるとの誓いを立てた。

今までの矜持もモットーも置いておいて、共に行く願いをかけた。

自身の身を持って、能力を使い潰して、この優しく小さな天使の望みの全てを叶えてみせる、そう自らの道を定めた。

それは一目惚れだとかそんな大袈裟な理由ではない。単にその存在全てに魅了され、惹きつけられ、心の全てを奪われただけなのだから。

やがで『白銀の楯』と呼ばれ、場所を変え『夜狩』と称された男は、こうして新たな在り方としての産声を上げたのだ。

ちなみに。

怯えたように、でもどこかキョトンとした風情で見上げてくる少女の証ごと、その頭をゆっくりと撫でようとして……近くにいた金髪の少女に思いっきり脛を蹴り上げられたのが、いずれ相棒となる少女からの最初の蹴りだったりする。

それから何年も経ち、今までに数百回はローキックを食らっているのに、一度たりともかわせていないのだから、この時から三人の間で明確な序列が出来ているとも言えるだろう。

もちろんその事に彼は不満などない。口ばかりは不満を漏らしてみせても、それがこの三人の在り方なのだから。

「おら、もっと飛ばせよ。お嬢に早く会いてぇんだ。スピード違反の馬車馬のごとく飛ばしやがれ、このストーカーロリコン童貞野郎」

「ツッコミ所は山ほどあるけど、とりあえずなんだ、そのハイスペックな変態ぶりっ！？」

「童貞は変態じゃないですよぉ？今シュテンのアホはぁ、無謀を剛毅と履き違えてぇ、世界中の童貞を敵に回しましたねぇ～」

「あんまりテメェが童貞押しだから、ついうっかり……って、お前にゃ言われたくねぇよっ！？」

もちろん、色々あって『こんな風になってしまった相棒』には、もうちょっと気遣いぐらいしては欲しいかもなぁ、などと思うのだが。

――結局帰りも俺が運転だしな。

そう愚痴を漏らしながらも、彼はそれなりに満足して『シュテン』となって。

『ヌエ』の相棒となり、スズカの楯となって、今も側にいる。

いつかは、なんの気兼ねもなく、この三人ぽっちの仲間であちこちを旅でも出来たらなぁ……などと、割と地味な未来を夢見ながら。

2―18・夜の狩人は天使に魂を捧ぐ（後書き）

完璧番外編風味満載ですね。
というか、二部では初めてに近い完璧な過去バナな感じです。
童貞疑惑のある彼が、実はロリコンストーカー童貞野郎疑惑のある彼にアップした話。
なんか思いっきり『ヌエ』さんの力がバレそうですが、これでも善処したのです。
むしろ今回の話は、すらすら書けたのに、その『善処』にはやたらと時間がかかったという。
まぁ、明記はしてませんから。
それに彼にも桜色が『見える』って辺りが、設定上おかしいでしょう？

これ以上は完璧ネタバレになるので自粛します。

お知らせでも書いた、別サイト様で完結済みのファンタジーを、こちらでもリメイクしてあげる予定で暇つぶしがてら作業していますが、なかなかはかどりませんね。
一年以上前に完結した話で、予想以上に手直しに手間かかる。
まぁ、それでノクターンのアップに支障が出る心配はないですけど。
何しろ年内アップ分は書けてますから。
この話を更新予約したのは……つまりこれを書いているのは、１２月４日だったりしますし。
シンフォニアも結構書けましたし、アンクロもそこそこいけてますし、マークは……まぁ『頑張りましょう』評価ですけど。

といった風に、あとがきらしいあとがきをしてみました。

2―19・3勢力の邂逅（前書き）

今更ですが、ご指摘により坂上晴臣の人物紹介をあとがきに載せています。

2―19・3勢力の邂逅

彼は風だ。そう評価された事が幾度かあった。
その評価は彼も気に入っていて、それゆえに自らを風と冠した呼び名で縛った。塵を舞わせ、人を翻弄する存在と己を律した。
彼は風として存在し、無色透明の力として在る事を望んでいたからだ。

時に人を翻弄する春風のごとく。
時に冷たき北風のごとく。
そして時に、人を傷付ける烈風のごとく在る事を。

そんな彼が望む事はただ一つ。ただ一人の少女の平穏。一人の少女のあるがままの笑顔を取り戻す事。

風を冠した青年は、夜空を舞う鶴を守る存在として、今も黒鉄にある。

「で、あなた方はどちらに着くつもりなんだ？」

「さっそく本題かよ。わざわざこっちまで俺のワガママで出向いて

もらったんだ。少しは雑談ってクッションを入れてくれないもんかね」

会議室どころか室内ですらない六班本部の屋上にて、二人の男が向かい合っていた。

一方の大柄で筋肉質な男は、目の前にいるいかにもダルそうな表情をした長身痩躯の男を、まるで値踏みするかのように見やっているのに対して、長身痩躯の男は、筋肉質で大柄な男へと面倒そうな表情を隠す事もなく向けている。

「残念ながら忙しい身でね。楽しく雑談をしている暇などないのだよ」

「ふん、そりゃご苦労なこって。そんな中、わざわざ訪ねてきてくれたのに悪いんだけどよ、正直どっちにって言われてもなぁ。ほら、ウチって情報班だしよ、あんまりドンパチにゃ関わりたかないってのが正直なトコなんだけどね」

あくまでも面倒そうに、どこか小馬鹿にした風もある言葉にも、筋肉質な男は表情一つ変える事はない。

それどころか緊張感すら滲んでいるようにも見える。

「今の黒鉄が、そんな言葉が通用する状況にはないって事ぐらい君にも分かっているだろう？」

「かもね。だけど、『金剛』さんよ。おたくら一が三とやりあうのは勝手だがね、ウチまでそれに巻き込むのはやめてもらえないかなぁ。勝てる自信があるってんならウチを無理に引き込む必要なんてないし、今の戦力じゃ勝ち目が薄いってんなら……そんないずれは沈みそうなドロ船に他人を巻き込むなよ」

黒鉄第六班『情報班』の本部たる廃ビルの屋上で向かい合う二人は、どこまでも対照的な二人だった。

かつてＩＴ企業の自社ビル跡だったこの地を根城とする六班の副官は、長身痩躯を相変わらずのダルンダルンなだらしないジャージで包み、置かれていたベンチの背もたれに怠そうに寄りかかっている。それに対して相対する一班副官は、その筋肉ではちきれそうな体を黒のタンクトップで包み、ミリタリー調のパンツを履いた足から頭の先まで、真っ直ぐな姿勢で立ったままだ。

一の副官は、六の副官に対して緊張感を滲ませた視線を向けているが、六の副官たるマルスにはまるで応えた様子もなく、いつもと変わらない面倒くさそうな視線を返していた。

「だいたいな、金剛さん。あんたは俺を毛嫌いしていなかったかい？おたくの鉄拳ほど露骨じゃなかったけどね」

「カリヤは単純に『無能』の外面にとらわれ、副官であるという立場を妬んでいただけだ」

「ま、俺って寝てばっかの役立たずだからな」

一班副官たる金剛のメメの言葉にも、風塵はヘラヘラと笑う。しかし、その笑みにはなんの返答も返さないままメメは続けた。

「だけど私は違う。私はお前を不気味に思っていただけだよ。恐れていたと言ってもいい」

「武闘派たる一班の副官殿の言葉たぁ思えないね」

揶揄するような響きのマルスの言葉に、僅かばかりの小さな笑みを刻みながらも、メメはどこまでも真っ直ぐに見返したまま視線を逸らさない。

「ヘルメスの力は闘いに向いたモノじゃない。珍しくはあるし汎用性はあるが、それだけだ。では班長（彼女）が持っていない戦力を補うのは、さて一体誰なんだろうな？」

「……ウチのみんなは頑張ってくれてるからね」

「アカツキやシャクナゲが情報班だけに戦力を割かない、なんて事は有り得ない。救急である二班にも『紅』がいる。何より君達は関西一円で関西軍と黒鉄に続いて大きな勢力を誇った『元ゼフィーロス』だ。現在の情報班で……そしてかつてのゼフィーロスで、彼女に代わって戦ってきた者は一体誰なんだろうな？」

メメの真っ直ぐすぎる問いかけにも、マルスはその表情を変えない。しかし、一瞬だけその気だるげな瞳が、鋭く細められた事をメメは見逃さなかった。

「……色々考え過ぎなんでない？ウチは敵対しないし味方もしない。その返事だけで満足して帰ったら？」

「そうはいかない。君には分かっているのだろう？あのヨツバに目を付けられたウチにそんな余裕はないんだ」

あくまでも笑ったままで。

瞳の奥に焦燥感と、それにも負けない強い意志を秘めて。

メメは目の前でその視線を胡乱げに細める『切れ者』へと向けて、その意識を高めていく。

「いざという時に敵に回る可能性がある相手……しかも君みたいな厄介な男に、中立を装っていられては困ると言っているんだよ！」

メメが一気に距離を詰め、力を高めた拳を振り抜くのと、マルスがダルそうに背中を丸めた姿勢のままで、背を預けていたベンチを飛び越え、地面を滑るように後退するのはほぼ同時の事だった。

『金剛』と呼ばれるコードフェンサー・メメの能力は、肉体の硬化――つまり自らの筋肉を鋼のごとく堅くする能力だ。自在に体を覆う筋肉を堅く固めて、攻守に活かす能力だ。

もちろん肉体を単に堅く固めてしまえば身動きが取れなくなり、使い勝手はそうよくない能力だと言えるだろう

だが硬軟自在に能力を使えば、その能力は接近戦においては無類の強さを誇る。

柔軟性を活かした振りから繰り出された拳は、普通に振るうよりも断然早く、鋭く振り抜かれるし、当たる直前でその拳は鋼の硬さまで持つ事になるのだ。

コンクリートに穴を開ける事すらも容易なそれが、先ほどまでマルスが腰をかけていたベンチをいともあっさりと微塵に砕く。

しかし、それほどの破壊力を誇ったメメでも、マルスを侮る事は出来なかった。それは武闘派として知られる一班の副官として、ほとんどの戦場で最前線に立ってきたがゆえの本能的な警戒心が働いたと言ってもいい。

だからこそ危険を承知の上で、相手が指定するまま六班本部の一番奥深くまで足を運び、接近する事にしたのだ。

交渉が無理だとしても、接近戦ならば自分の方が有利だと確信を持って。

事実、マルスもかの『金剛』に対して接近戦を挑む無謀を嫌い、

即座に距離を開けるべく、滑るように地を駆けていく。

「これぐらい近距離だったら俺のが不利……かね。あんたのゴツいパンチなんか食らっちまえば、俺なんて挽き肉にされちまう」

「力を使うヒマなど与えんよ。苦痛も考慮しよう。それに心配せずともヘルメスには手を出さない事も約束する」

「はん、お優しいこって。それにしてもウチの屋上で堂々と副官の俺を暗殺しようたぁ、本当大した度胸だよ」

二人の距離は五メートルと空いていない。まさに一息の距離であり、この距離での戦闘では、下手な能力や武器などよりも身体能力こそが一番重要である事は明らかだ。

しかし、おいそれとそれ以上の距離を取る事はマルスにも出来なかった。もしこれ以上不用意に距離を開けようとしたならば、メメは間違いなく問答の隙すらもないまま一気に距離を詰めてくるだろう。

それは金剛と風塵、二人の身体能力の差以上に、『前進するか後退するか』という違いが大きい。前進して距離を詰めるメメの方が、後退して距離を開けようとするマルスよりも有利なのは言うまでもない。

それが分かっていてもマルスはダルそうな態度は崩さないままで、小さく唾を吐き捨てる。

「でもさ、俺がここ以外じゃ会談に応じないって言った意味が、メメには分かんなかったみたいだね」

「六班本部……だからではないとでも？」

「そうさ。単にビビって本部に穴熊を決め込んでるとでも思ったかい？
ここはさ、この辺りじゃ三番目に高いビルなんだ。南の海辺方面に高いのが二つあるだろ？」

間近で向かい合う、自分よりも高い身体能力を持つメメにも全く気圧された様子一つなく、気軽に少し先に建つビルへと指を向ける。
そしてそれにメメは視線だけを向け――即座に彼は今の状況を悟った。

「分かったみたいだな。感覚も並みよりか上みたいじゃないか」

そんなメメを前にして、『風塵』マルスは小さく笑う。
無能のマルスとしてではなく、六班の戦闘部隊長『風塵』として嗤う。
面倒くさそうに、でもどこか剣呑な輝きをその瞳に宿して。

「そうさ、ここはあの二つの間を吹き抜ける潮風が、一番強く感じられる場所なんだよ。そして向こうの海岸線に少しだけある砂浜の砂や、雑多な街から舞い上がった目に見えないほど小さな塵が絶えず浮遊している場所でもある」

いつの間にか南から吹き抜ける風が強くなっていた。屋上の床面に落ちる塵埃を舞い上げるほどに。
マルスとの間に、それらの砂塵を含んだ風が、はっきりと目視出来るほどに。

「俺のコードは『風塵』。洒落た言い方をするなら俺はウインドマスターってやつさ。この辺りに流れる風もそれによる空間の流れも全ては手の内なんだよ。

――ここら一帯は全てが俺のテリトリーだ」

ほんの一瞬、メメは逡巡した。

剣呑な笑みを浮かべる男の顔を見ながら、今の距離と互いの能力を素早く比較し、結果を求めていく。

一気に詰めればしばらくは攻撃に転じられるだろう。その間に一撃を決められたならばいい。

そう考えれば、先ほど一気に距離を詰めなかった事が悔やまれた。

しかし、これらの風に阻害され、僅かでも距離を取られてしまえば、その時点で立場が逆転してしまう事まで考えれば、今の距離を維持出来たのはまだ幸運だったかもしれないとも思う。少なくとも僅かに考える時間が出来た。

下手に距離を詰めれば一気に勝負を決めるしかなく、それで決められなければ、距離だけを空けられて、風塵に金剛が敗れ去る羽目になる。

それらの可能性を比べ、状況を見極めた後のメメの行動は早かった。

すなわち脚に力を高め、一気に離脱する方を選んだのだ。

「賢いじゃんか。さすがナナシの知恵袋。ここじゃいかな『金剛』でも……いや、『不死身』でも俺にゃ勝てねぇよ」

そう小さく笑い、背を向け、屋上から躊躇いなく飛び降りようとするメメに、見せつけるかのように両腕を広げてみせる。

「でも、ただで帰らせちゃさすがに悪いな。おたくが気になってた六班の前衛隊長の力……少しだけ見てけ」

――東風（あずまかぜ）。

そう呟いた途端、辺りを吹き荒れる風の中から、その音に紛れるような小さな雑音が響きだす。

そしてそれらの雑音の群れはやがて連続し、一つの音となると、辺りの空間は朱色の風に包まれていく。それは高層にある屋上を包み込み、一気に薙払った。

その朱色の風の疾走が彼方まで走り去った痕に残ったものは、風が吹き抜けたような無色の傷痕ではなく、黒く焼け焦げたかのようなコンクリート。

燃え滓となった砕けたベンチと、東風という力があちこちに刻んだブラックマークだけだ。

「希望の西風（セフィーロ）をもじって、絶望の東風ってか」

相も変わらずダルそうなマルスと、すでに吹き消された熱風の余波。

「やはり強いわね、あなた」

そして顔の上半分を真っ白な包帯で巻いた、一人の女性のみが残された。

「はん、メメには見事に逃げられちまったけどな。にしても、覗き見たぁ礼儀がなってねぇな、『幻影』？」

「あら、やっぱりあなたは気づいていたのね。どうやら危険なのはこの能力だけじゃないみたいね」

屋上への入り口脇、コンクリートの壁にもたれかかったまま肩をすくめている女性に、マルスはその口元を皮肉げに歪めてみせる。

先ほどまでいなかったその女性を見ても……そして彼の力で傷一つついていなくても、全く臆した様子はなく、むしろいつになく真っ直ぐな視線でその女を見据える。

「さっきも言ったけどな、ここは俺のテリトリーなんだよ。そのテリトリー内に俺以外の誰かがいて気づかねぇ程度なら、そんな口上は間抜け過ぎんだろうが」

「確かにね。それにしてもね、さっきの力……砂塵を高速で連続摩擦させて、高熱を生んだあの風。あれは『私に見せてくれた』って判断してもいいのかしらね？」

そう言うと、今のお互いの立場からすれば、軽すぎるほどの気安い歩調でマルスへの間を詰めていく。

その歩みからは、先程の赤き風など気に止めた様子も見受けられない。

「あれぐらいでも一応の挨拶にはなったかね？俺としちゃウチに挨拶もなく勝手に入り込みまくりやがる二人の幻に、ウチの大将にゃ手を出すなよって意味を込めたつもりなんだけどよ」

「ふふっ、丁寧な挨拶痛みいるわね。でも今日は私しか来ていないみたいよ？スイレンちゃんは、五班（ウチ）にはよく顔を出してくれているけどね、今は六班（ここ）には来ていないみたいね」

それでも後退もしないまま、近づいてくる『幻影』を見据え、マルスはニィッと唇を歪めて笑ってみせた。

「そうかい、『あんたは』気付いてないのか」

そう言った瞬間だった。いきなり歩み寄る『幻影』を冠する女の胸から、鋼色の何かが何本も生えたのは。

それはその先端を鋭く尖らせた何本ものメスの刃。人の体を上手く切る為に生まれた刃のその先端。それが血に濡れる事もなく、胸と脾腹を刺し貫いて顔を出す。

「東の幻もここに来てんだよ。言ったろ、俺はこの戦場の支配者だぜ？風が教えてくれんだ、俺の方が間違ってるなんて事があるワケないだろ」

「……得意そうなのはいいのだけれど、私の方は自信を失くしそうだわ。アゲハみたいに気付いてくれていない方が可愛げがあるわよ」

無造作に、しかし的確に急所を抉った何本ものメスが、その胸に剣山を築いている女の背後には、薄手の和装を風に流している女が新たに一人立っていた。

『水鏡のスイレン』。

そう呼ばれる浴衣姿の彼女は、その細く白い指先に挟んだメスを器用にクルクルと回しながら、もう片方の腕の指先を空へと向ける。

「今日は不思議な天気ね。目に見えない不思議な刃が局所的に降り注ぐみたい。さっさと逃げないと……穴空きになっちゃうわよ？」

その言葉が終わるか否かの瞬間だった。その屋上の床面に幾つもの小さな穴が穿たれていく。

それは指の動きに釣られて上を見上げたアゲハの上にも……即座に後方に飛び、距離を取ったマルスが元いた場所にも刻まれていき、彼女――スイレンはほころぶような笑みを浮かべた。

「避けてくれて良かったわ。せっかく忠告したのに、それが無駄になってしまうと少し困ってしまうもの」

そう言って避けきれたマルスに笑みを向け、穿たれた穴達の中心地点で、身体中にメスを突き立てられているアゲハに、呆れたような、どこかつまらないモノを見下ろすかのような視線を送る。

「……やられたフリはいいわよ。それだけ穴だらけになっても突っ立っている時点で笑えないわ。あなたは立ち往生するようなタイプでもないでしょう？」

「……そう？結構壮絶な死に様を演出してみたつもりなんだけどね」

「面白くない冗談にしかなっていないわよ」

スイレンの呆れたような言葉に、立ったまま絶命していたかのように見えたアゲハは、僅かに俯かせていたその顔を上げる。

その上部が包帯に覆われ、瞳だけがわずかに覗いた顔を。

そして頭や身体に何本ものメス――光の屈折が戻り、目に見えるようになった銀の刃が刺さったままで、いかにも愛想笑いにしか見えない笑みを口元に刻む。

「私があなたを殺したのは、これで八回目ぐらいだったかしら。ヨツバに引き裂かれてるのも見たしね。この程度であなたが死ぬなんて私にはとても思えないわ」

「不貫にはヒドい目に合ったのね。いかに『幻影』でも、あそこまで容赦なくズタズタに引き裂かれたのは、はじめての事だったわね。

あの時は痛かったって伝えてもらえるかしらね？」

「彼はあなたを殺した事なんてもう覚えていないわよ。だってヨツバなんだもの」

事も無げに殺した者と殺された者が話し合い、向かい合う様は、どこまでも異常で、横から見ていたマルスは小さく舌打ちを漏らしてしまう。

「三班本部の奥深くまで入り込んだ異物で、生きて出られたのはあなただけだけれど、彼にはそんな事なんてどうでもいいみたいだから」

「相変わらず苦労しているみたいね？」

「えぇ。まぁ、望んで背負った苦労なんだけれどね」

そう言ってスイレンは微笑むと、マルスに向けて来訪の挨拶をするかのように深々と頭を下げた。

まるで先程のマルスの言葉に対しての最低限の礼儀を踏むかのように。

「急な来訪、申し訳ないのだけれども、あまり邪険にはしないでちょうだいね。マルス」

そして小さな笑みを刻んだ口元を、その浴衣の袖で隠すかのようにして小首を傾げる。

思わず漏れ出そうになる舌打ちを辛くも飲み込み、大仰な仕草でマルスは肩をすくめてみせた。

いかに地の利を得た彼でも、この二人にあっさり勝てると思うほど、楽観的ではなかった。

その姿を光の屈折による幻でしか見せず、それゆえに殺せないこの東の幻は、質量や気配さえも感じる幻があるが為に、この場での彼の力を持ってしても本体がいるか否かまでは分からない。五感の内、脳に最も強い影響力を与える『視覚』が攪乱される事によって、取り入れる情報が混乱してしまうのだ。

また殺しても殺してもあっさりと復活してみせ、身体中が切り刻まれても噛い続ける『西の幻』は、目の前に本体がいる事は間違いないと思えるのに、あっさりと本物の不死を気取ってみせる。

どちらもこの黒鉄という組織内では、最も倒しにくい相手で、最も相対したくない相手だ。

何しろこの二人を完全に敵に回した場合、例え目の前で消し飛ばしてみせても、勝利を確信する事が出来ないのだ。

その次の夜には、眠っている枕元に噛いながら立っているかもしれないし、食事中に後ろでナイフを振りかぶっているかもしれない。確信出来ない勝利には、いずれ精神の方が参ってしまうだろう。

彼女達の攻撃力自体は、『碧兵』や『紅』に劣るハズなのに……この場では風塵のマルスには及ばない相手でしかないのに、それぞれ二人ともが最悪な相手でしかない。

「私はここであなたとやり合うつもりはないんだけれどね。スイレンちゃんはひょっとしてそのつもりなのかしらね？」

「私にもそんなつもりはないわよ。あなたが何もせず、誰にも手を出さないまま大人しく引いてくれるなら……だけど」

体に刺さったメスを、なんの痛痒も感じさせないまま、無造作に過ぎる仕草で引き抜いていく『幻影』と、その様子をなんの感慨もなく見つめている『水鏡』。

二人の間には敵意も殺意もなく、害意や悪意もない。あっさりと塞がっていくアゲハの傷跡が、まさに彼女のコードである幻影であったかのように感じられ、いささか滑稽にすらも見える。

「黒鉄の為には、あの文書やデータを破棄すべきだと思うんだけど……どうやら賛成は得られないみたいね？」

「しかねるわね。あれは残すべきだと私の従う長が判断した。いずれ今みたいな状況の決め手になるモノだと分かっていても、あの人がそう決めた。ならばその決断こそが私にとっては絶対よ」

――そのままの自然な空気で、空間が張り詰めていく。

「シャクナゲ、アカツキ、カブト、そして今は亡き錬血にあなたと私。他にもいた黒鉄の創設に関わった古株は随分と減ってしまったというのに……残った面々も様変わりをしてしまったというのにね？スイレンちゃんにとっては、相変わらずアカツキの残した言葉とシャクナゲの意志こそが絶対なのね？」

「……あなたも様変わりをしたようには見えないけれど。あなたはいつまでも一人で不気味を演じてる。『幻影』を背負ってる。そんなあなたを、私個人は頼もしく思っていたりもするのよ」

――残念ながら敵対してしまったし、相対もしてしまったワケだけれどもね。

乾いた風が三人の間を吹き抜けても、紺色の髪の毛先一つ靡かせもしない『水鏡』と、ひらひらと舞う包帯を指先で弄ぶ『幻影』。

二人の様子は対照的でありながらも、どこかよく似ていて。

マルスは口を挟むような真似はしないまま、どんな事態にも対応

できるように、風が教えてくれる空間の状況把握に努める。
今この場には、気配だけは確かに存在している『水鏡』と、肉体も実体もここにあるハズなのに『幻影』を冠している、どこか似通った二人しかいない。
しかし、ひょっとしたらそれすらも自らの勘違いかもしれないとすら思う。
そう、ひょっとしたら二人ともこの場にはいるが、自らの認識の外にいるのかもしれないし、あるいは二人共この場にはいないのかもしれない。いるように錯覚し、あるいはいないと錯覚しているのかもしれない。

――バケモン共め。
思わずそんな悪態が浮かんでしまう。
攻撃力の高さやその及ぶ範囲においては、黒鉄の中でも最高位である自信が彼にはあった。
攻撃力ではパイロキネシストである『紅』に匹敵し、殺傷能力ではエレキネシストである『碧兵』に近いだけの力があると自負していた。そして『蒼』の『空間冷却』にも勝る、応用能力を持たせるだけの訓練もしてきたつもりだ。
毎日クタクタになるまで能力を酷使し、血の滲む制御訓練を経て、今の力を手にいれたという自負もあった。
『寝てばかりの副官』と揶揄されているのは、その異常なまでの訓練のキツさが理由でもあったのだ。隠された六班の地下で行ってきた訓練において、自らの能力を過剰に酷使し過ぎた事によって、体が動かなくなる事もザラだったからだ。
それでもここで一番格下と見做されているのが自分である事を、マルス自身がはっきりと認識していたのだ。

――この場で最も高い攻撃力と、効果範囲を持つ程度の事など、

些末な事に過ぎないのだ、と。

「……仕方ないかしらね、ここはスイレンちゃんを立てて退かせてもらう事にするわね」

睨み合うというには穏やかすぎる視線の邂逅の果て、先に声を上げたのは『幻影』だった。

そしてそのまま続けて、今まで視界の隅に置いていただけのマルスへと視線を向けると、素顔の覗く口元をにっこりと笑みの形に変える。

「でもね、マルスちゃん。『シークレットクラン』を読み解いたくらいでいい気にはならないでね？その程度で黒鉄（私達）の全てを知っている気になられたり、あえて残された情報だけで過去を知ったつもりになられると、それはさすがに業腹だからね」

――アスタ・ラ・ビスタ。親愛なる黒鉄達。

そう言って……幻影はあっさりと高層ビルから飛び降りた。その様子は、空でも飛べるのかと思えるほどに躊躇いがない。

当然重力に従い真っ直ぐに落ちていくが、最後にひらひらと振ってみせた手のひらには、どこかおちゃらけた雰囲気すら感じられた。

「私もそろそろ失礼しようかしら。ちょっと慌ただしいけれどもね。最後に顔なじみとして一つだけ言わせてもらうなら、七班の二人……『夜狩』と『牙桜』が動き出したわ。

――これはサービスが過ぎるかもしれないけれど、あの二人は私と同じ東の近衛よ。裏で動くのもいいけれど、出来るだけ敵には回さないようにして」

それだけを言い残すと、残っていた『水鏡の境像』も掻き消える。
その口元には、今までに見慣れた穏やかな笑みを浮かべたままで。

「……ったくよぉ。この組織の方が、『関西軍』よかよっぽどバケモン揃いじゃねぇか」

最後に残されたマルスはそう思いっきり毒づくと、ペタンと屋上へと腰を落とした。
その顔に色濃い疲労を滲ませながら。

「元皇二人にその側近が計三人もいるってか。さらにはその側近にも匹敵しうる『不貫』と『幻影』。そして『ネームレスワン』と、他数名のどこの誰かも分からない『名無し共』。
……冗談キツいぜ、ホント」

――もはや『謎解き』にかかってばっかもいらんねぇな。
そう最後に呟いて、抜けるような蒼天へと顔を上げる。
何かを思い詰めるというには、けだるさをあまりにも残したその表情は、どこか怜悧な雰囲気を宿していて。
『役立たず』の汚名に似合わないだけの苦労人を思わせて。

「……『東の近衛』だから何よ？つまりは俺じゃあんた達の敵にはならないってかい？くっ……はっ！」

そして――彼は哄笑を上げる。
姿を消した二人の『幻』がすでにこの場にいない事を確信して、

それでもなお念を入れて声を潜めた嗤いを上げる。

「……精々見下してろよ、バケモン共。取るに足らない相手だと見下ろして、バケモン同士で共食いでもなんでもしてりゃいいさ。この風塵の力を、あの東風程度と見くびってりゃいい」

自らが懐深くに隠し持ったジョーカーをそっとさらに奥深くに隠しながら、彼は頭を片手で掻き抱く。

彼は何者も恐れない。憚らない。退かない。媚びない。

何故なら彼は、自分も化け物と呼ばれる類の生き物だと知っているから。

化け物と呼ばれる事を恐れず、人外である事を肯定しているのに、自らの懐深くにその力を隠しているから。

――それでもやっぱ注意すべきは、三と七の同盟部隊かね。

俺らに被害や面倒さえくれなきゃ、敵対はしないでいてやるけどさ。

黒鉄に起こった動乱に逸る仲間を抑えつけ、悩む幼なじみを支える事で、身内に一切の被害なくこの動乱を乗り越えられたのなら、彼にはどちらの勢力が勝っても問題ない。

全てが終わった後に、今まで通り幼なじみの居場所が残っているのなら、彼は他人がどれだけ命を落としても構わないのだ。

――黒鉄と銀鈴が、将軍に代わる他地方への抑止力となるのなら、別にあの二人がどこの誰であれ気にしない。それこそ魔人や邪神類でも構わない。それ以外の誰かがあの二人を打ち倒したのなら、そ

の責任さえ取ってくれるのなら、別に問題なんて一つもない。
精々裏に回って、俺達に都合よく回るようにいろいろ調整だけさせてもらうさ。

そう一人ごちて、ゆっくりと寝直す為に自室へと歩を向ける。
身の回りがこんな状況でも、どこまでも『無能』らしくある為に。
その行動こそが、牙を隠す為の鞘となると知っているからこそ。

彼は風と評された。
風とは無色透明なモノで、決して触れられないモノ。
彼は望んで無能で在り続ける。無色透明で在り続ける。誰にも理解されたいとは思わない。触れられたいとも思わない。

――まぁ、ヘルっちが動けってんなら、表立って動くのも吝かじゃないがね。

彼を動かせる存在は翼を持つモノだけだ。翼を持って風を動かす存在だけだ。
だから彼は動かない。
夜の鶴が舞うには、いまだしばらくの時がかかる事が分かっていたからだ。

彼はそれまで風の向くまま気ままに在り続ける。
風塵のマルスとはそういった存在なのだと、自らを縛り付けながら。

2―19・3勢力の邂逅（後書き）

今更ですが、
人物紹介・坂上晴臣1。

関西産まれの数少ない純正型。粗野な言動が目立つ男ではあるが、意外と頭も回るタイプ。
変種による動乱以来、関西と中国地方のほぼ全域を掌握した始祖の一角。
かつてアカツキの友人として共にあった時期もあるが、関西事変以前から袂を分かち、現在では関西の革命軍の首領となっている。
敵対者には容赦しない政策を取っていたが、黒鉄に対しての対応には何故か甘さがあり、そこからもアカツキに対して思うところがあった事が窺える。
光の都と名付けた街を本拠地とし、関西以西のほとんどの都市を掌握してはいたが、黒鉄が本拠を置く廃都だけは抑えきれなかった。
一度は自ら先陣に立って廃都を攻め落とした事もあったが、坂上が光都に帰ると同時に地下に潜っていた黒鉄に奪還された過去がある。
それ以来、廃都の抑えは隣の戦都の知事に一任していた。
レジスタンス黒鉄には並々ならぬ関心があり、アカツキの片腕と目されるシャクナゲにもそれなりに思う所があったが、一年前の出会い以来、シャクナゲには妄執にも似た執着を持っている。

自分こそが関西の始祖だという自負を持っている為、それを傷つけたシャクナゲを討つまでは、自身の『将軍』という呼び名を封じていた。

能力

削る世界……B～A＋（威力よりも利便性、速射性に特化した力を発揮する。その領域内で坂上が腕……正確に言えば腕に付いた世界の端末たる赤錆色の刃……を振るうだけで、真空の刃を飛ばす能力。また、その真空を弾けさせ、空間を爆縮させる事も可能。普通の人間や器物には絶対な破壊力を誇る力であるが、純正型を相手取るにはやや弱い力。ただし、自らの領域内部ではただの真空ではなく、空間そのモノの断裂である為、威力自体も格段に上がる）

身体能力……A－（シャクナゲよりやや下、カーリアン以上）

執着心……A（物事や人間に対して執着する性質）

神経逆なで……B＋（嫌いな人物の神経を逆なでさせれば、かなりのもの）

プライド……A（曲がったモノではなく、坂上なりに筋を通したプライドを持つ。それを裏切る真似はしない）

統治能力……B

カリスマ……C～A（冷静な時と、焦燥に捕らわれた時の差が大きい）

2―20・不死身と不貫と水鏡と

――さて、どうしようか。

陽も暮れていく黄昏刻に、そう考えを巡らせながら、彼女はその藍色の瞳を空へと向けた。

六班に『幻影』が向かっているのを察知し、慌てて彼女は追っていった。その先で六班の副官と話をし、あちこちで不穏な動きを見せる要注意人物に目を光らせ、何事も無意識にやり過ぎである同僚を見張り、班員達が気を緩めないように見回りを続け……まさに休む間もなく動き回り、能力を使い続けていれば、さすがの彼女でも疲れを感じざるを得ない。

――副官さんがいてくれればもう少し楽なんだけれど……まぁないモノねだりしていても仕方ないわね。

そう自らを納得させて、脳裏に次々と送られてくる各地の映像に目を光らせる。遠距離であれ、彼女の能力であれば視界に直接映し出す事も出来るが、それではいまいち使い勝手が悪い。なにしろ周りの光景まで映し出すと、能力的な容量をかなり使ってしまう。

それにドアなどで完全に密封された箇所だといまいち能力の通りが悪く、光を単調に屈折させるだけでは視界が通らない。当然単純に屋外を見るよりも複雑な力を使う羽目になる。

彼女の能力を知る者は、いつであれ見張られている感に陥りがち

だが、別にそんな訳ではないのだ。いつどこであれ見張る事も出来るが、それでは他に回す能力が制限されてしまうのである。

だから彼女は、固有の人物や場所のみへと繋がるように能力を使っている。ある程度見る場所を固定し、労力を減らしているのだ。

それでも十数カ所に視線を送り、必要があれば幻像を作ってみせるには、相応に力を使ってしまう事になるのだが。

今現在、彼女が特に注意を向けている人物は、敵対者である『不死身』と味方である『不貫』、現在副官補佐に収まった少女、そして『幻影』と『碧兵』、先程顔を合わせた『風塵』だ。

場所としては、三班本部の入り口二カ所と、一班が本拠地を移した山頂周辺、五班本部と六班本部、そして民政部の本部だけである。

四班も敵対してはいるのだが、そこの長であるオリヒメは、ライバル関係にある紅とは違って、かなり冷静に頭の回る人物だと彼女は見ている。だからこそ、能力の使用容量を減らす為に警戒地区に当てていなかった。三班本部に視界を回すだけで十分だと考えた。

紅が本能と直感に非常に優れているのに対して、あの蒼は状況判断に優れ、周りを見渡す力に長けている。出来る事なら、一班が三班と争い、なんとか四班の仲間を傷付ける事なく問題に決着が付く事を望んでいるのではないか……そう彼女は見ているのだ。

あの会議では敵対したものの、蒼のオリヒメがいまだ『不貫』を過小評価しがちな他の黒鉄達とは違って、不貫の異常さと怖さを正当に評価し、水鏡と呼ばれた彼女を警戒している事をスイレン自身が知っている。

そしてオリヒメが、出来る事なら争う事なく、周りの仲間達にも納得させる形で、シャクナゲと話し合いたいと思っているであろう事も。

今現在は相対してほとんど間もなく、四班の長として簡単に応じてみせるワケにもいかないが、いずれはなんとかなるだろうとスイ

レンは考えていた。
その証拠に、四班は一班に同調こそしてはいるが、防衛態勢に入るだけであり、一班に呼応して動く様子は見られない。不貫に出会った際も、響音を抑えて引き下がっていたぐらいだ。

――紅に比べたら責任感があるのだろうけれど……辛くないのかしらね？まぁ、班員に好かれていたかいなかったかの違いもあるのだろうけれど。

スイレンからすれば、カーリアンよりもオリヒメに同調出来る部分が多い。似ている性格をしているとすら思える。
スイレンの力を持ってすれば四班本部に入り込み、彼女に会談を求める事ももちろん出来た。そうしようかと一時期は考えていたのだ。『水鏡』と呼ばれた彼女にはそれだけの力があるのだから。
しかし、その性格を考えた場合、下手に刺激しない方がいいと結果的に判断したのだ。
紅とのいざこざからか周りからは勘違いされがちだが、彼女は紅よりもずっと理性的な面が強い。本来は激情にかられるタイプではないのだ。
彼女が我を強くしたり、無差別に能力を使ったりする場合は、『紅』という反作用薬が刺激した場合がほとんどだ。
もちろん紅の少女とて、その強過ぎる能力ゆえに『危険な爆薬』か何かと誤解されている面がある。能力制御の甘さもあるだろう。
しかし本来は、非常に人懐っこい性格である事を彼女は知っていた。
そうでなければ、三班に遊びに来る時に鼻歌混じりだったり、それを三班の班員達が苦笑混じりに見ていたり、いつの間にやら三班本部の入り口が顔パス化したりはしない。
二人共に性格の違いや性質の違いはあるものの、話が全く通じないタイプではないのだ。単に紅にはあまり間を置かずに話を通した

方がいいのに対して、蒼は彼女自身が考える時間を置いた方がいい、という違いがあるだけでしかない。

彼女達が会う度に揉めているのは、性格の不一致……あるいは境遇が一致しすぎるあまり、お互いが反発しあっているに過ぎない。

――とりあえず警戒すべきは、やっぱり『幻影』かしら？副官さんが出ていった隙に、何かしらと動かれたのなら私もそちらにかかりきりになるし。

そう思考を巡らせ、そちらに意識の重きを置こうとして……監視していた人物の一人に動きがあった事を知る。

その視線と視界を支配する力で、脳裏の奥に水鏡のごとく映る光景を認識して、彼女は大きな溜め息を漏らした。

――貴方はひょっとしたら動き出すんじゃないかと予想してはいたけれど、ちょっとタイミングが悪いんじゃないかしら？今はそう手加減が出来そうにないのだけれど。

その男は仲間を引き連れず一人で歩を進めていき……その行く先に気がついてしまって、スイレンは思わず舌打ちを漏らしそうになる。

三班本部の裏口。

今日もまた、あの壊れた不貫の楯が、猫達だけをお供に夕陽を眺めている場所。

最近になって、何故か『不貫』のお気に入りとなり、侵入者にとっては鬼門と化している三班本部入り口の一つ。

「用があるのなら、正面から入ってきてくれた方がまだ救いがあるのに」

立て込もった場所から、わざわざ不貫のヨツバがガーディアンを務める方面へと、向かう男に思わずそう毒付いて。
彼女にしては珍しく、慌てたように本部へと帰還していく。
つい先月までよりも、多少人通りが少なくなった廃都のメインストリートのただ中を、その艶やかな浴衣の裾を翻しながら。
僅かながらもそこを行き交っていた人々は、その様子に気付いた様子もなく、目立つ風貌であり、この都市では有名人でもあるはずの彼女へ視線を向けもしない。

今現在の廃都で最も苦労人であろう三班の幻は、どこであっても幻に過ぎず、いつであっても誰の視界にも映る事もなく、痕跡一つ残さないまま歩み去っていく。

自班の本部である山頂から、たった一人で三班本部へと向かって歩いている『不死身』を冠された男を止める為に。

「止まりなさい」

道を歩く男を遮るようにしてスイレンは鏡像を現した。本体はいまだ遠くにあっても、彼女の場合これぐらいはワケなく出来る。
光を操り、視覚を支配する能力を持ってすれば、体から遠くに離れた場所に幻像を作る事も、その幻像を完全に支配下におき、存在感や言葉ですらも発しているように認識させられる。
ある意味では最高の空間支配能力であり、最高の幻覚使役能力だと言えるだろう。
その能力を持って、彼女は仲間から『水鏡』と呼ばれて信頼され、

敵からはインペリアルキラーとして恐れられているのだ。
しかし、そんな彼女の能力を目の当たりにしても、その男は一瞬だけ歩を止めただけで再び先へと歩き出した。

「止まりなさい、ナナシ。あなたの向かっている先は鬼門よ」

「そりゃあ、あの不貫がいるからか？」

「……そうよ。分かっていたのなら、その先がいかに危険か、あなたなら分かっているでしょう？」

面倒くさそうに、でもようやく足を止めて、男は胡乱げな視線をスイレンへと向けた。
ちょくちょく変わる男の髪の色は、現在抜けるような金髪に染め上げられていて、ソフトモヒカンのように逆立てられており、人相の悪さに拍車がかかっていた。
あまりにも頻繁に髪の色を変える余り、もはや彼の地毛が何色なのかすらもスイレンは忘れてしまっている。
しかし、バッチリと見事に逆立てられたその髪の毛からも、男の意志の硬さみたいなモノが見受けられた。

――『不死身』のナナシ。
強行班にして強攻班たる、黒鉄第一班の長であるその男は、いつものように彼を慕う部下――彼は子分と呼んでいる――を一人も引き連れてはいない。
親分肌であり、実際に元は義賊集団を自称していた連中の頭目だった男だ。いつであれ誰かしらが付いて歩いているのが常であったのに、今は一人で歩いている辺りからしても、今の彼が何を考えているのかが察せられて、スイレンはその表情を強ばらせた。

「何を考えているのかは聞かないわ。何も聞かない事にするから、今来た道を真っ直ぐに引き返しなさい」

「テメェの言い分を素直に聞いてやらなきゃなんねぇ理由があんのかよ？」

背丈の割にヒョロっとした印象があり、黒のタンクトップと肩にかけただけのジャンパーがぶかぶかなところから、一見するとガリガリなイメージを持つだろう。

しかしナナシの肉体は、限界ギリギリまで肉を削ぎ落とした戦闘仕様の身体である事をスイレンは知っていた。

かの黒鉄と並び得るだけの身体能力を持つ者が、この不死身と呼ばれた男しかいないというのも伊達ではない。

「ヨツバが本気になったら、私でも止められないわ。彼を言葉で止められるのはシャクナゲだけよ」

「関係ねぇな。シャクナゲの野郎は俺がぶっ飛ばす。なんなら水鏡、テメェから相手をしてやろうか？」

その言葉が大言壮語……などとはスイレンにも言えない。少なくともシャクナゲである彼や、高い攻撃力を持たないスイレンからすれば、不死身とまで呼ばれた自己治癒力を持つこの男は、天敵とも言える存在だ。

圧縮空気の銃弾をモノともせず突っ込んでくるだけではなく、普通ならば自らの身体が壊れてしまいかねない力を振るってくるのだから、タチが悪いという一言では済まない。

それだけではなく、この不死身と呼ばれた男は感覚や知覚能力が異常に高いのか、第六感や野生の勘とも言えるスキルまで持っていて、スイレンとの相性も非常によくない相手だった。

今もこの鏡像が、空間に映っただけの単なる水鏡と見抜いているのだろう。その鳶色の瞳には鏡像を相手に警戒感は見られない。

しかし、だ。いかにそんな戦闘向きの能力やスキルを持っていても、それ以上の存在という者は存在するのだ。

少なくとも三班には、彼以上に人外で、彼以上に戦闘向きな能力を持っている者がいる。

「私やシャクナゲには勝てても彼には勝てないわよ。二代目『不貫』、貫くをあたわずと冠された三班の楯……ヨツバにはあなたじゃ勝てない」

『不貫』のヨツバ。黒鉄の狂人。戦闘機械。盗賊殺し。そして三班の誇る絶対の楯。

故事にあったように、三班の剣であり矛である『水鏡』と、楯である『不貫』がぶつかれば、あとに残る者は楯であるヨツバの方だとスイレンは思っている。

故事のような『矛盾』などそこには欠片もなく、絶対の存在である楯だけが残る事になるだろう。

「私やあなた……いえ、他の班長達やコードフェンサーの誰が相手でもヨツバには勝てない。不可視の楯に阻まれ、弾き返されて傷一つ付けられないわ」

「……あいつの怖さはよく知ってるよ。闘り合った事ぁなくても肌で分かってる。『黒鉄』やテメェと闘り合う事は出来ても、あいつとは闘り合えねぇ。知ってんだよ、それぐらい」

「ならば引きなさい。それは決して恥じるべき事じゃないわ。絶対

に勝てない相手というのは必ず存在するの。今の世界じゃ、そんな事は常識でしょう？」

普通の人種や並みの変種では絶対に勝てない相手がいる事は、黒鉄のメンバーであれば誰しも知っている常識だ。

それはあの坂上しかり、各地の皇しかり、黒鉄唯一の純正型である銀鈴もまたしかり。

そしてあの『不貫』もまた、その対象になりうるとスイレンは言っているのだ。

不貫のヨツバがボロボロになって帰ってきた事は幾度もあった。正確に言えば、『ボロボロになった服を体にひっかけて帰ってきた事は』。

しかし、ヨツバ本人が傷を負ったところなど、あらゆる能力者を凌駕する視界を持つスイレンとて見た事がない。

それが銃弾の雨が行き交う戦場帰りであれ、荒くれ揃いの盗賊団を殲滅した後であれ、近衛が出張るほどの激戦を潜り抜けた後であれ、だ。

確かにヨツバは近衛を打ち破った事はない。しかしそれは、戦った事すらもないのだから当たり前だ。

近衛殺しの名前などに本人は興味がなく、黒鉄のシャクナゲや水鏡のスイレン、かつていた『錬血』ほど有名ではない彼が近衛の標的とされた事もない。

それは、近衛達にとって『運が良かった』だけになんだという事を、インペリアルキラー（近衛殺し）の一人である彼女は思っている。

もし、『不貫』を標的になどすれば……そして戦場をフラフラと歩き回り、その先々で敵を殺し尽くしてきたヨツバと近衛達が出会っていたならば、いかな前近衛総長や『将軍の右腕』と称されていたほどの近衛であれ、自らが狩られる側の存在である事を思い知っ

ただろう。
　ヨツバに今まで狩られてきた盗賊達と同じように、彼の『歪』の前にその命を散らされていたとスイレンは確信していた。

「ヨツバは純正型じゃないわ。彼は単なる普通の変種でしかない。でもね、彼は純正型以外の変種では、間違いなく最強の変種よ。彼の力の前では、私や五班の幻影でさえ万に一つの勝ちも拾えない。いえ、いかな純正型であれ、彼に勝てる存在なんてそうはいないわ」

「知ってる。だからそれぐらいは肌で感じてるっつってんだろ。でもよ、それならやっぱり俺ぁ行かなきゃなんねぇ」

　知ってる、そう言った言葉に偽りがない事は、ナナシの声音から判断が出来た。
　彼の――『不死身』と称された男の声からは、戦う前から敗北を口にする屈辱感と、僅かながら確かに存在する恐怖が見て取れたからだ。
　それは、強力な能力を持つ変種が多く所属するこの黒鉄でも、抜きん出た力や珍しい力、大きな発言力を持つ班長連の全てが、『不貫』のヨツバに対して感じているものだとスイレンは知っている。
　あのカーリアンでさえ、ヨツバには少し引いたところが見受けられるほどだ。
　それは強者は強者を知る、などという曖昧な理由からではない。もちろんそれもあるのではあろうが、そんなものが最大の理由ではないのだろう。
　単に他の人々よりも背負うものが大きい存在ほど……守るものが多い者ほど、不貫の異質さが目に付くだけで、本能的な警戒心が働いているのだとスイレンは思っている。
　オリヒメが泡を食って先走ったサクヤを止めたのも、彼女にも多

くの背負うものがあったからだ。彼女には班長としての自覚があり、あらゆるものから班員を守っていくという自負があったからこそ、黒鉄内でもっとも異質な男を警戒し、恐れていたのだろう。

カブトやヘルメスといった、力を持たない班長や、戦う為の能力を持たない者ですら、裏では不貫のヨツバに対して最大限の警戒を敷いている。スイレンに対するものよりもずっと大きな警戒感が見て取れる。少なくとも、スイレンの視界にはその痕跡が見える。

彼らには、オリヒメよりも背負う者達がたくさんおり、長としての責務をオリヒメよりも長く背負ってきた経験がある。

カブトは、アカツキがいた頃から変種ではない人々をまとめていたし、ヘルメスは関西の第三勢力とまで呼ばれた『ゼフィーロス』の元女首領だ。

オリヒメなどよりも、ずっと多くを背負ってきたという実績があり、今も背負い続けているという事実がある。

不貫に対して特に何も思うところを見せていないのは、七班の銀鈴ぐらいであろう。

それは自らも元新皇の一角であり、今も当時のガードに守られているスズカぐらいでなければ、あの不貫の異質さは恐れて当たり前だという事に他ならない。

さらにナナシの場合は、武装盗賊あがりという事から、ヨツバの怖さを噂として聞いた事もあっただろう。同じ前衛部隊的な班に所属する者として、接する機会も多かった。それだけで、ヨツバを警戒するには十分すぎる下地と言える。

「ヨツバは俺らを狙ってんだろ。だったらヨツバの野郎が強けりゃ強いほど、俺ぁビビってるワケにゃ行かねぇ。

俺がシャクナゲの野郎とケリを付けて……俺自身の問題にケリを付けて、終わりにしなきゃなんねぇんだ」

しかし、そう言ったナナシの声からは堅い意志が見て取れた。
不死身のナナシと呼ばれた男は、そう頭の回る人物ではないと思われている。スイレンもそう思っていたし、今向かい合っていても、その印象は覆らない。
やはりこの男は頭が悪く――どこまでも不器用なのだろう。そう彼女は思う。
ヨツバと相対する愚かしさを知りながらも、自分の中にあるシャクナゲに対する憤りも捨てられない。付いてきてくれている班員達の怒りも、この男は無視出来ないのだろう。
ただ、そんな自分の考えに班員達の全てを巻き込めないとも考えているのだ。中には黒鉄同士での争いを嫌う者もいるはずだ。
そう考えて、この男は自分一人で一班全ての総意を背負い、一班のメンバー全員の憤りを自分一人でぶつけると決めたのだろう。そうすれば一班の意地を通した上で、『ヨツバと仲間達が争う必要もない』。
――あの人が不思議とナナシを気に入っていた理由がよく分かる。
そんなナナシの考えが分かってしまい、思わずスイレンの口元には笑みが浮かびそうになる。
彼女が従う青年が、何度ナナシに勝負をふっかけられても邪険に扱わなかったのは、その真っ直ぐさが彼には好ましかったからだと思ったのだ。
隠し事をしていた彼には、ナナシが羨ましく思えていたのかもしれない。
それでもスイレンは、その鏡像の口元を引き締めて、強い視線でナナシを見据える。
いよいよこの先にナナシを行かせるワケにはいかなくなった、そう思ったからだ。
あのヨツバには、こんな真っ直ぐさは通じない。不器用さなど意

味を持たない。
躊躇いなく異質を纏い、迷いなく歪を掲げて、ナナシに力を向けるだろう。
しかし、この男がヨツバに殺されては、今一人で黒鉄の負の遺産と向かい合っている青年が悲しむに違いないのだ。
それはスイレンには耐えられない事だ。

役立たずの近衛。ロクな力を持っていなかった少年に、手前勝手な期待を寄せた不忠の側近。
そして『灰色』の世界に絶望した少年を見続けてきた最後の友として、例え僅かな悲しみとはいえども、彼にはこれ以上背負わせたくはなかった。
彼女はその為に、今も生き恥を晒しているのだから。

「あなたが何を考えているのか、想像しか出来ないけれど、もう一度だけ言うわ。
この道を引き返しなさい、ナナシ」

「何度言われても答えは変わらねぇよ。
俺ならあのヨツバにもそう簡単にゃ殺されねぇ。なんせ俺ぁ『不死身』のナナシ様だ。この身体の頑丈さは伊達じゃねぇ。ヨツバをなんとか撒いて、シャクナゲのツラに一撃入れてやるぐらいは出来んだろうさ」

「それを聞いて私がこの先へ通すとでも？私の視界とヨツバの歪が組めば、いかなあなたでもシャクナゲの元にはたどり着けないわよ？」

「ふん、そうなりゃ仕方ねぇな。テメェら相手で我慢してやる。生き汚く精々抗って、不様な手傷くらいは与えてやるさ。

でもよ、そうなったら最後だぜ？黒鉄は本当に真っ二つだ。俺一人をテメェら二人がかりで殺したとなりゃ、ウチの子分共は絶対に降伏なんかしねぇぞ？」

ナナシに引く様子は見られない。そんな程度の覚悟ではないと示すかのように、僅かな殺気をその身に纏わせる。

「ナナシ……あなたはバカな人ね」

そんなナナシに見据えられ、スイレンは思わず視線を伏せてしまった。

確かにナナシとシャクナゲだけで決着を着けられるのなら、それが最善だろう。

反シャクナゲの筆頭格であるナナシと、三班の長であるシャクナゲだけで問題を解決出来たなら、おそらくどこの班からも犠牲を出さずに済む。出たとしても最小限で済むだろう。

もちろん二人のうちのどちらかは死ぬ事になるかもしれない。いや、間違いなくナナシは、シャクナゲと闘り合えば、自分が死ぬ事になると分かっているはずだ。

『シャクナゲ』ならばともかく、遺産を捨てた彼には『不完全な不死身』では届かない。

『黒鉄最強』ではなく、この国最初のヴァンプであり、この国最強の純正型『元新皇』の一角を相手に、一黒鉄でしかないナナシが抗えるハズもない。

それでも彼に退く意志が見られないのは、やはり彼が長だからだろう。

二人だけでの決着の後には、三班と反三班のぶつかり合いの結末よりも、ずっと多くの仲間達が残る事が、ナナシにも分かっているのだ。

「俺を行かせろよ、あのクソ野郎のところまで。そうすりゃ俺だけで全てにケリを付けてやるさ。負けるつもりなんざさらさらねぇが、俺が倒れたら負けを認めっちまえって書き置きも残してある」

「……一班の連中がそれに従うかしら？」

「あんまウチの子分共を舐めてんじゃねぇぞ、水鏡。俺んとこにはな、仲間の最後の言葉を無視するヤツなんて一人もいねぇ」

「……」

「あいつらの代わりにな、俺がシャクナゲの野郎をぶん殴ってやるって書いておいた。俺が全部の憎しみや怒り、精一杯の恨みをあいつにぶつけてやるってな。

こんな八つ当たりじみた無様な真似はよ、親分の俺一人が肩代わりすりゃいいんだ」

ナナシがシャクナゲの正体を話した時に見せた怒りは嘘ではない。それでも仲間達に『怒りと恨みのままに戦え』などと言える人間でもない。

彼は不器用な男で、王や指導者ではなくあくまでも『親分』なのだから。

「必要なのは勝ち負けなんかじゃねぇ、負けても別にいいんだ。キッカケが必要なんだよ。俺ら全員の意地を見せたって証……それをあいつらにくれてやりてぇ。

それを最後に、あいつらはお前らが言う『本当の意味での黒鉄』になる。俺の子分共は巣立ってくんだ」

もしナナシが人の上に立つだけの指導者だったならば、彼は黒鉄に迎え入れられてはいないだろう。

アオイに煽られ過去を嘲られても、落ち着いて考えれば一番に仲間達の事を考えられる男だからこそ……多くの人々を束ねられる『親分』だったからこそ、ナナシは黒鉄に受け入れられたのだ。

「そっちこそこれが最後だぜ？多分、一番犠牲が少ない結末ってヤツを得られる、最初で最後のチャンスだ。

分かったらここを通しな」

言葉では説得が無理な事は明らかだ。逆にスイレンが説得されそうな気すらもした。

このまま時間を置けば、一班のメンバーは独自に動き始めてしまうかもしれない。鉄拳のカリヤのように先走る者も出てくるだろう。そうなればヨツバを止める事は出来ない。

鎖を放たれたシロツメ草は、今度は一班の血に濡れて、新たな異名を増やす事になるだろう。

すなわち『黒鉄殺しの黒鉄』と呼ばれる事になる。

そんな状況で、シャクナゲが戻ってくるまで待っていて欲しいなどと言えはしない。すでに、いつ一班のメンバーとヨツバがぶつかる事になるかも分からないのだから。

「――通す必要なんかあらへん。不死身はここで死んで、一班も全部綺麗に消えたらそれで仕舞いや」

そんなスイレンの葛藤に終止符を打ったのは、今ここでは絶対に聞きたくない男の声だった。

感情の感じられない、男性にしては高い掠れるかのようなアルト。
茫洋とした雰囲気を、その声からも滲ませる単調な声音。

「あんたが最初や、不死身。心配せんでも後からみんな追わせたる。
一人っきりっていうんは、普通なら寂しいもんらしいからな」

「……ヨツバ、あなたなんでこんなところまで――」

『不貫』のヨツバ。
本物の不死身を気取る五班の『幻影』ですらも、かつて三班本部でぶつかった際は這々の体で逃げ出し、スイレンの力を持ってしても勝てないと言わしめる、黒鉄第三班が誇る最凶にして最狂。
薄い色の髪と、白磁のような肌。いつであれ閉じられたままの瞳と、その戦歴からは想像も出来ないほどの細身の身体。
機械と向き合っているかのような違和感を感じさせる、黒鉄で最も歪な青年。
向かい合った敵の全てに、レクイエム代わりの口笛を贈りながら殺し尽くしてきた、二人目の『貫くをあたわず』と呼ばれた楯。

「あかんで、スイレン。考えるまでもない、迷うたらあかん。ウチに入り込むヤツはみんな敵や。見逃すなんてあり得へん。
でも、スイレンが黒鉄とは戦いたないっていうんなら、俺一人で全部片すわ。
一班以外は誰も傷つかん。この結果ならなんの問題もないやろ？」

彼は一人、なんの気概もなく、躊躇いもなく、ゆらゆらとした歩調で歩み寄ってくる。先ほどまで佇んでいたはずの裏門がある方向から。
ほんの僅か……一分にも満たない僅かな間、ナナシへと意識のほ

とんどが向かってしまったスイレンの隙を突くかのように。

「さて、殺し合おか、『不死身』のナナシ。
その不完全な不死身で、俺を貫けるもんかどうか……試したるわ」

声に僅かな抑揚すらも感じさせないままそう言うと、壊れきった不貫の楯は、仲間であるはずの黒鉄に対して、特になんの感情も見せないまま――その瞳を伏せたままで細い指先を掲げた。

2―21・幻界の刃と歪の楯

水鏡のスイレンの能力は、視界を支配する能力である。視覚に影響を与える光を操る能力だと言い換えてもいいだろう。

その能力は非常に稀少なものであり、変種の多い黒鉄を見渡してもかなり使い勝手のいい能力だと言えるだろう。

しかしその能力は、周りに知られているほど万全ではない。視界を支配するのにもやはり限界はある。

彼女自身は自らの能力を、かつての仲間達――新皇のガード達の中でも、最も『欠陥品』な部類に入ると思っているほどだ。

あまりにも多くの情報を取り入れ続ける為に、ちょっとした『バグ』で能力に乱れが出る。例えば、ふいに一つの場所へと意識を向けすぎた場合などには、他へと向かう能力に対して脳の容量が付いてこなくなるのだ。

それはこの能力に置いては致命的になりかねないバグであり、肉体的な限界がある以上必然的に出てくる欠陥だ。

視界と思考に負荷をかける能力である以上……そしていかなスイレンと言えども、脳というスペックに限界がある以上仕方のない事だと言えるだろう。

今の場合を見れば、ヨツバが最近恒例の夕陽見の時間だから裏門から動かないだろう、という過信があった事は否定出来ない。

彼は他の何者にも意識を向けず、気が向いた事だけを淡々と惰性

で続ける日常を繰り返してきた人間だから、今日に限っていつもと違う行動をするとは思わなかった。
やはり無意識にスイレンの中に油断があり、過信があったのだろう。
そんなヨツバだからこそ、特に大した理由もなく、今日に限って夕陽見をしなかったという事も十分に考えられる事ではあったのだから。
自分自身は過信したつもりはなくとも、結果を見ればそう思わざるを得ず、スイレンは小さく唇を噛み締めた。

「間違えたらあかん。迷ったらあかんやろ。敵に惑わされるなんてあんたらしくないで、スイレン」

「待ちなさい、ヨツバ！」

「待たん。あんたと俺は基本的に同格や。俺が間違えてへんと判断出来る時まで、あんたに従う理由なんかない。
敵は殺せ。敵になりうる者も殺せ。疑わしきは罰せよ……やろ？」

「あなたの役割は本部の守護でしょう？まだ本部まで足を向けていない相手を警戒するのは、『水鏡』の役目よ」

サッと鏡像を消し、改めて何人もの鏡像でもって威圧するかのようにヨツバを囲むも、三班の『不貫』には恐れなど微塵もなければ、引く様子もない。
ただ伏した瞳で真っ直ぐにナナシを見やる。掲げられた腕にも動きはなく、スイレンの言葉にもなんの表情も浮かべていない。

「警戒して、向かってきたヤツを帰してまうんやったら、スイレン

の言う『警戒』は甘すぎや。打たれる前に打たなあかん。一回敵意見せたら次もある。
右の頬を打たれたら左の頬を差し出す、なんて時代はとっくに終わっとる」

「ナナシは……一人で来たのよ？」

そんな物言いが通じる相手ではない事ぐらい、スイレン自身がよく知っていた。情や意地で心を動かすのは、『感情を持っている者』だけだ。ヨツバに対して感情に訴えるなど、時間稼ぎにもならない。
当然のようにヨツバは、『それがどうした』と言わんばかりに無情に宣告する。

「一人で来られたら面倒やな。まとめて来てくれたんなら、一遍に済んだのに」

――改めて一班の連中を殺しにいかなあかん。
そう言って、十字を切るかのように指先を振る。
振るったワケではなく、軽く宙を掻くような仕草で印を切るかのように振る。

「……かっ！？」

それだけで、隙を窺っていたナナシの胸に『十字』の傷痕が刻まれた。
全く立ち位置を動かないままで。
スイレンとの問答を続けながら。
ただ、離脱の機会を窺い、一気に三班本部へと向かうべく様子を見ていたナナシに、無表情を変えないままで傷を刻む。
ヨツバがその指先で空を掻き切る度に、鮮血の赤が宙に舞う。

「あかんで、ナナシ。あんたはここで死ぬんや。逃げるなんて許されへん。俺を素通りして先に行こうなんて持っての他や」

「――ヨツバっ！！」

「スイレンは黙っといてんか。手向けの曲が吹けへんやろ」

慌てて言葉をかけるスイレンにも、ヨツバの指の動きの度に傷が増えていくナナシにも、全く意を介した様子もないままで――レクイエムが紡がれていく。

その口元からは、流麗な余韻を刻んだ葬送曲が流れていく。

この曲――ヨツバがこの哀惜に満ちた曲を口笛で奏でるのは、『誰かを殺す時』だと黒鉄のメンバーならば誰でも知っている。

単に自班の班長に言われた、『誰かを殺した痛みを忘れるな』という言葉と、『奪った命を悼め』という願いに添う為だけに奏でられる、『不貫のヨツバ』唯一の手向け。

意味を持たない……少なくともヨツバ自身には、儀式じみた意味しか持たない音色。

その意味を知っていたスイレン――ようやくこの場までやってこれたスイレンの本体は、やむを得ず懐から得物を取り出して威嚇代わりに投げ付ける。

もちろん威嚇といっても、急所を外して投げたワケではない。出来るだけ注意を惹きつけるように、彼の顔を目指して投擲した。

もちろんその程度の攻撃で、『貫くをあたわず』と呼ばれた楯が、なんの痛痒も覚えない事ぐらいは理解していた。

いかに百発百中でも、所詮メスはメスだ。どれだけ鋭い刃物でも、突き立たないのでは傷を負うはずがない。

目と喉、そして口内へと突き刺さるべく飛んできた刃が、キンと甲高い泣き声を上げて砕けるのを気にも止めず、ヨツバはゆっくりとその顔をスイレンへと向けた。

「……容赦ないんはええけどな、相手見てからにしぃ。あんたは俺に勝てん。知っとるやろ？」

「知ってるわよ、それぐらい。でもね、あなたが絶対に破らない『決まり事』を止める事は出来たわ。

――口笛、止まってるわよ？」

「……つまり俺はナナシを殺す。あんたはその邪魔する。そういう事やな？」

人体を切り裂く為の刃は幾つもの微細な欠片に砕け、落ちたそれはあっさりと踏みしめられる。ヨツバの面倒そうな表情を崩す事も出来ない。

それどころか、みるみる内に傷が塞がっていくナナシを、なおも傷つけようとその細い指で宙を掻いてみせる。

「ちっ……」

その所作にナナシは小さな舌打ちを漏らしつつもその場を飛び退きながら、先ほどまで自分がうずくまっていた場所から少し先にあった地面が、十字に切り裂かれるのを見た。

「ナナシ、ここは一旦引きなさい……と言いたいところだけれど、一班の本部になんかに引いたら、ヨツバがそのまま追っかけていっちゃうわね」

「……あの野郎、『不貫の楯』って呼ばれるぐらいだから、生半可な攻撃が効かないのは知ってたけどよ、風の刃みたいなもんまで操ってやがんのか？それにしちゃ、傷を受けた時に衝撃がなかったんだけどな」

血にまみれた服を気持ち悪そうに引っ張りながら、ナナシは油断なく身構える。

今でもスイレンに気を許してはいないだろうが、ヨツバよりも話が通じる事は明らかだ。それでも思わず問いかけるような口調になってしまうのは、いかなナナシでもやはり混乱しているからだろう。

「これは秘密なんだけど……と言っても、単に秘密にしてたのは、あまりにもとんでもない能力だから、周りにこれ以上警戒されたくなかったってだけなんだけれど、ヨツバの能力はね、『精神防壁の物質化』よ」

「精神防壁の物質化、って言われても分かんねぇよ」

「……つまりね」

あっさりと……むしろ堂々とした態度で返すナナシに、スイレンは疲れたような溜め息を漏らしながら補足を入れる。

「人間が持つ精神っていうのは、他の人間や環境の影響を受けるものなのだけれど、最低限の自己保存……自分を守る機構があるの。自分の存在が揺らぐような出来事や記憶から、自分が壊れないように働く機能を持っているのよ」

「それが？」

「彼の能力はその『精神の防壁』を現実的な壁として現せる能力なの。しかもその壁は、現実の力を防ぐ能力を持っているけれど、基本的には人間のメンタルな部分に属するものなのよ。
つまり、彼の壁は現実の力からその身を守る為に働くけれど、『現実の力ではいかなる物であっても壊せない』のよ」

「……なんだそりゃ」

「さっきあなたを傷つけたのも、指先から飛ばされた精神の防壁の欠片よ」

ふらふらと歩み寄ってくるその足取りに力強さはない。そんなものはヨツバには必要ない。
なにしろ彼は、勝手に守られて、思うだけで力を飛ばせるのだから、肉体的な強さなどは関係がないのだ。
力強い歩みでもって威圧する必要もない。

「不貫のヨツバはね、純正型じゃないけれど……それは確かなんだけれど、その能力だけを見れば半ば純正型みたいなものなの。むしろ普通の純正型などよりもよっぽど厄介な能力者よ」

対して言葉を紡ぐスイレンの口調には重さがひたすら増していく。目の前にいる、仲間であるはずの男をその紺の瞳で見据えながら。
ヨツバの身体中に膜を張るかのように張り巡らされた、不可視な『精神の防壁』を見据えるかのように。

「彼には物理的な能力では傷一つ付けられないわ。彼を傷つけられるとしたら、現実の理から外れた力――純正型の力か、カーリアンの『紅』ように『あらゆるものを燃やす』という、別の理にも似た働きを持つ能力だけ」

「俺にゃ傷一つ付けられない、ってか？」

「いいえ、勘違いしないで。それでも過小評価が過ぎるわよ。あなただけじゃなく、銀鈴とウチの長以外では彼に傷一つ付けられないと言っているの。カーリアンのような制御の甘い能力も、碧兵の雷ですらも彼の壁は越えられないわ」

――もちろん私の力も瞳を閉じたままのヨツバには、対して効果はないわね。

そう続けながらも、スイレンは思考を巡らせていく。

不貫のヨツバは、間違いなく今の黒鉄という組織では最高位の戦士だ。過去にも彼と並ぶほどの黒鉄はほとんどいない。

いや、恐らくは誰もいないのではないかとすらスイレンには思える。

今は亡き黒鉄にも、『深緑』や『双刃』、『飛炎』や『初代・不貫』など強い力を持つ者はたくさんいた。

その中でも『錬血』と呼ばれた女性は、その能力の強力さと身体能力の高さ、頭の回転や精神の強さといった全ての面に置いて、スイレンを凌駕しうる能力を持っていた。

特に『剣匠』、あるいは『ソードライダー』とも称される理由となった彼女の能力は、戦闘に特化した錬血固有の力だ。似たような力を持つ者は他におらず、『物質の精製』と『使役』という二つを合わせ持った能力は、それぞれの面に置いても最高水準の力を誇っていた。

自分はおろか、戦闘向きの力を持っている『七班のガード達』ですらも、彼女には勝てなかったのではないかとスイレンは考えている。

それでも、不貫の能力には及ばない。
不貫のヨツバの力は、物理的な力では絶対に傷が付かないのだから。
どれだけ強力な力を持っていても、どれほど策を巡らせても、物理的な攻撃では傷一つも付けられない……そういった類の能力なのだから。
『自らの感情を燃やし、対象に問答無用で炎を発露させる』といった特殊かつ固有の概念がある能力か、もしくは『あらゆる力を具現化する』、『力も理も拒絶する』といった、『現実とは違った内から現れる世界の理』に依る能力でなければ、ヨツバの『精製防壁』は越えられないのだ。

「……仕方ないわね」

そこまで考えを巡らせると、本当に仕方なさそうに、どこか諦めが入ったような口調で彼女はそう言い――より自らの鏡像を増やしていく。そしてヨツバに向かい合ったままで、ナナシに向かってその白い手のひらを振ってみせた。

「シャクナゲは裏口から入って、右手に真っ直ぐ行った突き当たりにある階段を降った先にいるわ。そうね、地下三階辺りで待っていなさい」

「あん？」

スイレンの言葉の意味が分からず、思わず呆けた口調で問いかけるナナシに、表情を隠すかのようにその口元を浴衣の裾で隠してみ

せながら彼女は続ける。

「ヨツバはね、地下に入っちゃいけないって決まっているの。彼はそうやって行動範囲を決めておかないと、気分次第でどこにでも行っちゃうから」

「何が言いてぇんだ？」

「……分からない人ね。仕方ないからあなたのやりたいようにさせてあげると言っているのよ」

霧に霞むように、水鏡に滲むようにその姿を増やしていきながら、スイレンはさっと掲げたその指に新たなメスを携える。

細く白い指の合間に挟みこんだメスは、ゆっくりとその姿を霞ませていき、すぐに見えなくなってしまうが、孕んだ緊張感は微塵も薄くなりはしない。

「……シャクナゲが出てくるまでそこで待っていなさい。三階から先には行っちゃダメよ。結果的にはあなたの望みを聞いてあげるのだから、それぐらいは約束してくれないかしら？」

「待てよっ！なんで行かせる気になった？テメェはあいつの味方だろうがっ」

「味方、ね」

ナナシの言葉に対するスイレンの呟きは、自嘲するかのような響きで。

それが彼にも感じられて、思わずナナシは口を噤んでしまう。

「味方でいたいわ。これからはずっと……二度と裏切らずに仕えていたいと思ってる。
二度とあの人に勝手な期待を押し付けずに、ありのままの彼を受け入れられる仲間に……私はなりたい」

悔恨というにはいまだに生々しい感情が含まれたその言葉に、一体どれほどの想いが込められていたのか、それはナナシには分からなかった。
分かったのは、その言葉から彼女が一度だけシャクナゲを裏切った事があるという事だけ。あるいは『裏切った』と彼女が思える過去があるという事だけだ。
そしてそれを今も深く後悔しているという事だけは、その声音から嫌でも分かってしまう。

「あなたを行かせてあげるのはね、あなたは今もまだ、彼にとっては味方だから。ヨツバに殺させるワケには絶対にいかないからよ」

「勝手な事、言ってんなよ」

「……私はね、例えどれだけ深い絆がある仲間であったとしても、絶対に分かたれる運命がある事を知っている。でもね、二人ともが生きてさえいれば、仲直りをする機会があると私は信じたい」

「……ちっ」

「行きなさい、ナナシ。会って八つ当たりでもなんでもしてくればいい。
頑固なヨツバは私がしばらく留めてあげる。地下に入ればあなたの勝ち。私が立てなくなるまでに地下に入れなければ、あなたと一班はここでゲームオーバー。分かりやすいルールでしょう？」

辺りに流れ出る霞は、ゆっくりとスイレンの気配を周辺へと広げていき、その姿を乱反射させたかのように無尽蔵に増やしていく。目が眩むような光を孕んだ力は、視覚に幻界を現界させ、今まであった光景を支配していく。

全てのスイレンの像は全く同じ動作をしていたが、歪んだ空間が鏡像の彼女をぶれさせ、霞ませて、まるで万華鏡の中に紛れ込んだかのような光景へと辺りを変えていた。

一種の異界じみた世界。

それは偽りの世界だと分かっていても、視覚にだけ頼ったのなら限りなく本物に近いものだ。

――水鏡のスイレン。

光を操り、視界を支配するとまで言われるその力は伊達ではない。その能力を知っていたナナシですらも、思わず息を呑むほどの『幻の世界』。それは幻想的というよりも、むしろどこか蠱惑的な印象を受けた。

「スイレン、あんたに俺の命令権はないように、俺にもあんたの行動を縛る権利なんかない。考え方の相違ってやつがあったんなら……我の通し方は一つやな」

それでもヨツバは気に留めた様子もなく、幻界の中へとあっさり一歩を踏み出した。瞳を閉じていても、辺りに拡散された気配や感覚に異常ぐらいは感じているはずなのに、その歩みには躊躇いといったものが一切感じられない。

「あなたの融通の効かなさは頼りにもなるのだけれど、何事にも限度というものがあるのよ。ここで一班を完全に敵対関係だと認識す

るのは、その限度を踏み越えているわ」

「……知らんわ。考えるんは俺とちゃう。俺は考えたりせぇへん。どの道その幻を引き裂いて、俺が不死身を殺せば元通りや」

「あら、あんまり幻を甘く見ちゃダメよ？人間は幻覚に狂って死ねる生き物なの。あまり力を過信してオイタが過ぎると……お仕置きじゃ済まなくなるわよ」

僅かな衣擦れの音もなくスイレンの鏡像達は刃を構える。その指先に煌めく刃の色は見えずとも、攻撃の意志が刃となって辺りに満ちる。

置いてきぼりになった事に憮然となっていたナナシは、その気配に軽く頭を振るって我に返ると、小さな舌打ち混じりにヨツバを迂回するような形で走り出した。

「……ここは借りといてやる。三階だな？」

今の自分がすべきなのは、ここでヨツバの相手をする事ではない、そうナナシは考えた。スイレンならばヨツバの仲間だ。殺される事もないだろう。

しかし、自分が戦って負けてしまえば、一班の仲間の命運も尽きてしまう。

仲間達は降伏する事も和睦の手段も誇りすらもなく、敵ではなく仲間である者達と戦い、黒鉄に大きな傷痕を残す。

それは自らを『親分』として慕う子分達の事を思えば許されない結末だ。

「ええ、あの人は絶対に戻ってくる。待っていなさい」

「ちっ、言っとくがな、シャクナゲにゃ手加減抜きで思いっきりいかせてもらうからなっ！？ボコボコにしても文句言うんじゃねぇぞっ」

「えぇ、精々思いっきりやってあげてちょうだい」

駆けていくナナシに――『八つ当たり』として、思いっきり『ボコボコにする』というだけの不死身の背に、スイレンは口元に笑みを刻みながら小さくそう呟いた。

「実は私もね、ちょっとだけ腹に据えかねていた事があるのを思い出したわ」

周辺を幻で包み込み、四方八方を動き回りながら刃を飛ばし、上空からも刃の雨を降らせつつ、構わずナナシを追おうとするヨツバを抑える。

刃の攻撃力を用いてではなく、その刃に載せた殺気じみたものと、拡散した自らの存在感でもって、ナナシへの道を塞ぎながらも彼女は笑っていたのだ。

「あの人ったらね、心配していた私に……ずっと側に仕えてきた私に『足手まとい』なんて言ったのよ？

自分ばっかり勝手に重荷を背負ってしまうところも、本当はずっと不満だった。

だからね、シャクナゲ。八つ当たりじみた意趣返しぐらいなら……私も構わないでしょう？」

『灰色の皇』に仕え続けてきた『眩惑光后』として。

『黒鉄』になる前からの最も古い友人として。

そして今は容赦を知らない同僚の唯一の抑え役として、戦闘の為としては久々に全力で力を解放しながらも、彼女はそんな事を口にして笑っていたのだ。

2―21・幻界の刃と歪の楯（後書き）

人物紹介・ヨツバ１

不貫のコードを持つ三班のコードフェンサーで、二つ名よりも悪名の方が多い問題児。
彼の前にも不貫と称されたコード持ちはいた為、二代目・不貫と呼ばれる事もある（ちなみに初代・不貫に関しては、第一部のラスト……将軍との戦いの最中にシャクナゲが使った能力として少しだけ記述がある）。
その悪名で一番有名なものが『盗賊殺し（ロバーズキラー）』というもので、その名前からも黒鉄随一の武装盗賊殺しとして知られている存在。

首筋までかかるライトブラウンの髪と、細面に白い肌を持ち、細身で整った顔から女性とも紛う整った容貌の持ち主だが、その異質な存在感からか黒鉄の仲間達からは距離を置かれている。
それは血塗れで帰還してもケロッとしている辺りや、敵に対しては全く容赦しない様だけではなく、彼が発する空気に人間らしい感情が見て取れない為。
口笛が非常に得意で、高価な楽器を使っているかのような流麗な音色を奏でる。
シャクナゲの言葉にしか従わず、彼に考えを依存している様子は見て取れるが、完全に従いきっているワケではないのか、はたまた単に力加減が適当なのか、何事にもやり過ぎる場合が多く、シャクナゲやスイレンに頭を抱えさせている。

その能力についての詳しい詳細は、いずれ書く『人物紹介・ヨツバ2』に譲る。

スキル

能力・A＋（珍しさや異常さだけで言えば純正型にもひけを取らない。思考、あるいは精神を半ば物質として顕現させる能力。『半ば』であるだけに、その顕現した精神の力は物質による作用は受けない……つまり物質からの影響を隔絶するという反則じみた附加効果まで持つ。精神の力を防壁として使い、現実の力を受け付けない領域を作るという点を見れば、『半純正型』ともいえる。ただし、彼の性格上か、はたまた能力の仕様なのか戦闘にのみ特化している為利便性は低い。それゆえにランクはマイナス補正）

身体能力・B－（能力の仕様上、身体能力はあまり戦闘に関係ない）

直感・C＋（本能的に敵対者を察知するすべに長ける。例えば今回のナナシみたいに、近くに敵と認識した存在がいる場合などにのみ発揮）

無関心・A（無感情でプラス補正）

無感情・S

容赦のなさ・S（とにかく徹底的。敵対者は完全滅殺、完全殲滅主義）

問題児・（容赦のなさでプラス補正）

口笛・S（楽器を使っていると錯覚するほど。たまにスズカも遠くから聞いていたりする）

2―22・ファム・ファタル

「さてさて、これはちょっとばかり困りましたね」

波に揺れる小舟の舳先に立ち、小さな苦笑混じりにそう言うと彼は軽く肩をすくめてみせた。

見渡すばかりに広がる海原のど真ん中で、言葉ほどには困った風もなく自らの細い顎に手を当てると、アオイは目の前を仰ぎ見た。

「どうしたものか、といっても方法なんて一つしかないんですけど。厄介ですねぇ」

目の前にある異形……不可思議な現象に軽く小首を傾げる様は、どこまでもいつも通りの飄々としたものであり、その言葉とは裏腹に困った様子は見受けられない。

「『提督』の力が、これほどまでに巨大なものだとは……少々彼女を見くびっていましたかね？いやいや、全く大したものです」

彼は小さな漁船に乗り込み、自ら舵を取って『瀬戸内水賊衆』の本拠地がある瀬戸内海の小島へと向かっていた。その島まですぐ近くの位置まで船を進めており、あと数十分もあれば到着する場所まで来ていたのだ。

そこで船を止めざるを得ない事態に直面し、僅かでも時間を取ら

れるという意味では、確かにアオイは困っていた。
正直な話、時間は何物にも代え難い。僅かであっても面倒事は避けたいというのが本音だ。

「やれやれ。せっかく私一人で来たというのに、まさか問答無用で警戒されるとはね」

戦力となる仲間は一人も連れてこなかったのは、下手に警戒される事を恐れての事だ。無駄な問答をしない為だ。
その為だけに船頭紛いの真似まで自分でこなして、アオイはここまで来たのである。
それなのにこうまであからさまに、そしてどこまでも問答無用で警戒されてしまっては、慣れない舵取りまでした甲斐がない。

「本当にやれやれです。まぁ、骨折り損のくたびれ儲けには、ここ数年で随分慣れさせて頂きましたけどね」

そう嘆息混じりに独白を漏らして。
目の前にそびえ立つ『海水で出来た巨人』に向けて、気安く肩をすくめてみせた。

瀬戸内水賊衆・頭目である提督を名乗る少女が、関西では珍しい純正型である事は知っていた。
その能力が『固定』の理によるもの……中でも彼女にとっては身近なものである『海水の固形化』だという情報も知っていた。
それでもいきなり目の前の水面が隆起すればさすがに面食らった。
その上、仰ぎ見なければならないレベルの『巨人』を作り上げる事が出来るほどだとは聞いていない。彼が目を通した情報や、聞いていた話とは違っていたのだ。

「さて、どうしましょうか？案内役として出てきて頂いたのなら嬉しいのですが……やはり違うんでしょうね」

派手に隆起し、大きく盛り上がったくせに、全く動きを見せない海水はどこまでも異常だった。

目の前で津波が固定されたかのような違和感。向こうが濁りながらも透けて見える辺りが現実感を綺麗に壊していた。

それらから、この巨人そのものが……巨人を形造っている空間そのものが、『提督の世界』なのだろうと推測する。

純正型としての世界。

海水の固定という理を持つ、提督の呼び名を持った少女だけの異界。

それに目を凝らしてみせてから、大仰な嘆息を漏らしてみせた。

「やっぱり『世界』は見えない、か。その理が及ぼした『結果』しか見てとれない。世界という異界には少し興味があったんですけどね。少々残念です」

どのような世界でもって、こんな不可思議な現象を起こしたのか。そして純正型が持つ世界とはどのようなものなのか。

興味が全くないと言えば嘘になる。

しかし、アオイの場合はカクリとは違い、好奇心などといったものはサラサラない。今の言葉も単なる今まで得た情報の確認の為に過ぎず、これまた言葉ほどには残念そうな響きも感じられない。

改めて確認を取れた事に小さく頷いて見せていたほどだ。

むしろ目前にいる異物を前にして、どこまでも平常通り過ぎるきらいすらあった。

「案内役でもない。かといって単なる示威武力でもなさそうだ。今

は何も動きはないにしても、この先へ進もうとしても大人しくしていてくれるかと言えば……期待はできないんでしょうね」

――むしろそんな安易で甘い期待は持つべきじゃない。

そう自らを戒めながらも、彼は船の向かう先を変換させない。

『変換』させる必要がない。

むしろ面倒そうに巨人を見やりながら、船室の入り口に掛けたままにしておいたナップサックから覗く鎖へと手を伸ばした。

「こういったやり口は好みじゃないんですが、時間が余りにもないものでしてね。

ここまで問答無用な対応をされると逆にありがたい。無駄な時間を全く取らなくて済みます」

そして鎖を象る輪の内の一つに指を射し入れると、それを軸に鎖とその先に付いた棒状のモノ……鞘に入ったままの小剣を鎖ごとクルクルと回してみせる。

そしていつも通りの穏やかな笑みを浮かべ、この場では明らかに場違いな柔らかい声音で宣告する。

「力ずくで押し通ります。

――久々に踊ろうか、私だけの『運命のひと（ファム・ファタル）』」

その宣告と共に。名前を呼ばわると同時に。アオイの意志が伝わった瞬間に。

クルクルと取り回されている鎖に結ばれた二対の小剣が……その身を覆っていた鞘が、まるで手に取って刃を抜いていくかのようにゆっくりと抜かれていく。

――『付与』の世界を持った純正型。
黒鉄の創始者にして、あり得ない物質を想像し、創造する異端のアイテムクリエイター。
『暁』のコードと同じ呼び名しか知られていない男が残した、四つ目の異物にして遺物。
ファム・ファタルの銘で呼ばれるそれは、まるで見せ付けるかのように、鎖に通されたアオイの指を支点にゆるやかな弧を描く。
光を飲み込むかのような鈍色の刃と黒い鎖は、どこか不気味な空気を放ち、今は不機嫌そうに小さく振動していた
刃が抜かれた鞘は羽毛のごとく柔らかく船の上に落ち――アオイは薄く笑みを浮かべる。

「やり過ぎないように……出来たらいいんですけど、『彼女』は寝起きに不躾な敵意を向けられて大層ご機嫌が悪いみたいです」

苦笑混じりにそう言ってから船縁に足をかけると、アオイは鎖から垂らした小剣の片方を海面へと向ける。もう一方は、アオイになだれかかるかのようにその鎖を腕に絡め、先端の小剣は二の腕にぶら下がった。
その様は小剣自身が意志を持ち、アオイに甘えているかのようにすら見えなくもない。

そしてアオイは無造作に海へと降り立ってみせる。まるでそこに堅い地面があるかのように、唸る波も沈むはずの海面も気にした素振りはない。
降り立った海面も、そんなアオイの考えに従ったかのようにしっかりと彼の足を受け止める。
先に海面に付いていた片方の小剣は沈む事なく突き刺さり――そこを中心に、周囲一帯の海水を『氷』へと変えていた。

真っ直ぐに海面に浮かび、立ちはだかる巨人を覆う氷原へと変換させていたのだ。

「望みのままに……『変換』せよ、私のファム・ファタル」

温暖な瀬戸内に浮かぶ異常な流氷は、やがて巨人を覆う表面にすら迫り、その動きをゆっくりと、しかし確実に縛っていく。

その表面が凍る事はない。同じ海水で出来ていながらも、その表面を境に提督が支配する領域内だ。

しかし、辺りを氷で閉ざされてしまっては動けなくなる事に変わりはない。いかに巨人がもがこうが、津波のごとき巨躯で力を振るおうが、それはアオイからすれば無駄な足掻きにも満たない。

「放っていっても構わないんだけど……そうだね、そうしようか」

それを巨人のリーチ外から見やりながら、アオイは腕に絡みついた方の小剣に語りかけ、にっこりと笑いながら頷いてみせる。

「やっぱり君は賢いよ。そして私の考え方をよく知ってくれている。障害はやっぱり綺麗に片付けてから先に行くべきだ。後顧に憂いを残すなんて私らしくない」

その言葉と共に、海面に突き刺さっていた小剣はスルリと抜けると、もがく巨人がいる方角の空間を鋭く薙ぎ払う。

その空間を切り裂くかのように鋭利な剣閃は、剣そのものが意志を持って動いたとしか思えない。

なにしろアオイは、先ほどから無造作に氷原に突っ立ったまま、指一本たりとも動かしてはいないのだから。

「――変換せよ、ファム・ファタル」

彼がした事はと言えば、薙ぎ払う動きに合わせて再度小さくそう呟いただけに過ぎない。そして相も変わらず穏やかな笑みを浮かべていただけだ。

それだけで、もがいていた巨人が小剣の剣閃に合わせて上下に両断される。

まるでその両断した空間を、巨大な無色の刃が通り過ぎたかのように。

『変換』された何かが通り過ぎた後には、ただ真っ二つに切り裂かれた異形の巨人の下半身だけが立つ。

「なるほど。この巨人は通常の攻撃で傷を付ける事も出来る、というワケですか。ヨツバさんのような……そして話に聞いていたシャクナゲのような、通常の攻撃が効かないタイプじゃなくて助かります」

それを確認して小さく頷いてみせると、今度は一度だけではなく、何度も何度も小剣は空間を切り裂いていく。

その度に、斬り飛ばされた海水が寄り合い、再び形を成そうとする巨人が千々に切り裂かれ、微小な水滴を辺りへと撒き散らした。

「まぁ、通常の攻撃が効かなくても、『君』なら壊す方法はあるんだけどね」

そう言って腕に絡みついている方の剣に小さく笑みを向け、少し思案するように空へと視線をやってから、そのまま凍りついた大地を歩いて先に見えている島へと向かっていく。そこまで乗ってきた小舟は、辺りを覆った氷に取り込まれたようになっているが、それを気にした素振りはない。

――水賊達と争う事になったのなら、船を一つだけ壊さずに取っておいてそれで帰ればいい。もし話し合いで済んだのなら、帰りの船は出して貰おう。

そう都合よく考えをまとめあげ、氷の海面に突き刺さったままの小剣をぶら下げるようにして引きずっていく。

微塵に切り裂かれた巨人も、幾分その体を縮ませながら、再度体を構成させてその巨大な拳を振るうも、今度はアオイも目を向けはしない。

後顧の小さな災いよりも、今は時間だ。完全に巨人を沈黙させるには、代償となる時間が大き過ぎる。

そう思い直したのだ。

「お先に失礼」

ただ一言そう告げて、リーチの外をただ黙々と歩いていく。

歩みの向かう先にある海水を、次々と氷へと変換していきながら。

あくまでも穏やかな笑みを浮かべ、飄々とした態度を崩す事もない。

アカツキが最初に作り上げたグループ、今は無き『無銘』の名前を継ぐ一番目としてあっても彼は変わらない。

――ネームレスの一が果たして純正型に勝てるか。

――アカツキがシャクナゲの為に残した『遺産』として、力を持ってあの人の『わがまま』を……『全てを守りたい』という今の時代にあっては非常に難しいわがままを通せるか。

『物質の在り方の変換』という、強力な理を宿された小剣を携えた青年は、その為にだけ存在しているのだから。

変換の代償として、人間に取って最も大事なものを……人間にと

っては当たり前なものを失った彼には、もうそれしか存在理由が残されていないのだから。

だからこそ彼は飄々とした態度をいつであれ崩さない。
彼はどんな時であれ変換しない。
彼は本来刻々と変換すべき感情を、今は一切持ち合わせてはいないのだから。

だからこそネームレス・ワンたる彼は……ファム・ファタルに感情の全てを捧げた男は、いつであれ無難な笑顔を浮かべ続けているのだ。

2―22・ファム・ファタル（後書き）

ファム・ファタルとネームレス・ワンの紹介は次話です。
すごく短くて申し訳ない。
なにしろ長くなり過ぎて分けた次第でして。
今から次話も編集します。

2―23・提督少女

「お久しぶりです、提督。覚えておいででしょうか？シャクナゲの副官を務めておりますアオイと申します」

ゆっくりと腰を折り曲げ、慇懃に挨拶をしてくる男に、いかな荒くれ者揃いの水賊達とて呑まれずにはいられなかった。

島の守護者である『海の巨人』の警戒を抜けて本拠地にやってきたという事実もあったが、何よりその男が立っていた場所こそがあまりにも異常で、その異常を全く意に介していない丁寧さは不気味ですらあった。

そう、辺り一面の海水を凍りつかせ、その上を歩いてくる男がいたならば、いかに慇懃な仕草で挨拶をされようとも違和感を感じざるを得ない。

この辺りの海を良く知っていればいるほど、氷原と化した温暖な海は異常に見えた事だろう。

「アオイ……あぁ、覚えてるよ。シャクナゲの腰巾着だった事務屋だろー？名前は忘れてたけど、あんたの顔は覚えてる」

その中で唯一恐れを見せていない少女……キャプテンハットを模したハット帽と、小柄な体にはサイズが合っていないらしい、あちこちに金環をぶら下げた外套を肩に引っ掛けた少女だけが、平然とその男と向かい合い、小さな舌打ち混じりに肩をすくめてみせる。

――提督。

瀬戸内水賊衆頭目たる提督を名乗る少女。

中国地方では二人しか確認されていない純正型の一人にして、これからどこかに襲撃をかけるべく準備をしていたらしい海の男達の長。

しかし、数十隻からなる船団を束ね、島の防衛をもその能力でもって請け負っている割には、その体はあまりにも小柄で線が細い。

その整った顔立ちの中にある意志の強そうな瞳がなければ……そしてその首筋に純正型の証たる鰓のような切れ込みがなければ、アオイであってもそんな風評は信じられなかっただろう。

それほどに『提督』は小柄で、見た目まだ十代になったばかりにしか見えない少女なのだ。

「お、お嬢、どうしやす？」

「俺達じゃ、あんな海を凍らせちまうような野郎にゃ勝てやせんぜ」

「お嬢っ！」

「お嬢っ！」

周りの男達がアオイの異常さに若干の恐慌を来していても、お嬢と呼ばれた提督少女は慌てる事なく……一喝する。

「海の男がこれぐらいで狼狽えるなっ！この馬鹿たれ共ーっ！」

荒くれ揃いの男達を張り上げた声で一喝する。視線をアオイから逸らす事もなく、狼狽える男達に発破をかける。

「海が凍る？はん、だからどうしたー？その上に立ってる野郎がいる？だからってどうなったってんだー？その程度でビビるぐらいなら、陸で嫁さん達と網でも縫ってろってんだ、この馬鹿たれ共ー！」

嘲笑じみたものを浮かべ、部下の男達を叱咤してみせる。
その尊大に胸を逸らしてみせる様は、人の上に立つ事に慣れている人間のものだ。

「なんなら嫁さん達と立場を変わるかー？男なんざ、いざとなりゃ役に立たねぇって笑われたいのかー？」

そしてあっさりと凍りついた海へと飛びおり、無造作にテクテクと歩を進めていく。
氷に覆われた海面を恐れる事なく。
その先で不気味なほどに穏やかな笑みを向ける男に向かって。

「それからあたしの事をお嬢って呼ぶな。提督と呼べー。
……あんたはその点は合格だな。礼儀ってもんを分かってるー」

「恐れいります。提督」

「で、その事務屋が何しにきやがった？ウチに因縁つけよーってんなら、頼りにならねぇ野郎共に代わって、あたしが相手をしてやるー」

そしてそのまま両手を地面に付ける。
凍りついた海原、冷気すら上げている海面に。
もう片方の手で、キャプテンハットがずれ落ちないように、海色の髪ごとしっかり頭を押さえながら。

「島を荒らす不届き者はー、この提督様が直々に成敗してくれるー。きやがれー『だいだらっ』！！」

ペキッ。乾いた音が響き渡ると同時だった。提督と名乗った少女が上げた可愛らしい雄叫びに従うかのように、ゆっくりと氷原が『持ち上がった』かのような感覚をアオイは覚えた。

氷の下……いまだ凍っていなかった海から、まるで何か巨大なモノに殴り付けられたかのような振動が辺りに響き渡る。

「だいだらをこんなちっぽけな氷で封じこめたなんて思うなー、このバカ者がー」

得意げな提督の言葉に従うかのようにその振動は増していく。

そしてついにその振動源の辺りの氷が叩き割られ……そこから巨大な拳がゆっくりとその姿を現した。

海水で構成された、透明な拳。

拳だけでも、アオイよりもずっと巨大な巨人の拳。

その拳が辺り一面の氷を叩き割ろうと遮二無二暴れまわり、ささくれ立ったかのような氷柱を、歪なオブジェのごとく林立させていく。

「あたしのだいだらを舐めるなー。あたしのだいだらは最強だー。坂上もこいつがいたからウチとの喧嘩は避けたんだからなー」

「いやはや、全くもってお見それいたしました。こちらに来るまで、提督のお力を見くびっていた事を深く謝罪いたします」

それでもアオイはにこやかに笑い、慇懃な所作で一礼する。ついに分厚い氷の膜を破り、縛から逃れた巨人の労を労うかのような、どこかからかいが混じった仕草で。

「提督、あなたは生まれながらに『持つ側』に立つ人間だ。力を、人望を、チャンスを。そしてそれらに付随する銀色の未来を手に出来る側の人間だ」

そして手にした『運命のひと』をクルクルと回し始める。

空を切るかのように舞わし始める。

「ゴチャゴチャ言ってんなー。ぶっ潰せー、だいだらーっ！」

そんなアオイに、海の巨人を支配する少女は躊躇いなく攻撃命令を出す。

自分が生み出した巨人の強さに対して、絶対の信頼と自信を覗かせて。

「ですがね、生まれながらに『持つ側の人間』だからこそ、恐れるべき存在がこの世界にはいるんですよ。

――あなたはそれを知るべきだ。『何も持たない人間』の怖さをね」

そんな少女と、迫りくる巨人の拳に対して薄く嗤い……自らの恋人を踊りに誘う。

あらゆる物質を別の形に変換させる力を持つ、第四の遺物にして異物であるファム・ファタルの踊りを。

「……変換せよ、私のファム・ファタル」

アオイ自身よりも巨大な拳に向かって振るわれた剣閃は、大きさの比率からすれば、カッターナイフで薄く切ったかすり傷にも満たない大きさのものだった。

巨人からやや離れたところで見ていた提督が、せせら笑うような笑みを浮かべるほどに、薄く細い剣閃だった。

そう、余りにも薄過ぎて、その剣閃が刻んだ傷の深さが分からないほどに。

「……変換せよ」

その傷が拳を縦に切り裂き、続いて振るわれた剣閃が交差するように横に切り裂き、さらに次々と振るわれる深い剣閃が、巨人の拳を微細な水滴へと変えていき――呆然とその結末を見ていた提督へと、再度にっこりと笑って一礼をしてみせる。

「素晴らしい力です。軍勢を薙ぎ払う力としては、私が知る限りでも最高位の力です。この巨人ならば、かつてあった海上自衛軍など歯牙にもかけないでしょう」

その巨人を、再生する暇も与えず切り裂いていきながら、穏やかな笑みで笑いかける。

二心など一切感じさせない、この場には相応しくない笑みで嗤う。

「ですが、私の与えられた力の方に分があるみたいですね。ただ物質を変換させるだけのちっぽけな力なのですが、力にも相性というものがありますから」

「ちっぽけ……だぁ？あたしのだいだらを切り裂いておきながら、ちっぽけたぁふざけんのも大概にしとけよー？」

嗤うアオイにも呑まれず、悪態混じりに提督は舌打ちを漏らし、そっとその手を自らが立っている歪な流氷へと付ける。

そして切り裂かれながらも、自身を庇うように在り続ける巨人を見やった。

「てめぇごときには勿体ないがー、見せてやるー！瀬戸内水賊が提督、漣海月（ささなみ・みつき）の本気をー！」

そして、最後にアオイを睨み据えてから、集中するかのように瞳を閉じた。

いや、閉じようとした。

「本気も結構ですが、これ以上やるのなら、私も本気でいかせて頂きますよ？後ろのお仲間さんや、あなたの本拠地が巻き添えになっても許して下さいね？

まぁ話を聞こうともせずに、いきなり攻撃してきたのはそちらなんですから、恨むなんてお門違いってものですけど」

どこか憂慮を含んだ、どこまでも聞こえよがしなそんな言葉が聞こえてこなければ。

「最初に言っておきますが、私はあなたの『家』と『お仲間』から狙います。いやはや、非才なこの身でお強い提督を相手にするのですから、目の前にある『足枷』を上手く使わない手はありません。

大変心は痛みますが……仕方ないですよね？」

「……ちっ」

今も巨人を無力化すべく切り刻んでいる剣のもう一対、男の腕に絡まっていた方の刃が、ゆっくりと頭をもたげてみせるのを見て、提督は小さく舌打ちを漏らした。

目の前の男が何を言いたいかは明らかだ。

そして巨人の攻撃をかいくぐり、本気の自分とやり合いながらそれが実践出来るかと言うと、恐らく出来なくはないのだろう。
なにしろ目の前の男は、底を見せていない。『変換するだけの能力』とうそぶいてはいたが、『何をどこまで変換出来る』のかは全く言及していないのだ。
海水を氷へと変えられる。潮風を鎌鼬へと変えられる。それを実践してみせた上で、『変換しか出来ない』と自称してみせただけに過ぎない。

「……話がどうとか言ってたなー？」

それが分かった以上、そして自らの後ろに守るべき存在がある以上、男の手のひらの上と分かっていても、提督には乗ってみせるしかない。

「えぇ。まずは話し合い。そこで平和的解決を望みたいところですね」

「それが決裂したら？」

「その時は殺し合いも致し方ないでしょう」

腹立ち紛れに即座に切り返した言葉にも、目の前の男は躊躇なくそう返し

「でも私と提督が話し合いをしている内に、女性や子供達を別の島に逃す事は出来ますよ」

にこやかにそう切り込んでくる。
話し合いに応じなければ、まずは一番無力な者達から狙う……そ

う言っているように聞こえてしまうのは、提督少女の気のせいではないだろう。

「……つまんねー話だったら、楽に死ねるとは思うなよ、事務屋ー！」

「残念ながら私は楽に死ねない事を約束されたクチでね、そんな事はもう何年も前に覚悟しています。もっとも、ここで死ぬつもりは毛頭ありませんけど」

辺りは再度氷で覆われ、遮二無二攻撃を繰り返していた巨人は、三度体を海水で再構成させ、唯一氷に覆われていない地点にぼーっと立つ。

提督を名乗る漣海月という少女は、内心で自らの誤算に軽く顔をしかめながら、目の前の男を見やった。

今の関西以西の地域には、自分に匹敵する能力者など、学園の『委員』を束ねる存在と銀鈴を名乗る女しかいないと思っていた。

自分達を抑えつけていた関西の将軍はすでに亡く、その将軍を殺した男は、部隊指揮に優れただけの単なる暗殺者だ。

今まで何度となく関西軍の高官を暗殺してきたように、今度は上手く将軍を暗殺し得たのだろう……そう考えていたのである。

その男とは、実際に向き合った事も、闘り合った事もあったが、その男などよりも周りの人間の方が厄介だったぐらいだ。

特にあの銀髪の女――銀鈴を名乗る女は、間違いなく強大な理を持った純正型で、一度廃都に海賊行為を行った際に力を見た時には、何故レジスタンスなどに参加しているのか首を傾げたものだ。

あの女一人に、自身のだいだらを抑え込まれ、百に迫る剣を飛ばす女に何隻もの船を沈められて撃退された事は、彼女にとって苦い思い出となって脳裏に刻まれている。

しかし、その剣を飛ばす女はすでに関西軍との争いで散り、銀鈴を名乗る女が廃都を出て行った事は配下の密偵が確認していた。どこに向かったのかは聞いていなくとも、今いない事は間違いない。

つまり、食糧自給率の高い廃都を攻め落とすには、今が絶好の機会だったのだ。

懸念があるとすれば、将軍を殺したとされる男。将軍には勝てるハズがないと思えたのに、勝ってしまった男ぐらいなものだ。

上手くやっただけなら……将軍が油断しただけならば問題ない。かつて近衛総長だった『旭』を奇襲し、瀕死の重傷を負わせたほどの暗殺技能者なのだから、その可能性は高いだろうと思えた。

しかし、彼が予想外の能力を隠し持っていたのなら――『もしも真っ向から坂上と向かい合って勝ちを拾ったのなら』、事態は一気に悪くなる。

自分じゃ勝てないかもしれない。

そんな可能性も出てくる。

それでも、食糧を心配しなくても済む土地が目の前にあるのに……瀬戸内の小さな島々ではまかないきれない食糧を、補えるだけの都市が目の前に転がっているのに、『今は様子を見よう』などと酷な事を仲間達には言えなかった。

彼女は頭領として、島民達を満足に食わせていく義務があり、将来に不安なく生活させてやる義務がある。

まだ若くとも……いっそ幼いと言ってもいいほどに若くとも、代々島の網元（あみもと）家系で、付近の漁師達の頭格であった『漣家』に生まれたという誇りがある。

何より、不当に変種を差別した国の政策をはねのけ、関西軍の侵攻からも島々を守る為に戦った、誇り高い父や兄達と同じ血を引いているのだという自負がある。

だからこそ廃都と水都への侵攻を決意したというのに。
自ら先頭に立ち、廃都の勢力や水都の関西軍残党と戦う覚悟をしたというのに。
こんなダークホースが単なる事務屋として廃都の勢力に隠れていたとなれば、その侵攻計画自体が危ういものとなる。
水都は落とせても、目的の廃都は落とせないかもしれない。それどころか逆襲を受け、取り返しの付かないダメージを受けてしまうかもしれない。

提督を自称し、水賊衆をまとめ上げてきただけあり、彼女は年相応以上に聡かった。また聡くあるべく努力をしてきた。
関西軍と渡りを付け、その配下に加わる代わりに、瀬戸内での自治権をもぎ取れるほどに。
父や兄が争ってきた関西軍に対して、苦汁を飲みながらも膝を折ってしまえるほどに。

だからこそ、内心では『話し合い』で済むのなら――これ以上力を示さず、自らの本気を見せずとも、こちらの意を汲んでもらえるのならば、それはそれで悪くはない……そんな事を考えていたのだ。
舌打ちを漏らし、盛大に悪態を付いてみせながらも、実は内ではしっかり打算が働いていたのである。

海の男達を率いる為には、豪放に振る舞ってみせる必要があるからこそ、そのような言動を心掛けてはいたが……年相応な言動に交えて、豪快に振る舞ってみせていたが、実際の彼女は危険を犯す事を好まない。

提督少女、水賊頭と称された漣海月とは、そんな少女なのである。

2―23・提督少女（後書き）

まだ提督場面（？）は続きます。
提督、漣海月という名前と共に、非常に気に入ってしまってたりして。
なんか新キャラクターを文に起こす度に言ってそうですが。
実はナナシも結構好きですしね（汗
お気に入りキャラクターが多すぎて困ってます。

人物紹介・ネームレス・ワン
名無しの壱、黒鉄の裏の一人、コードを持たないコードフェンサーの一番。
遺物にして異物たるアカツキの遺産の四番目を持つ男。
その遺物とは二本の小剣（片刃の脇差し）の柄を、鈍色の鎖で繋いだモノで、『恭順』の銘と共にファム・ファタルの名前が与えられたモノ。
普段は飾り気のない鞘にその刃を収めているが、一度抜けば刃に触れ合ったものに『変換』の理を刻む。
水を凍てつく氷に、潮風を切り裂く烈風に、兵器を形造る鉄材を酸化させ、炎を起こす燃料を還元して散らす。
物質が持ちうる形へと瞬時に変換する能力がファム・ファタルの能力である。
『変換せよ』という言葉は文字通りの力を促すモノであるが、『踊れ』などの言葉はファム・ファタルを戦場に誘うモノとして使っている。
この事や文中で語りかけるシーンからもわかるように、彼はファム・

ファタルを一人の人間として扱っている。またファム・ファタルの考えすらも分かっているような表記があるが、それが実際のモノなのか、はたまた単に彼の中だけの事実なのかは分かっていない。彼が遺物であるファム・ファタルへの繋がり（代償）として捧げたモノがモノだけに、『感情』を持っていると考えている可能性もある。

ただ、オートで動いてみせる辺りからして、他の遺物達とは一線を画している事も間違いない。

ファム・ファタルの事を女性のごとく扱う割に、刀身が鞘に入っている時の扱いがぞんざいなのは、なんらかのこだわりがあるらしい。

ファム・ファタルに彼が代償として捧げたものは、自らの感情。最も多彩に変化し、刻々と変わり続けるものを『変換』の理の代償として捧げた。

今までに『遺物に全てを捧げた』という表記があったのは、人が生まれつき持つモノの中で、普通は失わないあるべきモノを失ったからだろうか？

なお、今まで感情があるように見せていたのは、あらゆる場面でどのように行動すべきか、付随する表情はどうすべきかを、パターンとして覚えこんできたから。

笑みを絶やさないのは、それがほとんどの場合一番無難な表情であるから、作り慣れている為。

2―24・歌姫と運命

「結構なお点前で」

「単なる安物の煎茶だ。気取った作法で抹茶でも飲みてぇーなら古都にでも行きなー」

出されたお茶を迷いなく手を付けてみせながらにっこりと笑うアオイに、提督少女たる海月はつまらなさそうに鼻を鳴らしてみせてから、ことさら乱暴な仕草で湯呑みをあおってみせた。

毒など入れるつもりも、入れる必要も彼女にはなかった。そんな事をしなくとも、この島内では負けない自信が彼女にはあったし、何より危険の多い戦をしなければならないところを、話し合いで済ませられる可能性を持ってきてくれたのだ。交渉を有利に進められる地場も得ているのに、話も聞かずに始末するのは得策だとは言えない。

だが、そこまであっさりとなんの疑いもなく飲み物に手を付けられては少しばかり興ざめしてしまう。

様子を見るぐらいすれば可愛げがあるのに……そんな事を考えてしまうのだ。

「いえ、喉が乾いていましてね。やはり水賊衆の本拠地ですから、緊張しているみたいです」

「よく言うー。てめぇは汗一つかいてねーじゃねぇーか。ダメダメだー、てめぇには致命的に演技の才能がねーな」

和風の居間……漣家の一室たる和室で、黒鉄最精鋭たる第三班の副官と、関西でも瀬戸内沿岸の大勢力たる瀬戸内水賊衆の提督が向かい合い、ズズーッと煎茶を啜っていた。

その間の空気は決して穏やかとは言い難いが、一触即発といった風でもない。

どっかりと胡座をかいた少女と、折り目正しく正座をしている青年は、あくまでも何でもない風を装って会話を交わしながら、時折お互いを牽制するように見やるだけだ。

「まっ、その能面じみた顔に上手く表情を載せてるけどなー？」

提督を名乗る少女はどこか探るように。

「……手厳しいですね。それになかなか人を見る目もおありのようだ」

アオイは必要以上の干渉を避けるように。

お互い間を測るかのように言葉を交わし、本題にはなかなか入らない。

見た目からすると十は年が離れていそうな二人だが、アオイは相手を侮るような色は一切見せていない。

「ふん、これでも人並み以上に苦労してるだけさー。で……話ってのはいつ始めてくれるんだい？」

それでも最初に痺れを切らしたかのように本題を促したのは、年若の少女の方だった。

正直な話、アオイの方にも時間があったワケではなかった。しかし、思ったよりも上手く話し合いの席に付けた事により、予定していた時間よりもかなりの前倒しが出来ていた。

アオイが組み立てていた最悪の予想からすれば、二時間は短縮出来たのだ。

そう、提督と派手にやり合い、最悪殺し合って甚大な被害を『水賊衆』に被らせてから、休戦に持っていく事を思えば、状況もかかった時間も理想的な展開だと言えた。

何より、水賊衆に被害を出さずに済んだ事により、話し合いに対する姿勢も前向きなモノを期待できる。

ならば、『この提督と呼ばれる少女を測っておくのも悪くない』、そう考えたのである。

そして、ここまで彼が見てきたところに寄れば、この少女はかなりの傑物だといえた。

この年頃の少女は総じて我慢が効かないものだ。それなのにこの提督は、即座に本題を切り出す真似はせず、話の主導権を渡さないようにしていた。あくまでもこちらから本題を切り出させ、こちらからの話し合いに『彼女が応じる』という形を取ろうとしたのだ。

最後に話を切り出したのも、『ここまで話を引っ張ったのなら、舐められる事もないだろう』と見切りを付けたのだとしたら、アオイをして見事という他ない。

時折交えた会話に上手く探りを入れているところと言い、年相応以上に知恵も回るようだ。

――これはいずれ手強い相手になりそうだ。カクリさんぐらいでもなければ、真っ向からやり合うのは厳しいかな。

そんな判断を下し、そんな内面を見せないままでアオイは話を切り出した。

「私が今日訪れたのはですね、今まで黒鉄と水賊衆の間には交流がなかったでしょう？お互いの交流の正常化ではありませんが、今の機会に友好な関係を築きたいと――」

「それが建て前だろー？本音が欲しいんだけどなー、あたしは」

ズズーッと茶を啜り、茶菓子代わりの干し柿をパクつきながら、提督はチロッとアオイへと視線を向ける。

「これは手厳しい。でもこれが本音なんですがね」

本当に聡い少女だという印象を深めながら、アオイは表情に苦笑を載せる。

――ちょっと厄介かと思えるほどに聡い。でもその才能を隠す事を知らない辺りは、まだ年相応といったところかな。

その辺りが、アオイのよく見知っている誰かと被って見えた。

「それに伴って、不可侵の条約を結びたい……こう言えば納得頂けるでしょうか？」

「……ふん」

――さて、ここまで言えば、この『提督』はどこまで深く考えるだろうか。

そう考えれば少しばかり興味にも似たモノがアオイの中に浮かぶ。

感情を遺物に捧げた欠陥品が、唯一残した感情。それは執着心という衝動だ。

仲間を大事に思う為に、そして使命を忘れない為だけに残されたそれが、この年には似合わないやり手に興味を向けてしまう。

提督だけではなく、カクリやヒナギクなどといった、未完の大器とも言える人物ほどアオイの琴線に触れるのは、その唯一残された『執着心』の産物である事はもちろん自覚していた。

仲間と黒鉄に対する執着が残されているばかりに、それの未来に関係するであろう才能ある人物に目がいってしまうのだ。

今のアオイにとって、そういった人物とのやり取りは、唯一の娯楽と言ってもいい。

惜しむらくは今回の場合、最後には敵になる相手かもしれないといった点だ。最後にはこの未来に残すべき光を……能力などを全て込みで考慮すれば、カクリやヒナギクなどよりもずっと大きな光を、自らの手で狩り取らなければならないかもしれないという点だ。

この少女が順調に成長し、自らの主を支えてくれたら――そう考えてしまう以上に、警戒に値する人物だという事はしっかりと脳裏に刻みつける。

「はん、そっちはそっちで色々厄介な事が起こってるみたいだなー。ま、当然、こんな話を持ってくるからにゃー手土産ぐらいは持ってきたんだろーなー？」

しばらく黙考するかのように視線をさまよわせていた提督が、やがて考えを纏めたかのように視線を合わせた。

もちろん露骨に悩むような仕草は見せていない。時折思い出したかのように茶を啜り、軽口を挟み、それでも本題には触れないままで思考を纏めていたのだろう。

その辺りもアオイからすれば、満足のいく……そして警戒に値する相手だと思えた。

「手土産、というワケではありませんが、ウチと争うデメリットを

分かって頂けるだけの情報は提供させて頂きますよ」

「はん、それは必要ないなー。あたしが欲しいのは――」

「そう……例えば、将軍を討ち取った彼が何者なのか、という話には興味ありませんか？」

ピクリと肩が跳ねるのを見やり、アオイは自らの話が提督の興味に触れた確信を得た。

「何人もの強い力を持つ変種……ネオと自称する彼らを、その身体能力と技能でもって打ち破ってきた、我ら黒鉄でも最高の戦士。そして敵にとっては最悪の暗殺者。

さて、今回彼は『どのようにしてあの将軍を打倒し得たのか』。それを知りたいとは思いませんか？

その情報は、あなた方瀬戸内水賊衆にとっても高い関心を持つ事柄かと思いますが？」

それと同時に、彼女がやはり優秀だという確認を得た。

浅はかな者ならば、将軍を討ち取った顛末にまでは興味が惹かれても、討ち取った男が『何者』なのかといった話には首を傾げるだけだろう。

黒鉄のシャクナゲ、生粋の戦闘技能者にして暗殺者たる彼が、上手く暗殺し得たという辺りで納得してしまうに違いない。

今のアオイの物言いで興味を惹けたという事は、彼女はその結末に納得しないだけの用心深さがあるという事に他ならない。

「どうやらお話は聞いて頂けるようですね？」

僅かに逡巡の色を見せる少女に、確認を取るようにそう言って、

アオイは居住まいを正した。
それに少女は軽く肩をすくめながら、小さく鼻をならしてみせ、仕方なさそうな仕草でもって頷いてみせた。

「……茶飲み話として聞いてやるー。それで万が一にもあたしの琴線に触れる話が出来たなら――そうだなー、条件次第では手ぇ結んでやってもいい」

「条件、ですか。例えば……私共にとっても西の敵性都市、はっきり言えば水都は邪魔でしてね。その辺りでは協力出来るかと思いますが？」

「条件は後だ。まずは話から聞こうかー？せっかちなヤツは嫌いなんでなー」

今度も話の主導権はくれないか。
そう内心で舌を巻きながらも頷いてみせ――アオイは話を始めた。
とっておきの秘密にして、どこの勢力にとっても一大事となり得るだろう情報を。
つい先日将軍を打ち破った、今では最初の黒鉄となった青年の話を。

「……はん。そりゃ大それたホラ話、ってワケでもないみたいだなー」

話を聞き終えた提督は、さすがに驚いた表情を見せてはいたが、取り乱す事はなかった。
内心の想いはどうあれ、一団の長としてそれに引きずられた様子は見られない。
僅かに探るような表情を見せてはいたが、それもすぐになりを潜め、今では今後の指針について検討を進めているのだろう。
先ほども見せた、あちこちへと視線をやる仕草を見せている。人差し指がトントンと軽快なリズムで机を叩いている。

「今話した話に嘘は一切ありませんよ。全てが真実です」

「それは、嘘は一切言っていないけど、真実を全部語ったワケじゃないって事だろ？」

「その辺りの判断はお任せします」

さて、これで本格的に敵に回るようなら、アオイが取れる選択肢は殺し合いしか残らない。
今の黒鉄でも半数が取ったように、『新皇』の名前に敵意を剥き出すのならば……気は進まなくとも悪い芽は今の内に摘み取っておくべきだろう。
それが、『ネームレス』という黒鉄の暗部の一員としての役割だ。後顧の憂いを断つ意味でも、瀬戸内水賊衆には消えてもらうしかない。
でも、『新皇を抜けた新皇』の力とその価値に気付けるのなら――いまだ健在の『他の三人』や、他地方の皇達に対する『壁』として黒鉄の価値を見出したのなら、彼女はアオイの提案を断らないハズだと思っていた。
少なくとも、今のアオイにとっては理解が及ばない、『感情』の問題さえなければ。

「いくつか聞きたい。それからあんたの話に乗るか、それともあんたを殺して、シャクナゲも殺すかを決める。いい？」

口調が変わった。そしてその小さな体に纏う空気も変わった事を、アオイは感じとっていた。

今の口調こそが、『本来の提督』のものなのだろう。『提督になりきった少女』ではなく、彼女個人のものなのだとなんとなく悟って――アオイは表情を消した。

――やはり感情の問題はあり、か。

それをつまらないこだわりだとは言わない。アオイを持ってしても言えない。

新皇に対する遺恨が全くない存在など、この国にはまずいないだろう。

三班のメンバーだとて恨みの一つや二つはあると思うし、新皇ではなくシャクナゲとしての彼を知らなければ、敵対していた可能性の方が高い。

それが逆恨みに過ぎないとしても……彼個人に対する恨みではないとしても、そう簡単には納得出来ないだろう。

それが分かるからこそ下手に言葉を連ねず、少女の言葉を静かに待った。

「もし、シャクナゲが他の連中みたいに狂ったら……坂上に成り代わって関西の皇になる道を選んだら、あんたはどうするつもりだ？」

当然、その疑問は出てくるだろう。それは彼の予想の範囲内だ。

むしろその辺りの懸念すら浮かばないのなら、アオイにしても彼女に失望していたかもしれない。

だからこそ彼は、予定調和としてあるべき答えを返す。おそらく

黒鉄中を見渡しても、『彼』と『彼女』にしかこなせないであろう……最後の役割について語る。

「そんな事はまずあり得ませんが、何事にも絶対というものはありませんからね。その辺りについて議論するつもりはありません。ですから結論だけを言わせて頂くなら……その時は私が彼を殺します」

笑みを消し、抑揚のない言葉で返す。

そう、つまり今の『虚ろなアオイ本来の声音』で答えを返す。

「……あんたが？正直な話、出来るとはとても思えない。もし『新皇』が噂に聞くほどの力を持つのなら、ヤツらは国軍の一師団をその世界で飲み込んで殲滅し、都市一つをその理で喰らい尽くした――文字通りの怪物だ」

「そうですね。『無色の皇』と呼ばれた新皇は、国軍との総力戦だった議事堂前の決戦で、一人で国軍数千を殺し尽くしたと聞いています。シャクナゲ……『灰色の皇』と呼ばれた彼も、北陸から送られた援軍に壊滅的なダメージを与えた過去があります」

「それでも――」

「ええ、それでも彼を殺せます。私ならば……そうですね、八割八分ほどの確率で。たった一人でね」

正確に言えば『彼』と『彼女』ならば、だ。

さらに言うならば、もう一人の新皇たる『白銀』が前を遮らなければ、という条件もつく。

しかし、そこまで彼女に語る必要はない。アオイが彼女に語る必要があるのは、何故自分ならば彼に勝てるのかについてだけで構わない。

「私が持つ力は『変換』です。物質が持ち得るあらゆる形状に、一瞬で変化を促す力です」

「さっきの流氷もそれか」

「あの程度なら一瞬ですよ。ただし、この力は純正型の領域に干渉された物質、そして力には影響を及ぼす事が出来ません」

海面に突き刺して、彼が彼女に願うだけでいい。

向こうに歩いていきたいけれど、この海水が邪魔だと訴えればいい。

それだけで、本来は体を飲み込んでいくはずの海水が、歩く事の出来る氷原に変換する。

「なら――」

「えぇ、変換は彼の理にはなんの影響も及ぼせないでしょう。こっちの力は、あくまでも彼を守護する為に与えられた力ですから」

そう、彼がシャクナゲとしてある為にアオイに与えられた力。

それが変換の理を持つファム・ファタル。

「……こっちの力、ね。つまり、『もう一つ何か隠し玉がある』という事でいいのかな？」

「えぇ、私には八割八分彼を殺せる力――『停滞』の力があります」

そして、彼がシャクナゲでいられなくなった時に……時代に流され、周りに影響され、シャクナゲである彼を絶望が殺してしまった時に、止めてあげる為の力が『ディーヴァ』。

歌姫の銘を持つ、『鎖に繋がれたもう一対の彼女』。

「ただし、こちらの力は制約が多いんですよ。代償となるものが少々厄介でしてね」

「あんたが言ってたアカツキの『付与』の代償か」

付与。絶大にして矮小なるアカツキの理。

アオイとシャクナゲを、未来を夢見る代わりに『制約』で縛り付けている……異物。

それが最後の最後で、未来を刈り取るものとなる事に、アオイは何を思うべきなのか分からない。

アカツキに恨み言を述べるべきか、最後の最後、最低の最悪となる手前で止められるすべがある事に、感謝をするべきか。

それは分からない。

今のアオイには、いくら考えても分かり得ない。

その点はアオイにとっても少しだけ残念な気がする。

「ディーヴァ、つまり停滞の理を持つ力はね、あらゆる現象の停滞を約束する代わりに、私も停止させてしまうんです。

つまりね、一度っきりの使用で『命』を求めてくるんですよ」

――ディーヴァが私から代償を取り立てた後になれば、私はその事に対して何かを思う事が出来るのだろうか。

始めて唖然とした表情を見せる少女に、そんな事を考えながら、

アオイは小さく茶を啜ってみせたのだった。

中間番外編（前書き）

完璧な番外編です。設定公表等した事がないので、おかしな箇所もあるかもしれません。
お気付きの際はお知らせを。

中間番外編

第二部中盤の番外編兼解説編。

今回も一部の『カクリの考察』みたく、カクリに立ってもらおうかと思いましたが、ちょっと今の彼女は空気……というか出番がないのに番外編だけ語り部を張るっていうのもあれなので、今回は完璧に番外編。

外から見て『黒鉄色のノクターン』について解説します。

後、やたら長い人物紹介もあります。もう長くなるのは分かっているから、ここで書いてしまいます。雪代雅。

1・時系列。

黒鉄色のノクターンが本編ではありますが、時系列的には『マークオブブラックメタル』→『黒鉄色のシンフォニア』→『ノクターン』の順だったりします。

それを、伏線やらまだ出てきていない箇所やらをぼかして、時系列順に並べてみました。

なお、これらは初期に決めてあったプロットのままなので、ノクターンを書いている内に変わっちゃった部分もあるかもしれません。

気付いたら……流して下さい。

七年前……某国の軍高官にまで上りつめた人の変種・『リシャール・ベルナンド』が革命を起こし、優れた才覚を持つ変種を率いて、世界の中心的存在であった大国の政権を崩壊させ、実権を掌握。以後『総統』を自称し、大国であった自国を完全に掌握すべく、軍拡を進める。

『アカツキ』が無銘を結成。

六年前……リシャールの起こした革命により、世界経済の低迷、及び景気が低下。大国の目がなくなった事による紛争が勃発。日本でも景気の低下と世界情勢の不安から、人の変種に対する蔑視と差別が人の既存種の中で広がっていく。特に関東地方、東北地方ではその傾向が強く、二地方のあちこちで変種と既存種の小競り合いが日常化。既存種と変種それぞれに別れて、様々な勢力が産まれる。そんな中、関東地方では若い変種三人を中心とした『道』と呼ばれる変種のグループが台頭する。

道の中心の一人が港湾区の一帯を壊滅させる（灰色の道の目覚め）。その報告を受けて、国は変種……中でも純正種と呼ばれる変種に対する危機感により、国を守る為だけの専守防衛の軍隊から、積極的自衛の為の軍隊へと国の防衛部隊の在り方を変える法案が成立（国軍と呼ばれる）。

そして強力な純正種が何人も所属する『道』の壊滅作戦を決行（第

一次危険変種掃討作戦）。
しかし逆に国軍は壊滅的打撃を受け、首都圏の港湾部から撤退を余儀なくされる。

道に純正種である『言霊』が加入する。

道の中心人物となった灰色の道が新皇と呼ばれ始め、本格的な関東革命軍としての活動を開始。
港湾部から周辺地域へと行軍を開始。
港湾部奪回の為に出てきた国軍と激戦を繰り広げ、再度撃破する（第二次危険変種掃討作戦）。

国会議事堂前で、総力を結集した国軍と革命軍が首都の制圧を巡ってぶつかり合う（第三次危険変種掃討作戦）。
しかし、数師団もの勢力を投入した国軍は、道のメンバーの少女一人に七割方の勢力を削られ敗走する。

首都圏内の国軍は北陸、東北地方の基地へと援護を要請。その援軍は途中、灰色の皇と濃紺の皇に撃退され、首都圏内の国軍は完全に孤立。
革命軍との間に屈辱的な和睦を結んだ末に、首都圏内から要人や国軍を撤退させる。
この争いにより、首都圏は完全に革命軍の勢力圏内に収まる。

道の時代から革命軍に所属していた芝浦尋（マスターシヴァ）が関東から抜ける。

後の白銀の皇、東北の始祖となりえた少女、スズカが革命軍に合流。

灰色の皇の妹分たるスズカが、北陸からの偵察部隊である変種ばかりの実験部隊とぶつかり合い、これを撃退する（スズカと後の北陸の皇、長尾まりあの邂逅）。

この件によりスズカの実力は知られ、言霊の皇と毒の皇の推挙を得て、スズカは革命軍に加入。革命軍の第五部隊のトップに立つ。

＊構成は第一大隊、灰色の軍。第二大隊は無色の軍。第三大隊は濃紺の軍。第四大隊は山吹の軍。第五部隊は白銀の軍。

革命軍は東北地方南部に侵攻し即座に制圧。東北地方を掌握していた変種グループの連合を撃破。

この時の活躍により、革命軍の上層部ではスズカが本格的に新皇の一角と目されるようになる。

中部地方で国軍と争っていた『新羅』に、濃紺の軍が援護に向かい、侵攻してきた東北地方の部隊の迎撃に山吹色の軍が出向。

反革命軍的立場のまま北陸地方で勢力を確立すべく動いていた長尾まりあの撃破と、いまだ国軍が抗っている北陸地方の完全掌握の為に白銀の軍が向かう。

灰色の皇が関東地方を抜ける（灰色と無色の争い）。

この頃より、革命軍の動きは小さくなっていく。

約四年と少し前……アカツキとシャクナゲが出会う（『マークオブブラックメタル』）。

シャクナゲの無銘への加入。ミヤビと出会う。

スズカがシャクナゲを追って関東地方を抜け、無銘に加入。

ここからはネタバレ多数だから自粛。

この合間に関東からの圧力がなくなった長尾まりあが、北陸地方を制圧。
新羅が独力で中部を制圧。
坂上晴臣が軍を率いて、弱体化した国軍を撃破し関西を掌握。
マスターシヴァが東海を掌握。

水賊が廃都に襲撃してきたり、閃光を名乗るエリカが抜けたり、『リバティ』をシャクナゲが破壊したり、『ノーフェイト』にやられたり諸々があった。

約一年半前……
関西の第三勢力たるゼフィーロスが関西軍に敗れ、そのメンバーが黒鉄に加入。
ナナシの部隊が黒鉄に敗北、黒鉄に加入。
カーリアンとカクリがシャクナゲに拾われる。
オリヒメが拾われる。

廃都郊外で黒鉄、関西軍、各地の勢力がぶつかり合う大抗争が起こる。
ミヤビ、クロネコ他数名の黒鉄古参のメンバーが死亡。
この事件を裏から操って起こした関西軍・近衛総長・旭が、報復と

してシャクナゲの襲撃を受ける。
半死半生の重傷を負い、関西軍からアサヒが抜ける。

一年前……
アカツキが死亡（『黒鉄色のノクターン』）。
関西軍の将軍を暗殺すべく、シャクナゲが光都へと向かう。

めっちゃ端折り、飛ばしましたがこんな感じです。
どうでしょう、端折った部分の方が多い年表ですが。

次に、今まではあとがきに書いていた人物紹介の特別編として、『錬血』こと雪代雅の紹介をここに載せておきます。
マークで書こうかと思っていましたが、あっちに書くとこちらでのネタが書けないのでここに書いておきます。
長くなりますしね。

雪代雅

黒鉄最古参のメンバーであり、『錬血』と呼ばれる高位の能力を所持した変種。
その能力とは、『自分が意識を向けた一つの物質を任意の形に固める』、『その任意の形に精製した物質を、自らの意識下において完全に支配する』という能力で、独特の物質精製能力と高位の念動力

を併せたような能力。
その能力は非常に稀少かつ強力なもので、それを自在に操る彼女は、黒鉄でも随一の戦闘能力を持っていた（スイレン曰わく、『関東の仲間達の中にも、彼女ほどの戦闘技能を持つ者はほとんどいなかった』）。
黒鉄（当時の名前は『無銘』）に加入した当初は、戦闘に対して否定的なところがあり、未熟な面があったが、持ち前の才覚と努力でもってメキメキと戦闘能力を上げていく（スイレンでさえ、初めて出会った時はここまでの力を持っているとは思っていなかったほど）。
その能力で精製するモノが、ほとんど剣の形をしている事から『剣匠』と呼ばれる事もある（自らが精製した剣に乗り、宙を駆ける様から『ブレードライダー（剣の乗り手）』とも）。
アカツキには『剣の群れでテロを行う、リアルテロリズム女』『栗毛の戦闘向き小悪魔』などと呼ばれる。
シャクナゲには『機関銃を持ったアッパーシューター（乱射魔）より、怒り狂うミヤビの剣軍の方が何百倍も怖い』と言っていた。
その剣は、彼女の意志で固めたものであり、生半可な力では欠けもしない。特に『朱の刃張り』『朱袴の矛』と呼ばれる二振りは、戦車砲の徹甲弾とまともにぶつかり合っても、徹甲弾の方が砕けるとまで言われる。
その戦闘能力だけを見れば、普通なら他人に煙たがられるところであるが、彼女の場合はその明るい性格とさばさばしたところから、ムードメーカーとして周りには絶えず誰かがいた。
その性格は、心を閉ざしていたシャクナゲやカーリアンにも多大な影響を与え、人見知りなスズカですらも心を開いた人物。
面倒見のいい性格と、世話焼きなところ、身体能力の高さと抜群の

戦闘センスから、黒鉄に入ったばかりの新人をしごく役割を持ち、『恐怖の鬼教官』として新人達には恐れられていた。
ただし、黒鉄の上層部で新人達に一番懐かれていたのも彼女だったりする。
その教え子達は『雅組』と呼ばれ、当時は黒鉄の中でもかなり大きなグループだった。

現役のコードフェンサーの中では、カーリアン、サクヤ、ヒナギクが彼女の教え子である。
他にも何人もの教え子達が現役の黒鉄として戦っているが、その全てが黒鉄としては優秀だと評価を受けている（中にはカーリアンやヒナギクみたいに、黒鉄としては優秀でもそれ以外では問題ありとされているメンバーも多い）。

一年と少し前に起こった各勢力入り混じっての戦いで、未熟な教え子と仲間達の背後を守る為に一人戦い、当時の関西軍・近衛総長直轄部隊の多数を道連れに戦死している。

個人的なプロフィール。

享年１９歳（アカツキより下でシャクナゲと同じ学年。カーリアンとスズカの二つ上）。

１６３ｃｍ４８ｋｇ。

栗色の髪と夜空のような濃紺色の瞳。
血液型・検査した事がない。

好きな食べ物・ナポリタンスパゲティ。　バニラジェラート。

嫌いな食べ物・椎茸、バナナのようにヌルッとした感触がある食べ物がダメ。胡瓜はサンドイッチに入ったものがべちゃっとしている為、やはり苦手。

好きな言葉・ケ・セラ・セラ。なるようになる。ケ・セラ・セラという言葉はシャクナゲに指摘されるまで、ちゃんとしたスペイン語だとばかり思っていた過去があり。

顔立ちに置けるアクセント・左目の下に泣き黒子。髪型はしょっちゅう気分で変わるが、ツーサイドアップかサイドポニーテールがお気に入り。

趣味・コスプレ（というより、色んな衣服を着る事が好き）。バイト。恋愛小説の執筆（シャクナゲしか見た事がない）。

バイト歴・コンビニ、焼き肉屋、ビラ配り、ファーストフード店、郵便局、スーパーマーケット、喫茶店、ゲームセンター、アカツキの手伝い、メイド喫茶『メイディ』他。

剣道経験者だが、段までは持っていない。
槍術や棒術をかじったが、棒術は性に合わず、槍術は習う人がいなかった為、個人的に作った槍を振り回して長物の扱いに慣れた。
居合いは経験者であり、個人的にも好みに合っていた（一撃必殺の辺り）が、こちらは特別誰かに師事した事がない。
独自の発想と修練により、我流の戦い方を身につけている。
手先は非常に器用なくせに料理や家事は苦手であり、行きつけの小料理屋で毎日晩御飯を食べている（マークでシャクナゲがジャガイモの皮を剥いていたところ）。

キャラクターモデルは特にないが、彼女がモデルになってカーリア

ンが出来た。元々は彼女がメインキャラクターな予定であったが、シャクナゲがベクトルイーター（数多の鎖）を使う事に対して、ミヤビが『錬血』で無数の刃を使う事でやや被る為、設定段階でいじくって過去の人物となった。

ちなみに、今のシャクナゲも彼女の影響が3、アカツキの影響が3、他仲間の影響が4ぐらいで性格や口調が出来ている。

ミヤビ・スキル

能力・ＡＡ（純正型にも勝る数少ない高位の能力。彼女しか使えない、他に類を見ない唯一無二の能力。スズカやシャクナゲほど稀少ではないが、スイレンの水鏡よりは戦闘に特化しており、カーリアンの紅よりも使い勝手がいい能力）

身体能力・Ａ（シャクナゲとほぼ同等のものを持っている。得物を用いた近接戦ならば彼よりも確実に強い。ただし無手での戦いには慣れていない上、遠距離からの錬血で造った剣の爆撃は、命中精度があまり高くない為（チマチマ狙いなんて付けてらんないらしい）、その身体能力の高さも近接戦にのみ特化した使い方しか出来ない）

ポジティブ・Ａ（ひたすら前向き。黒鉄には珍しいタイプ）

幸運・Ｂ（壮大にトラブルを起こしても、致命的な結果には陥らないという、幸運なのかどうかよく分からないスキル）

ルックス・S（ルックスはスズカと唯一タメを張ると言われていた）

カリスマ・A（周りに自然と人を惹きつける何かがある。シャクナゲやアカツキとは違うタイプのカリスマ）

部隊指揮・B（能力は高いが、部隊指揮は性に合っていない。人の上に立って物を言う事が好きではない）

鬼教官・A（そのしごきにはカーリアン逃げ出し、ヒナギクが泣かされたほど。逃げ出しても地の果てまで追いかけられ、さらに鉄拳制裁される事から、新人の黒鉄達にとっては最も恐れられていた）

トラブルメイク・A（たまにアカツキが真っ青になる事や、神を否定するシャクナゲが思わず神に祈りたくなるような事をしでかした）

女の武器・B（涙。つまり嘘泣き。マジ泣きも得意です）

仮病・A（古参黒鉄曰わく、しょっちゅうお腹が痛いと言っては、面倒な事から逃げ出して新人教育にばかり精を出していた）

このミヤビさん。実は設定でポシャっただけあって、当初はかけらも出さない予定でした。

完全に過去の人物として置いて、番外編やら過去編を書く時にでも出そうかというレベルだったのです。

ノクターンの当初から中盤くらいまでは、その傾向が強く見られるかと。

でもまぁ、お気に入りのキャラクターですし、愛着もあったから『過去から今につながる形』で出す事にし、カーリアンの師という立

場を捏造したのです（新人教育係だった設定は元々あり。ただしカーリアンは弟子じゃなかった）。
当初のカーリアンは、もっと力ずくで攻撃力の高い能力任せなキャラクターでした。
彼女を出す事にしてカーリアンも変わったのですが、出して結果的に良かったんじゃないかと思っていたりもします。

番外編ラスト。
二部について。そしてその後の三部以降について。
二部はノーフェイトという過去との決別を。そして他勢力の顔出し。
三部は他勢力との争いや、名前しか出ていない『学園』、西に追いやられた『政府』などとの問題を。
四部は関東編で、五部はラストといった形に考えています。
本来は六部まであったのですが、自分が萎える可能性やら、その他諸々の問題が起こる可能性やらを考えて、編集して五部にまとめました。
まとめたといっても書く分量自体はそれほど減ってないんですがね。
気持ち的な問題です。ぶっちゃけて言うと、減らすつもりで編集したのに、減らした分だけ増えた分もあったというオチです。

今回の二部。物語のキーとなるのは『エリカ』、『新皇としてのスズカ』です。
伏線は諸々ありますが、多分気付かれていないでしょう。特に『エリカ』の目的については自信があります。
ヒントは『ヨツバ』『シャクナゲ』。
これで気付いた方はエスパーです。

エリカの目的とカーリアン。
シヴァとスズカ。
ノーフェイトとシャクナゲ。
そして本編前にも書いた灰色対灰色。
おまけでシャクナゲとナナシ。

全てに繋がりがあるワケではありません。黒鉄色のノクターンという世界で繋がっているだけで、その世界観を補完するストーリーが二部、そして次の三部だと思って下さい。
ただ、ちょこちょこ繋がりがある点もありますから、最後までその辺りを楽しみながら読んで頂けたら幸いです。

最後に独り言。
早く五部を書きたい。三と四は飛ばして五部を書きたい。
五部の為だけに二・三・四部はあるようなものです。一部にもすでに五部の伏線が入ってます。二部にも入ります。
適当に話の冒頭で補完して、補足して、いきなり五部を書き始めたりしないか我ながら結構不安です。

そんな自分ですが、今後ともよろしくお願いします。

2―25・夢現

人間には絶対に忘れちゃいけない事がある。
『忘れられない事』ではなく、『忘れてはならない事』。
忘れる事が許されない事。
受動的ではなく、能動的なもの。

それは今でも……こんな時でも、俺を縛り付ける。
『忘れるな』と――。
『忘れるな』と語り続けて、俺を縛り付ける。
灰色の呪縛でも暁の戒めでもなく、その声が俺に運命の否定から逃れる力をくれたのだとしたら……それは果たして喜ぶべき事なのだろうか。
灰色の無限を展開して、現界して、殲滅して、壊滅させて。
蹂躙して踏みにじって。
それを思い出したから、より強く心に声が響いたのだとしたら。
甘い甘い夢の中に、その声が微かな苦み（現実）を落としたのだとしたら、それは救いなんかじゃなく、報いなのだろう。
そう思う。

だってそれは、かつては甘い夢を見せてくれた『運命の否定』の力を持ってしても、今の俺には夢を見させられないという事の証明に他ならないから。
俺には甘い夢を見る資格すらない、そう宣告されたに等しいのだ

から。
今でも殺し続けている俺に対しての恨みの声が、『災厄』よりも大きくなったという証でしかないから。
それでも俺は……暁に照らされたシャクナゲは。
祈りを持って。
願いをかけて。
いつか在りし日を夢見て。
――この引き金を引こう。
まずはこの甘い夢を引き裂く為に。
狂おしいほどに懐かしいのに、唾棄するほどに嫌悪すべき幻（まぼろし）を打ち抜く為に。
そして、いつかは本物の彼女に、あるべき終わりを見せてあげる為に。

「ねぇ、悠はさ、将来何になりたいとかってある？」
「……はっ？」
少年は身近なところからよく聞き慣れていた声でそう問いかけられてふと我に返った。
余りにも聞き慣れ過ぎた耳に馴染むその声に、どこかボーっとしていた意識がはっきりしていく。まさに『我に返った』といった不

思議な感覚に、軽く頭を振るう。

「ん、あれ？」

現状の把握には手間取った。寝ていたワケではなかったはずなのに、どことなく意識に靄がかかったかのような不思議な感覚。

その靄は霧よりもなお深く、霞よりもなお濃い色彩で意識に滲み、ゆっくりと体に溶け込んでくる。

「……悠？」

「あぁ、悪い。で、なんだっけ？」

「将来なりたいものだよっ！ほら、進路調査書が配られたじゃん」

訝しむような声に、思わず自らに小さく渇を入れながら、少年は目の前にいる少女へと不器用な笑みを浮かべる。

見慣れた顔。見慣れ過ぎた顔。

サラサラと音をたてそうな腰まである黒髪に、細かな造形までが細部まで整っている顔立ち。

細身の体は、軽く抱き締めただけでもぽっきりと折れそうなほどなのに、内から発散されている生命力や意志の強さがその印象を覆している。

そう、細部の細部まで違和感一つなく整ったその顔立ちを、思わず穴が開くのではないかというほどにマジマジと見つめ……間違い探しでもしているかのように見つめ、思いっきり頭を叩かれた。

「ちょっとぉ！寝てんの？目は開いてるけど、頭だけ寝てんじゃないの？そんな面白特技はいいからさ、しっかり頭も起きなさいって

！」

「いてっ、痛いって！壊れたテレビを叩いて直す昔のおっさんみたいに、俺の頭を気安くポンポン叩くな」

「だぁれがおっさんですってぇ～！？」

「た、例えだろっ？単なる例え話なんだからさ、そんな目だけは笑っていない怖い顔で睨むなよ――」

――りぃ。

そう少女の愛称を呼んで。

呼び慣れていた愛称を小さな声で呼んで、少年はまた僅かに笑う。

親しい者にしか分からない、不器用で無愛想な微笑を浮かべてみせる。

その表情に一瞬だけ逡巡が垣間見えたが、それを掻き消すかのように彼は大きなあくびをもらした。

「で？何だって？」

「だぁからぁ～！将来の夢みたいなもんは何って聞いてるんだってばっ！」

プクッと膨らせた頬が、少女の落ち着いた容貌にはアンバランスに見える。

それは見慣れた所作で、見飽きるほどに見てきた表情で、少年はまた小さく笑った。

まるで小さな子供のようにコロコロと変わる表情の少女と、どこか不器用に表情を変える少年の組み合わせは、端から見ればアンバランスなものに見えるだろう。

それでも、周りで騒ぐクラスメート達も本人同士も、この二人の在り方に違和感を覚えた事はなかった。

二人は産まれなじみと言ってもいいほどに小さな頃からの幼なじみで、同年同月同日に近所で産まれた、『異性でありながらも同姓同名を持った特別な二人』だと彼女は広言していたから。

それを周りのみんなも知っていたから、この二人はセットとして認識されていたのだ。

「夢、ねぇ。漠然とし過ぎて分かんねぇや」

「あ、ほら！昔言ってたおじさんの跡を継ぐって夢はどうなったのよ？」

「俺にカメラマンは向いてないよ。戦場に出て、その凄惨さを世界に伝えるなんて――」

――戦場。

その言葉に、少年の脳裏には凄惨な情景がフラッシュバックする。

目眩を覚え、吐き気がこみ上げ、頭がキリキリと痛みだす。

髪や肉が焼けたすえた臭気に、中身をぶちまけた人間だったものの生臭い匂い。

血の赤と、臓器や骨の白と、黄色ががった何か。

動かなくなった戦車に、堕ちた戦闘機。

誰かの名前を泣き叫ぶような声で呼びながら銃を乱射している兵士と、下半身が千切れた状況で呪いの言葉を吐く士官らしき男。

泣いて命乞いをする誰かの声と、小さな子供をまるで自らの体で守るかのように覆いながら、最後の子守歌を歌っている女性。

その果てに――

「悠く～ん？起きてますかぁ？」

――その果てに、赤錆が浮いたような鈍い色に染まった剣を持つ女性と、痩せさらばえた金髪の男の幻影を見る。

コンコンと、どこか中身が詰まっているか試すような調子で頭を叩いてくる少女は……一番身近なハズの彼女は、そこにはいない。

いないと――いるはずがないと彼は『知っていた』。

初めから、意識がこちらの世界で覚醒してすぐに彼は気付いていたのだ。

この世界は夢なのだ、と。

単なる幻に過ぎないのだ、と。

自分の心が生み出した虚構の世界だと、少年である彼は知っていた。

それでもこの世界は居心地が良くて。

まだまっさらな……まっさらに感じられる自分がいて、同じような彼女がいる。

それが心にしこりを残し、膿をだし、甘えが顔をもたげてしまったのだ。

『もう少しだけ』

そんな考えを、覚醒しきっていない自らに許し

『状況を確かめてから』

そんな甘ったれた言い訳に溺れた。

そして――

意識がはっきりした今でも、溺れた膿から逃れられないでいる。

心は捕らわれている。

今の自分がすべき事を知っていても。

ノーフェイトに捕らわれる事がないように、『取りたくない手段』までとったというのに。

結局は逃れられないでいる。

この甘ったるい、『理想』という名前の猛毒にまみれた世界から。

アカツキが残した絶望から。

そして自らの弱さからも。

辛い事や悲しい事には耐性が出来ていても。

苦しい事や絶望には慣れていても。

少年は……少年である彼は、致命的なまでに優しさや甘さには慣れていなかった。

むしろ絶望や悲哀を見すぎたからこそ、その甘い夢には逆らえなかったと言ってもいい。絶望で心が血を流す事に慣れ過ぎて、甘い夢が膿を出す事には耐えられないのだ。

「俺は……戦場なんかに行きたくないよ。だから無理だと思う。父さんの跡を継ぐ勇気なんて俺にはない」

「あ、起きてた。でも――」

そっかそっか。とふむふむ少女は頷いてみせて。

何故か嬉しそうに笑ってみせる。

「うん、それがいいよ。悠にはさ、戦場なんて向いてない。いくらおじさんの跡を継ぎたくってもさ、あたしは悠に危ない事をして欲しくないな」

そしてよしよしとばかりに少年の黒髪を撫でてから、ここぞとばかりに隠し持っていたらしいプリントを見せつけてくる。

大袈裟な所作で。

どこか誇らしそうな笑顔で。

そのプリントの頭にはこう書いてあった。

『進路調査書』と。

「あたしは保母さんになりたいなって思ってるんだ。

それで、良かったら――良かったらさ」

あぁ、そうだ。

少年は覚えている。片時たりとも忘れた事はない。

昔通っていた保育所。

すぐ近所にあった教会が運営していた懐かしき場所。

神の教えを信じ、暖かい優しさで自分たちを見守ってくれていた老神父と彼の娘。

子供達に分け隔てなく接し、慈しんでくれた先生達。

自分と彼女が、いまだ世界の汚さと絶望の意味を知らなかった時代の事を、彼は今でも鮮明に覚えている。

その時から彼女は面倒見が良く、年下の児童達を見守るリーダー格だった。

先頭に立って遊びまわり、いつも笑っていた。

年上の小学生を相手に揉めた時も、決して怯む事なく仲間の前で両手を広げて引く事がなかった。

神の教えを良く理解し、仲間達にもその尊さを語っていた。

彼女を嫌う友達は一人たりともいなかった。いるはずがなかった。
嫌っていたのは、友達の保護者や近隣の大人達だけだった。
その優秀さに。
大人顔負けの聡明さに。
言葉だけで大人の理不尽を言い負かしてしまう気の強さに。

――あぁ、そうだ。彼女は昔っから子供が好きだった。将来は保母さんになりたかったと言っていた。

彼は知っていた。
そしてそう言っていた時の彼女の悲しそうな笑みを……彼は覚えている。

『でもこんな血に濡れた手で抱いたりしたら――嫌われ者のあたしなんかが先生だったりしたら、子供達が可哀想だよね』

まだ狂う前の……世界の絶望に抗っていた時の彼女の言葉を。
そのいつも『僅かながら発光している瞳』に浮かんだ涙の揺らめきを。

今の彼女にその瞳はない。
普通の日本人らしい黒瞳で、感情の煌めきが輝いているだけだ。
彼女なら――『この彼女』なら、叶えられなかった夢を、叶える事を諦めてしまった夢を掴む事が出来るだろう。

それは彼にとっても甘美な夢で。
どこまでも心を惹きつける未来で。
その隣に自分が立てたなら、きっといつも笑って生きていられるだろう。

そう考えてしまう。
そう信じたくなってしまう。

「悠もさ、一緒に保母さん――じゃないや、保父さん目指さない？二人で一緒にさ、いつか近所の子供達を集めてこぢんまりとした保育園でもやれたらなぁ、って」

そう、その優しい戯れ言が耳に届くまでは……彼の心は完璧に甘い運命毒に負けていたのだ。

「悠にも向いてると思うんだよね。基本的に面倒見はいいし。見てくれも悪くないから、その不器用な笑顔だけもうちょっとなんとかすればね」

――この汚れきった手で子供達に接する？
彼女が悲哀した以上に血に染まってしまったこの汚い手で、彼女が手にする事を諦めてしまった未来を手に取る？

それはいかな『夢』の世界でも、希望に擬態した擬似世界であっても、彼には看過しえない事だった。
彼女は彼女の希望に反しながらも、自らの意志でその手を汚して絶望に抗ってみせた。
それでもその手を『汚れている』と悲しんでいたのだ。
自分の手はそんな彼女以上に汚れてしまっている……そう考えたら、夢に浸る甘さが凍りついたかのような感覚を覚えた。

ここで目の前の彼女の言葉に目を瞑ってしまえば、あの時の彼女の悲しみや、それを目にした時に感じた心を締め付ける痛みの全てに、目を背けてしまう事になる。
死ぬ覚悟すら決めて『絶対毒の皇』と化した彼女と相対した『あ

の時』――大勢の仲間達の犠牲のもと、『捨てたくない』と想いを込めて言ったあの言葉を嘘にしてしまう。

「あ、あれ？悠？聞いてる？結構重要な事を言ってるつもりなんだけど……」

誰かを守るという事に逃げて、償いという言葉に縋って、自らの手を命の赤で染めてきた自分。

居場所に縋って、理想に寄りかかって、他人を理由にして戦ってきたという過去。

それは決して誇れるものではないだろうけれど、そんな自分でも絶対に嘘にしてはいけない言葉……捨ててはならない誓いがある。そんな自分だからこそ、最後の最後まで見据えていかなければならないものがある。

それは一度でも安易に目を背けてしまえば、二度と言葉にする資格を失ってしまう誓いだ。二度と誰にも語る事が出来なくなってしまう想いだ。

彼を仲間と呼び、友と呼び、願いを託して散っていった者達を裏切る事になってしまう。

例え一時であれ、彼らを忘れる事になってしまう。

もしここで彼女の望みのままに、そして自らの安逸の為に『甘い夢の言葉』を受け入れたのなら……一度でも自らの罪と願いから目を逸らしたのなら、彼はこの四年以上もの間、本当に立ち止まって足踏みをしていただけになるだろう。

手を汚した時の心の痛みや、誰かを失った時の悲しみを一時でも忘れる事。

それはそこで命を散らした者達が、本当の意味で無駄に命を落としたと認める事に他ならないのだから。

そして同時に、『彼女』が願った……でも叶わなかった普通の未来を今の自分が掴むなど、絶望に抗っていた頃の『彼女』に対する侮辱でしかない。

そこまで考えた時、彼の脳裏には逃げ続けてきた数年間で出会った仲間達がはっきりと浮かんだ。

誰も彼もがたった一つしかない自分の命をベットし、懸命に認められない現実に抗っていた姿が鮮明に蘇った。

――あぁ、俺は忘れていない。忘れてなんかやらない。

似合わない無骨な刃を翻し、鮮血で赤く染まった少女がいた。

いつも明るく、強く、賑やかな、背中を預けあった相棒たる少女だ。

背後に感じる彼女のか細い背中に幾度命を助けられた事か。

どれほどその存在感を心強く感じていた事か。

――忘れられるわけなんかない。

そんな彼女が夜中になれば、すでに綺麗になった手からなおも血の赤を落とそうとするかのように、必死に何度も手をこすっていた事を彼は知っている。

時折、自らの体にこびりついた『匂い』を気にする仕草を見せていた事を知っている。

誰もいないところで自らの頬を張って、必死に心を奮い立たせていた事を彼は知っているのだ。

年々痩せさらばえ、命を削って情報を取り出しながらも、普段は不敵な笑みを絶やさなかった青年がいる。

彼にとっては親友で救い手でもあったその青年は、甘ったるい性格には似合っていない皮肉げな言動を好んでとっていた。
しかし、そんな彼が一人になれば『死にたくない』と呟いていた事を、一番身近にいた彼だけは知っているのだ。

そしてそれを知っていて、何も出来なかった無力感を彼ははっきりと覚えている。
何も出来るはずがなかったのだ。
何故ならそこは彼にとって贖罪の場所であり、抜け出す事など到底出来ない場所だったから。
身近な誰かの苦しみを背負う余裕はなく、その苦しみを拾う力もない。彼に出来た事はその苦しみを見て見ぬフリをする事だけだった。
隠していた本音に、気付かないフリをしてやる事だけだったのだ。
もし自分に本音が気付かれてしまった事が分かれば、きっとあの二人は弱音を吐く場所を無くしてしまうだろうから。
強くあろうとして、実際に最後の最後まで強かったあの二人が、弱さをみせられる場所をなくさせるワケにはいかなかったから。
だからそんな彼らの本音の痛みを自らの胸に刻みつけて、持っていく事だけしか出来なかったのだ。

それが――その痛みが、『この世界』にはなかった。
刻みつけ、忘れないと誓った数々の大事なものがこの幻の中にはなかった。
痛いだけで、悲しいだけで、苦しかっただけの大切な時がこの場所にはなかった。

理想の幼なじみはいる。

恐らく探せば、理想の親友や理想の相棒も見つかるだろう。それも彼が望めば存外簡単に。
理想の妹分や、その親友たる少女もいるに違いない。
ただそこには、忘れられない、忘れるわけにはいかない痛みだけがない。
忘れないと誓った過去だけがない。
叶わなかった未来はあっても、そこに繋がる痛みを抱えた昨日がない。

――自らの中で広がっている世界に、灰色の風が吹いた。

――理想と現実、夢と現の合間に鎖状の亀裂が入った。

――そして、吹き荒ぶ世界の風の音がはっきりと耳に聞こえる。

カラカラと。
ガラガラと。
ゴロゴロと。

その音達も言っていた。
ここは『在りし日の明日ではない』と。
単なる幻で、薄っぺらな夢で、自分だけが満足出来るちっぽけな虚ろの世界なのだと。

昔は捉えられた。捕まった。離れられなかった。弱くて脆くて、安易に薄っぺらなものにくるまってしまうほどに、心が壊れかけていたから。

でも、今の彼ははっきりと思い出せた。

心の内で灰色の世界を展開しているから――地下に入った瞬間からワードを紡ぎ、世界に手を伸ばしていたから、『運命の否定』の甘い毒に浸かりきっていなかった今の彼は、『自身の名前』をはっきりと思い出せたのだ。

その名前は、『比良野悠莉』なんて名前じゃない。その名前を呼ぶ資格など今は誰にもない。夢の中の綺麗な彼女にもその資格などありはしない。

『彼女』に名前を呼ばれる資格など彼にはないのだ。

今の彼にあるのは、青年が、相棒たる彼女が、仲間達が呼んでくれた名前……呼びやすいように短い愛称まで付けられた名前だけなのだから。

それは『威厳』の銘を持つ、誇り高き徒花の名前だ。自分には見合わない、でもいつかは見合う存在になりたいと願った名前だ。

自らの命すらも惜しまない彼が、唯一惜しむものがあるとすれば、それは仲間達が呼んでくれたその『名前』だけだ。

後ろ向きで、足踏みを繰り返していた自分に、今も傍にいる紅の少女や銀色の妹分が呼びかけてくれるその名前だけが、彼にとっては唯一のものなのだ。

目の前では今も少女が何かを言っていた。しかし、それはもはや耳に届かなかった。

もはや輝かしいはずの『夢の中の彼女』の言葉は軽く感じられてしまう。

痛みを知らない彼女は確かに綺麗で、絶望を見た事がない彼女は本当に尊くて……でも希薄なそれでは『彼』の心はつかめない。

彼が知っている昔の彼女は、もっと綺麗だった。
死した今でも相棒である剣の少女は、この幻よりもずっと尊かった。
親友だった男は……苦しみ抜いても最後に笑っていたあの男は、運命の否定よりもなお強く心に根を張っている。

だから彼は――シャクナゲは小さく宣告したのだ。
唐突に。でも確かな言葉で。
ほんの少し、あと少しだけ今の彼女と言葉を交わしたいという想いはあったけれども、そんな甘い誘惑は乾く事のない血が滲む痛みで抑え付けて。
この綺麗で、でもどこか醜悪な悪夢を壊す為に。
幻の世界をも覆う、灰色の領域を開く一つの言葉を。
幻よりも広大な灰色世界を現すワードを。

「Ｓｅｔ―Ｏｐｅｎ　ｔｈｅ　Ａｎｏｔｈｅｒ　ｆｉｒｓｔ……開け、灰色世界へと至る最初の境界」

ゆっくりと確実に世界を開く為の長々としたワードではなく、一瞬でも早くこの心を膿ませる幻を切り開く為の『強制展開』の言葉を。

2―25・夢現（後書き）

ちょっとどころかかなり駆け足で、唐突です。
でもこの形にしたのは伏線の関係と次話の関係です。
以後のシャクナゲ編で補足する為にこの形にしました。
本当はもっと現実っぽいやり取りがあったんですが……ネタに引っかかるので以上自粛。

シャクナゲが地下に入った際の冒頭、唐突な世界展開ワードの羅列は今回の伏線でした。
つまり自身の内側から溢れ出す灰色世界の圧力で、運命毒の領域に支配される事を逃れたワケです。
また二部の最初、シャクナゲでなければ運命毒に抗えないとアカツキが言っていたのも、ここに関係していたりします。
これだけだと同じ純正型であるスズカ辺りでもなんとか出来そうな感じですが、彼女の境遇や性格からして、幻だと分かっていても逃れられないだろう、というのは分かって下さい。
彼女は日常的な現実に憧れている、それを想像する事が大好きだ、という彼女のシーンでの記述はこれを補足する為です。
多分ごっちゃごちゃになっていて分かりにくいでしょうから、一応このあとがきを補足あとがきとして書いておきます。

分からない、忘れたという方はこの機会にでも読み返して下されば幸いです。

2―26・ノーフェイト（前書き）

短いです。
多分今までで一番短いです。
しかもちょっと違和感ある語りかもしれません。

2―26・ノーフェイト

永らく闇の中にいた『それ』は、創造主より与えられた機能を遺憾なく発揮した。

本来は持ち得ぬはずの力を、ねじ曲げられて付与されたままに。

造られた当初に望まれた形で。

なんの矛盾も、僅かな意志も、『それ』自身の想いもなく、ただ自らの中に組み込まれた『在り方』のままに力を解放した。

自らに触れようとするもの、自らを傷つけようとするもの、そして自らの『現実を否定する』領域に入った力ある者を飲み込んだ。

何年か前に一度取り込んで、虜にして、自らの確立する『領域』に溺れさせた事がある心脆き男へと、その機能を振るってみせた。

もし『それ』に意思があったのなら、その男の無謀を嘲笑った事だろう。あるいはまたも自らの前に立った男の愚かしさを憐れんだだろう。

それほどかつてのその男は、あっさりと……そして完璧に『それ』の力に心を捕らわれた過去があるのだ。

現実をあっさりと捨てて。

夢の中の幻に心を通わせて。

それに違和感一つも感じる事なく溺れきって。

甘い幻に縋った過去があったのである。

普通の人間ならば多少なりとも『現実』に捕らわれる部分があるはずであり、いかな『それ』の力を持ってしても、その現実に捕らわれる部分を完璧に抑えきる事は不可能だ。

矛盾のない幻は作れないのである。

死んだ人間を死んでいない事にした幻には、当然『その結果に至るあり得ぬ過去』が作られる。

起こったはずの事件を無きものとすれば、その事柄へと至る為プロセスが全てねじ曲げられる。

つまりより辛い過去であればあるほど……そして悲しい思い出が多ければ多いほど『甘い夢』は『矛盾にまみれてしまう』のだ。

そう、例えばその男の過去のように、『変種』と『既存種』に人々が分かたれた事に全ての悲しみの要因があれば――ほとんどの過去がそこを起点にしたものであれば、『変種は生まれなかった』という壮大な矛盾を生むしかないのである。

数多ある悲しみを全て消す為には、その男の過去は絶望が多すぎた。悲しみと苦しみが溢れていた。死に別れた者が多すぎて、死別よりも深い溝が出来た者達が多すぎたのだ。

それら全てを補完するには、より多くの矛盾を生まなければならない。より致命的な矛盾を用いなければならない。

だから『それ』は、『人の変種は生まれなかった』という壮大な矛盾を『甘い夢』の核にせざるを得なかった。

その男を夢で捕らえるには、そこまで有り得ない『過去』を造りあげねばならなかったのだ。

それは普通ならば違和感の一つぐらいは感じてしまうほどのあり得ぬ世界。

現実とは全く違う価値観を持つ世界。

他の人間であれば……ほんの少しでも『変種がいる現実』に何か

思い入れがあったならば、あっさりと壊れかねないほどの矛盾を含んだ世界だ。

それでも彼はあっさりとその『夢』に捕われた。

現実の方を否定し、夢に縋った。

彼自身がその世界の矛盾を肯定し、矛盾を受け入れて、夢に溺れた。

『それ』の創造主が割って入らなければ、その命が潰える瞬間まで男は『夢』に浸っていただろう。

『それ』の力が強力なものであるだけではなく、その男の弱さと脆さ故に。

今回もそうだった。

そのはずだった。

あっさりと『それ』の侵食を受け入れた。

その精神に備わっている防壁でさえ僅かな抵抗でしかなく、滲み出す甘く深い霧は男の奥深くまで染み渡った。脆すぎる防壁はなんの障害にもならなかった。

侵食し尽くし、その男の『現実』を喰らい尽くせるはずだった。

ただ一点、精神の一番深い場所にある一点のみが『夢』の侵食を受け付けなかっただけで、そこ以外はほとんど全てが『夢』の毒素にまみれていたのだから、『それ』がそう判断しても不思議はない。

その『夢』が入り込めない場所、一切の『色』を否定した無彩色の領域は、単に不可侵なだけで――入り込めないだけで、『夢』を否定はしなかったから。

ただそこにあるだけで、なんの動きも見せてはいなかったから。

もし『それ』があらゆる生物が持ち得る警戒心を持っていたのなら、前回の時にはなかったその『不可侵領域』に最大級の注意を払っただろう。

絶対的な夢幻を対象者の脳内に現界させる『それ』――『ノーフェイト（運命の否定）』の能力をもってしても入り込めない心象領域に、本能的な恐怖を感じたはずだ。

何物をも拒絶し、何者のものであれ『他の理』を否定する、小さくはあれど絶対的な領域としてたゆたう無彩色の塊に対して、あらん限りの手を打たなかったのは、ひとえに『ノーフェイト』は器物でしかなく、どこまで行っても偽物でしかなかったからに他ならない。

創造主のあらゆる『快楽』を喰らい、夜に見る『夢』を喰らい生まれた、『偽物の夢』を作り出すだけの器物に過ぎなかったからだ。

だから対象者という名前の獲物が望む世界を構築し、それを見せるだけという決められたプロセスのみをこなした。

かつて完全に犯し尽くした男を、前回と同じ夢で縛ろうとした。

その男が……前回あっさりと捕らわれた彼が、何故また過去と同じ轍を踏むのかを考える事はなかった。

それを許されてはいなかった。

『運命の否定』――『現実の否定』であるそれは、人に対して用いられるものとしては最高の精神兵器だろう。そのように造られた。

絶望ではなく偽物の希望を見せて人の心を縛る機能は、間違いなく欲望を持ち、希望を持つ人間には抗い難い能力だ。

だがそれは、『結城智哉という創造主』、『アカツキという使用者』があってこそ活きる能力なのだ。

何故なら『それ』には考える機能がなかった。理解する力も理解しようとする意志もなかった

あらゆる事に知恵を回す使用者、人間というものをよく知る使用者がいない『それ』は、その時点で重大な欠陥を抱えていたのである。

それでもそれは与えられた使命を果たすべく回り続ける。
対象者が夢を否定しても。
否定する力を持っていても。
現在の対象者が、その心の奥底にたゆたっていた灰色の領域を広げ、夢を完全に消し飛ばしてみせても。
『それ』は受諾した使命を果たすのみ。
与えられた役割をプログラムにこなすのみ。

『ノーフェイト』が持つ防衛の機能は、『希望』を見せるその基本能力だけではない。
希望で縛る力だけではない。
獲物を捕らえ、その希望を覗いてそれを展開出来るという事は、反対のものである『絶望』をも展開出来るという事だ。
対象が疎む存在をも覗き、希望に代わるそれを具現させられるという事だ。
『ノーフェイト』には、人の希望を理解して現界させる能力がある。その与えられた能力を用いれば、反対の存在である絶望をも覗き見て、それを現界させる事も出来るという事である。

希望と絶望。
その内の『希望』を持って対象者を飼い殺し、希望を否定した存在は『絶望』で殺し尽くす――それが『ノーフェイト』に与えられた二重の絶対防衛機能。
アカツキという異端のアイテムクリエーターに与えられた……与えられてしまった能力。
他の誰にも利用されないように、その力が他者に触れられないように与えられた自衛能力。

希望を否定された時点では――灰色に夢が喰らい尽くされただけ

では『現実を否定する偽物』は終わらない。
希望を食い尽くされても、夢からは覚めない。
何故なら捕らえた時点で『絶望』という楔は打ち込まれているから。
対象者を取り込む希望の世界の外側に、対象者を囲う絶望の世界が作られているのだから。

希望が打ち払われた時からその世界は回り始め、的確に対象者が疎み、否定し、忌み嫌う存在を『夢の中の現実』に生み出す。
対象者とノーフェイトが互いに干渉し合う二重の世界を修正する為に……完全に犯しつくす為の刺客として、絶望の象徴が送り込まれるのだ。

今回の対象者の場合のそれは、圧倒的に反則的な力を持った――『対象者自身』。
対象者が何者よりも疎み、嫌った存在は『過去の自分』。
そう、対象者は――シャクナゲという男は、他の何者よりも自分自身を恐れていた。
自分よりも強大な力を持つ存在よりも、自分という存在を嫌悪していた。
そして誰よりも……過去に出会ったどんな敵よりも、『かつての自分』を忌み嫌っていたのだ。

そして――
二つの灰色が、ノーフェイトとシャクナゲの意思が混ざり合う領域内で巡り会う。
シャクナゲの精神という核を中心に構築された世界で、有り得ぬ邂逅が実現する。
同一の能力を持った、全く同じ存在同士が殺し合うという、現実世界では起こり得ない戦いが展開する。

現実世界でも現在ではほとんど起こらない、変種の中でも規格外である『皇種』同士の争いが、『現実を否定する偽物』の手によって演出される。

今は亡きアカツキが『ノーフェイト』という災厄に施した、最後にして最大の防衛機能が回り始める。

2―27・灰色世界の二重奏

――神様って本当にいると思う？

その問いに彼は何も返せなかった。

そんなものはいないんだと本当は言ってしまいたかったけれど、そう正直に少女へと答えを返すには彼女は傷つき過ぎていた。

例え偶像であれ……目に見えない虚構の存在にであれ、彼は少女に希望を持たせてやりたかったのだ。

『神様はいるんだ』と。

『いつかは報われるんだ』と。

いつも少女が仲間達に言っているように――彼女を慕って集まった仲間達に諭しているように励ましてやりたかった。

でもそう言ってやるには状況が悪すぎた。

廃墟と化した街の片隅で……二人が壊してしまったほんの少し前まで街だった場所で……大勢の命の灯火を飲み込んだその直後に

『神様はいるんだよ』

『いつか俺達も幸せになれるんだよ』

と言ってやれるほど、彼は無神経にはなれなかったのだ。

――あたしはいて欲しいな、神様。

だってさ、もしいるのなら……あたし達の痛みを教えてあげたいじゃない。あたしの世界（力）で、自分だけは尊い存在でいる神様

を汚してあげたいじゃない。

いつから彼女が『神様』に対して呪詛の言葉を吐くようになったのか。

いつから祈る事がなくなったのか。

そしてその力を使う事に躊躇いを覚えなくなっていったのか。

正直なところ、彼ははっきりと覚えてはいない。

彼自身、自分が抱えていた力に押し潰されそうになっていたし、彼女は――彼女だけは『大丈夫だ』と思っていたから。

例え自分が狂ってしまっても、仲間達みんなが誰かを傷つける事になんの感慨を抱かなくなってしまっても、そして誰もが現実に絶望してしまっても、彼女だけは『大丈夫なんだと思ってしまっていた』から。

――ねぇ、あたしの力ってね。神様を殺す為に与えられた力なんじゃないかって、最近はそんな事を思ったりもするの。

全てを守れない自分の不完全さを嘆いた神様が、自らに死を与える為にわたしは生み出されたんじゃないかって。

わたしなら……わたしの『毒』なら、きっと神様でも殺せちゃうから。

彼女は圧倒的だった。

いや、圧倒的というだけでは余りにも生ぬるい。比較すべき対象すらいないのだから、『圧倒的』という表現は間違っている。

彼女は――『アブソリュート・ベノム』と呼ばれた彼女の力は、その名前の通りあらゆるモノに対して絶対的な効果を発揮する『絶対毒』だ。

炎を汚せばその炎は熱を全て失い、鉄を汚せばその硬さを失う。

大気を猛毒へと変え、大地を腐敗させて腐敗の過程で発する高熱を持ったヘドロへと変える。

全ての生物が、そして全ての無機物が、彼女の領域では絶対にその『在り方』を歪めてしまった。
耐えられるものなどありはしなかった。

変種のあらゆる能力を。
人間の叡智が生み出した兵器の力を。
そして人間そのものをも汚す絶対の毒素。
それは変種の極みである『純正型』の『世界』をも侵蝕し、その領域を自らの『アブソリュート・ベノム』の領域へと変換させた。
絶対毒で在り方を歪めた。
彼女の前に立ちはだかったあらゆる『世界の理』を『絶対毒』で侵略し、自らの領域へと変え、展開された世界を自らの力へと変えた。
それは同じ新皇である彼でさえも――ある意味では彼女よりも異常な、『真なる新皇』である少年の『具現の灰色』でさえも抗いきれなかった反則過ぎる力だ。
他の新皇の誰であれ……言霊の山吹色や重力の濃紺色、拒絶の銀色でさえ、無色透明の毒には抗えない。

そう、彼女が言うように、その力であれば『神』でさえも汚せただろう。
悪魔でさえも貶められただろう。
邪神ですら歪められただろう。
死神すらも殺せただろう。

その世界は実質的な戦闘能力を持っていなかったが、汚す毒素は確実に全ての存在を凌駕していたのだ。

――でもさ、神様はきっといないんだよね？

――わたしが殺すべき神様は、この世界にはいないだよね？

――だからわたしの力は……『わたしは』きっとこの世界には不要なものなんだよね？

神はいない。いるわけがない。

だから自分の『毒』は――神をも汚せる絶対毒は、人間の世界には存在してはならない力だと彼女は泣いた。

自分は不要な存在なんだと、常に前を向いていた少女が認めてしまった。

それが彼の見た少女の最後の涙で……最後の理性。

自らの力を抑え続け、周りの理不尽に抗い続け、仲間達の為に走り続けてきた彼女の最後の姿。

彼が『皇』とされ、同族となった日から数週間。

たったそれだけの期間しか、二人は同じ境遇の仲間にはなれなかったのだ。

自覚したばかりの人の純正型変種である少年と、真っ直ぐに生きる事に疲れた狂える変種の少女という違いが、二人の間に深い溝として刻まれて――そしてあの決別の日がやってきたのだ。

『世界を変えるんだ』という少女と、『今までを捨てたくない』という少年。

『もういいだろ』と諭す少年と、『まだこれからだ』と堕ちていく少女。

二人は……今までどんな時であれ一緒にいた二人は、その日初めて争って、殺し合って。

そして今の世界へと繋がっている。

灰色の世界が弾けた――。
文字通り『世界』が『弾けた』のだ。
自分という狭い領域に抑えつけられた『世界』は、宿主の意志を受けて爆発的に広がっていく。
彼に望まれて、『希望の幻』を塗り潰していく。

ありふれた日常が。
そこにいる、どこかで見た事のある級友達が。
そして汚れなく笑っていた少女が、灰色に色を奪われ、次々と空間と同化していく。
まるでキャンパスに描かれていた絵を、灰色の絵の具で塗り潰していくように。
日常的な風景を撮った写真が、有り得ない速度で風化していくかのように。

その中でいまだ照れたように笑っている少女へと、彼は思わず手を伸ばした。
幻だと分かっていても――所詮は自分が望む歪な存在なのだと知っていても、なんとか彼女だけでも連れ出せないかと考えてしまった。
なんとか彼女だけは『幻』から『現実』に連れてはいけないかと望んでしまった。
自分が否定したのに……自分が否定した存在なのに、灰色に塗り

潰されていく彼女を見ていられなかったのだ。

一度は見捨てて。

壊れた故郷に置き去りにして。

そして今でも記憶の先で『自分はいらない存在なんだ』と泣いている少女を、目の前で失う事には耐えられなかった。

幻なんだと、夢なんだと分かっていても手を伸ばしてしまったのだ。

でもその手は空を切って。

その瞬間に彼女は灰色の霞へと消えてしまう。

『ほら、所詮は造られた幻だった』

そう宣言するかのように、灰色世界はなんの躊躇いもなく消し飛ばしてしまう。

それに歯を噛み締めて。

自分が望んだ結果だとは言え、手から血が滲むほどに強く拳を握って。

灰色の空にシャクナゲは呪いの言葉を吐く。

無力を呪う叫びを上げる。

今も彼方で一人泣いている少女を、置き去りにしたままでいる自分に対して。

こんな幻を生み出した『運命の否定』に対して。

「また……お前が嫌いになったよ」

そして灰色の空に浮かぶ、緋色の月に対して。

「地獄で会ったら絶対ぶん殴ってやる」

こんな事を自分に任せた親友に対して。

親友である男にはきっと分かっていたのだろう。

いや、少し考えれば分かる事だった。

自分の望む夢の世界。

それを消し飛ばすには、『運命の否定』の理をも越える力で――より強力な理で上塗りする他ない。

甘い夢に飲み込まれた後も意識を保つには、自分を別の『世界』に置いて、幻から意識を守るしかないのだ。

そこまで分かっていたのなら、その過程で甘い幻が消えていく様子を目前で眺める羽目になる事が分かっていないはずがない。

目の前で望んだ世界が、存在が消えていく様を見ていなければならない苦痛を、創造者であり使用者である男が分かっていないはずがないのだ。

「……くそ、しかもまだ終わってないのかよ」

そう毒づいて、シャクナゲは自らの領域――ノーフェイトが入り込んできていた自ら精神世界に、いまだ『甘い毒』が息づいている事を悟る。

本当はすでにへたり込みたいぐらいに精神的に消耗していた。懐かしくも悲しい少女が心にしこりを残していた。

それでも、まだ終わっていないという事実になんとか自らを奮い立たせ、自分が支配する領域『灰色世界』に僅かに紛れ込み、異物感を示している存在へと意識を向ける。

いつもより――今までのどんな時よりもずっと一体感を感じる灰色の世界。

手足の動きも、視界や声の響きすらもいつもと変わりがないのに、

ただ現実感だけが圧倒的に足りていない世界。
そんな不思議な感覚は、明らかに『ノーフェイト』の力によるものだ。『運命の否定』が作り出した明晰夢じみたものだ。
自分には『灰色世界』――つまり『運命の否定』の力が完全には及ばない領域があった。それがノーフェイトの力を吹き飛ばし、ノーフェイトがそれに抗ったが為に今の状況に陥っているのだろう。
シャクナゲは灰色世界の中にありながら、ノーフェイトが作り出した『夢』からも、いまだ完全に抜け出せてはいないという事である。

そこまでは、灰色世界そのものを内包しているシャクナゲには分かった。
おそらくノーフェイトが封印されていた部屋で倒れているだけで……きっと強制的に夢を見させられているだけなのだろう。
自分の世界が僅かとはいえかき乱されている感覚には、さすがにいい気分がしなかったけれど、それはまだ我慢は出来た。
あの性格のひねくれた創造者が、あれで全てを終わりにはしてくれなかった事も『あいつらしい』で済ませられた。
そんな現状の中でただ一つ、どうしても許せないものがあるとすれば――

「運命を冒す運命毒、ね。まさしくだな」

そう毒づくように呟く彼の目の前には見慣れた人物が立っていた。
いや、『見慣れていた』というべきか。
その人物は背を向けて立っていて、顔も表情も窺えない。それでも彼がその人物を誰かと見間違うハズがなかった。
見間違いようがなかったのだ。

「……この世界に神はいない」

その人物を認識して、理解して、
あり得ない存在だと意識して。
それでもシャクナゲは躊躇いなく己の内側へと手を伸ばす。
今自らの周りに展開していて、その無彩色な存り方を主張する寂しい世界へと。
少し前まで……ほんの十日ほど前まで、四年以上も目を逸らしていた灰色（過去）へと手を伸ばす為に。

「認めず、在らず、その存在を否定する」

背を向けて立つ人物がそこにいる事。それがいかに異常な事かぐらいは、シャクナゲ自身が一番分かっている。
でも、この世界では何が起こってもおかしくない事も、また分かっていたのだ。
この運命を冒す運命毒――運命を否定する『ノーフェイト』の力が及ぶ領域では。

「紡ぎ手のみが世界にありて、カラカラと虚ろに響く歌を唄う」

目の前の人物がゆっくりと振り返る。
そしてその見慣れた虚ろな黒髪を揺らし、濁った黒瞳をゆっくりと向けてきて――記憶の中にある通りの絶望を溢れさせた色を向けてきて、小さく何事かを呟いた。

「彼の者は最果ての日までただ独り、暗き血を流し、赤き涙を落とす」

その呟きが何と言ったのかは当然聞こえない。聞こえるワケがない。

轟々と鳴る世界の風が、自らの口をつくワードが、そして内から溢れてくる世界の侵攻とノーフェイトの異物感が、それに耳を傾ける事を徒労とさせた。

――それでも……それでも、彼には『その人物』がなんと言ったのかが容易に想像ができた。

「無限の灰色世界にて、幾千もの刻を刻み、幾万もの孤独に心を砕く」

どうせ、『今だけだ』、『いつかはこんな事をしなくてもよくなるようになる』、そんな事を言っているのだろう……そう思えば、頭の片隅がチリチリと焦げるような感覚を覚える。

目の前に立つのが誰かなんて事は関係なく、自らの内側にある世界に怯えながら、『いつかは』とか『もうすぐ』とか考えて期待して、そうやって自分を追い込んでいるのだろう。

それはとても彼自身には馴染みのある考え方で……泣きたくなる。嗤いたくなってしまう。

「その身はただ歯車を廻す虚空の歪み」

『その心は数多の世界を歪むる輪廻の鏡』

そして――

反響するかのように重なる同列のワード。彼特有で彼固有の広大なる無彩色、灰色世界を現す言葉の羅列が完璧に連なった。

それが二つ重なって、吹き荒れる風の中に紛れる。

一つは彼自身の声で……もう一つは目の前の『幾分若いもう一人

の彼自身』の声。
ノーフェイトが作り出した、シャクナゲを捕らえる為の『毒の象徴』たる存在にして、異物感の根源たる少年の言葉が。

「故に紡ぎ手は今も独り」
『灰色の雪原にありて――』

重なって響くのは、虚ろで、濁って、落ち込んで、歪んで、壊れかけの彼の声。
目の前にいるのは、最強最初のヴァンプと呼ばれた『新皇』の象徴たる一人の姿。
かつての彼自身の声と姿を持った、唯一人新皇と称されてしまったこの国のロードヴァンプ。

「――いつか在りし日の明日を唄う」
『――いつか在りし日の明日を唄う』

それが彼、シャクナゲの声と重なって――
世界には『二色の灰色』が具現した。

2―27・灰色世界の二重奏（後書き）

活動報告にも書きましたが、二部冒頭の小話で書いたシーンが出てきます。
活動報告にて毎回アップ前にはお知らせをしていますが、良ければそちらにもいろいろと書いていますのでご一読ください。
来週からはカーリアンシーンが続きます。

彼女だけ話が全く進んでいない事実に気付いて愕然としていたりなんかしませんよ？

2―28・光都の片隅にて

「自分らしく生きてくコツはね、絶対に譲らない一線を見つけることよ。そしてそれを本当に最後まで譲らないこと。それさえ守れれば、誇りなんてもんまで後からついてきたりするものよ」

そう師である女性は言っていた。

誰よりも強く、誰よりも明るく、誰よりも懸命に駆け続けたその女性は、決して迷う事なく走り続け、後輩達を導き続けた。

そんな師に、不出来な弟子である彼女が聞いたのだ。

『なんであんたはそんなに真っ直ぐでいられるの？』と。

『なんでそんなに楽しそうに笑えるの？』と。

その時の彼女は本当にどん底で。

気力は底辺を這いつくばったまま上昇する気配を一向に見せなくて。

ただがむしゃらに『敵』を探し続けて、その敵を傷つける事でなんとか自分の存在を確立していたような状態だったのだ。

だから師である女性の前向きさが不思議で、こんな世界でも朗らかに笑えるその明るさが分からなくて、もやもやがイライラに変わって毎度の師弟喧嘩をして。

結局ボコボコに剣の平で殴られた上マウントを取られた後になって、素直に聞いてしまったのである。

それに対しての答えが、『絶対に譲らないものを持っているから』であり、補足として冒頭の言葉が続いたのだ。

『絶対に譲れないもの』ではなく、『絶対に譲らないもの』である辺りがどこまでもその女性らしく、その補足に全く迷いがない辺りがさらにその女性らしく感じた事を、『紅』たる彼女は今でも覚えている。

彼女が絶対に『譲らない一線』については聞かなかった。聞くつもりはなかった。

彼女の生き様を見れば聞かなくても想像がついたのだ。

彼女は自分みたいに過去を振り返ってばかりいない。

自分みたいに言い訳をしない。

自分の行動について他人を理由にしない。

そして戦場に出れば、例え大怪我をしている時であれ『絶対に先陣に立つ男の背後を譲らない』。

そのどれかが彼女の譲らない一線であり、そのどれもが彼女の譲らないと決めた一線なのだろう。

「アカちゃんもさ、譲らない一線ってものを見つけなよ。どうせ不器用にしか生きられないんだからさ」

そう言ってニコッと笑ってみせて。

「あたしみたいな生き方をしてたらね、きっと死んでも天国になんて行けないんだろうけど、例え地獄の底に落ちても譲らないものは譲らないってあたしは決めてるの。そう決めたらさ、誰彼かまわず牙を剥く必要なんてないでしょ？牙を収めれば笑う事も出来るようになるよね」

――あたしが牙を剥くべき相手、剣を抜くべき相手は、自分が決めた一線を踏み越えようとする相手だけよ。
だからあたしは大抵の事なら笑って許せるの。

そう締めて、ノックアウトした弟子を軽く小突いて、手を差し伸べてくれたのだ。

廃都と呼ばれるカーリアンにとっての第二の故郷にあたる街に比べて、その光都と呼ばれる都市は雑然としていた。
あちこちに人はいる。廃品を拾っている女や、継ぎ接ぎの農具を抱えた男、へたり込んでボーっと空を眺めている子供。
確かに人数だけ見ればそれなりの数の人間がいた。
ただそんな人々の全てに活気というものがない。少しでも売れるものを得る為に仕方なく廃品を回収し、食べられる分を得る為だけに慣れない農具を担ぐ。
路地にいる子供達にもはしゃぐ元気はなく、親も近くには見当たらない。
真っ当な親がいるなら、治安が著しく悪化している街に子供を一人で外には出さないだろう。
（って事は、あの子達はストリートチルドレンって事かな）
そんな事を考えて、今日三度目の見回りを終え、待ち合わせ場所へと足を向ける。

元々情に厚い彼女だ。それに物に執着しないおおらかな性格だった師の影響もあり、他人に何かをあげる事も嫌いじゃない。

しかしいくら可哀想に思っても、今の自分の立場を考えれば無闇に目立つ真似は出来なかった。多少の施しをする余裕があっても、そんな目立つ真似は出来ないのだ。

この街で……活気もなければ長もいない名前ばかりの関西の首都で、誰かに何かを施す事ほど目立つ真似もないぐらいは理解しているのである。

「この街は好きになれそうにないや」

そう一人ごちて、彼女はそっと踵を返した。

一向に現れない待ち人をただ待ち続ける事にも飽き、無駄な時間を費やす事に限界が来てから何度となく『光都』の偵察には来ていたが、その度に憂鬱な気持ちが膨れ上がってくる。

彼女の現在の故郷たる街、廃都と呼ばれる都市は、確かに建物のほとんどがボロボロになっている。幾度もの激戦で、攻め寄せる関西軍や、大規模な武装盗賊団を相手にフルに楯として鉄筋の建物を使ってきたのだ。無傷な建造物など一つとしてありはない。

身体のどこかが欠けた人間も珍しくないし、今までの防戦で費やした戦費や資材も莫大なものだ。

いざという時の為に備蓄する食糧と、配給する食糧だけでいっぱいいっぱいで、他の街に売りに出す余裕などありはしない。食うに困らないだけマシとはいえ、あくまでも『食うに困らない』というだけでしかないのである。

有り体に言えば貧乏であり、常に前線に立ち、命を張ってきた黒鉄といえども決して懐に余裕などありはしない。都市で作業する人々や、黒鉄や都市が所有する農園で働く人々よりは、多少マシといった程度でしかないのだ。

彼女も最近になって知った事ではあるが、現在所属している黒鉄第三班の長……そしてその側近連中など、自分に支給された賃金や

物資ですらも多少は足しになるようにと班の備蓄に蓄えているほどなのである。

特にシャクナゲと呼ばれる班長は、副官が気を利かせなければロクに自分のための買い物すらしないらしく、副官の仕事に無欲過ぎる班長の私物の管理まである事をカーリアンは最近になって知った。

住民達が着ているものも大抵は手縫いで作られたものだから、華やかさなどもないに等しい。

カーリアンの着衣は黒鉄の給金から大枚を叩いて買ったものだが、他の一般市民にそんな余裕などありはしない。

それでもこの街よりはあの廃墟ばかりの『廃都』の方が彼女は好きだった。

まだ綺麗な整った街並みを持つ光都よりも、あの活気ある廃都の方が好ましく思えたのだ。

「いつまでこんなとこにいなきゃなんないってのよ。偵察ばっかりじゃ飽きちゃうわ」

それでもそれぐらいしかする事がないのだから仕方がない。

あのレッドコードの前で、下手に力を使うワケにもいかないと判断した為に力の制御訓練も出来ないし、馴れ合う事が自分の性格にとって危険な事も彼女には分かっている。

彼女は必要とあらば力を他人に向けられる人間ではあったが、顔見知りや知人に力を向ける事が出来ないタイプだ。正確に言えば条件次第ではできなくもないが、その条件に踏み入って来ない限りは躊躇して力を減じてしまうのである。

だが、世の中には知人であれあっさりと力を向けてくるタイプがいる事もまた彼女は知っていた。

例えるなら三班の狂戦士ヨツバ。同じく三班の副官アオイ。五班のアゲハや六班のマルスもそういったタイプだと彼女は判断してい

る。

その判断の理由は主に『女のカン』でしかなかったが、カーリアンは自分の『予感』や『直感』の正確さには自信があった。

そしてそのカンは、あのレッドコードもそういった『知人』という枠組み程度では躊躇いを覚えないタイプだと告げていたのだ。

だからこそ無駄に話をする事を避け、己の力を見せる事も控えたのである。

その直感は、いずれあのレッドコードと戦う羽目になるんじゃないかと警鐘を鳴らしていたのだから。

そういった理由から彼女はする事もなく、散歩がてら光都を偵察していたのだ。

初めは大人しく待ち合わせ場所の橋の下にいたのだが、聞いていた落ち合う刻限を過ぎても誰も来ず、やがて手持ち無沙汰になり、暇を持て余しだした。

もとよりじっとしている事が出来ない性格だ。じっとしている事が苦手なのではなく、出来ないタイプなのである。

今回の偵察ですでに三度目となっているのは、そういった諸々の理由によるものだった。

「帰ったわよ、ってあんた落ち着き過ぎなのよっ！」

「座ってお茶を飲んでいるだけでしょう?あ、このクッキーは自前よ。信頼してくれるのなら食べてもいいけれどいかが?本はかさばるから小説しか持っていないのだけれど」

「お茶飲んで小説片手にクッキー摘む、とかここはあんたんチの庭かっ！?」

そういった理由から一人ヤキモキしながら橋の下に帰ると、彼女

には似合わない事を考えさせられている理由たる女がクッキーを食べながら小説を読んでいた。
ご丁寧にもどこからか拾ってきたらしい車の座席らしきものに座っていたりまでする。

「この座椅子なら向こうの廃品置き場にまだあったわよ？ひょっとして売り物だったのかしらね？誰かさんが追い払った連中が集めていたのかもしれないわ」

「あ、なら一つ持ってこよっかな……って違うわっ！」

出会ったばかりのレッドコードと二人連れ立って、待ちぼうけを食らっているカーリアンは途方にくれていた。
というよりも、『出会ったばかりのレッドコードにも』カーリアンは途方にくれていた。
直感を裏切るかのように、最初に出会った時の緊張感からすれば妙に緩い所がある彼女の性格や、待ち時間を全く苦痛に思っていないらしい落ち着きぶりに。
そして何より――

「約束の時間になっても人っ子一人来ないじゃないのよっ！どうなってんのっ！？」

「ウチに聞かれても困るのだけどね」

「じゃあ誰に聞けっての！？」

「少なくともウチ以外の誰かに聞く事をオススメするわ。私は任務の詳細自体知らないんだもの」

「って読書の片手間に適当に相槌打ってんじゃないわよっ！」

散歩（彼女は本当に散歩気分）から帰ってくる度に増えていく『くつろぎグッズ』に。

ボロボロにすす切れた小説、お茶の入った水筒（買ってきたらしい）、座椅子と来たのだから、次辺り何が増えているのか想像もつかない。

「くっそぉ、副官のヤツっ！絶対帰ったら泣いてもぶん殴ってやるっ！」

面倒な事を押し付けた副官を呪い、いつまで経ってもやって来ない諜報員達をどの程度燃やしても許されるか真剣に検討し、楽しげに待ち時間を過ごしているエリカを脇に、カーリアンが光都にやってきてから最初の日が暮れようとしていた。

「ねぇ、カーリアン。一つ提案があるのだけど」

「なによ？」

二人揃って自前の簡易食料を腹に収め、建ち並ぶビルの一つに入って小休止をしていたところで、エリカがいつもの調子で声をかけてきた。

黒の外套を直接地面に敷き、その上に胡座をかいている姿は気楽

な様子に見えなくもないが、一足飛びではギリギリ届かない距離をカーリアンとの間に置いている辺り抜かりがない。

もっともそれは、いまだに警戒を解いていないカーリアンに気を使っている部分もあるのだろう。

近接戦ではなく中距離戦になる距離、つまりカーリアンの紅が最も力を発揮するミドルレンジ。今までエリカとの間にカーリアンが取ってきた間合いから、彼女が近接戦よりもどちらかというと少し距離を置いた中距離戦を得意としている事を、この元コードフェンサーは悟っているのだろう。

そしてそれを悟られている事を知っていて、カーリアンは敢えてその距離を置いていた。

紅の特性上、近距離よりは中距離、両手の範囲からさらに数メートル離れた間合いが理想的な事は間違いない。

ただしそれは、近距離での肉弾戦が全く出来ない事と同義ではない。

なにしろ彼女の師は、接近戦ならばかの『黒鉄』よりも上だとまで言われた『剣匠』なのだ。

弟子達が総掛かりで挑んでも、剣の平でボコボコに打ち据え、軽く全員を返り討ちにしてしまうような接近戦のスペシャリストだったのである。

その師がいた頃に鉄拳混じりで鍛え上げられたスキルと、師がいなくなってからの一年で磨かれた経験値は、元は殴り合いや殺し合いに全く縁のなかった彼女に、紅を効果的に接近戦で用いるすべを体得させている。

だが、無闇やたらとそれを晒す必要もない。ましてやこの『レッドコード』が相手では、警戒をしてし過ぎるという事もないだろう。

他の大多数のパイロキネシスト達のように、距離を置いた戦い方しかしないタイプだと思ってくれているのならそれにこした事はな

い。
もちろんそんな考えすらも読まれている可能性はあったが、何も手を打たず自然体でいるよりはマシだと考えた為に、カーリアンは距離をそれなりに取ったままにしているのだ。

「さずかに日が暮れるまで待ち合わせの相手が来ないなんて異常でしょう？」

「まぁ、確かにね」

そんな精神戦を会話の最中も続けるカーリアンに比べるとエリカはどこまでも泰然自若としていた。
これまたどこからか拾ってきたらしいクッションにもたれかかり、ジッと見据えてくる瞳にも余裕のようなものが見て取れる。

「だったら一度帰還するべきじゃないかしら？正直に言うなら、ウチが早く廃都に帰りたいからというのももちろんあるのだけれど、もし待ち人にアクシデントがあって合流出来ないのなら時間を無駄にしてしまうわ」

「ま、そうかもね。時間厳守は作戦行動に当たっては基本中の基本だし」

『閃光』などという、いかにもなコードで呼ばれていたと自称する程には、エリカの気配には戦い慣れた者が持つ匂いがあった。
それは元二班班長として戦線の後方にいる事が多かった、紅のカーリアンが持っていない歴戦の戦士の気配だ。
圧倒的な力を持っているスズカや、その能力から黒鉄では支援や裏方に回る事が多かったスイレン、カーリアンと同じく後方部隊所属のオリヒメが持っていないものだ。

シャクナゲやナナシ、ミヤビが持っていた命を晒して戦う者が持つ、感じ慣れた気配なのである。

「もちろんあなたになんらかの理由があって、それでまだしばらくここで待つというのならそれに従う事は吝かではないのよ？ウチはあなたを頼っている身だものね。でも意固地になって、来ないかもしれない待ち人を待っているのならそれは勘弁してほしいわ」

「あたしだって待つのは嫌いよ。でも……」

このレッドコードの提案に乗る事も嫌だった。

意固地になっているつもりはカーリアンにもなかったが、『レッドコード』という名前に持っている嫌悪感はどうしようもない。

本来ならば、待ち合わせの刻限を過ぎた時点でカーリアンは即時撤退していただろう。彼女は徹底的に『待ち』に向いていない性格なのだ。

そうしなかったのは、ひとえにこのレッドコードの存在によるものだ。

このレッドコードを『廃都』に連れていっていいものか。『彼』に会わせていいものかを、少しでも見極めようと考えたのである。

一度は連れていく事を承諾したものの、即時実行というワケにはいかない。現在の彼女には、班長補佐として班長の考えを汲む必要があったが、それ以上に班長や仲間に降りかかる火の粉を払う義務もあるのだ。

甘い考えを持つ班長を補佐するには、同じように甘い考えに殉じるだけではいけない。

時には副官のアオイが持つような、シビアさが必要な事を彼女は学んでいたのである。

「……でも、そうね。明日の待ち合わせ時間までは待ってみて、そ

れでも来なかったのなら帰る事にしましょうか」

しかし、さすがに何日も待ち続けるワケにはいかない。すでに待ち過ぎなほど待っているぐらいだ。

ここで帰ったとしても誰にも文句を言われる筋合いはない。それどころか、逆に文句を言う資格すらあるだろう。

そしてこのレッドコードを警戒して様子を見るにしても、一日以上はさすがに無理がある。

それらを考慮し、しばし黙考した後、彼女はそう決断を下した。

「言っておくけど、あなたの提案に乗ったワケじゃないのよ？勘違いしないでね」

もちろんそうエリカに釘を刺しておく事も忘れない。

「ええ、わかっているわよ」

「わかってるっていうなら、その意味深なニヤニヤ笑いはやめてっ！」

もちろんカーリアンが軽く刺した程度の釘では、エリカの態度は小揺るぎもしない。普段の不器用な笑みではなく、やたら晴れやかな笑みでカーリアンの言葉にうんうんと頷いてみせる。

しかしその笑みに擬音を付けるなら、『ニコリ』ではなく『ニヤリ』だろう。少なくともその笑みを向けられたカーリアンにはそう感じられた。

「あら、心外ね。精一杯晴れやかな笑みを向けているつもりなのだけれど」

「言ってなさい。明日は刻限を過ぎたら一気に帰還するからねっ！」

そう言ってコートにくるまると、カーリアンはコロンと横になった。

衣類の詰まったバッグを枕に、結局拾いに行った車の座席を寝具にする。それらを気にした様子もなく、寝苦しさを感じる事もない。

出生地である東海地方にいた頃は、とてもこんな環境では寝られなかったが、そんな甘ったれた根性は抜けきっている。

師であるミヤビなど、カーリアンよりも小柄で可愛らしいスタイルだったのに、ダンボールを布団に地べたでグースカ眠っていたぐらいだ。そんな彼女に徹底的にしごかれた経験はこんなところにも生きていたりする。

「……やっと帰れる」

そんなやりとりからでも、帰還すると決めたらやはりカーリアンの心は軽くなった。

思わずそんな言葉が口を付く程度には。

かつて黒鉄だったと名乗る女。

エリカ。

――明日はきっと今日よりも疲れる事になるだろう。

そんな予感を胸に、彼女はゆっくりと瞳を閉じた。

2―28・光都の片隅にて（後書き）

題名めちゃ悩んだ……。
使いたい題名がふと浮かんだ時、本を読んでいて使いたいフレーズがあった時などは携帯のメール欄にメモっているんですが、これってなかなか使う機会がないんですよね。
話に合う題名でなきゃならないし、題名に合わせて話を書くワケにもいかないですしね。

次回もカーリアンターン。
というか何週間かはカーリアンターン。
エリカの目的が出るまでぐらいは続きます。
そしてスズカターン、アオイターン、スイレンとヨツバ、カーリアン、シャクナゲと続きます。
半分は終わったかな。
後半もよろしくお願いします。

2―29・大事なものは残されている

「さて、さっさと帰るわよっ！」

眠る前までは散々色々と考えを巡らせていたはずなのに、目が覚めた瞬間にはカーリアンの頭の中からそんな考えなど綺麗に消え去っていた。

――もう廃都に帰ってもいいんだ。

起きた瞬間にそんな事が頭に浮かんだ以上、彼女のテンションは否が応でも上がってしまう。

もう待たなくてもいい……そんな事などより、今は『帰れる』事の方が彼女には嬉しかったのだ。

現在、廃都と呼ばれる街は未曾有の混乱の中にある。

そこで今も苦労している仲間達。

彼女が出生地である東海地方から共にいる少女は、きっと文句を垂れ流しながら……あるいは雑事を押し付けた男に呪いの言葉を吐きながらも、手を抜けないその性格から人一倍頑張って裏方や雑事をこなしているだろう。

水鏡と呼ばれる女性は、きっと見境なしの同僚に苦労をかけられながらも、仲間達の……そして居場所を守る楯となるべく、いつも通りのたおやかな笑みを浮かべたままその身を張っているだろう。

副官の男は、いつもと変わらない笑みを浮かべたまま、自分がす

べき事を最も効率的なやり方でこなしている事だろう。

――そして一人、誰も知らない混沌へと立ち向かっている男。

黒鉄の創始者たる純正型の男が造り上げた、『変種の皇をも殺せる武器』を破壊すべく一人地下へと入っていった彼。

他の仲間達がその存在に狂わされないように、その間違った存在を望んでしまわないように、他班の誰にも知られる事なく一人過去に立ち向かっている仲間。

（また無茶してるんだろうな、あいつ）

しっかりと胸に抱いて寝た、その男の愛銃にして呪縛が包まれたお手製ガンベルトの表面を軽く撫でるだけで、カーリアンは思わずほっこりとしてしまいそうになる。

その柔らかな表情と穏やかな心情は、無茶をしていても『彼は大丈夫』という予感が彼女にはあったからだ。

今の彼は――自分や二班の面々まで新たに仲間として抱えた彼は、以前よりももっと安易に死ねなくなったはずだから。

全てを知っても付いてきてくれる仲間達をほったらかしにして、あの変にお節介な男が自分だけ楽になれるはずがないのだから。

そんな仲間達の事を思えば、彼女の気持ちは朝起きてすぐの状態であっても逸りそうになってしまう。

「朝からあなたは元気ね？ウチは低血圧だから、もう少しテンションを下げて欲しいのだけど」

「さっさと起きて支度して！時間になったら一回橋の下を見に行って、そのまま神杜まで帰るんだから」

「えらく張り切ってるのね。朝はゆったりとした時間を過ごしたいものだけど……あなたの言う通りにするわ」

もちろん今の旅の連れである『レッドコード』の事は忘れていない。

彼女を連れて帰ると決めたからには、当然その責を全うする覚悟がある。

つまり、『彼女が仲間達に害をなす存在だったのなら、自分の手で始末をつける』という覚悟が今もあるという事だ。

しかし、それはいついかなる時でも牙を剥くべく心掛けておく、という事と同義ではない。

『レッドコードだから……自分の勘がそう告げているから、彼女とは戦う羽目にだろう』

そう決めつけてかかるのは、カーリアンがミヤビから学んだ一番大事な黒鉄としての心得……『いつも笑っている為の心得』から反するのだ。

――彼女があたしの決めた一線を越えた時、その時までは笑っていよう。

朝目覚めた瞬間にそう決めただけで、彼女は彼女らしさを取り戻していた。

特に夢を見ていたワケではないのに、何故かモヤモヤしていたものが目覚めた瞬間には消えていたのだ。

――いつでもどんな時であっても、むやみやたらと牙を剥いたりなんかしなければきっと笑う事も出来る……か。

あたしが『紅』という牙を剥く時は、あたしが譲らないと決めた一線を踏み越えようとする相手がいる時だけ。結局はそれだけの事

なんだよね。

そんな単純な考えを改めて刻みつけただけで、カーリアンは自分らしさを取り戻せた。

昔のいつでもどんな時でも『敵』を探し、誰にでも強大な『紅』の牙を剥いて威嚇してみせた『死にたがり』から離れられたのだ。

師の鉄拳でもって刻み付けられた記憶。

笑顔でもって示された道。

涙でもって教えられた暖かさ。

それは今でもカーリアンを助けてくれている。

朝焼けの空が目蓋を焼いた。

僅かに活気が感じられる朝市の声が耳朶に響き、カーリアンは軽く目を細めた。

「ん～～」

「今日は何故か昨日よりも機嫌が良さそうね？」

気持ち良さそうに伸びをする彼女に、隣で出立の準備をしている黒い外套を羽織った女が思わず訝しげな声をかける。

「そう？」

「えぇ。昨日はやたらピリピリしていたから、夜眠る前も少し緊張

していたのだけど」

「寝込みを攻撃する真似なんてしないわよ」

「そこまでは考えていないわ。あなたはそんなタイプには見えないもの」

「ふん」

確かにカーリアンは感情が表に出るタイプで、裏工作や闇討ち、不意打ちに向いているタイプではない。

それは彼女自身も自覚している。

しかし、それを読み切ったかのようなエリカの台詞には思わず鼻を鳴らしてしまった。

「ただ、朝起きたら『やっぱり連れて行かない』とか言い出したりしないかと不安にはなったけれどね」

「それこそないわよ。あなたが本当に仲間になりそうなんだったら放っておくのは薄情ってものだし、本当の意味で仲間になれそうにないんだったら、なおさらあたしが目を離すワケにはいかないでしょ？」

――仲間になれるのならばその手助けはするべきだ。しかし、仲間になれないのならば、なおのこと目は離せない。仲間になれないのに味方に入り込もうとする相手は、きっと単純な敵よりも厄介な相手だから。

カーリアンがそう言外に言っている事を悟り、エリカはなおさらおかしそうに笑う。

「……ふふっ、そうね。全くもってその通りだわ。昨日も思ったのだけれど、あなたはやっぱり彼女に似てるわね」

「彼女？」

「昔の知り合いよ。もういないわ」

「そっ」

そんな簡潔極まるカーリアンの返答にも笑みは増していき、最後には声を上げてエリカは笑いだした。

目には薄く涙が滲んでいる辺り、かなり本気でツボに入った様子で、笑われているカーリアンの方は思わず首を傾げてしまう。

しかし、意味も分からないまま笑われているという状況に、さすがに面白くなかったカーリアンはムッと顔をしかめるが、それよりも早くにエリカが口を挟んだ。

「あぁ、気を悪くしないでね？あなたのようなタイプ、ウチは好きなのよ？」

「笑いながら言われても信用出来ないわよ」

ムッツリとして見せてはいても、そこに敵意じみたものがない事は分かっていたのだろう。エリカは憚る事なく笑みに顔を崩して続けた。

「他人の過去には無闇に触れない。仲間に及ぶ危機は見逃さない。あなたはシャクナゲや彼女みたいな典型的な『黒鉄』ね。

今はもう少なくなったと思っていたのだけど……」

「黒鉄はなくならない」

エリカが言う『彼女』。

それが誰なのか、カーリアンには分かった。

シャクナゲと共に典型的な『黒鉄』として挙げられる存在。

それは『カーリアンになる前の自分』――『死にたがり』とまで呼ばれた真っ赤に濡れた過去には全く触れもせず、気安く近寄ってきた少し年上の少女。

戦場では誰よりも勇猛果敢な剣使いでありながら、他人の抱える闇にはあっけらかんとした態度でもって接してきた彼女。

その抱えた闇ゆえに間違った方向に歩き出そうとした時にのみ、全力でぶつかってきた『錬血』と呼ばれた最初の黒鉄の一人。

それを悟った瞬間、カーリアンの口からは言葉が漏れていた。

「人がいなくなっても記憶は残る。意思は残る。想いも残る。

確かにあんたがいた時に比べたら、強い力を持つ黒鉄は大勢いなくなったかもしれないよ。でもさ、今の黒鉄が昔よりも弱くなった、なんて考えないでね？」

「……」

「まだシャクがいる。あたしもいる。スズカもスイレンもいるし、今は仲違いしてはいるけどナナシやオリヒメもいる。

そしてみんなに残された意志も、託された想いもちゃんとこの胸に刻まれてる」

そう語るカーリアンの表情に硬さはない。強い口調でもない。

それだけに揺るぎがない。

脅しをかけるようでもなく、誇る風でもない言葉は、ただ事実を思ったままに告げるそれだ。
それに呑まれるかのように、エリカは笑みを収めた。

「さっ、朝市でも覗きに行こ。何か手に入ったら、不味い簡易食料食べなくても済むしさ」

「……そうね」

――そんなに持ち合わせもないんだけど。
あっさりといつもの調子に戻り、そんなことをぼやきながら背を向けるカーリアンに、エリカも続けて立ち上がりながらその口元をキュッと噤む。
まるで先ほどのカーリアンの言葉をしっかりと噛みしめるかのように。

「その通りだわ。昔の顔なじみ達がいなくなったからって、腑抜けた連中ばかりが残されているほど甘いワケがなかったわね。
ミヤもアカツキもそんなに甘い人間だったのなら……弱い人間だったのなら、ウチは『アレ』を諦めて黒鉄を抜けたりなんかしていないもの」

その瞳は暗く深い色を宿して。
蒼白に近い色の寝起きの顔には、どこか寂しさを宿して。

「でも、今更諦めるなんてもう出来ない。
例えあの街にあなた達の意志が残されていても――ずっと憧れて、後を追っていたウチには、もう『アレ』しかないのだから」

そして、閃光を名乗る女は先に出たカーリアンの後を追って廃屋

を後にした。

もはや『来るはずのない諜報員』を待つ彼女を……自分でも意外なほどに気に入ってしまった昔馴染みによく似た彼女を、一体どうするべきか考えを巡らせながら。

2―29・大事なものは残されている（後書き）

来週もちゃんと更新します。
今回よりは長いです。

2―30・宵闇に包まれる前に

「来なかったね」

「そうね、諜報員だか連絡員だか知らないけれど何かあったのかしら？」

「……今日も来なかったわね」

「……？そうね。今はこの街も混乱しているから、何かトラブルにでも巻き込まれたのかしらね？」

「何かあったかどうかなんてどうでも――よくはないけど、それは問題じゃないわ」

「そう……なの？」

昨日一日いた橋の下でカーリアンは一人猛々しく気炎を上げていた。

高々と掲げた握り拳が年頃の少女の割に無駄に雄々しい。カーリアンはやや溌剌とし過ぎた印象もあるが、見た目も美しいと言っても過言ではない少女なだけに、普通ならばその仕草に違和感を感じてもおかしくはないだろう。

そんなカーリアンを横目で見て、エリカは開いていたページに折

り目を入れてから本とじた。

――こんな仕草が似合い過ぎているところまで彼女に似なくてもいいと思うのだけど。

しかし、隣で見ていたエリカがそんな事を思うぐらいには、その雄々しい仕草が似合っていたりする。

「問題はこのあたしに！わざわざお使いを頼んでおいて！結局無駄足を踏ませてくれた副官にどの程度ヤキを入れるかよ！」

「そこが問題なのね」

「大問題よ！今のあたしは一応班長補佐って役割があるのに、あの副官野郎ったら班長補佐を顎で使ったあげく、わざわざ光都くんだりまで無駄に足を運ばせてくれちゃったのよ！？カクリと一緒にこってり絞ってやるんだからっ！」

ただカーリアンの場合、気炎を上げてそれで終わりではなく、パチパチと赤い稲光が宙を走ってしまう辺りタチが悪い。

その赤い稲光が、『発火能力者』である彼女の力の発露である事がすでにわかっていたエリカは、少しだけ距離を取り小さな溜め息を漏らした。

昨日までのカーリアンは思慮深さと短慮さ、慎重さと短絡さが複雑に入り混じって、コロコロと印象を変えていた。

時折薄い殺気じみたものをエリカに放ったかと思えば、やおら朗らかになってみせたりとコロコロと表に出ている感情を変えてみせたのだ。

――それが今日起きたらいきなりここまで落ち着いてみせるなんて、眠っている間に何かあったの？

正直な話、ここまで感情に『ブレ』がなくなるとエリカからすれば気味が悪くもある。

もちろん『ブレ』がなくなったと言っても、感情そのものに起伏がなくなったワケではない。それは現在の『副官にヤキを入れる』と気炎を上げまくっている状況を見ても明らかだ。

ただ、『エリカに対しての接し方』、そして『エリカに対して向ける感情』にブレが見られない。

昨日と比べてエリカ自身にはなんの変わりもないのに、だ。

昨日と態度を変えたワケでもないし、口調に違いがあるワケでもない。昨日と同じくカーリアンの力を測っている部分もあるし、腹に一物も含んだままだ。

確かに多少カーリアンに興味を惹かれる部分はあれど、そんな好奇心に近いものなどエリカの目的の前にはさほど重みがあるワケではない。だからこそエリカ自身の態度は変わらない。

そんな彼女をエリカは少しばかり警戒し、同じく膨れ上がる興味が顔をもたげてしまう。

目の前で自分が起こした癇癪が廃材に火を着けた事に、あわあわと泡を食って火を踏み消している年下の少女に。

そんな癇癪まで『副官』とやらのせいにして、またまたいやに勇ましく帰還宣言をしている姿に。

――本当に面白いコ。

エリカは内心でそう小さくひとりごちて肩をすくめてみせる。

仕草がやたら雄々しく、感情が読みやすく、なおかつその感情のベクトルが常に上向きであるその姿は、かつてよく見知ったもので。

よく見知った、今はもういないはずの女性とそっくりなもので。
『レッドコード』である閃光としては少しだけ憂鬱な気分になる。
そんな少女を利用して現在の廃都の情報を集めつつ、帰り道の伝手を得ようとしている自分自身と、『アレ』を手に入れようとした時に立ちはだかるであろう彼女と戦わねばならない時を思って。

「帰り道はどうするの？」

「歩きよ」

「……はっ？」

「歩いて帰るの。ドゥーユーアンダスタン？」

今現在も関西地方で孤立している都市、廃都『カリギュラ』。
冗談のようなノリで名前が付けられたとしか思えないその都市は、レジスタンス活動が活発な関西地方において、そういったレジスタンス達の中心と言っても過言ではない都市だ。
東にある関西統括軍の都市、戦都とは絶えず抗争を繰り返し、西にある水都とも時折思い出したかのように争っている軍事都市。
むしろ規模的に言えば光都に次ぐ規模である上に、食料自給率や今も残された数多の工業施設などを見れば、もはや都市国家と言っても過言ではないレベルだろう。
武装は関西軍所属の光都や戦都に劣るとしても、黒鉄というレジスタンスに所属する人々の人的戦力でいえば決して見劣りはしてい

ない。むしろ今の混乱のさなかにある戦都や光都などを上回っているほどだ。

辺り一帯を敵地に囲まれていても自立してやっていけたのは伊達ではないという事である。

もちろんアカツキと呼ばれるレジスタンス『黒鉄』の創始者が計画した、『都市防衛計画』によるものが大きい事も間違いないが、『廃都』となる前の『神杜』という都市の下地が大きかった事もまた事実だ。

そんな都市……辺り一帯を長らく敵地に囲まれてきた街だけに、周辺には『関所』が随所に敷かれている。

関西統括軍が敷いた関所だけではない。廃都のレジスタンスが交代で見張りに立つ警戒施設が置かれているのだ。

警戒施設とは言っても簡単な櫓と狼煙台があるだけのものから、比較的堅固そうな建物を中心に簡易ながらも柵と壕を掘られた小さな砦じみたものまである。

それらがエリカにとっては問題だった。

簡易なものであっても、ひょっとしたら『そこに彼女を知る者がいるかもしれない』。

砦並みの施設ならば、それなりの戦歴を持つ黒鉄が間違いなく詰めているだろう。

そうなった場合、黒鉄の本部である廃都に連絡が行く事は確実だ。最悪、連絡云々以前にそれら関所兼防衛施設に、昔からの『符号持ち』がいれば厄介な事になる。

だからこそ、それら黒鉄の警備の目をすり抜ける為だけに、カーリアンが帰りに用意するすべが頼りだったのである。

彼女が車を用意しているのであれば、それに乗っていくだけで黒鉄の目はフリーパスだろう。帰りにカーリアンが黒鉄の砦に寄って

いく可能性もなくはないが、彼女の知り合いとなれば『顔馴染み』以外ならやり過ごせると読んだのである。

――それがまさか帰りは歩きだなんて。

計算があっさりと狂い、思わずエリカは唖然としてしまう。

敵性都市一つを跨いで帰還する方法がまさかオール歩きでの強行軍だとは考えもしなかったのだ。

またカーリアンが――先ほどまで『副官』とやらにブチブチ文句を言っていたカーリアンが、帰り道について不満や不安を漏らしていなかった事が、なおさらエリカにとって予想外の事に思わせた。

普通ならば今までの段階で、帰り道が歩きという事に対して愚痴や不満を漏らしているだろう。なにしろひたすら歩いても、位置関係や距離から一日では帰れるか微妙な場所だ。

それなのに彼女は帰り道について、エリカの前では不満らしきものを見せていなかったのである。

だからまさか『歩きで帰る』などとは思わなかったし、『帰りが歩きだとあっけらかんと言われる』などとはもっと思ってもいなかったのだ。

「えっと……分かっているとは思うけれど、廃都まではかなり距離があるわ」

「……？？そうね？歩いてきた事はないけど」

「歩いて帰る事に不満はないの？」

「不満？」

はて、と小首を傾げてみせるカーリアンに、疑問を投げかけたエリカは思わず立ち眩みを起こしそうになる。
不満など全くなさそうな、少なくとも今はその事を『なんとも思っていなさそう』なその仕草に。

「確かに歩いて帰るなんて面倒だけどさ。みんなだって廃都で苦労してんのに、班長補佐のあたしが帰り道を楽したいなんて勝手は言ってらんないし」

「……」

「それに不満を言ったらそれがどうにかなるの？」

「……はぁ」

――忘れてたわ。そう言えばミヤも物事が決まるまではゴネたけれど、決まってしまった後までグチグチと不満を言うような人じゃなかったわね。
それに自分の立場や力を利用してまで、自分だけが楽になる道を選べるコでもなかったわ。

この赤髪の少女と全く同じようなスタンスを持っていたかつての顔馴染み。彼女からも同じように首を傾げつつ同じような事を言われた過去を思い出して。
同じように心底不思議そうな瞳で見られた事を思い出してしまって。
狂ってしまった計算を『まぁ、仕方ないか』と納得してしまう。
そんな感覚すらも懐かしいもので、エリカは小さく肩をすくめてみせてから先に歩き始めたのだった。

「ねぇ」

「……あんまり聞きたくない気がするけれど、なにかしら？」

「……ここってどこ？」

「……はぁ」

カーリアンに関して言えば、これから何があってもどんな事をされてもびっくりしない心構えはあった。少なくともエリカはそのつもりだった。

昔の顔馴染みはいろいろと破天荒で、あっさりと常識をすっ飛ばしたかと思えば、非常識すらも蹴っ飛ばしてみせるような女性だったから、カーリアンに関してもその女性と向き合っていた時と同じように考える事にしていたのだ。

ただ自分の街に帰る時になって『真っ直ぐ北』に向かった時にはさすがに首を傾げてしまった。

それでも好意的に『真っ直ぐ東に向かい戦都を越えるよりも、迂回するルートを取っているのだろう』と考えて黙っていたのである。

まさか間違って北に向かっているなどとは思ってもいなかったし、明けてそう間もなかった陽が中天に差し掛かるか否かの時間になってから、『迷っただけ』と暴露されるなどとは露ほども思っていなかった。

思いたくなかった、といった方がより正解に近いかもしれないが。

「……こんな事言いたくはないけれど」

いろんな意味で言いたくもなければ認めたくもない事実を口にするのは、さすがのエリカでも疲れたような口調になってしまう。

「あなた最初から北に直進しているわよ？さすがに古都よりは光都の方がまだ近いけれど」

「……うそっ！？」

「本当よ。てっきり戦都を迂回しているか、はたまた少し光都から離れた場所で車でも調達するつもりなのかとばかり思っていたのだけど」

迂回路にしては北過ぎる位置まで来た時点で、エリカは光都の連中の目が届かない場所まで行って、関西軍に所属する車を力ずくで奪う為かと考えを改めた。関所を襲うか、あるいは古都との連絡に走る車を奪うかする為だと信じたかったのである。

それにしてはカーリアンが首を傾げだしていた事が訝しく思えたが、その仕草は見なかったふりをした。

その矢先にこんなやり取りをする事になるとは考えたくなかったのだ。

「なんでもっと早く言わないのよ！？」

「それはさすがに理不尽というものよ？あなたが自信満々で先を歩いていたんでしょう？ウチはあなたに付いて歩いていただけなんだ

から」

「それでも普通『おかしいな』って思ったらすぐ言うもんでしょ！？」

「ええ、そうね。全くもってその通りよ。あなたの言い分は正しいわ、カーリアン。

これから帰る先があなたの街じゃなければ……あるいはあなたが自分の家への道も分からないような、小さな子供だったのならもっと早くに声をかけていたでしょうね」

「……うっ」

「それに、ウチが一年以上もあの街を空けていなかったらすぐさま間違いを指摘したいたと思うわ」

「……むぅ」

「唸ってもダメよ。もちろんそんな上目遣いで睨んでみてもダメ」

エリカの言葉にバッサリと斬られたカーリアンがなにやらブツブツと愚痴を垂れていたが、そんなものには目もくれず、彼女はすっと真横……よりやや後ろ方向に指を立ててみせる。

灰都があるであろう真東よりもやや南よりの方向を。

「今まで自覚していなかったのかもしれないから言っておくわね。

カーリアン、あなたって間違いなく方向音痴よ」

「うっさい！」

――今までカクリの言う通りに作戦行動を取っていただけだから、廃都の外の地理なんかわかんないわよ。
あたしってこの辺りの産まれじゃないし！
そんな言い訳にしてもどこか情けない言葉を背中に聞きながら、エリカは今日何度目になるか分からない溜め息を漏らした。
――このコは厄介さでいえばミヤよりも数段上手だ。少なくともミヤは方向音痴じゃなかったし、こんな風に可愛らしく膨れてみせたりなんかしなかった。
自分がかつて仲良くしていて。
世話にもなって。
命さえも何度となく救われた女性に、言動から性格からそっくりでありながら、遥かに手のかかる少女。
そんな少女に、実はエリカは心底参っていた。
手のかかる少女でありながら、なんとなくその『手のかかる』辺りが放っておけないという感覚に陥ってしまっていたから。
今はもういない昔馴染みの女性には、積もり積もった莫大な借りを受けておきながら、結局エリカはそれを仇で返してしまっていたから。
もはや返す宛てもなかったその借りを、そこはかとなく被って見えるこの少女に返してしまいたくなっていたから。
――あぁ、もう！こんなはずじゃなかったのだけど！
たまたま見かけただけの黒鉄。
たまたま見かけてしまっただけの少女。
その少女を見かけた際に自分が描いていたプランが、もはや根っ

こから木っ端微塵に砕けてしまっている現実に、エリカは目眩すら覚えていたのである。

――やるなら早くするしかないわね。

そうしなければウチは本気じゃいけなくなる。本気で行かなければこのコには勝てない。

寝首を掻いてやる事には抵抗があった。

そんな手法ですら普段のエリカならば躊躇なく取れただろう。しかし、カーリアン相手には取りたい手ではなかった。

――真っ向から話してみて……そして結果戦いになったのなら、それは仕方のない事でしょう？ミヤ。

そう考えて、真っ直ぐに廃都へと向かっていた方向を少しばかり修正する。

一年前の記憶を掘り起こし、このあたりの地図をなんとか脳裏に思い起こして、戦都とも光都ともある程度距離があり、なおかつ関所のなかった場所へと向かう。

歩く速度ですらも、夕刻に差し掛かる頃にそのあたりへと着くように調整しながら。

――陽が暮れるまでに、宵闇が広がる時間までにケリを付ける。

『宵闇』に包まれながら彼の仲間を傷つける、なんてさすがに気分はよくないものね。

そして。

閃光を冠された女は、らしくないやり方でもって動き始める決意を固める。

欲しいものをただ手に入れる為だけに。

ずっと願っていたものを手中にする為だけに。
そんな自分らしくない感傷に浸っている自分を、軽く鼻で笑ってしまいそうになりながら。

2―30・宵闇に包まれる前に（後書き）

すんません。遅れました。
この分だと来週も微妙そうです。
頑張りますけどね。今書いてるあたりって難しいんですよね。
プロット書いてあっても、会話やら地文やらはないですから、一から書くしかないですしね。

本当のところを白状すると、少し先のシャクナゲターンやスズカターンを書いてたんですけど。

2―31・最初の障害

「どうしても欲しいものがあったら――なんとしても手に入れたいものがあって、それが他の人の手の内にあったのなら、あなたはどうする？」

簡単に少し早めに野営の準備をした後で、エリカはそうカーリアンに問い掛けた。

野営の準備といっても至極簡単なもので、飲み水とする為に近くの貯水層の水をカーリアンがその力でもって沸騰殺菌し、夜に火を焚く為の木々をエリカが集めて回っただけでしかない。

寝る場所など雨が降っていなければ、外套やコートを広げるスペースさえあれば……そして関西軍の目が届きにくい場所であればどこでも構わない。

元より二人とも黒鉄と元黒鉄だ。どこであれ眠れる程度の神経の太さぐらいは持っている。そうでなければ、どんなに不利な局面であれ諦めず戦うなんて真似は出来ないのだ。

そんな野営というには簡素過ぎる準備をして、お互いに持っていた食料を口にしている最中に、エリカはなんとはなしを装ってそう会話を始めた。

対するカーリアンはと言うと、『とっておき』らしい干し肉を片手で掴み、軽く表面にその力の発露である赤い光を走らせて炙りながら、もう片方で沸かしたお湯を小さな器に入れていた。胡座を組

んだ目の前には、味噌がはいった小さなアルミのパックが置かれている。
それら食事の準備をしながらエリカの言葉を正面から受け、カーリアンは小さく首を傾げてみせる。
「ものによるんじゃない？頼んでくれるものならいくらでも頼みこんでみるだろうし」
「それが普通かもね。でも頼みこんでも貰えないものなら――大事に抱え込んで、手放しそうにないものならどうする？」
「……」
「どうしても諦めきれない。ずっと憧れて、ずっと欲しくて欲しくて仕方がなくて、ふとした瞬間に想いを馳せると、狂おしいほどの衝動に駆られるような存在。
そんなものがあったら、あなたはどうする？」
エリカの言葉を受けながら、カーリアンは用意していた食事を手に持ったまま、心持ち軽く重心を後ろへと下げた。
今の会話、いきなり振ってきた『欲しいもの』に対する想いを述べた言葉。
それらが一体なにを意味しているのか彼女に分かったワケではない。
単に今のエリカの言葉に、『直感』と『紅』が動いた感覚があっただけだ。
自分の『女の勘』は直情型であるカーリアンにとって信頼に値するものだ。それだけではなく、『紅』が――他者からカーリアンに向けられる感情、中でも『害意』に反応する力が蠢いた事が彼女に

悟らせたのである。

――今の会話にある『欲しいもの』に対する想いこそが、彼女を再び黒鉄へと誘ったのだと。

そしてエリカがその欲しいものを得る際に、自分は障害になりうるのだと。

「ウチにはね、そんな風にずっと欲しかったものがある。欲しくて欲しくて仕方なかったものがある。それは他人が欲しがっちゃいけないものなのかもしれないけれど、そんな理由じゃ到底諦められなんてしないわ。

ウチの憧れは――そんなに安い想いなんかじゃない」

「……それは」

――誰が持ってるの？

その言葉が開戦のゴングになる事は本能的に分かっていた。紅の蠢きがエリカの心情を教えてくれていたからだ。

エリカの視線を受けて自分の内で紅がたかぶっていく理由を考えたなら、その疑問をぶつけてしまった後、自分もエリカも引けなくなるのだろうとカーリアンは悟っていたのである。

恐らくまだ早い時間帯から野営の準備を始めたのも、このような会話を食事前に振ってきたのも、エリカなりに真っ正面からぶつかってきた末の結果なのだろう。

日は沈みかけているが、先が見えないほど暗いという時間帯ではない。夜通し歩いて帰るつもりだったカーリアンからすれば、こんな時間から野営の準備など不自然極まりない。

それでもエリカの言に従って食事の準備を始めたのは、単に彼女にはここがどの辺りなのかすら分からなかったから、先導役となっ

たエリカに従う他なかったからだ。

何故エリカが、油断させておいて不意を討つような真似をしないのかはカーリアンにも分からない。

ただ開戦のゴングとなる疑問をぶつけずに、エリカの話を流すような真似をカーリアンには出来なかった。

今まではどこか探るようなものか、あるいは面白がるような色が含まれていた視線が、今は真摯な瞳で自分を見据えていたからだ。

それを見て、視線を合わせてしまって、その上で話を流せてしまうほどカーリアンは器用な少女ではないのだ。

そんな心情を読み取ったのか、はたまたエリカなりに何か想いを馳せる事があったのか、小さな笑みを漏らすとはっきりと告げたのだ。

「宵闇のシャクナゲ」

――二人がぶつかり合う理由に足る人物の名前を。

――『最初の黒鉄』と呼ばれる二人の内、今も生きて戦い続けている男の名前を。

――廃都と呼ばれる街を新たな故郷と定めたカーリアンにとって、自分を受け入れてくれている数少ない仲間の……かつて呼ばれていたコードを。

「ウチはね、その欲しいものを諦める為に廃都を捨てた。『閃光』の名前と家族とも思っていた仲間をも捨てた。

そうしなければ、いつかウチはシャクが持っている『それ』に手

を伸ばしてしまう。力でもって『あれの所有者』だと認めさせたくなってしまう」

「……あんたが欲しいものって何よ？」

「つまらないものよ。本当につまらないもの。でも黒鉄にとっては大きな意味を持つものね」

「それはシャクが持っていて、シャクに所有権があって、あいつが大事に抱えてきたもの……そういったものなのね？」

「そうね。彼にとっては大事なものだと思うわ」

カーリアンには『シャクナゲが持つ』『黒鉄にとって大きな意味を持つもの』について、一つ心当たりがあった。

――『ノーフェイト』。

今、件のシャクナゲが対処に当たっている『死した最初の黒鉄が残した遺産』だ。

あるいはノーフェイト以外に残ったままとなっている『他の何か』かもしれない。

その『アカツキの遺産』について言えば、一つは今カーリアンが懐に大事に抱えている。

『二番目』にして所有者の男と同じ銘を持つ抑制器。変種の皇とまで呼ばれるほどの彼の力を抑えつける為の異物にして遺物。

二丁のオートマチックを象った異界の産物を。

エリカの欲するものが『シャクナゲ』に所有権があるものとするならば、今彼女が持っている『二番目』こそがそうだろう。

しかしそれらは、エリカの言葉には当てはまらない部分がある。

シャクナゲにしろノーフェイトにしろ、決して『つまらないもの』ではない。

黒鉄にとって大きな意味があるものであると同時に、この二つには大き過ぎる価値がある。

変種の皇の世界を『抑えるもの』と、変種の皇が創る世界をも『殺せるもの』。

これらより大きな価値と意味を持つものなど、色々と凄いものが眠っていそうな黒鉄の中にも、そうそうあるとはカーリアンには思えない。

アカツキの力が最強の変種である純正型の中でいかに異端のものであっても、この『災厄』と『威厳』の銘を持つ二つ以上の意味と力を持つ遺物などあってはたまらない、というのが正直なところだ。

ならばシャクナゲ個人にとって大事な、でも実質的には価値などないに等しいものだろうか。黒鉄という組織にとって大きな意味を持つというならば、『アカツキ』に関係するものである可能性もあった。

「ならご飯の後、それからでいいよね？」

それが何であってもカーリアンがどう動くべきかは決まっていた。エリカが欲するものがどんなものであっても、彼女には立ちはだからなければならない理由があったのだ。

カーリアンの決めた『一線』には触れていなくても、これ以上彼から何かを奪おうとする者を見過ごすワケにはいかなかったのである。

今の言葉がそれを宣告するものである事はエリカにも伝わったのだろう。

「ええ、それで構わない。ウチはあなたを『あれ』を得る為の最初

の障害だと認めてる。あなたが今は亡き『彼女』に代わって最初に立ちはだかる者だと認めるわ」

「あたしはあたしよ。あたし自身の考えでしかあたしは動かない」

「そうね。ウチのつまらない感傷にあなたが付き合う理由なんてないわ。

でもね、あんまり期待はずれだったら――」

――殺しちゃうわよ？

その瞳の光にほんの僅かな、でも初めて深い狂気を垣間見せて、見せつけるかのように赤く濡れるチロッと舌で唇を潤してみせる。

「言っておくけどね、ギブなら早めにしてよ？あたしにはあんたを殺す気なんてさらさらないんだから」

それでもカーリアンは変わらず普段通りのままでそう告げて、『ご馳走』の準備を続けていた。

そんな彼女に、エリカの方がやや拍子抜けしたかのような表情で小さく目を見開く。

エリカが見せた狂気など、カーリアンには怖くもなんともなかった。

彼女は自分の中にエリカの狂気などよりも、もっとずっと恐れるべき『モノ』が眠っている事を知っていたからだ。

あらゆるものを焼き尽くす、憎悪の炎が今も自分の中にある事をカーリアンは忘れてはいない。

出生地であらゆる変種を、既存種を焼き尽くし、その地の皇にすら――今では誰であれ傷つけられないとまで言われている、『マス

ターシヴァ』にすら傷を負わせた紅色の狂気を覚えている。

そして他者の狂気や負の感情に一々過敏にカーリアンが反応していては、それらに彼女よりももっと鋭く反応する『紅』が、意志と本能だけに従って、理性による制御を離れて発露してしまう可能性もなくはない。

黒鉄に来て、毎日毎日飽きもせずに制御訓練をしてきたのも、そういった『自らの力に対する自覚』を持つ為だった面もあるのだ。

自分の力は、数ある変種の能力の中でも強力なもので、それに比例して制御の難しい部類の力なんだと彼女自身が自覚していた。それでもなんとか完全に能力を律する為だけに、一年間飽きもせずに訓練してきた結果が僅かなりとも実を結んでいたと言えるだろう。

「ただまぁ、あたしって性格的にか能力的にか手加減ってやつがつくづく向いてないみたいだからさ、ひょっとしたらやり過ぎちゃうかもしんない。

謝らないけど、恨まないでよね」

「……本当に面白いわね。あなたとはいいお友達になれそうだと思うんだけど、仕方ないわね？ウチもあなたも引けないんだから」

このような事態になっても、変わらずまっすぐに話を向けてくるカーリアンにエリカは嘆息混じりでそう言うと、水を入れる用に出していたアルミのコップを手に取って、それを軽く腕だけの力で空へと投げ上げた。

「あなたを気にいったというのは本当よ？だから、フェアになるようにウチの力も見せてあげる」

そのコップは不自然なほど高々と舞い上がり――軽い発破音とと

もに四散した。
僅かな閃光と、小さな金属片のみを残して。
それを見上げる事もなく、エリカは肩をすくめてみせると、本当につまらない一芸を披露したと言わんばかりの口調で続ける。
「ウチは『閃光』なんて仰々しい名前で呼ばれているわ。でも光を操るような能力を持っているワケじゃない。ウチの能力はあらゆるものを爆発物に変えるだけの――単なる『爆破能力』よ」

2―31・最初の障害（後書き）

遅れました。
すみません、寝てました。
帰ってきてからバタンと倒れ、延々眠りこけてました。
来週こそは月曜日中に。

2―32・赤札付きと死神の代名詞

「爆破能力、か」

それが本当ならば――エリカの言葉が真実ならば、非常に珍しい能力である事はカーリアンにもわかった。

数多くの変種が所属する黒鉄の中でも、さっき見たような現象を起こす能力を持った者はいない。

もちろん『アルミのコップを四散させた』という結果だけを見れば、同じ事を出来る者は何人もいるだろう。しかし、破裂する際に目に見える外的要因が見当たらず、爆破するかのように発破音を残して物質が四散するような能力をカーリアンは見た事がなかった。

その爆破という現象を起こした原理みたいなものはわからない。

単に破裂させただけなのか、それとも他の何かしらの現象が働いたのか。

カーリアンの元副官である白髪の少女なら、今の爆破を見ただけで多少なりとも何かを読み取れただろう。

物事を理屈付けて考える事や、それに必要な観察力、一つの考えに捕らわれない思考の柔軟さ、そして何より僅かな会話の中から裏を読む年齢に見合わない狡猾さがカクリにはある。

エリカの言った『爆破能力』が本物の『爆発』によるものかどうかの判断も、カクリならばカーリアンよりも的確に下してくれただろう。

何しろ東海という出生地で、『カーリアンがカーリアンとなる前』に暴れまくっていた頃から、カクリにはそういった役割があったのだ。

東海随一の同族殺しと呼ばれた『死にたがりの紅』。ひたすら敵を探して突っ走っていた『死にたがり』の後をずっとついて歩き、無茶をしそうな時や罠がありそうな時は、しがみついて行かせないという態度でもって引き止めてみせていた。

凄惨な記憶からか失語症となっていても、体当たりでもって死にたがりの舵を取ってみせていたのだ。

だからこそついカクリの存在に思いを馳せかけて、そんな自分にカーリアンは小さく渇をいれる。

――大丈夫、大丈夫。あたしの力なら単に爆破するだけの能力なら、いくら珍しくっても負けっこない。ううん、どんな力であってもそうそう負けなんかしない。あたしがこの一年ひたすら鍛えあげてきた紅（ちから）はそんなにヤワじゃない。

そう言い聞かせて、カーリアンはゆっくりとその心の中に紅い光を灯す。絶えずくすぶってきた猛き炎を自分という炉にいれる。

――戦いになったら自分の力を信じるな。強い能力を持っていても過信をするな。変種の持つ力には相性というものがあって、それは覆しがたいアドバンテージになる。

――いざという時は自分が努力してきた時間だけを信じろ。自分の力を磨いてきた今までだけを信じろ。それだけはどんな状況でも、誰が相手であっても絶対に嘘にはならない。

――その為に自分を甘やかすな。今頑張っていれば、それはどんな時でも絶対に揺るがないものになる。

――戦う事に震えそうになったらまずは足をしっかりと踏みしめ

ろ。そして自分の周りにあるものを思い出せ。
——息が上がっても大きく口を開けて息をするな。歯を食いしばっていても息は出来る。しかし、だらしなく大口を開けたままでは体に力なんか入らない。
——戦う事から逃げ出したくなったなら逃げてもいい。でもその前にまず考えろ。自分が逃げたくなる状況に、自分が逃げた後で向かい合う事になる仲間達の事を考えろ。

そう自分が叩きこまれてきた事を反芻して……彼女が師とした女性から体に叩き込まれてきた事を思い出して——カーリアンはスイッチを入れる。
カチッと撃鉄を引くイメージで、精神を『戦闘』に向けて切り替える。

ここで自分が引けば、この先エリカと向かい合う事になるかもしれない『彼』の事を考える。
エリカと面識があり、かつて仲間だったという一人の男の事を考える。
もちろん彼が負けるなどとは思わない。
例え『新皇』ではなくとも——その力は使わずとも、『黒鉄最強』が負けるはずなどないと信じている。
それでも間違いなく手傷は負うだろう。
身体の傷だけではない。『面識のある相手』で『かつての戦友』を傷つけたという心の傷が深く刻まれるに違いない。

——ダメ。それだけは絶対にダメ。そんな結果にだけは絶対にさせないっ。

それだけを思い、熱を噴き出した炉にさらなる燃料をくべていく。
そして黒鉄であるという自負を抱えて、自分の立ち位置をしっか

りと認識して、負の感情のままただ敵を傷つけてきた『死にたがり』ではなく、いっぱしの戦士として戦場に立つ覚悟を決める。

向けられた戦意と高ぶっていく戦闘への緊張感に、急速に燃え上がっていく紅が紅蓮の炎となってその身から溢れそうになるのを、自分の覚悟の内にゆっくりと沈めていく。

紅蓮の猛りはそのままに。しかしその猛りに狂わされる事なく、それをしっかりと支配して。

怒りや憎悪といった自分の感情に対しての甘えを捨てて、自らの意志だけで誰かを傷つける黒鉄としての自分を――『狂気に頼った炎』ではく、たった一人でこの一年ひたすら鍛えあげてきたカーリアンの紅を燃やしていく。

「……言っとくけど、あたしはすっごく強いよ」

「でしょうね。そうでなければ困るわ。あなたは最初の障害。今のウチが『アレ』を手にするに相応しいか、あなたには――彼女によく似たあなたには、それを見極める相手になってもらう事にしたのだから」

「あたしはあたしよ。でもこれがミヤビのやり残した事だってんなら、あたしが代わりになったげる」

そう言って紅色の稲妻を辺りに迸らせながら、自身を見やってくるエリカに向けて低い姿勢を取ると軽く掲げた右腕を突き出した。

そしてその腕を振り子のように軽く上下に振って、その先に力が集まっていくイメージをかためていく。

その右腕の先端、あるいは場合によっては左腕の先端こそが、カーリアンにとって力を向ける為のスコープの役割を果たす。両腕を違和感なく使いこなせるように訓練してきた彼女は、単に立ち位置

によって使う腕を変えていた。
そんなスタイルも、力の扱い方を知らなかった頃とは違う、無意味に……そして無駄に余波を撒き散らす戦い方ではなく、一撃必殺を狙って彼女が磨いてきたスタイルだ。
元よりカーリアンは、灼熱と言っても過言ではない火力を扱う能力者だ。発火能力者としては間違いなく最上位の力を持っている変種だろう。
それを考えれば、余波を無駄なぐらい盛大に撒き散らす戦い方こそが、実はもっとも効果的な戦い方だという事は自覚している。
なぜなら人間の体は、カーリアンの紅に耐えられるようには出来ていないからだ。なんの準備も変種の力もなく、紅の余波を防ぐすべなどありはしない。
それでも一点集中による無駄をなくしたスタイルを使うのは、自分はもう『死にたがり』なんかじゃないという思いによるものが強い。誰彼かまわず憎しみを振りまき、周りを巻き込む事もいとわない戦い方など今の彼女には出来ないのである。
それだけの『燃料（憎悪）』が今はない、とも言えるであろうが、燃料があったとしても今の彼女は『カーリアンが確立したスタイル』を使う事を選んでいただろう。
何故なら、そのスタイルで戦う自分を彼女は誇りに思っているのだから。

「まずは小手調べかしらね？」

そう言って、拾った握り拳ほどの岩をエリカが投げつけた事が開戦の号砲となった。ほんの無造作に投げつけてきたそれが四散する事で先手を打ったのだ。
しかしカーリアンはそれを避ける事すらせずに、小さく爆散して散弾と化した小石の群れを紅色の電光で撃墜する。

その紅に触れた散弾は、あっさりと異端の炎に包まれて勢い無くすと、代わってカーリアンがその腕を掲げる。

「小手調べなんて余裕ぶっこいてたら、熱いじゃ済まないかんね！
――鮮烈の紅(あか)っ！」

その言葉に反応し、指先に収縮した紅き電光は紅蓮の炎を撒き散らす槍となり、一直線にエリカへと向かって宙を走る。

この『言葉』、『言葉に出す事によって瞬時に力のあり方を決める方法』は、カーリアンのスタイルの中で唯一シャクナゲに習ったものだ。

言葉にする事により固めていく力のイメージ。

力のあり方を決める『ワード』を持つ事。

今思えばそれらは、彼自身が自らの力を律する為に使っていた方法なのだろうとカーリアンは思う。

その言葉によって固められた力のあり方は、先ほどのエリカの攻撃と同じように辺りに力を四散させる紅を放つ。

ただし、その殺傷能力だけでいえば段違いだ。燃え上がる炎を撒き散らす紅の電光は力が広がった領域をそのまま炎の海へと変える。

「……あらあら。あなた、ひょっとしてヒエンよりも発火能力者としてだけ見たら、ずっと強いんじゃないかしら？」

「言ったでしょっ？今の黒鉄が昔の黒鉄に劣るとは思うなってねっ」

紅の光は何かに着弾すると熱波を生む炎となり、鮮烈なる赤色を周囲に振りまいていく。

普通の炎よりもずっと色の濃い紅蓮の炎。その色こそが彼女の炎を指して『紅』と呼ばしめたものだ。

「それはこれから確認させてもらうわ。
先に言っておくけれど――ヒエンもミヤも昔のウチよりはずっと強かったわよ？」

「ミヤビがあんたより強い事ぐらい……知ってるってのっ！」

炎の海による熱を、纏った外套を軽く翻して退きながらも、ニッと唇を歪めてみせるエリカに、カーリアンは次々と紅の熱線降らせる。

音もなければそれ自体には熱もない赤い閃光。それを軽い身のこなしでかわしながら、脇に立っていた広葉樹の幹に無造作に手をあてた。

「破っ！」

次の瞬間、エリカが軽く手を当てた部分が大きくはぜる。

ささくれを作り見事に裂けた表面は、まるでその部分に小型の爆弾が着弾したかの様相で、ごっそりと抉れて内部の幹を覗かせていた。そのまま大樹といっても過言ではないその樹は、あっさり横倒しに倒れてカーリアンの頭上へと迫る。

「そんなもんで――」

「――なんとかなるなんて思ってないわよ？」

それを軽く後方へのステップでかわしてみせるカーリアンに、エリカは倒れていく『幹の上を駆けて』迫る。

枝葉でカーリアンの視界を遮り、思考を倒れゆく大樹に向けてカーリアンの紅が自分に向くまでの僅かな隙を突くよう格好で、その黒い外套を翻しながら右手をカーリアンの顎もとに差し込むように

伸ばした。

――危険だ。この『手はヤバい』。

その伸ばされてきた手を、自らの手ではねのけようとして……膨れ上がる『予感』に辛くも回避という手段を取る。

転がるように不様な格好で、その手をかわす方法を取ったのだ。

何故かはカーリアン本人にも分かっていない。自慢であり、大切な宝物である赤いハーフコートでなかっただけマシだとは言え、数少ない私服が土埃にまみれるのを気にする余裕すらなく、気がつけば『勘』に従って転がりながらギリギリ手をかわしたのだ。

かわされた手はそのまま背後に立っていた木に当たり、かわして距離を取ったカーリアンとエリカは再び向き合った。

「あらあら、残念。チェックメイトかと思ったのだけど」

「おあいにく様……ってうわっ、白いパーカーが斑になっちゃったじゃないの！」

「それだけで済んで良かったと思いなさい。自分の手でウチの手を払おうとしてたら――」

その言葉の先は聞くまでもなかった。

エリカが手を当てたままにしていた木が大きな発破音と共に砕ける様が全てを語っていたのだ。

「これはまだ言ってなかったはずなんだけど、ウチは手を当てたモノを爆破させる能力があるの。石も木も……例えば人の肉体でさえもね」

そう言って黒い外套についたウッドチップと化した木片を払いながら、小さく小首を傾げてみせる。

「なんでウチの『手』が危ないって分かったのかは分からないけど……ひょっとしたら、あなたもクロネコと同じような『直感』を持っているのかしら？

なににしても、これからも精々気をつけなさい。ウチの手に触られたら――痛いじゃ済まないわよ？」

「……なんつう危ない能力持ってんのよ」

人体よりもずっと強度が高い木を四散させるだけの爆発だ。痛いで済むワケがない事ぐらいはカーリアンにも分かる。

殺傷力に特化した能力は多々あるが、エリカのそれは殺傷能力のみを持つ純粋に誰かを傷つける為だけの力だ。

カーリアンの紅とて殺傷能力だけをみれば黒鉄でも随一の力を持っているが、エリカの『爆破』は紅と比べても遜色はない。

むしろ触られたら『爆発』という結末は、人体にとってずっとタチが悪いかもしれない。

それでもエリカはカーリアンの言葉に小さな笑みを漏らしてみせる。

「それはお互い様でしょう？『死にたがりの紅』。あの化け物、マスターシヴァの顔に消えない傷を付けたあなたに――」

「……あたしをその名前で呼ぶな」

パチッ。

揶揄するようなエリカの言葉に、カーリアンから紅の稲妻が一際

大きくはぜる。
エリカの能力を知っても、彼女の戦意は萎えるどころか膨れ上がっていた。
――今ここで逃げたら、この先仲間達がこの爆破能力者と向き合う事になる。
刻みこまれた教えが、怯えを消してくれた。
『死にたがり』と呼ばれる嫌悪感は消えなくとも、それを憎悪に向けずに済んだのは間違いなく黒鉄としての記憶のおかげだ。少なくともカーリアンにはそう思えた。
「あたしは黒鉄第二班――じゃなかった、黒鉄第三班・班長シャクナゲの補佐役。紅のコードフェンサーよ。それ以外の名前をあたしは持ってない」
「……そう」
「死にたがりと戦いたかったならおあいにく様。確かに試練としちゃやりがいのある相手かもしれないけど、彼女はあんたとは戦いたくないってさ」
そう言って、カーリアンは斑にデコレートされたパーカーを脱ぎ捨てて、再度構えを取る。
「だからあたしが相手をしたげる。最強の剣使いの弟子にして黒鉄の補佐官。これだけの肩書きがあれば、あんたの欲しいものの番人としても不足なんかないでしょ？」
「そうね。ウチはもうコードフェンサーじゃない。赤札付きの『閃

光』、ロストコードを持つ女。
ふふっ、確かに不足なんてないわね。今のあなたでもウチの相手には十分以上ね」
――本気でいくわよ。
そう告げて。
赤札付きの爆破能力者と、かつては死神の代名詞とまで呼ばれた『元・死にたがり』の発火能力者はその力を解放させていく。
共に誰かを傷つけるだけの能力を持ちながらも、一人は自らの妄執に突き動かされ、もう一人は自分以外の誰かの為だけを思いながら。

2―32・赤札付きと死神の代名詞（後書き）

最近は本文中にある言葉を題名にする事にしています。
考えなくて済む分楽……じゃなくて、その方が話の内容に直結した題名になりやすいので。
次回はスズカターンな予定です。
マスターな人とのやりとりですね。
でも彼女のシーンのラストは、マスターな人との決着じゃないんですよね。
その先にちょっとした出会いがあって、それがラスト。
スズカターンは多分あと3、4回でラスト。
シャクナゲターンはその倍ちょっとでラスト。ナナシもいるしね。
カーリアンターンはシャクナゲよりちょっと短いぐらいでラスト。
あとアオイやらヨツバやスイレンやら、そしてマルスやらのシーンをちょろっと書いて終わりです。
先が……あんまり見えていない気がするのは気のせいでしょうかね？

番外編・万色線乱の白銀世界（前書き）

この話については活動報告に詳しく書いています。
サクマ様がコメントで質問をくださっていますから、よろしければそちらもお読みください。
次話から本当にスズカターンです。

簡単に言えば今回の話は、シヴァとの決着前に『彼女、本当はめっちゃ強いんですよ』とアピールした話。

番外編・万色線乱の白銀世界

「お嬢、本当に行くの？」

金髪の少女の言葉に、お嬢と呼ばれた少女は小さくコクンと頷いてみせた。

それは白いターバンが乱雑に巻かれた頭を、ほんの僅かに上下させただけの仕草ではあったが、その様子に迷いらしきものは全く見られない。真っ直ぐに遥か遠くを見据えるその紺碧色の瞳は、なんとも言えない様々な感情を宿してはいたが、迷いだけは一切含まれてはいなかったのだ。

「まぁ、お嬢ならそうするかなぁって思ってたけどね」

「ここにいたいのなら美哉はこっちにいてもいい。無理に付いて来てなんて私には言えない。美哉には美哉の居場所があるから」

でも、と続けて少女は儚く笑う。

寂しそうに、でも固い意志を秘めてそっと笑う。

「……もうここは私の帰る場所じゃなくなった。あの人がいないこの街は、もう私の居場所じゃない」

その身に『冠された色』と同じ銀色がかった髪を風に流し、纏っ

た真っ白な外套を翻しながら、後ろに控えた美哉と呼ばれた少女へと視線を向ける。

白銀の道、白銀の皇と言う二つの含みを込めた呼び名である、シルバーロードと呼ばれる少女はそう言って真っ白な外套を脱ぎ捨てた。

まるでその白いコートと一緒に、その可憐さからすれば大仰過ぎる立場と呼び名を捨て去るかのように。

「分かってる？お嬢が抜けようとしても『他の三人』は絶対に許さないわよ？特にお嬢を警戒している山吹はね。何より『新皇』を掲げる軍として、これ以上『色の失墜』は許されない」

「……」

「抜けた『あの人』もいずれはきっと無色に捕まる。自分にはあの人しかいない――少なくとも無色はそう思ってるから」

美哉の口調は相変わらず軽い調子でありながら、その言葉の端々に僅かな恐怖が見てとれた。

特に『無色』と呼ばわった時には僅かに震えてすらいた。

それでも銀色の少女には迷いなど微塵もなかった。恐れもなければ戸惑いもない。普段のどこか気弱な印象からは想像も出来ない頑固さで、美哉の言葉にはっきりと答えを返す。

「魔女が私を留めるのなら、彼女の『言葉』を砕いて私は進む。グライが私を攻めるのなら、彼の濃紺を消し飛ばして先へ行く。無色が止めようと私は歩みを止めたりはしない」

彼女の言葉から感じられるのは絶対の決意。

自分の考えは絶対に曲げないという確固たる意志だけだ。

「私は帰るべき場所に帰りたいだけだから、その邪魔は誰にも絶対させない。私の道を遮れるのは灰色と呼ばれたあの人だけ。私に『お帰り』と初めて言ってくれた悠兄ぃだけ」

「……彼は逃げたのよ？」

美哉の『逃げた』という言葉にも――言いにくそうに告げた真実でも、少女は視線をぶらす事はない。

「そこは怒る。怒って怒って……絶対に謝ってもらう。私を連れていかなかった事は絶対に謝ってもらう」

ただその言葉を受け入れて、その結果も受け止めて、それでも考えを変えないとはっきりと告げる。

「でも、私も謝るべき。私はずっと守られてきただけだったから。ただ甘えて、灰色と同じ立場の白銀になった事だけで満足して、灰色としての悠兄ぃの苦悩に何も手を貸してあげられなかった。最後の決断を下すまで何も出来なかった。

だから――今度こそ私は悠兄ぃを助けてみせる」

さらに今までの自分をも見据えた上で、それでも『兄』が必要なんだと伝える。

何もしてあげられなかった自分。

灰色と無色がぶつかった後でさえも、白銀たる自分にはなんの被害もいかないように、灰色の意志に守られていただけの自分。

兄から長尾という純正型が台頭しはじめた北陸に向かうように言われ、首都圏から出された事を当初は不満に思っていたのに、その事実でさえも白銀たる彼女の為だった事に後になって気付いた愚か

な自分。
灰色と無色との争いにおいて、最後まで頼ってもらえなかった自分。
それを踏まえて、『今度こそは』と彼女は決意を口にする。
「他の三色でも私は絶対に止められない。私の世界はあらゆる障害の存在をを否定する。全てをまっさらにしてでも私は行くと決めたの」
そう言って、その頭に軽く巻いていたターバンを振りほどき、風に流すように捨て去ると、懐から取り出した地味に過ぎる黒一色のニット帽を被った。
最初に兄から贈られたお古の帽子。
単に彼女の証を隠すだけの役割を持った、洒落っけの一切ない真っ黒な帽子を。
「今ここで、白銀の皇は死んだ。
私はスズカ。ただのスズカ。帰るべき場所に帰りたいだけのスズカ。それでいい」
そう言って、スズカは先へと一人歩き始める。
ただ真っ直ぐに西に向かって。
唯一生き残った『グレイガード』の女性が残した、『灰色の皇は関西に逃れた』という言葉だけを頼りにして。
そんな珍しく考えなしな行動を起こし始めたスズカに、『シルバーガード』・夜鳥美哉は苦笑を漏らす。
そして彼女の子供達をもう一人のシルバーガードへの合図代わりに送った。

（全く。例え関東を抜けるにしても、情報を集めて手順を踏めばずっと楽になるのに。
ま、気が逸って珍しく頭が回っていないお嬢のフォローをするのも、私たちの役目なんだけどね）

そんな事を考えながら、美哉は一人、同僚の大男が来るまでの間、自らが仕える少女を守るべく頭をフル回転させていく。
引き連れてきた北陸平定の為の軍勢を北陸に向かう途中で勝手に停止させて、地域一帯の情報を混乱させる為に同僚は残った。
適当な指示でもって要所に駐屯地を作らせ、中部の勢力と関東軍、北陸軍を警戒させてそちらに視線を向けさせる為にだ。
もちろんそれなりの時間を稼いだら、その同僚も雲隠れして合流する予定だが、それまではシルバーガードの一たる美哉が一人で、西に真っ直ぐに向かうスズカを助けなければならない。

（警戒すべきは関東に残っている山吹、か。無色は灰色が抜けた事により茫然自失としているらしいし、濃紺は東北に出張ったまま。
『言霊の皇』、スペルロードが追いすがってきたら――やっぱお嬢頼みになるかな）

もっとも『スズカを助ける』とは言っても、白銀たる彼女こそがシルバーガード二人よりもずっと強いというのが事実だ。
それを計算に入れて、確実にスズカを西へと向かわせる事こそが、彼女の役目なのだ。

「待ってくださいよぉ～！お嬢、私も一緒に行きますからぁ～」

気の抜けた声を張り上げながらも、美哉は絶対に追いすがってくるであろう『山吹色』との邂逅へと思考を馳せる。

白銀対山吹色。
灰色対無色に次ぐ、二人の新皇のぶつかり合い。
変種の皇二人による戦争に対して軽い憂鬱感と、それ以上の恐怖に苛まれながら。

「ねぇ、シルバー。大人しく東に帰る気はないかい？面倒なのは嫌いなんだ。同じ立場の二人が争って怪我をするなんてバカらしい事だ。そうだろ？」

関東を抜け、東海地方に入るか入らないかの辺りまで来たところで、美哉が予想していた通り『彼女』は追いすがってきた。
声をかけてきたのは、やや長身の中性的な顔立ちをした細身の女性だった。束ねられたライトブラウンの長髪を風に流して立ちはだかっていたのだ。
山吹色の布きれをその腕に巻いてはいたが、一目でその人物が新皇の四番にして『イエローロード』、サンライトイエローの世界を支配する『言霊の皇』だと見抜けるものはいないだろう。
飄々とした態度はふてぶてしさをにじませていたが、他の新皇達のような大物感や威圧感、人を惹きつける魅力や圧倒的な美しさは持っていない。
ただ彼女と相対した人物の全ては不気味なものを感じ、その乾いた印象を持つ紫紺の瞳に空寒いものを見とるだけだ。

「……そう思うならあなたが引けばいい」

それでも同格たる元新皇の少女は、その山吹色の女に対して恐れる事なく向かい合う。
警戒はしても警戒をしすぎない。
言霊を恐れていても恐れすぎない。
ただ真っ直ぐに視線を交わし、白銀としての彼女の領域――白銀世界を広げていく。

「私はね、君をもの凄く高く評価してるんだ。恐れていると言っても過言じゃない。君を灰色が連れてきた時は、恐れと同時に歓喜に震えたほどだよ」

その声音は単調な響きのアルト。女性にしてはやや低い乾いた印象を持った声だった。
『恐れていた』、『歓喜した』という割に、その言葉には余りにも抑揚がない。
大袈裟に肩をすくめてみせても、天を仰ぐような仕草とともに額に手を当てて見せても、その声の調子にはなんの変化も見られない。

「君も知ってるだろ？灰色や……ひょっとしたら無色よりも、白銀を私が高く評価しているって事はさ。そうだね、君と戦うぐらいなら、灰色や濃紺と戦った方がまだマシだと思っているほどなんだよ」

「私はあなたが嫌い」

「知ってるさ。私の事を『魔女』だと呼んで嫌ってる事ぐらいはね。私も好きか嫌いかで言えば君の事は嫌いだよ。でも、それと能力に対する評価は別物だ。君も私の力の事は評価してくれていたと感じていたんだけど……それは勘違いじゃないよね？」

「……」

からかうような、どこか真剣味の感じられない山吹色の言葉であったが、広がっていく白銀の領域に対抗するかのように、自らが支配する『山吹色の世界』を広げる。

白銀世界とほぼ同等の範囲を持ち、白銀世界と同じ程度に濃密で異常な純正型の世界を。

灰色ほど異端ではなくとも、他の純正型よりはずっとはっきりとした存在感を持つ『言葉が力を持つ世界を』。

それを後方で見ていた二人は、皇たる二人が放つ圧倒的な威圧感、空間を歪めるかのような圧迫感に飲まれていた。

シルバーガードと呼ばれ、新皇の側近たるガードと呼ばれる人々の中では、グレイガードとインビジブルガードに並ぶ強者とされた二人ですら身動きを封じられたのだ。

二人揃って言葉を発する事もなく皇たる女性二人を見つめ、『一人やってきた言霊の皇』を牽制する真似すらも出来ない。

「無言は同意と見ても構わないよね。ならば大人しく帰ってくれないか。

灰色の事は大丈夫さ。彼は無色のお気に入りだ。どこに逃げても必ず連れ帰るよ。君はそれを待ってればいいんだ」

「くどい。なんと言っても無駄。邪魔をしたいなら好きにすればいい。あなたを蹴散らしてあの人のところに私は帰る」

あくまでも淡々と。

でも珍しく嫌悪感を滲ませたスズカの声が、白銀世界と山吹色の世界の境界に軋みを上げさせる。

白銀世界が世界の核にして皇たるスズカの感情を受けて、山吹色の世界を侵蝕すべく力を強めているのだ。

「……君の拒絶と私の言葉。相性は最悪だよ？君の拒絶は『君が生きる為に必要なものを拒絶出来ない』。つまり『空気』だけは完全に拒絶しきれない。そんな真似をすれば、世界の核たる君が死んでしまうからね」

それでも言霊と呼ばれた女性は揺るがない。揺らぎ一つ見せないままで、自分とスズカとの『相性』……戦う事に対するデメリットを挙げてみせる。

拒絶の世界を作る白銀にとって、最も苦手な能力を持つと分かっていた言霊の皇のその言葉に、白銀の守護者達はようやくスズカの前面に出ようとして――軽く掲げられたスズカの腕にその動きを止められた。

助けは必要ない。

言葉はなくともその意志が読み取れて、二人は仕方なく視線でもってのみ自らが仕える皇に敵対する女を牽制する。

もっとも二人が前面に出て言霊の皇とやり合えば、無事では済まないのは二人の方だろう。

目の前にいる二人は、二人ともが『皇種』とされた変種の皇たる存在なのだ。例え純正型で、ガードと呼ばれる関東軍随一の力を持つ変種だとしても、皇たる存在にはかなわない。

彼女等はその力のみでもって『皇』とされた、生まれついての純粋なる強者なのだから。

「君は空気を伝播する『音』……『言葉』は拒絶出来ないんだ。

知ってるだろ？君の拒絶は『先に行けば』無色の絶対毒ですらも、防ぐ可能性がある異常な世界だけれど、私の言葉だけは拒絶出来ないんだって事をさ」

「本当にくどい。そう思うならかかって来ればいい。私が拒絶出来ないものは、灰色だけだと言う事をあなたに教えてやる」

変種の能力には『相性』というものがある。強力な力を持つ純正型とはいえ、それは無視の出来ないファクターだ。

いや、強力な力を持つ者同士であればあるほど、その相性というものは勝敗を分ける大きな要因となりうる。圧倒的に一方が勝っていればまだしも、実力が拮抗する者同士であれば『相性』こそが一番大きな勝因にも致命的な敗因にもなりうるのだ。

それを指しての言霊の言葉にもスズカは躊躇う様子を見せない。むしろより一層苛烈な勢いで白銀世界を広げていき、山吹色の世界を飲み込むかのごとく圧迫感を増していく。

それに言葉の皇たる女は小さく溜め息を漏らし――世界に理を刻む。

その呼び名のごとく、言葉でもって力を示す。

「……仕方ないね。『硬直せよ、白銀の肉体』！」

「――其は銀月、降り注ぐ破壊の光」

白銀世界に紛れ込む『言霊』という異物に対抗すべく、スズカも躊躇う事なく破壊の理を穿つ。

圧倒的な力を持つ拒絶の法則は、スズカの定めたワードに従い白銀世界にある理を回していく。

相手の存在そのものを否定すべく、そして白銀世界以外の異界を全て拒絶すべく、高らかな音を放つ銀鈴はその音色を拒絶の力として放ち、轟々と轟く破壊音とともに全てを破砕していく。

銀鈴から放たれた斥力が大地を割り、空間を引き裂いて山吹色の世界に迫る光景。

それは空想上の大魔法使いが放つ究極の呪文を連想させる威力でもって、あらゆるものを飲み込んでいくが、それでもその力を向けられた言霊の皇はせせら笑うかのような表情でスズカを見た。
ただ一言、『歪め』と言うのみでその力の大半を防いでみせたのだ。

「はっ、やるね。私の言葉だけを僅かなりとも拒絶するとはさ。さすがは身を守る力だけなら新皇随一の白銀」

僅かにぎこちない動きを見せるスズカが、自らの言葉による力に捕らわれた様を見て、そう揶揄するかのような言葉を女は投げかけた。

『言霊の皇』と呼ばれる女の力は、自らの山吹色の世界を抜ければ、生物に対しては暗示に近い力を持つ。
炎を生み出す言霊を放てば、その炎の熱をスズカは拒絶してみせただろう。
風を刃と化す言霊ならば、風という現象を否定しただろう。
しかし、スズカ個人に対して『束縛』、あるいは『硬直』を命ずる言霊は、『言葉』そのものを否定しない限りは防ぎようがない。
例え空気の振動を拒絶しても、『言霊の皇が言葉として力を放った事実』までは拒絶出来ない。言葉としてスズカ個人に向けられた時点で、山吹色の皇の理は発動する。放たれたという事実でもって山吹色の世界は回り始める。
空気そのものを拒絶し、音を否定出来ても完璧には防げるかどうか分からない力だ。
絶対毒の皇ならば『絶対毒で言葉の意味を汚染して』防いでみせただろう。
あるいは灰色の皇ならば、『広大な灰色世界による、距離を取った殲滅戦』でもって主導権を握れただろう。
そのどちらも出来ないスズカには……空気を拒絶出来ない白銀に

は、言葉が力を持つ山吹色こそが天敵だと言えた。

「忌まわしの銀槍――大通連」

「我が言葉は力となる――『アイギスの楯』」

それでもお互いに躊躇う素振りは見せない。仲間だった事実など今のこの場には関係なかったのだ。

そして放たれた力は、それぞれが必殺……あるいは絶対防御として用いる理だった。

鬼姫の剣と女神の楯。

それらは互いにぶつかり合って殺し合う。

いや、威力だけならば大通連が勝っていた。『アイギスの楯』という言霊だけならば打ち破ってみせただろう。

『大通連』は白銀と呼ばれたスズカにとって必殺を現す理だ。その威力は攻撃に特化した濃紺や、多数に対しての殲滅戦を得意とする灰色でも現せるかどうか分からないほどのものなのだ。

使用者であるスズカ自身も、その力の影響で後方に吹き飛ばされるほどなのだからその威力のほども分かるだろう。

そう、言霊の皇が二度、そして三度、足りなければ四度五度と、楯が破れる前に重ねて『アイギスの楯』を現せなければ、決着はあっさりと付いたはずだった。

「さすが奥羽の鬼姫。東北の始祖。私の『楯』を突き破り、さらに手傷を負わせるなんてね」

しかし、重ねて紡がれた『楯』がその決着を拒んだ。

幾重もの楯は拒絶の銀槍に刺し貫かれながらも、その軌道を僅かにずらしてみせたのだ。

言葉という理で刻まれた『女神の楯』は、その名前に恥じぬだけ

の力を示したのである。
それでもさすがに言霊の皇も無傷とはいかない。その二の腕をざっくりと切り裂かれてはいる。
しかし、亜音速で迫る『白銀の皇必殺の大通連』を真っ向から受けてその程度で済んだのだから、役割は十分以上に果たしたと言えるだろう。

「やっぱり君は行かせるワケにはいかないね。灰色と君が組むのは危険過ぎる」

そして自身が最高の理を編んで放った大通連が防がれた事に、気を取られていたスズカに再度『硬直せよ。動く事あたわず』と暗示の理を放った。

「君は強いけどね、その拒絶じゃ私の言葉を完全に拒絶しきれない。私の言葉は世界を抜けても使い方次第では強い力を持つからね。
私の言葉は君を絡め取る事が出来る。絡め取られた君はさらに弱り、私の言葉にもっと捕らわれる」

言霊の皇は、新皇達の中でも最も力の扱いに長けている変種だ。その点だけは、他の新皇達の追随を許さない。
それもまた彼女にとっての自信に繋がっているのだろう。
たしかに攻撃力といった面では、他の新皇達には遠く及ばない。言葉に宿した力は、山吹色の世界を抜ければ途端に威力を落としてしまう。
そんな力で自らの世界に守られた純正型を殺す事など至難の業だ。
それでも彼女の言霊は『新皇の一角』に名前を連ねているのだ。
他の新皇達には出来ない力の使い方と、その巧みな制御力でもってだ。

「あなたは強い。あなたは賢い。あなたは戦い方が上手い。
それでもあなたは私の事を分かっていない」

下手に力が強いだけの純正型よりもずっと厄介な相手を前に、それでもスズカは揺るがない。
硬直を暗示された体は、先ほどよりもさらにぎこちない動きを見せていたが、それでもその瞳の光は強さを失ってはいなかった。

「私がいかに暗い場所にいたかを知らない」

むしろより強まっているような印象すらもあり、さすがの言霊も嘲笑う調子を抑えてスズカを見やる。
追い詰められた白銀がその立場に見合わないだけの戦意を放っている事に、今まで泰然とした態度を崩さなかった言霊の女が僅かに呑まれる。

「一人ぼっちで山の中にいた寒さ。
真っ暗な夜の怖さ。
近寄る全ての人間を敵とみなさなければならない虚しさ。
私はもう、あんな場所には戻りたくない。私にはあの人が必要なの。
邪魔を――するなっ！」

スズカの瞳の光は、もはや『狂気』を思わせるほどのもので――強迫観念に追い詰められた狂人を思わせるもので、関東ではどこか控えめな印象をスズカに持っていた言霊ですらも、その変貌には目を疑った。

「……白銀の彼方より来たりて」

そして――

スズカのワードに従って、今まで単調に鳴り響いていただけの『銀鈴達』が上げる悲鳴を彼女は聞く。

「我が身の深淵に帰るモノ」

狂ったように甲高く鳴く白銀世界の声を聞く。

「砕ける欠片は白銀で、こぼれる雫は黒銀色」

黒いニットを剥ぎ取り、証を晒した白銀の少女が自らの世界をぐちゃぐちゃにする様を見る。

勝てると踏んでいた相手が……灰色よりは相手取りやすい少女だと踏んでいた相手が、実は一番相手に回してはならない類のモノだと知る。

そして辺り一帯は、スズカから広がった『狂える白銀世界』に飲み込まれた。

防御に徹した山吹色の世界をも飲み込むかのごとき勢いで。

予定が狂い、逃げに徹した言霊の女がその領域をからくも脱出するまで、世界は白銀が彩る万色の繚乱に壊され尽くした。

スズカの後方で唖然とした表情を見せている二人っきりの仲間がいる場所を除いて、その一帯は白銀世界の理に食い尽くされたのだ。

その狂った世界の現れ方は、スズカに魔女と嫌われていた言霊の皇をもってしても――絶対毒の皇を身近に知っている彼女をもってしても、最悪と言えるだけの力を持っていて。

自分ではどうしようもない相手だと認識せざるを得なくて。

新皇はまた一つ『色』を堕とす。

表向きでは新皇と唯一呼ばれた灰色に続いて、白銀という色までも。

それがどんな影響を後に与えるのか。
何故、その後何年も元新皇二人に追っ手がかけられなかったのか。
それは後に語られる事もあるだろう。

――灰色の男と白銀の少女が関東に戻る機会があったのなら。

2―33・Ｆａｌｌ　ｉｎ　Ａｎｇｅｌ（前書き）

この題名はかなり早くに決まってました。
多分二部書き始めよりも早くに。
というか一部中盤ぐらいにはこの話の根幹は書けていたはずです。
それを編集しただけの話だったりします。

この話だけじゃなく、この辺りのスズカターンは全部そう。
おかげで楽が出来てたりします。

2―33・Fall in Angel

「僕は狂人って呼ばれてる。あるいは凶人とね。さて、後輩ちゃん。君は『狂ってる人』の定義ってなんだと思う？」

「……つっ」

無傷ながらも突っ伏し、小さく呻くスズカに対して、右肩から先をズタボロにされたまま立っているシヴァが、楽しげな口調を崩さないままでそう声をかける。

その右肩は、傷ついたというだけでは不足があり、斬り飛ばされたというには血の赤が足りていない。『欠けた』という表現が一番近いだろう。

血を一滴も流さず、ただ欠けただけ。肩から先は傷もなければ、傷を負う為の肉体すらもない。僅かに見える骨の白と血の赤だけが、肉体が欠損した証だった。

僅か三十分にも満たない、戦闘というよりもいっそ『喧嘩』と言った方が見合う、たった二人きりが向かい合っただけの戦闘で、辺りの景観はまるっきり変わっていた。

元白銀と元朱色。
拒絶と肉体支配。
銀鈴とマスターシヴァ。

そして元皇の少女と現在進行形で皇としてある少年。

この二人のぶつかり合いにより、捨て置かれたまま風化への道を辿っていた家屋達は文字通り完全に風化させられ、舗装されていた道も直接大地が覗いていた場所も、今では等しく赤土が覗く荒野へと変貌させられた。

一帯に幾つも穿たれたクレーターは、地下に眠ったままだった様々な配管ごと大地を抉っており、とてもたった二人の人間が……変種が戦っただけの傷跡には見えない。

「僕はね、こう思うんだ。『人が本来抑制している衝動を躊躇いなく解放する人間』。つまりずっと自分に素直な人間が、しがらみやらちっぽけな理性やらを理由に、自分自身をがんじからめにしている人間から見たら、『狂ってる』ように見えるだけなんだって」

「……其は――」

「僕の言いたい事が分かるかな？そうさ、僕達皇は全て狂ってるんだよ。狂う定めにあるんだ。そういう運命なんだよ。

今もあの関東（地獄）にいる無色も濃紺も端から見れば狂ってる。あんな場所にいたいなんて狂ってるとしか言いようがない。

海外からわざわざその地獄に流れてきた山吹もそうさ。

そして自分のエゴで仲間を捨てた灰色と、全てを捨ててそれを追った君もね。全員が全員、充分に……そして徹底的に狂ってる」

スッと手を掲げるスズカをなんら警戒する事なく、シヴァはその歩みを止めはしない。

「もうやめなよ。あんまり抵抗されちゃ、グチャグチャのドロドロにしたくなっちゃうだろ？せめてその綺麗な顔には傷をつけないま

まで、ひーくんにプレゼントしてあげたいのにさ」

ただスズカとは対照的に、ズタズタにされながらも、シヴァは可笑しそうに笑い続ける。心底愉快そうに哄笑を上げ続ける。

――どうせ無駄なのに。

――足掻きに過ぎないのに。

――またこの肉体（世界）を『殺しきる』ところまではいけないのに、と。

スズカのか細い腕から放たれる銀色の力の奔流にも、軽く無事な左腕を掲げてみせるだけでその力に身を任せ……今度は左肩から先を吹き飛ばされてもシヴァは気にもかけない。

ただ不自然に欠けた肩をすくめ

「ほら、殺しきれなかった」

そう嘆息を漏らすだけだった。

その口元に狂笑を刻み、『ゆっくりと再生していく両腕』を大きく広げながら。

両腕が欠けた以外は、不自然過ぎるほどに無傷なままの体を、まるで見せつけるかのように。

「落ち込む事はないよ、後輩ちゃんはすっごく強い。強い純正型さ。多分坂上と戦っても、長尾や新羅とぶつかってもいい勝負をするだろうね。ウチのファーストになら勝てちゃうかもよ？セカンドなんか相手にもならないだろうさ。

……でも『それだけ』だね」

そして小さな嘆息を漏らし。

天を仰ぎながら、大袈裟に嘆くように――多分にからかいを含んだ妙に演技がかった仕草で、額に再生しきった右手をやってみせる。

「その上、僕の世界とはとっても相性が悪いね。僕って単なる衝撃や打撃、斬撃にはすこぶる強いからさ、いかに強力な斥力を操れても、単なる物理攻撃の範疇でしかダメージを食らわないなら、そんなのは簡単に治っちゃうんだよ。

『僕の身体（世界）』はそういう類の理を持つものだからね」

そして……見る間に再生した右腕に、三度『血の刃』を伸ばす。

スズカの『銀鱗』に押し負け、二発目の『妖刀』に肩から先ごと消し飛ばされ、それでも蘇った『惨劇の剣（アーネンエルベの剣）』を。

「僕も中部の新羅とは相性が悪いんだけど、それも僕と後輩ちゃんほどじゃない。

まっ、それ以前にいくら力が強くっても、『皇の狂気』も自覚出来ないほどにひーくんから甘やかされてきた君じゃ、結局は最後の最後で長尾や新羅には勝てないんだろうけどね」

そして惨劇の血刃を振りかぶると、凄まじい勢いでスズカへと肉薄する。

その人形のように整った口元を、乾いた狂笑に歪めながら。

「……お喋りはもういいかな。そろそろ切り刻んであげるよっ、後輩ちゃん！！」

振りかぶった余波だけで大地に亀裂を走らせながら。

その口元には歪んだ嗤いを浮かべ、頬に刻まれたファイヤーパターンのタトゥーへと舌を這わせながら。

強大な理を宿した力使い過ぎ、無傷ながらもへたり込むスズカを切り刻む為に。

「其は銀鱗、其は銀龍、其は銀鈴！」

しかしスズカはへたり込んだその姿勢のままで両腕を突き出した。

あっという間に迫る狂人を見据える紺碧の瞳には、退く意志も、かえりみる心も、恐れる感情も見られない。

たった3つの言葉――スズカが最高の楯を現すために使うワード、『銀龍』『銀鱗』、そして世界を現す『銀鈴』という言葉だけで拒絶の銀楯を展開し、続けて次の力ある言葉を口にする。

そして拒絶の楯に阻まれ、動きを止めたシヴァを見すえながら、その頭を覆っていたニット帽（宝物）を片手で剥ぎ取った。

彼女の大事な大事な日常の象徴を脱ぎ捨て、血と死と拒絶の象徴である証を晒したのだ。

「……白銀の彼方より来たりて」

――大丈夫、大丈夫。

私はまだ大丈夫だよ、スズカ。

妹としての彼女にとっては絶対の存在である兄に、心の中では助けを求めそうになりながら……泣いていれば側に来てくれた存在に縋りそうになりながらも、自分自身に軽く『大丈夫』だと言い聞かせてから、スズカは深く白銀の世界へと指を伸ばす。

その先へと歩を進める。

「我が身の深淵に帰るモノ」

自分を一人から掬い上げてくれた存在。たった一人きりの家族を思って深淵に手をかざす。

弱音を吐きそうな自分を、兄の為にここにいるという事実だけで無理矢理抑え込み、弱い心を抑え込んでいく。

深淵から広がる世界に犯されていく自分を奮い立たせながら、拒絶の理を統べる世界の皇に身をやつす。

「砕ける欠片は白銀で、こぼれる雫は黒銀色」

孤独だったあの頃より、さらに一人ぼっちの場所に自分を追いやっていく。

誰も届かない、誰も存在し得ない、彼女だけの銀色の地平へとその身をさらす。

「ゆらりゆらりと回り巡りて、なお万色は銀色に彩られる。
其は……」

――あぁ、こんなに無茶をしたらやっぱり怒るかな。

――だったらいいな……めちゃくちゃ怒ってくれたらいいな。私を心配して、いっぱい怒ってくれたら嬉しいな。

彼女はそんな事を考えながらも、躊躇いなく自らの狂気のスイッチを押す。凶気へと世界の理を向ける。

拒絶の世界を狂わせる。理にひびを入れ、銀鈴に断末魔の悲鳴のごとき鳴き声をあげさせる。

自分を怒ってくれる人の為だけに、自らの意志でもって作為的に拒絶の世界を壊していく。

シヴァは言った。
スズカには『皇の狂気』がない。知らないだろう、と。
だからそんなに綺麗な世界なんだろう、壊したくなるぐらい真っ直ぐなんだろう、そして脆いのだろう、と。
しかしそれは『違う』のだ。
彼の言葉が間違っているという事を、他ならぬ彼女自身が一番よく知っている。
自分は汚くて、ねじ曲がっていて、他の皇達にも負けないだけの狂気を孕んだ歪な存在である事を知っているのだ。
彼女は狂気を知っている。力を使う事に対する衝動も知っている。自らの世界が他の皇達の現せない『狂い方』をする事も知っている。
そしてそれがどんなに怖い事かを知っていて、それでも彼女はその道を自らの意志だけで歩んでみせる。

そんな自分が……狂う世界に蹂躙される恐怖を知りながらも、それでも躊躇いなく世界を狂わせられる自分が、真っ当な人間であるはずがない事を理解している。
そう、自分こそが狂人と呼ばれるに足る存在なのだと知っているのだ。
自分が壊れる感覚を……その恐怖を知っていながら、それでも躊躇いなくそんな真似が出来る人間は、どこかが『壊れた人間』でしか有り得ないのだから。

彼女は汚いモノや怖いモノを知らないのではなく、それを誰よりも制御しきれているだけなのだ。
自らの意志だけで狂気を解放出来てしまうほどに。
自分の意志だけで、自分の白銀世界を狂わせてしまえるほどに。

――『白銀』は、誰よりも皇としての素養がある、そう言霊の皇に呼ばれていた。

彼女こそが、本来は東北の始祖だったのだろう、そう断言されたほどだ。

広大なる灰色や堕ちた無色、そして狂気の朱色などよりもずっと、白銀こそが始祖らしいとまで言わしめた。

灰色と呼ばれ、兄代わりとなってくれた少年の為なら、あっさりと『世界の境界』を越えてしまうその様は、強大なる言霊の皇を持ってしても歪だと警戒させた。

我らの中で一番歪なのは、新参の白銀だと恐れられていたのだ。

「――其は白銀色（しろがねいろ）の翼を持つ聖天使。

――其は黒銀色（くろがねいろ）の力を宿す闇天使。

――其は理を越えた先に在りし、万色繚乱の……」

その彼女が。白銀が。一番若く、朱色の代わりであった新参者の元新皇が。

あっさりと覚悟を決めて。

はっきりと狂う決意を秘めて。自らを鬼と化す結末を認めて。

魂の深き底から叫ぶように、精神の全てを持って弾劾するかのように、存在そのもので宣告し、断罪するかのように叫ぶ。

そんなスズカの様子に、本格的な戦闘を開始して以来、初めてシヴァの表情が喜悦以外のモノに歪められた。

風に流れたのか、拒絶の理に流されたのか、ニット帽の下に収められていた銀糸を思わせる細い髪が靡いていた。その額よりやや上部に、左右対照の位置から伸びた銀色の小さな突起は、整った顔立ちを持つスズカを歪に象ってはいる。

しかし、そんな『証』の歪さを持ってしても、弱さを抑え込んで真っ直ぐに見据えてくる、その意志の強そうな――でもどこか歪んだ光を放つ紺碧の瞳の前では、些かも美しさを損なわせる要素には

なり得ない。
むしろ弱さを抑え、覚悟を秘める姿は、単純に美しいだけの存在とは隔絶した輝きがあった。人の境界を踏み越えた何かを垣間見せた。
そんな彼女に、シヴァですら――殺す事にしか生命の価値を見出せない狂人ですらも、思わず視線も思考も奪われて……気付くのが遅れてしまったのだ。

晒された角を思わせる頭部にある銀色の突起。
それが外気に触れた時からより強まっていく『拒絶の理』と、指先程度のその小さな突起がゆっくりと鋭くなっていく事に。
広がっていく銀鈴の世界に在りながら、その銀鈴が悲鳴を上げている事に。
銀色の鈴がその体に亀裂を入れていく事に。
あと一言告げて、自らの狂気をもって世界の境界を越えれば、先ほどシヴァが『皇の狂気』と言った言葉通りに、スズカの『白銀世界』があっさりと狂ってみせる事に。

「――白銀世界」

そして世界は白銀色に満たされ始める。
十メートル四方ほどだった世界は倍以上に広がり、様々な色を含んだ銀色の欠片が繚乱する。
壊れた銀鈴の欠片達が世界を満たす。

それはまるで雪原を思わせる美しい世界でありながら、生物の存在を許さない極寒の凍土のような死地を連想させる世界。
そんな世界の中心で、白銀の皇は鋭く尖った『証』をかざしながら産声を上げたのだ。

2―34・Guardian

始まりは今はもう思い出せない。
長くずっと独りでいて、独りっきりじゃなかった頃など忘れてしまった。
そしてそんな時代があったとも彼女には思えなかった、
気付いたらそこにいた。たった独りで震えていた。
ずっとずっと小さな頃から、独りぼっちではなかった時など記憶になかった。
独りで何もかもを学んで、生きるすべを得て生きてきたのだ。

そこは夜眠る時に灯りがなかった。
真っ暗な闇の中でも側には誰もいなかった。
敵意を向けてくるだけの他者がいるだけの世界だった。

夜に怯えて、闇に震えて、一人だった自分に近付いてくる他人に背をむけようとして――でも完全に背を向ける事も彼女には出来なかった。
なぜなら、一人には慣れていたはずの彼女でも、自分が孤独なんだと知ってからの夜は長く感じられたから。
自分の存在が夜の闇の中へと溶けるような感覚は、体が傷付く事

なんかよりもずっと怖くなってしまったから。
全身が血にまみれる事は我慢出来ても、孤独にまみれる事だけは我慢出来なくなってしまったのだ。

体の感覚がなくなって。
聴覚も視覚も狂って。
自分という存在そのものが希薄になって。
そんな独りぼっちという闇に溶ける感覚は、自分を殺すものだという事を知ってしまったのだから。

吹き荒れる砂塵は世界を曇らせていた。
長らくアスファルトの下にあり、土中深くに埋もれて、わずかに水気を持っていたはずの赤土が、乾いた砂のごとき軽やかさで噴き上がって世界を舞い狂う。
一見すると辺りの景観は赤土が舞っているだけのように見えるだろう。
既存種から見れば——いや、例え変種であっても純正種でなければ、その辺りだけが普通ならばあり得ない超局所的な突風に見舞われたかのように見えたはずだ。

その領域をくまなく舞い散る銀色の欠片達——銀鈴の『死骸達』の姿が目に映る事は決してない。
様々な色を含んだ白銀色の世界。
その世界の支配者（マスター）自身が壊し尽くした『万色繚乱の白銀世界』は、マスターの同族の目にしか映らない。

その中心で、支配する世界を狂わせた皇は高らかに吼哮を上げる。

白銀の髪を振り乱し。

血走ったかのように僅かに赤く染まった紺碧の瞳を見開いて。

小さな突起でしかなかった銀色の証が鋭く尖り、その存在感を増した頭を大きく仰け反らせながら、天を貫くかのような産声を上げる。

そして彼女は、自らの領域にある唯一の異物……自分以外のマスターを見やり、白銀色の世界は自らの中にある朱色の世界へと意識を向けた。

皇たる少女はその瞳をより大きく見開き、普段の茫洋とした緩やかな印象の瞳とは似ても似つかない視線――刺し貫くかのごとき『刺線』とも言い代えられるほどの鋭い視線を向ける。

そして自分が壊した世界に彼女は命じた。

狂わせ、壊し尽くした白銀世界に、狂って壊れ尽くしかけた支配者として命じた。

自分以外の世界を持つ者を殺し尽くす為に命じようとした。

「はい、お嬢、そこまでっ。そこまででストップっ！」

「いやぁ、遅れちゃってホントゴメンなさぁ～い。お嬢、大丈夫だったぁ？」

そんな白銀に――より拒絶の理を狂わせようとしている彼女に、二つの見知った影が気軽に近づいていかなければ、彼女は完全に狂化した世界を回していただろう。

白銀の皇として堕ちた朱色の皇と相対していただろう。

周辺にある全てを壊し尽くして、その代償に『堕ちた朱色』を『壊れた白銀色』で塗り潰す道を選んでいた。

その二人がいなければ、この辺り一帯には彼女にとって『大切なもの』はなかったのだから。

「ヌエ？シュテン？なんで――」

二人は人外の戦場と化した場を、全く意にも介した様子もなく、スズカの側に近寄っていた。

完全に戦闘モードに入っていた朱色と白銀に、あっさりと近付いてみせた。

完全に狂いきるところまでいっていなかった少女は、そんな二人からかけられた言葉にゆっくりと『狂化』から戻っていく。

二人の存在にシヴァ以上に驚いてみせながら……しきりに首を傾げながらも、強く深くしていった世界を霧散させる。

壊れた白銀世界が自分と同じ分だけ全てを壊そうとする衝動を、ギリギリまで追い込んでいた理性でなんとか食い止める。

「いやね、お嬢に頼まれて『提督』や学園の『委員共』の抑えを受け持ってたんだけどさ。学園は相変わらず静かなモンだし、水賊にや三班の副官が向かったみたいなんだよ。だから西側は『ネームレス』の一番にお任せして、俺らはお嬢のお手伝いに来たってワケ」

――ほら、今みたいにお嬢って平然とムチャするしさ。

そう笑いながら言う二人の内やや大柄な男は、活動的な黒いタン

クトップと締まった体に似合った青いジャージ、濃い灰色の髪が映えるその頭にはタオル地のバンドを巻いている。
その頭を軽く掻いてみせながら、彼は呆然としたまま首を傾げているスズカに気安く近付いていくと、ニカッと気持ちよく笑ってみせる。

「でも間に合って良かったよぉ～。シュテンのカス野郎がチンタラしてなきゃ、もっと早く来れたんだけどねぇ～。
……ったく、使えねぇ×××野郎だよ、ホント」

もう片方の細身の女は、ひらひらのレースが着いた白いブラウスと、ひらひらした薄い生地を持ついわゆるゴスロリ調の黒いドレスを纏っていた。
そのほんわかとした、どこまでも穏やかな笑みはとても柔らなモノで、フワフワに巻かれた金糸のごとき髪が、精巧な造りのフランス人形を思い浮かべさせる。
その笑みを浮かべたままで、はてなマークを盛大に浮かべていたスズカに抱きつき、自分より先に声をかけた男に抉るようなローキックを放つ。
しかも爪先を真っ直ぐに突き立てるように、足首のスナップを見事に効かせたトゥーキックで。

「いってぇだろうがっ、こんの二重人格女っ！大体な、お前が『風呂入りたいから廃都寄れ』ってワガママを言わなきゃもっと早く来れたんだよっ！」

「相変わらずシュテンの×××野郎は、細かい事をグダグダ言って、責任を女になすりつけるクソしみったれた男ですねぇ～。どうせ『アレ』の後始末も女任せなんですよぉ～、こいつみたいなヤツに限ってぇ～。まぁ、どうせ一生童貞ですからぁ、関係ないですけどぉ

～」

「だからなんで童貞押しなんだよっ！」

そんな事を言いながら、すねを抱える――それでもスズカを気遣うかのように背後に庇いながら――男と、乱れたスズカの髪を、愛おしそうに撫でる女は真っ直ぐに睨み合い……二人揃ってシヴァへと視線を向ける。

底冷えするような深い青と、猛る獣を思わせる金の二対の瞳を。

今までのじゃれ合いじみた時に見せた視線とは違い、射るような……刺し殺すかのような殺気をのせた強い視線を。

「……ウチの可愛い可愛いお嬢を、あんまりイジメないでやってくんないかなぁ。

……いくらお嬢の元先輩さんでもぶっ殺すぞ」

「こんの腐れ×××野郎がっ。テメェのイカ臭ぇ手で、ウチの可愛い可愛い可愛い可愛いお嬢に触れんなよ。その粗末で小汚ねぇ×××と一緒に、その狂っちまった頭を綺麗に斬り落としてやろうか、あぁ！？」

「……いや……いやいや、殺る気マンマンなのは結構だし、気持ちは分かる。見た目を裏切りまくって口が悪ぃのも毎度のこった。でもよ、ここは一旦退いた方が良くねぇ？」

底冷えのする青の瞳の光以外はにっこりと笑みを浮かべたままで、伏せ字にしなければ聞くに耐えない言葉を吐くヌエに、同じく怒っていたハズのシュテンが腰を引きながら、思わず小さな溜め息を漏らす。

見るからに血の気の多そうな野性味のある顔立ちのシュテンよりも、温和な笑顔のヌエの方が前に立っている辺りが普通ならば違和感を醸し出すはずだ。

しかし、それがこの二人の場合には不思議と不自然には見えない。

それはヌエの言葉遣いによるモノだけではなく、彼女自身が穏やかな笑みのままで、剣呑過ぎる殺気をバラまいている事が要因と言えた。

「腰が砕けたってんなら一人で引っ込めよ、アンダードッグ（負け犬）。一人遊びが好きなマス野郎の手なんざ借りるまでもねぇ。私一人で東海の害獣は駆除してやるよ」

「いや、俺に当たんなよ。俺もムカついてんだからさ。でもお嬢も結構疲れてるみたいだから、休ませてやった方がよくねぇ？」

物騒な殺気を放つヌエと、疲れたように肩を落とすシュテン。

二人はあわあわと二人を見渡すスズカを挟んで、しばし睨み合い……ヌエの方がふてくされたように視線を逸らした。

「……ちっ、かもしれませんねぇ～。アホでもたまにはいい事言うじゃないですかぁ～」

そしてそんな事を言って、彼女は軽く肩をすくめてみせる。

なんの気負いもなく、少しだけむくれるかのように唇を尖らせながら、小さな舌打ちと共に僅かに下がる事で、不満と了解を示したのだ。

そのやり取りをしている最中も、二人はシヴァが迂闊に攻撃を仕掛けられないだけの圧力を放っており、一種異様な空気が辺りを漂っている。

ヌエは尖り突き刺さるような敵意を剥き出しにし、シュテンは重

くのしかかるような気配を前面に向けているのだ。
シヴァを牽制しうるだけのそれは、並みの人間には決して持ち得ないモノだ。

「この僕から逃げられるとでも思っているのかな、かな？」

そう言ってはみせたが、その視線や雰囲気からは隙一つ見当たらない。シヴァはその口元に相変わらずの歪んだ笑みを刻んでいたものの、彼の狂人を持ってしてもこの二人に迂闊に間を詰める事を躊躇わせた。
躊躇わせるだけの何か、脅威になりえるだけの確固たる何かがこの二人からは感じられたのだ。

「えぇ～、そんなの余裕ですよぉ～？余裕過ぎですねぇ～。わたしたちぃ、これでも他の皇に付いてた有象無象共とは違ってぇ～、『たった二人っきりで、白銀のガードをしてきた』んですからぁ～」

「誰が関東から白銀を冠したお嬢を逃がしたと思ってんだ？灰色が抜けて、警戒しまくってた向こうの皇共に比べりゃ、一人ぼっちのアンタをやり過ごす程度ワケねぇよ」

そう二人揃ってヘラヘラと笑うも、共にその内から滲む敵意を隠さない。

「しつこく追っかけてくる山吹色（ストーカー野郎）や、その手下の雑魚共にぃ～、横からちょっかいかけてくる中部のバケモン野郎、身の程知らずの盗賊（おバカさん）達を～、お嬢と退けてわたしたちってばこっちまできたんですよぉ～？」

黒鉄第七班の誇る『夜狩』と『牙桜』は、狂人を前にしても一歩

も退く様子はなく、スズカの前に立ちふさがり、揃ってその手をかざしてみせた。
ヌエはその身を銀鈴の敵を砕く剣の先端として。
シュテンはその身を銀鈴を守る為の大楯として。
その姿は、東海の狂人を前にして、なおその身を誇るかのように真っ直ぐと立ちはだかる。

「つまりぃ……大物ぶってあんま余裕かましてんじゃねぇぞ、ダーキーヘッド（イカレ頭）。お嬢にムチャさせたてめぇは、次の機会に殺す。体に千個穴開けて、その穴全部に指ぃ突っ込んで、グチャグチャに中を掻き回して狂うほどに逝かせてやる……って事ですぅ」

「たった三人きりの一軍、たった三人だけの軍勢。今のアンタは、関東軍の一角だった軍勢と、一人っきりで向かい合ってんだよ」

その言葉を最後に、一番前面に立ちその手をかざした少女の殺気は空間を走り抜ける。そしてにっこり笑ったまま柔らかく立てた親指を地面に向けて振り下ろした。
そのすぐ後ろに立つシュテンは、立てた親指で自らの首をサッと掻っきるジェスチャーと共に、唾を吐き捨ててみせる。

「……あいつを抑えろ」

そのシュテンの言葉に大地が揺れる。

「あのクソッタレを喰らっちまいな」

続いて言った柔和な笑顔のままのヌエの言葉に、大気が激しく振動する。
赤土にまみれた幾本もの触手が伸びて大地に亀裂を作り、ヌエか

ら飛び立った小さな黒点は空間一帯を支配する。

触手は『木』。黒点は『虫』。

木々の生えていない場所には有り得ない――二人の皇により、歪に耕された大地には見合わない巨大な幹は、ほどなくシヴァを間断なく囲い込んでいく。

そして地球上で群れを成す生物としては最も強大なる種族の一、子供の手の平ほどもある蜂の王『オオスズメバチ』の兵団が、シヴァを女王の敵対者として覆い尽くす。

最初小さく細い触手だった幹は、ゆっくりと……しかし常識からすれば目を見張るほどの勢いでその身を太くし、蠢く羽音は膨大なる群れでもって、その音源であっという間に増してシヴァを囲い込んだ。

「逃げやしねぇよ。ちっとこの場は借りとくだけさ。仮にも皇ならこれぐらいは切り抜けられんだろ。イカレたその頭で精々覚えとけ。こっから先の地はてめぇにとっての鬼門なんだって事をな。今の俺ら二人に狙われたら、いかなアンタでも無傷じゃ済まないぜ？」

「アンタはわたしらが殺す。お嬢が手を下すまでもねぇ。わたしら二人で充分だ。少しだけそいつらと遊んでから追いかけてきな、マッド野郎。綺麗に駆除してやるからよ。……ほら、ウスノロ、とっととお嬢を背負えよ、気が利かねぇ童貞野郎だな」

「わぁってるよ、イテッ、蹴んな」

そしてシヴァをその場に置いたまま、二人は気楽な歩調で背を向ける。

『壊れかけ』から戻ってきた反動からか、いまだに混乱しているらしいスズカに二人揃って優しく手を貸しながら。

「おい、コラ、童貞。改まって言うまでもねぇだろうが、変なトコ触ったらその汚ねぇのねじ切るからなっ」

「お嬢の前で下品な事言うな」

「確かにシュテンの×××野郎の首は、下品な代物ですぅ～」

「ねじ切るって首かよっ。普通に死ぬわっ！」

異形の線と点の群れに包まれる純正型を視界から外して、シュテンは軽く首を傾げたままのスズカを肩に担ぎ上げる。

ヌエはそんなシュテンに腰の入った蹴りを入れて、いつも通り過ぎるやり取りを交わしながら後退していく。

極小の点の群れと極太の線に囲まれ蠢く塊をその場に残して。

「もぉ～、お嬢が本気でブチ切れたらわたしたちじゃ止められないんだからねぇ～！『向こうに行っちゃった』お嬢は本気で怖いしぃ～」

「……うぅ、でも」

「デモもストもないよ、ホント。いや、勘弁して、マジで。ブチ切れモードのお嬢を前にしたら、ヌエのヤツはびびって腰引けちまう

んだ。つまり俺ばっかりが苦労する羽目になるんだからさ――」

「テメェも似たようなモンだろうが、この××××野郎。向こうから逃げる最中に、あのクソ陰険山吹野郎が追っかけてきた時、ブチ切れお嬢にブルってヘタってただろっ？！」

「お前よかはマシだよ！さっさと一人だけ逃げやがったクセに！あん時俺を蹴り転がして一人だけ隠れてたのを、まさか忘れたとは言わせねぇぞっ！お前に蹴り飛ばされた直後に、思いっきり顔の間近を妖刀が掠めていったんだっ。普通にヘタるわっ！」

「……あの、落ち着いて――」

「とにかくお嬢はブチ切れ禁止だからぁ～！『あれ』は、可愛くないしぃ～」

「絶対、お嬢はブチ切れ禁止ねっ！次辺り平気で死にそうだからっ！俺がっ」

主従なのか、兄妹なのか分からないやり取りを交わしながら。

抱えられたスズカに、二人っきりの同僚がコンコンと言い聞かせながら。

2―34・Guardian（後書き）

ここでスズカターンは終わりじゃないですよ？
シヴァがどうするのかも載せますし、ここからがスズカターンのメインとも言えます。
ネタばれ覚悟で言うなら、彼女のバトルパートはもう終わりですけど。

2―35・Master―Master

「あ～ぁ、逃げられちったよ。くっそぉ～、フラストレーション溜まるなぁ、もぉ。……虫ケラなんかいくら殺しても収まんないよ」

辺りに転がる虫の死骸を踏みにじり、引きちぎり、引き裂いた蔦のようなモノ――巨大な木の根を蹴り飛ばすと、シヴァは顔にかかった薄い色の髪をかきあげた。

「後輩ちゃん達は……もう結構離れちゃったみたいだね。引いたって事は足留めだったのかな？
まだ僕の足留めをするつもりなら、光都辺りで追い付けるだろうけど」

――さて、どうしよっか。
そう小さく呟いて空を見上げる。

彼に襲いかかってきた、数百もの数を誇る最強の軍隊にして群体たる昆虫は、すでに空を飛ぶ機能も毒の剣も失い、拘束しようと迫ってきた蠢く大樹の足は、単なるウッドチップと化していた。
それに対してシヴァは、その体に傷一つついていない。ぼろ切れと化したシャツと、クラッシュジーンズにしても鉤裂きの付き過ぎたジーンズをはいたその身体には、傷一つ見当たらない。

「あの二人って『支配系』かな、かな。僕やひーくんの『世界』ほどじゃないけど、支配系の能力ってだけで激レアじゃんか。あぁ、ちっと手下に欲しいかもぉ～。

あのガード二人はさて……どっちかは『同族』だったりするのかな、かな？どっちも『同族』だったりしたら面白いんだけど」

体中の汗腺から血液を霧状の弾丸にして飛来する小さな虫を撃墜し、惨劇の刃で根を切り裂いた後であっても……異形の軍勢を相手にした直後であっても、シヴァは心底つまらなそうな無表情で曇天の空を見上げた。

怯まず迫る最強の虫兵と、唸りをあげて宙を走る異形の大樹の圧力は、どちらも自然界では有り得ない凶悪さではあったが、それでもやはり先ほどまで相対していた『ご馳走』に比べれば味気がなさすぎた。

「でもいかに同族さんであっても、皇同士の遊び場にたかだかガードごときが口を挟むのは……ちょっといただけないよね」

そう嘆息を漏らすと、先ほどまで敵対していた少女が去っていったであろう方角に向かって軽く頭を振ってみせた。

「……あの子が東北の始祖か。なるほど、さすがは始祖、ひーくんやゆーちゃんと同格なだけはある」

そう言ってほぅ、と小さく丸い息を吐くと、軽く鳥肌立った腕をその異形の手のひらでさする。

何度も何度も……皮膚が赤く染まり、腫れ上がるほどにこする。

そして小さく顔を僅かに伏せると、唇を僅かに歪めて隠しきれない笑みを刻んだ。泣いているかのような歪さで作った笑みを歪めたのだ。

「最初はひーくんに甘やかされて。
『ゆーちゃんの代わり』に大事にされすぎて。
産まれ持った牙を抜かれちゃったのかと思ったけど……あの姿はまさしく銀髪の鬼、銀髪鬼だ。
――人間離れした綺麗さだった」

歯を僅かに鳴らし。
目を大きく見開き。
そして自身の身を抱えるようにしていた腕を体が軋むほどに広げ、空に向けてその身を大きく仰け反らせて、堪えきれない狂笑を口の端から漏らした。

「銀髪の彼女……あの『先にいた』彼女を見てみたかったなぁ、あぁ、見たかった。まったく、この欲求不満をどうしてくれるんだよ。僕の中じゃ、僕の中じゃあ、すでに後輩ちゃんで遊ぶ心積もりが出来てたのにさぁ！
ハッ……ヒャハハハハッ！！」

そこまで狂笑混じりに文句を漏らし終えると、その体から血の散弾をバラまいていく。
霧のように細かく、しかし暴悪な力を振りまいていく。
すでに朱色と白銀の力でメチャクチャに、グチャグチャになった大地を、極小の血の欠片でさらに耕していったのだ。

単なる衝動で。
溢れ返る狂笑と共に。

「さてさて。どうしようか？どうしよっかな？あはっ、嬉しい誤算

があり過ぎて頭が回んないよっ！これでひーくんとも遊べるなんて、考えるだけで頭がこれ以上どうにかなっちゃいそうだっ！」

彼は思考を巡らせてゆく。回らない頭を、理性というタガが壊れてしまった思考を回していく。

自らの身体に引っかかった形になっている、すでにシャツの原型を留めていないぼろ切れを鬱陶しげ引き裂いて、その頭を実際ぐるぐると巡らせ、首を回してみせる。

このまま関西に遊びにいくべきか、それとも中部や北陸を先に回して、つまらないハズだった関西をメインに当てるべきかを。

シヴァの中での今回の遠征は、『坂上がいなくなってつまらなくなってしまった関西を、今後北陸や中部に遊びに行く時の為の前準備として落としておく』という意味合いでしかなかった。

いずれ北陸の長尾や中部の新羅と遊ぶ際に、関西という皇無き地を持っておいた方がひょっとしたら面白くなるかもしれない、という考えでしかなかったのだ。

そして東海で利権を漁る連中に、勢力が広がる旨味を与えておけば、北陸の長尾や中部の新羅と遊ぶ際に、より大きな遊びへとなり易くなるだろうと考えたし、新たなおもちゃの狩り場として……マンハント（人狩り）の対象として、見知らぬ土地の人間も面白いかもしれない、と思っただけでしかない。

でも――

「あぁ、ダメだ、ダメダメだ。頭が回らないな。乾く、渇くよ。喉が乾く。世界が渇く。

銀色の髪を散らしたい。

赤い血を浴びたい。

磔にかけて、縛りあげて、ぐちゃぐちゃになるまで泣かせたい」

面白くなりそうだったのに。

これからだったのに。

関東を抜けて以来――皇三人に追われたあの時以来、久々に命がけで遊べそうだったのに。

そう思えば、より『乾き』が増した気がしてしまう。

『飢え』が狂おしくなってしまう。

東海という地方では、地域一帯の支配を終えるまでついに味わえなかったほどの興奮が――東海軍ではナンバー2である『ファースト』を相手に回した時でも感じなかったほどの高ぶりが、身体の奥底でくすぶったまま消えてはくれない。

燃え上がった炎が心を燃やし尽くし、銀髪の少女の姿が頭に焼き付いて離れないのだ。

「……ダメダメだね。ダメダメだ。

とりあえずカエラに言って、『銀髪のオモチャ』でも調達させようかな、かな。

例えダミーでも、今は銀髪の女の子でなきゃ満たされそうにないや。考えるのはそれからでもいいよね。この『乾き』を満たしてからでさ」

そう言って、白銀の皇とそのガード二人に攻撃された後でも、結局は傷一つ負わないのままで『堕ちた朱色』は踵を返した。

別にこの場を去った三人に恐れを抱いたから背を向けたワケではなく。

純正型の中でも、皇種と呼ばれた少女とその側近二人を相手に、状況の不利を悟ったワケでもない。

ましてや疲労により戦闘をさけたワケでもなければ、後ろに控え

たままの手下達が心配になったという事でも決してない。
マスターシヴァは……そう呼ばれる彼は、そんな事を気にするような性格ではないのだ。

「また来るよ、後輩ちゃん。
次は絶対に遊びに行くよ？ひーくん」

そして――
朱色の皇の進行は、たった一つの都市を落とす事なく。
しかし彼の皇にとってはそれ以上の成果を得て。
現在の朱色の狩り場にして『おもちゃ箱』へと帰っていく。
美味しいものは最後に食べる主義たる彼は、たったそれだけを考えて――関西の地にご馳走を残す事にして、ただそれだけで満足してとりあえず帰る事にしたのだ。

「さぁて、一旦帰ろっかぁ」

のんびりと歩いて帰ってくるなり、ただそれだけを楽しげに言って、シヴァは銀髪の少女の奇襲を受けても無事だった車の後部座席に身を預けた。
そんな彼に特に何かを問う事もなく、カエラはただ首肯を返して、連れてきた東海の軍勢に指示を出していく。
ぼろ切れになった服にも、相変わらず傷一つついていない体にも、その他人の都合を考えていない物言いにも、彼女は特に何かを返したりはしない。

それはマスターシヴァという存在がそんな人物だと知っていたからでもあったが、彼がもう帰るという以上、関西に根城を持つ連中と戦うには戦力が足りないという打算もあった。
彼が帰るという以上、例え一人でもこの少年は帰ってしまうだろう。仲間――同じ地方の人間がいくらやられようとまったく気にも止めないに違いない。
それ以前に『帰る』という言葉に従わない者がいれば、彼はあっさりと殺意を向けて、その後でもう一度『帰ろう』と宣言してみせるだろう。
それこそ全員が帰るに賛成するまで。
マスターシヴァとカエラ二人になっても、彼は全く気にすまい。

その意味でも、連れてきた東海の軍勢全てより、『マスター』一人の方がずっと強いというのは問題だろう。
それこそが彼の意志が軍勢の意志を覆す理由の最たるものだ。
いかに勢力が力を込めた政策でも、彼の気分が乗らなければ実行されない。
彼が戦いたくなれば戦端は開かれない。
今みたいに侵攻作戦の途中――というより、むしろ始まってもいないうちに、中止になるぐらいは普通にあり得る事なのだ。

「何も聞かないんだね、ね？やっぱりカエラは賢いなぁ。
その賢いカエラにさ、頼みがあるんだよね」

「なんでしょう？」

一応形としてはそう問い返してみせたが、カエラにはマスターの言う『頼み』について想像が付いた。
このマスターが『頼み』という言葉を持ち出す時は一つしかない。

「銀髪のおもちゃが欲しいんだ。女の子で銀髪なら作り物でもいい。ナチュラルな銀髪じゃなくてもいいんだ。
小柄で……そうだな、色白なら誰でもいい」

「……大層気に入られたみたいですね？」

今までになく上機嫌なマスター。
その様子こそがカエラには頭が痛い。
余りにも上機嫌過ぎて、その機嫌がハイに振り切れないかと考えてしまう。
その考えがあながち的外れでない辺りがどうしようもない。

「うん？何か問題でもあるかい？」

「問題ありません。帰りつけば『玩具のストック』がありますので、我らが都につくまでお待ちいただけますか？」

「うん、いいよぉ。でも、我慢してんだからぁ、あんまりつまんない作り物はやめてよ？
他に八つ当たりとかされたくないだろ？」

玩具のストック――。
その玩具とは、すなわち『マスターシヴァ』の狂気を向ける対象。つまり彼の破壊衝動と殺人衝動を向ける為の『血と肉と痛覚と悲鳴を上げる為の声を持った人間』。
罪人を始め、別地方から流れてきた食うに困った難民……そんな理由をでっち上げられた、『マスターシヴァが気に入りそう』という理由で集められた『玩具のストック』。
そんな中から、マスターの要望に従って玩具を出す事も、『マスターシヴァによる東海軍への被害』を減らす為には必要な事だった。

「ふふっ、本当にこの世界は面白いよね、ね。こんなに愉快な気持ちになったのは久しぶりだよ。
事実は小説よりも奇なり。そして世界は『世界』よりも奇なり、だよ、ほんと」

「さようにございますか。今現在南下を続けている北陸の連中はいかがいたしますか？」

「ははっ、心配しなくても、今南下してる長尾じゃ関西は落とせないよ、カエラ。あいつは一回、ひーくんにボロ負けして這々の体で逃げ帰った事があるらしいからね」

「長尾が、ですか？」

長尾まりあ。
支配面積で言えば、マスターシヴァや中部地方の皇、新羅よりもずっと広い地方を掌握している女帝。
そんな女が、ボロボロに敗れ、這々の体で逃げ帰った相手がいるなど、カエラには信じられなかった。
なにしろ長尾まりあは、相性的にはそう良くない相手であるマスターシヴァを相手に回しても、そうひけを取らなかった純正型なのだ。関東軍の皇を除けば、間違いなく最強の女性であろう。

「そうさ。長尾は強いよ。あいつは化け物で……本物の怪物だ。僕と新羅、そして長尾は今じゃ三竦みみたいになっているけど、それはだてじゃない。
でもね、そんな状況でいられるのは……長尾が化け物だと思えるのは、関東の皇達が大人しくしているからさ。

本物の怪物は関東にいるんだ。本物の皇種は始まりの地であるあの地獄で、最初に皇と呼ばれた三人だけだよ」

――長尾はそれをよく知ってるはずさ。

自分より化け物で、自分より最悪な世界をあいつも見たはずだからね。

そして何より。

そう簡単には驚いたりはしないカエラを驚かせたのは、『関西にいると噂だった新皇』、『あやふやな噂でしかなかった生ける伝説』が――『ひーくん』というシヴァらしい微妙な呼び名の新皇が、今現在の関西にいると自らのマスターが確信しているらしい事だ。

マスターシヴァのお気に入りとなり、壊れた彼を上機嫌にさせたほどの銀髪の少女以外に――恐らくは仕留めなかったのであろう化け物少女以外に、そんな規格外がいると断言するような口調こそが戦慄を走らせた。

「彼をもし倒せる存在が『同じ新皇達』以外にいるとしたら……それはこの僕だけだ。同じ『新皇』に目されかけたマスターシヴァだけだ。長尾じゃ無理だ。新羅でも無理だ。あいつらは変に冷静で頭が回るからね。

彼が持つ世界の異常さを知って、怖さをもよく知っていて、それでも恐怖を感じない……感じる感覚がないこの僕にしかひーくんは殺せない」

「……」

「きっとカエラでも、ひーくんのあの『殲滅世界』を見たらびっくりするよ？そしてまともな人間なら、『新皇達』を敵に回した瞬間に絶対に生きる事を諦める。そんな世界を持ってるからこそ新皇な

んだからね」

その言葉を最後に、上機嫌そのもので鼻歌を歌いながらその目蓋を閉じる。

この少年が『鼻歌』を歌うという事自体めったにある事ではない。玩具で『遊んで』いる時も、どこか乾いた瞳をしているような無感情さが滲み出ている少年だ。

ここまで上機嫌なところなど、長らく側にいるカエラをもってしても今まで何度も見た事はない。

自分の語った言葉がいかに大きな事なのか、そんな事は一切考えていないのだろう。

――マスターが勝てるというならば、きっと勝てるのだろう。『勝ってしまう』のだろう。

しかし、その情報は秘密にしておかなければならないな。

もし外に漏れたりすれば、マスターシヴァに支配される東海地方で暴動が起きてしまうだろう。絶望に飼い慣らされる事に慣れた人々が、『関西にいるマスターシヴァよりはマシかもしれない皇』という、儚い希望に縋り自滅してしまう。

その結果がいかに分かりきった事なのか、愚かな連中にはきっと分からないのだろうからな。

そんなシヴァを見ながら、カエラは一人考えを巡らせる。

東海軍の参謀長にして、マスターシヴァの補佐官。

狂人の知恵袋にして、狂人による被害を調整するバランサー。

そんな役割を課せられた『サード』たる彼女にとって、それこそが仕事なのだから。

そして現状を見た上で、東海の人間にとって最善で、マスターシヴァにとっても望むであろう策を打つのだ。

「ならば我らは北上いたしますか？長尾が他の誰かにやられては、また不機嫌になられるでしょう？」

「ふん、カエラは相変わらず正直だなぁ。そんなとこも嫌いじゃないけどね。
でも今は行かないよ」

「それは何故でしょうか？」

てっきり『そうだね、それがいいね』と返されるものだと思っていただけに、その返事は彼女にとって予想外だった。
なにしろ関西の坂上が倒されたとの情報が回ってきた時、マスターシヴァはかなり荒れたのだ。

『僕が殺すつもりだったのに出遅れちゃったじゃんか！』

そう言って、今まで安易に関西へと攻め込む事をなんとか自重させてきた側近達数人を、あっさりとミンチにしてみせて暴れ回ったのだ。
だからこその策だったのに、マスターシヴァの返答は予測から外れていた。

「ふん、ひーくんと後輩ちゃんを相手にあの長尾がどこまでやれるのかちょっと興味があってさ。何より今のひーくんがどこまであの『殲滅世界』を扱えるのか、それも見てみなきゃ食い損ねが出る可能性がある。皇は全部僕が食うつもりなんだから、状況はしっかり把握しとかないとね」

「しばらくは動かない、と？」

「二回も言わせるなよ、カエラらしくもないなぁ。飢えは我慢するさ。ご馳走の前だからね、その我慢が辛ければ辛いほど、ご馳走の味が増すってもんだ。そうだろ？」

――だから今日は食い溜めだ。

いい玩具を期待してるよ？

それを最後にひらひらと手を振ってみせると、シヴァはそっぽを向いた。

その態度が『これ以上話すつもりはない』という事であると分かり、カエラは小さく黙礼を返して背を向ける。

変種の皇を全て食らう。

それが単なる大言壮語でも、自意識過剰な自分を過大評価した言葉でもない事は、他ならぬカエラが一番わかっていた。

マスターシヴァと呼ばれる少年にとっては至極真面目で、どこまでも本気なのだ。

そしてそれはカエラにとっても望むところである。

狂人と呼ばれる彼を制御して、なんとか理解して、そして全ての皇達を殺し尽くす事。

それは自分の知識や能力に自信があるものとしては、挑みがいのある課題だ。

ペイ（対価）として自分の命をかける事になっても、それを成せたとしたなら構わないと思えるぐらいの難解な問題だ。

なにしろ遠くを見通せ、遠くに言葉を運ぶ以外には、なんの能力もない自分が、『国一つを壊した国崩しの変種』を殺せるのだ。

これほどやりがいのある事など他には有り得ないとすら思う。

だからこそサードたるカエラからすれば、マスターシヴァの危険

性などその異常な能力に比べればなんとも思わない。
彼女は彼女自身が見いだした難問に全てを賭けているのだから。

――最初の新皇、か。
望むところだ。いずれは関東に攻め入り、他の新皇も討つつもりだったのだからな。
私の愛しい狂気が皇を全て食らう過程で、その身も食らってやろう。

そして。
サード率いる東海軍。マスターシヴァが加わった東海軍。
ただ二つの思惑に……二人の狂人に支配された子羊の軍は帰っていく。
犠牲だけを出し、その対価を手にする事もなく。
いずれまたこの地に戻ってくる事を誓って。

2―35・Ｍａｓｔｅｒ―Ｍａｓｔｅｒ（後書き）

シヴァはしばらくお休み。
第三部でも出ますが、長尾のが先かな？
次の話でスズカターンは終わりです。
次の話がメインな感じですが、バトルはナシ。
次回『Ｍａｍａ……』

2―36・Mama……

全く縁もゆかりもない地で出会ったその少女は、まさしく彼女の生き写しだった。

かつての自分自身のすがたがその少女にぴったりと重なったのだ。

その少女との出会いがどれほど自分に衝撃を与えたか。それは彼女自身以外には、恐らくあと一人にしか分かってなどもらえないだろう。

自分の事を一番に考えてくれる二人っきりの同僚……家族同然の二人にも、今では心を許せる友人となった紅の少女にも、その衝撃の大きさは絶対にわかりっこないと思う。

それどころか『どこが似ているのか』と首を傾げるかもしれない。

そう、姿形自体は全く似ていない。

彼女は灰色がかった銀髪だったのに対して、少女はくすんだ金色の髪だったし、瞳の色も彼女が抜けるような紺碧の瞳であるのに対して、少女は全ての色を飲み込むような漆黒の色だ。

それでも、そんな違いなど全く気にならないほどによく似ていた。

間違いなく目の前の少女は、かつて兄に拾われるまでの彼女自身だと思ったのだ。

空腹のあまりか弱々しく唸る口元は、それでもはっきりとした敵意が見えるもので、自分に近付いてくる彼女に怯えている事が分かる。

涙を浮かべて、歯をカチカチと鳴らして、猫科の動物の攻撃態勢を思わせる前傾姿勢で警戒するその姿は、どこまでも獣じみて見えたのに――それでもその姿は、傷つく事に怯えただけの幼い子供のものだ。

そして何よりはっきりと自分に似ていると思ったのは、少女の頭にある『証』だった。

彼女と同じように――今では銀鈴と呼ばれ、多くの『大切』を持ったスズカと同じように、兄に大切なものをたくさんもらった彼女と同じように、頭に異物がある少女。

スズカは左右対象に二対。

少女は額のすぐ上に一つだけ。

それでもその程度の違いなど全く小さなものでしかない。

頭にかぶせてあった布がスズカの力で弾かれたあと、必死といってもいい表情で『それ』を隠そうとする姿だけでも、彼女には十分だった。

十分過ぎるほどに胸が痛んだ。

それだけでスズカには、少女の今までが……歩んできた暗い道のりが見えてしまったのだ。

――その少女との出会いには、ほんの少し時間を遡る。

「止まって」

いきなりそうかけられたスズカの声に、シュテンは運転していた年代物のジープにブレーキをきかせた。軋んだ甲高いブレーキ音が響き、僅かにつんのめるかのように車体が滑る。

場所は山都から外れてすでに光都に近い場所でありながら、他地方との抗争の爪痕なのか荒れ果てた建物が目立つ地域だった。

人の姿は全くなく、ゴーストタウンという呼び名が相応しい寂れた元住宅街だ。

シヴァと争った場所――東海地方との境界からは離れていたが、その荒んだ景観だけは全く変わらない。

「ん～？何ぃ？なんかあったぁ？」

スズカにもたれかかり半分眠ったように瞳を瞑っていたヌエは、そんなジープの動きに合わせてシートからズレ落ちながら小さなあくびを漏らしつつ、キョロキョロと辺りを見渡してみせる。

その仕草はどこまでも呑気なもので、気楽な様子にしか見えない。

しかし、別に彼女はいつものように運転をシュテンに任せてサボっていたワケではない。

今もその力でもって、後方にいる狂人の動向を『子供達』に探らせているのだ。

それだけではなく、この辺りの状況を念のために偵察をさせていたりする。

今の三人の中で、最も働いているのは彼女だと言っても過言ではない。

またも運転を一人任されたシュテンは、いつものように彼女に対して不満を漏らしてみせたが、それは別に本当に不満たらたらだっ

たからなどではない。そんなやり取りが『いつもの二人らしさ』だったからに過ぎない。

スズカの側にいる二人らしさ。

ギャーギャー喚きあって、結局最後にはいつもシュテンがヌエにやりこめられて、これまた毎度かわせた事のないローキックを食らって、それをスズカがあわあわと慌てながらあたふたしている。

そんな『らしさ』を求めたからこそ、文句を付けてみせただけだった。

もちろん後部座席に陣取ったヌエが運転席に座るシュテンに対してローキックを放てるワケもないから、今回は後頭部に思いっきりケリを食らったのだが、別に蹴られたくて文句を付けたワケではない。

「声が聞こえる」

「声？」

「待ってて。すぐに戻る」

いまだボーっとしているヌエに、スズカは答えながらもあちこちを見やり、そしてある方向を見据えると返事も聞かずにジープから飛び降りた。

もはや理性を追い詰め、壊した白銀世界の果てに手を伸ばしていた頃の余韻は全くなく、頭に被った可愛らしいニットもいつも通りだ。

無感情で無表情なその顔立ちにすら、いつものスズカらしさを感じる。

「あっ、待って、待ってぇ！お嬢ぉ～、私も行くからぁ！
……童貞はちゃんと車見てろよ、『メリー』の部品一つでも盗られたら、あんたの体のパーツをばら売りするからな」

「お嬢の前でまで童貞押しするな、そしてうちに支給されてるもの全部に可愛い名前をつけんな、さらに車のパーツ一つで俺の体のパーツをばら売りとかどんな不等価交換だっ！」

律儀に全てのツッコミ要素に返事を返すシュテンを、ヌエは得物を担ぎながらヘラッと笑い、残される彼に見せつけるように彼女はスズカに腕を絡めてみせる。
もちろんただシュテンに見せつける為だけに、彼女はスズカに付いていったワケではない。それもないとは言わないが、それだけではないのだ。

スズカ自身は全く自覚がないが、彼女は非常に目立つルックスをしているのだ。
ヌエが身内贔屓なく見ても、スズカに匹敵するほどの美少女など今の黒鉄には一人もいない。贔屓目ありで見たなら、今まで一人もいなかったと断言してしまうだろう。
だからこそ、そんな自分の容姿に無頓着なスズカを、こんな治安があまり良くなさそうな場所で一人には出来ない。
なにしろスズカは非常に頭がよく、異様なほどに聡い少女だが、それ以上に世間知らずな面がある。自分の容姿が男という人種の目にどのように見えるのか、その結果どんな欲望を向けられるのかをほとんど分かっていない。
それは兄代わりであった男が、一人で色々と知識を教えこんできた弊害であり、その兄に依存しすぎているスズカの性格によるものだろう。
何かあっても一人で切り抜けられるだけの力はあると確信してい

ても――スズカを傷つけられるような人間などそうはいないと知っていても、その辺りがヌエにとって不安にならないとは言えない。

また、ヌエが車を見ているように言ったのにももちろん理由がある。別にシュテンに嫌がらせをしたいだけではない。

いかに廃墟であれ――そう見える場所であれ、ちゃんと動く車、しかも服やら食料やらを積み込んだものを、ほんの数分であれ目を離すワケにはいかないのだ。

そんな真似をすれば、車は骨組みだけを残してバラバラにされてしまうだろうし、積み荷も一切合切持っていかれてしまうだろう。

パーツ一つであれ、車を持っている組織――関西統括軍やら境界を接する東海軍に持っていけば、それなりの値段で買ってくれるし、衣料品やら食料やらはそのまま自分で使っても市で売り払っても構わない。

盗む事が悪いのではなく、盗まざるを得ない時代が悪いのであり、盗まれる方が間抜けなのだ。それをヌエはよく知っている。

今も人の姿は見えないが、その気配だけはそこかしこにある。隙を見せればどこからともなく食うに困った人々が雲霞のごとく群れてくるに違いない。

スズカは全くの素手で、見るからにか弱そうではあるが、シュテンは見るからにゴツい体付きであるし、ヌエは明らかに使い方を間違えている『得物』を抱えているから、警戒して様子を見ているだけなのだろう。

そういった理由から、変に悶着を起こさない為に、見るからにゴツく見るからに変種であるシュテンを留守番にしたのだ。

そしてそのシュテンに上から目線で留守番を言いつけ、様子を見ている連中に『自分の方が格上なんだ』とアピールしてみせ、さらに肩に物騒な得物を担いだ見るからに危なそうなヌエがスズカに付いていったのである。

ちなみにヌエの本音を言わせてもらうならば、さっさと帰ってゆっくりしたいところだったりする。
移動による疲労も、力を行使した倦怠感もあるのだから、出来るだけ早く帰りたいと思うのも当たり前だ。
ただ、基本的にスズカの行動や方針に対して、ヌエもシュテンもめったな事では口を出したりしない。
『声が聞こえる』……そして暗に『その声が気にかかる』と言うスズカに、二人が『疲れたからさっさと帰りたい』という理由で帰還を促す真似などするはずもない。
二人は揃ってスズカには甘いのだ。昔の関係――皇とその側近という立場だった事も、それを加速させているのだ。

「お嬢ぉ、声ってなぁに？なんか言ってるのぉ？」

「泣いてる声が聞こえる」

「泣いてる？」

「そう」

全くもって簡潔過ぎる言葉は、どこまでもスズカらしかった。
これでも兄代わりの少年や、仲のいいパイロキネシストの少女、あるいは同僚であり兄姉代わりでもある二人の影響を受けて多少は話すようになった方だったりする。
昔、ヌエがまだ『夜狩』でなかった頃に初めて会った時など、兄である少年の服をしっかり掴んで、その背後に隠れて出てこなかったぐらいなのだ。

「泣いてる子供の声」

「子供の声って――」

――そりゃあ泣いてる子供ぐらい今のご時世ならそこら中にいるでしょうけどぉ。

そう続けようとして、その言葉はスズカの次の言葉に永遠に遮られた。

「その声には同族の匂いがする。その子供の声からは別の世界の気配を感じる」

「えっ？」

「なぜこんな感覚を覚えるのかはわからない。こんな感覚は私も久しぶり」

「マジ、ですか？」

「至極マジ」

スズカがそう『感じる』というならば、その言葉に嘘はないのだろう。そうヌエは判断する。

なぜならばスズカが絶対に他人に嘘をついたりはしない事をヌエは知っているからだ。

ヌエやシュテン、そして黒鉄の仲間達にだけではなく、見知らぬ他人にさえスズカが誰かに嘘をついたところなど彼女は見た事がない。

そういったものを駆使した駆け引きなどは、異常に頭の回るスズカが唯一苦手とするところだ。

その反面なのか、他人の嘘に対して異常ほど鼻が効くという面もあったが。

「近い。ヌエは下がってて」

「そんなワケにはいかないってぇ」

地面に置いた得物――チェーンソーといういう凶器に足を掛け、エンジンをかけようとしたヌエをスズカはジッと見据える。

その視線にへらへらとした笑みを返しながら、『よっ』と小さな掛け声をかけてエンジンを回そうとして――

「子供達はこれ以上使わない方がいい。そして子供達を使わないなら下がってるべき」

「ぶ～。それならお嬢だってこれ以上『拒絶』は使わない方がぁ――」

「下がってて」

「……いいんじゃないかなぁって思うんだけどぉ」

「下がってて欲しい」

「分かった、分かったからぁ！もう、そんな潤んだ目でジッと見ないでよぉ～

あたしが何か悪い事してるみたいじゃないですかぁ」

結局はその戦闘準備を諦めた。いや、諦めざるを得なかった、というべきか。

まっすぐにヌエを見据えるスズカの瞳が、次第に潤みだした時点で逆らえるわけがなかったのだ。
自分を心配して、心の底から気遣っているスズカに、自分の意志を通しきる自信などヌエにはない。

――もう！この兄妹は本当に自分の事は棚に上げて人の心配ばっかするんだからぁ！

よっぽどそう言ってやりたかったが、その台詞は逆に喜ばれてしまうだけだと分かっているから言わなかった。
これ以上変なところであの兄に似られては、スズカには真っ当に育って欲しいと願うヌエからすれば困ってしまうからだ。
正直な話、これ以上あの兄貴分をリスペクトされるのは避けたいというのが本音なのだ。

「こんな事ならシュテンのヤツに付いてこさせたのにぃ」

「シュテンは見た目が怖い……と感じるかもしれない。だからヌエ。ヌエはすごく綺麗だから」

「……いや、お嬢には負けるけどね、ってやっぱり自覚はないんだよねぇ」

「……？」

「なんでもないよぉ」

――全く、あの兄貴ときたら、なんでこんなに無頓着な子に育てたんだか。やっぱり男はダメねぇ。

そんな事を内心では考えながらも、ヌエは小さな溜め息を漏らすに留めた。

もっともこのヌエの考えは、かなり自分の事は棚にあげた部分がある。

第一に、ヌエも服装は凝っていてもあまり他人の目を気にする質ではない。平然と一人で治安の悪い地域を散策するぐらいは平気でする。

もちろん不埒な輩には、彼女を守る飛翔兵達による制裁がある事を知っての事だ。

第二にその『兄代わり』の少年よりも、今となっては同姓であるヌエの方が影響を強く与えられる位置にいる。

今のスズカの性格や考え方を形成するのは、かなりの割合で同姓のヌエや友人であるカーリアン、かつていた『錬血』という黒鉄の影響が大きいのだ。

カーリアンや『錬血』もまた、服飾には凝っていても自分の容姿に対して無頓着であり、そういった部分ではヌエによく似ているのである。

根本では兄の影響が一番であろうが、スズカに対して自分の影響がどれほどのものなのかを綺麗に置き去りにして、顔なじみの男に文句を言っているのだ。

「気をつけて。この辺りに純正型がいるなんて聞いた覚えがないけど……そんな子供がいるなんて、私は知らなかったけど、だからこそ気をつけて」

「いやぁ、お嬢に気を使われたらぁ～、ガードとしては立場がないんだけどぉ」

「……？」

「あぁ、はいはい。気をつけますからぁ、お嬢も油断しちゃダメよお？」

「分かった」

はぁ～、と大きな溜め息を一つ漏らし、ヌエはそっと懐に忍ばせた小瓶を確認する。

彼女の本当の武器たるものが詰められた金属製の小瓶を。

「――ミヤっ！」

そんな僅かな確認行動により反応がスズカよりわずかに遅れた。

歩いていた裏通りの壊れ尽くした木箱の影から、サッと飛び出し軽く……しかし鋭く振るわれ小さな腕に首を掻かれそうになった。

その影の体躯は小さい。そして細い。

しかし、その動きは野生の獣じみた速さで一瞬気を逸らしたヌエへと迫る。

その現状に小さな舌打ちを漏らす間もなく、軽く体を捻って急所である首を逸らそうとして――軽くその体を押される。

隣にいたスズカに足蹴にされたのだ。

しかしそれは、気を逸らしていなかったスズカでさえも……僅かに疲れていたとはいえ、銀鈴のスズカをもってしても、大事な仲間を足蹴にしなければならないほどの速さだったという事だ。

「……お嬢っ！」

ヌエの代わりに態勢を崩したスズカが、小さな影が続いて振るった腕にその体を掻かれそうになり、思わずヌエは焦りの声を上げる。

「くぅっ！」

しかし、その小さな影はスズカに結局触れる事なく僅かな声を上げて弾き飛ばされた。

スズカの防御意志が、白銀世界の使者たる銀鈴が、その影によるスズカへの接触を拒絶したのだ。

「私は大丈夫」

「まぁ、そうだよねぇ」

――お嬢を傷つけられるヤツなんて、まずいないもんね。関東(あっち)じゃあるまいし。

思わず情けない声を上げたヌエは小さな嘆息を吐き出して、スズカに弾かれた『小さな影』を見やった。

綺麗に受け身を取ろうとして、それに失敗したのか地面を滑るように転がった純正型の少女を。

その弾かれた拍子に、頭からズレ落ちた布切れに手を伸ばし、必死な様子で頭にそれを載せ直したまだ十歳に満たないであろう少女を。

「あなたはこの辺りの子？」

スズカは出来るだけ優しい声音を使ってそう声をかけた。

一瞬、反射で発現した銀鈴を即座にかき消して、『世界』そのも

のを力ずくで抑えこむ。
そして自分をあっさりと弾き飛ばし、その上で近寄ってくるスズカに、脅えたように身構えている少女に、これ以上の警戒感を与えないようにその身を僅かに屈ませた。
小さな子供に警戒心を起こさせないには、目線を合わせる事が効果的だと昔に聞いた事があったからだ。
そう、関東にいた頃に、兄のすぐ側にいた少女から——保母さんという、子供の面倒を見る仕事をしたかったという少女から聞いていた知識を、なんとか掘り起こしてゆっくりと近づいていく。

「私はスズカ。比良野鈴華って言うの」

普段の無表情がデフォルトである顔立ちに、なんとか笑みを浮かべてみせ、声にも驚かせないように極端な起伏をつけないようにして。

「名前を教えてくれないかな？」

「……」

「怖がらなくても大丈夫。私はあなたと一緒。ほら」

そして、人前では決して——その存在を消し去る相手か、その存在を絶対に信用すると決めた相手にしか決して見せた事のない『証』をさらしてみせる。

「ほら、私もあなたと同じ。だから私はあなたを苛めたりなんかしない。ヌエも……後ろのお姉ちゃんも苛めたりなんかしないよ？」

スッと懐に手を入れたヌエに、『そうだよね？』とばかりに視線

を走らせる。
そんなスズカの瞳に、一瞬だけ『警戒はした方がいいですってぇ』とヌエは抗ってみせるも、それもあくまで一瞬だけだった。
一瞬以上は抵抗出来なかったのだ。
だからヌエは降参するかのように懐から手を出し、軽く肩をすくめてみせる。

「ほら、大丈夫」

そう言ってスズカはいまだ警戒態勢を解かない少女に手を差し出そうとして。
その手のひらを振るわれた少女の指先で切り裂かれた。
本当に軽く、僅かに触れた程度の接触で赤い線が刻まれたのだ。
それにヌエが一歩前に出ようとして、向けられたスズカの視線にまたも降参する。

――わずかだけど世界が見えた。やっぱり純正型。理は……恐らく坂上と似たタイプ。

それほど深い傷ではない。しかし、接触した感触はほとんどなかった割には深い傷だ。
それらから冷静に状況を見て。
今何をすべきかを考えて。

「こら、そんな風に力を使っちゃダメ」

スズカは少女を叱った。

「いや、それはあたし達が言っちゃダメなんじゃ――」

後ろで小さく呟くヌエの言葉には返事を返さない。ただチロッと見やって沈黙を促すだけだ。

その視線にブンブンと大きく何度も頷くヌエの表情には、僅かに恐怖が見てとれる。

スズカが本気で怒った際の怖さは、ヌエだからこそよく知っている。ぶんむくれたスズカは全く手が付けられない事を今までの経験で学んでいるのだ。

そんなヌエから視線を外し、スズカは下がる事なく少女の前に再度手を伸ばした。

「誰かを傷つけるならその理由をしっかりと持ちなさい」

――誰かを傷つけるなら、自分が納得出来る理由がある時だけにしとくんだ。

兄に昔言われた台詞をそのまま少女に伝える。

「こんな風に誰かを傷つけるのはね、悲しい事なんだよ?」

――誰かを傷つけるっていうのは悲しい事なんだよ。

それもかつての自分に言われた言葉だ。

「私はあなたを傷つけたりなんかしない。だってそれはとても悲しい事だから」

手のひらから溢れる痛みと血。

向けられた攻撃意志に膨れ上がっていく白銀世界の防衛本能。

それらを抑えこみながら、慣れない笑みを浮かべてみせる。苦痛にも似た『衝動』を表には出さないように笑みで隠す。

また攻撃されるかもしれないという恐怖はなかった。そんなものを感じるはずがなかった。

なにしろ、かつての自分はこんなものじゃなかったのだから。

自分はこんな程度の警戒心ではなかった。

兄の手をグズグズになるほど傷まみれにして、めちゃくちゃに体中を痛めつけて、その上で自分勝手に泣いて八つ当たりしていたのだ。

――こんな程度、我慢出来ないはずがない。

そう言い聞かせた。

――私は彼の妹なのだから。

それは彼女の誇りだ。

――何度でも手を差し伸べて、根気よく。子供は大人よりも物分かりがいい。かつての私を相手にした悠兄ぃより、ずっと楽なはずだ。

一度で無理だったなら二度。

二度でも無理なら三度。

それでも無理だったのなら何度でも。

「あなたの名前を聞かせて。私にあなたの声で教えてほしいの」

「……」

警戒心が僅かに緩むのを感じた。その漆黒の瞳に揺らめきが見えた。

それでも敵意は残る。今まで傷つき過ぎた事から、あっさりと他人に歩み寄る勇気がわかないのだろう。
そんな考えですらもスズカには手に取るようにわかる。
かつてのスズカは――兄に出会ったあの日までは、そんな弱さと傷にまみれていたのだから。

「私はあなたと同じだから、私はあなたの味方になれる。あなたの側にいてあげられる」

「……」

きっとこの少女も今までに辛い事がたくさんあったのだろう。
それこそ辛い事のない日など、滅多になかっただろう。
この少女の年頃にはすでにスズカも一人ぼっちだった。だからこそ分かる。
寒い夜に震えた。
暗い闇に脅えた。
他人の気配に牙を剥いた。
それでも一人の寂しさには耐えきれず、何度か街に降りて人の営みを遠くから眺めていた。
近づけば傷つけられる事が分かっていても、その暖かさに惹かれていたのだ。

「大丈夫。私があなたのママになってあげる。ママっていうのはね、絶対に裏切らない人の事を言うんだよ」

それはかつての仲間で、姉とも慕った黒鉄の言葉だ。
多くの仲間達を導き、守りきった女性の信念を表す言葉だ。
母親ではなく『ママ』。血の繋がりではなく、想いの繋がり。
スズカに色々と教えてくれたその女性の言葉の中で、その言葉は

特に彼女に強い憧れを残していた。

「……わたしは化け物だよ？」

「そう。そんな事を言われたの？」

ようやく開いた口からもれたのは、いまだに警戒心の残ったそんな言葉だった。

「頭に角があるなんて、そんなのは化け物なんだってみんなが言う」

それは今までに何度もスズカの心を抉った言葉だ。

それでも彼女は小さく笑ってみせる。

胸に痛みを覚えながらも、なんとか笑ってみせる。

「なら私も化け物でもいいよ。

これで私達は同じだね？」

「……同じ？」

「そう、同じ。角みたいなのがある私も化け物だって言われた事がある。悪魔だって言われた事もあるよ？でもね、私もあなたも同じ人間なの」

「……人間？」

「うん。私は人間。あなたも人間。化け物だって言われた事があるだけの人間。ほら、一緒だ」

その言葉と共に、警戒心からか突き出されたままの少女の手のひ

らに触れる。
攻撃は――もう来なかった。

「暖かいね。小さな手だね。
今まで頑張ったんだね」

「……あったかい」

クシャっと――少女が泣き顔に表情を崩すのが見えた。
その時の気持ちはスズカにはよく分かった。
なぜなら彼女も、兄に『暖かい』と手を握られた時に泣いてしまったから。
そんな当たり前の言葉が嬉しくてたまらなかったのだから。

「名前を教えてくれる？私はあなたの名前を呼びたいから」

「……さら」

「さら。いい名前だね」

そう言って、スズカは強張ったまま泣いている少女を抱きよせた。
出来るだけ痛くないように。
でも出来るだけ少女の全てを覆ってしまえるようにしっかりと。

「私が今日からさらのママになってあげる。さぁ、一緒に帰ろう。
私達のおうちに」

そう柔らかく告げながら。

「えっとぉ……ママってマジですかぁ？」

「マジ」

泣き疲れ、緊張に疲れたのか眠ってしまった少女を抱えあげたスズカを見ながら、ヌエは途方にくれたような大きな溜め息を漏らした。

すでに血に濡れたスズカの手のひらの治療は終えている。言動からすれば意外かもしれないが、ヌエには多少手当ての心得があったりするのだ。

抗争にまみれ、悲惨な環境だった故郷で、自然と身についたスキルだ。

「ママって、ママになるんですかぁ？」

「私、ママ」

「……そうですかぁ」

念を押すかのようなヌエの言葉にも、スズカの答えには迷いがなかった。

『さら』と名乗った少女は、自らがつけた傷をものすごく申し訳なさそうに……そしてビクビクしながら見やっていたが、治療の間もスズカはずっと笑っていたからか、今では安心したかのように眠ってしまった。

関西という純正型の少ない地で、ようやく同じ純正型――しかも自分と同じように『頭に証のある』大人に出会えて、それだけで親近感を覚えた少女の気持ちは分からないでもない。

またスズカの心情も全く察せないほど鈍いワケでもない。

……ただ『ママ』は問題だろう、そう思うのも間違いなかったりする。

「大丈夫。悠兄ぃなら文句は言わない」

「それは言わないでしょうけどぉ」

しかしいくらあの兄代わりでも、引きつったような笑みを浮かべてみせるだろう。

それはそれで見物かな、とは思ったりもするが、ヌエとしては笑ってばかりもいられない。

「ヌエの事はお姉ちゃんって呼ばせる」

「そんな心配もしてませんけどぉ」

もし『おばちゃん』なんて呼んだりしたら、折檻では済まさない自信がヌエにはある。

しかし今問題なのは、銀鈴のスズカがいきなり『ママ』になんてなっているという事だ。

それは一体どれほどの騒ぎになる事か。考えるだけでも頭が痛く

なる。
　せめて『お姉ちゃん』じゃダメなのかとよっぽどそう言ってやりたくなる。
「……ダメ、なの？」
「……いや、あの――」
「ヌエは絶対に反対なの？」
「せめてお姉ちゃんじゃ――」
「絶対絶対反対なの？」
　言ってやりたくなって、実際に言ったとしても、最後まで反対しきれるかはどうかはまた別問題だったりするが。
「……はぁ、分かりました。分かりましたよぉ。全く、なんで一日でいきなり子持ちになってんですかぁ」
「大丈夫。みんなには迷惑をかけない」
「いや、あたしはいいんですけどねぇ。黒鉄最強の銀鈴に、『子供』って弱点が出来るのを問題視するヤツはいるでしょうけどぉ」
　――それとその状況を歓迎する輩もいるかも。
　そこまでは言わなかったが、ヌエが言うまでもなくスズカにもそれぐらいは分かっていただろう。スズカの聡さはヌエもよく承知している。

守るものを増やすという事は、結局は弱点を増やすという事に通じる。それは寂しい考え方なのだろうが、今の御時世ならば仕方のない考え方で当たり前の考えだ。

「大丈夫。私がもっと強くなればいい。私の名前で悠兄ぃやこの子、ヌエやシュテンに手を出す人間がいなくなるほどに、私が強くなればいいだけの話」

「……」

「白銀は死んだけど……白銀の道はもう途絶えたんだけど、その名前を超える事は出来る。今の私が超えてみせる」

「はぁ、それに付いていくあたしも結構大変そうなんですけどぉ」

――まぁ、あの『兄貴分』に付いていくのも大変さで言えば変わらないかな。レンも大変だ。

そう内心でかつての同僚と比べる事で自分を慰め、スズカの背中で眠る少女を見やる。

キュッとスズカの服の裾を握りしめる小さな手。薄汚れ、ボロボロの服を纏った少女を。

そんな自分にしがみつく少女を柔らかい表情で見やり、スズカはほうっと小さな息をついた。

そしてどこか遠くを見やるような眼差しを帰るべき方向に向ける。

「ヌエ……やっぱり悠兄ぃってすごいね」

「はっ？何がです？」

「私は証があったから……同じような体の証があったからこの子も信用してくれたけど、悠兄ぃはそんなものがなくても――証なんか必要としないままでも、私を救ってくれた」

「あぁ、まぁ、それはスゴいって言うか――」

――スゴいバカと言うか。

もちろん後半は口には出さない。スズカにとってその兄貴分との出会いはとても貴いものとなっている。その出来事を美化し過ぎて、もはや神聖視していると言っても過言じゃない。

それを汚すような野暮はしない。

ただまぁ、後で話で聞いた限りではもうちょっとやりようがあっただろう、と思っていたりもするが。

「同じ風にやってみてようやく分かった。攻撃意志を向ける世界を抑える事がどれだけキツいか。痛みを我慢して笑う事がどれだけ辛いか」

――やっぱり悠兄ぃはすごい。

そう言って。

彼女は小さな笑みを浮かべたままさらに続けた。

「でも私も一人救えた。まだたった一人だけれど、手を差し伸べる事が出来た」

「お嬢……」

「まだ一歩。私が貰ったものから比べればまだ一歩分にも満たない。でもこの一歩から始めて、私はこの子にも『大切』をいっぱいあげ

たい」

これ以上あの兄貴分をリスペクトされるのは困るけれど……そう考えながらも、珍しく饒舌に語るスズカにヌエにも穏やかな笑みがもれた。

――そっか。この感覚が姉や母親だけの特権なんだとしたら、そんなに悪くないかもね。

そんな考えに、かつて黒鉄の後輩を鍛え上げていた一人の女性の姿が思い浮かんだ。

手がかかるだけで役に立つのか立たないのかも分からない新米達を鍛えて、生きるすべを叩き込んでいたその女性は、最後の最後で教え子達を守って死んでしまった。

それを『バカな真似を』と蔑み、『あんた一人なら逃げられたでしょうが』と悲しんではいたが、その女性の気持ちがヌエにも少しだけ分かった気がしたのだ。

昔に比べれば大分独り立ちし始めたスズカ。

大切な戦友から託された妹分が、先を見据えられるようになった事に一抹の寂しさと、今まで感じた事のない喜びのようなものを感じて。

それでもそんな自分を素直に認めたくなくて。

自分にこの道を――『身勝手極まりない救い』をくれた男に感謝なんかしてやるものか、とばかりに心の中で中指をおっ立てる。

今も多分、自分の為ではなく誰かの為に棘の道を歩いているであろう、この国最大の大罪者にして、この先の流れ次第ではひょっとしたら救世者にもなるかもしれないスカした男に。

――あんたが大事にしてきたスズカが今日からママになるんだってさ。

精々泡を食って困りまくりやがれ、クソ野郎。

そんな事を考えながら。

とりあえずその兄貴分の前に、律儀に車で留守番をしていたシュテンが、飛び上がるほどにびっくりしてみせるだろうが、それはヌエにとってどうでもいい事だった。

なぜなら、『夜狩』として『牙桜』に黄金のローキックを放つ事で、いつものごとく納得させれば済むだけの話なのだから。

そして、黒鉄第七班の三人は廃都へと帰還する。

誰にもその働きを知られる事はなく。

いつものごとく『黒鉄』という組織の影に徹した三人きりの精鋭集団らしく。

ただそこに一人の小さな影を加えながら。

2―36・Mama……（後書き）

ママです。
マザーにしようか悩みましたけど、やっぱりママです。
スズカ編はこれにて完。
かなりあちこちに伏線残りまくってますし、シャク編への振りも露骨にありますけどこれでも頑張ったんです。
まず間違いなくノクターンで最長です。
書きたい事を詰め込んで書いてはいますけど、いまだちょっと心残りもあったりします。
文章力がもうちょっとあればもっと早く、なおかつ書きたい事を全て書けたんでしょうが、これでもかなりいっぱいいっぱいです。

あらかじめ決まっていたのは、『シヴァの顔出し』『ヌエとシュテンの顔出し』『関西の状況を書く』『それからシヴァ戦後の状況を書く』『子供を出す』ぐらいでした。
これらは一応全部やれましたし、かつての自分に似た子供に手を差し出す時の感慨も出せたのは良かったです。
次にスズカが出る時には、『ママさんスズカ』にクラスチェンジしています。

次回はスイレン。
ヌエもスイレンに軽く話を振ってたからってワケじゃないけどスイレン。
シャクはその次でカーリアン、さらにシャクとナナシでラストな予定ですが、まだ変更な可能性はあります。
まぁ確実なのは、『やっぱり一部と変わらない長さになったな』って事です。
これでも削った部分はあるんですけどね。

では、また来週もちゃんと更新出来る事を願って。
今のところ全くスイレンについては書いてないから、かなり本気で願って。

水鏡のスイレン。

彼女に対する評価は、彼女をよく知る者とよく知らない者の間では――あるいはごく身近にいる者と名前だけは知っている者の間では、両極端に位置していたりする。

見るからにたおやかで控え目な所作と、浴衣がよく似合ったすっきりとした顔立ち、藍色の細い髪の毛は細く白い肌と相まってどこか清廉な雰囲気を感じさせる。

彼女を慕う人間が男性のみに限らず女性でもかなりの数に上るのは、そういったものの他に穏やかな笑みを絶やさない柔らかな印象があるからだろう。

過去に傷を持つ者が数多く所属する黒鉄にあって、いつであれ誰に対してであれその笑みでもって対応する彼女は、間違いなく黒鉄の中で最精鋭たる第三班の『良心』として認識されている。

もちろん極端なまでに反対の要素を持つ『不貫』がいるからこそ、その印象が強まっているという理由もあるのだが。

しかし、それはあくまでもスイレンを遠くから見ている者の意見であり、『水鏡のスイレン』に対して抱いている印象のようなものであり、彼女のごく身近にいる存在が知っている彼女の本質ではない。

彼女が民政部のお歴々を相手に、心を抉り、魂を削るような言葉の数々で舌戦不敗を誇っている事など、黒鉄の上層部以外は知りもしない。

ほとんどの者は『老獪かつ石頭な民政部の首脳陣を相手に、一歩も退かず黒鉄の為に議論では矢面に立っている』などという、普段のイメージに見合うキャラクターを信じているのだ。

スイレンを相手に顔をひきつらせ、粘っこい汗をダラダラ流して、舌戦不敗を相手に必死に立ち向かっている民政部の苦労など知ろうともしない。

彼女が仲間には非常に穏やかで、どこまでも柔らかい印象を持つ女性であるあまり、敵対者にはどこまでも冷たく、果てもなく無慈悲になれる事を知らない。

なぜ彼女だけが『近衛殺し（インペリアルキラー）』と呼ばれているのか、他にも関西統括軍の精鋭集団、『近衛』を打倒したものはシャクナゲやアゲハ、過去にはミヤビやクロネコもいたというのに、なぜ水鏡のスイレンだけが『インペリアルキラー』と呼ばれ、敵方に恐れられていたのか。

そんな事まで誰も考えない。

錬血のミヤビという鬼教官が、その教え子達に教える『生き残り方』の中に、『これだけはやっちゃいけない黒鉄ルール』というものがあるが、その中に『水鏡のスイレンだけは絶対に怒らせちゃいけない』というものがある事など、錬血の教え子達でなければ知り得ない。

錬血の教え子達がスイレンに対して異常に敬意を表している理由など、水鏡がかの鬼教官と背を預けあった歴戦の黒鉄だから、ぐらいにしか考えていないのだ。

あの『紅』ですら、水鏡に対して遠慮を見せるのに、それですらもスイレンに対して好意的な解釈をしてみせるのである。

『あぁ、さすがはスイレンさんだ』と。

しかし彼女に近しい者達――本当の彼女を知る者達は知っている。
彼女の怖さも。
彼女の残酷さも。
そして彼女の強さも知っている。

今はもういないある黒鉄は知っている。
『スイレンはめちゃくちゃ頑固だから。シャクの心を折れるヤツがいたとしても、スイレンの心を折れるヤツなんかいっこない』と。

かつては同僚で、今は違う班に所属している少女は知っている。
『レンがブチキレたりしたトコなんて見た事はないけどぉ、ブチキレたりしないままでもあいつは十分怖いヤツだからぁ』と。

別の最強を冠する黒鉄は知っている。
『スイレンは身体能力は低いけど、戦闘能力が低いワケじゃないよ。あいつはスキルと経験でそれを補うヤツだから』と。

さらに別の――実質は最強である黒鉄の少女は知っている。
『スイレンは最後の一人だから。最後に残ってしまった一人だから、自分は最後の最後まで生き残らなきゃならないと脅迫観念にも似た思いを持っている。そういう相手が一番怖い』と。

近しい相手であればあるほど。
側にいる者であればその距離感が近いほど。
過去を知っていれば知っているほど。
よりその強さと怖さが見えてくる相手。

水鏡のスイレンとはそういった女性なのだ。

「ねぇ、ヨツバ。もうそろそろ諦めてくれる気にはならないかしら？」

スイレンのその言葉に――辺り一帯から反響して聞こえてくる声に、それでも瞳を閉じた男は無言で一歩足を進める。

途端飛んでくる細く鋭い刃にも。

辺り一帯から感じられるその刃にも負けない鋭い殺気にも。

彼は全く躊躇を見せる事なく、さらに一歩前へと踏み出す。

「いかにあなたでももう不死身には追い付けないわよ。ナナシの足ならもうすぐ地下へと足を踏み入れるわ」

「あんた、ほんまに分かってやっとるんか？今までずっと地下には誰も入れへんようにしてきたやろ。それが俺とあんたの仕事の一つやったはずや。それがなんであいつは入れる気になった？」

どんな攻撃にも、どんな言葉にも無言を貫き、辺りから感じられる殺気の刃に生物の体に刻まれた本能が警鐘を鳴らしても――彼には全く効かない無意味な攻撃とはいえ、水鏡の攻撃にその身を晒していても、ひたすらに無言だった男は淡々とした口調で口を開いた。

「今はもう、今までとは変わってしまったのよ。昨日と同じ明日はこない。そんなものは来ちゃいけないの」

「そうか」

――ならあんたが全面的に味方やったんは昨日で終わったんやな。

そしてヨツバはスイレンの言葉にそう返して。

最後の確認に対する答えを聞いて。

憂いを帯びた、どこか諭すような響きのスイレンの言葉にもはっきりと敵対を示してみせる。

「あんたを傷つけんと不死身を追いかけたかったんやけど、それが無理ならしゃあない。

あんたじゃ俺は止められんって事をちゃんと記憶に刻んだる」

そしてそう言って、再度自分に向けられた鋭い刃を空中で微細な欠片へと砕いてみせる。

全く触れもせず、意志を向けた様子も、気にかけた風もないままで、スイレンの攻撃を塵へと返す。

それだけではない。ヨツバの立っている場所を中心に大地が抉れ、まるで爆心地であるかのような――その中心で巨大な力が膨れあがり、大地を圧したかのようなクレーターが刻まれていく。

「――解」

ヨツバの小さな呟きはその不可視の力場がもたらす破壊音にかき消された。

彼が築く精神防壁の物質化により作られた領域は、そのまま攻撃

性を有した防壁となる。
大地を圧し、空気を震わせ、あらゆるものの侵入を認めない精神防壁は、それそのものがぶつかって『あらゆるものを破砕する力』となる。
広がり始める不貫の盾は、そのものが全方位を圧迫し、廃絶する力場となるのである。

「あんたは俺に勝てん。水鏡は所詮泡沫の夢幻。浮かんだ月も一投の小石で消える淡い世界や」

そしてその上で、的確にスイレンの方向を――スイレンの本体がいる方向を見やりながら、いつものように抑揚のない口調で告げる。

「――裂」

広がっていた力場は小さく欠け、３６０。四方に展開されていた不貫の盾の一部がざっくりと裂けて刃となる。
その姿がスイレンに見えたワケではない。
ただその軌跡が――裂けて一閃の線と化した盾の軌跡が、大地を切り裂き、空間を引き裂いた跡が見えるだけだ。
恐ろしい速さで進むそれは、まさしく不可視の刃といえるそれで、ヨツバの言葉に不吉を感じて本能的に回避してみせたスイレンの藍色の髪を一房空に散らす。

「もう言葉は必要ないやろ。あんたの幻は踏みにじって先行かせてもらうわ」

「――無限幻想（インフィニティ・エア）」

一歩。また一歩と歩を進めていくヨツバ――黒鉄最凶の凶人（まがびと）を前にしても、スイレンは一歩たりとも後ろには引かなかった。
ただ自らが持つ『幻覚を見せる力』を最大限に解放させて、伏せられたその瞳と視線を交わす。

自分の能力が不貫のヨツバに対してどれほど脆弱なものなのか。
かつての新皇のガードとしていかに不足なものだったのか。
今も苦しんでいる友の最も古き友人としていかに無力なものなのか。

そんな事は彼女自身が一番分かっている。彼女こそがその無力を最も理解している。
しかし、彼女こそがその無力を一番後悔してきたのだ。
そんな彼女に――スイレンという名前を持つ友の理解者に、ここで引くなどという選択肢はない。
そんな答えは有り得ない。
故郷を捨て、仲間を失って、家族すらも――血を分けた弟でさえも残されていない彼女にとって、自分だけが最後に残された意味を見失う事だけは絶対に許せないのだから。

「ねぇ、ヨツバ」

語りかける言葉落ち着いた響きのそれで。
いままさに自分の命や、その誇りに手をかけようとしている凶人に対するものとは思えない静かなもので。
広がる『無限幻想』と名付けた力の領域は、ゆっくりと幻を広げていく。

「あなたの過去は私も知っているわ」

もはや構える刃もなく。

「でもその過去を理解してあげられるなんて、そんな傲慢な事は考えてはいない」

本体をそのまま晒して。

「だって私の過去にも、仲間であるあなたにさえ理解されたくない事があるもの」

広がる泡沫の幻だけを武器に。

無力な幻影のみを力として。

「そんな私の過去が……培ってきた後悔を積み重ねた力が――」

――安易にあなたの過去に負けるなんて思われたくないわ。

現実を浸食していく。

幻が……単なる背景に有り得ないものを写すだけの力が。

光の屈折によるだけのたわいない夢幻が。

ゆっくりと瞳を伏したヨツバの現実をも蝕んでいく。

光を拒んだ不貫ですらも飲み込んでいく。

「私は最強のグレイガードだった男のたった一人の姉。そして最後の一人。

過去により心を、世界を拒んだあなたが、過去を積み重ねてきた私に簡単に勝てるだなんて間違っても思わないで。それはとても不愉快だわ」

光の反射と視覚の混乱による幻。
認識を狂わせ、思考にノイズを走らせ、空間を支配したかのように『みせるだけ』の幻が、光を受け入れない瞳を伏した男に影響を与えられるワケがない。
精々がその柔な光の残像に付与した僅かな気配でもって、空間認識をあやふやにするだけだ。
それだけのはずなのに、ヨツバが初めて軽くその閉じた瞳を震わせる。
まるでその目蓋の奥にある眼球を、あちこちに這わせるかのように。

「瞳を閉じて、光を受け入れない相手には無力な力。所詮は泡沫と消える夢幻。
そうね。私の力はその程度。『あの子』のように全てを切り裂いて、道を開く力なんて持っていない。同じ血を持った双子でありながら、私の力は姑息で卑怯で裏技じみたものよ」

でもね、と続け。
今までにない凄惨極まる笑みを浮かべ。
歩みを止めた不貫を真っ直ぐに見つめる。

「その力は卑怯で卑劣な手段を厭わなければ、結構使える力なのよ？光を瞳で受け入れなくても、その影響まで受けない人間はいないわ。光は肌で、五感で必ず感じるものなのだから」

瞳を閉じていても目蓋を焼く光は感じられる。
目蓋越しに陽光を感じ、ライトの光を見る。
明るい日差しを肌に感じるのは、陽光の熱によるものだけではない。生まれ持つ本能によるものだ。
目を閉じ、光を拒絶していても、昼と夜を真逆に感じる事はない

だろう。
そして光を掻き乱して生み出した夢幻に、僅かとはいえ気配すら持たせる事が出来る『水鏡』からすれば、目蓋越しに届ける僅かな僅かな光で――視覚以外の五感や本能で感じる光で、脳に幻を刻む事ぐらいは出来ないはずがない。
より明確に感じられる気配。あちこちから感じる視線。敵意に殺気。それらはかの凶人を完全に覆い込み、包み込む。

「ようこそ、私の夢幻境へ。歓迎するわ、不貫のヨツバ」

そう言って凄みのある笑みを浮かべると、『夢幻境』の主であるスイレンは優雅に一礼してみせた。
瞳を伏していてもなお感じる幻に、僅かながらとはいえ『初めて』かの不貫に困惑を浮かべさせた事に小さな満足感を感じながら。

2―37・Ｉｎｆｉｎｉｔｙ―Ａｉｒ（後書き）

ガード三人組の簡単紹介。
詳しくはそれぞれの個人紹介に譲りますが、当初の設定などを書いてみます。
最近こういったあとがきしてなかったですしね。
本名等はここ以外では出ないかも。

水鏡・スイレン
本名・繰崎蓮（くるさき・れん）マークでのみ『レン』という呼び名が出ている。
双子の弟がおり、二人揃って関東で『道』に所属。これまた二人揃って灰色の軍に属していた。
姉である彼女は後方支援や不正規戦を得意とし、弟は真っ向からのぶつかり合いで力を示す、と反対のタイプだった。
能力は『視覚の支配』、あるいは『錯覚の支配』。
こだわりとして和服や和風の小物をこよなく愛している。
口が上手く、人をからかう事も嫌いではない。
彼女を慕う人間も多いが、彼女を苦手とする人間もまた多い（カーリアンやカクリ、マルスにサクヤなど）。

牙桜・ヌエ
本名・夜鳥美哉
七班に所属し、班長であるスズカを溺愛している。
また『夜狩』に対しては格上である事を自認し、コキ使いまくって

いる（自分の方が先にスズカに従っていたんだから、後輩は後輩らしくパシリになれ、という事らしい）

能力はまだ不明。
虫を自在に操っているが、それが能力に関係しているかは後に記述。
多分もうバレバレだろうから書いておくと、彼女も純正型。
夜狩は見た事のある人間がいても、彼女を見た事がある人間はかなり少ない。
余りにも表に出てこない為、彼女の存在自体を黒鉄に伝わる都市伝説の類と信じている人間すらいる。
普段はスズカからヌエと呼ばれているが、たまに昔の癖で『ミヤ』と呼ばれたりもする。
錬血をライバル視していた節があり（ミヤと錬血が呼ばれた際に自分が反応した時から）。

夜狩・シュテン
本名・酒井典斗
ヌエと同じく、班長であるスズカを溺愛しているが、これはどちらかと言うと力の割に危なっかしいところがある『妹』に対する感情みたいなもの。

能力は不明。
植物を操ってみせたが？
牙桜に比べると黒鉄としての表の仕事もこなしている為、それなりに顔見知りもいたりする。
実はスズカとヌエの食事を作っているのは彼で、七班の資材を保管したり、帳簿をつけたり、七班の作戦について考えたり（スズカが大元、彼は微調整、ヌエは文句を付ける）、必要な生活物資を補充したりも彼の仕事。

七班の主夫ともいえる。もしくは七班専用家政夫。
シャクナゲをライバル視している（兄ポジションで）

2―38・残されたもの

「あなたにはあらゆる攻撃が効かない。私程度では不貫には傷一つ付けられない。あなたの力は『貫くに不わず』と呼ばれるに相応しいものよ。悔しく感じる気持ちすら浮かばないほどに、あなたと私の間にはどうしようもないほどの差がある」

そう言ってクスッと小さく微笑むスイレン。その笑みは『自分では手も足も出ない』とヨツバに言っているに近い言葉が、まるで信じられないほどに余裕な態度だった。

その態度が決して強がりによるものではない事は、相対する『不貫』のヨツバがその進行を止めた事が証明している。

この不貫は、かつて三班本部に侵入した五班の最大戦力、『幻影のアゲハ』ですらも一人で退けた男だ。彼の歩みを『力で持って止められる』存在などそうはいない。

今は瓦解した関西統括軍の精鋭たる『近衛』でさえ、この凶人を前にすればただでは済まないだろう。それは『近衛殺し』たるスイレンだからこそ確信を持って言える。

どれほど危険な場所であれ……そしてどれだけ多数の敵がいてさえも、この男は全く気にも止めずただひたすらに前進し、全ての敵をその歪の力で殺し尽くしてきた。

ただし彼は、その残虐さ、無慈悲さだけで味方からも『凶人』と呼ばれているワケではない。

恐怖を知らず、怒りを知らず、躊躇いすらも持たないままで、ただ真っ直ぐに敵陣を引き裂くその歪な戦い（生き）方こそが、『二代目』不貫を凶人と恐れさせてきたのだ。

そんなヨツバが、僅かながらとはいえ警戒したかのように前進を止めただけでも、彼をそれなりに知る黒鉄からすれば驚嘆に値する。

それでもスイレンは、そんな些末な事など誇るまでもないと言わんばかりの穏やかな口調で続ける。

「でもね、私と相対しても無傷なままでいられるあなたは、果たして『脳と体、そして本能に刻まれた幻をかいくぐって、三班本部まで辿り着けるかしら』？」

「……辿り着けんかったらあんたの勝ち、やったかな」

そんな余裕な口振りのまま続けられたスイレンの言葉に、ヨツバはどこか面倒そうに首を回し、周囲を見やる。

その動きは時折一点で止まったり、また動き出したりして、まるで辺り一帯にいる誰かをじっくりと見やるかのようなそれだ。

「私の幻は弱いものよ。幻は敵を砕いてはくれない。この身を敵の攻撃から守ってもくれない。所詮は幻、泡沫の夢……まさしくその通りね」

そんなヨツバを前にしても――瞳を伏したヨツバにすら力を及ばせていても、スイレンの言葉にはどこか自嘲するような色が見える。

無力を蔑むような色も含まれている。

それでも彼女の言葉に怯みはなかった。

力を誇る事はなけれど、退く弱さもない。

あくまでもいつもの『水鏡』らしい優雅さでもって、無力な幻だけを味方として凶人の前に立ちはだかっていた。

「でもね、その幻を見せる事で誰かに遅れを取るつもりは毛頭ないわ。

あなたは私が――この国が壊れるずっと前から戦ってきたこの私が、あなたみたいな瞳を閉じた相手と今まで向かい合った事がないとでも思っていたの？」

穏やかながらも、どこか普段のスイレンには似合わない凄惨さを滲ませた口調で。

光を取り入れないヨツバにとって、他の五感で感じ取れる気配というのは生命線。特に聴覚、触覚の役割が視覚に変わっている部分は大きい。

気配を感じる感覚を乱され、聴覚を四方八方からの声で乱され、触覚すらも肌で感じられる光に惑わされた現状では、いかなヨツバとて真っ直ぐに歩く事すらままならないだろう。

いや、光を瞳で取り入れずに生活してきたヨツバだけに、現在の状況は不利が大きいかもしれない。見るハズがない幻、感じるハズがない幻に対する戸惑いも大きいだろう。

夢幻の世界を体全体で感じながら、体全体が惑わされながら、目的地に着く事など不可能に近い。

「あなたを殺せ、と言われたら私には無理ね。命を賭しても無理だと思うわ」

――まぁ、それでもそれがどうしても必要な事なら、なんとかしてみせるだけの気概はあるけれど。

そう心で付け加えながら、幻達を従えた彼女はどこまでも不貫の前に立ちはだかる。

きっと自分は、これからもずっとこんな損な役回りばかりする羽目になるのだろう、そんな事を考えながら。

「でも、時間稼ぎなら出来なくはない。私の力はそういった搦め手の戦いこそが大好物なのだから」

そう言って妖艶に笑うスイレンの気配は、すでに辺りの泡沫に紛れていた。もはやヨツバには自分の気配を辿る事など出来ない……その確信がスイレンにはある。

この周囲は『完全に無限幻想の領域』だ。

周囲が光の一切差さない闇に閉ざされてしまわない限り――あるいは『この世界の光が届かない異界にでもならない限り』彼女の幻は消せはしない。

「……あんたを舐めてたつもりはなかったんやけどな。正直想像よりは上やったって事は、やっぱり舐めてたんかもしれへん。大した力やと思うわ」

しかし、幻に包まれた当の本人たる凶人は、そんな現状にありながらも、全くいつも通りのまま淡々と言葉を吐く。

その声には歩みを止められた焦りも苛立ちもなく、自らが置かれた状態に対しての言葉もない。

ただいつも通り過ぎるほどの口調で――

「でもそれがどないかしたんか？あんたを砕けば幻は消える。それは変わらんやろ」

――自身から広がる防壁で幻を飲み込んでいく。

「普段のあんたの能力は、かなり距離があっても使えるみたいやっ

たけど……今の『これ』はどうなんやろな？」

そして幻を砕いた感触で……自身の『精神防壁が触れた感触』を足がかりに、迷いなく歩を進めていく。

「前にあんた、確か言うてたな？あんたの水鏡が操れる光には限界があるって。脳や思考のスペックを越える幻覚は作れんってな。そやから『気配』を持った幻は使いにくいとも言うてたな？

今の『これ』は大した力や。強力な幻やな。でも、その為に犠牲にしたんは『能力が及ぶ効果範囲』やったりするんとちゃうか？」

ヨツバの防壁に触れても、スイレンの幻は消えない。光は防壁に拒まれない。

ただそれでも消えるものがある。

そう、足を踏み出す大地の感触はわかる。障害物も砕ける。そして触れてしまえば幻の発生源たる女性も排除できる。

『幻は幻』。空間に浮かんだだけの壁では身は守れない。偽物にもなりきれない幻では、絶対に本物の代わりにはなり得ない。

「今のあんたの幻と、俺の防壁。どっちが効果範囲広いんやろな？言うとくけど、俺の力は半径十五メートル四方は逃げ場なんかないで？」

「知ってるわ。無限幻想（これ）でもう少しぐらいは面食らってくれるかと思っていたのだけど……答えに辿り着くのが思ったより早かったわね」

――でもお生憎さま。

目前まであらゆるものが砕け散る不可視の領域が迫るのを見ながら、それでもスイレンは笑みを漏らしたままそう続けた。

「大した推理だけどね……しかも『効果範囲を犠牲にしている』って辺りが正解で業腹だけど」

そして先ほどまで展開していた『無限幻想』を解きながら……『不貫をここに留めおく為だけの力』を解きながら、いまだ戦況が見えていないらしい不貫を見やる。

「でもやっぱり私の勝ちね。ナナシはもう地下に入ったわよ」

その言葉に、広がりゆく不貫の精神防壁は、広がりきる事なくスイレンの目の前で拡大をやめた。

それを見て、彼女はネタばらしをするかのように悪戯っぽい笑みを浮かべる。

「いくらなんでも早すぎると思う？そうね、『彼がここから離れてまだ間もない』ものね。でもその答えは簡単なものよ。

私はね、別に『私の気配だけを幻に乗せられる』ワケじゃないの。例えば……そうね、あなたが最後に感じたナナシの気配、あれがすでに私の幻だったらどうする？」

「ありえん。声もはっきりと聞こえたし、俺には簡単な幻は効かん。つまりそれはブラフやろ」

スイレンの言葉をばっさりと切り捨ててみせるが、ヨツバは新たに歩を踏み出す事はない。

「あら、それすらも私の力による錯覚だとは思えないのかしら？」

「あんたの戦い方は知っとる。あんたが得意としとんのは『精神戦』

や。幻の力を自分の口から語って、敵に『自分の認識に対する不信感』を持たせる。そこを突くのがあんたの得意な戦術やろ」

自分にはそんなものは効かないとばかりのヨツバだが、それでも再び足を踏み出さずにいたのだ。

「仲間であるあなたに、そんな陳腐な搦め手が通じるなんて思っていないわ。

それともヨツバ、あなたは『この水鏡のスイレン』が、その程度のブラフであなたを騙せる、と思うようなマヌケな女だとでも思っているのかしら？」

「……せやな、思えへん。あんたは少なくともマヌケやない。バカやとも思ってへん。どこまでもあやふやで無力やけど……あんたは強い人や」

それはあの水鏡のスイレンが――自分とは仲間であり、班内でも一番頼りになる女性が、そんなありきたりな戦術で自分にバレバレなハッタリをかますとは、さすがに思えなかったからだ。それをヨツバ自身がよく知っていたからに他ならない。

何より先ほど自分に見せた幻。あれはヨツバが知らなかった力である。つまり隠し玉だったのだ。

しかし、その力でさえも『彼女にとって最高の力』だとは限らない。

だからこそ、誰にも止められないはずの『不貫』の行進が止まった。

さっき見た『ナナシ』が確実に本物だとは言い切れない。彼女の言葉が嘘だとは言い切れなかったのだ。

「……でも、今すぐに追いかけて狩り殺せば済むだけやろ」

「行きたいならどうぞ。あの人との約束を破って、力でもって好き勝手に生きる道をゆくのなら」

チロッと舌で唇を潤し、自分を見やるヨツバにも、スイレンは肩をすくめるだけで特にその言葉を気にした様子はない。

暗に自分を排除して、ナナシを狩り殺すと言っているのに、だ。

「でもそれであなたの本懐は遂げられるのかしら？あの人の側にいれば、あなたは『意味のある終わり』を迎えられる。自分だけ残ってしまった理由が『あなたにも』見いだせるはずよ。なにしろあの人は、これから起こる騒動の真っ只中にいる人だから」

「……」

なぜなら、そのヨツバの言葉が実行されるなどと、スイレンは欠片も思っていないからだ。

彼にとって一番大事な事は、シャクナゲの――自分に意味のある最後をくれると、そう約束してくれた男の側にいる事だと知っている。

ここでスイレンを殺し、ナナシを殺してしまえば、その立場は間違いなく失ってしまうだろう。

元よりそんな制約がなければ、この不貫を名乗る男の足留めなど『脆弱なる水鏡』には出来はしない。

ほとんど攻撃をしてこず、しても『居場所は分かっている』と言わんばかりの……スイレンなら簡単によけられる程度の攻撃しかしてこなかったのは、それがあったからだと彼女自身が分かっている。

最後の防壁を破壊障壁として広げた力も、殺傷能力自体はしれたものだと確信していたからこそ、彼女は逃げたりはしなかったのだ。

それもある意味では信頼によるものだと言えるかもしれない。

あやふやで、どこか脆さのある、水面に浮かんだ月のごとき信頼関係であったとしても。

「さて、どうするの？あなたがあなた自身の本懐を――生きた死人たる不貫が望んだ最後の意味を捨てて、目先に捕らわれるというのなら……私も本気で覚悟を決めなくちゃならないのだけれど」

「もうええわ。今回は白けた」

「そう」

だがしかし、そんな脆い信頼関係であっても、それが唯一の勝算となり得た。

その脆いものの上で、勝負は最初からスイレンに有利な条件だったのだ。

その有利な条件上でなんとか目的を達せた事に、彼女は心中で盛大に安堵の息をもらす。

彼女は傷つく事を恐れる必要がなく、ただひたすらに足留めにだけ心を砕いていれば良かった。そして生きてさえいれば、いくらでも先がある事を彼女はよく知っている。

その面だけを見ればワンサイドゲームだったと言える。

ただし、今回の勝負には負けていた可能性も多分にあった。それも間違いない。

自分には先があったとしても――死ぬ事はなかったとしても、その結果としてまたあの青年に重荷を架していた可能性があったのだ。

つまり『部下による同僚殺し』という重荷を。

そんな覆し得ない過去を刻んでいたかもしれない。

そう、その面で見れば敗北は十分にあり得た。不貫の行動次第で

はあっさりと突破されていたかもしれなかったのだ。
そしてその結末は、不貫が考える『スイレンを殺さない程度』の割合が『無傷』なのか、はたまた『瀕死』なのか、その程度の違いで結果は真逆に変わっていただろう。
ある意味ヨツバの気分に賭けるという、賭けとしてはあまりにも不成立がすぎる条件の賭けに、彼女は勝っただけだと言えるかもしれない。
しかし、彼女からすればそれは賭けなければならない賭けだった。そしていかにナナシが三班本部内の構造に疎くても……なおかつ追ってくる凶人に警戒しなければならない状況でも、『水鏡』としては時間稼ぎごときで負けるワケにはいかない。

「今回の不死身だけはあんたの『警戒』を信じて例外にしとく」

「心配しなくても、彼を先に行かせた責は私が取るわよ。例えシャクナゲの目の前で不死身を殺す事になっても、ね」

面倒くさそうに髪を払うヨツバに、スイレンはクスクスと笑いながら……いつもの穏やかな笑みを浮かべながら、どこまでも不穏な事をあっさりと言ってのける。

――助けたはずの不死身を殺す、と。
害をなす存在だったのなら、自分の手で殺してみせる、と。
彼女はそう言ったのである。

しかしそんな彼女は、いまだ油断なく不貫との距離を測っている。
ヨツバに戦闘態勢を向けている。
今はまだ不死身を殺すという選択によるべきではない、そう態度で示すかのように。

ヨツバが一足跳びでは絶対に届かない位置、でも決して自らの疑心を示さない程度の距離を開けていたのだ。
当然『精神の一欠』が飛ばされても、『無限幻想』の余波でヨツバの認識能力が低下している今ならば、なんとかかわせる事まで計算の内だ。

「そんな甘いやり口やったらいずれ後悔するで。この世界はそんなに甘い場所ちゃうんやから」

それでもヨツバは彼女の言葉がごく当たり前の事のように返し、だるそうに肩をすくめてみせた。

――それならやっぱりさっき殺していても良かっただろう。面倒になる前に。

そう告げるかのように。
それをこれまた当然の返答のように受けながら、スイレンはなおも続ける。

「世界の残酷さぐらいは十分知っているわ。かつて私の目が届かない場所で、仲間の全員が意地を見せる為に死んだあの時に、ね」

――仲間だったからひょっとしたら助命されたかもしれない。
誰か一人ぐらいは生きているだろう。同じ『道』を歩いた仲間なのだから。

そんな甘さを抱いた過去を、スイレンは今でも覚えている。
クーデターに失敗した自らの皇を逃す為に――今ではシャクナゲと名乗っている友人を助ける為に、日本中を駆け回っていた彼女は、関西という地に逃亡先のアテを付けて慌てて故郷に舞い戻った。

あやふやではあっても確かな期待と、壊れてしまったとはいえ、長い時を仲間として過ごした者達との絆を信じて、だ。

その結末は――壊れてしまった世界の残酷さを脳裏に刻む結果だった。

「唯一の肉親である弟は、私達の皇の為に――友の為に身代わりとなって、かつて仲間だった毒の皇に処刑されたわ。他の仲間もみんな死んでいた。

私はね、こんな力を持っているくせに、その姿を記憶に刻む事すら出来なかったの」

帰った先に同僚達は誰一人として生きていなかった。

灰色の近衛達十数名以外は、周り全てが敵という中で、無色の近衛全て（インビジブルガード）と一般兵、さらには残されていた他の色のガード達まで相手に回して、必死に血路を開いてみせた。灰色の皇が無色の皇を説得、あるいは討ち取るまでの時間を稼いでみせた。

絶対数で劣っていた灰色の勢力が、死力を尽くして戦ったからこそ、灰色は無色と真っ向から向かい合えたのだ。

そう、自らが仕える灰色の皇では、無色たる絶対毒の皇には勝てないと知っていても、彼等は『道』として……人としての意地を見せて、安逸に世界の流れに身を任せなかった。

狂うを良しとは出来なかった。

最後の賭けに出た仲間達は、全員が全員、誇れる在り方のまま戦い続けたはずだった。それは間違いない。

間違いないのに。

一人として降伏しなかったばかりに……誰一人としてその生き様を曲げなかったばかりに、全てが殺されてしまっていたのだ。

例え降伏しなくとも。

膝を折る事を良しとしなくとも、仲間達の命を賭けた訴えは僅かでも届くだろう……届かなかったとしても、誰か一人ぐらいは助命

されただろう。かつては仲間で、本来は今も仲間であったはずなのだから――そう彼女は信じていたのに。

彼女に残されたモノは、『一人生き恥を晒したガード』という十字架だけだった。

「あんたの『灰色時代』なんかに興味ないんやけどな」

「ふふっ、安心して。不幸自慢なんかあなたとするつもりはないわ」

――そんなもの私達には無駄でしょう？

彼女の述懐を聞いても、どこまでも普段通りな同僚にそう告げて、スイレンは小首を傾げる。

それは見る者の心を捕らえてしまいそうな……計算され尽くしたかのような可憐な仕草だ。先ほどの発言の内容からすれば有り得ないほどの柔らかなものだ。

「ただ私も知っていると言いたいだけ。世界の残酷さと、私達人の変種の能力には限りがある事をね。そしてその上で私はこの選択をしたんだと……それはあなたに分かって欲しいの」

そしてその端正な口元を和装の袖で覆いながら、自分と同じく世界の残酷さに心を壊した男を見やる。

背を向け、もはや息をするのも面倒だと言いたげな吐息を漏らす男を。

自分とは違う選択を――脅威を全て取り除き、ひたすら終わりへと走り続ける壊れきった『盾』を。

「俺は変わらん。あんたと次に当たる事になっても変わらん」

「私も変わらない。あなたとまた向かい合う事になっても。でも、私達の関係はこれでいいんじゃないかしらね？」

そしてなんの感慨もなく、またフラフラと目的地もなく歩き出した同僚に、今度こそ彼女は背を向けて、不死身の後を追って三班本部へと向かって歩き始めた。

「あなたとはもう戦いたくないわ」

「俺も面倒なんは嫌いや」

最後にそんな言葉だけを交わして。

三班最強の『脆き剣』と『歪の盾』はその場をあとにしたのだった。

――良かったわ、ヨツバが引いてくれて。自分とは全く別物の他人の気配なんて、所詮幻でしかないものに乗せられるワケがないのよね、実は。

迷いながらも、ようやく三班本部裏口に辿り着いた男の姿を『能力』で見やり、彼女は小さな溜め息をもらす。

自分の能力で相手の考えを乱す、という当たり前の事が……結局はいつもの『やり口』こそが決め手だった事を、少しだけおかしく思いながら。

そして、自分の無力さを補う為にひたすら騙しに走り、何手も何手も搦め手を用いるしかなかった『刃なき剣』は――敵を討つ力を持たない三班の剣は、そっと空を見上げた。

気の早い月が浮かぶ空を。

かつて見た灰色の世界に浮かぶ、真紅の月へと思いを馳せながら。

2―38・残されたもの（後書き）

スイレンやヨツバについて書こうと思ってましたが、今回は見送りで。
本気で携帯調子悪いんすよね。
パソじゃなく、携帯で書くってのはつまらないながらもポリシーだし。
携帯ショップ行ったら休みだからか、人がめちゃ多くて平日に延期。
しばらく更新も困りそう。
慣れてない携帯とかで。

2―39・Ｖｏｉｃｅ

――ガガガガガガガガッッッッ――――――！！

百を遥かに超え、目視では確認しきれない線の群れが、互いにぶつかり合い、削り合い、殺し合うかのように舞い狂う。

「Ｓｅｔ――！」

『……Ｓｅｔ』

共にお互いを否定し合うかのように……お互いの存在自体を許せぬと告げるようにぶつかり合う鈍色の鎖達。

それらはそれぞれが蛇のようにのた打ちながら、死を告げる為に空を駆ける。それを阻むモノは、自らが生み出した（具現化させた）力以外は認めない、同じく空を舞う死を告げる無限の蛇。

「Ｓｅｔ――！」

シャクナゲが指を翻し、意志を向けるだけで蛇達は死の牙を剥く。

『……Ｓｅｔ』

ノーフェイトが生み出した灰色の悪夢は、それらをあっさりと防

いでみせると、返す力でそれと同等以上の攻撃を繰り出してみせる。
その度に蛇達はあっさりと対消滅し――そして消えた数以上の蛇達が再び虚空に生まれゆく。
それら蛇達は単なる空を舞うだけの鎖ではない。かつて日本という国の東部、首都のあった地方では、あらゆるものを殲滅し尽くした破壊の尖兵だ。
壊し、殺す為だけの力が具現したものだ。
空を舞う人類の叡智で造られた戦闘機をただ一筋の力で叩き落とし、地を走る重厚なる戦車を圧倒的な数でもってスクラップに変えた存在だ。
虚空から舞い落ちる流星雨の爆撃じみた攻撃で、人の営みを築いていた街を、都市を破壊し、最後には国を傾けた異界の存在だ。

その鎖の力は、単体では決してそう攻撃力の高いものではない。鎖は鎖。抉る為の形をしているワケでも、切り裂く刃を持っているワケでもない。
ただ単にその身に宿す一つっきりの理と、その圧倒的なまでの数でもって、あらゆるものに対しての絶対的な脅威となる。
『ベクトルイーター』と名付けられた、どんな力のベクトルでも極小化させる理は、他のどんな力を持つ変種であれ敵とはしなかった。どれほど強大な力であれ……そして科学の粋を凝らした兵器であれ、その理のみで細い鎖を最高の盾と変えた。
『ウロボロス（無限の蛇）』と名付けられたその膨大な数は、広大無比な異界の中で死の舞踏を舞い狂った。
『灰色世界』と単純に名付けられた灰色の異界を、『殲滅世界』と畏怖させたほどの力を示してみせた。

十代半ばのまだ若い少年を、新たな人類の皇と呼ばしめ、人々を魅了し、絶対的な存在だと盲信させたほどのモノなのだ。
『新皇』。新たな人種の皇。人の変種が生まれた新しい世界の皇。

この世界の核はそう称された。
あるいは蔑視された。
そう、彼の――彼等の過去は、全てこの『異界』によって紡がれたのだ。

ここは闇と光が入り混じり、黒と白が互いを主張し合い、互いを殺しあった灰色の世界。
広大なるその世界を支配し、果てなき領域を使役する二人の支配者は、互いに動く事なく、視線だけを交わし合って、互いの端末におのが生命を賭ける。
火薬の匂いも、科学の力もなく、ただ自らが持つ一つっきりの理でもって、お互いを否定しあう。

「Ｓｅｔ――」

――廻せ。廻せ廻せ廻せ廻せっ。
己が世界をカラカラと廻し、クルクルと使役して、力の母体となる鎖を飛ばす。
――壊せ。壊せ壊せ壊せ壊せっ。
己が持つ『具現の理』を使い尽くして、その理の持つ意味とは反対に近い『消滅』を相手に願う。

「――Ｒａｇｉｎｇ－ｃｈａｉｎ（荒れ狂う大蛇）！」

シャクナゲのワードに従い、幾つかの鎖が螺旋を描くようにその身を飛槍と化せば、少年は自らの端末を横合いから幾つもぶつけて、凄まじい勢いで迫る幾重もの蛇を撃墜する。
変わって少年が自らの端末を弓なりにしならせ、空を引き裂く勢

いを持って蛇の先端を砲弾と化せば、シャクナゲは自らの鎖を弾幕として張り、数を持って迎撃する。

無限対無限。
無制限対無制限。
広大対広大。
そして灰色対灰色の戦いに終わりはない。

まさしく千日手。
全く同じ力量を持つ者同士が戦えば、その結末は二つしか有り得ない。
つまり互いの一撃必殺でどちらか……あるいは共に倒れるか、今のように延々と戦い続けるかだ。
この二人の場合、今の段階では攻撃は数を持って補う他なく、一撃で決まる展開にはなりにくい。その上、無限に近い数で補った防御は非常に堅いものだ。
つまりなるべくしてなった、陥るべくして陥った千日手。
無限であり、無制限であり、広大故の千日手だ。

――吼えろ。吼えろ吼えろ吼えろ吼えろっ。
それでも二人は決まり手を繰り出せないままで、世界に殲滅を命じる。
相手を打倒しえない不甲斐なき世界に、戦意という燃料を注ぎ込んでいく。
シャクナゲの意志に従い、舞い狂う蛇が灰色の世界を飛び、力の端末が核たる存在の命で、少年の全てを否定すべく牙を剥く。
大地を埋める灰が絶え間なく宙に舞い、二つの緋色が天高く煌々と煌めきを馳せる。
終わりの見えない殲滅世界同士のぶつかり合いは、まさしく二つの灰色世界が喰らい合う戦争そのものであり、互いの否定を叫ぶ理

同士の殺し合いだ。
もしこの殺し合いが現実世界で実現したならば、どれほどの大都市であろうとも、広大なる灰色の荒野へとその姿を変えてみせただろう。
『具現の灰色』、あるいは『殲滅の灰色』は、その身に宿す強大な理などよりも、常識外れの広大さと広大さが併せ持つ物量こそが脅威とされていた。
圧倒的な支配領域でもって、あらゆる場所を包み込んできたのだ。
それが二つある異常に耐えきれるものなどありえない。

憎悪と怨嗟と嫌悪を剥き出すシャクナゲと、空虚と孤独と悲哀を滲ませる少年。
全く同じ世界を持つ、全く同じ存在たる二人。
究極的に相似しておりながらも、全くの対極に当たる二人。
彼等のぶつかり合いが現実世界で起こる事は有り得ない。『具現』と『広大』を持つ者など、二人としているはずがない。
もしいたとしても、その結果はやはり殺し合いにしかなり得ないだろう。
この二人のように『全く同一の二』でなかったとしても、互いに牙を剥き合う他なかったはずだ。

『圧倒的な破壊』、『完全殲滅』の力を持つ者が最終的に望む事は、やはり自己の破壊と自我の殲滅しかあり得ない。
特に彼等のように自らの力を忌避していれば、自分の力と同質の悪夢（モノ）などその存在自体が許し難いものだ。
例えシャクナゲが過去の自分を忌避していなかったとしても、彼等は出会った瞬間に殺しあう他なかっただろう。
シャクナゲと新皇・灰色。
異端と異常と異界。全てを併せ持つ灰色同士の殺し合いを避ける方法などなかったのだ。

だからこそ彼らは、ただお互いを一刻も早く否定し、一瞬でも早く抹消すべく、世界に進化……あるいは退化を求める。
必然として二人ほぼ同時に世界を廻す。

――カラカラと
世界の一部である歯車を廻し
――ガラガラと
空に浮かぶ赤き月を動かし
――ゴロゴロと
自らの中に眠る狂気を起こす。

「……Ｓｅｔ（廻れ）！」

『――Ｓｈｉｆｔ　Ｕｐ　２ｎｄ－Ｗｏｒｌｄ（より壊れた二つ目の世界）』

「Ａｎｏｔｈｅｒ　Ｂｉｒｔｈｄａｙ（歪の生誕日）！」

シャクナゲは叫ぶように、魂を底の方から震わせるかのように。
少年はただ淡々と宣告を零すように告げる。
全く同じ言葉（ワード）。
手のひらを天に向けた左手を、くるっと回転させる仕草まで全く同時で。
そこに込められた感情に差違はあれど、全く同じ願いを持って世界を変質させる。
月を欠けさせ、鎖に歓喜を走らせる。
灰色の風が大地を走り、旋風のように核を中心として渦を巻く。

そして、生まれた時から異常たる世界に、さらに大きな亀裂を走らせる。
くるっと回した手の動きが、まるで合図であったかのように歯車が回り始める。

歪み、進む。
壊れ、退く。
欠けて歪む。
歪みが産まれ、一つ目の世界が飲み込まれた。
Ｃｈａｉｎ－Ｗｏｒｌｄ（鎖の世界）が、歪な力の世界へと進化し、退化する。
蛇の世界に新たな力が吹き込まれ、もう一度世界は生まれ直す。
そして二つの灰色世界は、全く同質の理を持ちながら、全く同じタイミングでありながら、全く違う形へと変貌したのだ。

廻り始めた異界に、轟々と轟く力の大群が吹き荒れる。
そこは虚空から生え、大地から這い出て、空間を覆う鈍色の蛇達が支配する異界から、一歩先へと進んだ世界。
あるいは一歩後退した世界だ。
空に浮かぶ一つっきりの赤以外は、無彩色が埋める世界。
それはかつて一人の少年が絶望し、心を置き去りにした負の象徴だ。

多くの人々を飲み込んで、殺し尽くしてきた異界だ。

――『灰色世界』――

単純に世界を満たす色からそう名付けられただけの領域に、新たな力が生まれゆく。より強い歪が無音の産声を上げた。

その世界の住人である鈍色の蛇達は、その生誕を喜ぶかのように鈍色の体を震わせる。そしてゆっくりと世界が内包する具現のプログラムに沿って変貌し、力と色を空間に広げていった。

さながら灰色のキャンパスに、力という色を塗りたくるかのように。

もしくは灰色の原稿用紙に、無限の可能性を持つ力という文字を載せるように。

何本かの鎖はその身を色とりどりの炎へと変え、それとは別の鎖は氷雪の嵐となって空間を切り刻んでいく。烈風が大地を引き裂けば、甲高い音の塊が粉塵をさらに舞い上げる。

それらは同じ理から産まれながらも、全く同じものではなかった。所々に確かな違いが見受けられたのだ。

そんな二つの灰色世界の中心で向かい合った二人は、それら歪の中でも無言であり、従えた力達のみが牙を剥き合う。

『……消えろ』

二人の内の若い方――よく似た二人の内の少年とも言える年齢の男は、一言そう小さく呟き、自らの周囲に広がる一方の灰色世界に……荒れ狂う異界の一つに力を解放させていく。

それらは未だに無言で佇んでいるシャクナゲよりも強い力で、世界を震わせる。

そしてその荒れ狂う力は、相対するもう一つの灰色世界を殺すべ

く侵攻を開始した。
全く同質であるべきなのに、どこまでも異質な灰色へと牙を剥いたのだ。

二人の男を取り巻く二つの灰色の世界。
荒れ狂う動の灰色世界と、静寂なる静の灰色世界。
あるいは無感情なまま攻撃意志を剥き出しにする灰色世界と、溢れんばかり殺意を静かに内包している灰色世界。
そこに大きな違いはない。
ただ灰が積み重なった灰色の大地に、虚空に浮かぶ歯車。真円から少し歪んだ四分欠けの緋色の月。
目に見える限りは全く同じ世界で――どこまでも異常な皇種とも呼ばれた純正型の領域だ。

顕現した力も大した違いはない。
確かな違いはと言えば、やや年かさの青年が扱う力の方が兵数――つまり力の種類が多いというぐらいだろう。
重ねた年数の分だけ、積み上げてきた記憶分だけ、現した力の数が多いという程度の違いでしかなかった。
しかし少年は、その程度の違いなど気にする事もなく、自軍の兵達に軽く左腕を掲げて自らとよく似た青年の殲滅を命じる。
領域の主として厳かに。
世界の皇としてあるがままに。

『――Ｔｅｒｍｉｎａｔｅ』

力の全解放……領域内の異物を完全殲滅する為に設けた、あらゆるものの終わりを示すべく設けた言葉（ワード）で。

「幻に過ぎない、所詮は俺の『内面での争い』に過ぎないと分かっていても、やっぱりいい気はしないな。本当に最低で――どこまでも最悪だ」

ノーフェイト。

運命を殺す運命毒。人の精神を甘い幻覚で留めてしまう精神毒。

そんな理を与えられた錫杖が、今どこにあるのかは彼にも分からない。

この『内面世界』のどこかにあるのか、はたまた現実世界に回帰しなければ見つける事が出来ないのか。

それは彼には分かり得ない。

甘い甘い――有り得なくても、求めてやまなかった幻に包まれていたあの時から、きっと『場所自体は変わっていない』のだろう。

それぐらいしか分からず、小さく嘲笑うように口元を歪めてみせる。

「精神世界、心象領域といったモノはお前（災厄）の独壇場だとしても、これはちょっと気が効き過ぎてる。ブラックジョークとして見れば最高だけどな」

ここはきっと自分の心の中で、ノーフェイトに捕らわれる前から『自らの内側で展開していた灰色世界』のままで、彼を捕らえきれなかった災厄が入り込んだだけの自分の世界なのだろう。

その災厄から追っ手とも言える使者が、過去の自分――シャクナゲと呼ばれた彼が、最も忌避する存在である辺り、余りにも皮肉が過ぎて嗤うしか出来なかった。

「甘い夢で捕らえきれなかった者は、その者が最も恐れ、嫌う存在が心を殺す……ってところか。
いくら智哉でも、追跡者――いや、俺の場合は断罪者と呼ぶべきかな。それを過去の俺に設定するほど性格がひん曲っちゃいないだろうしな」

ここで過去の自分と戦う事に意味などないかもしれない。ひょっとしたらあるのかもしれないが、ただの徒労に終わる可能性もある。なにしろ『彼』は所詮は幻だ。単に最悪を冠し、模倣しただけの偶像だ。
希望とは正反対なものを集めてノーフェイトが造りし幻影だ。
しかし、そう理解しながらも、シャクナゲは過去の自分から目をそらせないでいた。
目の前にいるのは、過去の――恐らくは現状に抗う為に、自分の力を使う事に躊躇いを持たなかった頃の自分。
いわば本当の意味で『新皇』だった少年だ。
いつか、いつかは……そう考えて、ただ先だけを見て現実(いま)を押し殺していた過去の亡霊だ。

「……本当に気が利いてるよ。偽物だとしても――紛い物で造り物に過ぎないと分かっていても、お前にだけは絶対に背を向けられないって辺りが最悪だ」

それが分かっていても、過去の自分に背を向けるわけにはいかなかった。それは彼にとって絶対に譲れない事だったのだ。
関西で色々知って、多くの仲間を得て、ようやく前を向き始めた自分が、『過去の自分程度』に負けるなど許せない。そして何より、この何年かで多くの仲間達に出会った自分が、『その仲間達を得たせいで弱くなった』などとは断じて認められないのだ。

いまだに心に大きなしこりとして残る『坂上』が幻影として現れたなら……あるいは『彼女』が絶望からの使者として現れたとしても、まだ彼は冷静でいられたであろう。

今のような気持ちは抱かなかったに違いない。血が滲む心を自覚しながらも自らを保てていたはずだ。

痛む心や猛る想いを幻だと割りきり、抑える事が出来ただろう。目の前の少年以外ならば、それが例えどれだけ絶望的な力を持つものであれ、ここまで彼の心を乱したりはしなかった。

即座に今出来る最善を考え、ノーフェイト破壊に向けて動き始めただろう。彼はその為に持てる力の全てを使うと決めてきたのだから。

「……本当に最悪の幻だ」

力を従えた『少年』を見やり、荒れ狂いながら迫る力を見据えながら、一番凶悪だった頃の灰色をと相対する。そして力を振るう事に躊躇いを覚える自分を、内から膨れ上がる黒い感情で抑えこんでいく。

今の自分が過去の自分に勝てるかと言えば、勝算は正直言ってかなり低いだろう……心を乱されながらもシャクナゲ自身そう自覚していた。

負けるわけにはいかないと思いながらも……この相手にだけは負けられないと考えながらも、彼の中にある冷静な黒鉄としての部分は、的確に互いの戦力ぐらい把握している。

過去の自分は今の自分よりも絶望している。そしてその絶望に抗う為に世界を凶悪に染めている。人の命を食らい慣れた灰色世界は半ば抑制を無くしていて、それが当時の自分には当たり前だった事を覚えている。

それらのファクターを鑑みて、シャクナゲは自らの敗北する未来を的確に理解していた。

これらは単純な兵数の違いなどで埋まる程度の狂気ではない。年季で埋めるには抱えた絶望の差が大きすぎる。

今の自分とは在り方が違う。

取り巻く環境が違う。

シャクナゲである彼が持つ物をこの少年は『まだ』持っていないが、この少年が抱えているものを――孤独という名前の猛毒を、絶望という名前の漆黒を、シャクナゲは薄れさせてしまっている。

そしてそれは、灰色世界の強弱に大きく関わっているだろう。

なにしろこの灰色世界は彼そのものなのだから。

まさしく目の前の存在は、シャクナゲにとって災厄そのモノであり、逃れられない天敵だと言える。

ノーフェイトには、幻覚を破った者や現実へと回帰しようとする者、そして幻覚で捕らえられなかった者を抑える力がある事は間違いない。

それも対象者が内心で最も畏怖し、最も恐れ、最も嫌悪する存在を汲み取り、呼び出すのだろう。

――持ち主の性格の悪さと底意地の悪さが垣間見えるってもんだ。

それが自分にとっては『過去の自分』だったのだろう。そうシャクナゲは考えて、今は亡き親友に再度悪態ついた。

過去にノーフェイトと向かい合った時は、この状態にすらもなれなかったのだから、正確なところはもちろん分からない。

あの時、初めて向かい合った時は、使用者――使用予定者であったアカツキがいなければ、死ぬまで甘い毒に捕らわれ続ける羽目になっていただけだ。だから今となっては知りようがない。

「本当に笑えるな、最高に最悪過ぎて笑える。もう笑うしかない」

でもそんな今の自分を誇りに思う気持ちは欠片も出てこない。浮かぶ笑みもどこか禍々しさが滲むそれだ。

目の前の自分――過去の過ちの象徴に対して、彼はどす黒い感情が滲み出て抑えられない。

自分を殺せば過去が清算されるワケではない。

それは彼にも分かっている。

今のこの国の現状が覆るワケでもない。

そんな事はあり得ないと知っている。

起こってしまった事、起こしてしまった事はもはや変えられない。

しかしそれが分かっていても、シャクナゲの心は荒ぶり、どす黒い感情が湧き出てくるのだ。

――Ｔｅｒｍｉｎａｔｅ

だから同じように世界に殲滅を命じようとして。

終末の端子に全てを任せようとして。

戦いの結果が分かっていても、衝動に行動を任せようとして。

自らの罪の象徴たる存在を殺し尽くそうとして。

『忘れるな』

――声が聞こえた気がした。

『あたしも連れてってよ』

――忘れられない声が聞こえた気がした。

『もう負けないよね？』

――そう、大事な言葉が聞こえた気がしたのだ。

自らの従えた力から――灰色の大地に突き立つ刃と、空を走る紅色の光。そして自分の世界に入り込んだ親友の存在を感じさせる気配から、彼は確かに声が聞こえた気がしたのだ。

『これからはお前が最初の黒鉄だ』

そして――その声により思い出してしまう。

燻る黒い感情の中でも思い出されてしまう。

『お前は一人じゃない。もう一人ぼっちの孤独な皇なんかじゃない。お前はただの俺の親友、それだけでいいだろ？』

『あんたを一人っきりにはしないよ。もしこのミヤビさんが万が一いなくなっちゃったとしてもさ、『あたしの子供達』はあんたの側にいてくれる。あたしの願いを忘れないでいてくれる』

残された言葉を。

残してくれた大事な遺産を。

今も自分の世界に力として居座るお節介な相棒と、純正型の力は残してやれないからと言って、暇を見つけては書き溜めていた『手記』という形で、自分のいた証を残してくれた親友がはっきり脳裏に浮かんだのだ。

しかし、聞こえるはずのないその声に気を取られた内にも、彼を殺し尽くすべくもう一つの灰色世界は迫る。

確実に周囲の景観ごと消し飛ばすだけのその力には、なんの感慨も、一切の容赦もない。

ただ世界のあるがままに、『自身の理に寄らず存在しているもの』を全て食い尽くす。

その尖兵である力達は、戦意を無くしたかのように呆然と辺りを見やるシャクナゲを包み込み――彼の姿は、少年が解放した異端の灰色に飲み込まれていった。

2―39・Ｖｏｉｃｅ（後書き）

スマホ使いにくいっす。
今回は何か後書きを書くつもりでしたが、慣れない操作にいっぱいいっぱいで延期。
また何かあればお知らせにでも書かせて頂きます。

「先生ってのは、本当に贅沢な仕事だよね」

散々新人達をしごきあげて、何人もの新人達を泣かせまくった後で彼女はそう言って笑っていた。

後輩達数人を教練と称して地べたに這いつくばらせた後で、そんな彼女を呆れたように見ていた彼に朗らかに笑っていた姿を、彼は今でもはっきりと思い出せる。

「あたしには家族なんかいないのに……家族ってどんなものなのかすらわかんないのに、あたしはみんなの先生になった。同時にお姉ちゃんにもなれたし、お母さんにもなれたんだよ？もちろん仲間にもね。これってすっごく贅沢な話だと思わすない？」

彼女は孤児だった。

生まれた時から一人っきりで、目立つ髪の色や瞳の色からあちこちをたらい回しにされて、まるで猫の子でも捨てるかのように施設に放り出された過去を聞いていた。

その性格がねじ曲がらなかったのが不思議なぐらいの辛酸を舐めてきたのだと、彼は彼女自身からではなく『親友』から聞いていた。

――あいつは多分、家族が欲しいんだよ。

そう言っていた親友の瞳は、どこまでも深い悲しみを秘めていた事を覚えている。

そんな彼女が、自分の教え子達を『仲間』と、『兄弟』と、そして『子供』と呼んだのだ。

その言葉にどれほど深い想いが込められていたのか、それは相棒だった彼にもいまだ分かっていない。

「先生なら生徒を心配して当たり前よ。お姉ちゃんなら弟や妹は守らなきゃでしょ。お母さんなら子供の為に命だって賭けられる。そして仲間になら……後を託せるんだよ」

――こんな贅沢な話なんてそうそう思わない？

そう言った彼女は、その想いの丈をぶつけるかのように大勢の後輩達をしごきあげ、まっすぐに体当たりで導いてきたのだ。

その考えに殉じて、生徒達全員に真っ向からぶつかっていたのである。

東海随一の同族殺し『死にたがりの紅』、孤児でストリート育ちだった『音速』や『響音』の道を、理不尽な死で終わらせない為だけに。

ただ厳しく当たっただけではない。そんなやり方で心を閉ざした人間を導けるはずがない。

彼女達全員の保護者として、自分に出来る事全てをやってきた。ただそれだけの事を全身全霊でやってきたからこそ、彼女は恐れられながらも仲間達全てに慕われるようになったのだ。

黒鉄としての彼女を知る仲間の多くは誤解しがちだが、彼女はあの最後の瞬間、相棒である彼の背中を守る為に一人で大軍に立ちはだかったワケではない。

彼女は――錬血の呼び名を持った女性は、いまだ未熟な『子供達』

の為だけに、その命を燃やし尽くしたのだとシャクナゲだけは知っている。

『あたしはね、あんたの背中なんか追ってやらない。
――何が何でも真横を歩いてやる』

そうずっと言っていた彼女は、最後の瞬間まで意地でも真横を歩き続けて……彼の後ろを付いて歩く事は結局一度としてしないままで、最後には手の届かない先へと行ってしまった。
後を託せる存在を――己の意志を継ぐ者達を残して。
そして沢山の言葉を彼に残して。
シャクナゲに返しきれない借りだけを山ほど作ったままで。

「お前の本当の力、『力の具現』だったか、それについてちょっと考えてみたんだけどな、やっぱり規格外な力だって事しかわかんなかったわ」

そう言った青年は――シャクナゲ以上に規格外で、常識を越えた力を持っていた男は、恐らくは単なる暇潰しとして呼んだのだろう、そんな事を唐突に語りだした。
自身の力について嫌悪感しか持っていないシャクナゲにとって、その話題は決して楽しいものではない。
思わず憮然とした表情になる彼に、その青年は小さく笑って、でも気にした様子を見せずに言葉を続ける。

「あらゆる力の具現化、変種達がそれぞれ持つ力を領域内に現してみせる世界。
正直な話な、直接目の当たりにしたわけじゃなく、話に聞いただけだからなんとも言えないんだけどよ……」

そう言って青年はしばし言葉を区切ると、言葉を吟味するかのように口内で転がしてから一つ小さく頷いてみせる。

「なんかそれっていいよな」

そしてその力を嫌っている彼の前で――その世界に多くを奪われた親友の前で、そんな事を言ってみせたのだ。

「あ、でも勘違いすんなよ?そんな力があったら『他の変種達なんか相手になんないぜ』とか、『無茶苦茶しまくるミヤビのヤツにも、ガツンと一発お仕置きしてやれるぜ』とか、そんな事を考えてるわけじゃないからな?」

その言い様が可笑しくて。真剣なものでありながら、どこかいつもの『彼らしさ』が見てとれて。
シャクナゲはその好きではない話題に対して――嫌悪し、忌避しているものの話に対して、どこか気が楽になった事を覚えている。

「なんて言うかな、つまりお前の世界はさ、一人っきりじゃ力を発揮しない世界って事だろ?強い力を持つ『誰かがいてこそ』強くなれる、そんな世界なんだろ?」

なんでもないように……単に思いつくままに語られるその言葉に、シャクナゲは思わず呆然としてしまった。
それは決して的外れな事を聞かされたからでも、好意的すぎる解

釈に呆れたからでもない。
シャクナゲ自身はそんな風に考えた事がなかったから、『ただ力を記録するだけのもの』としか見てなかったから、胸を突かれた気がしたのだ。

「膨大な数を持つ端末？広大な領域？そりゃ確かに凄いもんだ。他に誰も持ってないもんだよ。
でもそんなもんで純正型には――皇を名乗る連中にゃ勝てねぇ。
それはお前の方ががよく知っているんじゃないのか？」

皇の力は――その異常は、確かに彼こそがよく知っていた。彼自身が誰よりも理解していた。
確かに、広大と膨大だけでも『彼ら』を相手にそれなりの勝負は出来るだろう。相手の世界の果てよりさらに遠距離から、ひたすら攻撃を繰り返していれば、時間稼ぎくらいならやってやれなくはない。
ただそれだけで勝てるかと問われれば、即座に否と言わざるを得ない事も事実だ。
同じく皇と呼ばれた存在に、手を抜いて勝てるはずなどない。それほどまでに彼の世界が全てを超越していたのなら、『シャクナゲ』という徒花は生まれなかっただろう。

「お前の世界の力がさ、誰かがいてこそ……誰かの力を受けてこそ、その力を増す『記憶の世界』なんだって考えたらさ、それで他の皇達と渡り合えるのってなんかいいよな」

――俺達の力は本来誰にも理解出来ない、世界の中心以外は誰も立ち入れない孤独なもんだしな。

それでも青年はそう言って。

不完全な超越を持つ彼を心底から羨ましそうに見つめて。

「俺にもいつか見せてくれよ」

気持ちよく笑ってみせたのだ。

叶いそうにない願いだと分かっているはずなのに――そんな『時間』など残されていない事は、『欠陥預言書』のせいで寝たきりになって久しい彼こそが一番分かっていたはずなのに。

「は、どこまでも身勝手な世界だ」

吐き捨てるかのように、でもどこか苦笑いを含んだ声でそう漏らすと、彼はゆっくりと目の前を見据えた。

「俺自身はいい加減飽き飽きしてるってのに、どうやらこの世界はまだ生き足りないらしい。

しかもそこに居座る奴らもお節介ばっかりときたよ。勘弁してくれ」

四方八方から迫る力の大軍を相手に回して、精一杯抗っている自身の灰色を。

支配領域を削られながらもなお猛々しく立ち向かう己が内面世界を。

普通の純正型が持つ世界は、他の世界からの干渉を嫌うものだ。しかし、この灰色世界はその領域の広大さから他の世界を包み込む形でも発動する。他の世界が支配する領域を除いて、その周囲一帯に展開するのだ。

その点だけを見ても、他の世界への干渉力はそう強くない方だと言えるだろう。もしその干渉力が強ければ、灰色世界で飲み込んだ他の世界とは自動的に戦闘を――支配領域の喰らい合いを開始する羽目になるのだから。

そんな干渉力の弱い――言ってしまえば領域面積が広いだけで、世界自体の堅固さはそう強くない灰色世界において、他の世界に対する侵攻はもっぱら『端末』の役割であり、防衛も端末がこなすのが当たり前だ。

それら端末が現した力が……世界に刻まれた力の具現化したものが、シャクナゲが呆然としていた間も自動的にその身を守っていた。今までもずっとそうしてきたように。

理の力を濃縮させた力を振るって。

彼が望むかどうかはお構い無しに。

その中で、ひたすら猛威を振るう剣の嵐と、紅の稲妻。

歪な剣が力を拡散させ、弱めたそれを紅が焼き尽くす。討ち洩らした力は、弾ける音の塊と乱れまう不可視の刃が相手取る。

さらにはもうずっと昔――故郷に置き去りにした過去に眠る様々な記憶の欠片が、今なお飛び立つ姿を見て。

彼にはもはや笑う事しか出来なかった。

「ほんとさ、お前らは俺に甘過ぎだ。どうせ『発破かけてやらなきゃなんも出来ない』とでも思ってんだろ？」

なんというか、その力達が自分に……過去に捕らわれていた愚かな自分に、その在り方を見せつけているように見えて。
聞こえてきた声と、脳裏に浮かんだ記憶の先にいる人物らが、発破をかけているように感じられて。

「ったくさ、お節介焼きばっかだよな」

――俺みたいなヤツに構ったばっかりに嫌な思いもしただろうにさ。

そうぼやきながらも、彼は小さな嘲笑を浮かべていた。
いつも『望む望まざる』に関わらず、自分を守る世界に辟易としてきたというのに。
ただ無慈悲に自分だけを守る世界を呪ってきたというのに。
今だけは何故かその姿に大事な仲間達の姿を見た気がしたのだ。

「分かってる。分かってるよ、俺なら『新皇・灰色』に勝てるさ。グライやワードでも確実には勝てない最悪の新皇に――スズカでも勝ちきれない悪夢に、俺だけは確実に勝てる」

そう言って、圧倒的な数で迫る力の群れに対して、一歩も退く事なく抗う自分の世界に、彼は皮肉げな笑みを浮かべてみせた。
その笑みは、ここのところずっと忘れていた『自分らしさ』を、なんとか思い出すかのようなきこちなさを伴って、どこか造り物めいて見える。
まるで目の前にいる誰かに見せつけるかのように、ことさら時間をかけて彼は笑みを浮かべたのだ。

「Ｓｅｔ－ｓｔａｒｔ　ｕｐ　ｂｏｏｔ　ｏｎｅ'ｓ　ｏｆ――」

そしてその笑みを浮かべたまま、もはや目前まで迫っていた異なる灰色の力を見やり、押されに押されていながらもなんとか押し返そうとしている自身の灰色を感じながら、シャクナゲはそっとその右手を空にかざした。

今も灰色の異界の空で、煌々と輝く月を掴むかのように。

そしてその仕草と共に自身が刻んだ力ある言葉を口にする。

「――『ｔｈｅ　Ｅｇｉｓ（イージス）』！」

迫りくる異端の灰色を目前にして、彼が自分の奥深くから拾い上げた言葉はそれだった。

それは少年のように終末を望む言葉ではなく、殺意を込めた言葉でもない。ただ自身を……自分の周りだけを守る為に刻んだ、今までに一度も使った事のない言葉だ。

そう、ただ自らを殺し尽くそうと迫る力を前に、自身が設けたワードの中では『最高の防御』を現す言葉で――刻んだまま一度として使う機会のなかった言葉で、最高の迎撃を現す命を下したのだ。

勝手に守られてしまう事を自嘲し、結局はその自嘲の念通りに、一度として使われる事のなかったそのワードが現すもの。

それは、数で補うしかない、数の力で壁を造る事しか出来ない彼が、いつか自分の身を――そして身近な誰かを守る為に力を使えたらと願い、それが叶わない事を分かっていても、つい大事に取っておいた唯一守りを現す言葉だ。

そのワードは簡単に言えば、広大過ぎる世界の中で彼の周囲のみに力を集めるだけのものだ。

果てのない世界の中で、自分自身の周りに集中的に力を留めるだけのものでしかない。

しかし、それだけの事でも一定以上の力を持たない相手なら――端的に言えば別の世界を構築する純正型を敵としなければ、『絶対防御』とも言える力を発揮する。

あらゆる力を霧散させる理を持つ無限に近い数の鎖と、その数だけ現せる異能の力。その全てを近辺に集めておけば、後はただ放っておいても集めた力達が勝手に活動する。

集められた力の全てが『自動的に世界の核に対して』脅威となるものから優先的に迎撃、消滅させていくのだ。彼がワードによって定めた事は、精々ただ狭い領域に力を集める事だけでしかない。

しかし、集中させただけにその守りに穴やムラがないのだ。

終末端子による自動殲滅では、どうしても出来てしまう『一定領域辺りに具現化する力の質の違い』がないのである。また集めてしまうだけに、迎撃面積も限定できる。

言うなればただ核の周囲のみに力を集結させて、ただいつも通りに勝手に守られるだけであるが、その迎撃の苛烈さはいつもの比ではない。

『核』の意志を汲み取った力は、より激しく轟音を上げて回り始め、一定領域内から先には一歩たりとも近付けまいと力を奮う。

その自動迎撃の様相が、さながらイージス艦の持つイージス戦闘システムを思わせる。

それ故にこのワードは『Ｅｇｉｓ』。

イージスの盾……つまりかつての仲間が冠した『女神の盾（アイギスの盾）』ではなく、人類の叡智が生んだシステムから取った名前だった。

それゆえに、その解放のワードも、単純に『セット』ではなく、『起動させる』としたのだ。

元は圧倒的な領域を誇った灰色世界の内、残されたのはわずか核

の周囲の十メートル四方のみ。
しかし、そこ以外の全てが異端の灰色に喰われ、殺し尽くされ、貪り尽くされても。
それがシャクナゲの敗北を示すわけではない。
起動し、廻り始めた『Ｅｇｉｓ』は、その劣勢をものともせずに、狭まった領域内でなお狂おしく歯車を稼働させる。

その防御力自体は、他世界の理の侵入すら拒む白銀の盾には遠く及ばない。むしろ普通の『拒絶』と変わらない程度の防御力しか持ち得ない。
それでも極めて攻撃性の高い防壁であり、ただ防ぐだけの力たる『白銀』とは一線を画している。
さらにイージスの起動を命ずる言葉が、押されに押されていたシャクナゲの従者達に力を与えていた。
さながら今か今かと反撃の機会を待っていた騎士達に、主である王から絶対の信頼を持って命令が下されたかのごとく、今まで押されまくっていた力を押し返してみせる。
空舞う刃が、紺碧の雷が、破裂する振動弾が、燃やし尽くす紅色の閃光が。
領域を侵そうと暴走する災厄の灰色に真っ向から力を向ける。

「はっ、俺は何をやってんだかな」

そんな力達の中心にいる彼は、ただそこにあって。
そこにあるだけで。
暴走し、破壊を撒き散らす終末端子の直中にあって、皮肉げな笑みを浮かべたまま額に張り付いた髪を鬱陶しそうに払ってみせた。

「自分の弱点なら吐き気を覚えるほどに自覚してるんだ。過去の自分を殺したい衝動に駆られるほど記憶に刻まれてんだよ」

そう一人ごちながら、ゆっくりとした動作で辺りを見渡すシャクナゲに、異端の灰色はさらに力を向けるもＥｇｉｓの迎撃網は越えられない。密集した力の壁は突き崩せない。

例え防御力自体は低くとも、無差別に領域全てを破壊する力に対して、『核の周囲だけ』を徹底して守る事なら出来る。広大な灰色の全てを塗り潰そうと広がり続ける異端の灰色から、わずが数メートル四方を守るだけなら出来ないはずがないのだ。

いかにこの数年立ち止まったままだった彼でも――新皇から堕ちた存在であっても、二人は全く同じ『具現』の世界を持つ者なのだから。

「なによりお前には言いたい事が山ほどあるはすなのにさ。殺意にかられて、悪夢に負けて、何も言わないままわざわざ勝てない真っ向勝負なんてするなんて……」

――バカらしい。

吐き捨てるようにそう言って、彼はその表情を歪めた。悲しげにではなく、怒りからでもない。

ただ憂鬱そうに歪めて、自身の世界を暴走させた少年を見やる。

自分がいかな方法を取ろうとも……そして目の前の少年はいかに追い込まれたとしても、彼は決して一点に力を集めて誰かを殺そうとしない事をシャクナゲは知っている。

たった一人に殺意を向けて、ただ一人を殺す為だけに、自分の意思で『第二の世界』を廻さない事を――廻せない事を知っている。

無差別殲滅ではなく、自分の意思のみで世界で個人を殺せない事を覚えている。

――あの時でさえ、『りぃ』と向かい合った時でさえ、俺は『自

分』の意志で世界を回せなかった。自動殲滅に頼って、それであいつに向かい合おうとしたんだ。

それがどれほど滑稽な事か分かっていても、彼には出来なかったのだ。ただ暴走させた力で、最悪に立ち向かおうとしたのだ。

正面から自分だけに向き合ってきた、本当の意味で唯一の新皇たる彼女に対してさえ、自分は個人で世界を使おうとしなかった。ただ意図的に世界を暴走させただけでしかない。

それは信念があったからではない。断じてそんなわけではない。

単純に少年が『弱かった』からだ。自分の意思で世界を廻し、誰かに殺意を向けてしまえば、『もはや誰にも言い訳が出来なくなる事が怖かったから』だ。

一度でもそんな真似をすれば、『自分はこんなものなど欲しくなかった』ともう言えなくなる気がした。

そして『自分が殺したわけじゃなく、世界がやったんだ』と言えなくなる気がしたのだ。

殺してしまった相手が夢に出ても、言い訳一つ出来なくなる事が怖くて仕方なかった。夜眠る前に、『自分が悪いんじゃない』『自分は努力している』と、そう自分に言い聞かせる言葉がなくなることを恐れた。

その弱さは、彼自身が一番知っている。

新皇・灰色は誰よりも『弱い』事を彼だけは知っているのだ。

2―40・Eg1s（後書き）

Ｅｇ１ｓは単純にワードです。
言葉で力の在り方を定めただけのもので、第三ではないです。
とりあえず迎撃密度を上げる為に設定したものと理解してください。

一応この辺りのシャクナゲの心情は、一部とやや繋がりがありますが、どうでしょう？
というかですね、これ書くのもいっぱいいっぱいたったりします。
憎むべきはスマホです。今週の自分は結構頑張って書いてたはずなのですが、内容よりも打ち込む時間がヤバいです。

充電なくなるの早いし、携帯充電器は必須。これなきゃ小説なんて書けません。

と、またまたスマホに愚痴りましたが、そろそろこのネタも厳しいですかね？
全くもって事実ばからなんですが。

シャクナゲターンは後二週な予定。
次回もぜひどうぞ。

2―41・Lost Memories（前書き）

誤字、脱字（特に濁点や脱字）が増えたのは、これは本当にスマホのせいです。
特に濁点。
読み返しても気付かない時が多々あります。
申し訳ありませんが、慣れるまでまだまだかかりそうです。
あとがきは連載バージョンでやってみようかと思ってましたが、人物紹介を入れる事にしました。

2―41・Lost Memories

灰色の風が彼のトレードカラーである黒い上衣をはためかせる。
その日本人の変種では珍しい漆黒の髪を逆立て、皮膚を撫でる。
それを少しだけ煩わしく思いながら、シャクナゲは轟々と息吹を轟かせつつ迫る災厄の世界を見やる。
そしてわずか十メートル四方という、いつもの灰色世界からすれば、箱庭のごとき領域のみを自らのものとしながら、その災厄の力に対して小さな感慨と共に息を飲んだ。

――あぁ、これが『俺』が殺してきた相手が最後に見た絶望か。

辺り一面を食いつくし、この十メートル程度の領域以外の全てを侵しつくし、いま最後に残ったこの場所まで殺しつくそうとしている異界を見て、ふとそんな事を考えてしまう。
辺り一面を覆う異界の脅威に対して、言葉にしようがない痛みを感じて、まるで胸が締め付けられる錯覚を覚えてしまったのだ。。

今まで積み重ねてきた咎。
忘れるには重すぎる過去。
今なお自らを苛む黒き夢。

それらを思い、そんな中で消えていったものを思い、消してしま

った存在に思いを馳せる。

もはや後戻りは出来ない。初めて人を殺した時にそう思った。

先に進むしかない。そう自らを駆り立てていた。

自分はもう、『背負ってしまった』のだから……汚れてしまったのだから、引き返す道などどこにもない。

そう理解したつもりになっていても。

そう言い聞かせていても。

自分の力が足りなくて、全然足りてなくて、致命的に無力だったからいっぱい人を殺してしまったけれど、そんな事実よりもなお『やったのは全部この世界なんだ』と、そう考えていたという自覚こそが鋭い刺を胸に突き立てる。

そうしなければ、彼は立っていられなかった。

それは事実だ。

他の誰のせいにも出来ないから、自分の中にあるもののせいにしなければ、自分を保っていられなかった。

それも間違いない。

生きる事に、自分が生き続けているという事に対して、彼にはそんななんの言い訳にもならない戯れ言が必要だった。

そんな自分自身をシャクナゲは知っている。

スズカを妹にし、彼女を誰よりも大事にする事で、不幸にしてきた人々に対して、『自分にはスズカがいるから……妹がまだいるから戦わなきゃならないんだ』と。

仲間達が変わってしまっても、『スズカだけは自分達とは違う道を歩かせるから』と。

そう言い訳にして、拠り所にして、最初の理由だった『幼なじみの代わりにして』。

彼はなんとか生きてきたのだ。

弱い彼でも、生き続けていられたのだ。

そんな考えこそが、彼が犯した罪の中でも最も卑劣な罪だろう。
そんな思いか、心をキリキリと締め付ける。

そう、『彼』は『最強の変種』などではない。
『始祖の一人』ではあっても。
『強大なる関東の皇』ではあっても。
彼は誰よりも弱く、どこまでも脆いただの人間だったのだ。

「はっ……本当に俺そのものだな。鏡を見ているみたいだ」

――でも、違うな。
出来るだけはすっぱで、ぞんざいな口調を心掛けながらそう呟いて、シャクナゲは無理やり口元を歪めて笑ってみせた。
自分らしさを思い出すかのようなぎこちなさで笑みを刻んだ。

「本物か偽物かで言えば、お前の方が本物なんだろうよ。俺は所詮紛い物の偽物だ。俺自身が何年もかけて、お節介な連中の影響を受けて造りあげただけの粗悪品（フェイク）さ。
――お前は皇で、お前が本当の俺だ」

その存在を否定したいワケじゃない。
過去を認められないワケじゃない。

許し難い存在ではあっても、それを認めていないわけではない。むしろ目の前にいる存在は、自分の記憶にある自身そのモノなのだろうと思う。

その力に相反し、矛盾しきった弱さは、灰色――白でも黒でもない、どちらにもなれなかった自分以外には見えない。

でも『今の自分』とは絶対的に違う存在なのだと確信を持っていえる。

「でもさ、お前は俺なんだろうけど……どこまで行ってもやっぱり俺自身なんだろうけど、俺はお前じゃないな。黒い絶望も白い悪夢も、確かにお前は知っているんだろうさ。失われた命も見てきたんだろうよ」

いつもよりずっと狭い世界に逆巻く力の群れが、ゆっくりとその在り方を変えていく。『イージス』という、力が密集した領域に広がっていた兵達がその色を違えていく。

無限の幻像が敵対する力を惑乱するように生まれ、甲高い音源が力を増していく。

そして不可視の壁はシャクナゲに迫る力を留め、紺碧の雷が他の雷撃を飲み込んだ。

「それでもな……それでも俺のやってきた事は全部俺のモノなんだ。罪も咎も絶望も悲しみも、やっぱり全部俺だけのモノなんだよ。

俺の為に死んだヤツも、殺してしまった命の重みも、俺が自分で背負っていくんだ。この身にしっかりと刻んでいかなきゃならないんだよっ。

それは絶対にお前のモノなんかじゃないっ、『この俺』だけのモノだっ！」

そのシャクナゲの言葉とともに、幾筋もの鎖が新たに虚空より生

まれたかと思うと、それら全てが『理に従って』再度紅色の輝きを放つ力へと変わる。
その紅色の力が持つ光は、シャクナゲの周囲をあっさりと焼原へと変えると、そこへさらに新たな鎖が炎の海へと突き立った。
その鎖に刻まれた力は溢れる紅を圧縮し、『炎が連結された剣』を何本も作る。
灰色の地面から伸びるような形で何本も造る。
中心にいる彼を囲むかのように創る。

何十振りもの炎の剣。
灰の積み重なった大地に突き立つ紅蓮の刃。
それは眩い輝きでもって灰色世界の中でも強い力を示した。灰色の大地に突き刺さったその無骨な有り様は、まるでその剣の所有者の生き様を示しているかのようにも見える。

「自分でやった事は全部自分で悲しんで、全部自分で苦しんで、全部自分で背負っていくんだよっ！どんなに重くても、どれほど辛く感じても、どれだけ目を反らしたくても、自分の背に抱えていかなきゃいけないんだよっ！それは誰にも肩代わりされちゃいけないんだっ！例えそれが過去の愚かな自分が相手でもっ！」

轟。
膨れあがる灰色は、殲滅の為の軍勢と化した暴走する灰色に真っ向から向かい立つ。
灰色世界の中でもなお輝き、なお存在感を示す炎の剣陣の中心で、しっかりと敵対者を見据えている『核』の意志を示すかのように。
そして紅の刃達はゆっくりと大地を離れて宙へと舞い上がり、その先端を『過去』へと向ける。

「……お前は俺には勝てない。俺は力なんて欲しくないと思ってき

たけど――今もそう思っているけど、お前なんかじゃ俺には絶対に勝てないっ」

そう呟く言葉と共に、紅蓮の刃は甲高い音を立てる。

それは単に熱せられた空気と、凝縮された炎が、他の力と干渉しあい、共鳴しあっただけの音なのかもしれない。

錬血の残した力と今も共にある紅をいきなり合わせた事によって、灰色世界のどこかに無理が出ているのかもしれないし、単に熱くなった空気が上昇気流を生み、細かな灰と灰がぶつかりあっただけの音なのかもしれない。

しかし、それでもシャクナゲは小さな笑みを浮かべるだけで、その手のひらを目標に向けて振るってみせた。

――彼にはその音が、どこか懐かしい声で発破をかけているように聞こえたのだ。

「Ｇｏ－ａｈｅａｄ（進軍せよ）！Ｓｗｏｒｄ－Ｆｏｒｃｅ……Ｓｐｉｒａｌ（歪（いがみ）の剣陣）！」

剣陣を操る剣の姫はもういない。

少なくとも生きてはいない。

そしてあるはずのない『他の力を含んだ錬血の剣』。

それは『もはや存在するはずのないという、絶対の歪みを含んだ剣の軍勢』だ。

その『歪』は向かってくる災厄を引き裂き、力を薙払いながら、今なお広がり続ける暴走した『真なる灰色世界』の中に道を作っていく。

先ほどまで押され捲っていた、もう一つの灰色世界の中に確かな道を築く。刃だけでも、紅だけでも成せなかった事をやってみせ、他の力達の先駆けに相応しい戦果を示した。

それは二人の戦闘区域全面からすれば、ほんの僅かな一点だけだっただろう。とはいえ、暴走する灰色に押し勝ってみせたのだ。

たった一人が歩くには十分なだけの『道』を切り開くという形で。

イージスの領域から広がるわけではない。

ただ、真っ直ぐに『災厄の核』への道を最短距離を繋ぐだけだ。

――当たり前だ。

その光景にシャクナゲはそう思う。彼にとっては当たり前の結果だったのだ。

なぜなら、その力は今は亡き相棒の血で鍛えられた剣達が造る最強の陣形……かの親友の言葉を借りるなら、その『記憶』だ。

確かに剣の数は本物の剣陣よりもずっと少ない。その出来も見劣りするだろう。

剣を構成する炎が秘めた力も、本物の『紅』には全く及ばない。

彼女が感じてきた痛みが、その積み重ねたる過去が、この紅には込められていない。

シャクナゲたる彼の過去が、彼女の絶望に勝るなどと傲慢な事は言えない。言えるはずがない。

だがしかし。

それらは例え模造品であれ、たかだか真似事のようなものあれ……そして本物に比べれば螺旋のように捻曲がった粗悪品のようなものであれ、その強さがはっきりと『記憶に残っている（世界に刻まれている）』限り、この剣の軍に敗走はありえない。この剣の軍が押し負ける事など、彼は絶対に『許さない』。

刀幻境と味方には呼ばれた剣の園。

剣の姫と敵には恐れられた、今も相棒だと信じている女性が誇った最高の攻撃陣形。

しかも、そこにその相棒を今も追いかける少女の力……いずれはあの錬血を――誰もが認める最高位の黒鉄を『超えてみせる』と言

ってのけた、後継者の強き紅（ひかり）を上乗せしたのだ。

――たかだか『造られた悪夢』ごときに負けるはずかない。

それはシャクナゲにとって、ただ一つの信念だった。神を否定し、運命を拒み、人を信じると決めた彼にとって、その想いはもはや信仰と言い換えてもいい。

ただ愚直に、その想いが見えない偶像を崇拝するものより弱いはずがないと信じた。

他者に言い訳を求める人間なんかより、脆いはずがないと根拠はなくとも確信していたのだ。

「……お前は俺に勝てない」

再度告げたその短い言葉は、そういった想いの全てを籠めたものた。

そんなシャクナゲの言葉に、願いに、そして想いに応えるかのように、紅蓮の記憶達はさらに奮い立ち、より猛然と、ただひたすらに苛烈な勢いで、敵対するあらゆる力（記録）を切り開いた。そして切り裂いた端から燃やし尽くした。

支配領域は圧倒的に劣っていても、シャクナゲと少年を結ぶ直線において言えば、優劣はすでに逆転している。

他の領域は食い尽くされ、いまなおイージスが数の力で攻め立てられながらも、少年という一点にだけ向けられた戦意は道を切り開いてみせる。

無意識による殲滅――自身の意思を込めないまま、ただ殲滅の結果だけを残そうとする灰色と、はっきりとした意思を込めて進む灰色は、すでに同じ色でありながら全くの別物だ。

そんな二つの領域の境を飛ぶ、全てを切り裂く血の刃が宿した燃やし尽くす業火の紅。二つの異端が織り成す力が、災厄の灰色の中にただ真っ直ぐな紅蓮の道を造る。

それに続いて破壊の音弾が飛び立ち、無色の刃が舞い狂う。

そうして切り開かれた道を、シャクナゲはゆっくりと歩きだした。

傍らの地面に突き刺したまま、唯一攻撃に参加させていなかった強き刃をその手に取りながら。

その無骨な日本刀にも真っ赤な力を灯しながら、ただ真っ直ぐにもう一人の『灰色の皇』を見やる。

力の種類――数自体は今となってはシャクナゲの方が劣っている。イージスを食い破ろうとする力に比べたらかなり少ないぐらいだろう。

支配領域の差は理が一番力を発揮する領域の広さの差だ。つまり力が現界できる領域の差なのだ。無限とも言える端末は、それらが具現出来る領域があってこそのものでしかない。

シャクナゲの世界を食い荒らし、膨張しきった異端の灰色を相手に、狭い領域に集められるだけ力を集めても数でかなうはずがない。

それは見た瞬間にわかるほどの差だ。

それでもシャクナゲには焦りなど微塵もない。

彼はあり余る力の中から、いくつかを選び抜き、それをイージスの領域内において完全に制御しきっていたのだ。そう、坂上と戦った時よりもずっとしっかり制御していたのである。

少年への道を切り開く為に必要な最小限を使い、少年を止める為に必要な最低限だけを使いこなす。その為に予備兵力はなく、全てをフル稼働させているが、それだけに『イージス』内において言えばかつてないほど完全に統制出来ていた。

それでも普段なら上手くはいかなかったかもしれない。

ここが現実世界に広げられた灰色世界であったのなら、いかに狭い領域であっても彼には支配しきれなかっただろう。

彼には五年近いブランクがあり、元々制御には甘いところがあったのだ。なんの理由もなく、今回に限り制御が上手くいくはずがない。

その理由については、彼自身分かっていた。

ここは無意識下の世界。内面の世界、精神の世界だ。

つまり『記憶の世界』でもある。

ならば、ここでなら現実世界よりも完全に……肉体という枷がなく、記憶が鮮明に浮かぶ分だけ完璧に、力の群れを制御出来ると考えたのだ。

そしてそれは間違っていなかった。

いや、精神の世界だけにそう思い込む事こそが有効だったのかもしれない。今まで使った事がなく、ただ自身に刻んだだけの『イージス』が上手く作用したのも、恐らく無関係ではないだろう。

それゆえに圧倒的な破壊の軍勢、無制御による殲滅の灰色に、制御された灰色が拮抗しえた。道を切り開く事でその考えを真実としてみせた。

しかしそんな風に現状を把握こそはしていても、シャクナゲにはそんな後付けの理屈など必要なかったと言える。それが出来ている理由などより、出来ている結果だけがあれば良かったのだから。

その結果こそが、シャクナゲとしての彼の目的――『ノーフェイトを壊す』という目的と、自分は過去に負けないという確信には大事なものなのだから。

そんな考えもまた、かつての『灰色』と彼との間にある明確な差であり、彼なりの変化の証でもある。

皇と抗う者の差であり、他人に言い訳を求めてきた者と、自分で背負っていくと決めた者の差だ。

――血にまみれた手を悲しみながらも、自らの頬を叩いて弱気に渇を入れ続け、ずっと自分で――自分だけの意志で己の道を真っ直

ぐに歩いていた相棒。
――『死にたくない』と一人の時には慟哭しながらも、他人の前では決して弱さを見せず、最後には『お前になら安心して後を任せられる』そう言ってくれた親友。
そんな人々を知っているかいないか、託されたものがあるかないかの差だ。

そんな自らを誇るかのように。
まるで『皇ではない自分』を見せつけるかのように、彼はゆっくりと築かれた道を歩き出す。
焦る様子はどこにも見られない。ただ真っ直ぐに先へ続く道を阻む『暁が造った災厄』を見据えながら、彼はその手に握る刃に力を籠めた。

2―41・Lost Memories（後書き）

人物紹介・マスターシヴァ

本名芝浦尋（しばうら・じん）。純正型変種。
関東の路地裏で暮らすストリートチルドレンだったが、変種グループ『道』に拾われて徐々に才覚を表していく。
その世界の特殊性は、道のトップ連にも見劣りしないほどに稀少なもので、個人戦闘という面だけを見れば、恐らく純正型でも随一の力を持っている。
その力の中核たる彼の世界は、純正型でありながら他の純正型にも見えないという特異点があり、それゆえに彼を純正型と見ない者もいる。
しかし彼が純正型である事は、その肉体に刻まれた『身体的な証』と、『世界を知覚出来る』点から間違いない。

実は彼の世界は、『その肉体に内包されたもの』であり、純正型にも見えないのではなく、『純正型以外にも見えるものを外郭としている』だけである。
それが純正型にとっての常識であった『純正型以外には見えない』に抵触し、純正型以外には『見えない世界』は持っていないと認識されたのだ。
いわばシャクナゲの『灰色世界』の変化版で、ただ世界の形が人の形をしているだけ。

その世界の理は『使役』
。世界そのもの――つまり肉体そのものを、核の思考のみで完全に操る力。
理自体は『拒絶』や『具現』ほど強力ではない――というより脆弱

な理だが、純正型の世界にとって一番の弱点となる肉体（核）そのものを、理の使役対象としているだけあり、他の純正型よりも遥かに高い……まさに人間離れした肉体強度を持っている。
さらに他の純正型の世界そのものを砕く力は全く持っていない代わりに、他の理からの干渉を受けにくい特性がある。
例えば言霊の『暗示』や『催眠』程度では、肉体に認識されて言霊が効果を現す前に、シヴァの肉体を完全使役する理が打ち消してしまうのだ。
その肉体強度と理の特性を生かして、世界そのものではなく敵対する核そのものを攻撃するスタイルを得意としている。

現在では、中部地方の新羅、北陸の長尾とともに中日本3強の一角とみなされており、関東軍に対抗する勢力の主戦力として、東海地方の政権に席を置いている。
厳密にいえは彼は皇ではなく、一地方軍に所属しているだけであり、政権の主たる立場にはない。
彼が『マスター』たりえるのは、東海地方ではなくそこの軍部であり、他の地方の皇達とは違う立場にある。

2―42・Good―bye，days

――メーデー、メーデー、メーデー！なんなんだ、ここは！嫌だっ、こんなワケの分からない所で死にたくないっ！メーデーっ！た、助け――

そう喚く声だけを残し、穴だらけなって墜落していく戦闘機を見下ろした。

墜ちる戦闘機を見下ろした、と言うと不思議に思うであろうし、高速で向かってきて高速で墜落していく戦闘機パイロットの断末魔が聞こえるという事も、普通では有り得ない事だろう。

だが、そうとしか表現出来ないのだから仕方がない。

最後の声を聞いた少年は、自らが墜とした戦闘機を『虚空に走る幾つもの鎖の上から』見ていたし、驚愕と絶望がない交ぜになった声を『自分の世界』の中で確かに聞いたのだから。

最期に自分を見上げるパイロットの瞳も見えてしまったのだから。

――あぁ、今日もまた……。

そんな思いにも溜め息すら出なかった。

人の死に慣れたワケではない。人の死を受け止めたワケでもない。

単に疲れきった心には溜め息を吐くだけの気力がなく、擦りきれ

た彼の精神にはすでに新たな傷を負う余地がなかっただけだ。
だから先ほどの少年の独白に続く言葉があるとしたら、それは自らを貶める自虐の言葉ではなく、自らを死に至らしめる傷を心に刻む為の自傷の言葉であっただろう。
地上より遥か高空に立つ少年の視線の先には、北方の地からやってきた国軍の軍勢が見える。
その中に出来るだけ多くの自走型無人兵器がある事を望み、そんな技術は確立だけはしていても、普及しきっていない事実を痛み、痛む自ら胸を抉るかのように掻き抱く。
胸に爪がめりこんで血を流し、その爪がかかる力に耐えきれず剥がれても。
噛みしめすぎて切ってしまった唇から顎を伝い、大地に赤い血が流れ落ちても。
広大なる灰色の虚空に走る鎖の上に立った少年は気にしない。
体の痛みなど感じていないかのように自らの傷をいとわず立ち続けて。

「足りない。足りない。足りない。まだまだ足りない」

そう憑りつかれたかのように繰り返す。

――自分の力が足りない。
――世界を抑え込む力が足りない。
――この世界で他人を殺さない為の力が自分には足りていない。

そう幾度も幾度も繰り返す。
だから目の前に迫る軍勢も、斥候だったのであろう先程の戦闘機のパイロットも、この世界で殺す事になってしまったのだ、と。
まだ本格的に開戦はしていないのに、分かりきった真っ黒な結末に思いを馳せると、吐き気を覚えるほどの嫌悪感を籠めて空を見上

げた。
そこにある明々とした色を持つ月を睨むかのように。
その存在に持ち得る限りの負の感情をぶつけるかのように。

そうしなければ――自分以外の何かに、多少なりとも責任を押し付けなければ立っていられなかったとしても。
そうしなければ、慣れる事のない精神の傷に心が壊れてしまったのだとしても。
それはかなり自分勝手で、利己的な考えだったと言えるだろう。
年端もいかぬ少年らしい弱さの現れだ。
しかし、そんな事に精神的に追い詰められた彼が気付くはずもなく。
自分の考えに一切の疑念を抱いていないかのような、狂信的としか表現出来ない輝きを瞳に宿して。
その盲信と狂信が、いずれ自分に牙を剥くものだとは知らないままに。
彼は再度自らの世界を廻す。
自分の周囲にある鎖達を舞わす。
彼方から自分と仲間達を殺す為に、国から遣わされた正義の味方（正規軍）を敵に回す。
『仲間達を殺させない為』という、いつも自らに言い聞かせている理由でさえも、すでに誰かに責任を押し付けたものなのだとは考えないままで。

「よぉ、クソガキ。お前はずっと一人で頑張ってきたな。たった一人で、ただがむしゃらに」

自らの世界で創られた紅蓮の道を、武骨な日本刀をぶら下げてシャクナゲは歩いていく。

ただ真っ直ぐに少年を見据えているその黒瞳は、今は二つの力で構成された刃の色を淡く揺らめかせている。

「今の痛みや犠牲も我慢すれば報われる、いつかは絶対に報われる時がくる、そう自分に言い聞かせてな。

でもな、お前の望むもので本当に人を救えるのか？お前が掲げた理想や欲しがった居場所なんかで人に報いる事が出来るのか？」

語る口調はとても静かなもので。

しかし、穏やかというには激情にも似た何かが含まれていて。

ただ『目の前にいる少年』に向かって言葉を紡ぐ。

「……違う。それは違うんだよ。理想の為に戦って救えるモノは絶対に人なんかじゃない。

理想の為に戦って救えるのは理想だけだっ。居場所の為に戦って守れるのは居場所だけなんだよっ！」

やりきれなさと怒り。

悲しみと寂寥。

そして苦痛と後悔。

その言葉が少年に届くかどうかに意味はない。そんな行為になんの意味もない事ぐらいは、彼が一番知っている。

過去は変わらず、幻はどうやっても幻の域を出ない。

今も自分を苛む繰り返しの悪夢が、この言葉でエンドロールを迎えるなどと都合のいい夢想もしていない。
それでも言わずにはいられなかった。ただ言わずにはいられなかっただけだ。

「お前はそんなモノの為に命を奪ってきたのかっ!?そんなモノの為にお前は戦ってきたっていうのかよ!?」

いかに溢れそうになっても涙は流さない。
走り寄って目の前の悪夢を掻き消したくなってもそれも我慢した。
まだまだ言い足りない。全然言葉が足りていない。
だから全ての衝動を力ずくで抑え込んだ。
道を切り開く仲間の記憶達はまだ保つから、限界ギリギリまで言いたいだけ言ってやる事にしたのだ。

「いつからだ……いつからお前はっ！
お前はそんなモノで心を塗り固めて、見えないものにすがり付いて自分を守るようになったんだよ！
最初は——最初からそんな大層なもんを望んだわけじゃなかっただろ!?あいつの望みを、その果てを見たかっただけだろっ!?」

——神様、お願いです。神様じゃなくてもいいです。誰でもいいですからお願いします。助けて下さい。
あいつを助けてやって下さい。あいつは悪くなんかないんです。いいヤツなんです。優しいヤツなんです。凄いヤツなんです。みんなに必要なヤツなんです。
だからお願いします。お願いします。助けてやって下さい。
俺の幼馴染みを助けてやって下さい。あの『世界』から解放して

やって下さい。あいつが本物の怪物になる前に助けてやって下さい。

そんな願いは当然叶わなかった。叶うはずもなかった。無神論者のすがる言葉には、ついに救いは訪れなかった。

神様を信じていた少女にすら、結局なんの救いの手も差し伸べられなかったのだ。それは当然の結果なんだと思う反面、彼の中に僅かにあった信仰心――僅かに残っていた幼さは完全に錆び付いた。

でももしその時の彼が――全てが手遅れになってしまった過去の自分が、最後の最後になってから彼女の為に祈るのではなく、最初からたった一人だけ、彼女だけを救おうと行動していたのなら、結果は違っていたかもしれない。

仲間達の為という枷を自らに科していなければ……周りの誰かを言い訳に使って、その結果言い訳としたものから逃れられなくなっていなければ、違った結果もあったのかもしれない。

そう思う。そう思ってしまう。

「いつから理想なんかに縋って、見えないモノに縋りついて今を見なくなったんだよ!?『いつかはこんな真似をしなくてもよくなる』『いつかはみんなで笑い合える』『いつかは』『いつかは』って、笑わせんなっ!そんな風に背負って背負い続けて――!!」

いくら『今』を繰り返しても、背負ったものに報いられるだけの成果はなく、焦燥感に身を焦がした。

ただ今日より先に期待を先伸ばしにして、押し付けて、それでも誤魔化し続けて走ってきた。

いつしか仲間達と共に今を変える為の行動だったものは、まだ見ぬ未来への期待と過去への償いに姿を変え、そして新たに戦う為の言い訳へと在り方を変えた。

過去には数で報いようとして。

溢してしまったものを、助けた仲間（命）の数とその未来への可能性で購おうとして。

結果、全てを取りこぼした。

背負い続けた末に残ったものは、ただ信じていないものに祈るだけの結末と、最後の最後になってからようやく大事な個人の為に祈るという不様な結果だけだった。

「それじゃあ、いつかなんて来ないんだよ！いつまでたっても来るワケがないだろっ！！だってその『いつかは』今の続きなんだからっ！！」

今日が駄目だったら明日へ。それが駄目なら明後日へ。

ただ先送りして、先送りにし続けて、その時々の間違いを押し殺した。

そうしなければ、今までの間違いは無駄だったと認めなければならない。

そうして誤魔化さなければ、自分は単なる過ちを繰り返してきたんだと自覚しなければならない。

自分は罪を幾重にも重ねて、その上にさらに結局は言い訳を乗せて、何一つ得られなかったんだと理解しなければならなくなる。

「今日を犠牲にしただけじゃ明日は変わらないっ。そんな事ぐらいすぐ分かるだろうがっ！。それじゃあ結局明日も犠牲にするだけなんだって気付けよっ！さらに先にある明日の為に同じ事をするだけなんだってさっ！！」

それは耐えられなかった。

彼には耐えられなかったのだ。

だから彼は今の責任にして。

今現在の状況のせいにして。

自分が一番辛い場所に立つ事で、罪に対する報いを受けた気になって。

そうやって心に折り合いをつけて。

まだ見ぬ未来にだけ期待をよせて。いや、『期待したふり』をして。

ただ止まる事を恐れるかのように走った。

止まってしまったら――振り返ってしまったら、もう走れなくなる事が分かっていたから脇目もふらず走り続けたのだ。

その結果があの結末だった。

何も残らず、一番身近な人も残らない。後悔しか残せず、罪しか残っていない最後だった。

最初から大事なものだけを抱えていれば、それはそれで後悔もしただろう。

ただし、そこにはほんの僅かな救いもあったはずだ。なのに、それすらも残らなかったのだ。

止まる機会など山ほどあったのに。

周りを見回す機会もいくらでもあったのに。

今の状況の先にいる自分が、果たして笑っていられるかどうかぐらいは考えられる知恵があったはずなのに。

「……お前は間違いに気付いた瞬間に止まるべきだった。考えるべきだったんだよ。

たまには立ち止まって周りを見てみろよ、そうすれば気付けたはずだ。お前は一人じゃなかったって。いつであれどこであれ、お前は一人じゃなかったんだって事にさ」

もはや自分が何を言っているのか、シャクナゲには分かっていなかった。

創られた道の直中、すぐ近くに顔がはっきりと見える距離で。

気付けば思い出していた。
気付けば過去を嘆いていた。
どうしようもなく溢れてくる感情のままに、言葉を連ねていた。

「地獄の中でも一緒に足掻いてくれたヤツらがいただろ。そいつらが足掻き疲れて、ちょっとばかり道を間違っちまったなら、すぐさまひっぱたいてやれば良かったんだよ。我慢して、自分だけが合わせる必要なんてなかったんだよ」

ほんの僅かな手遅れが全てを台無しにしてしまう事がある。そんな事は子供にすら分かる理だ。
それでも考えてしまう。今になっても考えてしまうのだ。
もし、もしほんの僅かでも早く、過ちは過ちでしかないんだと認めていれば。
ほんの少しでも勇気を出して、最初の一歩を踏み出してさえいれば、例え『あの時』のように彼女と対立する事になったとしても、その結果は全く違っていたんじゃないか、と。
いや、間違いなく結果は違っていただろう、そう思う。
なぜなら、故郷での仲間達は――そしてその中でも『彼女』は、彼にとって本当に自慢出来る存在だったのだから。

「……そうだろ、それぐらい気付けよ。バカで……可哀想な俺」

だから彼は、最後の最後でそう言って。
愚かな自分自身と、その立場に立ってしまった過去を憐れんで、残された距離を歩き始めた。

災厄の灰色はいまだ猛威を奮っていた。
どこまでも彼を殺し尽くすべく迫っていた。
それでも二人の間にある道だけは、シャクナゲが造る静寂が広がっている。
混じりあい、溶け合った二つの灰色世界内において、紅蓮の道が作るその場所だけが静かな領域だった。
嵐の前の静寂さ。陳腐で使い古された表現でありながら、その境界はそう呼ぶ他ない静けさをもって『過去』と『現在』を繋いでいたのだ。

「お前は逃げているだけだ。まだ見ぬ『いつか』に逃げて、怯えて、皇って道に転げ落ちているだけだ」

シャクナゲの目の前にいる幻。
それは状況を理解したつもりになって、状況に見合う力もないくせに最善を望んで、悪化していく環境と変わりゆく仲間を見ても、仲間達と対立する勇気もなく最後の最後まで先送りにして。

「――お前は俺には勝てない。絶対に勝てるはずがない」

どうしようもなくなって。
なんの救いも残されていない状況になって。
変わってしまった『彼女』を見ていられなくなった後でさえも、目を反らし、大逃げをかました愚者を模したもので。
そして、変わってしまった彼女を止めるという名義で戦って、どんな結果になったとしても彼女から目を反らせる道を選んだ、そんな臆病者だ。
そんな自分を自覚して。
今になってようやく本心から認められた。

「……これで最後だ。これが『今の俺』が持っていて、お前が持っていないものだ」

そう宣告する言葉は呟きのような小さなもので。

ただし、そこにはありったけの想いを込めて、忘れてはならない『過去』へと言葉を手向ける。

「俺が抱えているこの力を、この刻みつけられた記憶を、お前が操る単なる『記録』に過ぎない力で砕きたいのなら――」

そしてシャクナゲは今まで何度となく制御を離れていた猛卒達、果敢に攻め続けていた力の手綱を再びしっかりと握りしめた。

握り砕かんばかりに紅の刀の柄を握りしめ、最後の最後に残された障害――少年の正面に今なお残されている災厄の灰色領域へと、ありったけの力をぶつけるべく声高く吠えた。

「――せめて後五年は苦しみぬいて、悩みぬいてから出直してこいっ！このくそったれ！」

その言葉と共に、世界への侵略者に対して果敢に立ち向かっていた全ての紅き刃は掻き消えた。途端に強まる圧力は、未だ残されているシャクナゲの世界を圧迫する。

しかし彼はそれを気にもかけなかった。自分に残された世界が軋んでも、その視線は一切反らさない。

五年、彼が今の地に来て五年も経つのだ。

その五年間でシャクナゲが出会った仲間は、相棒たる女性一人のみではない。他にも多くの仲間達がいる。その記憶は自分の中にしっかりと残っている。

今も灰色の空を舞う無色の刃はその内の一人。

災厄が産み出した力を留める不可視の壁や宙を翔る真っ赤な炎、衝撃や震動を飲み込む音源もそうだ。

そんな仲間達の中には、彼女が抜けたからといって――錬血とその弟子が戦列を抜けたからといって、あっさりと敗けを認めてしまうような諦めのいい人間はただの一人もいなかった。もっと足掻いて、足掻いて、足掻きぬいてみせる生き汚い連中ばかりだった。

むしろ今のような状況であれば、この場所（守り）を仲間に任されたという信頼に応えようと、なお奮い起つようなそんなバカな連中ばかりだったのだ。

それを彼は知っている。

だからこそ彼は、今も世界の境界を守ろうとする力達には見向きもしなかった。

――信じると決めたなら最後まで信じきれ。信じる事は力になる。それこそが、シャクナゲがこの五年で学んだ大事な事なのだから。

二人の距離はもはや指呼の間だった。一飛びに満たない距離しか残されていない。

それは意地と意地のぶつかり合いが出来る距離だ。純正型同士による世界の喰らい合いではなく、領域の侵し合いでもない。『核』と『核』で勝負が出来る間合いだ。

そしてその距離こそが彼の望んだ戦場だった。この間合いこそが『世界のぶつかり合いでは劣る』と自覚したシャクナゲが、唯一確実に勝ちを拾える距離だった。

ほとんどの純正型を全く寄せ付けない灰色。

圧倒的なまでの攻撃範囲を持ち、敵対者の体よりも先に、その心を殺してしまいかねないだけの手数をも持ち、それ故に最強の一角

とされた少年の事。そんな彼の事はシャクナゲが一番理解していた。
新皇・灰色に勝てる者などそうはいない。彼を相手に回して必勝を約束出来る者など、この国『最悪』たるもう一対の新皇以外には存在しない。
特にこの災厄の世界では、彼ほど絶望を体現した存在は他にはいまい。どれだけ願っても狂えず、狂ったふりすら出来ず、最後には逃げ出したという負い目すら負って孤独に溺れた彼ほど、この災厄が現す絶望にマッチした存在はいないだろう。
そして、そんな彼に僅かばかりでも理解を示す者では、この精神世界において絶対に勝ち目がない。
絶望的な力を相手に回した上、さらに相手に理解を示してしまう事は、この精神の在り方が力を持つ世界では致命的な敗因となる。
そんな条件がある中で、もしこの災厄が混じりこんだ世界において『彼女』以外に灰色に勝てる存在を挙げるとすれば、他の誰もが知らない彼の弱さを知っている者で、なおかつ灰色という異常に心を殺されない者。そして誰もがその名前を恐れ、誰もがその異常を認めた灰色を、真っ向から否定出来るものだけしかいない。灰色の在り方を全否定できて、過ちは過ちなのだとその全てを許さずにいられる人間。そんな存在は彼しかいなかった。
剣の姫や白銀の妹分、紅纏う少女では、少年の歩みを理解してしまい……あるいは理解しようとするが故に勝てなかっただろう。
さらに言えば、世界の強度……あるいは狂度においては劣っていると認めていても、そこに現した力では負けていない、灰色の力を知っていても、絶対に負けてはいないという自信を持つ彼だけが勝てる相手だった。
今の意地と気迫のぶつかり合いが出来る距離において言えば、その想いは必勝の確信を持てるものへ変わっている。
それこそがこの『絶望』に抗う為の大きな力となっているのだ。

彼は消した分の力の紅の全てと、錬血の繋がりの全てを、握った紅蓮の剣に宿してさらなる力で煌々と燃やす。強度を増し、明度を増した刃を誇示するかのように掲げる。

空にはいまだ走る飛炎。

周囲には極大の音波の塊と乱舞する風刃。不貫を誇る不可視の壁。

それらも強大な力ではあるが、それらに決着を任せるつもりは全くなかった。背中を預けて、全身全霊で信じられる存在であってくれればそれだけでよかったのだ。

それだけでずっと強くなれる気がしていたし、実際に強くあれる自信がある。

そして何より、他人任せに――『世界任せ』にする自分はもはや捨てるつもりだった。

長く足踏みをしていたノロマな自分は、まずそこから始めるべきだと思ったから、彼は自身での決着こそを望んでいたのだ。

「分かるか？お前の単なる『記録』に過ぎないモノと、俺が今抱えているものとの違いが？」

風刃と飛炎が混じり合い、少年の周りを固めるあらゆる力を飲み込んでいけば、音波による振動弾はただ真っ直ぐに少年へと至る最後の道程を切り開く。

その道を走り抜けながら、シャクナゲが掲げたのは紅蓮の刃。

今は亡き最初の相棒が、ただ一人血と想いと意志で鍛えあげ、連結した刀で……託してくれた折れない心。

今は彼女の弟子である少女の紅を纏った『朱の刃張り』。

「分からないんだろうな。でもそれでいいんだ。

だってもう俺は、お前（そこ）より先へと歩き始めているんだからっ！」

振りかぶられた紅蓮の剣を受け止めようと、少年はその手の平から鎖を伸ばし、それを青く輝く水圧の刃へと変えると、迫る紅蓮の剣を受け止めるべく頭上に掲げた。その力は……純正型の理が入り交じった刃は、単なる鎖では受けとめきれないと判断したのだ。

甲高い音を立てる半透明な剣。硝子で作られた剣を思わせるそれ。

その力もシャクナゲはもちろん知っている。少年が掲げる力の中に、彼が知らないものが混じっているはずがない。

それは関東にいた頃の仲間であり、部下だった青年の力だ。

シャクナゲとなる前の彼が、他の新皇達――中でも『絶対毒』を操る少女を相手取って起こしたクーデターにおいて、身代わりとなって処刑された友人の『水分を操る力』だ。

空気中に含まれた水分を収集し、圧縮し、超高速振動させる切り裂く刃だ。あらゆるものを斬り裂く『デュランダル』と呼ばれた必殺の刃だ。

その力は純正型である同僚達をも抑えて、彼の仲間内では最も攻撃力の高かった力なのだからよもや見間違うはずもない。

「その力の重みが分からないヤツが……その力を単なる重荷としてしか見れないお前がっ！！」

それでもシャクナゲは躊躇う事なく『紅蓮』を『水刃』に叩きつける。かつての『最強の記録』に対する躊躇など微塵も感じさせないまま、ただ真っ向から振り下ろす。

激情をたぎらせ、怒りすら乗せたその表情に恐怖など入る余地はない。

その力を知っているからこそ――その力を使った仲間がいかに気高く、いかに誇り高かったかを知っているからこそ、彼には許せなかったのだ。

重そうに、でも惰性で攻撃を防ごうとする少年が。

ただ近接戦最高の力だから、という理由でそれを掲げた過去の自

分が。

「――その『剣』を掲げるなっ！」

その叫びは魂からの叫びで、許しがたいものに対する弾劾の言葉だ。それに呼応するかのように紅蓮は力を増す。

バシュッ！

そして僅か一瞬の邂逅。刹那の接触で、薄い青の刃と紅蓮の熱は大量の白い蒸気へと変わる。

それすらも振り下ろされる『紅蓮』が巻き起こす高熱――敵対者に煉獄を思わせる熱を放つ、紅の生んだ上昇気流に吹き消されて、あっさりと霞みと化した。

「……だから言っただろ。お前じゃ俺には勝てないってな」

そして。

そのぶつかり合いの後、そこに立っていたのは彼一人だけだった。いまだ明々と輝く刃を持った男。当たり前のように押されに押されていた彼だけが、それが当然といった風情でそこにはいた。

「お前の世界は俺の世界よりも強いけどな、お前は俺よりもずっと弱いんだよ」

青き刃の所持者であった少年――災厄の最悪が産んだ悪夢を、その体を肩口から綺麗に両断されていた。

呆然とした表情で、僅かにその口元を歪めながら。

それを見て、そんな残骸を見て、彼は気分が悪そうに顔をしかめてみせると、ゆっくりと空を見上げた。

自分の世界にある、二つから一つに減った赤き月を。

「散々苦労して、泥にまみれる覚悟を決めてから出直してこい。この大バカ野郎」

2―42・Good―bye，days（後書き）

三部三部。長尾は出るし、学園も出るけど、他は顔出し程度に新顔が出るぐらいですかね。
ほとんどなんも考えてません。
どこまで話を持っていくかぐらいしか考えてないですね。
長尾はキャラクター決めてますが、出し方をどうするか未定だし。
スズカはのんびりさせて、カーリアンはああさせて、シャクナゲはこうさせて……。
とりあえず三部で黒鉄編は終わりな予定。
その次からは関東ですから、組織としての黒鉄はメインじゃないですしね。
とりあえず終わったらまた一月か二月かお休みします。
よろしくお願いします。

2―43・Fake―Diamond

『……おいっ、あんた、大丈夫か!?』

――あの日、あの時に彼女は『運命』に出会った。

『良かった、怪我も特にないようだな』

運命なんて大それた言い方をすると、その運命を感じた男は嫌そうに顔をしかめるだろう。

自分はそんな大層な人間なんかじゃない、と皮肉げに……そしてどこか自虐的にも見える表情で返すかもしれない。

だが、当時十代後半に入ったばかりの彼女には、その出会いはまさに『運命』を感じさせるものだった。

『大丈夫、俺は敵じゃない。俺もあんたと同じなんだ』

彼女はその出会った運命に魅了されたと言ってもいい。

そしてその出会いに魅せられた事により、彼女の未来は大きな変化を来した。

それほどまでに、空腹と焦燥と絶望に埋もれかけていた彼女にとって、自分の無事を喜んでくれた男の笑みはとても輝いてみえたのだ。

「ねぇ、カーリアン。あなた、勘違いはしていないわよね？」

エリカとの接近を拒むかのように紅を散らすカーリアンに、エリカは軽く肩をすくめてみせた。

どこかからかい混じりにすら見える小さな笑みを浮かべて、自分との近接戦を忌避する少女にどう攻めるべきかを思案する。

「ウチはあなたと勝負するつもりなんかさらさらないのよ？あなたと……彼と同じ黒鉄を名乗るあなたと、殺し合いをするつもりなの」

いや、正確に言えば『どうこの戦闘を詰めるか』を思案していた。

一手布石を置き、二手絡め手を敷いた。

確実に攻めきる為に幾度もシミュレートし、置いた布石を最大限生かす方法も思案してある。

「あなたは力比べでもしているつもりなのかしら？だとしたら、今の黒鉄は随分と生ぬるい事ね」

確実に王手をかけられるだけの下準備はしたつもりだ。

なにしろ彼女は、『直接ぶつければ人体が耐えきれない』といった程度の力しか持っていない事を自覚している。目の前のパイロキネシストの少女や、脳裏に今も浮かぶかつての戦友達には遠く及ばない。巨木とは言えないまでも、それなりの樹齢を持つ木の幹を破

裂させたのが精一杯なのだ。
それを覆す為に色々と思考を巡らし、罠を張り、置き石をして結果を求めた。
元より自分よりも強い能力を持つ相手とばかり戦ってきた彼女だ。そしてそのほとんどに勝ってきた彼女だ。
その前準備は、九割まで整った自信がある。並大抵の相手なら――いや、並大抵を越える相手でも、結果を出せる自信がある。

「そんなに距離を置いたままで、ウチに炎がぶつけられるかはもう分かっているでしょう？それとも辺り一帯を焼き払って、蒸し焼きにでもするつもりかしら？」

ただそれでも懸念があるとすれば、目の前の紅き少女が『あの女性』の後継者であるという事だ。
自分と同じような戦い方をしながら……単に無限の銃弾を放てるというだけのお粗末な力しか持っていない状態で、黒鉄最強と呼ばれた男の唯一人の相棒。
その女性と似た印象を持つ少女だからこそ、エリカは最後の詰めを始める前に幾度も思考を巡らせる。

――大丈夫。イケる。このコはウチの本当の力を知らないのだから。そのアドバンテージがあれば絶対に勝てる。

そう自らに言い聞かせながらなかなか詰めに入らない理由は、彼女自身も自覚出来ていなかった。
そう、今のエリカにとっての対戦相手は、決して目の前の少女ではなかったのだ。
脳裏に浮かぶ女性――華奢な体つきでありながら、身の丈に余る刃を従えていた『剣の姫』。
今まで何度となく訓練で手合わせをした中で、ただの一度も勝て

なかった女性こそがエリカにとっての対戦相手だったのだ。

当時彼女が住んでいた地域は、人の新たな種とされる『変異種』の存在そのものを、蛇蝎のごとく忌避する宗教団体が勢力を誇る一帯だった。そんな中で変種として生まれた彼女は、それを必死に隠して生きていた。

ありのままの自分を隠して、誰にも見せないようにして、変種が疎まれるようになった頃から十代後半までを過ごしてきたのだ。

しかし、いかに上手く隠しているつもりでも、どこから漏れるか分からないのが秘密というものだ。彼女が平穏を得る為に隠してきた『自分自身』とて、どこからどう漏れたのか分からないままに秘密ではなくなった。

変種が極端に忌避される街で、ただ平穏を望んでやむにやまれず隠してきただけなのに、まるで街に隠れ潜んでいたスパイを吊し上げるかのように追い立てられた。

家族ですら——彼女が変種である事を知っていたはずの家族ですら、執拗な追求を嫌ったのか、はたまた幼い弟や妹を守る為か、彼女が変種である事など知らなかったと言い張った。

元より家族の中で一人だけ変種であった彼女と家族の間には、僅かな亀裂があった事も原因の一つだろう。

見知った街で、ずっと過ごしてきた居場所で、彼女は一人ぼっちになったのだ。

『なんで自分だけがこんな目にあうんだろう』

そんなやる方ない気持ちと、一人ぼっちになった孤独感。狂信的な信仰心を持つ者に追われる恐怖。

全てが嫌になって、逃げる事も億劫になった。

『どうせこの街を出ても、もう学校なんか通えない。仕事も見つかりっこない』

そんな諦めが彼女を支配しつつあったのだ。

そんな時に救いの手を差し伸べられたのだから、彼女が彼との出会いに特別なものを感じても仕方がないだろう。

たった一人という孤独感の中で、『自分と同じ』だという男に強い親近感を覚えたのは無理もない事だ。

自分を執拗に追いかけてきた狂信者達が……自分を恐怖に陥れていた追跡者達が、彼の静かな恫喝で震え上がる様を見たのだからなおさらだ。

夢見る年頃ではなかったが、その彼は自分が困っている時に現れる『正義の味方』に思えた。

白馬の王子様に憧れる気持ちなど幼い頃に捨てていた彼女にも、彼が自分にとってのヒーローに思えた。

『もう帰る場所なんかない』

と言い張って、渋る彼に付いていったのは、別に新たな自分の居場所が欲しかったからではない。

その彼に運命を感じてしまうほどに強い憧憬を感じた。ただそれだけの理由で、彼女は彼に付いていったのだ。

――手で触れたものを爆発させる、か。

正直厄介な相手である事は間違いない。触られたらアウトというのは、どこまでもタチの悪い鬼ごっこを思わせる。

――昔のホラー映画で似たようなヤツがなかったっけ？

触られたら死んでしまうという結末を持った鬼ごっこ。

それに対してどこか気の抜けた事考えながら、そんな自分に苦みの混じった笑みをもらす。

確かに厄介な能力だ。ある意味ではカーリアンの持つ力よりも危険な力だ。

しかし、その危険な力に怯むつもりはさらさらなかった。

――触らせなければいい。つまり近寄らせなければ負けない。遠くから突つきまわして、油断なく紅で牽制していれば負けはない。

そう冷静に相手と自分の能力を計り、戦場を組み立てる。

たしかにエリカは、カーリアンよりもずっと戦い慣れていた。自らの爆発で倒した木の上を走って近寄ってくるなど、カーリアンには思いもつかなかった。

もしあの時、彼女の直感が『避ける』という選択肢を選んでいなければ……右手だか左手だかでエリカの手を払う方法を選んでいれば、その片腕は吹き飛んでいただろう。

無鉄砲を地でいく印象が持たれがちだが、今のカーリアンは命のやりとりにおいて自暴自棄だった『昔』とは違う。

先ほども普通の状況ならば、直感に頼るまでもなく念をいれて距離を取る、という方法を取っていただろう。

しかしあの時はエリカの行動に驚かされた直後だ。その状態で冷静な判断など簡単にできるものではない。

意表を付き、判断力を欠如させてその隙を逃さず決まり手を放つ、という先ほどのやり口は、戦術としては至極王道だ。そして王道だからこそ難しいものである事ぐらいは彼女でも知っている。

王道であるという事は、それは相手にとっても既知であるという事なのだから。

それを個人で――しかも真っ正面から向かい合った状態でやってのけるなど、いかにお互いの能力や戦闘スタイルを知らないとは言え、並大抵の事ではない。対象であったカーリアンをして見事だと唸らざるを得ない。

しかし、いまだに負に落ちない点もある。

確かに彼女は『その手に触れたものを爆破出来る』のだろう。その点には嘘がないと判断しても間違いないと思う。

ただ、『それだけなのだろうか』とも思うのだ。

何故彼女はそれを口にしたのか。

何故わざわざカーリアンにそれを教えたのか。

そんな事を言えば、カーリアンは間違いなく距離を置いて戦う方法を選ぶだろう。彼女の発火能力からすれば、接近戦よりも分のある戦い方だ。

エリカにもそれは分かっていたはずなのに……カーリアンの得意とする間合いは、一緒にいた期間で分かっていたはずなのに。

それが彼女の心に言い知れぬ焦燥感を覚えさせる。

圧倒的に自分が攻め立てているという現状。そして今まで与えら

れた情報からしても、不利な点は全くないと思える戦況。
エリカはただ紅を避けるだけで手一杯で、近寄るすべすらない。近寄らせない自信もある。
自分の紅が力を失う前に――燃料である負の感情が尽きる前に、エリカの体力の方が先に尽きるのはカーリアンから見ても明らかだ。空間を走る紅の光を、彼女は必要以上に距離を取って避けていたのだ。使う体力と磨り減らす精神力はかなりのものだろう。
しかしエリカもただ者ではない。回避に必要な間合いを五とするなら、最初に取っていた距離を十、次は九、八、七とギリギリの間合いまで徐々に詰め始めているのだ。そのセンスと思い切りは見事と言う他ない。戦闘巧者として見れば彼女に優る者など黒鉄にもそうはいまい。
たまにひっかけで強めに力を籠めた際には、びっくりするぐらいのカンの良さを見せて大きく距離を取る。しかもそんな陳腐なひっかけを鼻で笑うオマケ付きだ。

ただそれでもカーリアンには自身の有利を確信出来た。有利だと判断出来てしまった。
これほどの戦闘巧者を相手に回して、戦闘開始から間もない内に。
それが不可解で……何よりも怖く感じられていたのだ。

男が所属するグループについて話を聞き、あちこちで変種と既存種が対立する厳しい現状を知り、その間に立つ男の立場を知っても、彼女は背を向けなかった。

男と同じ道を歩く事が、荒事には慣れていない自分にとってどれほど困難な事なのかが分かっていても、彼女はその道を喜んで選択した。

彼みたいな『誰かの救い』になれる事を夢見て――あの運命の時に見た『ヒーロー』みたいになりたくて、彼の模倣を始めた。自分みたいな何もかもを失ってしまった誰かに、かつての自分みたいに光を当ててあげたくて、自分が感じた光を真似し始めた。

いつもどこか皮肉げな調子である彼をよく見てそのスタイルを真似た。誰よりも最前線に立つ彼を真似て、自ら荒事に飛び込んで大怪我を負った事も一度や二度ではない。

彼がいつも使っている二挺の銃は、さすがに同じものが手に入らなかったが、彼の着ているものとよく似た黒のコートを買って自らのトレードマークにした。

グループにおいては戦闘担当だった彼に学び、戦闘技能は忠実にコピーして自らの体に刷り込んだ。戦術理論について何冊ものノートを端から端まで埋めて、自分にあった戦闘方法を個人戦闘から集団戦闘に至るまで考察し、頭に叩き込んだ。

それだけではなく、国や近くの地方の現状についても情報を集めて、単なる戦闘技能者で満足するのではなく、彼や仲間の役に立つ存在になるべく自分を高めた。

目で見て盗み、教えを乞うてその身に刻み、着実に彼の立ち位置に近付いていったのだ。

――彼には最高の相棒がいたからその座は諦めた。

――彼には心を許した無二の友がいたからその座も諦めた。

しかし、卓越した戦闘技能を持ちながらも、相棒だった女性のように弟子などは一切取っていない彼にとって、自分こそが『最高の弟子』だという立場だけは譲れなかった。

その名前に見合うだけの努力をしてきた自負があったし、彼に恥

をかかせない能力も培ってきたつもりだ。
だからその場所だけは、絶対に誰にも譲るつもりはなかった。その立場を……かつて見た光に近付いている実感こそを誇りとしてきたのだ。

やがて、彼とその唯一の弟子を自認する彼女が所属するグループは、激動する時代に沿って変遷の時を迎える。
彼は漆黒の外套と神出鬼没な戦闘スタイルを持つ事から、『宵闇』と冠された最悪の暗殺技能者として、敵方には今まで以上に恐れられるようになった。
彼女はその能力に対するイメージと、電光石火のごとき勢いで実力を上げていき、最後には黒鉄でも有数の戦術家となった事から『閃光』と呼ばれるようになった。
もっとも、『剣匠』や『銀鈴』のような華やかさとは無縁な戦い方と、着実ではあるが地味なスタイルを自負していた彼女にとって、その派手な呼び名は少しばかり不満なものであったのだが。

――宵闇のシャクナゲ、そして閃光のエリカ。

彼らは仲間として。
友として。
そして師弟として、黒鉄と名前を変えた組織に所属し、共にあったのだ。

そう、あの時まで。
宵闇と対になる『暁』が――シャクナゲにとって無二の友である男が倒れたあの時まで。
まだ余裕があるとはいえ、あと一年は持たないだろうと、本人の口から聞かされたあの日まで。

「カーリアン、あなたは本当に強いわ。あなたよりも異常な能力を持つ人間なんて、全国回ったウチでもそんなに多くは知らないぐらいよ。発火能力者としては間違いなく最高クラスの力を持っているでしょうね」

攻撃の合間に向かい合い、かけられたそんな言葉からはまだ余裕が見られた。感心したかのような言葉にも恐れは感じられなかった。息は多少上がっている。元より血の気の薄かったその顔色には、先程までより赤みが増していて、確かな疲れが見てとれる。

それでもエリカにはまだ余裕が見えた。

そんな彼女に対して、ただひたすら攻勢に出ていたカーリアンは、言い知れぬ不安を覚えていた。

それは彼女特有の天性の『カン』によるものではない。彼女が感じていたのは、そんなあやふやなものではなくもっと確かな『不吉』だ。

彼女が感じているもの――それを言葉にするならば、直感や予感といったものよりずっと確かな『既視感』。

いつか見た、今までに何度も目にした誰かと、向かい合っているようなデジャヴ。

目の前にいる彼女の中に感じた誰かの影。

それがカーリアンの中で盛大に警鐘を鳴らしているのだ。

「でも、残念ね。本当に残念だわ。あなたにはその力に見合うだけの経験値が全く足りていない。自分よりも戦闘が巧い相手との戦いにあなたは慣れていないでしょう？
　対してウチは、自分よりもずっと強い相手と戦う事に慣れている。その経験値の差はウチとあなたの能力の差よりもずっと大きいみたい」

　エリカの口元に浮かぶ笑みは、ひたすら攻勢をかわしていただけの者には見合わないものだ。少なくとも不利を背負い、それでも気概で浮かべただけの笑みにはどう見ても見えない。

「これは確信を持っていえるのだけれど……あなたはほとんどミヤに何も教わっていないでしょう？多分、力の制御について教えてもらったぐらいじゃないかと思うのだけど、どうかしら？」

「……っ」

　カーリアンの実力を計り終わったかのような言葉。そこに大きな間違いがない事に、思わず歯を噛みしめる。
　カーリアンが師から学んだ事。それが力の制御がメインであった事は確かな事実だった。脳裏には紅が暴走しそうになる度に凹まされ、制御を甘くする度に折檻された記憶がはっきりと蘇る。
　何より紅を暴走させない事、仲間を傷付けない事を第一として叩き込まれていたのだ。

「ふふ、当たりみたいね？あなたはまだ原石、磨かれ研磨されていないただのダイヤモンド鉱石よ。
　そんなあなたを、自らで磨きあげて造り上げただけのフェイクダイヤ（偽物）に過ぎないウチが、徹底的に鍛えあげ、磨きあげ、ブ

ルーダイヤモンドにまで高めれば、あの錬血にも勝てるだけの力を持てるかもしれない。

……そう思うと正直な話心が踊るわね」

不敵で皮肉げで――どこかで見慣れた誰かの笑みが被って見えた。

自分が知っている、自分以上の誰かが重なって見えた。

だからこそカーリアンの中からは警戒心が消えない。むしろ時を経るごとに膨れ上がっていく。

エリカに被って見える存在。それはカーリアンがよく知っている黒鉄最強と呼ばれた男のものだったのだから。

「それだけに残念だわ。ここでさよならしなきゃいけない事が残念でならない」

そう小さな嘆息混じりに告げて。

そのまま決め手に欠け、見知った印象に戸惑って立ち竦むカーリアンを前にしたまま、ゆっくりとその腕を持ち上げていく。そしてその細い指を擦りあわせ、パチンっと鳴らして乾いた音を立てた。

ただ見せ付けるように、軽い音を響かせた。

その直後だった。カーリアンの真後ろにある小さな木が……エリカとは対称の位置にあるまだ細い若木が、『炸裂音をあげて倒れたのは』。

「ふふっ、敵の言動は全て疑ってかからなきゃダメよ。ミヤはこんな事まで教えていなかったのかしら？

敵となりうる相手――しかも力が分かっていない変種が、その力をわざわざ誇示してみせる時は、『その発言自体が罠である事を疑え』って」

「くっ……」

「変種の能力は、敵に知られたら不利になる能力がほとんどだけれど、中には『敵に知られても上手く使える能力』もあるの。
スイレンなんかは特にそうよ。彼女は敵と正面から向かい合う時は、あらかじめ敵に自分の力を見せ付ける。わざわざ口にして、敵に知らしめる事すらあるのよ？そうやって『敵に目で見て得た情報に疑いを持たせる』。自分の視界に不信感を抱かせるの。
恐ろしくえげつなくて、怖い戦い方だと思わない？」

倒れてくる若木を辛くもかわし――そして見る。
閃光と冠された女が、その両手を持ち上げ指を鳴らすべく構えている姿を。

「ウチもそう。ウチの力は弱いものだからね。だから攻撃力は少し割り増しで見せ……でも『性能は少し割り引いて』能力を語るのよ。
さっきの大木ね、結構簡単に倒したように見えたでしょう？でもウチの力では、あれで『精一杯』だったりするの。ああやれば、大抵の相手は『あなたみたいに接近する事を怖れて距離を取って戦いたがる』から。そして戦術の幅が狭まり、行動の範囲が狭くなる」

そして、その口元が先程までよりずっとはっきりとした笑みを浮かべているのを。

「言っておくけど、ウチの力が爆発だって言うのは嘘じゃない。能力自体はあらゆるものに自身の力を籠めて炸裂させるだけの力よ。
そこに嘘は一切含まれてはいないわ。
単にウチの爆弾が『任意で爆発』させられる事を言っていないだけでね。
さて、弱い弱い陳腐な爆発物でも、あちこちに仕込んでおいて、囲まれた位置まで敵を誘導してから爆破させたりしたら――どうな

るかしらね？」

「ヤバ――」

エリカの言葉を聞くまでもなく、彼女を視界に入れ続ける為に少しずつ移動していた自分を自覚して。

紅をかわす為とは言え、エリカが自分の周囲を回るように移動していた事を思いだして。

「……Ｂｏｍｂ（ボンっ）！」

――パチンっ！

エリカのふざけたようなその言葉を合図に、その指が鳴らす弾けるような音と。

――バァンっ！

周囲一帯で連鎖的に何かが……数十個近くの何かが炸裂していく音をほぼ同時に聞き、カーリアンの視界は白い粉塵と爆風により巻き起こされた土煙に閉ざされた。

2―43・Fake―Diamond（後書き）

エリカの立ち位置が見えてきたでしょうか。
カーリアンが剣の後継ならば彼女は宵闇の後継です。
愚直に、ただ真っ直ぐに憧れた存在へと近付き、ただ努力だけで才能の壁を超えた少女。
強い力を持っていなくて、才能すら欠けていて、天然の輝きを持つ者とは似つかない。それでもただ戦術論（練磨）と戦闘経験（工夫）で本物へと近付いた『偽物』。
そんな彼女もやはりお気に入りです。
彼女が何を望んで、どんな理由で道を違えたのか、ぜひお楽しみに。

番外・堕ちた閃光の軌跡（前書き）

これは本編に繋がる話ではありますが、番外編っぽいので番外としました。
思いっきり前回から繋がってはいますが、番外編ぽい書き方をした話です。
とりあえず二部は番外編がないし、番外編にしとこう……とか考えたわけではないですよ？

番外・堕ちた閃光の軌跡

――お前に俺の後を任せたい。

そうアカツキが彼に述べた言葉を聞き、彼女は我が事のように興奮した。『当然だ』そう思ったし、『彼の他にはアカツキの後を継げる人間なんかいない』と確信を深めた。

アカツキの命がそう長くないという事実には、彼女とて絶望にうちひしがれそうになった。

まだ若いアカツキが仲間達全員を導く絶対的なリーダーであったのは、その珍しい能力や類いまれなるリーダーシップによるものだけではない。彼の在り方そのものが仲間達の指針となり、道標となっていたから自然と先頭に立つ事になっただけだ。

居心地のいい新たな故郷、命を預けるにたる仲間。それを得られたのは、アカツキの持つ誰であれ受け入れて最後には仲間にしてしまう『人間的な器の大きさ』によるものだ。

アカツキ以外の誰が『変種』も『既存種』も受け入れられる街を作れただろう。

既存種は変種を恐れ、人から産まれた人外だと考える者が多かったし、変種は変種で既存種を力を持たないくせに見下してくる古い人間だと考えていたのだ。全員が全員、そんな考えを持っていたわけではないが、全員が全員、この二つの種族の間にある壁は理解し

ていただろう。
そんな『当たり前』が蔓延する中で、この街以外のどこに力を持たない既存種や力の弱い変種が、力を持つ他者に怯えなくても済む場所があるだろう。そして既存種の冷たい目に、力を持つだけの人間が傷付けられなくても済む場所があるだろうか。
持つ者と持たざる者に別たれた一つの国民が、そんな垣根など気にせず笑い合える場所は、もしかしたら他にもあったかもしれない。だとしても、それもそう多くはないだろうし、この街ほど居心地がいいとも彼女には思えなかった。
この国の現状を知るごとにそう理解してしまった。
アカツキが先頭に立ち、計画的に街を発展させてきたからこそ、この街は食うに困らないだけの食糧を得られる整備がなされ、他の勢力にも負けないだけの人材が揃った。そんな土壌があるからこそ、多くの人間が出自に関係なく笑いあえるようになった。
何よりみんながみんな、変種や既存種の区別なくアカツキが好きだったからこそ（彼の妹だけは兄の一番近くにいるアカツキに敵意を向けていたが）、彼の周りにいる人間に対して真っ直ぐに目を向ける事が出来た。
そんなアカツキが居なくなった後、この居場所も変わってしまうのではないかという考えは、一度故郷と家族を失った彼女にとって絶望以外の何物でもなかったのだ。

そんな先の絶望を覆せる存在がいるとすれば、それは『彼』以外にはありえない。彼女はそう確信していたし、他の仲間達もそれを望んでいる事を知っていた。
アカツキと共に最初から戦い続け、陰日向なく支え続けてきた『彼』。
指揮官としても戦士としても黒鉄随一で、自ら前線に立つタイプではないアカツキに変わって、仲間達に指揮を出し、その命を背負ってきた『彼』。

アカツキとはタイプが違っていたが、人を惹き付ける何かを持っている『彼』。

アカツキの他に黒鉄を守れる存在がいるとすれば、彼を置いて他にはいない。弟子の欲目抜きに彼女はそう思っていたのである。

宵闇のシャクナゲ。

それがこの街を奪取すべく攻め寄せてきた勢力に立ちはだかった男の名前だった。

攻めてきた相手には相応以上の報いを負わせ、必要以上に痛手と恐怖を与えて、この街を攻めるリスクを作り上げた存在が彼だったのだ。

攻め寄せてきた武装盗賊は、撃退された後も追撃として舞い降る刃の雨と、銀色の少女が放つ圧倒的な力に追い立てられた。

だが、廃都に攻め寄せた勢力が一番恐怖する事になるのはその後だ。

ようやく彼女らの追撃から逃れられたと思った後には、夜闇に紛れて襲撃する漆黒の暗殺者に悩まされる事になるのだ。朝になる度に、数人ないし数十人の盗賊達が冷たい骸をさらした。

誰も襲撃者の姿を見ていない。ただ朝になれば誰かが冷たくなった身体をさらしていて、その結果として彼の存在に気付かされる。自分達はまだ逃れられていないのだと恐怖をもって理解させられる。

今この瞬間にも自分が狙われているかもしれない……そんな恐怖を抱えたままで眠れる者などそうはいない。そんな姿なき相手を警戒しても、闇に紛れた襲撃には効果がない。夜間の警備に当たった者が冷たくなって発見されるだけだ。

安息の時はなく、恐怖心は日毎に増していく。深夜になれば現れる姿なき亡霊のごとき暗殺者が、一体いつになればその手を引いてくれるのかすら分からないまま、ただ朝まで震える日が続くのだ。

その結果として結束を乱し、精神を乱し、自壊した盗賊団は決して少なくない。

彼こそが最初に『盗賊殺し』と呼ばれた人間であり、今現在でもかつてその恐怖に際した者からすれば、彼こそが最強の『ロバーズキラー』であろう。

そして彼を怖れたのは盗賊達だけではない。近隣の敵対都市からしても、彼はどこまでも忌々しい最悪の障害だった。

かつて隣の水都と戦都が連携して攻めてきた際には、防衛だけで手一杯で都市にはかなりのダメージを受けた。都市の戦力比からすれば、陥されなかったという結果だけでも奮戦が見て取れるほどの戦力差で、何人もの仲間達がその命を散らし、その数倍の仲間達が傷付いた。

あの剣匠ですら傷を負い、本部が強襲されて陥落寸前まで追い詰められたほどだ。無傷であったのは彼の銀鈴ぐらいのもので、その彼女とて出張ってきた近衛や強力な変種を抑えこみ、崩れる戦線をなんとか維持するだけで手一杯だったのだ。

一人本部を防衛する為に奮戦した黒鉄でも五指に入る実力者の『不貫』は、その身に十を越える致命傷を負った姿で発見された。彼女はそれでも倒れる事なく、敵の侵攻方向を見据えて立ち塞がったまま事切れていたのだ。

なんとか最後の一線は守りきったものの追撃を掛ける余裕はなく、倒れた戦友達を悲しむ余力もない。何も得るもののない戦いだった。

しかし、その報いですらも彼は敵に与えてみせた。自らの名前で敵を抑えつける為に――敵対した者には誰であれ必ず報いを与えるという姿勢を示す為に、危険を知りながらもあえて二つの都市の最高責任者である知事を襲撃したのだ。

彼自身も一番の激戦区を抑えきり、立ち上がる事すら辛かったはずなのに。彼はその働きだけでも十分過ぎるほどであったのに。彼の受け持ちが崩されていれば間違いなく街は陥とされていただろう。

その上で、かなりの戦果に意気揚々と引き上げていった都市の権

力者達を襲撃して、ならず者と見なされている盗賊相手だけではなく、関西の正規軍たる統轄軍にもその名前を知らしめたのである。
警備の厳重な敵部隊の中心で、その二つの都市の知事が警備にあたっていた者達と共に殺されていた件は、瞬く間に周辺地域に広がった。
そんな真似が出来る存在などそうはいないのだから当たり前だ。
この二つの都市の知事がやたらと代替わりが早い理由が、彼に狙われたが故である事も後に名を上げる理由となっている。

――廃都の暗殺者に狙われたくなければ、あの街には手を出すな。

そんな不文律が武装盗賊達に出来た事が、廃都にゆとりをもたらしたのは間違いない。
そして二つの隣接都市による襲撃頻度が下がった事も、間違いなく彼が理由だろう。
誰であれそれなりの地位を持っている者ならば、多大なリスクを侵してまで虎穴には入りたくないものだ。先の件からしても、防御の堅い廃都を落とすのは一都市の戦力では至難である事が明らかだ。攻め寄せても虎の子の代わりとなる代価が手に入る確率は低い。
ましてやその虎穴にいるのは、虎などよりも遥かにタチが悪い最悪の暗殺者だ。上からせっつかれでもしない限り、知事という甘い蜜を吸える立場にある者が手を出しがらないのは当たり前だろう。
また関西軍の下っ端からしても、そんなタチの悪い殺し屋に目は付けられたくない。なにしろ彼は、地位の高低に関係なくその牙を向けるのだ。
甘いところは上の者が手に入れるだけなのに、そんな物騒な相手を敵には回したくない。それが末端の兵士達の考えであり、そんな考えを持つ以上は戦意など上がるはずもない。

剣の姫は確かに強力だ。その力は恐ろしいもので、彼女の従者達

を相手に回す事はそのまま命知らずな精鋭数百人を敵とするに等しい。

銀色の少女はその力そのものが反則だ。お供を引き連れ戦線に出た際には、その反則さであらゆる敵を蹴散らした。彼女は間違いなく黒鉄最強で、あらゆる変種の中でも最高位の力を持っているだろう。

だが夜になり、廃都からずっと離れた場所まで引いた後でも狙われるという恐怖。

それはいかに自らの力に自信があり、剛毅さに自信を持つ命知らずな者でもたまったものではない。警戒していても、その網を縫うように誰かが狙われる。幹部や末端構成員の区別なく誰かが命を落とすという結果が残される。

それは悪夢じみた、というものではなく、『宵闇の中で必ず起こる悪夢』そのものだ。

目に見える恐怖よりも、目に見えない恐怖の方が人の心を容易に縛る。実際の苦痛よりも想像の傷みの方が人を抑圧する。

彼はまさしく、恐怖の対象となる事で仲間達を守ってきたのだ。

さらに彼は、敗北という結果を負った事はただの一度もない戦士だ。

部隊を率いては負け知らずの指揮官だ。

外の敵にとっては最悪の悪夢。中の味方にとっては誰よりも頼りになる味方。

それが『彼』だ。

そんな彼以外には、アカツキという傑物の後を担えるはずがない。

彼の唯一の弟子を自認する彼女はそう思っていた。そう信じていた。

たとえ彼が、かつてこの国を壊した国崩しの皇である事を知っていても。

その話を聞いた後でも、彼女が抱く憧れはなんら変わる事はなかったのだ。

だから彼がその地位を望まなかった時には正直失望した。そして同時に安堵もした。

それは責任ある立場から逃れた事に対する失望と、自分だけの師が責任ある立場まで行ってしまわなかった事に対する安堵。

戦う事しか出来ない彼女は、同じ目線に彼がいてくれる事を喜び、そこから歩き出さない彼に失望したのである。

いまだ手が届かない位置にいる彼が、二度と手の届かない場所に行ってしまわなかったと感じた分だけ安堵の方が大きかったかもしれないが。

彼女には自分がいつか戦闘において彼を越えた時まで……かつて感じた光に手が届いたと思えるその時までは彼が必要だった。いつか彼を越えた時には、今の彼の代わりを自分が務めたいとも考えていた。

そう、彼女はいつしかかつての憧れに手が届く位置にいると感じ始めていた。

いつか彼がその親友の立ち位置に、そして自分は今の彼がいる場所に立ちたいとそう考え始めていたのだ。

剣の姫では今の彼の代わりにはなれない。銀鈴でもそうだろう。

何故なら彼女達は産まれついての強者だ。表舞台に立てるだけの実力を産まれ持った人間だ。

ならば陰湿で陰惨で血と泥にまみれる裏側に立つ必要などどこにもない。そんな場所は彼女達には似合わないし、そんな裏側の舞台まで産まれ付きの輝きを持つ人間に手を出されたくはない。

自分のような存在が絶対に必要になる。そう考えた。

自分だからこそ彼の代わりが出来るとも。

今の彼に代わる人間は黒鉄には必要不可欠だ。それは確信であり、

戦略的に見ても絶対だ。
いずれ彼は仲間達のトップに立つだろう。いくら固辞しても、彼以外の誰かがアカツキに代われるはずもない。今は彼も辞退したが、アカツキがいなくなればそうもいかない。彼は立たざるを得ない。
ならばその時には自分が『宵闇』になろう。
閃光などという似合わないコードではなく、自分がその名前を継ごう。
そう考えた。
そしていつか自分もあの時の彼のように、誰かの光になりたい。
そう思っていたのだ。

――アカツキが彼の辞退を受け入れ、数人の合議制で黒鉄を運営する体制を考案し、仲間達に発表したあの日まで。
その中でも一番の黒鉄である事と仲間達の支柱である事を示す為に、彼が『黒鉄のシャクナゲ』と呼ばれるようになったあの日まで。
宵闇のコードが絶たれ、ロストされたあの時。そしてその名前が持つ意味が『黒鉄』に継承されたあの時。
もはや誰もその名前（宵闇）を名乗る事が出来なくなったのだ。

彼女は望んでいた位置には立てない事を知った。
彼はリーダーにはならず、あくまでもリーダー格でしかなくなった。
そんな彼を裏から支える未来はなく、黒鉄でも有数の実力者であり戦闘巧者でもあった彼女は、彼とは別のグループのトップに立つ事を望まれた。
彼女は強い力を持つタイプの変種ではなかったが、その身体能力

はかなり高かったし、磨き上げてきた個人戦闘における戦術と、天性の戦略眼においていえば黒鉄でも有数のものを持っていたのだから、それも仕方がなかったと言えるだろう。

彼の脇を支える役割は、支援や援護に特化した稀少な能力を持つ水鏡と、絶対防御に近い防御力を持つ『二代目・不貫』。この二人で決まりであり、この二人が能力からしても黒鉄になった経歴からしても一番適役である事は彼女にも分かっている。

そして合議制となる以上は、彼のグループにそれ以上力を集結させる事は望まれないだろう事も。

少なくともその時は望まれていなかっただろう。

不貫の名前が二代目に継承された時。黒鉄史上最悪の激戦で、名前通り仲間達の盾となった女性の名前。

その名前が当事有名ではあっても黒鉄としては新入りだった男に受け継がれた時、彼女は人知れずガッツポーズを取った。冷静な思考と皮肉げな物言いが板についてきた彼女ではあったが、溢れてくる喜びを隠しきれなかったのだ。

そう、いつかは自分も彼の名前を継げるかもしれない、そう喜んだ。

喜んでいたのに。

それが不可能だと決まった時には足許が崩れたかのような錯覚すら覚えた。

袂を分かつ時が来る事。それは自体は覚悟をしていた。いつかはそうなるだろうと理解していたつもりだった。

それでも彼女にはその形は我慢出来なかったのだ。

暁が潰えた後に宵闇までなくなる事が。

そしてかつての自分を救ってくれ、今まで導いてくれた存在に至る為の道が断たれるような思いが彼女を苦しめた。

彼女は何も望まなかった。大それた望みなど抱いたつもりは欠片

もなかった。
ただ彼女が――エリカが望んだものは、ただ一人師として慕った男と同じようになる事。かつて救われた自分が誰かの救いとなる事だけだ。
それが血と泥と闇に包まれた暗い道のりでも構わなかった。その道のりの中で誰かを照らせれば十分だった。誰かの救いとなれて、笑ってもらえたのならそれで十分報われた。
いつしかそうなれたらいいという望みは、エリカ自身が思っていた以上に彼女を焦がす。そうなれないという事が、より彼女にそれを求めさせたのだろう。

彼女は『宵闇』になりたかった。
今となってはその名前を継ぐ為には、彼を超えてみせる事で自らの力を皆に示すしかなかったとしても――彼を超えた上で失われたその名前を希望するぐらいしか、方法も可能性もなかったとしても。
それでも彼女は二代目・宵闇になりたかったのだ。
他の仲間達からすれば、その名前に価値は見出だしても、渇望するほどに欲した彼女の感覚は分からないだろう。たかが呼び名と言われるかもしれない。
それでも『その名前が欲しい』という思いは、彼女には何にも代えがたい感情だったのだ。
誰もが知っていて、でも誰も継ぐ事が出来ないその名前は、彼の全てを学んできた自分こそが継いでもいいはずだと思った。
彼がその名前をロストしたのなら、自分がその名前を得ても問題なんかあるはずがないと考えた。
彼女はそれしか望んでいなかったのだから、誰も継ぐ者がいないそのコードは、自分だけが手にする事が出来るはずだ。それだけの働きをしてきた自信があるし、その名前を戴いたのなら先代である彼の名前に泥を塗る真似も絶対にしない。仲間達の為に今まで以上に力を奮ってみせよう。

暗殺だってやろう。それがその名前を名乗る為に必要ならば。
謀略を駆使する事が必要ならば、誰よりも上手く策を仕掛けてみせる。それがその名前を得る代価ならば。
彼よりも仲間達の先頭に立つ覚悟もある。それがその名前が持つ意味ならば。
その名前を背負うリスクは恐くない。その名前を得た事で死ぬ事になっても構わない。その名前を抱いて死ねたなら不満など全くない。

彼女はやがてそんな望みを抑えられなくなる自分を知っていた。
その為だけに黒鉄に来て、ひたすら力を磨いてきた自分を知っていたからだ。
そしてかつて彼に見た光が、憧れが、何年経っても全く色褪せていない事を自覚していたからだ。

だから彼女は、彼の側にいる人間に――錬血と水鏡に自分の心情を全て述べて……彼女達には自らの思いを理解されない事は分かった上で、一つの頼み事をしてから黒鉄を後にしたのだ。

――もし自分の憧れが暴走し、いつか彼を越えて彼になろうとした時には止めてほしい。

そう頼んで黒鉄を抜けたのだ。
彼と戦いたくはなかったし、殺したくはない。そして彼にだけは絶対に殺されたくなかったから。
二人に自分が次にこの街へと戻ってきた時には、黒鉄の敵だとみなすように頼んで、第二の故郷とも思っていたあの街を離れたのである。
あの二人が彼の側にいる事で、自分を抑える為の抑止力となるように。

自らと互角以上に渡り合える二人が彼の側にいる事で、冷静な戦略家としての自分が抑えられるように考えて。

錬血という一つ目の楔が抜けて一年経っても、街が今のような動乱に包まれるまではそうやって自らを抑えてこれたのだ。

夢にかつて彼に救われたあの時を見ても。

憧れた気持ちが焦燥感となり、たった一つ望んだものに手を伸ばしてしまいたくなっても。

彼を相手にして、どうやれば勝てるかを考えてしまう自分を自覚していても。

堕ちた閃光たる彼女は、一年以上も自らの欲望と衝動を一人抑えてきたのだ。

あの憧れた存在を自分は超える事が出来たのかどうかをひたすら自問し続けながら。

自分は居場所も仲間達も捨てて一体何をしているのだろう、そんな自嘲を繰り返しながら。

そんな日々を越えて彼女に今そこにいた。

自問自答の果て、全てを賭ける覚悟を持って。

2―44・Erika

「あっけないものね」

寂寥感にも似た思いを抱きながら、エリカは夜の空にそんな言葉を洩らした。

月はよく見えない。雲が隠したのか、はたまた辺りの木々に隠されたのか。それはエリカには分からなかったが、それが少しだけ彼女の気持ちを軽くしてくれた。

かつての仲間で、恩人で、その力と立場に嫉妬を向け、逆にその力に感謝をも向けた女性の教え子を殺した自分を、例え月にであれ見せなくて済んだ事が安堵させた。今の自分を誰かに――いや何かにであれ見られたくはなかった。

やがて舞い上がり、吹き上がっていた爆風が収まった場所を見て。小規模でありながら連鎖的に力が発露した爆心地を見やって、思わずエリカは固まった。

そこには爆発によってズタズタに引き裂かれ、身体中を砕かれた少女が倒れているはずなのだ。

ベストなタイミングとはいかなくとも、ベターな瞬間を選んで爆発領域に巻き込んだはずだった。

逃げられるはずがなく、そんな余裕を与えたつもりもない。なすずべもなく、せめて顔と頭を腕で守ろうとする事ぐらいしか出来たはずがない。

出来るはずがないタイミングだった。
それなのに――

「……いたた、やってくれんじゃん」

そこには倒れ伏しているはずの少女がいまだ立っていたのだ。
その身に纏う上衣をズタズタにし、素足にはいくつもの擦過傷を負い、場所によっては青く内出血している箇所もありながら、戦闘可能なままで少女はニッと笑ってみせる。
確実に仕留めたつもりで、仕留められたはずのタイミングで、ここまで見事に計算を崩されたのはエリカにとって始めての事だ。
思わず彼女が立ちすくんでしまったのは仕方ないだろう。その僅かな隙に、エリカがさっき倒したはずの少女――カーリアンは一気に間合いを詰める。

「くっ……」

それもまたエリカの予想を越えた行動だ。『自分に近寄ってくる』などとは彼女は思ってもいない。
思わず呻きを漏らし、それでも本能で武器を……その両手を伸ばそうとするも、その伸ばした先に紅い閃光が産まれるのを見て、一瞬の躊躇いを覚えた。
迸る紅の導火線へ手を突っ込ませる事はさすがに遠慮したい。相手が何故無事なのかは分からないが、自分がカーリアン（産まれ付いての強者）の力をまともに食らって無事でいられるとはとても思えない。それは絶対だ。
だから紅を避けながら手を伸ばし、なおかつカーリアンを上手く掴めるかを計算する。刻みこまれた戦闘本能が働いてしまう。
そんな僅かな間に、生まれた紅は膨張し一瞬だけ炎の色でエリカとカーリアンの視界を埋めた。

――目眩ましかっ。

視界いっぱいに広がる赤。それを目を眩ませる為のものだと判断し、その広がる紅の膜の左右どちらから少女が回り込んでくるかを警戒する。

上も下も論外だ。下は地面であるし、熱気は上に上がるものだからだ。

後ろに下がってくれるならそれはそれで構わない。それこそがセオリー通りの行動で、読みやすくなってやりやすくなるぐらいだ。

しかし彼女ならばそんな選択をしないだろうという、変な確信が彼女にはあった。

――来るなら左右どちらか。出てきたら捕まえて、直接爆破する。

そう考えが纏まるまで数瞬。距離も測り、あらゆる状況のシミュレーションをあっさりと終える。

後はこの目眩ましを抜けてやってきたところを捕まえるだけ。

そう考えていたエリカは、『吹き上がる紅の膜を突っ切って伸ばされてきた拳』に――炎に赤く染まる笑みにその身を打ち抜かれた。

拳の打撃に。

そしてそれ以上に、今もよく覚えている自分の考えの斜め上を平然といきながら、ニカッと笑ってみせた同僚を見たかのようなデジャヴに。

それにやられて、エリカは攻撃の威力を逃す事すら出来ず、ただ拳のヒットポイントを顎から肩に移しただけでまともに攻撃を食らったのだ。

「この炎はさ、純粋に全部があたしから生まれたものだからあたしを傷つける事がないの。言ってなかったっけ？」

その打撃による力を逃す事なく後ろに下がるエリカに、カーリアンは追撃をかける真似はしなかった。エリカの能力を考えれば接近戦を挑むリスクは今でも変わらないからだ。

下手に勢い任せな追撃などをかければ、痛い目を見るのは十中八九カーリアンの方だ。

今のようによほど意表をつかない限り、駆け引き込みの戦いではエリカに勝てない事はもう分かっている。

真っ向からの能力のぶつけ合いでは負けないだろう。しかし、身体能力の差、そして絶対的な経験値の差が、エリカをどこまでも強大な相手へと変えていた。恐らくカーリアンが今まで向き合った相手の中では、間違いなく最強の相手だろう。

死にたがりの紅として襲撃を掛けたあの狂人よりはマシな相手だと思いたいが、相性などを含めて考えればより分の悪い相手かもしれない。

だからこそ彼女は安易に距離を詰めない。お互い痛み分けで――能力を少しずつ知れた事で一旦仕切り直す事にしたのである。

「なるほどね。強い力を持つだけの単なる発火能力者ではなかった、と」

「単なる発火能力しか持ってないなんて、あたしは一言も言ってないわよ？」

一般的な発火能力者（パイロキネシスト）が操る炎は、能力者本人をも傷付ける一般的な炎となんら変わりのないものしか生まない。発火能力者だからといって、炎の熱に耐性があるわけでもない。

自分が発した炎に巻かれれば焼け死ぬし、今のカーリアンのように腕を突っ込めば大火傷では済まない。普通の発火能力者であればそのはずなのだ。

発火能力自体、変種が持つ能力の中でも数の多い部類であるだけに、エリカにとってその炎を突っ切って攻撃してくるなど想定外もいいところだったのである。

そんなエリカの考えが分かったのだろう、一矢を報いたカーリアンは小さな嘆息を洩らすと自らの腕についた炎の残滓を見やる。

「まぁ今みたいに紅から炎に変えちゃったら、服は焼けちゃうんだけどさ」

そして僅かに煤けた上衣をかなり複雑そうに見やり、焦げた袖にいまだに残っている残り火を半ばヤケクソにも見える動作で叩いて消しながらカーリアンはニッと笑う。

その笑みもカラッとしたものではなく、どこか凄惨さを滲ませている。一瞬悲しそうに焦げ落ちた服の切れ端を見ていた辺り、お気に入りの服だったのだろう。

「せっかくカクリが見繕ってくれた服だったのに……絶対弁償させてやるからねっ」

「燃やしたのはあなたでしょう？さっきの攻撃といい、爆発を防いだ時といい、ウチの責任にはされたくないわ」

仕切り直しという考えが分かったのか、はたまた単に色々と考える時間が欲しかったのか、距離を開けたエリカも軽く黒い外套を払ってみせるだけでその場からは動かない。今まで通りの口調でカーリアンの軽口にそう返すと、口元を歪めるだけの不器用な笑みを向ける。

「……ふーん、分かってんだ。さっきどうやってあんたの力を防いだか」

「舐めないで欲しいわね。その発火能力はあなた自身を傷付けないと言うのなら答えは一つでしょう。
さっきやったのは、高熱をごく身近な空間に生んで気流の壁を作る事により爆発による力を削いだ……で正解？」

「正解よ。ちなみにこの服は耐熱仕様なの。結構高いんだからね」

「痛い出費ね。御愁傷様」

「だからあんたが言うなっての！」

こんなやりとりをしながらも、カーリアンは目の前の女が自分より格上である事を認めていた。
自分にはまだ新米に毛が生えた程度の経験値しかなく、班長なんて役割をこなしてこれたのは、『紅』という強力な能力におんぶで抱っこしてもらってきたからだ。
それを認めて。
悔しさに歯を軋らせながらも認めて。
その上でもカーリアンは敗けを認めるつもりなどさらさらなかった。
そんな程度の事は敗けを覚悟しなければならない理由にはならない。シャクナゲもミヤビも目の前のエリカも、黒鉄として敗けの目しかない戦いをしてきたのだ。
今現在の黒鉄として――エリカが抜けてから入った新参者代表として、情けない真似だけは絶対に晒せない。
それにカーリアンにはまだ奥の手があった。
それは力の制御を訓練していて、その副産物として生まれた力の使い方で、カーリアンの師が最後の時に――敵の軍勢を前にたった一人残ったあの時に見せた『景色』がモトネタとなったものだ。

彼女がかつて見た景色。
それは『錬血』の生んだ『最後の剣界』の光景。
『終の剣界（ついのけんかい）』と呼んだ剣の姫最強の力。
それは視界一杯に生まれ、その数が百なのか千なのか、はたまた万を越えさらに上にいっているのかすらも分からない、圧倒的過ぎる数の剣が咲いた領域だった。
それを真似ようとして、ただそれに追い付こうとして生まれた粗悪品。
空間全てを剣で埋めてみせたあの力には到底及ばない。紅をそこまで広げられるほどの力はいまだに持てていない。
それでも色々と工夫して、制御力を地道に上げて、紅の特性をも利用し道具を使って『あの景色』に近付けた。
自分が班長として望まれている『力』を得る為の取って置き。まさしく紅のカーリアンが持つ唯一にして最大の必殺技だ。
でもその一手を打つ前に聞くべき事があった。
『彼』とよく似た女性。そして自分ともよく似た立場を匂わせる元コードフェンサー。
彼女が求めるものは自分にとっても無関係だとは思えなかったのだ。

「聞かないつもりだったんだけどさ、あんたが欲しいものがなんなのか聞いておいてもいい？」

「教えたら手に入れるのを手伝ってくれたりするのかしら？」

「冗談っ。あいつの抱えてるもんはあいつだけのもんよ。例えあんたがあいつの弟子かなんかだとしても、あいつが持ってる色々なもんはあいつだけのもんで、あたしがそれをどうこうする資格もするつもりもないわ」

こともなげにそう言うカーリアンに、エリカが軽く目を見張った。そして自嘲するように、でもどこか誇らしげな色も含んだ笑みを浮かべる。

「……気づいてたのね」

「そりゃ気付くわよ。あんたのスタイルはシャクナゲによく似てる。その格好も――黒い外套もあいつに似せてるんでしょ？」

「そうよ。ウチはあの人から全部を学んだ。あの人に黒鉄として鍛えられたの。といっても、シャクは手取り足取り教えてはくれなかったから、目で見て反復して覚え込んだだけなのだけどね」

――この外套もそう。スタイルそのものを真似たのよ。

そう小さく一人ごちるエリカが何を考えているのか、それはカーリアンにはさっぱり分からなかった。

だが、服装すら真似るなど並みの憧れではない事は分かる。女同士ならまだあり得るかもしれない。しかし、彼女は男女の差があってなおそうしたのだ。

思慕の念というだけでは足りないだろう。

恋愛感情というには偏りがある。

でもその思いの強さは、恋愛感情に決して劣るものではない。

才能もあったのだろうが、彼女はその思いを糧にあの『黒鉄のシャクナゲ』に迫る――彼を連想させるほどの戦闘技能者になったのだ。

錬血に憧れ、その背を必死に追っていずれは抜かしてやろうと思っているのに、一向にその背が見えてこないカーリアンからすれば、敗北感にも似た何かを感じてしまう。

「それだけじゃない。真っ向からじゃなくて搦め手を好む陰険さとか、能力には全然頼りきってないくせに、それを上手く使う戦闘の巧さとかはそっくりよ」

エリカは能力に頼りきってはいない。それは今までの事を鑑みても明らかだ。体術のみで紅から身をかわし続け、経験でもって戦場を支配した。

爆発に巻き込まれるまではわからなかったが、彼女は立ち位置こそ常に変わっているものの、戦場自体は別の地点には移していない。カーリアンの感覚的にはそれなりに動いたはずなのに、巧く動き回る事によってそれをカモフラージュしていたのだろう。

最初の位置――彼女が初めて爆破能力を見せた場所からは十メートルも離れていないぐらいなのだ。

つまりこの辺り一帯は、エリカが紅による攻撃をかわす為に走り回っていた場所なのである。攻撃をかわしながら、『時限爆弾』をしかけて仕留めにかかるには十分過ぎるほどの時間をかけられただろう。

しかし、彼女は最後に仕留める為にその能力を使っただけだ。それ以外の攻防は全て技術と戦術によるものでしかなく、最初の『爆破能力を見せ付ける事で両手にだけ注意をむけた時』も、それは単に戦術の一環でしかなかった。

その戦場の組み立て方は、間違いなくカーリアンが知る彼と同じものだった。

彼は能力を単なる技術の一環として扱い、それを要に置いた戦い方は絶対にしない。それが使えなくなったのなら、代替え案でこなしてみせる。能力を使わずとも戦い抜いてみせる。

そんな変種はほとんどいない。それは当たり前だろう。

持って生まれた能力を使い、その能力頼みな戦い方を好むのは、手にした力を使わずにはいられない人間の性だ。

また、強力なものであれば兵器の力を優に超える力を、戦闘の中核に置く事が間違いであるはずもない。

彼の『無限の弾丸を放つ能力』とて決して捨てたものではなく、それを中心に据えた戦い方も出来るはずなのに、それでも彼は能力を絶対視しないのだ。

だから彼は銃手（ガンスリンガー）とも狙撃手（スナイパー）とも呼ばれない。そんな呼ばれ方は絶対にされないし、カーリアン自身も彼にそんな印象を持った事がない。

能力は単なるパーツ。戦術を組み立てる歯車。

使えるなら一番効率的な場所で使い、無駄な事に使う真似はしない。

それが黒鉄最強の戦士たる彼の見慣れたスタンスであり、それをカーリアンが見間違えるはずがない。

「ふふっ。身につけたスキルはなかなか錆びないものね。外套の方はすでにボロボロで見る影もないというのに。

それでも捨てられないのだから、ウチの諦めの悪さも筋金入りだと思うわ」

――笑えない。

エリカの自嘲を含んだ言葉にそう思った。少なくともカーリアンには彼女の諦めの悪さは笑えなかった。

そして、やはり自分は……追いかける側である自分は、彼女が求めるものについて聞く必要があるとも。

「……あなたが欲しいものは何？これは興味本意の質問じゃないわ。教えてよ」

「そう、あなたも追い付けない背中を追っているのね。なら教えてあげる」

それがエリカにも分かったのだろう。特に悩む素振りもなくあっさりと答えを返す。

表情から自嘲する色は消えなかったが、迷いのない様子でしっかりと見据えて、カーリアンの瞳を射竦めたのだ。

「ウチが欲しいものはね、『あの人の後継者の証』。今は亡き『宵闇の名前』よ」

そう言った言葉には迷いがなかった。そう、言葉には一切の迷いの迷いが含まれていなかったのに、エリカはどこか空々しい笑みを浮かべていた。

矛盾じみたものを感じさせる表情と感情のせめぎあい。

それがエリカという人間が抱えてきた今までの葛藤を現しているように思えて、カーリアンは思わず息を呑む。

「あなたには分からないかもね。その名前が持つ意味が。

でもウチにはね、その意味が絶対に必要なの。

そして黒鉄という呼び名に引き継がれたその名前の意味……それは黒鉄のシャクナゲを打ち倒さなければきっと取り戻せないものよ」

「そんなものの為に――」

「そんなもの、ね。確かにその通りよ」

思わず洩れたカーリアンの言葉にもエリカは苦笑を返して、惚けた表情をしたカーリアンにあっさりと同意してみせる。

「でもウチには大事なものなの。それが薄汚い暗殺者に対する蔑称でも構わない。ウチはその名前を持った人間に憧れた。救われた。その結果『私という人間はそのつまらないものを』全てをかけて追いかけた。つまりはそれだけの話よ」

閃光を冠された女。
冠されてしまった女。
彼女はやはりカーリアンに似ていた。
似ているのに、それでも絶対的に違う位置に立っていた。

「ウチはかつて見た光（彼）になりたい。彼のようになって、そこから見える景色が見てみたい」

ここまでの言葉で終わったのなら、カーリアンの感じた親近感はかなり高い位置で留まっただろう
エリカは彼の全てに憧れた。それはカーリアンにも分かったからだ。
カーリアンは彼に憧れて、その相棒である少女に憧れた。師である少女がいなくなった今でも、その気持ちに揺るぎがない。
しかし、エリカの言葉はここでは終わらない。
エリカという人間は、カーリアンほど純粋にはなれず、目指すものの位置をよりしっかりと把握していて――その遠さを客観的に見る事が出来て、その違いは大きな壁となっていたのだ。

「でもね、ウチじゃ彼の全てにはなれない事も知っているわ。ウチには彼やアカツキみたいな人を惹き付ける天性の魅力がない事を知っている」

そんな追い付けない部分を知って。

客観的にそれを口にしてみせても、エリカは笑ってみせる。
笑って自らが目指すものに届かない事実を認めてみせる。

「本当は彼みたいな絶望に沈んだ人を救える人間になりたかった。
なれるものなら彼みたいな仲間達の英雄にもなってみたかった。
でもそうはなれない事をウチは知っている。知っていて、それでもがむしゃらになって全てを求める強さがない事も知っている。
ならば『彼の中でも暗部となる宵闇にぐらいはなってみせる』。
それはウチが彼の持つ要素の中でも目指せる唯一無二のものだから」

そう笑いながら、彼の中で一番暗い部分だけを目指していると言ってみせて、それにだけは追い付けると言ってみせたのだ。
一点だけ。たった一点、黒鉄のシャクナゲを構成する要素の中でも、『最強の暗殺者』として知られる『宵闇』にだけはなれると言ったのである。
それは『彼の全てを追いかける』などという中途半端なものより、ずっと重い言葉である事は間違いない。
目指すものを諦めない為には強さが必要だ。前を見続ける為にも強さは必要だろう。
だが、それを諦める強さ。歯を噛み締めながらも諦めてみせて、別のものに向かうには一体どれほどの強さが必要だろうか。

「ウチは最強の暗殺者だった彼を知っている。あなたの知らないであろう彼を知っている。
あなたでは……錬血の後継に過ぎないあなたでは、黒鉄史上最強最悪のコードフェンサー『宵闇』を目指すウチには勝てない」

諦めて、諦めて、それでも諦めきらなかった者。
それが宵闇の唯一無二の後継、閃光のエリカ。
諦めず、諦めず、全てを諦めないつもりでいる者。

それが錬血の後継の一人、紅のカーリアン。
彼女達はたとえ出会う場所が違っていても、争いあうさだめにあったかもしれない。
彼女達はどちらも純粋でありながら、根幹では対極に位置する二人だ。蒼のオリヒメとカーリアン程度の差異ではなく、ぶつかり合いは避けられぬ違いがある。
だからエリカの最後の言葉を受けて……カーリアンはただそっと腕を構えた。

「勝てないかどうか試してみれば？雅組（ミヤビの弟子達）の諦めの悪さは、今の黒鉄ではピカ一だって事を教えてあげる」

この大馬鹿者には言いたい事が山ほどある。山よりもある。
でもそれは、まずはもう一発ぶん殴ってからにしよう。そう考えたのだ。

きっとここに自らの師が――あのお節介な少女がいたら、間違いなく一発では済まさないほどに小突き回していただろうから。

2―44・Erika（後書き）

題名は適当っぽいですが、当初から書いてあったように、エリカの目的が書かれた話なのでこの題名としました。

自分は憧れた人にはなれない事を知っている。
どれだけ求めてもその境地に立てない事をしている。
足りないものがあって、必要不可欠な要素が不足していて、それをなまじ冷静に頭が回るからこそ理解している。
自分では彼と同じ存在にはなれない。全てを模倣しても彼にはなれない。
でも、その一部……暗く陰惨な一部だけなら真似ができる。おそらくは自分だけがそうできる。
エリカはそういった考えを持って、シャクナゲではなく『宵闇』の名前で知られる存在になろうとしているのです。
その辺りが書けてるかどうか。

ちなみに『エリカ』とはこれも植物の名前から。
花言葉は『孤独』『裏切り』『博愛』。
この内、『孤独』の部分がエリカを作っています。
ちなみにシャクナゲは今までの本文にもあったように『威厳』。
他のメンバーの花言葉も参考にしてみると面白いかも。

――俺はね、理想なんか追っちゃいけなかったんだ。それを許されるのは、ほんの一握りの時代に生まれた僅かな人間だけだって事を分かってなかったんだ。あんな時代……しかも俺みたいな弱いヤツには、そんな資格なんてなかったんだって事を理解するべきだったんだよ。

「あんたがさ、あいつに憧れた気持ちは分かるよ。あたしもそうだったからさ」

あちこちで起こる発破音。それに追いたてられながらも、天性の直感と紅による自動防御でなんとか直撃をかわしつつカーリアンは口を開いた。

あの光都からの帰り道。隠していた事を話してくれたあの時。そんな時でも彼は笑っていた。自嘲と自虐と悔恨を滲ませながらも、彼は浅はかな己を笑うかのように笑っていたのだ。

話を聞いていたカーリアンが、悲しみからか怒りからか、それとも別の何かによるものなのか涙が浮かんで止まらなかったというのに、彼は笑って『なんでお前が泣くんだよ』なんて言ってみせたぐらいだ。

――あんたがヘラヘラ笑ってるから代わりに泣いてやってんのよ。

そう言ってやりたかったけれど……あんたは泣いてもいいんだよとそう言ってやりたかったけれど、そんな事を彼女が言えるはずもない。

彼女は奪われた側で、彼は間接的ながらも奪った側だ。奪われた側の彼女から泣いてもいいなどと諭されたならば、彼はきっと弱みを見せている自分を抑えつけるだろう。

あの男は何者にも屈しない信念を持つ誇り高い人間でも、過去を顧みず憐れみを乞うような下劣な人間でもなかったが、被害者である彼女に卑屈な態度は見せない程度の意地は持っている。そして涙で過去を濁さない程度の覚悟も持っているだろう。

彼が変に意地っ張りで、強がりな性格をしている事をカーリアンはよく知っていた。

だからこそ言えなかった。だからこそ赦しは口に出来なかった。

それをする資格は、きっとカーリアンにもなかっただろう。彼を断罪出来るのも、赦しを与えられるのも、彼の間違いで命を散らした者達だけの特権だ。

手を血の赤で真っ赤に染めたカーリアンは、すでにそんな資格を放棄している。

……でももし叶うのならば、彼に赦しを与えたかった。

彼の中に勝手な理想を見ていた自分にはそんな資格などないと分かっていても、過去を背負って喘いでいる男にほんの僅かな救いでも与えてやりたかった。

彼は正義の味方はおろか、ただの人間としてさえも存在出来なかった。それを時代に、仲間達に許されなかった人間だ。

そんな自分を覆そうとして足掻いて、過去に絡まれながらもただ

足掻き続けてきただけで、それがドン底に沈んだ他人から見れば―
―その足掻きに救われた人間から見れば綺麗に見えただけでしかない。腐った時代には尊く見えたに過ぎないのだろう。
今のカーリアンにはそれがよく分かった。
そして目の前の女には、それがいまだに見えていないのだろうという事も。

「あなたもあの人に手を差しのべられたらしいものね」

カーリアンもそんな彼に救われた人間で、勝手に理想を押し付けた人間だ。
彼女もそんな彼を追いかけた一人だった。
だからエリカが追いかけた背中が、救われた人間にとってどれほど大きく見える事か、それはカーリアンにもわかっている。
彼は誰からも頼りにされ、必要とされている英雄だった。街を守る正義の味方だった。
自らの存在価値を見失ったものからすれば、その在り方は眩しすぎる。憧れても仕方のないものだろう。
エリカはその意味でもカーリアンとよく似ていた。共に追いかける側の人間で、『他人に理想を見て、理想を押し付けた人間』だ。
『迎えにきたよ』。
あの言葉に救われて彼女は今の場所にいる。
仲間がいて、友人がいて、妹分がいて……そして好きな人がいる場所に立てている。
エリカもきっと、その言葉に代わるものを胸に抱いているのだろう。

――でも。

バンっ！

軽い音と共に弾ける礫を紅の熱気で燃やす。それに紛れて空から降ってくる小石（爆弾）をかわしざま、熱線をエリカに向けて放つもそれはあっさりとかわされた。

まるでそこに攻撃が来る事を読んでいたかのように――そこにカーリアンの攻撃を誘導したかのようにあっさりと。

押されているのは分かっていた。分かりきってしまうほどに押されていた。

エリカは早い。エリカは正確だ。エリカはその経験と知恵で戦場を支配している。闇に包まれた戦場を駆ける黒き閃光は、まさに『宵闇』という闇を抱く名前に相応しい強さだ。

でも負けられない。

より強くそう思う。

カーリアンはエリカにだけは負けるわけにはいかないのだ。エリカに共感を覚えていても、彼女にだけは負けられない理由があったのである。

そう、カーリアンはすでに『エリカ（そこ）』から歩き始めている。恐る恐るながらも、手探りで先へと歩を進めている。

ならば負けるわけにはいかないではないか。

過去で止まったまま他人に理想を押し付けて、その理想が築いたものを戴こうとする女などに負けては、『最強の相棒』で最強の女性だった師を超える事など出来るはずがない。

「言っておくけど、今のあたしとあんたじゃ違うわ。決定的に違う。今のあたしはね、あいつの後ろを歩くつもりなんかサラサラないの。

――意地でも真横を歩いてやるって決めてんのよ！」

――ミヤビなら正義の味方にもなれただろうさ。スズカなら英雄にもなれただろうし人々の救いにもなれたんだろう。だけど、俺に

は……俺だけはそんな存在にはなれないんだ。
なっちゃいけなかったんだよ。

彼の後継を自称する彼女は、彼の暗い部分を受け継ぐとそういった。それを継ぐ覚悟があるように見えた。
ならば何故彼女は、彼の弱さと葛藤を受け継いでいない？
何故彼の強さの原因にもなっていて、でも『最も暗い部分』たるそこを引き継がない？守る為に誰かを殺す矛盾に苦悩する弱さを持たない？
それもカーリアンには我慢がならない。
エリカは暗くとも黒き光を放つ『宵闇』という部分を引き継ごうとしているだけだ。盗賊どもに悪魔のように恐れられ、強者達にもまるで死神のごとく怖がられた『宵闇』という過去を引きずっているだけだとしか思えないのである。
もしそれを望んでいると――暗き光を放つ部分を望んでいるとはっきり自覚していたのならばまだ許せた。そうはっきりと口にしたのならば、共感は理解に変わっていただろう。
強者である彼に憧れたと言葉にしたならば、だ。

でも彼女は、『彼の一番暗い部分を受け継ぐ』という言葉で自分を誤魔化した。
彼の全てを学んだというのなら、その弱さにも気づいていないはずがないのに、エリカはカーリアンが最初に惹かれたその部分を無視して、『名高き宵闇』を『一番暗い部分』と位置付けたのだ。
神杜の守護者（ヒーロー）にして街の英雄たる名前と、そこに付随する役割を一番深い闇だと言った。
それがカーリアンには許せない。
彼を正義とし、憧れの対象としながら、その彼が持つ人間くささをないがしろにした言葉は、そこに惹かれたカーリアンには決して

無視出来ないものだったのだ。
だからカーリアンはエリカを否定する。
力の限り、声を枯らして否定してみせる。

「あいつはね、英雄とか正義の味方（ヒーロー）とか、そんなワケのわかんないものじゃないよ。
だってあいつはさ、戦いの後はいつも悲しそうにしてる。迷って迷って迷い続けて、それでもそれしか出来ないから戦ってる。
あいつは勝った後に勝鬨を上げて、『正義は勝つ』なんて陳腐な事を絶対に言わないわ。そんな言い訳は使わない。『どんな理由があっても人殺しは最悪だ』って顔をして、今にも死んでしまうんじゃないかって暗い顔してんのよ。あんたもそれを知っているんでしょうが！
そんな後ろ向きなヤツが英雄なんてヤツであるもんかっ！」

「違うっ！あの人はヒーローだった！間違いなくそうだった！ウチはあの人に助けられた、スズカもそうだったし、あなたもそうだったんでしょう！？街もあの人に何度も救われたっ！今の神杜があるのは彼のおかげに他ならない！なら、あの人が英雄でないはずがないっ！」

「違うよ。あいつは英雄なんかじゃない。あいつは正義の味方なんかじゃないっ。あいつは単に『仲間達の味方』で――苦しんでもがいているヤツを放っておけないだけのお節介よっ！」

淡々と戦場を組み立て、的確にカーリアンを追い詰めていきながらも、思わず声を荒げて否定を返すエリカに重ねて否定を告げる。
彼は『正義の味方』なんてものじゃないと告げる。
彼は戦いに思想をいれない。正義を語らなければ、理想も語らない。それどころか自分の我が儘を戦う理由にいれて、生の感情を殺

し合いにいれるようなドロ臭い男なのだ。
支配されたくないから戦って、仲間を傷付けたくないから敵を倒す。居場所を失わない為に銃を手にして、その手を血に染める。
ただそれだけで、それだけだからこそ自らの手で生みだした犠牲を悲しんで、せめて味方だけでも犠牲を出さないように強くあり続ける。心が軋むほどに辛くても自らを強く見せる。

そして――そして、敵でなければついその手を差しのべてしまうのだ。
放っておいても構わないような『死にたがり（狂犬）』や『京の変種殺し（復讐者）』にも、手を差しのべてしまうような甘さが顔を出すのである。

そんな事すら彼だけを追い掛けた彼女は忘れてしまったのか。
忘れたふりをして、勝手な理想を重ねたのか。その背中（幻）を追ってきたのか。
あの男が本当に正義の味方で、英雄のような非ののうち所がない存在なら――そんな人間だったのなら、彼と共に戦って死んでしまった人間はどうなる。
彼らも正義なんて立場によって変わるものの為に死んだとエリカはいうのか？
理想なんてあやふやな言葉をよりどころに命を落としたエリカ（仲間だった彼女）がいうのか？

――ふざけるな！

カーリアンの感情に従い紅が猛る。
熱線が猛火をあげ、紅き熱風が地を舐める。

脳裏には、生徒達を逃がす為に一人剣の世界に残った女性が浮か

んだ。

似合わない儚さを持った笑みを背中越しに浮かべ、一人死地に残ったその女性は、カーリアンや他の生徒達の為に戦ったのだ。

正義や理想の為だったのなら……その為の戦力を考えたのなら、彼女こそが生き残るべきだった場面だ。

今後の事を考えるのなら――多くの仲間達や街の人間達の考えを優先したならば、問題児や戦力的に劣る者達なんかより、彼女一人が生き残った方がずっと有益だったはずだ。

彼女はあの男の唯一の相棒で、黒鉄という組織の中核で、生徒達の全員よりもずっと強かったのだから。ずっと強くて、ずっと大きくて、ずっと暖かで、一年経った今でも全然敵わないとカーリアンが思うような女性だったのだから。

それでも彼女はただの人間として、師として、姉として、仲間として、そして未熟者達を守る母として、正義や理想をそっちのけにし、先の事や打算などを捨てて自らの命を賭した。全てを賭けた。

いかに大軍を向こうに回しても、彼女一人だったならば切り抜けられただろう。それが名高き彼女一人を狙った狡猾な罠であったとしても、『剣匠』とも『剣の姫』とも呼ばれたあの黒鉄なら、その罠ごと斬り払って逃げ延びられなかったはずがない。

でもそうしなかったのは、彼女が英雄でも正義の味方でもなく、理想にすがった者でもないただの人間だったからだ。

恐怖もあっただろう。困惑もあったはずだ。

弱みが顔を出して誘惑もしたと思う。

自分だけなら逃げられるという考えが浮かばなかったはずがない。

しかし彼女は自分一人でそれらをはねのけて、自分だけでそう決めて、笑って一人死地に立ったのだ。

決して自らの力を過信しての事ではない。

『後は頼んだから』

そんならしくない言葉を残したのは、自らの最期を予見していた

からに他ならない。それでも彼女は全てから逃げ出さなかった。どこまでも彼女らしく最期まで全力で走り抜けた。

――そんな最期が、あの在り方が、正義や理想の為だったなどとは絶対に言わせない。そんなものがあの場面に入る余地など欠片もない。

「勝手にあいつを『正義』なんて、ワケの分からないものの味方にするな。

あいつを『英雄』なんて名前で括って、自分の理想を押し付けんな」

――俺は仲間達しか守れない、自分の周りだけしか見れない、でも仲間達は絶対に守れて、自分の周りだけはしっかりと見る事ができる……そんな人間になりたいんだ。そうすればきっと、もう二度と一番大事なものを失わなくて済むから。

そんなものとして彼は仲間達の為に戦ったわけじゃない。そんなものになりたくて救ってくれたわけじゃない。

エリカは単に自分が憧れたものをより大きなものとして認識したいだけなのだろう。弱い部分を見ないふりし、自分が憧れたものを立派なものにして――例え悪名であれ大きな壁としてある事を望んでいるだけだと思う。

そこにたどり着けない自分と、それを追い続ける自分。その狭間の葛藤に答えを出すには、理想（シャクナゲ）がより大きな存在としてあってくれればいい。弱さなど一片も持たない存在であればいい。

そうすれば追い掛け続けてきた自分も、諦めようとした自分も納得出来る。

今も諦めきれていなかった自分にもだ。

「だったら――だったらっ！ウチの憧れはどこに向かえばいいのっ！？あんな惨めな想いをして、悲しい想いに潰されそうな時に救われたウチは、何を目指せば良かったのよっ！」

「知らないわよ。なんでも目指せばいいし、好きな方向に歩いていけばいいじゃない。あいつみたいになりたいなら構わないと思う。でもあんたは『あいつにはなれない』。絶対になれないの。

それにね、あいつは格好付けだけど、いい格好をしたくてあんたを助けたんじゃないよ？あんたを縛りつけたくてあんたに手を差し伸べたワケじゃないの」

認められないのか、はたまた分かっていた事を告げられて、言葉を上げるしか出来なかったのか。

エリカの周囲から、その叫びに合わせて空気が破裂するような音が響く。

それでもカーリアンは、結局は追い詰められた先――木々と岩に囲まれた袋小路のような場所で静かに言葉を返した。

もう一発ぶん殴ってやりたくても、それが叶わない自らの未熟に嘆息を漏らしながら。

それでも負けない為に、今もなんとか腰にぶら下がっているポシェットから、彼女が持つ唯一の得物を取り出した。

「……お願いだからさ。あいつに助けられた事を理由にして前に歩けないなんて、そんな悲しい事は言わないでよ。あいつはあたしを助けてくれた。先へと続く道をくれた。あんたもそうだったんでしょ？

そんなあいつをさ、夢中であいつを目指したあんたが汚さないでやってよ」

それは長さ十センチほどの『針金』。なんの加工もされていないただの針金だ。

単に整備班たる五班に切り分けてもらった堅く耐熱性が高い金属棒。

それこそが、カーリアンの『剣』だった。

それこそが今のカーリアンが『剣の姫』に追いつく為には必要なものだったのだ。

それを両手の指に挟み、軽く力を籠める。感情を籠める。

「あんたじゃあたしには勝てない。閃光のエリカは紅のカーリアンよりずっと強いんだろうけど……エリカ、今のあんたじゃあたしには勝てるはずがない」

その針金へとカーリアンの身体から迸る『紅』が収縮し、圧縮して――それらは赤く燃える炎の剣へと変貌した。

真っ赤にたぎる紅の刃と化した。

それを片手に四つ、両手で八本、それぞれ指の間に握りしめる。

「――これでケリよ。

見せてあげる。錬血の後継であるあたしが造り出した、あたしだけの紅き世界を。

本物（錬血）を超える為に鍛えてきた、紅（カーリアン）が彩る『赤の境界』をっ！」

2―46・The Free―shooter

それは彼女が経験したものの中でも最悪の戦場だった。

辺り一面怪我人ばかりが転がり、無傷なものなど一人としていない。片腕がまるまる欠けたものがいれば、耳や目を失ったものもいる。もはや命が消えるのを待つだけの人間も少なくはない。

まさしく最悪で……そして最低の戦場だった。

一度はなんとか敵を撃退したものの、圧倒的な物量差を生かした消耗戦を仕掛けるつもりならば、次の襲撃はもはや時間の問題だろう。

そんな中で、皆が皆暗い雰囲気で最後の時を待っていたのだ。

一度は敵を打ち破り、勝利を得たはずなのに、戦勝ムードなど欠片もないまま重苦しい空気が仲間達を覆っていた。暗い先行きに対する気持ちの澱みは、いつ暴発するか分からない不安定さで緊張感を辺りに満たす。

もはや最後の時が間近である事は疑いようがなく、その場には紛れもなく濃厚な死の臭いが漂っていた。

ここにいる仲間達はみんな殺され、黒鉄は関西軍に敗れる事になるだろう。それがエリカには分かった。戦術眼などなくともその結果が分かる圧倒的な数の違いは、もはや笑うしかないほどに絶望的な差だったのだから。

それでも……それでも彼女には諦めきれないものがあった。諦めたくないものがあったのだ。

この部隊の指揮官にして彼女の師である男が、こんな場所で死ぬ事だけは許せなかったのである。

彼がいたからこの部隊はまだ部隊として機能していた。彼がいたからこそ全滅だけは避けられた。

彼がまだ生きているからこそ、仲間達は絶望に押し潰される事なく部隊の形を保てていた。

今の状況でも死の恐怖に負ける事なく、黒鉄の戦士として存在しえていたのだ。

そして一番危険で一番重要な場所を任されるこの『黒狗隊』がなんとか生き残ったという事は、そのまま街にいる仲間達の首を、例え皮一枚であろうと繋げているという事実に繋がる。

この場所さえ陥落しなければ街は無事だろう。この場所は街の入り口で正面玄関に近い場所だ。ここを落とされない限り、大部隊は街の中心には近づけない。下手に近づけば後方を切り取られ、挟み撃ちにされてしまうからだ。

何より後方に『宵闇』と『錬血』という黒鉄が誇る二枚看板を残して街に深入りなど、敵方からすれば恐ろしくて出来るはずもない。

……彼さえ生きていれば、あの街は今後も無事でいられるに違いない。

その考えは戦術と戦場を冷静に見た結果ではなかったかもしれない。エリカの希望とちょっとした感情によるものに過ぎず、冷静で理論的であるべき戦術家としては落第物の考えだったに違いない。

それでもエリカにとってその考えは絶対だった。

何者に対する信仰や、どんな方程式の上に立てられた立派な理論よりも絶対だった。

だから彼女は言ったのだ。彼女自身も片腕の骨を折られ、重傷者の一人だったからこそ言ったのである。

『あなた達だけでもこの場所を離れてくれ』と。

『もう動けない怪我人達だけでこの場を守る壁となるから』と。

そして『足手まといにだけは死んでもなりたくない』とも。

その言葉の全てが、その場にいた仲間達――特に怪我をして、足手まといとなりうるメンバー全員の意思を代弁したものだった。

そこにいる誰であれ、今の時代に……世界に抗ったという意地がある。プライドがある。

彼の足を引っ張り、その結果として仲間達の足をも引っ張り、さらには街の人々を自分達が足手纏いとなったせいで危機にさらすなど、『黒鉄』を名乗り、宵闇のシャクナゲと呼ばれる男の部隊にいた者として我慢出来る事ではない。

今まで黒鉄最精鋭の部隊だの神杜を守る最後の盾だのと呼ばれてきた自負を、最後の最後で裏切れはしない。それは今まで歯を食いしばって戦ってきた生き様に、最後の最後で拭いきれない汚濁を落とすに等しい。

例え死ぬとしても……いや、絶対に死は避けられそうにないからこそ、最後に汚点を残すような真似などしたくはない。希望ぐらいは後に残したい。

それは人間として当たり前の考えであっただろう。

だから彼女は皆を代表してそう言った。

この部隊の指揮官である男と、その相棒であり副官格でもある女に、自分達に死に花を咲かさせてくれと。

いまだ生き残っている仲間達の為にも勇気ある死を選択させてくれと。

でもその男はあっさりと拒否してみせた。

そしてその隣の女までも肩を竦めるだけで何も言わなかったのだ。

――おいおい、お前らだけカッコ付けて俺達には尻尾を巻いて逃げろってのか？俺にももうちょっと見せ場ぐらいくれよ。

なんておどけてみせて、チラッと隣の副官を見やる。

――まっ、こいつにだけ下がれったって下がるワケないっしょ。底無しのバカちんなんだからさ。

副官であり相棒である彼女は男の視線にそうあっさりと返すと、エリカを見つめてニッと笑う。

『こいつを下がらせたいならアンタが言い負かしてみせなさい』

そんな言葉が見て取れる笑みだ。

男が拒否しても――その性格を考えたならまず拒否するだろうが、彼女は同意してくれるのではないか……そんな風に考えていたエリカは、その笑みにグッと言葉に詰まった。

そしてエリカが口をつぐんだ隙に、その男は信じられない真似をしたのだ。

――それに怪我人は足手まといになるから……だっけか？ならこれで俺も足手まといとなりうる怪我人の仲間入りだな。

そう言って、彼は自らの武器である銃でその二の腕を撃ち抜いてみせたのだ。

思わず呆気に取られるエリカと、軽く天を仰いでから彼を小突く少女。

そして茫然とする仲間達に彼は言った。腕を自ら撃ち抜いて……二丁の銃を操る事が出来なくなった怪我人となった上で、それでも笑って彼は言ったのだ。

――ここで仲間達の為に死ね、なんてくそったれな命令をするぐ

らいなら、ここで俺と一緒に死んでくれって言う方がまだマシだ。

そう言って、その男は不敵で凄惨な笑みを浮かべてみせる。

――お前らが絶対にここで死ぬつもりだってんならさ、その命、俺にくれよ。それは俺には必要なもんなんだ。だからここで落とすはずだった命は俺にくれ。

そう区切って、皆を見渡してから胸を張るようにして彼は続けた。恥ずかしげもなく言ってのけた。

――分かってないかもしれないから言っておくけどな、お前らが死んじゃったら俺は絶対泣いちゃうぜ？もう戦えなくなっちまうどころか、立てなくなっちまうぜ？

その言葉に、めちゃくちゃな行動にエリカは呑まれた。

そして彼はまさしくリーダーの器だと思った。

打算はなく、演出でもなく、計算をしてそうしたワケではないだろう。

それでも彼は仲間達を『笑わせてみせた』のだ。

――あんたってホントにバカよね。でもこんなバカちんを一人になんて出来ない。そうでしょ、あんた達。

その男の相棒がそう口にした時、皆が皆頷いてみせた。エリカも自然な流れで、でも真剣に頷いていた。そこに先程までの悲壮感はどこにもない。

命の危機が間近にあり、いつ死神の鎌が降り下ろされるか分からない状況は変わっていない。そんな状況下で、他人を笑わせる事が出来る人間などどれほどいるだろう。

ましてや彼は、冗談を口にして仲間達を笑わせたワケではないのだ。
本音としか思えない言葉を口にして、信じられない馬鹿げた事をしただけなのに仲間達を笑わせた。
そして今までいかに死ぬかを考えていた人々に『絶対死ねない』と思わせた。死にたくないと思わせた。
相棒が乗っかって話を持っていった事は事実でも、彼がいなければ――彼が言った言葉がなければ、誰も前向きにはなれなかっただろう。

その時の事をエリカは今でもはっきりと覚えている。もう三年近く前の事なのに、その時の空気や匂いまで覚えている。
きっと一生忘れられないほどにしっかりと記憶に刻まれている。
……何故なら、その時こそが自分は彼の全てを受け継げないのだ、と理解した時だったのだから。

カーリアンの手で光る赤は闇を染め、黒を塗り潰す。
剣と呼ぶには拙い、短き刃の群れ。それはどこから見ても『錬血の剣』には見えないだろう。
だが、それは確かに粗悪で本物には到底至らないものではあったが、必死に本物に至ろうとする偽者だけが持つ輝きを放っていた。
そしてカーリアンが望んだ対象にだけ着火する紅を、針金を支点

として留めただけのそれは、確かに彼女だけの剣だと言える。針金には熱を通さず、それに触れたものだけに力を発揮する炎など彼女でなければ現せないものだ。

「そんな力があなたの奥の手だというの？」

しかし、その紅の剣が戦闘に役立つ力を持つかどうかは別の話だ。正直な話、一瞬面食らいはしたものの、到底脅威になりうるだけの力だとはエリカには思えない。例えその紅の剣が死を避けられない強大な力を持っていたとしても、食らわなければいいだけの話だ。彼女からすれば周囲一帯に無差別に力をばらまかれる方がよほど脅威であり、そんな風に一点に力を留めるなど力を制限しているだけとしか思えないのである。

「そうね。これを剣として扱って肉弾戦をするのならあたしに勝ち目はないでしょうね。でもこれは剣として使うワケじゃないの。これはね……こんな風に使うのよっ！」

しかしカーリアンは不敵な笑みを洩らして、両手に握ったそれを投げる。

エリカに向けて投げたワケではない。ただ無造作に投げただけとしか見えないのに、それらは四方八方に散った後、真っ直ぐにエリカに向かって走る。

しかしその程度は予測の範囲内だ。だからエリカはあっさりとかわしてみせようとして……かわそうとしたそれらから、『新たな紅の光』が迸る事まではさすがに予想が出来なかった。

炎を撒き散らしたワケではない。その刃に籠められた紅が避けたエリカを追うように宙に線が瞬いたのだ。

ただ炎を撒き散らすよりも的確に、避けたエリカをピンポイントで狙う力が放たれたのである。

「……魔弾タスラム。『これ』を知ってるあたしの『妹』はそう名付けたわ。
残念ながらあたしには剣を使う才能がないっぽいからね。剣の形はしていても使い方は錬血のそれとは違うの。これはそれ自体が媒介になり、敵を追尾して紅の魔弾を放つ『自走式の砲台』のようなものなのよ」

シュンシュンと音を立て、夜闇を切り裂く八対の魔弾はよく見ればごく細い赤い線でカーリアンと繋がっていた。
まさしく有線式で『自走式の砲台』だ。
ただしそこから放たれるものは、弾丸よりもたちの悪い煉獄の炎だ。
その砲台――魔弾の軌跡が辺り一帯を紅に染める。それらはまさしくカーリアンの色を辺りに広げていたのだ。
あの剣の園には及ばない。辺り一面に紅を放ち制御するだけの力は自分にはまだない。
ならばどうするか。カーリアンの出した答えがこの魔弾だった。
紅を放つ支点を自分以外にも作る事。それによって攻撃の手を増やし、剣の姫が使った剣の数に迫る事。
最初は一本の魔弾から始め、時間をかけて二本に増やした。制御を失って廃都の郊外を焼原に変えた事もある。初めの頃は訓練用の服がしょっちゅう炭になり、やがては服がなくなってしまうんじゃないかと恐怖した。
そうやって訓練を続け、今ではなんとか八本……剣の姫が扱った数の何百分の一をなんとか制御しきれるようになったのだ。

「タスラム……確かケルト神話のルー神が使った邪眼殺しの飛礫、だったかしらね？」

「そんな由来のある名前なんだ？聞いた事ないわね」

神話になんてまるっきり興味ないと言わんばかりのカーリアンに、エリカはくくっと小さく笑いを洩らす。

邪眼のバロール。ダーナ神属の王たるこの魔神を殺したのは、その孫であり光の神と言われているルーが持つ『ブリューナクの槍』だったとも、この『魔弾タスラム』だったとも言われている。

そしてこの魔弾の別名は『太陽弾』。つまりは炎の魔弾だ。そういった経緯から名付けられたものであろうに、当のカーリアン自身がその名前におざなりな事が可笑しかったのだ。

「さしずめあなたは魔弾の射手……Ｄｅｒ　Ｆｒｅｉｓｃｈｕｔｚと言ったところかしら。ウェーバーよ。知ってる？」

「それも知らないわね」

スッとその剣先、あるいは砲口を向ける魔弾にもエリカは不敵に笑ってみせる。避け損ねて、ぼろぼろになった外套に黒く穴を開けられたというのに、そのスタイルにはなんの変わりも見られない。

「カール・マリア・フォン・ウェーバー。ドイツオペラよ。ならこれも知らないわね。魔弾の射手はね、たった一発を除いて放った弾丸の全てを望んだ的に当てられるの。でもその残り一発は悪魔が望んだものに絶対に命中する。さて、この場合その悪魔は一体誰にその必中を約束された魔弾を放つのかしら？」

――ウチかしら？それとも魔弾を奥の手まで取っておいた……取っておかざるを得なかった射手たるあなた自身？

そんな無言の問いかけを見て、その意味を理解してもカーリアンは一笑に附した。

「確かにあたしはまだこの子達を使う事に不安があるわよ？……でも、悪魔？あんたが悪魔なんて言葉を使うの？
はん、忘れちゃったっていうのならあんたにはこの言葉を贈ってあげる」

それどころかエリカに、何故か不敵に笑みを返して。
むしろその台詞を待っていたと言わんばかりの勢いで言葉を続けた。

「この世界に神なんかいない。悪魔もいない。いるのは人間だけ、ここにはあたしとあんただけよ」

そう言って『一回この台詞を言ってみたくてたまらなかった』という色をありありと浮かべたカーリアンに、エリカは思わず呆気に取られて……そして次の瞬間には爆笑した。

「あはっ、あはははははっ！そうね、まさしく、まさしくその通りね。これは一本取られたわ。彼の後継を名乗りたいと言った側から『悪魔』だなんてちゃんちゃら可笑しいわね」

「そうよ、あんたはやっぱりあいつにはなれない。あいつは死んでも『悪魔』がどうとか『神』がどうとかなんて口にしないわ。そんなものはどこにもいないんだ、なんて罰当たりな事を言ってのけるだけ」

「……そうね」

「あたしもね、ミヤビにはなれない、彼女そのものには絶対になれないんだって事を知らなかった。気付かないフリをしてたわ。
でも今は違う。『剣匠にはなれなくても、彼女を超える事なら出来るんだ』ってそう信じてる」

カーリアンの言葉にも頷いて。
否定を返す事なく頷いてみせて。

「でも決着は着けないと、ね？ウチにも彼を目指したという自負があるもの。それだけは曲げられない。だから――」

――あなたの手でウチを止めてみせなさい。

その言葉を最後にエリカは再び戦場を駆ける。黒き閃光たるその身を宵闇に染めて。
対するカーリアンは八つの剣を舞わせ、その進行方向を塞ぐかのようにタスラムを飛ばすと、自らは距離を取るべくギリギリまで後方に下がった。
深く底の見えない木々の群れと大地から突き出た岩に囲まれた場所の隅。そこまで下がり、魔弾達に戦場を託す事にしたのだ。
本来ならば彼女自身も前線に出て戦うスタイルを取る。紅を自らの手で直接相手の体に叩きこむ方が無駄に力を使わなくて済むし、何より他に力を撒き散らさなくても済むからだ。
しかし、自分ではエリカにまだ勝てない事はすでに分かりきっていた。共に相手の体に手をあてれば絶対に倒せるだけの力を持ちながら、それを成す為に必要なスキルには大きすぎる差がある。
彼女を相手に接近戦などを挑めば勝ち目はまるでない。自分が勝つイメージすら浮かばないのだ。
本当の事を言えばカーリアンはエリカに一度勝てていた。勝てる機会があった。

その勝機とは、先程エリカに拳を叩きつけたあの時だ。その時に紅を直接身体にぶつけていれば恐らくは勝てていただろう。

あの攻撃は何故かカーリアンが考えていた以上にエリカの意表をついたらしく、びっくりするぐらいクリーンヒットしたのだから。

しかし彼女は、エリカを一度単純にぶん殴る方を選択した。エリカと向き合い、一発思いっきり『この先輩』をぶん殴ってやる方を選択したのだ。

その代価はひょっとしたら自らの命であがなう事になるかもしれない。あの時、勝てる時に勝たなかったがゆえに後悔する可能性は決して低くない。

それでも迷いなく拳を振り切った。

その一発は非常に気持ちよく決まった。だから後悔などは全くない。

もう一度エリカの意表をつけばいいだけの話であり、宵闇の後継を自称する彼女とて完璧ではなく、新入りに毛が生えた程度のカーリアンにも意表をつかれる事が分かったのだから、意味のない攻撃でもなかったはずだ。

そして意表をつく為の手段もある。それが剣匠に追い付く為に考え出した魔弾の手数であり、広範囲を自在に飛ぶ事で補える汎用性だ。

「アインス、ツヴァイ、ドライっ！」

「魔弾の射手は知らないのに、呼び名はドイツ語なのね？」

「これも命名者の趣味よっ」

エリカの軽口に答えながらも先行する三体の魔弾を撹乱役として縦横無尽に舞わせた。その動きに規則性はない。単に目眩ましだ。

しかしそれもただの目眩ましのみしかこなせないワケではない。

この三体を単なる目眩ましだと油断すれば、この一番から三番の射手はアタッカーへとその役割を変え、紅を放つ砲台へと変化して牙を剥く。

「フィーア、フュンフ、ゼクスっ！」

続く三体は先行する三体の動きに紛れて、実際にエリカを攻撃する役割を持つ。

エリカの周囲に紅を乱射してその動きを制限するだけではなく、いざとなればその真紅の体を持ってぶつかっていく突撃兵である。

いまだ『魔弾』を完璧に扱えるワケではないカーリアンが、その未熟を補う為に考えた方法がこのような魔弾達の役割分担だった。

それぞれの魔弾にメインとなる役割を与える事で、細い紅で繋がった有線式であるそれらを、マスターであるカーリアンの思考によって完全に支配する方法ではなく、役割に沿うという支柱を与えてそれに沿った形で使役する。そうする事によって不安がある制御への負荷を軽減させているのだ。

カーリアンの魔弾達を初めて見たカクリが、それを『自走式』の砲台だと評価した理由はそこにある。

そして理論的に力を鍛えたワケでもないのに、本能的に巧く力を使う方法を導きだしたカーリアンに舌を巻いたものだ。

しかし、そんな能力を持ってしてもエリカの動きは止まらない。むしろそれら六体の魔弾を翻弄するほどのものだった。

魔弾達の動きは決して遅いものではないのに、閃光の名に相応しきスピードであっさりと凌駕してみせたのだ。

その速さと複雑さはカーリアンの予想の斜め上を平然といく。最初の三体を早々に目眩ましだと見切ってあっさりとかわしてみせると、それらが回頭するよりも速く地を這うような低い姿勢でその囲みを突破する。

後ろから飛ばされる魔弾からの紅ですら、背中に目でもあるのかという正確さで避け、突撃してくる四番と五番を嘲笑うかのようにかわすと、かわしきれなかった六番はぼろぼろの外套を犠牲にして払うと一気にカーリアンへと肉薄した。

「ズィーベンっ！」

そして残る二つの内の一つ。最近になってようやく扱えるようになった『七番』は、まだ複雑な動きをさせられない。カーリアンが持つ制御力を動き回っている最初の六体に取られるからだ。

しかし、与えられた役割からか込められた紅の力は最も大きい砲台だ。真っ直ぐに迫るエリカに紅を乱射して牽制するそれは、カーリアン直属のガード役の魔弾なのである。

もし間近まで敵に迫られた時には、この七番が炎をばらまいて牽制する間に最初の六体が態勢を立て直す形を取る。

しかし今回は相手が悪かった。なんとエリカはカーリアンに迫りながら拾い上げたありったけの石ころ（爆弾）をその七番にぶつけ、生まれた粉塵でその後ろにいるカーリアンの視界を塞いだだけではなく、七番に込められた力をも『爆破力』で相殺してみせたのだ。

「残念ね。これでチェックよ、カーリアン」

そして七体を背後に回し、視界を閉ざされたカーリアンの腹に手を当てようとして――

『アハト』という言葉と共に、戦闘開始早々上空に上っていた八本目が頭上から急降下してエリカの歩みを一瞬だけ遮った。

そして――

「そうね、終わりよ、エリカ。

――『ヌル』っ！」

熱を持たず、ただ光だけを放ってエリカの視界を焼くアハト――閃光弾と照明弾の役割を持ち、戦場の上で辺りを紅く照らしていた八番が、一瞬で燃焼しきる事でエリカの視界を奪う。それと同時に、『カーリアンは自分自身を零番目（ヌル）の砲台として』その指先から紅の光を放ったのだ。

「甘い、でも惜しかったわ」

しかし至近から迫るその一撃ですらも、紙一重でなんとかかわしてみせる辺りが、この宵闇の後継を名乗る女の実力を示していた。その上で今が勝機だと一瞬で判断したのだろう。闇に慣れた視界をアハトの光に潰されながらも振るったエリカの腕は、確かにカーリアンの肩を捕らえた。

「――っ！？」

いや、捕らえさせられていた。

視界が定まりきらないエリカの表情が、その時初めて驚愕に歪んだ。魔弾達を見ても、先程殴られた時でさえもここまで驚きを露にはしなかっただろう。

なぜならカーリアンは迫るエリカの腕を自ら肩に当てさせると、彼女が逃れられないように腕一本を使ってその手を絡めとっただけではなく、自分はほぼ同時にもう片方の腕をエリカの腹に当てていたのだ。

エリカが爆破するよりも早く、腕一本をあっさりと捨てる覚悟を決めて、だ。

カーリアンが最初からその形に持っていくつもりだったとは思えない。

恐らく切り札は、ヌル――つまり零番の魔弾の射手たる自分自身

と、一瞬で熱を光に変えて燃焼しきって意表をついたアハトだったはずだ。そう考えたからこそ、エリカは視界を焼かれながらも下がらなかった。

紙一重ながらもヌルの一撃をかわしてみせた時点で、もはや勝ちだと判断していたのだ。

でもその勝敗は一瞬で覆された。ほんの一瞬でカーリアンは自分の腕一本を質に入れると、勝機を力ずくで引き寄せたのである。

そしてその行動にエリカが目を見張った時点で、勝敗の流れはもはや覆しようがないものとなっていた。

「あたしの勝ちでチェックメイト。そうでしょ、エリカ？」

ニッと笑うカーリアンを見るまでもなく、エリカはそう理解するしかなかったのだ。

2―46・The Free―shooter（後書き）

フリーシューター、つまりこれも魔弾の射手という意味になるんじゃないかな、という表題です。

カーリアンの魔弾について。

アインス（1）から順番にアハト（8）までの八本。

（ドイツ数字はさすがによくわからなかったのでネット調べによるもの。

間違ってたら教えてください）

それぞれが20センチほどに切られた太めの針金を支柱として紅が細長い刃を模しており、それが細い紅の線で繋がれた形をしている。

カーリアンと紅という能力で繋がれている為、距離的に制限がある。

現在の制限距離は約30メートル前後ではあるが、これも発現させた本数とカーリアンの感情次第であり、カーリアンの紅の基本設定通りにムラがある。

魔弾自体は基本的に熱を持たず、紅の光に包まれた形をしているだけであるが、それもカーリアン次第であり、炎の矢（ただしリード付き）となる事も。

ただし、あまりに強い熱を持たせ過ぎると力を集める支柱の針金が持たなくなる為、炎の矢とする使い方は本来しない。

本来の在り方はあくまでも砲台であり、『これ自体が射手』である事。

魔弾を作り出すに当たってカーリアンが考えたのは、『ミヤビに比べてまず手数が足りない、手数が』であった為、魔弾はあくまでも手数を増やす為に作り出されているのだ。

基本設定としてカーリアンは制御力に問題ありとした弊害で、自力だけでは魔弾を産み出せないが、カーリアン自身は最終目標として

『千本の魔弾を寄り代なしで産み出して、となりの戦都ぐらいは魔弾達に空爆させられるようにする』という、遠大な目標を掲げていたりする。

余談ではあるが作り出した経緯としては、ミヤビが『剣界』を作り出して全てを自分で使うなら、カーリアンは使い手自身を作らせよう、だけだった気がする。

2―47・Crimson&Flash

エリカの手はカーリアンの左肩へ。
カーリアンの手はエリカの腹部へ。
その状況はまさしくチェックメイトでしかなく、エリカを持ってしても現状を覆す方法など思い浮かばない。
腕一本と自らの命では秤にかけるまでもないだけではなく、肩に手をかけている腕を捕まれている以上離脱する事すらも出来ない。
自分はこの未熟な後輩に……そのムチャクチャながむしゃらさに敗れたのだ、そう認めざるを得なくて、エリカは肩に当てていた手をあっさりと離した。

「……あなたの勝ちよ。腕一本とウチの命一つでは対等とは言えないものね。この命の代価にあなたの腕を一本まるまるもらっていく、というのも悪くはないのだけれど、黒鉄であるあなたを相手にそこまで意地汚くなるつもりはないわ」

勝敗を分ける差を挙げるとすれば見切りの早さ、それに尽きる事をエリカは自覚して思わず唇を噛み締める。
スキルは自分が勝っていた。タクティクス（戦術）においては圧倒的に上回り、戦闘に必要なステータスにおいて言えば、『紅』という強大な発火能力以外には見るべきものがない相手だった。

「ウチの負け……か」

それでも負けた。

エリカが算出したステータスには表記されていない『諦めの悪さ』に負けた。そしてカーリアンに重ねた『自分の過去』に負けたのだ。

かつての自分だったなら……がむしゃらに生き足掻いていた『あの頃の自分』だったなら結果は変わっていた、などとは言わない。

その考えは現在の自分に勝った少女への侮辱に他ならないからだ。

でも、今の自分が無くしてしまった何かへと思いを馳せる事までは止められなかった。

――勝ちを確信してチェックメイトをかけたエリカ。

――そこでこの勝負を見切ってしまっていたエリカ。

――予想していた通りに自分の勝ちで終わる事を当たり前の事なのだと受け入れていた今のエリカ。

こんな自分を見れば、過去の自分は呆れ返るだろうか。

そして今は亡きあのお節介な少女はなんと言うだろうか。

『まだまだだね、エリちゃん』

そう言って彼女は無様に負けたエリカをケラケラと笑っただろうか。

それとも『あたしの教え子は強いっしょ？』と得意気に胸を張ってみせただろうか。

――こうやって過去を垣間見たりしているから負けたのだろうけど。

頭を軽く振ってそんな自分の考えに苦笑を洩らし、ただ心の中に不甲斐なさを刻んでから肩をすくめる。

カーリアンの魔弾達の数とその力は脅威だった。それは間違いな

い。

でも決して勝てない相手ではなかった。勝てなくてはおかしい勝負だった。

負けおしみでもなんでもない。もう一回同じ状況でやれば絶対に勝てる自信がエリカにはある。

何故なら、脅威的な能力を持つ『魔弾』ではあったが、それを完璧に扱いきれていないカーリアン自身はエリカにとって脅威でもなんでもなかったからだ。

エリカならば数を八つも出さなかった。二つ三つ完全に制御しきれるだけを使い、それを元に戦術を組んだだろう。それを無理矢理八つも出したのはカーリアンの未熟だと判断し、数を頼りにする弱さだと考えた。

だから一気に決めるべく手を打った。

たしかに限界ギリギリの八つを出したのは、カーリアンの未熟によるものだった事は間違いないだろう。

でも弱さではなかった。そこをエリカは見誤っていたのだ。

彼女は数を頼ったわけではなく、数を使いこなせるという自信があったのだ。それはあるいは過信だったのかもしれないが、攻める気持ちがあったからこその『八つ』だったのだと今のエリカは考える。

だからこそエリカが勝ちを見切った後もカーリアンは敗けを見切らなかった。敗けを絶対に認めなかった。

八本をかわされても動揺する事がなかったのは、その数に頼りきってはいなかったからだ。攻める気持ちが消えなかったからだ。

八本をかわされたなら『絶対にカーリアンは揺らぐはずだ』と決めつけていた時点で、エリカの敗北は決まっていたのだと思う。

――腕一本くれてやる。その代わりあんたには絶対に敗けてやらない。

まさか切り札の数をかわされて、すぐにそんな風に切り返してくるとは思ってもみなかった。
そんなカーリアンの気概に対して、エリカは勝利に対する見切りを持ってしまっていたのだから勝てるはずもない。

「思い出したわ。すっかり忘れてた。黒鉄って連中のキャッチフレーズは、彼の言葉を借りれば『誰よりも諦めの悪い人間の集まり』……だったわね」

「そうよ。あたし達は誰よりも諦めの悪い人間の集まりなの。他の誰もが今の時代を仕方がないんだと諦めても、あたし達は絶対にそんなの認めてなんかやらない。あたし達のやってる事が自分勝手なエゴだと言われても……お前達はもう負けたんだと言われても、諦めないし敗けてなんかやらないの。
それが黒鉄ってもんの心髄でしょ、先輩？」

「そうね。そうだったわ。あぁ、ウチはそんな事も忘れてたのね。だから勝てる勝負に負けて……こんなにも悔しいのね」

今までには何人もの黒鉄達に敗れた記憶がエリカにはあった。
宵闇たる師には手合わせの度に敗れたし、彼の相棒たる少女には最後の最後まで黒星を連ねたままだ。他にも『深緑』や『水鏡』にもやられた記憶はある。
それでも確実に勝てると判断出来た相手に負けた事は一度もなかった。訓練でも実戦でも、だ。
勝てる戦場を落とした事など味方に足を引っ張られた時か、あるいはちょっとした不運の積み重なり以外ではなかったのである。
それはエリカが持つ戦術眼による他者との能力比較が、かなりの精度を誇っていたが為だ。彼女はその眼こそが爆弾生成能力などよりも頼りになる武器だと考えていたほどなのだ。

勝てない相手と向かい合った時には、戦う前からあらかじめ敗北という結果が見えていた。その逆もまた然りだ。

ならば敗北の中で何を得るかこそが重要であり、勝てる相手にはいかに損害を受けず勝利するかが戦闘においての要点となる。

それをあらかじめ予見する眼。あるいはセンス。

これを一番の武器として生き残ってきたのだ。そしてそれ故に気付かない部分があった。

――だからウチは今の今まで気付けなかったのね。その眼は一番の武器でありながらも、戦場に立つ者としては衰えさせるものでもあった事に。

勝てる相手には完膚なきまでに勝ち、負ける相手には出来るだけ損失を受けないように負ける。いや負けそうな相手と無理をして戦う必要などどこにもない。逃げてしまえばいいのだ。

それが黒鉄を抜けたエリカにはいつしか当たり前になっていた。

宵闇は側におらず、黒鉄の仲間達もいない。回りに守るべき者がいなければ、無理をする必要などどこにもないのだからそれも仕方がないかもしれない。

しかし、そんなスタイルでは完璧に近い勝利を収める事は出来ても、『絶対的な敗北が見えた戦場を覆す事など出来るはずがない』。見切りの早さは欠点にしかなり得ない。

敗北を覆す者である男に憧れて、その背中をずっと追っていたつもりだったのに、いつしか自分は『勝利出来る戦場だけを確実に勝つ者』になっていたのである。

そんな事実こそがエリカに無意識の内に歯を噛み締めさせる。

負けという勝負の結果などよりも、そんな自覚の方がエリカに敗北感を与えていたのだ。

「さて、と。どうしよっか？あたしももう一回闘ってあんたに勝て

る自信なんかないし」

そう言った言葉通りに、目の前の少女は自らの負けを予見していたはずだ。エリカのスキルとタクティクスは彼女を翻弄し、追い詰めていたのだから。

それでも諦めずに立ち向かってきて……その結果としてエリカが見た勝敗を覆してみせた。今回はその結果を掴み取れた。

でもそれは二人が初見であったからだ。エリカが忘れたものをカーリアンが持っていたからだ。

次の機会があれば結果は変わっているだろう。それをカーリアンも自覚していたのだ。

「そうね。次の機会があればウチが勝つでしょうね」

もちろんエリカも次があれば負けるつもりはさらさらない。次は最初から同格の相手と見て、こちらも身体の一部を切り売りする覚悟で勝ちに行くつもりだ。

――少しばかりかつての自分を見ているようで気恥ずかしいのだけれど、ね。

エリカもかつては何度蹴り転がされても、自分より強い黒鉄達に挑み続けていた。最悪の戦場でも生き足掻いてみせたのだ。

その結果として、訓練で結局一度も勝てなかった相手は宵闇と錬血だけという成果を得た。弱者として磨いた戦場を見る眼と、それを生かす為に少しずつ積み上げてきた経験。そして誰よりも不屈な精神。

コード持ちの中で誰よりも弱かった自分が、いつしか『彼』に追い付けるのではないか、と思えるようになったのはその心髄ゆえだろう。

もちろん、今のカーリアンはそんな過去を思い出させたからこそ敗北が堪えた部分もあるが。

「だよね。あんたが黒鉄の心意気とか諦めの悪さとかを思い出しちゃったら、今のあたしじゃまだ勝てる気がしないし」

「……今の、ね。いつかはウチに完全に勝てるつもりなんだ？」

そんなエリカの意地の悪い質問にもカーリアンはあっけらかんとした表情を浮かべ、小首を傾げる仕草までつけて答えた。

「だってさ、あんたを超えなきゃミヤビには追い付けないんでしょ？」

『戦闘能力』という面だけを見れば、かの銀鈴にも迫るほどの特殊能力を持っていた錬血を超えるつもりなのだから、あんたもついでに超えていくとあっさり言ってのけたのだ。

そんな言葉を聞いて呆気に取られ、しばらくフリーズした頭を無理矢理起動させてから、エリカは堪えきれない笑いに喉を震わせる。

――なるほどね。ウチは通過点なワケか。言ってくれるわ。

ううん、この子はミヤ（ゴール）しか見ていないのかしら。きっとこの子ならウチと違ってゴールまで脇目も振らずがむしゃらに走り続けるんでしょうね。

そう出来なかった自分を思って。

ゴールを間近にみていたのに、そこに追い付く事を諦めて、宵闇という一部に成り代わる事だけで妥協した自身を思って――エリカは笑った。

自嘲でも嘲笑でもなく、朗らかに笑ってみせたのだ。

「ねぇ、カーリアン。今あなたが握っているウチの命、しばらく預けてはもらえないかしら？」

そして面白い。そうも思った。

自分とは全く違う性質を持った、強者となりうるだけの資格を……そんな能力を生まれながらに持つ少女。

変種が持つ能力としてはありふれている発火能力と酷似していながらも、全く次元の違う『紅という固有の異端』を持った少女。

そしてそれが持つ特異性、単なる発火能力では持ち得ない自在性を上手く用いて、『魔弾タスラム』という使い方まで導きだした現黒鉄。

もしそんな彼女を、この自分が……『生まれは弱者ながらも、かの宵闇を目指すという一点だけでコードを持つにまで至ったこの閃光』が鍛え上げたならば、一体どれほどの力を持つに至るのだろう。

ひょっとすればかの錬血を超えるだけではなく、生まれながらに最強種たる事を約束された銀鈴すらも超えられるのではないか？

そう思ってしまったのだ。

そう、エリカが見るところによるとカーリアンの紅という力は、間違いなく水鏡や錬血と同じ普通の変種が持つ能力とは何かが違う特殊な能力だ。

そして水鏡が新皇のガードだった事を考えると、彼女よりもより戦闘向きな能力を持つカーリアンならば、最低でもそのクラスの戦闘能力ぐらいは持てるだろう。

普通の変種からすれば雲上の力を持つ皇。その側近と言えど並みの変種から見れば十分以上に化け物揃いである。そこに手を伸ばす資格を彼女は持っている事になる。

さらに言えば、錬血と冠された彼女の師匠は、水鏡によれば並みのガードなどよりもよっぽど強いと評されていた。ならば自分の力

だけでその錬血を超えると豪語しているこの原石を……やがては独力でもその領域まで登り詰めるであろう彼女を、戦闘技能者として宵闇から学んだ自分が研磨したのならば、一体どれほどの戦闘能力（輝き）を持つ事にいたるだろう。

またこの少女の見るべき点は紅だけではない。カーリアンは、エリカがついには持てなかった天性の直感まで持っているのである。

戦闘技能者としてその直感、言ってしまえば『先読みの力』が一体どれほどのギフト（天性の才能）であるかは言うまでもない。

エリカが知る黒鉄達の中でも、初見の相手の切り札――エリカの場合、両手で触る事による爆弾生成能力――を『嫌な予感』で見切れるほどに鋭い直感を持っていたのは、かの『深緑のクロネコ』かあるいは無垢であるゆえに相手の裏を読む事に長けた『銀鈴のスズカ』ぐらいしかいない。

錬血や、宵闇でさえもそこまで桁外れな……言ってしまえば予感の域を超えた予知じみたカンは持っていないのである。

それらを考慮し、実際に今現在彼女に敗北を喫してしまったエリカとしては、ここで命を散らすなどもっての他だ。

「もちろんただでなんて厚かましい事は言わないわ。シャクに手を出す真似もしない。宵闇の名前はいずれ貰うつもりだけれど、しばらくは様子を見てもいいと思っているの。

そうね、あなたが強くなって、もう一度ウチと戦っても勝てるぐらいになるまでは待ってもいいのよ？」

自分が追い付けなかった二人、これからも追い付けないであろう錬血と宵闇、そして普通の変種では絶対に勝てない事を定められた『皇』という人種に、自分が手を加え、磨き上げた少女が手を付けるなんて、きっと何よりも痛快な事だろうと考えてしまったのだから。

「そうね、単にあなたにリベンジする機会が欲しいだけだと、そう取ってもらって構わないわ。でも今のままリベンジさせてもらうのは、勝者であるあなたにはなんの得もないでしょう？
だからね、あなたが強くなる手伝いをさせて欲しいと思っているの」

何より自分が宵闇に学んだという過去に意味を持たせる方法としても、きっとこれ以上のやり方はない、そうも考えたのである。

自分があちこちを流れている間に見た『皇という名前の化け物共』。魔人と呼んでも差し障りはないどころか、魔神とさえも呼べるほどの怪物達と彼が向き合った時の為に、それらを討てるだけの剣を宵闇から全てを学んだ自分が用意出来たのなら、彼から自分が得たものは最大限に生かされたのだと確信出来るだろう。
そして彼から得たものを次の者に渡すという過程こそが、自分は彼の後継になれた証にはならないだろうか。
宵闇から閃光へ、そして閃光からその次へと渡されるバトン。つまりは後継へと流れていく過程を施す事だ。
宵闇から学んだものを誰かに譲っていけたのなら、彼から直接学んだ自分だけが彼の後継であり、自分から学んだ誰かは宵闇から引き継がれた自分の後継となる。
そうなれば、自分こそが宵闇の後継だと名乗ってもはばかりなどないだろう。

「ウチはかの錬血の強さを知っている。どのぐらいの差があったのかも自覚しているわ。それを踏まえるなら決して悪い条件だとは思わないのだけれど。
なにせ、ウチを完全に越えたのなら錬血の背中は見えている証明になるのだから。
それともあなたは、一生彼女に追い付けたかどうか分からないと

いう葛藤を抱えて生きていきたいのかしら？」

「うっ、それは……」

「先の見えないまま、たった一人でひたすらに自らを鍛えあげる、そんなストイックな生涯もカッコいいとは思うけれど、実際にそんな一生を費やしたいと思う？それならそれで頑張ってくれてもいいと思うけれどね」

目の前の少女は間違いなく逸材だ。錬血が道は示しているであろうから、能力制御の下地程度はある。そこから閃光たる自分が鍛えあげれば、カーリアンが目指す錬血の名前にも、エリカが望む宵闇の名前にも恥じない実力となるだろう。

そこまで考えたエリカの言葉には遠慮はなかった。容赦なくカーリアンが潜在的な不安としているであろう箇所を突っつく。

錬血がいなくなってからもその背中を追い続けてきた間に、『いつになったら追いつけるのだろう？』と考えないはずがない。

いかに楽天的でも、『一生追い付けないんじゃないか』と、今は亡き目標に対して不安にならないはずがないのだ。

少なくともエリカには――同じく追いかける者である彼女には、その考えが手に取るように分かるからこそ、そこへと切り込んでいく。

「それにね、ウチはどん底からここまで強くなったという自負があるわ。誰よりも自分を鍛えあげる事に関して貪欲だった自信がある。だから言っておくけれど、我流はやめておきなさい。変種の能力トレーニングにおいて言えば、自分一人でやる事にはデメリットしかないわよ」

さらにそうやってカーリアンを揺らしておいてから、危機感を煽

る言葉を続ける。カーリアンが気にかけるよう心掛けたエリカの話術に、元から駆け引きに弱い彼女が引っ掛からないはずもない。

固唾を飲むようにエリカの次の言葉を待っている時点で、もはやカーリアンが話の網に絡み取られていると言えるだろう。

何より、いつまで今のやり方で制御訓練をすればいいのか、一人でやってきたやり方が今の自分にも合っているのか……そんな疑問もカーリアンの中には少なからずあったりしたのだから当然だ。

「今までの既存の体術などは、それはそれで洗練されたものよ。そこから学ぶものはあるし、それだけを基盤に学ぶなら一人でも出来なくはない。

でもね、それらはあくまでも既存種向けのものでしかないの。既存種の一般的な身体能力がベースになったものでしかない。

それにそれぞれ固有の能力を持つ変種の力には決まったトレーニング方法なんかないわ。それを独自の判断だけでやると個人では超えられない壁にぶつかるか……やがて『力に狂う』かしかない」

「あたしは――あたしは狂わない！一度そうなった事があるから、もう二度と――」

死にたがりの紅。

そう呼ばれた過去を払拭するのに、カーリアンがどれだけ苦労したか。そしてその苦労とて十全には報われていない現実に、どれほど歯噛みしたか。

最近になってようやく今のカーリアンを認めてくれる仲間達が出来てきたのだ。それを一挙に失う真似などするはずがない。

そんな思いがカーリアンに声を荒げさせる。

しかしそんな彼女にもエリカは全く調子を変えないまま言葉を続けた。

「もう二度と、ね。その決意は立派だけれど、ウチは何人も力に狂った変種を見てきたわ。かつて仲間だった人間を手にかけた事もある。その中にはウチやあなたよりもよほど思慮深い人間もいたのよ。変種はね、一人で力に向き合っちゃいけないの。これはミヤとシャクの持論なのだけれど、それはきっと正しい事よ」

「……ミヤビとシャクの？」

「多分、多分だけれど、あの二人自身の経験による持論でしょうね。よくは知らないのだけれど、シャクは関東で。ミヤもウチが入る前に何かあったのは間違いないと思う。確証はないけれどね」

――それでもあなたは『自分だけは大丈夫』だと言い切れる？あの二人でさえ危惧した事に、自分だけは無関係だと断言出来る？

その言葉にカーリアンが肯定を返せるはずがなかった。

彼女には狂った過去がある。力に酔いしれ、敵を狩り殺し、煉獄を顕現させた事実がある。

あのいつも能天気なほどに明るく、裏表の全く感じられなかったミヤビや、思慮深くて臆病とも取れるほどに無駄な争いを嫌うシャクナゲが危惧した事に、自分だけは無関係だと言い切れるはずもない。

「……ウチならばあなたを強く出来る。ううん、ミヤがいない今、ウチにしか出来ないと思うわ。あなたが自分を過信し、力に酔いそうになれば叩きのめしてあげられるしね」

ついさっき負けたばかりで、とは思ったが、エリカの言葉には嘘などない。もう一度やればカーリアンを叩きのめせる自信がある。

かつての閃光のエリカに戻れたならば、今のカーリアンにはまだ負

けない確信があったのだ。
だから悪びれも臆する事もなくそう言ってのける。

「それにシャクやスイレンは他人に何かを教える事に向いた性格ではないし、スズカは生まれついてからずっと最強種なのだから、力の向上なんて考えた事もないはずよ。きっと銀鈴には訓練の意味すらも理解出来ないでしょうね。
そこまで考えたなら、あなたにとっても決して悪い条件ではないと思うのだけれど」

「あんたになんのメリットがあるのよ？シャクの宵闇が欲しいんでしょう？」

その問いには答えたつもりでいた。それだけじゃなく、『自らの命が助かる事』だけでもメリットとしては十分なはずだ。しかもその言葉は、こちらの提案を受け入れる前提での言葉に近いとは気付かないのだろうか。
そんな思いが苦笑を浮かばせそうになるが、それをなんとか噛み殺してエリカは改めて建て前を述べる。

「ウチのメリットは強くなったあなたにリベンジする事。あなたが強くなるまでに、ウチも忘れている事を思いだしてもう一度鍛え直すわ。そしてその末にシャクから宵闇の名前を戴く事にしたの。錬血の後継未満に負けたままじゃあカッコが付かないものね？」

――この子の場合、能力云々なんかより、駆け引きから教えた方が良さそうね。こんなに素直で分かりやすくちゃ、せっかくの力を殺してしまう事にもなりかねない。

そう早くも心の中でメモを付け、いまだに頭を抱えんばかりに何

らかの葛藤しているらしいカーリアンに、エリカはトドメをさす事にした。

「それにあなた、忘れているみたいだけれど、元からウチを殺す気なんてなかったんじゃないの？戦う前にそんな事を言ってたでしょう？ならばこの提案は悩むまでもなく、メリットしかないと思うのだけれど」

最初にカーリアンは『エリカを殺すつもりなんかない』と言っていたのだ。

その時は何を甘い事を……とエリカは思ったものの、カーリアンにとっては至極本気の言葉であった事は確信出来る。

もちろん実際エリカと闘った後になって、その考えを覆すつもりになった可能性もある。普通であればエリカとてそう考えるだろう。

だがカーリアンに関して言えば『単にその発言自体を忘れている』だけだという変な自信があった。

つまり王手をかけながらも自分も腕一本差し出した形に興奮し、混乱して、当初の発言を忘れ決着の付け方をどうするかいまさらになって迷っているだけなんじゃないか、そう考えたのだ。

そしてその考えは正しかったのだろう。

空いていた片手で頭を抱えていたカーリアンは、はたと気付いたかのように顔を上げるとポカンとした表情でエリカを見つめる。

――あぁ、なるほど。

その表情を見て、今度はエリカの方が頭を抱えたくなる。

――この子は先天性のスキルは申し分ないけれど、学ぶ事で得る後天性のスキルはからっきしなのね。自分だけで訓練してきたみた

いだから、戦闘自体の経験も全く不足しているみたいだし。

確かにカーリアンは原石だろう。その考えは変わらない。

錬血や水鏡、あるいはそれ以上の輝きを放ちうるだけの可能性すら持っているはずだ。下手な師につかず、錬血の教えだけをただやってきたのなら変なクセもないであろうし、その意味で言えば純度も申し分がない。

ただ原石は原石でも、発掘されたばかりのそれだ。カットや研磨はおろか、全くなんの加工もされていない単なる鉱石に近い。

つまり、生まれつきでなければ得られないギフトと呼ばれる才能や、潜在的な質で言えば間違いなく最高に近いものを持っているのに、後から学ぶ事で得られるスキルは軒並みザルなのである。

――それでも『死にたがりの紅』とまで呼ばれ、あのマスターシヴァに消えない傷を与えたというのだから、空恐ろしい事だけれど。

まさしくエリカとは正反対であるが、彼女とてカーリアンほどに極端ではない。

エリカですら目眩を起こしそうになるのだから、極端さで言えば比ではないだろう。

「ま、まぁそうね！う、うん、確かにそう言った！あんたはもともとシャクの前に引っ立ててくつもりだったんだから、その後であいつが許してくれたのなら訓練に付き合ってもらうのも悪くないかもしれないわね！」

――忘れてたんじゃないからね？ほんとよ？

なんて上目遣いで言う事自体が、すでに盛大に墓穴を掘っている証だとなぜ気付かないのだろうか。

エリカからすれば逆に不思議で、感心してしまうぐらいだ。
さらに手をエリカの腹からあっさりと離して、恥ずかしいのかそっぽを向く辺りも信じられない。もしエリカが嘘をついていて、ここで彼女を殺そうとしたらどうするのだろう？
ミヤビとて時折信じられないような大ポカをかましてはいたが、基本的にはしっかりしており、なおかつ大ポカをしでかしても自ら補えるだけのスペックがあった。
そうやって比べてみて、似ているようで全く似ていない師弟だと考えてから『この子が成長すればああなるのか』と納得しそうになり、思わず溜め息が漏れた。
先は長いんだろうな……なんて事を考えて、改めて色々な問題児を一手に引き受けていた錬血の優秀さに感じるものがあったのだ。

「決まりね。ならばとりあえず久々の廃都に帰りましょうか。ウチはウチで懐かしい顔に挨拶をしなければならないし、あなたはあなたでやるべき事があるでしょう？」

「やるべき事って？」

「……カーリアン、あなたははるばる光都までなんの為に行ったのかしら？例え待ち合わせの相手が来なかったとしても、任された仕事はその結果を報告するまでは終わらないのよ？」

「あっ、そっか」

――はぁ、頭が痛くなりそうだわ。
ふむふむと素直に頷くカーリアンに、思わずこめかみを押さえながらエリカは先に歩いていく。
今はまだ夜に入ったばかりの時間帯とはいえ、『用事』が済んだのなら早々に帰還すべく歩き始めるべきだろう。用事さえなければ

闇に包まれた夜にこそ行軍すべきで、足下が見えにくいからといって休憩するなどもっての他だ。
　そんな考えを下して歩き始めたエリカに、取り残されそうになったカーリアンは大慌てでその後を付いていく。

「あ、こら、待ちなさいっ。あんたが仕切るんじゃないっての！あんたはシャクに引き合わせるまであたしの管理下にいてもらうんだからっ」

「ならあなたには帰り道が分かるの？先頭に立って歩いても、いつの間にか北陸やら東海やらまで行ってしまわない自信があると？だからウチには黙って自分に付いて来い、とそう言いたいのね？」

「うっ、それは……多分」

「多分じゃダメ。という事でウチが先導しても問題なんてないわよね？」

「むぅ～っ！」

「黙って付いて来なさい、カーリアン。帰りがてらあなたに足りない部分――というより決定的に欠けている部分についてたっぷり語ってあげるから」

　『あたしが勝ったのに』なんて事をぶつぶつと洩らしながらも、一人取り残されるのはごめんなのか、はたまた『決定的に欠けている部分』とやらに興味があるのか、カーリアンはやや早足でエリカに並びかけた。

――偽物ゆえに自らを徹底的に鍛え上げ、その結果として閃光とまで称されるほどとなった女性と、本物でありながらも師を失ってからは鍛えあげるすべをただ一人手探りで模索し続けてきた少女。

「まずあなたは方向音痴と、その分かりやすすぎる表情を隠すすべを得なさい。というかねカーリアン、あなたその『紅』とか『直感』とか生まれつきの才能以外の面はてんでダメね」

「ムカッ！てんでダメに負けたくせにっ！」

「帰ったら今度はコテンパンにしてあげるから安心しなさい。それにあなたは人を疑う事を知らなすぎる。そんなんじゃいつか絶対変な男に騙されるかして痛い目を見るわよ？」

「……それはちょっと反論出来ないかも。あいつってば変なヤツだし」

この正反対でありながら、よく似た二人の出会いがやがて揺れ動くこの時代に大きな波紋を起こす……かもしれない。

2―47・Ｃｒｉｍｓｏｎ&Ｆｌａｓｈ（後書き）

ん～～、ん？
う～ん。なんか納得がいつまで経ってもいかない。
やっぱり一人称の方が向いてるかな。書きやすかった気がします。
三人称ってむずかし……。
なんか一人称にすれば『一人称ってむずかしいね』とか言いそうですが、それはそれ。
クリムゾン&フラッシュ
もしくは
クリムゾンガール&ダークフラッシュ
さらには
カーリアン&エリカ
もういっちょ
レッド&ライト
などなど題名に悩み、まぁいいよね、これで……と決まったのが表題です。

この後は、すでに存在をＭ７８星雲辺りに置いてけぼりにして、いつの間にやら影薄少女となったカクリと、ネームレスの『四番』アザミによる『廃都にて（仮題）』と、エリカがこんこんとカーリアンにダメ出しをする『帰路（これまた仮題）』を挟み、アオイの話とシャクナゲラストで終わりな予定です。

とりあえずカクリの話を書いてはいますが、久々すぎてカクリの書き方が……不安過ぎる。

番外・白き少女、廃都にて奮戦す1

――こんなものか。

とりあえず新たに支援部隊を設立するにあたって、カクリは任された人員の編成から始める事にした。

年齢や性別、これまでの経歴や能力の有無、身体能力までを含めて考えて、最も無駄のない効果的な部隊編成案を作る事から始めたのだ。

下に付けられたヒナギク――めちゃくちゃ不満たらたらで、ぶつくさ文句を言いながらも、『シャクナゲの言葉なら嫌で嫌で仕方なくても逆らえないです』と、心底嫌そうにしながらも手伝ってくれる事になった――には、集まった人員を相手に訓練を始めてもらっている。

もちろんいきなり訓練を始めたのにも理由がある。

カクリが集めたデータはあくまでも書類だ。紙の上の数値でしかない。それでは正確に計りきれない、『意欲』みたいなものを彼女には見てもらっているのだ。

新しく三班に入ったものの中には、当然カクリとカーリアンが引き連れて二班を割ったメンバーもいる。彼ら、あるいは彼女らは、カクリからしても信用に足る人物だ。

意欲もあり、熱意もある。野心を持つ人物もいるが、大それた望みを抱く者はおらず、上に立つ者がそれなりに優秀か、あるいは自

分にとって有益な存在ならば制御しきれる範囲だ。
　また副官だったカクリが常日頃から目をかけてきただけあり、その能力についても自信がある。
　そういった人々には、今まで『医療班』として培ってきた経験を、新たな支援部隊隊員候補者達に教授する役割を頼もうと考えている。
　頭が堅いだけの医療職経験者などより……二班としての体面にこだわって立場を保留した連中などより、戦場ではずっと役に立つメンバーだとの自負もある。大掛かりな手術が必要なほどの怪我は厳しいとしても、簡単な医療スキルや手早く処置するだけの要領の良さでは上回っているだろう。
　それはカーリアンに従ったいわば『カーリアン派』の元二班メンバーとして、恥ずかしいものではないと確信している。

　しかし、新たに三班に加入したメンバー全員が、そういったなんらかの突出したスキルを持っているワケではない。
　中にはかねてから三班への加入を希望してはいたが、班の編成段階で他班に入る事になってしまい、この際に三班入りを果たそうというメンバーもいる事はいる。それらの人物は、シャケナゲ率いる最精鋭部隊たる三班への配属を希望しただけあり、なかなかの戦歴と実力を持っていた。
　しかし、ほとんどは『労働して食料を得る』事から落ちこぼれた連中だというのが実状だったりするのだ。
　廃都再建の作業で食料を得る事が面倒で、『黒鉄』で生きる方が楽だと考えている人間も決して少なくない。
　だからこそヒナギクや経歴に信頼が置けて、なおかつ素性も確かな連中に、最初から厳しい訓練を課させる事で『篩い（ふるい）』にかけてもらっているのだ。
　カクリには単なる食い詰め者を迎えいれる気などさらさらない。
　そんな余裕はないし、多分に『ふざけるな』という気持ちもある。
　いくら三班の貯蓄する資材がかなりの量にのぼっても――思わず

どれぐらいまでなら、着服してもバレないかなんて事を考えてしまうほどであっても、それを管理する側に回った以上は役に立たない者の為に米一粒や木片一つであれ無駄にする気などない。

そういった考えから、ヒナギクら訓練組の連中には『錬血の訓練並みにいじめてやれ』と言っておいた。

その言葉に、あの『音速』がサッと血の気を引かせたのは、その訓練の記憶が蘇ったからだろう。

カーリアンですら逃げ出し、ヒナギクですらトラウマとなっているらしい訓練並みにやれという事は、そのままほとんどをふるい落としてしまえ、と言っているに他ならない。

その篩いに日に日に脱落者が増え、残っている者は当初の五分の一を切った段階で、彼女は残った者達を組み分けする事にしたのである。

新しく支援部隊を編成しろ、と言われてカクリが考えた方法は、『今の黒鉄にある班の内、最も班内の統制が取れ、最も戦意の高い班』をモデルとする事だった。

自分には集団を統制する能力はあっても、人を惹きつける力がない事は、カクリ自身が一番自覚している。自分は裏方に回るべき人材で、表に立つ為の力がない事ぐらいわかっている。小賢しいだけの小娘だとあなどられがちな外見についてもだ。

人を率いる事に慣れておらず、また不向きな自分では、一から新しい体制の班を作るのは無理だろう……そう判断したのである。

しかし、今あるものを『できるだけ模倣する事』は出来る。それこそ自分向きなやり方だと考えたのだ。

そして自分だけでは、十割模倣できないならば……せいぜいが八割ほどしか似せられないのなら、『最高の部隊の八割』こそを望んだ。

つまり、『支援部隊の所属する黒鉄第三班』を、第三班支援部隊

のモデルにしたのである。
その為の方針作りと部隊運営草案をまとめ、初期予算案を組み、その上で八割＋αとすべく改良する事が、事務能力特化型であるカクリの考えた方法だった。
さらに言えば、新入り達をふるいにかけている間にそんな仕事をこなしつつ、新部隊の味方となる人物を作る事が目下の目標である。

まず始めに第三班の特徴としては、班内で能力に合わせての細かい小隊分けがある。さらにその小隊には副隊長を置き、いくつかグループ分けもしている。
シャクナゲ率いる黒狗は、精鋭の中でも特に選りすぐったメンバーを配置し、敵を攻撃する事のみを主眼に置いた班だ。つまり『防衛戦が多い黒鉄の戦闘の中でも、攻め寄せてきた敵部隊を切り崩す』為の部隊なのだ。
敵部隊の司令官や本隊を急襲したり、要人を攻めつけてそちらに目を向けたりと、攻撃的な事のみをこなすのが黒狗小隊だ。

対してアオイが率いる黒兎小隊は、防衛のみをこなす部隊だ。要所に配置して守り切る為の部隊であり、それだけにこの部隊は防衛戦の訓練のみを施している。

スイレン率いる黒猫小隊は、遊撃部隊であり諜報部隊、そして敵を陥れる為に動く為の部隊だ。スイレンの能力を中心に据え、それをフルに使って敵を攪乱する為に行動する。
珍しいだけではなく、上手く使いさえすれば非常に大きな力となる彼女の能力を最大限に使う事を主眼におき、他の小隊メンバーは彼女をサポートする為だけに行動するのである。
当然、スイレンの『幻』に対する耐性も黒猫小隊は積んでおり、ある意味では一番特殊な小隊だと言えるだろう。

最後の黒雉小隊は、それら他の三隊を援護する為の予備部隊だ。戦況によっては防衛も攻撃も諜報活動すらもする。

この部隊はオールマイティーな活躍を期待されるが、それだけに目立たない部隊でもある。能力如何よりも戦意や訓練に対するやる気で評価されている節があり、厳しい事で有名だった『錬血』のしごきを最後まで耐えぬいた男が隊長を務めている。

これを踏まえて、残った新入り達を幾つかの小隊に分ける事にした。

つまり後方で支援を行う支援専門小隊と、その支援小隊と後方の支援拠点の護衛小隊、前線へと支援に出る攻撃型支援小隊と、それを援護する斥候小隊だ。

中でも、攻撃型支援小隊と情報を集める斥候小隊には力を入れようと考えていた。

単なる支援部隊ではなく、積極的支援を行う二班とは違った形の部隊を望んだからである。

もちろん、普通の支援小隊や護衛小隊もおろそかには出来ない。普通の支援小隊はカクリ自身が隊長となり、その能力を底上げする事にし、部隊のアドバイザーとして護衛小隊の顧問を勤めるにした。

カクリ自身は戦闘を出来なくても、回された情報から戦況を読み、安全な後方陣地を作成する事が出来る。支援スキルに関して言えば元二班でトップだった実績もある。

だからこそその形で後方の編成を組んだのだ。

そして前衛の攻撃型支援小隊はカーリアンに任せる事が彼女の中では決定していた。ついでに彼女をこの支援部隊全体の隊長として、三班内で勢力を保つ事にしたのだ。

残るは斥候小隊だ。

この小隊もカーリアンに任せようかと考えた。

そして考えた上で無理だと判断したのだ。
カーリアンの攻撃型支援小隊と斥候小隊では役割が違い過ぎるし、活動する範囲も違う。いくらカーリアンの直感が鋭く、本質的にはリーダーとなる器があったとしても、活動範囲の異なる部隊を指揮出来るとは思いがたい。
斥候小隊は少人数で攻撃型支援小隊のさらに先に行き、戦況や敵部隊を確認する事が仕事であり、いかに攻撃型ではあれ、支援をメインに置いた小隊とは望む在り方が異なるのである。
後方の二つの小隊は、在り方は違っても活動する範囲は被っている。それとはワケが違うのだ。

そこがネックとなっているが、とりあえず残った新入りから斥候小隊の隊長を当てようと考えて、一旦彼女はもう一つの目的の為に動く事にした。

休憩がてら新部隊の味方を増やす為に動きはじめる事にしたのだ。

そう決めて行動を開始したものの安っぽいスチール製のドアを前にすると、カクリは思わず大きく息を飲んだ。そして緊張をほぐすように、わずかに瞳を伏せる。

≪黒鉄第三班執務室≫

ここはカクリが今所属する黒鉄第三班の中枢とも言える部屋だ。

今では第三班に所属している身でも――いや、第三班に所属する経緯があったからこそ、カクリはこの部屋に入る事に躊躇いを感じてしまう。

この部屋は今の今まで……少なくともアカツキがいなくなってからの一年、黒鉄という組織の中心だった部屋だ。

戦力的な意味でもそうであるが、黒鉄の存在理由としてもそうだろう。

最強最悪の皇を囲う鳥籠。彼が皇にならない為だけに造られた、黒鉄という名の偽りの楽園の最奥にして最深。

その真実を知り、自ら飛び込んだ後だからこそ、二班に所属していたには感じなかった圧迫感を覚えてしまう。

――こぉら！シャク！とりあえずみんなに頭下げなさい、頭っ！ほらっ、あたしも一緒に頭下げたげるからっ！

同じく真実を……カクリよりもずっと間近で偽りを取り払った皇（彼）の姿を見たはずなのに、帰ってきて早々いつも通りに騒がしかった少女を心底凄いと思う。

あの時、光都へと二人で出向いて帰ってきた後、カーリアンはよりにもよってその新皇だった男の頭を掴み、今後の対策の為に集まっていた面々の前で強引に下げさせていたのだから。

――ほら、ごめんなさい。それとありがとう。はい、リピートアフターミー？

知らず知らずの内に緊張していたカクリも、さすがに毒気を抜かれた。

えっと、カーリアン？あなた、誰に何をしてるか本当に分かってる？

思わずそう言ってしまいそうになって。
恐る恐る隣を窺うと、あのアオイのニヤケ顔までが固まっていた事にまたまた驚かされた。
その時思ったものだ。
あぁ、カーリアンは自分が思っていたよりずっと凄い人だったんだなぁ……なんて事を。
もちろんカーリアンでなければ『よっぽどのバカ』なんだと切り捨てていただろう。その無謀に呆れ返り、そのバカのとばっちりを食らわないように即座に離脱していたに違いない。
新皇とは文字通り『国崩しの怪物』で、魔人で、そして人外の化け物なのだから。
そんな相手に『彼女のカーリアン』は今まで通りに全く遠慮がなくて。
どこまでもいつも通りで。
いつの間にか緊張し、身を固くしていた自分がバカらしくなった。
室内で唯一カクリと同じように身を固くし、ガチガチに緊張していたヒナギクがカーリアンに食って掛かる様を見て。
そんな彼女と睨み合いを始めたカーリアンに、さてこの騒ぎをどう納めようか、なんていつも通りの事を考える余裕すらも出来たぐらいだった。

でもこの場にはそのカーリアンがいない。
カクリが全てを賭けて信じられる少女はいないのだ。
そもそも自分の考えで街の外の仕事を回したのだからいるはずもない。
その事実がまたカクリにプレッシャーをかける。背中には粘っこい汗が浮かび、知らず知らずのうちに拳には力が入る。
一人っきりな錯覚に震えそうになり、一旦引き返そうかと考えてしまう。

それでもありったけの度胸と負けん気、それから自分が持ちうる限りの意地とプライドを総集してからカクリはドアを開けた。

「おりょ？カクッちさんじゃないかな。なんか用……ってうわわっ！崩れる、崩れるかな――！？」

――ドアの先には人跡未踏の地が広がっていた。

つい先日まで綺麗に片付けられていた室内は、見るも無惨と言うか、見るも悲惨にグチャグチャに荒らされていたのだ。

ドアを開けた拍子に崩れたらしい、様々な書類やら使い回しの弁当箱やら寝具やらに埋もれた女性によって。

「いやいやぁ、助かっちゃったかな。カクッちさんがいなきゃ、自分とこの本部で遭難するとこだったかも」

まいったまいったとばかりに楽しそうな表情で額を叩く女性に、カクリは思わず溜め息をもらした。遭難……というよりも落盤事故じみた真似にあっていたのだから決して笑い事ではないと思う。

それでもなんとか気を取り直し、カクリはその女性――アザミに向き合う。

「……ねぇ、アザミ」

「なにかな？カクっちさん」

「……とりあえずカクっちさんはやめて」

「じゃあカクさん？」

「……水戸の御老公のお供なんてしていない」

ゴミやらなんやらに埋もれて目を回していた女性を救出し、辺りを片すだけで数時間かかった事実には正直目眩がした。その後、どこまでも気安くいられるアザミの図太さにもだ。

どうやればアオイがきっちり片付けていた部屋を、ほんのわずか数日でゴミや書類が雪崩を起こすほどに荒らせるのか、その辺りをこんこんと問い詰めたくなる。

フワフワとした喋り方と、穏やかな性格が見て取れる顔立ちをしているものの、あのアオイが補佐役に抜擢しただけに実は切れ者に違いない……そんな考えをアザミに対して持っていたのだからなおさらだ。

今まで何度か見た時は身嗜みもしっかりとしていたのだから、カクリがそんな印象を持っていたとしても仕方のない事だろう。

前回見た時――つまりアオイが出ていく直前も、スラッと身体の線にあったパンツルックを着こなしており、深い茶色の髪も綺麗にセットされていたのである。

それが今は、分厚いレンズの瓶底メガネに安っぽい三本線入りのジャージ、煤けた印象すら受ける茶髪は空爆にでもあったのかというほどに荒れ果てていた。

全方位のどこからどうみても人脈として頼りになるようには見えない。

――じゃ、まぁ仕事頑張って。

思わずそう言って、よっぽど人選ミスを理由に撤退してやろうかと考えてしまうが、とりあえず間を取るようにゴホンと咳払いを一

つし、思考を巡らせて損得を改めて勘定する。
カクリが目を付けたのは、ホワホワとした空気をまといながらどこか切れ者っぽさも匂わせる……匂わせるだけかもしれないが……黒兎小隊の副隊長だった。そうだったはずだ。
間違っても三班執務室という黒鉄の中枢部を、まるで自分の部屋のごとく散らかし尽くしてだらけきっていた女性ではない。ゴミや資料の雪崩にあい、目を回すような人物では絶対に絶対になかったはずだ。
しかし、しかしだ。彼女が一隊の副隊長である立場だけは間違いない。それだけは事実だ……ったと思う。
――予想していた人物像とは余りにも違うけれど、やっぱり彼女の立場だけは捨てがたい。一応恩だけは売っておくか。
そう損得勘定を終えると、やる予定は全くなかった片付けをしたばかりの部屋のデスクに座る。
黒狗小隊の副隊長がヒナギクであるだけに、各小隊の副隊長（カクリはまだ候補であったが）達で連携を取る形に持っていく予定だったのだ。そうなれば『こんなの』でもアザミだけを避けて通るワケにはいかない。
新入り達をしごき上げているヒナギクは、その性格からか新入り達に感情移入しているだろう。かつての自分を新入り達の中に見て、心情的には味方となっている可能性が相当に高い。
そうなるように――気分よく新入り達をしごけるようにそれなりに気は使っているものの、ヒナギクにはそれ以上の工作は必要ないだろう。
さらに彼女は、性格的に子供っぽい所が目立つものの一応はコード持ちでもある。しかも黒鉄最強と謳われる第三班所属の、だ。その実力だけは水鏡やシャケナゲの折り紙付きだと言ってもいい。

それらを込みで含めて考えれば、黒鉄第三班の五小隊――今はまだ四小隊だが――の副隊長で連携を取る形は絶対に捨てがたい。
アザミだけを外せば角が立ち、『副隊長全員』という名分が立たないのである。

「……あなたの仕事……手伝ってあげましょうか？」

だからやる気が半減しながらも当初の予定通りそう告げる。
とりあえず『実は切れ者』という可能性もゼロではないし、などと自分に言い聞かせながら。

「えらく直線的だね？裏があるのを隠すタイプじゃなかったかな？」

「……あなたは私をひどく誤解している」

誤解もへったくれもなかった。裏はばっちりある。
ついでに面識の余りない相手にまで『裏があるタイプ』と思われている事実に、思わず苦虫を噛んだ表情を浮かべそうになり、それだけはなんとか自制した。

「……でも、そうね……腹の探り合いも嫌だからはっきり言うなら……あなたの仕事を手伝って早く終わらせる代わりに……私の仕事も手伝って欲しいの」

「手伝うって、結構あるよ？アオイの野郎――じゃなかった、アオイさんってば、呪い殺して欲しいのかって思うぐらい仕事を残していったからねっ」

――ほんと月が輝く夜ばかりじゃないんだ、って事を教えてあげたくなるかなっ。

そんな不穏極まりないセリフを吐きながら、アザミはひょいと肩をすくめて山積みの書類に軽く顎をしゃくってみせた。それを見ても軽くコクンと頷いてみせるだけで、サッサとカクリは机に座る。

その仕事の量はきっちり想定の範囲だったから問題などあるはずがない。

恐らくアオイが残した仕事は、カクリ一人でもギリギリこなせる量だろう……その読みが当たっていた事に少しだけ気分が良くなる。

本来は――シャクナゲが厄介な事を先に任せていなければ、カクリがやるはずだった仕事がアザミには回っていると読んでいたのだ。

ならばアザミの実力は分からなくとも、二人がかりには違いないのだからかなり短縮出来る。

それを計算に入れ、自分が受け持っている現在の仕事の進行具合も考えてからもう一度頷いてみせた。

「……大丈夫……多分明日には終わる」

「……マジかな？わたし一人なら軽く五日はかかりそうだけど」

「……大マジ……私が七割、あなたが三割……それなら明日で十分」

「そりゃ楽でいいけどさ」

「……カーリアンが問題を起こす度に……このぐらいは書類が回ってきた……それを一人で片付けたのは私」

カクリの言葉に『あ～、なるほど』と言った感じにアザミは頷いた。

自慢には全くならないが、紅の少女が起こす問題はどこでも有名なのである。蒼が絡めばもはや災害と称されていたほどだ。

伊達に黒鉄五大アンタッチャブルの中でも『双頭にして双璧』とは評されていないのだ。

本当に全くなんの自慢にもならないが。

そんな過去から力ずくて視線を反らし、椅子に座ったままカクリはカクンと首を傾げてみせた。

手伝った方がいいか、そして手伝ってくれるのか、という思いを込めてだ。

「う～ん、じゃあ交渉成立って事で。私も日がな一日机に向かってると、本気でアオイさんに殺意の波動を送りそうになるしねっ。ところでカクッちさんは藁人形なんかはどこに売ってるか知らないかな？」

「……知らない……どうしても欲しいのなら手作りを進める。……その気持ちはよぉく分かるから。……あの陰険スマイルは……一回痛い目を見るべき」

「ほんとほんとっ。あの腐れ副官はいつか絶対目にものを見せるべきかな。まっ、見せられるかどうかは別として」

アザミの気を引こうとして、意外なところでカクリの中で彼女に対する大幅に評価が上がった。

暴落したアザミ株が浮上する感覚に『なんでよ？』と自らツッコミたくなるが、それもあの副官のせいだと納得させてから、彼女は胸ポケットに刺していた愛用のペンを取る。

その馴染んだ手触りに手慣れた仕事に対する愛着じみたものを感じて……さらに自分に染み付いた事務屋根性と、面倒な書類仕事に慣れきった中間管理職の哀愁じみたものを感じて、少しばかり虚し

くななる。

「はぁ。絶対に私って他の副隊長達より損な立場にいると思うかな。アオイさんの下なんて、副官に回ってくる厄介事を処理する下請け業者みたいなもんだしね。それにあの人って絶対に断れない状況に話を持っていくから、仕事は溜まる一方さっ」

「……心の底から賛同する。……私もあのスマイル詐偽野郎には……地獄を見せられた経験が何度もある」

「いずれはあの笑顔を見ただけで、ひきつけを起こしたみたいに拒否反応が起こすようになってもおかしくよっ。あっはっは、あたしなんか実はすでに半ばそんな感じだしさっ」

このアザミという女性とは、本当に仲良くなれそうだ。頼りになるかは微妙だけど。

そんな事を考えながらも、彼女の愚痴には心底から深く深く頷き返してカクリはペンを走らせる。

自分に信頼が集まり、実績をもっと積んだあとには、いずれ冤罪を山ほど付けてから不信任案を出し、あの目障りなスマイル野郎を副官の立場から叩き落としてやる……そんな誓いを新たにしながら。

番外・白き少女、廃都にて奮戦す1（後書き）

ギリギリ月曜っすよ、月曜。
題名は適当になりましたけど。
また変えるかもしれない。
題名決めるのって……いと難し。
来週も月曜更新出来る――といいなぁ。

ちなみにアザミは『アザミ草』から。
どんな植物かは調べてみてください。

番外・白き少女、廃都にて困惑す2

「でね、アオイさんったら言うんさっ。『仕事がありすぎて寝る時間も取れないのなら、寝なければいいだけの話でしょう』ってね。それって死ぬっしょ、普通に。いやぁ、ほんと鬼だよ、あの人はさっ」

それからしばし仕事に没頭する間も、耐えずアザミは話し続けていた。ハイテンションではありながらもどこか微妙に気の抜けたような声による彼女の話は、少なくとも溜め込んでいた愚痴を発散してしまう程度の役には立った。

今までただ黙々と仕事をこなす事が当たり前だったカクリに、誰かと話ながら作業を進めるのもそう悪くはないと思わせたのだから、アザミの話術は非常に巧みだと言える。

少なくとも彼女の話は話題に富み飽きを感じさせないものであったし、喉を潤す為にいれてくれたお茶も満足出来る味だった。

その上で仕事自体もそれなりにこなしているのだから、底辺まで落ちきっていたアザミ株は当初と同程度ぐらいまで上昇していた。

まぁ、その私生活がだらしない女性の見本にもなりえないほどにグダグダな格好だけは、一応年頃の女性であり、他人の前でもあるのだからそれなりに繕って欲しかったが。

「あ、そう言えばカクッちさんはそろそろウチに慣れてきたかな？ウチってば立場が上に行けば行くほど仕事量が増えるんだけど、居

心地自体は悪くないと思うんだっ」

「……慣れた。元からよく来ていたから……違和感もない。……ただアオイが上にいるから……仕事自体は面倒なものが増える気がする。……正直憂鬱」

「あは、その予想はぴったり的中さねっ。アオイさんの下にずっといる羽目になってるこのアザミさんが言うんだから間違いないよっ。三班から離れたくないから転属する気はないけどねっ、アオイさんの下からは全力で離れたいかなっ」

「……つくづく同情する。……カーリアンの下も過酷な職場だけど……アオイにはカーリアンみたいな可愛げもない。……本当に災難ね」

今回の仕事に限ればシャクナゲに乗せられた。それは事実だ。

だが、カクリの中で一番の敵役はやはりアオイなのだ。何につけても、自分よりそつなくこなす辺りがカクリのプライドに触るのである。

さらにそのアオイは妙にカクリを評価しているらしく、にこやかな表情のまま信じられない量の仕事を回してくる。二班にいた頃ですら、取引の末に遠慮など欠片も見えない仕事が回ってきていたのだから、部下になんてなればどうなる事だろう。

世が世なら、労働基準を定める法やら児童保護を訴える法やらの違反で訴えてやるところだ。

そんな悲惨な職場環境において先輩であるアザミには、いかなカクリでも心底からの同情を禁じ得ない。

正直な話、カクリの幼い外見に惑わされないアオイの評価が全く嬉しくないとは言わない。

幼く見えるルックスはカーリアンの知恵袋としては武器になる。油断を誘える。それも事実ではあるが、外見だけで侮られて悔しい思いをした経験も決して少なくはないのだ。

だがアオイに関して言えば『もう少しぐらい外見に惑わされて欲しい』。カクリの能力を寸分の狂いなく計り、それに見合う期待と仕事をきっちり乗せてくるのは勘弁して欲しいのだ。

色々と『やる事』があるカクリは、自身のスキルに見合うだけの仕事をきっちり回されては困るのである。

もっともアオイからすれば、カクリに裏で動き回らせない為に大量の仕事を回している面もある。

その辺りの駆け引きが水面下で起こっている辺りは、カクリが二班にいた頃からなんら変わっていない。

「それは良かった。うん、余計な事をしでかさなきゃ、ウチはカクッちさんにとって居心地がいいと思うよっ。ウチは見た目や年齢で差別されないから腕の振るい甲斐はめちゃあると思うし」

「……そう、そうかもね」

確かに自分の力を示したいという願望があり、自らの力に見合う働き場所を求める者には三班は悪くない働き場所だろう。それぐらいは認められる。

カクリとて三班の在り方は、黒鉄という規模の小さな組織の中では理想に近いものだと考えているのだ。

三班という班は単なる戦闘しかこなさない部隊ではない。事務や裏方を仕事とする者にとっても悪くはない職場だと言える。

三班ほど徹底して班の運営を自班の者だけでこなす班など他にはなく、そうなれば当然事務仕事も多くなるのだから仕事自体はいくらでもある。

戦闘を行えば当然その記録を取る。食料や武器弾薬などの資財も必要となるし、そうなればその運用についても人手はいる。戦闘がない時も管理は欠かせないし、訓練にも物資はかかる。経費など班に所属する人間の分だけかかるし、三班が管理する土地で働いてくれる人間にも必要だ。

それらの管理全てを自班だけでこなしている事がいかに凄い事か。それは二班で四苦八苦していたカクリだからこそわかる。

なにしろ三班は規模的に最大の班だとはいえ、決して突出した人数が所属しているわけではないのだから。

それを成し得ている理由は、一重にこの班最大の特色――『戦闘要員、非戦闘要員の区別なく、全員が班の運営に関わっている』という事に尽きる。

通常時であれば、戦闘時には先に立って戦うメンバーもペンを取り、うんうん唸って帳簿とにらめっこしているのである。

また戦闘があれば戦闘要員が出るのは当然の事なのだが、この三班の場合は非戦闘要員とて大人しく避難するわけではない。非戦闘要員は本部守備要員として徹底的に本部に立て籠って、本部防衛の為に働くのである。

罠を設置し、バリケードを築き、戦闘要員が帰ってきた時の為に炊き出しをする。班の運営が滞らないようにその代わりもする。さらには三班本部から繋がる地下道の管理もし、そこから物資の輸送までこなすのだ。

その結果、通常時も戦闘時も戦闘要員と非戦闘要員の間で声を掛け合う機会が増え、その垣根が他の班に比べるとずっと少なくなる。

普通に考えれば戦闘時に外に出向く分、戦闘要員から仕事の割り振りに文句が出そうなものだが、戦闘時には仲間達の一番先に立ち、一番リスクを負っているシャクナゲが文句一つ言わないのだ。彼が率先して資財管理から本部の掃除までしているのだから、誰も文句を付けられるはずがない。

シャクナゲの場合は、『いいからあんたはちょっと休め。頼むか

ら休め。お願いだから休め』と言われているほどなのだ。

さらに言えば、戦闘要員が傷付いて今後戦えなくなった際も、三班の非戦闘要員としての働き場所が用意されている面も大きいだろう。傷付いたからといって放り出される心配もなく、傷付いたなりにそれまでの仲間達と共に戦える環境があるのだ。

もちろんこの体制にもリスクは当然ある。他の班が通常の運営で民政部に頼る面が多いのは、そのリスクゆえだと言ってもいい。

それは優秀な人間にかかる負担が極端に大きくなり過ぎる事だ。出来る人間にはどこまでも仕事が増えてしまうのである。

しかし、その辺りを上手く折り合い、ずっとこなしてきたのだからシャクナゲやアオイの手腕が窺える。

少なくとも他の六班では、人数や人材が足りない。カクリ一人いても達成は出来ず、五班の『幻影』やカブトでも無理だ。

戦闘で随一の実積があり、その実積を引っ提げて仲間を導くシャクナゲと、過酷な裏方をひたすら支え続けるアオイ、どちらが欠けても回せる体制ではない。

カクリがシャクナゲと組んだなら出来るかと言えば、いかに悔しくとも答えはノーと言わざるを得ない。

カクリは自らの力に自信を持っているが……戦闘能力はなくとも、自分は黒鉄に絶対必要な人間だと自負してはいるが、それでも上には上がいる。勝てない相手ぐらいは分かるつもりだ。

アオイという人間が気に障り、ついカクリが目の敵にしてしまいがちな理由の最たるものは、『あらゆる点において現状の自分では勝てない』という点に尽きる。

もちろんそれぐらいは自覚し、しっかりと自制出来ているだけでも、カクリが相応の能力を持っている事を示しているだろうが。

――ちなみにカクリがシャクナゲを嫌う時は、カーリアンが絡ん

だ時やわざとらしく子供扱いをしてきた時に限る。なんとなく嫌いにくい相手であり、それでもやっぱり苦手な相手……それがカクリにとってのシャクナゲなのだ。

「ま、その代わり仕事をサボるのは至難なとこなんだけどさ。ヒナだってヒナなりに仕事回されてるし、スイレンは多分うちでも一番の働き者だしねっ。うちで好き勝手やってるのはあの『不貫のヨツバ』ぐらいなもんさっ」

「……彼は致命的に集団行動には向いていない……一緒に作業をすれば寿命が縮まりそう」

「あっはっはっ、うちの皆がそう言うねっ。アザミさんもヨツバだけは苦手さっ。なんせ、存在自体が怖いからねっ。

まっ、あの人にはちょろっとお外を回ってもらって、適当に盗賊を狩って『はい、お仕事はおしまいよ』ってな生活をしてて欲しいねっ。下手するとお仕事が増えそうだっ」

そしてこの愚痴のこぼし合いでストレスを発散した以外に、もう一つアザミの話が役に立った面がある。

このずぼらな女性が、ただの怠け者ではない事を理解出来た点だ。

彼女の口は止まらない。カクリの沈黙も気にしない。

でもそれとなく三班の内情や、今まで気にしていた事を合間に聞き出そうとしても、のらりくらりとかわされる。単なるお喋りの範疇からは絶対に踏み出さないし、踏み込ませないのだ。

思いきって『ネームレス』……かつてアオイが名乗った『名無し』について聞いた時など

「ネームレスって都市伝説のあれかな?都市伝説と言えば、アカツ

キが神杜の地下で人体改造による人造純正型を作ってたとかって話は聞いたかな？

笑えるっしょ、そんな事してもし上手くいってたのなら、廃都は廃都って呼ばれるほどボロくなってないってねっ」

などとスルッと流されたのだ。その上で

「でもまぁ、そんな連中がもしいるなら、あんまズケズケと踏み込まない事をオススメするねっ。その都市伝説の怖ぁい名無しの亡霊達に連れてかれちゃうかもだからさっ。くわばらくわばらだっ。うん、人間関係は距離感が大事かな」

なんて言って、それとなく牽制しているような口振りをしてくるのである。

もちろん気のせいかもしれない。しかし、彼女の立場――カクリが唯一知る『ネームレス』の片腕たる点を考えれば、気のせいや考え過ぎだとは思えない。

危うく騙されてうっかり忘れそうにはなったが、彼女はあの性悪スマイルの右腕なのだ。この執務室で彼女が仕事をしていたのも、この部屋の『番人』を兼ねているからだと考えられなくもない。

しかし、そういう風にも疑えるというだけで、尻尾を出したわけではない。会話の端々にチラチラと気にかかる箇所は見えるのに――恐らくは『わざと見せている』と思えるのに、核心に触れそうなところは一つもないのだ。

アザミがそうである以上、カクリの方も自分から深入りは出来ない。副官補佐の立場を持つ以上、その役職から踏み出したところまで首を突っ込んで、『同僚』から変に勘繰られるわけにはいかないのだ。

「あぁ、そうそう。カクッちさんはまだこの班じゃ新入りだから知らないかもしれないけどさ」

「……なに？」

「地下は危ないから入っちゃダメだよ？あそこって半ば迷宮だかんねっ」

「……地下に行くつもりはない」

――またも気にかかる言い方をして。

そうは思ったもののカクリは素直に頷いてみせた。

地下に行くつもりはないという言葉に嘘はない。

少なくとも今のところは……ではあるが。

地下に入ろうなどと考えた事はない。少なくともシャケナゲに止められてからは、まだ時期ではないとカクリは考えていた。

なにしろお宝が眠っている事が明らかな場所だ。ならば相応の危険が潜んでいる事も明白だ。

彼が『来るな』という以上、そこのセキュリティはカクリを不法侵入者と見なして牙を剥くだろう。

――今はまだ『その時』ではない。今は三班内に足場を築くべく動く段階だ。

そう考えてカクリはこうして真面目にお仕事をしているのだ。

だから言われるまでもない事なのだが、とりあえず先を促すべく小首を傾げてみせた。

アザミが本当に切れ者ならば、カクリが地下に『興味を持っているだけ』である事はわかっているだろう。

それでも念をいれる意味が気にかかったのだ。

「そっ。最近うちの地下はややっこしいっしょ？アカツキ作のお宝も眠ってたしね。それが漏れたのかチョロチョロしてるヤツがいんのさ」

「……そう」

「うんっ、まぁカクッちさんなら注意するまでもないんだろうけどさっ、一応ここでは先輩のアザミさんからの注意事項だっ。まっ、地下は三階を過ぎたらごっちゃごちゃらしいしさ、普通に迷宮みたくなってるみたいだからねっ。とにかく危険なんさっ、あそこは」

――地下、地下か。

ノーフェイトがあるのも地下。

街に張り巡らされた地下道も三班の本部に繋がっている。その地下道の把握、管理を一手にしている事こそが三班を特別な地位に押し上げているのは間違いない。

この街で過去行われた防衛戦において、複雑に入り乱れた地下道がどれほど大きな力となった事か。

そんな用途とアカツキの遺産以外にも、ここの地下にはまだ他に何かあるのか。

そんな疑問を抱くも、それは表に出さないままで神妙に頷いてみせる。

元より自分一人で危険一杯謎一杯、秘密も一杯ではあるが、秤が明らか『リスク』に重きがいくような場所に赴くつもりはない。親の虎がいる事が分かりきっている虎穴に入り込むのは、命がいらないバカのする事だ。　いかに大枚で売れる虎児がいようが死んでは意味がないのである。

もし誰か――そう、幻影やら風塵やらが虎児を得たなら、それを掠め取るか交渉で得るかぐらいにしか考えていない。
もちろんその交渉や策略も命懸けとはなろうが、自ら虎穴に入るよりはまだ全然マシだ。

ここでの蛮勇、リスクの高い行動は、カクリにとっては自らの命にも等しいカーリアンにも降りかかる事になる。自分達に付いてきた元二班の仲間にもかかるだろう。
自分一人で綱渡りをするならまだしも、両手に他人を抱えてそんな真似は出来ない。
それが分かるからこそ、今の彼女には賢く、堅実に表舞台をいくしかない。謀略ではなく長期的に組み上げた戦略、そして積み上げた実績と信頼で『自分が手に出来る情報の上限』を広げていくしかないのである。
そうでなければ、シャクナゲの言う事を素直に聞いて、しち面倒くさくて不慣れな仕事などやってはいない。適当に切り上げて、三班の中でも袖の下が有効そうな人物のリストを作ったり、幻影やら風塵やらに渡りをつけて、欲しい情報の代わりに三班の中から働きかけたりぐらいはしただろう。
カクリは幼い外見ではあるが、かつての二班時代は黒鉄七班の上層部では最年少を誇っていたのだ。海千山千の黒鉄上層部を相手とり、隙さえみせれば干渉してくる民政部の古狸を向こうに回し、問題児筆頭であったカーリアン率いる二班を維持してみせたのは、一重にカクリの立ち回りの狡猾さと巧みさによるものだ。
黒鉄七班の中で最も精強で、実績も名声もある三班に頻繁に出入りする事によって二班と三班の親密さアピールしてみせた他、借りを受けた相手には誰が相手であれ働きでもって等価以上に熨斗を付けて貸しを返してきた。
それは貸しを返すという意味以上に、自分の価値を内外に示す機会として絶好のものだった為だ。

辛酸を舐めた事も決して少なくはなかったが、それでも舐められっぱなしではいなかった。

他人に舐められたままで終わる事が、東海という他の地方から流れてきた自分達にとって、どれほどの弱味になるか。そして身寄りもなく、後ろ楯もない自分達がこの街の仲間になる為には何が必要かが分かっていたからだ。

この辺りの押し引き、そして行動の硬軟を自在に使いこなせなければ、曲者揃いの班長連や副官連を相手に一つの班の副官を張ってはいけなかっただろう。

外に示す力と名前は東海地方最悪の同族殺したるカーリアンが受け持っていたが、その看板を裏から支え、しっかりと足場を固めて、この街になくてはならない仲間となる為の実績を積み重ねてきたのは、まだ年若いカクリの手腕に寄るところが大きい。

「うんっ、まぁアオイさんお気にのカクッちさんなら下手は打たないだろうけどねっ。ウチに入ってきたおバカさんやら密偵やらは、大抵最後には地下に目をつけるからさっ。そんで行方不明になるってオチがつく事も多いし、一応忠告をばねっ」

「……下手を打つつもりはない。……今の私はたった一回の馬鹿でもしでかす余裕がない。……だから『正攻法』しか取れない」

一つの失敗、僅かなポカで、いまさらこの三班から放り出されるわけにはいかない。

放り出されはしなくても、班の中で孤立するわけにもいかないのだ。

何故ならカクリは、仲間達全員を引っ張ってすでにベットを済ませた後だ。掛け金は今までの二班での立場と自分の命。そして仲間達の未来。

自分みたいな小娘が抱えるには余りにも重すぎて笑ってしまいそ

うになるけれど、抱えてしまった以上は仕方がない。
最低でも今までと変わらない程度の生活は送らせてやりたいし、今までと変わらない程度の毎日は送っていきたい。
だからこその正攻法だ。

「それがいいよ、どんな事であれ正攻法がやっぱり最高さっ。それならウチの連中も文句は言わないだろうしねっ。急がば回れ。カクッちさんも信頼が置かれ、それが必要な時が来たなら地下が見れる時もあるさっ。ま、楽しみにしといてよっ。
――なぁんて言ってはみたものの、このアザミさんも地下は五階までしか行った事はないのでした、まるっ」

「……あなたってほんとに変な人ね」

「あっはっはっ、よく言われるよっ。自分では親切なお節介さんのつもりなんだけどねっ」

親切なお節介焼きは自らをそう評したりはしないだろう。少なくとも目の前の女性はそんな評価を下せる相手ではないというのがカクリの印象だ。
仕事ぶりや話をした感覚からしてやり手である事は間違いない。だらしない風体が素なのか、はたまた見せかけなのかはいまだに分からないが。
だが、それだけなら別に問題はない。いずれは政敵になり得るかもしれないが、今の状況では頼りになる事も間違いないからだ。
問題なのはアザミから受ける印象だ。彼女の印象、彼女から感じる雰囲気が、どこかシャクナゲよりもアオイに近いものを感じるのである。
カクリはカーリアンほど鋭い直感は持っていない。一目見ただけで人の本質を見抜くような眼力もない。それは間違いない。

しかし、明るく朗らかで能天気にしか見えない彼女に何故か『アオイ』が被る。どこかあの『自分よりも上』の男の影がチラチラと見える気がするのだ。

シャクナゲもアオイも、二人が二人とも油断ならず、裏を幾つも持っているタイプである事は間違いない。しかし、二人から受ける印象は明暗がはっきりと別れている。

どちらが明でどちらが暗かは言うまでもない。

匂い、と言えばあやふやだ。雰囲気はアオイとアザミでは全く違う。それでも感覚的なものまであげれば、彼女にはアオイに近い匂いを感じるのである。

そして『性悪』だの『陰険』だのとさんざん言ってきた通り、あの副官は絶対に親切なお節介焼きなどではない。ならばアザミが意味もなく親切だったり、裏もなくお節介を焼いたりするとは思いがたいのだ。

「カクッちさんが何を考えてるか、当ててみせよっか？」

そんな思考にふける間も、休む間もなく口を動かし続けていたアザミが、ふとその口許をいたずらっぽい笑みに変えてそう言った。

それについ身体がビクッと跳ねそうになるのを、理性と根性と気合いをフル動員して抑え、カクリ思わず心中で舌打ちを漏らす。

――まだ私は油断をしている。思考を完全に消せ。アザミがヘルメスと同じタイプの能力者じゃないとは限らない。意識を数に向けろ。素数を数えて、完全数を挙げろ。円周率を並べられるだけ並べるんだ。

六班班長『夜鶴』のヘルメス。

彼女の能力は『思考誘導』。そして他者の意識や感情の把握だ。

つまり『自分に敵意や疑心に似た感情を持つ相手を見抜く』事が

出来る能力なのである。
非常に珍しい能力ではあるが、彼女固有の力というわけではない。他にも似たような能力を持つ者ならばいるだろう。
そういった能力は、カクリにとってはまさに天敵とも言える能力だ。それだけに対策は練ってきてはいた。いや、出来るだけ練ってきたつもりだった。
ありったけの数を頭の中で羅列し、記憶から数式を無茶苦茶に引き出し、思考を出来るだけ切り離す……単純に言えばそれだけではあるが、カクリはヘルメスと相対した時はいつもそうしてきていたのだ。

今もそれを実行しようとして。
変に勘繰りすぎている事は自覚していても、警戒はいくらしてもしすぎるということいつも通りのスタイルを貫こうとして。
次の瞬間には、頭に浮かべていたあらゆる数式も危惧した憂慮もあっさりと消し飛ばされた。

「今日の夕飯の心配だねっ！間違いない、ファイナルアンサーだっ、うんっ」

「……はっ？」

そして目が点になった。
しかし、そんなカクリの様子にも『分かってる、分かってる』と言わんばかりに頷いてみせてアザミは続ける。

「皆までいわなくてもいいさっ、実はいい店があるんだよねっ。ウチの班御用達の隠れ家的名店だよっ。そこはなんとっ！我が班のエースにして栄えある班長、黒鉄のシャクナゲもたまに通ってる店な

のさ。かつてシャクナゲと合わせて黒鉄の二枚看板だった、あの『錬血』のミヤビもお気に入りだったほどの料理屋でさっ……ってあれ？なんでカクッちさんは転けてるのかなっ？」

「……バランスが崩れただけ。……気にしないで」

この女は本当によくわからない。

わからないままで終わるのは癪にさわるし、カクリのポリシーにも反するけれど、彼女の事を理解するにはまだまだ時間がかかる事だけは分かった。

――このキャラを狙って作ってるんだったらかなり苦手な相手かも。

嫌いな相手でも目障りな相手でもなく、『苦手な相手』。

それがアザミに対するカクリの印象だった。

実は三班上層部全員が、アオイの片腕たる彼女に対して似たような印象を抱いていたりするのだが、そこまではさすがのカクリでも分からない。

図々しいように見えて裏がありそうで、ずぼらに見えて時折細かくて、大雑把に見えて芸が細かそうなところが、ほとんどの仲間達から掴み所のない変なヤツだと印象付けているのだ。

――みんながみんな、ヒナギクみたいな分かりやすい相手なら良かったんだけれど、さすがにそうはいかないか。でもまさか同僚として面通しした副隊長の二人目でここまで疲れる羽目になるとはね。

正直先を考えれば憂鬱で面倒でとことん気が重くなった。

とりあえずしばらくはアザミと交流しただけで満足し、様子を見てから他の二人にも顔を合わせよう……そんな事を考えていたカク

リに、アザミはニコニコと笑いながら追い討ちをかける。

「じゃあ、今日はヒナやリンドウ、ついでにサツキも呼んで、ちょっち遅くなったけどカクッちさんの大歓迎会って事でいいねっ！」

「……歓迎会っていつ決まったの？……それにリンドウとサツキって」

「ありゃ？知らない？猫んとこの根暗リンドウと雉んとこの生真面目サツキ。二人とも一応一隊の副隊長なんだけど？」

「……知ってる」

黒猫隊のリンドウと黒雉隊のサツキ。

それぐらいはカクリも知っている。問題はそこじゃない。

今日いきなり大歓迎会をする事になった経緯と、その二人がそこに参加するらしいという事実。さらに言えば一応主賓扱いらしいカクリの意志も聞かず、もはや決定と言わんばかりのアザミの口調にげんなりとしたのだ。

――もう好きにして。

嬉しげな鼻唄混じりにペンを振るうアザミとは対照的に、疲れが滲んだ嘆息を隠しきれないカクリは、ガックリとその細い肩を落としたのだった。

番外・白き少女、廃都にて困惑す2（後書き）

とりあえずアザミンを出しました。
どうするつもりなんですかね？キャラを増やし過ぎでしょ。
とは思いつつも、懲りずに出してしまった怪。

三班の体制とか、ちょっとした設定とか書く話だったんですけど、なんかアザミとカクリって書いてると話を区切るのが難しいんですよね。
カクリはあーだこーだ考えるし、それの補足も必要になる。アザミは喋るだけ喋ってるくせに、何か喋ってない箇所もあるっぽい……
そんなコンビは締めが難しいんす。
とりあえずカクリの大歓迎会については、そんな事をする事になりましたよ、で切ってしまって書かない予定です。
終わらないんですよね、この二人。
だからぶっちぎって次回は陰険で性悪でエセでスマイリーなあの人がでます。
次回はちゃんと来週の月曜に更新いたしますので、よろしくお願いいたします。

番外・Ｎａｍｅｌｅｓｓ？

――ひょっとしたらこの潮風と青い空も、本当ならば私でも気持ちがいいものとして感じたりするのだろうか。

抜けるような青い空と、内海特有の濁った潮風を全身で受けながら彼はふとそんな事を考えた。

そして小さく嘆息を漏らすと同時にそんな考えを放棄する。

かつて色々と感じられた過去の自分を惜しむ気持ちすらも浮かばないのだから、そんな疑問に答えなど出るはずもない事に思い至ったからだ。

そして小型の漁船……いっそ手漕ぎボートにエンジンとプロペラを着けただけといった方が早いものから伝わる波の揺れを、腰かけた面から感じながらそっと空を見上げる。

濃厚な海の香りが乗せられた風は、彼の長髪といってもいい髪を煽り、身体中をあぶるように抜けていったが、彼にはそこにも爽快さなどは微塵も感じられない。

粘つくような風は服を煽って面倒だったし、服が張り付く感触にも違和感しか感じない。青い空は視界に眩しいだけだ。

彼にとっての海の香りとはプランクトンの死骸が発する死臭でしかなく、流れゆく潮風はそれを撒き散らす運び屋に他ならない。微生物が絶え間なく死にゆく事によって発せられる独特の香りに、海

という場所を連想する事は出来ても、それは臭いが記憶に結ばれて算出された検索結果に過ぎない。
それ以上の感慨など全く浮かばないのだ。

――昔の私だったなら何かを感じたのだろうか。

そうは思っても、昔を思い返す事すらもしない。
いや、彼にはそれも『出来ない』。
彼はそういった感情、感慨、常に移ろう思想なとの全てを捧げて力を得た人間だ。いまさら過去を懐かしむ感覚など残っていない。
浮かぶのはそれの残滓でしかなく、よりあわさっても完全に復元はされない欠けたピースの一片だ。

――痒いところに手が届かないむず痒さ。それに似た感覚と、自分の不完全さを自覚出来ない曖昧さには慣れたけれど、時折よぎる過去の感覚は面倒だな。今でも思考にノイズが走る。

彼の力は、アカツキという一人の人間に与えられたものでありながら、人間という種族の中では最高峰の異能力を持つ『純正種』にもひけを取らない力だった。
『あらゆる物質が持ちうる別の形への強制変換』と、『あらゆる物質がやがて辿る終局、存在そのものの停滞』を約束された力。
それらは間違いなく個人が持ち得ていい類の力ではないだろう。
変換は使いやすく、上手く使いこなせばより上位の力を持つ人間とも戦えるだけの応用性があり、停滞は個人あるいは一個の物体のみを対象としか出来ずとも『絶対の停滞』を約束する力だ。
確かに力の強弱、理が現実に及ぼす影響はどちらもしれたものだ。
この二つは無から有を産み出せない。有を無に返すにも代償がいる。
純正種の能力と比べれば確実に並よりも下だろう。
しかし頭の回る人間ならば、それらを使いこなす人間などよりも、

『それらを産み出した人間』の方を驚異と感じるに違いない。
何故ならそれは、『一人の人間が別種の理を使いこなす純正種を人工的に造り上げた』に等しいからだ。

人間の変種の力が果たして神と呼ばれる何かに与えられたものなのか、はたまた進化……あるいは退化によって得られた必然の産物なのか。そこに結論を出せた者はいまだ一人もいない。
かつての宗教家達は、神によって授けられた奇跡――あるいは悪魔によって授けられた悪意の産物だとのたまった。
そして科学の信奉者達は、人のやがて来たる進化が起こったのだという進化論者と、現在の科学力では解明出来ないなんらかの物質か力場により、既存の人の遺伝子が変質をきたしたのだと述べる遺伝子の変容を唱える者がいた。
しかし彼――ネームレスという名無しの集団の一番は、もう一つの説を唱える者がいた事を知っている。
他の誰もが想像もしなかった説があった事を知っている。
そしてその説を唱えた男は、自らの力でもってその説が可能性ゼロの空論や妄想の類ではない事を証明してみせたのだ。

――私のような凡人にはどの説が正しいのか、いまだ判断はつきかねますがね。あなたの考えが正しかったのなら……さて、どうしましょうか。約束のコーヒーを奢ろうにも、あなたはいませんし。

アオイが唯一敗北を認めた男は言った。

『俺の荒唐無稽な考えが正しかったなら、お前の奢りでコーヒーの飲み放題な？豆はケチんなよ』

そして続けてこう言ったのだ。

『で、俺が間違えてた時の代価は先払いだ。正否に関わらず返却の必要はねぇし、捨て去る事も出来ない。
お前にこれからやる力はな、俺に残せる最大の遺産になるだろう。俺はみんながこれから先の時代にすがるものとして、藁みたいなチンケなモンは残したくないんだ。頑丈でどんな荒波にもまれても沈まない、そんなものを残してやりたいんだよ』

そう言って、彼は四番目となる二振りを遺したのだ。
『変遷する運命の人』と『終局の歌姫』。
『ファム・ファタル』と『ディーヴァ』。
守る者と終わらせる者。
敗者であり、凡人であり、『生ける死体（リビング・デッド）』でしかない死に損ないに、かの輝く者は勝利を盾にとり、有り余る才能をかざし、そして何より死を間近に見ながら約束で縛り付けた。
感情を奪い、変遷を奪い、名前を消して死に場所すら固定した。

今ではアオイという名前だけで呼ばれる彼にとって、勝者であり、強者であり、弱者でもあり、すでに死者でもある彼は、希望を残した聡明なる指導者でもなければ、その存在を誇れるだけの仲間でもない。
あの純正種は卑怯者であり、外道であり、人外でしかなかった。
約束と契約、記憶と過去で縛り付けて他人の一生を固定した卑怯者。
唯一無二の力を持ちながら、自らのエゴにのみ従った使い方しかしなかった外道。
そして人という種を超えた領域に他人を誘う……誘う事が許された人外。

誰も彼もがアカツキという名前を称えても、その業績を不動のも

のとして奉っても。

全てを無くして、自分すらも亡くして、名前や過去すらも失くした代わりに、『絶対なる客観視』を得たアオイからすれば、アカツキという人間は災厄の手先であり、地獄への道標でしかない。

彼が黒鉄を造り上げ、その上でも徹底的にエゴを振りかざしたから死んだ仲間達がどれだけいるか。

アカツキならばもっと上手く、死者やそれに殉ずる被害者がもっとずっと少ない値で、今よりもさらにいい状況へと持っていけたはずなのだ。

彼は『百識』と呼ばれた策謀家を打ち負かした知謀があり、ウィザードクラスのハッカーであり『情報を得る者』としては最上位の能力をも持って生まれた、灰色に従う女性も味方にいた。

何より『皇』を味方に引き入れた。

偽りの皇たる坂上など相手にならない。格が違うどころか断絶している。

それでもアカツキは多くの仲間に傷を負わせる道を選択した。仲間が死に、土地が荒れ、人が他者の血で濡れる道をだ。

皇の名前や始祖の名前に二つ名がつく事から考えれば、その男――関西の本当の皇につけられるべき名前は『大罪の皇』だろう。

関東の始祖が大罪を犯したのは間違いない。しかし、アカツキの選んだ道がそれに劣るとは思えないのだ。

絶対的な支配者とならず、完全な指導者にもならず、完璧な道標にもならない。

それら全てをこなせる力量がありながら、彼は全く違う道を選んだのだ。

――それでも……そんなアカツキのエゴイズムと歪みを知った上でも、あの人は感謝していると言っているんでしょうけれど。

アカツキに縛り付けられた最大の被害者にして犠牲者。
アオイの考えからすれば、彼にはアカツキを恨む権利が十分ある。
死んだ黒鉄の仲間達などよりもずっとだ。
アオイからすれば死者は過去でしかない。刻まれた記録であり、すでに存在しない影に過ぎない。だからアカツキを恨み、罵り、貶める最大の権利は彼にこそあると思う。
生けるだけの死者である自分はそんな資格などとうに放棄していて、力を得た代償と納得せざるを得ないぐらいに壊れているけれど、彼はそうではないのだから。
感情があり、思考があり、過去がある。
皇の道を逃れた先で用意されていたのは、決して救いなんかじゃなかったはずだ。さらなる罪の螺旋で、血と死と絶望の連なりでしかない。
それでも彼は『感謝している』と言う。
アカツキを『友』と呼ぶのだ。

アカツキのせいで、彼は自らの幕を引く事も出来なくなった。
そうすればもはや苦しまなくて済んだはずなのに。
ずっと逃げ続ける選択も放棄させられた。
逃げ続けた先に息を潜めて隠れ潜んでいれば、ひょっとしたらその先でちょっとした幸せじみたものを掴む事もあったかもしれないというのに。
世界が、国が落ち着く頃には、彼の絶望も多少は癒えていたかもしれないのに。
それでも、今も自分の上にさらに絶望と苦悩を上乗せしながら…
…『あいつは本当に他人任せで自分勝手なヤツだよな』なんて事を言いながら、その場を放棄はしないのだ。
――なぜなのだろう

全てを無くして、全てを無くしたが故に、無くした事すら悲しめない彼が、唯一残念に思う事があるとすれば、その疑問に答えを見出だせそうにない事だ。

あらゆる可能性を考慮し、現状と量り合わせてみても、感謝より恨みの方が多くて重いと思われる。

アオイと呼ばれた彼がそう計算したのだから、その答えに間違いなどあるはずがない。それは自信ではなく確信だ。

でも彼は間違いなく感謝していると言う。

恨み言の末でも笑っているのだ。

――私には一生答えが見つからないのだろうな。

それは諦めたが故の答えではなく、変えられない真実だ。

彼はネームレス・ワンとして生きて、名前なき死体となる最後が約束されている。

彼自身が得るものなど何もなく、得たものに感慨もなく、やがて朝日が上がれば消える亡霊のように混迷の夜明けには消え去るだけだ。

そんな存在に答えなど見つかるはずがない。見つけられる道理がない。

生ける死者が得るべきは、本当の死者となる未来だけでしかないのだから。

「……せっかく一人でゆっくりと思案する時間が持てたというのに、やはりそんな時間は長く続かないな」

それでも――そんな彼でも、何もする事がなく一人で思案にくれ

て、物思いにふける時間ぐらいはあってもいい。
何より、それぐらいの休暇に見合う程度には働いているはずだ。
提督と呼ばれる少女率いる『瀬戸内水賊衆』と渡りをつけ、しっかりと不可侵の約束を取り付けただけでも、優秀な人材何人分の仕事量になるか分からない。

「それでも束の間の休暇を得る資格にもならないなんてね。彼じゃないけど、神様っていうのはやっぱりいないらしい」

――いても、働き者であれ亡霊でしかない名無しには加護を与えてはくれないかもしれないけど。

そう一人ごちて……後方から高速で迫る三隻の漁船を見やる。

『わたしに従う連中には廃都への攻撃は控えさせるよ。この本島――わたし達の本拠地周辺に住むヤツは従うと思う。あんたの『変換』の力も見ただろうしね。
でも、形ばかり従ってはいる連中がどう出るかまでは保証しないよ。いかな『漣』でも……そして純正型であっても、わたしみたいな小娘に従いたくないって内心で思ってる連中は少なくないからね』

そんな提督少女の言葉を思いだし、今迫る三隻に乗る連中がそんな人間だと判断してもいいものかと素早く思案を巡らせる。
とりあえずこの瀬戸内で提督の指示に従わずに海賊行為を働く連中や、不可侵を結んだ黒鉄の人間に害をなす連中は、瀬戸内水賊に敵対する者として排除してもいいとは言われていた。
しかし、もしこの連中が提督の側近連中であり、漣海月という『幼く見える少女』の判断を不安に思い、よかれと判断して勝手をした連中であれば瀬戸内水賊衆に禍根を残すかもしれない。

彼女はアオイから見れば優秀であり、長たる器量を持っている人間だと判断出来たが、まだ幼くも見える外見がその才能に全く付いてきていない事も事実だ。それは時間が解決する他ない問題ではあるが、それだけにどうしようもないものでもある。

提督の言う『本島』の連中は、アオイの力を間近で見てはいたが、それ以上に彼女の幼い外見もずっと見てきたはずである。ならばこそ、いざという時は勝手に動く可能性もないとは言えない。

黒鉄と手を結ぶとなれば周りの反発もあるだろうし、アオイの力を見たからこそ驚異を感じている面もあるだろう。それも間違いない。

――真偽はどうであれ、近寄らせなければいいだけの話か。勝手をした欲深な連中であれば提督が手を下すだろうし、側近連中なら叱りつけてくれるだろう。

まったく、深く色々と考え過ぎるのは私の困った性だな。

結局はそう判断して。

三隻の漁船がまだ何も出来ない位置にある内に、抜き放った『恋人』を海面へと突き立てる。

「……変換せよ、私のファム・ファタル」

――あの連中に近寄られたくないんだ。君の力ならどうにでもなるだろ。

内面の思いをいつも通りの言葉に変換して。

腕に絡み付く『歌姫』には好きにさせて、『恋人』に刻まれた理だけを発動させる。

途端、蒼白い冷気をあげた海面は、アオイの乗ったボートの後方を氷原へと姿を変えた。ガリガリと盛大な音をあげて推進源たるプ

ロペラは氷を削り、あっという間に一隻の船は氷原へとその船体を乗り上げる。残りの二隻は白い霜に覆われてその場に縫い付けられていた。

「わざわざお見送り頂きありがとうございます。提督にはよろしくお伝えください。黒鉄のアオイが感謝をしていたと」

そしてその上でそう慇懃に頭を下げると、スピードを落としノロノロと進むボートの上で、海面から引き抜いた恋人を軽く振るってボートの後部に迫る巨大な流氷を斬り砕いた。

氷に包まれ動かなくなった二隻と、氷原に乗り上げ横転した一隻から視線を向けてくる相手に自らの力を示すかのように。

「ではごきげんよう。いずれ敵としてまみえる事があった際には、心苦しくはありますが立場上手加減など出来ませんので悪しからず」

その言葉を最後に抜き放たれていた『恋人』をくるくると勢いよく回し、その刀身を滴っていた海水と氷の欠片を振り落としてから鞘に納める。

後方で何やら叫んでいる声に視線すらも向けない。

――提督も苦労しているようだ。

そんな思いに、能面じみた顔に苦笑いじみた表情を被りながら。

――いつかはあの聡明な少女を、自分がこの手で殺す未来もあったりするのだろうか。

そんな考えにもなんの感情も浮かんでこない自分に、やはり何も感じたりしないまま。

番外・Ｎａｍｅｌｅｓｓ　？（後書き）

アオイさんて難し……。
とりあえず書いてて『～に笑いそうになった』とか『悲しくなる』などの感情表現が使えない。
多分今までも使ってなかったと思うけど（多分ね）、それって難しいんですよね。
書き手泣かしなキャラナンバーワンです。
とりあえず次回はシャクナゲ、ナナシ。

……実はナナシとネームレスって意味と名前が被ってる事に、何故かいまさら気付いたり。

「なんで最後の最期に笑ってんだ……そんなとこまでいちいちムカつくんだよ、お前」

肩口から切り裂かれた痕からは、炭化した肉と焼けた黄色い脂肪が覗き、ピンクの内臓までもがリアルに表現されていた。

そんな過去の自分に、シャクナゲは吐き捨てるようにそう言ってぐしゃぐしゃに自らの黒髪をかき混ぜる。

もはや自分の『世界』には災厄の残滓しか残っておらず、一色のみの灰色だけが広がっていた。

理を現す万の鎖もそこに乗せられた力もなく、ただ広がる灰色の原野と、安堵したようにも見える渇いた笑みに口許を歪めた『灰色の残滓』のみがあるだけだった。

「……死が救いってか。歪んでんな、俺」

その残滓はまさに自分そのものだった。

在り方も、荒れ方も、歪み方も、その死に様さえも。

死して笑い、生きて苦痛にまみれるその姿はまさに自分を模写したものでしかない。

「はん、先に逝ってろ。もう一人の……今とは違う先にいた俺。お

前の歪さはまさに俺そのものだったよ。それだけは忘れないでいてやる」

生きて戦場の修羅、死して一握の灰――。

それは本来辿るべきだった『可能性』だ。本名を捨てられず、捨てる機会すらもないままただ沈むだけだった自分の成れの果てだ。

本来なら彼も自らの死を間近見た時には、歪んだ渇いた笑みを刻んでいただろう。

徒花の名前を得ず、選択を与えられなければ、彼は彼たりえなかった。アカツキという歪みに出会わなければ、彼は彼になれなかったのだ。

だからこそ目の前に転がる本当の自分に吐き気を覚え……同時に張り裂けそうなほどに胸が痛くなるのだろう。

「……奈落の果てで見てろ。俺は――この俺がお前に出来なかった最悪の罪を犯してやる」

今も泣いているであろう少女が脳裏に浮かぶ。

圧倒的で絶対的な力を与えられてしまっただけの普通の少女が独りぼっちで泣いている。

――助けて、私を止めて。

そう言われた事はなかったけれど……そんな弱音は誰にも見せない少女だったけれど、間違いなく彼の知る少女はそう言って泣いていた。

漢字が違うだけで同姓同名の少女。

産まれた日も、産まれた場所も同じで、同じように『ただの人としては産まれられなかった少女』。

――あぁ、俺が止めてやる。今度こそは俺が止めてやるよ、りぃ。

力の衝動とそこに潜む抗い難い快感。
他者を圧倒し、ひれ伏させる優越感。
何かを壊すという選択肢を持つ全能感。
そして誰かにすがられるという重圧感。

それは人を壊すには十分過ぎるほどの要因となる。
絶対にこいつだけは大丈夫だろう、こいつほど人間を信じられるヤツなんかいないんだから――そう彼が信じた少女でさえも、その重みには耐えられなかった。
何年も耐えて耐えて耐え続けて。
結局は何も報われず、ただより最悪な状況へと転がり続ける現実に、もう『何も我慢しない』という安易な道を――全てを壊してから『自分の居場所を作る』という簡単な選択を選んでしまったのだ。
その道を選ぶしか彼女にはなかったし、許されなかった。
もし彼女が関西に生まれていて、関東にアカツキが産まれていたのなら、その立場は全くの逆になっていただろう。
それは単なる仮定でしかなく、なんの意味も持たないＩＦの話に過ぎないけれど、間違いなく彼女は不幸で、アカツキはまだ幸運だったんだと思う。
それほどに『故郷』は地獄だった。関西の騒乱など比べ物にならないぐらいに最低だった。
あの地は『普通』じゃないものにどこまでも優しくなかった。最悪に『普通以外』を嫌っていた。

――この国はは狭いね。わたし達が普通に生きられるだけの場所もないなんてさ、この世界は狭すぎるよ。

かつて嘆いたその地獄（世界）に……その時よりもさらにずっと壊れてしまった現実に、今も取り残されたままでいる彼女。
そんな彼女の為に、『壊す』事しか出来ない世界を与えられた彼が出来る事など一つしかない。
壊れきってしまった故郷を元に戻せない以上、たった一つしか許されていない。

――彼女の絶望にまみれた今を終わらせる事。
これからも続くであろう今を壊す事。
つまり彼女自身の道を終わらせる事だけしか。

「はぁ、まだ俺にしがみついてんのかよ。そんなしつこさは本当に『持ち主』そっくりだな。
でも、もういいだろ。
……どけよ、ノーフェイト。運命を否定し、現実を否定する事しか出来ないお前なんかじゃもう俺は止められないんだよ」

過去を思い、彼方を思う間も自分を留めようと僅かに足掻く力がある事を感じて、彼は冷たい声で吐き捨てた。
目の前で死に様をさらす存在が、いまだ消えずにそこにある事こそが、『運命毒』が自分を捕らえよう足掻いている証だったが、もはやそれに対しても何かを思う事もない。
かつては怖れ、嫌悪し、ずっと手を付けずにいたそれ。
それに単に『邪魔だ』と告げ、『どけ』と命ずるだけだ。

「だから、だからっ！消えろぉぉぉ――――――！！」

轟。

荒れ狂う灰色世界はその領域を満たす灰を巻き上げて領域を満たす。マスターであり皇である男の意思に従って、灰色の理をより強固に広げていく。

歯車はカラカラと廻り、ガラガラと軋みをあげ、ゴロゴロと獰猛な唸りを発して世界をより濃厚な異界の空気で溢れさせる。

『具現』――あるいは『記憶』の世界は、『他の純正型の力を本来は認めていない』。そこに現される事を許さない。

それは『あらゆる記憶（力）』を現すこの世界においての原則であり、灰色世界における原点だ。

この世界は純正型の力を現せない。

理に記憶された力と同質の力を持つ他者が内部にいる場合は、これもまたその力は現せない。

それだけは絶対に覆せない。それが理だからだ。

『全く同質で差違の全くない力』はそれそのものが矛盾であり、灰色の理に軋みを生む。

そして、世界に世界を混ぜ合わせる矛盾に灰色の異界は耐えられないのだ。

他の純正型が、灰色世界に入り込んで自らの領域を広げたならば話は違うが、ここにいる純正型は『彼一人』。ノーフェイトという、『夢』を現す理とて本当ならば許されない。力を振るう事など許さない。

何故ならそれは『純正型ではなくあくまでも器物でしかない』のだから。

理は持っていても、それを使役する世界も純正型もいないのだから。

それでもノーフェイトがその理を入り込ませたのは、彼自身が『その夢を望んだから』だ。

甘さを望んで、あり得ない仮定を覗き見て、そこに浸っていたかったからに他ならない。

世界の核たる彼自身が迎え入れたからこそ、ノーフェイトという例外は持ち主不在のまま入り込み、純正型という存在はいないままその力のみを発揮したのである。

――でも、それももう終わりだ。

もうあり得ない仮定を見て、夢を見て、可能性を越えて、彼はもう『それ』を必要とはしなくなったのだから。

そして『最悪が迎え入れた災厄』は欠片も残さず消し飛ばされ、残滓は一握の灰すらも残らず灰色に紛れゆく。

世界に残されたものはただ灰色の空虚で、空には一つの紅き光。

落とされた水滴は、その世界の王様が溢した夢の残り火。

「……あぁ、くそっ。最悪だ。最悪だよ、気分も何もかもが最悪だ」

目覚めるなりそう呟いて、シャクナゲは倒れていたゆっくりと身体を起こした。

そして服に砂利がついた感覚と、倒れ伏していた顔に残された小石か何かの僅かな跡にさらに毒づいてから、軽く黒髪をかきあげる。

「暗くてはっきりは見えないけど、こりゃ絶対服が埃とかで斑模様

になってるぞ。どうしてくれんだ、俺の数少ない私服だってのによ」

そう呟いておざなりに服を払ってみせて……大きく深い溜め息を漏らす。

「しかもよく考えたらこの上着、アオイじゃなくてエリカが見繕ってきたヤツじゃねぇか。あぁ、くそっ、『地下』で地面に寝転がってぐちゃぐちゃに汚した……なんて言ったら、帰ってきた時にガミガミ言われるな。あいつはアオイよりも口煩いのにってのに」

かつてはいつでも自分に付いてまわって。

どんな場所でも後を追ってきて。

そのせいで散々痛い目にもあってきたはずなのに、全く懲りた様子もなく後ろをウロチョロしていた少女は、アオイやミヤビなどよりもずっと口煩くシャクナゲに構ってきた。

昔からお洒落どころか日常着る服ですら頓着せず、とりあえず着れたらいいという考えしかなかった彼に、それなりに見れる服装を用意する役目を負っていたのは、かつてはその少女とミヤビだった。

二人がいなくなってその役割は新たに副官という役職についたアオイが請け負ったが、当時の服はいまだに残っている。

彼女が出ていってはや二年近いが、いつかは帰ってくると彼は完全に信じきっていた。出ていった理由もはっきりとは知らないのに『とりあえず気が済んだら帰ってくるわよ。あの子が帰る場所はこの街なんだし。可愛い子には旅をさせろって言うにゃ～』

というミヤビの言葉に、疑いなんて全く持っていなかったのだ。

そのミヤビがいなくなった事をエリカが知っているかは分からないけれど、彼女なら知っているんじゃないかと思っている。それでも帰ってこない理由には思い当たらないが、やはり『気が済めば帰ってくるんだろう』という気持ちは変わらない。

「とりあえず洗えば落ちるよな。落ちなきゃ智哉のせいって事でよろしくな」

そう気軽に言って――なるべく気軽な調子でそう言って、軽く掲げた左手から『鎖』を飛ばす。

目の前でコンクリートに先端部を埋め込まれた錫杖に。

その形をした異物のすぐ脇に。

自分の意識を一瞬で捕らえると、内部に入り込み、あっさりと昏倒させて精神世界へと誘った遺物のすぐ間近に。

「ふん、こんなに間近に攻撃を向けても何もしてこないって事は、もうこいつの力は『灰色世界』には入り込めないって事かな」

結城智哉というマスターを亡くしたそれが、もはや今の自分――灰色世界を持ち、造られた夢を求めていない自分の脅威にはならない事を確認すると、苦笑とも取れる小さな笑みを浮かべた。

「……そういやお前に墓標はなかったな。自分にゃそんのもんは必要ないって言って――『身体は燃やして海にでも流せ』なんて言ってさ、残された者に墓参りすらさせてくれないんだもんな」

それを『らしい』と言うべきか、彼の用心深さゆえと見るべきかは分からない。

異質で異常な力を持つ純正型として、自分の死した後の身体が研究素体となる事を嫌ったのかもしれないし、単に海に流して自分の存在を街から完全になくす事で、いなくなった自分を頼る仲間達に自立を促すつもりだったのかもしれない。

「はん、夢を見せる遺物、お前個人のもので遺されたものがこれし

かないってのは……さて、なんの皮肉なんだ？」

他人に荒唐無稽な夢と在り方を示した男が唯一残したものがそれ。

誰も訪れない深淵の底でただ突き立つ様は、まるで寂れた墓標のようで。

「俺だけはまた来てやるよ。俺にぐらいは墓参りを許してくれてもいいだろ」

そう言って、左手から伸びた鎖を地面に突き立てるとコンクリートを連結させた刃を生んだ。

世界は展開していないからこそ、剣軍ではなく一本きりの錬血の刃。今はそれが限界であったが、その一本で『ケリ』には十分だった。

「ふっ――！」

そして突き立ったまま錫杖の頭頂部のみを一呼吸で切り飛ばしてみせる。

突き立つそれを小揺るぎもさせず、『災厄』としての一個の存在を示す『それ』だけを壊したのだ。

「ミヤビなら軽く墓碑銘くらいは刻んだんだろうけど、俺の剣の腕もそう捨てたもんじゃないだろ？結局ミヤビにゃ剣じゃ勝てないまんまだったけどさ、これでも一応暇を見て鍛えたりもしてたんだ」

――剣の素性も悪くないしな。

そう言って握っていた朱の色を冠された剣を、無機質なコンクリ

ート塊へと戻して踵を返した。

「墓参りと約束。この二つを果たすのに一年以上だ。ノロマな俺だけどさ、ノロマなりにやってくよ」

――俺はなんでも出来る人間じゃない。そんな器用な人間なんかにゃなれない。でも、こんな俺でも何も出来ないわけじゃない。そうだろ？

その言葉に返事はない。あるはずがない。

それでも構わなかった。何故なら、それ以上のものをすでに貰っているのだから。

『後は任された』。

『後を続いてくれる仲間』も貰った。

これ以上何かを求める必要などどこにもなく、それ以上を必要ともしていない。

「仲間達は任せろ。ほったらかしになんかしないから。そして全てが落ち着いたらさ、俺は俺のすべき事をしてくるよ。その前にもう一回顔を出すさ。

――今度は血に濡れていない花でも持ってな」

深淵の底にある遺物の残滓。

それは人知れず朽ち果てるだけの遺物。

皇から人へと堕ちた男を、さらなる戦場へと誘った道標の跡だ。

そこを訪れる者は一人もいない。

ただ忘れ去られる事を望むかのように、その存在はたたずむだけだ。

運命を否定し、現実をも否定して。

ただ朽ちる事をよしとするその姿は、自分自身の物は何も残さなかった男の在り方そのものだ。

そして。

ノーフェイトという名前も失った遺物は、今も単に唯一遺されたものとしてそこにある。

個を壊され、力を失ったただの墓標として。

2―48・Ｇｒａｖｅ―ｍａｒｋｅｒ（後書き）

表題は『墓標』。　いや、墓標のまんまにしようかとも思ったんですが、それだと表題からなんとなく連想しちゃ　うんじゃないか、なんて思ったから英訳で。　多分これであってるはず……うろ覚えですけ　ど。

アカツキ個人がアカツキ個人の物で残したも　の……それは実はあんまりないんですよね。　話にも出してないはずです。　災厄といった形ではあっても、それは友人が個　人のものとして唯一残したものです。それをど　う思うか……その辺りが書けてたら嬉しいです。　二部は出会いと再開、歩みがメインですが、　シャクナゲに関して言えば『墓参りに行っただ　け』と言い換えられるかもしれません。

次回、シャクナゲとナナシのお話。　ナナシがかっこよく、不器用に書けてたら幸い　です。　ご期待ください。

2―48・深淵領域にて

カツン、カツン。

僅かな非常灯の光しかない、真っ暗といってもいい地下空間に響く靴音に、ナナシは粘つく唾液を飲み込んだ。

自分がこれから相対する相手。

それに対しての恐怖に思わずナナシの身体が、そして魂すらもがすくむような錯覚を覚える。

闇に対する本能的な恐怖を圧倒的に上回る畏怖。

圧倒的に反則的な力を持つ生まれながらの怪物を相手に、自分は自分らしくいられるのか。そんな弱気は周りの闇を喰らい、深淵の底から響く足音を糧にして膨れ上がっていく。

――はん、知ってたはずだろ、あいつがあの『宵闇』なんだって事ぐらい。新皇なんてはるか東のバケモンなんかより、よっぽど怖いヤツなんだって俺は知ってたはずだろうが。

そう自らを叱咤し、鼓舞してみせても、その身体は僅かに震えていた。

そんな彼の中の弱気を押さえつけたのは、一重に義侠心によるものだ。長としての役割だからではなく、個人的な怨恨なんてものでもない。

元より長なんて立場は面倒なだけで、なりたい者がいるのなら代

わってやってもいいとすら思っていたぐらいだから、ナナシには上に立つ者としてのプライドなんてものもない。
ただ個人的に自分を慕ってくれる子分達、自分を長として立てて働いてくれる者達に、恥ずかしい思いをさせない程度の自分でありたいという思いはあった。
他の者に任せて子分達が苦労する羽目になるぐらいであれば、いかに向いていなかろうが自分が出来る精一杯で役割をこなしてやるという気概もあった。
ナナシは自分が頭の回る人間ではない事を知っている。そして上に立つ者として色々と欠けている自分も知っている。
そんな自分に出来る事は、不死身とも呼ばれるほどの体を張って子分達の代わりに意地を張ってみせる事だけで、子分達に恥じない自分を周りに示してみせる事だけだと考えてきたのだ。

ならば、まだ相対もしていない内から尻尾を巻く真似など、例え神話上の怪物を相手にする事になったとしても出来る事ではない。
ましてや相手は、そんな怪物ではなく自分と同じく人間から生まれた相手なのだ。例え怪物である事は変わらなくとも、何もしない内に背を向けるような真似だけは絶対に出来なかった。

「よぉ、待ってたぜ、くそったれ」

だから闇の中から見慣れた男が表れた時には、ありったけの気合いと根性を動員して自分から声をかけた。
自分から声をかける事で逃げ場をなくしたのだ。

「……ナナシ？」

「それ以外の誰に見えるってんだ。てめぇを殴りにわざわざこんな寂れた場所まで来る物好きなんざ、俺以外にゃいねぇだろうが」

「……そうか、スイレンか。あいつは頭が硬いんだかそうじゃないんだかな」

そう小さく呟いた漆黒の男は小さく笑みを刻んでいて。

その表情にナナシは違和感を感じた。

小さな小さな非常灯だけが等間隔で設けられているだけの、闇が圧倒的な存在感を示す空間で薄く笑っている男。

彼に別におかしな箇所があるわけではない。男の顔はここ一年余りで見慣れてしまったそれで、違和感の源がどこにあるのかはナナシにもわからない。

それでもナナシは、確かに『違う』と感じたのだ。

「お前、本当にシャクナゲか？」

「それ以外の誰かに見えるか？」

ついさっきナナシが言った言葉を真似るようにそう言って、彼は小さく肩を竦めてみせる。皮肉げな笑みを浮かべた表情はやはり見慣れたもので、でもどこか違うものだった。

「見えねぇよ。だから聞いてんだ。なんで――なんでこの短期間でそこまで印象が変わってんだ？坂上の野郎を殺したから、じゃねぇよな。ヤツを殺して気が抜けたって感じじゃねぇ。

――てめぇ、ここで一体何をしてやがった？」

「本当にお前は鋭いな。いや、今までの俺が傍目から分かるほどに不安定に見えてたのかな」

そう言ったシャクナゲは、珍しく本気で驚いたかのように目を見開いてみせる。そして小さくとも深い嘆息を漏らした。

「何を、か。別に大した事じゃないさ。ちょっと昔の自分を――新皇と呼ばれた愚かなガキを殺してきただけだ」

ジャリっと踏みしめられた床面が音を響かせる。

冷たい地下の冷気と闇が身体に染み込むかのような錯覚は、ゆっくりと寒気をもたらしていく。

シャクナゲが語った『自分殺し』という矛盾。

それが比喩的な意味なのか、はたまた言葉通りの意味なのかはナナシには分からない。

誤魔化しや煙に巻く為の言葉遊びの類ではないだろうとは悟れても、その真意はわからない。

それでもその寒気が、彼の言葉が大きな意味を持っている事を理解させた。

「綺麗事じゃやっていけない。そんなやり方が通じるのは、舞台を全部お膳立てされた想像の中のヒーローだけ……そんなセコい現実を俺は知っている。

それを理解していなかった愚かな自分（ガキ）を殺して、本当の意味で前を見れるようになった……それだけの事さ」

そして彼は続けて言う。

視線を反らす事なく真っ直ぐにナナシを見つめて、宣言するかのように言う。

「お前がなんの為に来たのかは想像しか出来ない。

もし俺への罰を下す執行者として来たのなら全てを受け止めるよ。

いずれ来る報いも必ず全てを受け止める。

でもな――今はまだダメだ」

罰は受ける。どんな罰でも受け止める。

でも『今は』ダメなんだ、と。

反らす事なく向けられた視線に、深い闇と固い意思を覗かせて。

今までの『シャクナゲ』のように、皮肉げな笑みで真意を隠すような真似をしなければ、言葉巧みに適当に逃れるような真似もしない。はっきりとそう言って、真っ直ぐにそう宣言して、目の前の男はナナシへとまた一歩距離を詰める。

「俺は失敗した。致命的なミスを犯したよ。命であがなってもまだ足りない大ポカをしでかしたんた。それは間違いない。だから報いを受ける覚悟は出来てるさ。

でもな、俺はまだ死ねない」

まだ『死ねない』と。

今まで『死にたがっているんじゃないか』とナナシには思えてきたぐらいに、ずっと無茶のしどおしだったシャクナゲが――誰よりも命知らずで、まるで『死に場所を漁る』かのように一番不利な戦場ばかりを渡り歩いてきた男が、『今はまだ死ねないんだ』と言った。

勇猛果敢なように見えて、時折どこか弱さや情緒不安定なところが垣間見えていた男はそこにはいなかった。

「昔な、俺が殺した人間に『お前なんか人間じゃない』って言われたよ。身体が半分に千切れながら、それでも消えない憎悪を向けられて『この化け物め』ってな」

身体が半分に千切れながらも撒き散らす憎悪。

それがどれほどのもので、どんな重みを持つものなのかはナナシ

でも想像も出来ない。
彼が知っているのは、死に際に残された言葉はどんなものであれ堪えるものだという事だけだ。

「そうさ、俺は化け物だ。人間なんかじゃない。人外の化け物で、国崩しの怪物だ。殺せる者はみんな殺したし、壊せるだけ全部壊した。父親も俺のせいで死んだし、幼馴染みを闇の深くへと突き落としたまんまずっとほったらかしてる。最低の外道で、最悪の化け物野郎だよ」

父は自分に降りかかる報いを代わりに受けてくれた。故郷を壊し、国を壊した不肖の息子を庇ってくれた。
幼馴染みは、きっと今も泣いている。
地獄と化した地で、生まれ持ってしまった力に振り回されて泣いている。
信頼していた相手から離されてしまった手をむちゃくちゃに振るって、その悲しみから漏れた力だけで『最悪の新皇（一番の化け物）』なんて呼ばれて泣いている。
ずっと一緒にいた愚かな少年を求めて泣いている。
ナナシにはその辺りの事情など分からないはずなのに、漏れでる自虐の言葉は止まらない。ナナシも口を挟んだりはしない。

「でもな、思い出したんだ。思い出しちゃったんだよ。
俺はただ力を振るって暴れ狂うだけの怪物なんかじゃないんだって。『人間として生きる事を親友に望まれた怪物』なんだって事を」

――怪物？はん、おおいに結構。俺みたいな人でなしの外道にゃ怪物の友人が似合ってる。だろ？

――人道や善悪を適当にこねくりまわしておいて、結局自分じゃ

何もしようとしないヤツよりマシさ。綺麗事をただ抜かして、それに沿わない他人を貶めるだけの野郎なんかお呼びじゃねぇしな。

――お前が怪物のお前自身が嫌いだってんならな、俺ぐらいはお前が人間らしい怪物として生きられるように望んでやるよ。目的を持ってて、しかも他人から在り方を望まれた怪物ならそんなに悪かないだろ？

本当に自分勝手で、エゴの塊のような男だったけれど、その男のエゴは誰かの為を思ったがゆえのものだった。エゴでありながら、その中核には必ず自分以外の誰かがいた。

どこまでも自分本位でありながら、自分以外の誰かをも含めて掲げたエゴイズムだった。

だから彼は多くを救えた。傷付けた人間も救った人間以上にいたけれど、救った人間も確かにいたのだ。

「俺は何でも出来るわけじゃない。みんなが思っているほど全てを器用に上手くこなせるやつなんかじゃない。むしろ俺は他人より不器用なぐらいだ。そんな事は知ってるんだ。

でもこんな俺も……何にも出来ないわけじゃない。俺にしか出来ない事がある」

――だから今はまだ死ねない。

罰は受けられない。

そんな資格すらもない。

罰を受けるのは、精算出来るありったけの償いをした後だ。

そう言って。小さく呟くような……でもはっきりとした言葉でそう告げて、彼はナナシに向かってその左手を掲げた。

前方に立ちふさがる形のナナシに、抗い難いほどの圧力をかける

かのように。

「……そこをどいてくれ。まだ俺なんかを必要としてくれているヤツらがいるんだ。

殺さなきゃならない相手もいる。大好きで、本当に大好きで、とても大事な相手だけれど、だからこそ殺してやらなきゃならない相手がいる。

だから、俺を殺したいのならその後にしてくれ」

カツン。

また靴音が一つ、闇の中に響く。

いまだ向き合うナナシに向かって、距離を詰める足音が。

「お前が俺を殺したいなら、この場で俺を殺すというのなら……お前の屍を越えてでも俺は先にいくよ。それぐらいの覚悟はあるつもりだ。

今の俺はな、例え死神が相手でも命をくれてやるつもりはないんだから」

いよいよ増していく圧迫感は、ナナシを完全に捕らえ――

「殴りたいだけなら好きにすればいい。抵抗なんかしない。でも、好きなだけ殴って飽きたらどいてくれ」

――それら全てを、ナナシという男は歯を磨り潰すかのように噛み締める事で、全てを飲み干した。

シャクナゲの言葉を受けて、全身で『シャクナゲ』という男の殺気を受け止めて、それでもナナシは吼えてみせたのだ。

「はんっ、てめぇはいっつもそうだっ！いつも俺なんか相手にして

ねぇ。いつもそうやって適当にいなしてかわしやがる。好きなだけ殴りゃいい、だぁ？
――っざけんなっ、殴らせてもらわなきゃ俺がなんも出来ねぇと思ってやがんのかっ！」

自分はその背に抱えた仲間達の意地を背負ってここに来た。そのつもりで死ぬ覚悟すら決めていたのだ。
例え無謀を笑われても『さすがは黒鉄第一班の班長だ』と他の班の連中に認めさせてやりたかった。
敗れたとしても『自分が最後まで意地を見せる事で、力には絶対に屈しなかった仲間がいたんだ』と、子分達が誇れる敗れ方を選択させてやりたかった。
野盗崩れと裏では蔑まれている子分達に本当の意味での拠り所をやりたかった。
ただ力で圧倒されて、なし崩し的に一つにまとまるのではなく、自分達の存在に誇りを持てる形で終わりにしてやりたかった。
例え三班班長に恨みを持ち、怒りを持ったままでもいい。それが消える事はなくとも、ただそれを衝動のままにぶつけて、その結果惨めに敗れるような結末など与えたくはなかったのだ。
自分がその役を負ってみせる事で――そんな道を最後まで歩んでみせる事で、恨みの連鎖は最後にして欲しいと命懸けで願ったのならば、仲間達はきっとその最後の言葉を理由に矛を納められるだろう。
その為にも、袂を別った末に犠牲者を出しただけで終わるような間抜けな結末とは全然違うものが必要だった。
何より親分として子分達を『所詮は野盗崩れ』、『考えなしで無様な連中だ』などと笑わせるわけにはいかないのだ。
それでは自分みたいな男がリーダーとして立っている意義が何もない。

それらの蔑みに対する憤りですらも、やがては三班の長であり元凶でもある『彼』へのものと代わり、『シャクナゲ』に対する恨みはさらなるものとなって禍根を残すだろう。

「俺を殺してでも先に行く？上等じゃねぇか。それこそ望むところだってんだ。やっと俺を対等と見て、正面から向かい合ってくれる気になったんだろ？」

だからここでの殺しあいは望むところだった。その覚悟はあった。

「俺はお前を下に見た事なんか一度もないよ」

それでもシャクナゲはそんな事を言って……そんな事を顔を背けながら言ってみせて。

ナナシの中に僅かにあった『怯え』を消し飛んだ。怒りに火が入った。

「はん、てめぇはそうだろうさっ。そんなヤツだって知ってらぁ！でもな、正面から向かい合ってきた事はねぇだろうが。

ひょっとしてあれか？本気になっちまったら俺を殺しちまうってビビってんのか、あぁ？」

『正面から向かい合った事がない』

その言葉に、シャクナゲが僅かに唇を噛み締めるのをナナシは見た。目をそらし、正面から背けたのも見た。それは『まだ見慣れたシャクナゲ』の姿で、何よりも腹が立つ表情だった。

「舐めんなっ。死ぬ事が怖くて……てめぇの命が惜しくて子分の命なんざ背負えるかってんだ！

俺ら一班はな、てめぇら三班が勝負を決する為に一番に突っ込む

のが役目なんだ。ずっとそうしてきたし、その果てに死んだヤツらも少なかねぇ！」

ナナシの中で班の子分共の為っていうものが一番に来る事に偽りはない。だが根っこの部分では、シャクナゲと本気で向かい合いたかったという要素も大きかった。

何故ならナナシは、誰よりもシャクナゲを認めていたのだ。アカツキやアオイ、カーリアンやオリヒメなどよりもずっと彼個人を認めていたのだから。

だからこそ、隠されていた事や騙されていた事などより、今の現状になってもまだ自分から視線を背けるシャクナゲが気に入らなかった。

言葉だけ、視線だけは真っ向から向かってみせても、『殴りたいだけなら好きにすればいい』などと最後に逃げ道を残す事が許せなかった。

そう言って、『ナナシに格好を付けさせ、安易な結末を得よう』とする姿勢は、『自分が唯一ライバルだと認め、張り合ってきた男には見合わない』。

そして一目見立た時から本気で惚れた少女が、ずっと追いかけている男だとは信じたくない。

それらがナナシに恐怖を忘れさせた。怯えによるものではなく、怒りから猛々しい声を上げさせたのだ。

「『騙してた』なんて糾弾をするつもりは俺自身にゃさらさらねぇんだ。悔しいのは悔しいし、ムカつくのはムカつくし、ぶん殴ってぶっ殺してやりてぇよ。それぐらいは思っても仕方がねぇだろ」

「……そうだな、そう思うよ」

「でもな、いまさらだって気持ちもあるんだ。てめぇが一番命を張

ってた事ぐらいは一班を仕切ってる俺が一番よく知ってるし、てめぇが必要なヤツだってのも俺は理解してんだ」

その言葉に偽りはない。だからナナシは目をそらさない。シャクナゲからも、そして自分の言葉からも目をそらさない。それが国をメチャクチャにした者と戦う黒鉄七班の一つを預かる者としては相応しい言葉でなかったとしても。

口に出して言った事はなかったが、一班に所属してその先頭に立っていたからこそ、三班の先頭に立つ男がどれだけ命を張ってきたかを知っている。

どれほど黒鉄の仲間達に必要な存在だったかを知っているのだ。

「でもな、死んでったヤツらは違う。あいつらはな、この俺の背中を見て死んでいったんだ。死地の真ん中で、俺に色んなもんを預けて散ってったんだよ。この俺のこんな背中を追って死んでったんだよっ！そんな俺がっ！そんな俺だけが保身に走れるかっ！」

でも。それでも。

今のシャクナゲを相手には退けない。

生きている仲間達の為だけならば、今後の事を理由にする事は出来るだろう。これからも戦い続ける為に必要だから――という言い分は、恐らく我慢を強いるにたる理由になる。

宵闇たる『彼』の恐ろしさも、シャクナゲたる『彼』の頼もしさも、一班の班員達は十分に知っているだろうから。

――でも今に繋がるまでに落としていった仲間達の命は？

自分が死なせてしまった子分達には？

過去にしか生きられない死者達にそんな言い分が立つのか？

自分もシャクナゲも、『これからに必要な存在だから』と言って、安易に今までから目を背けて許してしまっていいのか？

しかも『自分を真っ向から見てこないような男』を、自分に付いてきた仲間達に『必要だから』と納得させられるのか？
自分を慕ってくれた者達に……生きていようが死んでいようが、ナナシという男に従ってくれた事がある者達に、自分を見ないような男を信じてくれなんて言えるのか？
その命を張ってくれだなんて言えるのか？

答えは絶対に『Ｎｏ』だ。

「……殺しあうぐれぇに全部賭けて、この俺と真っ向からぶつかってみろよ。そうすりゃてめぇの本気を認めてやる。てめぇは『嘘つき』で『バケモン』で『敵だった』けど、それでも命を張った甲斐がある凄ぇヤツなんだってあいつらに誇ってやれる。
でもてめぇが本気の俺を見下して、一回もマジにぶつかってきた事がねぇまんまじゃ信じられねぇ。俺の背中に付いてきたあいつらを納得させられねぇんだよっ！」

そのナナシの言葉はシャクナゲからすれば言い掛かりに等しかった。ナナシを『見下した』などという言葉は誤解も甚だしい事だ。
何故なら彼は、『ずっと他人を見上げ続けてばかりいた』のだから。

――あぁなりたい。でも自分は無理だ。
――あんな風に振る舞いたい。でも自分には出来ない。
――皆みたいに生きてみたい。でも自分なんかに『そんな資格はない』。

そう言い聞かせてきたのだ。だから『見下した』などという言葉は、全く正反対の言い分でしかない。
でも『対等と見なかった』という言葉はまさに正鵠を射ていた。

だから息を飲んで、歯を噛み締めて。
そしてゆっくりとナナシへと視線を向けた。
『お前の屍を越えてでも』
そんな今はまだ言葉にしただけに過ぎなかった覚悟を、現実のものとする決意を秘めて。

そんなシャクナゲの葛藤が……口上のみの覚悟から本気へと変わるまでほんの刹那にも満たない時間であったが、相対するナナシにははっきりと分かった。
ジャラジャラと腕から伸びはじめた鎖達は、唸りを上げるかのように波打ち、その鎌首をゆっくりとナナシに向ける。それは見た事のない異常ではあったが、その鎖が凶悪な力を秘めたものだという事をナナシの直感が告げていた。
なによりシャクナゲの本気の感情がナナシの全身の肌を粟立たせた。

「お前は本当に凄いな。
……でも最初に言っておく。俺はお前が思っているよりもずっと強い」

そしてシャクナゲは不器用に笑って、指からその『鎖』を伸ばす。
銃の代わりに、より凶悪な力を持つ本来の得物を。

「上等だっ、来いよっ！俺ん中の不満もごちゃごちゃの理屈もめちゃくちゃな八つ当たりもっ！全部ぶっ飛ばしてみやがれっ！」

それを見てもナナシは怯む事なく牙を剥くように獰猛な笑みを見せ、身を低くし、大顎を広げるように左右に広く両手を構えた

「シャクナゲだ。今はこの名前しか名乗れないけど、この名前なら

お前が本当の敗北を喫しても……その結果死ぬ事になったとしても、誰にも恥ずかしい思いはさせないだけの名前だと自負してる」

目には本気で誰かを殺める時にのみ見せる冷たい光と、心から羨望するかのような色が同等に交わり。

「七峰士郎だよ、バカヤロウ。大した名前じゃねぇけど、記憶の片隅にゃ刻んどけっ！」

目の前で牙を剥くように吼える『七峰』と名乗った男を見やる。

自分とは違っていて。やっぱりどこまでも違っていて。それでもその背中には色々と重いものを背負っている同僚を。

「世界は……純正型が持つ反則は使わない。でも勘違いするなよ、ナナシを舐めてるわけじゃない。単に使えないんだ。上には仲間がいるから使えないだけでしかない。

お前だって仲間達を巻き込むような戦い方は絶対に避けるだろ？そういう事さ」

そう言って僅かに唇を歪める。

地を這うかのように低く構えられた姿勢は、まるでクラウチングスタートをきる短距離走者のように力と勢いを蓄えたもので、うねる蛇のごとき鎖達は彼を中心に据え四方へと広がっていく。

「――それにな、そんなものがなくても俺は変わらない。そんなものを使わなくても俺は黒鉄最強だ」

見た事のない力と本気の構え。なにより自ら上げた『黒鉄最強』の名乗り。

他称でしかないその名前を自ら名乗った所は初めて見た。ナナシ

が知るその称号は、あくまでも他人からのものでしかなかったのだ。
だからこそ、目の前にいる『彼』こそが本当の『黒鉄最強』なんだと震えが走る。
宵闇の名を越え、黒鉄の名前すらも越えて。
今のシャクナゲこそが最強なのだと悟る。
それでもナナシは笑ってみせた。

「はん、知ってんだよ、てめぇが……てめぇこそが黒鉄最強なんだって事ぐらいなっ！俺に負けたらその最強って称号、ここに置いていけよっ、クソヤロウっ！」

猛る鎖は本来の『無限に近い数』を失ってはいても、圧倒的なスピードと破壊力を纏いながらで相対する男に迫り、不死とも称された回復能力を持つ男は、持ち前のタフネスさを武器に鎖にも負けないスピードで駆け、自らの身体ごと砕けよとばかりに拳を振るう。

その勝負は始めから勝敗の決まったもので、ぶつかり合いは不必要なプロセスだったかもしれない。
それでも二人は二人とも本気であり、二人が二人とも真っ正面から相手を打倒しようとしていた。
不死身のナナシと黒鉄のシャクナゲとして持ち得る全てを賭けていた。

そう二人にとっては決まりきった結末であったとしても、決して不必要なプロセスなどではなかったのだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0921i/

黒鉄色のノクターン

2011年11月7日15時08分発行